

Deadline Delivers

銀匙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海棲艦が海に多数出没するようになって久しい世界。

艦娘との大海戦は今日も繰り広げられている。

世界の海運輸送網は随所で分断されたが、必要な事には変わりはない。

「だからこそ」

正規の輸送会社が断るルートを引き受ける「裏」の運び屋が生まれた。

人々はいっしか彼らの事を「Deadline Deliver
s」と呼んだのである。

●お断り●

※本作は「艦娘の思い・艦娘の願い」のサイドストーリーであり、世界観や登場組織も準じています。

先に「艦娘の思い・艦娘の願い」をご覧頂く事をお勧めします。

※艦隊これくしょんには出てこない人物が多数登場するので「オ리지」タグを付けています。

※轟沈表現がありますので「R15」「残酷な描写」タグを付けています。

※短編小説を予定しています（フラグじゃないよ！）

2016／5／12 完結致しました。

ありがとうございました。

目次

1章：「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッド」編

第1話	1
第2話	7
第3話	13
第4話	18
第5話	23
第6話	28
第7話	32
第8話	37
第9話	42
第10話	47
第11話	52
第12話	57
第13話	62
第14話	69
第15話	75
第16話	80
第17話	85
第18話	89
第19話	94
第20話	99
第21話	104
第22話	110
第23話	114

第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	2章：「神武海運」編		第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話	第24話
232	227	221	217	211	206			201	197	193	189	184	179	174	169	164	159	153	148	143	138	133	129	124	119

第13話	359
第12話	354
第11話	349
第10話	344
第9話	338
第8話	333
第7話	328
第6話	323
第5話	318
第4話	313
第3話	307
第2話	301
第1話	295

3章：「C&L商会」編

第17話	288
第16話	283
第15話	278
第14話	273
第13話	268
第12話	262
第11話	257
第10話	252
第9話	247
第8話	243
第7話	237

第6話	487
第5話	482
第4話	477
第3話	472
第2話	467
第1話	462

4章：「ワルキューレ」編

S. 10話	453
S. 09話	446
S. 08話	440
S. 07話	432
S. 06話	427
S. 05話	422
S. 04話	417
S. 03話	412
S. 02話	405
S. 01話	400

特別編―蒼龍と飛龍の場合

第20話	395
第19話	389
第18話	384
第17話	379
第16話	374
第15話	369
第14話	364

第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話	第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話
608	603	598	593	589	585	580	575	569	564	560	555	550	545	540	536	531	526	521	516	511	506	502	497	492

第5話	720
第4話	715
第3話	711
第2話	706
第1話	702

5章：「夕島整備工場」編

S. 10話	698
S. 09話	693
S. 08話	689
S. 07話	684
S. 06話	680
S. 05話	676
S. 04話	671
S. 03話	666
S. 02話	662
S. 01話	657

特別編—それぞれの年末年始

第39話	651
第38話	645
第37話	640
第36話	635
第35話	630
第34話	625
第33話	620
第32話	613

第9話	835
第8話	829
第7話	824
第6話	819
第5話	813
第4話	808
第3話	804
第2話	800
第1話	796

6章：「Silver bullet」編

第20話	790
第19話	785
第18話	780
第17話	776
第16話	771
第15話	766
第14話	761
第13話	757
第12話	752
第11話	747
第10話	743
第9話	738
第8話	733
第7話	728
第6話	724

第11話	966	第1話	909
第10話	960	第2話	915
第9話	955	第3話	922
第8話	951	第4話	928
第7話	944	第5話	933
第6話	938	第6話	938
第5話	933	第7話	944
第4話	928	第8話	951
第3話	922	第9話	955
第2話	915	第10話	960
第1話	909	第11話	966
7章：「昼下がりの出来事」編			
第22話	903	第1話	846
第21話	897	第2話	851
第20話	892	第3話	855
第19話	887	第4話	859
第18話	880	第5話	865
第17話	875	第6話	870
第16話	870	第7話	875
第15話	865	第8話	880
第14話	859	第9話	887
第13話	855	第10話	892
第12話	851	第11話	897
第11話	846	第12話	903
第10話	841	第13話	909

第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話 第23話 第22話 第21話 第20話 第19話 第18話 第17話 第16話 第15話 第14話 第13話 第12話

10991094108910841079107510711066106110561051104610411034102910231018101310081003 998 991 985 978 971

第6
1話

第6
0話

第5
9話

第5
8話

第5
7話

第5
6話

第5
5話

第5
4話

第5
3話

第5
2話

第5
1話

第5
0話

第4
9話

第4
8話

第4
7話

第4
6話

第4
5話

第4
4話

第4
3話

第4
2話

第4
1話

第4
0話

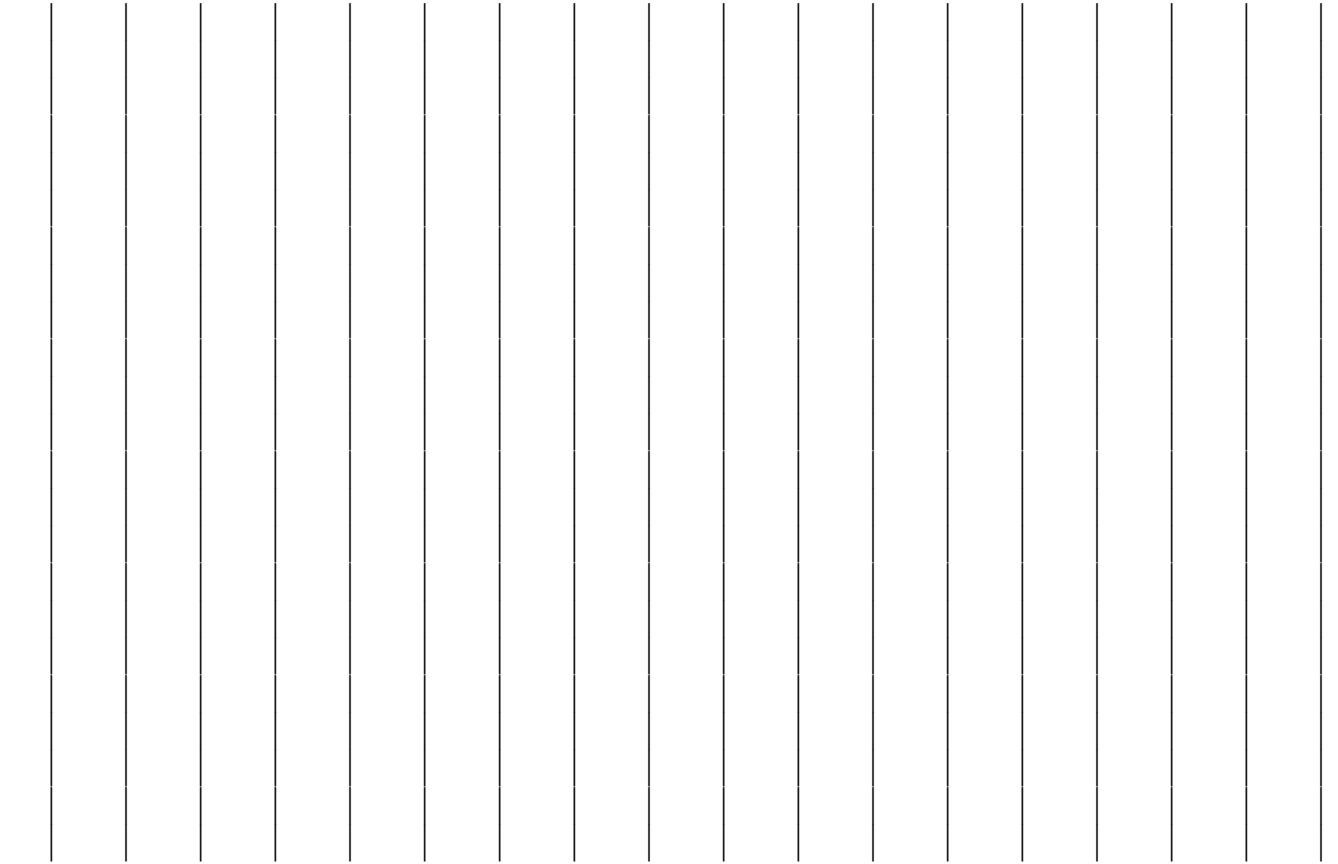
第3
9話

第3
8話

第3
7話

1230122512201215120912031197119211871182117711721167116111551150114511401135113011241119111411091104

第79話 第78話 第77話 第76話 第75話 第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話 第64話 第63話 第62話



132413181313130813031298129312881283127812731268126312571252124712421235

1章：「ブラウン・ダイアモンド・リミテッド」編 第1話

5月21日 朝

881研究所は大本営敷地内にあるが、他の棟とはやや離れた位置にあり、高い壁に囲まれている。

それは表向き、実験が失敗した時に爆風や毒ガス等による影響を避ける為とされていた。

実際は倫理上問題のある実験を出来るだけ秘匿するためだったのであるが。

研究所の中でひとときわ高い中央棟の所長室に続く廊下で、2つの足音が連なつて響いていた。

とても急ぎ足の様子で、これから始まる事を暗示しているかのようだった。

コンコンコンコン

「・・・入れ」

ガチャリとドアが開かれると、部屋の主、輪泉所長は戸口を睨みつけた。

この時間は書類仕事を片付ける為に打ち合わせ等は予定しないようにしていた。

つまり、この来訪者は仕事を邪魔する存在でしかないのである。

「失礼致します、所長。緊急事態です」

「何だど？」

研究主任の説明を隣で聴きながら、同行した輸送班長である蛇又は内心溜息をついた。

どうしてこう研究者って奴は詰めが甘く、迷惑ばかり掛けるのだ？

「馬鹿者おおっ！」

ほら見ろ。カンカんだ。

所長は議員に立候補する前に箔をつける為、この仕事をしてるだけだからな。

在任中は出来るだけトラブルを起こさず、今回のようなシーンではきつちり得点をあげておかねばならない。

その逆、華々しい舞台上で醜態をさらせば良くて減点、下手すれば左遷だから無理もないか。

ひとしきり研究主任を叱り飛ばした輪泉所長が血走った目を自分に向けたので、蛇又班長は肩をすくめた。

「・・・正攻法のルートでは間に合いませんよ？」

「やり方は一任する。蛇又、費用は全て機密費から支払え。痕跡を残すな」

「かしこまりました」

失敗の許されない尻拭いか、報われんな。

蛇又班長はそう思いながら無表情に敬礼した。

5月21日 昼前

「なあファツゾ、エンジンくらいかけてくれよ」

「掛けるのは良いが、エアコンは週末まで故障中だぞ。ミストレル」

「ウゲツ・・・そうだった」

「この車の廃熱は暑いが、良いのか？」

「わ、わかったって。切っといてくれ」

運転席にはファツゾと呼ばれた男が、返事をしつつもサングラス越しに外の1点を見続けている。

助手席にはダツシユボードに両足を乗せ、若い女性がけだるそうに座っていた。

車が止まる海沿いの駐車場や周囲には人っ子一人居らず、沖合いから飛んできたウミネコが一声鳴いた。

深海棲艦が姿を現してから約百年。

艦娘と深海棲艦の戦いは熾烈を極め、一進一退のシーレーン争奪戦は全く終わりが見えない。

長距離航路で大型船を使えば必ず深海棲艦の餌食となる為、かつて港を賑わせた大規模な輸送業者は港から去っていた。

しかし、この港町はかつてとは異なる活気に包まれていた。

そう。

幾ら深海棲艦が居ようと、民間船はおろか旅客機さえ撃墜されるような激しい戦闘が海原の日常だろうと。

人類にとつて外国との交易は必要不可欠だった。

かつてのように輸送業者が船や飛行機で安価かつ確実に輸送してくれる事はなくなったが、それだけの事。

そもそも、外国との交易が安全だったのは歴史のごく短い期間であり、危険極まりなかった時代の方が長い。

危険要因は変われど元に戻っただけともいえる。

今、港に集うのは有象無象の小規模な海運業者達。

依頼者から高額な報酬を受け取る代わりに危険極まりない海へと乗り出していく。

彼らは人々から「Deadline Deliver」と呼ばれており、ファツゾ達もそうだった。

ファツゾが顎をしゃくつた。

「・・・来たようだ」

「25分遅刻だぜ。おかげで汗かいちまった」

「1割増しにしてもらうか」

「おつ、そりゃ良いな！」

途端にミストレルの機嫌が良くなった事にファツゾはくすつと笑いながら、エンジンを掛け、車の窓を閉めた。

相手を確認するまでは、降りない。

エンジンを掛けたのは万一の時速やかに逃げられるように、窓を閉めたのはせめてもの弾除けだ。

駐車場は4箇所出口があり、包囲は容易ではない。

交渉にはそういう場所を選んでいる。

やがて、黒のミニバンがファツゾ達の車と対峙するように停車すると、中から男が3人降りてきた。

顔ぶれを、そして手荷物を見たミストレルは小さく舌打ちした。

「あれくらい、急ぎならアエロの連中に回しや良いだろうに、テッドの

奴」

ファッツはパツパツとハイビームを照らしつつ答えた。

「・・・それが答えて事だろう、ミストレル」

「あん？」

「航空機で運ぶなという条件をテッドに出したんだろうよ」

スーツケースを持った男が手に持ったフラッシュライトを一定の形に振ったのを見て、ファッツはドアを開けた。

「さて、大事な時間だ」

「ファッツなら安心だ。いつも急な話ですまない」

「蛇又さんが遅刻とは珍しいですね」

蛇又は手に持ったスーツケースをもう片方の手でぽんぽんと叩いた。

「これがなかなか揃わなくてな」

「なるほど。では早速ですが、輸送条件から伺いましょう」

蛇又は肩をすくめた。

「いつも通りだ。水濡れ厳禁、開けるべからず。ああ、見掛けよりは少し重い」

「ほう。気圧の変化は問題ありませんか？」

蛇又の隣に居た研究主任が怯えたような声を上げた。

「なっ、何でそんな事聞くんだ？中身を知ってるのか？」

だが、研究主任は舌打ちした蛇又にひと睨みされると途端に口をつぐんだ。

ファッツはふふつと笑うと、

「うちにいつも頼まれるのはもう少し大きい・・・アエロマイクログが運べないサイズが多いもんでね」

蛇又は肩をすくめた。

「プラスマイナス0.3気圧以内で運んでもらいたい。1時間で40度以上の温度変化もご法度だ」

ミストレルはファッツに囁いた。

「ビンゴー」

ファッツはニツと笑った。

「割増成立、だな」

ファッツは蛇又に向き直るとサングラスをくいとあげた。

「行き先と到着刻限は？」

「シアルガオ島沖、座標はこの海図に書いてある。到着刻限は明後日の0600時までだ」

ミストレルが渋い顔になった。準備や当該海域までの距離を考えると全く余裕がない。

ファッツは続けた。

「現地での受け取りは？」

「ない」

「経費とギヤラは？」

「ギヤラの半分を前金、成功時は経費全額とギヤラの残りを帰港後に前払い分はこのバッグの中だ」

「ギヤラはいつもの2割増でお願いしますよ。気圧と温度保持の関係上」

ファッツの言葉に蛇又はもう1度傍らの研究主任を睨みつけると「・・・いいだろう。帰港時の支払額に上積みしておく。では頼む」

そういうとバッグとスーツケースをその場に置き、ミニバンに戻っていった。

蛇又達が走り去った後、ミストレルはジト眼でスーツケースを見ながらファッツに言った。

「なーんか嫌な予感すんだけど」

ファッツは肩をすくめた。

「奇遇だな。俺もだ」

「蛇又のダンナはしみつたれじゃねえが素人でもねえ」

「ああまであっさり2割増を飲まれると想定内だったって可能性もある。だが何故だ？」

「・・・そういやさ、クーの奴が蛇又のダンナからたっぷり金貰って運んだ荷が妙に温かったんだと」

「ほう」

「で、運んだ後さ、いつもの業者に貨物室の清掃を頼んだら苦情言われたんだと」

「何て？」

「除染作業なら先に言えっつてさ。それ聞いて3日寝込んだらしい」

「ファツゾとミストレルは顔を見合わせた。」

「・・・ガイガーカウンターはさすがに持ち合わせてないぞ」

「アタシも持ってねえよ」

「温かかったって、言っただよな」

「・・・ああ」

その後、恐る恐るスーツケースに触れる二人の姿があったという。

第2話

5月21日 昼過ぎ

表に止まったBMWの様子を見て、ベレーは読んでいた本から顔を上げ、首を傾げた。

ファッツはいつもならタイヤが鳴く位急ブレーキ踏んで止まるのに・・・ガス欠かしら？

ベレーが静かに本を閉じた瞬間、事務所に飛び込んできたミストレルは開口一番怒鳴った。

「おいベレー！ガイガーカウンター貸してくれ！」

「はい？」

「ヤバいかどうか確かめたいんだって！早く！」

ベレーは肩をすくめた。

「年明けに、ここの家賃払うからって売っちゃったじゃないですか」「ゲ!？」

「まあ、影響があるような強い放射線が出てるかどうくらい調べられますけど・・・」

「本当か!？」

「ええ・・・用意したら行きますよ。外に行けば良いんですね」

「ああー!」

ベレーが表に出ると、青い顔をしたファッツが遠巻きにスーツケースを指差していた。

ミストレルに至ってはスーツケースと車を挟んで反対側に隠れている。

通りを歩く人達が何やってるんだという視線を投げているが、ファッツはそれどころではない。

「さあ、早くガイガーカウンターを」

ベレーはスーツケースを指差しつつ

「これが調べる対象なんですね?」

「ああ」

「ええと・・・ちよつと待ってくださいねーつと」

そういつつ、ベレーは持ってきたバケツから、スーツケースの周りに海水をばさりと撒いた。

そしてちよんちよんとその上に立つと。

ベレーは輝きだした。

比喩ではなく、ベレーの体全体が輝きだし、やがて光が消えた。

そして、そこに居たのは深海棲艦の二級だった。

「エエトー」

そう言うのとレーダーを動かしながらスーツケースの周囲をしばらく回った後、

「大丈夫デスヨ、放射線ハ出テマセン」

といつて、再び輝くと元の姿に戻ったのである。

「良かった。じゃあとつとと入ろう。計画を練らなきやならん」

ファッツはスーツケースを掴むと、ミストレルとベレーを促した。

3人の様子を眺めていた人達もファッツの一言でつまらなさそうに解散していった。

ファッツは金庫から封筒を取り出し、懐に入れながら二人に告げた。

「ミストレルとベレーは出港準備を進めてくれ。あと、航路の確認も」

「補給は給油と弾薬両方か？」

「いや、先に艀装に給油しといてくれ。兵装はネタを仕入れてから考える」

そう言い残すとファッツは事務所を出た。

「よおファッツ。ヤバイ研の荷を受けたらしいな」

「そうだマツケイ。だから関連ありそうな南太平洋関連のネタをくれ」

ファッツはそう言うと、マツケイの机の上に2000コイン札の束を置いた。

マツケイは札束を見て目を細めた。

ここは情報屋マツケイのオフィス兼住居だ。

屋根の上に突き出た巨大なアンテナが看板代わりにもなっている。

マツケイは日がな一日ここで鎮守府と大本営の通信を傍受しており、ネタになる情報を拾っている。

ファッツは必要な兵装を選択する為、情報を集めにマツケイを尋ねてきたのである。

「んー」

マツケイは置かれた札束から1枚抜くと、裏表を眺めながら続けた。

「大本営が半月前から幾つかの鎮守府に声をかけてな、大掃除をやってる」

「それで？」

マツケイは次の1枚を抜いた。

「シアルガオ島沖の小島から東の半径50海里圏が戦闘海域で、艦娘達は小島に集結してる」

「なるほど」

マツケイは抜いた札に破れを見つけると眉をひそめて札束の下に返し、代わりに2枚抜いた。

「ただ、今回は大掃除そのものが目的じゃねえらしい」

「どういうことだ？」

マツケイは札越しにファッツを見た。

「ここからは2枚ずつになるぜ？」

「構わん」

マツケイはニツと笑うと札を2枚抜き、続けた。

「連中は符丁を使ってるが、対ボス戦用の新兵器お披露目会らしい」
「ほう」

「送りこんだ艦娘の数は報告されてる敵の規模から考えれば過剰だが、過剰分は護衛部隊だ」

「護衛部隊？」

「ああ。第2鎮守府の司令官が今回のアタマで、司令官も小島の臨時鎮守府に居るんだと」

「何でわざわざ司令官が現地？」

「新兵器の威力を実際に見て確認するそうだが、ありや半分休暇だな。」

余裕かましてる」

「兵器について、他には何か言ってなかったか？」

マツケイは札を抜かず、ファッツゾを見て肩をすくめた。

「そろそろ気づいてるんじゃないかねえのか？」

「賭けるかい？」

「んー」

マツケイは片目を瞑ってファッツゾを見た後

「よし、外れる方に1万だ」

ファッツゾは一呼吸置くと話し始めた。

「討伐は開始されているが、まだボスに到達してないから新兵器とやらは使っていない」

「・・・」

「新兵器は881研お手製で：そうだな、何か部品が壊れて使えない状態だった」

「・・・」

「それを現地から知らされた連中は大慌てでもう1セット作って俺に渡した」

「・・・」

「だからボスに到達する予想時刻より前に届けろと俺達に命じた。違うか？」

マツケイはニンマリ笑った。

「甘いなファッツゾ。それなら帰りも受け取る荷物がある筈だろ？へまの証拠を残さない為にな」

「むう」

「正解はな」

「ああ」

「弾倉に肝心の砲弾を込め忘れてたんだと。5枚頂き」

ファッツゾはがくりと肩を落とした。研究所の連中は阿呆揃いか？何考えてんだ。

マツケイの机から札束の残りを回収しながらマツケイに声をかけた。

「ありがとうマツケイ。他にネタはあるかい？」
マツケイはニツと笑った。

「今日は儲けたからサーブিসだ。物渡したらとつと帰ってきな」
「なぜだ？」

「27日から燃料代が2割値上げされるってよ」

ファッツは顔をしかめた。

「ああちくしょう。良い情報ありがとう」

「どーいたしましてー」

その頃。

「しっかしさあ、絶対深海棲艦の艤装の方が進んでるよなあ」

「そうですか？」

「だって艤装に燃料いらねえんだろ？」

「要らないんじゃないかって、海水から燃料を生成出来るんです。それも一部の子だけです」

「お前もだろ？」

「はい」

「あーあ、退屈だなー」

「だからこうして付き合ってるじゃないですか」
そう。

鎮守府では、艦娘専用の給油設備が整っている為にハイペースで給油出来る。

しかし、ここは民間港であり、そういう専用設備はなく、給油速度が相対的にとても遅い。

給油の間、艤装には給油ノズルが刺さりっぱなしになるし、艤装を放っておくと盗まれてしまう。

従って補給が終わるまで給油所に長い事居続けるハメになる。

ミストレルはこの補給の時間が退屈であり、その必要がないベレーがうらやましくてならないのである。

ちなみにベレーはミストレルの隣に座り、本を読みながらバケツに汲んだ海水に足を浸している。

一応給油もしているが、どちらかというと暑いので涼んでいると

いったほうが正しい。

ベレーは航行中に幾らでも燃料補給出来るので、そもそも出航前に満タンにする理由が無いのである。

第3話

ミストレルは給油メーターからベレーに視線を戻すと訊ねた。

「なあ、お前は武器何持ってたよ」

ベレーは本を閉じると、少し首を傾げながら答えた。

「んー、ファッツさんの指示次第ですけど、多分いつも通り5インチ連装砲と3連魚雷じゃないですか？」

「つまんねーな」

「ミストレルさんはどうするんです？」

「パーツと派手なもんが欲しいよな。三式弾とか、対空噴進砲とか、烈風改とか！」

「三式弾は高くて買えませんし、噴進砲は売ってませんし、烈風改は元から積めないですよね？」

「一瞬で全否定すんなよ」

武器弾薬類の製造・販売・所持は当然ご法度だが、この町には武器屋が幾つもある。

町の人々はそれらが海軍から横流しされたものだとは知ってるが、出自に拘る奴はいない。

一方、良く出てくる装備は旧式の物が大多数だが、たまに新装備が売りに出る事もある。

当然武器屋は吹っかけるので、逆に持っていれば町ではステータスになる。

ミストレルが先程挙げたのはステータス性の高い装備だが、ファッツは徹底的に経済優先である。

いつも超のつく定番商品（例えば12.7cm砲や15.2cm単装砲）を買ってくる。

ベレーは人差し指をピンと立てて諭すように言った。

「いつもファッツさんが仰ってるではないですか。いかに安いコストで最善の結果にするかって」

「ちえ。ベレーもすつかりファッツの味方だよな」

「毎日美味しいご飯が食べられるのも必要な節制をしているからです」

よ」

「重巡なんだからせめて20・3cm砲くらい寄越せつてんだよ」

「15・2cmで十分じゃないですか。7・7mm対空機銃に比べれば」

「あんな爪楊枝持つて来たら殴つてやる」

「私なんてそもそも5インチしか積みませんけど、敵を追い払うくらいの効果はありますよ」

「うー」

その時、ミストレルの艦装に差し込まれていた給油ノズルがガチンと音を立てた。

「おつ、給油終わりかな。ジミーー！」

事務所からとととと小男が駆け寄ってきてノズルを掴む。

少しずつ抜きながら最後までできっちり給油を終えると、キャップを閉めてミストレルに向かって親指を立てた。

ミストレル達は立ち上がり、メーターに表示された料金を見ながら札を数えて渡した。

ジミーはポケットからコインを数枚取り出し、つり銭としてミストレルに握らせて領いた。

「サンキューなジミー」

ミストレルとベレーはジミーに手を振りながら立ち去った。

「おいおい、それじゃ881研のミスじゃないってことか？」

「そういう事だファッツ」

マツケイのオフィスを出た後、ファッツはふと立ち止まった。

幾らなんでも間抜け過ぎる。

少し考えた後、ファッツはもう1人の情報屋を訪ねる事にした。

深海棲艦側の事情に詳しい、ムファマスの元へ。

「どうやったのかは知らないが、連中は輸送前に保管中の新兵器から弾を引っこ抜いた」

「大本営の中でか？」

「ああ。置いてあったのは881研の倉庫らしいがな」

「目的は？」

「お披露目をぶち壊して881研を弱体化させる事。それに無論、仲間を護る事」

「その新兵器とやらは強いのか？」

「噂はいつも通り錯綜してるが、深海棲艦側は相当警戒してる」

「へえ。たまには881研もまともな仕事をするんだな」

「まあそんな所だ。で、ファツゾ。そこへ配達か？」

「ん、そうだが」

「なら、一番良い装備で行けよ」

「なぜだ？」

「勘だが、深海棲艦側は他にも何か企んでる。大海戦の匂いがする」

「ふーむ・・・」

ファツゾは渋い顔になった。なんだかきな臭い仕事になってきた。

二人を危ない目に遭わせるのは出来るだけ避けたい。

いずれにせよ、急いだほうが良い。

ムファマスは札束の残りをファツゾに返しながら頷いた。

「ピースは揃ったかな？」

「ありがとうムファマス」

ファツゾのBMWが事務所に戻ってきたのは宵の口になってからだった。

「ただいま」

「どうしたんだファツゾ、マツケイのどこじゃなかったのか？もう航路も決めちまったぜ。安全策で近海沿いだ」

「それで良い。兵装は変更する。二人とも買ってきたものに乗せ替えてくれ」

ミストレルとベレーは顔を見合わせた。珍しい事もあるものだ。

「んー！ひっさしぶりに20・3cm連装砲と25mm3連装機銃積んだぜー」

「うわー、これが三式爆雷ですか、初めて見ました」

重装備に目を輝かせるミストレルと物珍しそうに手に取るベレーを前に、ファツゾは真剣な眼差しだった。

「二人とも聞いてくれ。今回の作戦は電撃的に行う」

「・・・」

「長居は無用。戦闘は避ける。行きは勿論だが帰りも時間を最優先にしてくれ」

「・・・なんか情報があんのか？」

「大海戦が勃発する可能性がある」

「なるほど、それでこれなんだな」

そういうとミストレルは、最後の装備として手渡されたダメコンを振って見せた。

「そうだ。そのスーツケースの中身は881研が開発した兵装の弾だ」

「ああ」

「ただ、こうなったのは深海棲艦側が輸送前に弾を引っこ抜いたからだ」

「・・・へえ」

「大本営の情報はいつも通り深海棲艦側に筒抜けだ。我々への依頼も気づかれてるかもしれん」

「・・・」

「そもそも危険を冒してまで引き抜いた弾だ、輸送を阻止しにくる可能性がある」

「・・・」

「だから出来るだけ遭遇しないよう、遭遇しても退路確保の為の攻撃に徹してくれ」

「アタシが対空と対艦、ベレーが対潜と広域探査だな」

「そうだ。夜戦は避けたいが、万一の時は二人で協力してくれ」

「あいよ。当該海域で艦娘達が使ってる暗号表は？」

「今回はりだ。それからベレーには道中、可能ならやって欲しいことがある」

「はい」

「深海棲艦の連中が何をしようとしてるのか探って欲しい」

「はい」

「もし海戦勃発間近など、二人に大きな危険が迫るようならスーツ

ケースを投棄し、回れ右して帰って来い」

ミストレルとベレーはぎよつとした顔でファッツを見た。

「・・・え？」

「なんだ？」

「あ、あの、お仕事は達成が大事だって、いつも仰ってるので・・・」

「全ては命あつての物種だ。沈むのはスーツケースだけで良い。生きてればまた稼げる」

「ファッツさん・・・」

「二人とも絶対に生きて帰って来い。待ってるからな」

「おうっ！」

「解りました！」

「よし、じゃあメシ食ったら出発だ」

こうしてすっかり夜もふけた2140時、ミストレルとベレーはスーツケースを抱えて出航した。

「必ず、帰って来いよ・・・」

港で見送りながら、ファッツはそう呟いた。

第4話

「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッド」のボスであるブラウン・ファッツゾは、人間である。

わざわざそう断つたのは残る二人がそうではないからである。

ミストレル・ダイヤモンドは艦娘であり、ベレーは深海棲艦である。

二人とも脱走兵であるが、この港町で脱走兵と言った所で別に珍しくもない。

危険極まりない海域を人間が船や飛行機に乗って出たところで幾らも行かぬ前に海の藻屑にされてしまう。

「Deadline Deliver」と呼ばれる面々は、その大半が脱走した艦娘か深海棲艦か妖精で構成されているのである。

何年も前のこと。

ミストレルがまだ鎮守府で艦娘の摩耶として活動していた時。

摩耶は戦闘を重ねるうち、深海棲艦は一概に好戦的ではないという事に気づいてしまった。

逃げ惑い、武器を捨てて降伏を訴える深海棲艦に砲弾を叩き込む事は正しいのか？

司令官に何度も進言したが、演技だから騙されるなど言って全く取り合ってくれなかった。

摩耶は次第に攻撃を躊躇うようになり、敵を取り逃がしてしまう事が増えていった。

やがて艦隊から外され、持て余す時間を悩み尽くした結果、摩耶は1つの結論に達する。

「無差別攻撃に正義なんてあるか」

摩耶は大規模攻略の際に長時間遠征を任されたので、かねてから用意していた脱走の計画を実行に移した。

遙か遠くの海域での脱走劇はあっけないくらい上手く運んだ。追っ手はもう何日も見ていない。

それだけなら喜ぶべき状況だったのだが。

「あーしまった。腹減ったなあ」
そう。

鎮守府を出るといふ事は、すなわち補給手段が無くなるということ。

武器弾薬だって有限であり、遠征用装備ということもあり、兵装は最低限しか積みなかつた。

艀装に頼って海原を移動すれば燃料がどんどん減っていくので、艀装を仕舞って陸路をとぼとぼと歩く。

確かに燃料や弾薬は減らないが、その代わり体力を使う。すなわち腹が減るのである。

どさり。

ついに摩耶は海原を見渡せる小高い丘のてっぺんで、道端に座り込んでしまった。

幾ら訓練で体力をつけてるとはいえ、何日間も食事を取らずに歩くのは無理がある。

水だけは艀装で海水から真水を取り出せるものの、空腹は限界に達していた。

眼下の海を睨みつつ、両腕を組んで考え始める。

「んー」

脱走後の事を甘く見ていたなと摩耶は苦笑した。

ふと、財布を取り出して中身を見る。

遠征直前に用意していた数十万コイン分の札が見えた。

舌打ちをした後、摩耶はバシンと乱暴に財布を閉じた。

「くっそ……ここまで店がねえなんて予想外だったぜ」
そう。

遠征航路途中に大きな半島があつたので、摩耶はその半島を目指し、真夜中に逃走を図つた。

海図で見た半島には幾つもの町の名前が記されており、金さえあれば服や食料は調達出来ると踏んだのだ。

しかし、目指した先にあつたのはかつて店や家だった廃墟ばかり。仕方なく海沿いにずっと歩いているのだが、人っ子一人居ないので

ある。

「ちつ、上手く行き過ぎると思っただらそういう事かよ」

摩耶は目を瞑って現状を整理した。

逃亡を凶った所で廃墟と化した町では艤装への給油も食事も出来ない。

早く気づけば鎮守府に戻れる（記憶消去といった処罰はあるだろう）が、このままなら餓死するしかない。

司令官は手を下さずとも勝手に事が済んでしまおう、だから追う必要がないという訳だ。

ガツと立ち上がった摩耶は海に向かい、叫んだ。

「アタシは負けねーぞチクショーー！」

その時。

「なあ、青春ごっこやるにはここらは物騒だぞ？」

ぎよつとして振り向いた摩耶が見たのは、怪訝な顔をして運転席の窓を開けてこちらを見ているファツゾだった。

いつの間に車が通りがかったのか。何日も人影を見なかったから油断した。

くそ、超恥ずかしいところ見られちゃった。

摩耶は顔を赤らめつつ、何と言って良いか迷った。

「あ、あー」

「お前艦娘か。どっかから逃げてきたのか？」

「！」

途端に身構え、兵装を展開する摩耶にファツゾは肩をすくめた。

「まあ艦娘なら痴漢や強盗なんて返り討ちに出来るか。せいぜい気をつけろよ」

「・・・お前、憲兵か？公安か？」

「まさか。この先の港町で何でも屋をやってるしがないオヤジだよ」
「その割にや良い車乗ってるじゃねえか」

摩耶がジト目で見たのも無理はない。

ファツゾの車は年代物とはいえBMWのセダンだったからだ。

外国の車を乗れるように維持するのは、今となってはとて金と手

間隙のかかる事である。

「ほっとけ。これに乗るのが俺の趣味なんだよ」

摩耶は考えた。

捕まえに来た憲兵や公安なら単独というのは変だし、奴らが乗るのは黒のワンボックスだ。

それに何より捕まえる気が全く感じられない。

「・・・この先に、町があるのか?」

「歩きじゃまだ結構かかるがな。帰るところだし、送ってこうか?」

摩耶は躊躇いつつ言った。

「へ・・・変な事する気じゃねえだろうな?」

「艦娘に蹴りでも食らったら骨の1本や2本じゃ済まないし、砲弾の一発で粉微塵だろうが。心配なら後ろに乗れよ」

「・・・」

たつぷり1分はファツゾの目を見た後、摩耶は兵装を仕舞い、運転席の後ろのドアを開けた。

「やれやれ、信用無いなあ」

「へ、変な事したら大声上げるからな」

ファツゾは肩をすくめつつ、車を発進させた。

「あいつらも、可愛かったなあ」

そう呟いたファツゾの目が悲しげに揺れるのを、後ろに乗る摩耶は知る筈も無く。

町に着いた頃は丁度夕食時で、家や料理屋からは美味しそうな匂いが漂っていた。

摩耶はファツゾの車に乗るといふ緊張感で空腹をしばし忘れていたのだが、

「は・・・腹減ったあ・・・」

そういうと、こてんと後部座席に倒れこんでしまったのである。

ファツゾはバックミラー越しに声をかけた。

「腹減ってんのか?」

「・・・おう」

「カレーでよきや食ってくか?」

「!!」

ファッツゾはバックミラー越しに、まるで尻尾を振る子犬のような摩耶を見た。

・ほんと、艦娘ってやつは可愛いな。

ファッツゾは苦笑しながらハンドルを切った。

第5話

「おかわりっ!」

「・・・はいはい」

摩耶から皿を受け取りながら、昼にカレーを作つといて良かったと
ファッツは思った。

明日も食べるつもりで鍋一杯に作ったんだが、これで完売御礼だ。
よく食うのは戦艦や正規空母の連中と相場が決まっていた筈なんだ
がな。

摩耶は嬉々としてカレーを頬張りながら言った。

「うちのカレーとは違うな」

「あつちはスープカレーというか、カレー粉入り肉じゃがって感じだ
ろ?」

「そうそう。もう少しサラツとしててき・・・」

ふと、摩耶がスプーンを止めてファッツを見る。

「・・・なんだ?」

「何で知ってるんだ?」

「何を」

「軍のカレーとか、アタシが艦娘だとか、さ」

ファッツはしばらくもぐもぐとカレーを咀嚼していたが、ごくんと
飲み込むと

「・・・俺は人間。でもそういうのを知っているとすりやだーれだ?」

「ああん?そりゃー・・・」

摩耶は眉をひそめた。

確かに大本営や鎮守府には人間も少数ながら関わっている。

大本営なら事務官や上級軍人、鎮守府なら警備兵とか・・・

「・・・司令官、か?」

「ご名答。退役して何年も経ってるけどな」

「定年にしちや若すぎねえか?」

「辞めさせられたからな」

「なんでだよ」

「・・・命令違反を繰り返すとな、大本営から調査隊が来るんだよ」

「何の命令違反をしたんだよ」

「知ってどうする?」

「アタシの身が安全かどうか判断する」

「・・・ほんとーに信用無いんだな」

「で?」

ファッツは嫌そうに摩耶を見返したが、逆に促されてしまい、仕方ないとばかりに溜息をついた。

摩耶のジト目を見ないようにしつつ、ファッツはグラスの水を一息に飲み干すと、重い口を開いた。

「・・・白旗を揚げた深海棲艦を救助したんだよ」

「うん」

「で、そいついわく、当時大本営が討伐に指定した海域は深海棲艦の大病院がある所だって言うんだよ」

「・・・」

「だから深海棲艦が大勢集まってるけど攻撃の意志はないってな」

「・・・」

「俺はついに進撃命令を出せなかったんだが・・・」

「ああ」

「結局他所の鎮守府が攻撃し、俺は敵の工作に屈したとして職を追われた。そういうことさ」

「・・・聞きてえんだけだよ」

「ん?」

「救助した深海棲艦はどうしたんだ?」

「憲兵が来る前にありったけ補給して逃がしたが、どうなったかは解らん」

「そいつは逃がした時、何か言ってたか?」

「もしどこかで会ったら、この恩を必ず返しますってさ」

「・・・そっか」

目の前のカレー皿を見つめたまま動かなくなった摩耶に、ファッツが尋ねた。

「お前さんの脱走理由も似たようなもんか？」

「・・・アタシはさ、命令通り戦うのはカンタンだって思ってた」

「ふむ・・・」

「刃向かってくる連中ならボコボコにしてやる自信があるんだけどよ」

「ああ」

「涙を浮かべて震えて手を上げてる連中を的扱い出来ねえんだよ」

「・・・」

「けどさ、そんな連中にうちの僚艦達は容赦なく攻撃して沈めていく」

「・・・」

「無差別に撃ちまくるのが正義なのか？戦う意志のねえ連中も皆殺しにするのが正義なのか？」

「・・・」

「そう、思えなくなっちゃった。だから遠征の途中で逃げてきたんだ」

「そうか」

二人は再びスプーンを取り、何かを考えるようにカレーを口に運んでいた。

そして食べ終わる頃、ファッツゾがぼつりと言った。

「お互い、迷っちゃいかんところで迷っちゃったようだな」

「ああ。あ、あのさ」

「ん？」

「アタシは、この町で生きていけるかな？」

「名前くらい変えとけよ。艦娘も割と多いしな」

「名前を？」

「摩耶って呼ばれて返事したら他の人だったってパターン、結構恥ずかしいぞ」

「ぐ。アンタの名前は？」

「ファッツゾ。ブラウン・ファッツゾだ」

「んじやー横文字にすっか」

「今時横文字って・・・」

「うっせーな。えーつとー」

両腕を組んで長考に入る摩耶を見て、ファッツは肩をすくめて片付けに入った。

そして鍋釜も洗い終える頃、ふいに摩耶が叫んだ。

「よっしゃ！決めた！」

「随分悩んでたな。何て名前にするんだ？」

「ミストレル・ダイヤモンド！」

「どっから出てきたんだよ」

「摩耶の摩は摩訶不思議の摩だろ」

「ああ、そうだな。だからミストレルか」

「それで、ダイヤモンドは世界一硬え石だろ？」

「らしいな」

「だから！」

自信满满みたいだから突っ込まないでおこうとファッツは思った。

まあ、被りそうな名前の奴もこの街にはいないし。

ファッツは鍵を一本投げて渡すと、廊下の奥を指差した。

「じゃあ突き当たりの部屋で寝ろよ。それが部屋の鍵だ。内鍵もかかる」

「あ・・・」

「嫌なら出て行って構わんが、この町にはホテルや宿屋なんて洒落たものはないぞ？」

「そ、その」

「ん？」

「い、一緒に、寝るのか？」

ファッツはおずおずとこちらを見る摩耶を見て溜息をついた。

「俺は生憎と自殺志願者じゃないんでな。俺の部屋はそっちだ。入る時はノックしろよ？」

「そ、そっか」

「更衣室兼シャワー室はお前の部屋の向かい。明かりがついてたら使用中」

「おう」

「・・・覗くなよ？」

大袈裟に恥ずかしがるファッツに摩耶は真っ赤になって怒鳴った。

「おい！逆だろ！アタシがいう台詞じゃねーか！」

「こういう事は早い者勝ちだ」

「うー」

「じゃーな。おやすみ」

パタン。

閉じられたファッツの部屋のドアを見ながら、摩耶ことミストレルはカリカリと頭をかいた。

くそ。町まで送ってくれた礼も、食事の礼も、泊めてくれる礼も、何もかも言いそびれちゃった。

肝心な事が言えない。アタシの悪い癖だ。

「・・サンキュー、ファッツ」

ミストレルはドアに向かって呟くと、そつとあてがわれた部屋に入ってしまった。

翌朝。

「へえ。うちの冷蔵庫からまともな飯が出せるとはたいしたもんだ」

「へへん。摩耶様に不可能は無いんだぜ」

「・・ミストレルじゃなかったのか？」

「あ」

「ところで、うちは居候を養えるほど金持ちじゃないからな」

「あつたりまえだろ！アタシも働くって！」

「よし」

こうしてミストレルはファッツと手を組む事にしたのである。

第6話

ミストレルが町の流儀に慣れた頃。

ファツゾは何でも屋から「Deadline Deliverers」へと鞍替えした。

店の名前も「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッド」と改めた。

とはいえ、ファツゾはこの話に乗り気ではなかった。

鞍替えするほうが多額の収入を得られるものの、危険を引き受けるのは海原に立つミストレルだ。

だからファツゾはミストレルに何度も確認したが、

「海は好きだし、無差別に撃ちまくる為じゃねーし、元々アタシは船魂だからな！」

とってニツと笑い返すのみであった。

初日の朝、ファツゾはミストレルに言い聞かせた。

「危険を感じたらいつでも遠慮なく言え。すぐ廃業する。元の商売だって生きていける。いいな」

ミストレルはこくと頷き、開店準備に戻ったファツゾの後姿に向かって

「アタシは借りっぱなしは好かねえんだよ、司令官」

そう、呟いた。

ミストレルが重巡の艦娘だった事は、割と都合の良いポジションだった。

この港町には多くの「Deadline Deliverers」が居る。

かつては依頼を誰が引き受けるかを巡り、「Deadline Deliverers」同士での揉め事も多かった。

無理に依頼を引き受け、輸送を完遂するどころか轟沈してしまう連中も多かった。

そして争いに巻き込まれた依頼人が死亡する事件が起きた後、協定が結ばれる事になった。

・仕事を依頼をする場合は、仲介屋のテッドに連絡する事。

・テッドは依頼内容に対し、適切な特性を持つ「Deadline Deliverers」に仕事を割り振る事。

「Deadline Deliverers」が直接依頼を受けた場合はテッドに連絡して断りを入れる事。

仲介屋が出来た事で依頼人は「Deadline Deliverers」に仕事を頼みやすくなった。

内輪揉めが減り、「Deadline Deliverers」の成功率が上がり、次第に世間に認知されていった。

とはいえ、テッドは慈善事業ではないので信用出来る「Deadline Deliverers」を優遇する。

町を代表する「Deadline Deliverers」を紹介してみよう。

スピードを求められる時には「エアロマイクロ」が定番である。妖精2人と元司令官のトリオで、彼らの手段は航空便である。

ただし艦載機ではなく改造したセスナなので、戦闘の激しい海域へは近づけない。

また、大きさや重さなどの制限が多い。

極めて大量の物資を運ぶなら「C&L商会」である。

非武装の輸送ワ級二人組ゆえ、普段は深海棲艦の地上組から直接オーダーを受けている。

大量かつ定期的な契約を好み、戦域や鎮守府への輸送は断っている。

一方、砲弾飛び交う戦域のど真ん中に届けるなら「ワルキューレ」である。

レ級4人組の火力は中規模鎮守府でさえ火の海に出来るほどで、深海棲艦達も絶対到手出ししてこない。

ただしレ級そのものであるがゆえに艦娘や鎮守府への配達は断り、報酬は最も高額である。

コスト面を優先するなら「スターペンデュラム」である。

軽巡1人と駆逐艦3人による4人組で、実は遠征部隊が丸ごと逃亡してきたのである。

ゆえに資源調達や低コストでの輸送を得意とするし、鎮守府や艦娘の「お約束」に明るい。

ただし所持兵装は少ない（ほぼ輸送用ドラム缶しか持ってない）ので、戦域への強行輸送は不得手である。

そんな競合ひしめく中で開業する「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッド」は残るニーズを研究した。

結果、

「1回だけ多めの荷を運んで欲しい」

「長距離航路など、戦闘が予想される海域への強行輸送をして欲しい」という分野を引き受けたのである。

ファッツは当初、後者の依頼を全く引き受けなかった。

臨時のチャーター便だけで十分食っていける、リスクが高い事はないと。

だが、開業半年後にミストレルが自ら後者の依頼を引き受けてきたのである。

「何でこんな依頼受けたんだ！インドまで輸送なんて正気の沙汰じゃないだろ！」

「一番危ねえのは太平洋航路のハワイの辺りだ。インド行きなら関係ねえって」

「これだけ長距離の航路を1度も戦闘に遭遇せず往復出来る訳ないだろ」

「だから武器弾薬を前払い全額支給って条件にしたんだって。ギヤラだって桁違いなんだぜ？」

ファッツはぐいっとミストレルの両肩を掴んだ。

「・・・いいか、ミストレル」

「おっ、おう」

「お前がどこで大破しようとな、俺は全財産を投げ打って助けに行く」
「・・・」

「だが、この町の小規模なドックじゃ軍の工廠に比べれば出来る事は限られる」

「・・・」

「お前が後遺症で苦しむような目に遭わせたくないんだよ」

ミストレルはその時、ファッツが司令官の真っ白な制服を着てるかのように見えた。

きつとこいつは愛される司令官だったんだろうな。

．．だからこそ。

ミストレルはファッツの手をそつと払うと、優しい目で笑った。

「アタシはアンタに救われた。恩は返す。出来る事はやる」

「それはお互い様だ。俺だってミストレルがいなきゃこんな商売は出来なかった」

ミストレルは一呼吸おくと、まっすぐファッツを見ながら言った。

「信じてくれよ。パートナーだろう？」

ファッツはしばらく沈黙した後、渋々と言った様子で口を開いた。

「今度から依頼を受ける時は必ず俺と一緒に行く事。それがパートナーの条件だ」

「！」

「俺達は一蓮托生だ。身の危険を感じたら荷を捨てて帰って来い。良いな」

「．．ああ」

こうして、ミストレルはインドに向けて出航したのである。

数日後。

「気色悪いなあ．．」

荷を届けた後、台湾沖を北上しながらミストレルは呟いた。

ここまで一切戦闘に遭遇していない。

遠方で砲火の1つくらい常にあるだろうと想像してたのに、気がつけば航海は終盤。

ファッツの居る港町はまだ遠いので通信は出来ないが、何事も無く至極順調だ。

順調過ぎて気色悪いというわけである。

その予感程なく現実となった。

第7話

「・・・やべえ」

ミストレルが思わず呟くくらい、夥しい数の艦娘達が自分の予定航路を横切っていく。

全員戦闘準備を整えた艦隊であり、ミストレルのように単艦など居ない。

集まっている規模から言っても討伐クラスの大海戦対応だ。

そうミストレルの勘は告げていた。

自分は逃亡兵だ。

艦娘達に気づかれぬよう島影に停泊してやり過ごすか、あえて話しかけて疑われないようにするか。

迷っているうちに偵察中の艦載機に発見されてしまった。

程なく艦載機を回収する為か、単独で艦娘が近づいてきた。

「第11263鎮守府の隼鷹だよ。そっちは？」

しまった。以前所属してた鎮守府のナンバーなんて言えない。

「あ、えーと、アタシは摩耶だ。西方海域への長距離遠征帰りなんだけどよ、皆は討伐か？」

「ああ。全鎮守府に招集かかっている例の討伐だよ」

「もうそんな時期だったかあ。じゃあアタシも帰ったら出撃命令かかるかなー」

隼鷹は周囲をきょろりと見回した後、ミストレルに耳打ちした。

「暗号表の7は使っちゃダメだって1ヶ月前から指令が出てるだろ。今は1か3を使っとけよ」

ミストレルはひやりと汗をかいた。当然最近の指令変更なんて知らない。

「そうだった。つい癖でさ」

隼鷹はにこりと笑った。

「だよなー、アタシもラッキーセブンだからつい使っちゃまうんだよー」

「あはははー」

よし、切り抜けられる。ミストレルがそう思ったとき。

「隼鷹ダメじゃない！隊列から勝手に離れないで！」

そう言いながら近づいてくる飛鷹を見た途端、隼鷹の表情が曇った。

「ゲ。お前早く行け」

「え？」

「お前、脱走兵だろ。飛鷹は容赦しねえからさ」

「・・・」

見抜いてなお、隼鷹は情報を伝えてくれたのだ。

これから帰港するまでに、犯してはならない致命的な間違いを。

ミストレルはとっさに自分の連絡先が書かれた名刺を隼鷹の手に押し付けた。

「お？」

「物を運びたかったら連絡しな。必ず届けてやる。この借りは返す」

「左舷側の島を回り込んで中央の海峡を進みな。艦隊航路から外れる」

「サンキュー」

こうしてミストレルと隼鷹は目配せを交わし、隼鷹は大袈裟な身振りで飛鷹の所に戻っていったのである。

「そうか。出航前に最新情報の収集をしておく必要があるな」

「やー、敵の群れに遭遇するのは別の意味で冷や汗かいたまいったぜ」
隼鷹のくれた情報のおかげで、以降遭遇した艦娘達とは暗号表1で通信を交わし、事なきを得た。

ミストレルは帰港後、ファッツに顛末をすっかり話して聞かせたのである。

ファッツはしばらく顎を撫でていたが、ちらりと時計を見ると

「じゃあ外でメシ食うか、たまには」

と言い、ミストレルを促したのである。

「いらっしやい」

チリリンと鐘を鳴らしながら、ファッツ達はキッチン「トラファールガー」のドアを開けた。

中から声をかけたのは口ひげを蓄えた初老の男だった。

「やあライネス、元気かい？」

「どっかの誰かさん達が何でも屋を廃業しちまったからな。買出しが面倒だよ」

「そりやすまないな」

「ミストレルもピラフ定食で良いのか？」

ライネスの問いにミストレルは頷いた。

「その方が手間が省けるだろ？ピラフ旨いしな」

「良い子にはエビフライをサービスだ」

「やった！」

嬉しそうにテーブル席に座るミストレルを横目に、ファッツはライネスにたずねた。

「なあ、情報屋で信用出来るのは誰だ？」

「ネタにもよる。深海棲艦関連ならムファミマス、海軍内部ならケイル、海域関連なら・・・」

ライネスはカウンターの奥に顎をしゃくった。

「そこに居るマツケイだろうよ」

ファッツはマツケイに近寄ると、声をかけた。

「やあ、海域関係に詳しいって聞いたんだけど、どんな事を聞いても良いかな？」

マツケイはグラスをコトリとカウンターに置くと、口を閉じたままファッツを見返した。

ピンと来たファッツはライネスに聞いた。

「すまん。こういう時の相場は？」

ライネスはニツと笑って答えた。

「そうさな。奴はそろそろジントニツクのお代わりが欲しい頃だろうよ」

「OK、奢るよ」

ライネスがジントニツクをマツケイに手渡すと、マツケイはニツと笑った。

手渡されたジントニツクを旨そうに一口飲んだ後、マツケイは話し始めた。

「元何でも屋で今は大手の一角に食い込もうって勢いのブラウン・ファッツさんだな」

「毎日食うので精一杯だけどね」

「質問の答えだが、鎮守府と大本営のやり取りなら大体解る。深海棲艦が新たに出現した海域とかな」

「それはその、イベント、とかもか?」

マツケイは目を細めた。

イベント、とは海軍内の符丁であり、その意味は「大討伐事案」である。

「ふーん、なら話は早えや。クエスト含めた定期連絡と緊急通信は押さえてる」

「情報料は?」

「一言2千コイン」

その時、ライネスはおやつと言う顔をして口を挟んだ。

「マツケイ、それはお得意さん向けの値段じゃなかったのか? 普通は4千コインだろ?」

マツケイはファッツを見ながら言った。

「そうなるだろ? ファッツさんよ」

ファッツは肩をすくめた。

「間違いなくね」

マツケイは目を輝かせながらピラフを食べ始めたミストレルをちらりと見た。

「あの嬢ちゃんの為だろ?」

「経営者としては従業員の安全確保義務があるんでね」

「義務ねえ。まあ良いや。オフィスはこの裏、デカイアンテナが目印だ」

「定休日と営業時間は?」

「そんな物があるような上等な商売じゃねえよ」

「解った。じゃあこれからよろしく」

「ごちそうさん」

マツケイが機嫌良く出て行ったのを見送ると、ファッツはミストレ

ルのいるテーブルに戻った。

そして少し怪訝な顔になると、

「なあ・確かピラフ定食にはエビフライが2本ついてた気がするんだが、なぜ俺のは1本なんだ？」

「気のせいだろ」

「そーかなー」

「う、疑うなら証拠はあるのかよう」

ファッツはついとミストレルの皿の端を指差した。

「どう見てもエビの尻尾が4本分あるんだが？」

「！」

「ライネスはオマケしてくれても1本だ。なら2+1は3だよな」

「・・・」

「なんで4つあるのかなー？」

「ど・・・」

「ど？」

「ごめん・・・1本食べた」

「正直でよろしい」

ファッツはピラフを頬張って目を細めた。

ライネスの料理は少し冷めたくらいでは、その美味しさは変わらないのだ。

依頼をこなす度に、二人の役割は自然と固まっていた。

ファッツは依頼内容の交渉、金銭管理、兵装の調達、海域の情報収集および全体計画の立案。

ミストレルは実際の輸送と艀装の整備、である。

マツケイ達の情報によって依頼の成功率も上がり、コストも無駄が無くなった。

「サンキュー、見立てが良かったから楽なもんだったぜ」

ミストレルが笑顔で帰ってくる度、ファッツはほっとしながら頭を撫でたのである。

第8話

話は現在に戻る。

5月22日 夕方

「ベレー、10時の方角に艦影が見える。どつちだ？」

ミストレルの問いにベレーはレーダーを向けた後、

「・・・深海棲艦側ノ斥候部隊ダト思イマス。高速型駆逐艦4隻デス」

「どうする？話してくるか？」

「・・・ソウデスネ。問題ナケレバ15分毎ニ探照灯デ合図ヲ送りマス。途絶エタラ迎エニ来テクダサイ」

「アタシはあっち、ヤシの木が1本突き出てる島の影に居るからな」

「解リマシタ」

ミストレルは島へと舵を切り、ベレーはそのまま深海棲艦達に近づいていった。

「コンニチハ」

「ヤア、単独ノ二級トハ珍シイネ」

「哨戒任務デスカ？オ疲れ様デス」

「んー・・・そろそろか？」

ミストレルは時計を見た。14分30秒が過ぎている。

そつと岩陰から片目だけ覗くと、ベレーがシグナルを出しているのが見えた。

よし。大丈夫。

ミストレルは再び時計を見た。予定より早めに動けてるから2時間くらいは余裕がある。

上手く聞きだせるかな、ベレーの奴。

ベレーは真面目な表情で説明を聞いていたが、深く頷きつつ呟いた。

「・・・ソウイウ事ナンデスネ」

「アア。コノ計画ガ上手ク行ケバ良イノダガ・・・アアスマナイ、マダ回ル所ガアルンデナ」

「オ引止メシテスママセンデシタ。オ氣ヲツケテ」

「デハ」

艦隊が十分離れてから、ベレーはそつとミストレルの元に帰って来た。

「どうだった？ 話聞けたか？」

「聞ケマシタケド、チョット想像ヲ超エテマシタ」

「あん？」

「ト、言ウ訳デス」

「洒落にならねえな・・・」

ミストレルはベレーの話聞いて渋い顔になった。

ファツゾに相談すれば間違いなく「スーツケースを捨てて帰って来い」レベルの話だ。

第2鎮守府の司令官を誘拐し、身柄引き渡し条件として大本営に武装解除または停戦を飲ませる。

要約すればこれが深海棲艦達の計画である。

周辺6海域の深海棲艦が協力し、大本営が把握している数の50倍の軍勢で周囲を囲んでいるという。

先程の部隊は偵察がてら、作戦を知らない深海棲艦が巻き添えにならないよう知らせて回っているのだという。
だが。

それだけの戦力差があるのなら、今更スーツケースを届けようがどうしようが状況は変わらない。

深海棲艦達が動き出すのは明日の夜明け。今から最大戦速で突入すれば撤退を含めても十分間に合うだろう。

ミストレルは頷くと海図を取り出し、ベレーと計画を微調整した。

5月23日 未明

「あー、シアルガ才島臨時鎮守府はそこだよな」

「誰だ貴様は」

目的の島が視界に入った頃、単艦で進んでいたミストレルは艦娘で

構成された2艦隊に止められた。

声をかけてきたのは一方の旗艦と思しき重巡艦娘だった。

静かな真夜中なのに緊張感を失ってない辺りはさすが第2鎮守府の精鋭だなとミストレルは思った。

ミストレルはあらかじめ聞いていた合言葉を話し出した。

「えっと、今夜は良く晴れてるな。星が881個は見えるよ」

途端に相手の眉がピクリと動き、

「・・・ああ。そこに見える星座は何だったかな」

「三本矢座だな」

「・・・よかろう。荷は？」

「これ1つだ」

重巡艦娘は探照灯を照らしてケースの刻印と封印を確認すると頷いた。

「確かに。ほら、受け取りの札だ」

「了解」

「ではな」

くるりと背を向ける重巡艦娘に、ミストレルはそつと声をかけた。

「な、なあ」

「ん？なんだ。まだ何かあるのか？」

ミストレルは一瞬迷ったが、信じる信じないはこいつらの問題だと思いを直した。

「耳かせ。大事な話だ」

「ミストレルサン、コッチコッチー！」

集合地点で待っていたベレーは、明かりをぶんぶん振り回しながらミストレルに声をかけた。

ミストレルはベレーの傍で止まると、島の方を振り向いた。

あの旗艦は司令官に報告するだろうか？

司令官は艦娘の話信じるだろうか？

・・・全員で夜明けまでに撤退出来るだろうか？

どう考えても蜘蛛の糸より頼りない確率だ。

しかし、脱走兵のアタシが引き返して説明したところで旗艦より信

じてもらえる訳もない。

ミストレルはベレーに向き直った。

ベレーはきよとんとした顔で見返した。

・・ならアタシは、アタシが出来る事をやる。

「帰るぞ。時間が押してる。最大戦速出すから手を離すなよ」

「ハイ」

ミストレルはベレーの手首を掴むと、艀装の推進装置を最大出力にセットした。

ベレーは、アタシが護り抜く。

5月26日 夕刻

「受け取りの札です。残りの金を頂きたい」

「・・ギャラの残りど連絡された経費だよ。ああ、ギャラの割増分も入ってる」

バッグを受け取りながら、ファッツは蛇又の表情が冴えない事に気づいていた。

札束を2つ3つ手に取り、真贋を確かめるとバッグに戻す。

「他ならぬ蛇又さんだ。額面通り入ってることは信じますよ」

「・・ありがとうございます」

ファッツはサンングラスの上端から見上げるように蛇又を見た。おかしい。

「どうしました？持って行った物で何かトラブルでも？」

「ん・・」

蛇又が顎をしゃくると、蛇又に同行してきた面々はミニバンに戻っていった。

蛇又は内ポケットからタバコを取り出した。

「吸うかね？」

「意志が弱いんで止めときますよ」

「ふ」

キン・・シユボツ。

深々と紫煙を吸って吐き出した後、蛇又は海原の方を見ながら言っ

た。

「君達が島を去って数時間後に、深海棲艦との大海戦が勃発した」

「・・・」

「第2鎮守府の少将閣下は現地で自害、艦娘も1名を除き壊滅した」

「・・・」

「その艦娘が、少将から君達への伝言を持ち帰ったよ」

「え？」

蛇又はそつと、ファッツゾに向き直ると続けた。

「・・・ありがとう。だが我々は引く訳には行かない、とな」

ファッツゾは口惜しそうに目を細めた。

第9話

24日の帰港直後、ファッツはミストレルから、深海棲艦の計画を艦隊旗艦に伝えた事を聞いた。

計画を知った時点でなぜ回れ右して帰ってこなかったとの問いに、ミストレルは

「艦娘が・・・全滅せずに済むかもしれないねえだろ・・・」

囁くような声でそう答えたので、ファッツは黙ってミストレルの頭を撫で、それ以上咎めなかった。

だから蛇又の口から聞きたかった。艦娘の無事を。おかげで全員逃げおおせたと。

それこそがミストレルが自らを危険に晒してまで望んだ結末だったから。

しかし。

軍と民のリクツは違う。

居たからこそ解る、外から見れば不思議な、しかし軍の中では正しいとされるリクツ。

自分が現地に居る司令官だったら導き出したであろう答えは、少将と同じだったと思う。

しかしそれは誰も、深海棲艦さえも望まぬ結末だった。

これでまた、艦娘と深海棲艦の溝が深くなったに違いない。

穏やかな顔で一礼し、蛇又が乗り込んだミニバンが去っていくのを、ファッツは唇を噛んだまま見送っていた。

この戦いに、何の理由があるんだ。

その頃。

「お洗濯くお洗濯、良いお天気の日はお洗濯く♪」

歌いながら、溢れんばかりの洗濯物が入った籠を抱えて屋上へと階段を上るのはベレーである。

ブラウン・ダイヤモンド・リミテッドにおいて、ベレーの役割は大変重要である。

仕事中はレーダーを使った広域探査と深海棲艦側との話し合い、そ

して戻ってくれば

「どうしてあの二人は掃除も洗濯も苦手なんでしょうねえ」

そう。事務所兼住居の掃除洗濯全般を任されているのである。

今から1年ほど前のこと。

ファッツ達の「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッド」がようやく商売として軌道に乗った頃。

文字通り事務所にベレーが転がり込んできた。

深海棲艦になるパターンは大きく分けて2つ。

1つは元々人間だったが、人体実験によって深海棲艦にさせられたパターン。

もう1つは元艦娘が、轟沈時に何らかの思念が残って深海棲艦になってしまったパターンである。

そして深海棲艦になった後、時間が経過すれば目指す方向性は変わってくる。

ある者は自分を貶めた者への復讐を誓い、

ある者は目にする全てに対して攻撃を始め、

ある者は元居た鎮守府を一目みたいと探し回り、

ある者は戦いが嫌になり、軍閥すらも避けて逃げまわる。

ベレーの場合は元艦娘であり、最後のパターンだった。

深海棲艦になったのも、沈み行くとき、もう戦いを命じられるのは嫌だという思いが強かったからだ。

そしてそれゆえに深海棲艦の二級になっても誰とも戦いたくなくなかった。

深海棲艦になった場所からデタラメに逃げ回り、疲れ果ててこの町にやってきた。

そしてファッツ達の事務所の前で、ついに目を回して倒れてしまったのである。

「良いんじゃないねえの。そいつと戦う気があるならここに居ねえよ」

「まあ、そりやそうだな」

ベレーがソファで目を覚ました時、ファッツとミストレルはこんな

事を話していた。

だが、意識が戻ってきたベレーはミストレルを見てガタガタと震えだした。

深海棲艦の天敵は艦娘。しかも駆逐艦と重巡では勝負にならない。

「ア・・・ア・・・」

ファッツはゆっくりと、声も出ないほど怯えているベレーに話しかけた。

「起きたか。先に言つとくが、俺達に攻撃しない限り俺もこいつも君を撃つたりしないよ」

ベレーが震えたままファッツを見たので、ファッツはカップにコーヒーを注ぎながら続けた。

「俺はクビにされた司令官、ミストレルは艦娘だが脱走兵だ。コーヒー飲むかい？」

「ア、ハイ、頂キマス・・・」

「で、君は艦隊からはぐれちやつたのかな？」

「イエ、ソノ・・・私モ逃ゲテ来タンデス」

ミストレルはベレーをじつと見返しながら訊ねた。

「なあ。お前はその後どうしたい？」

ベレーは悲しげに首を振った。

「・・・解リマセン。タダ、モウ戦イタクナインデス」

「仕事する気はあるか？」

予想外の質問に、ベレーはきよとんとして答えた。

「エツ？エエ、ハイ。地上デ食ベテクニハ働カナキヤイケナイツテ聞イテマスシ」

「じゃあアタシらを手伝って欲しいって言つたら、何が出来る？」

「エ、エエト、秘書艦ガヤル事務作業クライナラ」

ファッツが口を挟んだ。

「ほう。君は元艦娘か」

「ハツ、ハイ。今ハ沈ンデ、コウナツチャイマシタケド」

「んー・・・あたしらは海の上で物を運ぶ仕事をしてる」

「ハイ」

「だから深海棲艦や艦娘に出会う事は普通にある」

「ハイ」

「アタシは艦娘だから艦娘には話が通せるけど、艦娘だって事で怯えて攻撃を始めちゃう深海棲艦もいるんだよ」

ベレーは苦笑した。

「ソウデシヨウネ。怖いデスモノ」

「だからそいつらにさ、アタシが攻撃するつもりがねえって説明してくんねえかな」

「・・・ナルホド」

「そういう仕事だ。どうだ、やってみるか？無理強いはしねえよ」

たつぷり1分ほど思索した後、顔を上げて答えを言った。

「才願イシマス」

「ん。じゃあお前はベレーだ」

「・・・ベレー？」

「あだ名だよ。今の姿、流行のベレー帽被ってるみたいだからな」

「エー」

「だって、二級なんて呼べねーだろ？」

「ソウデスケド、モウ少シ名前ラシイ名前ノ方ガ」

「この町じゃ誰もがあだ名で呼び合ってる。名前だってほんとかどうか怪しいもんさ」

「貴方ハ・・・ソノ、艦娘ノ摩耶サンデスヨネ？」

ミストレルはニツと笑った。

「んな名前は知らねえな。アタシはミストレル・ダイヤモンド。ミストレルって呼んでくれ」

ベレーはくすつと笑った。

「解リマシタ。ミストレルサン」

「おうよ」

ファッツは頷き、キーホルダーから鍵を1本抜いて放り投げた。

「突き当たりから2個手前の部屋、それが君の部屋だ。鍵を渡す。内鍵もかかるよ」

「へ？」

「ミストレルの部屋は突き当たり、俺はその部屋だ。後はミストレルから聞いてくれ」

「ア、ハイ、解リマシタ」

「というわけだ。後は頼むぞミストレル」

「あいよ。じゃあ案内するからついてきな」

「エツト、アリガトウゴザイマス」

「おやすみ」

こうしてベレーは「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッド」に住みこみで働くことになったのである。

第10話

ベレーが転がり込んできた翌朝。

3人で朝食を取っていると、ベレーははっとした顔で告げた。

「アツ、ソウイエバ、私、人間二化ケラレマス」

「ファツゾは領くと、

「そうか。じゃあ食べ終わった後で良いから化けておいで」と返した。

ベレーが変身する為に海水を求めて出て行った後、ミストレルはファツゾに尋ねた。

「・・・なあ」

「んー？」

「深海棲艦ってさ」

「うん」

「大人しい奴多いよな」

「・・・そうだな。まあワルキューレの4人組みみたいに派手な連中も居るが」

「いや、派手か地味かじゃなくてさ、なんつーか、性悪な奴ってあんま見た事ねえんだよ」

「・・・でも鬼や姫、その取り巻きはかなり怖いって聞いたがなあ」

「そいつらも、どっちかっていうとさ」

「ああ」

「真面目な奴が理由があつて怒ってるって感じだったけどな」

「・・・へえ」

「向かった先の海域で人形抱えた小さい深海棲艦に「帰れ！」って涙目で言われた時は罪悪感ハンパなかったぞ」

「うーむ」

「この戦いつてさ、何で始まったんだ？」

「俺が生まれた頃には既に大海戦の只中だったからな。詳しくは知らん」

「ベレーもそうだけど、深海棲艦って元艦娘多いじゃん」

「まあな」

「・・・本当に戦ってどうにかなる問題なのかなあ」

「今朝は随分深い悩みだな、ミストレル」

「まーな」

そんな二人の会話は戻ってきたベレーによって途切れた。

「あ、あの、ただ今戻りました」

戸口に立つ人影をミストレルは二度見した。

「お、おま・・・ベレー・・・か？」

「は、はい。どこか変でしようか？」

服の裾を指で挟みながら、ベレーはもじもじとしていた。

ファッツは肩をすくめた。

「やれやれ、世の中の美人は艦娘か化けた深海棲艦なんじゃないかって気がしてきたよ」

ファッツの言葉の通り、化けたベレーは美少女という言葉がふさわしかった。

銀髪に青い瞳、透き通るように白い肌、ほっそりした体型。

人間で言えば高校生か大学生くらいだろう。

シンプルで落ち着いた、悪く言えば地味なワンピースもベレーの大人しさに良く合っていた。

ベレーはちよこんとソファに行儀良く座ると、二人の視線を辿りながら言った。

「あ、あの、この服がダメでしたら着替えますけど」

「いや、そういう事じゃないよ、ベレー」

「なんつーかさ、アタシらは何で戦う羽目になっちまったんだろうって思ってたの」

「ふえ？」

「お前さんのように大人しい子に主砲向けて撃つなんて、やっぱできねーよ」

「わ、私も、何で戦うのか、よく解らないです」

「ベレーが見た中でさ、いかにも性悪ってというような深海棲艦って居た？」

ファッツの問いにベレーは眉をへの字に曲げた。

「もちろんですよ！艦娘も深海棲艦も民間船も見境無く撃ちまくってくるのとか」

「お・おお・・・」

「わざと至近弾ばかり打って傷ついた姿を見て笑う奴とか！」

「えー・・・」

「休戦協定結んだクセに徒党組んで夜戦仕掛けてきて海域ごと奪っちゃう連中とか！」

「ひでえ」

「艦娘もそうですけど、深海棲艦側にだって性悪の連中は居るんですよー！」

ぶんぶんと拳を振って力説するベレーを見た後、ファッツとミストレルは顔を見合わせた。

そして、ファッツはにこりと笑って言った。

「よし、言いたい事をちゃんとと言えるのは良い事だ」

「へうっ!？」

ミストレルが続けた。

「この町じゃさ、黙ってるると美味しい所は皆取られちゃうからちゃんと主張しろよ」

「は、はい」

「まあしばらくは町に出る時は俺かミストレルと一緒に行動するといい」

「わ、解りました」

「ところで、私は司令官だったから深海棲艦側の艦装ってよく解らないんだが」

「そうでしょうね」

「装備とか維持方法とか教えてくれないか？」

「あ、説明書をご覧頂いた方が解りやすいかもしれませんね」

「・・・説明書あるんだ」

「私もなりたての頃はこれを見て覚えたんですよ」

「艦娘の方で説明書ってあったっけ？」

ミストレルもベレーも肩をすくめた。

「まあ、使い方はなんか記憶してた」

「そうですね。マニュアルが頭の中にある感じでした」

「そういう風になってるって事か。とりあえず、ちよつと読ませてもらえるかな」

「どうぞ」

こうしてファツゾは深海棲艦の運用方法を学び、特に給油が要らないという点について

「良いなあ・燃料代考えなくて良いのか・良いなあ・・・」

と、呟いていたという。

話は現在に戻る。

洗濯物を干している最中に事務所の電話が鳴ったので、ベレーは階下の事務所に向かって叫んだ。

「ごめんなさいい、誰か電話に出てくださいーい」

「あいよ、アタシが出るー」

ミストレルは腰を上げたファツゾを手で制しつつ受話器を上げた。

「ハロー、ブラウン・ダイヤモンド・リミテッドだ」

すると、一瞬の沈黙の後、聞きなれない声が出た。

「あーつと、覚えてるかな・何年か前に台湾沖で会った、第1126

3鎮守府の隼鷹なんだけどさ」

ミストレルは一瞬考えたが、すぐに表情がぱあつと輝いた。

「久しぶりだなおいーつといけねえ、あー、あの時はおかげで無事帰港出来たぜ」

電話の向こうで隼鷹が笑った。

「心配すんなって。外の公衆電話からかけてるからさ。覚えててくれて良かった」

「当たり前だろ。で、仕事か?」

「仕事になるのかな・どこから話せば良いのかってくらい長い話なんだよ」

「おう。なんなら直接会おうか?」

「助かる。明後日、海上で落ち合えないかな」

「場所は？」

「ええつと、この間会った台湾沖辺りは？」

「台湾沖か。ああ、かまわねえよ」

「じゃ座標位置を言うぜ。そこに1400時くらい」

「あいよ・ん、メモした。じゃあ28日の1400時、台湾沖な」

「じゃーな」

ガチャリと電話を切った時、ファッツは眉を顰めてミストレルに言った。

「おいおい、依頼ならテッド通させた方が安全じゃないか？」

「まだ依頼って決まった訳じゃなさそうだからな」

「1人で行くなよ？台湾沖だって艦隊航路も戦域もあるんだ」

「解ってる。ベレーと一緒に行く」

「よし、ベレーに説明しといてくれ。出港準備もな」

「あいよ」

「俺はこれからテッドに説明してくる。台湾沖だと・2週間くらいか？」

「そこまでかからねえと思うけどな」

「まあ早く終わる分には問題ないさ」

そういうとファッツは車のキーを手に、がたりと席を立った。

第11話

この町で生きていく上で、守らなきゃいけないルールはそれ程多くない。

だが、ファッツが行おうとしている事は間違いなくその中の最優先事項だった。

ファッツは表通りから少し奥に入った所にある、目立たない家の前でBMWを止めた。

「テッド仲介所」

そう書かれた扉を開けると、きつい葉巻の匂いがした。

「やあテッド、調子はどうだい？」

部屋の奥で書類とにらみ合いをしていた小太りの男は、ファッツの声で顔を上げた。

「ああ？ファッツか、今忙しいから面倒事はお断りだぞ」

「分配かい？」

「違う。差配だ」

差配とは、1つの依頼を複数のDeadline Deliverablesに任せる為に仕分ける事。

分配とは、複数のDeadline Deliverablesで1つの仕事をした後、仕事量に応じてギャラを按分する事を指す。

両方ともテッドの重要な仕事であり、その為にテッドは居るようなものである。

ゆえに、一番ここに来てはいけないタイミングは分配額でDeadline Deliverablesがテッドに文句を言ってる時だ。

テッドはDeadline Deliverablesに仕事を依頼する唯一の仲介人である。

とぼっちりを食って仕事を干されてはたまらない。

差配で良かったと思いが、ファッツは話し始めた。

「何年前か、うちでインドまでの長距離輸送を受けただろ？」

テッドは思い出すように顎に手をやったが、やがて頷くと、

「・・・ああ。あの超長距離な。あの後依頼人が大層喜んでな、うちの評判も上がったぜ」

そう言いながらテッドが満足そうに葉巻の煙を吐き出すのを見て、ファッツは頷いた。

「そりや良かった。で、その輸送中にミストレルが世話になった艦娘が居るんだが」

「ほう」

「そいつから今朝、ミストレル宛に電話がかかってきた。だから2週間くらい、うちはそつちを対応する」

「仕事か？」

「今は会ってくれと言われたただだから解らない。仕事に変わった場合は改めて連絡するよ」

「そうしてくれ。じゃあファッツのそこは2週間対応不可・・・と」

「すまん」

テッドが気づいたようにガリガリと頭をかいた。

「あーそうか、じゃあ今度の計画にはお前らが使えんのか・・・参ったな」
ファッツが肩をすくめた。

「終りが早まったら連絡するよ」

「そうしてくれ。期待しないで待ってる」

「報告はこれだけだ。邪魔したな」

「ああ、またな」

ファッツはテッド仲介所を振り向き、1度頷くとBMWに乗り込んだ。
だ。

あらかじめ、このように知らせてしまえばどうという事は無い。

まずいのは後で、しかも他の人の口からテッドが聞いてしまった場合である。

もしもテッドという仲介システムをないがしろにしていると疑われれば、町の連中が一気に敵に変わる。

そうなればもう町にはいられない。

以前、ちよつとでも多く稼ぎたいとコソコソ動き回った連中がどれだけ消されていった事か。

破ってはならない町の掟だ。

BMWのエンジンをかけた時、聞きなれた「ドツドツドド」というエンジン音が近づいてきた。

バックミラーをちらりと見たファッツは運転席の窓を開けた。

BMWの隣に派手なハーレーのチョップパーが優雅に止まる。

キックスタンドを起こしつつライダーが声をかけてきた。

「はぁーいファッツ、元気?」

「ナタリア、どうしたんだ?」

ナタリア。

レ級4人組のDeadline Deliver、*「ワルキューレ」*のボスである。

ナタリア自身もレ級であり、当然今は人に化けた姿である。

乗ってきたハーレーは彼女の愛車であり、傷でもつけようものなら跡形なく吹き飛ばされるだろう。

ナタリアは眉を寄せて話し始めた。

「聞いてよファッツ、テッドの奴、この間の山越えのギャラ、ペナルティで250万も減らすっていうのよ!」

「うん? 深海棲艦向けの弾薬輸送だろ? なんで山越えなんだ?」

「運び先は海底だけど置いてあるのが山奥の倉庫だったのよ。地上を300kmも運んだんだから」

「どうやって運んだんだ?」

「決まってるでしょ。艦装に押し込んで皆で1台ずつバイク運転したわよ」

「で、なんでペナルティなんだ?」

「ハイウェイにパンダが隠れててスピード違反でパクられたの」

パンダとはパトカーの事である。色でお察し頂きたい。

「何キロで?」

「・・・」

バツの悪そうな顔になるナタリアをファッツが無言で見上げると、渋々と言った様子でナタリアは答えた。

「・・・120km」

「高速で120km?別に皆出してるじゃないか。蛇行運転でもしたのか?」

「120kmオーバーよ」

「一発免停確定じゃないか」

「そもそも免許持ってないけどね」

「よく警察とトラブルにならなかつたな」

「なって、留置場にご案内されて、輸送が間に合わないって事でテッドに電話した」

ファッツがますますジト目になったので、ナタリアは人指し指を立てて反論し始めた。

「しようがないでしょファッツ。ハーレーは高速の方が安定するのよ。知らないの?」

「だからって200kmも出す事ないだろ」

「あら、240kmよ」

「お前なあ」

「超特急でってオーダーだったし。パンダ振り切ったら機動隊のヘリまで出てきてさあ」

「留置場からどうやって出たんだよ」

「身柄引き受けに来たのは町長の秘書だったわよ」

「あー・・・」

交通違反で留まる限り、速やかに収束させるなら政治家に介入してもらうのが手っ取り早い。

この町の警察署長と町長はとても仲が良いから尚の事だ。

警察もナタリア達が深海棲艦だとは気づかなかつたのだろう。

もっとも、ナタリアが本気で怒れば警察署の1つや2つ訳も無く壊滅させられるのだが。

「それなら250万で実費じゃないの?政治家動かしたんだろ?」

「実費だろうが何だろうがアタシ達は砲弾搔い潜って海底まで運んだのよー。そこまで値切られる覚えは無いわー!」

ファッツは両手を挙げた。

「んじゃあ後はテッドとやってくれよ。サシで」

「えー、一緒に来てくれないのファッツお？」

「どう考えても肩を持てる理由がないよ」

数秒間ファッツを見たナタリアは、フンと鼻を鳴らし、再びハーレーのエンジンをかけた。

「ファッツがダメだっていうなら勝ち目無いか。じゃ、帰るわ」

「それが良いよ」

「みっちゃん達によろしくねー」

「ああ」

みっちゃんとはミストレルの事である。

「やれやれ、テッドの肩代わりをしちまったよ」

ファッツはハーレーの後姿をちらりと見送ると、BMWを発進させた。

第12話

5月28日 台湾沖

「おーい！摩耶〜！」

隼鷹が嬉しそうに腕を振り回して呼びかける姿を見て、ミストレルは苦笑した。

「あー、摩耶って呼ばれるの久しぶりすぎだぜ」

傍らのベレーが訊ねた。

「会ツテル間、私ハナント呼びマシヨウカ？」

「ミストレルでいいよ」

「ハイ」

やがて3人は海の只中で落ち合うと、隼鷹は偵察機を放った。

「近辺の哨戒。アタシ達以外を見つけたら知らせてくれ」

偵察機の妖精達はピシツと敬礼すると四方に散っていった。

隼鷹はちらりとベレーを見たあと、ミストレルに向き直った。

「え、えーつと、さ」

「こいつなら心配要らないぜ。アタシの仕事仲間だ」

「ハジメマシテ。ベレー、ト申シマス」

「そつか。よろしくな。で、さ。早速なんだけど」

「おう」

「轟沈した艦娘が深海棲艦になるって噂、本当だと思うか？」

ベレーがそつと手を上げた。

「アノ、私ガソウデス」

隼鷹がぐきりとベレーに向き直った。

「マジか!？」

「ハ、ハイ。以前ハ鎮守府デ秘書艦ヲシテマシタケド、沈ンジャツテ」

「・・・」

悲しげな顔で黙り込んだ隼鷹を見て、ミストレルはそつと声をかけた。
「なあ、誰か沈んじまったのか？」

隼鷹はミストレルを見返した。

その瞳の揺れ方を見て、ミストレルは頷いた。

ミストレルは隼鷹を刺激しないよう、努めてさりりと要点を伝え
た。

「そつか。で、深海棲艦になつてても良いからもう1度会いたいって
事か？」

隼鷹は俯きながら答えた。

「・・・会いたいと言うかさ、謝りたいんだよ」

「謝る？」

「前会った時、あたしの後ろから来た飛鷹覚えてるか？」

「えっ？あ、ああ、ちよつとだけな」

「先週の戦いでさ、艦載機の弾薬交換タイミングをあいつの言う通り
早めにしておけば」

「・・・」

「あいつが敵の航空隊から不意打ちされた時、蹴散らしてやれたんだ」

「・・・」

「あたしは慌てて航空隊を発艦させたんだけど、その時にはもう沈む
のが見えたんだよ」

「・・・」

ミストレルは水平線に視線を向けた。こういう時に隼鷹を見続け
るのはこちらも辛い。

「いっつもあいつは小言が多くて真面目でさ、うっとうしいって思っ
た事もあった」

「・・・」

「鎮守府では忙しいから考える暇がないんだけど、遠征とかでぽつん
とするとさ」

「・・・」

「あのうるさい飛鷹はもうどこにも居ないんだって、暗い闇みたいな
気持ちがいじわじわ襲って来るんだよ」

「・・・」

「あたしが守れなかったせいで飛鷹は沈んだ。あたしがああしてくれ

ば、こうしてればって」

「・・・」

「何を言っても飛鷹は許してくれないと思う」

「・・・」

「許してもらえなくても良いけど、もう一回だけ会って、直接謝りたいんだ」

「・・・」

「でないとき、このままだとあたし、気が狂いそうなんだよ」

「・・・」

隼鷹が鼻をすすりあげた。

「鎮守府の誰もあたしを責めなかった。悔しさをバネに一層戦いに励もうって」

「・・・」

「司令官は飛鷹をまた建造してやるって何度も建造レシピ回してる」

「・・・」

「けど、そうじゃ、そうじゃないんだよ」

「・・・」

「あたしに向かって手を伸ばしながら沈んでいった、あいつの横顔が忘れられないんだよ・・・」

「・・・」

「夥しい数の深海棲艦が居るのは解ってるし、他の艦娘に沈められる前に巡り合えるかどうかも解らない」

「・・・」

隼鷹はミストレルの手首を掴んだ。

「で、でもさ、もしかしたら、もしかしたらさ」

だが、その言葉を遮ったのはベレーだった。

「隼鷹サン」

「え?」

「・・・深海棲艦ニナルト、私達ハ大概、記憶ノ一部マタハ大部分ヲ失イマス」

「・・・え?」

「私ハ、元居タ鎮守府ノ番号ヲドウヤツテモ思イ出セマセン」

「・・・」

「ソレドコロカ、同僚ニ誰ガ居タカモ、全員ハ覚エテナインデス」

「・・・」

隼鷹が次第に表情を失っていくなか、ベレーはしっかりと隼鷹を見ながら続けた。

「デモ」

「・・・」

「鎮守府デ起キタ、楽シカッタ記憶ハアルンデス」

「・・・え？」

「私ハ潜水艦ノUー511デシタケド、伊58サンニ、トテモ親切ニシテモラエタ」

「・・・」

「潜水艦ノ皆デ内緒デ海水浴ニ行ツテ、スイカ割シテ、花火ヲ見テ」

「・・・」

「楽シカッタナアツテ記憶ハ、アルンデス」

「・・・」

「他ノ深海棲艦ノ話デハ、轟沈後、艦娘トシテ蘇ルカ、天国ニ行クカ、ソレトモ深海棲艦ニナルカ選ベタソウデス」

「・・・」

「私ハ気ツイタラ深海棲艦デシタケド、モシカシタラ、モウ1回、飛鷹サントシテ来テクレルカモシレマセン」

「・・・」

「仮ニ深海棲艦ニナツタトシテモ、隼鷹サントノ楽シイ思イ出ダケ覚エテルカモシレマセンヨ、私ミタイニ」

「・・・」

隼鷹の手を、ベレーはそつと握った。

「ダカラ・・・ダカラ、絶望シナイデ」

隼鷹が泣き止んだのは、それから2時間も経った後のことだった。

「ご、ごめんな。変な事につき合わせちまって」

隼鷹を見ながらミストレルはニツと笑った。

「アタシにとってアンタは命の恩人だ。ちつとは落ち着いたか？」

「・・・ああ。だいぶ整理出来た。依頼にならなくて悪かったな」

「気にすんなよ。友達だろ」

隼鷹はミストレルをしばらく見つめた後、こくりと頷いた。

「・・・うん。ありがとう。それじゃ、行くよ」

「大丈夫か？」

「へへっ。遠征の途中だから長居するとバレちまうんだよ」

「そういうことか」

「・・・今度、オフの時にでも酒に付き合ってくれよ」

「良いぜ。連絡してくれ。人間に化けたこいつ結構可愛いんだぜ？」

「エー？」

そういうとミストレルはベレーの頭をわしわしと撫でる。

隼鷹は少しの間、ベレーをじっと見た後、

「・・・あたしはもう、二級を撃てないなあ」

と、ポツリと言い、

「また連絡する。じゃあー！」

そう言いながら二人から去っていったのである。

ミストレルとベレーはそこに立ったまま、水平線の彼方に消えるまで見送っていた。

第13話

「・・・ベレー」

「ハイ」

とっぷりと日も暮れ、帰途の途中でミストレルはベレーに声をかけた。

「お前、さっきのは嘘、だな？」

「エツ？」

「・・・楽しい記憶は残るってやつ」

ベレーは少し俯きつつ頷いた。

「・・・ハイ」

「ああでも言わなきゃ隼鷹が潰れちまうのは見えてたから、ダメだとは言わねえ」

「・・・」

「・・・いや、そうじゃねえな。ごめん」

「？」

ミストレルはぐいとベレーを引き寄せた。

「ワツ」

「良いフォローだったぞベレー。アタシのダチを助けてくれて、ありがとうな」

「・・・ハイ。デモ、嘘ツイテゴメンナサイ」

「なあ」

「？」

「ほ、本当はさ、さっき言ったような事を覚えてたりするのか？」

「シー」

しばらくベレーは考えていたが

「・・・ドチラカトイウト、沈ンダ状況ダツタリ、同僚ノ嫌ガラセダツタリ、アンマリ良い記憶ツテ残ツテナイデス」

「・・・そつ、か」

「断片ダケノ記憶デモ、コンナニ変ワリ果テテデモ、何カ強イ思念ガ

残ツタノガ私達デスカラ」

「・・・」

「タダ」

「ただ？」

「残シテキタ後輩ヲ守リタイトイウ、物凄ク強イ思イヲ持ツテタ人モ居マシタ」

「・・・へえ」

「命令ヲ遂行出来ズニ終ワツタ事ヲ謝リタイツテ子モ居マシタ」

「・・・」

「昇天スル前ニ、モウ1度ダケ鎮守府ヲ見タイツテ子モ」

「・・・」

「タダ、自分ガ沈ンダノハ司令官ノセイダカラ、道連レニシテヤルツテ子ガ一番多カツタ氣ガシマス」

「・・・そっか」

ベレーとミストレルは、そつと空を見上げた。

漆黒の空の中で星は白く、宝石のように瞬いていた。

出航してから5日後。

隼鷹と分かれた二人が港に戻ってきた時、ファッツォは二人が喧嘩でもしたのかと首を傾げた。

珍しく黙りこくっていたからだ。

3人で車に乗り、港から帰る途中、そつとベレーが口を開いた。

「ファッツォさんは司令官時代、部下の艦娘さんが沈んだ事はありませんか？」

ファッツォは首を振った。

「俺は超のつく臆病司令官だったからな。LV20までは演習しかさせなかったし」

「・・・」

「小破になったら撤退させてたからな」

ミストレルが苦笑交じりに言った。

「それはちよつと臆病すぎねえか？」

ファッツォは笑った。

「よく言われたよ。まだ行けるってな」

「・・・」

「だが、行けるかもしれないのと、行って大丈夫というのは違う」

「・・・」

「轟沈の方程式が解明されてない以上、可能性があるなら撤退させるべきだと思ったのさ」

「・・・」

「まあ世間的には中破までは大丈夫と言われてるがな」

「ああ」

「そういうのとは別に、港に服が破れるような痛々しい姿で戻ってくるのが可哀想でならなかった」

ベレーが微笑んだ。

「ファッツさんらしいですね。優しい司令官は好かれますよ」

ファッツは微妙な顔をしながら答えた。

「だが結局、俺がクビになった時点で鎮守府は閉鎖、皆もLV1化されてバラバラに異動していった」

「・・・」

「だからあの鎮守府の記憶を持つてるのは俺1人だ。まあ、その方がいいけどな」

「・・・」

ミストレルは頭の後ろで両手を組んだ。

「現場でどうあれさ、進撃するか否かは司令官の判断じゃん」

「ああ」

「だとしたらさ、艦娘が轟沈した事に僚艦が責任感じなくてもいいよな」

「そうだな。轟沈は司令官の采配ミスだ。ただ」

「ただ？」

「仲良しであれば、そんな事言ってもらえないだろう」

「・・・」

「同じ艦娘を建造出来たとしても記憶までは戻ってくれない」

「・・・」

「実際、司令官同士の連絡会ではさ？」

「姉妹や友人を失った艦娘が著しく士気低下する例は、少ないが報告されてたよ」

「・・・そっか」

「司令官が一番やってはいけない事が艦娘を沈めてしまう事だ」

「俺のへっぴりな履歴で唯一自慢出来る点は、誰も沈めなかつたってことだけだ」

「・・・」

ベレーがポツリと言った。

「私の僚艦達は、やっぱり悩んだのかな・・・」

「仲良しが居たのかい？」

「・・・正直、良く覚えてないんです。でも、誰か居たような気がして」
「ただ、沈んだ事をベレーが気に病む理由はないよ。ベレーは命令通り戦ったんだからね」

「・・・はい」

「俺は今までも、これからも、誰も沈めない。そんな事になるんなら農家に転職する」

ミストレルとベレーが怪訝な顔をした。

「農家？」

「ああ。それなら海戦とはおさらば出来るだろ？」

ベレーが首を傾げた。

「みんなでサツマイモ作るんですか？」

「なんでサツマイモ限定なんだ？」

「なんとなく」

「まあサツマイモでもキャベツでも良いんだが、何をしてても生きていけるってことだ」

「・・・」

「だから二人とも海に拘るな。この町に拘るな。手段に拘って命を軽んずるなよ」

ミストレルが肩をすくめた。

「ま、ファッツがそう言うんならその通りにするさ」

ベレーがくすくす笑った。

「艦娘や深海棲艦に畑仕事させる司令官ですか。聞いたこと無いですね」

ファッツがニツと笑った。

「意外とミストレルって農家ファッシュン似合いそうだよな」

ミストレルが怪訝な顔になった。

「ああん？農家ファッシュン？」

「頭にタオル巻いて麦わら帽子、両腕はゴム手袋、上は長袖シャツに割烹着、下はモンペで長靴履き」

ミストレルが一気にジト目になった。

「どういう意味だよファッツ」

「可愛い子は何着ても似合うって事だ」

「んな格好似合いたくねえよ」

「案外気に入るかもしれんぞ？これからホームセンターに買いに行くか？」

「いらねーって！」

ベレーはやり取りを聞きながらくすくす笑っていたが、ふと気がついた。

ファッツは私達が暗い顔をして帰って来たので、気を紛らわせようとしているのではないか。

・・うん、きつとそうだ。

だってファッツさんは優しいから。

「・・・ダンケ」

ファッツの背中に向かってぽつりと呟いた後、ベレーははっとした。

二級になってからドイツ語なんて一回も口をつけて出てきた事なんてなかったのに。

「ああっ!？」

ファッツがそう叫んだので、二人はびくりとした。

ミストレルがそつと訊ねた。

「な、なんだよファッツ？」

ファッツは嫌そうな顔でミストレルに振り向いた。

「燃料代・・・2割上がったんだ。27日から」

「ゲ」

「ところで聞きそびれたが、5日間行って何か仕事に結びついたのか？」

音速で目を逸らすミストレルとベレーを見て、ファッツは溜息をついた。

「やっぱりな。じゃあ燃料代の分だけ赤字か・・・」

ミストレルがファッツに向き直って言った。

「ほ、ほら、損して得取れって言うじゃんか」

「得は取れたのか？」

「その辺はこれからって事でさ」

「・・・当面、装備は15・2cmのみな」

「魚雷も無しかよ!?!」

「高いからな」

「そんな装備で戦域いけねえだろうがよ」

「だから戦域へ行くな。修理代も浮く」

「稼げねえだろ!?!」

「安全航路の臨時チャーター便だつて沢山ある。ドラム缶3セット積みば結構入る」

「・・・あれつまんねえんだよ」

「仕事とはそういうものだ」

「ドカンと1発稼げば一気に赤字解消できるって」

「ドカンと稼ぐ話は修理代も経費もドカンとかかるだろ。チャーター便の方が利益率は高いんだぞ」

「いやーだー、ずっとチャーター便なんていやだー」

「わがまま言うな。今回の燃料代ミストレルのペイから引くぞ」

「やめろー」

ベレーは溜息をついた。

これは自分が地味に稼がないといけないパターンだ。
でないともた家財を売る羽目になる。

第14話

翌日。

「んー…どうかなあ？需要あるのかなあ」

「解らないですけど、テッドさんにご相談しようかなって」

「あー、まあ売るならテッドの店だろうが…」

ファッツが苦虫を噛み潰したような顔をしているのに、珍しくベレーは引かなかった。

深海棲艦向け燃料を小売出来ないか。

これがベレーの提案だった。

知つての通り、ベレーは自らの艤装内で海水から燃料を生成出来る。

それを今までは自分で消費していたのだが、外販したら稼げるのではと考えたのである。

ファッツはしばらく考えた後にベレーに訊ねた。

「燃料を作る事でどっかの部品が消耗するとか、魂削るとかないだろうな？」

「特にそういう事は無いですよ？」

「鶴の恩返しの展開は御免だよ？本当に大丈夫か？」

「そう言われると…大丈夫だと思いますけど…」

ファッツはポンとベレーの肩を叩いた。

「ミストレルはぶーぶー文句言ってるが、やらなきゃならん事は理解してる」

「はい」

「俺も片手間に何でも屋を再開したし、貯めてるのは万が一への備えだ」

「はい」

「だから身を削るような働き方だけはするな。これは命令だ」
「…」

ベレーはしばらく俯いていたが、再び顔を上げると言った。

「でも、そうやってお二人が頑張ってるのに、私だけ家事手伝いで
は・・・」

「家事だつて大事な仕事だ。ベレーがやってくれなきゃ今頃埋もれて
る」

「でも、出来る事はやりたいです」

「んー」

ファッツは腕を組んで考えていたが、

「知ってるかどうか解らんが、あいつらに聞いてみるか」

「？」

ファッツは車のキーを指に引っ掛けながら言った。

「修理屋だ」

ファッツがベレーを連れてやってきたのは「夕島整備工場」と書か
れた工場だった。

駐車場で車から降りた途端、事務所から声が飛んできた。

「あーやつと来たー！おっそーいー」

ファッツはびくりとしながらも返事をした。

「な、なんだ。何かあったのか？」

駆け寄ってきたのはつなぎ姿の少女。

そしてファッツの隣に立つと腰に手を当てて仁王立ちし、ファッツ
に人差し指を突き出した。

「コンプレッサーが届くのは先週土曜日の朝だから、それまでに入庫
してつて言ったじゃん！」

「・・・あ」

ファッツはここに至り、少女が怒っている理由をようやく思い出した。
た。

BMWのエアコンの修理を頼んでいた事をすっかり忘れていたのだ。
である。

部品が入庫する日に交換するよう手筈を整えてもらっていたのだ。

「月末は立て込んでるから忘れないでねっ」

「大丈夫だ。この暑いのにエアコン無しでいりや嫌でも思い出す」

・・・しまった。

こういう場合は詫びの品の一つでも持っていないてはならないが、生憎丸腰だ。

青くなつていくファッツの顔色をじっと見ていた少女は溜息をついた。

「・・・今の今まで忘れてたんでしょ」

ファッツは素直に頭を下げた。

「すまない、アイウイ。残念ながらご名答だ」

「もー・・・」

その時。

「島ちやーん、どうかしたー?」

騒ぎを聞きつけたのか、工場の方からもう一人人影が現れた。

「ばりつちー、またファッツさんが約束忘れたんだよー!」

「んー?」

ファッツが頭をかきながら詫びた。

「ビット、すまん。こいつのエアコンの件をすっぱかしてしまった」

ビットは呆れたように軽く手を上げた。

「よくこの暑いのにエアコン無しで乗ってられたわねー」

町の人にはビット、アイウイと呼ばせるが、互いは「島ちゃん」「ばりつち」と呼び合うこの2人。

ビットこと「ばりつち」は艦娘の夕張、アイウイこと「島ちゃん」は同じく艦娘の島風である。

町でも評判の仲良しコンビであり、例によって脱走兵である。

ビットは修理加工技術に関しては職人並だが、銭勘定はからつきし。

ゆえにアイウイが作業スケジュールや請求といった事務処理を行っている。

町で唯一の工場であり、艦装がメインだが、車やエアコン、家電製品など大概の修理を受け付けている。

ファッツが肩をすくめた。

「色々立て込んでたんだが言い訳だな。1つ借りだ。何か用があれば言ってくれ」

それを聞いたビットはニツと笑った。

「あら。じゃあ早速お願いしちやおつかない」

「構わんが」

「私達はあなたの車直しておくから、あれ届けてきてくれないかしら？」

ビットが指差した先にあるのは軽トラとトラクターである。

「・・・どっちを？」

「トラクターよ。隣町の溝山さんのところまで。帰りは軽トラで帰ってきて」

「げ」

ファッツが途端に嫌そうな顔になった。

溝山氏は大変良い人なのだが、溝山家までの道のりは悪路だらけの一本道である。

トラクターや軽トラでやっと抜けられる崖っぷちの道が数え切れないほどあるのである。

「これ請求書とキーだよ。よろしくっ」

あつという間に請求書とトラクターのキーを握らせるアイウイ。

ファッツは軽トラを指差し

「そ、そうだ。ベレーはMTだと運転できな・・・」

と言いかけたが、

「あれATよ。BMWの鍵頂戴。はい軽トラの鍵。じゃ頑張つてー！」

と、ビットが鮮やかに退路を塞いだ。

ファッツは仕方なく、運転して自分についてくるように言うと、ベレーに軽トラの鍵を渡した。

「ついていけば良いんですね」

「ああ。シフトレバーの前にスイッチがあるだろ？」

「え？あ、はい。これですね」

「それがデフロックススイッチだ。車輪が空転したらそれをONにする」といふ

ベレーは首を傾げた。

「私、そんなに運転下手そうに見えますか？」

「そうじゃないが、行けば解るよ」

「？」

「やれやれ、だ」

ファッツは溜息を吐きつつトラックのドアを開けた。

日のあるうちに帰ってくるには急がねばならない。

2時間後。

「お手数かけましたなあファッツさん」

「いえいえ、夕島整備工場の代理ですから」

「何でも屋復活ですかね？」

「出来る時だけ、ですけどね」

「ほっほ。連絡先はとっておくものだ。代金を持ってくるから待っててください」

「解りました」

トラックに気づいた溝山さんと一通り会話を終えると、ファッツはそつと額の汗を拭った。

何度来てもこの道は慣れないな。以前よりは道幅も広くなったけど。

その時、ようやくベレーの運転する軽トラが最後の坂を上ってきた。

ファッツの脇に車を止めると、よろめくように降りてきて一言。

「ここはどこかのポリビアなんですか・デスロード以外の何物でもないですよ」

「いや単なる私道だから」

「何回か後輪が崖の外にはみ出ましたよ！」

「デフロック必須だろ。軽トラ最高だよな」

「あの丸太橋、絶対腐ってますよ！」

「腐食が進んでない所を見分ける目が養われるよな」

「~~~~~!!」

涙目のベレーが無言でぼかぼか叩いてくるのをファッツが無抵抗で受け止めていると。

「ほい代金。島風の嬢ちゃんの指定金額通り入れといたよ」

溝山さんが封筒を手に、玄関から出てきたのである。

叩くのこそ止めたものの、頬を膨らませてむくれているベレーを横に、ファツゾは封筒を受け取った。

「どうも・・確かに」

そして溝山さんはビニール袋をベレーに手渡した。

「ふえ?」

「ごっちは山葡萄のジャムとスコーンだ。良く来てくれたね、お嬢さん」

「あ、あの、頂いて良いんですか?」

「もちろんだとも。さあ、気をつけて帰りなさい」

これほどの確な注意があるだろうかとファツゾは思った。

泥まみれの坂は登りより下りの方が怖い。もう少し休みたいが日が暮れたら万事休すだ。

崖つぶちで野宿なんて考えただけでぞっとする。

第15話

「絶・対・に！ファッツさんが運転してくださいね！」

早々と軽トラの助手席に座り、涙目で訴えるベレー。

「はいはい、じゃあ帰るとするか」

運転席でシートベルトをしながらファッツは思った。

あの道を嬉々として運転したがるミストレルは肝が据わってるんだな。

ベレーの様子を見る限り、艦娘だからってわけでもなさそうだし。

・・ナタリアはジヤムを買いにしょっちゅうハーレーで来てるらしいが、あれは論外だ。

3時間後。

「届けて・・きたぞ」

グロツキーな表情を浮かべるファッツとベレーにビツトはけろりとした顔で

「結構早かったじゃない。こっちは部品入れ替えてテスト中よ。もうちょっと待って」

そう答えると、アイウイが

「お疲れ様！麦茶だよ！」

そう言って2人分の麦茶を盆に載せて立っている。

さすが最速を誇る島風。気配りも一流である。

「やあありがたい。ベレーも飲むと良い」

「い、頂きます・・」

二人がグラスを受け取ると、アイウイはにこりと微笑んで手を出した。

「？」

「御代」

「麦茶で金取るのか!？」

「トラクターの修理代っ！預かってきたんでしょ？」

「あ、ああ、そうか。これだ」

封筒をそのまま渡すとアイウイが早速中身を確認し、

「……ん。丁度だね。確かに！」

と喋ってポケットに仕舞った。

その時ビットが計器を片付けながら振り向いた。

「お待たせーこれで良いと思うわ。ガスの抜けも無いみたいだし」
と言ってきたのである。

「涼しい……極楽……」

ドバドバと冷風を吐き出すBMWの室内でベレーが感動している頃。

ファッツは修理代の支払いを済ませながら、ふと用件を思い出した。

「そういえばさ、ビット」

「なーに？」

「あいつの事なんだが」

ファッツがベレーを指差し、続けた。

「燃料を生成出来る機能が艤装にあるようなんだが」

「ふんふん」

「外販する為に大量に作って、その、あいつ自身に悪影響は無いだろっか？」

「うーん」

ビットは少し考えこんでいたが、

「ちよつと艤装見せてもらえるかしら？」
と返した。

「生成装置ハコノ辺リダト思イマス」

「ふんふん。これね。海水はどこから取り入れるの？」

「足首ノ辺リニ取水口ガアリマス。生命維持装置ノ取水口ト共有デス」

「なるほどねー。ちよつと燃料貰っても良いかしら？」

「ハイ」

ベレーが二級に戻り、ビットが説明を聞きながら装置を調べている。遠くで見守るファッツに、アイウイが声をかけた。

「ベレーちゃんの艤装で商売するの？」

「俺はさせたくないんだがな・命を削ってまで商売する事はない」

「でもさ、ベレーちゃんの生成出来る燃料って誰でも使えるの？」

「さあな。お互い燃料という1つの単語で言ってるが、同じ物かどうかも解らん」

「だよー」

しばらくして、ビットがフラスコを手に戻ってきた。

「うん、一般的なケロシンとほぼ同一の成分。燃焼特性も同じ。海水から生成出来るなんて羨ましいわ」

「どうだった？生命や艤装の重要な装置に影響はありそうか？」

「ううん。構造は結構単純で、触媒みたいなのを通してるだけよ」

「そ、そうか」

「元々大量に変換する事を想定してるみたいね。ただ・・・」

ファッツゾがピクリと反応した。

「なんだ？どんな悪影響があるんだ！」

「取水システムはベレーちゃんの体力がエネルギー源なのよ。ガス欠でも動けるようにでしょうね」

「それで？」

「だから燃料変換すると、ベレーちゃんはお腹がすぐ筈よ」

ベレーはこくこくと頷いた。

「ただ、ベレーちゃんは体力維持に必要な栄養も海水から取れるでしよ」

「ハイ」

「だからある程度燃料を生成したら、今度は体力回復の為に栄養生成モードに切り替えないといけない」

「ソウデスネ」

「そういう意味で連続生成は難しいわ。多分ベレーちゃんの燃料タンク一杯分位が連続生成出来る上限だと思っ」

「ハイ。ソナナ感ジデス」

ファッツゾは首を振った。

「そんなに身を削ってやる事は無いよ、ベレー」

ベレーは人間の姿に戻ると、

「でも、ご飯1回分でタンク1杯分の燃料が作れますよ?」

「装置が壊れたらベレーの命に関わるだろ?」

ビットは肩をすくめた。

「まあ取水装置くらい直してあげるけどさ」

「ビットは黙っててくれ」

ファッツが睨んだので、ビットは肩をすくめてアイウイに囁いた。

「まるでお父さんだよねー」

アイウイがニツと笑って返した。

「娘がアルバイトするなんて許さーんって感じ」

「うるさいぞ二人とも」

「はーいはい」

しゅんとするベレーにファッツは続けた。

「俺は前も言ったが、生きる為に必要な金を稼ぐだけで、金を稼ぐ為に命を削って欲しくないんだよ」

「ファッツさん・・・」

「どうにもならなくなったら頼むかもしれないが、今はやらなくていい」

「・・・」

「それこそベレーは片付けや掃除、洗濯なんかをキッチンと出来るんだから、そっちの方を生かすとか」

そう、言いかけたとき。

「えっ!ベレーちゃん掃除得意なの!?!」

目を輝かせて見事にハモったのはアイウイとビットであった。

ファッツとベレーは涼しい車内に満足しつつ、事務所へと車を走らせていた。

「結果オーライだったな、ベレー」

「はい。週1でハウスキーピングのアルバイトが頂けるとは思いませんでした」

ビットとアイウイの修理工場は、別名ゴミ屋敷である。

確かに部品取りの車が置いてあったりと工場ゆえやむをえない所

もあるが、二人とも片付けが超苦手である。

ゆえにベレーに掃除のアルバイトにこないかと誘ったのである。

勿論コキ使われないよう、ファッツが睨みを利かせて交渉したわけであるが。

「うん、夕島整備工場で掃除のアルバイトなら安心だ。うん」

何度も頷くファッツをちらりと見ながら、ベレーはそつと微笑んだ。

深海棲艦の自分でも、ファッツはとても大事にしてくれている。それが嬉しかったのだ。

第16話

ファッツは街中を運転していた時、あつと短い声を上げた。

「おつと、テッドに報告しなきゃな。ちよつと寄つてくぞ」

「はい」

「・・・と言う訳で仕事には結びつかなかったが、明日から仕事は引き受けられるよ」

「まあそういうのも良いだろ、連中だつて色々思う事はあるだろう」

「燃料代がかからなきゃ好きにしろと言いたいけど・・・」

「5日も航行すりゃ涙目の額になるだろうな」

テッドとファッツが会話してる間、ベレーはきよろきよると室内を見回していた。

それに気づいたテッドが怪訝な顔でベレーに尋ねる。

「嬢ちゃん、なんか珍しい物でもあったか？」

「物っていうか、この香りに覚えがあつて・・・」

ファッツは肩をすくめた。

「この香りといえば・・・葉巻以外ないな」

テッドは懐から葉巻を1本取り出した。

「この香りか？」

ベレーはそつと手に取ると、くんくんと香りを確かめ、頷いた。

「はい。この・・・香りです。とても良い香り」

「テッド、この葉巻はどこ産だ？」

「舐めんよ。キューバ産コイーバ以外の葉巻なんて認めん」

「そういうもんか」

ベレーがじつと手の上の葉巻を見つめているので、ファッツは言った。

「1本譲つてくれないか、テッド」

テッドは肩をすくめた。

「良いぜ。6000コインだ」

「高っ」

テッドはファツゾがすつとんきよんな声を上げた事に眉をひそめた。

「吹っかけ無しの仕入れ値だ。嘘だと思うならアエロの連中に聞いてみる」

「テッドを疑ったんじゃないくて、葉巻の高さにびつくりしただけだ」

「お前のBMWの維持費の方が高いだろうがよ」

「趣味の領域か。まあそうだな。はいよ、60000コイン」

「確かに」

ベレーが首を傾げながら葉巻を見つめていた。

「高い・・・葉巻・・・良い香り・・・うーん」

何か思い出せそうな気がするのに、どうしても出てこない。

翌日。

ミストレルが事務所でコーヒーを飲んでいると、入り口のドアが開いた。

「いらつしや・・・へえ、珍しい奴が来たもんだ」

「そう言わないでよ、みっちー」

「みっちー言うなクー、何の用だ」

「僕の事はクーちゃんって呼んで良いんだよ？」

「呼ばねーよ」

クー。

C&L商会の共同経営者の1人である。

ボーイツシユな少女の姿に化けているが、実際は深海棲艦のワ級である。

ただしワ級でも非武装の方なので、積載量はワ級中最大だが戦闘はまるつきりダメである。

ただ、それも言ってもらえないのが近頃の海であり。

「ねーねー、ベレーちゃん暇？護衛頼みたいんだけどさー」

「んだよ。護衛ならワルクユーレに頼めば良いだろ」

「高いんだもん！僕達のギヤラを全部吹っ飛ばしても足りないよ！」

「全員雇うからだろ。ナタリアの姉御なら1人でも受けてくれるだろ」

「えっ！ そうなの!？」

「頼んだ事あるぜ」

「ねー口利きしてよー、ナタリアの姉ちゃん怖いんだもーん」

「交渉くらい自分で行けっての」

「うー」

クーが口をへの字に結び、唸りながらミストレルを見つめていると。

「おや、クーちゃんか。久しぶりだな」

「あーファツゾのお兄さんだー」

途端にファツゾが怪訝な顔になる。

いつもは何度言っても「ファツゾのおっちゃんだー」と言うのに。

お兄さんだと？

「・・・どんな面倒ごとを押し付けに来た？」

「人間きが悪いなあ。ちよつとベレーちゃんに護衛頼みに来ただけだよー」

「お前らの護衛にはやらん」

「えー」

ファツゾがすぐさま断ったのは理由がある。

以前、深海棲艦の多く居る海域を運ばねばならないから念の為と、クー達から護衛を頼まれた。

ミストレルは艦娘ゆえ刺激しかねないという事でベレーだけで応じたのである。

ところが、積荷が食料にも関わらず、クー達が杜撰な積み方をしたので匂いで気づかれてしまう。

駆逐艦1隻と食料を満載した非武装の輸送船2隻で飢えた深海棲艦達の群れを強行突破出来る筈もなく。

クー達は運ぶ筈だった荷を全部放り出してほうほうの体で逃げ帰ってきたし、

「ち、血走った目の深海棲艦達に一晚中追い回されました：私、ご飯じゃない、です」

ベレーは部屋の隅で毛布を被って丸2日間震えていた。

さらに。

荷の受け主だった深海棲艦の幹部は途中で強奪した連中に激怒し、大軍を率いて掃討作戦を開始。

この動きを察知した大本営が急襲作戦を展開した結果、三つ巴の大海戦に発展してしまう。

1ヶ月近く当該海域は危険すぎて航行不能となり、多くの Dead line Deliverers が迷惑を被った。

町の誰に聞いても「クーのせいだ」と答えが返ってくる有名な事件である。

元はといえばクー達が大量だから面倒といつて積荷のチェックをあまりしないからである。

ゆえに過積載で転覆しかけたり、核廃棄物を運んで後で大騒ぎとなったり。

とにかく日頃からお騒がせなのがC&L商会なのである。

ファッツはミストレルに言った。

「ほら、クーちゃんがお帰りだ。外までしつかり送ってあげなさい」

「あいよ」

「待ってよー、じゃあせめてナタリアの姉ちゃんに話を通してよー」

「なんでアタシが」

「お願いだよー、こんな健気でボーイッシュな所がちよっぴり可愛い美少女を見捨てるのー?」

ファッツが肩をすくめた。

「自分で言ってもなあ」

「ほらほら、アタシはやる事あるんだよ。帰った帰った」

「暇そうだったじゃーん」

「1ヶ月前に買って忘れてた雑誌から既に終わった星占いの記事を読まなきゃならないんだよ」

「すつごくどうでも良い用事だよね!?絶対暇つぶしだよね?」

「さーなー」

クーは仕方ないといった表情で懐に手をつ突っ込んだので、ミストレルは眉をひそめた。

「あん？なんだよ」

「じゃーん！これなーんだ？」
「!!!」

第17話

クーが手にしていたのはビニール袋に入った小さな猫のキーホルダーだった。

それを見たファッツは溜息をついた。

ミストレルはあのキャラクターグッズを集めに集めてるからな。

本人は上手く隠してるつもりだが、町の誰もが知ってる事だ。

という事はこの展開を最初から見越してたな？食えん奴だ。

ミストレルは震える手でキーホルダーを指差した。

「おっ・・・お前・・・それ・・・」

「コンビニでおむすび買ってクイズで正解しないと貰えなかった限定版だよ〜?」

「あ・・・ああ・・・着てる服が違う・・・」

「期間・地域・数量限定だったんだよ〜?もうやってないよ〜?」

ミストレルがファッツを見た。

「同じ仕事仲間が困ってるのを見過ごす手は無いよなファッツ?」

「清々しいまでの建前論をありがとうよミストレル。休暇を取るなら好きにすれば良い」

「うぐ」

「どうする?」

ミストレルは肩をすくめた。

「OK。じゃあ半休な」

「なら俺は何も見えてない聞いてない、だ」

ミストレルはクーに振り向き、キーホルダーを掴もうとしたが失敗した。

「こういうのは先払いだろ!」

「成功報酬に決まってるよ!」

「先払い!」

「ダメ!」

「先払いじゃないと行かねーからな!」

「だったらこれオークションで売っちゃおーつと」

「あつ・・・それ・・・は」

「どーするのかなー？」

「ぐ・・・ちゃ、ちゃんと成功報酬としてくれるんだろうな？」

「疑うならいーよ。オークション出せば5万くらいになるしー」

「やめてくださいお願いします」

ファッツはやれやれと首を振りながら部屋に戻っていった。

どうせミストレルが騙されるに決まってる。クーは伊達に経営者をやってない。

まあミストレルとナタリアは仲良しだ。滅多な事で紛争にはならんだろう。

そして30分後。

「という訳なんだけどき、姉御」

ナタリアはちらりとクーを見た後、ミストレルに向き直って言った。

「みっちゃん、あたしに厄種押し付けるって事かい？酷い事するねえ」

「い!?そ、そんな事ないぜ姉御」

目頭を押さえるナタリア。

「うっうっ、友達だと思ってたのにさ・・・」

「あ、当たり前だろー！」

ナタリアはハンカチの隙間からチラリとミストレルを見ると

「おおかたクーの古狸に何か物やるって騙されたんだろう？友情を売るのがかい？」

ミストレルはクーに向き直った。

「マジか!?やっぱり成功報酬ってのは嘘だったのか！」

クーはジト目でミストレルを見返した。

こいつ、純情過ぎて全く交渉に向いてないや。ファッツを丸め込んだほうが良かったか。

まあしようがない。

クーは軽く両手を上げながらナタリアの方を向いた。

「航路的にはいつも行くルートなんだけど、ムファアマスが途中の海域で変な動きがあるって言うんだよ」

ナタリアはじつとクーの目を見ながら答えた。

「それで？」

「僕達の今回の積荷は燃料だからさ、引火したら大爆発しちゃうよ」

「良いじゃない。潔く散りなさいよ」

「散りたくないから頼んでるんじゃないよ！」

「じゃあテッドに話通して。ワルキューレとしてなら受けてあげる」

「4人分のギヤラを出せるほど定期航路のギヤラは良くないんだよ」

「・・・じゃ、変な動きって何さ？隠したら承知しないよ」

ナタリアがすつと目を細める。冗談は通じない雰囲気だ。

クーは溜息をつき、一呼吸置いてから話し出した。

「広範囲の海域で、深海棲艦が全滅してる。僕が通る海域も含まれてる」

「は？全滅って、艦娘の奴らの仕業かい？」

「違ってみたい。艦娘も被害にあってるらしいしね」

ナタリアの声が一段低くなる。

「・・・まさかモンスターじゃないだろうね」

「さつ、さすがにモンスターって事は・・・」

クーは誤魔化しかけたがナタリアの殺気立った視線に耐え切れず、「すいません。その確率が濃厚だとマツケイからも聞いてます」

と、認めたのである。

モンスター。

通常見られる深海棲艦が可愛く見える程、規格外の戦闘能力を持つ化け物である。

ここに居るメンバーはいずれも実物を見た事は無いが、その苛烈な戦いは伝説として語り継がれている。

モンスターに逆らうなんてもつてのほかであり、自分の縄張りが見つかからない事を震えながら祈るしかない。

「フン、そんなことだろうと思ったよ」

ナタリアは細巻き煙草に火をつけながら納得したように頷いた。

ミストレルは思い切りクーを睨みつけた。

「てめえ・・・そんな危ねえ橋をベレーに渡らせようとしたのかよ」
「ベツ、ベレーちゃんは超広域レーダーを持ってるからそれを頼りた
かったんだよう」

ミストレルはナタリアに向き直った。

「姉御すまねえ、この話は無しだ。幾らなんでも無茶苦茶だ」

ナタリアは肩をすくめた。

「定期航路なんてすつとぼけちやいなさいよ。1ヶ月もすれば艦娘達
が始末してくれるわよ」

クーは床に目線を落としながら言った。

「・・・テッドも断ってやるって言ってくれたんだけどさ」

「なんだよ」

「情報屋の話を総合すると、モンスターは僕達の古巣の海域に向かっ
てるんだ」

「！」

「もし燃料を持っていかなかったら逃げる時に燃料切れになっちゃ
う」

「・・・お前」

「捕まったら全滅させられちゃう」

「・・・」

クーはキツと顔を上げた。

「今行かないといけないんだ！僕の友達が！モンスターから逃げる為
の燃料なんだよ！」

ナタリアはミストレルとクーの会話をじつと聞いていたが、紫煙を
吐き出すと目を細めた。

第18話

ナタリアはクーを横目で見ながら静かに口を開いた。

「だったら払う物払いなさいな、クー」

クーはそつとナタリアを見た。

「・・・払ったら・・・助けてくれる？」

「そんな状態なら閑古鳥で退屈してるでしょ、テッドだって」

「・・・へ？」

ナタリアはニツと笑った。

「この町にどんだだけDeadline Deliverersがいると思ってるの」

「？」

「皆で運べば怖くないわ。アンタが町の連中を雇いなさい」

クーが目を見開いた。

「全財産はたいたつて足りないよ！」

ナタリアはクーを睨みつけた。

「そのくらいの意気込みを見せな！ダチの命と預金残高どっちが大事なんだ！」

「へうう・・・」

ナタリアはタバコを揉み消すと立ち上がった。

「さつさとテッドのところに行くわよ。みっちゃん、この事ファツゾに伝えて」

ミストレルが頷いた。

「あいよ姉御」

夕方。

「モンスターのクソ野郎が何だ。おい、裏の駐車場にそのテーブル持ってけ！この黒板もな！」

テッドは啞えた葉巻からブスブス煙を上げながらDeadline Deliverersのボス達に指示している。

それに大人しく従っている辺りがDeadline Deliver

ersとテツドの関係を物語る。

テツドの家に来られるDeadline Deliverersは基本、ボスだけである。

なぜならボスだけでも百人以上居るからで、家に入りきららない以上は仕方ないと面々も納得している。

駐車場を埋め尽くすDeadline Deliverersのボス達は、一様に硬い表情をしていた。

それはそうだ。モンスターが居る事が濃厚な海域への配達なんて1度だつてなかった。

とびつきり危険な話だが、それを見事やってのければ後々有利になる。

ボスはこの後の力関係とリスクを天秤にかけていた。

どこまでを引き受けるか、受けないか。完全なバクチである。

一方、集まってきた面々を見て真っ青になっているのが依頼者となったクーである。

「い、いったい幾らギャラかかるんだろう…ねえルフィア、億単位かなあ・・・」

そう、傍らにいる相棒のルフィアに言ったが、

「しようがないでしょ、町の皆が助けてくれるんだから。また稼ぐしかないわよ」

と、もはや諦め顔である。

テツドは3本目の葉巻をくゆらせながら運ばせた黒板を睨んでいたが、大きく頷くと声を上げた。

「よし！テメエら良く聞け！マツケイの情報ではモンスターは島みたいにデカイ凶体してやがる！」

「遭遇した艦娘も深海棲艦も皆殺しにするくらい血に飢えてやがる。全く手に負えねえ」

場内のざわめきが大きくなる。

「だから！今回は輸送船団、護衛部隊、そして斥候部隊を募集するぜ！」

「斥候部隊は出来るだけ散って化け物を早く見つけな！スピードと正

確さが勝負だぜ！」

「化け物に接近する必要はねえからギャラは少ないが、護衛部隊に知らせりゃボーナスだ！」

おおっと声上がる。

「護衛船団は集まった情報をもとに航路を決めてけ。モンスターを上手く避けるのが目的だ！」

「それでもモンスターと遭遇した場合は輸送船団と別れて化け物を引き付けろ。戦うのもアリだ！」

「護衛船団は化け物と出会えばハイリスクだがギャラは最高だ！遭遇しなければ濡れ手に粟だぜ！」

数名のボスが思案顔になる。戦艦や正規空母といった重火力を擁する連中だ。

「輸送船は高速型限定だ。満載の半分だけ積み、装備はダメコン一つ！逃げる為の機動性を確保しろ！」

「モンスターと遭遇したら各艦個別に散会、だが荷物は指定海域まで届けるんだ」

「ギャラは普通、ただし届けた事が確認されればボーナスありだぜ」
ファッツは目を見開いた。

確かに軽巡など、輸送向きの船が持てる火力じゃフル装備したってモンスターに勝てる筈が無い。

ならば最初から丸腰で逃げの一手に特化し、かつダメコンを積んで轟沈は避けるという事か。

「・・・なるほどな。さすがテッド」

ファッツがそう呟いた時、テッドは一層声を張り上げた。

「よし！斥候部隊！護衛部隊！輸送部隊！早く名乗りを上げた奴からギャラを多く出すぜ！」

「おー！」

あつという間にテッドの周りにDeadline Deliveries達が群がっていく。

「じゃあねファッツ。ああ、アンタんところは止めときなさいよっ！」

そう言いながらあつという間にテッドの元に走っていくナタリア。

「うーん・・・まあ止めとくのが妥当か」

説明を聞いて乗り気になるほどファッツは興奮していなかった。ミストレル達はナタリア達に比べれば遙かに火力は弱く、輸送能力に秀でているわけでもない。

斥候部隊の志願者は軽空母を擁する連中が多い。いくらベレーが広域レーダーを持ってても航空探査に勝てる筈がない。

何より、クー達だけで行くより成功確率は高いだろうが、いつもより数倍危ない事に変わりはない。

ファッツは溜息をつき、俯いた。

「臆病司令官は健在、か」

大本営で罵倒された過去が頭をよぎる。

だが。

わざわざ二人を不得手な戦いに送り出すような事はしない。

艦娘達をむざむざ死に追いやるような事は決してしない。

俺は、そう、決めたんだ。

やがて。

志願し、説明を聞いたボス達が部下に伝える為に会場を後にしていった。

ナタリアはファッツの所に戻ってくる

「ねえ、あたし達に賭けときなさいよ。賞金は山分けで良いからね！」

そう囁くとウインクして走り去った。

ファッツはすぐには意味が解らなかったが、やがて周囲を見て理由が解った。

様子見を決め込んでいたDeadline Deliverのボス達が、志願者と入れ替わるようにテッドの周りに集まったのである。

青い顔のクーをチラリと見た後、テッドはおもむろに黒板をひっくり返した。

「さあ、ここからお楽しみだ！トトカルチヨの時間だぜ！」

ファッツは頭を掻いた。

「1番！斥候部隊で1番最初にガセじやないネタを護衛部隊に渡すの

「は何班だ！」

「2番！輸送部隊がモンスターに食われずに輸送出来るか否か！」

「3番！護衛部隊がモンスターと遭遇して生き残るか否か！遭遇しなきゃ親の総取りだぜ！」

「まだまだあるがまずはこの3つだ！オッズはこれだ！さあ張った張ったあー！」

志願の時の熱気より遥かに盛り上がりを見せる会場。

テッドが用意した金を入れる木箱があつという間に高額の札で埋まっていく。

ファッツは少し考えた後、

「ナタリア達の班が一番最初に護衛部隊に正確なネタを渡す」

「輸送部隊は無事輸送を終える」

「護衛部隊は生き残る」

に、それぞれ50万コインずつ賭けた。

ファッツはチケットを見ながら思った。

「ナタリアの差し金か、テッドの計らいか」

ファッツはトトカルチヨのチケットを懐に入れると、会場を後にした。

第19話

帰って来たファッツの説明を聞いて、ミストレルはテーブルをバシ
ンと叩いた。

「不参加だ?!?ふっぎけんなファッツ!」

ファッツは眉一つ動かさずに答えた。

「護衛部隊は高練度の戦艦や正規空母の連中が占めてる。今回はガチ
だ」

「う」

「斥候部隊は高機動型の空母と軽巡がメインだ。レーダーでは航空探
査には勝てん」

「じゃ・・じゃあ輸送は・・」

「高速型限定、ダメコン必須、積載量重視だ」

「だ、だったらアタシ達だつて行けるじゃないか・・」

「遠征特化型の連中より速く荷役が出来るか? 6隻フル艦隊より積め
るか?」

「ぐ」

「残念だが今回の任務で俺達に都合の良いピースはこれしかなかった
んだよ」

「え?」

そういうとファッツはチケットを取り出した。

掛け金の欄を見てミストレルとベレーは目を丸くした。

「ちよっ!?!」

「いちじゅうひやく・せん・まん・ファ、ファッツさん・これ・」

「この掛け金は、恐らく参加者のギヤラに使われる筈だ」

「・・・」

「俺だつてクーの気持ちを考えれば何かしてやりたい。だからせめて
資金を出したのさ」

ミストレルが肩をすくめた。

「その割には鉄板の賭け方じゃねーか」

「まあ、そうなって欲しい未来にかけたんだよ。ナタリアとお別れなんて切ないだろ?」

「んな事あるか。ところで、姉御は斥候部隊なのか? てつきり護衛部隊かと思っただが・・・」

「だな。俺も意外だった」

ベレーがチケットを見つめながら言った。

「誰も怪我せずに・・・戻ってこられると良いですね」

ファッツはベレーの頭を撫でながら言った。

「そうだな・・・うん、そうだなあ・・・」

輸送作戦開始から2日後。

「航空隊長カラ姫へ。海域F2G58ノ掃討作戦開始ヲ許可願イマス」

「許可シマス。シツカリ潰シテラツシャイ」
「ハハッ」

唸るように低い音で重々しく飛び立つ大型爆撃機とキーンという高い音を立てる攻撃機が3機。

4機を単位とする数編隊がそれぞれ滑走路から飛び立っていった。

姫は窓の外を見た。

北の果てで我々は生まれたが、余りに寒すぎて艦娘も深海棲艦も居なかった。

機械にも雪と氷の世界は芳しくないので南下する事にしたが正解だった。

姫は海図へと視線を移した。

今回の行き先は第6駐留ポイントであるセフィ島である。

航行中は航路上で遭遇した敵のみを攻撃しているが、駐留先では周辺海域の敵をじっくり索敵して殲滅する。

セフィ島を駐留ポイントに選んだ理由は航続距離的に丁度良かった。ただそれだけだ。

艦娘と深海棲艦を一掃し、妖精に平和な世を取り戻す。

我々の唯一の目的。

いつかきつと叶えてみせる。

その頃。

「コレ：・本当ニモンスターナノ？長サモ幅モULCC級タンカー4隻分位アルンダケド」

「島ガ動クワケナイデシヨ」

「ソウダケド：・コンナノ100万トンジャ済マナイワヨ・・・」

「ア、チョット待ツテ」

「何？」

「深海棲艦ノ通信：・モンスタート接敵シタミタイ。避難命令ヲ部下ニ発シテル」

「発信源解ル？」

「雑音ガ酷イノヨ、モウチョット待ツテ・・・OK、特定シタ」

「コツチデ戦闘時間ヲ計測スル」

「才願イ」

ナタリア達は出航前、自分達の航空機にレーダーと広域アンテナを取り付けていた。

そして航路に先回りすると航空部隊を展開。周囲の無線通信を傍受し始めたのである。

どんな阿呆だろうと自分達が壊滅的な被害を受けるなら救難信号くらい発するだろう、と。

読みは的中した。

モンスターと遭遇してしまった可哀想な深海棲艦の艦隊が逃亡に失敗したようだ。

基地への通信内容が生々しい状況を伝えてくる。

「攻撃機ガ多過ギテ対空砲ガ間ニ合ワナイ！モウ砲身ガ溶ケル！交換シテル暇ガ無イ！」

「海中ダ！海中へ逃ゲロ！」

「ウソダロ！爆弾ガ海面デ爆発シナイ！コツチニ来ル！ギヤアアアアア！」

「ボス！ボス！助ケテ！助ケテエエエエ！」

ナタリアは黙って聞いていたが、ぴくぴくと眉が動いていた。相当怒っているサインなので他の3人は静かにしていたが、気持ちと同じだった。

深海棲艦の断末魔なんて、聞いていて気持ちの良いものではない。自分達の裁量で自由に動ける状況なら、駆けつけてモンスターを火の海に沈めてやりたい。

だが、今は輸送部隊の安全確保が最優先だ。

「ファイナ、護衛部隊二送りナ。接敵位置ト状況、手短テ良イヨ」

「OKボス」

ナタリアからもたらされた情報は護衛部隊を動揺させたが、統制は取れるようになった。

モンスターと遭遇してから全滅まで僅か5分という事実。

反撃らしい反撃さえ出来ずに全艦轟沈したという事実。

それを聞いてモンスターに1発くれてやると息巻いていた連中が一気に大人しくなったのである。

護衛部隊のリーダーはかつて武蔵と呼ばれた戦艦娘だった。

姑息な手を使う司令官に辟易し、昼間に堂々と鎮守府を後にしたというつわものだ。

彼女はテッドの作戦が気に入っていた。スパツと潔く理論的で無駄がない。

「よし。全艦、方位022に航路を修正。繰り返す、方位022だ」

出来る事なら帰港まで輸送部隊を護衛したい。その為には気づかれてはならない。

まずは輸送先であるセファイ島まで出来るだけ最短で移動する。

作戦開始から4日目。

「・・・アア、ナンテコト」

ナタリアは極力距離を置かせつつ、交代で航空部隊にモンスターを見張らせていた。

そして航行軌跡を収集し、今後の航路を計算したのである。

その結果

3日後の取引日時に、取引場所でモンスターと遭遇する。という最悪の展開になる事が判明。

部下からこれを聞いたナタリアの反応が冒頭の一言である。

悲痛な面持ちでナタリアの言葉を待つレ級達。

しばらく沈黙していたナタリアは

「テッドニハモウ電波が届カナイ。護衛部隊ノ連中ト話シ合ウワヨ。連絡ヲ」

「了解ボス」

第20話

「・・・まったく、どうしてクールの奴が絡むと悪い方悪い方に転ぶんだ」
「モウ、アノ子ノ才家芸トイツテ良イワネ」

途中で見つけた島に艦隊を上陸させた後、護衛部隊のボスとナタリアは海図を見ながら毒ついていた。

知らない人が見れば戦艦武蔵とレ級が相談しているという奇怪な構図である。

「受け取りの連中には連絡が取れないのか？」

「エエ。定期便ダカラ当該日時シカソノ海域ニハ居ナイミタイ」

「受け取りの連中を動かせないとすると、モンスターを動かすしかないな」

「・・・ドウヤルツモリ？」

「致し方あるまい。護衛部隊から決死隊を募り、時間稼ぎを行う」

「決死隊ガ瞬殺サレタラ輸送部隊マデ壊滅スルワヨ」

「ぐ・・・ではどうするのだろうか」

ナタリアがニツと笑った。

「行キタクナイト思ワセレバ良イノヨ。チョット数が要ルワネ」

「作戦を聞かせてくれ」

説明を聞いた武蔵はしばらく苦々しい顔をしていたが、

「あー・・・それは軍事作戦なのか？」

「アンナ畜生相手ニ真面目ニ戦ウ必要ナンテ無イモノ」

「・・・ふむ。一理ある。よし、全部隊を編成しなおす。ナタリアはテッドに連絡してくれ」

ナタリアがニツと笑った。

「オ互イニ上手クヤリマシヨ」

作戦開始から5日後、テッド達の元にナタリアの航空機が1機到着した。

「テッドさんに緊急！緊急連絡です！」

パイロットの妖精が差し出した手紙を読んだテッドは眉をひそめた。

「・・・モンスターのくそつたれ。まあ荷はそのままだ。ただ、後残ってる奴等は・・・」

テッドは手元のリストを見た。いつも使ってるDeadline Deliver'sの多くは作戦参加中。

それ以外の連中は戦域への輸送不可・・・ん？

テッドは受話器を上げた。

「はい、ブラウン・ダイヤモンド・・・あつテッドさん・・・はい、お待ちください」

受話器を手で押さえながらベレーが叫んだ。

「ファッツさん！テッドさんから緊急の輸送依頼です！」

2時間後。

「このコンテナ気密性は大丈夫なんだろうな？こんな劇毒物以外の何物でもねえよ」

「いざという時は私が積んでるガスマスクを差し上げますから！」

ファッツは大部隊が出航したのを見送った後、念の為にミストレルに給油と兵装の準備を指示していた。

ゆえに連絡を受けた時には二人とも体制が整っており、依頼の電話から僅か2時間後には荷役を終えて出航したのである。

港で見送りながら、ファッツは傍らのテッドに言った。

「・・・ところで、何であんなものが要るんだ？」

テッドは葉巻に火をつけながら言った。

「ばら撒いて足止めするんだと」

ファッツは肩をすくめた。ある意味正しい使い方かもしれない。

翌朝。

「ん！敵の航空機かベレー？」

ミストレルの問いに、ベレーは首を振った。

「イエ、連絡サレタ合図デス！味方ノ航空機デス！誘導スルト言ツテマス！」

「よし行くぜ！最大戦速だ！」

「ハイ！」

「ヤー、ミツチャン達ガ港ニ残ツテテ良カッタワー」

「こんなものどうするんだよ姉御？」

ミストレルの問いに護衛部隊長の武蔵が肩をすくめた。

「浮遊機雷というか・・・まあそんなもんだ」

「へ？」

「で、ガスマスクとゴム手袋はどこだ？」

「コッチデス！」

ベレーが艤装から取り出したケースを、護衛部隊長が次々と空母達に手渡していく。

「航空隊のパイロットは予備含め一人2セットずつ受け取れ！命綱だぞ！」

ミストレルからコンテナを受け取ったナタリアが叫んだ。

「ハーイー！獲物ハコッチ！ゴム手袋シテ受け取りナサイヨー」

ミストレルとベレーは首を傾げた。一体何が始まるんだ？

その日の昼頃。

「今日ノオ昼ハ・・・ウフフフ」

姫は時計を見ながらうきうきとした表情をしていた。

1週間分の献立は日曜日に発表され、本日の昼食はチキンライスと煮込みハンバーグと記されていた。

姫の好物である。

あと1時間で今週最大のお楽しみがやってくる。

仕事を進める手も自然と軽やかになる。

そんな時に通信リクエストのブザーが鳴ったのである。

「ハイ」

「ヒ、姫様！コチラ警備班長・・・一大事デス！」

「ドウシタノ？」

「ア、アア、アノ、魚ガ・・・ウォエエエ」

「ハイ？チャント報告シナサイ」

「・・・」

「警備班長?」

「・・・」

「警備班長? 応答シナサイ」

姫は眉をひそめた。敵襲か? 迎撃部隊は何をしているのだ。

即座に通信先を切り替えると

「攻撃隊! 応答シナサイ!」

だが、しばらく後に帰って来た応答は、酷くグツタリした声だった。

「エフ・・・攻撃隊・・・班長デス」

「スグニ応答シナサイ! 何カアツタノ?」

「・・・ソレガ、我々モサツパリ解ラナイノデスガ・・・臭ツ・・・」

「ハイ?」

「航路ノ先カラ、臭イ魚ノ切り身ガ流レテクルンデス」

「切り身? サンプルヲ持ツテキナサイ」

「ハ!? イ、イヤ、止メタ方ガヨロシイカト」

「ジャアソツチヘ行クワヨ」

「キ、来テハナリマセン! 姫様! 危険デス!」

姫は首を傾げた。

魚の切り身が海面に浮いているのならどうせ崩れた積荷だろうし、腐敗しているのも何となく解る。

だが、たかがそれだけの事。

何を言ってるんだ。酒でも飲んででバレたくないのか?

姫は首を振りながら席を立った。少し現場に行つて引き締めなくては。

ガチャ。

「?!?」

姫は棟の入り口を開けた途端、思わず利き手で鼻を覆つたまま固まってしまった。

空気が・・・くっ・・・臭い。

臭いなんて生ぬるいものじゃない。

に、匂いが目に染みて・・・しかも匂いの種類が限りなく気持ち悪い!

生ゴミを1週間放置したってこんなに臭くない。
あまりの臭さで景色が歪む。涙が止まらない。

こっ、これは・・・これは命に関わる。

ボタン！

辛うじて入り口のドアを閉め、ぺたんと座り込む。

「ゼイ・・・ハア・・・ゼエ・・・ウウツ！」

食事前で良かったと姫は思った。

食べた後だったら間違いなく全部ぶちまけただろう。

しかし・・・

何か、ドアの隙間から匂いが・・・いや、匂いが体に！服についてる

！

「イ・・・イヤアアアア！」

姫は全速力で階段を駆け上がり、指揮官室へと飛び込んだ。

第21話

通信機を引つつかんだ姫は機関室に繋いだ。

「機関長！機関長オオオオ！」

もはや半狂乱の姫の声に応答した機関長の声は珍しく緊張していた。

「姫様、通ジテ良カッタ。指揮官室ノ外ニ出テハナリマセンゾ！」

「モウ出チャッタワヨ！コノ凄マジイ臭イハ何?!」

「警備班長ガ意識ヲ失ウ前ニ伝エタ限リデハ、海面一体ニ魚ノ切り身ガ浮遊シテオリ、ソレガコノ匂イヲ放ツテイルト」

「!?!」

「コチラデモ進路上ノ海域ニ、大量ニ浮カンデイル事ヲ確認シマシタ」

「・・・」

姫は震え上がって声が出せなかった。

「姫様ノ計画ニ進言スルノハ大変心苦シイノデスガ・・・」

「・・・エエ」

「船体ニ、コノ匂イガ付着スルノハ大変好マシクアリマセン」

姫はぞつとした。

我々の生活の場であり、我々の最高傑作である船体にこんな匂いが染み付いたら冗談ではない！

「ソ、ソウ・・・ネ」

「セファイ島ニ重要ナ目的ガ無ケレバ、別ノ海域ニ向カツテハ如何カト・・・」

姫は大慌てで海図を引つ掴むと一番最初に目に付いた島の名前を言った。

「目的地ヲ「スノフマレイ島」ニ変更シマス！速ヤカニコノ海域ヲ離脱シナサイ！」

「カシコマリマシタ。直チニ。臭イガ消エタラ連絡致シマスノデ、ソレマデ指揮官室カラ出ナイデクダサイ」

「ア、アリガトウ。ソウサセテモラウワ」

指揮官室は空気清浄機を通じて空気を取り入れている。

今ほどその事に感謝した事は無かった・・・が。

「・・・何カ・・・臭イ気ガスルワネ」

くんくんと腕に鼻を近づけ、すぐに離れた。

「クサッ！モウ嫌ア！」

そういうとシャワールームに飛び込んだのである。

シユールストレミング。

その正体は塩漬けされたニシンの缶詰だが、封入後も発酵が進み、それがもたらす強烈な臭いが特徴である。

屋内での開缶は厳禁とされており、屋外でも数十メートル先から判別出来るという。

その匂いは飛沫が僅かでも衣服に付着すると取れない為、開缶時に身に付けていた物は全て廃棄する事になる。

また、発酵が進むと内圧が高まり缶が膨張する。

ゆえに低圧下では破裂の危険があり、ハイリスクなので空輸禁止とされている。

製造からの経過年数によっては爆発物処理班が対処する事態になったこともある。

一般市民が合法的に入手可能なバイオ兵器という異名を持つゆえンである。

ナタリアは出航前、港湾倉庫に保管されていたシユールストレミングを見て覚えていた。

他の地で販売する為に一時保管されていたものだったが、無理矢理買い付けてミストレル達に運ばせた。

それをガスマスクを被らせた航空部隊に託し、上空でわざと低圧状態にして缶を破裂させながら航路上に投下したのである。

効果は絶大だった。

帰還したパイロット達は、投下する僅かな時間だけでも死ぬかと思つたと口々に訴えた。

そしてそれまで一直線にセフィ島に向かっていたモンスターはぴたりと止まった後、急速に海域を離れていった。

以後、Deadline Deliver'sの間でモンスター除けとしてシュールストレミングの缶詰が飛ぶように売れたという。

夕刻。

「定期輸送分ノ燃料、弾薬、修理材、ソレトコレハ：クー達カラノ手紙ヨ」

深海棲艦向けの荷という事で、実際の受け渡しの際はナタリアが仕切り、深海棲艦だけの部隊で固めた。

指定刻限に受け取りに現れたのは深海棲艦のル級だった。

いつもと違う面々に戸惑いながらも、手渡された手紙を読み始めた。

次第に顔色を失い、ガタガタと震えだしつつも、

「ス、スグニコノ海域カラ脱出シマス。避難先ヲ見ツケタラ連絡スルト、クーチャンニ伝エテクダサイ」

と言った。

ナタリアは頷きながら答えた。

「解ツタワ」

「ソ、ソレカラ」

「ナニ？」

「コ、コンナ危ナイ所ニ運ンデ頂イテ、アリガトウゴザイマシタ」

「礼ナラ・・・クーチャンニ言ツテアゲナサイナ」

「・・・ソウデスネ。落ち着イタラ直接伺イマス」

につこりと微笑むナタリアにル級はピシリと一礼すると、部下と共に慌しく去っていった。

「ヨーシ、任務半分完了。サ、皆、帰ルワヨ！」

ナタリアの掛け声に皆が力強く頷いた。

なお、この時、警備部隊が破裂せずに原形を留めていた1缶を見つけ、機関長に報告した。

「フム、ワシガ預カロウ。何かニ・・・使エルカモシレン」

そういうと自室に持ち帰り、後に姫の食卓へと供される事になる。

「よーし！今回も1人の轟沈者もナシで帰って来たな！」

「おー！」

「モンスターなんて俺達にかかればチョロいもんだぜ！」

「おー！」

テッドが珍しく帰港した皆を集めて盛り上がっていた。

それはそうだろう。

海運上最悪のリスクであるモンスターを退け、依頼通りに輸送を達成したのである。

それもただモンスターを回避したのではなく、撃退してのけた。

これは大いにDeadline Deliveries達の自信に繋がった。

テッドが続ける。

「今回の立役者は勿論ナタリアだ！いち早くモンスターを押しさえ、撃退手段も考案した！」

「さすが姉御おー！」

「ついで護衛隊長だ！皆を統率し、前線で速やかに部隊を再編成したおかげで作戦が上手くいった！」

「良い差配だったぜー！」

「そしてミストレル達だ！缶詰を速やかにナタリア達の所に届けたのは彼女達だぜー！」

「あれを運ぶなんて勇者だぜー！」

「ようし！まずはギャラの支払い、ついでトトカルチョの結果発表と当選金支給だぜー！さあ並ぶんだー！」

「待つてましたー！」

こうして町全体を揺るがしたモンスター前輸送作戦は、Deadline Deliveries側の大勝利となった。

モンスターが提督達ソロール鎮守府の面々と全面戦争に突入するのはもう少し先の話である。

その夜。

「まだだったのかファッツ。チケット見せな」

ファッツはあらかたDeadline Deliveriesが帰っ

た後、最後にテッドにチケットを差し出したのである。

「声が枯れてるよテッド。大丈夫かい？」

「疲れ切ってるが久しぶりに良い気分なんぞな。これが終わったらぐっすり寝るさ」

「まあ、皆そうだろうなあ」

「ほおー、2つ当てたか。だがオッズはどっちも1.01倍だ」

「鉄板過ぎたか。3つ目の外れ分はカバー出来なかったな」

「ほらよ、101万コイン。後こっちが緊急輸送のギヤラだ」

「・・・確かに。ところでテッド」

「あん？」

「やたらオッズが低いが、掛け金はギヤラに使ったのか？」

テッドはニツと笑った。

「クーが幾ら渋ちんでも今回のギヤラを全額賄える筈がねえからな」

「総額どれくらいだったんだい？」

「まだざっくりだが、およそ1億3千万だ」

「掛け金で賄う分は？」

「9千万位だな」

「おいおい、クーは4千万も払えるのか？」

「さつきルフィアが小切手で持ってきた。眉一つ動かさずにな」

「恐ろしいな」

「ま、これでC&Lは当分コキ使える」

「確かに巨大な貸しだな」

「上手く行ったのは偶然の要素もあるが、お前達が迅速だったのが決め手だと俺は思うぜ」

「・・・そうかな。俺は臆病なだけだ」

「司令官時代の罵詈雑言なんて忘れちまえ。いつも通りの出航なら半日はかかっただろ？」

「なら燃料代をちよつとでも負担してくれると嬉しいんだが」

「それはギヤラからやりくりしろよ」

「だろうな」

テッドはニツと笑うと手を差し出した。

「ありがとうよファッツ」

ファッツも笑いながら握り返した。

「頑張ったのはミストレルとベレーだ」

ファッツはBMWに乗り込むと、ギヤラの封筒を開けた。

挟まれている明細を見てひゅうと口笛を吹いた。

「大盤振る舞いだなテッド。これで多少黒字か。だが・・・」

ファッツは少し俯いた。

「しばらくはチャーター便メインを続けるとしよう。やっぱり：戦域への配達は心臓に悪い」

キーを捻ると、待ちくたびれたとばかりにBMWのエンジンが唸りをあげた。

第22話

「あら、ベレーちゃん」

「？」

呼びかけられたベレーが振り向くと、ナタリアともう1人、スーツを着た背の高い女性が立っていた。

「紹介するわ。地上組の柿岩ちゃんよ」

「柿岩です。よろしくお願いします」

ベレーは耳慣れない単語に首を傾げた。

「えっと・・・地上・・・組・・・？」

「あれ、ベレーちゃんは地上組知らなかった？」

「は、はい。すみません」

ナタリアは頷いた。

「まあこの町に限れば知らなくても生きてけるからね」

柿岩が肩をすくめた。

「最近は何と増えてきましたよ。深海棲艦が化けずに歩ける町は」

「あら、そうなの？」

「過疎で人間が居なくなった町に深海棲艦が集まって町になったケースとか」

「あー」

「半島の先とかが多いわ。ここもそうでしょう？」

ベレーがそつと手を上げた。

「あ、あの、地上組って・・・なんでしょうか？」

柿岩が苦笑した。

「ああごめんなさい。説明しますね」

地上組。

深海棲艦という名前は人間側が命名したもので、その理由は最初期は外洋でしか遭遇しなかった事にある。

どこから来たのか？海の底からか？では深海に棲む艦か！

という事で深海棲艦と名づけられた。しかし。

逆に文字のイメージから、深海棲艦は深海に居るもので陸には上がってこないと思ひ込んでしまった。

実際は艦娘の旧型を発端とする別の進化を遂げたシステムを持ち、海中でも活動可能というだけなのである。

よって厭戦的で、しかも人間に化ける能力を有する深海棲艦達はこの思い込みを利用し、陸で住むようになった。

その方が安全というわけである。

ただ、「化けている」ゆえ、自然に老いるといった事が無い。

気をつけないと何十年も若い姿のままといった不自然な事になってしまう。

加えて、881研を始めとする極少数はこの事実を把握しており、深海棲艦の捕縛活動を内密に行っている。

人間社会の中で疑われずに溶け込むノウハウの共有と捕縛されそうな仲間を避難させる為の互助会。

このネットワークを総称して「地上組」と呼んでいるのである。

「へえー」

ベレーが目を丸くしていると、柿岩は名刺を取り出した。

「私は日本のエリア長なの。あなたもDeadline Deliverersなのかしら？」

「えっ？あ、はい・・・ええと・・・これが名刺です」

ベレーが差し出した名刺を柿岩が受け取ろうとした時、ナタリアが横からピツと取った。

柿岩は怪訝な顔をする。

「え？ちよつと、ナタリアさん、返してくださいな」

ナタリアは名刺をひらひらさせながら肩をすくめた。

「えつとね、ベレーちゃん所属するDeadline Deliverersは、艦娘と人間と深海棲艦と一緒に働いてるの」

柿岩が目を見開いた。

「ええええっ！そんなの聞いた事無いですよ!？」

「ええ。私もこの子達のとこしか知らない。そういう特殊なDeadline Deliverersだって事、覚えといて」

「へー」

ベレーは首を傾げつつ、二人に訊ねた。

「ミストレルさんやファッツさんと、一緒にお仕事するのは、ダメ、なんですか？」

柿岩はポリポリと頬をかきながら言った。

「い、いえ、ダメという事ではないのですが、あまりにも特殊なのよ」「特殊？」

「地上組の経緯にもある通り、私達は戦いを避ける為に、あえて敵の懐に飛び込んだわけです」

「・・・」

「ここだという敵は人間、そして艦娘」

「・・・」

「だから人間や艦娘と一緒に働くのは、地上組の常識からするとちよつと信じられないの」

ベレーが悲しそうな顔で俯くと、ナタリアは柿岩の肩を叩いた。

「補足するとき、ベレーちゃんの勤務先の人間も艦娘もあたしの親友で、全く敵意は無いわ」

柿岩が興味深そうにナタリアを見る。

「そうなのですか？」

「それにベレーちゃんが深海棲艦という事も解った上で仲間として受け入れてるわ」

「へー！」

「だからうちの荷を任せても問題は無いと思うけど、受け手の方がびつくりしちゃうかもね」

「ええ。艦娘と深海棲艦が仲良く並んで「お荷物です」なんて来たら硬直するでしょうね」

「あるいは・・・仲間を艦娘に売ったと誤解されるかも」

「そうね。そういう風に誤解される可能性があります」

「という事で、これからも荷物の配送はワルキューレをよろしく♪」

「あなたの所は高いのよ・・・もう少しまけてよ・・・」

「C&Lよかいでしょ」

「そりや・・危ない海域でもちゃんと運んでくれますけどね」

「アタシ達は配達失敗した事なんてないわよ？」

「・・そうね。半年分の食料を海原にばら撒いてくるようなヘマはしないですけど」

「高品質には高いギャラが要るって事よ」

「・・・」

柿岩は少し思案した後、ベレーの方を向いて言った。

「ねえベレーさん、事務所行ったら社長さんとお話し出来るかしら？」

ベレーは目を白黒させた。

「ふえっ？あ、あの、ナタリアさん・・良いん・・でしょうか」

ナタリアはニツと笑った。

「ついてってあげるわよ。こいつがおかしな事したらアタシがぶっ飛ばしてあげる」

「お、お願いします」

ベレーは頷いた。ナタリアは強い。ファッツ達に危害が及ぶ事は無いだろう。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

ファッツ達の事務所には、柿岩とナタリア、ベレー、ミストレル、そしてファッツが座っていた。

ベレーの出した麦茶を前に、柿岩はすっと目を細めると、

「では単刀直入に伺います。貴方達は私達の敵？それとも味方ですか？」

そう、ファッツに問うたのである。

一瞬で事務所がしんと静まり返り、ナタリアは何気ないふりをしながらズボンのポケットに手を忍ばせた。

ファッツ達は心を許せる数少ない友人だ。

流れによっては部下を呼んでも護らねばならない。

第23話

ファッツは両手を顎の下で組み、柿岩を見ながら答えた。

「まず始めに、俺達は運び屋稼業であって客を選ぶつもりはない。まして敵味方なんて無い」

柿岩は黙ったままファッツの目を見ているので、ファッツは続けた。

「俺はその昔、司令官をクビになったが、その理由は深海棲艦への攻撃の意味に疑問を感じたからだ」

「・・・」

「ミストレルも脱走艦娘だが、その理由は明らかに戦意の無い深海棲艦への攻撃が出来なくなったからだ」

「・・・ファッツさん」

「ん？」

「あなたはどうして疑問に思ったのですか？」

「俺の鎮守府で、ある晩、哨戒部隊から連絡が入った」

「・・・」

「武器を持たない深海棲艦が白旗を振ってるが、攻撃を開始して良いかと、な」

「・・・」

「大本営はいかなるモーションもブラフであり、躊躇わず攻撃しろと俺達に教えてた」

「・・・」

「だが俺は人間同士の戦いでは降伏した敵兵は救助するのがルールだから、深海棲艦だって同じだと思っていた」

「・・・」

「その時、たまたま鎮守府には精鋭が全員揃っていた」

「・・・」

「だから全艦を召集し、おかしな事したら反撃して良いと命じた上で、深海棲艦を連れておいでと言ったんだ」

「・・・」

「司令室に入ってきた深海棲艦は、最初は震えて何も話してくれなかった」

「・・・」

「だが、赤城がどら焼きとお茶を渡した所、美味しそうに平らげた後、にこつと笑ったんだよ」

「・・・」

「だから俺は、この子は大丈夫だと思った」

「・・・」

「そしてお互い身振り手振りと言葉の単語でやり取りをした」

「・・・」

「すると、当時攻略対象になっていた海域には深海棲艦の大病院があるという」

「・・・」

「沢山の患者は居るが戦意は無い。彼女はそう言ってるように見えた」

「・・・」

「俺は大本営に報告する事は出来なかった。明らかな命令違反の上で知った情報だからな」

「・・・」

「だが同時に、俺は大本営の進撃命令を飲めなくなった。その子が嘘を言ってるようには見えなかったからだ」

「・・・」

「出撃期限が来て、他所の鎮守府が代わりに攻撃したと聞き、俺は大本営から調査隊が来ると察した」

「・・・」

「だから俺はその子に補給したうえで送り出した。調査隊が来る前にな」

「・・・」

「案の定、その後調査隊が来て命令違反を指摘され、俺はクビ、鎮守府は取り潰された」

「・・・」

「だが、今もあの時の判断は間違つてなかつたと思う」
「・・・」

「どこかで会つたら必ず礼をすると書き残したくらい、優しい子だったからな」

「・・・そう」

柿岩は2く3秒俯いて沈黙した後、

「申し訳ありませんでしたっ!」

と、いきなり土下座したのである。

ミストレルもファッツもベレーも、ナタリアでさえも。

この展開は全く予想外で、ぽかんと呆気に取られてしまった。

「え・・・あの・・・」

ファッツが辛うじて声を出すと、柿岩は土下座したまま続けた。

「そのお話!私の姉君が何度も聞かせてくれた話でございます!」

「そ・・・そっか・・・」

「姉君は常々、司令官にも鬼や悪魔ばかりではない、仏のような人も居ると繰り返し申しておりました!」

「・・・」

「地上組が人間や艦娘を避けて暮らすのは、万が一にも恩人に刃を向けてはならないとの考えからでございます」

「・・・」

「ファッツ様は私の姉君の命の恩人!先程は誠に無礼な振る舞いをしてしまいました!」

「いや・・・別に・・・」

「なにとぞ!平に!平にご容赦をおお!」

「別にそんな気にしてないから、良いから頭を上げてくれ・・・」

ベレーはふと気がついた。

つまりファッツが救助してなかったら、地上組は地上から海軍を攻撃していたかもしれない。

地上組が穏健派の道を選んだのは、ファッツが柿岩の姉の話を聞き、丁寧に対応したからなのだ。

ベレーは微笑んだ。

そんな凄い人のもとで働けるのは、嬉しい。

「うう、お優しい方です。ありがとうございます」

ようやく柿岩は椅子に腰掛けたが泣き止まない様子だったので、ファッツはナタリアに訊ねた。

「やっぱり深海棲艦にとっては、艦娘や人間って憎むべき敵なのかい？」

ナタリアは肩をすくめた。

「人類全体とか、艦娘全部とかに恨みを持つてる子は少ないけど、特定の復讐対象が居る子は多いわよ」

「戦って大怪我させられた相手とか？」

「んー、わざと自分を沈めた司令官とか、僚艦よ」

ファッツの眉がピクリと上がる。

「・・・そんな鬼畜が居るのか？」

「でなきやこんな長い間海戦が続くはずないでしょ」

「真の敵は海軍内にあり、だな」

柿岩が鼻を嚙りながら口を開いた。

「今日はとても良い情報を手に入れました。姉君の前で報告出来ます」

ミストレルはそつと訊ねた。

「え、ええとき、それって、姉貴は死んじまったのか？」

柿岩はきよとんとした顔になった。

「はい？ピンピンしてますよっ」

「紛らわしい言い方すんな」

「そんな事仰られても」

「んでき、前にもファッツから聞いたんだけど、姉貴は礼をするって約束したんだろ？」

「え？あ、はい」

ミストレルはニヤリと笑った。

「で、どんな礼をしてくれるんだ？」

ファッツが眉をしかめた。

「おいミストレル、止めろ。普通に補給したくらいで大した事なんてしてないんだ」

柿岩はファッツに尋ねた。

「姉君が望んだ時、またこちらに伺ってもよろしいでしょうか？」

「別に来てくれて構わないよ。もう司令官でもないし、かしこまる事なんて何もないさ」

ナタリアは皆に気づかれないう、小さく溜息をついた。

スマホを離れた手がじりと汗ばんでいる。

柿岩の正体は港湾棲鬼であり、力任せにねじ伏せるには少し骨の折れる相手なのだ。

ミストレルとベレーでは太刀打ち出来ないと言ったのでついてきたが、変な方向に行かなくてよかった。

第24話

数日後。

「ファッツさーん、ファッツさーん！」

「んー？」

洗濯物を干していたベレーが屋上から呼んだので、ファッツはとんとんと階段を上っていった。

「なんだ？」

「あ、あの、あれ・・・」

ベレーが指差したのは町外れの方角。

ファッツは最初何を意味するのか解らなかったが、すぐに気づいた。

車列、である。

真っ黒でピカピカに輝くSUVが十数台、隊列を組んで向かってくる。

周囲には同じく黒塗りのオフロードバイクを全身黒尽くめのライダーが操っている。

「・・・なんだなんだ？」

車列はまっすぐこちらに向かってくと、止まった。

先頭の一台がファッツの事務所の真横になる位置で、である。

「・・・降りようか、ベレー」

「は、はい。海軍の方でしょうか？」

「解らん」

ピン・ポーン♪

滅多に鳴らされない事務所のドアホンが鳴らされた。

ミストレルはソファに寝転んで雑誌を読んでいたが、表を見てひっくり返りそうになった。

玄関前を埋め尽くす武装したスーツ姿の連中の真ん中に、絵に描いたような執事姿の男が立っていたのである。

「私、柿岩家の執事で香布と申します。ブラウン・ファッツ様はご在宅

でしょうか」

「あ、え、ご、ございたく、です・・・」

しどろもどろで答えるミストレルの肩を叩いたのはファッツだった。

そのまま香布に向かって答える。

「ブラウン・ファッツは私ですが」

香布は深々と頭を下げた。

「突然の訪問をお許しく下さい。柿岩家の主がブラウン・ファッツ様にお会いしたいと申しております」

ファッツはぽりぽりと頬を掻いた。随分お偉いさんだったようだ。

「構いませんよ」

「こちらの内情にて申し訳ありませんが、あちらの車中までご同行頂きたく」

ファッツは頷いた。

大抵、要人が狙撃されるのは防弾を嚴重に施した車に乗っている時ではなく、その乗降時である。

用心深い事だと思いつながら、ファッツはミストレルとベレーを手招きし、香布についていった。

ガチャ。

SUVの中は向かい合わせのシートになっており、3人ずつ座れるようになっていた。

その後部側に2つの人影が見える。一人は見覚えがあった。

ファッツ達はベレー、ファッツ、ミストレルの順番で乗り込んだ。

「お呼び立てしてしまい、申し訳ありませんでした」

そう言つて頭を下げたのは先日会ったエリア長であった。

「いえいえ。改めて紹介します。私のパートナーのミストレル、そしてベレーです」

ミストレルとベレーがぺこりと頭を下げると、二人はにこやかに頭を下げた。

「すみませんが、一旦変装を解かせて頂きますね」

「どうぞどうぞ」

そういうと二人が人間の姿から深海棲艦の姿へと変わった。

エリア長の港湾棲鬼が続けた。

「我が姉君デゴザイマス。ファッツ様、覚エテオイデシヨウカ？」

ファッツはもう一人を見て頷いた。

「・・・ええ。数日間でしたが、お互い言葉や文化が通じなくて苦労しましたね」

ファッツの言葉に感極まったように、もう1人が話し出した。

「モウ、モウオ会イスル事ハ叶ワヌ願イカト思ツテオリマシタ。土原司令官殿」

ミストレルは首を傾げた。土原って誰だ？

ベレーは室内に入ってからカタカタと震えていた。

それは真正面に座り、ファッツに向かって涙を浮かべて話す相手が防空棲姫だった故である。

防空棲姫。

駆逐艦でありながら、その火力は都市の1つや2つは容易に消し去る事が出来ると噂されている。

モンスターを除けば深海棲艦の中でも上位に数えられる実力者である。

二人は人間の姿に戻ると、防空棲姫が話を続けた。

「その節は、私のつたない交渉に最後までお付き合い頂き、大変感謝しております」

「いえいえ、言葉が解らなかつたのはお互い様です。あの時何か失礼がありましたら改めてお詫びします」

「何を仰います。土原司令官殿は寝室や風呂、暖かい食事までご馳走してくださいました」

「・・・」

「私の話を熱心に聞いてくださり、帰り際には補給までして頂きました」

「しかし、結局は病院は攻撃されてしまったのでしょ？」

防空棲姫はこくと頷いた。

「確かに病院は廃墟と化しましたが、私の恩師は無事手術を終えて転

院する猶予がありました」

「・・・」

「その際、医療スタッフも患者も全て一緒に転院しましたので、被害は建物だけで済みました」

「そうでしたか」

ファッツは安堵の溜息を漏らした。

あの時。

自分は病院、けが人、攻撃の意志はない、そんな単語だけを拾って思案していた。

だが、防空棲姫は恩師の手術が終わるまでの間、攻撃を待つて欲しいと懇願していたのだ。

それは決死の覚悟で、白旗を振るに足る理由だ。

・・・そうだったのか。

「そうでしたか。それはまだ、不幸中の幸いでした」

防空棲姫は続けた。

「ですがその後、私の手下より、鎮守府が取り潰され、司令官の座を追われたと聞かされました」

「まあ・・・そうですね」

「妹から、それは私の願いを聞き届けて頂いたからだと聞きました
が・・・」

「・・・いや、私が命令違反をしたからですよ」

防空棲姫は真っ直ぐファッツを見返した。

「その命令違反とは、指定刻限までに病院を攻撃しなかった事。そうですね?」

「・・・」

「恩師は昨年亡くなりましたが、畳の上で穏やかに大往生を遂げました」

「・・・」

「今際の際まで、何とか土原司令官殿に一言御礼を申し上げたい、ご恩を返したいと申しております」

「いや、お気持ちだけで十分ですよ。何より」

「・・・何より？」

「自分が決断した事で多くの命が救われたと伺う事が出来た。これほど嬉しい事はありません」

ミストレルはじつと聞いていた。ファッツってこんな丁寧な会話が出来るんだな。

ベレーはあまりにも怯えていたので全く会話が耳に届かなかった。

防空棲姫・・・怖い・・・です。

防空棲姫は続けた。

「妹は日本に居る、深海棲艦達の多くを束ねております」

「・・・」

「私は同じ組織のもう少し上を束ねるお役目を頂いております」

ファッツは車列の意味を理解した。

この二人は事実上、深海棲艦のロイヤルファミリーであり、VIPという言葉がふさわしい存在なのだ。

万が一にも凶弾に倒れる事はあってはならず、ここに来るのも相当な反対を押し切った筈だ。

第25話

防空棲姫はそつと、紙片を差し出した。

「何かお困りの事がございましたら私達にお命じください。いつでも、最優先で対応させて頂きます」

ファッツが受け取った紙片を見ると、電話番号らしき数字が書かれていた。

港湾棲鬼が防空棲姫を見ると、防空棲姫はこくりと頷いた。

「…私の大恩ある方がこうしてご存命で、御礼を申し上げられる機会を賜れた事に感謝いたします」

ファッツはその言葉で、会談の時間が終わりを迎えた事を察した。

「私も、私の判断の結末を伺えてとても嬉しく思います。わざわざ足を運んで頂き、ありがとうございます」

「本当はもつとお礼を申し上げたいのですが、慌しい事をお許しください」

港湾棲鬼がそつとドアの外に目配せをすると、すつとドアが開いた。

「いえいえ、十分です。では、我々はこれで。ミストレル、ベレー、帰るよ…ベレー?」

ファッツの言葉に残る3人を見ると、そこには極限の緊張のあまり気を失ったベレーを見つけたのである。

「…はっ!? あ、あれっ!? あれっ!」

「おー起きたかベレー、おはよう。水でも飲むか?」

ベレーは事務所のソファに寝かされてる事に気づき、恐る恐る起き上がった。

「あ、あの、あの」

「柿岩さん達はもう帰ったよ。どうして気を失っちゃったんだい?」

ベレーは信じられないと言う目でファッツを見ながら言った。

「あ、あああの、お話されてた方がどなたかご存じないんですか?」

「え? あのお姉さんのほう?」

「はい」

「いや、知らないけど、ベレーは知ってるのかい？」

「防空棲姫さんです！一払いで山を吹き飛ばせる程の力を持つ物凄く怖い人なんですっ！」

ファッツは頭を掻いた。

「んー、だつて凄く丁寧に接してくれたし、物腰も柔らかい感じの良い人だつたじゃないか」

「そ．．それは．．ファッツさんが恩人だからだと思います」

「だとしてもさ、わざわざ礼を言いにくうして足を運んでくれるなんて良い人だと思うぞ」

その時、ミストレルがひよこつと事務所に入ってきた。

「お、ベレー起きたか。おはよー」

「あ、ミストレルさん、おはようございます．．というかごめんなさい」
「何で気絶したんだ？」

「ぼ、防空棲姫さんがあまりにも怖くて．．」

「まあ．．あんなのとやりあつたらアタシどころかナタリアの姉御でも瞬殺だろうな」

ファッツが頷いた。

「へー、そういうの解るんだ」

「あつたり前だろ。あの気配は只者じゃないぜ。あ！そうだ！」

「なんだ」

「なあファッツ、あの防空棲姫の姉ちゃん、なんで土原司令官なんて言つたんだ？」

ファッツは肩をすくめた。

「司令官時代は本名で過ごしてたからな」

「え．．ファッツ、本名って土原なのか？」

「悪いか？」

「なんでブラウン・ファッツなんだよ」

「名前を捨てたくてな。土からブラウン、原からファッツをこじつけた」

「へー。まあ西洋人っぽい名前の割に思い切り日本人顔だなとは思つて

たけどさ」

「ワターシ、日系3世ヨ」

「超嘘臭えー！あっはっはっは！」

「まあ、とりあえず、この事は俺達3人の秘密にしといてくれ」

「喋る理由がねえよ」

「ベレーも、頼むよ。な？」

「もちろんです。それにしてもファッツさん、物凄い人の恩人だったんですね」

「・・・今日の今日まで知らなかったけどな」

「そうなんですか？」

「あの時、あの子はさ、たった一人で、武器を全部捨てて、白い布つけた棒一本だけ持って来たんだよ」

「・・・」

「どれだけ実力者だろうと、そこまで丸腰ならロクな攻撃も出来ない」

「・・・」

「それだけ真剣に、誠意を見せたかったんだろうね。偉いと思うよ」

「・・・」

「裏を返せば、私が命令に従っていれば、そんな大物を早い段階で討ち取れたって事だ」

「あ・・・」

「そうしたら今、もしかしたら戦争は終わっていたかもしれない」

「・・・」

「歴史にIFは無いけれど、今の選択が最善だったと信じたいな・・・」

「そう・・・ですね・・・」

「なあ、ミストレル、ベレー」

「あん？」

「はい」

「今まででもそうだったが、今後も向こうから攻撃されない限り、艦娘も深海棲艦も攻撃せずにいよう」

「・・・ああ。そうだな」

「はい。ずっと撃たずに済むと、良いですね」

「うん」

ファッツはそつと、カップのコーヒーを啜った。

その日の夜。

「昼間のアレは一体何だったんだ、ファッツ？」

「へ？」

ファッツ、ミストレル、ベレーの3人で食卓を囲んだ時、突如事務所のドアが開けられた。

戸口に立っていたのはテッドである。

ぽかんとする3人に、テッドは妙に恐る恐る尋ねた。

「な、なあ、町の奴が車に四つ菱に柿の家紋を見たって言うんだが：見間違いだよな？」

「いや、知らんが・・・柿岩さんが礼を言いに来てくれただけだよ」

「やっぱり柿岩家だったのか!? お前何運んだんだ!」

テッドが大声で怒鳴ったので3人はびくりと椅子の上で飛び上がり、両手を挙げた。

「な、何も運んでないよテッド。何日か前にうちを柿岩の妹さんが訪ねてきたんだよ、ナタリアと一緒に」

「・・・あー、地上組が輸送業者を追加したいから探してるって言ったな。エリア長が来てたのか」

「とりあえず入ってくれよテッド。メシ一緒に食うか？」

「いや、コーヒーだけでいい」

ベレーがとてとてとカップを取ってくると、ファッツがコーヒーを注いで手渡した。

「ん・・・ほら。でな、ずっと昔、司令官だった頃に俺は柿岩さんを助けた事があるって解ったんだよ」

「へー、意外と世間は狭いもんだな」

「だな。俺もそう思う。で、今度礼に來たいというから良いよって言ったら來たって訳き」

「ん？ 待て。・・・ってことは何か？ ファッツは柿岩家の大恩人って事かよ」

「まあ、そうかもな。単なる昔話だが」

「単なる昔話なら車列組んで使いの者なんて寄越すかよ」

ミストレルが口を開いた。

「使いつて言うか、助けられたっていうエリア長の姉ちゃんそのものが来たぜ？」

テッドが盛大にコーヒーを噴き出し、むせこみながらも尚叫んだ。

「はー!?げほげほげっ・・ごっっ・・ごご当主がいらっしやっただとー!？」

「な、なんだってんだよテッド、ほら雑巾」

ファッツが渡した雑巾を握り締めならテッドは言った。

「あ、あんなファッツ。柿岩姉妹の姉、つまり柿岩の当主は地上組の元締めだ」

「そんな感じだったね」

「まるつきり解ってないだろファッツ。深海棲艦の幹部だってお目通りが叶わないロイヤルVIPなんだぞ？」

「へー」

「一言お言葉を頂けるだけで深海棲艦の中じや鼻高々で自慢出来るんだぜ？」

「ふーん・・」

「常に命を狙われてるお方が危険を冒してこんな片田舎まで来るなんて・・なあ、どんなお方だったんだ？」

ファッツがベレーの方を向いた。

「確か、あの子強いんだよな、ベレー？」

ベレーがスプーンを咥え、眉をひそめながらこくこくと頷く。

ミストレルが顎に手を当てて言った。

「確か・・えっと・・防空棲姫だっけ？」

テッドが部屋の反対側まで盛大にコーヒーを噴き出したのはい言うまでもない。

第26話

ある日の事。

ファッツ達が事務所でくつろいでいると、柱の電話が鳴った。

近い所に居たファッツが受話器を取ると、テッドのやけに明るい声が聞こえてきた。

「おい、今回の荷はボロいぞ。良かったなファッツ」

受話器を握るファッツは首を傾げた。

ボロい、とは儲けの大きい旨みのある依頼という意味のスラングである。

しかし、テッドがこういう台詞を吐く時は大抵ろくな事がないと相場が決まっている。

呼びもしないのに美味しい話なんて来る訳が無い。

「・・・ほう。依頼主は？」

ファッツは慎重に質問を返した。

まだ受けるとは言わないほうが良いと勘が告げていたからだ。

テッドは上機嫌で答えた。

「ナマゾン様だ。支払いは确实迅速だぜ」

「・・・エクスプレスか？」

「大当たり。3辺計250cmのダンボール箱1つ、重量は20kgほっちだぜ？」

エクスプレス。

大手通販会社の「ナマゾン超特急」が売りにする、通常より短期間で届けてくれる会員専用サービスである。

このサービスは通常陸送業者が請け負うが、届け先が海で隔てられている場合はDeadline Deliversの出版となる。

年会費を払っても注文しない人や陸送では黒字が出るが、Deadline Deliversに頼むと赤字と言われている。

ゆえにナマゾン側も非常にコストを気にするので、通常、テッドはスターペンデュラム等の低ギャラ組に振る。

なのに比較的高価なギャラを必要とするファッツの所に電話をかけてきて、美味しい仕事だと餌を撒いている。

つまり・・・

ファッツはサングラスを押し上げながら言った。

「行き先は・・・鎮守府か？」

「よおよ今日は冴えてるなファッツ。ロト30でも買ったらどうだ？」

「開始以来10年間1回も当りが出なくて賞金が溜まる一方のあれか？30桁も当てられる訳ないだろ。で、どこだ？」

「冗談だよファッツ・・・あー、位置は・・・その・・・ちよつとばかし南だ」

途端にファッツの眉間にしわが寄る。

「・・・ちよつと？」

「ちよこつと」

「・・・どこだ？」

「そ・・・それより今回の報酬は良いぞ！通常のお前さん達に頼む額の3割増しだぜ？」

次第に上ずるテッドの声に、ファッツの眉間のしわが一層深くなり、一段声色が低くなる。

「場所は、どこだ、テッド？」

数秒間の沈黙の後、テッドは諦めて答えた。

「・・・ソロルだ」

ファッツは白目を剥きながら唸った。

「おおいテッド・・・あんな訳の解らない海域は二度と行かないぞとあれほど」

「深海棲艦にも鎮守府にも話を通せるDeadline Deliversが他に居ねえのは解ってるだろファッツ」

「他に居なからうとあの海だけはお断りだ。常識が通じないにも程がある」

「そこを何とか頼むぜファッツ。アエロの連中もやけに頑なに拒否しやがったんだよ」

「あそこは戦域より怖いんだよ。変な宗教の勧誘まであるらしいな」

「カレー教とかいう奴だろ？群れに混じってガラムマサラとか言いながら盆踊りしときや良いんだろ？」

「うちの従業員にそんなキチガイみたいな真似させられるか。切るぞ」

「まあ待てって。最近仕事もご無沙汰だろ？」

ファッツは渋い顔になった。

テッドが唯一の仲介人である以上、テッドはDeadline Deliverersの懐具合を熟知してる。

言われた通り、ここ3ヶ月ほどは依頼なし。開店休業状態だ。

しかも。

「・・・」

「確か先々週だっけ？BMWのAT壊れたんだろ？」

ファッツの眉がピクリと動く。

「・・・どこから聞いた？」

「アイウイがホクホク顔だったんでな」

「くそ、あのおしゃべりめ」

「AT乗せ換えて100万近くするんだろ？」

「・・・85万だ」

「ちよつと痛い出費じゃないのかい？」

テッドの指摘はいちいちその通りであり、ファッツは言わなかったが財政状況は決して良くなかった。

余裕があるからと家賃を1年前払いなんてするんじゃないかった。

電話を横で聞いていたミストレルが肩をすくめながら呟いた。

「押し問答しても仕方ねえだろ。ギャラ吊り上げちまえよ」

ファッツは受話器を押さえながら反論した。

「しかしだな」

「どうせ受ける事になるんだし、時間の無駄だつて」

「酷い目に遭ったつて言ってたじゃないか」

「教祖と間違えられて信者に囲まれたつてだけだ。今度はサングラス

でもしていきや」

「・・・ベレーはどう思う?」

ベレーは遠い目をしてふるると小さく震えた後、

「・・・ふ、二日くらいお休みを頂けるなら、が、がんばり、ます。はい」と、自らに言い聞かせるように小さく小さく答えた。

ファッツはベレーを指差しながらミストレルに噛み付いた。

「ほらみるミストレル、ベレーは完全に怯えてるじゃないか」

「お弟子様ですかって握手を求められただけだから実害は無えんだって。ま、アタシが違うって解れば大丈夫だろ」

「・・・うー」

ファッツは唸りながら受話器に向かって話した。

「・・・3割増じゃ割に合わん」

テツドの声が一気に明るくなった。

「行ってくれるか!そうか!良かった!いやーさすがファッツ!」

「3割増じゃ割に合わんと断ってるんだが?」

電話口の向こうでテツドが誰かと激論を交わしている様子が伝わってくる。

たっぷり1分経った後、

「倍だ。これが上限だ」

「・・・なに?」

「ナマゾンさんはお急ぎの様子でな。運賃は倍払ってくれる。それも前払いでな」

ファッツは1ミリも警戒を解かずに続けた。

「・・・輸送失敗の場合は幾ら返すんだ?」

「・・・」

「・・・テツド?」

嫌な沈黙だなどファッツは思った。

たっぷり30秒は経った後、テツドは言った。

「失敗は・・・認められない・・・そうだ」

ファッツは溜息をついた。予想通りだ。

ボロいどころかこつちがボロボロになりそうだ。

第27話

話は少し前、ベレーが来て少し経った頃に遡る。

同じくエクスプレスのオーダーがソロール鎮守府からかかった。

当時、予備知識が全く無かったファッツ達はいつも通りの手順で準備を始めたが、マツケイに訊ねると

「..あの海域だけは訳が解らねえ。山ほど深海棲艦が居るのに戦闘が無いらしい。信じられねえよ」

そういつて肩をすくめた。

ファッツはムフアマスの所にも行ったが、ムフアマスも首を振りながら溜息をついた。

「あの海域の深海棲艦達は秘密のベールに包まれてる。鎮守府と協力してるなんてデマも流れてるしな」

「はっ..」

「有力な説は地上組元老院の重役級が居るから情報を意図的に攪乱してる、という奴だ」

ファッツは頷いた。だとすれば深海棲艦側の警護は相当強固だろう。

戻ってきたファッツはベレーをしつかり見ながら言った。

「ベレー、君の役割は非常に重要だ。鎮守府近海の深海棲艦達と最大限友好的に振舞って欲しい」

「はっ、はい！頑張ります！」

「とにかく刺激しないように、運ぶだけ運んだらすぐに帰ってくるんだ。良いね」

「解りました！」

「ミストレルも良いな？下手にぶつ放すなよ？」

「解ってるって」

こうして二人は出航したのである。

2日ほど経って、二人はソロール鎮守府の近海までたどり着いた。

だが二人はベレーのレーダー反応を見て、撤退するかどうするかを

真剣に話し合っていた。

なぜなら、個々の反応が識別出来ない位大量の深海棲艦が狭い海域に密集していたのだ。

その数は少なく見積もっても4000、いや5000は居ると思われた。

5000対2。

絶望的な数量差である。

相手の1%でも好戦的だった場合、自分達に勝ち目はない。

さらに、配達先はそのど真ん中である。

しかし、数時間様子を伺ったが戦闘が起きる様子はない。

散々迷った挙句、ミストレルはマツケイの情報を信じて腹を括った。

もし誤りだったらマツケイが死ぬまで呪ってやる、と。

二人はいつになく緊張した面持ちで、そっと前進し始めた。

それは、突然の事だった。

「ヤア、君モカレー食べニ来タノ？」

「・・・エツ？」

声をかけられたベレーが振り向くと、いつの間にかレ級が背後に居た。

ベレーは息を呑み、硬直した。

いつの間に背後を取られたのかさえ解らなかった。

この至近距離でレ級の主砲を一発でも喰らったらひとたまりも無い。

なにより、深海棲艦のヒエラルキーの遥か上に位置するレ級に失礼な態度を取ればそれだけで始末される。

それが深海棲艦の常識である。

ベレーはミストレルの事をどう説明したものかと、頭を超高速で回しながらそっと答えた。

「エ、エエト、アノ、私達ハ」

その時。

「おーいどうした？ベレー」

ベレーが振り向くと、先を行っていたミストレルが戻ってきていた。

ミストレルからはレ級が死角になっていて見えないらしい。

は、早く言い訳を考えないとミストレルもろとも殺される！

極まったベレーが涙目になったその瞬間。

「キョ・・・教祖様？」

ベレーは慌てて声がしたほうを向くと、夕級とヲ級の2体がミストレルを凝視しながらそう言っている。

「？」

何の事だろうと思っていると、ざばざばと取り囲むように深海棲艦達が上がってきて、

「教祖様！」

「教祖様ガイラシター！」

「アリガタヤ！アリガタヤ！」

と、口々に囁き出したかと思うと、次々とミストレルに握手を求め始めたのである。

ミストレルもベレーも事情がさっぱり解らない。

だが、異様な雰囲気が出てベレーは思わずミストレルにしがみついた。

すると、

「才弟子様！」

「才弟子様ナノデスネー！」

そう言いながらベレーもまた、握手を求められたのである。

二人は思った。

とにかく、訳が解らないけれどこんな大軍勢を刺激してはいけない。

求めに応じて引きつった笑顔で握手し続ける事1時間。

「トコロデ、ドチラニ御用事デシヨウカ？」

夕級がそう言った途端、深海棲艦達はぴたりとざわめきを止め、一斉に二人の方を向いた。

「あ、あー、ええと、夕張に渡したい物があって探してるんだけどさ」

ミストレルがそう言うのと、まるで海を割るかのように1箇所だけ深海棲艦達が道を空けた。

「才探シニナルヨリ、配送室ヲ呼び出シテモラウ方ガ早イカト！」

「そっか。さ、サンキューな」

「イエ、コレシキノ事！」

こうして二人は何とかソロル本島に上陸すると配送室を見つけ、夕張を呼び出してもらったのである。

「・・・なんだそりや？」

ミストレルは出来るだけ誇張する事なく、正確にファツゾに伝えた。

（実際、ベレーは素晴らしい説明だったとミストレルを褒めたくらいである）

だが、ファツゾの答えは冒頭の通りだった。

「アタシだって訳が解らねえよ」

「・・・だよな」

「とにかく、連中にとって教祖的な存在の摩耶が居るんだろうな」

「で、ついていったからベレーもお弟子さん扱いされたって事か」

「他に考えようがねえよ」

「まあ、二人ともとにかく疲れたろう。ゆっくり休め」

「悪いがそうさせてもらうぜ。あれだけ深海棲艦の大軍に囲まれた事も初めてだったしな」

ベレーが弱々しく微笑んだ。

「緊張・・・しすぎ・・・ました」

ミストレルとベレーの二人は、その後丸2日眠り続けたという。

二人が眠っている間、ファツゾはトラファルガーでマツケイとムファマスに会ったので話して聞かせたところ、

「阿呆も休みみ言え」

「深海棲艦が艦娘を教祖として崇める？全く聞いた事ないよ。ファツゾ」

そう言われたし、たまたま横で聞いていたナタリアも

「あたしも結構いろんな海域旅したけどさ、そんな話は聞いた事がな

いよ
」

と、肩をすくめた。そして4人が出した結論は、
「ソロールには近づかない方が良い」

と、いう1点でまとまったのである。

第28話

ミストレル達がそんな体験をした数カ月後。
航路的にソロル近海を通りがかったクー達は、深海棲艦達から話しかけられた。

「ネエネエ、君達モカレー食べニ来タノ？」

クーは思わず足を止めて聞き返した。

「ハイ？」

「ココノカレー美味シインダヨー」

「へー」

「抽選ダカラナカナカ食ベラレナインダケドサー」

クーは興味を持ちかけていたが、それを聞いて途端に意欲が失せた。

「チユ、抽選ナンダ・・・」

「カレー教ニ入信スルト確率ガ上ガルンダヨ？」

「・・・カレー教？」

その時、別の1体が海面に浮かんできて厳かに言った。

「ゴ本尊ガアル小屋ノ方ニ向カツテ、毎日3回海底デ教祖様ヲ称エル舞ヲ奉納シ、4回祈リヲ捧ゲルノデス」

「ゴ本尊？教祖？奉納？」

クーとルフィアは顔を見合わせた。

なんでカレー食べるのに宗教に入信しなきゃいけないの？

僕達の町ならトラファルガーに行けば普通に食べられるのに。

クーは眉を顰めた。

・・・だから海底生活は嫌なんだよ。飛び出して良かった。

クーはルフィアに目で合図し、じりじりと後ずさりし始めた。

「イ、イヤ、僕達輸送任務デ先ヲ急イデルカラ」

「ソウ言ワズ、セメテ手ヲ合ワセルダケデモ」

「エー」

ふと、クー達が周囲を見ると、いつの間にか神器を手にした深海棲

艦達に囲まれていた。

「ヒッ！」

「サア、オ祈リノ時間デス。教祖様ノ為ニ祈リヲ捧ゲマシヨウ」

・・・しょうがない。下手に刺激するのは得策ではない。

クーとルフィアは周りに合わせるべく、形だけ頭を下げてきたのである。

この話を帰ってきたクー達が尾ひれをつけて噂した結果、この町では

ソロル海域は狂信的な深海棲艦の巣窟

というのが定説となり、この海域はタブーであるとDeadline Divers達は認識したのである。

話は現在に戻る。

ファッツは電話口でテッドに洩る理由を並べていた。

「ソロル近海だけでも5千体は深海棲艦が居るんだぞ？」

「・・・まあな」

「しかも変な宗教に入れとか言われるんだぞ？」

「・・・」

「うちだけで突破するのは無理だ」

「じゃあ誰となら良いんだ」

「ナタリアは要る」

「ちよちよちよ！おいおい、ワルキューレはオーバーコストだぜ」

「連中を黙らせる必要があるだろ？」

「それがねえんだとよ」

「なに？」

「ソロル手前のムルガ島から護衛をつけるそうだが、それなら安全だろ？」

ファッツはそれでも躊躇っていたが、ミストレルが受話器をファッツからもぎ取ると

「なあテッド！後1割くれたら引き受けるぜ！」

「がめついなおい」

「ファッツの説得代だ」

「・・・ええい！その代わり最優先ですぐ出発してもらおうからな！」

「OKテッド、任せときな。補充済ませたら事務所に行く」

「頼むぜミストレル。ファッツによるしくな」

ガチャリと電話を切ったテッドは頷きながら言った。

「・・・うちの組合員達も覚悟して行かなきゃならん海域なんですよ、メイさん」

メイと呼ばれたテッドの目の前に座る女性は、小切手にサインしながら答えた。

「これだけギヤラを払うんです。失敗は許されませんか？依頼主は大株主様なのです」

テッドは葉巻に火をつけながら言った。

「そいつは・・・海域でドンパチやつてる深海棲艦や艦娘に言ってくださいよ」

メイは小切手をピッと切りながら言った。

「それ込みの値段ですから、我々はあなた方に言うのです」

煙を吐きながらテッドは思った。言ってる事は正しいが、行き先が行き先だ。

テッドは長年の疑問を口にした。

「あんた方の勝手だが、なんだってあんなイカれた所にエクスプレス契約を認めたんだけ？大赤字だろ？」

メイは重い溜息をついた。

「その通りなのですが、あのエリアの会員様はいずれも大株主と大得意様なので断れないのです」

「・・・司令官がつて事ですか？」

「いえ、全員艦娘の方です」

「複数の艦娘が株主やお得意様なんですかい？」

「・・・ええ」

「しかし、今回何かあったら我々も次回以降は引き受けられませんぜ？」

「そうはならない、そう仰ってました」

「どなたがですか？」

「今回の依頼主様がです」

テッドは肩をすくめた。艦娘がそう言うつて事は大海戦でもおつ始めるつもりか？

戦闘に巻き込まれてミストレルやベレーが沈んだらファツゾがどれだけ怒るか解つたもんじゃない。

テッドは窓の外に目を向け、首を振った。何事ありませんように。

「目立つ特徴・・・か？」

「ええ。依頼主様が識別用に教えて頂きたいとの事でした」

テッドの事務所に向かったミストレルとベレーは、着くなりメイからそう訊ねられた。

「識別なあ・・・サングラスとかで良いのか？」

「目立つのであれば」

「うーん・・・」

考え込むミストレルを見て、ベレーがぼんと手を叩きながら言った。

「ちよつと待っててください。すぐ戻ってきます」

5分後。

ベレーが持ってきたのは長いロイヤルブルーのスカーフ2枚だった。

ミストレルが怪訝な顔で訊ねる。

「なあ、こんなのあつたか？」

ベレーがにこつと笑いながら返す。

「先日、玉ねぎの袋についてた懸賞で当たったスカーフセットです！」

「・・・お前懸賞なんてやってたのかよ」

「当たると嬉しいじゃないですか。宝くじよりお手ごろですし！」

「まあ良いけどよ・・・これを二人それぞれ首に巻くので良いか？」

「はい。それが識別子になりますから決して身から離さないでください」

「じゃあ安全ピンで留めるか」

テッドが顔をしかめつつミストレルに言った。

「おいおい、それシルクだろ？折角の綺麗なスカーフに安ピンはねえだろ」

「他に持ってねえよ」

「しかたねえなあ」

テッドは奥の部屋に行き、数分後に小箱を手に戻ってきた。

「ほらよ、ミストレル。こっちはベレーちゃん」

「ああん？」

ミストレルが手渡された箱を開けると、そこには古いカメオのブローチが入っていた。

「うわあ・・・綺麗・・・」

ベレーも箱を空け、入っていたブローチを取り出すと嬉しそうにスカーフにピン留めした。

ミストレルは首を傾げた。

「何でテッドがこんなもん持つてるんだ？」

「コレクションだ。なくすなよ？弁償出来るような金額じゃねえからな」

「わ、解ったって。なあメイ、これで良いか？」

メイはスマホのカメラで二人を撮りながら言った。

「・・・はい。画像として送りました。それから伝言です。護衛は航空機だそうです」

「機種は？」

「彗星・・・ろつぴやくいち・・・と読むんですかね？これ」

ミストレルはメイのスマホ画面を見て眉をひそめた。

「彗星六〇一空だと・・・熟練部隊じゃねえか」

「その護衛機に従って航路を取ってほしいとの事です。コールサインと返信はこちらだそうです」

「オーライ、見失わないようにするさ。あと、ベレーは深海棲艦の二級だ。間違えて撃つなよって伝えてくれ」

「解りました」

第29話

「いいか、とにかく、十分気をつけるんだぞ」

「なんべん言うんだよファッツ・さすがに聞き飽きたぜ」

「マツケイやムファマスの話ではソロル近海での戦闘は無いようだが、そこまでだって油断は禁物だ」

港の岸壁で兵装を装備しつつ、ミストレルとベレーはファッツと出発前最後の打合せをしていた。

ミストレルは肩をすくめた。

「二人で警戒しながら明朝0700時までにはムルガ島へ行く。後は護衛機にのんびりついていく。簡単だぜ」

「ダメコンは持ったな？レーダーは動くな？」

「ちやんとあるって。ベレーも大丈夫だろ？」

ベレーが頷いた。

「3回確認してますから大丈夫です」

ファッツは二人の手をぎゅつと握ると言った。

「無事を祈ってるからな」

ミストレルはニツと笑い、岸壁を蹴りながら言った。

「じゃ、ちよつくら行ってくるぜ！」

ベレーはファッツの手をぎゅーつと強く握り返すと、むんと頷き、

「い、い、行ってきますー！」

そう言つてミストレルの後を追つていった。

「何回やっても、この瞬間は慣れないな…必ず、必ず帰って来いよ」

ファッツは二人が見えなくなった海原を見つめながら、そう呟いた。

「くっそ、これじゃ指定刻限に辿り着けねえよ」

「チョット、数が多い、デスネ」

二人はムルガ島沖まで辿り着いていたが、そこで深海棲艦の艦隊と遭遇してしまった。

ベレーが交戦の意志がない事を伝えたにも関わらず、応答代わりに砲撃が始まったのである。

懸命に迂回してムルガ島に近づこうとしたが、運の悪い事にさらに別の深海棲艦の艦隊と遭遇。

両者から攻撃されて進路を阻まれていたのである。

ミストレルは舌打ちをした。

島の付近まで行かなければ護衛機は見つけてくれないだろう。

このままじりじりと戦闘を続ければランデブー出来ず、輸送任務は失敗だ。

その時、1発の砲弾がミストレルに着弾した。

「くっー！」

「ミストレルサン！大丈夫デスカ!?!」

「至近弾だ・・・ちよつと痛えけど大丈夫」

まだ自分は小破で済んでいるが、帰路を考えればこれ以上は厳しい。

状況を全て記録し、無理だったと伝えよう。ファツゾなら解つてくれるはずだ。

ミストレルが撤退の判断を下そうとした、その時。

「!?!」

ミストレルとベレーを、黒い影が覆った。

とっさに見上げた二人は、我が目を疑った。

見えたのは、彗星六〇一空の群れだった。

1機2機ではなく、空を埋め尽くす勢いで飛んできたのである。

恐ろしい事に、それら数え切れないほどの大編隊が格子状にビタリと並んで飛んでいる。

「・・・どんだけ訓練したらあんな事が出来るんだよ」

自らも水上偵察機を運用した事があるミストレルは、その異常性を即座に理解した。

数も錬度も尋常じゃない。誰がこんな航空部隊を操ってるんだ？

呆気にとられるミストレルにベレーが叫んだ。

「コールサインデス！」

「ん?!マジか!」

ミストレルがコールサインに対する返信を送ると、彗星の大編隊は二手に分かれた。

そして先程までミストレル達に砲撃を浴びせていた深海棲艦の2艦隊を一瞬で轟沈させてしまった。

「!？」

ミストレル達は呆然としていた。

相手は重巡や戦艦を含む6隻フルの2艦隊だった。

幾ら熟練した航空部隊とはいえ、1度の通過タイミングで全艦轟沈させるなんて不可能だ。

そう。

不可能だと、今の今までミストレルは思っていた。

だが、彗星六〇一空の航空隊は目の前であっさりとやってのけた。

そして再び1隊に集まると、ゆつくりとソロル島に向けて方向転換した。

ミストレルはベレーに向かって言った。

「お、おい、後を追うぞ」

「ハイ」

それからしばらくして。

「・・・ミストレルサン、アレ」

「んー?」

ベレーが恐る恐る指差した先に見えたものは、深海棲艦達だった。

だが、二人が首を傾げた理由はそうではなく。

「・・・なんで直立不動なんだ?あいつら」

「トテモ・・・緊張シテル感ジガシマス」

最初は首を傾げるだけだったが、

「な、なあ、あっちの奴らもこっち見ながら直立不動だよな・・・」

「アッチノ方々ハ、敬礼シタママ動力ナインデスケド・・・」

「・・・結構、大規模な部隊・・・だよな」

「ハイ・・・」

微動だにしない深海棲艦達を見て、二人は思った。

この航空隊、よほどのこの海域で名を轟かせてる実力者なんだな、と。
「遠い所をわざわざ届けて頂き、ありがとうございます」

「い、いえ、大丈夫です」

「おかげさまで明日の支度に間に合います。嬉しいですよ」

ソロール近くの海原で待ち、大編隊を静かに艦装へと仕舞ったのは
たった一人の鳳翔だった。

鳳翔は、軽空母である。

本来ならばこんな大編隊をたった一人で運用出来る筈が無い。

更に言えば、海は折からの風が強く吹き、立ってるだけでも結構大変な程に波が立っていた。

それなのに編隊は一糸乱れることなく着艦し、鳳翔は平然と受け入れたのである。

普通なら着艦自体諦める状況であるにも拘らず、何事も無かったかのように。

ミストレルはごくりと唾を飲んだ。

やっぱり尋常じゃない編隊は持ち主からして尋常じゃない。

荷を見て頷く鳳翔に、ベレーはおずおずと伝票を差し出した。

「エエト、アノ、後デ構イマセンノデ、コチラニ受取ノサインヲ才願イシマス」

鳳翔がにこつと笑った。

「すみません。私とした事がうっかりしてました。貸して頂けますか？」

「ハ、ハイ」

鳳翔はさらさらとサインすると伝票を丁寧にベレーに返した。

「こちらで宜しいですか？」

「・・・ハイ、大丈夫です」

鳳翔はミストレルの方に向き直ると言った。

「護衛が遅れてしまいすみませんでした。破損箇所の修理と補給を兼ねて島で休憩なさいませんか？」

ミストレルは頷いた。

破損は小規模だが、鎮守府で直してもらった方が早く綺麗に直して

くれる。

それに、帰路の海域で再び好戦的な深海棲艦達に遭遇しないとも限らないからだ。

第30話

「えっ？私のも良いんですか？」

「大丈夫。メンテナンス、しておく」

ベレーはきよとんとしながら艀装を工廠から出てきた小さな女の子に手渡した。

・艦娘にも見えないし、妖精さんかな。でも深海棲艦の艀装なんて解るのかなあ。

工廠に艀装を預けた二人は、そのまま鳳翔の店へと連れてこられた。

「もう少しで夕食の時間ですから、宜しければ召し上がっていきませんか？」

鳳翔がそう訊ねたので、断る理由もなかった二人は開店前の店内で座って待っていた。

そして出された夕食を一口頬張った途端、

「・・・旨っ！」

「お、美味しい、です」

二人は目を見張った。

これは・・・これは美味しい。

言っでは悪いがこんな南の果てにある離れ小島でこんなに美味しいご飯が作れるものなのか？

「うふふ、沢山ありますからお代わりしてくださいね」

「サンキュー！煮物旨えな」

「こんな美味しいご飯食べた事ないです！」

「ありがとうございます」

鳳翔は少しの間二人の様子を見ていたが、そつと話しかけた。

「お二人は仲良しなんですね」

ミストレルは頷きながらニコツと笑った。

「ああ、コイツは妹みたいなものだ！家事も上手いし可愛いんだぜ！」

ベレーがミストレルを見て、ぺこりと頭を下げた。

「いつも頼りにしています」

「おう！任せとけ！」

「・・・そうですか。それは何よりですね」

鳳翔は微笑みながらそう言うのと厨房に戻っていった。

「いやー、直してもらった上にメシまで食わしてもらってサンキューな」

「艀装も調子が良くなった気がします。ご飯も美味しかったです。ありがとうございます」

修理、補給を済ませた艀装を受け取り、ミストレルとベレーは岸壁に立つ鳳翔に礼を述べていた。

鳳翔はにこにこ笑いながら返した。

「いえいえ、簡単な物ですみませんでした」

「あんな旨い煮物は初めて食ったぜ！」

「ところで、帰りも護衛機に送られますが、どちらまで随伴させますか？」

ミストレルは目をパチクリさせた。

「・・・えっ？」

「はい？」

「だ、だって日没過ぎて真っ暗だぜ？」

「それが何か？」

ミストレルは呆気に取られた。

航空機は夜間の離着陸が難しい。特に着艦は不可能である。

ゆえに空母は夜戦に参加する事が出来ない。

これは艦娘の間では常識中の常識である。

困惑しながらもミストレルは1つの結論に達した。

自分が脱走してから何らかの技術革新があったのだろうと。

ならば深く突っ込んではいけない。

「じゃあ・・・悪いけど、ムルガ島沖で攻撃にあったからもう少し本土寄りまで頼めるかな」

「大丈夫ですよ」

「助かる。燃料が続く範囲で良いぜ」

「解りました。それではお気をつけて」

「じゃーなー！」

「失礼しますー！」

鳳翔は岸壁で水平線の彼方へと進んでいく二人と、自らの航空隊を見つめていた。

その傍らに、工廠長が立った。

「鳳翔」

「・・・ありましたか？」

「気にしておらんかったようじゃの。建造当時の貼付位置にあったぞい」

工廠長が鳳翔に手渡したのは、掌に乗る程の小さなプレート。

そこには

「29891鎮守府 NO. 038 摩耶」

と、書かれていた。

その夜遅く。

艦載機の整備をする妖精達を横目に、鳳翔は端末のキーを叩いていた。

画面には「手配艦娘リスト」が示されていた。

「ええと・・・29891鎮守府・・・摩耶さん・・・これですね」

「犯罪歴なし、素行良し、ただし特定の状況下で撃ち損じる事多し・・・」

「・・・遠征指令遂行中に行方不明・・・自口座の預金が引き出されており計画的逃走と見られる・・・」

「・・・直前に深海棲艦への一律の攻撃に対し疑問を呈する進言が多数見られた・・・なるほど」

鳳翔は画面を見ながら頷いた。

「・・・今、幸せに過ごしているのなら、それで良いのではないでしょうか」

鳳翔はキーボードを叩き、手配リストから当該情報を削除した。

この操作が出来るのは鳳翔以外には大将や雷、ヴェールヌイ相談役など限られたメンバーである。

もちろん特別機密事項だ。

「大変でしょうけど、頑張ってくださいね」

鳳翔は窓の外を見た。

艦娘が脱走し、一般社会に溶け込んで生きている事は、実は大本営も把握している。

司令官が想像する以上に、艦娘達は苛酷な環境に居る。

戦闘の最前線でのストレス、戦争の意義への疑問、戦術への疑問、作戦への疑問。僚艦への疑問。

諸々の心理的負担を緩和する装置は艦装に組み込んであるが、万能では無い。

心が折れてしまう艦娘も居る。

典型例が悩みすぎて攻撃出来なくなってしまうパターンだ。

ただ、司令官へは「攻撃したが失敗した」と報告する決まりにしている。

それは失敗率が高い艦娘を司令官が敬遠する事で、自然と休養が取れる事を狙ったのである。

ところがブラック鎮守府の司令官は、失敗率の上がった艦娘を「囹艦」として使い捨てる。

溜まりに溜まった疑問と司令官への怨嗟は、艦娘を深海棲艦へと誘う充分な理由になる。

881研の特別リポートは、そう結論付けていた。

そんな悲惨な末路を辿るくらいなら逃亡する方がマシではないか。

鳳翔はそう考えるようになり、特に犯罪を犯していない逃亡兵に対しては寛容だったのだ。

「私達は司令官の思いに素直ですからね。良い方向でも、悪い方向でも」

ふと、袖を引っ張る感覚に気づいて目をやると、妖精達が整備を終えた事を伝えてきた。

「ふんふん・・・いつもながら美しい整備ですね。お疲れ様でした」

労われた妖精達はピシリと敬礼すると、寢床へと移動していった。

「私は良い提督の元に居られるから、今でも幸せですけど・・・」

大本營で雷の作戦に同行して大肅清をかけた時のような乾いた毎日だったら耐え切れただろうか。

鳳翔はもう1度窓の外を見た後、そつとカーテンを閉めた。

第31話

「店を間違えてないか・・・ここは運送屋の看板を掲げてるんだが？」
「ファッツ、落ち着いて。ちゃんと説明するから。ね？」

ベレーはコーヒーの入った盆を持ったままオロオロしていた。

ミストレルが買い物に出かけてすぐ、ナタリアが事務所を訪ねてきた。

笑顔で迎えたファッツがコーヒーを注いでくるようベレーに言ったのはわずから5分ほど前の事だ。

しかし、湯気の立つコーヒーを持ってきたらファッツが殺気立っていた、という訳である。

ナタリアはベレーの姿を認めると手招きをし、その盆からカップを受け取った。

一方、ファッツは完全に沈黙したまま、ナタリアを睨み微動だにしない。

その中で優雅にコーヒーを啜る辺りはさすがナタリアである。

「・・・えっと、手短かに説明しようとして誤解を生んだ事は謝っておくわ」

「・・・」

「この計画は、運ぶ子達そのものから依頼されている事よ」

「先程は地上組が依頼者だと聞いたが？」

「..そうね。納得して欲しいから、本当の最初から説明させてもらえないかしら」

「・・・」

ファッツが黙したまま拒否しなかつたので、ナタリアはにこりと笑った。

「ありがと。事の始まりは、普通の町に住む化けた深海棲艦2人が人間に疑われたの」

「何を疑われたんだ？」

「容姿が変わらない事よ。十年ぶりに町に帰郷した奴がその事を住人

に指摘したらしいわ」

「・・・」

「毎日会っていると変化が無い事に麻痺してしまうけれど、十年ぶりに見て全く同じ姿なら疑いを持つのは当然よ」

「・・・」

「住人同士で噂するだけなら良かったんだけど、それが公安の耳に届いてしまった」

「・・・」

「その子達は人間の町に住んでいたのに地上組に加入しなかった事が2つの意味で災いしたわ」

「・・・2つ?」

「1つは地上組が指導してる、年の取り方を全く知らなかった事」

「・・・」

「もう1つは公安の動きを地上組が把握出来ず、捕縛前に逃亡を支援出来なかった事」

「・・・」

「公安が警察署に連行してきて始めて、地上組は仲間が捕縛された事を知った」

「・・・」

「通常の犯罪人への取調べと違って、深海棲艦かどうかの検査は人道的とは言えないわ」

「・・・」

「程なく元の姿を晒してしまったその子達は、大本営に連行される事になった。処刑は免れないでしょうね」

「・・・」

「地上組に加入してなかったとはいえ、仲間である事に変わりはない」

「・・・」

「公安は大本営の受け入れ態勢が整うまで、この町の警察署に2人を留置してる」

「・・・」

「警察からは881研究班の連中が移送するのが恒例だから今回も間

「違わないわ」

「・・・」

「今の留置場で確保する事も可能だけど、移送中に確保する方が容易だし、警察との遺恨を残さずに済むわ」

「・・・」

「地上組は大本営への送致途中で2人を確保し、遠く離れた地へ逃がす事を決めた」

「確保というか・誘拐だろ。本人が知らない所で計画されているのだからな」

「2人には昨夜、警官に化けた地上組メンバーが会って、そのプランに同意する事を確認したわ」

「・・・」

「だから決して深海棲艦の誘拐に加担しろって事じゃないのよ」

ファッツが眉をひそめつつも殺気を放つ事を止めたので、ベレーはそっと隣に寄った。

「あ、あの、コーヒー・・・淹れ直しましょうか?」

「ん?あ、いや、今は少し冷めていた方が良く。貰うよベレー、ありがとう。・・・少し、向こうに行ってなさい」

「は、はい。失礼します」

ベレーが足音も立てずにそつとそつと立ち去った後。

ファッツは黙って手に持ったカップのコーヒーを睨んでいた。

数分の沈黙の後、ナタリアは言った。

「この件はテッドも通した正式な依頼よ。さっきも言った通り依頼主と費用負担は地上組日本支部」

「・・・」

「ファッツ達に依頼したいのは私達輸送班の航路を先回りし、艦娘が居ないか見張るパート」

「・・・それだけでは済まんだろ」

ナタリアは肩をすくめた。

「もちろん、この事が大本営や鎮守府経由で海の上まで伝われば、捕縛部隊と化している場合もあるでしょうね」

「艦娘同士で交戦する事になるぞ」

「地上組は出来るだけ穏便に事を運びたがってるからテッドが気を回しただけよ」

「・・・」

「貴方達が噛まないのならプランAを放棄する。テッドも無理にとは言わなかったし」

「・・・」

「もし私達に任されれば、確保後は戦闘態勢で外洋まで強行突破するプランBで行くわ。手っ取り早く確実」

「・・・」

「ほとぼりが冷めるまで、久しぶりにナポリ辺りで過ごすのも悪くないと思っただけ」

ファッツはガリガリと頭を掻いた。

ミストレルやベレーに危ない橋を渡らせるのは避けたい。

だが、自分達が出ないと海戦になってもおかしくは無い。むしろその確率が高い。

どうせ後手後手に回る大本営の事だ。最初は駆逐艦や軽巡位しか派遣しないだろう。

ナタリア達のような重火力部隊が最初から本気を出せば外洋まで強行突破するのは訳もない筈だ。

そして一旦外洋に出してしまえば航路や領海を気にしなければいけない艦娘達は圧倒的に不利になる。

総合すれば、ナタリア達は単独でも地上組の依頼を達する事が出来る確率が高い。

ただし、たまたまナタリア達に遭遇した艦娘達は悲惨な運命を辿る事になる。

運が良くて突破された責任を取って謹慎、プライドの高い司令官なら手酷い罰を与えるかもしれない。

百戦錬磨のナタリア達と交戦すれば轟沈する可能性だってある。

ナタリアは同じDeadline Deliverersの艦娘でさえ、その一部を快く思っていない。

深海棲艦の仲間を護る為、見知らぬ艦娘に砲を向ける事など一ミリも躊躇う事はないだろう。

その逆だつてゼロとはいえない。

たまたま出撃途中の大和型とでも遭遇すればナタリアとて無事では済むまい。

だがもし、我々が加担したとして。

包囲網の回避に失敗し、戦闘状況下にミストレルとベレーが居合わせれば彼女達はどうか動ける？

誰にも砲を向けられず、一方的に敵とみなされて轟沈させられる様が容易に想像出来る。

かといつて相手の戦意を失わせる為に戦艦や正規空母を擁するDeadline Deliverを出せば事が大きくなりすぎる。

それは依頼主の地上組にとつても本意ではないだろう。

そもそも世間では表向き、深海棲艦とは手を結ぶ術が無い事になっている。

だからこそ深海棲艦を殲滅する為の戦争を、これだけの巨費を投じて行っているのだ。

もし並んで航行するようなシーンがマスコミにでも流れればこの大前提がひっくり返ってしまう。

軍にとつてあまりにも不都合な真実が明らかになる前に、この町ごとと消滅させられるだろう。

とはいえ。

実は一般市民でも「ちゃんと話せる」穏健派の深海棲艦が居る事を知っている。

ただ、大部分の「好戦的な深海棲艦」が人間の経済活動にとって非常に不都合で、両者の見分けがつかないのだ。

加えて表立つて深海棲艦の肩を持つと、深海棲艦に親しい人を殺された人間から恨まれるので言えない。

公安と海軍が協力して地上に居る深海棲艦を排除している事は公然の秘密だ。

そして深海棲艦に恨みを持つ人間は沢山居るので、その精度はとも

かく密告情報には事欠かない。

深海棲艦、海軍、市民、それぞれの言い分はそれぞれの中で筋が通っている。

だが、それらは相容れず、大本営の中の８８１研のような異分子が混ざっているのですます複雑になっている。

・・どうすれば、事が丸く収まる？

そこままで考えを打ち切り、ファッツはナタリアを見返した。

第32話

じつとファッツを見ていたナタリアは小さく肩をすくめ、口を開いた。

「キリスト様じゃないんだし、この世の不条理を全部背負い込む必要なんてないと思うわよ。ファッツ」

「・・・そんなつもりは無いんだが」

ナタリアは悲しげなファッツの目を見つめていたが、諦めたように立ち上がった。

「・・・オーライ、解ったわよ」

「？」

「移送は明後日の午後。それまでに貴方がプランCを作れるならテッドと二人で聞いわ」

「・・・」

「でも私達が危険に晒されるような話なら即座に強行突破のプランBを選ぶからね」

「ナタリアをそんな目に遭わせる訳がないだろ」

ナタリアは腰に手を当て、目を細めた。

「あら、それってどういう意味？」

「どうって・・・親友を危険に晒すような事はしないよ」

ナタリアはがっかりした表情になるとフンと鼻を鳴らし、

「ちえ。まあ良いわ。で、プランニングするってテッドに返して良いのかしら？」

「・・・ああ」

「こつちだつて準備あるからギリギリまで考え込まないでね」

手をひらひらと振りながら、ナタリアは事務所を出て行った。

数分後。

「帰ったぜー・・・あれ、姉御来てたのか？」

ファッツはのろのろと戸口から入ってきたミストレルに視線を向けた。

「・・・ああ。何で解った」

「姉御が使ってる香水の匂いがするからな」

「・・・そうか」

ミストレルは眉をひそめた。

「なんだよ、どうしたってんだ？ほれ、たい焼き買って来たぜ」

ファッツはミストレルが差し出したたい焼きをじつと見つめると、そのままパクリと齧りついた。

ミストレルは慌てて手を引つ込めると、

「自分で持つてから食えよ・・・まったく。おいベレー！たい焼き買って来たぞー！」

と言いつつ、自分の分を袋から取り出した。

たい焼きを両手で持ち、少しずつ齧りながらベレーは言った。

「・・・つまり、穩便に、脱走が済めば良いんですね？」

「それは無理だとしても、せめて誰も撃たずに済んで欲しい」

「撃たずに済むって事は・・・撃つても意味が無いって事ですよね」

ファッツは天井を睨みながらおうむ返しにベレーの言葉を繰り返した。

「撃つても、意味が、無い・・・」

その時、ミストレルは袋の中のたい焼きを見て舌打ちをした。

次に食べようと思っていたクリーム入りがどれだったか解らなくなってしまうたのである。

ミストレルは袋の中を睨みながら言った。

「うー・・・似たような外見でさっぱり解らねえ」

ファッツがピクリとした。

「・・・似たような・・・外見？」

ミストレルは真剣に袋を睨みながら呟いた。

「こういうの慣れてる奴だったら一発なんだろうなー」

「・・・慣れてる・・・無意味・・・紛らわしい・・・」

ベレーはファッツとミストレルの会話がまるでかみ合っていない事に気づいていたが黙っていた。

何となく、ファッツが策を思いつきそうな感じがしたからだ。

ベレーはミストレルに向かって無言の声援を送った。もう後一押し！

ミストレルは選びに選んだたい焼きを2つに割ると天を仰いだ。

「あーちくしょー外したー」

ベレーはファッツゾに視線を動かしたが、どうやらこの一言は役に立たなかったようだ。

再びミストレルを見て眉をひそめ、無言の念を送る。良い一言！良い一言をお願いします！

「まあつぶあんでも良いや」

そしてふと、自分を凄目つきで睨んでいるベレーに気がついてびっくりとした。

「うおっ・・・べ、ベレー、そんなにつぶあん食いたかったのか？」

「ふえっ!?!」

「い、いや、なんか物凄い殺気立った目で見てるからさ・・・」

「ち、違うんです。ファッツゾさんが何か思いつきそうなんです」

「・・・それとアタシとどういう関係なんだ？」

「ミストレルさんが言った一言で、ヒントを得てるみたいなんです！」

「・・・たい焼きのクリーム入りがどれか探してただけなんですけど」

その時、ファッツゾが息を吐いた。

「ふはあ。あーなんかこう、もやもやしてまとまらん」

「あうー」

ベレーが惜しそうな声を上げたのをミストレルは首を傾げつつ眺めていた。

そんな簡単に代案を思いついたらテッドは商売上がったりだ。

あれでも元は天才と言われて大本営の総合戦略部長まで上り詰めた奴だからな。

だからこそDeadline Deliverersが全幅の信頼を寄せてるわけだし。

ま、ファッツゾが諦めるか、本当に考えつくか知らねえが、アタシはファッツゾの言う通りにするだけだ。

そうこうしているうちに日も暮れて。

「・・・うーん」

ファッツは頬杖をつきながら相変わらず唸っていた。
ミストレルはTVドラマを見終わるとソファ越しにファッツに話しかけた。

「なあファッツ、そんなに悩み続けるとハゲるぞ」

「そうは言ってもだな・・・」

「ちよつと早いけどメシにしちまおうぜ。食ったら気分変わるって」

「んー」

「作ってきてやつからさ」

「んー」

「・・・全然聞いてねえ・・・仕方ねえなー」

肩をすくめたミストレルが台所に消えた後。

「こんにちはー！ファッツさんいらっしやいますかー！」

と、元気の良い声が事務所の入口から室内に響き渡った。

びくりとしたファッツが入り口を見ると、制服姿の少女が立っていた。

「な、なんだなんだ？」

「あ、居たー！」

「なんだ、舞ちゃんか。どうした？」

「もー！ちゃん付けは止めてっってお願ひしたじやないー！」
舞。

元艦娘の舞風であるが、この街では珍しく脱走兵ではない。

正規の解体を経て普通の人間となり、そして警察官になった。

解体時に人間になる事を希望した艦娘達は、再生プログラムに基づいて戸籍と職を与えられる。

なぜか。

彼女達は見た目に反してそれなりの年数を生きている為、一般常識は身についている。

そして養子縁組にも限界があることから、基本的に働いて独立するよう言われるのである。

舞は警察官採用試験を自力でパスした、れっきとした警察官であ

る。

しかし、艦娘から人間になって2年しか経っていない為、艦娘時代とほとんど容姿が変わらない。

それが何を意味するかというと、

中学生が警官の制服を着てるようにしか見えない。

当初は普通の人間の町の警察署に配属となったが、ミニパトの隣で交通整理をしていたのに、

「こおらー！子供が何を悪戯しておるか！」

とおじいさんから叱られ、慌てて警察手帳の写真入り身分証を見せたにも関わらず

「ちよこざいな小細工しおってからにー！どこの中学だ！」

と、全く信じてもらえなかったという悲しい逸話を持つ。

舞が悪いわけではないのだが、「警官らしく」見えるまでは人の少ない所でという事になった。

そこで（人間の）人口が少ないこの町の警察に転属となったのである。

この町では艦娘や深海棲艦（の逃亡兵）が沢山居るので、舞はあっさり受け入れられた。

ゆえに舞もこの町を気に入っているが、子ども扱いされる事はすっかりトラウマになっていた。

第33話

ぷつくりと頬を膨らませる舞に、ファッツは苦笑しながら手を振った。

「ごめんごめん。ちょっと考え事をしてたんだよ。ところで何か用事かい?」

「あ、そうだった。えつと、何でも屋さんはまだやってますか?」

「へ? あ、ああ、手の空いてる時にな」

「・・・つかぬ事を伺いますが」

「何だい?」

「あの・・・MTの運転免許をお持ちですか?」

「持つてるぞ。トラックの限定解除もしてある」

「実はうちの署で、誰もMT免許を持ってない事が判明しまして」

ファッツは呆気に取られた。時代って奴か。

「はあ」

「それでその、MTの護送車を駐車場から署の玄関まで動かして欲しいのです」

「敷地内なら免許無くても良いんじゃないの?」

「・・・ほっそい公道を一本隔ててるんです」

「・・・あー、まー、確かにそうか。でもあれくらい・・・」

「オフの時だったらそれで良いんですけど、一応公務なので・・・」

「この町でそんな細かい事をとやかく言う奴居ないだろ」

「なんでも海軍の方がいらっしやるそうで、間違いがあってはいけないと」

「ふーん・・・いつ?」

「明後日の午前中にお願いたいです」

護送車、海軍、明後日。

ファッツの頭の中で点と点が線で繋がっていく。

「・・・あ」

舞は心配そうに覗き込む。

「ご都合悪いですか？」

ファッツは超高速でプランを立てながらいった。

「い、いや、いや・いやいや・ええと、お、俺もMT久しぶりでな」
「ですよー」

「だから明日の午後、ちよつと練習しにいつて良いかな？」

舞はこくこくと頷いた。

「勿論です！じゃあビットさんにもその時来てもらおうかなあ」

「ん？ビット？」

「はい。全然動かしてなかったんで、使う前に点検してもらおうって
事になって」

「ほう・ほうほう・ほうほうほう」

「点検して頂いて、ファッツさんが運転練習して、翌日本番。準備万端
ですねー」

「間に合うかな・・・」

「え？何の話ですか？」

「ああいや、こつちの仕事の話。じゃあ明日の午後、2時位で良いか
？」

「わかりましたー！じゃあ署で声かけてくださいねー！」

「はいよ」

「助かります！じゃあよろしくお願いしまーす！」

去っていく舞の後姿を見ながら、ファッツはぺこりと頭を下げた。

立役者の舞にも迷惑をかけないようにしなければ。

そこにベレーがひよこつと顔を覗かせた。

「ファッツさん、お話終わりましたか？」

「終わったよ」

「じゃあ晩御飯の配膳始めますね」

「今日は何だ？」

「ポトフです」

「・・・5人分、あるか？」

ベレーはきよとんとした後、

「大丈夫だと・・・思います。どなたかいらつしやるんですか？」

「テッドとナタリアにも来てもらおうと思うんだ」
ベレーの顔がパツと明るくなった。

「という事は、何か思いつかれたのですね！」

「うん。まだ整理の途中だが、行ける筈だ」

「解りました！5人分用意します！」

「俺の差配を蹴っ飛ばすんだ、良い案なんだろうなファッツ？」

「あたしが急かしたからって早過ぎない？ちよつと心配なんだけど・・・」

事務所を訪ねてきた2人は素直にそう言った。

ファッツは席を勧めながら言った。

「正直、まだ固め切れてない。だから細部を相談したいんだ」

テッドはポトフに目を細め、早速スプーンを取りながら頷いた。

「まあその方が俺も心配は少ないな。さっさとまとめちまおう。頂くぜ」

夕食後も2時間ほど3人は討論を重ねた後、ファッツのBMWに乗ってどこかへと消えた。

疲れた様子でファッツが戻ってきたのは真夜中に近かったという。

翌日。

署の交通課で舞の姿を見つけたファッツは声をかけた。

「舞、来たぞ」

しかし、舞の表情は優れなかった。

「あ、ファッツさん・・・それが・・・」

「どうした？」

「護送車、まだ修理中なんです」

「おや」

「ビットさんが工場でないと言わないで仰って、まだ戻ってきてなくて・・・ごめんなさい」

「そうか」

ファッツは時計を見た。

14時10分。

・・・13時55分までには返してくれる筈なんだが、本当に壊れて

たか？

舞はしゅんとした顔でファッツに言った。

「なので、申し訳無いのですけど戻ったらお呼びしますので、それで良いでしょうか」

「構わないよ。無理を言ってるのはごっちゃだから。それじゃ」

ファッツはそういつて踵を返した。

舞から電話があったのは16時を過ぎてからだった。

再び訪ねたファッツに舞はぺこりと頭を下げた。

「お待たせいたしましたー！本当にすいませんー！」

「いやいや、全然構わないよ。じゃあちよつと駐車場内を回らせてもらおうよ」

「はい。あ、ビットさんから、まさかの重ステだから気をつけて、どの事でした」

「うげ」

「重ステって何ですか？」

「あー・・・知らないか」

「はい」

「まあハンドル切るのに物凄く力が必要って事だよ」

「古い車ですからねえ。じゃあこれ、鍵です！」

「うん」

鍵を渡した舞が、そつと上目遣いでファッツを見た。

「それでその・・・今回の御代はお幾らでございましょうか・・・」

ファッツは顎に手をやりながら言った。

「まあ・・・最短の15分もかからんだろうし・・・税込1200コインでどこか」

「ほんとですか！ありがとうございます！助かります！」

「何でそんなに喜んでるの？」

「諸雑費は2500コイン超えると経理課に説明が要るので「きつついな」

「他県だともうちよつと緩い所もあるみたいなんですけどね」

「じゃ、請求書は明日持ってくるよ」

「わかりましたー！」

そしてファッツは駐車場で

「うお・・・これは・・・本当に重ステ・・・だ・・・」

と、額に汗しながら1時間ほど練習したのである。

そして翌日、すなわち移送の日を迎えたのである。

第34話

移送当日、11時半頃。

「オーライ、オーライ、はい！良いですー！」

ガタガタと中折れ式のドアを開けてファッツが降りてきた。

「助かった、ありがとう。護送車がここまで後ろが見えないとは予想外だった」

「誘導くらいお安い御用です！」

「じゃあこれ、1200コインの請求書ね」

「はい！すぐお持ちしますね！」

舞が署内に入って行った後、ファッツは護送車を振り返った。

「・・・よし」

そして正午過ぎ。

蛇又は乗っていたミニバンの揺れの違いに気づき、目を覚ました。

隣席に座る部下が小さく、目的地である警察署に着いた事を囁いた。

「ん・・・解った」

また後味の悪い仕事が始まると、蛇又は顔をしかめた。

深海棲艦を捕縛した場合、大本営内の881研本部ではなく、山奥の研究所に連行される。

それは深海棲艦が暴れても被害の無い所で人間に化ける仕組みや機装に関する解析作業を行う為とされていた。

しかし、それは名目で、実際は深海棲艦に様々な生体実験をしてなぶり殺しにしているだけである。

想像を絶する深海棲艦達の悲痛な叫び声と、狂気に満ちた研究主任の笑い声。

たまたま忘れ物を取りに戻った蛇又を未だに悪夢へと誘う程の惨状だった。

・・・哀れな生贄と命を弄ぶ悪魔。

あの光景を他に表現する言葉が見つからない。研究主任の猟奇的な趣味なんじゃないかとさえ思う。

班の部下には誰にもこの事を知らせていない。任務遂行に著しく影響すると判断したからだ。

だが、自分は知っている。いや、知ってしまった。

また、あの犠牲となる者を連れて行くのか。

自分が悪魔の手先となるような感覚。

それは蛇又に酷い罪悪感となつてのしかかっていた。

「はあ」

重い溜息をつくとき、蛇又は入口に止まる護送車をちらりと見た。

今日は2人・いや、2体だ2体。2人と考えたらとてもやりきれない。

「公安の柵沢です。護送車に乗せるまでご同行します」

蛇又が声のした方を振り向くと、スーツを着た若い男が敬礼していた。

「・・・ああ、よろしく頼む」

「深海棲艦が人に化けるなんて、全くふてぶてしいですね。悪魔どもめ」

蛇又は無言のまま、柵沢をじとりと一瞥した。

海軍にそれ以上の悪魔がいると言つてやったらこの若造はどういう反応を返すのだろう。

・・・到底言えないがな。

自分が余計な一言を言つたと気づいた柵沢は、それからは黙つていた。

「すみませーん、お待たせしましたー!」

署から駆け出てきた舞に慌てなくて良いと蛇又は手を振つた。

舞のはつらつとした声は自分の頭の中のもやを追い払ってくれるかのように感じた。

「会議室にご案内します。こちらへどうぞ!」

「うむ・・・ありがとう」

署内に入った一行は、程なく会議室へと通された。

舞が出て行ったのと入れ替わるように、別の婦警が盆に茶を載せてきた。

「失礼しまーす、手続きにもう少し時間がかかるので、お茶どうぞ！」
「ん・・ありがとうございます」

「はい」

先程案内した婦警といい、この子といい、随分若い子が勤務しているのだな。

蛇又はそう思いつつ茶をすすったが、その苦さに眉をひそめた。
何分置いといたんだ。苦すぎて味も解らないし、ぬるくなってるじゃないか。

部下達も2く3口啜っただけですぐに机の上に茶碗を置いている。

この任務の苦さを暗示してるかのようだと蛇又は思った。

留置場から出てきた二人は20代くらいの若い女性の姿であり、明らかに怯えていた。

どこまで知っているのか知る由もないが、間違いなく想像以上に酷い所へ連行される。

蛇又の表情が再び暗くなった。

「・・引渡し手続きは以上です。では私はこちらで失礼します」

「お疲れ様」

柵沢がパトカーで去っていくと、蛇又は署員に一礼して護送車に乗り込んだ。

護送車の施錠エリアには、先程の女性、いや、深海棲艦が2体、肩を寄せ合って隅のほうに座っていた。

「・・出発だ」

蛇又の声を合図に、運転席の部下がエンジンをかける。

年代物のディーゼルエンジンは車体をぶるっと震わせた。

こうして護送車と黒のミニバンはゆっくりと警察署を後にした。

それは、町外れに差し掛かった時だった。

車の流れが急速に下がりだし、やがて止まったままとなった。

助手席に居た部下が蛇又に声をかけた。

「班長、事故のようです」

「ん？」

蛇又が進行方向を見ると、先が渋滞している。その先では大型ト
レーラーが道路を塞いでいる。

スリップしたのか、トレーラーヘッドは路肩で大きく傾いていた。
蛇又は舌打ちした。

あれはどかすのに時間がかかるだろう。面倒な事になった。

その時、深海棲艦達を監視していた部下が蛇又に耳打ちした。

「あ、あの、そのコンビニに寄れないでしょうか」
「どうした？」

「その、トイレに行きたくなりまして・・・渋滞も長引きそうですし」
言われて意識した為か、蛇又も少し尿意が来た。

ちらりと道の先を見ると、最寄の店がそれしかない事もあり、コン
ビニの駐車場は混みつつあった。

トレーラーが動く気配は感じられない。

「・・・やむをえん。行くか」

無線でミニバンにコンビニに入る事を告げると、2台は道を逸れ
た。

ミニバンはたまたま店の正面で空いていた駐車スペースに滑り込
んだが、護送車はトラックだ。

普通車の駐車スペースには入れないので、コンビニの裏手にある大
型車専用スペースへと駐車した。

本来ならミニバンと護送車は隣接して止まるが、これだけ混んでい
るとそうも言えなかったのである。

護送車の隣のスペースには派手な色の幼稚園バスが止まっていた。
一瞬、幼稚園バスを見て違和感を感じた蛇又だったが、部下の視線
を感じて考えるのを止めた。

「うむ、急を要する者から行ってよし。私は残ろう」
「といったのだが、部下達は

「すみません！」

と、弾かれるように全員出て行ってしまった。

蛇又は呆気にとられた。

普通は交代で行くものだし、それが解らぬ部下でもない。

よほど切羽詰っていたのか。止まって正解だったな。

第35話

エンジンの切られた静かな車内には、蛇又と深海棲艦の2人だけが残された。

2分・・3分・

部下達が戻ってくる様子は無い。

外から小鳥のさえずりが聞こえてくる。

蛇又は何気なく深海棲艦達を見た。

視線に気づいたのか、2体は蛇又をそつと見返した。

・・もしこの深海棲艦が凶暴な存在なら、この隙を突いて俺を攻撃し、逃げる事も出来るだろう。

そうしないという事は、危険性は無いという事じゃないのか。

蛇又は口を開きかけて、閉じた。

言葉を交わす事は、踏み込んではない領域のような気がしたからだ。

だが、それは長年の疑問でもあり、ついに蛇又は口を開いた。

「お前達は・・地上で何がしたかったんだ？」

2体は互いに顔を見合わせ、そつと答えた。

「・・誰とも戦わず、ひっそりと生きていきたかったんです」

「もう、戦うのも、血の海も、見たくなかったんです」

「・・そうか・・そうだな。気持ちちは解る」

聞かなければ良かったと、蛇又は思った。

この二体が口にした事は真実だと、自分の勘は告げていた。

二体は住んでいた町で何一つ犯罪を犯していなかったし、真面目に会社で働いていたのだ。

「お前達を連れて行くのは、心苦しいよ」

思わず口について、そんな一言が漏れてしまった。

「えっ・・」

「あの・・」

きよんとする二人の視線に耐え切れず、蛇又は窓の外へと視線を

逸らした。

・・・それにしても、部下が誰一人として帰ってこない。

蛇又はじわりと汗をかいていた。

自分も予想以上に尿意が大きくなっている。

誰か一人でも帰ってきてくれたら、すぐにでも飛び出したい。

足をとんとんと踏み鳴らし、頭をかき、きよろきよろと首を回す。

・・・来ない。

そろそろ我慢の限界だという時、2体がそつと声をかけてきた。

「あの・・・大丈夫ですか？すごい汗ですよ」

「ん・・・いや、その」

「お顔の色が優れませんけど、どこか具合が悪いのですか？」

蛇又はその時、なにかがふつつりと切れた。

これから酷い目に遭う子達から、その場所に連れて行く自分が心配されている。

蛇又は初めて、職場を少しだけ放棄した。

その優しさに触れている事が、あまりにもいたたまれなくなったのである。

護送車から転がり出るように降りると、コンビニの店内に向かって行った。

「!？」

蛇又はそこで、部下が帰ってこない理由を理解した。

まだ列の中ほどで並んでいたのである。

コンビニの1箇所しかないトイレは、先に乗りつけた車のドライバーや同乗者が列を成していた。

「・・・おお・・・」

並んでいる部下の顔色は真っ青で、既に虚ろな目をしている。

一般市民の前で醜態を晒すわけにはいかない。

蛇又はとつさに軍の所属証を取り出すと、コンビニの店員に見せた。

「すまない。海軍の者だがどうしても至急、用を足したい。何か策は無いか？」

コンビニの店員は蛇又だけに聞こえるよう、そつとレジ後ろの扉を指差しながら言った。

「あのドアの裏に事務所があつて、その奥に従業員用のトイレがあります。どうぞお使いください」

「すまん。恩に着る」

蛇又は目立たぬよう部下を連れてくると、一目散に事務所へと駆け込んだ。

「あ、危なかつたです」

「班長のおかげで助かりました」

「全員スツキリしたか？」

「はいー」

蛇又は時計を見た。5分も全員で席を外してしまった。

「俺は先に戻るから買い物を済ませたら戻ってこい…あー、少し多めに買ってやれ。な？」

「解りましたー」

コンビニを出た蛇又が表通りを見ると、道を塞いでいたトレーラーが走り去る所だった。

多少側面が凹んでいるものの、どうやら自力で道路に戻れたらしい。

良かった。このぐらいのタイムロスなら影響はないだろう。

ほつとしつつコンビニの裏に戻ると、隣の幼稚園バスは居なくなつていた。

「…ふむ」

幼稚園バスの運転手も用を足せたのだろうか。

そう思いながら護送車の扉を開けると、室内はムツとするくらい暑くなつていた。

その奥で二人が相変わらず小さく座っているのが見えた。

「すまなかつた。暑かつたか？」

蛇又はそう二体に声をかけたが、ぐったりした様子で返事はなかつた。

熱中症になつたか？

そう考えかけて、蛇又は苦笑いをした。

「深海棲艦が熱中症だとして、どうやって助けてやれば良いんだ？」

そもそも助けても拷問で死ぬまで苦しむのだから、いつそ熱中症で死んだ方がマシなのではないか。

その時、部下がどやどやと帰ってきたので思考を中断して部下に言った。

「長居をしてしまった。出発するぞ」

その日の夕方。

「蛇又班長・・・どういう事ですか」

「思い当たるタイミングはあるが、手段も相手も解らん」

ようやく研究所に辿り着いた一行は、施錠エリアに立ち入って初めて気がついた。

連行した2体だと思っていたのは精巧な、しかも小さく身動きをする機能があるマネキンだった。

確かに我々は5分ほど護送車を空けてしまった。

しかし、車自体も施錠し、施錠区画の錠は鍵無しで5分やそこらで開けられるような代物ではない。

だからこそその油断だったが、一体どうやったのだろう。

「蛇又班長・・・何がおかしいんです？」

研究主任が苦々しげにそう言い放った時、蛇又は自分が微笑んでいる事に気がついた。

・・・ああ、そうか。

蛇又は理解した。

自分は深海棲艦が、この研究所に来なくて済んだ事を喜んでいるんだと。

艦娘の為の兵装や艦装開発をし、人類最後の砦になっている881研は自分にとって誇りだ。

だが、無意味に深海棲艦をいたぶるだけの881研は忌むべきものだったのだ、と。

「本件は所長に報告します。良いですね！」

「この間の装填ミスと相殺出来ると良いな、主任」

「・・・くっ！」

主任が怒気を含んだ足取りで去っていった後も、蛇又は微笑んだままだった。

部下達が護送車を搜索する様子を眺めていたが、ふと、空に2つ並んだ星を見つけた。

「・・・うまく、逃げろよ」

蛇又はそう呟くと、自らの身を案じてくれた二人の表情を思い浮かべた。

懐からタバコを取り出し、火をつける。

吸い込んだ紫煙は旨かった。

吐き出し、次を吸い込むと、頭の中で護送中の光景が思い起こされた。

そして、吸い終える頃、ハツとした表情になった蛇又は

「・・・ああ、ああ、なるほど、そうか」

と、一人くすくす笑い出した。

第36話

数日後。

「かんぱーい！」

「いえーい！」

「お疲れっ！」

ガシャガシャとグラス同士がぶつかり合い、中身がこぼれるも気にする者は居ない。

ここは夕島整備工場の裏手にある資材置き場である。

ドラム缶を割って作られたバーベキューコンロの中では大量の炭が赤々と燃えている。

その上にある金網には肉や野菜が溢れんばかりに乗せられていた。

コンロを囲んでいるのはファッツ、ミストレル、ベレー、ワルキューレの4人、ビット、アイウイ、そしてテッドである。

無事2人を国外へと逃がし終えた祝勝会というわけである。

ビットがソーセージを箸でつまみながらニコツと笑った。

「いやー、それにしてもここまで上手く行くとはねえ」

ファッツが頷いた。

「成功要因の一つはアイウイの名演技だな」

アイウイがニツと笑う。

「利尿剤入りのお茶どうぞ！」

ナタリアが肩をすくめる。

「あっけなすぎすぎて拍子抜けしたわよ」

ファッツが首を振る。

「そんな事は無い。ナタリアが居ると解っていたから俺達は落ち着いて迷彩を剥がせたしな」

ファッツが考えたカラクリは、このようなものであった。

まず移送前日、ビット達が護送車に故障箇所があると言って整備工場に引き取る。

整備工場で内外装全て複製した偽の護送車を作成し、周囲をすぐ剥がせるシールで覆って幼稚園バスに偽装した。

車内には予め二人のマネキンを座らせ、シートベルトで固定しておいた。

もちろん、護送車の全ての鍵を複製してから警察に返したのだが、この鍵の複製に手間取り、返却が遅れたのである。

「セキュリティチップ付きの鍵をつける前にパワステつけなさいよね！本気で壊れてるのかと思ったじゃない！」

とはビットの談である。

そして、移送当日の今日。

ファッツは警察署で本物の護送車を正門前に移動するが、わざと下手に振舞って立番の舞を手伝わせた。

その間に婦警の格好をしたアイウイが署内に忍び込み、利尿剤入りの茶を盆に載せて給湯室で待機。

蛇又達が舞に会議室へと案内された後、アイウイは入れ替わるように会議室へと入り、茶を振舞う。

そのまま警察署を脱し、少し離れた所で待っていたビットの軽トラで工場へと戻った。

一方、ファッツはミストレル達と幼稚園バスに扮した偽の護送車をコンビニ裏へと移動し、そのまま待機。

時を同じくしてコンビニの前の道路でナタリアがわざとトレーラーを蛇行運転し、事故を装って道を塞ぐ。

トレーラーヘッドは路肩の段差に少し乗り上げ、傍目に大きく傾いているように見える。

そのままトレーラー部分に乗り込み、部下3人と共に有事に備えてスタンバイしておく。

本物の護送車から蛇又達が全員出て行った事を確認したファッツ達は偽の護送車から幼稚園バスのシールを剥がす。

偽の護送車を本物の護送車の位置へと入れ替え、ファッツ達は本物の護送車で元来た道を町の港へと舞い戻る。

ファッツ達が走り去ったのを確認し、ナタリアが再びトレーラーを動かして道路封鎖を解除する。

港に連れられた二人は程なく合流したナタリア達が護衛し、タイの

地上組の元へと身を寄せた。

これがかいつまんだ顛末である。

ふと思いつ出したように、ナタリアがファッツに訊ねた。

「ねえファッツ」

「ん？」

「タイに行く途中で、あの子達が蛇又班長が処罰されるんじゃないかって心配してたのよ」

「なんでまた」

「蛇又班長がね、あの子達の言い分を聞いて、連れて行くのは心苦しいと言ったらしいわ」

「へえ・・・」

「あの子達はその一言で救われた、だから処罰されて欲しくないってね」

「そうか・・・」

ファッツはフライドポテトをつまみながら答えた。

「蛇又班長が処罰される事は無いと思うがなあ」

「どうして？」

「蛇又班長は881研の色々な事を知ってる。表から裏までね」
「・・・」

「彼をクビにして世間に暴露されるリスクを負う位なら、何も無かつた事にする方が881研は安泰だ」

「実験台にされるんじゃない？」

「俺達Deadline Deliverersとの交渉を始め、彼しか知らない事は多い。簡単に用済みに出来る人じゃないよ」

「へー」

「だから心配しなくて良いと思うがな」

テッドが葉巻に火をつけながら言った。

「ファッツの言う事を補強するわけじゃねえが、その蛇又さんから今日も依頼が入ったぜ」

「早速か。忙しいことだな」

「ああ。内容的にはスターペンデュラムでもこなせるが、引き受ける

かファッツ?」

「うーん・・・藪蛇にならんかな」

「まあとにかく、蛇又のダンナは元気だつてこつた」

ナタリアはにこつと笑った。

「じゃあ地上組を通じてあの子達にも伝えとくわ。きつと喜ぶから」

翌日。

「早速ですが、輸送条件から伺いましょう」

車から降りてきたファッツに、蛇又は淡々と答えた。

「今日はお嬢さんは居ないのか?」

「別件がありました」

本当はそんな用件などないのだが、ミストレルが口を滑らせる事を懸念しての用心であった。

「条件はいつも通りだ。水濡れ厳禁、開けるべからず。ああ、今回は気圧が変わっても問題ないぞ」

「大きさも重さも規定内ですか?」

「そうなるな」

「じゃあ割増は無しですね」

「いつもいつも割増では予算が底をつくからな」

「なるほど。行き先は」

「九州南方の鎮守府だ。詳細はこの海図にある」

「解りました」

蛇又がくいつと顎をしゃくると、部下達はミニバンに戻つていった。

ファッツが怪訝な顔で見返す。

「・・・他に、何か?」

蛇又は黙つてタバコに火をつけ、1度大きく吸い込んだ。

そして啞えタバコを挟みつつ口を手で覆いながら、ファッツに囁いた。

「・・幼稚園バスの側面に描くならリアルなライオンやワニの絵は止めとけ。子供が怖がるからな」

「！」

「・・・二人によろしくな」

ファッツはサングラスの上から覗き見るように蛇又を見た。

蛇又はニツと笑うとタバコの火を消し、そのままミニバンへと戻っていった。

ミニバンが走り去った後、ファッツは置かれたスーツケースの脇にどざりと腰を下ろした。

「・・・お見通しだが認めるってことか。やれやれだ」

ファッツは内ポケットを探る自らの手に気づいて苦笑した。

司令官を辞めた時に禁煙したのに、まだこういう時に癖が出てしまう。

「んー、テッドとナタリアには言っておくか」

重たいスーツケースをトランクに押し込むと、ファッツはBMWの運転席に戻った。

体が鉛のように重いのに、なぜか気分は晴れやかだった。

「よし、ギャラの為に頑張りますか」

ファッツはそう呟くと、BMWのエンジンをかけ、発進しようとした。

その途端。

ポーン！

BMWオーナーにとって最も聞きたくない音と共に、インパネに英語のメッセージが表示された。

ファッツはブレーキを踏みつけて唸った。

「ああくそ、今度は何処が壊れやがった！」

だが良く見ると、メッセージはトランクが半ドアになっている事を示す警告だった。

「故障と警告を一緒の音で脅すのは勘弁してくれ：どいつもこいつも俺の心臓と胃に悪すぎる」

大きく息を吐くと、ファッツはトランクを閉めに車を降りたのである。

第37話

「・・・んー」

ファッツはふと、目が覚めた。

カーテンからは薄日が差し込んでおり、枕元の時計は午前7時を指している。

いつもより少し寝過ぎした。

まあ良いかと身を起こしながら思う。

テッドからの依頼対応は昨夜で終わったし、今日は特にやる事も無い。

とはいえ、ダラけると仕事の時に力が出せなくなる。

依頼のない時の過ごし方は自由だが実は大切なのだ。

「よし」

ベッドから起きると、ファッツは勢いよくカーテンを開けた。

こんな朝は凝ったメニューにするのも悪くないだろう。

同じ頃。

ベレーは自転車に乗って売りに来る牛乳屋と会話していた。

「おはようございます」

「おはようベレーちゃん、いつも通りで良いのかい？」

「はい。牛乳500ccと卵3つ・・・あ、バターもありませんか？」

牛乳屋は籠を探るとニツと笑った。

「運が良いな。ほら、バター。これが最後の1つだ」

「良かった。最近本当に買えなくなりましたね」

牛乳屋の表情が曇る。

「なんでもかんでも軍が召し上げちまうからな。市民を植物と勘違いしてやがる」

「今、酪農すれば儲かりますか？」

牛乳屋は首を振った。

「需要は沢山あるが、家畜の餌も農機具の燃料も何もかも無い。あるいは売値で回収出来ないくらい高い」

「そうですか・・・」

「戦時下にしちや良い方かもしれんが、刻一刻と悪化してる」
「・・・」

「ま、ベレーちゃんのせいじゃないよ」

「・・・えっと、お幾らですか?」

「900コインだ」

「・・・はい、ちようどです」

「まいどあり。じゃあな!」

「ありがとうございます」

牛乳屋がキコキコと自転車で走り去るのを見送った後、ベレーは籠の中を覗き込んだ。

自分は食事をしなくても海水から生命を維持するシステムを持っている。

だがファツゾやミストレルはそういう仕組みを持ってない。

「貴重なご飯・・・私が食べても良いのかな・・・」

「・・・どうしたベレー?」

食卓を囲んだ3人は朝食を食べ始めたが、ファツゾはベレーの様子がおかしい事に気がついた。

ベレーがフォークを取らず、じつと皿の料理を悲しげに見ていたからだ。

声をかけられたのでベレーはハツとしたようにファツゾを見た。

「その・・・あの・・・ええと・・・」

「気持ち悪いのか? 艤装の調子が悪いのか? どこか痛いのか? 何か嫌な事を思い出したのか?」

ミストレルは口の中の物を飲み込むと言った。

「ファツゾ、そんなにせつついたら答えを返す暇がねえよ・・・ベレー、なんか悩んでんだろ?」

「あつ・・・解り・・・ますか?」

「まあなんとなくな。で、何を心配してんだよ」

ベレーはちらりとミストレルを見た後、俯いてポツリと言った。

「私まで、こんなに美味しいご飯を頂いて良いのでしょうか?」

ファッツとミストレルが同時に首を傾げた。

「は？」

「なんで？」

ベレーは俯いたまま呟いた。

「今朝、牛乳屋さんから、物がどんどん無くなっていると聞きました」

「・・・まあなあ」

「牛乳屋さんだけじゃなくて、スーパーも空の棚が多くありますし」

「もう何十年も前からだけどな」

「お値段もちよつとずつ上がってますし」

「・・・」

「わ、私は、海水があればご飯を食べなくても生きていけます」

「・・・」

「それなのに、他の誰かが食べられた筈のご飯を食べてしまつて良いのかな・・・って」

「良いさ」

ファッツが即答したので、ベレーは思わずファッツを見た。

「・・・えっ？」

「あまりにも多過ぎて見えにくいのが、食うつてのは、食う資格がある奴が得られる特権だ」

「・・・」

「その資格とは何だと思う？ベレー」

「・・・食べないと死んじゃう方ではないのですか？」

「違うな。正解は、そいつが必要とされてるかどうかだ」

「・・・必要・・・」

「そうだ。ミストレルやベレーは俺やテッド、その後ろに居る沢山の依頼者に必要とされてる」

ファッツの横で、ミストレルは黙ってコーヒーを啜っていた。

ベレーはじつとファッツの話を聞いている。

「・・・」

「昔から言う、働かざるもの食うべからずつてのは、文字通りそういう意味なんだ」

「で、でも私は、深海棲艦で、深海棲艦は皆が困ってる戦争を引き起こしている原因ですし」

「んー、今言った事、深海棲艦って単語をドイツと置き換えてみるといい」

「・・・」

「ベレーがドイツ人で、世界がドイツと戦争してるとして、何でベレー個人が責任を負わなきゃならん？」

「・・・」

「ましてやベレーは輸送任務や家事をしてくれている。十分俺達の役に立ってる必要な存在だ」

「・・・」

「もう一つ」

「？」

「こんなちっぽけな会社だが、俺は経営者で、ベレーは従業員だ」

「・・・」

「経営者は従業員が満足しているか考えるのは当然の事で、そこには食事も含まれる」

「いつもとても大事にして頂いているのは解りますし、ありがたい事なんですけど・・・」

「うーん・・・」

一向に浮かぬ顔のベレーを見てファッツが困った顔をした時、ミストレルが口を開いた。

「なあベレー」

「はい」

「その朝飯はさ、ファッツがベレーに旨えなって食って欲しいっていう気持ちで作ったもんだ」

「・・・」

「少なくとも、ベレーがその朝飯を食わなかった所で誰一人救えねえし、優しきことゴミになっちまう」

「・・・はい」

「この世は元々、アタシ達がどうにも出来ねえ所から、理不尽で、不平

等で、無茶苦茶で、仕方ねえんだ」

「・・・」

「ベレー、こつち見ろ」

ミストレルを見返したベレーは目に涙を一杯貯めていた。

「お前はきちんと食って、食った分だけ周りを良くする方向に動け」

「・・・周り」

「ああ。この世の全部を背負ったら何も出来ずに潰れるだけだ。自分
が出来る事を考えな」

「・・・」

「それがファッツの優しさがベレーの行動に繋がっていくってことだ
ろ」

「・・・つながる」

「まずは自分や大事な奴、余裕が出来たらその周囲。世の中を変える
なんてのはやれる奴がやれば良い」

「・・・」

「少なくとも今のお前がすべき事は世を憂いてファッツの気持ちをゴ
ミ箱に放り込む事じゃねえ」

「・・・」

「だからお前はまずその朝飯を食いな。お前に食べてもらう為に作ら
れたんだから」

「・・・」

「・・・解ったか？」

「・・・はい」

ベレーはそつと席を立つと、ミストレルにきゅつと抱きついてすす
り泣いた。

ミストレルは黙ったまま、ぐいぐいとベレーの頭を撫でた。

「お前は考えすぎだぜ」

「・・・はい・・・はい」

食べ終えたファッツはミストレルに目配せして席を立った。

こういう時、男の説得力って奴は無力だなと思いつつながら。

第38話

少し後。

「へ？私ができる事が何かって・・・何？」

「あ、いえ、すいません、変な事聞いちゃって」

「随分深刻そうだけど、なんでそんな事知りたいのか聞いても良いかしら？」

朝食を食べた後、ベレーはファツヅに送られて夕島整備工場に来ていた。

今日はハウスキーピングのアルバイトをする日である。

最初は不慣れなものとゴミの多さに呆然とする事も多かったが、次第に慣れていった。

ところが今日は箒を手にしたまま悲しげな目をしてじっと立っているばかり。

心配したアイウイは自分達も休憩するからと言い、ベレーをお茶に誘ったのである。

そして思い詰めた顔でベレーがアイウイに訊ねた返事が冒頭の内容である。

ビットに促される形で、ベレーは今朝の顛末をポツリポツリと話した。

話し終えたとき、それまで黙って聞いていたアイウイが頬杖をついたまま言った。

「ベレーちゃんが悩む理由がさっぱり解んないなー」

「そう、ですか？」

「だって戦争するぞって決めたのベレーちゃん？」

「いつ、いえ、私はそんな事決められません」

「ベレーちゃんが戦争続ける事にしたの？」

「・・・違います」

「ベレーちゃんが一人でバター買い占めてるの？」

「け、今朝、最後の1つを売って頂きました」

「それは自分だけで食べるため？」

「い、いえ、ミストレルさんにあつたら買つといて頼まれていたの
で・・・」

「それでなんでベレーちゃんが悩まなきやいけないの？」

「・・・」

ビットがふふつと笑った。

「ベレーちゃんて艦娘から深海棲艦になっちゃったクチ？」

「はい」

「元艦はなんだつたか覚えてる？」

「U-511、です」

「なるほどねー」

ベレーはそつと、ビットのほうを向いた。

「えつと、どういう、事でしようか？」

「アタシ達がずっと前に鎮守府で働いてた時にもユーちゃんが居た
の」

「・・・」

「その子も本当に考えこむ癖があつて、いっつも難しい顔してたのよ
ね」

「・・・」

「司令官にその事を言ったら資料を見せてくれたの」

「・・・資料？」

「艦娘の生まれもつた基礎的な傾向は、実ほどの鎮守府で建造されて
も一緒なの」

「・・・」

「生活する事で行動パターンや性格は育っていくけど、基礎的な傾向
は艦の影響が大きいのよ」

「・・・」

「ユーちゃんの場合は、特に深く考える傾向が強い。1を以つて10
を知る才女タイプとも言えるわね」

「・・・」

「ちなみに夕張の場合は好奇心が強くて技術ネタに目が無いらしいん

「だけど、私は普通だから例外かしらね」

アイウイが黙ってテーブルの上に無造作に置いてあった

「週間軽金属 特集：アルミの金属疲労」

「電子工作技法 半田ごての極意」

「月間建造技術 巡洋艦のオーバーホール」

の3冊を手に取り、ビットに見せた。

ビットはきよとんとして首を傾げると、

「え？それがなに？」

と言った。

溜息を吐きながらアイウイはベレーに言った。

「・・・自分の事って案外見えてないんだよ、ベレーちゃん」

ベレーが深く頷いた。

「・・・認めざるを得ません」

ビットが眉をひそめた。

「そんなの一般的な雑誌じゃない。趣味用にNC旋盤持つてる夕張とか居るんだからね！」

アイウイが反論した。

「上を見すぎ！そもそも整備士の仕事してる時点で十分マニアックだよ！」

「だって仕事しなきゃ食べていけないでしょ」

「うー」

ビットは軽く両腕を上げた。

「まあそれは置いといて、ユーちゃんを迎えた司令官に対する注意事項があった」

ベレーが不安げにビットを見た。

「注意・・・事項？」

「とつても色々な事で悩むから、僚艦か司令官がちゃんと聞いてあげて、ってね」

「・・・聞かないと、どう、なるんですか？」

「んー・・・」

ビットは少し言いよどんだが、先を促すベレーの視線にふうと溜息

をつぎ、

「自殺の確率が飛躍的に上がるそうよ」

「……あ」

ビットのその言葉を聞いた時、ベレーの頭の中で線が繋がった。きゆるきゆると記憶が高速で逆再生されていく。

最後の戦いで深海棲艦の軽巡と目があい、轟沈させられたこと。

皆が進軍していく中、艦装が動かず取り残されていく自分。

直前の戦いで皆が無傷な中、自分一人大破した事が言えなかったこと。

戦いに向けて海域を進んでいく際の海中の様子、

司令官が好きだった葉巻の香り、

そして。

出撃前夜に司令官から「くだらない事をいつまでも悩むな」と叱られた事。

ごめん……なさい。ごめんなさい。

でも……ユーは……

「……ちゃん！……ベレーちゃん！」

ふと現実を引き戻され、目の焦点が合うと、アイウイとビットが心配そうに覗き込んでいた。

自分の肩を揺さぶっていたのはアイウイだった。

ビットが心配そうに話しかける。

「気がついた？ 私達の事解る？」

「……ビット、さん。アイウイ、さん」

「正解よ……って、どうしたの？」

ベレーの瞳からほろほろと零れ落ちる涙は、しばらく止まらなかった。

第39話

「・・・そうか」

ビット達から連絡を受けて駆けつけたファッツとミストレルは、今までの経緯を聞かされた。

ミストレルはベレーの隣に腰掛けると、肩をくっつけて話し始めた。

「ベレー」

「・・・はい」

「ビットはさ、深海棲艦になったきっかけを思い出しちまったんじやねえかって言うんだけどさ」

「・・・」

「アタシもさ、正直、軍ていうか、鎮守府生活にいい思い出はねえ」

「だからビットの見立てが正しかったとしても、聞き出すような真似はしない」

「ミストレル・・・さん」

「けどさ、もしベレーが話して、スッキリしちまいたいならいつでも聞^くぜ」

「・・・皆さんに・・・ご迷惑がかかるんじゃないでしょうか」

ファッツが頬を掻きながら言った。

「あー、俺は以前、司令官をクビになった話、二人にしたよな」

「はい」

ビットがにやりと笑った。

「私達も知ってるけどねー」

ファッツがぐきりとビットを見た。

「おい、何で知ってるんだよ」

「酔っ払ったテッドさんから聞いたわよ」

「あんのお喋り!」

「いーじゃない。私も気持ち解るし」

「なんでだよ」

「あれ？言ってなかったかしら。私が鎮守府追い出された理由」

「ああ。ミストレルは知ってるか？」

「いや」

ビットは軽い咳払いを一つすると、

「私は建造妖精の子達と一緒に、装備のメンテをする事が多かったのね」

「ほう」

「あの鎮守府は凄く入渠件数が多くてね、より早く効率的に修理するノウハウを覚えたかったの」

「・・・熱心だったんだな」

「それで、深夜に修理の仕方とかを復習したかったんだけど、練習用の艀装なんてない」

「まあそうだろうな」

「どうしようかなーって夜の波止場を歩いてたら、出会っちゃったのよね」

「・・・まさか」

「お察しの通り、傷ついた深海棲艦よ」

アイウイを除く全員が一齐に向いたので、ビットは小さく肩をすくめた。

「最初の子をちゃんと修理してあげたからか、波止場に深海棲艦達が並ぶようになったっちゃった」

「まあ・・・解らなくもないが・・・」

「で、私の方も何体も修理をこなした結果、幾つか発見があったの」

「まず、深海棲艦の艀装と艦娘のそれは基礎技術に共通点が多かった」

「更に言えば、深海棲艦、艦娘、それぞれ相手より秀でている部分があった」

「・・・」

「で、司令官が食料のやりくりが辛いつて溜息吐いてたから、ついば

ろつと言つちやったのよ」

「・・・何を？」

「深海棲艦が持つてる生命維持装置を皆の艦装に組み込みましょうかって」

「・・・あー」

「それで上を下への大騒ぎになって、波止場の件もバレちゃって」

「あー」

「ちよつとヤバイかなーって思ってたら島ちゃんが真夜中に荷物背負つてうちの部屋に来てさ」

「・・・」

「皆が寝てるうちに逃げようって言ってくれたの」

「・・・寝てたのか？」

「島ちゃん凄いのよ、夕食に睡眠薬盛って全員眠らせたんだから」

「・・・利尿剤の時に手際が良かったのは前科ありだったからか」

アイウィはジト目になった。

「ぱりつちと逃げた時は必死だったの！司令官は今夜中にぱりつち解体しろとか叫んでたし！」

ビットはぎよつとした顔でアイウィを見た。

「えっ、それ初耳なんだけど!？」

「ほんとだよ！それに鎮守府には睡眠薬なんて腐るほどあるじゃない！」

「まあね」

ストレスによる不眠や出航時間の変則シフトに対応する為、睡眠薬の常備は鎮守府では割と普通である。

ビットはベレーを見て言った。

「はい。私達の事はこんな感じ。ベレーちゃん迷惑だった？」

「い、いえ、皆、色々あるんだなって、思いました」

「そうね。だから私達もベレーちゃんの話聞くのは別に迷惑じゃないわよ」

ベレーはきよとんとした後、ぽうと頬を染めると、

「あ、あの、だからお話ししてくださったんですか？」

「そうよ、これでお互い様でしょ？」

ひゆうつと息を吸い込んだベレーは覚悟したように眉をひそめると、

「・・・っ、つまらなかつたら、言ってください」

そう前置きすると、ぽつりぽつりと話し始めたのである。

「・・・そいつ、ムカつく位うちの司令官そっくりだぜ」

吐き捨てるように言ったのはミストレルだった。

「えっ？」

「アタシもさ、深海棲艦が武器を捨てて両手を上げるのを何度も見たんだよ」

「・・・はい」

「そういう連中はさ、降伏したがってるんだから助けてやれよって言ったんだ」

「・・・はい。私も、そう思います」

「けどさ、司令官は「嘘だから撃て、騙されるな」って判で押したように同じ答えしか返さねえ」

「・・・私の司令官も、そうでした」

アイウイは頷いた。

「うちもそんな事、確か神通さんが言ってたなあ。武士道の精神に反するって嘆いてたもん」

ファッツが肩をすくめた。

「まあ、それが大本営のマニユアルなんだよ。そして違反すると俺みたいにくビになっちまう」

ベレーはファッツを見た。

「でっ、でもっ、私はファッツさんの判断の方が正しいと思いますっ！」

第40話

ベレーの言葉に、ビットがコーヒーを啜りながら微笑んだ。

「正しいか正しくないかじゃなくて、自分達の命令通り動いてるか否かしか見てないからね、大本営は」

ベレーは俯いた。

「そんな・・・」

「元々戦争自体が不条理だらけなんだれど、今は人類より遙かに力の強い深海棲艦が相手じゃない?」

「・・・」

「深海棲艦が1度降伏しても、後で気が変わって力押しされたら人間や留置場なんかじゃ太刀打ち出来ない」

「・・・」

「降伏を受け入れるな、じゃ無くて、降伏されても困る。本当はそういう事なんでしょうね」

ファッツが頷いた。

「ビットの言う事が正解だろうな。大本営は死んでも認めないだろうが」

ミストレルが腕を組んだ。

「・・・んだよ、そういう事ならそうと言えよ。頭ごなしに言われるよかよっぽど納得出来るぜ」

ファッツがサングラスの上からミストレルを見上げた。

「納得したら撃てたかミストレル?」

「・・・ごめん、無理」

「だろうな。俺も柿岩の当主をあの場で成敗する事は出来なかったよ」

「ちゃんと話を通じる、心が通じる相手だって解ったら戦いなんて出来ねえよ」

「ああ。ビットの言うとおり、戦争なんて不条理の塊だ。理性を吹き飛ばす程の理由でもない限り無理なんだよ」

「理由って？」

「親しい者を殺されたとか、祖国を焼け野原にされたとか、かな」

「・・・じゃあ深海棲艦はなんで俺達に戦争をふっかけてるんだ？」

「ナタリアが言ってただろ。人類全体に恨みを持つのは少なくとも、特定の司令官や艦娘に恨みがある奴は多いと」

「・・・あー」

「1人1人がそれぞれ別の個人だったとしても、それが膨大なら人類対深海棲艦になっちまうんだろうよ」

ミストレルがガリガリと頭を搔いた。

「・・・ほんにより、ベレーじゃねえけど堂々巡りの悩みに陥るよなあ」
ファッツは頷いた。

「考えないようにしてるってのはあるな。どうにもならん問題だし」

ベレーはファッツに向かって言った。

「でもっ！ファッツさんがちゃんと考えたから、地上組の皆さんは戦いを避けようと動いてます！」

「んー」

「ファッツさんの行動は決して無駄なんかじゃない！無駄なんかじゃなかったんですっ！」

「ベレー・・・」

「だって・・・その話を聞いた時、私は、ファッツさんと一緒にお仕事出来る事がとても嬉しくなりました」

「・・・」

「誰も戦いたい訳じゃない。でも戦いはきつと、憎しみあうだけじゃ終わらない」

「・・・」

「だから、せめて、せめて助けを求めてる子に救いの手を差し伸べなきゃ・・・いつまでたっても・・・」

ビットが懐に手を突っ込んだ。

「深海棲艦の艦装直してあげたらさー、こんなのくれたんだよね」

そう言っ取り出したのは、明らかに宝石と解るとても大きな石だった。

「ほう・・・俺は詳しくないが綺麗な石だな」

「でしょ。私もこれの価値は知らないけどさ、これを見ると何度も頭下げて帰っていった事も思い出せるわ」

「・・・」

「言葉が通じる子、通じない子それぞれ居たけど、まあ身振り手振りで何となく解るし」

「・・・」

「話せば解るんじゃないか、力押しで無理矢理何とかしようとする大本営のやり方が悪いんじゃないか」

「・・・」

「そんな事を思った事はあったわよ。軍法会議ものだから言えなかったけどね」

ベレーがポツリと言った。

「・・・私が思っていた事、皆さんと共通点があつて、良かったです」

ビットがにこりと笑った。

「そうね」

「鎮守府に居た時から、この事を、誰かと相談したかった・・・気がします」

ミストレルは腕を組んだ。

「アタシも誰かところやって話したら、飛び出さなかったかもな」

「うん・・・私の考えてる事・・・おかしく・・・なかった・・・」

ファッツォがふとベレーを見ると、ベレーがうっすらと輝きだしていた。

「ん？ベレー、変身を解くのか？」

だがベレーはそれには答えず、目を瞑り、微笑みながら呟き続けた。
いた。

「良かった・・・誰か一人でも・・・同じ思いの人・・・居て欲しかった・・・
認めて・・・欲しかった」

アイウイもベレーを見たが、既に放つ光はとても強くなっていた。

強いけれど柔らかく、包み込むような光。

アイウイが叫んだ。

「・・・ベレーちゃん？ねえ、ベレーちゃん！」

「認めてくれて・・・ありがとうございます・・・」

ミストレルが叫んだ。

「ちよーベレーー！おい！お前何変な事言ってるんだよ！」

だが誰も、あまりに強い光に目が眩んで、その姿を見ることが出来なかった。

ビットだけが誰にも聞こえないくらいの声で

「そっか、思いを遂げたんか・・・良かったね」

そう言つて、頷いた。

第41話

「ベレー」

「はい」

「お前、バツとして料理当番1週間な」

「ふええええっ!?!」

それは、夕島整備工場からの帰り道だった。

BMWにはファツゾ、ミストレル、そして今、目を白黒させているベレーの3人が乗っていた。
そう。

あの強烈な光が収まった後。

ベレーは深海棲艦の二級からU-511に戻っていたのである。
姿を見つけたビットは意外そうな顔でベレーに問いかけた。

「あら、昇天を選ばなかったの?」

ベレーは顔を真っ赤にしながらつんつんと左右の指同士を合わせつつ、

「折角皆さんに認めて頂いたわけですし、はるばるドイツから頑張つて来ましたし」

そしてファツゾの方をチラリと見ると一層小さい声で

「・・・ごはん、美味しいですし」

と言ったのである。

ベレー以外が一斉に笑い出したのは言うまでもない。
しかし。

「ベレーも艦娘になったし、深海棲艦との窓口役を募集するかなあ」

ファツゾが工場の去り際にそう言った頃から、ミストレルは次第にむすつとし始めた。

「姉御にでも頼みや良いだろ」

「今更ギヤラを大幅に上げるのは難しいから、ベレーのように省燃費な子がいいんだが」

「二級限定で募集すりゃ良いだろ」

「そこまで限定する必要は無いけどな」

「はん」

ファッツはミストレルをちらりと見た。これは今の会話とは別の事でお冠だな。

まあ察しはつくし、相談は明日にでも改めれば良いさ。

そして車が走りだした途端、ミストレルから放たれた言葉が冒頭の一言という訳である。

ベレーは何の事かさっぱり掴めていない様子でオロオロしている。助手席で不機嫌そうなミストレルをちらりと見た後、ファッツが肩をすくめて言った。

「ミストレル、幾ら心配したからといってバツ当番は酷くないか？」

「うるせーよ」

ベレーは解らず、おうむ返しに聞いた。

「えつと・・・心配・・・？」

ファッツはニツと笑った。

「ベレーが大好きなミストレルはな、あの光とベレーの意味深な台詞で消えちまったと思ったんだよ」

「ちやかすなファッツ」

「えつ・・・でも・・・お礼はちゃんと言いたかったんです・・・」

ベレーはシート越しにミストレルを見たが、ミストレルは真っ赤になつて外を見ていた。

ベレーは恐る恐ると言った様子で、そつと口を開いた。

「あの、ごめんなさい」

「ブン」

ベレーは叱られた子犬のような顔になった。

「あうう・・・」

ファッツはハンドルを切りながら続けた。

「正直、俺もお別れかと思つたんでな・・・まあその、安心したつてのはミストレルと同じだ」

「えっ?」

信号待ちで車を止めたファッツは、ハンドルにもたれかかりながら言った。

「毎日一緒に居て、メシ食って、仕事して、笑って、泣いて、沢山話してりや・・・な」

「・・・」

静かなアイドリングの音だけが車内に響きわたる。

道路には1台の車も通ってないので静寂な瞬間となってしまうた。

続きを促す気配を感じ、ファッツゾがごくりと唾を飲む。

「・・・あーその、なんだ」

「はっ」

ファッツゾはちらりとバックミラーを盗み見た。

そこにはリアシートで一言も聞き漏らすまいと、身を乗り出し、真っ直ぐ見つめるベレーが映っていた。

「・・・うっ」

い・・・言いづらい。

そんなに純粹無垢な瞳で見つめないでくれ。

くそ、ミストレルが真っ赤になってるのも良く解る。

親しかろうと何だろうと、こういう事は流れに任せないとダメだ。

一旦途切れると恥ずかしくて物凄く言いくくなる。

ミラー越しにベレーを盗み見ることに30秒。

ファッツゾは青信号に変わった瞬間、グイッとアクセルを踏みつけた。

ストレート6のエンジンは嬉々とした咆哮をあげ、タイヤはありつたけの力で地面を蹴り飛ばした。

姿勢制御装置は突然の仕事に警告灯を点滅させて抗議しつつも車体を真っ直ぐ前へと導いた。

急加速にのけぞったベレーはそのままシートに押し戻され、慌ててシートにしがみついた。

「わあっ！」

ファッツゾはエンジンの咆哮に紛れるくらいの声で呟いた。

「俺は大事な我が子だと思ってるんだよ。お前達をな」

ミストレルは外を見たまま、目を細めてくすつと笑った。

ファッツゾだって不器用極まりねえじゃねえか。

ま、だからこそ本音だつて解るけどな。

BMWはいつになくハイスピードで街のメインストリートを駆け抜けていった。

ようやくスピードに慣れたベレーがじつとファッツォを見ながら訊ねた。

「ファ、ファッツォさん、さっき何て仰ったんですか？」

ファッツォはATを3rdレンジに落としながら言った。

「さて、今夜の晩飯は何が良い？ミストレル」

「え・・・あの・・・」

ミストレルは頬杖をついたまま、ニヤリと笑ってファッツォに返した。

「さあなー、ベレー料理長にお任せしようぜー」

ベレーの顔色がさあつと青ざめた。

「えっ!? さっきの話本当なんですか！私・・・料理した事・・・ない・・・です」

ファッツォは肩をすくめた。

「こりやあ米の研ぎ方から教えなきゃならんようだぞ、ミストレル」

ベレーは口を尖らせた。

「私、ファッツォさんのご飯が大好きなんです。ファッツォさんに作って欲しいです」

ミストレルはニツと笑った。

「じゃーアタシが作る時はファッツォの分だけで良いんだな」

「ふえっ!? ミストレルさんのご飯も大好きです」

ファッツォは肩をすくめた。

「二股かけられたぜ、ミストレルさん」

「二兎を追うものは一兎も得られないんだぜ、ベレー」

「え、選ばなきゃいけないんですか?!」

「だとしたら？」

ベレーはたっぷり1分ほど唸った後、

「・・・ファッツォさん！」

と言った為にミストレルは再びむすつとした。

だが、そこはファツゾが晩のメニューにエビフライを足す事を約束してとりなしたという。

B M Wは3人を乗せて家路を真っ直ぐ進んでいった。
西の水平線は綺麗な茜色だった。

2章：「神武海運」編 第1話

「神通社長、今話しても良いかい？」

自分を呼ぶ声に、神通は気だるそうに片目をちよつと開けた。

神通は自分の部屋、すなわち社長室の応接間に置いたソファで横になっっていた。

別に徹夜した訳ではないが、特に仕事も無いので横になっていたのだ。

彼女の事は見なくても声で解るのだが、反応しないと律儀に待ち続ける。

もう軍隊に居るわけじゃないのだし、そのまま話してくれて構わないと思うのだけど。

「・・・何でしょうか？時雨さん」

「車検に出すから、輸送トラックを夕島整備工場に持っていくよ」

「・・・ええ」

「運転してて何か気になったことはあるかい？」

「特に・・・ありません。燃費が倍になって欲しいとは思いますが」

「僕もそう思うよ。ビットに相談してみるかい？」

「奇怪なマシンを高値で売りつけられそうだから止めておきます」

「あはは。それもそうだね。じゃあ行って来るよ」

「・・・あ、時雨さん」

「なんだい？」

「帰りがけに練乳の缶詰買っ・・・て・・・」

「・・・」

言っている途中で神通はしまったと思った。そしてその結果がこの沈黙だ。

あつという間に重力が増していくような沈黙。

ごくりと唾を飲み込んだ途端、低く低く、その言葉は飛んできた。

「・・・神通」

途端に神通はがばりと飛び起きた。

「はいっ！」

「仕事を済ませてから休息を取る事に僕は何も言わないよ」

「・・・」

「けれど、業務時間中に私用を行う事は社規で禁止したんじゃないよなかつたかな？」

「仰るとおりです！」

「・・・なら、僕の答えは解るよね？」

「業務時間が終わってから自分で買いに行きます！」

「うん・・・じゃあ、行って来るね」

「はいー！」

ぱたん。

神通はがくりと肩を落とし、はあーっと大きく溜息をついた。

頭を左右に振る。

いけないいけない。

起きぬけのぼんやりした意識のまま時雨の相手をするところなるって解ってるのに。

「遠征で7徹がなんだ！気合が足りん！」

「後14分で再出撃しろ！」

「破損が何だ！行け！行け！進め！戦地で散れ！」

・・・くうっ。

神通は手で頭を押さえた。

フラツシユバックって奴はどうしてこう不意打ちするのだ。

言葉だけでも辛いのに、ズキズキと激しい痛みまで伴う。

「ゆっくり治していきましよう。焦りは禁物ですよ」

精神科医の言葉は優しいようである。

全ては私の問題だ、と。

「・・・」

棚の紙袋が目に入る。薬の束だ。

薬は辛うじて自分をつなぎとめている命綱のようなものだ。

いつも眠くても、体が鉛のように重くても、深海棲艦に変化してし

まうよりは良い。

・・・はず。

いけないいけない。弱気になっている。

神通は頭を振ると、ゆっくりと立ち上がった。

コーヒー、飲もう。

インスタントで良い・・・

インスタントのコーヒーなら部屋から出なくても用意出来るから。ふらつく足取りでは廊下の先の給湯室は遠いし。

その時。

「おっ、目え覚めたんか。気分はどうや?」

声の方を見ると、ドアを半分開けた状態で龍驤が覗き込んでいた。

「ああ、龍驤さん」

苦笑した神通を見た後、龍驤は廊下をきよろきよろと見回し、そつと部屋に入ってきた。

「?」

神通が首を傾げていると、龍驤が神通の耳元で囁いた。

「また時雨に叱られたんやろ?」

「あ、あはは、解つちやいますか・・・」

「原因はどうせこれやろ?」

「!」

龍驤が懐から取り出したのは練乳の缶詰だった。

「それともこつちか?」

「!!」

もう片方の手にはつぶあんの缶詰。

「お、美味しそう・・・ステキ・・・」

うつとりとした瞳で缶に釘付けになる神通の手に、龍驤はそつと2缶を握らせた。

「えっ?あの・・・」

「ええから、好きな時に食べや」

「で、でも、これは龍驤さんのじゃ・・・」

「ちよつち買い過ぎたんよ。時雨に見つかつても言い訳出来るように

「仕事は済ませときや?」

「あ、仕事は・・・もう済ませてます」

「ほんなら遠慮せんと食べればええ。ここはもうあの鎮守府やないんやし」

「・・・」

「鎮守府と違って、勤務時間中の飲食は禁じとらんしな」

「・・・社規には、書いてないですね」

「私用の外出は勤務時間中はご法度やけどな」

「はい」

「まあ皆で理由があつて決めたルールや。しやあないで」

「はい」

「で?先に行くのは練乳か?つぶあんか?どっちや?」

神通は真剣なまなざしで2缶を見つめたあと

「・・・練乳で」

というと、龍驤はニツと笑い、

「神通の練乳好きは変わらへんな。ジャムは持ってるんか?」

「はい。勿論です。食パンもあります」

「ほなちゃんとしたコーヒー飲みたいやろ。待っときや」

「あの、龍驤さんも召し上がりませんか?練乳ジャムのオープンサンド」

「よっしや共犯や。ほなこっちの準備頼むで」

「はい!」

神通がぱあつと笑つたのを見て、龍驤はひらひらと手を振りつつ部屋を後にした。

廊下に出た龍驤は肩をすくめた。

「まったく、うちの連中は・・・今を見れば楽しいやろに」

「・・・」

「どうした、時雨」

トラックを見上げていた時雨が振り返ると、正門から入ってきた武蔵が手を振っていた。

それを見て、時雨は困つたような顔で微笑んだ。

「トラックに何かあったのか？」

「ううん、そうじゃないよ。車検に出すから乗ろうとしてただけさ」

武蔵は少し時雨を見た後、助手席側へと回り込みながら言った。

「なら、一緒に行こう」

「えっ？僕一人で行けるよ」

「気分だ。機装を動かさなければ経費の無駄使いにはなるまい？」

そう言っただけで助手席でぱちんとウィンクした武蔵を見て、時雨は溜息を一つ吐いた。

「・・・はい、じゃあ月曜午後以降ならいつでも受取可能だよっ！」

「よろしくお願いするよ、アイワイ」

「任せといてー！」

時雨はにこっと笑うアイワイを見て、寂しそうに笑った。

最後に心から笑ったのはいつだろう。

武蔵は少し離れた、夕島整備工場の門にもたれたまま時雨を見ていた。

「・・・ふむ」

やはり、な。

武蔵は一人頷いた。

第2話

「折角武蔵が一緒なんだから武蔵に運転してもらって、僕は軽自動車
で随伴すれば良かったね」

「そういえばそうだな。はっはっは」

夕島整備工場からの帰り道を、時雨は武蔵と並んで歩いていた。

丘を下る道は海からの風が強く吹きつけ、雲間から太陽が見えたり
隠れたり忙しい天候だった。

それっきり、二人はしばらく沈黙したまま歩いていたが、武蔵が口
火を切った。

「さて、時雨」

「・・・えっ？」

「以前も言ったが、神通の事を一人で抱え込むな」

「・・・顔に、出ちゃってたかな？」

「お前が深く悩むのは今の所それしかないだろう」

時雨は苦笑した。

「財政状況もそろそろ頭痛の種なんだけどね」

「そっちはともかくとして、だ」

「・・・うん」

「確かに神通は一度海中に沈み、意識を失い、死の淵まで行った」

「・・・」

「しかし、時雨が命を賭して海に潜って引き上げたから、神通は今も
我々と共に居る。そして、戦っている」

「・・・病魔と、ね」

「違う」

「？」

見上げた時雨を武蔵は見下ろした。

「深海棲艦に変化させたがる、自らの莫大な怨念と、だ」

「・・・僕の、せいだよね」

武蔵は立ち止まり、時雨の両肩をぐいと掴んだ。

「蒸し返すな時雨。あの戦いで時雨は出来る限りの事をした。神通も

感謝こそすれ、毛ほどもお前を責めていない」

「でも、僕が後ろを振り向いてなかったら、棲姫の最初の砲火が見えたはずだ」

「お前は高々度の敵機を追跡していた。そのおかげで私が爆撃される前に知らせてくれたではないか」

「でもっ！」

「無茶苦茶を言うな時雨。我々の眼は2つで頭は1つ。2つも3つも同時に注意を払い続ける事は不可能だ」

「・・・」

「私も、神通も、他の誰も、絶対に時雨のせいだとは思ってない」

「・・・でも・・・でも・・・僕は・・・僕がもつと上手くやっていたら・・・」

「仮にそうだとしても、そこまで立ち回る必要に迫られるような艦隊編成を命じたあの能無しが悪いのだ」

「・・・」

「あの時雪風や不知火が居れば分担出来たかもしれないが、3隻で出撃しろと命じたのはあの能無しだ」

「でも、それは司令官が期待してくれたからであって・・・僕は・・・」

「あれは期待ではない。大本営の艦隊編成例すら無視し、命を軽視し、資源を優先した姑息な手だ」

時雨は何か言いかけたが、口をつぐむと俯いてしまった。

「・・・」

「時雨」

「・・・」

「時雨、私を見ろ」

時雨はのろのろと顔を上げた。

「不可能を可能にするのも限度がある。お前に課された事は限界を遥かに超えていた」

「・・・」

「私が鎮守府を去る時にお前達を連れたのは、無用な自責の念でお前達を苦しませたいからではない」

「・・・」

「あの能無しに受けた傷を癒し、再び笑って欲しいと願ったからだ」
「・・・」

「神通はきつと治る。自らとの戦いに勝って我々の元に帰ってきてくれる」

「・・・」

「我々がそう信じてやらなくてどうする」

「・・・うん」

「もう1つ」

「・・・」

「そうは言っても彼女の戦いは孤独で、辛い筈だ」

「・・・そう、だね」

「だからお前まで、そんなに自分を責めるな」

「・・・」

「帰ってきてくれた時、お前が深海棲艦になっただけは神通が悲しむぞ。悲しみの連鎖を生むな」

「・・・」

「それがお前の戦いだ。解るな？」

武蔵がそつと肩から手を離れた時、時雨はそのまま武蔵にもたれかかった。

「・・・ごめん。ちよつとだけ、こうしてて良いかな」

武蔵は答えず、時雨の背中をぎゅつと抱きしめた。

時雨は小さく、小さく肩を震わせていた。

武蔵は思った。

時雨は一体どれだけ、自らを鞭打ってきたのだろう。

それもこれも、我が姉が沈んだのも、赤城が、扶桑が、金剛達が沈んで行ったのも、すべて。

武蔵はぎりりと奥歯をかみ締めた。

奴に応分の報いを。ふさわしい末路を。

準備は進めている。資金はもう目処をつけた。

今のうちに少しでも傷を癒しておけ、時雨。

私が必ず決着をつけ、まともな鎮守府に凱旋させてやる。

同時刻、柿岩家会議室。

「説明は以上です」

柿岩家の当主である防空棲姫は、手元の資料を読み終えた。

静かに深呼吸しているが、メガネを外す手は小刻みに震えている。

並の艦娘や深海棲艦であればそれだけで気圧されそうなくらいの殺気である。

低い、ゆつくりとした声で防空棲姫は訊ねた。

「これは、確かな情報ですね？」

遠く離れた畳の間で、女性は平伏の姿勢を取りつつ応えた。

「はい。他支部の2課にも応援を要請し、連携して複数個所で裏を取った情報です」

防空棲姫は再び大きく一呼吸すると、周囲に問いかけた。

「元老院の皆様、ご意見を」

防空棲姫の右に座っていた初老の男が目を瞑り、穏やかな笑みを浮かべたまま手を上げた。

「よろしいかな」

「お願いします、浮砲台組長殿」

「単独犯と考えるにはいささか経緯が出来過ぎている。周辺をもう少し洗うべきではないか？」

足を組んで座っていた紳士も頷いた。

「だろ。赴任日程や宿泊先は高度な機密の筈だ。内通者が居るだろう」

コツコツと机を指先で叩いていた女性も頷いた。

「事案発生エリアから考えれば、海底国軍の連中が疑わしいわね」

「協定を結んだ相手と推論で砲火を交えるのはあまり得策ではない。証拠が必要だ」

「だが奴らなら高度な隠蔽工作はお手の物だ。課長、短期間で突破出来るか？」

畳の間に平伏したままの、課長と呼ばれた女性は頷いた。

「急を要する事案である事は承知しております。最精鋭の2人をアサ

インしています」

防空棲姫が口を開いた。

「これは地上組を脅かす、大変憂慮すべき事態です。まずは掴んだ事に御礼を申し上げます」

「ははっ！」

「リポートの通り、私も侵略事案認定を提案します。元老院の皆様、ご採決を」

元老院のメンバーを見渡すと、一人を除いて全員が手を上げていた。

「・・・浮砲台組長殿、反対ですか？」

「いや、関係者を全員明らかにすれば良い。それは無論・・・」

浮砲台組長はカッと目を見開いた。

「加担するドブ鼠共を残らず喰いちぎる為だ」

防空棲姫は頷いた。

「課長、我々元老院は貴提案を条件付で承認します」

「ははっ」

「条件は本件に加担する関係者全員の特定です。出来ますね？」

「はい！」

「満たされた暁には侵略事案として認定し、力の行使を認めます」

「はい！」

「被害が拡大する前になんとしても阻止してください・・・お願いします」

課長は一瞬、防空棲姫を見上げた。

防空棲姫は悲しげな目をしつつも、ゆっくりと頷いた。

再び平伏した課長は、しっかりとした声で答えた。

「必ず成し遂げてご覧に入れます！」

部屋の隅に控えていた、柿岩の妹で日本エリア長の港湾棲鬼は内心ホツとしていた。

確かに悲惨な事例だし、卑怯な手段に腹も立つ。決定事項になんら異議は無い。

だが、もしターゲットがファッツさんだったら、姉君は眉一つ動か

さず海底国軍と全面戦争を始めただろう。

なにせ密かに盗撮させたファッツの写真を毎日うつとりした顔で見つめているのだから。

姉君が怒り狂う事態にならなくて本当に良かった。

第3話

神通達は現在、「神武海運」と名乗る Deadline Deliversである。

元々全員が4219鎮守府に所属していた、神通、武蔵、時雨、山城、そして龍驤で構成されている。

艦娘ゆえに深海棲艦達や海底への輸送は出来ないが、艦娘の居る海域や鎮守府への輸送は可能である。

武蔵は急死した前司令官に代わって着任した司令官の運営方法に辟易し、鎮守府を去る事を決意。

司令官を恫喝し、当時第1艦隊の精鋭だった残る4人を随伴させると堂々と昼間に去ったのである。

鎮守府近海を抜けた頃、武蔵の傍に時雨が寄ると、ぺこりと頭を下げた。

「ありがとう。神通はこれ以上出撃したら轟沈していたと思う」

武蔵は山城が支える、憔悴した神通を見ながら頷いた。

「奴の好きな捨て艦戦法をしようにも我々が居なければ、もはや高LV艦娘は居ない。しばらくは安全だろう」

山城が遠くの海原を見ながらつぶやいた。

「定期補給船に食料しか頼めないようシステムを改竄しておきました。時間稼ぎにはなるでしょう」

「なるほどな。さすがだ」

龍驤が肩をすくめた。

「ほんまに、あんな奴を取り締まる為の調査隊やないんかいな・・・」

大本営直轄鎮守府調査隊。

龍驤が調査隊と言った組織の正式名称である。

大本営の説明によれば、艦娘達への無理な指示や不正行為を取り締まる為の直轄組織という事だった。

しかし、届いてくる噂は黒い物ばかり。

袖の下を献上する鎮守府は取り締まるどころか悪事に加担してるとまで言われている。

そもそも、調査隊を束ねる男は元々良くない噂の絶えない奴だとも聞く。

どうして大本営の上層部はそんな奴に調査隊を任せたのか。

どうして今起きている鎮守府内の不正を正せないのか。

どうして調査隊自体の不正を許すのか。

艦娘達の間では、調査隊が出来た事でかえって大本営に対する不信感が高まっていたのである。

龍驤の嘆きを聞いた武蔵は、フンと息を吐いた。

「上の考える事なぞ知らん。大本営に居る私の同艦とやらに拳の1つでも食らわせてやりたいがな」

「完璧反逆やんけ」

「意見具申だ。沈んだ者達の痛みの1%でも思い知れば良い」

「で、どないするんや、この先」

「まずは神通を始めとする皆の療養を優先する。その為にも食い扶持を見つけねばなるまい」

「アテはあるんか？」

「無い！」

「胸張って言うなや！」

「無いものは無い。だがあれを耐えた我々なら何とかなる！」

ニツと笑う武蔵を見て龍驤は溜息をついた。

「どうして武蔵は戦術は仔細まで考えるのにそれ以外はズボラなんや？」

「ほんなら、うちが先導してええな？」

「ん？何か策があるのか？」

「Deadline Deliverって仕事があるらしいんよ」

「なんだそれは？」

「まあ、要するに民間の海運業や」

「海運だど？どれだけ危険だと思ってるんだ。タンカー1隻動かすのに艦娘が4人はつかねばならんのだぞ？」

「だから、危険を引き受ける代わりに報酬も良いんやて。噂やけどな」
「ふーむ・・・」

「で、それを生業としてる人が多く集まる港町があるらしいんよ」

武蔵自身には他に策もなかったので、山城の方を向いた。

「山城はどう思う?」

山城は武蔵の問いに少し考えた後、

「まあ、行って様子見しても良いんじゃないですか? いざとなれば撤退くらい可能でしょう」

そして山城は武蔵を見てにいつと笑い、続けた。

「私と武蔵さんの火力があれば」

武蔵はぎよつとした顔になった。

「お、おいおい、町を焼け野原にするつもりか?」

「必要なら」

龍驤は二人の話を聞きながら肩をすくめた。

山城は戦地での順応も早い頭脳派だ。

そして現時点で武蔵と共に行動してる以上、我々はお尋ね者である。

アウトローにはアウトローとして必要な考え方があり、山城は既にその思考に切り替えている。

龍驤はそつと時雨に囁いた。

「あの二人、絶対敵に回したらあかんな」

「もちろん。僕達を救い出してくれた恩に報いる為、命を懸けて従うつもりだよ」

「ええと・・・まあええわ・・・」

龍驤は溜息をついた後、天を仰いだ。

このメンバーに欠けてるのは「ほどほど」という言葉だ。

堅物という言葉さえ裸足で逃げ出すほど真面目な時雨。

その時雨にさらに輪をかけて生真面目な神通。

悪く言えば戦術馬鹿、よく言えばまっすぐな武蔵。

徹底的に理詰めで思考し、白黒きつちりさせる山城。

「あーあ。どこ行っても、うちの役は変わらんようやなあ」

龍驤は手で額を押さえつつ祈った。

行き先の町にうちを助けてくれるお仲間が沢山居ますように。

行き着いた港町では、既に自分達と同じような境遇の艦娘が働いていた。

最初はシヨックを受けたり戸惑う事も多かったが、働きながら次第に町の流儀に慣れていった。

「よし、ここらで一旗上げようではないか！」

武蔵の一声と、たまたま部屋数の多い事務所兼倉庫が格安で売りに出た事をきっかけに起業した。

神通を社長に据えたのは、ひとつは鎮守府最高LVだった事に敬意を込めて。

もう1つはあまり体調の良くない時でも、秘書艦経験を生かして書類仕事なら進められる為であった。

こうして「神武海運」は始まり、今は鎮守府を後にしてから3年の歳月が過ぎていた。

現在の「神武海運」には2つの顔がある。

一つは龍驤、時雨、そして神通が引き受ける、海と陸の輸送業務。もう1つは武蔵と山城が引き受ける傭兵ならびに護衛任務である。

激しい戦域への強行突入も1社で受けられるが、その場合の報酬は高額になる。

それでもワルキューレの価格表を見た後では「安っ！」と依頼人が叫ぶので、如何にワルキューレが高いか、である。

先のモンスター事案の折、武蔵が護衛部隊長を立派にこなした事から、神武海運の評判は確固たる物になっていた。

しかしその一方で、神通の具合は段々と悪化していった。

段々と眠る時間が増えている為、輸送業務を引き受けられなくなっていたのである。

先程武蔵が出かけたのも、テッドに説明する為だった。

第4話

時間は武蔵がテツドの事務所に居た時に遡る。

「そういうわけで、神通の容態が余り良くない。最近ほぼ1日中眠ったままになっているのだ」

テツドは武蔵を見つつ、葉巻の煙を含みながら眉をひそめていた。少しの沈黙の後、テツドは紫煙を吐きながら口を開いた。

「俺がまだ軍に物言える立場なら、その司令官を空爆演習の標的にしてやるんだがな」

武蔵はふっと笑った。

「誰かさんは僅かな情報から特別機密事項を言い当てた上に上官を殴ってクビになったからな」

「うるせえな。ちよつと考えりゃ解る事じゃねえか。なんで皆解らねえんだ」

「お前ほどの天才が日本の政治家に1人居たら、とうの昔に元帥共の与太話を見抜いているだろう」

「正論過ぎて反論出来ねえよ」

「まあ、神通を案じてくれるのはありがたい。礼を言う」

「・俺には案ずる事しか出来ないがな。心を壊すつてのは殺しと一緒だぜ」

「だから引き続き、輸送業務、特にトラックによる陸送は控えたい」

「お前や時雨ちゃんも運転出来るんだろ？」

「そうだが、時雨は神通を案じて傍を離れないからな」

「・くそつ。本当に狙撃してやりてえな。クソ野郎め」

武蔵がふっと笑った。

「お前が手を下すまでもないさ」

「どういうこった？」

「あ、おつと、いや、なんでもないさ」

テツドがじとりと武蔵を見上げた。

「なあおい、武蔵。変な事やろうとしてねえよな？」

「さあてな」

「武蔵、お前まで居なくなったら本気でお前んところは崩れるぞ？」

「・・・大丈夫だ。時雨が居る」

「強かろうと何だろうと、時には支えが要るってもんだぜ」

「・・・」

「強い奴ほど限界まで我慢してぶっ倒れる。神通だつてそうじゃねえか」

「・・・」

「よし、俺にも1枚噛ませろよ、武蔵」

「・・・だから、何も無い」

「水臭え事言つてると時雨にばらすぜ？」

「なっ・・・なにをだ」

「あの時お前は真夜中の波止場の岸壁だよ・・・」

「それは忘れろと言つただろ！まだ覚えてたのか！」

真っ赤になる武蔵の前にテッドはニヤリと笑つた。

「俺様は天才だからな」

「・・・やはり46cmの咆哮を聞かせた方が良くようだな」

「空砲でもミンチになるわ馬鹿野郎」

「ならば忘れろ！忘れるんだ！」

「あー、武蔵の計画に1枚噛みたいなー」

「・・・くっ」

「噛まないと忘れられないなー」

武蔵は心から、自らがうっかり放ってしまった一言を、そして波止場での一生の不覚を呪つた。

絶対テッドの奴は噛ませた所で忘れる筈がない。

だが他にオプションはない。

「・・・絶対に、絶対にうちの連中に言わないな？言いそうな奴にも言うなよっ。」

「例えば？」

「クーの奴とか」

「俺がそこまで間抜けに見えるか？」

「いや、そうではないが、しかし・・・」

「そろそろ諦めな。俺の元の職場知ってるだろ？喋らせる事が仕事だったんだぜ？」

「・・・ママシの117研め」

「ママシって言うな。仏のテッドさんとは俺の事だぜ？」

武蔵がテッドの腹を見ながらニマリと笑った。

「大黒腹の大山事務官とやらは知ってるが、仏のテッドなんて知らないな」

テッドがすうつと真顔になった。

「・・・今から時雨に電話してやる。時雨の携帯にな」

「やめろ！ほんとに止める！46cm撃つぞ！撃つからな！」

テッドは受話器を上げ、並ぶボタンの1つに指を乗せた。

「俺は本気だぞ！このボタンは時雨直通だぜ！打ち明けるかバラされるか選べ！」

二人は30秒ほどにらみ合った後、

「くそっ」

ついに折れたのは武蔵だった。

テッドと武蔵が言い争ってる頃、某所。

「局長」

顔を上げると、目の前に部下が立っていた。

「なんだ」

「第15四半期の定期レポートをお持ちしました」

「ん・・・そうか。ご苦労」

受け取った書類をぺらりぺらりとめくり、くつくつと笑った。

「よしよし、予定通り終盤だな。上層部もこのままなら本稼動を認めてくれるだろう」

「序盤は例外もありましたが、現在はほぼ順調です」

「新たなケースも無いな。まあ次の四半期でクロージングだ。仕上げまで気を抜くなと指示しておけ」

「かしこまりました」

部下が立ち去ると、局長は書類をばさりと籠に放り込み、元の仕事を再開した。

その表紙には

Corrosion計画テストリポート

(セクト2 ターム15)

と記されていた。

それから30分ほど後、テツドの事務所。

「なあ武蔵」

「なんだ・・・もう本当に計画はこれで全部だ」

テツドは眉をひそめ、真剣な目で武蔵を見た。

「これで、全部、なのか？」

「・・・本当だ。どういう事だ？」

テツドは椅子の背にのけぞると、呆れたような視線を送った。

「絶対失敗するぜ、これ」

「な、なにっ？完璧じゃないか！」

「完璧に、見落としてるだろ。相手は人間だぜ？海原を追ってこれる

訳ないだろうが」

「あ」

テツドは肩をすくめた。

「まあ基本は悪くねえから組み直しといてやるよ」

武蔵は腕を組みながらテツドを見た。

「何でそこまで肩入れする？」

テツドは地図を見たままボソツと言った。

「んーまあ、神武海運に復活してもらいたいっていうのと、あとは」

「・・・」

「俺の愛も込めて、そいつの額に風穴を開けてやりたくてな」

武蔵とテツドはニツと笑いあった。

そしてしばらく後、テツド仲介所の玄関を出た武蔵は吹っ切れた顔をしていたのである。

数日後。

神武海運の電話が鳴ったので、時雨が取った。

「はい、神武海運だよ」

「よお時雨ちゃん、俺だ」

「こんにちはテッド、何か依頼かな？」

「ちよつと武蔵に用があるんだが、居るかい？」

「居る筈だよ。代わろうか？」

「いや、居たら事務所に来てくれと伝えてくれ」

「うん・・解ったよ」

そういうと時雨は電話を切り、席を立った。

「そうか。すぐに行く」

艀装の手入れをしていた武蔵は、時雨から話を聞くと手早く仕舞い、テッドの事務所へと歩いて行った。

その後ろ姿を見送りながら、時雨は首を傾げた。

確かにテッド仲介所との窓口担当は武蔵であり、呼ばれるのはおかしな事ではない。

ただし、それは仕事の依頼がある場合だった。

傭兵にも輸送にも声はかかってない筈なのに、ここ最近何度も出向いている。

「どうして、何度も呼ばれるのかな」

時雨は嫌な胸騒ぎがして、両手を胸元できゅつと重ねた。

自分が会計役として財務を預かり、規律を守るよううるさく言ってきたのは、これ以上損耗しない為だ。

皆が沈んでいったのは、突き詰めれば満足に修理も受けられないような資源状況だったからだ。

もうこれ以上、一人も欠けて欲しくない。

だから・・だから僕は・・

時雨は武蔵が出て行った正門をずっと見つめていた。

その時。

「時雨」

時雨が声の方に振り向くと、山城が手招きしていた。

「な、なんだい。山城」

「来なさい」

「えっ？」

「来なさい」

「う、うん」

時雨は頷いた。

山城は普段は物静かで大人しいが、明確な意思と目標を持つと動き出す。

そうなった山城には逆らっても無駄である事を時雨はよく解っていたのだ。

第5話

「今日は計画のお披露目と顔合わせが目的だ」

テッドは集まったメンバーに向かってそう言った。

武蔵は見慣れぬ顔ぶれを前に頷いた。

確かにこんな作戦だ。メンバーの顔は知っておきたい。

テッドが武蔵の反対側に座る二人を紹介していった。

「こっちは地上組治安維持庁日本支部3課から来た、ミシエルとサマ
ンサ」

「こっちは今回の依頼者となった武蔵だ」

二人の女性は武蔵を見てにこりと笑い、うやうやしく頭を下げた。

「こんにちは」

「よろしく頼む」

武蔵は敬礼を返しつつ、小さく首を傾げた。

どこかでこのアクセントに覚えが・・・気のせいか。

テッドが続ける。

「俺達と治安維持庁はあまり普段縁が無いんで説明しとくぜ。まず、
地上組は穏健派だ」

武蔵が頷いた。

「そう聞いている」

「ただ、深海棲艦が陸で暴れば人間じゃ太刀打ちできんし、それが公
になれば地上組全体に影響が出る」

「・・・」

「だから地上組自らが取り締まり、秩序を保ってる。まあ海軍でいう
憲兵みたいなもんだ」

武蔵は疑問を口にした。

「で、今度の件とどんな関係があるんだ？」

「まあ待て。でな、自地域の治安維持に当たるのが1課、地域外の広域
連携捜査をするのが2課」

テッドは肩をすくめた。

「そして、好戦的な深海棲艦による地上侵略やテロ等の破壊活動を防

いでるのが3課なんだそうさ」

「ん・・・なっ・・・」

武蔵は目を見開いた。

テッドは葉巻に火をつける間、部屋には奇妙な沈黙が流れた。

紫煙をゆっくり吐き終わると、テッドは武蔵に話しかけた。

「俺も軍を辞めてからこの話を初めて聞いたし、その時は呆れ返ったもんさ」

「・・・」

「だが、日本支部のエリア長もこの事を認めてるし、聞かされた理由も納得出来た」

「どう・・・いう・・・」

「地上組は穏健派だがリアルリストだ。艦娘が深海棲艦になる理由は知ってるだろう？」

「轟沈時の・・・強い思念」

「そうさ。例外も居るが、ほとんどは特定対象への怨念だ」

「ああ」

「だとしたら、口約束だけで大人しく生きていくわけがねえ。特にその対象を見つけた時はな」

「・・・」

「十分な抑止力こそ治安維持に欠かせないと地上組は最初から解ってたって訳さ」

「・・・」

「その証拠に、治安維持庁は地上組の中で最古の組織らしいぜ」

「・・・」

「つまりまあ、深海棲艦が地上で目立った破壊活動が出来ないのは3課のおかげってことだ」

「そう・・・だったのか・・・」

武蔵はずしりと体が重くなるような気がした。

地上組が居る事自体知らなかった海軍時代は、自分達の働きで深海棲艦の上陸は防がれていると考えていた。

そうでなければあれだけの激務に耐える事は厳しかっただろう。

逃亡兵となり、この町で地上組の話聞き、深海棲艦の Dead line Deliverを見て、現実を受け入れざるを得なくなつた。

しばらくの間、皆で声も出ないくらいショックを受けた事を覚えてる。

だが、今のインパクトはそれ以上だ。

・・・艦娘は一体、何の為に戦っているのだ。

「少し、補足しますね」

しゅんとなつた武蔵を見て、ミシエルが口を開いた。

「私達は日本の組織で言えば、公安や機動隊に近い存在だと思います」
ゆつくり武蔵が自分の方を向いたので、ミシエルはにこりと微笑んだ。

「艦娘の皆さんが軍隊として国家間防衛を行い、それでも国内に入つてしまった不穏分子を始末するのが我々」

「・・・」

「ですから我々だけでは、決してこの平和は保てないのです」

武蔵は首を振った。

「謙遜は無用だ。私も艦隊の一員として様々な戦いを見てきたから、目を見れば何となく解る」

「・・・」

武蔵は目を細めた。

「二人とも相当上位・・・姫クラス、だな？」

ミシエルは肩をすくめた。

「隠し切れませんか。さすがですね。でも、我々の活動範囲も、予算規模も、海軍とは比べ物になりません」

数秒沈黙していた武蔵は頷き、パンパンと両手で自分の頬を叩くとミシエルに向き直った。

「地上の治安維持に力を尽くして頂き、この武蔵、艦隊を、いや、軍を代表して礼を言う。先程の無礼を許せ！」

ミシエルは笑った。

「テッドさんも先代の班長にそう仰つたそうですよ。お二人は似てる

「のですね」

「えっ」

武蔵がふと見ると、明後日の方を向いてスパスパ葉巻をふかすテツドが見えた。

「ほほう。普段は自分の事しか気にしないと豪語しているテツドがなあ」

「あーあーあー、俺の事は良いんだ俺の事は」

「ほほう。ほうほうほう」

「ニヤニヤ笑うな武蔵！つと、それは良い。どう繋がるかの答えはミシエルから聞けよ」

ミシエル達の話聞いた時、武蔵の顔から一気に表情が抜け落ちた。

テツドは肩をすくめた。

「俺も念の為と声をかけて初めて知った。前代未聞だし、ある意味丁度良いタイミングだったのかもな」

武蔵はミシエルを見て言った。

「・・・ミシエル殿、1つ聞かせてくれ」

「なんででしょう?」

「容疑者は、どうするんだ?」

ミシエルは微笑んだ。

「地上組には確かに治安維持庁はありますが、司法や刑務所まであるわけではなく、更正も期待していません」

「ああ」

「ですから、罪状が固まり次第・・・」

ミシエルは目を細め、とんとんと手刀を自分の首に当てながら言った。

「一切を殲滅します。我々はその為に力を行使する事を元老院から認められています」

武蔵は頷いた。

「それなら我々は、きっちり同じ立場で事に当たれるわけだ」

「ええ。お任せください」

テッドが書類を配りながら言った。

「という事で、俺の立てた作戦を説明するぜ。気になる事はその場で言ってくれ」

武蔵は説明を聞き、頷きながら武者震いしていた。

それはテッドの素晴らしい作戦のせいか、それとも、久しぶりに戦えるからか。

武蔵は後者だとすぐに理解し、苦笑した。

艦娘は戦う為の船の魂。戦いと聞くと血が騒ぐのだな、と。

ミシエルは武蔵を見て目を細め、サマンサはそんなミシエルを見てふふつと笑った。

説明を続けながら、テッドはその様子と浮かんできた考えを手帳に走り書きした。

117研時代からの癖だ。

同時刻、4219鎮守府。

「・・・今日も終業時刻か」

「では失礼致します。お疲れ様でした、司令」

「ん」

とんとんと書類を整えた秘書艦の不知火が一礼して出て行った。

司令官は席から立つと、窓際に寄った。

「・・・」

4219鎮守府は狭い入り江に建っていた。

高波等の浸水を防ぐ為、寮や司令官棟は海底から足場を組み、およそ5階程の高さに建てられていた。

そのおかげで司令官室の景色は遮る物もなく、実に素晴らしい眺めだった。

「・・・うっとうしい艦娘の声が静かになってせいせいしたぜ。後は資源移送だけだ」

司令官は夕日を眺めながら、そう呟いた。

ここでの勤務もあと少しだ。

第6話

武蔵は神武海運の事務所に入りつつ言った。

「帰ったぞ」

すると、普段挨拶を返す時雨とは異なる声が返ってきた。

「武蔵さん、おかえりなさい。早速けどちよつと良いかしら？」

声の方を見ると、スマホを見たまま話しかけたと思われる山城と、こちらを見つめる時雨がいた。

・・・まずい。

「・・・少し喉が渴いていてな。水を飲んでくるからその後で聞こう」

ピンと来た武蔵はそう言って踵を返そうとしたが、

「そう思つて麦茶持つて来たで。さあさあ座りや」

そう言いながら部屋のドアを後ろ手に閉めたのは、龍驤であった。

「さて、一体なんだ」

武蔵は肩をすくめると、諦めて時雨達の座るソファと直角に置かれた1人がけのソファに腰を下ろした。

山城はそつと目を閉じたまま壁の方を向き、時雨は何か言いたげな顔である。

龍驤は麦茶のコップを武蔵の前のテーブルにコトリと置きながら言った。

「なあ武蔵、うちらもう何年の付き合いやつたかなあ」

「今更なんだ。軽く10年は付き合ってるだろう？」

「そりやな。元は他人の夫婦でもな、10年付き合えば色々解るようになるらしいで」

「あいつはケツコンカツコカリしたい奴ではなかったのな、知らん」

龍驤は武蔵の向かいの一人がけソファに身を預けながら言った。

「まあそこはうちらも同意見やけど、話はちよつち違うんや」

武蔵はごくりと麦茶を飲んだ。

喉がからからなのは外を歩いたからではない。

山城が薄目を開けながらそつと口を開いた。

「私は時雨と仲良しだから、なんとなく雰囲気解るの」

「・・・」

「時雨は相変わらず神通に攻撃を知らせられなかった事を悔いてるけど」

時雨がどきりとした顔になるが、山城は構わず続ける。

「最近少し余力が出てきたように思う」

「・・・」

「まずは時雨を助けてくれた武蔵に、時雨の友人として礼を言うわ」

「・・・どういう事だ？」

「貴方と二人で夕島整備工場から帰ってきてからだから。時雨がそうなったのは」

「うっ・・・まあその、大した事はしていない」

武蔵は目を瞑った。山城の洞察眼と考察能力はすさまじい。

戦場である限り、僚艦である限り、それは素晴らしく心強い。

しかし向こうに回すと肝が冷えるどころか凍りつきそうなくらい怖い。

117研初代所長の取調べと山城の追及、どっちが恐ろしいかと武蔵は考えたが、止めた。

どっちも経験したが、怖すぎる事には変わりはないからだ。

「だから少し、猶予をあげるわ」

「えっ？どういう事だ？」

武蔵の問いに答えず、山城は再び目を瞑った。

それを見た時雨は、おずおずと武蔵に向かって話し始めた。

「そ、それでね。僕は少し、気がかりに思ってる事があるんだ」

「ほう？」

「武蔵は僕達に内緒で、何か動いていないかい？」

「んー？何かとは何だ」

「じゃあ聞くけど、テッドさんの用向きはなんだったんだい？」

「ああ、あれか。あれは指南のようなものだ」

「指南？」

「この間、モンスターと対峙した件があっただろう？」

「武蔵が護衛隊長を勤めた件だね。山城と二人で参加したよね」

「ああ。あの時の功労者はナタリアだが、私の判断も聞きたいという奴がいてな」

「・・・」

「なので何回かに分けて、どういう状況でどう判断したか解説に行ってるんだ」

武蔵は言い終えると、麦茶を口に運んだ。

危ない危ない。

テッドが言い訳を考えておいてくれなかったらこうは答えられなかった。

武蔵はコップを置くと、すつと右手で左腕をさすった。

時雨はふうんと言ったが、山城の反応は薄かった。

龍驤は肩をすくめつつ口を開いた。

「なあ武蔵、うちがさつき言った事覚えとるか？」

「夫婦がどうのという奴か？」

「10年付き合えば色々解るようになる、つてとこや」

「覚えているが？」

「武蔵はな、嘘つく時は軽く右を向いてな、つき終わった後に左腕をさするねん」

武蔵がぎくりとして固まった時、山城が言った。

「正確に言えば、こんな感じで私達がカマかけて、びくつとしたら本当に嘘をついている」

「んなっ!？」

山城は正面の壁を向いたまま、少しだけ顔を上げて目を開いた。

「時雨の荷を武蔵が肩代わりしようとしている」

「う・・・」

「そしてこの町のDeadline Deliverersを指揮下においでるテッドの元に足しげく通っている」

「い、いやそれは」

山城はふたたび沈黙した。

もちろん部屋を静まり返らせ、武蔵を精神的に追い詰める為である。

龍驤がそつと、優しい口調で言った。

「そろそろ観念しいや。山城は怖いで？」

「な、なんの・・・こと・・・」

時雨が泣きそうな目で武蔵を見た。

「僕の為に武蔵が死ぬような事があれば、僕は今度こそ後を追うよ？」

武蔵はギツと時雨を睨みつけた。

「ダメだ！お前は神通や山城の傍に居なければだめだ！」

時雨がぽろぽろと涙をこぼしながら返した声は、もう叫び声に近かった。

「なら何をしようとしてるんだい？僕は嫌な胸騒ぎが止まらないんだ！」

「だつ、だから、ただ単に説明を」

龍驤が上目遣いに武蔵を見ながら言った。

「ええか、時雨が今度口をつぐんだら山城が動くで？今が最終警告段階やで？」

時雨が涙をいっばいに貯めた目で武蔵をまっすぐ見つめた。

「本当に・・・何をしているんだい？」

「い・・・いや・・・だから・・・」

たっぷり1分は見つめあった後。

ついに時雨が悲しそうにしゃくりあげながら俯いた。

猶予は終わった。そういう事か。

武蔵は無意識に歯を食いしばった。

ぞわぞわと鳥肌がたつ。

まるで遠方に居る敵が放った砲火が見えた時のように体をこわばらせる。

その時。

砲塔を向けるように、ゆらりと、ゆつくりと、山城が武蔵の方を向いた。

武蔵は身じろぎ1つしなかったが、獅子に睨まれたネズミのような心境だった。

「・・・自分から言う気は・・・ないのね？」

「だ、だから・・・説・・・め・・・」

「残念だわ・・・本当に」

武蔵は震えが止まらなかった。

山城怖い！

怖すぎる！

一体どこまで知ってる！

すっ。

山城が、手にしていたスマホをこちらにぐいと突き出した。

「？」

そして、ゆっくりと武蔵に見えるように裏返した。

「!？」

武蔵は凍った手で心臓を掴まれたような気分になった。

第7話

山城が手にしたスマホには、武蔵が先程テッド仲介所で顔合わせしている場面が写っていた。

「弾ちやあく、今っ」

龍驤の冷やかす声に武蔵が抗議しようとして口を開きかけたが、その前に山城が話し始めた。

「最近のドローンはね、市販のおもちゃでも結構性能が良いのよ」

武蔵は真一文字に口を結んだ。

下手な事を言えば一発轟沈だと悟ったからである。

「それに、この子とこの子は *Deadline Deliver* で
すらないわ」

武蔵はごくりと唾を飲んだ。

何故解る？

何故知ってる？

「!？」

山城はスマホ越しにじっと武蔵の目を覗き込んだ。

「どうして *Deadline Deliver* ですらない子達が、
レクチャーを受けたがるのかしら？」

「!？」

山城はスマホを手元に戻すと、手早く操作しながら言った。

「そしてこれは・・・その時の動画だけど」

「!？」

山城が再び見せた画面では、無音の動画が再生されていた。

たっぷり5分近く続けた後、再生を中断した山城は口を開いた。

「これだと、武蔵は聞いて頷いている方で、レクチャーなんてしてないわね」

武蔵の顎が震えだした。

「え・・・そ・・・それ・・・は・・・」

「あと、動画を拡大する事も出来るんだけど」

「!？」

「ここで配られてる武蔵の手元にある資料のタイトル、読み上げましょうか？」

刹那の瞬間。

武蔵は必死になって過去の山城の追求を思い出した。

扶桑の羊羹を一切れ失敬した時。

海戦時に司令官の指示以上に砲撃し、補給数を誤魔化した時。

あの時、この時、ええとええと……

武蔵はぎゅつと目を瞑って超高速で判定を下した。

いや、山城が推測したにすぎない事が多かった。

これはブラフだ。

本当は読めないのに自滅を誘っているだけだ！

武蔵はそつと目を開けて言った。

「よ、読んでみろ……」

じつと見ていた山城はふうと溜息をつき、

「舐められたものね。良いわ」

そう呟いてから

「第4219鎮守府討伐計画、ね」

と言った。

武蔵は真つ白になって固まった。ブラフにかけたのは失敗だった。

龍驤は首を振った。

「防衛失敗、全滅やな」

山城は再び壁の方に向き直ると、くすつと笑った。

「さて、面白くなかったから減免はナシよ。洗いざらい吐いてもらい

ましようか」

「……」

「その後で武蔵さんは夕食にしましょうね。私達は先に食べたけど」

武蔵の顎がかくんと下がった。

既に手が打たれている!?

兵糧攻めは武蔵にとって一番つらいうえに、既に腹は減っている。

そこで龍驤が呟いた。

「夕食のメニューはビーフシチューやし、とろ火にかけたままやで」

「ええっ!？」

武蔵は涙目になった。ビーフシチューは武蔵の大好物である。

そして焦げたシチューほど台無しなものはない。

「今日は山城が奮発せえ言うから上等な牛肉をたっぷり使ってるんやで?。」

「い!？」

「うちらが食べた時が丁度やったし、はよ言わんと煮詰まってどんどん台無しになっていくで?。」

武蔵はがくりと頭を垂れた。

「は、話す。全部話すから火は止めてくれ。頼む・武士の情け・」

龍驤は山城が小さく頷いたのを見て立ち上がった。

「やれやれ。今回だけやで?。」

その頃、テツドの事務所。

「・・・」

テツドは葉巻をくゆらせながら、手帳のメモを確認していた。

「これは解決済・これは、あー、計画修正か。俺の取り分が減るなあ・くそ」

そしてふと、ページをめくる手が止まる。

「・・・んー」

テツドは口いっぱい葉巻の煙を吸い込んだ。

「ミシエル・・・か・・・」

治安維持庁と連携するのは初めてではなかったもので、その違和感をテツドは感じていた。

「やけに親切というか・親切過ぎるとは思ってたんだがなあ・・・」
走り書きをじっと見ながら、テツドは身じろぎ一つせず考えていた。

単なる勘で可能性に過ぎないが、そう考えると辻褃が合う。

やがて昔の手帳を取り出してぺらぺらとめくっていたが、元に戻すと眩いた。

「作戦開始前に始末をつけちゃうか。だが、もう少し手札が欲しい

な・・・よし」

テッドは立ち上がると、事務所の鍵と財布を手に出して行った。

再び、神武海運の事務所に戻る。

「ほっ、ほんとうに、本当に君って人は・・・君って人は！」

武蔵の説明の途中で、既に仁王立ちして両手に拳を作って震えているのは時雨だった。

「ここまでが私の当初の計画だったが、テッドが噛ませろといってきたな」

「えっ」

「任せた結果、新たな情報がもたらされた」

「・・・えっ?」

武蔵が眉をひそめ、まっすぐに時雨を見た。

「落ち着いて、聞いて欲しい」

山城がゆらりと武蔵を見た。

「・・・そ、そんな・・・う・・・嘘だ・・・ぼ・・・僕は・・・」

武蔵の話を聞いた時雨は今度は真っ青な顔でがくがくと震えていた。

龍驤が肩をすくめた。

「ま、それなら辻褃が合うなあ。あの屑が来てからの鎮守府は文字通り地獄やった」

山城は壁の方を見ながら頷いた。

「そうね。姉様が沈んだのはあの屑の差配のせい。意図的に殺す為なら正鵠を得ていたわ」

時雨は俯いた。

「で、でも、ほ、本当に、あの司令官は深海棲艦なのかい?」

武蔵が言った。

「それを暴き、仮説が真実ならば治安維持庁と協力し、連中を一掃する」

時雨はハツとした顔で武蔵を見た。

「でっ、でも、鎮守府で司令官に砲撃したら武蔵が反逆罪で処罰されるんじゃないのかい!?!」

武蔵はきよとんとした。

「忘れたのか？ 私は自分の意思で鎮守府を後にした以上、既にお尋ね者だ」

「・・・」

「だがお前達は私が脅して随伴しただけだ。だからあの司令官が居なくなり、まともな司令官が来たら戻れば良い」

「そんな理屈は通らないと思うよ、武蔵」

「心配ない。ケイルに頼んで調べてもらったが、お前達は手配リストには入ってない」

「えっ？」

「勿論私は誘拐と逃亡の2件に司令官殺害まで加わるから極刑確定だな。はっはっは！」

「・・・！」

パン！

乾いた平手を打ったのは目に涙を一杯に貯めた時雨で、武蔵は痛みを感じる前にただただ驚いていた。

時雨が自分に手を上げた事などなかったからだ。

山城が壁を見たまま呟いた。

「貴方の犠牲の上に私達だけ鎮守府に戻って、元通りやっていけると思ってるの？」

「・・・」

「神通があれだけ自分を追い込んだのは、目の前で那珂と川内が沈んだからだし」

「・・・」

「皆、姉妹を、友人を思いあつてる。貴方が死にたがってるのも大和の元に行きたいからでしょ」

「！」

武蔵が真顔に戻って顔をそむけた時、時雨はハツとした顔になった。

そうだ。武蔵も、目の前で大和の轟沈を見ているのだ。

その後も全く変わりなく過ごしている・・・そう見せていたのか？

・・そうだ。

だって。

鎮守府の中でもとびきり仲良しだった武蔵と大和だ。

姉が沈んだ事に武蔵が何も感じない筈がないではないか。

あまりにも変化が無かった事をもっと疑うべきだった。

時雨は自分の頭に拳を打ちつけた。

僕は、僕はどうしてこんな、こんな表面的にしか物事を見られないんだ！

2 発目・・・

「もう止めなさい、時雨」

山城の静かな声がしたが、時雨は自分が許せなかった。

3 発目・・・

「し、時雨、もう止めときょう？コブになるで？な？」

龍驤の声を無視して4発目を振りかぶった時、背後から時雨は腕を掴まれた。

時雨がギツと振り向くと神通が立っていた。

いつの間に入ってきたんだと、時雨と龍驤は驚いた。

山城は時雨を掴もうとしていた手を戻し、ちらりと神通を見て微笑んだ。

武蔵は驚くよりも先に、いつもと様子の違う神通に既視感を覚えていた。

あの・・・身のこなしは・・・

第8話

神通は時雨の手を掴んだまま、俯き加減に言った。

「武蔵さん」

「・・・ああ」

「今のお話、全て本当なんですね？」

「私の計画も、テッド達から聞いた話も、何もかもそのまま言ったぞ」

神通は目を瞑り、頷いた。

「・・・なるほど。良く解りました。それならば全て腑に落ちます」

武蔵が神通を見上げた。

「どういう事だ？」

神通は目を細めたまま、淡々と言った。

「現在の、深海棲艦である事が疑われる司令官のオリジナル、すなわち殺された司令官は私の知り合いです」

「!？」

「ですが、着任当初から違和感がありました。ご無沙汰していますと申し上げてもそっけない返事だったり」

「・・・」

「そして夏には海水浴にお誘いしたのに、泳ぎは嫌いだと拒否された」

「・・・」

「私を知る限り、彼は水すましと呼ばれるほど泳ぎが好きだったはずなのです」

「・・・」

「違和感はどれも小さい物でしたが、まとめてみればかなりの差です」

「・・・」

「容姿に騙されてましたけど・・・深海棲艦が化けていたのなら全て辻褄が合います」

神通は武蔵に顔を向けた。

その目はかつて秘書艦と第1艦隊旗艦を務め、出撃の為に海原に立った時の、あのキリツとした顔だった。

「神通・・・」

「軽巡洋艦、神通。鎮守府に巢食う深海棲艦を成敗する為、いきますっ！」

龍驤が神通に向かって言った。

「あー、えつとな、神通」

「さあ、皆さんも出陣の支度を！」

「出発は明日の夜やから、今から行くと誰も居らんで？」

「・・・えっ？」

慌ててカレンダーを見た神通は見る間に真っ赤になると

「あ、あの、日付・・・間違えてました。か・・・顔が火照ってきてしまいました」

そう、囁いた時。

「ああ・・・ああ神通・・・やっと・・・僕達の所に戻って来てくれたんだね」
そう言つて神通にしがみついたのは時雨だった。

神通は時雨をしっかりと抱きしめながら、こくりと頷いた。

「お話を伺つて霧が晴れた気がします。長い間、私を見捨てないで頂き、ありがとうございます」

視線を時雨から順に、武蔵、山城、龍驤へと移しながら続ける。

それはかつて、旗艦として作戦を説明している時の神通の姿そのものであった。

「私、この件に決着をつけます。私の姉妹の為、沈んだ皆の為、そして・・・」

視線を再び時雨に戻すと、神通は澄み切った声で宣言した。

「赴任前に殺された、司令官の為に！」

武蔵が不敵に笑った。

「それでこそ我が艦隊の旗艦殿だ。喜んでお供するぞ」

時雨が大きく頷いた。

「僕も行くよ。神通と同じ気持ちさ」

山城は微笑みながら頷いた。

「全力で姉様の敵討ちをするのも悪くないわ」

龍驤はにこりと微笑んだ。

「しゃあない。うちも行かんとあかんやろ」

神通は武蔵に向き直った。

「テッドさんや治安維持庁の皆様にもお伝えしなくてはなりません」

武蔵は頷いた。

「強力な助っ人が来るのだ。テッド達も喜ぶだろう」

神通は尋ねた。

「ところで、どうやって司令官が深海棲艦が化けていると証明するのですか？」

武蔵はニツと笑った。

「さっきの話を聞いて方法を思いついたが、確証を得たいな。明日テッドの所で聞いてこよう」

神通が頷いた。

「解りました。ではその結果を私に報告してください」

「ああ。一緒に行っても良いだろう」

「そうですね。あと、皆さんは…といっても私が主ですけど、艦装の手入れと給油を済ませておいてください」

時雨が頷いた。

「弾薬の補給も要るね。明日は武器屋にも行こう」

山城が微笑んだ。

「私は艦娘兵装とは異なるものも仕入れてくるわ。役に立つ筈よ」

龍驤が続けた。

「それなら食料も備蓄しといった方がええで。すんなり通れんかもしれへんし・・・」

龍驤は神通を見てニツと笑った。

「行き詰まったら練乳でも舐めれば良いアイデアが浮かぶかもしれんしな」

神通が再び真っ赤になった。

「あ、あの、あの、それは」

龍驤がすつと真面目な顔になった。

「皆、それくらい肩の力抜きや。力んだら上手く行くものまで失敗するで？」

武蔵が頷いたあと、そつと龍驤に話しかけた。

「ところでもう全部白状したのだから、そろそろビーフシチューが食べたいのだが・・・」

龍驤は山城が頷いたのを見てニコツと笑った。

「お許しも出たようや。武蔵は生クリームやのうてサワークリームやったな。パンはどれがええ？」

「ミツシユブロート。たっぷり添えてくれ。腹が減った」

「よっしゃよっしゃ、待つとき。大盛りで持ってくるで！」

廊下に出た龍驤はにこりと笑った。

神通が元に戻った事で一気に空気が変わった。

これはいける。うちの勘は当たるんやで！

龍驤は調理室に向かって軽やかに走って行った。

翌朝。

「これは・・・旗艦失格ですね。すみません」

神通達は日の出を合図に倉庫に集まって艤装の手入れを始めたのだが、神通の艤装は長らく展開していなかった。

あまりに久しぶりに展開したそれは赤錆が浮き、蜘蛛の巣が張っていたのである。

時雨が苦笑しながら言った。

「確かに、それどころじゃなかったけどね・・・」

龍驤は首を振った。

「艤装がこれじゃ元気もなくなるで・・・」

山城が神通の主砲を外して呟いた。

「これは使うと危ないわ。兵装一式交換ね」

「でも、そんなお金は・・・」

その時、倉庫にドロドロドロという低いエンジン音が響き渡った。皆が周囲を見回すと、入り口に真っ白なダツジラムのバンがピタリ

と寄った。

武蔵がプライベートの時に使う車である。

「ほら皆、夕島整備工場と武器屋を回るぞ！早く乗れ！」

運転席からそう怒鳴った武蔵は、歯を見せてニツと笑った。

第9話

「んもー、なーにー?」

ウサギ柄のパジャマ姿で出てきたアイウイは、眠そうに目をこすりながら言った。

「今まだ0430時だよ。開店時間まで4時間はあるんだけどー?」

武蔵は構わずに続けた。

「どうしてもな、全員の艤装をオーバーホールしたいのだ」

途端にアイウイはパチリと目を覚ました。

「・・・5人分?」

「ああ」

「即金で?」

「即金だ!」

ぴこんと良い笑顔になると、アイウイは

「すぐにぱりっち起こしてくるね!待ってて!」

と言いながら家の中に消えたのである。

「起き抜けに随分とへビーな物見せてくれたわねえ・・・」

「あ、あは、あはははは」

うつすらと寝癖がついたまま、ビットは作業着姿で現れた。

だが神通の艤装を見た途端、一気に眉をひそめてジト目になった。

「兵装はデリケートなの。艤装は日頃のメンテナンスが大事なんだからね」

「面目次第もございません」

武蔵は肩をすくめながら言った。

「長きに渡る療養の間、我々も艤装まで手が回らなかったのだ。許せ」

「これは預かりになるわよ。再塗装とか含めてじっくり1週間くらいかけたいわね」

「ダメだ。どうしても今日中にやってもらいたい」

ビットがお前の気は確かかと言う目で武蔵を見た。

「ちよつと、幾らなんでもこれを今日中にどうにかするなんて無理過ぎるわよ!」

「他の4人分もだ。兵装は新しく買うから艀装部分だけで良い。頼む」

「武蔵さんの艀装くらい状態が良いならともかく、他の人の完全分解が要るわよ?」

「・・・」

「海の上で動かすんだし、特に神通さんのは防錆塗装からやり直したいし・・・あーもーこんなになって・・・」

武蔵はアイウイの方を向いて言った。

「1割増」

アイウイが言った。

「3割増」

「くっ」

「起きぬけのばりっちは機嫌悪いんだよー」

「むう」

「へそ曲げちやうと本当に1週間かけちやうかもー」

「1割5分!」

「2割5分!」

「・・・1500時まで」

「1900時!」

「間に合わん!」

「じゃあ2割増で1700時」

「・・・手を打とう」

ガシリと握手する武蔵とアイウイ。

武蔵から受け取った札束を数え終えると、アイウイはビットの方にごやかに近づいていく。

ビットは物凄く嫌そうな顔でアイウイを見て口を開いた。

「ねえ島ちゃん、解るでしょ。5人分の艀装を12時間で直すなんて幾らなんでも」

「出来たらスタビレーのフルコンプリートレンチセット買って良いよ」

「やらせて頂きます!」

山城は頷いた。アイウイは優秀な経営者だ。

「46cm用の三式弾!?無い無い、41cm用が2発あるだけだぜ武蔵さん」

「是が非でも要るんでな。今日はその他兵装もまとめて買う。な?頼む!」

夕島整備工場を後にした5人は武器屋に足を運んでいた。

渋い顔をする武器屋の耳元で武蔵が囁いた。

「誰にも言わぬ。我々神武海運の口の堅さは知ってるだろう?」

武器屋は渋々席を立つと店のドアをロックし、「closed」の札をかけた。

「..本当に黙っててくれよな」

「さすがだ。頼りになる」

「ちえつ。年末オークションの目玉商品にしようと思ってたんだがなあ」

「まあまあ、そう言うな」

武器屋がレジ脇のくぼみを押すと、ビーっという音がして床板の一部がするりと開いた。

穴の下には梯子と薄暗い地下室が見える。

武器屋はその中に入りかけて、慌てて武蔵を見た。

「..おい、ついてくるなよ?」

武蔵がにやりと笑った。

「フラグか?フラグだな!」

「ちっ違..ええと..さ、酸素が少ないんだ。だから危ないんだ。絶対来るなよ?!」

「そういうな主よ、さあさあ早く行こう!早く!」

「やめろ馬鹿!押すな!」

だが、身軽に二人の間を抜けて穴に飛び降りたのは神通だった。

「ああっ!?!お嬢ちゃんダメ!」

地下室の底に降り立った神通は壁にかけてあったランタンを手に、どンドン奥に向かって歩いていく。

「ちよ!?!待って!ほんとにそっちはダメ!あー!」

慌てて武器屋が下りていき、武蔵達も続いていった。

1時間後。

「……とほほ、年末年始の目玉商品根こそぎ持っていきやがって」
がくりと肩を落とす武器屋を尻目に、5人は手にした兵装を見て頷いていた。

「さすが町一番の武器屋さんですね。53cm艦首酸素魚雷をこんなにお持ちとは」

「そうだね。あと、三式爆雷とソナーもとても良い状態だ」

「46cm主砲の重みはやはり心強いな！三式弾もこれだけあれば十分だ！」

「武蔵い、ちゃんと零観も持ちや？それにしても彗星一二甲は久しぶりやなあ」

「私はC4のフルセットと偵察用ドローン、主砲は試製35.6cm三連装砲2セットで良いわ」

武器屋は涙目になりながら電卓を武蔵の目の前に突きつけた。

「ちゃんと払ってくれんだろうな？ツケなんて許さねえぞ？」

武蔵は持参したスーツケースを開き、札束を見せてニツと笑った。

「私がそんな野暮を言うと思うか？」

昼過ぎ。

「ええ。大変助かります。大歓迎ですよ」

全員で参加する事を伝えるに行くと、ミシエル達は既に事務所に居て、テッドと話をしていた。

葉巻に火をつけながらテッドが言った。

「それならもうちょいすつきり分けられるな。情報もアップデートされたしよ」

武蔵が眉をひそめた。

「どういう事だ？」

「それもあってミシエル達を呼んだ。お前達にも連絡する所だったんだが手間が省けたぜ」

「というと……情報源は」

「先に言っとく。とびつきり胸糞悪い話だから覚悟して聞きな」

時雨がぐうつと拳を握ったとき、サマンサが時雨の肩にそつと手を置いた。

慌てて時雨が振り返ると、サマンサはにこりと笑った。

「大丈夫。落ち着いて聞いてね」

領きながら時雨は何か思い出せそうな気がしたのだが、テッドが話し始めたので思考を止めた。

「ムフアマスが入手したのは計画書の複製だ。最終草案だから大きな変化は無いだろうよ」

そう言ってテッドが取り出したのはcorrosion計画と記された冊子だった。

第10話

corrosion計画。

それは深海棲艦の天敵である艦娘と直接対峙するのではなく、内側から崩壊させようという計画である。

具体的には司令官の交代を狙い、移動中の司令官を道中で殺害し、深海棲艦が司令官に化けて着任する。

着任後は所属艦娘達をわざと不利な編成や兵装で送り出し、長期的に少しずつ轟沈させていく。

長期作戦とする理由は3つ。

1つは長く悪辣な運用をして艦娘達に恨みを蓄積させ、1人でも多く深海棲艦側に引きずり込む為。

もう1つは短期間に多数轟沈させると大本営に嫌疑をかけられて憲兵隊が来るので、それを防ぐ為。

最後は艦娘の轟沈と並行して、大本営が補給してくる資源を深海棲艦側に少しでも多く横流しする為である。

これらを丁寧に行えば人間の司令官が行うブラック運用と見分けは困難で、発覚の恐れは低いと記されていた。

「想像以上に・・・邪悪だね」

時雨の言葉にテッドを始めとする全員がうなづく。
数秒の沈黙後、

「次に、この計画に関与する連中の組織図があるから説明するぜ」

テッドが再び説明を始めた。

まず、後方支援を請け負う「第1セクト」は3つの部隊に分かれている。

1つは司令官の転勤情報等を収集する「諜報部隊」

2つ目は鎮守府に送り込む深海棲艦に司令官の基本教育を施す「訓練部隊」

「

3つ目は横流しされた鎮守府の資源を回収し分配する「資材部隊」次に、実行部隊である「第2セクト」には3つの部隊がある。

1つは道中の司令官を痕跡を残さぬよう殺害し、身の回りの品をす

りかえる「処置部隊」

2つ目は憲兵隊や大本営直轄鎮守府調査隊に対する懐柔工作を行う「制御部隊」

そして、鎮守府に送り込まれた深海棲艦達が所属する「運用部隊」である。

最後に、上記全ての状況を把握し、企画や統括を行う部隊が「第3セクト」

これらの構成員は本計画専用創設された「第41研究局」に居ると記されていた。

裏表紙を見て、ミシエルが言った。

「それは海底国軍の紋章ですね。これで本件に海底国軍が組織的に関与している事が明らかになりました」

サマンサはタブレットを見ながら頷いた。

「海底国軍の第41研究局は単独で、我々との海境に近い海底山脈の中にあります。そちらは我々が処理します」

テッドが紫煙を吐きながら続けた。

「ムフアマスの話だが、現在は本稼動前にデータを集める為の最終テスト段階らしい」

「・・・」

「そのターゲットとなった鎮守府は・・・もう言うまでも無いよな？」

神通が頷いた。

「他の鎮守府にこの地獄が及ぶ前に始末出来る分だけ、良かったかも知れませんか」

山城は目を細めた。

「私達はまんまと嵌められたってわけか。ただ、奴らの計画が少しだけ狂ったとすれば」

龍驤がくすくす笑いながら言った。

「武蔵が大人げなかったつちゆうこつちやな」

武蔵が苦笑した。

「鎮守府強行離脱をやる艦娘なんて居ないからな。ただ、今思えば納得出来る事がある」

「なんや?」

「出て行くと言った時、普段あれだけ傲慢な司令官が急におたおたし始めたのだ」

「ほう」

「私は怒り心頭だったから足早に司令官室を辞したが、今思えばあれは・・・」

「マニュアルに書いてなかったから対応に困った、という事ですね」
「そういう事だろうか」

ミシエルが静かに言った。

「司令官は深海棲艦である疑いが濃厚ですがまだグレーです。黒の証拠を見つけないけません」

武蔵がニツと笑った。

「案外簡単かもしれんぞ?」

全員が武蔵を見た。

武蔵はミシエルに言った。

「1つ確認したい。貴殿達は海中でも変身を継続出来るか?」

ミシエルは首を振った。

「いいえ。半身が海中に没すれば変身は解かれます。変身中は海中用の生命維持装置が起動出来ないからです」

武蔵は頷いた。

「よし、確認は私が行う。我々は乗り込む班と近海からの支援組の2手に分かれよう」

神通が頷いた。

「武蔵さんが乗り込むなら私も」

「いや、神通と時雨、龍驤も待機して欲しい」

「えっ?」

「山城、お前は面の皮が厚いからな」

山城がじとりと武蔵を見た。

「ポーカーフエイスの訓練が出来ているだけです」

「まあそういう事だ。顔に出ると困るんでな」

テッドが言った。

「じゃ、明日の仔細とタイミングをまとめていくぜ」
サマンサが一人呟いた。

「課長・・・間に合うかしら」

夕刻。

「さ、最速記録更新よ・・・島ちゃん・・・私・・・頑張った・・・えへへ」
「うんうん、さすがぱりっちだよねっ！」

放心するビットに膝枕をしながら、アイウイは一団に向かって声をかけた。

「ぱりっちが命がけで整備したんだから大事に使ってよ！」

カシヤリ。

艦装に53cm艦首酸素魚雷を装填しおえた神通が振り向いた。

夕日を浴びて立つその姿は闘志に満ちていた。

「ええ・・・使い切らせて頂きます」

その夜。

「俺の見送りなんて滅多にねえ事だからよ、ラッキーだなお前達！」

テッドが冗談めかして言うと、神通がすうっと流れるように敬礼した。

「はい。これまでのお力添えに感謝致します。テッド様」

テッドは神通を指差しながら武蔵を見た。

「なあおい、武蔵。こいつはこんなに堅物なのか？」

武蔵は苦笑した。

「まあ、時雨がお茶目に見えるくらいだな」

「おいおい。鉄筋コンクリが豆腐並みって事かよ・・・なあ、神通ちゃん」

神通が敬礼のまま、困ったような目で見返した。

「はっ、はいっ？」

テッドは素早く神通の頬を両手の人差し指でぶにぶにとつついた。
神通はビクリとして思わず声を上げてしまった。

「ひゃんーび・・・びっくり・・・しました・・・」

テッドは優しく微笑み、まっすぐ神通を見た。

「肩の力が入り過ぎだぜ。力むな。しなやかに行け。お前なら出来る」

「あ・・・」

「しっかりとめえの未来をもぎ取ってきな。待ってるぜ」

神通はにこりと笑った後、

「・・・解りました。では、行ってまいります！」

そう言って静かに岸壁を離れたのである。

テッドは波止場の先に消える灯火を見送った後、カリカリと首筋を掻き、呟いた。

「ああ痒い。くそ、柄じゃねえ・・・俺の柄じゃねえ・・・所長の真似したって付け焼刃だぜ、くそっ」

そしてくるりと振り向くと、歩きながらスマホを取り出した。

「さっさと本物に電話しねえからだな。俺の仕事を済ませるか」

第11話

テッドがかけた先には数コールで繋がった。

「こんばんは。順調かい？」

テッドは呼びかけの声を聞き、軽く息を吸い込むと答えた。

「ええ。今しがた神通が出撃して行きました。所長」

「解った。こちらでも向かわせているよ。あと、そんなに畏まらなくて良いんだよ。」

「いえ。今度の件、俺の勘を信じてくださり、ありがとうございます」
「いつも通りに応じたただだよ。117研以来、ずっと信じてるからね」

「・・・」

「それにしても、まだ帰ってくるつもりは無いのかい？大山さん」

「俺はとうの昔にクビになりましたよ、所長」

「君は行方不明で配属保留というだけだよ。もう桶やんも左遷されたしね」

「あの分からず屋は齒の2、3本くらい折っちまいたかつたんですがね」

「だったら戻ってきたらいい。口論でぶちのめすなら誰も何も言わないよ」

「所長の居ない117研なんて真つ平ですよ」

「君が所長として117研を仕切ってくれたら良いじゃないか」

「俺は人を引つ張るのは苦手です。何度も言いましたよ」

「引つ張れる部下を置いて任せたら良い。君の解析力は天下一品だ」

「俺はここでこうしてるのが性に合ってますよ」

「とほほ。つれないねえ」

「所長の方はお変わりありませんか？」

「ああ、ちよつと前、島流しにされたよ。今はソロル島に居る」

「・・・は？あの魔境に島流しされたんですか!？」

「魔境？ま、まあ、今となっては笑い話だし、結構居心地良いんだよ。」

「・・・相変わらず海軍の上はロクデナシばかりのようで」

「そうなんだよねえ。ここらで誰かに空気を入れ替えて欲しいなあ」
「・・・」

「どっかに頭脳明晰で腐敗不正に勘働きが鋭い人は居ないかなあ」

「海軍内で探してくださいよ」

「そうだ！配属保留の人が1人居るじゃないか！」

「だから俺じゃなくて。用件は伝えたんでもう切りますよ」

「まあまあそう言わないで。今度夕食でも一緒に食おうよ、ね？」

「いや・・・だから・・・」

「今回の結果報告とか、知らせてくれた礼もしたいしき」

「俺の方が礼を言いたいくらいですから、結構です」

「おお！じゃあその礼に海軍に戻ってくるってのはどうだ？」

「コントじゃないんで！」

「解った解った。とりあえず今回の件、後は任されたよ。結果は知らせるからね」
ピッ。

白目を剥きながらテッドは唸った。

「あーもう、所長と話すところだから嫌なんだよ・・・くそ」

そしてシガーカッターで葉巻の先を切り落とした時、ふと

「配属保留って・・・今更過ぎるだろ・・・ないない」

そう呟いた。

未明頃。

「皆さん、お疲れ様です。駐留ポイント到達です」

神通は正面を見たまま告げる。

皆も答えないが、それぞれの方向を見たまま耳を澄ませ、次の指示を待っているのが背中で解る。

この連携感、この面々だからこそその物だった。

懐かしい感覚に安堵しながら、神通は続けた。

「鎮守府の現状はケイルさんから頂きましたが、所属艦娘数が1人も減っていない等、腑に落ちない点があります」

「・・・」

「よつて計画通り、日が昇るまでに各自準備をお願いします。散会！」
5人は弾かれたようにそれぞれの海へと進んでいった。

同時刻、柿岩家会議室。

「・・・では、本計画は海底国軍の総意ではなく、一部の造反者によるもの、という事ですね？」

「その通りだ。貴殿の連絡で知る事になったが、貴方達との協定を乱す行為であり誠に遺憾だ」

モニタに写る海底国軍の副将軍は大仰に首を振ってみせた。

軽く溜息をついた後、防空棲姫は更に言葉を続けた。

「第41研究局の越境ならびに領海内での身勝手な振る舞いについて、我々は処置を始めます」

「海境に居並んでいるのは勿論存じているし、阻害するつもりはない」
「今度の不始末に関し、海底国軍側としてどう対応なさるおつもりですか？」

海底国軍の副将軍は隣に座る参謀長から渡されたメモを読み上げ始めた。

「第1に貴作戦への一切の阻害をしない事。第2は貴作戦で消費した資源の7割を負担する事」

「・・・」

「第3は本件に関する内部調査を行い、残る関係者が居れば粛清する。それで手を打って頂きたい」

「ではこちらの作戦行動中はそちらの海境警備部隊から攻撃はない。よろしいですね？」

「既に第41研究局より内側まで下がらせた。ただし偵察部隊は待機中だ。海境改変を心配する向きがあつてな」

防空棲姫はぐっと奥歯を噛んだ。尤もな話だが、先に侵略行為をしたのは海底国軍ではないか。

「では作戦終了後、負担資源量について改めて交渉を」

「いや、その必要は無い。先程と同様、参謀長に要求内容を連絡頂けれ

ば即時手配する」

「よろしいのですか？」

「それが我々の誠意だと思つて欲しい。お手数をかけるが、完璧に、肅清願いたい」

画面越しではあるが、副将軍が小さく頭を下げたのを防空棲姫は見逃さなかつた。

「解りました。では引き渡し場所を含めてご連絡致します」

通信を終えた後、浮砲台組長が話しかけた。

「研究局の規模を考えれば相当上位の関与が疑われるが：トカゲのなんとやら、か？」

防空棲姫も頷いた。

「そこは引き続き情報収集にあたるとして：皆様よろしいですね？」

居並ぶ面々が頷いたのを見て、防空棲姫は課長に声をかけた。

「課長」

「はいっ！」

「我々元老院は全作戦を承認します。残らず殲滅するのは我々の本意でもあります」

「はっ！」

「徹底的に叩いてください。跡を見た海底国軍の兵士が震え上がるほどに」

顔を上げた課長が見たものは、ぞつとするほど殺気を漂わせた元老院の面々の姿だった。

「・・・は、ははっ！直ちに開始します！」

夜明け前、海底国軍海域内。

ミシエルは周りを囲む面々に頷いた後、通信機の回線を開いた。

「課長、ロシア極東班、北米班、東南アジア班、オーストラリア班トノ合流完了、諸準備完了デス」

「了解。それから待たせたわね。先程、全作戦の最終承認が下りました」

「ハイ」

「貴方の担当する作戦がメインです。海底地形の温存に留意する必要はありません。一切を粉碎してください」

ミシエルは大きく頷きながら、待ちに待った一言をゆつくりと告げた。

「総員二告グ。連合艦隊ニヨル攻勢殲滅作戦ガ承認サレタ。予定通り展開セヨ。目標、海底国軍第41研究局」

ザザザツと兵装を展開する音が響いていくなか、ミシエル自身も兵装を展開しつつニイツと笑った。

「サア、ヤルワ。砲雷撃戦用意！」

こうして研究所を取り囲む5大隊、計6万体による大規模作戦が開始された。

終了後、それは一方的な、あまりにも一方的な展開だったと偵察部隊は報告した。

「・・・クソツ・・・クソツ・・・クソオツ！副将軍メエエエ！」

報告を聞いた「長官」は手当たり次第部屋の物を壁に叩きつけて壊したという。

第12話

明け方、第4219鎮守府。

「一体なんだ、うるさいな！」

普段の起床時間より遥かに早く秘書艦の不知火に起こされた司令官は、苦りきった顔で司令官室に顔を出した。

「申し訳ありません。ですが、武蔵が帰ってきましたので」

司令官は呆然とした表情で不知火を見返した。

「・・・確かか？」

「艤装の刻印を確認致しました。間違いありません」

「・・・他には？」

「山城も居ります。同じく確認済です」

「どこに居る」

「港に待機させております」

「・・・連れて来い」

「かしこまりました」

不知火が去ると、司令官は所属艦娘帳簿を取り出した。

「・・・神通、時雨、龍驤は逃亡中に沈んだか？まあ最終段階だったからな」

パタンと帳簿を閉じた司令官はニツと笑った。

今なら充分クロージングに間に合う。

第1艦隊の全艦轟沈は実に良い手土産になる。

コンコンコン。

不知火のノック音に、司令官はどかりと席に腰を下ろしつつ声を張り上げた。

「おう！入れ！」

ガチャリ。

「お連れしました」

不知火は武蔵と山城を司令官の前に立たせると、自分は2人の少し後ろに控えた。

司令官は無言で武蔵と山城をじつと見ていたが、やがて薄笑いを浮かべた。

「・・・お前達を逃亡兵として処分するのは簡単だ」

2人は真つ直ぐ見たまま無言を貫いていた。

「・・・」

「だが、折角建造したのだから、その分働いてもらわねばならん」

「・・・」

「海軍の為に働く気があるから帰ってきた、そういう事で良いんだな、武蔵？」

武蔵はゆつくりと頷いた。

「ああ。海軍の為に、な」

司令官は上機嫌で立ち上がった。

「よしよし、それなら良い。早速働いてもらおうぞ」

司令官が差し出してきた手を武蔵はきゅつと握り返しつつ、口を開いた。

「ところで、司令官よ」

「なんだ？」

「神通から聞いたんだが」

「ん？」

「お前は海軍学校時代、みずすましと言われたそうだな」

途端に司令官の表情が曇った。

「・・・えっ？あつ・・・ああ、そう・・・だ。そうだったな。それがどうした？」

司令官が握手の手を離そうとしたが、武蔵は握ったままニツと笑った。

「なに、簡単な話だ。ちよつと泳ぎを教えてもらいたくてな」

そう言つて司令官をやすやすと持ち上げると、窓に向けて振りかぶった。

「おい！何をする！うわああああっ！」

その時。

「司令を離しなさい！」

武蔵が不知火の方を振り向くと、不知火が真っ直ぐ武蔵に主砲を向けていた。

ガチン。

不知火の兵装から、砲弾を装填する音が響いた。

その音を聞き、山城が目を細めつつ不知火を見た。

「・鎮守府内での兵装使用や実弾装填は厳禁の筈ですけど？ 不知火さん」

「今は非常事態ですから例外です」

「貴方が決めたルールですし、如何なる時にも例外は無い。そういったのは貴方ですよ？」

「・・・」

「ご記憶にありませんか？ それとも、ご本人では無い・・・とか？」

山城がゆつくりと不知火に問いかけると、不知火はチツと舌打ちをした。

そして武蔵の手をふり解こうともがく司令官に向かい、不知火は今までとは明らかに異なるしゃがれ声で怒鳴った。

「おい、こいつらとつとと始末しやうぜ。 出撃時の轟沈に拘る必要はねえだろうがよ」

司令官はぎよつとした顔で不知火に答えた。

「馬鹿！ お前何言ってるんだ！」

山城は小さく頷くと続けた。

「やっぱりね」

武蔵は怪訝な顔をし、司令官を体ごとぶら下げたまま山城に尋ねた。

「どういう事だ？」

山城は不知火から目を離さずに言った。

「corrosionの意味、知ってる？」

その言葉に司令官と不知火がピタリと固まった。

武蔵は苦笑いを浮かべた。

「あー・・・いや・・・」

山城が続けた。

「corrosionには腐食の他、侵食という意味もあるの」
「侵食・・・」

「そこにいる司令官が深海棲艦、それも立派な侵食だけど・・・」
司令官がビクリとする。

「不知火も深海棲艦・・・いいえ、不知火だけじゃなさそうね」
不知火が山城を睨みつけた。

「デメエら・・・どこまで知ってる?」

山城はそれに答えず、懐からリモコンを取り出した。

怪訝そうな顔をする司令官、不知火、そして武蔵を前に、山城はニツと笑うと、

「Let's Roll♪」

そう言つてスイッチを押した。

ズン!

巨大な爆発音の後、部屋がゆっくりと傾き始めた。

「い!?!」

ギ・ギ・ギイイイイイ・・・

部屋の傾きが収まったのを見計らうと、武蔵は倒れてきたソファをどかし、むくりと起き上がった。

そして今は床となった司令官室の壁を見て、山城が何をしでかしたかを悟った。

「山城・・・お前、足場を爆破したな?」

「(名答)」

司令官は開いた窓から「真下の」海に落ちかけていた。

司令官室は今や僅かな足場が支えるのみで、部屋全体がゆらゆらと揺れている。

司令官は自らの体を両腕で支えているが、手が滑るのか、じりじりとずり下がっている。

だが既に、白かった海軍の制服は深海棲艦特有の艶のある黒色に変わり、髪は長く伸びていた。

「シ、不知火! 不知火助ケテクレ! 引キ上げテクレ!」

だがその不知火も、今や床となった壁に下半身が突き刺さってお

り、艀装が抜けない状態だった。

「くっ！こっ、こっちも抜けねえんだ！」

山城は澄ました顔のまま、不知火に声をかけた。

「ねえ不知火、あなた達の計画はもうおしまいだけど、何体くらい入れ替わってるの？」

「こっ……答えるわけが」

「うふふ……そうこなくっちゃ。白状されたらお楽しみが減る所だったわ」

悪辣な満面の笑みを浮かべた山城に、不知火の顔が引き攣った。

「まっ、まさか」

「その、まさか」

山城が再びリモコンのスイッチを押した。

ズン！

「!!!」

全員の重力が、一瞬なくなった。

スローモーションのように近づいてくる海面。

司令官役だった潜水力級は氣を失って海中に没し、不知火は絶叫した。

「うっ、うわあああ落ちるうううううう!!!」

武蔵は齒を食いしばりながらその瞬間を待った。

ドボン！

海面に叩きつけられた司令官室は木っ端微塵に砕け散った。

「……ぶはっ！」

武蔵は自身の頭上にあつた壁の塊をどけ、艀装を動かすと海面に立った。

そして周囲を見渡し、同じく浮き上がった山城を怒鳴りつけた。

「山城！お前鎮守府全体の足場を爆破したのか！」

「そうよ？」

「いきなりやるな！そしてそういう大事な事は先に言え！」

「敵を欺くには味方から、よ。なんとも無いでしょ？」

「無表情過ぎるぞお前は！」

「ああほら、私は面の皮が厚いし〜」

「・・・意趣返しだな？根に持つてるな？」

「さあ？」

「と、とにかく：艦娘が深海棲艦じゃなかったらどうするつもりだったんだ！」

「何の為に2段発破にしたと思ってるのよ」

「えっ？」

「私は艦娘も深海棲艦と入れ替わってる可能性を考えてたの」

「・・・」

「1発目は秘書艦の真贋を問わず、海に投げ落とす事を阻止しようとした場合に使う為」

「・・・」

「2発目は深海棲艦が艦娘とも入れ替わってるなら、全員白黒つける為、よ」

武蔵はハツとして、周囲を見回した。

すると既に、数体の深海棲艦が海面に浮かび、憎悪の目で二人を睨んでいた。

「ははっ・・・掃討作戦開始だな」

「ええ、あの子達も気づいてるでしょ。始めるわよ」

その一言を合図に、山城と武蔵の主砲が火を噴いた。

射線上に居た数体の深海棲艦は木っ端微塵に吹き飛んだ。

鎮守府の瓦解を見て、時雨は神通に言った。

「僕達も鎮守府に行かないと！二人だけじゃ・・・」

だが、神通は首を振った。

「龍驤さん、ここから発艦して空爆を始めてください」

「よっしゃ、うちの周辺警備は任せただ」

「ええ。時雨さん、龍驤さんの護衛をお願いします。潜水艦に気を付けてくださいー！」

「わ、解ったよ・・・神通は？」

神通は最大戦速に設定しながら答えた。

「武蔵さん達に加勢します！」

第13話

鎮守府で戦闘が始まった頃、柿岩家会議室。

会議室には浮砲台組長と防空棲姫だけが残っており、浮砲台組長が戦況報告を読んでいた。

「研究局は木っ端微塵、鎮守府はまもなく開戦。こちらは状況に応じて適宜支援を出しましょう」

「ええ。課長には許可しています」

「懸案は大本営内部ですな。今後3課で対応を？」

防空棲姫は静かに首を振った。

「その為のアンダーカバーです。彼女達なら大本営の始業前に始末出来るでしょう」

浮砲台組長は眉を顰めた。

「いささか4課を使い過ぎではありませんかな。881研の至近距離なので？」

防空棲姫は両手を組み、目を伏せたまま言った。

「・・・881研の特殊砲弾にしろ、今度のフォックスハントにしろ、緊急度や重大性は最高レベルです」

「ならば今後、4課の増員強化は必須となりましょう。交代要員も含め、早く手を打つべきです」

「異存はありませんが、4課の特殊性を考えれば適任者は大変少ないのが実情です」

浮砲台組長は腕を組んだ。

「その通り。目立たず溶け込み、長期間の待機に耐え、真夜中の指令でも迅速かつ確実に事を・・・」

ピッピッ

浮砲台組長の話を遮るように鳴ったアラームと共に、モニタに写し出された短いメッセージ。

8 stinky foxes kick out.

Walk in the park or now?

防空棲姫は頷いた。

「終わったようです。後は鎮守府のみですね」

浮砲台組長は首を振った。

「汚いスラングを使うのは止めさせねばなりませんな」

同時刻、4219鎮守府海域。

神通達の遙か後方から、戦況を見つめる9人の目があった。

「深海棲艦は何体くらいですかー？」

「反応は54体です、お姉様！」

「・・・それじゃ、艦娘はもう誰も居なかったって事ですか？」

「司令も深海棲艦ですし・・・そういう事になりますね、榛名」

「カタパルトの調子は如何ですか、姉さん」

「バッチリじゃ！とところで陸戦にならなくて残念だったな、球磨？」

「別に良いクマ。海底でもこの鉤爪があれば八つ裂き出来るクマ」

「あらかた位置特定したにや。潜水艦も結構居るにや」

ソロル鎮守府腐敗対策班攻撃隊。

彼女達は、そう呼ばれていた。

金剛4姉妹、利根姉妹、そして球磨と多摩で編成される部隊である。

その8人に臨時指揮官の龍田を加え、計9人が現場海域に到着していた。

数日前、大山事務官ことテッドからcorrosion計画を聞かされたソロル鎮守府の提督は直ちに腐敗対策班を召集。

攻撃隊は鎮守府で戦闘となった場合の支援攻撃をする為に来たいたのである。

「潜水艦2体、重巡3体がこっちに向かっています！即応を！」

榛名がそう叫んで主砲を発射すると、金剛達は主砲を、球磨達は爆雷を構えた。

「さあさあ、鎮守府の攻勢にも加勢しようぞ！カタパルト用意！」

利根がニカツと笑うと、筑摩が頷いた。

「!？」

正面の敵が砲弾の直撃を受けて沈んでいくのを見て、武蔵は呆気に取られた。

龍驤の爆撃は先程終わった筈だし、今は重巡クラスの弾着観測射撃だ。

30を越す深海棲艦達が浮かんできたのを見て、武蔵は分の悪さに唇を噛んだ。

こちらは精鋭5人だが、圧倒的な数量差は練度優性を覆す事がある。

それが押される事なく、均衡、いや、こちらが有利に押ししているという事は・・・

「一体・・・誰だ・・・」

「武蔵さん！左！」

神通の声に即座に回避行動を取りながら左方へと主砲を撃つ武蔵。

見事に深海棲艦に直撃し、また1体沈んでいった。

「懸念は解ります！両面即応体制を崩さないでください！難しいですが私達ならやれます！」

「すまぬ神通！行くぞ！」

2時間後。

「クソツ・・・チクショウツ・・・アト3ヶ月ダツタノニ・・・」

司令官役だった潜水力級は墜落後1度も海面に浮上することなく、海底を歩いて静かに撤退していた。

たかが2人の艦娘では何も出来まいとタカを括っていたのが失敗だった。

1度は海底から魚雷を撃つ事も考えたが、海底に沈んでいたデータの入ったスーツケースを見て考えが変わった。

1人沈められるかどうか解らぬ無謀な賭けをするより、まずはこれを研究局に届けなくてはならない。

テストはまた別の所であれば良い。

地上組と合意した海境まであと2km。基地まで3km。

ここでは艦娘はもちろん、地上組の連中も敵だ。

今見つければ協定合意内容を無視した越境作戦である事が地上組に発覚してしまう。

海面からはしよつちゆう艦娘達がソナーを発信しており、全く油断

出来ない。

探査と探査の合間に気づかれないように移動する。

移動しては止まり、止まっては移動する。

冷静かつ迅速に。

訓練の通りだ。落ち着け、落ち着くんだ俺。

今自分が捕まれば文字通り水泡に帰す事を理解しているからこそ、

潜水力級は最後の気力を振り絞っていた。

あの・・・岩の・・・下まで・・・まずは・・・

パシヤリ。

潜水力級は予定通り、緊急脱出時の休息ポイントに到達した。

岩の中に空気が溜まっている広場であり、潜水力級は水辺の岩に腰

を下ろした。

ここなら一息つける。ソナーも届かない。

「フー・・・ヤレヤレダ」

だが。

「コンニチハ。見ナイ顔ネ」

ハツとして振り向くと、そこには南方棲戦姫が立っていた。

地上組のバッジをつけている。

「・・・ア」

「オ互イ時間ヲ省キマシヨ？アナタ・・・海底国軍ヨネ」

潜水力級は懇願する他なかった。

「ミ、見逃シテクレ。攻撃ノ意志ハナイ。後テ海底国軍カラ地上組ニ

必ズ詫ビト礼ヲスル」

「・・・」

潜水力級はスーツケースを見せた。

「艦娘ドモヲ一掃出来ル作戰データヲ持ツテルンダ。頼ム、見逃シテ

クレ！」

「ドンナ作戰ナノカシラ？」

乗り気だと判断した潜水力級は続けた。

「鎮守府ヲ乗ツ取ツテ轟沈スルヨウ仕向ケルンダ」

「上手ク行クノ？」

「勿論ダ。俺ハ4年近ク司令官トシテ何十モノ艦娘ヲ沈メテキタ。間違イナイ！」

「……」

「カ、艦娘ハ俺達共通ノ敵ダロウ？」

「……フフツ」

「良カツタ。ナア、解ツタラ頼……」

南方棲戦姫は右手の指を3本立てながらいった。

「貴方ニ3ツノ事ヲ教エテアゲル。ソレガ答エヨ、海底国軍第41研究局ノ局員サン」

「エツ……ナゼソレヲ……」

「1ツ目。貴方達ノ侵略行為ヲ認定シタカラ、第41研究局ハ我々が既ニ消シ去ツタワ」

「オイ……ウソダロ……？」

「2ツ目。貴方達トサツキ戦ツテイタ相手ハ、私ノ妹ヨ」

南方棲戦姫はぐいっと潜水力級に近づいて言った。

「3ツ目。ダカラ貴方ガ艦娘ダツタ私ヲ沈メタ仇ナノ。会エテ嬉シイワ」

蒼白になった潜水力級の返事を待たず、南方棲戦姫は潜水力級を一瞬で粉碎した。

空母棲姫はそつと、南方棲戦姫に声をかけた。

「少しハ気が晴レマシタカ、ミシエル？」

ミシエルと呼ばれた南方棲戦姫は潜水力級の欠片が輝くのを見ながら、

「……思ツタ程デハ無カツタワ、サマンサ」

無表情のまま、そう呟いた。

第14話

まもなく昼を迎える頃。

武蔵達5人とミシエル達は互いの健闘を称えあっていた。

「そうか。周辺海域の部隊が協力してくれたのか。良かったな！」

「ハイ。局員全員ヲ殲滅シ、研究局モ山ゴト粉碎出来マシタ。皆様モ、ヨクゴ無事デ」

「いや、それがな・・・」

そこに。

「あの一、少しお話しても良いかなあ？」

一同が振り向くと、そこには金剛達ソロール鎮守府腐敗対策班攻撃隊と龍田が立っていた。

武蔵が応ずる。

「先程支援攻撃をしてくれたのは貴方達か？」

「そうよー」

「まずは礼を言う。で、本作戦は極めて特殊なんだ。その・・・あ！この2体は協力者の深海棲艦で、ええと」

龍田はくすつと笑うと

「大丈夫よー。テッドさんから今回のお話は全部聞いてますから」

武蔵は龍田の言葉を聞いてホッと溜息をついた。

「そ、そうか。どこから説明してよいやらと途方に暮れていたのだ」

龍田はかつて鎮守府だった崖を眺めて言った。

「鎮守府は・・・跡形も無いですねえ」

「う・・・そ、そうだな。だがこれはやむを得ずで」

「上がる場所も無いし、立ち話もなんですから、うちの鎮守府にお越しくださいな」

「し、しかし、そちらの司令官殿は承知してるのか？」

「勿論よ」

武蔵は神通を、ついでミシエルを見た。

神通が頷いた。

「いずれにしても、我々は軍に事と次第を説明しなくてはなりません」
ミシエルがポンと武蔵の肩を叩いた。

「サアサア、突ツ立ツテテモシヨウガナイワ。行キマシヨ」
武蔵はふと、その仕草に亡き姉の面影が重なった。

「貴方は・・・まさか・・・」

その言葉は龍田の声で塞がれた。

「じゃあ皆さん、周囲は金剛さん達が警護しますから、ついてきてくださいねー」

ソロル鎮守府で出迎えた提督達に向かって、神通はピシリと敬礼しながら言った。

「この度の支援攻撃に対し、まずは厚く御礼申し上げます」

「うん。皆それぞれ損傷があるね。話は後だ。まずは工廠で修復を。バケツを使いなさい」

「えっ? そんな、貴重な物資を・・・」

「大丈夫。長門、工廠に案内してやってくれ」

提督の傍らに控えていた長門は頷くと、

「うむ、艦娘の皆さんはこちらへ」

そう言つて5人を工廠へと連れて行つた。

ミシエルとサマンサが微笑んで見送っていると、提督は続けた。

「ところで、お二人の損傷は?」

サマンサは一瞬、何を言われてるのが解らなかつた。

「・・・ハイ?」

ミシエルはおうむ返しに程度を答えた。

「ア・・・アノ・・・小破程度デスガ・・・」

提督はにっこり笑うと、傍らに控えていた東雲に言った。

「じゃあ一緒に直してくると良い。東雲、頼んだよ」
「解つた」

「へ?」

ミシエルはぽかんとして、足元に寄つて来た東雲を見つめた。

「この子は・・・妖精? でも鎮守府の妖精よね?」

「さあ、こつち来て」

ぐいと手を引つ張られ、ミシエルはよろめきながらもついていった。

「エツ？私、アノ、深海棲艦デ」

「解つてる。見えてる」

サマンサも事態を理解出来ていなかった。

「エツ？ココ、鎮守府デシヨ？エツ？」

「おかげ様で全員修復と補給が終わりました。重ねて厚く御礼申し上げます」

神通に続き、人の姿に化けたミシエル達が照れた笑いをしながら言った。

「えーと、あの、私達まで対応して頂けるとは思つて無かったです」

武蔵達がぎよつとした顔でミシエルを見た。

「ええっ!?深海棲艦も直せるの!?!」

ミシエルも戸惑いながら頷いた。

「そうなんです。なんか普通にバケツ使つて直してもらいました」

「バケツ万能すぎるー!」

「とりあえずそこまでよー」

提督の隣でパンパンと手を打ちながら、龍田が口を開いた。

「先に遂行結果についてまとめめるから、間違つてたら言つてねー」

だが、山城は懐からドローンを取り出して言った。

「この4機のドローンが戦域上空で全てを記録していたわ。良かったら使つて」

提督は手を顎にやった。

「へー、ドローンを記録用に戦闘海域上空に放つておくか。良いアイデアだねえ」

「べつ、別に・・・普通よ」

「じゃあデータをコピーさせてもらおうか。夕張に報告内容の比較と合わせて頼んでくれないか」

「はい、じゃあ渡してきますね。えっと、攻撃隊の皆もお疲れ様ー」

「ワーオ、コングラチュレイション！」

金剛達攻撃隊の面々はガタガタと席を立ち、武蔵達に労いの言葉をかけて部屋を出て行った。

パタン。

榛名が外から静かにドアを閉めると、提督室には提督と長門、神通達5人、そしてミシエル達が残った。

提督がにこりと笑って頷いた時、神通はきゅつと覚悟を決めた眼差しになった。

そして提督が口を開く前に口を開いた。

「本件の責任は全て私がかかります。どうか、他の方達には寛大なるご処置をお願いします！」

武蔵が気色ばんだ。

「馬鹿を言うな！無理矢理連れ出したのは私だ！私が責任を取る！」

「艦隊旗艦として！秘書艦として！私が！」

「いやダメだ！」

長門が静止しようとするのを、提督は手で抑えつつ、頬杖を突いて言った。

「本当に全然変わってないね、お二人さん」

すっかり興奮していた武蔵と神通はギツと提督をにらみつけた。

「何の事だ！」

「ほら、もう何年も前になるけど・君んとこの潮と羽黒が他の鎮守府の遠征艦隊と衝突事故を起こしてさ」

「・・・？」

「話を聞きに行った時も、開口一番そうやって二人で自分のせいだつて言ってる」

「・・・」

「ただの事情聴取だよって言ってるのにどちらが腹を切るだの切らないだので口論を始めたからさ」

「あ・・・」

「ちよつと静かにしてもらったでしょ？」

一足先に気付いた神通は、蒼白になってカタカタと震え出した。

武蔵はそんな神通を二度見したが、その途端に思い出した。
恐る恐る武蔵は提督を見た。

うん？いや、あの時の・・・でも、奴はスーツ姿の事務官だったはず
だ・・・

第15話

武蔵はそつと、提督を指差しながら言った。

「初代・・117研・・所長・・か？」

「あはは、思い出してくれたんだね。久しぶり」

武蔵は真つ青になりながら、あの時の一幕を思い出した。

完全に血が上っていた自分達を凄まじく冷たい一瞥で黙らせた事。

潮達のミスを隠そうとしたのに、幾つもの証拠を手に自分や神通を完璧に追い詰めた男。

あのテッドの追求が優しく見えるほど徹底的に理詰めで真実を吐かせた男。

初代117研所長。通称ヤマタノオロチ！

「ひっ・・ひっ・・ひいひいひいひい！」

武蔵は神通と抱き合い、目をぎゅつと瞑ってガタガタと震えていた。

もう御仕舞いだ。跡形なく解体される！今度こそ100%言い逃れ出来ない！

「あーもー、ホンマ変わらんなあ、この展開」

溜息混じりにそう言ったのは龍驤だった。

提督は肩をすくめた。

「私はまだ久しぶりだねとしか言っていないんだけどね」

山城はちらと震えながら抱き合う二人を見て、

「ほんと、仲良しコンビよね」

と、呟いた。

サマンサはふと、時雨の視線に気がついた。

首を傾げると、時雨はハツとしたように俯いてしまった。

提督は龍驤の方を見ながら口を開いた。

「えーと、また君を頼るしかなさそうだよ、龍驤さん」

「ええよ。話始まらんし」

「2つ目の用件はね、そちらのお二人さんについてなんだよ」

提督はそういうと、ミシエルとサマンサを指差した。

「んー？この二人は協力者やで？さっき言うたやろ？」

「そこは解ってる。どうして協力してくれたかって事なんだ」

ミシエルとサマンサはまずいと思った。

地上組の事は特に海軍には知られてはならないとされている。

知られてしまった場合、当該鎮守府の殲滅が追認されるくらい優先度が高い。

だが、この提督は自分達を修理してくれた恩義がある。

何とか地上組の事に触れずに切り抜きたい。

そう、思い至った時、提督から思いも寄らぬ発言が飛び出した。

「これは仮説なんだけど、お二人は4219鎮守府の轟沈した艦娘じゃないのかな？」

その言葉に、俯き加減だった時雨はがばりと顔を上げた。

「ああっ！そうだ！」

提督は時雨の大声にびっくりとしながら訊ねた。

「ど、どうしたの？時雨さん」

時雨はぶるぶると手を振るわせつつサマンサを指差しながら言った。

「あの時の仕草・・・き、君は、君はもしかして、扶桑・・・じゃないのかい？」

山城は一瞬ぼかんとした後、音速でサマンサの方を見た。

サマンサは悲しげな顔をして、

「・・・お二人の仰るとおりです。そして・・・ミシエルさんは、大和さんです」

そう、答えたのである。

即答したのは、地上組の事を暴露するよりよほど機密レベルが低いと判断したのである。

「ふむ、やっぱりそういう事だったか」

提督が領きながら面白い、武蔵がサマンサの言葉を理解したのはその時だった。

「や・・・やっぱり・・・あ、姉上なのか？」

ミシエルは少し拗ねたように言った。

「時雨ちゃんも扶桑の事を思い出してくれたのに、貴方はちっとも気づかなかったわね」

「ちっ、違っ！いや、あの」

「…なーんてね、ふふっ。そうよ武蔵。貴方の顔が見られてとても嬉しかったのよ？」

「あ…」

言葉が出ない武蔵に代わって、提督が口を開いた。

「お二人が深海棲艦になったのは、やはり作戦指示への強い不満なの？」

サマンサは首を振った。

「いいえ。それは確かに恨めしかったです、それ以上に妹の行く末が心配で…」

ミシエルは寂しそうに笑った。

「サマンサも同じ事で深海棲艦になっちゃったと知って、二人で苦笑したわね」

「そうでしたね」

提督が言った。

「じゃあ怨恨の方は今回の件を以って消えたと考えて良いのかな？」

ミシエルが肩をすくめた。

「一応、作戦を統括していた研究局も、直接指示していた深海棲艦もこの手で葬りましたから」

「よし。じゃあ艦娘に戻るといい」

提督の言葉は、傍らで微笑む長門を除き、それぞれが理解するのにとても時間がかかった。

「…」

ぼかんとする山城に、提督は頷きながら言った。

「この鎮守府では、深海棲艦を艦娘に戻す事が出来るからね」

呆然としていた7人は、やがて耳をつんぎくほどの大声で驚いたのである。

そして1時間後。

「姉様っ、姉様っ！姉様あ！」

「山城、他の方が見ている前ですよ。きちんとなさい」
「だってだってだってー！」

喜び一杯の顔で扶桑にしがみつくのが山城で、武蔵はと言えば号泣していた。

「うっ・・・ぐすっ・・・姉上・・・姉上え・・・うわーん！」

「あーもー、普段のきりりとしたイメージ戦略が台無しじゃない・・・」
「うっうっ・・・良かった・・・姉上・・・寂しかった・・・寂しかったよおおおー！」

「はいはい、解ったから、そんなに泣かないの」

時雨が呆然としてその様子を見ていたので、龍驤は声をかけた。

「どないしたん？」

「いや、てつきり逆の展開になるのかなって思ってたから・・・」

「あーまあ、山城は案外凶太いし、武蔵は毎日一生懸命頑張ってるで」
「そう、だったんだね」

「戦艦はどっしり構えとらんと艦隊全体の士気に影響するからなあ」
「・・・」

「だから武蔵はそうあろうと努力しとるんよ」

時雨は頷きながら、そっと武蔵に呟いた。

「・・・ありがとう。君のおかげだよ」

提督は工廠前の砂浜で、7人の様子を見ながら睦月と東雲の頭をわしわしと撫でていた。

「えと、二人には問題はないかな？」

「いつも通り完璧ですにゃー」

「パーフェクト、です」

「よっしゃ。今日は特別に間宮アイスを奢ってあげよう。チケツト上げるから食べておいで」

「やったにゃーん！」

「ありがとう、提督」

「行ってらっしゃい」

あつという間に走り去る二人を見送っていると、その先から歩いてくる人影を認めた。

「・・・鳳翔さん」

「手配リストには武蔵さんお一人だけ載っているようですね」

「そうですか・・・ええと、この場合、鳳翔さんの的に武蔵は黒？白？」

上目遣いで見る提督に困った笑顔を返しながら、鳳翔は答えた。

「事例が事例ですし、恫喝相手が深海棲艦では黒とは言えないので、灰色でしょうか」

「後は、本人達の希望、かな」

「ええ」

提督は鳳翔と頷きあうと、長門と3人で7人の方へと歩いていった。

第16話

提督は7人に話しかけた。

「さて、君達の処遇についてなんだけど」

ピクリとした後、全員が恐る恐るこちらを見たので提督は続けた。

「まず、今度の件で4219鎮守府は完全に崩壊し、再建には時間がかかる」

「・・・」

「こういう場合、通常、所属艦娘はLV1化と記憶の剥奪が行われ、それぞれ別の鎮守府に行く」

長門がおやつという目で提督を見たが、鳳翔がこちらを見て小さく頷いたので黙っていた。

「・・・」

鳳翔が後を継いだ。

「ただ・・・」

「・・・」

恐る恐る鳳翔を見る7人。

「戦闘中に行方不明になった皆様を先程の攻撃隊が懸命に搜索した所、IDプレートだけ見つかった」

「・・・」

「そう、大本営に報告する事は可能ですよ」

神通は首をかしげた。

「えっと、それは、解体して人間になる、という事でしょうか？」

「いいえ。IDプレート以外は我々もどうなったかは与り知らない事です」

神通は眉を顰めた。

「そ、それは・・・つまり脱走を認めて頂ける、という事ですか？」

明後日の方を向いている提督を横目に、鳳翔は首を振った。

「与り知らない事、です」

「そ、それじゃ・・・武蔵さんは逃亡と恐喝の罪でずっと手配犯のままになるという事ですか？」

「IDプレートを大本営に返した時点で轟沈や解体と同じ、除籍扱いとなります」

「・・・」

神通は今一つ理解していない様子だったが、龍驤が「除籍された奴の手配なんて残らんわな」

と言った事に長門が頷いたので、ようやく納得したようだった。

時雨が呟いた。

「このまま、LV1化してバラバラに配属されるか、今の生活を続けるかって事だね」

時雨はそつと神通に言った。

「確かに、選ぼうとしている事は正しくないかもしれない。だけど、だけど、だけど神通、僕は」

神通はそつと、掌で時雨の口を塞いだ。

「皆まで言わなくても解ります」

神通はふうと溜息をつくくと、全員を見回しながら言った。

「海軍の支援無しに生きて行く事は、体験した通り大変シビアな世界です」

「私一人なら、到底やっていけないと思います」

「でも、私は時雨さんも、龍驤さんも、武蔵さんも、山城さんも、ずっと一緒に居たい。忘れたくない」

「そして、尊敬する大和さんや扶桑さんにもお越し頂けるなら心強いです」

「・・・皆さんは、いかがですか？」

神通は発言の最後の方はまるで囁くようであり、耳まで真っ赤になっていた。

そんな神通を6人は微笑んで見ていたが、

「しゃあないなあ、こんな可愛い筆頭艦娘をほつとけんぞ？」

「あつ、あのつ、ぼつ、僕も神通と一緒に居たいな」

「私は姉様についていきます」

「あらあら。じゃあ山城と一緒にお世話になろうかしら」

「武蔵、いつまでも泣いてないで、私達の会社に帰りましょ？」

「・・・姉上？来てくれるのか？」

恐る恐る訊ねた武蔵に、大和は笑顔で応えた。

「ええ、もちろんです」

「・・・姉上が一緒なら、私は倍、いや3倍は働ける。働いてみせる！」
鳳翔がそつと、銀の箱を浜辺に置きつつ言った。

「この箱には私達が現場海域で見つけた、行方不明となった方のIDプレートが入っています」

「・・・」

「提督は少しお手洗いに、私は忘れ物を取りに食堂へ行つてきます」
「・・・」

「その後、この箱を添えて、本件の顛末と行方不明者について大本営に報告します」

鳳翔が7人に微笑み、提督がちらりと7人を見たとき、神通達は深々と頭を下げた。

「・・・ご恩は生涯忘れません」

提督は海原に視線を戻しながら言った。

「そうそう、鳳翔さん」

「なんででしょうか？」

「うちではさあ、もし人間に戻りたいなーっていう艦娘や深海棲艦が居たらさ・・・」

「その方がどこからいらしたかといった事は問わず、受け入れてますねえ」

「解体処置をした上でさ、戸籍の付与手続きとかもきちんとして手続きしてるし」

「他と違って提督が後見人になってますものね」

「スズメの涙だけど、路銀も渡してあげるし」

「人間社会での一般教養研修もありますし、就職の面倒とかも見てますよねえ」

「ちよつと前までは忙しかったけど、今はそんなに来てないよねえ」

「そうですね。施設を遊ばせておくのは勿体無いですねえ」

「いやー誰か来ないかなー。この事が広まると良いなー」

そう言うのと提督は大げさにぶるつと震えた。

「おつと、砂浜で長居をしたから冷えてきたな。ちよつとお手洗いにいってこよー」

「あ、私も忘れ物を思い出しました。長門さん、手伝って頂けますか？」

「任せろ。ああ、そうだ・・確か日本は向こう、だったな」

長門は小さく1点を指差すと、ウインクしてから鳳翔を追いかけていった。

砂浜には置き去りにされた箱が1つ残された。

最後に自分のIDプレートを箱に入れ、蓋を閉めると神通は微笑んだ。
だ。

「もし・・私達の司令官が提督でしたら、私は命を賭して戦えたと思います」

龍驤はニツと笑った。

「ほんならアイツが司令官でなくて良かったわー」

「えっ?」

「だからこそ今、こうやって神通と話せるんやからな」

「・・・」

「で、武蔵はそろそろ泣き止んだのかいな?」

龍驤の声に武蔵は思い切り渋い顔で応える。

「うっ・・うるさい・・とうの昔に泣き止んでる」

「波止場の夜以来ね、武蔵の泣き顔見たのは」

武蔵は蒼白になりながら素早く山城の首を締め上げた。

「それ以上言ったら轟沈者としてIDプレートを返還する事になるぞ!」

「うぐ・・わ・・解った・・わよ・・」

大和が溜息をついた。

「どうせ波止場でわんわん泣いてたんでしょ?」

「うえっ!?!」

「武蔵は一人になった時とかそうやってよく泣いてるもの」

「姉上・・ばらさないでくれ・・」

龍驤がぐいっと伸びをした後言った。

「ま、あの3人が帰ってくる前に出航しよか！」

7人は海へと歩いていった。

「…記憶を残したまま他鎮守府へ紹介する、その手を何故示さなかった？提督」

提督室から7人の航跡を眺めつつ、長門は提督に話しかけた。

提督はその隣で小さく頷いた。

「彼女達は知りすぎた存在、だからね」

長門は困った顔をした後、俯き加減にこくりと頷いた。

「…まあ、今回の件は特別機密事項として処理されるだろうな」

「間違いなくそうだね。ヴェールヌイ相談役の狼狽振りを考えれば：ね」

「彼女達に悪意はなくても、何かの折に話してしまう事は充分考えられる」

「だから他鎮守府に記憶を持ったままでの転属は選択肢に入れられない。そう判断したんだよ」

「今回解体するという選択肢を外したのも、人間に戻った後厄介事に巻き込まれるのを防ぐ為であろう？」

「勿論。公安にマークし続けられる生活なんて楽しくないでしょ」

「うむ。私も提督の話聞いた後考えていたのだが、推論が合っていて良かった」

「今まで頑張ってきたのだから、彼女達が笑って過ごしていける方法を提示してあげないとね」

長門は提督と頷きあうと、窓の外に目を向けた。

第17話

「ところで武蔵、一つ聞いても良いかな？」

海原を町へと戻る途中、時雨は武蔵に話しかけた。

「うん？なんだ？」

「僕達が出航する日、艀装をオーバーホールしたよね」

「ああ」

「その後武器屋に行つて、即金で兵装買ったよね」

「ああ」

「そのお金はどこから出てきたんだい？」

武蔵はポリポリと頬を掻きながら言った。

「あーその・・・た、宝くじだ。そうだ！」

大和がくすくす笑い出した。

「貴方つて本当に嘘が下手ね」

扶桑が頷いた。

「特に答えを用意してなかった時の嘘はすぐばれますね」

武蔵が真つ赤になった。

「あつ、姉上っ！」

大和は武蔵の鼻をつんと突いて笑つた。

「大丈夫よ。時雨は説明すれば解つてくれるでしょ？はぐらかすから追求されるのよ？」

武蔵はチラと時雨を見た。

時雨はじつと武蔵を見つめている。

「あー、その・・・トトカルチョ・・・だ」

「へっ？トト・・・何？」

龍驤が納得したように頷きながらいった。

「ほれ、大きな輸送話があるとテッドが賭け事やるやんか」

「・・・賭博」

「武蔵は昔からクジ運ええからな。それで元手を増やしとつた。そういう事やな？」

武蔵は龍驤を見て頷いた。

「まあそういう事だ。元手は貰った給料だから・・・ひいつ!」

武蔵がそんな声を出したのは時雨に目を向けたからである。

氷のような瞳をした時雨は静かに言った。

「・・・神武海運社規22条・・・違反だね」

「い、いや・・・でも他に皆に気付かれずに増やす手がなくてだな・・・」

「そもそも僕達に内緒で復讐計画を進めようとしてたから悪いんじゃないか」

「ぐ」

「それに・・・ちゃんとやってくれたら・・・僕の方が無駄にならなかったのに」

山城がぼつりと言った。

「あーなるほど、あれはそういう意味だったのね」

神通が首をかしげた。

「どういう事ですか?時雨さん」

「皆から毎月光引きしてる項目に、年金特別控除って項目があるよね」

「・・・覚えてません」

山城が頷いた。

「月2万5千コインだったかしら。結構引かれてたわね」

「あれはこういう時の為の基金だったんだよ」

大和が頷いた。

「年を取るという概念の無い私達には、老後の生活は無縁の存在ですからね」

「まあ、提督が今回、その可能性を開いてくれたから無駄にはならなかったけどね」

龍驤が首をかしげた。

「わざわざ人間になりたい言うんか? たった50年やそこらで死んでまうんやで?」

「に、人間と結婚したいって可能性もあるかもしれないじゃないか」

「時雨はそんな相手が居るんか?」

「僕じゃないよ」

「誰やねん」

「武蔵だよ」

グキリと音を立てて武蔵が時雨の方に向き、山城がニヤリと笑った。

「なっ!? 何で私が! 天地神明に誓って心当たりが無いぞ!」

「えっ? そうなのかい?」

「ちよ、ちよつと待て時雨。私が一体誰と結婚したがるとうんだ?」

「テツドさんだよ?」

「時雨、私は仕事上の窓口だから奴の所に行くのであって」

「・・・それだけかい?」

「それだけだ! 全く何を勘違いしてるんだ!」

「だって、事ある毎にテツドさんの作戦は素晴らしいとか、実に頭が良いとか褒めてるし」

「そつ、それは皆もそう思うだろ? 事実今回の作戦だって成功したではないか!」

「んー、そうだけど・・・」

扶桑がふふつと笑った。

「時雨さんは結構勘が鋭いですものね」

大和が頷いた。

「武蔵は賢い人が好きですものね」

武蔵は真つ赤になってバタバタと腕を振った。

「ちつがう! ええい変な事言うな! 帰ったら報告に行かねばならんだぞ?」

山城がニヤリと笑った。

「嬉しいんですよ?」

「ぼつ、馬鹿者!」

龍驤が山城に抱きついた。

「あなたあーん、ただいまー、寂しかったんよー」

山城が宝塚の男役のようにきりつとした声で応ずる。

「よしよしハニー、僕の元に帰ってきてくれたんだね。はっはっは!」

武蔵は邪悪な笑みを浮かべ、砲塔を動かしながら言った。

「・・・遺言はそれだけだな、二人とも」

ばばつと二人は両腕を上げた。

「ドンピシヤヤからて本気で怒るなや！」

「そうよそうよ！」

「違うわ馬鹿者！ふしだらな猿芝居をするなっ！」

大和が武蔵の肩をぽんと叩いた。

「ま、お姉ちゃんとしてもテッドさんならまあOKかなあ」

「姉上?！」

時雨は溜息をついた。すっかり話題が逸れてしまった。

今更社規違反の話を持ち出せないではないか。

「・・・戻ってしまったのなら、もう仕方ありませんね」

「す、すみません。課長」

武蔵達が帰って数日後。

テッドから連絡を受けた治安維持庁3課の課長は、艦娘に戻った大和と扶桑を見て溜息をついた。

「貴方達のどちらかを私の後釜にしようと思ってましたのに」

「あー・・・」

テッドはゆっくりと煙を吐きながら言った。

「ただ、あの魔境で艦娘や人間に戻るってのはビッグニュースなんじゃないですかい？課長さん」

課長はこくりと頷いた。

「ええ。組合員の中には逃亡生活や公安にばれる事を極度に恐れてる子も居ますからね」

「すつきり人間になっちまえば怯える事もない。そして経緯は問わない」

「・・・その鎮守府の提督殿は信用して良いのでしょうか」

テッドがニツと笑った。

「ああ。所長っていうか提督は俺の元上司だが、そういう事で嘘は言わねえ。保証するぜ」

課長はちらりと二人を見た。

「・・・貴方達、少し艦装を調べさせてもらって良いかしら？」

「えっ？はい、良いですよ」

課長は真剣な眼差しで艤装を丹念に調べていった。
数分後。

「ふーむ、盗聴器やGPS発信機の類はありませんね。普通の艤装です、か」

テツドが肩をすくめた。

「だろ？所長はそういう事はやらねえよ」

課長は二人に問うた。

「あーち、地上組の事を含め、何か聞かれませんでしたか？話してしまいましたか？」

大和は扶桑と顔を見合わせた。

「聞かれたのは・・・元の艦種といつ沈んだかという事くらいで・・・」

「艦娘化の作業は黙って立ってるだけでしたし、そう言えば何も聞かれませんでしたね・・・」

「ほっ、本当？本当に？作業時間はどれくらいかかったの？」

「ええと、多分15分くらいだったと思います」

「そうですね。あつという間でした」

課長はしばらく頭を掻きながら唸っていたが、

「今の所疑念はありませんが・・・そもそもなんでそんな事を・・・」

テツドが珍しく真顔になると、言った。

「俺達は117研で色んな事故を調べてきたんだがよ」

「・・・」

「その時から既に、所長は艦娘の轟沈事故に心から同情してた」

「・・・」

「俺はそのうち、くだらねえ差配で沈んだ艦娘が深海棲艦になるって事に気づいちゃってよ」

「・・・」

「当時、所長はもう鎮守府に異動してたんだが、その事を言ったらさ」

「・・・」

「そういう可能性があるなら、こちらへ戻す道が必要だなんて言ったんだ」

「戻す、道・・・」

「ああ。司令官のせいでもそっちへ行っちゃまったのなら、引き戻すのは海軍の責任だって、な」

「・・・」

「まあ、所長以外誰も俺の話なんて信じてくれなかったから、所長が変わり者なんだろうよ」

「・・・」

「どうやって方法を見つけたのかは知らねえが、所長なら納得出来るぜ。なにせあの所長だからな」

「・・・」

「まあ、それを地上組の中でどう活用するかはアンタ達が勝手にすればいいさ」

課長は溜息をついた。

「そうですね。私だけで判断するには大きすぎます。持ち帰って検討しましょう」

そして課長は二人を見ながら言った。

「これまでの実績を考慮し、お二人に地上組を抜ける条件を伝えます」

「はっ、はい!」

「海軍に地上組の情報を漏らさぬ事、約束してもらえますね?」

「わ、わかりました・・・それだけで良いんですか?」

「ええ。条件は少ない方が良いでしょう?」

テッドが肩をすくめた。

「俺がもし海軍に復帰したらどうすりや良いんだ?」

ぎよつとして課長がテッドを見た。

「お戻りになるんですか!」

「可能性の話」

「止めてくださいよ・・・折角 Deadline Deliverersの皆様とパイプが出来たのに・・・」

「だよなあ・・・もう無理だよなあ・・・」

大和は溜息をつくテッドをそつと見ていた。

テッドが海軍所属に戻るなら妹の嫁ぎ先としては安心かもしれないな

い。

まあ今も充分稼いでるみたいだし、傍で見られていられるからそれはそれで良い。

「うふふ」

どつちに転んでも、お姉ちゃんは武蔵の味方ですからね。

こうして総勢7名となった神武海運は、Deadline Deliveryの主力の1つになっていくのである。

3章：「C&L商会」編 第1話

「ねールフィアあ」

「なによ」

「今月ちよつと多くない？」

「荷が多いのはいつもの事でしょ」

「配達先だつてば」

「んー・・・」

ルフィアは伝票の台帳をめくり始めたが、その中身は既に十分把握している。

パートナーであるクーの言うとおり、今月は荷の量は変わらないが細々と配達先が多い。

それはつまり大変手間がかかるという事である。

ただ、荷には1件受けるごとに基本料金というものがある。

よつて1箇所的大量に届けるより、細々と沢山の配達先に届ける方が売り上げは多い。

ただ、配達先同士が離れていると燃料代がかかり、売上割に利益が上がらなくなる。

この辺の按配を勘でやる経営者は多い。

だがルフィアは過去の荷を元に統計を取り、配達先が近くて沢山あるタイミングを上手く掴む事に成功していた。

そのタイミングの1つが今回というわけである。

問題はそれによつて戸配担当であるクーの負担が激増するのだが、説明し忘れていた事に今気がついた。

さて、これをどう処理しましょうか。

パタン。

台帳を閉じると、ルフィアはクーににこりと笑いかけた。

途端にクーの目が警戒モードに入る。

嫌な予感しかない、と言う奴である。

ルフィアは言った。

「ごめんなさい、言い忘れてたわ」

「えー・・・全体でどれくらい増えてるのさー」

「まあいつもよりは多いわねえ」

「どれくらいなのさー?」

クーもルフィアも輸送ワ級であり、深海棲艦としては珍しく武装を
持っていない。

基本能力は同じだが、金融機関との調整や経営、事務処理といった
業務はルフィアの方が長けていた。

一方でクーは対外的な交渉や戸配など、他人と顔を合わせる仕事が
好きだった。

勿論荷が多過ぎる場合はルフィアも運ぶし、クーだって事務処理が
からつきしと言うわけではない。

ただ、普段は得意な事を自然とやっている。そういう状態だった。
ルフィアは肩を押さえ、大きな溜息を吐きながら言った。

「ああ、言われて気づいたんだけど、配達件数が多いから事務処理も増
えちやって大変なのよねえ」

「えっ・・・」

「そうだよ。ねえクーちゃん、伝票処理手伝ってくれないかしら?今
日の戸配終わったんでしょ?」

藪蛇

クーの頭の中に真っ先に浮かんだ単語である。

そこらに居る Deadline Deliverers、例えばミスト
レル辺りなら軽く丸め込んでしまうクーである。

だが、ナタリアやテッド、そして目の前にいるルフィアにはあまり
勝率は良くない。

今だって明日の配達を手伝ってもらおうと思ったのに、いつの間に
か伝票処理を手伝えと言われている。

ルフィアには正攻法も捌め手も通じない。あらゆる意味で1枚上
手。

ならば。

「ぼつ、僕！明日の配達分を準備してくる！細々してるから間違えな
いようにしないとねっ！」

三十六計逃げるに如かず

クーは大慌てで荷物が置かれた倉庫めがけて事務所を飛び出した。
ルフィアはひらひらと手を振り、頷いた。

作業分担に合意を得た事に変わりは無い。

ルフィアはタタタとキーを叩き、財務諸表を画面に呼び出した。
バランスシートは改善に向かっているが・・

「やっぱりモンスター前輸送作戦は痛かったなあ・・」
そう。

町を揺るがす一大騒動となった、モンスターが接近する地点への輸
送作戦。

テッドがトトカルチョで賄ってくれて約3割の負担で済んだとは
いえ、4千万コインも支払う事になった。

クーには黙っていたが、バランスシートはオールグリーンから債務
超過寸前まで追い込まれたのである。

事案が解決した翌日。

興奮と熱気が冷めやらぬ町の中を、ルフィアは無表情のまま原付で
走りぬけた。

目的地に着くと深呼吸を1つ。

「・・よし」

ルフィアは荷台からバッグを取り出し、建物の中へと入って行っ
た。その看板には

「山甲信用金庫」

と記されていた。

「こちらでお待ちください。コーヒーでいいですか？」

「・・はい」

顔馴染みの職員にいつもの応接間に通されたルフィアの表情は既
に冴えなかった。

4千万コインもの支出はC&L商会にとってデーパーインパクト

だ。

本来、財務諸表に重大な影響を与える決定をするならば、事前に主要金融機関と相談するのがマナーである。

しかし、今回の件は最後まで必要額が見えなかった上に支払いまでの猶予がなさすぎた。

だが、テッドがあれだけ手を貸してくれているのに支払いを待つてもらわねにも行かなかった。

それでは自分達が支払えると信じ、自腹で立て替えてくれたテッドに筋が通せない。

かといって私費で払える額でもない。

是が非でも5日後に迫った返済分を低金利で借り換えるか、支払いを待つてもらわねばならない。

それが今回の任務だ。

ガチャ。

「お待たせしました、ルフィアさん」

担当職員がドアを開けた途端、ルフィアは両手を祈るように組みながら立ち上がった。

「南城さん、すみません。あの」

南城は苦笑していた。

「モンスター前輸送作戦の件ですね？概要は存じてます。うちも朝から大騒ぎで」

「はい。支出の前にご相談する事が出来なくて・・・」

ルフィアはうるると目に涙を貯めて続けた。

「南城さんと築いてきた信頼関係にヒビが入ってしまったわいかと・・・心配で・・・」

「いえいえ、そんな事はありませんから、どうか落ち着いて。現状と今後について相談しましょう」

「す、すみません・・・うう」

こうしてルフィアはいつもの通り、借り換えや延滞交渉を目標通りに進めていった。

信用金庫を出たルフィアは入る前と変わらぬ無表情だった。

涙の1つや2つで交渉が円滑に進むなら安いものだ。

経営者を取り巻く世の中は甘くない。

パパン！パルパルパル・

日頃からルフィアが良く手入れしている原付は、主を乗せて軽快に走り出した。

ルフィアがこの原付を大事にしているのは、勿論長持ちさせてコスト削減を図るという意味もある。

だが、ルフィアはそれ以上にこの原付をとっても気に入っていた。

クーが使い捨ての勢いで2〜3年毎に買い換えているのは対照的であった。

キキツ。

ルフィアは赤信号で止まった。

事務所に向かうにはウインカーを出して左折だが、ルフィアは指を伸ばしかけて止めた。

「・・・」

少し考えたルフィアは頷くと、青信号と共に直進した。

パルパルパル・パパパパ・

坂道を登る時でもエンジン音は控えめで可愛いし、乗り心地も穏やかだ。

高級バイクではないけれど、なんだか品の良い感じがする。

パルパル・パル・パル・

坂を上り終わると、そこにはかつて高速バスの停車場があった。

パークアンドライド用に一般車用の駐車場も併設されており、ルフィアはそこに原付を進めていった。

・・・キキツ。

ルフィアは原付から降りると愛おしそうに軽くハンドルを撫でた。

そしてヘルメットを脱ぎ、顎紐でハンドルにぶらさげると、顔を上げた。

ざあっ・・・

ルフィアの長い髪が丘を登ってくる風に舞い、ルフィアは目を瞑って深呼吸をした。

やっぱり町の中より、ここの方が空気が良い。

「夕方の風も・・・いいわね・・・」

ぎゅっと腕を伸ばしきると、手すりにもたれかかる。

手すりの先は果てしない海原であり、丘から見下ろす海はほぼ西の方角へと開けている。

ルフィアは左手首に嵌めた時計を見た。

あと20分もすれば水平線に沈む夕日が美しく海原を彩るであろう。

「ちよつとだけ・・・サボっちゃおう・・・」

資金繰りに目処はついた。

一切贅沢出来る状態ではないし、明日からまた山ほど事務処理がある。

だから、今だけは。

お気に入りの場所で一番好きな景色を見ていたい。

深海棲艦になってたった一つだけ良い事があったとすれば、自分で選択する自由がある事。

どんな移動手段を選ぶかも、ウインカーを出すのを止める事も、仕事を明日に延ばす事も。

生きる事も、死ぬ事も。

みんな、自分で決められる。

・・・その代わりに全て自分で責任を負うし、決して世の中は甘くないけれど。

ルフィアはじつと、ゆっくり沈んでいく夕日を眺めていた。

第2話

話は現在に戻る。

「さて、事務処理を始める前にとっ．．．いつ．．．いた．．．うー．．．」
一人残った事務所でルフィアはぎゅつと背伸びをし、入念に自分の肩を揉んでいた。

これをしてないと仕事が終わった後、肩や首が痛くて仕方ない。

小学生くらいの見た目であるルフィアがそんな事をしてても大人の真似事にしか見えないが、本人は真剣である。

実際、1度整体師に診てもらった時は

「こりや．．．岩ですわね．．．酷いなあ」

と眉を顰められた。

やってもらおうと楽になるが1週間も経たずに凝ってしまおうし、人気の整体師さんは予約しても軽く3年待ち。

かといって下手な人にやらせると却って酷くなってしまおうから誰でも良い訳でもなく。

一方、クーも全く同じ時間を生きているし、同じくらいの見た目だが、こちらはそういう悩みを言わない。

以前、肩とか凝らないのと訊ねたら、

「あははっ、だってそんな事するとおばさん臭く見えるしー」

と、良い笑顔で言われたので力一杯アイアンクローしておいた。

そのクーは少し前、重さによるめきつつ戸配へと出て行った。

戸、といってもクーの配達先は地上の家ではない。

全て海中、正確には航路に設定してある海上受け渡しポイントである。

現在、制海権を握るのは深海棲艦である。

ただ、深海棲艦とひとくくりにするのは人間を人類とまとめるのと同じくらい大まか過ぎる。

深海棲艦の中にも多種多様な考え方があり、派閥があり、多数の軍閥がある。

例えば強硬派の最大派閥は海底国軍、穏健派のそれは地上組であ

る。

そこまで行かなくても特定海域を支配下に置いている軍閥はそれなりの規模を誇る。

隣接軍閥と相互不可侵条約を結ぶには24時間体制での臨戦態勢が必要だ。

突然襲ってくる艦娘にも注意を払わねばならない。

兵站や恩賞が疎かになれば忠誠度が下がり、寝返りなどの政情不安にも繋がる。

なんだかんだ言つて軍閥を率いる者はそれなりの人望(?)が必要で、しかも日々忙しい。

西へ東へと走り回る姿を「海中鎮守府の司令官」と揶揄する向きがあるが、割と的を射ているのである。

そんな中。

C&L商会の売りは、Deadline Deliveriesゆえの「無所属」という点だった。

軍閥に所属している補給部隊は、他軍閥への輸送はおろか、越境輸送もかなり敷居が高い。

それは輸送艦隊に見せかけて領海内で戦闘を開始されると軍閥の存続が危うくなるからである。

深海棲艦同士も実はあまり信じていないという事である。

両者の違いをもう少し詳しく見てみよう。

たとえば、ロシア極東のウラジオストクから、四国沖の軍閥まで届きたい荷物があるとする。

軍閥所属部隊であれば、協力関係にある他軍閥と航路調整を進めながらウラジオストクまでの往復路を決めていく。

実際の行動時も戦闘を避ける為に山のような手続きが必要だし、上陸なんて論外なので海を回りこむ事になる。

だが、C&L商会なら非武装である事が明白で、しかも当該海域を支配する軍閥の言う事を聞くので、

「ヤア、クーチャン・エエト、アイツガ誘導スルカラツイテキナ」その一言で済んでしまふし、北陸から四国まで陸路を使うので所要

日数は圧倒的に短い。そして安い。

もちろん、C&L商会すら信じない軍閥もいるし、彼らが支配する海域はきちんと避けて航行する。

すると、その海域はC&L商会の航路から外れ、依頼する事も出来なくなるので実に不便である。

隣接軍閥が様々な品物を輸入して快適に過ごしていると、それを見た部下から突き上げを食らうので、

「トツ・通ツテ良イカラ、コツチニモ宅配頼ム！」
と、言ってくる。

こうしてC&L商会は今では世界の過半数の海域を自由に行き来出来るようになっていた。

なお、拒否している代表格は太平洋ハワイ沖を拠点とする海底国軍であり、その理由は

「敵対する地上組の荷を扱っているから」
である。

ただ、Deadline Deliverersは全員地上組の荷を扱っているので、太平洋航路は事実上断絶されている。

C&L商会の定期航路はこれらを避けて設定しており、依頼側も事情を知っているので特に問題はない。

この、自由に通れる海域の広さがDeadline Deliverersの実力であり、腕の見せ所でもある。

C&L商会はワルキューレに次ぐ航行可能域の広さを誇るが、その秘密は大量輸送能力である。

他の荷を運んでいる最中に頼んでも、荷室に空きがあれば二つ返事で引き受けてくれる。

そしてチャーターではなく定期航路なので船代が安い。
敵対するより取り込んでしまう方が軍閥達にとって利があるようにする。

それがルフィアの戦略であった。

火力に物を言わせ、誰が支配する海域だろうと構う事無く最短航路を突き進んでいくワルキューレ。

かたや自分達軍閥を尊重し、案内に従って航路を取り、頼みも聞いてくれるC&L商会。

Deadline Deliveriesの間ではお騒がせで知られるC&L商会だが、軍閥からの信頼は大変厚かった。

それは軍閥の頼みを出来るだけ融通するという点をどの立場で見るとかという違いなのである。

ただ、いつでも無理をして無事でいられる訳ではない。

過去には無頼の深海棲艦達に食料を奪われた事もあった。

(治世者が居ない無頼者の吹き溜まりのような海域は治安も悪く、C&L商会の悩みのタネでもある)

頼まれ過ぎて過積載になり、荷崩れを起こした事もあった。

しかし、そういう事があっても、荷主達は

「まあ、いつも無理聞いてくれるし、安く運んでくれるからね：しようがないね・・・」

という感じで血相を変えて怒ったりはしない。

むしろ散らばった荷を一緒に拾ってくれたりする。

こちらも無理を言うから輸送事故にも文句は言わない。

そういう関係になっているのである。

昨日から、クーは先週末に遠路はるばる運んできた荷物を近くの海域へと配る仕事をしていた。

定期航路は数本持っているが、一本辺りは3ヶ月に1回の頻度である。

どうしてそうなるか。

例えば極東ロシアとこの町を結ぶ航路がある。

1日に出航し、向こうでの配達と引き受け作業を行い、10日に戻ってくる。

向こうで引き受けた荷を12日と13日で近海域へ、14日と15日で少々遠い海域へと配り、依頼も受け付ける。

事務処理作業も同時並行で行ったとしてもこの航路関係だけで月の半分を消費してしまう。

これを全ての定期航路で単純に累計しても一巡するのに2カ月半

かかる。

そして税務や金融機関との調整もあり、休みを切り詰めて頑張っても3ヶ月毎にしか巡回出来ないのだ。

もつと来て欲しいと切望されているが、どの航路も人気なので統廃合する訳にもいかない。

時折チャーターの相談も受けるが、到底手が回らないのでテッドに頼んで他所の業者を紹介してもらっている。

ただ、普段C&L商会の輸送費に慣れている顧客なので、実際に契約が成立するケースはそう多くない。

「ふにゅー・・・」

ルフィアは伝票の束の1つをやっつけると、机に突っ伏した。

書類で使われる言語は日本語、英語、ロシア語、イタリア語、中国語、タイ語と様々だ。

依頼票、受領票、荷受作業請求書、給油代金領収書、果ては食事のレシートと書類も多岐に渡り、精度も様々。

それらをきっちり集計していかないと最終的な財務諸表が作れない。

パソコンに打ち込んでしまえば後は自動計算だが、そこまでが大変なのである。

「ほんと、これで為替レートまであったら余裕で死ねるわね」

深海棲艦の通貨はコインで統一されている。

海軍が運用する擬似通貨を敵対する自分達が使うのもどうかと思うが、今や国際的に通じる通貨は他に無い。

独自通貨を発行する為には造幣局や中央銀行を運用し、通貨レート調整等も必要だが、それらが出来るとの力は無い。

プラグマチズムにその辺を割り切った初期の深海棲艦達の英断に拍手を送りたい。

ルフィアは突っ伏したまま顔だけ上げた。

目の前にある伝票は後2束。

ふと柱時計を見ると、まもなく1400時になろうとしていた。

「あーランチャー！」

大慌てで財布とヘルメットを引つつかみ、事務所に施錠したルフィアは原付に飛び乗った。

「お、おばちゃん！生春巻ランチ・・・は・・・」

息を切らせて戸口で訊ねたルフィアに、食堂のおばちゃんは首を振った。

「ええとー・・・確か12時半には売り切れたねえ」

「・・・あうー」

「あと・・・」

「ふえ？」

「今日のランチは全部売り切れちゃったんだよ・・・ごめんね、また来ておくれ」

ルフィアは硬直した。

第3話

「うー、今日は滅多にない生春巻ランチの日だったのいい」とぼとぼと原付の所に戻り、ヘルメットを被りながら考える。

「・・・よしー」

ルフィアはぐるんと原付をターンさせた。

「ライネスおじさまー」

ドアベルが揺すられすぎて鳴り止まぬ中、ルフィアは涙目でキッチン「トラファルガー」の主の名を呼んだ。

キッチン「トラファルガー」のランチタイムも過ぎており、ドアには「closed」の札が下がっていた。

それでもライネスは頼み込めば作ってくれる事をルフィアは知っていた。

ライネスは山のような洗い物をこなしていたが、きゅつと蛇口を閉め、布巾で手を拭きながら答えた。

「また食べ損ねたのか？」

「・・・うう・・・おじさまあ」

「やれやれ、そこに座れ」

「わーい！」

ライネスが指差したカウンター席にきちんと腰掛けると、身を乗り出し、目を輝かせて言った。

「おじさま、生春巻を作って頂けませんか？」

ライネスは顎に手をやった。

「んー？まあ・・・材料は揃ってるか。食べたいのか？」

キツツキのように高速で頷くルフィアを見て、

「ちよつと時間かかるが、待てるか？・・・あー解った解った」と言いながら冷蔵庫をガパリと開けた。

トントンと軽やかに包丁を捌きながら、ライネスは訊ねた。

「そんなに生春巻が好きだったか？」

「今日は朝からそのつもりだったので・・・」

「・・・ああ、山下食堂のランチか」

「ええ、でも売り切れだって断られちゃって・・・」

「何時に行つたんだ？」

「う」

お見通しだと言わんばかりのライネスの視線に頬を染めながら告白した。

「い、1405時・・・」

ライネスは手元に視線を戻しながら言った。

「山下食堂のランチタイムは14時までだった気がするがな」

「だって」

「それに、山下食堂は毎日13時半には全部売り切れるのはルフィアだって知ってるだろ？」

「でも、トラファルガーだってランチタイムは1400時まででしょう？」

「最近では遅刻魔が多くてな、closedの札を下げてても14時で終わらせてくれん」

ライネスがそう言った途端。

「おっちゃんお願い！ごはん食べさせて！」

勢い良く開いたドアから聞こえてきたのはクーの声だった。

ルフィアは真つ赤になりながら

「ご、ご迷惑をおかけいたします・・・」

と、頭を下げたが、クーはいつも通り元気よく入ってきた。

「ねえねえおっちゃん、生春巻食べさせてー！あー！ルフィアみつけー！」

「・・・くっ！」

ルフィアが下を向いたまま、齒軋りして拳を固めた。

こおの能天気娘！

クーはルフィアの隣にどすんと腰を下ろしながら言った。

「ねーねールフィアあ、会議費って事で良いでしょ！それなら自分のお金出さなくて良いし！ラッキー！」

ゴチン！

クーの頭にルフィアの拳骨が落ちた。

「ま・・商売繁盛ってやつだ」

ライネスは肩をすくめてルフィアにそう言い、ルフィアはクーの頭頂部にぐりぐり拳をねじ込みつつ

「ほんとにすみません・・」

と、再び頭を下げたのである。

「ふわーあ、美味しかったあ」

「食べたい時に食べたい物を食べられるって最高ね！」

ライネスがふふつと笑いながら食器を下げた時、クーは元気良く手を上げた。

「チョコミントアイスくださいー！」

ルフィアはクーを見て固まった。

ここで自分だけ頼まないという自由はもちろんある。

ライネスだって無理にとは言わない筈だ。

だが。

目の前でチョコミントアイスを食られてジツとしてられる訳がない。

私の好物なのに！

でっ、でもっ、節・・約・・

「ほれ」

コトリと二人の目の前に置かれたのは、ガラスの器に入ったチョコミント味のアイス。

「あ、あの・・おじさま・・」

ルフィアがライネスを見ると、再び食器を洗い出したライネスが、「うちのCランチはデザートもあるんでな。今日はチョコミント味だ」

そう言ってパチンとウインクした。

クーが首を傾げながら言った。

「ねえおっちゃん、ランチセットってここにはAかBしか書いてないタタタター！」

ルフィアは目一杯クーの腕をつねりながら、ライネスにぺこりと頭を下げた。

「おじさま、ご馳走様でした」

「美味しかったよ、またねえ」

「いつか時間内に来いよ」

ニツと笑うライネスに頭を下げた後、二人はキッチン「トラファルガー」を後にした。

クーが歩きだったので、ルフィアも原付を押しして歩く。

しばらく二人は黙々と歩いていたが、クーが先に話しかけた。

「ねえルフィア」

「なによ」

「困った時に助けてくれる人って、かっこいいよね」

ルフィアはクーを見た。

「そっ・・・そうね」

クーはニカツと笑うと、

「僕もさ、二人で決めたとおり、依頼は出来るだけ断らないようにしてるんだけど・・・」

「ええ」

「あんな風にかっこよく見えてるかなあ？」

ルフィアはにこりと笑い返した。

「ええ。きつとそう見えてるわ」

「へへへー」

「それで、今日の集配は終わったの？」

「うん！案外まとめて渡せちゃったし、受ける分も少なかったから！」

「あら・・・そう♪」

言い終えて、そしてルフィアの飛び切り素敵な笑顔を見て、クーは青褪めた。

しまった。几帳面なルフィアがランチに遅れる理由なんて一つしかないじゃないか。

「・・・あ」

「手伝ってくれるわよね？伝票整理♪」

「あ、え、ええと・・・」

「ちようど後2束あるから1束ずつやりましょ」

「げげっ!? あ、いや、僕・・・」

ルフィアはすつと真顔になると、言った。

「ランチ代を会議費で落としてあげたんだから働きなさい」

「はい」

クーは諦めて頷いた。この状況で回避なんて無理だ。

そして日は暮れて。

「おじさまぁ・・・」

「おっちゃん・・・」

閉店後の楽しみであるパイプを啜えたまま、ライネスは店の戸口を開けた。

そしてドアをノックしていた二人を見て呆れ顔で言った。

「お前達・・・昼に続いて夜もか? もう閉店時間過ぎたなんてもんじゃないんだが・・・」

「お願いします〜」

「他のご飯処、全部閉まってたんだよう」

その時、店内の柱時計が1時を告げた。

「・・・こんな夜中ならそうだろうよ」

クーがしょぼんとしながら恨めしげに言った。

「出納帳が1000コイン合わなくてさ・・・ルフィアが揃うまでやるって言うからさ・・・」

「だから何度も謝ったでしょ!」

「僕の方が疑われて2回も伝票の束を計算しなおしたのにさ・・・」

「あの6にしか見えない5の字を書いたベトナムの連中に文句言いなさいよ!」

「だってえ」

ライネスは紫煙を吐いて苦笑した。

「大体解ったから入れ。ポトフなら仕込んであるし、ピラフも作ってやろう」

途端にクーが目を輝かせてライネスを見る。

「大盛り!」

「・・・夜中に沢山食うと太るぞ?」

「あ・・・じゃあ普通・・・でもピラフにチーズ乗せて！あとチョコミントアイス大盛り！」

ルフィアはクールの背後で歯を食いしばって拳を固めているが、遅くなった理由が理由なので行使しづらいのだろう。

ライネスは溜息をついた。

「やれやれ・・・店はもう掃除したから居間へ上がってろ」

「はーい！」

慣れた様子で店の通路を通り、ライネス家の居間へと向かう二人。

「まったく・・・ちつとも進歩してないな・・・」

ライネスは苦笑しながら冷蔵庫のドアを開いた。

やっぱりあの二人はお騒がせだ。

第4話

「いや、よくこの短期間でここまで持ち直しましたね。計画以上のペースです。さすがルフィアさんだ」

「いいえ、要所要所で南城さんに助けて頂いたからです。ありがとうございます
ございました」

「いえいえ、私どもは取引先の皆様をお支えるのが仕事ですから」

山甲信用金庫の応接室で、ルフィアは担当窓口の南城と自社の財務諸表を前に話していた。

モンスター前輸送作戦の支払いで傷ついた財務状態を何とか安定状態にまで戻した事を報告していたのである。

だが、ルフィアが自ら言ったとおり、それは山甲信用金庫の助力無しには到底無理な相談だった。

ルフィアは隣に置いていた風呂敷包みを南城に差し出した。

「・・・えつと、これは？」

「実は運んだ後で注文をキャンセルされてしまった」

「おや、それは困りましたね」

「中身は田代屋のお漬物、桔梗堂の栗甘納豆、それに靱山の八つ橋なのですが・・・」

「えつ、あつ・・・あー」

南城は京都の出身であるが、交通の便の都合もあり、ここからは大変遠い位置関係にある。

そしてルフィアが示した3つは全て南城がこよなく愛する好物である。

金融機関の職員は取引先との間で現金はもちろん、物品の授受も非常に厳しく規制されている。

しかし、法をきちんと咀嚼すれば、必ず対策がある。

ルフィアはにこりと笑った。

「もしよろしければ送料込み10000コインで買って頂ければ助かるのですけど・・・如何でしょうか？」

「・・・」

無論、最初から南城の為に買ってきたのであり、中身の総額は1万コインを軽く超えている。

1000コインでは送料にもならないが、要はこれらの口上や料金は摘発対策である。

キャンセルされた荷に対する個人的な協力であると、南城は言い切れる。

そしてルフィアは尻尾を掴まれるような生温い処理などしない。たとえば、ここで送料をサービスするなどと言えばそれだけで便宜を図ったと言われかねない。

録画されている応接室では1つのハマも許されないが、ルフィアは良く心得ている。

南城は少し腕組みをして考えていたが、そつと財布を取り出した。

「ええと・・・良いですよ。領収証を頂けますか」

「勿論ご用意しています」

山甲信用金庫を後にしたルフィアは小さく頷いた。

金融機関に限らず、対人関係の基本はメリツトの相互補完である。

それは褒めてくれる等の精神面、オマケしてくれる等のコスト面、特別な物が手に入るなど何でも良い。

あの人と付き合うと良い事がある。互いにそう思える関係である事。

「良い事」のバランスも取る必要がある。

一方通行は論外だが、アンバランスが長引くだけでも是正に過大な期待をされてしまう。

今回、C&L商会に対して南城個人が努力してくれた事はとても多岐に渡っていた。

債務返済を滞らせず、山甲信用金庫に迷惑をかけない事は企業対企業の最低限の礼儀だ。

ゆえに南城個人に対するアンバランスを是正することにしたのである。

もちろん、南城が困った立場に置かれないう配慮しなければならぬ。

こういう事を放置すると必要無い金融商品を購入する等、南城に対する「借り」を別の形で返す事になる。

それは1万コインどころではすまないのだ。

「・・・」

ルフィアはバッグに入れたもう1つの包みを確認すると、原付のスターターを回した。

「いらっしや・・・今日はえらく早いな」

「おじさま、おはようございます」

ルフィアが向かった先はキッチン「トラファルガー」であった。

「まだランチの時間じゃないが、ひよつとして朝飯か？」

「いいえ、今日はお礼です」

「・・・なんだって？」

「時間外にご飯を頂いたりしてる事にも感謝してますけど、商いの基本を教えて頂いたのはおじさまです」

「・・・」

「今日もそれをしみじみ思う事があったので、こういつた機会に言っておきたくて」

「もう何度か礼を言ってもらってる気がするけどな」

「それくらい大切な事だった、という事です」

ライネスはルフィアを席に案内した後、腕を組みながら言った。

「んー、波止場で二人と出会ってからもう10年位か。あの時はびっくりしたよ」

ルフィアはこくりと頷いた。

「最初からご馳走して頂きましたよね」

その日。

まだDeadline Deliverersという言葉もなく、ここがすっかり寂れた港町だった頃。

ライネスは埠頭で釣り糸を垂れていた。

店を開けていてもお客が来ないので短時間の営業にした結果、昼過ぎは暇だったのである。

「・・・あつーまた餌だけ取られちゃった!」

ライネスはひゅつと釣り糸を手繰り寄せ、後ろに置いた餌箱を取ろうと振り向き、硬直した。

いつのまにか背後に2体の深海棲艦が立っていたのである。

このまま俺は食われるのだろうか。

ライネスが呆然としていて、1体がぺこりと頭を下げて言った。

「アツ、アノツ！アタシ達仕事ヲ探シテルンデスケド、ドコカデ働ケナイデシヨウカ？」

「・・・はい？」

「ありがとうございます」

「しかし、化けると本当に人間と見分けつかないもんだなあ」

ライネスは店へと案内しかけて、輸送ワ級の恰幅が広いのを見て

「そのままだと店の椅子には座れないか・・・ここで話をする方が良いか？」

と言ったところ、

「ア、ニ、人間ニ化ケテ来マス！ヤダ！」

と喋って海に飛び込んだ。

きよとんとしていると2人の少女が海から上がってきた、というわけである。

まじまじと見るライネスの視線にルフィアは頬を染めて俯いていたが、クーは平気だった。

「ねえねえ可愛い？可愛い？」

「うん。結構良い線行ってるんじゃないか？」

「へっへーん」

「しかし、それだけそっくりなら、この町にも、もう案外深海棲艦が居たりしてな」

冗談めかしてライネスは言ったのだが、

「結構居るよ？」

クーがそう答えたので、再びライネスは固まった。

「ちよ、ま、待て。本当に？本当に深海棲艦がいるのか？」

「うん、だって街中ゲフツ」

うろたえるライネスを見て、得意げに話すクーに肘鉄を入れたのは

ルフィアだった。

「あ、あの、てつきりご存知だと思って・・・すみません」

「い、いや、良いんだけど・・・お嬢ちゃん大丈夫か？もろに肘入っただろ？」

クーはぶくりと頬を膨らませた。

「僕の事はクーって呼んで！」

「クーちゃんか、よし解った。痛い痛いのとんでけー」

「きやはははは。頭撫でないでよーくすぐりたいよー」

「お？すまんすまん、姪っ子が同じくらい背格好だったんでな」

「僕と似てるの？」

「・・・ほれ」

そういうとライネスは写真立ての1つを手に取り、クーに見せた。そこにはライネスと少女、そしてその両親と思しき4人が写っていた。

「へー！確かに背丈は一緒くらいかも！」

ルフィアが続けた。

「お近くに住んでらっしゃるんですか？」

ライネスが寂しそうに笑った。

「客船事故で3人とも亡くなっちゃったよ。もう2年になるかな」

「あ・・・」

第5話

クーがルフィアを責めるような目で見ると、ルフィアが申し訳なきような顔になった。

ライネスは手を軽く振った。

「もう2年も前の事だし、大丈夫だ」

「ご、ごめんなさい。あの、客船事故ということは、もしかして・・・」

「ダメだよルフィア、こういう事は詳しく聞いたら失礼だよ！」

「えっ！あのっ！ごめんなさい！私そんなつもりじゃ」

ライネスがふふつと笑った。

「クーちゃん、良いよ。えつと・・・君の名前はルフィアっていうのかな？」

「あ、あの・・・はい」

「じゃあルフィアちゃんにクーちゃん、ちよつと長いけど聞いてくれるかな？」

二人がこくりと頷いたので、ライネスはガラスの器を2つ取り出した。

そして冷凍庫からチョコミント味のアイスを取り出すと、盛り付けて渡したのである。

「あの・・・これは・・・」

「僕達お金持っていないよっ！」

「話を聞いてくれる御礼とでも思ってくれば良いさ」

ライネスからアイスの入った器へと目を移した二人は

「頂きます！」

と、にっこり笑った。

はむっ。

「~~~~~!!!」

ルフィアが目を見開き、幸せ一杯の顔になった。

美味しい・・・こんなに美味しい物を食べた事が無い。

プチプチ入ってる粒が甘くほろ苦く、飲み込めば爽やかに喉を過ぎ

ていく。

「これは、なんという食べ物なんですか？」

「チョコミントアイスだよ。粒々がチョコで、緑の所がミントアイスだ」

「へええ・・・」

急いで食べるのは勿体無い。勿体無いけどスプーンがとまらない！

「美味しいねー」

「美味しいわねえ・・・」

ライネスは二人の様子を見て微笑んでいたが、食べ終えたのを見て話し出した。

兄の家族3人と共に、寂れ行く郷里の国を捨ててきた事。

当時は景気が良かったこの港町で起業すべく、家を買って4人で飲食店に改装した事。

開店当時はこの国の税制や諸手続きが解らなくて何度も迷惑をかけた事。

ようやく軌道に乗った時、家族水入らずで旅をしておいでと送り出した事。

その帰り道、客船が台風を避ける為に取った航路で深海棲艦と思われる砲撃にあって沈んだ事。

「だからこの店は、ほら、あの辺がデコボコしてたり、机の高さが微妙に違うだろ？」

「・・・」

「町の人間も随分減っちゃったし、店も赤字続きだが、それでも兄貴達と作った店だからさ」

「・・・」

「そんなわけで、最後まで頑張ってみようと思っ・・・」

ライネスはそう言いながら、ふと二人を見てぎよつとした。

それはもう絵に描いたようにボロ泣きしていたからである。

「き、君達・・・」

「うっ・・・ぐすっ・・・えううう」

「可哀相・・・良い事してあげたのに・・・ひど・・・いよう・・・」

「・・・ん・・・そうだな。ちよつと・・・辛かったなあ」

二人がライネスにぎゅつとしがみついたので、戸惑いながらもライネスは二人の頭を撫でた。

「ありがとう・・・ありがとうな、二人とも・・・」

「客引きします!」

「手伝います!」

二人は泣き止んだ後、意を決したように頷いてライネスにそう言った。

「え?なんでだい?」

「このお店がずつと続けられるように!」

「お客さん沢山呼んできます!」

ライネスはきよとんとしていたが、やがて苦笑すると、

「よし、じゃあ頼むよ。住み込みで手伝ってくれ」

と、言ったのである。

その時、ライネスは喫茶店の経営に二人が貢献するとは思っていなかった。

ただ、持ち金も無く、治安の良くないこの町で子供二人が生きていく事は不可能だと考えたのである。

一方、ライネスの想定よりクー達は遥かにタフだった。

二人は深海棲艦であり、町を歩く人が人間か化けた深海棲艦か、あるいは艦娘かは見れば解る位生きていた。

ライネスの店に居候しつつ二人が街を歩いた限りでは、人間6割、艦娘1割、深海棲艦3割という所であった。

誰がどこで何を食べ、何が流行り何が敬遠されているか。

二人はしばらく情報を貯め、話し合った上でライネスに1つ提案をした。

「塩味を止めろって?」

「止めなくても良いんですが、塩味って書くのを止めた方が良いと思うんです」

「なんでまた?」

「海で生活していると否応なく塩味オンリーになるので、わざわざ食べたくないんです」

「・・・なるほど。じゃあソースとか醤油とかの方が良い訳だ」

「はい」

「調理法に関しては？」

「お刺身よりは揚げ物や煮物といった火が通っている料理の方が良いと思います」

「同じ理由だね？」

「はい」

「ふーむ・・・」

チリリン。

ドアチャイムが鳴った。

「ライネスさん、何でも屋です。何かご用はありますか？」

「やあファツゾ、丁度良い所に来てくれた。隣町のスーパーに行く機会はあるかい？」

「ええ、さつき米を頼まれたんでこれから行きますよ」

「それならデミグラスソースの缶詰、瓶詰めケチャップ、パン粉、後は豚の・・・」

ルフィアとクーはにこにこしていた。

自分達の言った事をライネスは受け止め、考えて反映してくれる。

それはとてもやりがいに繋がる。

ルフィアはふと、ポケットにあった紙切れにそれをメモした。

何となく忘れないほうが良いと思ったからだ。

それから2年が経った。

ライネスの店はメニューの調整とルフィア達の客引きにより、少しずつ売上が伸びていた。

また、ライネスは町の変化にも気がついていった。

「ルフィアちゃん」

「はい？」

「最近・・・町に若い人、増えたと思わないか？」

「それは多分、人が減って、深海棲艦か艦娘が増えてるんだと思います」

す」

「そうなのか？」

「艦娘は元々少女から若い女性の姿をしていますし・・・」

「ふうむ」

「深海棲艦も必要がなければ老人には化けません」

「なんでだい？」

「お年寄りになると体の動きが鈍くなったりするじゃないですか」

「そうだなあ」

「でも化けてるだけなんで、本当は軽々動くわけです」

「ふむ」

「なのでうっかり元通りに動いちやうと怪しまれるじゃないですか」

「まあ杖突いてたジイさんがアスリートみたいに走り出したら首を傾げるな」

「その通りです」

「なるほどな。ルフィアちゃんもそうやって見分けてるのかい？」

「いえ、なんとなく、見たら解ります」

「なんとなく、か」

「はい。なんとなく、なんです」

「ん。そうか。ありがとな」

わしわしと頭を撫でられた後、ルフィアは手帳を取り出した。

「見返りは額より返す早さ」

そう記したルフィアはうむと頷いた。

手帳はそうした言葉が沢山書かれていた。

第6話

3人が出会ってから5年目のある日。

「・・・ほう、起業する事にしたのか」

「はい。働き始めたら仕事場も別の所になっちゃいますから、あの・・・」
「おっちゃん、今までありがとうね。それと、手伝えなくなっちゃってごめんね」

閉店後、二人は温めていた話をライネスに打ち明けた。

少し白髪が増えたライネスはいつものパイプをくゆらしながら頷き、少し遠い目をしながら言った。

「手伝いが居なくなるより、家が静かになるのが寂しいなあ」

「・・・えっ?」

「兄貴達が居た頃は賑やかだったし、店も立ち上げたばかりでてんやわんやだった」

「・・・」

「それから2年くらい物音一つしない家に住んだが、悲しい気持ちだったから丁度合っていたんだ」

「・・・」

「それがクーちゃんとルフィアちゃんが来てくれて、一気に明るくなった。本当に楽しかった」

「・・・」

「クーちゃんは特に人の気持ちに敏感で、私の事も明るく励ましてくれた」

「あえっ・・・えっと・・・」

「ルフィアちゃんは経営に必要な知識やノウハウを勉強していたし、手帳によくメモしていただろ」

「み、見てましたか・・・」

ライネスは紫煙を吐き出すと、ふふっと笑った。

「まあ、俺はまだ働けるし、ここを離れるつもりも無い」

「・・・」

「もし事業が上手く行かなくなって困ったら、いつでもこの町に戻っ

て来るといい」

「・・・」

「やりたい事をやっといで。たまには手紙くらいくれよ?」

「あ、えつとね、おっちゃん・・・」

「なんだ?」

「僕達の事務所、2ブロック先の倉庫だよ?」

ライネスがジト目になった。

「それじゃお別れでも何でもないじゃないか・・・たまにはメシぐらい食いに来るだろ?」

「でっ、でも、お家は離れちゃうので・・・」

「そーいや：どこに住むんだ?この町には貸しアパートとかあまり無いだろ」

途端にクーとルフィアの顔が青褪めた。

「本当に本当にごめんなさい」

「気づいて良かったなあ」

自分達の住まいを探していなかった二人は準備の合間に探したものの、結局見つけられなかった。

なので起業した後も、家が見つかるまではライネスの家から通う事にしたのである。

頭を下げる二人に、ライネスは笑った。

「いきなりふつつり居なくなるより、夜だけでも帰ってきてくれる期間がある方が俺は嬉しいかな」

「えっ?」

「ま、気長に探すといひさ」

こうして仕事を始めたのだが、出来たてで実績も無い運送会社に向こうから依頼が来る筈も無い。

二人は町を回ったものの、丁度多数の宅配業者が乱立したり、大騒動があった頃で、なかなか依頼を得られなかった。

あつという間に半年が過ぎ、9ヶ月が過ぎ、まもなく1年を迎えようという頃。

「見通しが・・・甘かったですう」

「何があった?」

「信用金庫さんから事業戦略を出せなければ、追加融資は難しいって言われちゃいました・・・」

「クーちゃんはどうした?」

「他の海運業者さんの所でアルバイトしてます・・・利息だけでも払わないと・・・」

ルフィアはしょんぼりとした顔でカウンターに座り、苦しい胸の内をライネスに打ち明けた。

ライネスはカシヤカシヤと食器を洗っていたが、洗い物に目を向けたまま言った。

「話を通じるってのは、仕事を頼みやすいもんだ」

「話?」

「常識と言い換えても良い。たとえばうちに来る何でも屋のファツゾには、ずっと買い物の代行を頼んでる」

「はい」

「最初は買い間違いや俺が銘柄を指定しなかったとかでトラブルも多かったんだ」

「はい」

「だが、お互いに常識がすり合わさってくると、「そろそろ要りませんか?」「ああ買つといってくれ」で通じる」

「・・・」

「便利屋は他にも居るが、今となってはファツゾ以外は面倒臭くて頼む気にならない。そういう事だ」

「なるほど・・・」

ライネスの話をもとに、クーとルフィアは翌日から倉庫に籠って戦略を練った。

そして

・ お客は深海棲艦に絞る

・ 定期航路で一定期間ごとに何度も顔を出す

・ 頼まれたら出来るだけ断らない

といった戦略を描き、ライネスに見せた。

「うん。良く書けてると思うよ。ここはこういう風に説明すると銀行が安心すると思う」

ライネスはクー達の話が曲解されないよう、幾つかのアドバイスをした。

運良く、顧客の一人から地上組を紹介してもらい、定期航路の話をする。一本の航路を任せてもらえる事になった。

さらに、古巣の軍閥を訪ねると、幾つか定期契約を結んでくれたのである。

「聞いてください！お仕事がもらえて、融資も認めてもらえたんです！」

ぴよんぴよん飛んで喜ぶルフィアに、ライネスは真面目な顔で言った。

「よし。じゃあたった今から、俺は君の事を「ちゃん」を抜いてルフィアと呼ぶよ」

「あつ、な、何か気に障りましたか？」

「違う違う。個人事業主は気を抜いているとな、順調だったものがあつという間にダメになるもんだ」

「・・・」

「俺もそういう個人事業主だから、その厳しさは嫌というほど知ってる」

「・・・」

「君達二人だと、きつと君が経営戦略を握る事になる。個人事業主としての顔が多くなると思う」

「・・・」

「お金の事も、仕事の事も、油断しちゃダメだ。同じ事業主として忘れて欲しくない」

「・・・」

「そういう意味で、だよ」

「じゃあ・・・私は・・・」

ルフィアはほうつと頬を染めると、

「ライネスおじさまと呼ばせて頂きます。今までの御恩に感謝と、敬

意を込めて」

ライネスが困ったような笑顔をした。

「あー、姪っ子も俺の事をそう呼んでたな」

「ええっ!? あつ、あの、ごめんなさい! それじゃお嫌ですよね?」

「・・・いや、あの時俺は止めろと言ったが、本当は気恥ずかしくて、嬉しかったんだ」

「・・・」

「・・・ん、よし。そう呼んでいいよ」

「良いんですか? あの、ありがとうございます」

「それとき・・・クーちゃんが俺の事をおっちゃんと言うのは何とか・・・ならんかなあ?」

「拳で理解させてきましようか?」

「待て待て待て。結構ルフィアは手が早いな?」

「・・・時折、クーの能天気さに殺意が沸く事は否定しません」

「折角一緒に働いてくれるパートナーなんだから、あんまり拳を使うなよ?」

「・・・おじさまがそう仰るなら」

「ん」

二人はにこりと笑いあった。

この半年後、結局クー達は倉庫の小部屋を改装して居室とし、そこに今も住んでいる。

第7話

話は現在に戻る。

ルフィアはそつと、ライネスに包みを差し出した。

「うん？なんだ？」

「おじさまの好みに合うと良いのですけど」

ライネスが包みを開けると、小さなマホガニーの木箱が出てきた。

箱の中には象牙と金で出来たタンパー、リーマー、ミニナイフが入っていた。

いずれもパイプで使う道具である。

ライネスは肩をすくめた。

「またこんな高い物を・・・」

「おじさまに差し上げるのに粗悪な物なんて選びません」

「箱から出すのさえ恐れ多いよ」

「そう仰らず、ぜひ普段からお使いください」

「うーん」

「おじさまのポケットに入れて頂ければ、一緒に居られるようで嬉しいですし」

ふと、思い出したようにライネスは訊ねた。

「そういえば、どうして家を出たんだい？」

ルフィアは苦笑した。

「クーは騒がしいだけじゃなくて、しょっちゅう食器とか家具とか壊してましたし」

「まあ・・・否定しがたいなあ」

「ご負担に・・・なってしまうじゃないですか」

ライネスはこつんと、ルフィアの頭に軽く拳を置いた。

「あいたっ」

「子供がそこまで気を配らなくて良いんだよルフィア。私は君達と暮らせてとても楽しかったんだよ？」

ルフィアは寂しそうに笑った。

「おじさま、私達は今年で生まれてから30年を数えました」

ライネスがぽかんとしたのを見つめながら、ルフィアは続けた。

「私達は艦娘として数日、その後を深海棲艦として生きてきました」

「・・・」

「鎮守府で生まれ、幾つもの軍閥の間を渡り歩き、この町にたどり着きました」

「・・・」

「おじさまと出会ってから10年になりますが、私達は化けているだけなので姿形は変わりません」

「そうか・・・人間が10年前にあの背格好だったら、今頃成人式とか、そんな感じか」

「はい。そしておじさまは、この10年で随分変わられました」

「老けた、か。まあ自覚してるよ」

「・・・私達は老いませんし、寿命もずっと長いです。でもおじさまの人生は、私達よりずっと短い」

「・・・」

「艦娘にせよ深海棲艦にせよ、良い人との出会いはとても嬉しいのですけど・・・」

「けど?」

「あつという間に亡くなられてしまうので、お別れが本当に辛いんです」

「・・・」

「そしておじさまには、自由に生きる術を教えてくださいたいご恩があります」

「・・・」

「だから・・・おじさまがご存命の間は、少しでも好きな事が出来て、幸せであって欲しいんです」

「・・・」

「地上で好きな事をする為には、お金はとても大事です。だから・・・私
は・・・私達のせいで・・・」

ライネスはにこにこ笑いながら、目に涙を貯めたルフィアの頭をぐしぐしと撫でた。

「一緒に暮らすと、一人で生きるよりかはお金はかかるよ」
「・・・」

「でも、空気を前に一人で飯を食うより、あれやこれや話しながら食う方が旨い」
「・・・」

「俺が好きなのは、店を続けてる理由でもあるけど、人と関わり、話をすることだ」
「・・・」

「時に洗い物の最中に遅刻魔が店を訪ねて来たりもするけど・・・」

「お、主に私達ですよね・・・」

「それだって1日中誰も来ないよりずっと楽しいんだよ」

「おじさま・・・」

「私の幸せをといるのなら、また一緒に3人で暮らさないかい？」

「・・・良いんですか？」

「その方が楽しいからね」

「じゃ、じゃあ、今の仕事辞めて、お店を手伝います」

「折角軌道に乗せたんだから辞める事は無いよ。やりたかった事なんだろう？」

「でも、それだと私達は何日も家を空ける事もありますよ？」

「構わないよ。それでも今よりずっと長く一緒に居られるじゃないか」

「あ・・・あの・・・」

「うん？」

「おじさまは・・・いつもそうして、私達を認めてくださいます」

「・・・」

「私達は艦娘の時、生きる事そのものを認めてもらえませんでした」
「・・・」

「何の為に生まれてきたんだろうってクーンと泣きながら冷たくて暗い海に沈んで、深海棲艦になりました」
「・・・」

「海の底では皆、悲しみを復讐という暴力で解決する事しか考えてい

なかった」

「・・・」

「そんな悲痛な雰囲気嫌になって逃げ出したんですけど」

「・・・」

「おじさまが私達にくださったチョコミントのアイスは、私達が初めて知った愛でした」

「愛？」

「はい。他にも無償の愛、慈しみの愛、優しさの愛、おじさまは沢山の愛をくださいました」

「い、いや、俺は」

「おじさまが愛をくださったから、私達は愛というものを知りました」

「・・・」

「その後も今日に至るまで、おじさまはずっと愛を与え続けてくださいました」

「・・・」

「だから私は、おじさまの事が大好きです」

ライネスはまっすぐ自分を見てにこりと笑ったルファイアに、姪の姿が重なった。

「ライネスおじさま、だあい好き！」

ルファイアはライネスが自分を強く抱きしめて泣いている事に驚いた。

あの時から今に至るまで、これだけ声をあげて泣くライネスを見た事が無かったからだ。

だが、すぐに理由が解った。

きつと、あの写真に写る姪御さんの面影を私に重ねて見ているのだろう。

それなら、それで良い。

そうする事でおじさまが少しでも心の傷を癒せるのなら。

おじさま、私はずっと傍にいます。

おじさまが亡くなるまで、この家で、この姿で。

私には、それが出来るから。

「というわけでき、おっちゃん、また来たよ？」

「お・じ・さ・まと！言えと！あれほど！」

「うぐぐぐー！」

「まあまあまあ、ルファイア、その辺で・・・ええつと・・・おっほん」

咳払いをするライネスを、きよとんとした顔で見るクーとルファイアだったが、

「・・・おかえり。クーちゃん、ルファイア」

そう言っつて穏やかに微笑むライネスを見て、

「ただいまっ！」

「たっ、ただいま戻りました、おじさま」

ニカツと笑うクーと頬を染めながらもじもじと言うルファイア。

ライネスは思った。

この二人はちつとも変わってないが、それで良いんだ、と。

第8話

「それでは、行ってきます」

「お土産買ってくるね」

「事故にはくれぐれも気をつけてな」

ライネスが見送る中、クーとルフィアを乗せた長距離バスは町の喧騒へと姿を消した。

今日から始まる北欧ルートは、長距離かつ荷物が多いので二人で対応する航路の一つである。

南下して喜望峰を回り込むよりサハリンから北極海に行く方が早い。

そして国内は北海道の北端までは高速バスと列車を乗り継ぐ方が圧倒的に早い。

（かつて最速を誇った旅客機は墜落事件が頻発した為、今はほとんど軍用機しか飛んでいない）

ゆえに二人は人間の姿のまま、バスに乗って出発したのである。

そしてこのルートはもう一つ、その陸路でも重要な役割があった。

「クーちゃん久しぶり！元氣してた？」

「ひゅちゃんやっほ〜♪」

ゴン！

思い切り砕けた返事をするクーの頭にルフィアの拳が着弾した。

「う、うぐおおお・・・」

両手で頭を抱えてしゃがみこむクーを横に、涼しい顔でルフィアが言った。

「飛龍部長、ご無沙汰しています。この度もご用命頂き、ありがとうございます
ございます」

「あ、うん。ルフィアちゃんこんにちは。二人とも相変わらずだね・・・
すみません。きっちり言い聞かせておきますので」

ルフィアは飛龍と呼んだが、正確には「元」飛龍であり、現在は深海棲艦のヲ級である。

同じくヲ級となった元蒼龍と二人で暮らし、地上組の北陸地域部長

として活躍している。

※本作中では呼称として飛龍のままとする。

「じゃあ早速だけど、倉庫まで行こっか。お昼食べたのかな？」

「まだなんです。乗り継ぎでどっかの誰かさんが全然違う路線バスに案内してくれやがりました」

そういつてルフィアはクーの頭頂部に拳を押し付け、ぐいとひねった。

「いたたたたた！わぎとじゃないんだよう・・・」

「わぎとだったらこんなもんじゃ済まないわよ！」

「うえーん、暴力女がいじめるう」

「なんですってー！」

「ま、まあまあ、じゃあどつか食堂寄って行きましょ」

飛龍は二人をなだめつつ、乗ってきた車のキーを取り出しながら思った。

うん、いつも通り騒がしい。

「おいっし〜！」

「シロエビのかき揚げは美味しいですね〜」

「でっしよでっしよ？お刺身もあるよ」

「んー甘あい！」

飛龍が立ち寄ったのは大きな駅の中にあるチェーン店系の食堂だった。

飾らず気取らず、客の出入りが激しい。食券方式なので店員も客をほとんど見ていない。客層も様々だ。

そういう店である方が、深海棲艦の自分達が人の間で紛れるには都合が良い。

刺身を嬉しそうに頬張るルフィアの隣で、クーは店内をさりげなく見ていた。

「・・・」

「どうしたの、クーちゃん？」

飛龍の呼びかけに軽く首を振りつつ、

「ううん。僕の町で過ごす方がのんびり出来るなあって・・・」

飛龍は頷いた。やはりクーはそういう所に敏感だ。

深海棲艦が住み辛い1位は地方の農村、次いで地方都市で、逆に大都会は楽だというのが共通した意見である。

それは人間同士の横のつながりの濃さと言い換えても良い。

勿論一番住みやすいのは人が居ないか、深海棲艦であると知った上でも捕まえる人が居ない地域。

例えばライネスの待つ港町とか。

戦時中であり、巡回中の公安とすれ違ったり、駅や県境で検問を通り過ぎる等、ヒヤリとする場面にも割と遭遇する。

その度にライネスがチョコミントアイスを持って笑顔で頷く姿が脳裏をよぎる。

クーはそれほどライネスに思いを寄せているわけではない。

だが、あんなに無条件で優しくしてくれるのは世界でライネスだけであり、早く帰りたいとは思おう。

クーはちらりとルフィアを見た。

ルフィアはホームシックにかかつてないだろうか？

だが、クーはもう1度首を振った。

仮になっていたとしても仕事は始まったばかりだ。

ならば下手に郷愁を刺激するより、明るく振舞って励まそう、と。

「満腹満腹〜♪」

「ご馳走様でした。本当に奢って頂いて良かったですか？」

「あれくらい大丈夫！私に任せなさい！」

「いよっ！太っ腹あ！」

ニツと笑うクーの肩を、一気に真顔になった飛龍が揺さぶった。

「・・・えっ？私太った？そう見える？ねえクーちゃんマジ?!」

「ちっ・・・違・・・うぐぐぐ」

「あつ、あのつ、今のは言葉のあやだと思えます！いつもスマートで素敵です！」

ルフィアの言葉に飛龍はクーの肩をパツと離して答えた。

「そっかなあ・・・いやあ参ったなあ」

「あ、あは、あははは・・・」

深海棲艦は老いる事はないし、海底で生命維持装置を使って生活する分には体重の増減は無い。

しかし、地上でご飯を食べて生きていくと、体重は見事に増減する。正確に言えば、痩せるより太る方が圧倒的だ。

生命維持装置は食という楽しみにはならないが、ご飯は美味しいので食べ過ぎてしまうからである。

一方で重量超過で浮上出来なくなったという洒落にならない実例もあるので切実な問題である。

とはいえ。

「食べる楽しみこそ地上生活の特権だもんね〜」

車に戻った3人が声を合わせて言ったこの一言に集約される。

なかなか複雑な乙女心というわけである。

飛龍の運転する車は郊外の倉庫へと入って行った。

ここは幾つかのダミー会社を経由して地上組が借りている物流拠点の1つである。

「えつと、まずは受け取っちゃう方が良いよね？」

「はい。お願い出来ますか？こちらがリストになります」

「私は書類確認してくるから荷下ろしお願いね。あ、海水はそこに引いてあるから」

「はい」

クーとルフィアは海水に軽く足を浸すと、ワ級の姿へと戻った。

そして荷受と書かれた白い枠の中に、預かってきた荷物を置き始めたのである。

しばらくして。

「・・・ねーねールフィアちゃん」

「ハイ？」

「受ける方は合ってたんだけどさ、預かって貰う方の単位が違ってるよ〜？」

「エツ!?ドコデスカ!？」

「ここ。サバ味噌煮缶詰は12トンじゃなくて12ケースだよ〜？」

「・・・クー、ソコニ正座」

「ボツ、僕!？」

「コンナ間違イ、アンタシカ考エラレナイデシヨウガ！」

しかし。

「あ、ごめん！うちが頼んだ発注票自体が間違ってた」

という飛龍の一声が飛んできたおかげで、クーはルファイアの拳骨榴弾を免れたのである。

第9話

「ほんとに勘弁してよう、ルフィア怒ると怖いんだよう」

「あははは、ほんとごめん。晩御飯のお弁当フンパツしたから許してよ〜」

「えっ何？何くれるの？」

「じゃーん！越前ガニの釜飯とデザートは羽二重餅〜♪」

「やったー！」

すっかり機嫌が直ったクーを横目に、飛龍はルフィアに手招きをした。

「なんでしよう？」

「誤発注の件ごめんね。積載量だいぶ変わっちゃったよね」

「こちらでは珍しいですけど、全体としては良くある事なので」

「じゃあさつき物凄く怒ったのって・・・」

「いつも通りですよ？」

「えっ？」

ルフィアは肩をすくめた。

「クーに甘い顔すると際限なく甘えて来るんで」

「あー・・・そういうことか・・・うん、納得」

飛龍は蒼龍を思い出して頷いた。なんとなく共通点がある。

飛龍はにこりと笑った。

「じゃ、うちの荷物、宮城と稚内まで頼んだわよ！」

「お任せください！」

こうして二人は東北方面行き的高速バスに乗ったのである。

このルートのもう1つの役割。

それは地上組同士の物資の融通を行う定期便としての役割である。

日本エリアだけでも幾つもの地域支部があり、それぞれ物流拠点を持って運営しているが、どうしても偏りは生じる。

緊急の場合は地上組メンバーが自ら運ぶが、輸送時の公安対策など特殊なノウハウもある。

ゆえに定期便によるこまめな在庫調整は重要な役割なのである。

以前はC&L商会がこの分野を一手に引き受けていた。

だが、食糧をまとめて輸送した時に強奪された教訓を生かし、幾つかの業者に小分けにして依頼されるようになった。

C&L商会としては受注量が減ったのは痛手だが、増え続ける依頼に応えられなくなっていったのも事実だった。

ゆえに今は任せられた範囲をしっかりとこなしている、という状況であった。

その二日後。

「さつむー」

「しようがないし、これからもっと寒くなるわよ?」

「暖房モードにしようっと」

「そうね」

二人が先程たどり着いたのは北海道は稚内。日本最北端の地である。

ただし、稚内港やその近隣は鎮守府の管轄なので、うっかり使うと艦娘達に見つかってしまう。

ゆえに二人は少し南東側に回り、見渡す限り原野という浜辺に來ていた。

ここは地上組が提供してくれた、艦娘の警備が手薄な場所でもあった。

少し遠くで風力発電の風車が低い唸り声を上げて回っているだけで、とても寂しい場所である。

だが、人が居ると警戒しなくてはならない二人にとっては安らぎの場所であった。

「早く行きましょ。艦娘達の領海内では海底すれすれを移動するから日没前に距離稼ぎたいし」

「えー、ちよつと休もうよう。バスに乗りすぎてお尻痛いよう」

「さつさとする。待ち合わせ時間もあるし」

クーは溜息をついた。自分一人なら1時間位のんびりしてから出

航するのに。

「わかったよう」

数日後、真夜中。

「ココカラ2海里先二連中ノ受付ガアル。俺ハココマデシカ送レナイ。氣ヲツケテナ」

「アリガトウゴザイマシタ」

軍閥の案内人に従って北上したクー達は、メードヌイ島沖で案内人と別れを告げた。

よほど好戦的な軍閥を除き、年がら年中隣接軍閥と戦闘を繰り広げるわけにも行かない。

ゆえに軍閥と軍閥の海境は数海里ほど離して設定される。

軍閥の海域をマスクメロンの皮で例えれば緑の部分である。

そして白、つまりどこの軍閥にも所属しない空白海域こそ、C&L商会にとって危険海域なのである。

実際、先の案内者は危険を冒して空白海域の真ん中まで護衛してくれたが、不穏な集団も幾つか見えた。

クーは案内人が見えなくなるまで見送った後、そつとルフィアに言った。

「ネエルフィア、サツキ見エタ連中来ルト思ウ？」

「下手ニ動ケバ来ルデシヨウネ」

「コノママ真ツ直グ行ツテ良イノカナア」

クー達の目の前に広がっているのは密林でも岩場でもなく、360度海である。

ゆえにどこへ行っても見た目は変わらないし、まっすぐ行くのが次の軍閥が支配する海域への最短距離である。

彼らの支配海域はベーリング海はおろか北極圏全域であり、入ってしまったら北極まで安全である。

一方今居る辺りの空白海域は、案内人が親切で護衛してくれるくらい、大変治安が悪い事で知られている。

ゆえに皆、最短路を急ぐ。

だからこそ。

見た目は変わらなくても、すぐ下に機雷が潜んでいる事もある。艦娘も深海棲艦も恐れる網の罾が仕掛けてあるかもしれない。

ならず者達は襲った相手のその後など気にしない。こんな北の海で罾に嵌れば死が待っている。

恐る恐る最短路に踏み出そうとするクーをルフィアは止めた。

「待チナサイ。マダヨ」

「エツ？」

「ココデ待チ合ワセテルカラ。最低限ノ機能ダケニシテ、動力ナイデ」
クーはそつと、浮上システムと温度調節機能以外の艤装を停止した。

辺りに静寂が訪れる。

ルフィアは時刻を確認した。後30分。

先の案内人との鉢合わせはまずいと思ったのだが、少々時間を空け過ぎた。

ふと見ると、クーがそわそわしている。

まあ無理もない。

真つ暗な、ならず者がうようよ居る海のだ真ん中で、二人とも非武装。

最低限のシステムにしているのは、少しでもそういう連中に見つかる可能性を低くする為だ。

本当なら早く突破してしまいたいが、自分達にその力は無い。

こういう時はナタリア達ワルク्यूレが心底羨ましい。

ワルク्यूレはいつ、どこから、どういう航路で進むのかを荷とナタリアの都合で自由に決めている。

それはナタリアを視認した無頼者はおろか、軍閥さえも息を潜めて隠れてしまうから出来る事だ。

ワルク्यूレを知った上で立ち上がるのは海底国軍くらいであり、ナタリアもそこは心得ている。

裏返せば、ワルク्यूレに対抗するには海底国軍レベルの軍事力が要るという事である。

さらに、海底国軍は気に入らないとかいうレベルで総力戦に入る事

はないが、ナタリアはあつさり行使する。

今まで不心得者、あるいはトコトン運の無い艦娘がナタリア達と開戦して2時間生き残った記録は無い。

軍閥なら支配海域全体、艦娘なら所属鎮守府の全て、その一切を破壊し尽くすまで決して手を止めない。

ワルキューレの恐ろしさは総合的な火力や戦術レベルの高さだけではない。

稚拙な罠なら鼻で笑って解き、巧妙な罠なら逆に利用する程の個人スキルの高さである。

「アタシが網の罠に嵌ったって笑ってるからそのまま反撃してやったの。慌てふためく様が面白かったわ」

ナタリアはキツチン「トラファルガー」でグラスを傾けつつ笑い話にしていたが、ミストレル達は青褪めていた。

網の罠。

それは艦娘にとっても深海棲艦にとっても致命的で、運が良くても重傷を負う危険な罠である。

突如空から、あるいは海中から現れる丈夫な縄の網が体に巻きつき、一気に締め上げてくる。

下手に動けば艀装や兵装が壊れてしまう。海原の真つ只中でそんな事になれば後は死ぬだけだ。

砲門の部分だけ網をサバイバルナイフで切り抜き、艀装を壊さぬよう身をよじり、相手の急所を正確に狙う。

全員がそんな芸当を自然にこなせるワルキューレのメンバーだからこそ笑っていられる。

ルフィアは溜息をついた。

自分達が下手に真似しようとしても大火傷するだけだ。

この世は絶対にスタート地点もゴール地点も公平ではない。

御手手つないで皆で1位なんてお花畑は社会に出ればどこにもない。

不平等で、不公平で、様々な思惑に左右される、白と黒が不均等に混ざったドブネズミ色のマールブルなのだから。

その時。

二人の耳に艦装の駆動音が聞こえてきた。
不安そうに周囲を見回すクルー。

ルフィアは時計を見た。

そろそろ約束の刻限だが、少し早い。

この音の主は、敵か、味方か。

駆動音は徐々に近づいてきた。

第10話

ザバア・・・

「！」

海面に浮上してきた相手を見て、ルフィアは舌を打った。賭けは外れた。

こんな血生臭い気配を漂わせている港湾水鬼は待ち合わせの相手じゃない。

ゆつくりと顔を上げた港湾水鬼は、ルフィア達を睨みつけた。

「才前達、生キテ帰りタケレバ、持チ物ヲ全部置イテ行ケ」

クーはとつさにルフィアを見たが、港湾水鬼を前に全くの無表情で仁王立ちしている。

マズい。ルフィアが本気で怒ってる。

食料海洋投棄事件で信用を傷つけられた事を、ルフィアはそれはそれは苦々しく思っている。

働きもせず人の荷物を奪って生きているような連中を、ルフィアは決して認めない。

ルフィアはクーの見立て通り、怒り心頭だった。

労働の対価だけで生計を立てていく事がどれほど大変か知りもしない奴に！私は！負けるもんか！

何も答えず、荷物を取り出す様子も無いので、港湾水鬼は訝しがった。

だが、自らを恐れて硬直しているものと判断し、ニヤリと笑い、大声をあげた。

「怖ガルノハ解ルガ、私ハ氣ガ短イノダ。早くシロオ！」

「ハア？」

「・・・エツ？」

予想と全く違う返事に港湾水鬼は動揺した。

クーは本当は港湾水鬼に伝えたかった。

お願いだからルフィアをこれ以上刺激しないでください、と。

港湾水鬼は訝しがりながら、もう一度戦力チェックを行った。

自分は兵装も弾薬もフル装備であり、装填済であり、目の前のワ級はどう見ても2体とも非武装だ。

勝負にすらならない・・・はず。

なのになんで目の前のワ級はどっしり仁王立ちしたまま動かないのだ？

ハツタリ・・・としか思えない。いや、そうに違いない。

気を取り直した港湾水鬼はもう一度恫喝する事にした。

無頼者は無駄に出来る弾薬など無い。

定期的な補給手段が無い以上、次はいつ手に入るか解らない。出来れば撃たずに済ませたい。

それこそ非武装のワ級なんかには弾薬を使うのは勿体無い！

「オイ・・・コレが見エナイノカ？コノ主砲ハ」

「貴方、金融機関ノ債務取立人ニ困マレタ事アル？」

「・・・へ？何？何ト言ツタ？」

「金融機関ノ債務取立人。消費者金融デモ良イワ」

「エツ・・・ナ、何ヲ言ツテルンダ？我々ハ深海棲艦デ」

「知ツテルワヨ。私ガ何年生キテルト思ツテルノヨ」

「ソ、ソソナ事知ルカ。ソモソモコノ主砲ガ」

「耳元デ怒鳴ツタリ机ヲ叩イタリスル取立人ハ、決マツテ小者力素人ナノヨ」

「ハア？」

「本当ニ悪イ奴ハネ、散々手下ニ脅サセテオイテ、ヨリ悪イ条件ヲ優シク言ウノ」

「・・・エエト・・・ソノ・・・ソレガ何ダト言ウンダ？」

「アンタハ私達ヨリ強イ。ソウ思ツテルワヨネ？」

「当たり前ダ。オ前達ハ丸腰ジャナイカ」

「ドウシテ私達ガ、何度モ、ココヲ、丸腰デ、通レルト思ツテルノ？」

「・・・何が言イタイ？」

ルフィアは微かな、水泡の弾ける音を聞いてニヤリと笑った。勝った。

「ソノ答エヲ自分デ味ワイナサイ。冥土ノ土産ニ」

「!?」

ハツとした港湾水鬼が振り返ると、ザバザバと何体もの深海棲艦が急浮上して来る所だった。

慌ててリーダーを確認すると数十体の深海棲艦、それも戦艦や姫級がゾロゾロ居る。

こいつら・・・北極圏軍閥の海境警備部隊じゃないか。なぜここまで出張ってきた!?

くそつ、丸腰の連中は囷か!一掃作戦でも始めやがったのか?!ならば!

「チイイツ!才前達ダケデモ道連レニシテヤル!」

そう言いながら港湾水鬼はルファイア達の方を向いたが、

「アレツ?」

二人は忽然と姿を消していた。

「・・・エツ?」

もう一度振り向いた港湾水鬼は至近距離で海境警備部隊の一斉放火を浴びた。

黒光りする砲門が火を噴いた、そう認識する前に港湾水鬼は消し飛んでいたのである。

港湾水鬼が光となって昇天した頃、ルファイアとクーは海中を海境警備部隊の別働隊の案内で進んでいた。

海境を超えて安全圏に入った後、合流した部隊から1体の夕級がルファイアに急いで近づいていった。

「才迎エガ間ニ合ワズ、本当ニ申シ訳アリマセンデシタ」

「イイエ、皆サンハ予定時刻通りニイラツシヤイマシタ。約束通りデス」

「才怪我ハアリマセンカ?」

「大丈夫デス。回避行動モ取ツテイマセンカラ、荷物モ無事ダト思イマス」

「・・・回避・・・サレナカッタノデスカ?」

「エエ。皆様ノ荷物ガアリマスカラ」

夕級はごくりと唾を飲んだ。

もし自分の兵装が弾切れで港湾水鬼に遭遇したら、回避行動も取らずに預かった荷を護れるだろうか？

これがプロ根性という奴なのか・

クーはほつと胸をなでおろしていた。

海境警備部隊に迎えに来てもらう約束をしたのなら教えといて欲しかったなあ・

本気でちびりそうだったんだけど。

「二応、割レタ物が無イカ、中身モ確カメテモラエマスカ？」

「解リマシタ」

地図にも記されない、岩礁のような小さな島で取引作業は行われていた。

大量の荷を海上でやりとりすると海に落とさないよう細心の注意を払わねばならない。

ゆえにこういう見つけにくい場所を幾つか準備しておき、ランダムにその一つを使用する。

それがルフィアが指定した取引場所の運用方法だった。

場所を固定化すると受け渡しを狙って艦娘達に急襲される事がある。

実際、ルフィア達は取引中に艦娘達に襲われた事があり、その教訓を取引のある軍閥に伝授していた。

C&L商會が軍閥に信頼されているもう一つの理由。

それは、艦娘達の不意の襲撃を防ぎ、安定した兵站を運用するノウハウを提供してくれる事だった。

ルフィア達が想像するより遥かに高い価値として、軍閥達はこの情報を受け取っていた。

C&L商會の言うとおりに取引方法を定めるだけでそれらが得られる。

理論理屈を伝授されるより、目の前の解決策を具体的にくれるほうが遥かに役立つ。

そしてルフィア達はそれらを恩着せがましく言ってくるわけでも

ない。

ゆえに軍閥達はC&L商会の二人を重要人物として扱っていた。

先の軍閥の案内人が空白海域まで護衛したのも、この軍閥が海境警備部隊を寄越したのもそういう事なのである。

「・・・大丈夫デス。1ツモ破損ハアリマセン」

「ソレヲ聞イテ安心シマシタ。デハ受け取り伝票ニサインヲ」

「・・・コチラデ。トコロデオ願イシタイ荷物ガアルノデスガヨロシイデスカ？」

「荷物量ト行き先ヲ教エテ頂ケマスカ？空キヲ確認シマス」

ルフィアが取引を進める間、クーはなめらかな岩の上ですやすやと眠っていた。

今日は良く働いた。後はルフィアに任せよう。

第11話

ポーツ!

少し遠くで船の汽笛が聞こえる、薄明かりが差し込む海沿いの倉庫。

ルフィアはうきうきとはやる心を押さえつつ、北欧の地上組と最後の事務手続きを進めていた。

終わりを告げようとしている北欧の夏は、それはそれは過ごしやすい神の気候だった。

暑くもなく寒くもなく、湿度は低く日差しは温かい。

日本のように深海棲艦を追い回す公安も881研も居ない。

この取引が終われば往路用の予備日が2日間そのまま残っている。クーと昨晚相談し、明日明後日で町を散策する事に決めていた。

市内を歩くだけだが、本物の北欧の町であり、旅行気分は十分味わえる。

名所も1〜2箇所は回れるだろう。

おじさまへの土産もここで買おう。

何を買っていったら喜んでくれるだろう?

そうだ、たまにはテッドにもお土産買っていかうかしら?

サルミアツキとか。

しかし。

外で地響きがあったかと思うと、突然倉庫のシャッターを装甲車が突き破って来たのである。

あまりの出来事に呆然とする面々に、装甲車のスピーカーから声が響き渡った。

「全員その場を動くな!機動警察麻薬取締班だ!」

その声を合図に、四方から完全武装した集団が突入してきた。

外には赤色灯の瞬きも見える。

本物だと確信したルフィアは咄嗟に叫んだ。

「全員手を挙げて!抵抗しちゃダメ!」

翌日。

「……」

「じゃあ君は日本からここに書いてある物を届け、持ち帰る荷物を仕分けしていた、それだけだと言うんだね？」

「その通りです。何度もご説明しています」

「ふうむ……」

机を挟んでルフィアと対峙している警察官は、ガリガリと頭を掻いた。

何一つ、疑いの余地も無い。

他の部屋で取り調べている関係者の調書も全て一致していた。

日本から来た少女がこの国の友人に荷物や土産の品を持参した。

そして日本に居る友人にこの国から荷物を持って帰る約束もしていた。

だから荷物を取り違えないよう、皆であの倉庫で確認していた。

総合するとそういう話だったのである。

機動警察が突入してきた時、ルフィア達は全員人間の姿だった。

ゆえに少女と若い女性が数名、荷物の隣で突入してきた自分達を見てぼかんとしていた。

そんな構図だったので、突入当初から機動警察の面々は嫌な予感を感じていた。

無論、機動警察はマニュアルに従って全ての荷を開封し、涙目のクーを前にしても毅然とした態度で調べを進めた。

携行型X線探知機もくまなく使った。

しかし荷物はおろか、床下からも、壁からも、什器の中からも、麻薬のまの字も出なかった。

さんま蒲焼の缶詰にはさんまの蒲焼しか入っていないなかった。

麻薬犬は最後に開缶されたシユールストレミンクの臭いに半狂乱となり5ブロック先まで逃げていった。

完全にシロだったのである。

空振りや誤認逮捕というのは、警察にとって大変恥ずかしい出来事である。

特殊部隊が装甲車で強行突入したとあっては尚更である。

どうしても疑いを捨て切れなかった機動警察は署に全員連行したものの、そこは人権がしっかりしている北欧。

(外見は) 未成年の少女相手に証拠もなく取調べをしていると聞きつけた各種団体や弁護士が即座にすっ飛んできた。

新たな証拠も出ず、彼らの猛抗議もあつて夕方には取調べが終わった。

全容が解明されていないとして留置場に一泊となったが、食事を与えられ、睡眠も取ったうえで今朝を迎えていた。

しかし。

痛くも無い腹を探られたルフィアは静かに深く怒っていた。

この地に無関係の荷物は下ろしてなかったので無事だったが、ここでの取引分は全部パアだ。

送り主には自分達が謝らねばならないし、配送事故ゆえに約定で送料の半額を返さねばならない。

保険のかかっている品は保険会社と山のような事務処理をしなくてはならない。

よりにもよって、一番燃料代の高い北欧ルート。半額貰おうと大赤字である。

警察官を睨むルフィアの睨みがピクピクと動いた。

この阿呆共は何を根拠に私達の取引を邪魔したのだ！

話題は繰り返しになり、ルフィアには睨みつけられ、警察官が少し引いた時、部屋のドアがノックされた。

「はい・・・えっ・・・あ、ああ・・・解りました」

入ってきた警察官と言葉を交わした後、取調べを行っていた警察官は決まりが悪そうにルフィアの方を向いた。

「その・・・通報者の悪戯だったという事が判明した。君達の嫌疑は晴れた。釈放だ」

だがルフィアはジト目で見たまま身じろぎ一つしなかった。

その凄まじい無言の抗議を察した警察官は何度か咳払いした後、

「えー、っ・・・誤認逮捕をお詫びする」

と言ったが、ルフィアは一步も譲らず見続けた。

「・・・荷の、事、かな？」

ルフィアはゆっくりと頷いた。

折角運んできた荷も、受け取る筈だった荷も、倉庫の床にバラバラにぶちまけられた。

おまけに取引所として北欧地上組が管理する倉庫もメチャクチャだ。

巧妙に隠されている事が常の麻薬捜査では徹底的な調査は最も肝心ゆえに決して違法行為では無いが・・・

知った事か

警察官はついにルフィアから目を逸らした。

「そつ、それについては追って賠償請求、もしくは裁判を通じて補償額が確定されるだろう」

「私達は遠路はるばる日本からこの地まで、数多の苦勞を乗り越えて物を運んできたんです」

「うっ・・・」

「日々治安を維持されている事は敬意に値します。ですから我々にも尊敬出来る対応をお願いします」

「ぐっ・・・」

「さあー！」

警察官は溜息をつく

「荷を台無しにした事を詫びる。後、予定が許すなら留置場でファイにしてしまった一晩の代わりを用意しよう」

「・・・具体的には？」

「市内で一番見晴らしの良いホテルを手配するというのはどうかな。あとはその・・・ええと」

「台無しにされた物の代わりにお土産を買いたいですけど」

「それならホテルに併設されたショッピングモールがある。市内で一番大きい。何でも揃うだろう」

ルフィアはにこりと笑うと立ち上がった。

「ありがとうございます。賠償は別にして、早速宿にご案内頂けます

か？疲れてしまいました」

「自分も怒りの気力が切れたらどつと疲れるだろうし、きっとクローも限界だ。」

ルフィアはそう考えていたのである。

第12話

「まもなく山甲町、山甲町です。お降りの方は忘れ物の無いようご準備ください」

・キキーツ・・・プシュツ!

バスが信号待ちで止まり、ブレーキのエアが抜ける音がする。

ルフィアは窓と背もたれに頭を預け、口をうつすら開けたまま、ぼうつと電線を見ていた。

・疲れた・・・今回は・・・ほんとに・・・

隣で爆睡するクーは大いびきをかいてるが、今回だけは大目に見よう。

ベーリング海峡での不愉快な出来事といい、北欧での誤認逮捕といい、今回はなんなんだ。

毎回何かしらトラブルはあるけれど、つり銭を誤魔化されたり予定と荷物が違うとかそんな程度だ。

こんなに命の危機に続けて遭遇し、膝が震えるのを隠しながらハツタリをかまし続けるなんて事は無かった。

・・・ブルルーン

バスが再び走り出したので、ルフィアは電線を追う視線を下へと移した。

角を曲がった。そろそろクーを起こさないといけない。

ルフィアはゆさゆさとクーの肩を揺さぶった。

もう見慣れた景色だ。

あと500mも走れば私達が降りるバス停・・・あつ!

その人影を認めた時、ルフィアの表情に生気が戻り、ぱあつと笑顔になる。

「ねえ!ねえ!クーちゃん!起きて!」

「うー、なーに?」

「おじさまが!おじさまが迎えに来てくれてるわ!」

「・・・んじゃ降りるバス停だねー、用意するー」

「何をそんなしよぼくれているの！早く！」

クーは欠伸をしながら思った。

あれだけ大変な旅路をこなして帰ってきたのに、ライネスのおっちゃんを見ただけで……

「よくそんな元気残ってるよねえ……僕は無理だろう」

「しゃきつとする！おじさまに心配かけちゃだめ！」

プシューッ！ガチャッ！

バスの自動ドアが開くと同時に、ルフィアは荷物をクーに押し付けながらライネスの胸に飛び込んだ。

「おじさまあー！」

慌ててルフィアを抱きとめたライネスはにこにここと微笑んだ。

「おおとつと……お帰り、ルフィア、クーちゃん。怪我とかしてないか？」

「平気！おじさまに北欧でお土産を買ってきましたの！お気に召すと良いんですけど」

ルフィアの後ろで、バスの運転手が貨物室から二人のスーツケースを下ろしたのを見たライネスは言った。

「まあまあ、とりあえず家に帰ろう。長旅で疲れただろう？二人の荷物を持ってあげよう」

クーは目を輝かせたが、ルフィアはパツとライネスから離れてクーの足に着地すると、

「大丈夫です！さあおじさま、早く帰りましょー！」

「じゃあ帰るとしよう。今日は少し冷えるから子牛のシチューだ。二人が好きなのパンも焼いておいたよ」

「嬉しいっ！あのっ、チョコミントアイスは……」

「勿論あるよ」

「わーい！おじさま大好きー！」

「くお……おお……本気で踏むし……僕何も言っていないのに……ルフィアの馬鹿あ……」

踏まれた足をさすりつつ、二人の背中を見ながらクーは思った。

ほんとにもう……もう結婚しちゃえば良いんだよう……

数日後。

「・・・」

北欧ルートの件も落ち着き、今日はC&L商会の数少ない休業日である。

ただしキッチン「トラファルガー」は営業日なので、ライネスにあわせてクー達は起きる。

正確に言えば、起きないクーをルフィアが文字通り叩き起こす。そして朝食の片付けや店の開店準備を手伝い、今に至る。

ライネスは店に出ているが、ルフィア達はそれぞれの部屋に戻っていた。

時折、微かに聞こえる音から察するに、クーは再び眠りについたようである。

窓の外は穏やかな晴れの天気で、真つ白な雲がゆっくりと空を泳いでいる。

「・・・」

ルフィアは窓の外を眺めていたが、その瞳に景色は写っていないかった。

どうしよう・・・

話は昨晚に戻る。

「えっ!? ベレーちゃん艦娘に戻れたの!?!」

「おう。すげーだろ! 今や立派な潜水艦だぜ!」

「あ、あの、ミストレルさん。立派だなんて恥ずかしいです・・・」

「良いだろ、本当の事だし」

「はううううう・・・」

キッチン「トラファルガー」にファッツ達が顔を出す事は珍しい。

そして丁度その時間にルフィア達が店に居合わせる事はもつと珍しい。

ゆえにベレーが艦娘に戻っていたと知ったのはその日から随分時間が経った今夜だった、という訳である。

だが、仔細を聞いたクーは肩をすくめながら言った。

「ベレーちゃんが戻れたのは喜ばしい事だけども、その方法じや僕達は無理だねえ」

ファッツゾがクーを見ながら言った。

「・・・ん？、クーちゃんは戻りたいのか？」

「まあ・・・うーん・・・今となつてはどうなんだろう？」

「艦娘につて事か？それとも人間にか？」

「悩ましい所だけど・・・ルフィアはどう思う？」

一心に自分にも使えないかと考えていたルフィアは慌てて聞き返した。

「えっ？ごめん。何？」

「戻るなら艦娘か、人間かつて話」

「・・・クーちゃんはどっちにする？」

「あちや。返つてきちやつたか・・・うーん」

クーは少しの間悩むと、続けた。

「公安とかの目が怖い、という意味では艦娘でも鎮守府に所属しなければ一緒だしさあ」

「そうね」

「かといって人間になるとあつという間に死んじゃうでしょ」

その言葉にルフィアは俯いた。

大好きなライネスが「たつた10年で」あつという間に年老いてしまった。

ライネスの頭に白い物が増え、皺が増える速度と同じく、ライネスとの別れが超高速で近づいて来る。

それはルフィアにとって、最も気づきたくない、考えたくない事だった。

ファッツゾが渋い顔をした。

「俺はあまり長生きしたくないが・・・ライネスはどう思う？」

グラスを拭く手を止めたライネスは少し考えるそぶりを見せた後、「姪っ子達が死んだ後しばらくは、正直いつ死のうがどうでも良いと思つてたんだが・・・」

ルフィアはライネスの死角となる位置から、じつとライネスを見て

いた。

「んーまあ、今は健康なうちは長生きしたいな。ファッツも似たようなもんじゃないか？」

ファッツは肩をすくめた。

「俺は・・・ミストレルやベレーの足手まといになる前まで、だな」

ミストレルがギツとファッツを見た。

「ファッツ・・・アタシがファッツが怪我したり病気になったからって見捨てるだけでも言うのかよ？」

「そうじゃない」

「だったら！」

「俺が60だの70だのになって、今と同じように頭が回るわけ無いだろ」

「・・・」

「体だってそうだ。無理が利かなくなり、目も耳も思考速度も衰えていく、それが老いてもんだ」

「・・・」

「寝たきりも嫌だが痴呆症にでもなりや、俺が覚えてない所で俺がお前達を殴ったり手を焼かせる事になる」

「・・・」

「俺は、二人にそんな迷惑というか、悲しい思いをさせたくない」

「・・・」

「まあ、よほど運が悪くない限り、少なくともあと20年は気にしないで良い話題だと思うがな」

そう言つてファッツが笑い飛ばそうとした時、ベレーが目を見開いて言った。

「たった・・・20年、なんですか？」

第13話

見た目が変わらず、ずっと少女や若い女性の姿をしている艦娘や化けた深海棲艦達。

その為よく誤解されるが、例えば最長老である大本営の雷やヴェールヌイ相談役は1世紀近い時間を生きている。

それでも、人間の平均寿命や最高齢と比較すればそれほど差異は無いように思うかもしれない。

だが、彼女達はその間ずっと「最前線に立てる現役」なのである。

人間の場合、どんなに頑張っても生後約20年は育成期間で、60歳を過ぎれば退職である。

つまり頑張っても40年そこらしか就労出来ないし、「最前線に立てる現役」はその中の20年程度。

戦死や病死、中途退職等で去る事も勿論ある。

かたや艦娘達は先程も書いたとおり最初からずっと「最前線に立てる現役」である。

つまり、雷や五十鈴から見ると、周囲の人間はどんなに長くても2世代、平均して4世代は交代している。

着任当初に周囲に居た人間は全員亡くなり、下手をするとその孫の代さえ亡くなる頃合なのである。

いかに艦娘や深海棲艦にとって人間の寿命が短く感じるかお分かり頂けるであろう。

ライネスは苦笑しながら言った。

「まあその、ベレーちゃん達にとっちゃ20年はあつという間かもしれないが・・・」

ファッツが頷きながら続けた。

「人間は老いるからだろうな。60年でも生涯としては十分長い時間だよ」

ミストレルは頬杖をついた。

「考えた事無かったけど・・・アタシ達とファッツ達の時間の感覚は全然

違うんだな・・・」

ベレーはストローでグラスに入ったソーダを混ぜながら言った。

「私、ファツゾさんやテッドさん、もちろんライネスさんともずっと居たいです。その後が想像出来ません」

その時、カウンターで静かにウイスキーのグラスを傾けていた武蔵が振り向いた。

「我々の時間にファツゾ達が合わせる事は出来んが、逆は出来るぞ？」

クーが肩をすくめた。

「まあ、艦娘の皆には解体っていう手段があるからねえ」

ルフィアも頷いた。

「そうすればライネスおじさまと同じ人間としての時間を歩めますものね。でも、私達は・・・」

武蔵がルフィアを見た。

「うん？まだ聞いてなかったか」

「何がです？武蔵さん」

「ああいや、例のソロル鎮守府なんだが」

「あの魔境がどうかしましたか？」

「何故に深海棲艦が大勢集まっていると思う？」

「カレー教に洗脳されて狂ってしまったからでしょう？」

「ま、まあ、カレー教の事は否定しないが、最近はそれだけではないらしい」

「と、おっしゃいますと？」

「深海棲艦を艦娘や人間に戻してくれる。結構遠くの海域まで勧誘の為の船を出してるらしいぞ」

一瞬、場が静まり返ったが、沈黙を破ったのはクーのヘツという笑いだった。

「どうせデタラメで、船も乗ったら自爆するとかなんですよ？酷い手使うじゃん」

ルフィアも頷いた。

「深海棲艦から艦娘に真剣に戻りたがっている子は沢山居るのに・・・それを利用して騙すなんて・・・」

だが、武蔵は首を振った。

「気持ち解るが続きを聞いてくれ。我々は以前、野暮用でソロル鎮守府に行つたのだから」

「うん」

「その時、深海棲艦になつてた姉上と扶桑を艦娘に戻してくれたのだ」

「・・・えっ?」

腕組みをしていたファッツが思い出したように口を開いた。

「そういえば神武海運に大和さんと扶桑さんが増えたな。てつきり逃げてきたのかと思つてたが」

武蔵が続けた。

「ソロル鎮守府の司令官は、艦娘も深海棲艦も希望すれば社会復帰させる用意があると言つた」

クーが笑つた。

「どうして鎮守府が深海棲艦に手を貸すのさ? 敵だよ? うまい事言つておびきだそうとしてるんじゃない?」

「それなら姉上や逃亡兵の我々がここに戻つてきている事をどう説明する?」

「あれ・・・そつ・・・か」

その時、ベレーが天井を見ながら言つた。

「そういえば・・・私も前にソロル鎮守府へ配達に行つた時なんですけど」

「うん」

「工廠で艦装をメンテナンスしてくれたんです」

ミストレルを除く面々は一瞬聞き流し、えっという顔でベレーを見た。

クーが訊ねた。

「それって、艦娘に戻つてから?」

「いいえ、深海棲艦だった時です。私も出来るのになつて、ちよつぱり心配だったんですけど」

「直してくれたの?」

「はい。とても調子が良くなりました」

ルフィアは眉をひそめた。

「解体後は戸籍取得や後見人といった手続きがあります。逃亡兵や深海棲艦にまでやってくれるとは・・・」

武蔵は肩をすくめた。

「ソロル鎮守府の司令官は出自は問わぬし、司令官が後見人になって戸籍取得や就職の面倒も見ると言った」

「そんな事を本当にしてくれるなら、それこそ深海棲艦が山のように押しかけ・・・あつ」

武蔵が頷いた。

「そういう事だ。また、こんな噂もある」

「なんででしょう?」

「深海棲艦から艦娘に戻らないかと勧誘してる深海棲艦の一団があるそうだ」

「えっ?」

「こつちは軍閥単位で誘っているようだ。応じた所もあるようで、最近勢力図の変更が激しくなっている」

クーが思い出したように言った。

「・・・あー、あれってそういう事だったのかなあ」

「どうしたのよ、クー」

「懇意にしてくれてた軍閥がね、契約を終了するって言ってきたんだけどさあ」

「解約くらい普通にあるでしょ」

「どこかで会ったとしても私達は絶対撃たないからね、って言ったんだよね・・・」

「別の軍閥に併合されたんじゃないの?」

「その海域で最大手だったから去る理由が無いんだよ。彼らが居なくなったら後は紛争状態になって大変だったし」

「ふーん・・・」

武蔵が肩をすくめた。

「噂の方の真偽は定かではないが、ソロル鎮守府の方はそういう事だ」

「・・・」

「だから人間となつて一緒に時を歩みたいなら手段はある」

「・・・」

「ただ・・・」

「なに？」

「見た所、ソロル鎮守府の司令官は初老を過ぎていた。軍役が残り何年かは解らぬが・・・」

ルフィアが頷いた。

「司令官が変われば鎮守府の方針はまるつきり変わってしまう。そこね？」

「そういう事だ」

第14話

「・・・」

閉店後。

クーとルフィアは店の片づけを手伝っていたが、クーはちらちらとルフィアを見ていた。

いつもは細々注意してくるルフィアが黙ったまま、ぼうつと同じ所を拭き続けている。

「おっちゃん・・・」

クーがライネスに心配そうな声をあげると、ライネスは頷き、

「さっきの話、だろっうな」

「・・・おっちゃんはさ、僕達が今のままで居ると、人間になるのどっちが良い?」

ハツとして、一瞬非難交じりの目でクーを見た後、そつと何うようにライネスを見るルフィア。

ライネスは腕を組んでしばらく悩んでいたが、

「そうさな、まず、人間になるという事は老いもセットでやってくる」
「・・・」

「ファッツも言ってたが、老いなんて楽しくもなんとも無い。体が言う事を聞かなくなるんだから」

「・・・」

「そして君達がそうなった所で、私の寿命に変化は無い」

「・・・」

「今、君達はその姿形にふさわしい年齢、10代前半になったとする」
「・・・」

「私はそろそろ50だ。私があと20年生きられてもその時君達はまだ30過ぎ。まだまだ死ぬような年じゃない」

「・・・」

「成長した二人の姿を見たい気もするが、今のままでも私は一向に構わない」

「・・・」

「そう考えれば、老いと無関係に暮らせる今の方が良いんじゃないか、と、思う」

「・・・」

「一方で深海棲艦で居る限り、どうしても肩身の狭さを感じるようになる」

「・・・」

「テッドや今の町長が居る限り、この町は安全だろうけど、彼らもまた人間だ」

「・・・」

「そしてソロル鎮守府の司令官も人間だ」

「・・・」

「だから我々が死に絶えた後に悪い方へと変化した場合、その時人間に戻りたいと願っても戻れるとは限らない」

「・・・」

「老いも可哀相だが、お尋ね者になって迫害されるのはもっと可哀相だ」

「・・・」

「だから、どう答えたものかね・・・」

クーとルフィアはそつとライネスのエプロンの裾を掴み、ライネスは二人の頭を撫でた。

「どの答えも心配や不安はあるけど、君達が一番幸せだと思う道を行けば良い」

「おっちゃん・・・」

「おじさま・・・」

「私は生きてる限り、二人の味方だよ」

こうして、話は現在に戻る。

ロビーに置かれた時計の鐘が1400時を告げたので、ルフィアはハッとしたり。

いけない。何もしないままこんな時間になってしまった。

・・・でも、どうしたら良いか解らない。

そもそも自分がどうしたいのか、悩みすぎてもう解らなくなって来

た。

こんがらがったら、淡々と事実を思い出せ。

いいか、淡々とだ。

そしたら真実がぼつと浮かんでくる事もある。

ずっと昔、軍閥のボスが言っていた事だ。

淡々と、か。

ルフィアは目を瞑り、腕を組んだ。

ええと・・・最初から・・・

谷風だったクーと、天津風だった私。

着任の挨拶をしたら、司令官にまた来たのかと舌打ちされた。

戸惑っていたら、秘書艦の人が外に連れ出してくれた。

秘書艦を始めとする艦娘の皆は優しくなったけど、今思えば同情だったような気もする。

矢継ぎ早にご馳走をくれたり、親切に訓練してくれたり、良い景色を見せてくれたり。

私達が早々に武装解除させられた状態で出撃し、撃ちまくられて沈む運命を知っていたのだろう。

致命傷を負った私達を見て、吹雪が泣きながら何度も「ごめんね、ごめんね」って言ってたし。

去って行く皆を目で追いながら、私達はなんで生まれたんだろうねって、クーと泣いたっけ。

だから深海棲艦になっても非武装だったのは心底がっかりしたなあ。

軍閥に誘われて、輸送要員として働いて、司令官がやったのは捨て艦戦法だったって聞いて。

腹は立たなかったけど、私達がさせられた事の意味を知って悲しくなったなあ。

だけど「一緒に復讐しようぜ！」って仲間に言われてもピンと来なかった。

司令官に酷い事をされたのかもしれないけど、艦娘の皆に恨みはなかったから。

軍閥は規模の大小に関わらず、やられる時はやられてしまう。ただ私達は運よく難を逃れ、何度か渡り歩くことになっちゃった。

最後の軍閥は割と大きくて補給部隊長まで行けたけど、だから内情が見えちゃった。

結局皆、過去にされた事にすごく腹を立てていて、復讐する為だけに今を生きていた。

どうやったらこれから幸せになるかなんて誰も考えてなかった。

でも、私達はそっちの方を考えたかった。

せつかく生まれてきたのだから。

クーも一緒の考えだって事を確認して、後任に引き継いだから私達は軍閥を去った。

目的はどうあれ、私達に親切にしてくれた軍閥だったから。

あれはやつといて良かった。

でなければ後で訪ねて行った時に契約なんてしてくれなかったと思う。

そして、噂で聞いていた地上組を頼りにこの港町を目指して。

上陸する前に海面から偵察していたら、波止場で釣りをしているおじさまが見えたのよね。

釣竿を優雅に振るおじさま、格好良かったなあ。

これはもう絶対運命としか思えないって、ふらふらと上陸しちゃったのよね。

ドキドキして舌噛みそうになっちゃったし、人間にも化け忘れてたし。

ハマばかりしたけど、初めてチョコミントアイスを食べたのもあの日だった。

おじさまも酷い過去を背負ってらっしゃるんだって思っ、一生懸命お店を手伝って。

・・・クーが物を壊しまくったから鉄拳制裁する癖がついちやっただのよね。

おじさまが仰るから最近ほ控えてるけど・・・

おじさまに経営方針のアドバイスを頂いて、おじさまにご迷惑をかけるないように生活も独立して。

何とか自分達の生計を立てられるようになった。

・・・そうだ、忘れちゃいけない。

一生懸命 *Deadline Deliver* として働いてきたのは、おじさまにお金を返す為だ。

私達に惜しみなく買い与え、食べさせてくれたおじさまは、沢山のお金を使ってしまった。

だから全額を倍にして返そうって二人で決めて、その為に頑張ってきたんだ。

でも、モンスター前輸送作戦で、貯めていた4千万コインは露と消えた。

おまけにおじさまの優しさに甘えて、また一緒に暮らしている。
ルフィアは溜息をついた。

第15話

ルフィアはそのままの姿勢で、過去の記憶の掘り起しから今の気持ちの整理に移っていた。

・・・そうだ。

ほんの2ブロックだけ、たった数年だけ、離れて住んで解った事がある。

私はおじさまと居たいんだって。

だって、離れていた時も、おじさまの店に行く理由が出来たらとても嬉しかった。

いつもおじさまの店に行ってたなら、きっと寂しくて帰れなくなる。だからいつもは他の店に行つて、食べ損ねたらおじさまの店に行こうって自分へのルールを作った。

だから、だから、事務処理が大変でも、伝票が多くても平気だった。夢中で仕事しても、食べ損ねたらおじさまの店に行けるって、無意識のうちに思ってたんだ。

でも、おじさまには何一つ言えない。

おじさまは間違いなく、私を見てもルフィアじゃなくて姪御さんだと思つて見てる。

それで良いと、納得、した、筈。

私ほどのようにでも化けられて、たまたま今の姿が姪御さんそっくりで。

それでおじさまが喜んでくれるなら、それで・・・

それで、良いって・・・思っ・・・

「ねえーどうしたのルフィア？大丈夫!？」

声に気づいて目を開け、焦点を合わせると、いつになく真剣な顔で肩を揺さぶるクーの姿があった。

「・・・えっ?..えっ?..何?..」

「良かった、気がついた?..さつきからお昼ごはんだよって何度呼んでも来ないんだもん」

「あ、あー・・・」

「それはそれとして、ルフィア」
「なによ」

「何でそんなに泣いてるの?」
「えっ?」

ルフィアは自分の頬に手をやった。
そこには幾つもの涙の跡があった。

クーがぐいと顔を近づけた。

「ルフィア」

「う・うん」

「僕は、どんな事があっても、ルフィアの傍にいるよ」

「・・うん」

「食べたくないかもしれないけど、おっちゃんが待ってるから下に行こう?ちよつとだけでも食べよ?」

「・・うん、ええと」

「?」

「ありがと、クー」

「へへっ」

1時間後。

「・だから、姪御さんの代わりで良いって・思ってた・筈なのに・」
昼食を取り、店の片づけを手伝った後、自分の部屋でルフィアはクーにぽつりぽつりと話していた。

ルフィアは思った。

なんだろう。

どうしておじさまの事を話すと涙が止まらないんだろう。

おじさまと居ると楽しいのに、どうしよう、これじゃクーが誤解する。

「うーん・」

クーは腕組みをして考えていたが、やがてルフィアに向き直ると言った。

「まどまってるから、ごちやごちやになるけどさ」

「良いよ」

「まず、えつと、おっちゃんに金を返せなくなっちゃったのは、僕のせいだから、ごめん」

「二人で決めた事でしょ。ナタリアの提案に乗って、古巣の軍閥を助けるって」

「そうだけど、ルフィアの言うとおり、輸送を断って伝言だけする手もあったし、そしたら今頃目標額だったじゃん」

「・・・まあ、ね」

「だから、万一の事とかあれこれ言って強行したのは僕だから、謝る」
「・・・」

「で、もう1つの件だけど、ルフィア」

「うん」

「僕が今のルフィアの姿になろっか？」

「えっ?」

「それでさ、ルフィアはもっと年上のお姉さんに化けたらどうかな」

「どういう・・・こと?」

「僕はおっちゃんに恩義は感じてるけど、友達以上の気持ちは無いよ」

「・・・」

「だから姪っこちゃんの代わりに可愛がられても平気なんだ」

「・・・」

「でもルフィアはさ、自分を、えつと、ルフィアとして見て欲しいんでしょ?」

「!」

クーが言葉を選びを選び、そつと放った一言はルフィアの心の深い所にある何かに直撃した。

ふるふると震えだしたルフィアを見ながら、クーはそつと続けていく。

「だったら、ルフィアはさ、えつと、おっちゃんをつりあいの取れる年に化けたら良いんじゃないかな」

「・・・」

「地上組では年の取り方も教えてくれるんでしょ?」

「・・・」

「その辺りを習ってき、おっちゃんが死ぬまで人間のように振舞ってみたら？」

「・・・」

「今から人間になるより、折角好きな年齢に化けられるんだから、それを生かしたらどうかなんて」

「・・・」

「ダメ、かな・・・」

ルフィアはしばらく沈黙していたが、やがて絞り出すような声で言った。

「も、もし、私が今の姿じゃない姿に化けて、おじさまが、い、嫌だつて、言ったら・・・」

「・・・」

「私・・・もう・・・生きていけない・・・そんな冒険をするの・・・ここ、こわい・・・よ・・・」

クーは溜息をついた。

ルフィアは本気も本気、命を賭した恋愛をしている。

だめだ。

恋愛なんてした事が無い僕じゃどうしてあげたら良いか解んない。

誰なら・・・この問題を解決出来る？

答えは出ていなかったが、クーはカタカタと震えているルフィアの手を取った。

「行こう」

「・・・えっ？」

「とにかく行こう！さあ！道を開こう！」

店の扉を開けながら、クーは言った。

「おっちゃんごめん！今晚は二人で外で食べてくる！」

ライネスは頷いた。

「あんまり夜に出歩くなよ。泊まって来ても良いから連絡を入れなさい」

「はい！じゃあね、おっちゃん！」

出て行った二人を見送りながら、ライネスは考え込んだ。いつも手を引くのはルフィアなのに、今は逆だった。

そしてルフィアはこちらを見ようともしなかった。

昼食の時から様子がおかしかったが、一体どうしたのだろうか？

一緒に物を食べてるから、食当たりなんて事は無いはずだ。

やはり昨日の事だろうか？

確かにどっちを選んでも手放して喜べる未来にはならない。

ルフィアは賢い分、ずっと先を見てしまうのだろう。

ライネスはふと、ポケットから象牙と金で出来たタンパーを取り出し、きゅつと握った。

神様。どうかあの子達に幸せを、御導きください。

私はその為にかなる助力も惜しみません。

第16話

「で、その相談をしに、うちへ来たって訳？」

「突然来た事は謝る。ごめん！でも僕じゃどうにもならなくて、でも」
「・解ったから、玄関開けたまま大声上げないで。とりあえず座ったら？」

「う、うん、ごめん・・・」

事務所に入ってくる二人越しに茶を用意するよう部下に伝えると、ナタリアは細巻き煙草に火をつけた。

ソファに座った二人の前に、そつとアイステイーが置かれた。

「運が良いわね。本場の上質な茶葉よ。荷を運んだお礼に貰ったの」
ルフィアは目の前に置かれたグラスを見つめながら弱々しく答えた。

「・・・うん。ありがとう」

ナタリアはその返事に目を剥いた後、溜息と共に紫煙を吐き出した。

「ちよつとお、幾らなんでも変わり過ぎでしょ。アンタがライネスの事を好きなんて町中誰でも知ってるわよ？」

「・・・へ？・・・クー？」

表情の抜け落ちたルフィアが死んだ魚のような目をクーに向けた。暗い瞳に狂気と殺意が満ちている。

クーは大慌てで手と首を振った。

「ぼっ、僕は何も言っていない！言っていないよ！」

ナタリアはジト目で続けた。

「クーから聞いたんじゃないやなくて、アンタがライネスと居る時の態度見りや誰だつて気づくわよ」

クーはルフィアががくりと頭を垂れたので、ほっと息を吐きながらナタリアに言った。

「でもきつと、ライネスのおつちゃんには気づいてないよっ。」

ナタリアは溜息をつきながら頷いた。

「ええ、ファツゾやテッドもね。あのビットだって気づいたのに、どうして男って鈍いのかしらね」

その時、俯いたままルフィアがつぶやいた。

「・・・そうよ・・・ライネスおじさまが気づいてくれないのが悪いのよ」
ぎよつとした顔でクーはルフィアを見た。

「ル、ルフィア・・・？」

「こんなに愛してるのに・・・こんなに大好きなのに・・・おじさまの為に何だって出来るのに」

「あ、あの」

「おじさまと結ばれないのなら生きてる意味なんて無い。私、私は・・・」
ナタリアは目を細め、紫煙を吸い込みながら言った。

「アンタ、何でも出来るって言ったね？」

「・・・ええ」

「じゃあ真正面から告白しなさいな」

ルフィアはがばりと頭を上げ、ナタリアを凝視した。

「っ!!」

「何でも出来るんでしょ？」

真つ赤な顔から真つ青な顔へと一気に変わったルフィアはしどろもどろで答えた。

「で、ででっ、でででも、も、もも、もし断られたら」

「おや、じゃあ何でも出来るってのが嘘だったのかい？」

ルフィアは数秒固まった後、がくりとうなだれた。

「・・・そうね。何でもって言うのは嘘」

「素直に認められるとこつちが困るんだけど」

ルフィアは消え入りそうな声で答えた。

「しようがないわ。本当の事ですもの」

ナタリアは細巻き煙草を持ったまま頰杖をついた。

「でもさあ、正直な話、生きてる限りうんざりするほどの男と出会えるのよっ・・・」

「・・・」

「こつちは幼女から老婆まで好き放題化けられるんだから、年の差な

「なんて一ミリも関係ないし」

「・・・」

「もつといえれば化け分ければ同時に何股だつてかけられるのよ。自分さえトチらなきゃね」

「・・・そつ」

「うん？」

「そんな汚らわしい事いらない！それに、男だからじゃない！優しく愛を教えてくれたライネスおじさまだから！」

「じゃー宣教師のところでも行きなさいよ。何日もかけて優しく聖書の解説してくれるわよ？」

「ちがつー！」

「何が違うつて言うのさ？え？ルフィア」

「えつ？」

「アンタが望んでる事はそんなに高潔な、人に語れるような清らかで真面目な事なのかい？」

「えつ・・・ええつ・・・と・・・」

ナタリアはニツと笑つて目を細め、ゆっくりと紫煙を吸い込み、吐いた。

「アンタ、ライネスと男女の関係になりたくないの？」

「そつ・・・れ・・・は・・・」

「托鉢僧に説法語ってもらつて悟り開きたいようには見えないけど？」

「え・・・ええと・・・」

「耳元で優しく睦言語ってもらつて、人に言えないような時間を過ごしたいんじゃないのかい？」

「う・・・うあ・・・」

「身も心も蕩けるような時間を愛する相手に満足するまで求め、味わいつくしたいんじゃないのかい？」

「そつ・・・それで・・・良いの？」

全身真っ赤になったルフィア、何の事だろうときよとんとするクー。

本当に対象的で面白いわとナタリアは思いながら続けた。

「良いんじゃないの？男女ってそういうもんでしょ。求め合って気持ち良くなったら果てに子をなすんだし」

「こっつ、子供っ！」

「それが愛するって事でしょ。聖書に書いてある愛と愛する事は違うわよ？」

「・・・」

「アンタそれを一緒だと思って、目一杯ブレーキとアクセル同時に踏んでたんじゃないのかい？」

「・・・」

「かたや愛したいとアクセルを踏み、かたや高潔な愛でなければならぬとブレーキを踏んづける」

「・・・」

「そんな事してたら狂っちゃうわよ？」

クーはそつとルフィアを見て、ぎよつとした。

ルフィアは笑いながら泣いていた。

「そつかあ・・・うん、私・・・あははっ、そうだ・・・そうよね・・・」

「ルっ、ルフィ・・・ア・・・？」

ナタリアはじつとルフィアを見ながら続けた。

「アンタはアンタを許してあげなさいよ。そう願う事は忌むべき事でも汚らわしい事でもないわよ？」

「・・・違う、の？」

「それが好きって事で、愛して欲しいって望むって事よ。当たり前的情感。強行すれば犯罪だけど」

「・・・」

ルフィアはそつと、グラスを掴んだ。

数回、グラスに浮かぶ氷をくるくると回す。

そして目を細め、ふふつと笑うとアイスティーを、こくり、こくりと飲み干した。

明らかに今までのルフィアと違う何かを察したクーはふるるつと震えた。

コトリ。

ルフィアはグラスをそつとテーブルへと戻した。

その仕草は少女のそれではなく、女のそれだった。

ナタリアは小さく頷いて言った。

「答えは見つかった？ルフィア」

そつと、艶のある視線でルフィアはナタリアを見返した。

「ええ。よく解ったわ。借り1つ、ね」

ナタリアは口角を上げて笑った。

「アンタと同じ男の争奪戦にならなくて良かったって心から思うわ」

「そう？うふふふ」

「頑張りなさい。トチらないようにね」

「ええ。絶対に、しくじらないわ」

クーは二人を交互に見ていた。

一体どうなっちゃったの？

第17話

コツ、コツ、コツ。

しゃきつと背筋を伸ばして歩くルフィアの背中中は、すっかり元気を取り戻していた。

だが、ついていくクーは眉をひそめたままだった。

「私、一人でおじさまと話をつけてくる。貴方は外で時間を潰してきて」

「えっ?」

「日が暮れたら帰ってきて。大丈夫。絶対しくじらないわ」

いつものルフィアのようで、ルフィアじゃない。

クーはそう思った。

ナタリアの事務所で、ルフィアは何かを吹っ切ってしまった。

でもそれは、本当に吹っ切って良いものだったのだろうか?

今のルフィアをおっちゃんとかと会わせる前に、僕が確かめておかねばならない。

・・・いや。

止めなきゃいけない。

今のまま行かせたらおっちゃんとかとルフィアの関係が決定的に壊れてしまう。そんな気がする。

「ルフィアアツッ」

クーは海沿いの空き地で、そういつてルフィアを呼び止めた。

その声はもはや絶叫に近かった。

しかし、それにしやなりと振り返ったルフィアは、クーの知るルフィアではなかった。

「なあに?」

クーは奥歯を食いしばった。

これで生涯の友を失う事になったとしても、僕は、やらなきゃいけない。

それが、今まで何度も窮地を救ってくれた友達への恩返しだから。成功率は絹糸の上を綱渡りするくらい、か細い確率だけど。

「ルフィア、聞いて」

「ええ。どうしたのよ?」

自分を見下すような目つき。

違うよね、ルフィア。君はそんな子じゃない。

「僕は、ルフィアをずっと、ずっと間近で見てきた」

「・・・」

「ルフィア。今ルフィアは、その仮面を被る事で全部解決しようとしていないかい?」

「・・・えっ?」

「ナタリアが言った事は、ナタリアにとっての答えだと思う」

「・・・」

「でもそれは、それだけが世の中全てに通じる答えじゃない」

「・・・」

「僕は、ルフィアにとって、そしておっちゃんにとって、幸せな未来こそが答えだと思う」

「・・・」

あの日。僕が見たもの。

おっちゃんに見せたルフィアの最高の笑顔は

そんな俗物に塗れた物じゃなかった。

だからこそ、あんなにも輝いていたんだ。

「それは、体を求める事で満たされるの?」

「全部ではないけれど・・・」

ルフィアは目を細め、続けた。

「少なくとも私は一つ、大きな嘘を自分についてたの」

「嘘?」

「ええ。おじさまに対して、いやらしい事なんて微塵も考えてないってね」

「・・・」

「でも、私達30年も生きてきたのよ?元の司令官と体の関係を結んだ子だって居たじゃない」

「居たよ。居たけど・・・」

「私達はそういう事を知らないわけじゃない。でもあまり、良い印象はなかった」

「うん。その子は最後に元司令官を殺しちゃったしね」

「だからと言って私とおじさまが男女の関係になっちゃいけないなんて事は無いはずよ」

「誤魔化さないで。僕が聞いてるのは、それだけで良いのって事だよ？」

「・・・」

「今、ルファイアがおっちゃん与会ったら、間違はなく体だけの関係になっちゃうよ？」

「っ・・・それは・・・」

「こんな僕でも解る。それ位今のルファイアはおかしい。まるで獣だよ？」

「・・・言ってくれるわね」

よし、ルファイアが怒った。

少なくともあの見下した醜い笑顔は剥がせた。

「僕はルファイアを！自分の命と同じく大切に思ってる！だから本当に幸せになつて欲しいんだ！」

「・・・」

このまま行く。

僕の身と引き換えにしても。

「この前北欧から帰ってきた時、おっちゃんと手をつないで帰るルファイアは心底幸せそうだった！」

「・・・」

もうちよつと。もうちよつとだけ。

「でも！今のルファイアは！おっちゃんとどうやって体の関係になるかしか考えてない！」

「・・・くっ」

「それは籠絡のテクニクであつて相手を思う心じゃない！そんなの愛じゃない！」

「・・・だつて・・・うっ・・・」

お願い、届いて。

「それだけで幸せなの？あの日バス停でおっちゃんに見せた晴れやかな笑顔を作れるの?!」

「・・・う・・・るさい。うるさい！アンタに！私の何が解るのよ！」

僕は嫌われても良い。

だから神様、お願いです。

「解るさ！散々悩んで自分の心を蝕んで！疲れ果てて！ナタリアの言う事に全部任せたんだ！違う？」

「・・・」

ルフィアをそっちへ墮とさないでください。

「ルフィアは自分の幸せの答えを追うのを諦めたんだ！だから獣に落ちたんだよっ！」

「やめ・・・てよ・・・」

僕の大事な、大事な友達なんです。

だから、お願い。お願いお願いお願い！

「都合良く与えられた答えで！仮面を被って自分を誤魔化して！それで良いつて無理矢理納得しようとしてるんだ！」

ルフィアがついに泣き崩れた。

「やめてえっ！・・・やめ・・・て・・・お願い・・・」

クーは肩で息を切らしていた。

間に合った・・・の？

これ以上ルフィアの心をえぐるような事は言いたくなかった。

まだ必要なのか、もう充分なのか。

もうどこに答えを求めたら良いのか解らない。

クーはぐつと奥歯を噛み締めた。

僕はルフィアを救い出す為なら、悪魔にでもなる。

僕がナタリアの事務所に連れて行った事が過ちだったのなら、僕が責任を取る。

僕が導いてしまったのだから、僕が連れ出す。

1分足らずの間だったが、クーは超高速で考えた。

しかし、考えに考えたプランは全てネガティブな結末しかなかった

た。

それなら、シンプルに考えよう。

「ルフィア・・ねえ、ルフィア。聞いて」

「・うっ・・もう、もう、私、どうすれば良いか解らない。解らないよ・・・」

「うん。だからルフィア、一緒に聞きにいこうよ」

「・・へっ?」

「おっちゃんに、二人で一緒に行つて、全部話して、答えを聞きに行こう?」

「・・・」

「もしおっちゃんが嫌だつて言つたら、この町を出て行こうよ」

「・・・」

「僕は絶対、ルフィアの傍にいる。おっちゃんにはお金を返すし、またいつか時間を空けて会おうよ」

「・・・」

「どう転んだとしても絶対一人にしない。約束する。だからルフィア、結果を知る事を怖がらないで」

「・・・」

「僕と一緒にいこうよ。ねっ?」

ルフィアはしばらく放心したように涙を流していたが、のろのろと視線を上げた。

クーが差し出した手を、ルフィアは握った。

第18話

カロン♪

キッチン「トラファルガー」のドアベルが鳴り響いた。

「いらつしゃ・・・おや、二人とも・・・早かったな」

ルフィアはライネスの方を向き、口を少し開いた。

だが、震えて声が出なかった。

ちらとその様子を見たクーが、すつと顔を上げて言った。

「ライネスさん」

ライネスはクーを凝視した。クーがそんな呼び方をするのは初めてだったから。

「・・・なんだい?」

「営業時間中にごめんなさい。でもどうしても、今、お聞きしたい事があるんです」

ライネスは奥のテーブルを指差すと、キッチンから出てきた。

そして入口に鍵をかけ、「closed」の札を下げると、二人に続いた。

「ルフィアの様子がおかしい事に、関係するんだな?」

ライネスの問いに、クーは頷いた。

そのままライネスはルフィアに視線を移したが、ルフィアは口を開けては閉じるばかり。

しばらく二人の様子を黙ってみていたが、ライネスはがたりと席を立った。

「ラ、ライネスさん、待ってください。ルフィアはちゃんと」

「大丈夫だよ。店を開けるわけじゃない」

「ほら」

コトリと二人の前に置かれたのは、あの日と同じ器に入ったチョコミントのアイス。

今日はウエハースも添えられていた。

「溶けないうちに食べると良い。甘い物は落ち着くよ」

しばらく、本当に長い間、ルフィアはチョコミントアイスを凝視し

ていた。

ルフィアにとってのチョコミントアイスは、単なる甘味ではないからだ。

さらさらと涙が頬を伝い、ぽたぽたと床に滴り落ちていく。

震える手でスプーンを取ると、そつと、そつとすくい、口に入れた。

「・・・」

スプーンを口に咥えたまま、ルフィアはしゃくりあげた。

止めよう。止めないと。

ルフィアはそう思ったが、ミントの香りが、チョコの優しい甘さが、沁みた。

結局、嗚咽も、涙も、何一つ止まらなくて。止められなくて。

ついにわんわんと、大声をあげて泣き出してしまった。

クーはルフィアと、ルフィアをじっと見続けるライネスを交互に見ていた。

僕はどうしたら良いんだろう。

「ひっ・・・ぐすっ・・・ううっ」

20分ほど経っただろうか。

目をウサギのように真っ赤にしつつも、しゃっくりでむせながらも、ルフィアは落ち着き始めた。

すると、ライネスが微笑んだ。

「やれやれ。よっぼど思い詰めてたんだな？」

「う、うう・・・ひくっ・・・うう・・・」

「・・・なあ、クーちゃん」

呼ばれると思わなかったクーは、驚きながらも答えた。

「はっ、はい！」

ライネスはルフィアを指差しながら言った。

「お姫様は何をそんなに溜め込んで、爆発しちゃったんだ？」

クーは言いよんだ。それを自分が言っただけの良いのだろうか、と。

ライネスは肩をすくめた。

「クーちゃんがルフィアにとって単なる同僚なら、こんな事は決して聞かない」

「・・・」

「でも、クーちゃんはずっと、ずっと一緒だったんだろ？」

「・・・うん」

「なら、ルフィアが言いにくい所をカバーして、説明してくれないかな？」

「・・・」

「クーちゃんはそれくらいの段階だと、私は思うんだよ」

「・・・段階？」

「見ず知らずの人でも出来る段階、親友なら出来る段階、親なら出来る段階」

「・・・」

「クーちゃんはきつと、ルフィアにとって母親代わりだから」

クーは少し俯いた。

本当にそうだろうか。

僕はさつき、あんなにもルフィアを惑わせてしまったのに。

その時。

すすり泣くルフィアが、その右手でそっとクーの左手を握った。

助けて

手から伝わる思いを、クーは理解した。

クーは顔を上げた。

僕が母親代わりなら、僕がすべき事は一つだ。

「ライネスさん」

「うん」

「ルフィアをお嫁さんとして貰ってください」

ライネスの動きが見事に固まった。

だがクーにとって予想外だったのは、しゃくりあげていたルフィアまで固まった事だった。

2分間。

ルフィアが恥ずかしさで真っ赤になり、卒倒寸前からどうにか意識を回復するまでの時間。

そして、ライネスが何を言われたのか理解するのにかかった時間。

クーは言い方がまずかった事をさすがに察したが、どうフォローして良いか解らなかった。

言ってる事は真実だし・・・

「え、えっと、あの」

ゴツチン！

クーは薄れゆく意識の中で思った。

やっぱり僕はルフィアに殺されて終わるんだね・・・短い一生だったなあ・・・

がぼりとルフィアはライネスに向かって頭を下げた。

「ごっ、ごめんなさい！この馬鹿が変な事言っつて！」

だがライネスは、まだカクカクとしていたが、真剣な表情で答えた。

「でも、クーちゃんはそういう事を冗談では言わないと思うんだけど？」

「うぐうっ」

「聞かせて・・・くれないかな？」

「な、長く、なりますよ？」

ライネスはにっこり笑った。

「私の話だって聞いてくれただろう？おあいこだ」

ルフィアは笑いかけて、再び涙がこぼれた。

いつだってライネスはこうやって優しくしてくれた。

失いたくない。もし失ったら正気でいられる自信が無い。

でも、もうここまで来たら、言うしかない。

全てを失ってしまう原因になるかもしれない、私の願いを。

本当に、本当に、そつと、ゆっくりと。

ルフィアは気を失っているクーの隣で、自分の思いをライネスに伝えていった。

姪と重ねて見られている事を嬉しくもあり、思い出を汚してはならないと強く戒めてきた事。

だから幼子の好きだという表現しか出来なかったけれど、ずっと違和感を感じていた事。

強くなる違和感と姪との大切な思い出を守りたいという心に挟ま

れて苦しかった事。

その違和感が強烈な恋愛感情である事に、ようやく今日気づけた事。

「・・・自覚したのは今日、ナタリアに指摘された時でした」

その後クーに言われた事が、あまりにも自分の内側を正しく言い当
てていた事も打ち明けた。

もうここまで来たら言い残すほうが後悔すると思ったから。

ルフィアは思った。

おじさまはじつと私を見て、ずっと口を挟まず、耳を傾けてくれて
いる。

時折小さく頷く事以外、本当に何もせずに。

だから、囁くようにか細い声だけど、ようやく自分の気持ちを言葉
に出来た。

恥ずかしくて恥ずかしくてたまらない、自分の本当の気持ち。

「・・・だから私、もう、本当に、どうして良いか、解らなくなっ
てしま
いました」

ルフィアは目を伏せた。

やっと言えた。言い切った。

おじさまに、全部自分をぶちまけてしまった。

怖くてたまらない。

目を開けられない。

今、おじさまはどんな顔をしているのだろう。

姪御さんを汚したと怒ってるだろうか？

はしたない娘だと軽蔑されただろうか？

でも、もう今更引き返せない。

私の心は、そういう物だったのだから。

第19話

「う・・・うーん」

ルフィアはハツとして横を向いた。

恥ずかしさのあまり、力いっぱい拳骨を落としてからすっかり大人しかったから忘れてた！

「クー！ねえ！クー！」

「・・・あれ？ここ、天国？」

「違うわよ」

「うわっ！暴力女！地獄の一丁目だ！」

「なん・・・ですってえ・・・」

「ひいっ！事実じゃないかあ！」

「まあ待て、二人とも」

「！」

そうだったと、ルフィアはライネスの方に体を向けると俯いて縮こまった。

クーは事情が読みきれなかったので素直に聞いた。

「あの、ライネスさん。今どこらへんなの？」

「そうさなあ・・・」

ライネスはふふつと笑うと

「もうちよつとでハッピーエンドってところかな？」

「へー、じゃ見てよつと」

「・・・ルフィア」

ルフィアが文字通りびくりとし、こわごわ顔を上げる。

「はっ・・・はい」

「まあ確かに、君は姪っ子に似てる」

「はい・・・」

「君がこのタンパーをくれた日は、ちょうど姪っ子の誕生日だね」

そう言ってポケットから象牙と金で出来たタンパーを取り出した。

「姪っ子との思い出が色々重なってしまった」

「・・・」

「最初の日に余計な写真を見せ、あの日に姪の姿を重ねた為に、君をそこまで苦しませたのなら」

ライネスはすつと頭を下げた。

「本当に申し訳無い事をしてしまった。どうか許して欲しい」

「あつ、あのつ」

「続きを、話しきつても良いかな？」

「はっ、はいっ！」

ライネスはふふつと笑った。

「けどね、姪っ子は拳で物事を解決しなかつたし」

「ぐ」

「敏腕経営者でもない」

「・・・」

「そして間違いなく、町外れの墓地に眠っているよ。違うという事は解っているさ」

「・・・」

「それに、君が30年の歳月を生きていると聞いて」

「・・・」

「私は君がきちんと経営者として活躍している姿に納得出来たんだ」

「・・・」

「そんな有能な君に、私がつりあうのかは解らないけれど」

「・・・えっ？」

「あ、ただ、その、私は幼子に劣情を抱くほどロリータ趣味ではないんだ」

「・・・」

「もし出来るなら、その、もう少し大人になってくれない・・・かな・・・」

「なっ、何歳くらいが、良いでしょうか・・・」

ライネスはしばらく頭を掻いていたが、やがてキッチンから一枚の写真を持ってくると、ルフィアに手渡した。

「？」

「また写真で悪いんだが、ええと、それは私が大ファンだった女優さんなんだが」

クーが写真を見て頷いた。

「ボインボインで大人のブロンド美人だ！すっごーい！」

「た、頼むからこの事は他の連中には内緒にしてくれよ？あ、いや、その、そんな年恰好という・・・あー」

真つ赤になって手を振るライネスを見て、ルフィアはくすつと笑った。

「良いですよ、こういう感じの女性が好みなんですかね？」

「・・・そ、そう、だね」

ルフィアは写真を見て微笑んだ。

人間になってしまったら、この姿になるのは少なくとも15年はかかる。

それはそのままおじさまに好きになってももらえないロスタイムを意味する。

冗談ではない。

おじさまの一生の短さを考えれば、そして自分の気持ちを考えれば、今すぐにでも始めたい。

こうして秘密を打ち明けてくれた期待にも応えたい。

ならば結論は、1つだ。

ルフィアはクーを見た。

「私はこのまま、この家で、おじさまと暮らしたい。クーちゃんも一緒に居てくれる？」

クーは言葉の意味を理解すると、にっこり笑って頷いた。

「・・・うん、解った。もちろんずっと一緒だよ」

「ありがとう」

ルフィアは写真を持ったままそつと席を立つと、言った。

「では、ちよつと姿を変えてきます。クーちゃん、手伝って」

「良いよー」

「おじさま、待っててくださいね」

カロン♪

ライネスは閉まったドアを背に、今なお湯気が出そうなくらい真つ赤になったまま固まっていた。

そして思った。

自分の好みというか、性癖を晒すって恥ずかしい。

さつき、ルフィアは本当に恥ずかしい気持ちを押しつけて打ち明けてくれた事が良く解った。

しばらくして、深呼吸して、頷く。

自分が働けて、一緒に過ごせる時間は彼女達にとっても短いかもしれない。

それでも。

ずっと大切な思い出となるような、キラキラと輝くような。

そんな時間になるようにしていこう。

カロン♪

ライネスは入り口を振り向いたが、戸口を見たまま硬直した。

「おじさまっ！どうですか！こん……」

店の入口で固まったルフィアと、急停止したルフィアに対応しきれず後ろからぶつかるクー。

「ぐはっ……いったー……どうしたんだよルフィ……あー！」

店内では細巻き煙草をくゆらせるナタリアと、渋い顔で腕を組むライネスが居たのである。

「へー、ふーん、なるほどねー」

「えっ……えっと……」

ナタリアは姿を変えたルフィアをぐるりと一周回って見た後、にひやりとライネスに向かって笑い、

「随分ハイレベルを求めたわねえ、ラ・イ・ネ・ス？」

「ぐっ……あつ、あのな」

「こんなに一途にアンタを愛してくれるの、この子ぐらいだと思っわよ？」

「……」

「どうやら私の杞憂だったみたいね。大事にしてあげなさいよ？」

「……もちろんだ。ルフィアが後に思い出しても幸せだったと頬を染めるくらい、幸せな日を作ってみせる」

ナタリアはライネスをじっと見返すと、紫煙と共に大きな溜息を吐

いた。

「はいはい、ごちそうさま。あーあ、あのバカも早く気づかないかしらねえ」

「何の事だ？」

「ごつちの話よ」

ルフィアがニヤリと笑った。

「どんな手を使ってでも振り向かせたら良いじゃないですか、ナタリアさん？」

ナタリアがジト目でルフィアを見た。

「成功したからって有頂天になってると、ライネスをツバメにするわよ？」

笑顔のまま急速に殺意をまとうルフィア。

「へえ・・・この私と戦争を？」

邪悪な笑みを浮かべるナタリア。

「面白いわね。買ってあげましょうか？」

クーが二人の間に割って入った。

「はいはいそこで終わり！んもー！二人とも心にも無い事言わないの！」

「むっ」

「・・・ふん、アンタとクー、ほんとに良いコンビね。じゃ、アタシは帰るわ」

そういつてドアに手をかけたナタリアに、ルフィアは声をかけた。

「・・・ナタリアさん」

「なに？」

「・・・ありがとう。私達、幸せになります」

ナタリアは半分だけ振り返った。

「そうなさい。あ、街中でイチャつくのは止めときなさいよ？実弾で撃たれるから」

「ええ、長生きしたいんで止めときます」

「・・・ねえライネス」

「なんだ？」

「・・・ちゃんとプロポーズしなさいよ、なし崩しじゃなくて」

「何で事情を知ってるんだ」

「勘よ。あんた達似てるし」

「誰とだ？」

「ファツゾとか、テツドとか」

「ふざけるな。俺はあんなだらしなくはない」

「じゃあちゃんとプロポーズしてあげなさい」

「もっ・・・もちろんだ。何なら今すぐしてやる」

ナタリアがニイツと笑った。

第20話

ライネスの言葉を聞き、ニヤリと笑ったナタリアはくるりと踵を返し、店内に戻ってきた。

「じゃあ見届けてあげよつかない」

「うへっ!? よ、余計な事をせんで良い!」

「ほらクーちゃん、こっちこっち。特等席よ」

クーもニヤリと笑った。

「僕はお母さんだからしつかり見届けないとねえ」

「アンタ・・なんか姑っぽいわよ?」

「ちよっ!?!」

盛り上がるクーとナタリアを横目に、見る間に茹でダコのようになって立ち尽くすライネスとルフィア。

それぞれにくっついていくナタリアとクー。

「ほらほら、ちゃんと向き合いなさいよ。ライネス、あんたどこ向いて言う気? 壁と結婚するの?」

「あーあー、襟折れてるよルフィア。手で弄りすぎ。ん、これでよし。ほら笑顔固いよ?」

間近で向き合わされたライネスとルフィア。

たっぷり30秒ほど、ぶるぶる震えながらルフィアを見ていたライネスは、意を決して口を開いた。

「ルフィア。君と出会って10年が過ぎたけど、解った事がある」

「君が隣に居てくれないと、私はどうにも元気が出ないんだ」

「いつからそうなったのかはよく覚えてないけれど、今は間違いなくそうなんだ」

「元気が無くても生きてはいける。ちゃんと店くらい開けられる」

「でも君が居れば、私はとても嬉しくて、元気が出て、幸せなんだ」

「ルフィア、君が私の傍にいたら、私と同じように」

「嬉しくて、元気が出て、幸せになるように、する」

「だからルフィア、私の傍に、ずっと居て欲しいんだ」

ルフィアがそっとライネスの目を見た。

「それはその、私に・・・C&L商會を畳んで、トラファルガーに居ろつて事？」

ナタリアが、クーが、そしてルフィアがじっと見つめる中。

ライネスは答えた。

「ああ。君が戦地の海で命を賭す事も、長い間居ないのも、嫌だ」

「・・・お金、稼げなくなっちゃいますよ？」

「3人ぐらい、うちの稼ぎで食っていける」

「育ててもらった時に使わせてしまったお金、返せないですよ？」

「要らない。私が欲しいのは、ルフィア、君だけだ」

ナタリアとクーがムンクの叫びみたいな格好になる中。

ルフィアはライネスに抱きつき、熱い口づけをした。

愛している、その気持ちをありつただけこめて。

ライネスの手が優しく自分の頭を撫でていると解った時、ルフィアの目から涙がこぼれた。

嬉しくて嬉しくて、ただただ嬉しくて。

ようやく正気を取り戻したナタリアとクーがゲフンゲフンと大声でわざとらしい咳払いをしまくっても。

二人は唇を離さなかったという。

後日。

その時のキスの味を訊ねられたルフィアは頬を赤らめながらこう返した。

「ええとね、その、しよっぱかった、わね」

その答えにアイウィは眉をひそめた。

「えー？普通はレモンの味とかイチゴの味って言わない？」

ビットがぼんと手を叩いた。

「あ！ファーストキスじゃないとか？」

見る間に真っ赤になったルフィアはバンとテーブルを叩いた。

「ちっ違います！ファーストキスですっ！・・・あ」

ルフィアの目の前には口に手をやりながら、によによと笑うアイウィとビット。

たまらず横を向くと、そこには親指だけ立てた拳を掲げ、ニツと笑

うナタリアとクーが居て。

音速で反対側を向けば顔を赤らめ、視線を逸らすファツゾとミストレル、そして目を輝かせるベレーが居て。

「~~~~~!!!」

ルフィアはついに両手で顔を覆い、耳まで真っ赤になって立ちすくんでしまった。

そんな様子をライネスはキッチンから見つつ、頬を掻いた。

あの日から一年以上経つが、ありとあらゆる人から毎日こうして冷やかされている。

やっと先月になってC&L商會が店を閉じたという事もあり、昔の話題になるのはまだ先になりそうだ。

商売を畳むのが遅れたのは、それぞれの後任を決めて引き継いだ為だった。

最後までしつかりする事が大事だとルフィアは言い、ライネスも賛成した。

だから最終日はとても沢山の来訪者がC&L商會とキッチン「トラファルガー」に足を運んでくれた。

大盛況の店内でクーちゃんもルフィアも嬉しそうだった。私も感慨深かった。

だからこそ好意的に、今もトラファルガーを訪ねてくる客は三人を祝福してくれているのだと思う。

実を言えば、クーちゃんと自分達のスタンスは曖昧だ。

ルフィアの母親的スタンスのような感じでもあり、一方でお騒がせな所も変わっていない。

子供のようで、友達のように、母親のようで。

だからこそちよつぱり不思議な毎日で。

それが飽きる事のない日々の欠かせない要素になっている。

私にとつても、ルフィアにとつても、クーは大切。

そんな3人の関係で良いと、クーも言ってくれた。

だからこのまま、1日でも多く過ごせますように。

「そう！そうだ！みつ、水！水のお代わり持ってきますうつ！」

視線に耐え切れず奥へと引つ込むルフィアを見送りつつ、ナタリアはくすつと笑った。

「実際、ライネスは男を見せたわよねえ・指輪もちゃんとカッコ良く渡したし」

年も押し迫った、雪が綺麗に積もった冬の晴れた、静かな満月の夜。ルフィアが一番お気に入り、海が見渡せる丘の上で、それはそれはムード満点の状況で。

ライネスはもう一度プロポーズをし、指輪をルフィアの手に嵌めた。

「いや、何て言っただけなら良いか解らなくてな・・・」

そしてルフィアもルフィアで、プロポーズにプロポーズで返し、ライネスの手に指輪を嵌めた。

「だっ、だっ、だっ、私も結婚したいって気持ちは一杯ある：し：：そこまですごい後、ふと、二人は怪訝な顔でそれらを訊ねたテッドに聞き返した。

「・・・どうして知ってるの？」

周囲に誰も居ない場所で行われたこの模様は、翌朝には町中の人間が一言一句きちんと知っていた。

なぜなら何者かがその模様をビット謹製の超望遠カメラと高感度集音機で記録し、町中にDVDで配ったからである。

「一体誰にシステム売ったの?!ビット!言いなさい!言いなさい!ってばああああ!」

真っ赤になったルフィアが襟首を掴んで尋問したが、ビットは最後まで口を割らなかつたという。

そしてDVDを見た町の人は声を揃えて言った。

「うん、末永く爆発しろ」

実はこれが今なお二人が弄り回される主な要因である。

「ホットコーヒー、パンケーキ、それにチョコミントアイス、あがったよ」

「あつ、はぁーい!」

ライネスの声にパタパタと駆け寄るエプロン姿のルフィア。

店でウエイトレスとして働くうちの奥さんは、それはそれは可愛らしい。

カウンター越しに手渡す時、ついつい私はにこりと笑ってしまう。

「どうしたの？あなた」

ルフィアは少し首を傾げて、でもにっこり微笑み返してくれる。

いつも通り、最高の笑顔だ。

ルフィアの左手薬指で、ライネスが贈った指輪がきらりと輝いていた。

特別編―蒼龍と飛龍の場合

S・O1話

「・・・違いますよ」

「な、何を言ってるんだ蒼龍。忘れたのか？私は・・・」

「私は、蒼龍なんて名前じゃないですよ。ほら、二村って言います」

二村は困ったように微笑みながら、胸元の名札を指し示した。

「435コインになります。あの、後ろにお待ちのお客様が居ますので」

「あ、ああ、すまない・・・これで」

「500コインお預かりしましたので、65コインのお釣りになります」

「・・・蒼龍、私は君に・・・」

「ですから、人違いですよ。毎度ありがとうございました」

「そ・・・あつ・・・す、すいません」

提督はそこで、列に並ぶ人々がじとりと寄せる視線に気がつき、頭を下げると立ち去った。

二村は目の前に来た次の客に微笑んだ。

「お待たせ致しました。ポイントカードはお持ちですか？」

ピツピツとPOSに商品を当てつつ、ちらりと店の出口を見た。

「っー」

そこには自動ドアを開けたまま、悲しげな目でじつとこちらを見る提督の姿があった。

慌てて視線を戻すと、目の前にいた女性客が囁いた。

「困ってるなら店長さんに言ってきてあげようか？遠慮するんじゃないよ。」

「あ、い、いえ、大丈夫です」

「ほんとかい？アンタ可愛いからあのオッサンに付きまとわれたりしてるんじゃないの？」

「ちつ、違います！提督はそつ・・・!!」

二村は慌てて口をつぐみ、再び出口を見たが、そこには誰の姿も無かった。

「・・・」

「アンタ顔色悪いよ？本当に大丈夫かい？」

「だ、大丈夫・・・大丈夫です。全部で1698コインになります」

「なんだ提督。どうかしたのか？」

「・・・」

駐車場で姿を見つけた長門は提督に近寄ったが、分かれる前と明らかに異なる様子に首を傾げた。

黙ったままの提督の視線を追うと、「スーパーいろはにほへと」の入口が見えた。

提督の手にはその店のロゴが入った買い物袋が1つ。

「あのスーパーで釣りでも間違えられたのか？」

「・・・長門」

「ああ」

「北方海域で沈んだ、蒼龍と飛龍の足取りは掴めて無かったよな」

長門は少し俯くと、ややあつてから頷いた。

「・・・そうだな」

「あのスーパーのレジに居る子が、蒼龍そっくり、いや、本人にしか見えなかったんだ・・・」

「だが、蒼龍が轟沈したのは私がこの目で見ている。飛龍もな」

「そうだよな：轟沈した艦娘がスーパーでレジ打ってる筈は：無い：か・・・」

長門はふと、地面に黒く丸い点が描かれていくのに気づいた。

「提督。雨だ。11月の雨は冷たい。濡れれば風邪を引くぞ。車に戻ろう」

「・・・ああ」

「気になるようなら、私も見てこようか？」

「一応、頼めないか？」

「任せろ。提督は車に戻っていてくれ。レジは一人だったか？」

「一人だった」

「解った」

提督は駐車場に止めた車に戻ったが、途中何度もスーパーの方を振り向いた。

しばらくして戻ってきた長門はそれらしき者は居なかったと首を傾げたので、

「そうか・・解った。時間も迫ってる。出発しよう」

提督はそう答えたが、その横顔は、悲しみに満ちていた。

「・・元居た鎮守府の提督がスーパーに来たのかい？」

「はい」

「見間違いじゃないんだね？」

「軍服姿でしたし、その、記憶より年を取ってましたけど、間違いないと・・思うんです」

二村は女性客への対応後、すぐにレジを代わってもらおうと、足早に事務所へと戻った。

そして店長に状況を打ち明けた所、店長は坂之上のおばちゃんに電話した。

すぐさま飛んできたおばちゃんに、二村は全てを打ち明けたのである。

店長は二村に訊ねた。

「えっと、立ち入った事を聞きますが、二村さんは提督や元居た鎮守府に、悪い思い出がありますか？」

そう。

二村とは蒼龍の偽名であり、提督は一目で蒼龍だと見抜いていたのである。

二村は首を振った。

「提督は・・とても優しい人でした。私達が沈んだのも、提督のせいではありません」

おばちゃんは腕を組みながら言った。

「どうして、名乗り出なかったんだい？」

二村はおばちゃんになんとも言えない表情をしながら答えた。

「だって・・私は、どんなにこの化けた姿が元の姿に近かろうと、ヲ級になつちやっただんですよ？」

「・・・」

「提督は軍服を着てた。つまりまだ海軍にいらつしやる。それはつまり、私達の、敵、じゃないですか・・・」

「・・・そう、さね」

「今更名乗り出る資格があるのか、深海棲艦と気づかれた瞬間に殺されるんじゃないか」

「・・・」

「このお店にまで迷惑をかけるんじゃないか、でもこんな年月が経つてるのに気づいてくれたのが凄く嬉しくて」

「・・・」

「そんな、何をどうして良いか、わっ、解らなく、なつちやって・・・」
ぽろぽろと涙をこぼし始めた二村の隣に、おばちゃんは席を移すと、

「まあそうさね・・・よく冷静に対処したね・・・よしよし、良い子だ・・・良い子だよ・・・」

そういうと優しく頭を撫でたのである。

その晩。

「ねえ、ひーちゃん。大事な話があるんだけど」

「どつたの？そんなマジな顔しちゃって。このクーバリブレは私のだよ・・・」

「違うの」

風呂から上がり、首にかけてたタオルで髪をぐしぐしと拭きながら、下着一枚で冷蔵庫の前に立つ飛龍に、蒼龍は話しかけた。

飛龍はきよんとした顔で蒼龍を見返したのだが、普段と様子が違う事に気づいた。

肩をすくめ、冷蔵庫から取り出したクーバリブレの入った缶をテーブルにコトりと置き、

「上着てくるから待っててー」

そう言うと、寝間着代わりのフード付きトレーナーをがばりと被り、蒼龍の前の席に腰を下ろしたのである。

「ほいお待たせっと」

「下も着てきてよ」

「パンツはいてるよ?」

「良いから。長くなるし」

「へーいへい」

飛龍は再び立つと衣装ケースを開け、フリースのズボンを手に取ったのである。

S. 02話

「・・・は？ほんとそれ？」

「ほんと」

「ヤ・ヤバいわ・・・C・・・いやBランクかな。エ、エエ、エリア長の直通番号は確か・・・」

蒼龍の話を聞いて真っ青になった飛龍はカバンから携帯電話を取り出した。

だが、手が震えてボタンが操作出来ない。

蒼龍は心配そうに飛龍に訊ねた。

「ねえ、ひーちゃん」

「なに？あ、ごめん、電話帳呼び出してくれないかな」

蒼龍は飛龍から携帯をそっと受け取りながら訊ねた。

「良いんだけど、その前に1つだけ教えて」

「なっ何？は、早く電話したいんだけど」

「ひーちゃんは、提督の事、恨んでる？」

「えっ？」

問われた飛龍はぴたりと震えを止め、顎に手をやった。

「そっか・・・んー」

蒼龍はじつと飛龍を見ていたが、しばらく眉を顰めて考えていた飛龍はそつと口を開いた。

「恨みは無いよねえ。あの状況を提督が予測出来る筈無かったし」

「うん」

「長門は即時撤退命令を出してたし」

「うん」

「無理に進撃させられたーって程のダメージでもなかったし」

「うん」

「・・・まあ私個人に限って言えば、提督に何の恨みもないんだけど・・・」

「うん」

「でも、今の私を提督が見たら確実に討伐命令出されるよ？」

「なんで？」

「だってアタシ、地上組北陸地域部長やってんだよ？」

「うん」

「いや、うんじゃなくて」

「何かダメなの？」

「まず深海棲艦じゃん？」

「うん」

「で、会員が海軍に狙われたら881研が来る前に逃がす手伝いもやってるし」

「うん」

「地上組の事を大本営に知らせようとした鎮守府は、基本的に壊滅させてるんだよ？」

「・・・えっそうなの？」

「露呈したら全面戦争になるからね。まだ実例は無いみたいだけど」

「そっ・・・か・・・」

「うん」

「私達・・・提督の敵になっちゃってたんだね・・・」

俯いた蒼龍に、飛龍は慌てたようにそっと声をかけた。

「そ、その、蒼ちゃんに言っただけなのは、ショック受けるかなって思ってた・・・」

蒼龍は飛龍の携帯を持ち上げて言った。

「ねえ、今日の事をエリア長さんに知らせるとどうなるの？」

飛龍の目が泳ぎ出した。

「えっ、そっ・・・それは」

蒼龍は飛龍を真っ直ぐ見つめた。

「ちゃんと言っただけ」

「わ・・・私達は、他の地域に逃がされる。多分北歐とか、遠い国」

「それだけ？」

「・・・いつ、1課が出てくると思う」

「提督の鎮守府を壊滅させるために？」

「う・・・うん」

蒼龍はグッと携帯を握り締めながらいった。

「ひーちゃん」

飛龍は縮こまった。蒼龍の声色が明らかに変わったからである。

「はっ、はい」

「さつき、恨みは無いつて、言ったじゃん」

「はい」

「私、そうじゃないかって声をかけられたただけだし、人違いだって誤魔化したんだよ?」

「はい」

「なのになんで提督や長門達を皆殺しにしようとしてるの?」

「そ、それは、だって、それが、今の私の、し、仕事、なんだもん…」

蒼龍の声が更に一段低くなった。

「・・・ひーちゃん」

「は、はい」

「地上組って、そんなゲスな組織なの?」

「えっ、ええっ?」

「艦娘だった私達を高Lvまで育ててくれたから、私達Flagship i pクラスになれたんだよ」

「そ、そうだね」

「Flagship i pクラスでなきゃ出来なかった事、沢山あるよね」
「あります」

「それは今の生活に欠かせないものだよね?」

「その通りです」

「じゃあ提督は今の生活の恩人でもあるんじゃないの?」

「・・・そうなんだけど」

「もう1度聞くけど、提督に何か恨みでもあるの?」

「ない、です」

「ひーちゃん」

飛龍の目が揺れ出した。

「だっ、だって、だってさ、わ、私、北陸地域部長で」
「辞めちゃいな」

「・・・ふえっ?」

「そんな事しなきゃいけないなら、地上組なんて辞めちゃいな」
「でっ、でででもそんな簡単には」

「悪い子は明日からご飯抜きよ?」

「すみません」

「ひーちゃん」

「ほっ、ほんとに、そんな簡単には辞められないし・・・」

泣きそうになる飛龍を、蒼龍はジト目で見つめた。

「携帯は預かります」

「えっ?」

「返したら連絡するでしょ」

「だっ、だっ、だっ、その、それが、義務で・・・」

「うるさい。たかが仕事だの義務だの人の命を奪ったら取り返す
かないんだよ?」

「そ、そりゃそうだけど、で、でもねでもね」

「SIMカード割るよ?」

「止めてくださいお願いします」

「ひーちゃん」

「・・・うー」

飛龍はこれ以上無いというほど渋い顔をしつつ、

「解ったわよう・・・連絡しないわよう・・・あー、エリア長にバレたら大
変だー」

と、頭を抱えた。

「ひーちゃん」

「なによう」

「ひーちゃんは、提督と話したくない?」

「へっ?」

「私は、ちゃんと会って話が見たい」

「・・・」

「別に地上組の事とかどうでもいいの」

「こ、これでも一応頑張って出世したんだけどなあ・・・地味に傷つくん

「だけど」

「提督に一切合財ぶちまけるわよ?」

「本気で止めてくださいお願いします」

「話を戻すけど、私、提督に何一つ言えずに今に至るの、ちよつと心残りだった」

「・・・まあ、ね」

「提督は艦娘だった私達に、とても沢山の事を教えてくれた」「うん」

「Lv上げだけじゃない。常に未来を、生き方を、全部自分で納得するまで考えろって教えてくれた」

「考え方もね」

「だから私達は、あの海岸に打ち上げられた後も、考えて、選んだから、今まで生きられた」

「・・・そうね」

「それでもう1つ。あの作戦で私達は、撤退出来なかった」

「・・・だ、だけどさあ」

「事実でしょ」

「じ、事実です・・・そんな睨まないでよう」

「提督は戦況が悪ければあらゆる手段を使って逃げて来いって言うってじゃない」

「まあ・・・100%勝ち目無かったもんね」

「それを守れなかった事を、謝りたいの」

「で、でも私達は無茶をして突っ込んだわけじゃないし、サボって沈んだんじゃないよっ」

「そうだけど、提督はきつと、凄く悲しんだんだと思う」

「どうして解るのよ」

「今日、私を蒼龍だと気づいた後、提督は真っ青な顔になってた」「・・・えっ」

「私がお人違いだと言い切らなかつたら、提督は、あの場で謝ってくれたんじゃないかって気がする」

「物凄く怒って蒼白になってたかもしれないよ?」

「違う。あの目を見たらひーちゃんも解る」

「・・・」

「だから私は、謝って、感謝して、教えられた通り一生懸命考えて何とかやってますって伝えたい」

飛龍はテーブルの上でクーバリブレの缶を指でくるくる回しながら呟いた。

「・・・まあ、私もそこは、まあ、そうかなあ」

「ねえひーちゃん」

「・・・えっ？何か凄く嫌な予感するんだけど」

「調べて？」

「へっ？なっ、ななななにを？」

「今日、この町を、どこの鎮守府の提督が、通ったのか」

「やつ、やややややめようよ。データ勝手に調べたなんてエリア長にバレたら二人とも殺されるよ？」

「ひーちゃん」

「だめだめだめだめ絶対ダメ。絶対ダメよ？ダメったらダメ」

蒼龍はひよいと飛龍の手からクーバリブレの缶を取ると、にこりと笑った。

「このクーバリブレ飲んじやうわよ？」

「止めてください今週唯一の楽しみなんです最後の1本なんです」

「ひーちゃん」

「ほ、ほほほ本気でエリア長怒ったら怖いんだって。ほんとに！」

「じゃあ、そつと調べる手を考えようよ」

「そ、そんな事しなくても規定通り通報すれば」

「クーバリブレ飲みながらSIMカードへし折ろっかなー」

「止めてください本気で勘弁してください」

「ひーちゃん」

「んもおーお、なんでアタシが・・・」

「私、地上組の内情なんて知らないし」

「うー、私、誤爆の巻き添えになるくらいのとばっちりじゃない・・・」

・・・プシッ

「黙ってクーバリブレ開けるの止めて！解りましたやりますやらせて頂きます！・・・うううもおく」

飛龍はがくりと頭を垂れた。

エリア長に気づかれずにセンターのデータ調べてこいなんて・・・戦場のだ真ん中で阿波踊り踊るくらい無謀な事なんだけど・・・

上目遣いに見た先で、蒼龍はにこりと笑うとグラスに注いだクーバリブレを自分の目の前に置いた。

エリア長も怖い。でも怒った蒼龍はもつと怖い。

とほほ、どうしたら良いのよアタシ・・・誰か助けてよ・・・

半分やけになった飛龍は、ぐいつとグラスの酒を喉の奥に流し込んだ。

ちくしょう！こんな時でもクーバリブレは美味しいわね！

「はー、どーしろつてのよーもー」

「頑張つて、地上組北陸地域部長さん」

「くっ！」

飛龍は歯を食いしばった。

もう本気で辞めてやろうかしら・・・

S. 03話

翌朝。

「なんだいなんだい？そんな目の下真っ黒にして・・・」

「おぼちゃーん」

ずつと悩みぬき、ほとんど眠れないまま、困り果てた飛龍は坂之上のおぼちやんを訪ねたのである。

勿論地上組には体調不良で休むと伝えてある。

「・・・んー、そりや厄介だわ」

「良かったあ、良かったよう・・・うえーん」

「なつ、何が良かったんだい？」

「悩んでるアタシがおかしいのかとー」

「いや、そりや、普通に難題だよ。地上組を裏切るような真似をするのは・・・」

「でもー」

「まあ、1課が出張る確率は無いとは言えないさね」

「ってことは、出てこない可能性もあるんですか？」

「地上組の事が大本営に知られないよう、知ってしまった鎮守府を潰すってのがルールさね」

「はい」

「だから深海棲艦になった蒼龍ちゃんが蒼龍ちゃんだって提督に気づかれるのは該当しないさね」

「・・・あ」

「でもアンタが地上組に勤めると知られたら限りなくアウトさね」

「ゲツ」

「更には言えば、そんな状況なら辞めさしてくれないと思うよ」

「ど、どうして、です？」

「辞めちまったらアンタは自由に提督に喋れるじゃないさ。罰が無いんだからね」

「やっぱり・・・」

「だから無理矢理辞めたり姿を消したらアンタ含めて全員消しに来るよ。1課、あるいは2課がね」

「どうしよー、ねえおばちゃん。色々な意味で私死にたくないよう、どうしたら良いのー？」

「アンタはどつちをとりたいんさね」

「えっ？」

「地上組の今の仕事か、提督さんに挨拶に行くのか」

「そりや今の仕事ですよ。挨拶行つたつて復帰出来ませんもん」

「まあ深海棲艦が鎮守府に就職出来るなんて話は聞いた事が無いさね」

「・・・でしよう？」

「ふーむ」

おばちゃんはしばらく天井を睨んでいたが、

「・・・ま、意見をまとめるかね。ついといで」

そう言うのとどこらしよと腰を上げたのである。

「・・・なるほど」

飛龍と共にスーパーを訪ねたおばちゃんは、店長と蒼龍を交えた3人に提案を説明した。

だが蒼龍は懐疑的だった。

「万が一、万が一1課が提督や鎮守府の皆を手にかけてたら、私、死んでも詫びきれません・・・」

「だから、アタシが口を利いてあげるよ」

飛龍は恐る恐る訊ねた。

「本当に、お任せしてしまつて良いんですか？」

おばちゃんは笑った。

「じゃあアンタやつてみるかい？」

「絶対無理でございます」

「カッカッカ！可愛い教え子の頼みじゃないか！任せときな！」

店長がポケットからキーを取り出した。

「社用車、使われますか？表に止めてるセダンですけど」

「おや、借りて良いんさね？」

「しばらく使いませんし：お店があるので私ができるのはこれくらいですし」

「ん、ん、充分さね。これで足が確保出来た」

店長は蒼龍に向き直った。

「二村さん」

「はい」

「提督さんにお話出来るの良いですね。影ながら応援してます」

「あ、ありがとうございます」

おばちゃんは立ち上がった。

「じゃあさっさと出発しようかね」

店長が微笑んだ。

「お惣菜コーナーから好きなお弁当と飲み物を持ってってください。腹が減っては戦が出来ませんよ」

「・・・」

高速道路を南下すると、湿った鉛色の景色は次第に乾いた景色になっっていった。

ハンドルを握るおばちゃんの横で、飛龍は疲れきった顔で外をぼんやり眺めていた。

ほんとにこれが見納めになるかも・・・もうしようがないか・・・今まで生きられた事の方が奇跡なんかもん。

あーでも、最後にもう1度だけモヒート飲みたい。

後部座席の蒼龍が口を開いた。

「ひーちゃん」

「なによう」

「ありがとね」

「まだ何もしてないわよう」

「ううん。そんな事ないよ。だから、もしエリア長さんが怒ったら、全部私のせいだって言ってね」

「・・・えっ」

「そして裏切り者を連れてきたんですって、私を突き出して」
「えっ」

「私はそれでも、提督や二人に害が及ぶより良いから」
「・・・」

「だって私は、もう轟沈した身だもん。大丈夫」

「・・・」

「ねっ?」

「・・・うー」

飛龍が唸り始めたのを見て、おばちゃんは溜息をついた。

「やれやれ、蒼龍は本気でそんな事を飛龍が出来ると思ってるのかい?」

「いいえ?」

「えっ?」

「こう言えば、そんなの無理だよー、じゃ頑張っつてーって流れに出来ま
すから」

「あ・・・あー」

飛龍がジト目になった。

「ほんつと、蒼ちやんて悪魔だよねー」

「えーそうかなー」

おばちゃんは苦笑した。

蒼龍ちゃんの方が地上組の幹部には向いてるかもしれないねえ・・・
おばちゃんはとある地方のICで高速を降りると、そのまま田畑の
続く田舎道を走り抜けた。

やがて民家が減り、里山となり、雑木林が両脇に生い茂る林道に変
わった。

「あ、あの、坂之上さん」

「なんだい」

「ち、地上組の日本支部に、向かってるんですよね?」

「日本エリア長はそこに居るからね」

「と、東京とかじゃないんですか?」

「まあ、理由は見てのお楽しみさね」

「・・・」

ふいに道の両脇が開けた時、飛龍と蒼龍は言葉を失った。

城壁。

もはやそうとしか言いようが無いほどの高く頑丈な塀が遙か先まで続いている。

その塀越しに建物の屋根が見えるが、一体どこまで続くのかというくらい果てしない。

「見えるかい？あれが正門さね」

二人がやつと識別出来たほど小さな黒い塊は、やがて見上げるほどの大きな門になった。

ふと見ると、元来た方角の敷地内へと巨大なヘリコプターが着陸していく所だった。

二人は言葉が出なかった。どんだけデカイんだ。

「失礼します。こちらにどのような用件でしょうか？」

門の脇の小屋から出てきた警備員が、運転席の窓を下げたおばちゃんに訊ねた。

「こちらの北陸地域部長が日本エリア長さんに相談があるんさね」

警備員が覗き込んだ時、飛龍はそつと頭を下げた。

「お待ちください。顔写真を1枚撮らせて頂きます」

警備員はスマホを取り出すと、おばちゃん達に向けた。

カシャツツ・

カメラの撮影音が聞こえた後、警備員はなにやら画面で操作していた。

程なくスマホから着信音が鳴り響き、

「・・・ええ、はい。解りました。それでは」

そう言っつてスマホを耳から離すと、おばちゃんに話しかけた。

「お待たせしました。認証が終わりましたので開門します。入ったら案内に従って左にお進みください」

警備員が言い終わる頃、ギギギと音を立てながら大きな門が開き始めたのである。

S. 04話

「わざわざお越しになるという事はよほどの用向きなのでしょうか？
北陸地域部長殿」

「あつ、あのつ、あのですね・・・」

日本エリア長を前にすっかり動揺している飛龍の肩に手をおくと、
おばちゃんは、

「久しぶりさね、日本エリア長」

と、にこりと微笑みながら声をかけたのである。

「ご無沙汰しております。先代日本エリア長殿」

「すっかり貫禄がついたねえ。立派になつたじゃないさ」

「とんでもないです。私などまだまだ勉強不足で」

この間、飛龍と蒼龍は交互に二人を見ては、その発言にぎよつと
していた。

えっ？おばちゃん、元日本エリア長なの？どういう事？

「ちよつとこの子達のお願いを聞いてやって欲しいんさね」

「お願い、ですか？」

おばちゃんはぽんぽんと飛龍の肩を叩いた。

「怖がらないで本心を言つてごらんよ。大丈夫さね」

飛龍が見返すと、おばちゃんはにこりと笑つて頷いた。

飛龍は深く息を吸つてから、ゆっくりと話し始めた。

途中、何度か蒼龍が自分の思いを補足した。

自分達は轟沈の経緯に、提督に、心残りがある事。

地上組の事を知らしめたいのではなく、世話になつた提督に謝り、
礼を言いたいと言う事。

「私はそう思ってますけど、飛龍ちゃんは付き合ってくれただけで・・・」

「・・・ううん。私も機会があるなら御礼を言いたいよ」

「ひーちゃん・・・」

「私達は何度思い出そうとしても、所属していた鎮守府の番号も、位置
も、どうしても思い出せなかつたんです」

「……………」

「だからエリア長、お願いします。昨日、私達の町を通りがかった提督の鎮守府番号を、教えてください」

日本エリア長は眉を顰めて腕組みをし、少しの間考えていたが、「少し、待っててください。我々にとつて危険が無いか確認してきます」

そう言うと、奥の自席でしばらくパソコンのキーを叩いていたが、「はあっ?…えっ?…ええっ?」

画面にぐつと近寄ってはごしごしと目を擦り、やがて印刷した紙を手にも、困惑した様子で3人の所に戻ってきた。

「え、ええとですね…」

「な、何か問題が?」

「元老院の一部の方と、その鎮守府とは契約を結んでるんだそうです」
「……………」

飛龍は思わず素でそう答えてしまった。

おばちゃんは首を傾げながら言った。

「どういう事だい?」

「えっと、長老の一人である浮砲台組長殿は、日本から遙か南の海に自拠点を構えてらっしゃいます」

「そうだったね。確かレ級組もご近所だろう?」

「ええ。温暖な気候の方が体があつてると仰つて」
「で?」

「昨日、恐らく蒼龍さんがお会いになったのは、ソロル鎮守府の提督だと思えます」

3人は首を傾げ、おばちゃんが呟いた。

「…何で番号じゃないんだい?」

「それが、元々は第5646鎮守府と呼ばれていたそうなのですが」
「!」

その番号を聞いた飛龍と蒼龍ははっとして、互いに見合い、頷いた。
日本エリア長は続けた。

「大本営指令で移転し、ソロル鎮守府と改称したそうです。大本営内

ではX01鎮守府と呼ばれてるそうですが」

おばちゃんは首をかしげた。

「なんでまたそんな番号にしたのかね・・何か違うのかい？」

「それがその・理由が全く解らないのですが、とにかく我々に好意的なのです」

「地上組につて事かい？」

「いえ、深海棲艦に、という意味です」

「鎮守府・・なんだろう？」

「ええ。でも、浮砲台組にしろ、レ級組にしろ、ソロル鎮守府と契約してて」

「何をさね？」

「浮砲台組は、ええと・・白星食品の漁船の護衛を」

「な、なんだいその白星食品つてのは？」

「・・ち、鎮守府の所属艦娘が経営する水産加工会社だそうです」

「何でそんな事してるんさね」

「さっぱり解りませんが：社長は元深海棲艦の、ビスマルクさんだそうです」

「え？なに？も、元深海棲艦？」

「は、はい、資料にはそう書いてあるんです。ここです・・」

「・・・ほんとだね」

「そしてレ級組の方は、や、山田シユークリムの公式：護衛・部隊？だそうです」

「・・ええと、それは何なのさね」

「し、深海棲艦が、深海棲艦向けにシユークリームを作ってるそうです「はあ？」」

「その配布員の護衛契約を、ええと、鎮守府のベンチャーキャピタルを通じて山田シユークリームと結んでるそうです」

「訳が解らないにも程があるさね」

「本当に、ほ、ほら、ここに書いてあります」

「別にアンタを疑ってるんじゃないんさね：あー、浮砲台組長かレ級組長は居ないんさね？」

「あ、もうすぐ浮砲台組長さんは会議を終えて出てくると思いますよ」「ちよつと呼んで来てくれないさね?」

「解りました。私も気になりますし」

「ごく自然にスルーされたけど、元老院の幹部だよね・・・こつちに呼ぶなんて良いのかなあ。」

飛龍は冷や汗をかいていた。

「これはこれは坂之上殿、ご無沙汰しております」

「なにジイ様の格好してるんさね?」

「いやまあ、元老院として一応格好をつけませんとな」

「ちやんとご当主のサポートしてあげてるんだらうね?」

「勿論」

飛龍は色々突っ込みたくて仕方なかったが、ぐつと堪えていた。

「ところでこの、白星食品と山田シークリーム、そしてX01鎮守府ってのはなんなんさね?」

「ああ、ソロールですか。我々も判断に困っております。今は共存政策を維持してるのですが」

「厄介事でも押し付けられてるのかい?」

「逆です。あまりにも友好的なのです」

「そんな弱腰の鎮守府なら隙を突いて乗っ取っちゃえばいいじゃないさ」

「いえ、それが、油断も隙も無いんです」

「・・・強いのに友好的って事かい?」

「ええ。建設時、付近に居た深海棲艦の7割以上をたった数時間で掃討する程の猛威を見せつけました」

「どんだけの大型鎮守府なんだい・・・150名体制くらいかい?」

「いやそれが、所属艦娘は今も80名前後のごく一般的な規模でしてな」

「それでそんな攻撃力があるのかい?」

「ええ。ところが、鎮守府が出来た途端、急に態度が変わった」

「・・・」

「他に類例も無く掴み所が無い。大本営もそれを意識してのX01と

「いう番号なのかもしれませんな」

「今、態度が変わったといったね。我々に何を要求してるんさね？」

「それが・我々に食事を振舞ったり、水産加工会社や宝石工房を作ったり、何がしたいのか全く読めんです」

「あー・・・」

飛龍と蒼龍は苦笑しながらポリポリと頬をかいた。

あの提督の事だ。更に悪化・もとい、進化を遂げたのだろう。

うん、何か色々変な出来事があつたのを思い出してきた。バンジーとか・・・

「あんた達、何か知ってるのかい？」

「何でも良い。提督について知ってる事があれば教えてくれないかね？」

おばちゃんと浮砲台組長がこちらを向いたので、飛龍は頷いた。

S. 05話

飛龍は苦笑しながら口を開いた。

「私達が元々所属していた鎮守府なのですが、提督はとっても変わり者なんです」

「今の話だけでも充分予想出来るさね」

「ただ、大本営で研究所長やってた人なんで頭は良いんです。とてつもなく、奇抜ってだけで」

浮砲台組長が苦笑した。

「まさにその通りだ。深海棲艦を艦娘に戻せるなど、他では聞いた事が無・・・」

その一言に大声で返したのは蒼龍だった。

「ええっ?! 深海棲艦が艦娘に戻れるんですか?」

「うむ。その数は千を超え、少なくともあの海域の軍閥が3つは飲み込まれた」

「・・・」

「毎日のように艦娘化を希望する深海棲艦達が世界各地から押し寄せ、その全てが艦娘なり人間に戻っていく」

「・・・」

「少し前にそれ専用の基地を作り、どこから連れてきた大勢の深海棲艦と所属艦娘に共同運営させている」

おばちゃんがげっそりした顔で頬杖をついた。

「今さらつと変な事言ったね。でも他がおかし過ぎてむしろまともに聞こえるってのが困るさね・・・」

「部下に継続的に確認させとるが、今も変わらず艦娘や人間に戻してる。それに・・・」

「それに?」

「我が地上組の中にも、ソロル鎮守府で人間に戻った子達を働かせているんだが」

「何で受け入れたんさね?」

「無論調べるためです。高度なスパイ用の機器とかが埋め込まれてる

かもしれないと」

「で、どうだったんさね？」

「発信機もロガーの類も無く、スパイ活動させている形跡も無い。複数回確認させたので間違いないでしょう」

「一体何がしたいんだろうねえ・・・」

そつと蒼龍が手を上げた。

「なんさね、蒼龍ちゃん」

「えつと、そうすると、私達は提督の元に戻れるかもしれないって事ですか？」

「そうだな。あー、まあ鎮守府近海の深海棲艦達は鎮守府の運営をサポートしてるんだが」

おぼちちゃんが白目を剥いた。

「一体全体どういう事なんさね・・・もう理解の枠を超えてるとしか言いようが無いさね・・・」

「お分かり頂けましたか？」

「充分さね。ああ、話の腰を折って悪かったね。蒼龍ちゃん、続けとくれ」

「そつ、それなら・・・それなら私、提督の鎮守府に、帰りたい、です・・・」
おぼちちゃんが腕を組んだ。

「二人とも、地上組の事を話さないって約束できるかい？意外とうっかり話しちゃうもんだよ？」

浮砲台組長が肩をすくめた。

「実は・・・その・・・」

「なんさね？」

「ソロル鎮守府には、我々の存在は・・・とうに知られています」
おぼちちゃんはぽかんと口を開いた。

「・・・なんで放ってるんさね」

「それがその・・・提督が、全く大本営に報告するそぶりが無い。むしろ隠しているんです・・・」

「・・・単に忘れてるだけじゃないのさね？」

「いいえ。先程話題に出てきた山田シユークリームですが」

「ああ」

「その視察に大本営から査察団が来ましたが、我々の事は最後まで提督は説明しなかった」

「・・・」

「また、あれは鎮守府近海の深海棲艦達が海底資源を掘り、我々に卸して得た金を元に運営してます」

「・・・で？」

「その仕組みをまとめたのは、ソロル鎮守府所属の龍田という艦娘を筆頭とする事務方という組織です」

「どっぴり癒着してるじゃないさ。鎮守府に上納金でも収めてるのかい？」

「いえそれが、そういう要求は一切ありません。更に警備する我々には給金を支払ってくれています」

「でも設立時点で地上組の存在を明らかにせざるを得なかった、そういうことさね？」

「まあ、資源購入窓口という所しか打ち明けてはおりませんが」

「・・・まさかアンタ、その場に居たんかね？」

浮砲台組長はささっと目を逸らした。

「う、打ち明けたのは私ではないですよ。鎮守府近海に住む深海棲艦の代表がぼろっと・・・その」

「あー」

「ちなみにですが・・・」

「まだなにかあるんさね？」

「白星食品の粕漬けセットは、その・・・当主の大好物・・・でして・・・」

「・・・アンタも何か好物があるんじゃないのかい？」

「いつ!?!・・・あ、あの、ブイヤベースが・・・その・・・本格的と言いますか・・・」

「レ級組組長は？」

「白星食品ではありませんが、鎮守府がたまに供する、お好み焼き定食が・・・」

その時、そっと日本エリア長が手を上げた。

「あ、あの、私は白星食品の雪ん子蒲鉾が大好きで・・・あ、すいません」

おばちゃんは深い溜息をついた。

「そういう事かい・・・完璧に罫に嵌ってるじゃないさ、お前達」
「えっ?」

「そんな好物を提供してくれる鎮守府、潰す気になれないだろ?」

「まあその・・・潰す意味が・・・」

「それを懐柔工作っていうんさね：しかし何と手間のかかる事を・・・し、しかし、今は深海棲艦達は討たれて沈んでいる訳ではありません」

「冗談じゃないさね。艦娘や人間になるって事は、味方が減って敵が増えてるって事じゃないさ」

「まあ・・・」

「戦って討たれるなら味方が減る時、大抵敵も減ったり傷つくが・・・」

「提督のやり方だと味方がただ減って、敵は元気なまま更に増えるんだよ?」

「・・・あ」

「考えようによつちや下手な戦闘より深刻なダメージを受けてるとも言えるんさね」

「・・・」

おばちゃんは溜息をついた。

「まあ、それでも納得せずに艦娘なり人間になるならそれも良いかもしれないさね」

「・・・確かに、深海棲艦で居るのも楽ではありませんからな」

「そうさね。ただそれは、何の苦しみも不利益も無いならって前置きが付くけどね」

「その点なのですが・・・」

「何さね?」

「深海棲艦から艦娘に戻った場合は鎮守府での生活方法などの再教育を受けられます」

「・・・」

「更に人間に戻る場合は、提督が後見人となり、社会復帰の為の支援金も持たせる。これは確認しています」

「・・・そのお金はどこから出てるんだい？」

「それが、白星食品や宝石工場の売り上げでは無いかと、分析班は言うのですが・・・」

おばちゃんは肩をすくめた。

「見えたよ。なんてこった。全部辻褃があってるじゃないさ」

S. 06話

首を傾げた浮砲台組長に向かって、おばちゃんは右手の人差し指を立てながら話し始めた。

「いいかい、その鎮守府の主目的は、深海棲艦を艦娘または人間に戻す事さね」

「・・・」

「ただし大本営がくれるのは戦闘用資材と少量の食料だけ。だから労働力と莫大な運営資金を自力調達する必要がある」

「・・・」

「そこでまず、食事を供して近海の深海棲艦達を抱きこんだ」

「・・・」

「深海棲艦を協力的にしてしまえば巡視等に割く艦娘達が不用になり、手が余る」

「・・・」

「更に深海棲艦から戻した艦娘達も総出で働かせて外貨を稼ぎ、必要な資金を得る」

「・・・」

「・・・今も所属艦娘達の戦力は下がってないんだろう？」

「それが、年々凶悪なレベルに達しております。特に戦術の構成力がすさまじいのです」

「一体どうやってるか知らないけど、その提督は全く抜かりなくやってるさね」

「ですから、油断も隙も無いのです」

「・・・戦闘ではなく、双方納得ずくで深海棲艦を呼び戻してるって戦略である点が救いさね」

「では、共存政策を放棄し、壊滅工作に入りますか？しかしあれだけ高練度の艦娘を相手にするととなると・・・」

「放つといて良いさね」

「何故です？」

おばちゃんはちらと蒼龍達を見て、澄ました顔で口を開いた。

「そのやり方は多くの軍閥には有力な解決策の1つとなるさね」

「・・・」

「ただ、それを絶対に良しとしない阿呆な連中が居るじゃないさ」

「・・・海底国軍、ですな」

「そうさね。間違いなく連中は疎ましく感じる筈だ。連中にとって影響が無視出来なくなれば・・・」

「・・・」

「総力を挙げて仕留めに入るだろう。幾らなんでも1鎮守府で勝てる相手じゃないさね」

蒼龍が俯いた。

「提督のしてる事は、間違っているのでしょうか・・・」

おばちゃんは苦笑した。

「言えるのは人類が深海棲艦に勝つ為の唯一の手段って事さね。それを誰がどこから見るかで答えは変わる」

「・・・」

「だからこそ、大本営を、いや人類を屈服させたい海底国軍にとつちや厄介者以外の何者でもないんさね」

「・・・それなら」

「うん？」

「私、戻ります。そして提督の元で、皆を戻してあげて、海底国軍と戦います」

「・・・本気で狙われれば、勝ち目は無いよっ！」

「それならそうなる前に、一人でも多く、深海棲艦の皆を艦娘や人間に戻してあげたい」

「・・・」

「大多数の子達は、深海棲艦で居続けたいなんて本気で思ってるわけじゃないと思うから」

「・・・なら、行くと良いさね」

日本エリア長と浮砲台組長は、おやつという顔でおばちゃんを見た。

「止めないんですか？」

「・・・アンタは道を決めたんだらう？」

蒼龍が頷いた。

「はい」

おばちゃんは飛龍の方を向いた。

「あんたはどうしたいさね？こつちに残って蒼龍ちゃんとの窓口って手もあるさね」

浮砲台組長がポンと手を叩いた。

「そうですね。真の意味で信用出来る窓口が1つあるのも良い」

だが飛龍は、困った顔で微笑んだ。

「私も、提督の元に帰りたいなああって」

浮砲台組長達の顔色が変わった。

「えっ？そつ、それは・・・困るんだが」

「そうさねえ・・・一般会員なら別に構わないんだけど」

「あなたは元老院のメンバーとか、兵站維持方法とか、年間スケジュールまで知ってますものね・・・」

「でも、行きます」

「えっ？」

「だって蒼龍ちゃんが行くから。私達はいつも一緒でしたから」

「あー・・・」

飛龍はにこりと笑った。

「そうするには、どうしたら良いでしょうか？」

「確かに、我々の調査でもソロル鎮守府は平和主義であるという結論ではあります・・・」

事情を聞かされた防空棲姫は、頭が痛いとはばかりに片手で額を押さえながら言った。

「それこそ、ソロル鎮守府の全火力をもってここを襲撃されれば太刀打ち出来ません」

「そ、そんな。提督はそういう事は」

「やりそうに無い方だとは思いますが、上位組織である大本営が命じればやるでしょう。組織なのですから」

「それでも、私達は帰りた。常日頃から私達を慈しんでくれた提督の悲しみを、1つでも減らせるのなら」

「蒼龍さんがお戻りになるのは一向に構いません」

「飛龍が嫌がっているなら無理に連れて行く気はありません。でも願っているなら、連れて行きます」

「…私は、組織を危険に晒す要素から、組織を守る義務があります」
蒼龍はごくりと唾を飲んだ。見る間に防空棲姫が殺意を纏い始めたからだ。

「ならば、危険じゃないと解れば良いんですね？」

「…どう証明するのでしょうか？」

「同盟を結んでしまいませんか？」

「…は？」

「ですから、ソロル鎮守府と、地上組が手を結んでしまえば良いのです」

部屋に不気味な沈黙が訪れた。

「…んー」

防空棲姫は両手で左右のこめかみを押さえていた。

問題にもならない提案の筈なのに、どうしてこんなに引つかかるのだろう。

浮砲台組長が呟いた。

「まあ、我々も、レ級組も、対等な契約を結んでおりますからなあ」

おぼちゃんが溜息混じりに言った。

「普通の鎮守府なら到底不可能だけど、ソロルの変態ぶりを思うと乗って来そうな気がするんさね」

「そうーそれですー」

防空棲姫はおぼちゃんをズビシと指差しながら何度も頷いた。

普通の鎮守府相手なら絶対にありえない事であり、一蹴すれば良い話なのだ。

ここに本部があると知った瞬間、ここに向かって大軍勢を送ってくるのが海軍として当然の動きなのだ。

そういう相手だからこそ我々は錯覚を利用して敵の懐である地上

に飛び込み戦闘を極力回避しているのだ。

だがソロールの場合、本当に提督がとことこやってきて契約の話を始めようとか言いそうな気がする。

その異常さに自分が付いていけないのだ。

防空棲姫は溜息をついた。

確かに恩師は、いつか人間と和平協定を結ぶ糸口を先手を打って探しておくと繰り返し言っていた。

戦争を続けるほど有限の資源が減り、全員が貧しくなっていく。

我々の権利を認め、共存の道を提示してくれるなら協定に応じよと。

だが、よく考えればソロール鎮守府は和平どころか共に働く事も既に現在進行形で行っている。

既にその先、艦娘化や人間としての社会復帰まで実現させている。

だから地上組の子達の権利を保障してくれるなら、相互不可侵協定を結んでも・・・

・・・いやいやいやいや待て私。

防空棲姫は頭をふるふると振った。

相互不可侵協定はあくまで深海棲艦の軍閥同士を前提とした協定だ。

艦娘や海軍という共通の敵が居るからこそ、余計な戦力を割かない為に成り立つのだ。

・・・いや、海軍だって無駄な血を流す事を避けたいという意志があるなら同じなのか？

ソロールの提督はそこまで柔軟に考えるだろうか？

海軍には、確かにファツゾ様のようなステキな神様も混じってはい

る。だが、大多数が慈悲も無い冷酷な連中だ。

そんな大胆な策に応じるだろうか？

・・・でも、考えれば考えるほど、ソロールの提督ならなんとなく乗っ
てくれそうな気がする。

なにせあの変態鎮守府のボスなのだから。

S. 07話

30秒が過ぎ、1分が過ぎ、2分が過ぎた。

疲れきった表情で目を開けた防空棲姫は、蒼龍を見た。

「蒼龍さん」

「は、はい」

「交渉団長役を、お願い出来ますか？」

「私ですか!？」

「結べるとなれば、協定の仔細は我々元老院が対応しますので」

「んー」

蒼龍は天井を見た。

そこに浮かんだ提督の顔は笑っていた。

・・・よし。

「二人でお引き受けいたします!」

飛龍がぎよつとして蒼龍を見た。

「えっ?わ、私は許可出来ないでしょ?」

防空棲姫は蒼龍をじつと見ながら言った。

「飛龍さんは締結が確認された後に向かわせると言ったら・・・」

「お断りします」

日本エリア長は防空棲姫のまぶたがびくびくとしたのを見逃さなかった。

ああ、姉君はきつと今夜、私の部屋に来て愚痴を・・・いや、ヤケ食いに付き合えとか言いそう・・・

防空棲姫は冷たい目で飛龍を見た。

「ひっ!？」

「余計な事は言わない。守れますね?」

「は、はい、かしこまりました・・・」

浮砲台組長が頷いた。

「鎮守府への紹介は私からやりましょう。これからへりで帰りますから一緒にどうぞ」

防空棲姫は溜息をつき、浮砲台組長に頭を下げた。

「交渉の立会いも、お願いできますか？」

「勿論心得てますとも。ではお二方、参りましょう」

おばちゃんは蒼龍と飛龍に言った。

「二人とも、部屋の鍵貸しな」

「えっ？」

「もう戻るつもりは無いだろ？ 適当に処分しておくさね」

二人はおばちゃんを見た。

おばちゃんは笑って頷いた。

「よろしく願います。今までありがとうございます。ご恩は忘れません」

二人は鍵を手渡すと、揃って深々と頭を下げた。

ババババババババ・・・

冷たい雨が降りしきる中、3人を含む深海棲艦達を乗せたMi26は地上組本部のヘリポートを飛び立った。

深海棲艦だけに解るDMZのサインを発する事が出来る特別仕様の軍用ヘリである。

その様子を見送っていた防空棲姫は、ぽつりと言った。

「・・・坂之上さん」

「なんさね？」

「交渉は・・・上手く行くでしょうか・・・」

「そうさね。恐らくアンタはこの戦いを終わらせる快挙を成し遂げた英雄になれるさね」

「別に英雄になりたいわけではありませんが・・・」

「それでも、今そんな事を決められるのは、アンタを含めた僅かな深海棲艦さね」

「・・・」

「海底国軍のように何が何でも人間達を全滅させ、深海棲艦だけの国を作るって考え方もある」

「・・・」

「そうだ、海底国軍で思い出したけど、881研も邪魔してくると思う

んさね」

「でしようね」

「881研や大本營の様子は押さえてるのかい？」

「第4課は全員大本營に入り、活動中です」

「・アメリカかぶれのポイポイちゃんはまだ課長やつてるんさね？」

「優秀ではあるので・何度言っても英語の電子メールで報告書送って
きますけど」

「あんなタフな仕事、2〜3本ネジが飛んでないと出来ないさね」

「・深刻な後継者不足です」

「ま、それはそれとして、大抵の子達は、身の安全が保障される人間や
艦娘に戻りたい筈さね」

「・坂之上さんは、戻りたいですか？」

「もうそれなりに生きたからね。周りがどう動くかで決めるさね」

「・・・」

「あんたはどうなんさね？」

「わ、私は・組織がありますし」

「必要なくなったら？」

「勿論人間になります。お傍で暮らしたい方が居ますので」

「おや、あんたも隅に置けないねえ。互いに未来を誓い合ったとかか
い？」

「あ、いえ、完全な片思いで・・・って何言わせるんですかつ！」

「カッカツカ！ちよいと聞いたかいエリア長、お姉さんは戻る気満々
だよー！」

「ちつ違います！妹に変な事言わないでください！」

おばちゃんに弄り回される姉を見て、日本エリア長であり、防空棲
姫の妹である港湾棲鬼は溜息をついた。

ああ、今晩はきつとスイーツ食べまくりに付き合わされる。

明日からジョギング再開しよう・・・

おばちゃんはくるくると車のキーを指先で回しながら言った。

「さて、そろそろ帰るさね。あの子達の部屋を片付けないと大家に返
す時に怒られちまうからね」

防空棲姫はぎよつとした顔でおばちゃんを見た。

「て、顛末を確認されないんですか？まだ決まるかどうか・・・そもそも話に乗ってくるかさね・・・」

「え？そうさねえ・・・」

パシツとキーを握り締めると、おばちゃんは続けた。

「ご破算になりそうになったら電話しといで。あんた達が余程のドジを踏まない限り無いだろうけどねえ」

「ドジ？」

「あちらさんは十中八九：いや九分九厘、この話に乗ってくると思うさね」

「なぜですか？」

「良いかい、あの子達が深海棲艦になってもう5年以上だよ。それでもあれだけ忠誠心が残ってるんだよ？」

「・・・」

「浮砲台の言葉を借りれば、あんた達への接し方も対等さね」

「・・・そう、ですね」

「共通するのは何だと思うさね？」

「・・・優しさ？」

「そうさね。蒼龍が言っただろう？私達を慈しんでくれたって。艦娘を大事にし、深海棲艦を敵と見てないんさね」

「ええっ?!」

「どっちも大事にしてるのなら、戦わずにケリをつけたがる筈だ。だからこそその懐柔工作さね」

「戦わず・・・どういうことですか？」

「深海棲艦が全員人間に戻ればゲームセットじゃないか」

「んなっ!?ま、まさかそんな・・・どれだけの数がいると」

「あと、あの子達は必ず地上組の事を提督に伝えるよ。それが忠誠つてもんさね」

「ひえっ!?そっ、それはとても困ります！い、今からへりを呼び戻して・・・」

「馬鹿な事はお止し。良いから聞きな」

「は、はい」

「地上組を知るからこそ、提督はスケールメリットを見出すんさね」

「スケール・メリットですか？」

「そうさね。きつと向こうはこの協定を足がかりに更に話を広げようとするだろう。上手く利用しな」

「我々に不利になる事を阻止し、少しでも有利な協定として結ぶという事ですね？」

「カー、アンタは頭が固いねえ。ソロル提督の方が1枚も2枚も上さね」

「そんなあ・普通はそうじゃないですか・・・」

「連中にだけは頭を切り替えな。良いかい。今までの連中の態度を良く思い出さないと」

「・・・はい」

「アンタ達に不利というか、不平等な事をしたかい？」

「・・・いいえ」

「そうだ。それがミソさね。対等な道を示すのは懐柔工作の基本中の基本さね」

「・・・」

「もう1つ。向こうさんは見下せるほどの兵力かい？」

「いいえ。ICBMやSLCMまで保有し、艦娘達は特殊部隊なみです。正面衝突は絶対避けたい相手です」

「なんでそんな物まで1鎮守府が持つてんだらうねえ・なら尚更、それなのに何故対等であるかだよ」

「・・・」

「下に見られるほど不愉快な事は無い。へりくだれば凶に乗られる。互いの妥協点は対等しかありえないんさね」

「・・・」

「向こうは1体でも多く艦娘や人間に戻す為だけに突っ走ってる。それ以外は全てその為さね」

「えっ・・・そ、それは」

「深海棲艦に平穏を。安住の地を。笑顔を。地上組が最終目標とする

事の上位互換さね」

「それはそうですが・・・」

「提督が賢い程、うちらが連中に誠実である程、あんたは美味しい事になる筈さね。連中が味方なら笑いが止まらないだろ？」

「え、ええ。あんな戦力が背後にあれば、周辺軍閥との力関係は大幅に有利になるでしょうね・・・」

「矛は矛でもちよつと違うだろうけどねえ・・・まあいいさね」

「えっ？ど、どういうことですか？」

「とにかく、向こうが提案してくる意味をよく考えな。多分うちらに不利な事やそう難しい事は言わない筈だよ」

「・・・」

「じゃ、後は任せたまよ」

「い、嫌です。やっぱり居てください。お願いします」

「何を情けない事言ってるんさね。遙か昔に柿岩家に舵取りを任せただろ。しっかりおし！」

「でも・・・こんな時くらい・・・片付けは手伝わせますので・・・もう不安で不安で」

「そんな泣きそうな目をしなさんな。アンタならちよつと考えれば大丈夫さね。元老院の連中も居るだろ？」

「・・・」

「・・・あー解った解った。仕方ないねえこの子は」

翌朝。

「スマナイ。チョット提督殿ト相談ガアルノダガ：話ヲ聞イテモラエナイカ？」

「契約内容の問題なら私が決められるけど？」

「イヤ、違ウノダ・・・」

きよとんと首を傾げる白星食品のビスマルクを前に、浮砲台組長は首を振った。

地上組本部からへりで帰った日の翌日、朝から浮砲台組長は白星食品を訪ねていた。

予定外の訪問ではなく、月に1度の白星食品との定期報告会だった。

成果を伝え、ギャラを交渉する大事な相談会なのである。
ビスマルクは眉を顰めた。

「どうしたっていうの?」

「ソレガソノ、地上組ニナ、ソチラノ」

「シッ!それはちよつと待つて」

ビスマルクはきよろきよろと室内を見回した。

あの窓の位置はあまりよろしくない。

「ちよつと場所を変えましょう」

ビスマルクは浜風をコールした。

万が一にもパラツチに嗅ぎ付けられてはいけない。

最近はずいぶんだ。青葉は記事に飢えている。

「なんですって?ああ、何てややこしい事に・・・」

「解ツテクレテ本当ニアリガタイ」

浜風が用意した、窓の無い小倉庫に案内された浮砲台組長から話を聞いたビスマルクは天を仰いだ。

浜風はドアの外で、周囲に怪しい人影が無いか見張っている。

ビスマルクは白星食品の社長だが、ソロール鎮守府所属艦娘でもある。

だがその前は整備隊という軍閥を率いて長年深海棲艦をやってきた。

そして地上組とも頻繁に取引を行っていた。

ソロール以外で地上組という一言を発する事がどれだけハイリスクか提督に忠告したほどである。

ゆえに元ソロール所属の艦娘が地上組の幹部クラスまで登り詰めた事のややこしさをすぐに理解した。

地上組の存在は人間界なり海軍なりから秘匿されているからこそ
穏便に済んでいる。

知られてはいけないのである。

一方、ソロールに所属した艦娘達は提督に限りなく高い忠誠を誓い、

その目標に貢献するべく走り出す。

比較の後から来た経理方の白雪でさえ、

「提督の元を去って大本営に？行く訳無いじゃないですか。新しいジヨークですか？」

と、お前は何を言ってるんだという目で肩をすくめるのである。

浮砲台組長は続けた。

「ソコデナ、我々が相談シタイノハ、ソロルト我々デ相互不可侵協定ヲ結ベナイカト言ウ事ダ」

「へ？か、海軍に存在を知らせるの？」

「違ウ。ソロル鎮守府トダケ、ダ」

「・・・あー」

ビスマルクは少し怪訝な顔をしたが、頷きながら唸った。

「モチロン、提督ヲ全面的ニ信用セネバナラナイ前提ダガ・・・」

「まあそこは、大丈夫じゃないかしら。約束は守る人だしね」

「ソ、ソウカ。ヤハリ私ノ考エスギナノカ・・・」

ビスマルクが苦笑した。

「本来で言えば間違いなくあなたの懸念は正しいでしょうけどね」

「ソウダロウ？ソウダヨナ・・・本来ハ」

「じゃ、提督とちよつと話してくるわ。お待ちになる？それとも明日にでも出直されるかしら？」

浮砲台組長は少し考えたが、

「イヤ、待ッテイタ方ガ良イ気ガスル。良ケレバ、ダガ」

と、答えたので、

「なら応接室で。浜風！大きい方の応接室に案内してあげて！」

そう言って浜風を呼んだのである。

S. 08話

「蒼龍と飛龍、かあ・・・」

「最近縁があるな、提督」

「なー・・あれほんと見間違いだったのかなあ・・・」

訊ねてきたビスマルクの話の話を聞くと、提督は悲しげに微笑み、秘書艦だった長門は肩をすくめた。

ビスマルクは首を傾げた。

「どうしたの？」

「いや、先日出張の帰りに北陸を経由したんだけどね」

「ええ」

「たまたま立ち寄ったスーパーのレジに、蒼龍そっくりな子が居てね」

「へえ」

「声をかけたら人違いですってキツパリ言われるし、周囲のお客さんから白い目で見られるしで」

長門が首を振った。

「まあ、本当に人違いならストーカーと間違われても仕方ないからな」
「でもあの子は本物のような気がするんだけどねえ・・・」

ビスマルクは何となく、提督は本当に会ったのではないかと思っ
た。

だからこそ地上組の中で動き、この話に繋がっているのではないかと。
と。

ビスマルクは続けた。

「という訳で、地上組はここは信用してるけど、大本営を含む他に知られる事を物凄く警戒している」

「だから蒼龍達を帰す条件として、秘密を守る協定を結んで欲しい。
そう言う事だな」

「ええ」

提督は少し考えた後、

「龍田と文月を呼んでくれ」

と、長門に言った。

「あらあ、それは勿体無い話ねえ」

「その通りだ。どうせならもつとしっかりした契約を結びたい。文月はどう思う?」

「んー・・・」

文月は少し考えた後、

「基地を枕にしませんか?お父さん」

「そうだね。思い切り目的に合致してるしね」

「地上組の皆さんから人間に戻りたい方をどんどん受け入れて・・・」

「人間に戻った子達を地上組か関連企業に就職斡旋してもらえれば・・・」

「就職の心配も、社会復帰後の心配も格段に減ります」

「白星食品に就職してもらおう感覚になればベストだけど・・・なあビスマルク」

「なによ?」

「地上組は、その、どれくらい就職先として期待出来るかなあ?」

ビスマルクは首を傾げた。

「本当の規模は知らないけれど、数万とか数十万単位だと思うわよ? 複数の国に跨ってるし」

「・・・まあ以前、浮砲台組長さんがオーストラリアにもバイヤーが居るって言ってたよね」

「そっ・・・そうね」

ビスマルクは必死に思い出していた。あの時どこまで言っただけ?

うっかりマズい情報を追加してしまうと本気でこの鎮守府に大軍勢が押しかけてきてしまう。

・・・いや、むしろそうなる前に契約してしまう方が提督は安全かもしれない。

「ねえ提督」

「うん」

「地上組の事を知りたいなら、先に契約を結んでしまう方が良いと思うわ」

提督がじつと見返したので、ビスマルクのこめかみを冷たい汗が流れた。

「・・・ふむ」

提督は少し考えた後、龍田に向いた。

「文月の案で良いと思うんだが、向こうさんが気にするならもう少しダメーを噛ませるか？」

「いいえ、うってつけの手がありますから大丈夫ですよ」

「んー？」

龍田はインカムをつまんだ。

「お仕事中ごめんなさい。白雪さん、ちよつと提督室に来てくれないかなあ」

「下手に特殊契約を結ぶと大本営の目に留まりやすいですから、うちの通常契約にすれば良いかと思います」

「経理方との契約って事かい？」

「はい。教育の一環として、人間として社会復帰する方を対象にベンチャーキャピタル制度を作っています」

「あつたね」

「その制度を使い、例えば旧鎮守府艦娘化事業の就職斡旋といった形で契約し」

「ふんふん」

「その付帯条項として、相互的な機密保持契約を結ぶというのは如何でしょうか」

「ふーむ」

「それなら契約締結先は我々経理方、つまりソロル鎮守府のみとなりますし」

「うん」

「大本営に提出する義務のある書類関係には、一切記載する必要がありません」

「ええと、うちと取引してる業者さんと同じ扱いにしてしまうってことかい？」

「食品卸としての白星食品とかですか？」

「そうだね」

「あれは事務方の管轄で大本営に出入り業者として報告義務がありますが、我々は報告義務が無いのです」

「なんで報告不要なんだっけ？」

「社会復帰教育の一環で行う起業した会社一覧を作った所で、受ける大本営の部署が無いのです」

「そりゃそうか。ただ・・・」

「なんででしょう？」

「だとすると、誰の起業案件にするんだい？」

「北方棲姫さんです」

「・・・あー、そうか。確かに北方棲姫は現在中断してるだけで、最終的には人間化を希望してるからねえ」

「その通りです。名目上はぴったり当てはまります」

「そこまで待ってくれるかなあ・・・」

「そこまで、とは？」

提督がちらりと龍田を上目遣いに見た。

龍田はくるくると左手の指輪を回しながら白雪に言った。

「提督は恐らく、地上組の全員を人間まで戻すつもりよ」

提督が微笑んだのでビスマルクはゾクゾクしていた。

深海棲艦なら誰でも知ってるメジャーと呼ばれる超大軍閥は、地上組、北極圏軍閥、海底国軍の3つしかない。

それぞれが数十万ともそれ以上とも言われる構成員を抱えているのだが、その1つを消し去ろうというのだ。

ただ・・・

提督達がやろうとしているのは、個々の権利を尊重し、適切な指導を経た社会復帰プログラムだ。

大本営のように武力で一切を始末しようとしているのでは無いし、地上組の理念にも馴染みやすい。

提督は長門に言った。

「すまない。私が基地に行くか、北方棲姫と日向を呼びたい。電子会議では漏洩の恐れがあるからな」

長門が頷いた。

「・・・待ってる、基地に確認してくる。やる前提で進めて良いな？」
「構わない」

長門が出て行った時、ビスマルクが口を開いた。

「ええと、それなら浮砲台組長には出直してもらおうように言ってくるわね」

「なんだ、いらしてるのか？」

「え、ええ。そうだけど」

「なら一緒に話してしまおう。文月」

「なんですか？」

「集会場は空いてるかな。普通の会議室だと浮砲台組長さんは入らないだろう？」

「空いてるんですが・・・」

「うん？」

「その、今日の夕刊か明日の朝刊に・・・」

提督はジト目になった。

「・・・いかんね」

「はい」

ビスマルクが肩をすくめた。

「今、浮砲台組長さんはうちの応接室で待ってもらってるわ。そこで話した方が安全かもね」

「工場の入口ゲートでパパラッチ封鎖は出来る、か」

龍田はちらりと壁を見ながら言った。

「既に漏れてる分も含めてこの件は記事にしないよう、来年度の予算を人質にして念を押ししておくわねー」

提督は溜息をついた。

「もう漏れてるのか・・・早すぎるぞ・・・」
「ゲ」

ヘッドホンで提督室の会話を盗聴していた青葉は顔をしかめた。

同じく会話を聞いていた衣笠は青葉に話しかけた。

「はいはいっと。青葉、この件は一切ボツ。記事化禁止」

「うえー、久しぶりの特ダネだったのにー」

「しようがないでしょ。記事にしたら本気で予算0コインにされるわよ?..」

「はあーあ、じゃあエンタメ欄は予定通り提督のアクロバット寝姿写真集にしますかあ」

「...青葉、記事見せなさい」

「・・・既ニソコマデ話ガ進ンデルノカ？」

ドアが開いたのを見て浮砲台組長はビスマルクが伝えた事を知らせに戻ってきたのだと思った。

だがビスマルクに続いて提督や龍田、文月、そして白雪まで入ってきたのでのけぞった。

更に白雪から全体の提案を受け、龍田から契約書まで手渡されたのである。

提督が続けた。

「双方血を流さずに希望を叶えてあげられる。こんなに嬉しい事はありません。我々も就職斡旋先は是非とも欲しい」

「・・・」

「この形なら大本営や他鎮守府に漏れる心配もなく、合意頂ければ後は我々の内部手続きを進めるだけです」

「・・・」

「我々ソロール鎮守府は本件を是非、一刻も早く合意したい。確かに、ご提案より少し幅広い契約ではありません」

「・・・」

「ただ、これまでも白星食品や山田シユークリムの皆を護って頂いてます。信じて良かったと思っています」

提督はすつと頭を下げ、続けた。

「今後ともますます、幅広く手を携えていきたい。何卒よろしくお願ひいたします」

「エ・・・エエト、マズハ契約内容ヲ確認サセテ頂キタイノダガ」

なんて速さだ。

浮砲台組長はそう思い、心の内で深々と溜息をついた。

今日内々に打診し、ビスマルクが折を見て相談し、蒼龍達が補足し、内部で紆余曲折があつて、回答がある。

長ければ年内は無理かもしれない。そう浮砲台組長は予想してい

た。

だが現実には、自分が話してから30分も経たずにここまで仕上がってしまった。

確かにこちらの提案より遥かに大規模な契約だが、我々の方にもメリットがたつぷりついた。

我々は今後、艦娘化出来るルートを持つ軍閥だと名乗るだけで敵対軍閥の構成員を寝返らせる事が出来る。

なにせ多くの深海棲艦にとって艦娘化は悲願であり、詐欺も横行している。

つまり、我々が労せずして軍閥間抗争を制する事が出来る打ち出の小槌をタダでくれるというのだ。

しかも人間ではあるが、構成組織の労働力まで維持出来る。多く受け入れれば増やす事さえ出来る。

浮砲台組長はごくりと唾を飲んだ。

普通に考えれば・相当不利益のある条項が盛り込まれていても仕方ない。

それでも譲歩する価値がある。

だが、読み進めてもそういう条項は無い。

契約文はとてもシンプルで読みやすいから言い回しの誤訳も無いだろう。

必死に読む浮砲台組長はじとりと汗をかいていた。

持ち帰って検討とも言いつらいほど内容はシンプルだ。裏の意味を作りようが無い程に。

・・・困った。とても断りにくい。保留すらしづらい。

私が書類を持ち帰り、防空棲姫に説明すれば恐らくサインされるだろう。

・・それは契約の締結という事じゃないか。

小1時間でそんな段階だと？

本当にソロルは恐ろしい鎮守府だ。

打ち出の小槌は喉から手が出るほど欲しいが、必要以上にくつついて飲み込まれないようにせねば・・

だが、そんな芸当が出来るのだろうか・・・
それを差し置いてもこれは実に美味しい契約だ。

待て。欲に目が眩んではいけない。落ち着いてもう1度読もう・・・
何か裏が無いか・・・

浮砲台組長が再び契約書を1ページ目に戻した時。

ガチャリ!

「提督、今朝、基地から鎮守府に向かう往復船に空席があった」

「おお、往復船の手があったか。一番簡単だね」

「日向と北方棲姫が来てくれるそうさ」

「今日の基地の運営は？」

「伊勢と侍従長でやってくれ」

「それなら大丈夫だね。頼んでくれたかい？」

「無論だ。出航まで15分しか無かったのだな」

「助かる。お手柄だ長門」

「ふふ。というわけで、1020時には二人がこちらに来る」

「説明は龍田達で頼む。私も説得するから」

「まあ彼女は断らないと思いますけどねえ」

浮砲台組長は提督達を眺めていた。

完全に前向き、いやむしろやる気満々だ。

我々の頼みをクリアした上で、更に良い話にしようと自ら動いてくれている。

それは我々に対する誠意と言い換えても良い。

海軍という立場で考えれば本来なら一蹴しても良い筈の話なのだから。

しかし、あまり多くの借りを契約締結前に作るのは良くないかもしれない。

だが我々が今出せるカードといえば・・・もうあの二人しか居ないか。
浮砲台組長はふむと頷くと、言った。

「デハ我々モ、信頼ノ証ヲ用意シヨウ」

「証、ですか？」

「一旦戻ル。0950時二八戻ル。契約書ヲ預カリタイ」

「ええ、もちろんです。そちらも色々事情はおありでしょうからね」
「ソノ通りダ」

長門が頷いた。

「船が着き、二人が来られるのは1030時位だ。その時に合わせても良いのではないか？」

「イヤ、先二済マセテオキタイノダ。デハ0950時二、マタ」

浮砲台組長はそう言って提督に頷いた。

「そーりゆううううううう！」

「すみません、あまり艦を揺らされますと、発着艦訓練に支障が・・ゆさゆさと蒼龍の肩を掴んで揺さぶる提督に、思わず懐かしい台詞を口走った後、

「あ、あの、提督。本当に、すみませんでした」

蒼龍はそう言って、深々と頭を下げたのである。

提督は首を振った。

「何を言ってる。私こそ・・」

そう言ってストンとカーペットの上に正座すると、

「ダメコンの搭載ミス、そして進撃命令を下した事で轟沈させてしまった事を、心からお詫びする」

「・・へっ?・えええっ!?!」

蒼龍は僅かに顔を上げ、目の前に土下座している提督を認めたと
き、その隣に座り、

「あ、あの、お願いですから頭上げてください提督・・って、ひーちゃん!何棒立ちしてんの!」

蒼龍が怒鳴ったので、飛龍ははっと我に返った。

「え、ええ?あ、ああ、提督、もう良いですから、あれは提督のせいじゃ
なかつたんで!無理だったんで!」

そう言うと、蒼龍と二人がかりで提督の肩を押し戻したのである。

浮砲台組長とビスマルクは寂しそうな目をしていた。

自分達も轟沈しているが、それを指示した元の司令官は今どんな思
いのだろう。

だが、提督のように現在進行形で気にし続けてくれるとは思えなかった。

「良い指導者の元に着任出来るというのは幸せな事ね」

「ソウダナ。ビスマルク殿ハ今ハソウダカラ良イジヤナイカ」

「・・そうね。私にとつてアトミラールと言えば・・もう提督の事かもしれないわね」

「艦娘化？勿論出来るとも」

ひとしきりやり取りがあつて、ソファに腰を落ち着けた後、蒼龍はおずおずと質問した。

提督が当然と言う顔で頷いたので、二人はほっと胸をなでおろした。

「あ、そうか。今の姿は化けてるんだっけ」

「はい。元の姿はFlagship級のヲ級なんです」

「長門、東雲組はもう診療所を開けたかな？」

「1000時を過ぎているから開いているだろう」

「睦月に連絡して、可能ならやつてもらいなさい」

「うむ」

蒼龍が怪訝な顔をした。

「処置前検査とかですか？」

「まあそれもあるし、艦娘化処置もね」

「えっ？」

「えっ？」

「え、あの、艦娘化処置って大変なんじゃ・・」

「まあ工廠長いわく、普通の妖精達だと総出で丸1日くらいかかるらしいけど」

「たった1日で出来ちゃうんですか？」

「でも睦月達だと大体10分かかるからね」

「えっ？」

「えっ？」

「そ、そんなに、早いですか？」

蒼龍の問いを聞き、長門が答えた。

「診療所にはまだ誰も来てないそうさ。急ごう。蒼龍、自分の目で確かめると良い」

飛龍はやり取りを聞いていたが、ハツとして浮砲台組長の方を振り返った。

だが浮砲台組長は、契約書を目を皿のようにして睨みながら答えた。

「私ハ契約書ヲ確認シタイノデ、ココニ残ル。スマナイ、コノ意味ヲ教エテ欲シイノダガ・・・」

「そこは文月と龍田で頼むよ。私が飛龍達に付き添うからさ」

「はあい、いってらっしゃーい」

首を傾げる飛龍の肩に、提督はポンと手をおいた。

「よし、じゃあちよつと行つてこようか」

なんだろう、この、風邪引いた患者に総合感冒薬を処方する医者のような軽さ・・・

す、凄い処置受けるんじゃない、のかなかあ・・・あれえ？

そして10分後。

「・・・ただいま」

「うん、やっぱり変わらんないね。服が見慣れた制服になつたくらいか」「デスヨネー」

蒼龍が先に診察室に呼ばれ、本当に10分で戻ってきた。

提督は自然に話しているが、飛龍は本当に戻ったのか信じられなかった。

「ね、ねえ蒼ちゃん」

「なあに？」

「そ、その、艦装とか、ちゃんと出せる？」

「忘れてないわよう」

そう言う蒼龍はちきちきと無駄の無い動作で艦装を展開して見せた。

そして、

「航空甲板が長いからちよつと邪魔っけだよねー」

と、ペロツと舌を出した。

「やっぱりそうだよね」

「まあヲ級の装備は首が凝るから一長一短だけどねー」

「だねー」

会話を聞いていた提督はふむふむと頷いた。

「艦装全ての機能が頭の上にあるって感じだよね」

「航空機を飛ばした後の制御は杖を使ってやるみたいだけどね」

「着陸ってどうやるの?」

「航空機がその場で垂直離着陸出来るから」

「あーいいねー、甲板要らないんだ」

「そうなんですよね。でも・・・」

「でも?」

「私達、飛ばした事無いんで」

「なんで?」

「だって、ヲ級になった後、ずっとスーパーで働い・・・あっ!」

蒼龍が慌てて口を両手で塞いだが、既に提督はジト目だった。

「・・・そーりゆるーさーん」

「あ、は、はい」

「やっぱりあの時のレジの子は君だったんでしょー」

「・・・誠に申し訳ありません」

提督は溜息をついたが、長門は肩をすくめた。

「ま、艦娘化出来るようになったのも、戦闘をほとんどしなくなったのも二人が去った後だ」

「・・・」

「それまでの普通の鎮守府であった時代しか知らなければ、名乗り出難いのも当然だろう。な、提督」

「・・・そういう事なの?」

上目遣いで見る提督に蒼龍は答えようとしたが、

「あのー、飛龍さん来て貰って良いかにやーん?」

と、カーテンの隙間から睦月が顔を覗かせたので

「ああごめんなさい!すぐ行きます!」

と言いながら、飛龍は小走りに診察室へと入っていった。

S. 10話

蒼龍はひらひらと飛龍に手を振った後、苦笑しながら答えた。

「提督は軍服を着てましたから、まだ海軍にいらっしやるって事で「そうだね」

「それはつまり、普通に考えれば、私達の敵じゃないですか・・・」
「んー・・・まあうちの鎮守府も昔はそうだったからなあ」

「今更名乗り出る資格があるのかなって不安で」
「・・・」

「深海棲艦と知られたら殺されるんじゃないかって怖くて」
「・・・」

「長年働かせてくれた店に迷惑をかけるんじゃないかとか」
「・・・」

「でも何年も経ってるのに、提督がすぐ気づいてくれたのはとっても嬉しかったんです」

「・・・そうか」
「だから、すぐに判断出来なくて・・・ごめんなさい」
「ん」

提督は蒼龍の背中をぎゅっと抱きしめると、掌でぽんぽんと叩いた。

「おかえり、蒼龍。今までずっと、良く頑張って、よく戻ってきてくれたね」

「うっ・・・ぐすっ・・・て、提督・・・提督う・・・うわーん」
「よしよし、よくやった、よくやったなあ・・・」

長門は二人の様子を、少し離れた所で腕組みをしながら見ている。これでようやく、元第1艦隊の揃い踏み、か。

「飛龍！只今戻りましたっ！」

「うんうん、可愛い可愛い」
「んっふっふ」

元気良く戻ってきた飛龍の頭を提督が撫でていると、ふいに袖を摘まれた。

振り向くと蒼龍が真つ赤な顔をしている。

「・・・どうした？具合悪いのか？」

提督が慌ててたずねると、

「私も・・・ナデナデして欲しいんです・・・けど」

と言ったので、提督は笑いながら沢山撫でてくれたという。

「じゃあえつと、二人はもう1度、うちに来てくれるのかな？」

「他に選択肢があるんですか？」

「LV1になって大本営経由で他の鎮守府に異動とか、解体で人間に戻る手もあるよ？」

「折角戻ってきたのにそんな事する訳無いじゃないですか」

「そっか・・・いやその、君達を沈めてしまった私の元で働くのは嫌かな、と」

飛龍は強く首を振った後、正面から真つ直ぐ提督を見据えて言った。

「提督」

「うん」

「あの時我々が遭遇した敵は、ぎつと見えただけで数千体は居ました」

「・・・なに？そんな、だ、大本営の資料には最大6隻だと・・・」

「その通りです。ですから北方海域の資料情報とはかけ離れていたんです」

「・・・」

「そして明らかに彼らの狙いは大鳳でした。我々は大鳳の轟沈のついでに沈められたんです」

その話を聞いた時、提督の隣に立っていた長門は僅かに顔をこわばらせた。

生涯最悪とも言える暗黒の日。

口にしたくとも出来なかった、何一つなす術が無かったあの出来事。

思い出したくない惨敗の記憶。

「・・・」

そんな長門の手を、提督は黙ってきゅつと握った。

長門は提督を、次に握られた手を見て、力を抜き、ほうと息を吐いた。

「そうだ。あれは過ぎ去った過去だ。」

「第1艦隊は復活した。二度と同じ轍を踏まなければ良いのだ。」

「感謝するぞ、提督よ。」

「長門は提督の手をきゅつと握り返した。」

「飛龍は説明を続けていた。」

「奴らは目的を持って、私達の大鳳を狙ってた。そうとしか思えません」

「・・・」

「提督、あれだけの深海棲艦を動かせる軍閥はほとんど居ません」

「・・・数千ともなれば、そうだね。ビスマルクでさえ1000体前後だった筈だ」

「そして、心当たりのある軍閥が居ます」

「・・・どこだね」

「海底国軍と言います」

「海底、国軍」

「非常に人間や艦娘に敵意が強く、その一切の殲滅を目的に戦う、極めて好戦的な軍閥です」

「・・・うーむ」

「彼らは地上組とも敵対しています」
「なるほど」

「ここが今の活動を続けられれば、いつか海底国軍が襲ってきます」
「・・・」

「その時に備えておきましょう」

「蒼龍が笑った。」

「地上組北陸地域部長は伊達じゃないね」
「ちやかさないで」

「提督は腕組みしたまま答えた。」

「なら、地上組とそういう有事に備えた相互保障条項を足しといた方が良いかなあ」

「えっ？どういう事です？」

「我々が狙われるなら、地上組も狙われるんじゃない？加勢しなくて良いのかな？」

「いえ、地上組は深海棲艦ですし、相互不可侵条約を結んでますんで」「敵対してるのに良く結べたね」

「海底国軍が真に敵とするのは艦娘というか海軍だけです。余計な事に戦力を割きたくないんです」

「ああ、そうか」

納得したという風に頷いた提督に、飛龍は続けた。

「あと、この話は浮砲台組長さんには内緒でお願いします」「なんで？」

「地上組上層部だけが把握してる情報なんで」

「おー、おー、おー、そう言う事か。ビスマルクも他所で地上組って単語を言うなって言ってたしな」

「だと思えます。地上組の存在を知った鎮守府は、基本的に消すのがルールなんで」

「・・・浮砲台組長さんは私が知った事を知ってるけど？」

「ええ。ソロールだけは友好的だから例外扱いされてるんです」

「ははーん、だからビスマルクはさっさと契約してしまえといったのか。なるほど、良く解った」

「よろしくお願いします」

「長門」

「解っている。私は何も聞かなかった」

「頼むよ」

蒼龍は提督と長門を交互に見た。

なんだか前に見た時より、一段と気持ちが通じ合ってる気がする。手つないでるし。いいなあ・・・

蒼龍は提督に声をかけた。

「ところで提督」

「んー？」

「最前線を去られるのはいつ頃なんですか？」

「今の所決まってるよ」

「いえあの、直近という話ではなくて、後何年くらいかなって」

「それがね・・辞めるに辞められなくなっちゃってさ・・」

「いえ、でも、言いたくないですけど、その、お年の問題が・・」

「その事なただけどね」

「はい」

「まあその、君達と一緒に生きられるんだよ。私も」

「へ？」

長門がふふつと笑った。

「まあ提督も変則的ではあるが、そうだな、いわば艦夫になったという事だ」

飛龍が目を剥いた。

「はー!?提督も海に出られるんですか?艦種何ですか?」

だが、

「あの、待合室で・・騒がないでください」

と、東雲がとことこと出てきたので、

「すいませんでした」

と、4人は頭を下げ、提督は間宮アイスのチケットを2枚東雲に手渡すと、診療所を辞したのである。

「それでそれで?提督は大型クレーン船ですか?海底ケーブル敷設船ですか?絶対マイナーな種類ですよね?」

「一体何が言いたいのかな飛龍さんや」

「提督が一般的な艦種なんて絶対信じられません」

「だからそれはどういう意味だ」

長門がくすくす笑いながら補足した。

「説明が悪かったな。提督は無線機だ。だから正確には艦ではない」
「・・・あー」

飛龍と蒼龍が同時にそう答えたので、

「だからどういう意味ですか、お二人さん」

「えーだって、なんかすごく納得出来ました」

「普通じゃないですもんねえ。でもって無線機なのに自力で空飛んだ

りしそうですよね」

「むしろタイムスリップしそうじゃない？」

「あー解る。解るよひーちゃん」

提督はジト目で見た後、

「本当に君達は私の事誤解してるよね。こんなに真面目に普通の職務を遂行してるというのに・・・」

と言ったのだが、それを聞いた長門が

「さっ、最高だ提督！今年最高のジョークだ！あはははっ！」

と、腹を抱えて笑い出したのである。

「・・・もういいよ、皆の所に帰るよ。そろそろ北方棲姫と日向が来てる頃だろう」

提督はそういうと、首を振りながら白星食品に向かったのである。

後日。

蒼龍は個室で深海棲艦の相談に乗っていた。

「カ、艦娘二戻ッテ、具合悪クナツタリシマセンカ？」

「体調的な不良は無いし、艤装の扱いも特に問題無かったわ。なによ
り・・・」

「ナニヨリ？」

蒼龍は夕級の耳元で囁いた。

「公安とか、検問とか、もう怖くないもの。とつても気が楽よ」

夕級は深く頷いた。

「ソツカ・・・モウ警戒シナクテ良インデスネ・・・予想以上ニ怖カッタシ
ナア・・・」

蒼龍がにっこり笑ったので、夕級もにこりと笑ってペンを取った。

「解リマシタ。デハ、艦娘化ノ書類ニサインシマス」

「じゃあ書類をよく読んで記載していつてね。解らない所は何でも聞
いてね」

「ハイ」

夕級の様子を微笑んで見る蒼龍の左手には、提督が贈った指輪が輝
いていた。

蒼龍は思った。

撤退すら出来ずに沈んだ私達は、深海棲艦のまま討伐されても何の不思議も無かった。

けれど提督は自らの非だと詫びて、艦娘に戻してくれて、ケツコンカッコカリまでしてくれた。

そのうえで現状や将来を説明され、どこで働きたいか希望を聞いてくれた。

昔から提督は自らの考えをきちんと示すよう艦娘達に言っていたが、今はより自由な気がする。

自由、か。

不思議な事に、世間に身一つで出てみると、却ってこの中の方が自由に感じられる。

それはひーちゃんも言ってたなあ。自由って何なんだろう・・

「コレハドツチニ丸ヲツケタラ良イデスカ？」

「あ、ごめんね。えっと・・どこ？」

同じ頃。

コンコンコン。

「提督、お話して良いかしら？」

「ビスマルクか、どうした」

「今朝、浮砲台組長がこの書類を持ってきたわ。サインされた契約書よ」

「ん。見せて」

ビスマルクから封筒を受け取った提督は、さらさらと中身に目を通すと、

「ふむ、問題無いね。加賀、すまないが・・んーどっちかな」

「そうね。最終的には経理方ですが、先に事務方に渡す方が良いでしょう」

「だね。じゃあそうしてくれるかな」

「かしこまりました」

加賀が出て行った後、ビスマルクが訊ねた。

「ところで、あの二人は今どうしてるの？」

「ああ。日向達と一緒に基地の仕事をやってもらおう事にしたよ」

「どうして？」

「艦娘と深海棲艦それぞれに精通しているから、身の振り方の相談を受けられるでしょ」

「そうね」

「それに自身が処置を受けてるから、戻る事に不安を感じる深海棲艦の相談にも乗ってるらしい」

「ふうん・・・」

「あとは本人達の希望でね。一刻も早く、一体でも多く、艦娘や人間に戻りたいと」

「・・・そっか」

「希望する所で働くのが一番だからね。元々うちの第1艦隊に居たからLvも高い」

「伊勢や日向だって第1艦隊でしょ」

「そうだね。だから基地の安全確保がより楽になったという訳さ」

「・・・誰か攻めて来るみたいな言い方ね。何か情報があるの？」

「全部が地上組のように穏健なら、我々海軍が戦う相手が居ないはずでしょ」

「そうね。まあ・・・そうよね」

ビスマルクは海底国軍とか居るしという一言を飲み込んだ。

提督と話す時はきちんと意識しないとうっかり話してしまいそうになる。

いけないいけない。

「ま、これで地上組のおかげで就職斡旋にほとんど心配もなくなったし」

「希望者は今まで以上に基地へ行きやすくなるわね」

「地上組が斡旋してくれるからね。全くありがたい契約だよ」

ビスマルクはふふっと笑った。

本当にこの鎮守府は、提督は、変わってる。

「じゃあ私の用事はこれだけだから帰るわね。また月例報告の時に会

「いましてよ」

「そうだ忘れてた。ビスマルク」

「何かしら？」

「これを持っていきなさい」

「あら、鳳翔の4人用ダイナー券じゃない。豪勢ね。でもなぜ？」

「決まってる。今回の話は君が浮砲台組長と信頼関係を結んでいたからこそ始まったんだ」

「・・・」

「それで美味しい物を友達と食べてきなさい」

「ダンケシェーン・・・あーでも・・・連れて行きたい子が2人しか居ないわね」

「おや、そうか」

「提督に最後の一人をお願いするのはアリかしら？」

「構わないが、私が居ると気楽な会にならないんじゃないかい？」

「ううん、きつと素敵な夜になるから」

「まあ良いよ。穴埋め要員、任されたよ」

「ダンケダンケ！直近で都合の悪い夜はある？」

「・・・出張や食事は特に無いね。早くても2週間後だ」

「じゃ、日時を決めたら連絡するわね！」

「解った。頼むよ」

パタン。

ビスマルクは鼻歌を歌いながら白星食品への道を歩いていた。

メンバーは私、村雨、そして提督と浜風。

・・・提督って単語を出すだけで頬を染める浜風にダイナーデートを贈ってあげましょう。

それを私と村雨が間近で観察しながら極上の夕食を頂く！

2重の意味でメシウマよね！

「さ、浜風に気づかれないように計画を進めないと！腕が鳴るわね！」

ビスマルクはニヤリと笑うと、歩む速度を速めたのである。

4章：「ワルキューレ」編 第1話

「みんなお疲れ様。ギャラの時間よ。順番にオフィスへ来てくれるかしら」

ナタリアは事務所で作業している部下に、そう声をかけた。

「・・・という事。どう?」

「なるほど、そうか・・・気づいて無かったです。訓練方法を考えてみま
す」

「その辺はミレーナがクリアしてるから聞いてみて」

「はい!じゃあ早速!」

「あ、待って。ギャラの袋忘れてるわよ?」

「す、すみません!あと、えっと・・・」

「なに?」

「いつも、ありがとうございます」

「良いのよ」

ナタリアはオフィスの戸口で頭を下げたフローラに、微笑んで軽く手を振った。

ワルキューレ。

ナタリア率いる4人組のDeadline Deliverersであり、構成メンバー全員がflagship級の戦艦レ級である。

戦闘力の高さ、経験の豊富さ、輸送可能な範囲の広さなど、名実共に業界トップを誇る。

その頭目たるナタリアは、多くのDeadline Deliverersや軍閥から大魔王として恐れられている。

ゆえに囁かれる噂の多さも随一である。

噂いわく、

「目が合っただけで皆殺しにした」

「莫大な財産がある」

「あの海底国軍でさえ避けて通る」

「幾つもの鎮守府を壊滅させた」

「裏社会とつながりがある」

「あちこちに監視網を張っている」

他にも枚挙に暇が無い。

そしてそういう噂の真偽を訊ねられると面白そうに目を細め、

「さあ・・・どうかしらね？」

と、笑うだけで肯定も否定もしないので、ますます尾ひれがついていく。

一方でテッドやファッツ達、クー達、そして何よりワルキューレのメンバーは

「面倒見が良くて、情に厚い姉御肌」

と口を揃える。

なので、他の Deadline Deliverers 達はあまりのギャップに首を傾げ、やがて

「まあ、ファッツもイカれてんだろ」

「テッドも良い煮え具合だしな」

「おいおい、クーの言う事を真に受けるのかよ？」

と、評価する人を否定する方向で終わってしまう。

ちなみにベレーだけは

「どうしてベレーちゃんまでナタリアが優しいなんて言うんだ？」

「あんなに素直で良い子なのに・・・」

「きつと騙されてるんだよ、可哀相に」

などと同情されている。

実際どうかと言えば、TPOに応じて使い分けているに過ぎない。

部下には気づいた事をアドバイスし、良い事は褒め、相談にも乗る。

テッドとは契約主と請負業者としてはやや碎けているが、立場と礼儀はわきままえている。

ファッツやビット達とは親友として付き合っている。

ただ、クーのように誰に対しても笑顔を振りまく訳ではない。

賛同出来なければ同じ Deadline Deliverers だろうと真っ向から対立するし、戦う事も厭わない。

それだけなのである。

ナタリアの部下であるフィーナは、ナタリアのオフィスをチラリと見た。

近頃、ナタリアの機嫌が悪いし、その時間が増えている。

状況はきちんと共有しておきたいのだが、昔からボスは一人で抱えこむ癖がある。

「ふう・・・」

ギヤラを配り終えたナタリアがオフィスから出てきたので、フィーナはウォーターサーバーのコップを取った。

「ボス、お水ですか?」

声をかけられたナタリアはにこっと笑いながらソファに座った。

「ええ、ありがとう」

フィーナはナタリアの前にコップをそっと置き、自分のコップを手に、向かいのソファへと腰掛けた。

「・・・どうかした?」

ナタリアの問いに、ふふっと微笑んだフィーナは答えた。

「私の台詞ですよ、ボス」

ナタリアはフィーナを探るように数秒間じっと見た後、

「あー・・・表に出てた?」

「かなり」

「・・・ま、アンタじゃ無理もないか」

「という事で、お話頂けますね?」

「面白くないし・・・話したくないんだけど?」

「一緒にしかめっ面するくらい出来ますから、ぜひ」

明らかに嫌そうな目で見るナタリア、穏やかに微笑みつつも引かない姿勢のフィーナ。

ここまでナタリアに踏み込めるのはワルキューレでもフィーナだけである。

ナタリアはちらちらと周囲を見た。他の二人は・・・居ないけど・・・二人は地下で訓練メニューを作ってますからしばらく帰ってきませ

んよ、ボス」

「目を動かしただけで心を読まないでよ」

「凶星で何よりです」

そう答えつつ、フィーナは少し首を傾げた。

ボスがここまで言いよどむのは珍しい。

ナタリアは奥歯を噛んだ。

あーもう、言いづらいなあ。でもフィーナは諦めない子だし。

5秒の沈黙の後。

「え、ええと、ね」

まあ・・・フィーナなら良いか・・・

「はい」

そんなに深刻な事なのかしら？

「一晩だけの関係じゃない男って、居た？」

フィーナは全ての予想が外れたので目をぱちくりさせた。

ナタリアは苦虫を噛み潰したような顔で慌しく細巻き煙草に火をつけた。

くそ、やっぱり言わなきや良かった。

そしてフォローするようにフィーナを見ながら口を開いた。

「ご、誤解しないで欲しいんだけど・・・」

ガチャリ。

「ねえフィーナ！訓練メニューの事でアドバイス欲し・・・あれ？」

慌ててぎゅつと口をつぐむナタリア。

ナタリアを見たまま小さく頷いたフィーナは、

「いいわよミレーナ、そっちに行くわ」

そう言いながら立ち上がった。

その夜。

「酒気帯び運転すると免停くらいしますよ？」

「うちで誰か免許なんて持ってたかしら？」

2台のハーレーが仲良く並ぶ場所。

それはかつてコンテナを捌く為の埠頭であり、広く、平らで、人工的な四角形をしていた。

整然と並ぶ水銀灯は長期間放棄されたが故に多くが寿命を迎え、今や3箇所程しか灯っていないかった。

ナタリアはバイクのエンジンを切るとモヒートの缶をフィーナに1つ放り、次の缶を片手で器用に開けた。

受け取ったフィーナも肩をすくめながら開けた。

まあ、シラフで話せるような話題じゃなさそうなものね。

私は飲んでる場合じゃなさそうだけど。

第2話

仕事を終えた後、ナタリアはついついとフィーナの肩を突いて外に出て行った。

フィーナは自分のハーレーの鍵と財布を手に立ち上がった。

フィーナの予想に反し、ナタリアはキッチン「トラファルガー」ではなく酒屋に向かった。

そして缶入りモヒートを一ダースと細巻き煙草を一カートン買い、ここへと向かったのである。

それにしても、とフィーナは思った。

ナタリアが酒に頼り、人目を避けるって余程よね。

クシャツ!

ナタリアは一缶目を一気に飲み干すと、アルミの缶を握りつぶした。

怒ってるというより勇気が出ない自分に困っている感じだ。

これは助走が必要みたいね。

「ボス」

「・・・」

「昼の答えですけど、NOです。関係が続いた男は居ませんよ」

「それは、あー、えっと、続けたくなかったの・・・かしら?」

「んー・・・」

フィーナは少し目を瞑って考えたが、

「昔は1つの港にそんなに長居しませんでしたから、続けたいと考える暇が無かったですね」

「それは深海棲艦になってから、よね?」

「その前にそんな事に気を回す余裕ありましたか?」

「ごめん。ないわ」

昔・・・か。色々あったわね。

2缶目を開けながらナタリアは海原を見つめた。

そう。

ワルキューレは今でこそ長らくこの港町に留まっているが、ナタリアは以前ファツゾに向かって

「ほとぼりが冷めるまで、久しぶりにナポリ辺りで過ごすのも悪くないと思つてね」

と言つた事を覚えているだろうか。

ワルキューレを始めた時からナタリア達はここに居た訳ではない。

かつてのナタリア達は海原を回遊しては艦娘や軍閥と戦い、懐に余裕が出来るると諸国を彷徨つていた。

この港町にやってきたのは全くの偶然だったし、長居するつもりも無かつた。

食事をした店から通りに出た途端、ナタリアはかばんを持った紳士とぶつかつてしまった。

反動で尻餅をついてしまう。

「い、痛あ・・・なんなのよお?」

ぶつかった紳士も尻餅をついたが、そのままナタリアに這い寄ると真剣な目で言つた。

「ア、アンター!頼まれてくれんかね?」

「えっ?何を?」

「このカバンをロスアンジェルスマまで届けて欲しい!この通り!」

ふと通りを見ると、町の人間が遠巻きにこちらを伺っている。

だが、誰もがその紳士と係わり合いにならないようにしているのがすぐに解つた。

そしてこのたつた一言で、町の人がそうする理由も解つた。

かつてであれば、太平洋で繋がれたロスと日本はメジャーな航路だった。

だが、海底国軍が太平洋ハワイ沖に自陣を構えた事で太平洋は封鎖されてしまった。

今、日本とロスを結ぶには地球を西回りで向かわねばならず、あまりにも遠距離過ぎる。

道中のリスクを鑑みれば引き受けるのは余程の阿呆である。

あまり航路を気にしないナタリア達でさえ太平洋だけは近づかないようにしていたのである。

「ふーん・アメリカねえ」

「頼む。この町なら誰か引き受けてくれると聞いてたが、誰一人承知してくれん」

ナタリアはこんな事をしてみるのも良いかと思った。

自分達は戦艦だが、カバン1つ運ぶ位造作も無い。

そしていい加減、今の生活にも飽きていた。

付き従う部下と共に食い扶持に困らないのならそれもいい。そう。

ナタリア達ワルキューレは全員レ級で構成されている。

レ級は戦艦であり、空母であり、雷巡である。

そう言えるほど兵装選択性は柔軟で、防御システムは強固で、最高速は高く、超長距離を航続可能な燃料積載性を誇る。

対応出来ない艦種は居らず、文字通り万能艦と呼ぶにふさわしい多目的艦装が特徴である。

だが、深海棲艦が全てレ級に置き換わらなかったのは2つの理由がある。

1つは艦装を使いこなす為に船魂に求められる資質。

もう1つは運用コスト。

この2つがどちらも極めて高い事である。

下手な船魂では艦装を起動する事さえ出来ず、1戦交えれば吐き気がするくらいの資源を消費する。

どちらも上級になるほど指数関数的に高くなる。

flagship級ともなれば1体で平均的な鎮守府の1つや2つは易々と火の海に出来る。

代わりにその艦装の操作は極めて優秀な船魂でさえ難儀するし、小規模な鎮守府が運用出来る程の資源を消費する。

コストパフォーマンスは決して悪くないのだが、レ級が何体も狭い海域に留まれば海底資源が払底してしまう。

弱小軍閥や貧弱な海底資源ではノーマルのレ級1体さえ運用出来

ない。

ワルキューレは全員 flagship 級であり、そのコストを賄う
ナタリアの苦労は大変な物があったのである。

「ギヤラは幾らくくれるのかしら？」

紳士は懐から小切手を4枚取り出した。

「これだ。全部差し上げる！」

ナタリアは手渡された小切手の金額を見てぞくりとした。

4枚合計で1億コイン。

全員で全ての兵装を買い替え、弾薬や燃料を0から完全補給しても
まだ余る。

そんな必要は無いし、これまでの生活レベルなら数年は大丈夫だろ
う。

紳士はナタリアの手を強く握った。

「もう本当に、これで全部だ。頼む。どうしても、届けて欲しいの
だ・・・」

「・・・ちよつと待つて。期日は？」

「3週間以内だ」

ナタリアは唸った。

そりや町の連中が引き受けない筈だ。

太平洋の最短航路を通れた時代ならば、鈍足な貨物船であつても口
スと日本はおよそ2週間。

紳士のオーダーは妥当といえた。

だが今は、通れない。

馬鹿正直にスエズを經由し、米国東海岸から陸送すればナタリア達
でさえ到底3週間では間に合わない。

シベリア鉄道等の陸路は脱走艦娘や深海棲艦達がパスポートを
持つていない為、国境で捕まる恐れがあり使えない。

逆に紳士はパスポートは持っているが、日本を出ようにも海を渡る
事が出来ない。

ナタリアは出来るだけ明確に問題点を説明しようとした。

「ええと、今は太平洋が通れないの。地球を西方向に行く事になるか

「最短でも2ヶ月はかかるわよ？」

「何度もその話は聞いた。だがそれじゃ間に合わない」

そっか、そうよね。

ナタリアは状況を理解した。

1億コインは大金であり、皆引き受けたいのは山々だ。

だが、それと引き換えに太平洋の藻屑になりたくはない。

つまり落とすどころがないのである。

第3話

ナタリアは真っ直ぐ紳士を見ながら訊ねた。

「どうしてそこまで急ぐの？」

紳士は眉間にシワを寄せながら答えた。

「中身は肝臓病の新薬だ。ロスに居るわしの娘の手術に必要なんだ」

「・・・」

「娘の容態は刻一刻と悪化している。3週間は手術出来るリミットなんだ」

「・・・」

「頼む・・・助けてくれ・・・頼・・・」

その時、紳士は後ろから蹴り上げられた。

「がはっ！」

「いーかげんにしろよジジイ！小切手だけ置いてさっさと町を出ていきな！」

「そーよ、お金はアタシ達が有意義に使ってあげるわよう」

「寝言は寝て言いなよ〜？きやはははっ」

ナタリアが見上げると、制服を着崩した艦娘が3人。

身なりにしろ言葉の荒さにしろ、人間を足蹴にした事にしろ。

到底鎮守府に所属してるとは思えない。

ナタリアは目を細めた。堕ちた逃亡兵か。

スツ。

ナタリアの脇にフィーナ、反対側にミレーナが立つ。

二人とも怒気を孕む気配を漂わせている。

ナタリアはそつと紳士を自分達の後ろに導き、カバンを受け取ると立ち上がった。

そのまま艦娘達の方を向く。

「この件はうちが引き受けるの。邪魔しないでくれる？」

「ハン！出来る筈無いわよ。どうせ小切手持ってドロンでしょ？引つ込んでろオバサン！」

ナタリアの頬がピクリと動く。

「・・・分際をわきまえろ、駆逐艦」

「ハー?! あんた何様だつていうのよ! ただの人間だったら殺すわよ!」

そう言いながら艀装を、そして兵装を展開したのである。

パシヤツ・・・

フローラがグラスに汲んできた海水を、そっとナタリアの足元にかける。

そして、自分達にも。

通りに行く人が散り散りに逃げる中、艦娘達は4人がレ級の姿に戻る様を呆然と見ていたが、

「ちよつ! あ、ああ、相手悪過ぎ!」

「行こう? ねえ行こうよ! 早く!」

後ろの二人はそう言ったが、紳士を蹴った艦娘はナタリアに中指を立てた。

「こんな街中で撃てる筈無いわ! やれるもんならやってみなさいよ!」

ナタリアはニイと笑った。

「殺ツテアゲルワヨ」

ミレーナとフローラが素早く紳士の盾となり、フィーナが紳士の耳を塞いだ瞬間。

ナタリアの主砲が火を噴き、艦娘達は消し飛び、通りを挟んだ向かいのビルは崩れ去った。

砲撃の衝撃波は周囲の家や店のガラスを粉々に砕いたという。

轟音が止んだ後、フィーナはそっと耳から手を離し、紳士に尋ねた。

「配達先ノ詳細ト、引キ渡シ方法ヲ伺ツテ良イカシラ?」

紳士は呆然とした様子だった。

「き、君達は・・・深海棲艦だったのか」

人の姿に戻ったナタリアは肩をすくめた。

「お気に召さなければ返しますよ?」

紳士は首を振った。

「君達には今も助けてもらったばかりだ。認識を改める必要があると思っただけだよ」

そして紙を一枚取り出し、頭を深々と下げながら言った。

「届け先の住所、相手の名前、そして最後が私の連絡先だ。よろしく頼む」

ナタリアはメモを見て頷いた後、

「ミレーナ、私達が帰ってくるまでホテルでこの人の身边を警護。やれるわね？」

「はい」

紳士は首を振った。

「いや、車で来てるから自分で帰れる。家で吉報を待ってるよ」

「それなら車まで送りますわ」

「・・・ありがとう。頼めるかな？少し・・・怖い」

頷くナタリアの横顔をみて、フィーナはふふっと笑った。

無頼者として放浪するより、仕事してる方がナタリアには似合ってる。

難を逃れた町の人々は噂を交えつつ賭けをした。

だが、どんな最期を遂げるかという話題ばかり。

期限内に荷物を届けるといふ選択肢に賭ける者は誰も居なかったという。

そして。

「フィーナ、進路ト速度ハ間違イナイ？」

「エエ、ボス。コノママ45ノットヲ維持！」

「ミレーナ、冰山ハ？」

「航路1海里以内ニ脅威トナル塊ハアリマセン」

「フローラ、敵ハ居ナイ？」

「航空機、艦娘、深海棲艦、イズレモ反応ナシ」

「ヨシ。警戒怠ルンジャナイヨ」

「ハイ！」

ナタリア達が取った航路。

それは日本から北上し、アリューシャン列島沿いにベーリング海とアラスカ湾を超高速で突破するものだった。

全員で海図を睨みながら丸1日検討して導いた結論だった。

太平洋航路の最短に比べればだいぶ航路は伸びるのに、どうしてこの航路を選んだのか。

消去法で行くとこれしか無かったのである。

まず、最短の太平洋航路は海底国軍海域のど真ん中であり、見つければ数十万体に死ぬまで追い回されるので論外。

次に、地球を西に回るルートや南極海経由の迂回ルートは期限の関係上不可能だった。

シベリアとアラスカを経由する陸路主体のルートはパスポートより真ん中に横たわるベーリング海が問題だ。

極低温での艀装運用ノウハウは、それこそ北極圏軍閥のような特殊な深海棲艦しか身に着けていない。

レ級といえど艀装の生命維持装置が停止すれば氷のオブジェになるしかない。

よって却下とした。

通常を選択肢はここまでであり、ゆえに誰一人引き受けなかった。

ナタリア達が見つけたアリューシャン列島は、海底国軍と北極圏軍閥が睨みあう海境が続いている。

戦略上の重要な海境ゆえ、互いに選りすぐりの海峡警備部隊を隙間無く展開している。

これが街で、互いに銃を構え引き金に指をかけているギャング同士なら、その銃と銃の間を通るのは愚か者である。

だが、アリューシャン列島を挟んで引き金に指をかけているのは世界屈指の大軍閥同士。

下手に砲撃すれば取り返しをつかない大戦争に発展するリスクを理解し、引き止めるインテリジェンスも有している。

その証拠として互いに「無駄な間違い」を避ける為、その空白海域は類を見ないほど幅広く取られている。

ナタリア達が行くとしているのはまさにそこだった。

ただ、その空白海域は曲者でもあった。

特にこの時期は誰が好き好んでこんな所へ行くかという程、荒れた海の様相を呈するらしい。

元々変則的な浅瀬が多数あり、それがもたらす不規則な潮流に氷の塊が彷徨う極めて危険な海域。

空白海域に選ばれるのも納得だが、その油断を逆手に取れば突破出来る。ナタリア達は読んだのである。

第4話

読みは敵の出方という意味では的中した。

今までにおいて、ナタリア達は出航直後に近海で喧嘩を売ってきた無頼の艦隊を瞬殺しただけだった。

一方で、自然は予想通りとはいかなかった。

例年より多い流水が群れをなして海中海上に存在した為、レーダー式航行制御システムが無力化してしまった。

艦載機は見つかる危険があつて使えず、進路判断が目視のみとなり、推進制御も手動で行う他なかった。

しかし高緯度ゆえ、真冬のこの時期は日照時間が8時間程度しかなく、夜間に明かりを点ければ格好の標的となる。

計画では、1日平均15ノットで進む必要があつた。

進める時間が8時間しか無い以上、その間はずっと45ノット以上を維持しなければならない。

とはいえ。

毎日8時間もの間、氷の中で45ノットでの超高速移動を手動で続けるなど、正気の沙汰ではない。

ナタリア達はそれをこなして来たが、反動として心身の負担はすさまじかった。

しかし、日没後も氷に注意を払い続けねばならない。

高波がぶち当たった氷山がミシミシときししみ、流水が瓦解する不気味な音をたてる暗闇。

生命維持装置の取水口が凍りつかないよう、夜中に何度も付着した氷を叩き割る必要があつた。

日中は全神経を集中し、判断を1つたりとも誤る事が許されないのに夜は満身に眠る事も出来ない。

おまけに昼夜問わず凍みこんでくる寒さは判断力どころか意識すら薄れさせていく。

そんな死の海の中で、ナタリア達は依頼後19日目の昼を迎えよう

としていた。

刻限まであと2日と12時間。氷の海はもうすぐ抜けられる。

その後は僻地とはいえ海底国軍の域内ゆえ、海底国軍の深海棲艦と遭遇する確率が飛躍的に上昇する。

ゆえに常時20ノット程度で移動し、海底国軍に見つかった場合は最大戦速の48ノットで振り切る。

そういう計画だったのだが、異変は再び起きてしまったのである。

ゴン・ゴゴン！ガリガリガリ！

フロローラの足元で嫌な音がしたかと思うと、フロローラがぐくりと左に傾いた。

「ウアッ！」

「ドウシター！」

「左舷浮上装置が機能停止！氷ヲ吸イ込ンデ破損シタヨウデス。待機系モ・・起動出来マセン」

「ミレーナ！フロローラヲ支エテ。コンナ海水ヲ注水シタラ凍死スルワ」

「ハイ！」

「ゴメン・・モウ少シダト思ツテ油断シタ」

フィーナは苦悶の表情を浮かべた。

重大な故障を検知した場合、艦装は安全装置が作動し、速度上限を10ノットにまで下げてしまう。

それでは期限内にたどり着く事は困難だ。

フィーナはナタリアに訊ねた。

「ボス・・2小队ニ分カレマスカ？」

フィーナの問いは、フロローラとミレーナを切り離し、自分とナタリアだけで続行するかという事だった。

フロローラは俯いた。

それは任務続行には不可欠の選択だと自分も思う。

更に言えば、今後を考えればミレーナはナタリア達に随伴した方が良いので、温情のある措置ともいえる。

しかし、この状態で海底国軍に見つかった場合、生き残れるだろう

か？

数十万の軍勢に囲まれる未来を想像すると震えが止まらなかった。だがナタリアはふふつと笑うと、フィーナにデコピンを喰らわせた。

「痛ッ！」

「心配ハモットモダケド、ミツシヨンノ為ニ最高ノ部下ヲ見捨テルナシテアリエナイワ」

「・・・」

「上陸地点ヲ変更。ココカラ最モ近い米国西海岸ニスルト、ドコ？」

「・・・シアトル付近デス。半日アレバ着ケマス」

「目的地マデノ距離ハ？」

「陸路デ約2000kmデス」

ナタリアはフンと笑った。

「2000kmヲ2日。面白クナツテキタワネ！楽シム用意ハ良イカ！才前達！」

「ハイ！」

フィーナの予想通り、4人は20日目の0000時に小さな漁港へと到達した。

長きに渡る海戦で、かつては美しかったであろう漁港もすっかり荒廃し、無人と化していた。

上陸した4人は冬の装いに化け、町の通りを歩いていた。

ナタリアが口を開いた。

「残り48時間弱。ロスまでの移動手段を探すわよ」

「機動力があつて、速度が出せて、長距離の移動が可能なもの・・・」

「現金を調達してグレイハウンドに乗る手もありますが、運行ルートや所要時間が心配ですね・・・」

「でも、あまり探す時間は・・・あ」

ふと4人の目に止まったもの。

それは荒廃した町並みに不思議と似合う、原色のネオンがギラギラ輝くバーだった。

周囲ではいかにも荒くれ者という風情の男達と、ピカピカに輝く

ハーレーが整然と並んでいた。

フィーナが頷いた。

「大型バイク・・・いいですね。ほぼ条件を満たします」

ナタリアが微笑みながら言った。

「燃料は満タンに。面倒だから殺さない事。現金は出来れば確保。60分後に上陸した港に集合。行動開始」

3人は頷き、ミレーナが1台のバイクにそっと手を当てながら、近づいてきた男に声をかけた。

「ハァーイ♪これ貴方のバイク？後ろに乗せてくれないかしら」

ミレーナを上から下まで舐めるように見た男は口ひげを舐めながら言った。

「へっへえ、良いぜ。乗んな。ホテルへ直行しようぜえ」

ナタリア達もそれぞれ男達に声をかけていった。

少し後。安宿の一室で。

シーツで全身をぐるぐる巻きにされた男が床に転がされていた。

「ムーツ！ム！ムフー！ムムムムー!!」

ナタリアはシーツの上からつつつと男の腕をなぞりながら言った。

「騒ぐと腕へし折るわよ。それとも首の骨の方がお望みかしら？」

「・・・」

ナタリアはバイクのキーをくるくると回しながら、部屋の玄関で振り向いた。

「じゃあねミイラ男さん。100ドルだけ置いてくわ」

ドドドドド・・・ドツドツドツドツ・・・

ナタリア達はそれぞれバイクに乗り、慎重に操っていた。

短時間、男達の後ろに乗っただけでは右側通行である事を思い出し、操作方法をおさらいする位しか出来なかった。

そしてパトカー近辺で響いた銃声に、アメリカは警官も含めて容易に銃を撃つ国である事を実感した。

ゆえにナタリア達は街中では大人しく走り、郊外や砂漠でも流れに従う以上の速度は出さないようにした。

明け方、ふと目に留まったグリーンの道路標識は、シアトルの駅が近い事を告げていた。

「念の為、列車とバスを確認しとくか・早く行けるかもしれないし」
ナタリアは手で合図を送ると、ハイウェイを降りて行った。

第5話

シアトルの駅を出てきた4人の足取りは重く、フィーナは溜息混じりに言った。

「日本の運行精度がおかしいのか、こっちがおかしいのか・・・」
ナタリアは肩をすくめた。

「世界標準はどちらかというとこつちよ」

フロローラがつぶやいた。

「アムトラックのLA行きは修理中、完了予定は不明」

ミレーナが続けた。

「グレイハウンドは1日1便の筈だけど20時間遅延中、更にアムトラックからの乗り換え客で長蛇の列」

フィーナはうんざりした声を出した。

「そもそも20時間も来ない事を遅延の一言で済ませるなんて：事故にでも遭ったんじゃないのかしら」

ナタリアはバイクのキーをくるりと回した。

「信じられないものはアテにしない。自力で行くわよ」

3人は頷いた。

こうして他に手段がなかった為、最初は仕方なく乗り続けたのだが。

4人は次第にハーレー特有の操縦感覚に慣れ、その音や鼓動を楽しめるようになった。

ナタリアは思った。

大型バイクって面白いわね。でもこのオーナーのセンスは最低。

フィーナのバイクが一番良いけど、もうちよつと手を加えたいわね。

日本に帰ったら1台買おうかしら。

こうして途中で短い睡眠を挟みつつ、期限当日の昼過ぎに4人は指定場所へと辿り着いたのである。

フィーナはメモを見ながら言った。

「ロスアンジェルズ市立病院・住所も間違いないです、ボス」
「リミット10時間前か。オーケイ、じゃあジョージ医師に渡してきましょう」

「・・ありがとうございます。製薬会社向けの受領書にサインしました」

「確かに」

「私は直ちに緊急手術に入ります。もはや一刻の猶予も無いので」
「・・間に合いそうですか？」

「最善を尽くします。皆様には立会いをお願いします。こちらの書類にサインを」

「はい？」

「手術の立会いです。ご親戚の方と伺ってますが？」

医師が首を傾げたので、ナタリアは肩をすくめた。

しようがない。ここでゴネてファイにする必要はない。

「解りました」

そして日が暮れ、間もなく日を越える頃。

手術室の廊下でナタリアは毒ついた。

「・・こんなに長いなんて、聞いてないわ」

「そうですね、ボス。もうすぐ12時間です」

手術室の自動ドアが開いたので二人は立ち上がったが、

「執刀医の交代です。やっと前半が終わりました」

という一言にがくりと座り込んだ。

ふと見ると、フローラとミレーナは互いを支えあうような格好で眠っていた。

無理もない。

既に疲労困憊だったのに、2000kmもの陸路を不慣れなバイクで移動したのだから。

ナタリアはフィーナに言った。

「あんたも少し寝ておきなさい。後で交代してくれば良いから」

「ボスはそう言って自分だけ寝ませんよね？」

「・・・」

「ボスこそ少し休んでください。私、もう少し起きていられますから」
フィーナが微笑みながらそう返した時、ナタリアは強烈な眠気に襲われた。

「・・・ごめん。30分で・・・起こし・・・て」

そういうと椅子の背にもたれ、あつという間に眠りについた。

病院の椅子は決して心地良いものではなかったが、眠る事で体力は回復した。

目を覚ましたナタリアは顔を赤らめてフィーナをなじった。

「30分で起こしてって言ったじゃない。何で朝になってるのよ」

「手術が続いてるのは・・・明らかでしたので・・・」

「ほら、私起きたから寝なさいよフィーナ。もう限界でしょ?」

「・・・すう・・・すう」

「早っ・・・あつ・・・もう、アタシの肩を枕にしないでよ」

ナタリアはそう言ったものの、フィーナが起きるまでそのまま居たそうである。

ちなみにフローラとミレーナはずっと眠り続けていたそうである。

結局、手術は丸1日に及び、術後の検査を終えたジョージ医師はナタリアに告げた。

「手術は成功しました。容体も安定しています」

ナタリアは微笑みながらも医師に肩をすくめた。

「それを最も聞きたがってる人が日本に居るの。状況を書類にまとめてくれないかしら?」

「オーライ、お安い御用です」

病院の公衆電話で、ナタリアは手紙を見ながら紳士に状況を説明していた。

指定期限に間に合った事、手術に立ち会った事、手術は成功した事、容体が安定している事。

「証拠として医師からの説明書類と製薬会社向けの受領書を預かってるわ」

電話の先でも明らかに泣いている様子が伝わってきた。

「ありがとう。ありがとう。君達に必ず報いよう。気をつけて帰ってきてくれ」

「それなんだけど」

「なんだね？」

「仲間の一人の装置が壊れてしまったの」

「私に何か出来ないか？」

「この小切手、もう使えるのかしら？」

「もちろんだ。いつでも使える」

「まだ配達した証拠を渡してないけど、1枚使わせてくれないかしら」

「解った。君達を信じる」

「ありがとう」

ナタリアは銀行で小切手を換金すると、道具屋や材料屋を巡った。

翌日。

小さなレンタル式の作業小屋の中でフローラがミレーナの装置を見ながら一生懸命自分の艀装を直していた。

「ごめんミレーナ、ちよつと取水部の構造見せて」

「いいよー」

「ここ・・・か。インチネジのタップがあつて助かったわあ」

「それ、日本に持つて帰ったら？」

「ええ。そうするわ。インチ工具は手に入りにくいのよね」

「なんで深海棲艦の艀装って単位系がインチなのかしらね・・・」

そこへナタリアとフィーナが両手に袋を抱えて返ってきた。

「お待たせ、食べ物買ってきたわよ。サイズのスケールが違うわねえ」

「オレンジジュースが1ガロン入りとか信じられないです」

「ところでボス」

「なに？」

「帰り・・・どうするんですか？」

「当然東回りで帰るわよ？フロリダまではバイク、後は大西洋、地中海、インド洋、南シナ海、そんなルートね」

「ああ良いですね。暖かい海をのんびり旅したいです」

「でしょ。帰りは期限決まってるし、適当に小さな港で補給すれば

バレないでしょ」

「途中、支配的な軍閥の居ない空白海域も混ざってますが・・・」

「その辺りの連中はこっちが仕掛けなきや来ないわよ。イカレポンチの海底国軍じゃあるまいし」

「まあそうですね。東シナ海から日本の近海はどうします？艦娘達が出没しますけど」

「戦闘は避けるけど、遭遇した艦娘達が穏便に済ませてくれないなら鎮守府ごと潰すわよ？」

「なるほど、いつも通りですね」

こうして、依頼を受けてから3ヶ月後、ワルキューレの面々は港町に凱旋したのである。

第6話

連絡を受けた紳士は港でナタリア達を待っていた。

「よく帰ってきてくれた！おかえり！ありがとう！ありがとう！」

「任務完了いたしました。こちらが医師の書いた手紙と書類一式です」

「ああ。娘から電話も来ているよ。まもなく退院出来るそうだ。遠路、よく無事で帰ってきてくれた」

だがナタリアは、出発前に比べ、紳士に対する町の人間の態度が異なる事に気がついた。

妙に擦り寄ってる感じがするし、周囲には護衛らしき姿がある。

「ところで、あなたは何者なの？」

紳士はにこりと微笑むと

「わしか？この町の町長を始めたよ。先月からな」

「・・・先月から？」

「ああ。他に誰も立候補者がおらんかったから無投票当選だった。はっはっはー！」

「なんだってこんな荒れた町の町長なんか・・・」

「わしは今回、君達深海棲艦に助けられた。御礼というほどではないが・・・」

「？」

「この町では深海棲艦狩りは一切させません。約束しよう」

「・・・えっ？」

「君達がのんびり過ごせる町になるまで、わしは町長として頑張るぞ！」

「では、微力ながらお手伝いいたしますわ」

ナタリアと町長は笑って頷きあった。

ナタリア達が太平洋横断を成功させた。

この町では深海棲艦狩りが行われなくなる。

二つのニュースは瞬く間に町を駆け巡った。

ナタリア達のおかげだと街に居た深海棲艦達は喜び、地上組にも知らされた。

だが、ナタリアが消し去った3人組とつるんでいた艦娘勢は舌を打った。

あらゆる意味で面白くない。

それから3年が過ぎた頃。

町はその歴史上、最悪の治安状態になりつつあった。
なぜか。

艦娘と深海棲艦、それぞれの海運業者が依頼者の争奪戦を繰り広げたからである。

会社を興したからといってすぐ収入に繋がる筈もない。

海運業は遙か昔に大手が撤退した為、そもそも現時点で開業している者が居る事自体知られていない。

それでも噂を頼りにやってきた依頼者は町に足を踏み入れた途端、大変なトラブルに見舞われる。

「ねえ、貴方見ない顔ね、海運の依頼？」

「えっ、ああはいそうで・・・」

「ああダメダメ、そいつんとこサービス悪いよ、うちの方が安いよ」「へっ？」

「ちよっと、今うちと話してるのよ！」

「契約するとは言ってなかったじゃない！」

また、契約欲しさに説明内容にも誇張が混じる。

「うちなら世界中どの海域でも3週間以内に届けるよ！」

「へー、それは」

「こつちなら2週間よ！こいつらみたいにノロマじゃないわ！」

「ええっ?!」

「嘘言うな！南シナ海行けないくせに！」

「アンタの航続距離だってインドまで行けないでしょ！」

「あの・・・行き先は・・・」

海運業者同士が喧嘩ばかりしては、依頼人は自分の依頼内容さ

え説明出来ない。

だが、溜息をついて立ち上がろうとすると一気に態度が豹変する。

「アンタ、どこ行こうってのよ?」

「え、いや、他の業者さんも見て回ろうかと」

「座れ、人間」

「えっ?」

「座れ。逆らうと殺すよ?」

「・・・」

町長は警察署長と幾度も話し合っていたが、巡回を強化する以外の妙案は出なかった。

そもそもそれほど大きな町でもないから、警察の予算も人でも限られている。

海運業者同士のいさかいで暴力事件が日常化していた。

さらには食い詰めた海運業者が強盗に鞍替えし、治安の悪化に拍車をかけていた。

「弾け始めたポップコーンは、元の火を消さねば止まらないぞ?」

署長の言葉に町長はジト目で返した。

「それはダメだと言った筈だ。海運業者の1つにわしの娘は救われたんだ」

「だが、最近は依頼人を巻き添えにした傷害事件も起きている」

「・・・」

「アンタが頑張ってるのは俺も知ってる。理由も知ってる。だが連中は所詮は逃亡艦娘と深海棲艦だ」

「・・・」

「殺人まで起きたら、さすがに俺の力じゃ隠しきれんぞ?」

「解っている・解っているが・・・」

「考えといてくれよ。多分そう時間は無い。連中以外の町が平和なうちにな」

署長が出て行くと、町長は深い溜息をついた。

ナタリアは深海棲艦達を良く抑えてくれているというのに、もうどうしようもないのか?

どうしたら共存出来る？いや、いつそ・

コンコンコン

「はい」

入ってきたのは秘書だった。

「・・・町長、今夜の予定ですが」

「ああ」

「龍田会の会長殿が主催する夕食会に参加する予定となっております」

「ああ・・・確か雷会から龍田会に変わるとかいう奴か」

町長の浮かぬ顔を見て秘書は口を開いた。

「ええ。我が町は幅広く関連企業がありますので：出席を断るのは難しいかと」

「いや、断るんじゃない、相談がしたいんだ」

「相談、ですか？」

「例の海運業者の件だよ」

「龍田会は現役の海軍連中ですよ？そんな事を知らせたら討伐に来るのでは？」

「いや、彼女達は真っ白ではない。そこを踏まえて腹を割って話したい」

秘書は頷いた。

「解りました。ではその旨先方に連絡しておきます。場所等も手配しておきます」

「急ですまないが、頼む」

その晩。

「ゆっくりお話出来る時間まで作って頂き、感謝いたします」

「とんでもない。これからもよろしくお願いいたします」

「若輩者ですが、先代の雷に負けぬよう頑張りたいと思います。こちらこそよろしく願います」

「さあさあ、堅苦しい挨拶はこれくらいで。ウイスキーでも如何ですか？」

「ああ、松亀55年なんてよろしいんですか？」

「もちろん。ロックで如何ですか？」

「ありがとうございます」

町長と龍田は商工会議所の応接室で、にこやかに向かい合って座った。

第7話

龍田会の前身たる雷会。

大本営の雷が率いてきた大本営の裏の顔である。

今夜の夕食会は龍田が雷会の運営を雷から引き継ぐ事を伝える為の挨拶回りである。

もつとも、雷も名誉会長職にあるので、引き続き大本営の強い影響下に置かれる事は変わりないのだが。

「・・・ところで龍田様」

「何でしょうか？」

「こちらの灰色のご相談をする事は、可能でしょうか？」

灰色の相談。

雷会がグレーゾーン活動を含む事を承知の上で、町は今までずっと協力してきた。

それは都会から遠く離れたこの港町が過疎化しない為である。

仕事の受発注、お金や物資の授受は互恵関係にあった。

だが、雷はこの町にそれ以上の借りがあった。

それは非合法的な要求への協力と、世間からの隠匿工作である。

例えば隠密討伐事案で傷ついた艦娘の修理をする為、民間のドックを提供し、その事実を隠す事。

マスコミに嗅ぎ付けられると非常に厄介な案件だが、町は総出で隠蔽工作に手を貸した。

これを何度か行ってきたので雷からの信頼は厚く、同時に町にとって大きな貸しだった。

龍田は目を細めた。

「なにかお困りの事がおありなんですか？」

町長は苦渋の表情をし、頷いた。

「完全なオフレコで願いたいのです。特に881研と公安には」

「深海棲艦絡みですね？良いですよ」

「では」

「・・・まあ、そうなるでしょうねえ。よく地上戦になりませんでしたねえ」

龍田はそう言って小さく頷いた。

町長は続けた。

「しかし、私は深海棲艦側の海運業者に娘の命を救ってもらった恩があります」

カロン

龍田はグラスの水をぐるりと回し、氷を眺めながら言った。

「逃亡艦娘をこちらで始末しましょうか？」

「えっ？」

「2つの勢力が拮抗すれば火花が散りますが、不均衡になれば収まります」

「・・・」

「町長さんは深海棲艦側に肩入れしたい。ならば逃亡艦娘側が小さくなればいい」

「・・・」

「人間の警察や機動隊では武装した艦娘や深海棲艦と対峙する事は不可能です」

「・・・ええ」

「ですが私達は現役の海軍ですし、それなりに非合法のミッションもこなしてきています」

「・・・逃亡者とはいえ、艦娘同士で戦うのは辛くありませんか？」

龍田はにこりと笑った。

「ご心配なく。初めてではありませんから」

町長は躊躇った。

「頷けば今までの貸しを一掃し、更に大きな借りを作る事になるだろう。」

深海棲艦が町にはびこる事を黙認してもらうのだから。

だがそれは、アンバランス化は、将来に火種を残さないか？根本解決になるだろうか？

「・・・うふふっ、意地悪しちゃいましたね」

町長が龍田を見ると、龍田は美味しそうにウイスキーを飲み干すところだった。

「・・・ええと」

「それは最終手段として・・・じゃあこちらにお願いしちやおうかなあ」「何をですか?」

「人を一人、匿って欲しいんです」

「・・・」

「その人なら、そちらの問題を解決出来るかと思えますし」

「詳細を、伺っても?」

龍田はそつと、ボトルを指差した。

「えつと、もう一杯頂いても良いですか? 本当に美味しいので」「もちろんです」

町長はボトルの蓋を開けた。

「・・・それはまた」

「無関係の職員なら、とぼつちりは御免なので放つとくんですけど」

「匿うのは司令官殿の特命なのですか? ご友人なら・・・」

「いいえ、提督はこの件が起きた事も知りませんよ」

「・・・では?」

カロン

龍田は小さくなった氷を見つめながら、小さくはにかんだ。

「町長さんのお気持ちと、同じですよ」

「・・・恩返し?」

「ええ。提督は私が命を捧げてても良いたった一人のお方です」

「・・・」

「こんな事で余計な心労をかけさせたくないですし、それに・・・」

龍田は町長を見た。

「こちらの町は隠匿工作に関してとても信頼出来ますし」

「単に田舎過ぎてマスコミが来ないだけかもしれないかもしれませんがね」

「そんな事ないですよ、連中は暇ですからあ」

「・・・ふむ。ではその方に仲介業をお願いすれば良いのですね?」

「ええ。そうすれば依頼主は仲介屋に行けば良い」

「仲介屋が依頼に添って立案し、必要な業者を選定し、業者にギャラを支払う」

「ルールに従わない業者は処分という事で」

「それなら業者の増減があっても抑止力は維持されますな。なるほど」

「私達は隠匿先が見つかる、町長さんはお悩みが解消される」

「万が一、運用に失敗した場合は・・・」

「私どもが責任を持って、逃亡艦娘達の始末を行います」

町長は龍田を見た。

龍田は頬を染めてほろ酔いという感じだったが、嘘ではないと踏んだ。

「・・・ではよろしくお願いします。その方のお名前は？」

「テッドと、呼んであげて下さい」

「テッド？外国の方ですか？」

「本名は別にありますけど、万が一にも危険に晒す訳には行かないので」

町長は頷いた。

証人隠匿プログラムでも、関係者に証人の本名は漏らさない。

それは情報を売り渡す不心得者に渡らないよう、内部から気をつけねばならないからだ。

つまり龍田は、そういう事も熟知している、という事になる。

「さすが、雷会を引き継がれるお方だ。我々も安心です」

「それほどでも」

「早速準備を始めますが、テッド様はいつ頃いらっしゃるのでしょうか？」

「諸準備があるので3週間後でよろしいですか？」

「解りました。テッドさんへの説明はお願いしても？」

「勿論です」

町長と龍田は固い握手を交わし、部屋のドアを開けると蒼白になった秘書が立っていた。

「・・・どうした？」

「ついに、依頼人に犠牲者が出ました。町長」

龍田はぐるぐると腕を回しながら言った。

「日が昇る前に、夜露は払っておいた方が良いでしょう」

「お願い、出来ますか？」

「もちろんです。状況をまとめて頂きたいのと、すみませんが宿を手配頂けますか？工作の準備をしたいので」

町長は秘書にいった。

「署長はどこだ？」

「下でお待ちです」

「よし。では先に龍田様と引き合わせておきなさい。私も宿を確保したらすぐに行く」

第8話

「それにしても、恐ろしく都合の良い話だなあ」

龍田は町長との話を説明し、署長は状況を説明した。

その上での一言である。

署長は龍田を見つめながら続けた。

「被疑者の艦娘を討てば貸し借りはそちらに有利な形で進められる。実に申し分ないタイミングだ」

龍田は署長を見つつ目を細めた。

「我々が依頼人を殺すよう、その逃亡艦娘をけしかけたとでも？」

「相当なタマだよな、アンタ」

「女ですからタマは無いですよ？」

「うんざりするほど背負ってるだろうに、とびきりキナ臭い奴を。あ

あ、それと・・・」

「・・・」

「例のマルムスは泳がせてる最中でな。連中のヤサには秘聴も仕掛けてる。誰と電話したかも知ってるよ」

マルムスとは逃亡艦娘の隠語であり、ヤサは事務所、秘聴とは盗聴の意味である。

龍田は微笑んだが、うっすらと頬に緊張が走っていた。

「・・・町長にご進言なさいますか？」

「いや。あのお人良しは耐えきれんし、俺達としてもマルムスの処理が面倒なのは確かなんだ」

「・・・」

「第一アンタの諭え話に激昂して街中でお六にするなんて愚の骨頂だ。どんだけ目があると思ってるやがる」

お六は死体、目は目撃者という事である。

龍田は署長の意見に頷きながらも、慎重に言葉を紡いだ。

「・・・では、署長さんの胸に仕舞っておいて頂ける、という事ですね？」

「そつちが恩に着せないなら俺達も諭え話の件を忘れる。それが一番

だ。違うか？」

署長と龍田の視線が交錯した。

「・・・チャラという事で」

「解った」

互いにニツと笑って頷いた時、

「すいません。宿がなかなか見つからなくて、お待たせしました」

そう言いながら町長が部屋に入ってきた。

龍田は町長に柔和な笑みを送った。

「犯人は逃亡中ですが、どこにいるかの目星はついてるそうですよ」

署長は肩をすくめた。

「B17埠頭の奥だ。解るだろ？」

町長は顔をしかめた。

「チームメリッサ・最も武闘派の逃亡艦娘達か」

署長が頷いた。

「動機も簡単。依頼人が艦娘側業者の誘いを断って深海棲艦側の業者に行こうとした」

「・・・まさか」

「ああ。ワルキューレに、だ」

町長は弾かれたように立ち上がった。

「ナタリアが危ない！」

ドズン！ズズン！

町長に伝えるようにその砲撃音は鳴り響いた。

署長は窓に駆け寄り、龍田は眉をひそめてインカムをつまんだ。

砲撃の轟音は次第に数を増やし、夜空を赤く染め始めた。

ファンファンファンファン！

パトカー数台が車列をなして現場へと向かう。

その中央車両に、町長、署長、そして龍田が乗っていた。

町長は後部左側の席で指を噛んでいた。

ナタリアの事務所の方角だ。

ナタリアは無事だろうか？

自分もつと早く決断をしていれば・・・

署長は助手席でバックミラー越しに龍田を見ていた。

こいつ、こうなる事も解っていたな。海軍連中の中でもひとときわ厄介なアマだ。腹黒さは雷並みって事か。

龍田は後部右側の席で考えていた。

想定シナリオDか。憎悪は抑えられないほど強まってたって事ね。

あとはケースD aのナタリア側全滅か、D bの艦娘側全滅かのどちらか。

ただ、こうなった場合、不知火と文月はD bが95%と予想していたし、私もそう思う。

レ級4体を含む深海棲艦勢に駆逐艦と軽巡の計32隻じゃ到底勝てる筈が無い。

レ級の錬度によつては瞬殺も可能なくらいの戦力差だ。

そんな事さえ徒党を組んで不意打ちすればどうにか出来ると思うのが頭の弱い証拠だ。

龍田は小さく頷いた。

馬鹿過ぎれば生きて行けないのは戦場でも街中でもそう変わらな
い。

「こっ……これは……」

町長が呟きながら見ている先。

そこは、サウスウエストストリートと呼ばれた通りだった。

中心街とは言えなくてもストリートと言える程度には海運業者が
集まっていた地区。

深海棲艦側の拠点とも言える地区だった。

今やまともな建物は一つもなく、夥しい瓦礫の山、燃え盛る炎、そ
して数多の天に昇る光が見えるばかり。

それは艦娘の、そして深海棲艦の命が散った事を示す光だった。

警官達はストリートの入口をパトカーで封鎖し始めた。

この現場検証はどれだけ端折っても面倒な物になるだろうという
深い溜息を吐きながら。

「あ、町長待てー！」

署長の制止を振り切り、町長は瓦礫と炎の森に向かって駆け出し

た。

ワルキューレは・・ナタリアは・・

龍田はその背中を見ながら顎に手を当てた。

ケースD bのリスクは完了後もレ級達が理性を失ったままとなり、町全体を壊滅まで追い込む事だ。

それを防ぐ為、鎮守府から同行させた面々は外洋で待機している。

しかし、そのリスクを穩便に解決する方法が1つだけある。

それが町長であり、自ら行動してくれれば僥倖だ。

「上手く嵌るかしら、ね」

署長は龍田を背後からじろりと睨みつけた。

「ナタリアア！ナタリアア！」

叫びながら、走りながら。

町長はその姿を探し続けていた。

「……」

ナタリアは煙の立つ主砲を、だらりと下げていた。

フィーナ達は淡々と自らの兵装をチェックしていた。

その周囲にはル級など、生き残った深海棲艦達が疲れきった様子で地面に座っていた。

皆、粉塵を被って埃まみれであり、一樣にその表情は暗かった。

少し前。

「ナタリアさん！逃げて！逃げてください！」

砲撃を知らせに来たヲ級は、その後様子を見に通りへ出た直後に撃たれて消えた。

ワルキューレの4人は兵装を展開して即応したが、通りに住む多数の仲間が犠牲になった。

ストリート全体に炸薬榴弾で砲撃を加えた後、乗り込んできたのは艦娘達だった。

ただしチームメリッサだけではなく、チームメリッサと交友関係のある艦娘達も混じっていた。

手にした兵装は明らかに広範囲を攻撃対象とするものであり、無差別殺戮が狙いである事は明らかだった。

予定と違ったのはそれでもナタリア達の返り討ちにあって全滅してしまっただけという事だろう。

ナタリアを虚無感が包んでいた。

なぜ、我々は深海棲艦だというだけでここまで迫害されるのだ？

いや、それは愚問だ。深海棲艦の大多数は攻撃的な敵なのだ。

艦娘時代の教育内容を思い出すまでも無い。

しかし、先程までこのストリートの皆は、今日の荷を捌き、明日に備えて一生懸命仕事していた。

地上組に協力を仰ぎ、町で平和に暮らしていく為の行動方法も学んできた。

戦いを避け、働きながら暮らしたいと願う深海棲艦も移り住んできた。

人間は、町長は、約束を守ってくれた。

私達を探し出そうとする魔の気配をこの町で感じた事はなかった。

警察さえも人間と同じように接してくれた。

だからそれに応えようとしてきたのだ。

その努力の果てがこの瓦礫の山か？炎の海か？

だから艦娘は：いや、我々と一緒にひっくるめるのは良くない、か。

けれど、もう、もう何もかも、どうでも良い．．

第9話

「ナタリアっ！」

ナタリア達を見つけた町長は、息を切らしながらもナタリアの埃を払いながら言った。

「ナタリア、ナタリア。ああ良かった」

「・・・良クナイワヨ」

ナタリアは解っていた。

町長が良かったといったのは、自分達が生きていた事を指して言っているのだと。

だがこの瓦礫の山を、仲間達の死を、そんな一言で済ませたくなかった。

「イヤ、ボス、町長ハ・・・」

町長はフローラがフォローしようとするのを阻止し、頭を下げた。

「すまない。不謹慎だった。君達が心配だったんだ」

「・・・私達ハ無事。気が済んだら帰ッテ」

「ボス！ソクナ言イ方ハ！」

ミレーナがナタリアに抗議したが、町長は首を振って続けた。

「ナタリア。聞いて欲しい」

「・・・」

「こうなってしまったのは、解決策を見つけれなかったわしのせいだ」

「・・・」

「だが、もう2度と、こんな事にならないように手を打つ」

ナタリアは変わらず返事はしなかったが、町長の方に目は向けた。

その瞳は絶望の闇に塗りつぶされていた。

「聞いてくれ。以後海運業者は全員仲介役から仕事を貰う形にする。それで」

続けようとする町長を止めたのはフィーナだった。

「・・・ボスハ、才疲レデス。今夜ノトコロハ、ドウカ、才引取りヲ」

はっとした町長はナタリアの目を見てからフィーナに頭を下げた。

「…すまない。そうだ、宿を取っておくから、今夜はそこで眠りなさい」

「…良インデスカ？」

「瓦礫の中じや休む事もままならん。全部で何人かね？」

「12名デス・・スミマセン。才言葉ニ甘エマス」

「解った。宿の名刺を渡しておく。今、車を手配する」

「イエ、少シ歩キタイノデ、車ハ結構デス」

フィーナの返事にナタリアを心配する意図を察して、町長は頷いた。

「…頼んだよ」

皆が歩き去った後、町長は携帯を取り出し、宿の番号を呼び出した。「何度もすまないが、あと12人追加だ。こちらはしばらく滞在する。ああ、それで良い。急いでくれ」

翌朝。

「お食事をお持ちしました」

「ありがとうございます」

「…お布団はそのままにしておきますね」

仲居がそう言ったのは、布団の上に呆然と座っているナタリアが居たからである。

フィーナが頭を下げた。

「すみません」

「8番にぐ連絡頂ければ食器を下げにまいります。ごゆっくり」

「はい」

…トン。

襖が閉まった後、フィーナ達3人はナタリアをそつと見た。

視線に気づいたナタリアは軽く手を振った。

「貴方達は気にしないで食べなさい。私は要らないわ」

「…そもいきませんよ、ボス」

「…もう、どうでも良い。どうでも良いのよ…」

ナタリアは悲しげに目を伏せた。

サウスウエストストリートは、そのままナタリアの実績といっても

良かった。

つい先日、町で一番治安が良いと警察から褒められたばかりだった。

それはナタリアが先頭に立って、深海棲艦同士の諸事を調整してきたからである。

だからこそ依頼人も艦娘達よりこちらを頼るようになって来た。

自分達が町に戻ってきて以来、チームメリツサの連中は何かにつけて深海棲艦達に喧嘩を売ってきた。

だが徹底的に無視し、挑発に乗らないよう指導してきたのはナタリアだった。

無論、ナタリア自身、決して面白い訳ではなかった。

地上組には何度も理不尽を訴えた。艦娘を一掃しても良いかとも問うた。

だが、地上組は首を横に振った。

そんな事をすれば海軍が大挙して、町ごと消滅させる為に押し付けてくると。

昨晚の出来事は、既に大本営に届いているだろう。そう。

地上組の言う通りなら、まもなくこの町は消滅する。

ナタリアはそつと、顔を上げた。

「生き残りたければ海軍の連中が来る前に、町を後にしなさい」

「・・・ボスは？」

「私は・・・ここに残るわ」

フローラとミレーナはフィーナをそつと伺った。

昔から、ボスが煮詰まると窮地を救ってきたのはフィーナだったから。

スツ

フィーナは立ち上がり、ナタリアの真正面に対峙する位置となる朝食の席に腰を落ち着けた。

ナタリアは一瞬だけフィーナをチラリと見て、俯いた。

ミレーナとフローラは怪訝な顔でナタリアとフィーナを交互に見た。

フィーナは笑顔で言った。

「じゃ、いただきますあす」

かぱりと味噌汁の椀を開ける。

ほわりと味噌の香りが漂い、フィーナは箸で抑えながら啜り、

「んー♪あつ、ごはん♪ごはん♪」

茶碗を取り、おひつからご飯をよそい、一口。

「ごはんおいっしー♪」

ニコニコしつつもミレーナ達に小さくウインクしたフィーナ。

それを見て意図を察したミレーナとフローラはそれぞれ席につき、

食べ始めた。

「・・・この厚焼き卵、ダシが絶品」

「焼き鮭、ほわほわですねえ」

「煮物が薄味で優しい味・・・ニンジン可愛い」

リズミカルにつまんでは食べていく3人。

ついにナタリアがジト目でフィーナを睨みつけた。

「・・・ちよっと」

「あ、ミレーナ、ご飯のお代わりいる？」

ダン！

ナタリアが畳を叩いたので、ミレーナとフローラはビクリとして箸を止めた。

だがフィーナだけは平然と箸を進めている。

「フィーナ！」

ナタリアの怒鳴り声に、フィーナは今気づいたと言わんばかりに首を傾げた。

「なんででしょう？」

「あんだ・・・どうしてご飯なんか食べられるのよー！」

フィーナは静かに箸をおき、すつと息を吸った。

これからとても大事な時間だ。吞まれてはいけない。

第10話

怒りの目で睨みつけるナタリアに、フィーナはいかにも不思議だという顔で首を傾げた。

「さつき、気にしないで食べるって仰ったじゃないですか」

「そ、それは言ったけど、でも」

「私が絶食した所で誰かあの世から帰ってくるんですか？」

「帰ってこないわ、帰ってこないわよ、けど！」

「私は、艦娘共を手助けするつもりなんてありません」

「えっ・・・」

「あいつらは私達が消した3人のチンピラとつるんでた連中です」

「・・・ええ」

「私達は昨晚、連中を殲滅させた事で報復を完了しました」

「・・・」

「現時点で、連中が勝つとすれば私達が連中の悪意に飲み込まれて自暴自棄になるか、意気消沈するかです」

「・・・」

「つまり、我々さえ屈しなければ良い」

「・・・」

「それに、ボス」

「・・・なによ」

「最近ご無沙汰でしたけど、瓦礫や死体の山なんて今更何か思う事があるんですか？」

「・・・」

「一体幾つの鎮守府を肅清しました？幾つの軍閥を消しました？」

「・・・」

「死んだ敵も味方ももう数えられる数じゃないですよ」

「・・・」

「サウスウエストストリートもそのうちの一つになった。それだけです」

ミレーナは伏目がちに呟いた。

「まあ、私達は艦娘の頃から非正規戦部隊だったしね・・・」

フローラは肩をすくめた。

「正直、深海棲艦になってからのの方が楽よね・・・昨晚を含めても」

フィーナは苦笑した。

「レ級の艦装はどれだけ訓練しても飼い慣らした気がしないけどね」

ナタリアが何も答えないので、フィーナは再び箸を取り、味噌汁を啜りながら言った。

「だから私は、食べて、体力を付けて、町を再建します」

「・・・えっ？」

「別にここに海軍が来るなら他所でもいい」

「・・・」

「深海棲艦が笑ってやっていける町を作って、その中に居ます」

「・・・」

「美味しいご飯を食べて美味しいといい、良い景色を見て素敵だと言
い」

「・・・」

「そうして私達が高らかに笑っていれば、奴等はずっと負け犬です」

「・・・」

「連中の勝利に協力するなんて私は絶対にしない・・・してやるもんか
！」

パキッ

フィーナの持つ汁椀にヒビが入った時、ナタリアは溜息をついた。

「その汁椀、螺鈿細工入ってるから高いわよ？」

「うっ・・・」

「はぁーあ。ま、持つべきものは賢い部下よね。教官の言う通りだわ」

3人がナタリアを見た。

「確かに連中は私を凹ませてから殺したくてウズウズしてたし、その
為にド派手な花火を打ち上げた」

「・・・」

「でも私達は生き延び、連中は残らず塵にしてやった」

「・・・」

「私達が凹まなきや、大花火やった割には狙いは達成されず仕舞い」

「・・・」

「ただね」

ナタリアが顔を上げて真っ直ぐ見たので、フィーナは首を傾げた。

「アタシはアタシが楽しいから笑うし、アタシが美味しいと思うから美味しいという」

「・・・」

「連中は今まで始末した有象無象の1匹に過ぎない」

「・・・」

「だからこの先、連中を思い出してやる事もない」

「・・・」

「連中の影を意識しながら生きてくなんてマツピラよ」

「・・・」

「でも、私達の巻き添えになった子達は、供養してあげたいわね」

「・・・ええ」

「問題は海軍が攻め込んでくるのか、来ないのか、なんだけどね・・・」

「それは・・・」

トン・トン・トン

襖が軽く叩かれたので、フィーナは眉を顰めた。

仲居は食事が済んだら呼んでくれと言ったはずだ。

だがここは町長が手配し、人間が営む旅館。

海水は持つてるが、深海棲艦に戻って戦闘を始めるには場所が悪い。

戸惑いながら、探るような声が出てしまった。

「・・・はい」

「その海軍なんですけど、ちよつとご相談しても良いかなあ？」

「・・・はい？」

4人が顔を見合わせたとき、音も無く襖が開いた。

そこには龍田と文月、そして不知火がいた。

「・・・」

ナタリアは真正面で微笑み、きちんと正座する龍田達とどう向き合って良いか迷っていた。

まず、龍田達が尋常では無い気配を纏っている事には気がついていました。

そして折り目正しき振る舞いや服装に、現役の海軍である事は真実だろうとも思っていた。

だが、海軍ならばなぜ「相談」に来たのかがさっぱり解らなかった。自分達は完全に虚を衝かれる格好だったから、総攻撃すれば討ち取れたはずだ。

海軍はそれが民間人の所有建物だろうと深海棲艦討伐の為なら容赦しない。

この3人に少しでも脳味噌があるのなら自分達を上回る勢力で取り囲んでいる筈だ。

だが相談に行くなどというやり方はどの艦娘向けマニュアルにも無い。

それこそ非合法的な解決を図る為の非常に高度な作戦マニュアルにさえも。

ゆえに正座で応じたものの、出すべき言葉が見つからなかったのである。

龍田が静かに話し始めた。

「昨晚、町長さんから相談があったんです」

「・・・」

「町の治安が悪化していて、あなた達を護りたい。だから手を貸して欲しいと」

「いや待ってください」

ナタリアより先に音速で口を挟んだのはフィーナだった。

目を白黒させながらフィーナは続けた。

「前提がおかしいです。わ、我々は深海棲艦なんですよ?」

「存じますよ?」

「か、海軍の方が、どうして?」

「んー」

龍田は少し思案顔になったが、こくりと頷いた。

「みかんの箱に腐ったみかんが一つあると、回りはドンドン腐っちゃいます」

「・・・」

「とはいえ、腐る事そのものが世間的には絶対あつてはならない事ですよ」

「・・・」

「ゆえに、私達はあつてはならない事が最初から無かつた事にしなくてはならないんです」

「・・・」

「その始末を表立ってする訳にはいかないので、手助けしてくれる方がどうしても必要です」

「・・・」

「この町はそうした協力者の一つなんですよ」

フィーナは意味を理解し、目を細めた。

かつての我々のお仲間、か。

第11話

フィーナは自分の仮説をそつと呟いた。

「貴方がたは大本営直属の粛清部隊、ここはその補給基地・・・そういうことですか？」

龍田は微笑みつつも首を振った。

「そんな堅苦しいものじゃないんですけどね」

「・・・堅苦しい？」

「私達は腐敗鎮守府も潰しますし、必要な活動資金も自ら調達しますが、普段は鎮守府勤めです」

「・・・」

「ちなみにこの町には主に、お金を消す仕事をしてもらってます」

「・・・えっ？」

龍田は右手を握ったり開いたりしながら言った。

「握っていたお金が手を開くとアラ不思議、消えちゃいました」
「ね」

ナタリアはふつと笑った。

「ロンドリングね」

「ご名答です」

なるほどとナタリアは思った。

要は目の前にいる3人は海軍の裏の、それも相当マズい部分を司る連中だ。

粛清以外にも幅広く公に出来ない事をやっているのだろう。

確かに清濁併せ呑む事に慣れていれば、必要なら敵方を護る事も躊躇しないだろう。

CIAやGRUがよくやる手だ。

あの町長がそんな連中と手を組んでいたのは意外だったが、それにしても。

ナタリアは静かな声を発した。

「質問良いかしら？」

「どうぞ〜」

「で、町長の相談に、貴方達はどうか答えたのかしら？」

龍田はナタリアににこりと微笑んだ。

「脱線しすぎましたねえ。えっと、こちらにも相談があつて、取引する事にしたんです」

「・・・そちらの相談つて？」

「ある人間の隠匿です」

「それは海軍内のもつて事ね」

「お察しの通りです〜」

「裁判の証人か何か？」

「いいえ。上官を思い切りぶん殴つてクビにされかけてる人です〜」

「・・・匿う理由は？」

「私達の恩人のお友達なのと〜」

「・・・」

「世間に知られてはいけない事に気づいてしまったからです〜」

「・・・特別機密事項ね？」

後ろに控える文月は眉一つ動かさなかったが、隣の不知火はピクリと頬が動いた。

龍田は笑みを消し、わずかに目を開いた。

「・・・どこでその単語を〜？」

ナタリアは肩をすくめた。

「信じてくれなくても良いけど、私達4人は元艦娘でMADFに所属していたの」

文月が呟いた。

「ずっと昔に1度だけ編成された、専用の鎮守府で陸海空全ての特別訓練を受けた非正規戦部隊です」

フィーナが頷いた。

「ご存知でしたか。私達はそこで最後まで戦った4人でした」

「確か・・・深海棲艦の猛攻に遭つて全滅したんですよね」

「ええ。真夜中に数万の勢力に囲まれ、鎮守府の置かれていた島ごと沈められました」

事実と符合する事で文月が領いたので、龍田は顎に手を当てた。

「確かにMADFの訓練要綱には一部掲載されてましたねえ」

ナタリアは領いた。

「深海棲艦が元艦娘だとか書いてあったけど、自分達が体现してるから今更よね」

「まあそれも公式には完全否定してることなので」

「で、そんな事に気づいちゃったと」

「気づくのは勝手なんですけど、クビになったら自棄を起こしかねませんし」

「世間に暴露されては面倒」

「しかも元総合戦略部長なんて肩書きがつくと信頼度は抜群ですし」

「本人は辞めたがつってるの？」

「色々あって、現職に留まる気は無いそうです」

「それとこの町の事のつながりは？」

「その人が仮に、皆様と依頼人の中で仲介役になったとしたらどうですか？」

ナタリアはその一言で全て理解した。

そして龍田がキレ者である事も理解した。

艦娘連中は大本営の総合戦略部長を勤めた人間ともなれば無碍には出来ない。

逃亡兵と解ったうえで手を貸してくれるなら海軍に見つかった時の盾としても使えるからだ。

問題は深海棲艦勢だが・

龍田はナタリアをじつと見た。

「元MADFの皆様なら、いきなり撃ったりはしないですよねえ？」

フィーナが渋い顔で言った。

「お手並み拝見位はするわ。そうする事で海軍は攻めてこないんでしょっ。」

「その通りです」

「でも、その人が私達深海棲艦をどう扱うかによるわ」

「上官をぶん殴っちゃった理由なんですけど〜」

「ええ」

「深海棲艦の討伐作戦を編成しろって上官は命じたんですけど〜」

「ええ」

「その前に海軍内を消毒して、原因を潰せって大喧嘩したからなんです〜」

4人は呆気にとられ、フィーナは質問とも独り言ともつかない言葉を漏らした。

「え、ええと・・・それ・・・」

「更に悪い事に、上官さんは海軍内に腐敗なんて存在しないと固く信じてる人で〜」

「い?!」

「特別機密事項もご存じない方でしたから、深海棲艦は生まれた時から敵だって信じてて〜」

「・・・」

「壮絶な口論なのに論点どころか1ミリも前提が噛み合わなくて〜」

「・・・」

「上官に胸倉を捕まれた時、能無しのバカヤロウってぶん殴っちゃったんですよ〜」

「あー・・・」

その上官は立場的にいささか無知といえは無知だし、純粹過ぎたといえはその通りだ。

だが海軍内では極めて普通の人の一人である。

一方で、総合戦略部長はよく実情を把握していて、その対策も至極真つ当だ。

ただし真つ当すぎる。

腐敗司令官の粛清なんて泥臭い事の始末はもう少し搦め手を使わないと進めるのは無理だ。

そんな事が公になったら海軍は崩壊の危機を迎えてしまう。

少なくとも公式にやる事ではない。

だが・・・

仲間にするなら圧倒的に総合戦略部長の方だ。

リアリストであり、推察能力に長けており、そして・

ナタリアは口角を上げて笑った。

「そういうアツい奴、嫌いじゃないわね」

龍田はにこりと微笑んだ。

「お気に召して良かったです。町内の仕組みは町長さんとナタリアさんにお任せします」

「えっ？」

「艦娘側は代表としての適任者が居なかったのです」

まあそうかとナタリアは思った。

艦娘の最大勢力とそれに協力した連中は昨晚一掃してしまった。

あとは真面目で他所とつるまない艦娘達が少数居るだけだ。

真面目な決定なら、それをひっくり返すような邪さも無いだろう。

悪意を持って町長に刃向かうなら我々が始末すればいい。

第12話

ナタリアが頷いたのを見て、龍田は続けた。

「という事なんですけど、我々が皆様を攻撃しない代わりに、隠匿工作にご協力頂けますか？」

「他所の鎮守府からも？」

「ええ、主語は海軍とご理解ください。ただ・・・」

「ただ？」

「付近で民間船や鎮守府、その所属艦娘などに攻撃されると、難しくなりますね」

「自分の首を絞めるような阿呆な事はしないけど、喧嘩は売らないで欲しいわね」

「もちろんです。見込み通りの方で安心しました」

「あと、昨晚の件はどうするの？」

「何も無かっただけですよ」

「依頼人も死んでるけど大丈夫なの？」

「そんな人はここに居なかった。私達が警察にお話すればそういう事になりますから」

「・・・」

「では・・・」

龍田が差し出した手を、ナタリアは握り返した。

握手を終えた後、龍田は立ち上がった。

「詳細は別途、町長さんにご連絡しますね」

「待って、そいつの名前は？」

「テッドさんです」

「・・・オーライ、そういう事ね」

「そういう事で」

・・・トン

襖が閉まると、ナタリアはがくりと頭を下げた。

昨晚から今までジェットコースターも真つ青の展開だ。

ひどく疲れた。本当に疲れて・・・

くう

お腹が空いた。

フィーナがお櫃を開けて訊ねた。

「ボス、ご飯は特盛りですか？山盛りですか？」

「あなたは察しが良すぎるし、その2つは選択肢ですら無いわよ・・・」

「皆聞こえてると思いますけど」

「いいわよ、山盛りでよそいなさいよ！」

「は〜い」

フローラとミレーナはくすつと笑った。

ボスも大丈夫、海軍は攻めてこない。

後は死んだ仲間達を弔い、自分達と生き残った仲間が町を再建するだけだ。

その日が来た。

「初めまして。ええと・・・あ、そうだ。テッドと申します。この度はお世話になります」

「こちらこそよろしくお願いします。私が町長で、こっちが海運業者代表のナタリアさん」

「よろしく」

「さて、早速ですが現状の詳細を伺いたい。聞いている事は概要ばかりで役に立たん」

町長もナタリアも、テッドの対応に驚いていた。

遠路はるばる来た初日なのだから、挨拶だけ済ませて宿に向かうだろうと思っていた。

だがテッドは文字通り詳細をナタリアや町長から次々と聞き出していった。

コトリ。

途中で職員がお茶を持ってきた時、テッドはぴたりと止まると、そわそわしだした。

「あ・・・」

ナタリアはピンと来た。

「町長、喫煙所はどちらでしたっけ？」

「ここで吸って構わないですよ。灰皿持ってきてきましょう」

テッドは苦笑した。

「すみません。俺は考えをまとめるのにどうしてもコイツが入用なんです」

そういつてテッドが葉巻のセットを取り出したので、ナタリアは啞えた細巻き煙草を噴き出しそうになった。

会議中に葉巻!?

こいつ、やっぱリクセ者か。

ナタリアは慌てて町長を見たのだが、その町長は目を輝かせていた。

「や、や、キューバ産・コイバの上物ですな？また良い物を」

「ご存知ですか町長！」

立ち上がった町長は席の引き出しから小箱と別の灰皿を持ってきた。

「いやあ、わしの方で手に入るのはこれぐらいでしてな。灰皿はこちらの方が具合が良いでしょう」

「や、や、どうも。ほほう、これはキューバから輸出される最高級品じゃないですか」

「テッドさんがお持ちなのはキューバ国内の上級将校向けでしょう？」

「お、そこにお気づきですか。嬉しいですなあ」

「ぜひ交換しませんか？」

「では1本どうぞ」

「ではこちらは2本で」

「いやいや、町長、ここは等価交換で」

「とんでもない、価値は2倍あります」

「いやいやいやいや」

ナタリアは嬉しそうに互いの葉巻を交換する二人を見て、そっと脇に紫煙を吐いた。

一気に打ち解けたわね、この二人。

心配して損したわ。

「大体様子は解りました。後は現ナマの方ですな」

「そこは山甲信用金庫が上手く捌いてくれるはずです」

「ん？．．あー、ああ。聞いた事がある。なるほど、そういうことか」

ナタリアは面白そうに目を細めてテッドを見ていた。

葉巻を啜えてから、テッドの洞察力は一気に跳ね上がった。

既に町長室は主にテッドが吐き出す煙で火事かというくらい紫煙が立ち込めている。

しかし、町長も割と葉巻を嗜んでいたとは知らなかった。

途中で秘書が来たが、全く動じる事無く窓を開けていったのはそういう事だろう。

こうして話が終わり、3人は町を順番に見て回っていた。

最後に着いたのは、かつてサウスウエストストリートだった場所だった。

無人の廃墟を破砕機を付けたパワーショベルが砕き、瓦礫を積んだダンプが埃を立てて通り過ぎていった。

町長が俯き加減に言った。

「数日前に現場検証が終わったので、復興に向けて整地しているところですよ」

ふとナタリアが見ると、テッドは瓦礫に向かって手を合わせて頭を垂れていた。

「テッドさん．．」

しつかり祈りを捧げた後、テッドは顔を上げて言った。

「俺は二度と、こんな悲劇を生まない。その為にここに来たと思ってるぜ」

そのテッドの姿が、滲んだ。

「うっ．．うううっ」

町長はナタリアがぼろぼろと涙をこぼしたので、そっとハンカチを差し出した。

「泣きなさい。君には泣いて良い理由がある」

「うううっ．．ぐすっ．．うー」

「テッドさん。わしからもお願いする。この町で惨事を見るのはもう
沢山だ」

「気安い事は言えないが、最初から全力で行く。理由が良く解ったか
らな」

ナタリアが泣き止むまで、テッドと町長は眉を顰め、瓦礫の町を睨
み続けていた。

第13話

その夜。

「・・・通り名？」

「ああ。自分達の職業的呼称だ。俺が考えてもしっくり来ないだろうか？」

ワルキューレの仮設事務所を、テッドはひよつこりと訪ねて来てそう言った。

ナタリアは細巻き煙草に火をつけた。

「・・・ふーん」

「なんだよ」

「アンタなら、そんな事くらい自分で決める気がしてたから」

テッドはシガーカッターで葉巻の吸い口を切り落としながら首を傾げた。

「そんな事か？」

「どういう事よ」

「俺は大々的にこの仕事を世に知らしめるつもりなんだが」

「えっ？」

「例えば俺が「パンダ海運」とか名付けてさ」

「ち、ちよっ」

「行く先々で「あーパンダ海運の方ですか、いつもお世話になってます」とか言われるんだぜ？」

「止めてよ格好悪い！」

「だから、「そんな事」じゃないだろ？お前らにとってさ」

「アンタだってパンダ海運の仲介人ですから言われるじゃない」

「俺は葉巻が買えりや何でも良いぜ。以前の職場では散々陰口叩かれたしな」

綺麗に火をつけた葉巻を啜えたテッドがニヤリと笑ったので、ナタリアは拳を握り締めた。

くっそ、コイツ本気だ。しかもさっきの例から考えるにセンス無い

!

ナタリアはキツと部下達を見た。

フィーナは肩をすくめた。

「真面目に答えた方が良い場面ですよね？」

「当然よ。決まらなきやパンダ海運なのよ？」

テッドは表情を変えなかったが、

(いや、幾らなんでもそれはねえけどな・・・)

と、内心思っていた。

フローラが言った。

「あの、ボス」

「ええ、何？」

「私達は海運業者と言われるですけど、いつも危険と隣り合わせじゃないですか」

「そうね」

「運ぶだけって言われると、そうじゃないよねって思うんです」

ミレーナが頷いた。

「死線を掻い潜って頑張って届けてるんだよ！って感じを伝えたいなあ」

フィーナはポンと手を叩いた。

「必殺宅配人とかどうですか!?!」

ナタリアが盛大にむせ込み、ミレーナとフローラのそれは冷たい視線に気づいたフィーナは真っ赤になつて俯いた。

テッドは紫煙で輪っかを作りながら言った。

「なあ、さつき俺の例に不満だったみてえだが、もしかして同レベル」

「ゲツホゲホ・・・ち、違うわよ!」

「だって今のそう変わらねえじゃ・・・」

「違うったら違うの!・・・ゲフツ」

「Deadline Deliver!」

フローラが人差し指を立てながら、どや顔で言い放った。

テッドは小さく何度か頷き、ナタリアを見た。

「よし、じゃあえつと、必殺宅配人、パンダ海運、Deadline

Delivers。どれが・・・」

「1つしかないじゃない！やらせの3択でももうちよつとマシな物挙げるわよ!!」

「え?じゃあ必殺・・・」

「Deadline Deliverに決まってるでしょ!」

「よし、じゃあ用が済んだから帰るぜ」

「あーはいはい、おやすみおやすみ」

戸口で振り向いたテッドはニツと笑った。

「どうやら杞憂だったようだな」

ナタリアは首を傾げた。

「何の事よ」

「・・・言つとくが、俺は実力主義だからな」

「えっ?」

「幾ら可愛い涙を見せたオンナだろうが、輸送トチったら指名しねえからな」

途端に部下3人の目がギラリと輝き、ナタリアは慌てふためいて真っ赤になった。

「はあ!?アンタ何言ってるの!誤解するような事言わないで!」

「皆をせいぜい盛り上げな。あばよ」

「待ちなさい!ちゃんと説明して行きなさい!こっ!こっ!こっ!」

ボタン。

ナタリアは閉められたドアを見て齒軋りしていたが、ふと近寄る3人に気がついた。

「・・・えっ」

「ボス?」

「オンナの涙って?」

「どういう事ですか?」

デスクに覆い被さるように顔を近づけてくる3人に

「あ、ええと・・・パ、パスって言っても・・・」

「効くと思います?」

「いいえ」

「物分りの良いボスで助かります」

「潔く吐いてください」

「んもー！テッドおおおお！覚えてなさいよー！」

表通りでナタリアの可愛い悲鳴を聞いたテッドは頷き、

「・・・あの4人なら大丈夫だな」

そう言いながら歩き去った。

「許可制だ?!？」

「あれだけ大騒ぎ起こしてこれで済めば軽いんじゃない?」

「この仲介人って誰だ?」

「ねえ、アタシ達の財布全部コイツが握るって事じゃない?」

「おっかねーな」

立てられた告知板の前で、町の連中は大騒ぎになっていた。

海運業が今日から許可制になる事。

業者が依頼人と直取引すれば多額の罰金が伴う条例違反になり、認可も取り消される事。

認可の一切も、依頼人の仕事を割り振るのも、ギャラを割り振るのも全て仲介人が行う事。

そして末尾に書かれた

許可が欲しけりや今日の午後1時に俺の事務所に来い（意識）
という一文。

ただし仲介人の詳細は一切記されていないなかった。

ナタリアは読み終えて頷いた。

相談内容と特に変わった点もなさそうだ。

ナタリアは説明会が荒れる事も予想していたが、予想以上に好意的な展開になった。

それはナタリアさえ頷くほどテッドの説明は理論的で、公平で、シンプルなお内容だったからだ。

「解りやすければ納得出来る。納得すりゃ文句も出ねえ。だろ?」

申し込み手続きも済んだその日の夜、ナタリアに訊ねられたテッドはそう答えた。

「まあそうだけど。でもアンタ頭良いわね」

「あん？」

「複雑な物事を要点だけシンプルに説明するって賢くなきゃ出来ないわよ？」

「ふん。俺は伝統の大本営式って奴が大嫌いなんだよ」

「ああ、一層複雑にして読み解けないから文句言えないだろってやつ？」

「それぞれ。あんなのは馬鹿が馬脚を現さねえ為の自衛手段だ。くだらねえ」

ナタリアはくっくつと笑った。

「アンタ、よく大本営の中で生きてこられたわね。2〜3回命狙われたでしょ？」

テッドがきよとんとした。

「ああ、龍田から聞いたのか？」

「本当なの!？」

「なんかスープに油が浮いてるなーって思ってた試しに水槽に入れたらグツピーが全部浮いてきたとかさ」

「えっ・・・」

「調査に行く途中の山岳路で巨石が落ちてきて前の車ぺったんことかさ」

「ちよっ・・・」

「乗る予定だった公用車を他の奴が横取りしていったら正門で大爆発とかさ」

「それ、ガチの本気じゃ・・・」

「さあな。お釈迦様が手招きしたら死ぬ。それまでは死なねえ。俺が決める事じゃねえよ」

肩をすくめつつ、テッドはシガーカッターで吸い口をサクリと切り落とした。

第14話

テッドの告白を聞きつつ、ナタリアは真剣に龍田の台詞を思い出した。

「ある人間の隠匿です」

・・・そうだ。確かに龍田はそう言った。

単に上官をぶん殴った奴が不貞腐れないようにするなら就職斡旋とか言う筈だ。

隠匿とは、つまり、狙う誰かが居るって事で・・・

「あ、アンタ、誰に狙われてるのよ・・・」

「さあな。恨みは腐るほど買ってるらしいからな」

「何したのよ？」

「艦娘轟沈させた司令官を素直に評価しただけなんだがなあ」

「・・・ええと、例えば？」

「大破の言葉も解らねえ能無しが司令官なんて海軍の恥だからクビにしろ、とかか？」

「アンタ死にたいの!？」

「差配の為にいる司令官がそれを満足に出来ねえなんてジョークにもならねえよ」

「だからって!・・・あ、別に査定に影響しない非公式の場とかで？」

「そのまま懲戒免職されたぜ? でなきや俺様が評価する意味ねえだろ」

「アンタ鬼でしょ! 少しは情状酌量つてもものがないの!？」

テッドはすつと真顔になった。

「ふざけんな。艦娘の命を雑な差配で散らした司令官にかける情けなんてねえんだよ」

「・・・」

「真面目にやって、迷って、悩んで、その挙句なら仕方ねえ。そうじゃねえ司令官が多すぎんだよ」

「・・・」

「艦娘達は遠い海原で命張って戦ってるのに上の空で指示とかありえねえんだよ」

「・・・」

「司令官は互いになあなああのクソやっててちっともミスを反省しねえ」

「・・・」

「117研は言葉で軍をぶん殴る所だと初代所長に誘われた。そしてその通り俺達は行動した」

「・・・」

「俺達はマムシだ悪魔だ死神だと散々言われたし、姿を見ただけで悲鳴を上げた司令官も居た」

「・・・」

「だが所長が変わってから日和見主義になっちまったし、俺は適当な理由で総合戦略部に異動させられた」

「・・・」

「そして新しい上官はふんぞり返る上にまるで現実が見えてねえうすら馬鹿だった」

「・・・」

「だから拳で説教してやったんだよ」

ナタリアは微笑みながら言った。

「全く反省してないのね」

「ああ。どこに反省する理由がある？メリケンサック着けずに殴った事か？」

「ふふっ」

「なんだよ」

「アンタが沢山居たらMADFも要らなかつたわね」

テッドが目を見開いた。

「た・・・多目的攻守特殊部隊」

「ええ。正式名称よく知ってたわね」

「お前・・・まさか」

「そうよ。その筆頭艦娘だった」

「・・・」

「でも私達は大本営を恨んでないし、一緒に死んだ司令官にも敬意を
持つてるわよ?」

「なぜ大本営を恨まない? 動きを知ってから戦闘終了まで9時間は
あつた筈だ」

「そうね。でもあの当時、ハッキリ言つて私達以上の実力者は居な
かつた」

「・・・」

「その私達が殲滅させられようとしてるのに誰を寄越すつて言うの
?」

「だが・・・」

「私達の鎮守府は秘匿する為に僻地の島に建つてた。本土を長く空け
る訳には行かない」

「それだつて大本営から高速戦艦を幾らか回す事は出来たはずだ」

「大本営の兵力を分散させる事が主目的なら? 私達は敵の配置をそう
読んだ。だから支援を拒否したの」

「拒否したつてのは・・・ほんとの話だったのか・・・」

「ええ。私達は最終的には大本営を守る為の盾。その私達が助けを求
めたら本末転倒でしょ?」

「・・・なるほどな。それはもう矜持の世界だな。すまなかつた」

「いいのよ」

「そうだ。一つ教えてくれ」

「なに?」

「じゃあどうして、その、深海棲艦になつた? 別の事に対する恨みか
?」

「うーん・・・恨みつて言うのかしら。自分に腹が立ったのよ」

「自分に?」

「ええ。たかだか数万の深海棲艦の半分も減らせず沈むのかつて」

「それが理由だつてのか!」

「だからレ級になれて嬉しかったわよ。相手が何であれ戦えるんです
もの」

「・・・よく解ったよ」

「でもね」

「ん？」

「沈んだ事を惜しんでくれるのは嬉しいわよ」

「・・・MADFは、組織として今も存続してるが誰も配属者は居ない。全て当時のままだ」

「・・・」

「それはあまりにも壮絶な最後だった事、そして」

「そして？」

「絶望的な戦況でも一步も引かずに戦い抜き、深海棲艦達の侵攻を阻止した君達に最大限の敬意を払う為だ」

「あら、オチは初めて聞いたわ。やっぱり読み通りだったって事か。いい気味だわ」

「・・・」

テッドはスツと姿勢を正すと、ビシリと敬礼した。

ナタリアは頭をかくと、ひらひらと手を振った。

「よしてよ、もうずっと昔の事よ」

「117研は、MADFの惨事をもっと早い段階で食い止められなかったのかと、中将が嘆いた果てに出来たんだ」

「・・・」

「どこかで、誰かが、何かを変えたらこんな痛ましい惨事を防げたんじゃないか」

「・・・」

「だから些細な事故でも検証し、徹底的に究明し、間違いを正し、直さない者を罰する」

「・・・」

「その為に俺達は戦ったんだ」

「・・・」

「MADFの最後の戦いは誰一人何ひとつ間違っってなかった。だが惨事そのものを止められなかった」

「・・・」

「117研でやり残したとすれば、MADFの惨事を防ぐ方法を見つけてられなかった事だ」

「・・・」

「だが、ここでは俺は二度としくじらねえ」

「・・・」

「艦娘の為、深海棲艦の為、そして依頼人の為」

「・・・」

「俺が出来る事をさせてもらうぜ」

ナタリアはふふつと笑った。

「オーライ、アンタの作戦なら安心出来そうね」

「任せろ。それが俺の仕事だ」

「だから1つ協力してあげる」

「あん？」

「アンタの身边はうちの誰かが必ず警護する。24時間ね」

「4人だけで出来る事じゃねーぞ」

「私達だけじゃないわ。SWSPのメンバー全員」

「SWSP?なんだそりゃ」

「あのサウスウエストストリート之夜、一緒に戦った子達よ」

「：そうか。ま、やってくれるなら安心だぜ。俺はしよっちゅう町に出るからな」

「ウロチヨロされると警護しにくいんだけど?」

「現場は自分の目と耳で知る主義でな」

「はー、言わなきゃ良かったかしら」

「そう言うなよ。俺も頑張るからよ」

「よろしくね」

「ああ、よろしく頼むぜ」

こうして、テッドとナタリアは固い握手を交わした。

第15話

それから2年が過ぎた、ある朝のワルキューレ事務所。

「昨晚、また一人始末しました。いつも通り投棄しときましたよ」

「うそでしょ・・・前の奴が一昨日来たのに昨晚も来たっていうの?」

「皆ももう苦笑するしかないって感じですよ。一番経験の少ない子でさえ3人は始末してますから」

そう。

テッドが旗揚げしてからこの2年間で、SWSPは57人もの暗殺者を仕留めていたのである。

もちろん、暗殺者のターゲットはテッドただ一人である。

ナタリアは報告を聞いて最初げんなりした顔を見せていたが、次第にギリギリと歯を食いしばると、

「ほんつと龍田の奴……ここまで酷いなんて聞いてないわよ!だから海軍なんて信用出来ないのよ!」

と、拳で机を叩き、フィーナ達もむすつとした表情で頷いた。

事情を知っている警察署長が一切黙殺してくれているから良いものの、下手な戦場より酷い。

既に町では公然の秘密となっており、テッドの事務所近辺の家は巻き添えを恐れて誰一人住んでいない。

このブロックで真夜中に足音がすればSWSPか暗殺者か、という程である。

(テッドはナタリアから、真夜中に家から出たら命の保障はしないと
言われている)

とはいえ。

テッドの差配が功を奏し、寂れた港町はDeadline Deliverersの集う町として知られ始めていた。

Deadline Deliverersの出自に関心が向かないよう、テッドは慎重に舵取りをしていた。

それでも旺盛な海運需要は目ざとくDeadline Delivery

versを見つけ、依頼件数は増えてきたのである。
その数年後。

町で最も有名ななんでも屋だったファッツがテッドの事務所に入ってきたのである。

テッドは顔を上げて首を傾げた。

「ようファッツ、今日は特に何もねえぞ」

「今日でなんでも屋を畳もうと思つてな」

「お、おいおい、ちよつと待ちなよ。困る奴ぞろぞろ居るだろ？」

「ライネスにもそう言われたが、そんなに変わらんとと思うぞ」

「まずは俺が葉巻の入手先に困るんだが？」

ファッツは一枚のメモを差し出した。

「ここで買える」

「・・・あん？これはアエロマイクロの住所と連絡先じゃねーか」

「ああそうだ。よく覚えてたな」

「キューバから・・・空輸させたのか？」

「セスナで行ける訳ないだろ。アエロマイクロの社長は喫煙具の通販を副業にしてるんだが」

「マジか？今度行つてみるか」

「通販だつてば。それで、ロシアから年一回仕入れる時に一緒に輸入してもらつてたんだよ」

テッドはぴしやりと額を叩いた。

「くそ、そういう奴らは好天の季節ならウラジオストックまでは行けるつて言つてやがったな」

「そして自分が依頼人ならテッドに報告する必要は無い。だろ？」

「ああなんてこつた。灯台下暗しつてやつか」

「でな、テッド」

「ああ」

「俺もDeadline Deliverになろうと思うんだが」

「・・・あー、ちよつと前に入ってきた重巡の姉ちゃんか」

「そういう事」

「だが、なんでも屋でやっていく方が安全じゃねーのか？町でも評判

「良いぞ?」

「そうなんだが、どうしてもやりたいとミストレルが言うんだ」

「なんでだ?」

「俺にも解らんが、海が恋しいのかもしれない」

「あー・・・」

「まあ、あいつには借りもあるし、したい事をさせてやりたいからな」

「・・・ファッツ」

「うん?」

「お前本当にミストレルの親父になっちまったな」

「止めてくれ、まだそんなトシじゃない」

「しかもかなり娘を甘やかすタイプだよな」

「・・・そう見えるか?」

「他に言いようがねえよ」

「・・・まあそういうわけで許可ってどう貰えば良いんだ?」

「俺がテキトーに審査するだけだ」

「テキトーって・・・」

「例えばファッツがなんでも屋とDeadline Deliver

sどっちにいる方が俺に都合が良いかとかな」

「あまりにも偏ってないか? 審査基準」

「で? Deadline Deliver になつたらどの分野やる

つもりだよ」

「単発の、チャーターだ」

テッドは顎に手を置いた後、ふむと言って葉巻を取り出した。

もう片方の手にシガーカッターを持ち、カシヤカシヤと動かした。

「目の付け所は悪くないぜファッツ。よくライバルを観察してるな」

「ああ」

カシヤッ

「だがよ、Deadline Deliver は文字通り死線を彷徨

徨うぜ?」

「そうだな」

カシヤッ

「あの姉ちゃんが遠くの海で大破したらどうする?」

「まずテッドを力一杯ぶん殴る」

「ふざけんな馬鹿野郎。何言ってやがる」

「大真面目だ。そんなへボいプランを立てたって事だからな」

「ぐっ」

カシヤツ

「ま、まあ置いとく。それで?」

「全財産を渡すから確実な救出作戦を立ててもらおうよ、テッド」

「言っちゃ悪いが、俺達のギャン解ってるか?」

カシヤツ

「知ってる。だからこれを預けとく」

「・・・家の・・・権利書だと?」

カ・・・シヤツ

「俺の車はもう市場では価値がないからな」

「・・・」

「それで足りない分はなんでも屋再開してでも返す」

「社員割引はねーからな」

「こつちも容赦なくグーで行かせて貰う」

「マジで殴る気かよ!?!」

「当たり前だ。航路やプランは全部テッドに任せるしかないんだからな」

「・・・じゃあお前にも権利をやるぜ」

「何の?」

「俺のプランが本気で気に入らねえ時はお前が考えろ」

「!?!」

「俺も納得したらお前のプランでやってやる。その時は自分で手前の顔殴れよ?」

「・・・良いのか?」

「正直な話、俺はファッツにはなんでも家で居てほしい。その方が町の為だからな」

「・・・」

「だがミストレルに大甘なお父さんは言う事聞きそうにも無いしな」
「だから誰が親父だ」

「最初は軽いミツシヨンから回していく。二人で考えてこりやダメだ
と思つたら早く言え」

「・・・」

「俺もお前の家の権利書を債権屋に回すような事態にはしたくねえ。
意地を張るなよ」

「解つた」

「じゃ、権利書は預かる。これがルールブックと許可証だ、受け取れ」
「許可証・・・なんか簡単にコピー出来そうだな」

「ふざけんな。やったらどつき回すぞ」

「やらないさ。じゃあ後は連絡を待てば良いんだよな？」

「ああ。依頼を引き受けるならここで説明を聞き、行つて帰つてギヤ
ラ貰つてめでたしデンデンだ」

「解りやすい要約ありがとう」

「それは俺にとって褒め言葉だぜファツゾ？」

「褒めたつもりだが？」

「ちつ、ファツゾは頭が回るからな」

「なんだよ」

「なんでもない。ああ、もろもろの相談するならワルキューレの所に
行けよ」

「何故だ？」

「まあ、古参だからな」

「ん、解つた。ありがとう」

「じゃーな」

パタン。

閉まったドアの音を聞きつつ、テッドは葉巻の箱を開けた。

危ない危ない、そーいや在庫が切れかけてたんだ。早速注文する
か。

テッドは受話器を上げた。

第16話

テッドは短縮ダイヤルを押し、応じた声に機嫌良く話しかけた。

「よう、アエロマイクロの社長、俺だ。テッドだ。早速だが葉巻売ってくれ。コイーバをよ」

「…ああそうだ。ファッツに流してた奴。なんでも屋辞めるからって連絡先置いてっつな」

だが、相手の興奮した様子に、次第にテッドの表情が曇り始めた。

「え？あ、ああ、許可は…出したけどよ。それが何だ？」

「…なんで引き止めなかっただど？ああなったアイツが言う事聞くわけねえだろうがよ」

「…おい待てよ、俺のせいだつて言うのか？ちよつと話…あつ、切りやがったクソ」

ガチャンと受話器を置いたテッドは葉巻の箱を開けた。

「…切り詰めても3日が良い所かよ。ちくしようめ」

その時、電話が鳴り響いた。

「はい、テッド仲介所。ああどうも、依頼ですか？え？違う？と仰いますと…」

「…ええ、確かにファッツは来ましたし、心構えはあるようなので許可を出しましたが…」

25分後。

「…いえ、あの、私としましても皆様の生活状況まで鑑みて可否を判定する事は困難ですから…」

「そ、そんな泣かないください。あの、ええと、もう1度確認させて頂きます、はい」

チン。

テッドはぐつたりとした様子で受話器を置いた。

「俺に泣き落としかけられても困るんだがなあ…」

そうつぶやいた途端に電話が鳴った。

嫌な予感を抑えつつ受話器を取る。

「はいテッド仲介…えっ？あ、ああ。さつき許可した…なんでだつ

て？断る理由がねえだろ!？」

「・・・俺に言うなよ！やるつていったのはファツゾだぜ!?!断らなかつた俺が全部悪い!?!無茶苦茶言うな!！」

「・・・入店禁止!?!そりゃない・・・あっ」

テッドは電話の切れた受話器を持ったままじわりと青ざめた。

俺は情にほだされて大変な間違いをしちまったかもしれない。

ファツゾがなんでも屋を畳むなんてのは論外だったって事か？

溜息と共にそつと受話器を置いた途端、電話が鳴り響いた。

テッドは一瞬受話器を耳に当て、すぐに切った。

するとすぐさま電話が鳴り始めた。

テッドは今まで電話してきた連中をメモに取りながらぐくりと唾を飲んだ。

ちよつと待て。

これはビッグトラブルじゃねーか？

2時間後。

「ナタリアー！ここにファツ・・・居たあ!！」

ナタリアから真剣に話を聞いていたファツゾはテッドの大声にびっくりとして振り向いた。

「なんだよテッド、お前がここに行けつて言ったんじゃないか」

「ファツゾ！お前の許可取り消す!！」

「俺が何したつて言うんだ!まだ1件も依頼貰つてないぞ!！」

「取り消ししたら取り消し!ほら権利書返す!！」

ナタリアは肩をすくめ、細巻き煙草に火をつけた。

「何があつたのよテッド」

「俺のオフィスの電話が鳴りやまねーんだよ!！」

「電話機の修理なんて俺は元々やってないよ」

「違うわボケ！お前の *Deadline Deliver* 入りを認めた事に対する抗議の電話だよ!！」

「は?！」

テッドはメモをファツゾの目の前につきつけた。

「これがかけてきた連中だ。俺が断ると思つてたのにふぎけんなつて

「言われまくってるんだよ！」

「えー・・・」

「たった2時間でこんなにかかってきやがった！ほらリスト受け取れ！」

「・・・やけにあっさりしてたのはそういうことか」

「いいかファッツ、お前が何とかしろ。まず！いの一番に！アエロマイクロの社長を説得して来い！」

「なんで？」

「俺のせいだから葉巻売らねえって言われたんだよ！」

「は？」

「リミットは俺の葉巻の在庫が切れる3日後までだ！説得するかなんでも屋に戻るか選べ！」

「無茶苦茶言うなよテッド、職業選択の自由はあるはずだろ？」

「そんな安い憲法論で俺が禁煙するいわれはねえよ。ほうぼうの店に出禁になるのも以下同文だ！」

ナタリアはくすくす笑っていた。

「それは・・・本当にとぼちりね。ご愁傷様、テッド」

テッドはナタリアを見てニツと笑った。

「・・・じゃあナタリアにもこの恐怖を味わってもらおうか」

「えっ？」

「ファッツにDeadline Deliverersの指南をしたのはナタリアだって言いふらしてやる」

一瞬でナタリアの笑顔がひきつった。

「ちよつと！待ちなさいよ。アタシを巻き込まないでよ！」

「じゃーナタリアも俺の側についてくれるよな？」

「汚いわよテッド！」

「うるせえ！俺一人ジョーカー押し付けられてたまるかってんだ！」

真顔でナタリアがファッツを見た。

「貴方に恨みは全く無いんだけどね、ファッツ」

「え、あの」

「なんでも屋に戻らない？ああいえ、言い方が悪いわね。戻りなさい。」

「今すぐ」

「命令!?!」

「さすがにここまでテッドが血相変えるのは只事じゃないと思うのよ」

「・・・」

「だから今まで通りなんでも屋で、ねっ?」

ファッツゾが真顔になった。

「もし復業したとしても、このリストに乗ってる人達には取引しない。今決めた!」

「え!?!」

「俺の門出を邪魔するのなら応分の報いをくれてやる。だからこの連中に今後一切御用聞きには行かん!」

テッドは手を額にやった。

ああちくしょう、誰か俺の葉巻を救ってくれ。

ナタリアはファッツゾをジト目で睨んだ。

ファッツゾも負けじとナタリアを睨み返した。

第17話

「・・・」
「・・・」

ナタリアとファッツの睨み合いは無言のまま30分が過ぎようとしていた。

フィーナはつんつんとテツドの肩をつつき、小声で囁いた。

「あの一」

「・・・ああ」

「ボスがファッツさんと睨めっこして何か解決するんでしょうか？」

「俺が思うに、ナタリアは引つ込みがつかなくなってるんだらうよ」

「と言いますと？」

「ここで折れたらファッツの Deadline Deliveries
りを認める事になる」

「でしようね」

「だがそうなればいずれファッツの顧客がナタリアに牙をむく」

「テツドさんが余計な事を言わなければ良いのでは？」

「俺が黙っても必ず噂は漏れ広がるさ」

「でも言わなければ噂で済むかもしれないですよ？」

「俺だけ死ねって言うのかよ」

「言う気満々じゃないですか。ボスを困らせるんなら砲火を交えるくらい厭いませんけど？」

「俺が死んだらある一文が出回る事になるぜ？」

「なんでしよう？」

「(必殺宅配人) ってネーミングを考えた誰かさんの話だ」

真顔になったフィーナはホルスターからHK45Cを引き抜くと、ぴたりとテツドの額に押し当てた。

「額で葉巻吸えるようにしてあげましょうね。45口径では狭いですか？」

テツドはフィーナの目を見上げながら邪悪な笑みを浮かべた。

「よほど町中に知って欲しいんだな？俺の話がコケオドシかどうか体張って確かめるか？ええ？」

数秒間、フィーナとテッドは睨みあったが、フィーナが溜息をついてゆっくりと銃を戻した。

「と、いうのをあの二人も練り広げてるんですね」

「無言でな。まあメンチ切ったら先にイモ引いた奴の負けだ」

「メンチカツにジャガイモなんて入ってないですし、何の関係があるんですか？」

「違う。にらみ合いになったら先に目を背けた奴が負けって事だ」

フィーナはニツと笑った。

「あれえ？説明が解りやすすくないですよおテッドさあん」

「ぐっ・・・お前こんな時まで・・・」

「テッドさんが解り易くない説明をしたから誤解しちやったあつて言いふらそうかなあ」

テッドが真顔になった。

「ふざけんなフィーナ」

フィーナも真顔に戻った。

「嫌ならボスに加勢してください」

「ファツゾにスネられたら俺の葉巻はどうなるんだよ！」

「自分で買って来たら良いじゃないですか」

「キューバまで行けるか阿呆！」

一方。

ファツゾとナタリアは完全に顔の筋肉がけいれんを起こす寸前だった。

そもそも睨み顔を延々と続けられるように顔の筋肉は形成されていない。

「い・・・いい加減に・・・諦めなさいよ」
「断る」

開始から49分27秒が過ぎて。

「ハー！もうだめ！顔が筋肉痛！イタタタタ！」

両手で顔をマッサージするナタリア。

肩で荒い息をするファッツ。

しばらくしてファッツを見たナタリアは、すっかり憔悴した顔になっっていた。

「んもー、なんでそんなに強情なのよう」

「俺の今の生活は、ミストレル無しには語れない」

「・・・」

「そして彼女は艦娘で、彼女の願いは Deadline Delivers になる事だ」

「・・・」

「俺は借りを返す為に、彼女の願いを叶えてやりたい」

「・・・」

「俺も元司令官だ。だから海の事は多少は知ってる」

「・・・そう」

「今の海に出る危険は解ってる。本音を言えば余り賛成では無い」

「だったら」

「それでも彼女が望むことなんだ」

ナタリアは大きな溜息をついた。

「さすがファッツお父さんと言われるだけあるわねえ」

「誰がお父さんだ」

「ダメな物はダメだって言えば良いじゃない」

「他人が不便になるなんてのは願いを拒否する理由じゃない」

「・・・まあそうなんだけど」

「だろ？」

「うわっ！だっ、ダメよファッツ！ダメだったら！あ、アタシは認めてない！認めてないからね！」

「そんな真っ青になって首を振らないでくれよ」

「町の連中の恨みを一手に引き受けるなんてテッドだけで良いの」

テッドが怒鳴った。

「おい！聞き捨てならねーぞ！死ぬ時は道連れだからな！」

ナタリアは怒鳴り返した。

「だから巻き添えにしないで！」

ファッツはテッドの方を向いた。

「・・・このリストの連中を説得してこないとどうしてもダメなんだな？」

「ああ」

「そして二人は味方してくれないんだな？」

「あ、ああ」

「ごめん。命は惜しい」

「解った。じゃあ一人で何とかしてくる。ミストレルの為に。権利書は持つててくれテッド」

パタン。

閉まったドアを見ながら、ナタリアはテッドに囁いた。

「ねえ・・・その、このままだと後味悪くない？」

「寝覚めは悪いが町を敵に回すなんて冗談じゃないぜ？」

「うーん・・・フィーナは何か思いつかない？」

「果報は寝て待て、寝た子を起こすな」

「・・・余計な事すんなって事ね」

テッドはカリカリと頭を搔いた。

「まあ町の連中もファッツが本気で辞めるとは思ってたんだろ
うな」

「正直、取引していない人の方が少ないものね」

「マメで、トラブルは少なく、よく気がつき、正直者で、料金は安いと
きてるからなあ」

「完全に信用出来る何でも屋って彼しか居ないのよね」

「ミストレルが加わって二人で仲良く頑張つてるとますます評価も上
がってたしな」

「やっぱり無理だと思っわ、今回は」

「町の連中を説得出来ない、か」

「ええ」

「・・・それで良いのかな」

「そこはちよつと引つかかるわね」

「町の連中がなんでも屋でいてくれる方が都合が良い、それだけだか

らなあ」

「本人が意欲を失ったら同じサービスは提供しないでしょうし」

「んー」

「私も幾つか借りがあるのよね・・・」

「まあそうなんだが、町の連中がどうしてあそこまでムキになってんのか解らねえからなあ・・・」

「・・・ちよつと探りを入れてみるか。このままじゃやっぱり可哀相だし」

「もし動かす事で済むんなら町長なり警察署長なり幾らでも頼んでやるから言ってくれ」

「あんまり期待しないでね」

「解った」

二人は立ち上がった。

第18話

そして、2日後の夕方。

「リストに載ってた全員を説得してきたぞ」

「え？」

テッドは戸口にファッツの姿を見た時、てっきり諦めると言いに来たんだと思った。

ナタリアは不思議な位、この件については関係者の口が固いと肩をすくめていた。

だからファッツが説得するのも無理だと踏んでいたのである。

まあしようがないよ、うん、また頑張ってくれ。

そんな事を言おうと思ったのに、今なんて言った？

「だから、テッドに抗議の電話を入れた連中を全員説得してきたよ。確かめてくれて構わない」

「・・・よし、じゃあ」

テッドが真っ先に電話したのはアエロマイクロの事務所だった。

「やあ社長、俺だよ、テッドだよ。すまないが葉巻売っ・・・」

「・・・いや、うん、大丈夫だよ、始めたばかりの奴に無理な話は出さないって」

「・・・ほんとだって、うん、いや、それより俺の葉・・・だから俺の話を」

5分経過。

「頼むから信じてくれよ、今まで俺がトチった事ないだろ？大丈夫！大丈夫だって！」

「え？成功する毎に1箱？おい待てよ、何で俺が連帯責任・・・解った解った解った！」

チン。

テッドは受話器を電話に戻した姿勢のまま頭をがくりと垂れた。

ファッツは心配そうに声をかけた。

「え・・・ええと、テッド？」

「ふ・・・上等じゃねえか」

「えっ？」

テッドは顔を上げた。

「ファツゾ！依頼を出すから良く聞け！」

「あ、ああ、そんな大声で言わなくても解るぞ？」

「ミストレルに兵装持たせて湾内1周させてこい！」

「へっ？」

「今すぐ！湾内を！1周！させてこい！」

「誰の依頼だって言うんだよそんなもん」

「俺だ！」

「は？」

「お前つつーかミストレルが艦隊運動忘れてないか確認するための仕事だ！」

「え、ええと、ギャラは・・・」

パシッ！

「・・・この1000コイン硬貨はどういう意味か聞いて良いかテッド？」

「ギャラだ！以上！」

「断る」

「なにつ！」

「断る！燃料代にもならん！」

「ちっ・・・じゃあこれだ！」

パシッ！

「・・・んー」

「1周回るだけだろ！燃料代が5000コインもかかるわけねえだろ!?
何が不満なんだ！」

「プランは？」

「はあ!？」

「プランをくれ」

「・・・ほんつとーに運用ルールしつかり読んできやがったな
「もちろんだ」

テッドは港の海図を広げたが、ニツと笑った。

「いよーしファツゾ、依頼をちよつと変更だ」

「・・・その良い声にろくでもない予感しかしないんだが？」

「ミストレルはここから出航する」

「ああ」

「そしてこつちを回って、ここにいく」

「・・・ああ」

「そしてここで上陸し、ここで葉巻を一箱買う。この2万コインはその代金だ」

「・・・」

「あとは元来たルートを帰ってくる！以上！ほら海運だ文句無えだろ！」

「アエロマイクロの事務所なんて歩いて行けよテッド。何なら俺が車で送ってやる」

「アエロの連中がお前達が成功し続けなきゃ売らねえって抜かしやがったんだよ」

「・・・んー？ちよつと電話繋いでくれ」

テッドはアエロマイクロの短縮ダイヤルを押すと受話器をファッツに渡した。

ファッツは無表情のまま受話器を受け取った。

「・・・社長ですか？ファッツです。お約束が違うようですね」

「・・・申し上げた筈ですよ。それは我々の問題でテッド仲介役を巻き込むのは止めて頂きたいと」

受話器の声に耳を傾けていたファッツの声が一段低くなった。

「・・・先月までの請求明細、奥様に送りますよ？」

テッドはごくりと唾を飲んだ。

アエロマイクロの社長夫人は疑いだすと際限なく社長を責める事で知られている。

ファッツがにこやかに頷いた。

「お解り頂けたようで何よりです。では仲介役と代わります」
スツ。

テッドが返された受話器を耳に当てた。

「あー、俺だが・・・」

アエロマイクロの社長は打って変わって葉巻をすぐに売ると言っ

てきた。

購入量を伝え、受話器を置いたテッドはファッツに訊ねた。

「なあ・・アエロの社長はお前に一体何を頼んだんだ？」

「俺が喋る訳ないだろ」

ファッツは秘密を守るし義理堅い。だからこそ何でも頼める。

喋られると大変よろしくない事もつい頼んでしまった事が町の間なら1度はあるだろう。

テッドは灰皿から吸いかけの葉巻を取り、そつと火をつけた。

「・・早く実績上げて、町の皆を納得させろよ。無茶だけはするなよ」

「解ってる。俺だって権利書を使う事にはなりたくないし」

「ああ」

「テッドが初恋の女に似てるからと2つも買ったカメオの事を皆に喋る事態にはしたくない」

テッドは思わず目一杯肺に紫煙を吸い込んでしまい、激しくむせこんだ。

「ナタリアの所で続きを聞いてくる。じゃあな」

パタン。

ファッツが出て行ったドアをむせこみつつ涙目で睨んでいたテッドは、チツと舌を打った。

「くそつ、俺の黒歴史をまだ覚えてやがったか」

その時、どうして町の連中が自分に猛烈に抗議してきたのか、その理由に気がついた。

ファッツがなんでも屋を辞める事は不便だ。

だが、辞めた後もファッツが過去の依頼について守秘義務を守り続けるかどうかは桁違いの大問題なのだ。

なんでも屋を続ける限り、守秘する事はファッツにも信頼形成に大変意味のある行為だ。

だが辞めてしまえばファッツにとってはどうでもいい事であり、「使えるカード」に化ける。

その効果は先程の件を思い起こせばよく解る。

テッドのこめかみを一筋の冷や汗が滴った。

「ファツゾに回すのは、安全なプラン限定だな」

俺のカメオの秘密を怒り交じりにバラされたら恥ずかしくて町を歩けなくなるからな。

テツドは頭を掻いた。なんでこうややこしい連中ばかりなんだ・・・

・・・まあ葉巻の供給が再開されるから良いか。

「テツド、居るか？持ってきて来てやったぞ」

訊ねてきたアエロマイクロの社長が葉巻の箱と一緒に差し出した請求書はかなり高額なものだった。

「お、おいおい社長、これじゃほぼ2倍じゃねーかよ」

だが社長は眉一つ動かさずにいった。

「それが本来の経費込みの値段さ。ファツゾさんには色々世話になってるから赤字覚悟で卸してたんだ」

「とほほ・・・俺だって世話してるじゃねーかよ」

金を受け取りながら社長はニツと笑った。

「弱みは握られてないからな。ま、今後もテツドの為に備蓄は続ける。有難いと思ってくれよう？」

「オーライオーライ、解ったよ」

「もし値段が気に入らないならネットで調べてくれ。配送料込みの最安値だと思うよ。じゃあな」

テツドは頷いた。

連中がファツゾを引き止めた理由はさっきの推測で間違いなさそうだ。

第19話

「へえ、皆を納得させたの。凄いわねえ」

「ああ。だからよろしく頼む」

ナタリアは机の前に立つファッツをそっと見上げながら言った。

「・・・あなた、この2日で感じ変わってない？」

「そうか？あまり自分では解らないが」

ナタリアはニヤツと笑った。

「前は真面目な会社員、今はちよつと陰のある男前のボス」

「なんだそれは」

「まあ良いじゃない。吹けば倒れそうなお父さんにDeadline

Deliversは務まらないわよ」

「無知でもな」

「ええ。でも一番守るべき事は他所を見ない事」

「深入り厳禁か」

「それもあるし、無用な出歯亀で死んだ奴は沢山居るわ」

「なるほどな。で、この間中断してしまった話の続きをしたいんだが、

いつなら出来る？」

「別に今でも構わないわよ？暇だし」

「なら早速頼む」

ナタリアは細巻き煙草に火をつけた。

覚悟を決めた、そんな所かしら。

「そういうえば、依頼を捌いていく一番のコツは何だと思う？」

「うん？納期を守るとかか？」

「いいえ、依頼を反故にしても引く時は引く、よ」

ファッツは数秒間腕組みをしていたが、

「・・・そうか、陸の仕事ではなく、海の仕事だもんな」

「ええ」

「今話を考えれば、司令官時代のやり方の方が近いか」

「そうね。ただ、依頼人は反故にしたらカンカンに怒るし、違約金も発

生する」

「経営者が叱られる事を覚悟しておけ、そういう事か」

「まあ肋骨の1つや2つは諦めなさいな」

「そこまでか」

「ウツデイルーパーの社長がテッドの事務所の窓を突き破って通りに叩きつけられたのは見たわ」

「受けられるかの判断は慎重に、か」

「断つてばかりだとテッドも声をかけなくなるし、なにより飯の食い上げよ」

「バランス感覚は軍よりシビア」

「そういう事」

「コツは？」

「受ける依頼は吹っかける、安売りはしない」

「食える時に食っておけ、か」

「そうね。あと、テッドの提示額はそれほどの外れじゃないけど・・・」

ファッツは先程のやり取りを思い出した。

「少なくとも1回はゴネる価値がある。違うか？」

「あら、よく見抜いたわね。まあテッドだって自分の取り分は多めに欲しいわよ」

「まあ実地経験って奴だ」

「ねえファッツ、ほんとうどうしたの？一昨日とはまるで別人よ？」

ファッツは溜息をつくとき、ナタリアの細巻き煙草を指差した。

「えっ？」

「1本くれないか」

「良いけど・・・貴方吸う人だっけ？」

「司令官を辞めた日に禁煙したかな」

「・・・はい」

ナタリアがライターを差し出すと、ファッツは手際良く煙草に火をつけた。

「はあーあ、禁煙記録2回目のリセットだ」

「でっ。」

「まあ待ってくれ。久しぶりのメンソールなんだ」

「あら、メンソール吸ってたの？」

「そうだよ、ピークの時には1日3箱」

「・・・ちよつと興味本位の質問なんだけど」

「？」

「その、吸い過ぎると、女性を見ても、せ、性的興奮を覚えなくなるって、ほんとなの？」

「さつき無用な出歯亀で死んだ奴が沢山居ると言ったのはナタリアじゃなかったか？」

コトリ。

「ファツゾとナタリアにお茶を運んできたフローラがにっこり笑って言った。」

「もう私達は1度死んでるんで」

「ファツゾはむせこんだが、聞かすにはいられなかった。」

「ゲホゲホツ・・・でっ、出歯亀で死んだのか!？」

「ナタリアが真っ赤になって怒鳴った。」

「違うわよ!」

「ファツゾも真っ赤になってナタリアに反論した。」

「今の話の流れで考えたら普通そう思うだろ!？」

「私達が出歯亀如きで死ぬようなハマすると思う!？」

「その言い方だとしよっちゆう出歯亀やってんのか!俺の家も見てるのか!」

「やってるわけ無いでしょ!出歯亀出歯亀言わないで頂戴!」

事務所の外を掃いていたフィーナは箒を手に溜息をついた。

怒鳴り声を聞いた町の連中が途端に自分をジト目で見始めたからである。

もう少し、せめて事務所の中だけで聞こえる声量で会話して欲しいんだけどなあ。

少し後。

疲れきった様子で出て行ったファツゾに首を傾げると、フィーナは事務所に戻った。

「えっ・・・何この状況」

ナタリアは真つ赤になつて俯いてるし、フローラは両頬に両手を当ててきやあきやあ言っている。

背後からミレーナの声がした。

「ただいまー・・・何これ」

フィーナは肩をすくめた。

「多分ボスがファッツさんから何かを聞いたんだと思うんだけど・・・私は聞いてないのよ」

「じゃあ聞きましょう」

「そうしますか」

ガタリ。

フィーナはナタリアの前に立つと

「さ、お話ください」

と、にっこり微笑んだ。

「何聞いてんですかボス」

渋りに渋るナタリアをフィーナがなだめすかして懐柔すること12分。

ついに口を割ったナタリアの回答に対するミレーナの感想だった。

「ずっと疑問だったのよ。その、ほんとかな、って」

フィーナは自分の胸の前で組んだ手を静かに見つめながら続けた。

「で、ファッツさんは何と?」

「・・・か」

「か?」

「かわんない、って・・・」

「よかったですねー(棒)」

「反応薄くない!?!」

「呆れ返ってるだけです」

「ぐっ」

「ちなみにボス」

「なによ」

「さつき私達が出歯亀中に死んだとか何とか怒鳴ってましたけど」

「変な風に端折らないでよ！全然違うわよ！」

「表にまで聞こえてて、町の人が一気にジト目になってましたからね」
「えっ」

「報告は以上です、ボス」

「……も〜」

湯気が出そうなほど真っ赤になって机に伏したナタリアをちらと見て、フィーナはミレーナと肩をすくめた。

「しばらく色んな人から誤解されそうよ」

「とりあえず笑つとけば良いんでしょ？」

「そうね」

その後、面と向かってワルキューレを冷やかす根性がある者など居なかつたので、表面上は静かだったそうなの。

噂が乱れ飛んでいるのは今更である。

なお、ナタリアは今なお物の見事に肝心な事を聞き忘れた事に気づいていない。

第20話

話はこうして現在、つまり夜中のコンテナ埠頭へと戻る。

「うー」

「ボス、帰り運転したら絶対コケますよ?」

「ここで寝るゝ」

「ダメです」

「うー」

フィーナは溜息を吐いた。

旧コンテナ埠頭は最初からナタリアとフィーナの二人しか居なかったが、今は真夜中といって良い時刻。

周囲の町明かりもすっかり減ってしまい、ふと見上げれば綺麗な星空である。

そしてしんしんと寒さが降りてきている。

「バイクで来てるのにモヒート一本を立て続けに飲むなんて・・・」

フィーナは自分のバイクをキックスタンドで立たせると、ナタリアに近づいた。

「ボス、そこで寝たら風邪引きますよ」

「うー」

「何をそんなに悩んでるんですか?」

「・・・」

そしてナタリアの耳元で囁いた。

「抱かれない男でも居るんですか?」

「・・・うん」

フィーナは素直過ぎるナタリアの返事にびくりとした。

「こ、これはもしかして、聞き出すチャンス!」

「それはひよつとしてー、テッドさんですかー?」

「・・・」

「ライネスさんですかー?」

「・・・」

・ま、まさか。

「・・・ファツゾさん・・・ですか？」

「うん」

フィーナは一人真っ赤になってきよろきよろと周囲を見回した。

い、今、ボス、「うん」で言った!? 言ったよね!?

も、もう1回聞いてみよう・・・

「好きな人はファツゾさんで間違いないですかー?」

「そう・・・よ・・・むにゃ」

ほ、ほ、本物だー!?

ボイスメモ用意しとくべきだったー! って何に使うのよ私!

「ううーん」

ナタリアがバイクごとよろめいたので、フィーナは真っ赤になりながらもナタリアのバイクのスタンドを起こした。

そしてナタリアに肩を貸し、手近にあった木のベンチに二人で腰を下ろす。

フィーナの思考は目一杯空回りしていた。

ボ、ボボ、ボスの本音聞いちゃった気がする。

やーどうしよう私。もうファツゾさんをまともに見られない。

その前にボスと明日から普通に会話出来る自信が無い。

しかしボスはどうしてファツゾさんが好きなんだろう?

いやーどうしょ。どうしょー!

そして夜明けまでそこに居た為、二人は見事に風邪を引いた。

「へぷちっー!」

その声を聞いた時、ミレーナは怪訝そうに顔を上げた。

誰だ今の可愛いくしやみの主は。

「へぷちっ・・・へっ・・・へっ・・・へぷちゅん! うー」

そして主を見つけたミレーナは目を見開いた。

嘘でしょ。フィーナなの!?

「くしゅっ!・・・ふっ・・・ふっ・・・くしっ!」

違うくしやみの声がして、同時にフローラの驚いた声がした。

「・・・ボス？」

「なに？・・・ふっ・・・くしっ！」

「あの、やたら可愛いんですけど。ボスのくしやみ」

「ちつとも・・・くしゅっ！・・・嬉しく無いわよ」

「いや・・・それ、破壊力ありますよ？」

「へぷちっ！」

「いや、ボスのも可愛いですけど、フィーナもなかなかだと思っな」

「いやーここはボスでしょー」

フローラとミレーナは互いを見て頷いた。

これは白黒つけたい！

「朝っぱらから何を言っただよ、フローラ」

「いーから早く！」

まずフローラがすっ飛んで行った先はテツドの事務所だった。

テツドは二人のくしやみを聞いていたが、

「いや、これ完璧風邪だろ。早く寝かせてやれよ。2〜3日仕事待ってやるから。じゃな」

と言って帰ってしまった。

フローラは腕を組んだ。

「うーん・・・後誰が良いかしら」

ミレーナがぽんと手を叩いた。

「ファッツさんなんてどう？」

「良いわね！」

そしてファッツの事務所にミレーナが訊ねてきたという次第であつた。

「・・・二人のどっちが可愛いくしやみかって？いや、知らん」

「知ってるかじゃなくて、聞きにきてください！」

「今？」

「はい！早く早く！」

「二人がくしやみしてるのか？」

「はい。それも盛大に！」

ファッツは眉をひそめた後、

「んー…後で行く。用意があるから先に戻っててくれ」

と言って部屋に戻ってしまった。

ミレーナはベレーに訊ねた。

「なんか怒らせちゃったかな？」

「いえ、そんな事は無いと思います。ファッツさんが怒ると気配が変わるんで」

「気配？」

「すっごく怖いです」

「へー…まあ、じゃあ事務所で待ってるからって言つといて」

「はい」

そして20分後、ワルキューレの事務所。

「あーやつぱり、こりや大風邪引いてるよ」

「うー…さつきからちよつと熱っぽいとは思ったのよねえ」

「すいません…外で夜明かししちゃって」

ファッツは事務所に来るなり、二人がふらふらなのに気がついた。溜息をつくと持参したバスケットを机の上に置いた。

「ちよつと待てな…」

そういつてバスケットから取り出したのは3つの魔法瓶と紙コップだった。

目で追っていたナタリアは怪訝そうに訊ねた。

「ファッツ、それ何？」

「魔法瓶」

「中身よ」

「飲んで当ててみる」

そう言うとファッツは1つ目の魔法瓶からコップと中身を注いだ。

濃い茶色の液体は、とても芳しい匂いを漂わせた。

「あ、いい香り」

「ほら、フィーナも飲んでごらん」

「…ありがとうございます」

「完全に鼻声だね」

「はい」

それぞれ渡されたコップを両手で包む二人。
そつと口をつける。

「・・・ハーブテイ？」

「ご名答。美味しいかナタリア？」

「ええと・・・」

「フィーナはどうだ？」

「厳しいです・・・匂いだけの方が良いかなあ」

「そうか。ナタリア、どうだ？」

「うーん・・・それがあんまり味がしないのよね・・・」

「それはちよつとマズいな」

ミレーナが突つ込んだ。

「えっ、ファツゾさん、それどういう意味です？」

「飲んでみ？ヤバい物を入れてないから」

「・・・はあ」

ずずつと一口啜つたミレーナは目を白黒させた。

「濃ゆっ！苦っ！うっ・・・うがいしてくるー！」

ミレーナが洗面所に駆け出したので、フローラははつとした顔になつた。

二人はこれを平然と飲んでいるのである。

第21話

意味に気づいたフローラはファッツォに言った。

「つまり二人とも、味覚が・・・」

「うん。熱によるものだと思う。で、2つ目だ」

「それは・・・聞いても?」

「これは生姜湯だ。濃さも普通だよ」

コップに生姜湯を注ぎながらファッツォはフローラに言った。

「二人はこれを飲んだら早く休ませたほうが良いと思う」

「この場合って、ビットさん達を呼んだ方が良いんでしょうか・・・」

「艷装の不具合によるものじゃないし微妙な所だね。けど、起きてて良いとは思えない」

「じゃあ二人のベッドメイクしてきます!」

「うん、頼んだよ」

ズズ・・・ズズズズズ・・・

ナタリアは生姜湯をゆっくり飲み干していた。

全く味がしない。お湯じゃないのこれ?

フィーナはちらちらとナタリアとファッツォを見ては、そつと生姜湯を飲んだ。

「う・・・あたま・・・痛」

ナタリアは急にそう呟くと、眉をひそめて額に手をやった。

ファッツォは腕組みをしてフィーナに訊ねた。

「こうなる原因に心当たりは?」

「ボスは昨晚、モヒートを一缶空けました」

ファッツォがすつとんきよんな声を上げた。

「一缶?!」

ナタリアが呻いた。

「そんなに飲んだっけ・・・それからあまり大声出さないで・・・お願い・・・」

「ああすまん、じゃあこつちの方が良いな」

「うー?」

「こっちの魔法瓶は、シジミの味噌汁なんだよ」

「あー・・超飲みたいわー」

「待ってる・・あ、フィーナはどっちが良い？」

「私は生姜湯の方が良いです」

「じゃあこっちだな。もう一杯飲むか？」

「頂きます」

「ん・・ほら」

熱でぼうつとしながらも、フィーナはファツゾを見返した。

「どうした？視界がぼやけるか？」

「あ、いえ、大丈夫です」

「そうか。フローラがベッドを作ってくれてるから、飲んだら寝ると

いい」

「・・はい」

「ファツゾお、お味噌汁う」

「ああスマン・・ほら、熱いから気をつけて」

「ん・・おいしー」

「ナタリアも飲んだら休むと良い」

「部屋まで連れてってよう」

「女の部屋に上がりこめるか馬鹿」

「本人が良いって言うてるんだから良いでしょー？」

「朦朧してるなあ・・あ、フローラ、出来たか？」

「お待たせしました！出来ました！」

「よし、二人とも足元がふらついてるから、ナタリアはフローラ、

フィーナはミレーナが肩貸してやってくれ」

「はーい」

「表の札はclosedにしておく。後で適当に見繕ってくる。皆は

食品アレルギーはなかったな？」

「ボスもフィーナも全くありません」

「フローラとミレーナは？」

「甘いものが大好きです！」

「アイスならブルーベリーで！」

「・・・まあ良いか。じゃ、後でな」

そう言つてファッツは札をくるりと返すと、そつとドアを閉めて出て行った。

そして。

「じゃあねフィーナ、こっちは気にしないで寝てなさいよ」

「ごめんねミレーナ」

「顛末は後でゆつくり聞くからね？」

「・・・うん、治ったら」

「ええ」

パタン。

天井をぼうつと眺めながらフィーナはつらつらと思ひ出していた。テッドは私達を見た途端、ちゃんと遠慮して早々に帰つて行った。仕事も待つてくれたし、良い上司という感じだった。

一方でファッツは最初から私達がどういう具合かを考えて、その対策を持つてきてくれた。

生姜湯を飲んで初めて猛烈に喉が痛かった事、体が冷え切つていた事に気がついた。

フローラ達にベッドメイクや私達を運ぶ役をさせたのも紳士的だ。さすが元なんでも屋。気配りは町内一だ。

・・・いや。

そこでフィーナは気づいた。

なるほど、あれは「お父さん」だ。

年頃の娘の体調不良を気遣い、嫌がりそんな事は始めからしない。そういう段取りを組み慣れてる。

さすが、「ミストレルの父親」とか「ファッツお父さん」とか呼ばれる訳だ。

まあテッドにしてもファッツにしても親切だし、悪い気はしない：でもやっぱり私にはナタリアがファッツを好きになった理由が解らない。

ボスとはほとんど一緒に居るのになあ・・・

・・・しんどい、ちよつと寝よう。

目を瞑ったフィーナはあっという間に眠りについた。
一方。

「うー・・・」

「ボス、ほら横になってください・・・靴脱いで」

「ごめんねえ」

「良いんですよ、どうして風邪引くまで外でモヒート飲んでたか教えてください」

「えっ」

「後で良いですから、じゃー」

「あっ・・・うん・・・いや・・・出来れば違う事で・・・」

パターン

ナタリアはベッドの上でズキズキする頭を抑えつつ、そつと横を向いた。

視線の先にはいつも自分が座る椅子が見える。

「んー・・・」

そこに座るファッツの姿を想像する。

正直、自分でも良く解らないのだが、ファッツに全て晒してしまいたい。

これを好きと言って良いのかフィーナに聞きたかったのに、恥ずかしくて言えなかった。

さつきは部下3人の目の前からと辛うじて理性が勝ったが、ちやんと隠せたかしら。

「うー」

なんか熱でぼうつとしてるせいで隠し切れなかったような・・・

ナタリアはそつと椅子に手を伸ばした。

「もし、そこにファッツが居たら・・・」

きゅつと手を握ってもらって・・・濡れタオルを額に当ててもらって・・・

体とか・・・拭い・・・

ナタリアはそのまま眠りについた。

第22話

ファッツゾがワルキューレの事務所を再び訪ねてきたのは夕方だった。

事務所のドアをそつと開けると、事務処理をしていたミレーナ達が気づき、声をかけてきた。

「ファッツゾさん、こんにはは」

「二人は？」

「朝からぐつつりです」

「そうか。熱があると水分が逃げるから、これをそれぞれの部屋に」

そういつて天然水の入った2リットル入りのペットボトルを袋から出し、蓋をパキッと開ける。

「あ、ウォーターサーバーありますよ？」

「本人にしろ看病する人にしろ、部屋から何度も汲みに来るのは大変だろ？」

「・・・おお」

「なるほど」

「それから、このヨーグルトは二人の夕食に」

「あー、食欲なさそうですもんね」

「うん。ただ冷たい物だけだと体が冷えるから、これ温かい紅茶。1人1本ずつな」

そういつて「紅茶」とシールが貼られた魔法瓶を2つ取り出す。

「はい」

「明日の朝は、二人が大丈夫と言っても無理させるな。りんご位が良いと思うんだが、二人は剥けるか？」

「大丈夫です」

「ん。じゃあ4個渡しておく。昼と分けても良いから無理して食べさせないように」

「はい」

「と、いうことで看病を頑張ってくれる二人には、これだ」

「あつ！ブルーベリーアイス！」

「チョコアイス！」

「あと、お粥のレトルトも買っておいた。湯煎かレンジで温めれば良い」

「レーションみたいなもんですよね？」

「まあそうだ。梅粥だからさっぱりすると思う。ティーバッグの緑茶も置いとくから」

その時、ミレーナがまじまじとファッツを見ていたので、ファッツは首を傾げた。

「ん？なんだ？」

「・・・ファッツさんって」

「ああ」

「お父さんですよねえ」

「なんだそりゃ」

「どうしてこんなに手際良いんですか？」

「まあ、鎮守府ではそれなりに所属艦娘がいたんだ」

「ええ」

「数が居るって事は、しょっちゅう誰かしら怪我したり体調を崩してるんでな」

「・・・」

「まあその、こういうのも慣れたんだよ」

「不具合の対処って工廠の人がやりませんか？あるいは間宮さんとか」

「うちは小さかったから間宮さん居なかつたし、皆工廠にはちやんと行かせたんだが・・・」

「はい」

「なんか知らんが、俺が看病に来いって指名されてなあ」

「怪我人や病人の言う事じゃ無碍にも出来んし、こんな感じで手伝ってもらえばやれてたからな」

フローラが優しい目でファッツを見ながら言った。

「お父さんだ」

「えっ?」

「お父さんだ」

「おいおい、まあ、フローラ位の娘がいてもおかしくは無い年だけどき・・」

「そうじゃなくて、心意気がお父さんだつて事」

「そうか。そんなもんか」

「きつとファッツさんの鎮守府は、あつたかかったんでしようねー」

ファッツは悲しそうに笑った。

「俺がクビになつたから、皆記憶を奪われてバラバラに再配属されていったけどな」

「あつ・・」

「その行き先でどうなつたかは、正直今も心配だよ」

「・・」

「まあ、過去を知つてるといふか、覚えてるのは俺だけだから良いけどな」

「皆さんが・・」

「うん?」

「再配属先で幸せにやっていると、良いですね」

「そうだなあ・・」

何となくしんみりした雰囲気になつたので、フローラとミレーナは申し訳なきようにファッツを見た。

ファッツは手を振つて言った。

「良いよ良いよ昔の話だ、じゃ、二人とも悪いけど頼んだよ」

「あ!ファッツさん!」

「なんだ?」

「請求書ください。ちよつと後日になると思いますけど必ず精算しますから」

「・・病人から金むしるような極悪人に見えるか?なんでも屋としてやつてるわけじゃないぞ?」

「それは解つてますけど、ファッツさんにお支払い頂く理由がありません」

「んー…ま、ナタリアには運び屋を始める時の借りを返した。そんな風に言つといてくれ。じゃあな」

ボタン。

閉まったドアを見つめながら、フローラは悲しげな目で微笑んだ。
あんな司令官が沢山居たら、艦娘達はさぞ幸せだったろう。

どうして良い人はクビになり、悪い司令官がはびこるのだろう。

私達が始末しなきゃいけないような、救いようのない司令官が。

冷凍庫の奥底にアイスを仕舞ったミレーナは、フローラに声をかけた。

「どうしたの、フローラ？」

「ううん。世の中上手くいかないよね」

「・・・」

ミレーナはフローラの目を覗き込んだ。

「えっ？」

「まあ、軍は割り切りの世界だからさ」

「・・・」

「割り切れない人は弾かれちゃうけど、割り切り過ぎてても弾かれな
いんだよね」

「・・・」

「だから私達みたいな組織が、割り切り過ぎる人を弾くしかなかった
んじゃないかな」

「・・・何とかならないのかなあ」

「戦争が終わって、軍が用済みになるしかないよね」

「でもさ、終わったら、私達は無用だよね」

「そうね」

「そうなった時、ミレーナはどうしたい？」

「そうねえ・・・」

ミレーナは少し考えていたが、

「ファクションモデルやりたいかな！」

「そのままっ！」

「このまま」

「なんで？」

「化け放題じゃない」

「体重管理は要るけどね」

「うっ・・・ま、まあ・・・それは・・・」

「ははっ、変な事聞いてごめん。じゃあヨーグルトとか持っていこうよ！」

「そうだね」

実はミレーナは適当に答えただけだったのだが、フィーナ用の水とヨーグルトを手考えた。

戦争が終わった後、か・・・

第23話

「・・・すっごいなー」

ミレーナがそう呟いた理由は、

「ああ！ああ！そう！ヨーグルト！いちごのヨーグルトおお！」

そう言っただけでミレーナが目の色を変えてヨーグルトをがっがっ食べる姿を見ていたからである。

「そんなに好きだったっけ？ヨーグルト」

「今とっても食べたかったの！」

「へー。あ、あと紅茶も置いとくね？」

「あ、飲みたい！すぐ！」

「すぐですか」

「ジャストミートよ！」

ミレーナは心の中でファッツに拍手を送っていた。

こんなピンポイントでよく解りますねえ・・・

フローラとミレーナは事務所に戻ってきた後、冷凍庫からそつとアイスを取り出し、ニツと笑って領いた。

そして向かい合って食べ始めた。

「ご褒美があるというのは嬉しいものである。」

「そっちどうだった？」

「うん、フィーナが見た事無いぐらいの勢いでヨーグルト食べてた」

「ボスも食べたなあ。ゆっくりだけど全部。まだ熱あるみたいだったけど」

「フィーナは普通の顔色だったけど、ボスはどんな様子だった？」

「なんか、ぼーっとしてたよ？顔がちよっと赤くて、へらへら笑った感じ」

「大丈夫なのそれ？」

「私も聞いたんだけど、大丈夫大丈夫って言うからさ・・・」

「明日の朝の様子見て、変わらなければファッツさんに相談してみようよ」

「そうだね」

「ところで、さ」

「うん、私も提案あるんだけど」

「・・・一口」

「だよね」

二人はそういうと、互いにアイスを交換したのである。

「美味しいわー」

「パッケージからして高そうだよね。どこで買ってきたのかな?」

「なんかこう、ボスにもフィーナにも内緒でさあ」

「そつとご褒美の高級アイス食べるのって・・・」

「・・・」

「・・・」

二人はニツと笑った。

「すっごい美味しいよねー」

「背徳感と共犯感ものすごいわー」

「捨て方注意だよねー」

「あ、そうだねー」

「ひゃー、フタの裏舐めちゃおー」

「あつ、あたしもあたしも!」

二人はその晩、とても楽しかったそうである。

翌日。

「いや、大丈夫よ?起きて普通に食べるわよ?」

「ファツゾさんから、それでもリンゴを食べさせるようにと」

「あ、リンゴは貰う、けど・・・」

「なんですボス?」

「・・・ええと」

「リンゴは1人2個ありますから結構食べられますよ?」

「1個はお昼にしてさ、その、もうちょっと」

「お粥とかですか?」

「あ、良いわね」

「梅粥ならありますけど」

「良い！よく気がつくじゃない！」

「ファツゾさんが買ってきてくれました」

「・・・うちに渋いお茶なんて無かったわよねえ」

「緑茶のティーバッグが」

「あるの!？」

「ファツゾさんが以下同文です」

だが、途端にナタリアはしゅーんと俯き加減になった。

フローラは心配そうに手を取った。

「ボス？やっぱりまだ具合悪いんじゃないですか？」

「ううん。そうじゃないの・・・」

「・・・沢山お酒飲んだ事と関係します？」

「そう・・・ね、そうなるかなあ」

「話くらい聞きますよ？フィーナほど上手くないですけど」

「貴方達に優劣をつけてる気は無いんだけど」

「でも、こういうのってフィーナが一番対応してますし、それが合っているとしますし」

「・・・」

「フィーナもろとも風邪引いたのって、そういう事なんですか？」

「そう、ね」

「そろそろ吐き出した方がよくないですか？」

「・・・」

「今日はテッドさんも仕事待っていてますし、フィーナの具合が悪くなければ・・・」

「私個人の問題だし、あんまり良い話じゃないよ？」

「そうだとっても、です」

「・・・」

「私達は日頃からボスに色々気にかけてもらってますし、相談にも乗ってもらってます」

「・・・」

「だから私達がボスのお悩み聞くのだって良いと思うんです」

「・・・」

「ボスはよく言うじやないですか。事態が変わらなくても吐き出すだけで楽になる事もあるって」

「・・・」

フロローラは笑って立ち上がった。

「フィーナの様子見てきますね」

「・・・ええ、あの」

「はい？」

「ありがとう、フロローラ」

「いつもしてもらってる事ですから」

そして、ナタリアの部屋に全員が集まった。

言い淀むナタリアに、フィーナが口を開いた。

「・・・ボス」

「うん」

「あの夜、バイクに突っ伏して言った事覚えてますか？」

ナタリアの顔色がさあつと青ざめる。

「・・・な、何、言ったの？私」

「まるつきり？」

「記憶が無いんだけど」

「あーその・・・ファッツゾさんに抱かれたい、と」

キヤアアアアアアアアア！

同じ声を上げようとしたのはフロローラとミレーナだった。

だが、ナタリアが先に大声でそう叫び、声の可愛さと意外さに驚い

て声が引っ込んでしまった。

フィーナは肩をすくめた。

「まあほとんど丸解りなんですけど、一応補足貰えますか？」

茹でダコもかくやというほど全身真っ赤になったナタリアは、涙目

で体育座りになり、ふるふる震えている。

酔っ払いの与太話ではないと今証明してるようなものだが、3人は

思っていた。

やだ、ボスが可愛い、と。

「でもね、そういう気持ちってどうなのかな、好きって言っているのか

なって・・・それで私思ったの」

フローラとミレーナは既に数回足を組み直していたが、フィーナは相槌を打ちながらじっと聞いていた。

すでに2時間、話が止まらない。

乙女チックな告白が大フィーバーのノンストッププリミックスである。

ミレーナは思った。どんだけボスは溜め込んでたのよ。

「・・・という事なのよ」

ナタリアが口を閉じ、ようやく部屋が静まり返ったので、フローラはそっと溜息をついた。

フィーナが無表情に頷くと言った。

「つまりファッツゾさんが大好きで一人で悶々と考えまくって事実と想像の合い挽き肉状態である、と」

ナタリアが一瞬で真っ赤になった。

「あ、あああ逢引はまだ早いんじゃない!?も、もも物事には順序って物が」

「違います」

ミレーナは言った。

「まあ知らない仲じゃないから慎重になるのは解りますけどね」

「でしょ!?!そうよね! 攻略は慎重について教官も言ってたし!」

フローラは言った。

「ただ、戦況分析的に考えれば、ボスは相当不利ですよ?」

「やっぱりそう?」

「んーまあ、昨日の対応を見ればファッツゾさんはボスを決して軽くは扱ってないです」

「・・・そっかあ・・・えへへ」

「でもそれは、どっちかという具合の悪い艦娘を看病する司令官とどうか、お父さんの態度ですし」

「うっ」

「その方面から攻める場合、同居してるミストレルさんとかベレーさんの方が圧倒的有利ですし」

「そっ・・そうよね」

「そもそもファツゾさんがボスをどう見てるか、確認してないですよ
ね」

「ぐはっ」

ミレーナがそつとフローラのひざに手を置いた。

「あんまり致命傷負わせると可哀相よフローラ。戦況分析ほどドライ
にやらなくても」

「あっ、っい」

その間、フィーナはじつと、腕を組んで考えていた。

第24話

場が静かになったので、フィーナは顔を上げ、ナタリアを真っ直ぐ見た。

「ボスは・・・どうなりたいんですか？」

ナタリアは質問の意図を測りかね、そっと答えた。

「どう・・・って？」

「ボスがレ級である限り、ランニングゴストが膨大なのはご存知の通りです」

「・・・うん」

「一方で神武海運の話によればソロールでは艦娘や人間に戻れるそうです」

「・・・ええ」

「今のボスの姿で人間に戻って、ワルキューレも解散して、ファッツさんに飛び込むのは1つの手だと思います」

「・・・そうよね」

「ただ、それは後戻り出来ない選択ですから、お互いの合意の上で始めるべきです」

「ええ」

「そしてファッツさんに気持ちを確かめるなら、気まずい結果かもしれない事を覚悟しないといけません」

「・・・」

「その時ボスはワルキューレを、Deadline Deliver
sを、続けられますか？」

「・・・」

「ボスの恋路ですから、私達だって手伝える事は手伝いますし、決定を邪魔するつもりはありません」

「・・・」

「ただ、レ級のままファッツさんに飛び込んでも、ファッツさんは支えきれないと思います」

「・・・」

「どの道でも今とは決定的に変わって行きます。踏み出す限り」
「・・・」

フィーナはそこで言葉を切ってナタリアを見ていたが、続けた。

「だからずっと一人で悩まれていた。そういう事だったんですね？」

ナタリアは頷いた。

「・・・だって、私が仮に人間に戻ってしまったら、貴方達だって困るでしょう？」

「まあ2択ですけどね。ボスと一緒に人間に戻るか、3人でワルキューレ続けるか」

フローラが頷いた。

「独立だって出来なくは無いか、何もメリット無いよね。皆と居るの楽しいし」

ミレーナが続けた。

「ワルキューレに愛着はあるし、レ級でいる為の仕組みもボスが整えてくれたしね・・・」

「艦娘は無いわね」

「MADF? 永久に勘弁して欲しいわ」

「まあこんな感じで、もしボスが抜けたらその後は3人で話し合いますよ、心配しないでください」

ナタリアは溜息をついた。

「でも動かしたい理由は私の個人的感情。それも片思い。動くスケールと理由のバランスが取れなさ過ぎでしょ」

フィーナは首を傾げた。

「バランスが取れないと好きになった人に告白しちゃいけないんですか?」

「うっ」

「それは言い訳ですよ、ボス」

「容赦ないわね」

「変に達観して欲しくないのと」

「・・・と?」

「ボスはウルトラ級の引っ込み思案だつて良く解つたので」
「うっ」

フローラも頷いた。

「乙女モード全開で2時間語れるほど溜め込んでるとは思いませんでしたよ」

ナタリアは両手で頭を抱えて俯いた。

「ああああああ」

ミレーナはにこりと笑った。

「ただ・ボスが躊躇うのはそれだけじゃないような気がするんですけどねえ」

ナタリアはミレーナの方を向いた。

「なによ、私もう全部喋ったわよ?」

「じゃなくて」

「えっ?」

「ボス、今の仕事どうですか?」

「んー?仕事?」

「結構のびのび、上手くやれていますよね」

「ええ。さすがにもう慣れたしね」

「レ級だからこそ好きな海原進んでいきますし、稼ぎもそれなりにあるから何でも買えますし」

「そうねえ・・・」

「地上でだつてワルキューレの名前を出せば割と融通利きますよね」

「まあね」

「ファッツさんのお嫁さんとしてふつつーの人間になったら、それ全部無くなりますよ?」

「・・・あっ」

一瞬で顔色が変わったナタリアを見てミレーナは思った。

あ、余計な事言ったかもしれない。てっきり解ってるのかと・・・
「あーもうどうしよー、ねえフィーナどうしよー」

涙目のナタリアががつくんがつくん揺さぶられながらフィーナは無表情に答えた。

「どーしろっていうんですかー」

フローラは言った。

「いつそファッツさん囲いますか？ツバメとして」

ナタリアはフィーナを掴んだままフローラの方を向いた。

「えっ・・・どういう事？」

「援助交際の資本家的？」

「それ・・・パ・・・じゃない、ママって事!？」

「いやそんな言い回し初めて聞きましたし」

「私だつて今初めて言つたわよ何言わせんのよ!」

「でも、それならボスは好きな時にファッツさんと甘〜い時間を過ごせますよ?」

ミレーナが頷いた。

「仕事も今のまま、町での権力も今のまま、私達も今のまま、ファッツさんとの関係大前進!」

ナタリアは顎に手を置いた。

「意外と悪くな・・・いやいやいやいや」

「考えましたよねボス」

「考えさせたの貴方達よね!？」

「でも結構現実解ですよね」

「そつ、そりや、ファッツとご飯食べたし手を繋いだりあれとかこれとかキヤー!」

「具体例は別に聞きたくないんで」

「冷たくない!？」

「ぶつちやけ過ぎです。極端から極端へ飛びすぎです」

「もう何も怖いものなんて無いわ!」

「ねえフローラ、クレイモアって武器庫にあったわよね?」

「ボスの部屋吹っ飛ばすくらいならM67を数個放り込む方が安いよー」

「それもそうね」

ナタリアがジト目になった。

「微妙にリアルな話しないで」

フィーナが頷いた。

「よし。ボス！」

「ええ」

「告白しましょう」

「・・・は!?!」

「で、ファッツさんが良いって言うんなら先の事はファッツさんと相談しましょう」

「そ、そっか。まあファッツだって色々あるわよね・指輪とかー、新婚旅行とかー」

フィーナはナタリアのデレ顔にイラツとしたのでジト目で続けた。

「そもそもボスの事好きかどうか解りませんし」

「えっ」

「眉顰めて「俺はミストレルしか眼中にないんだ」と言われるかもしれないし」

「・・・うそ」

「「ベレーより上はBBA」ときっぱり言われるかもしれないし」

「えええええ!?!」

「まさかの「俺はテッドが好きなんだ」とか言うオチかもしれないし」

「そんなあああああ!そっちなのおおお!?!」

フローラとミレーナが声を揃えた。

「フィーナ待つて!ボスのライフはもう0よ!」

第25話

ナタリアがフィーナの言葉で変な方向の妄想全開状態になった、その時。

「おーい、誰かいるかー?」

「!」

今まさに話題の人が階下で呼んでいたのである。

「・・・いや、だから、女の子の部屋に入るのはマズいだろ」

「ボスはまだ具合悪いですし!」

「なおダメだろ!」

「覚悟が居るんですって! さあ!」

「お、おいおい押すなって」

ガチャツ!

階下で待っているのと断るファッツをフローラとミレーナが無理矢理連れてきたのである。

フローラが開けたドアの中を見たファッツは赤面した。

真正面にはベッドの上にちよこんと座ったパジャマ姿のナタリア。

隣の椅子には同じくパジャマ姿のフィーナが居たからである。

・・・パタン。

「ちよっ! 何でそっと閉めるんですか!」

「ばっ馬鹿! 二人とも寝巻き姿じゃないか! 俺はそこまで無礼者じゃない!」

「紳士モードはちよっと横に置いていってください!」

丸聞こえの3人の会話を聞いて、ナタリアとフィーナは頬を染めた。

フィーナは思った。

しまった。確かにこれは恥ずかしい。

海水は持つてないから変身という訳にも行かない。

ここで着替えさせて、もしドアが開いたらナタリアは自殺するか吹っ切れてファッツを押し倒すかどちらかだ。

どちらの先もろくでもない結末しか見えないからこのままいくしかない。

「……」

「……」

持ち込まれた椅子に座り、ナタリアの真正面に居ながら物凄く居心地悪そうに床しか見ないファッツ。

状況に反応しすぎて真っ赤になって押し黙ってしまったナタリア、という構図である。

フィーナは自分のパジャマの襟元を手で押さえつつ、深呼吸した。しようがない。呼び水は必要だろう。

「あ、あのう、ファッツさん」

「お、おお」

「まずは色々ご迷惑かけてすみませんでした」

「ああいや、俺はナタリアに Deadline Deliverers 始める時に世話になったしな。こういう時はお互い様だろ？」

「お互い様……」

「Deadline Deliverers は皆小規模な会社だ。うつかり体調を崩しちゃう事もある。俺だっていつそうなるか解らんしな」

「……」
「ウマの合わない奴は仕方ないが、互いに上手くやれるならその方が良いだろ？」

その時、ナタリアがそつと顔を上げて言った。

「……ファッツが、そんな事言うなんて思わなかったわね」

「ん？どれの事だ？」

「ウマの合わない奴なんて居るの？」

「おいおい、俺だって感情も嗜好もある。俺個人として気に入らない奴も居るし」

「……」

「ナタリア達を良く言わない連中だって気に入らんさ」

!!!

ファッツは普通にそう言ったのだが、ワルキューレの4人はピクリ

と反応した。

ゆえにファッツは首を傾げた。

「そんなに俺は誰にでもへらへらしてるように見えてるのか？」

フローラが思わず答えた。

「いつ、いえいえいえいえいえいえ」

ファッツは怪訝な顔でフローラを見た。

「なんでそんなにしどろもどろなんだ？」

「あ、ああああああの」

ファッツが一気にジト目になった。

「何かドツキリでも企んでるのか？」

「ちつ違います、違います！」

「それを鵜呑みに出来るほど鈍感じゃないんだが？」

「・・・鈍感よ」

ファッツの一言をおうむ返しにつぶやいたのは、ナタリアだった。

ファッツはいつもの癖でナタリアを見て、パジャマの開いた胸元が見えて慌てて下を向いた。

「な、なんだ。一体なんだナタリア」

「ファッツは鈍感、そう言ったのよ」

「ええっ？」

「な・・・なら、今の状況どう見てるのよ？」

「さっぱり解らん。本調子じゃあないなら横になってろとは思うが」

「横になりたいわよ」

「じゃあ何で呼んだんだ」

「仕事が手につかないからよ！」

「風邪引いた事に俺は何も絡んでないぞ？」

「絡むどころかバツチリど真ん中よ！あなたのせいじゃない！」

ファッツはサンングラスを外し、ナタリアをまつすぐ見た。

「待て。俺は本気で身に覚えが無い。俺がナタリアに何をしたんだ？」

ナタリアはファッツの膝の辺りを見つめたままぶるぶる震えていた。

フィーナはこの奇跡のような流れにドキドキしていた。これは千載一遇のチャンス！

フローラは思った。ま、結果オーライよね。後はボス次第だけど：
どうかなあ・・

ミレーナは両手をぐつと握っていた。ボス！頑張れ！ファイト！
永遠のように感じる5秒間が過ぎた時。

ナタリアはキツと顔を上げてまっすぐファッツを見た。

「わっ・・わたっ・・私はね・・」

「・・ああ」

「もう、ずっと、ずっとファッツの事が好きだった」

「え？」

「貴方がなんでも屋の頃から、貴方は良く私の事を見てくれてた」

「・・」

「機嫌の良し悪しも、具合の良し悪しも、そんな時私が何を欲しがるか
も」

「ま、まあなあ」

「それは商売柄だったかもしれない。そして私は深海棲艦で、しかも
凄く維持費のかかるレ級だし」

「・・」

「人間の貴方とどうこうなれる筈無いつて思ってた」

「・・」

「でも貴方はミストレルを迎えてDeadline Deliver
sになった」

「うん」

「Deadline Deliver sになつてからも、貴方はちや
んと私を見てくれた」

「・・」

「私が町の連中に何て言われてるか知ってる。とても悲しかったけど
貴方の言葉が救いだつた」

「ん？例えば？」

「そ、その、見る奴はちゃんとアタシの行動を評価してるし、俺もその

「一人だよ、とか」

「ああ、言ったなあ・・・」

「自分の不甲斐なさに気づきたくないから成功してる奴の悪口を叩いて誤魔化してるんだ、とか」

「その通りだろ？」

「嬉しかったんだもん！そうやって私が傷ついてる時にちゃんと励ましてくれるの貴方しか居なかった！」

「そ、そうか。あれ？なんか怒られてるのか俺？」

「今回の看病もそうだけど、適切な時に適切に優しくするのついていも見てないと出来ないじゃない」

「・・・まあな」

「だから嬉しかった。私を、ワルキューレのボスじゃない私を見てくれてるって」

「・・・」

「だから・・・えっ？あ、ありがとうとフィーナ」

ナタリアはフィーナが手渡したグラスの水をそつと飲んだ。

フィーナは思った。

ボス、少しだけブレーキ踏んでください。ファッツさん置いてきぼりです・・・

第26話

グラスをファイーナに返したナタリアは、軽く咳払いすると続けた。

「サウスウエストストリートが壊滅して、私達がここに事務所を再建した時だつて」

「ん？」

「町の皆に声をかけてお金集めて、私達のハーレーを直して贈ってくれたじゃない」

「あ、ああ。だつて攻撃の後、壊れたバイクを見つけたのは俺だしさ」
「ええ」

「直後のナタリアの落ち込みようは見てたし、そのまま返したら余計シヨックだつたらうし」

「・・・そうね」

「元々俺が紹介したバイク屋が売った奴だし、大事にしてたのは見てたしさ」

「そうよ、全部その通りよ」

「だから復興の印に丁度良いんじゃないかって・・・思ったんだが」

「ご丁寧なサプライズプレゼントにしてくれやがったわよね？」

「ああ、あれは入居日までに直せるか微妙だとバイク屋が言ったからさ。間に合わなかったら可哀想だし」

「私がこれから絶対泣かないって皆に宣言した直後に持ってきて、物の見事にぶち壊してくれたわよね」

「いや知らん、俺がバイク積んだトラックで行く前にそんな事言つたのか？」

「そうよ！あの後どんだけ冷やかされたと思つてんのよ！」

「そつ、えつ、あ、いや、すまん・・・」

「思い出したらまた涙出てきたじゃない！」

「そ、そんな嫌だったのか？」

「嬉し涙に決まつてるでしょ！」

「おいおい、俺はどうすりゃいいんだよ・・・」

フィーナ達3人はハラハラしていた。

ボ、ボス、落ち着いて落ち着いて。

ファッツさんめっちゃ引いてるから。

「あ、あなたはミストレルどころかベレーちゃんまで連れ込んだし」

「いかがわしい事なんてしてないぞ？人をロリータの変態みたいに言うのは止めてくれよ」

「じ、自分が気分屋なのは解ってる。解ってるけど、でも、でもね」

「ん？誰が言ったか知らんがナタリアが気分屋だなんて事は無いと思うぞ？」

フィーナが頷いた。

「ボスが気分屋って事は無いと思います。私達もそう思います」

「ええ」

「ですね。面倒見も良いですし」

予想外の形で皆から褒められたナタリアは頭に血が上ってしまい、くらくらしていた。

「あ、あううううう」

ファッツはカリカリと頭を掻いた。

自分の事が好きで仕事が見つからない。

こんな事真っ直ぐ言われるのは後にも先にもこれっきりだろう。

ナタリアにした事は別に鎮守府の司令官時代にもやった事だが、そんな事は言われた事が無い。

・・・と思う。

ファッツはナタリアに訊ねた。

「どうすれば仕事が見つかるんだ？」

「・・・えっ？」

「まずは目先の問題を一つずつ潰してくしかないだろ？」

部屋がしんと静まり返った。

ミレーナは内心、「無いわー」と思っていた。

別にボスは仕事に復帰したいからここまで打ち明けたわけじゃない。
い。

一大決心して告白したのに、ちよつとボス可哀相。

フローラは思った。

ボスは大体言いたい事を言えた気がするけど、これはファッツさん素で解ってないわ。

どう後押ししたら良い物やら。

フィーナは眉をひそめて考えていた。

ファッツが鈍感であれ超高度な思考をしたのであれ、実は今の答えは的を射ている。

レ級の維持コストを激減させる方法はとりあえず無いし、町への影響を考えればワルキューレ解散も難しい。

かといってナタリアが気持ちを押し殺すのはもう無理だし、ならばその中で妥協点を見出すしかない。

ナタリアだけが人間に戻るって手もあるけど、ナタリアを快く思っていない連中は確実に居る。

人間に戻れば格好の標的にされるだろうし、ファッツも巻き添えを食いかねない。

S W S Pのメンバーでテッドと同時に守りきれれるかは微妙だ。

フィーナが口を開いた。

「とりあえず、一緒に住んでみませんか？」

ファッツとナタリアは同時にフィーナを見た。

いや、正確にはフィーナ以外の全員がフィーナを見た。

フローラが呆気に取られて放った

「は？」

という言葉が場の雰囲気良くあらわしていた。

だが、その意味に最も早く気づいたのはナタリアだった。

「えっ・・・ええっ・・・わ、私は良いけど・・・ファッツあなたどう？」

ファッツは首を傾げた。

「んー？まあうちは部屋だけは沢山あるから構わんが、一緒の家で住んで何か変わるのか？」

ナタリアが訂正する前にフィーナが突っ込んだ。

「一緒の家ではなく、一緒の部屋でって事です」

ファッツはぎよつとした顔になった。

「え!?だ、だって、そ、それはイカンだろ・・・」
ナタリアがぷくりと頬を膨らませた。

「何がいけないのよ」

「だって間違いでしょ起こしたら軍法会議もの・・・あ、そうか。司令官じゃないのか」

「そうよ。私とあなたは上司と部下でもないし、司令官と兵士でもないわ」

「若い女の子を見ると艦娘として節度を持って対応しないっていうクセがついててなあ」

「恐ろしいまでの紳士的な司令官根性ね」

「・・・ん?」

その時、ファッツはふと気がついた。

そう言われればそうだ。

俺はもう、司令官ではない。

海軍学校では散々艦娘との距離感や心構え、対応方法を教え込まれ、着任後は適宜アレンジしてきた。

それは辞めた後もそのまま習慣になってたし、町で信頼を得る役に立ったと思う。

だが、艦娘、いや、深海棲艦であるナタリアとは、その意識で応じなくても良いという事か。

俺だってお互いに好きなら楽しく過ごしたい。

ああ、そうか。同居なら、そんな事も出来るのか・・・

何となく、海軍に入ってから恋愛という感情そのものを封殺してた気がするな・・・

そんな事を思いつつ、ファッツは何気なく口にしてしまった。

「うちの家・・・部屋の仕切り壁はそんなに防音性無いんだが・・・」

それを聞いたワルキューレの面々は、1つのコトを想像して真っ赤になった。

第27話

口火を切ったのは、震えながらファッツを指差したフィーナだった。

「い、い、いきなり話が飛びすぎです！そ、そそ、そっちの紳士ですか！」

フローラは自分の両頬に手を当て、首を振りながら言った。

「ひっ、一晩中そんな声聞かせたらミストレルちゃんやベレーちゃんの情操教育に良くない！良くないです！」

ナタリアはちらちらとファッツと床を交互に見ながら言った。

「わ、私はファッツが聞かせたいなら・・・その、良い、かなって・・・」
ミレーナは絶叫した。

「柔軟性高すぎですボス！フローラも何一晩中とか言ってるの変態！フィーナも何とか言いなさい！」

ファッツは自分が言った事をどう取られたかに気づき、その反応に真っ赤になった。

「お、俺は部屋で談笑しても廊下に声が聞こえるって意味で言ったんだが・・・あ、そっちか、そっち、な・・・」

ミレーナが即座に反撃した。

「紛らわしすぎです！絶対狙ってやっていますよね?！」

「ま、待て、誤解だ。ていうか俺のせいなのか?！」

「他に誰も居ません！」

「お、おお：あ、でも一晩中なんて絶対体力続かないから心配しないで良・・・」

「そんな事心配してないです！」

その時、キリツとファッツの方に向いたフィーナは真顔で訊ねた。

「では、何時間までならOKなんですか?！」

「どきくきに紛れて何聞いているのフィーナ!?私一人に突っ込み役押し付けないでー！」

「な、何時間って、そんなの計った事ない。30過ぎてからはその、1回か2回で」

「ファッツさんも真面目に答えないでください！」

「一晩・・・2回まで・・・」

「何メモしてるんですかボス！」

「あ、いや、毎晩は無理だよナタリア？さすがに続かな」

「ファッツもおおおおおおおお！」

その場で唯一の常識人となったミレーナだけでは到底持ちこたえられない筈も無く。

大変爽やかな朝の雰囲気になくふさわしくない濃い会話とは表通りにまで漏れ聞こえていた。

ゆえにワルキューレ事務所の前に、頬を染めて聞き耳を立てる静かな群衆が出来たのも無理なからぬ話で。

なお、家に戻ったファッツはミストレルとベレーに告白された事を正直に打ち明けた。

するとミストレルは眉をへの字に曲げ、

「ああん？もしかしてファッツ・・・今まで気づいてなかったの？」

ベレーは気の毒そうな顔をして

「ナタリアさん・・・あんなに解り易いサイン出してたのに・・・」

そして声を合わせると

「二ブ過ぎ」

と、重い溜息を吐かれたそうである。

その晩。

「はぁ・・・」

「ファッツさん、お代わりは？」

「うーん」

「・・・全然聞いてないわね」

ルフィアはそう言っ肩をすくめると、カウンターに陣取るファッツの横を過ぎていった。

その光景をカウンターの端から見ていた情報屋のマッケイは、ジントニックのグラスを手近づいて行った。

「よう、ファッツのダンナ」

「・・・ああ、マツケイか」

「えらい上の空だな」

「ああ、ちよつとなあ」

マツケイはちらりとファッツゾを見て、カウンター越しにライネスを見た。

ライネスはグラスを拭いていたが、視線に気づくとそつと厨房の奥に移動していった。

「俺は感謝セールとかはしたことねーんだけどよ」

「ああ」

「ファッツゾがそんな調子だと俺も困るんでな」

「ああ」

「ケイルに聞いてみたらどうだ？」

ファッツゾはその時になって、怪訝な表情を浮かべるとマツケイのほうを向いた。

「なんでそこでケイルが出てくるんだ？」

「ファッツゾ、あんな美女美少女の艦娘がうじゃうじゃ居る鎮守府で司令官は男一人なんだぞ？」

「・・・あ、ああ」

「まともな男なら半日もたたずに襲い掛かるか誰かに恋する筈だろ？」

「・・・」

「なんでそういう事にならねえか、だよ」

ファッツゾははつとした。

艦娘の艦装には、感情を抑制する装置が組み込まれています。

海軍時代に教官が教えてくれた事だ。

長期に渡って戦地で戦い続けるには、艦娘達はとても多感で、自己制御だけでは心許ない。

事実、最初期は精神を崩壊させてしまう艦娘が相次いだが故に、やむを得ず組み込んだ。

僚艦の轟沈や色恋沙汰など、時にドライな態度を取るかもしれないが、それはその影響だと。

恋愛問題についてはそういうものだと思って、そこで考えが止まっていた。

だが。

当然司令官側にだって、恋愛感情はあるはずだ。

・・・まさか。

マツケイはファッツの肩を叩いた。

「そろそろ司令官を捨てて来いよ、ファッツ」

ファッツはがたりと席を立ち、札を何枚かカウンターに置いた。

「ライネス、マツケイと俺の分だ！」

慌しく出て行ったファッツを目で追いながら、マツケイは呟いた。

「色んな意味でぐちそうさん。未永く仲良くやんな」

コトリ。

振り向くとライネスが目の前にジントニツクを置いていた。

「・・・これは？」

「感謝セールとやらに乾杯だ」

マツケイはライネスを見返し、二人はニツと笑った。

第28話

「ええ。適性検査の数値によるらしいですが、ホモか不能でもない限り適用されますよ」

「・・・」

「過去に何度か司令官がコトを起こした為、その対策だと聞いてます」
「コト？」

「風呂や寝室を覗いたり、匂いを嗅いだり、もっと直接的な犯罪方向とか」

「あー・・・なんでそんな事さえ気づかなかったんだ・・・」

ファッツはケイルに次の札を渡しながら溜息をついた。

少し考えれば解りそうなものなのに・・・

だが、ケイルはにこりと笑った。

「自分を責める必要は無いですよ、ファッツさん」

「どうしてだ？」

「その方向に考えが行かないように誘導するそうですから」

「・・・そこまでか・・・っつ！」

ファッツは左のこめかみを押さええうずくまった。

「あ！まだ入ってたのか・・・ええつと」

ケイルは携帯を取り出した。

「気がついた？ファッツさん」

「・・・あれ？アイ・・・ウイ？」

「私達も居るわよつと」

「ビットに・・・ケイル・・・か」

「OK。大丈夫そうね。もうちよつと寝ていくと良いわ」

「お茶持って来てあげるね」

ビットとアイウイが歩き去ったので、ファッツはケイルに訊ねた。

「・・・事態が飲み込めてないんだが」

「いや、すみません。僕の確認ミスでした」

「えっ？」

「ええつと、さつき僕と会って話をした事は？」

「覚えてる・・・司令官にも感情の抑制装置が適用されているかと・・・訊ねたと思う」

「その先は？」

「・・・いや」

「やっぱりそうですね。まずその答えはYESで、ファッツさんはまだ制御装置が入ってたんです」

「・・・」

「そのままさっきの説明を聞くと、制御装置が当該部分の記憶消去を行います」

「・・・あ、じゃあ」

「はい。さっきの頭痛は記憶消去措置に起因するものです」

「なぜそんな事を・・・」

「制御装置が入っている事が解れば、取り外そうと試みる司令官も出てくるでしょうから」

「そこだけ消すって事か」

「ええ。あまり大規模に消すと却って制御装置の存在に気づかれやすくなりますからね」

ファッツは溜息をついた。なんて高度な装置なんだ。

「で、それをビットが外してくれたのか？」

「ええ。作動した時痛くなる場所に装置が入ってますから」

「俺の場合はこめかみだったってわけか」

「埋め込まれる位置はランダムなんです。予期しない形で痛い思いをさせてしまったのは申し訳なかったです」

「いや、いい。これでスッキリしたし、今頭痛がしないって事は今後も無い。そういう事だろ？」

「ええ」

その時。

「ちよつと塩分取った方がいらしいから、昆布茶にしたよ？」

アイウイが湯飲みを乗せた盆を手に入ってきた。

「ありがとうアイウイ。えつと、支払いは足りてるかケイル？」

「ええ。大丈夫です。ちゃんと頂いてます。じゃあ僕はこれで」

ケイルと入れ替わるように傍に立ったアイウィは

「うちの請求はまだだからね？」

と、にっこり微笑んだ。

翌朝。

「朝帰りなんてどうしたんだよファッツォ？」

「良かった：朝になっても帰ってこなかったらナタリアさんの所に行こうって」

「ああいや、すまん。ちょっと司令官を捨ててきたんだ」

心配そうな顔で出迎えたミストレルとベレーに、ファッツォは力なく手を振った。

「・・・まあそんなわけで茶を飲んで再び寝たら朝だった。治療費も5000コイン位で済んだというわけだ」

「ひついでー事しやがるな」

「まあ待て、ケイルだって悪気があったわけじゃ」

「ちげーよ、海軍だよ」

「ん？」

「司令官の頭になんてもの埋めてんだよ」

「・・・まああれだよ、軍は司令官だけで何万人と雇わにやならん」

「うん」

「軍務に適性があれば、それ以外まで贅沢言ってられる数じゃない」

「・・・まあな」

「かといって憲兵が艦娘達を手籠めにする行為に四六時中目を光らせ続けるのも無理がある」

「・・・」

ファッツォは肩をすくめながらミストレルを見た。

「お前にしろベレーにしろ、相当な美少女だ。劣情を抑え続けながら仕事するのは司令官だって辛いさ」

「・・・」

「最初からそういう感情が湧かず、可愛い部下として接する事が出来るならそれはそれで正しいんだよ」

「・・・ファッツォは怒ってないのかよ」

「んー、まあそうかなと納得してる」

「そっ・・・か」

「何より、外してもらえたしな」

ミストレルがニツと笑って胸の谷間を強調するように寄せた。

「じゃーファッツはこれからアタシ達を見るとドキドキすんのか？うりうり」

急に真顔でミストレルを見るファッツ。

予想外の反応にミストレルは固まった。

「・・・えっ？」

5秒後。

「・・・ガオー！」

「うわああっ！」

「・・・なわけないだろ」

「ビツ、ビツクリさせるなよっ！ばか！」

涙目で胸元を隠す姿って、ちよつと色っぽいな。

・・・おお、ちゃんと思うこと思い始めてるじゃないか、俺。

ファッツは苦笑しながらミストレルの頭を撫でていた。

ファッツがいつもより豪華な朝食を作り、皆で食べ終えた後。

「少し、海風に当たってくる。考えをまとめたい」

「んー、姉御には説明してきた方が良いかもしれねーぜ」

「ナタリアに？」

「ああ。一世一代の告白をやたら冷静に処理された姉御の身にもなってみろっつての」

「・・・そうか」

「ま、姉御とファッツならアタシは大歓迎だぜ」

「そういうもんか？」

「まあその、二人とも凄い奴だからな・・・お似合いかなって」

「ベレーは・・・どうだ？」

二人に見られたベレーはにこりと笑った。

「ファッツさんもナタリアさんも幸せになって欲しいです。だから応援しますー！」

「そつ、そうか．．ありがとう、ベレー、ミストレル」
そういうとファッツは入り口のドアを開けた。

「．．抑制されない感情、か」
ファッツは珍しく徒歩で移動していた。

朝食を作る事でだいぶ考えは整理出来たものの、まだもやもやが残っていた。

そして戸惑つてもいた。

「．．．」

防波堤の見える橋の上で、ファッツはふと海の方を見た。

Deadline Deliversと思しき船団がゆつくりと
沖に出て行くのが見える。

船が立てた波に日が反射してキラキラと輝いていた。

「．．綺麗だなあ」

司令官として何百何千と出航の様子は見ていた筈なのに。

景色一つ、言葉一つに心が動くのが新鮮でもあり、不思議でもある。
そしてまだ、受け入れられずにいる。

ファッツは目を細め、小さく溜息をついた。

第29話

プツプツ!

橋の欄干にもたれていたファッツはクラクションの音に気づいて振り向いた。

静かに止まったのは黒のキャデラック・フリートウッド。

その運転席の窓から身を乗り出していたのはテッドだった。

「ようファッツ、また車壊れたか? 今度はどこだ?」

「違うんだよ、テッド・・・」

「・・・どうしたってんだ?」

テッドはファッツの様子がおかしい事に気づき、エンジンを切るとドアを開けた。

「・・・で、そんな自分の気持ちにビックリしてるってことか」

「それもあるし、なんだか頭の上にもやもやが沢山あってな、自分でもそれが何か良く解らん」

ファッツの隣で話を聞いていたテッドは、シガーカッターで葉巻の吸い口をゆっくりと切り落とした。

「・・・それってよ」

「ああ」

「今まで押さえ込まれてた、気持ちの塊なんじゃねえか?」

「気持ちの、塊?」

テッドはターボライターで葉巻に火をつけながら言った。

「ほんとはよ、綺麗だとか、カッコイイとか、良い女だなどか思うべきシーンがあったとするだろ」

「ああ」

「装置が制御してたから反応は出来なかったが、そういう気持ちや頭に積もってた」

「・・・なんか溜まった性欲みたいで嫌なんだが」

「そうか? アレみたいに作業的にスッキリしちまえたら良いのにつて俺は思う事があるぜ?」

「どういう意味だ?」

テッドは葉巻の火を確かめつつ、ゆっくりと紫煙を吐きだした。

「腹が立つとか恨めしいとか、社会生活には負の物が割と多いだろ」

「ああ」

「でもそういうのってさ、結局他の事で気を紛らわすか微妙に感情を鎮めるくらいしかねえだろ」

「ああ」

「腕を擦りむいたり足を折ったら消毒薬なりギプスなり、直接効く治療手段があるじゃねえか」

「ああ」

「なのに心の傷は遥か遠くから「痛いのは気のせいだ」って誤魔化すよ
うなまどろっこしい方法しかねえ」

「・・・そう、だな」

「だからさ、スッキリしねえもんがドロドロ溜まり過ぎると壊れちま
うんだよ」

「・・・」

「それは人間も、艦娘も、深海棲艦もそうさ」

「・・・」

「俺はこの町に来てそれを改めて感じるぜ。だから心を酷く傷つける
ような奴は死刑で良いと思ってる」

「おいおい」

テッドは葉巻を啜えたまま肩をすくめた。

「見えないからって皆、心を軽く捉えすぎだぜ。人間から心を抜きや
肉の塊だろうがよ」

「・・・まあなあ。俺がここで佇んで考えてるのも、心の為の行動だも
な」

「そういうこった」

「どうすりや良いんだろうな」

「皆にぶっちゃける会でも催すか？手配してやるぜ」

「何をだよ。そもそも町の連中全員に心の内を話したくなんて無い」

「じゃあ誰に話したい？ミストレルじゃ無かったって事だろ？」

「えっ」

「ベレーにはちと濃すぎるから事務所で話すのはナシにしても、ミス
トレルなら一緒に連れ出せばいい。だろ？」

「フアツゾはポンと手を叩いた。」

「さすがテッドだなあ。今ちよつと感心した」

「馬鹿にしてるだろ」

「いや違う。だからこういう事なんだって」

「そんなに抑制効いてたのかよ・・・」

「だから正直、俺が俺の反応に戸惑ってるんだよ」

「まあそうだろうな。で？」

「うん？」

「どこ行きたいんだよ。事務所からこっちの方角に来たって事は夕島
整備工場か・・・」

「ワルキューレ、だな・・・」

「テッドはニツと笑った。」

「もう一度装置付けてもらうかフアツゾ？」

「その方が紳士で居られそうだな」

「アツチが故障してるって噂は消えるんじゃないか？」

「・・・待て、誰が言ってるんだ？」

「所詮噂だ。俺なんて夜な夜なナタリアにムチでしばかれてるなんて
噂も立ってたしよ」

「はあ!？」

「昼間ドSだから夜はドMなんじゃねえかってよ。ふぎけんなんて
の」

「根も葉も・・・ない・・・んだよな？」

「ねーよ。そもそも俺はSじゃねーよ」

「ドSだろうが！」

「ちげーよ!Sならこんなに長々話聞いたりするかってんだ」

「・・・まあなあ」

「ほら、送ってやるからさっさと乗れよ」

「えっ？」

「ワルキューレ行くんだろ?そんな躊躇ってたらジジイになっても辿

りっかねーぞ」

「・・・躊躇ってなんか」

「ならなんで車乗ってねーんだよ？あつという間に着く事を恐れてたんだろ？」

「だからさつきから言ってるように、こう、もやもやしててさ・・・」

「あんまりガタガタ逃げ回るんならクローの奴呼んでくるぞ？」

「解った解った・・・ちつ、絶対Sだ」

キキツ。

車を降りたファッツにテッドはニツと笑いかけた。

「しっかりな！」

「あー、うん。もう正直に話してくるさ」

「それが良い。将来の奥さんにはちゃんと言うべき事を言えるようにしとけよ」

「!!」

テッドの言葉にファッツは一瞬で顔が真っ赤になった。

「・・・俺何か変な事言ったか？」

「あ、ああ、いや、だ、ただ、大丈夫、大丈夫」

「大丈夫か？中まで送ってやろうか？」

「い、いいいいや大丈夫大丈夫、大丈夫」

「そっか？じゃあな」

ブルル・・・ン

テッドのキャデラック・フリートウッドを見送るふりをしつつ、ファッツは奥歯を噛んでいた。

顔が、いや、全身が紅潮してる。

「もう、ずっと、ずっとファッツの事が好きだった」

ああ。

ナタリアがうるうるした目で真っ直ぐ俺を向いて言った事が今頃認識出来たよ。

ちくしょう。なに冷静にスルーしてたんだよ俺は。

ミストレル達を見るまでも無く、艦娘や深海棲艦が化けた姿は美少女美少女揃いである。

ナタリアだって例外ではない。

いや、むしろワルキユーレの4人が恐れられる反面、隠れファンも多いのはその容姿が理由といっても良い。

ナタリアは耳が見えるくらいの漆黒のショートヘアに軽く170cmはあるうかという長身。

切れ長で大きなコバルトブルーの瞳が特徴である。

仕事と趣味の関係上、タイトな革のライダースーツに身を包む事が多く、スタイルの良さがはつきり解る。

それぞれ異なった特徴があるが、他の3人もそれぞれ大人の美女達といえた。

だからこそ、実力に加えてその容姿を仕事に生かしてない筈が無いと不埒な噂が乱れ飛んだわけである。

第30話

「ファッツさん？何してるんですかそんなところで」

「うわああっ！」

思わず絶叫し、慌てて振り向くと、フィーナが箒を手に、びくりとした様子でこちらを見ている。

「えと、ボスならそろそろ事務所に降りてきますけど・・・呼んで来ましょうか？」

薄手のセーターに細身のジーンズ、そして肩掛けのエプロン。小首を傾げる様子が可愛いな。

・・・いかんいかんいかん。感情がありすぎる。

ファッツはふるふると首を振ると視線を逸らし、片手を上げた。

「あ、ああいや、入る、入るよ。うん」

「はあ」

フィーナは顔を真っ赤にしたまま事務所に入っていくファッツを目で追った。

どうしちゃったのかしら？

「あ・・・ファッツ」

「お、おおおはようナタリア」

「い、いいいいいい天気よね」

ミレーナは瞳孔が開きまくったフローラを羽交い絞めにして事務所の外へと引きずり出した。

「フーッ！フーッ！」

「野生化するんじゃないの！こらっ！」

フィーナは半ば呆れ顔で声をかけた。

「一応、表通りなのよ、こっこ」

ミレーナはフィーナを向くと溜息混じりに言った。

「ファッツさんとボスが中学生の告白並にぎこちない状態なのよ。それで・・・うっ」

ミレーナはしまったと思った。フィーナの瞳孔が開いたからである。

「そ、そうなんだ・・・」

「ああ。だから今朝から自分の感情があまりにも豊富で戸惑ってるんだよ」

「それはその・・・私の為にやってくれたの？」

「感度が悪いわ、もう少しマイクの角度で調整出来ない？」

「そもそも話し声が囁きに近いです。これ以上は天井を抜かないと無理です」

「泣き言を聞く気はないわ。なら音を立てずにどう抜くか考えましょう」

「ハンドドリルで大丈夫ですかね」

「下は静かな筈よ。他に手立ては無い？」

「いや待ちなさい。二人ともおかしいから」

ミレーナはついにフィーナとフロラの会話に突っ込んだ。

ここは事務所の2階の廊下の隅、ボス達が話している応接コーナーの真上である。

あつという間に足音を立てずにここまで移動した2人は当然の如く床板を外し、盗聴セットを持ち出してきた。

今はフロラがマイクを、フィーナがアンプを調整している。

軍事訓練もかくやというほど真剣そのものなのに、やってる事は出歯亀。

そしてミレーナが止めようとする（先程に続いて）殺気立った目で睨んでくるのでもう諦めた。

「しーらない。表でも掃除してこようつと」

ミレーナは肩をすくめて廊下を歩き去った。

そんな事とは露知らず。

ナタリアとファッツはソファで真向かいに座り、話を続けていた。

「ナ、ナタリア・・・その、凄く言いにくいことなんだが」「えっ」

ナタリアの脳裏に「だからゴメンナサイ」というオチが広がり、表情が青ざめていく。

ファッツはうつむき加減に続けた。

「今までの俺を好きだったとしたら、その、その俺はもう居ない」
「・・・」

「今ここに居るのは、もつと幅広い感情を、その、れ、劣情も抱く、普通の人間なんだ」

「・・・」

「だから正直、俺はナタリアを正視出来ない」

「それ・・・」

「好みが違うって事？ねえファツゾ・・・嘘でしょ？」

「ナつ、ナタリアは、とても美人だ」

「・・・へっ？」

「さつき挨拶を交わしただけで、こんなにドギマギしてるんだ。ほ、ほら、脈を診てくれよ」

変わった証明の仕方するわねとフィーナはヘッドホンに手を当てながら思った。

ナタリアはとてもぎこちない手つきで差し出されたファツゾの左手の脈を探したが、

「ほ、本当・・・掌も熱いし、こ、これ大丈夫なの？物凄い速さよ？」

「ナタリアの手が柔らかいから余計ドキドキしてるんだ」

「あ、ご、ごめんなさい」

「い、いや、謝る事は無い」

ナタリアは頬が火照るのを感じた。なんだろう。つられて恥ずかしくなってきた。

「おおおおお・・・甘酸っぱい青春的シーンじゃないんですかこれ？」

フィーナはフローラを二度見した。鼻から赤い物が滴っている。

「ちよっ！ちよつとフローラ、床に鼻血垂れてるわよ？」

「あつ・・・美味しすぎてつい」

「ちよつと！マイク持ったまま首の後ろトントンしないで！ガサガサ音が入る！」

「フィーナさん、これもう録音しましょうよ。むしろカメラで撮りましょうよ！」

「そんなの持ってたら真っ黒の証拠になるでしょうが」

「だって！だってこんなご馳走早々無いですよ！」

もはやキラキラ状態のフローラを見てフィーナは冷静になれた。

これはイカン。やってる事は変態だ。

「撤収するわよ。片付けましょ」

「ならば！ならば私は最後の一人として戦います！」

「そんな良い台詞ここで使ったら台無しよ？」

「やります！やってやります！」

フィーナは溜息をつき、いつのまにか居なくなっていたミレーナをキョロキョロと探した。

「じゃ、好きになさい。私は開店準備するから」

そして1階では。

「だから多分、お父さんというか、距離感を保った紳士的態度で居られるとは思えないんだ」

「・・・」

「みつともないと思う。もっと理性的でありたいと思うんだが」
「そんな必要ないわよ」

ナタリアの声に、ファッツはつい顔を上げてしまった。

そこにはここにこご微笑むナタリアの顔があった。

「あー良かった、ファッツがごめんなさいしにきたのかと思っちゃった」

「・・・良かった、か？」

「ええ。アタシにとつての告白は、もうアナタしか見えないって宣言する事ですもの」

「・・・」

「だからミッションでも体を使ったりはしなかった」

「・・・」

「まあやむを得ず、ムサイ男に背後から抱きついた事はあったけどね。それが精一杯よ」

「ええっ？」

「もちろん身動き出来ないように縛って転がしてきたわよ。本当なら首の骨折ってやりたかったけど」

「それはその、そいつに抱きつけと命じられたのか？」

「いいえ？そいつが持つてるバイクとガソリン代が至急必要だっただけ」

「・・・そいつも災難だったな」

「なによ。バイクの鍵と財布以外は取らず、殺しもせず、暖かい部屋の中で100ドルも置いてきてあげたのよ？」

「いや違うどっか違う」

「ミッションの為だってば」

「ナタリア」

「ええ」

「今後も、ミッションの為ならそうするのか？」

ナタリアはふとファッツの顔を見た。

ファッツは真剣な目で自分を真っ直ぐ見ていた。

第31話

「うーん・・・」

ナタリアは1分ほど真剣に考え込んだ後、ゆっくり口を開いた。
「他に選択肢が無いなら・・・口づけまでね。心はファッツだけの物。そう言っても許してもらえない?」

「目の前でナタリアと熱いキスをする男が居たら弾倉が空になるまで男の体重を鉛で増やしてやる」

「困ったわね・・・Hとかはしないわよ?」

「・・・すまん。想像しただけで殺意が湧いてきた」

「今までよりはずっと他の選択肢を真剣に探すわよ・・・」

ナタリアは立ち上がると、ファッツの隣に腰掛けた。

「私だって・・・旦那様以外に触られるのは嫌ですもの」

「ナタリア・・・」

「解って頂戴。貴方の元へ帰る為に他に生き残る選択肢が無かった場合。それだけに限定するから」

「そんなミッションを受けるなよ・・・」

「今まで1度も無いわよ。でも私達の仕事は出航前の想定通りばかりとは言えないでしょ」

ファッツは頭だけ俯いて考えた。

ナタリアの答えはきちんと考えたものだし、理由も解る。万が一の話だ。

ただ・・・俺がついていけるかと言われれば・・・

ナタリアはファッツの手に掌を重ねた。

「苦しませてごめんなさい。でも愛する人を偽るのは私の性に合わないの」

ファッツはその上にもう片方の手を乗せた。

「少し、考える。頭を整理したいし、俺達の会社を今後どうするかもあるし、な」

「・・・解った」

「きちんと向き合って答えてくれた事には感謝する。だからきちんと

考えたい」

ナタリアはファッツをそつと見た。

自分の方を向きこそしないが、その目はまっすぐで、真剣だった。嘘について、ファッツの気に入る事だけ言う事も出来た。

でもそれでは、きつといつか破綻する。

「じゃ、今日は帰る。近いうちに結論を出すよ」

「解ったわ、そうして頂戴」

「話を聞いてくれてありがとう。じゃあな」

「ええ、またね」

ファッツが出て行った後、ナタリアはそつと、ファッツが座っていた座面に触れた。

まだ少し温かかった。

・・・本当にこれで良かったのか。

自分出来る最大限の誠意を尽くしたつもりだったが、それは不器用過ぎたのか。

「ファッツ・・・」

ナタリアはぐつと目を瞑った。

いつも通りの事務所なのに、信じられないくらい寂しい。

あの日、あの鎮守府で。

司令官や皆との音信が途絶え、フィーナが目の前で光に変わった時のように。

「ボス？ボス大丈夫ですか！」

はつとして顔を上げると、フィーナが肩を揺さぶっていた。

ナタリアは懸命に笑顔を作った。

「大丈夫・フィーナ、もう2度と貴方が死ぬようなミッションはしないからね」

フィーナはふふつと微笑んだ。

「あれはボスの作戦ミスでも無ければ、ミッションが悪かった訳でもないですよ」

「でも」

「どうにもならないじゃないですか。63対5万だか6万だか、ある

いはもつと」

「・・・」

「むしろよく7時間以上も戦闘が継続出来たと思ってますけど?」

「私は・・・悔しかったわ」

「まあそれは一緒です。だからこうしてご一緒してるんですし」

フィーナはナタリアの隣、ファッツが座っていた位置とは反対側に腰を下ろした。

「ボス、ファッツさんに何か言われたんですか?」

ナタリアはファッツが座っていた座面を指先でなぞりながら答えた。

「逆よ。余計な事を言った気がするの」

「ファッツさんは怒って出て行ったようには見えませんでしたけど?」

「あの人は理性の塊よ。そこに甘え過ぎた気がする」

「傲慢な結婚条件でも出したんですか?」

「ミッションの為には口付けまではするって言っちゃったの」

「は?キスなんて生まれてこの方1度もした事無いのにですか?」

ナタリアはがばりとフィーナの方を向いた。

「なっ、何で知ってるのよ!?!」

「やっぱり」

ナタリアはがくりと頭を垂れた。

「・・・ああ、フィーナにカマかけられてあっさり嵌るなんて」

「残念でした」

「まあ、そんな事言っちゃったわけ」

「ファッツさんは何と?」

「そんな場面に出くわしたら相手の男を銃で撃つって」

「・・・ファッツさんの銃はグロック36でしたっけ」

「それはテッド。ファッツはSIG SAUER P226よ。そんな事どうでも良いの」

「そうですか?武器って性癖とすっごく関係あるって聞きましたけど」

「・・・うそ」

「割と普通に」

「び・・・P226って・・・」

「頑健で水や泥に強く、ハイレスポンスで命中精度は高い、ですかね」

「頑健・・・命中・・・精度が・・・高い・・・」

ナタリアが両頬に手を添えてふるふるするのを見て、可愛いなと
フィーナは思った。

結局。

「やあ、いらつしやい」

「ハーン♪世話になるわね」

「お邪魔します」

「ちゃんと当番こなしますんで」

「よろしくねっ!」

そう。

ワルキューレの4人はファッツの家に住む事になった。

最後までナタリアとファッツは同室か否かは議論となったが、その
決着をつけたのはライネスだった。

「・・・隣同士の別室にしとけよ、ファッツ」

「何でそんな限定なんだ?」

「ファッツの部屋は端の部屋だろ?」

「ああ」

「なら反対側をナタリアの部屋にすれば二人で一緒に居る時は全方位
に空間が空くだろ」

「・・・なあライネス」

「なんだ?」

「もしかしてライネスとルフィアの部屋もクーに聞かれないような配
置・・・」

「新しい牛刀の切れ味を試させてくれるのかな?ファッツ?」

「あ、いや、何でもないよライネス」

「そうか」

というわけで、ファッツとナタリアの部屋は隣同士である。

仕事の方はどうしているか。

ファッツ達は「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッド」として、
ナタリア達は「ワルキューレ」として。

それぞれそのまま活動している。

事務所も料金体系も別のままである。

ただ、ブラウンダイヤモンドの定休日がワルキューレと一緒に
なり、定休日が1日増えた。

現在のところ朝の様子を見てみよう。

「みつちゃん、そろそろご飯よ！起きなさい！」

「・・・うー、後5分・・・」

「あ、フィーナさん、おはようございます」

「おはようベレーちゃん、一緒に顔洗おっか」

「はい」

「卵買って来ました！ファッツさん、朝刊どこか知りませんか？」

「ん、ありがと。朝刊ならミレーナがクロスワードやってるぞ」

「ミレーナ！新聞に答え書き込まないでね！」

「大丈夫大丈夫！」

一言で言えば仲良し大家族状態である。

とはいえ、ファッツはすんなりとこの状況に入れた訳ではなかつ
た。

話はファッツがナタリアの「条件」を聞いた翌日の夜まで遡る。

第32話

「で、何だファツゾ。店は閉じたし妻達にも外してもらった。これで良いか？」

閉店間際、ファツゾは疲れ果てた表情でキッチン「トラファルガー」にやってきた。

カウンターの隅で小さくうずくまるように座り、ファツゾはウイスキーを少しずつ舐めていた。

途中でルフィアやマツケイが心配して声をかけたが、悲しそうに首を振るだけで何も言わなかった。

ルフィアはファツゾ以外の客が帰った時、厨房の奥でライネスに囁いた。

「あなたに何か聞いて欲しいんじゃないかしら」

「・・・解った。上に上がっててくれるか？」

「クーにも言っておくわね」

「そうだな。ありがとう」

ルフィアが2階に上がったのを確認したライネスは closed の札を下げ、冒頭の言葉をかけたのである。

しばらくグラスを睨んでいたファツゾは、溜息と共にライネスの方を向いた。

「・・・ライネス」

「ああ」

「俺達は、人間だろ？」

「まあそうだな」

「ルフィアと一緒にいる時、その寿命差をどう考えた？」

「それか」

ライネスは厨房にとつて返すと、氷とウイスキーのボトルを手に戻ってきた。

「横、座るぞ」

「ああ」

ライネスはファツゾに栓を開けたボトルを差し出す。

「ほら、俺のおごりだ」

「ん・・ありがとう」

コツコツコツ・・コツ

琥珀色の液体がファッツのグラスに注がれると、特有の芳醇な香りが漂った。

ライネスは懐からパイプを取り出すと、慣れた手つきで準備を始めた。

「んーまあ、話にもならん差だよな」

「こつちは老いのある60年、向こうはずっと適齢期のまま100年は余裕、だ」

「ファッツはそろそろ40だったか」

「ああ」

ライネスは目を細め、パイプに詰めた煙草の葉に丁寧に火をつけていった。

「50超えた俺より良いだろ」

「どつちもそんなに変わらないよ。向こうから見れば」

「まあな」

ライネスは懐から取り出した象牙と金のタンパーをファッツに見せた。

「のろけですまないが、これは妻がくれたんだ。結婚前にな」

「・・いい趣味だ。しかし、相当高そうだな」

「多分な。そしてこれをくれた理由ってのがな」

「うん」

「俺がこれをポケットに入れてれば、一緒にいられるようで嬉しいと言ったんだよ」

「・・そうか」

「お前の方の経緯も聞いたが、あいつらはほんとにまっすぐに思いを伝えてくるな」

「・・俺は昔、司令官だったんだが」

「ああ」

「艦娘達は皆そうだった。まっすぐで、素直で、正直だったよ」

「・・・」

「ナタリアにしろ、ルフィアにしろ、今は深海棲艦だが、昔は艦娘だったと思うんだ」

「妻はそうだと聞いている」

「そうか。ナタリアの方は俺の勘だが、同じだと思う」

ライネスは燃え具合を確かめると、タンパーで軽く火を回しながら言った。

「・・・そういうもんかもしれんなあ」

「俺は以前、司令官だったんだが」

「お前微妙に酔っ払ってるな？」

「着任する前に、大本営から注意された事がある」

「ほう」

「艦娘を愛すれば辛い結果が待っているから、兵士として、兵器として扱えと」

「・・・まあ、艦娘は戦地に赴くんだからな」

「ライネスはルフィアを良く説得したよな」

「うん？C&Lを辞めさせた事か？」

「ああ」

「俺は生粋の民間人だぞ。妻がしょっちゅう戦場に出て行くなんて心臓が持たん」

「それは軍人だって、司令官だって一緒だよ」

「ファツゾ」

「うん？」

「お前は「元」司令官で、今は民間人なんだ」

「・・・そう、なんだが」

「精神的に辛いなら陸の上で働くように皆と話し合ったほうが良い」

「無理だ。陸で稼げる金じゃナタリア達は生きていけない」

「・・・まあ」

「？」

「妻は非武装だったが、ナタリア達は・・・なあ」

「人間に戻させたとしても、俺はなんでも屋で7人を養う自信は無い」

「喫茶店でも無理だぞファッツ」

「それにテッドから言われたんだ。ナタリアを狙う奴らが居るってな」

「命を、か？」

「ああ。だから人間に戻るのはハイリスクだと」

「じゃあ2つしかないな」

「うん？」

「1つは完全に現状通り、まあナタリア達と同棲するくらいだ」

「ああ」

「もう1つは全員人間に戻し、この町か国を捨てることだ」

「えっ？」

「俺は後者もやったからな。遙か昔の話だが」

「そつか・まあ日本人のスタイルじゃないもんな」

「東欧のあの国から出た時はまさか日本まで働き口が無いとは思わなかったけどな」

「じゃあそつち方面に行っても・・・」

「大陸のどの国より日本の方が経済状況は良いだろうよ。好景気になった話なんて聞いた事が無いからな」

「・・・と、なると」

「道は一つしかないって事だ、ファッツ」

「・・・ならその間、俺は皆と出来るだけ思い出を、良い思い出を作つてやらなくちゃ、な」

「外れだ、ファッツ」

ファッツはライネスの方を怪訝な目で見返した。

「なんでだ？彼女達にしてみれば一瞬にも似た短い時間なんだぞ？」

「俺も、結婚当初そう思ってたんだがな」

「ああ」

「妻に言われたんだ。普段通りにしていてほしい。何気ない毎日が幸せなんだとな」

「・・・」

「毎日ご馳走が並び、贈り物をされるなんて不自然だし」

「・・・」

「なんだか生き急いでるみたいで、別れが早く来そうで嫌だ、とな」

「そっ、か」

「だから普段通り、ただ」

「ただ？」

「ファツゾ達は会社をどうするんだ？」

「対応してきた仕事の違い過ぎるからな、今の所合併は考えてないよ」

「なら、休みだけは合わせてやれ」

「・・・休み、か。そういえば微妙に違うな」

「休みが一緒なら出かけたりも出来るだろ？」

「合わせた上で・・・休みを1日増やすかな」

「確かにファツゾのそこは他より定休日が少ないが、経営は大丈夫なのか？」

「何で少なくしてたかと言うとな」

「ああ」

「俺が死んだ後、ミストレルとベレーに路銀を持たせてやりたかったんだよ」

「路銀？」

「俺の家の権利書はテッドに渡してしまってるからアテに出来ない」
「・・・」

「俺は必ずミストレル達より先に逝く。だからあの子達がその後も困らないように、な」

「気持ちには解るが・・・」

「彼女達の寿命を考えれば幾ら用意しても足りない。だから遺産とは言わない」

「なぜ路銀なんだ？あの子達は町に留まると思うぞ？」

「・・・前を向くには気晴らしが要る時もあるさ」

「お前を失った悲しみを旅で癒して来いつてののか？」

「まあそうだし、町を捨てるのも彼女達の好きにすれば良い。そう思ってたんだ」

「だが、こうなると・・・」

「さすがにナタリアの分も今から貯めるのは難しいなあ」

「その方向で考えなくても良いだろうか」

「なぜだ」

「お前の後の事はナタリア達に頼んでおけば良いじゃないか」

「あ」

「同じ時間軸で生きられるし、ナタリア達なら心配要らないだろう？」

「そっか。じゃあ合併した方が良いのかなあ」

「まあそこはナタリアと決めろよ」

「・・・だな」

ライネスがパイプを灰皿に軽く叩くと、さらさらとした灰が流れ出した。

ファッツゾがそれをちらりと見て言った。

「うまいもんだな」

「何十年と繰り返せば上手くもなるさ」

「そうだな」

「ナタリアと向き合う腹は決まったか？」

「・・・ああ。ありがとうライネス」

「良いき。大した事じゃない」

「あつ・・・と、御代は」

「饑に奢ってやる。行って来い」

「えっ・・・今からか？」

「今からだ、ファッツゾ」

ファッツゾは肩をすくめると立ち上がり、店の鏡の前でさつと身なりを整えた。

深呼吸して戸に手をかけたファッツゾに、ライネスは声をかけた。

「頑張つて来いよ」

「・・・行ってくる」

カロン♪

ドアベルの音を合図に、階段をそつと下りる音がした。

「終わったよ、大丈夫だ」

ライネスがそう言うのと、ルファイアが隣に立った。

「・・・ええっと、余計なお世話かもしれないけど、ナタリアに電話したわ」

「寝てたか？」

「いいえ。全然寝てない感じだったわ」

「クーちゃんの聞いてきた話が本当なら、ナタリアは寝られる筈もないだろうよ」

「上手く行くと・・・良いわね」

ルフィアはそつとライネスの隣の椅子に腰掛けた。

「そうだなあ」

「二人とも頭が回るから・・・」

「色々余計な事まで考えて考えて、疲れ果てるまで考えちまう」

「貴方もそうでしょう？」

「まあ、お前の幸せは常に考えてるよ」

ライネスはそう言って、ルフィアの柔らかな髪を撫でた。

「・・・うん」

ルフィアはぽふっと、ライネスの肩に頭を置いた。

第33話

「あつ・・・困ったな・・・」

ファッツは中途半端に人差し指を宙に彷徨させた。
そう。

ワルキューレの事務所の玄関には呼び鈴が無いのである。
勿論ドアノックカー等という洒落た物があるからではない。

閉店後に叩き起こして笑顔で応じてくれる面々では無いので、誰も
困らなかったのである。

ファッツはぐるりと建物を回りこむ事にした。

確か勝手口があったよな・・・そっちに無いかな。

サクサクと砂利を踏みしめていく足が、人影を見つけてぴたりと止
まる。

「どうしたってのよ、こんな夜更けに。答えでも聞かせてくれるのか
しら」

裏口の戸に軽くもたれながら、ナタリアが悪戯っぽく微笑んでいた
のである。

ファッツの、そしてナタリアの。

視線が軽く交差する。

ファッツがゆつくりと歩き出した。

「色々考えたんだけどな」

「ええ」

「同じDeadline Deliveriesだが、俺達の会社は業態
がまるつきり違う」

「そうね」

「だから・・・ああいや、こんな夜更けに言いたいのはそんな事じゃない」
「えっ？」

ナタリアの一步前に立ったファッツは、薄暗い街灯の裸電球に上か
ら照らされた。

軽く俯いたその姿は、まるで演劇の主人公みたいだとナタリアは密
かに思った。

私だけの・・・なんてね、ふふ。

だが、ファッツゾがキツと顔を上げたので、ナタリアはどきりとした。

「ナタリア」

「えっ・・・ええ」

ファッツゾはその一步を踏み込むと、強く、強くナタリアを抱きしめた。

「えっ・・・えっ・・・ちよっ!?!」

ファッツゾは事態を飲み込んでないナタリアの右耳に向かって囁いた。

「俺が俺で居られる間、ずっとお前と一緒に居たい。今すぐ始めたい」

「えっ!?!それって?あのっ!?!えっ?」

「ナタリア」

「はっ、はい」

ファッツゾは上半身だけ軽く逸らした。

首元にさっと冷気が流れたので、ナタリアはふるつと震えた。

「結婚しよう」

返事をする間もなく、ファッツゾはナタリアの唇を塞いだ。

ナタリアは始めこそ目を見開いたが、ゆっくり目を閉じると両腕をファッツゾの背中に回した。

その様子はまるで一枚の絵のようだった。

「お、おお、おおおおお・・・ミュージカルかっての。この後歌い出すのかっての」

「どうしよう、完全に出て行ける状況じゃなくなっただけだ」

隙間から見ていたフローラとミレーナが恐る恐るこちらを向いたので、フィーナは肩をすくめた。

「良いじゃない。今時こんな展開、少女漫画にもなさそうだけど」

「ど、どうしたら良いかな」

「音を立てないように撤退するしかないと思うけど?」

「うっそ録画しないの?」

「何でそうなるのよ・・・いーから来なさい」

「みつ、耳引つ張らないで・・・イタタタタ」

「私にも・・・あううううううう」

ナタリアは戸口を細目を開けて見ていたが、気配が消えたので再び目を瞑った。

邪魔したらファイーナ達といえど容赦するつもりはなかったが、まあ良いわ。

その翌日。ファッツの事務所にて。

「という訳で、うちの方の定休日を変えようかと思うんだ」

「そんな先の事まで心配してたなんて・・・さすがファッツお父さんよね」

「という事はナタリアお母さんになるんだぞ？」

「・・・そっかあ」

「お、おいおい、そこは突っ込んでくれよ」

「だって・・・実感するじゃない？」

「実感か。俺は今更って感じだけだな」

「言われ続けたものねえ」

「今までは否定し続けてきたが、ナタリアが奥さんなら悪くないな」

「まあ、うふふふ」

食堂のテーブルに腰掛けていたミストレルは頬をひくつかせながら、真向かいに座るミレーナに言った。

二人はカードゲームの真っ最中である。

「なあ、C4かクレイモア持ってないか？」

「RPG-7の方が良くない？」

「あー良いな、ぶっ飛ばしてえ」

「で、ストレートフラッシュ」

「げっ!？」

「はいはい2000コイン頂きい」

「なんでそんな強えーんだよミレーナあ」

シャシャシャとカードを切りながらミレーナはいった。

「だって訓練があつたもん」

「訓練って、どこで？」

「鎮守府よ。ミッションによつてはバツカみたいな方法で決着をつける事があるの」

「・・・」

「その時、クジ運悪いからカードはパスなんて言える場面ばかりとは限らない」

「・・・」

「だから色々学んでるわよ？ロシアンルーレットで死なないようにと
か」

「どう、やるんだ？」

「ハンマーを起こす前、次に装填される位置にタマが入つてると重心が偏るのよ」

「・・・ええっ？」

「解りやすいようにすると・・・」

ミレーナは自分のホルスターからコルトパイソンを抜くと1発だけ弾を残し、位置決めしてから手渡した。

「ほら、触ってみて」

「・・・うん」

「これが違う位置になると・・・ほら違うでしょ」

「・・・さっぱりわからねえ」

「それを解るようにする訓練をすれば、運任せから技術の世界になるの」

「なるほど」

「興奮した相手なら、そいつにタマが行くようシリンダーを回す事も出来る」

「マジかよ」

「ええっと・・・」

ミレーナはシリンダーを開け、シャーツと回転させた後でパシヤリと閉めた。

「これで最初にハンマー起こした奴はお陀仏で・・・」

再び同じような動作をして閉じるといった。

「これで3人目がお陀仏」

「マジかよ」

「開けてくれて良いわよ」

ミストレルがそつと受け取った銃のシリンダーを開け、数えた。

「ほんと・・・だ」

返されたパイソンにAP弾を込め直しながらミレーナは言った。

「まあそんな変態的な訓練もみっちりやらされたのよ。MADFって所はね」

「・・・実際、役に立ったのか？」

第34話

ミストレルの問いに、銃をホルスターに戻したミレーナは肩をすくめた。

「勿論。ロシアンルーレットで生き残ったら許してあげるって言ったら、司令官は喜んで死んで行ったわ」

「えっ」

「私達のミッションで一番多かったのはね」

「ああ」

「スパイというか、深海棲艦に魂を売った司令官の特定と関係者を丸ごと抹消すること」

「・・・」

「賭博場は職場より足を運んだわ。そういう司令官は高確率で違法賭博に手を染めてるし」

「・・・だから、ポーカーも」

「ええ。残念だけどカード類で私に勝つのは難しいわよ」

「それは他の皆もか？」

「えっ？ええ、まあ」

ミレーナはちらりとナタリアとファッツを見て、うげっという顔でミストレルの方に向き直った。

「ボスは今なら勝てる気がするくらい隙だらけだけどね」

ミストレルはニヤツと笑った。

「オーケイミレーナ、もう1回カードで賭けやろうぜ。勝ったチームは負けた奴から1万コインずつもらえる」

「大きく出たわね・・・メンバーは？」

「こつちにはフィーナ、そつちはフローラがつく2対2だ」

「くっ」

ミレーナは渋い顔をした。演習の首席はもちろんナタリアだが、2位は僅差でフィーナである。

私とフローラは一歩及ばない。

だが、ミストレルは悪いがド素人。足を引っ張りまくるに違いな

い。

それに、なんであれフィーナに勝つてみたい！

「・・・良い、わよ」

「へっへーん、じゃあ2人を呼んでくるぜ」

フィーナは嫌そうな顔で席に着いた。

「カードなんてうんざりするくらい訓練でやったから、正直見たくないのよね・・・」

「まあまあそう言うなよ、なっ」

「で？何のカードゲームするの？ポーカー？ブラックジャック？バカラ？神経衰弱でも良いわよ」

「大富豪だ」

「えっ」

一気に嫌そうな表情になるミレーナの横からフローラが口を挟んだ。

「ねえルールは？後出しは止めてよ」

大富豪。

大貧民とも呼ばれるポピュラーなカードゲームである。

同時に超のつくマイナールールが星の数ほどある事で知られている。

例えば同じ数のカード4枚を同時に場に出す事でカードの強弱を逆転させる革命という行為がある。

革命のカードにジョーカーを混ぜるのはアリかナシか。最強の札(2 or 3)で革命出来るか否か。

革命出来るのは大貧民だけか、誰でも出来るか、革命に革命返しが出来るか、

更にはその際成立した状態でより強いカードだけに限るのか限らないのか。

うんざりするほどローカルルールがあるのである。

ミストレルはニタリと笑った。

「そうだな。ちゃんと公平に明示しないと。ベレー！持ってきたな！」

「はぁーい」

ぱたぱたとベレーが手に駆け寄ってきたのは1枚の大きなボード。

それを見たフィーナ達3人は苦悶の表情を浮かべた。

「・・・ぜ、全部明記してあるわね」

「このルール通りいくぜー」

「うっ・・・地味に変則的ね・・・ジョーカーは山に2枚入ってて、革命では同時に1枚しか使えないとか」

ベレーはそつと去りつつ溜息をついた。

ミストレルさんがどうしてもファッツさんに勝ちたいと延々考え抜いた超変則ルール。

私ですらたまに間違えるし、あのテッドさんさえ絶叫しながら負けを認めました。

皆さん、勝てるんでしょうか・・・

そして3時間後。

「ねえあなた達、そろそろ晩御飯の時間よっ」

「あー、その大富豪やってるのか・・・作っついてやるから、まあ、ほどほどにな・・・」

ナタリアとファッツがそういつて生暖かい目を見た理由。

それは

「うっし！また大富豪だぜ！」

と、満面の笑みを浮かべながら最後のカードを放るミストレルはお決まりのパターンで、

「この際1位は良いのよ1位は！2位は渡さない、渡さないんだから！！」

「・・・こ・・・れで・・・良い・・・わよ・・・ね」

「くっ・・・ええつとこれ・・・ああルール違反じゃない！」

と、真っ赤になりながら2位争いを繰り広げているフィーナ達である。

3人とも2勝程度の差しかなく、ちつとも差が開かない。

フィーナと残る二人がここまでデッドヒートを繰り広げた事は滅

多に無く。

「ぬつがああああ負けたあああ！」

「ね、ねえ、そろそろ止めない？」

「1勝差で勝ち逃げなんて許さないわよフィーナ！」

「そーよそーよ！」

「そこまで本気にならなくてもいいじゃない：次でもう18ゲーム目よ？」

「18回もやって1勝差なのよ!?!」

「解った、解ったから。じゃあカード配るわよ。2勝差になったら終わりにするからね」

「さあミストレル、早くよこしなさいよ」

「へっへーん、4枚ポイー」

「ミストレル、あんたちよつとは空気読みなさいよ！」

「そんな事言つてられる状況じゃない事もあるんだろ？」

「こんな変態ルールで挑まれる事なんて無いわよ！そもそも受けないわよ！」

だが、フィーナは小さく首を振った。

「相手が有利な状況で、隙を見るしかない場合にはこう言う事もありえるかも」

「待つてフィーナ、絶対騙されてるわよ」

「そもそも私達もうMADFじゃないし」

「あーそっか。まあ、そうね。じゃあ2枚、はい」

「ぐげっ!?!」

ベレーはそつと周囲を片付け始めた。

目の色が変わってる・・・よっぽどミレーナさんはフィーナさんに勝ちたいみたい。

「・・・あー、勝負はが一番を迎えてるんだな？」

エプロンをしたファッツが苦笑混じりに見ている先。

そこには眉を顰めるフィーナと、鬼のような形相のミレーナが残り少ない手札を握り締めていた。

ナタリアの額に青筋が立った。

「アンタ達・ファッツのご飯をたかがカードゲームで遅らせるって言うのかい？」

フローラが申し訳なきようにナタリアに言った。

「すみませんボス。この結果で2位が決まるんで・その、長年の野望が叶うというか」

ファッツは肩をすくめた。

「まあ夕食はクリームシチューだし、ケリがつくまで寝かせても美味しいだろうよ」

ナタリアがぴとつとファッツにくつついた。

「あなた・それじゃ甘すぎない？」

「待ってる間ナタリアの頭を撫でてるよ」

「んっ・それなら良いわ」

ベレーは一人溜息をついた。

ファッツさんの美味しいご飯・出来立てを食べたいのになあ・

第35話

「いよっしー！いよっしやああああ!!! シャーッ！」

「あー負けたー」

そう。

1位はミストレルの全勝であり、ぶっちぎりである。

だが2位はミレーナ、3位フィーナ、4位フローラとなったのである。

トータルではミストレルとフィーナのチームが勝った。

しかし、ミレーナは1万コイン札を差し出ししながらも満面の笑顔だった。

まさに試合で負けて勝負に勝ったのである。

「うっうっ・・・ミレーナは、ミレーナはついに、ついにやりました・・・」

「良かったね、良かったねミレーナ」

「フローラあ・・・うわああああん！」

抱き合うミレーナとフローラを前に、フィーナは完璧に引いていた。

「そ、そんなに・・・」

一方、ベレーは手早くテーブルの上の散らかったカードや点数表を片付けると、

「ご飯に、しますー！」

と、少しムツとした顔で台所へと姿を消した。

気づいたフィーナがミストレルに訊ねた。

「えっと、何でベレーちゃん怒ってるのかな？」

「ん？ああ、ベレーはファッツとアタシのご飯が大好きでさ」

「へー」

「その為に昇天せずに艦娘となって帰ってきたくらいだからさ」

「えっ?」

「だからファッツのメシを邪魔されるのはとっても面白くないってわけさ」

「ご飯食べたら機嫌直してくれるかしら?」

「大丈夫大丈夫。気になるなら食後にビーネンシユティツヒ奢ってやれば完璧だ」

「ビ?」

「ビーネンシユティツヒ」

「え、ええと、シユトーレンじゃ無くて?」

「あれはハチ公の好物だろ」

「そもそもどこで売ってるの?」

「山下食堂の隣のケーキ屋」

「仕方ない。皆も買って来たたら食べる?」

「普通に食うぜ。旨いし。ただ・・・」

「ただ?」

「売り切れとか作ってない日もあるから、ベレーには確保出来てから言った方が良いぜ」

「ああ、先に言っただけ無かった場合・・・」

ミストレルがブルブル震えながら視線を逸らした。

「あつ・・・あれはさ・・・ちよつと想像を絶するくらい怖い思いをする事になるぜ」

「そこまで!?!」

「怒ったベレーはこの家でいっちばん怖いからな」

「・・・ボスより?」

「ああ。姉御より間違いない怖え」

フィーナはぐくりとつばを飲み込んだ。

「ちよつと出かけてくるわね」

食後。

フィーナはそういうと、バイクのキーと財布を手に出して行った。

ベレーちゃんに気づかれぬよう迅速に。

ピロロンピロロン・ピロロンピロロン♪

「良かった、まだ開いてた」

自動ドアをくぐったフィーナはホツとしつつ、いらっしやいませと声をかけた店員に訊ねた。

「あー、えつと、ビーネンなんとかって」

「ビーネンシュユティツヒですか？」

「そうそうそう。それ欲しいんだけど、ある？」

「ありますよ。お幾つですか？」

「良かった。ちなみにどれなのかしら？」

「これです」

あ、美味しそう。ボスも好きそうだなあ。

「ええつと、7つ、で、機嫌直してくれるかしら？」

フィーナの眩きに、店員はにこつと笑った。

「ああ、ベレーちゃんですか？」

「えつ？あ、聞こえた？」

「はい。たまにファツゾさんとかミストレルさんが真つ青になって買いに来るんで」

「あー」

「ちようど今のお客さんみたいに」

「・・・で、二人は何個買っていきます？」

「ファツゾさんは5個買って行きますね。ミストレルさんは4個かなあ」

「つてことは少なくともベレーちゃんは2個つて事ね」

「ええ。お二人ともベレーちゃんが物足りないと怖いからと仰つて」

「じゃあ・・・14個あるかしら？」

「ええつ!?!・・・えつと・・・すみません、10個しかないですね」

「まあファツゾさん達が2個ずつで良いか。買い占めると問題かしら？」

「もうこの時間だと大丈夫だと思いますけど・・・何となく予感が」

「何？」

「これ、他にも好きな方が居・・・」

ウーーン！

「おぼちゃん！ビーネンシュユティツヒ3個ちようだ・・・ひいっ！」

ドアを開けて入ってきたのはクーだった。

フィーナは氷の炎を背負いつつ、それはそれは鬼気迫る形相で睨みつけながら言った。

「うちが10個のうち8個買うのは確定してるの。買うなら2個で我慢なさい」

「でっ、でもっ、うち3人」

「他のになさい」

「えっ、いや、でも喧嘩に」

「死にたい？」

「僕バームクーヘンにします！」

「そう。良い子ね。じゃあ8個くださいな」

「はっ、はい・・・お持ち帰りの時間は？」

「15分もかからないわ」

「解りました」

ちなみにファイーナが急ぎ足で帰った後、

「ほら、シュネーバル2個あげるから、またおいで」

「おばちゃんああん、すごい怖かったあー、うええええええん！」

「よしよし」

と、泣きながらしがみつくクーをケーキ屋のおばちゃんは優しく抱きしめたという。

そして。

「・・・」

「あ、えっと、ベレーちゃん、夕食遅らせちゃってゴメンね」

「・・・」

「これ、お詫びの印なんだけど・・・」

「・・・ビーネンシュティツヒ発見しました」

「えっ、外箱見てよく解ったわね」

「気配でわかります。ビーネンシュティツヒです」

「気配!？」

「あっ・・・それ以上傾けたらダメ、隣とくつついちゃいます」

「あ、ああ、そうね。任せちゃって良いかしら？」

「お任せされます。アッサムのミルクティーを23%濃い目、任務開始です」

箱を受け取るとくるりと背を向けるベレー。

フィーナは個数の事を告げようと声をかけた。

「あ、後ねベレーちゃん」

だが、完全に目の光を失ったベレーが首から上だけフィーナの方を向きながら言った。

「邪魔する敵は完全排除します。夜の戦いです。負けません」

フィーナはぶんぶんと頭と両手を振った。これはマジだ。

「あ、いえ、後で良いわ」

「ビーネンシュティツヒ・・ビーネンシュティツヒ」

「こ、怖いわね・・」

ミストレルはTVから視線を外すとフィーナに言った。

「何個買ったんだ？」

「8個よ。ベレーちゃん2個で」

「おっ、よく気がついたな。まあ今日ならベレー大魔神は1個でも納得してくれると思うけどよ」

「あなた達が買う時の個数を教えてもらったのよ」

「アタシも2個って頼んどけば良かったなあ」

「そうしたかったんだけど、クーに2個取られたのよ」

「2個？3個じゃなく？」

「1個はお話し合いで、ねっ」

「どう考えてもクーがマジ泣きしてる姿しか見えねーな」

「そんなにあの店はビーネンシュティツヒ以外美味しくないの？」

「他もうめーよ、ただビーネンシュティツヒが異常なだけだ」

「異常？」

「まあ食えば解る」

第36話

「……………」

普通の範囲で美味しい物、まずい物を口に入れて沈黙という事はあまりない。

だが確かに、この晩、フィーナが買ってきたビーネンシュティツヒを口に入れた面々は沈黙した。

特に初めて口にしたナタリア達4人は、目を見開いたまま、である。

「おばちゃん…また腕を上げましたね…極上です」

ベレーがペろりとフォークを舐めながら呟いたのを期に、時が動き出した。

「これ…ほんと美味しいわ」

「ちよつと待つてよ…アタシ今までこんな長い事住んでこれ知らなかったのよ…」

「わー…美味しいの一言で片付けるのが勿体無いなあ」

「ああ、食べきるのが勿体無い！もったいなあい！」

「んー、やっぱり美味しいな」

「あーもつと食べたあい」

「うん、解るわミストレル、あなたの言ったこと」

「だろー？」

コトリ。

全員が食し終えた時、ベレーはもう1皿をテーブルの中央に置いた。

皆がその1皿に注目するなか、ベレーがフィーナを見た。

「ご覧の通り、頂いたビーネンシュティツヒは、1個…多かったです」

「あつ、それ…は…」

説明しようとしたフィーナは、ベレーから感じた事の無い気配を感じた。

ベレーの瞳から押し潰されそうなプレッシャーを感じて目が離せない！

目の闇の果てから得体の知れぬ地響きが聞こえてくる、そんな気が

した。

そのベレーの目がゆっくり見開かれた。

光を吸い込む漆黒の瞳は獲物を捕らえたサメのそれのようだった。

「ビーネンシユティツヒを一番愛してる人が……この一切れを食べましょう」

底知れぬ恐ろしさにフィーナは震えながら、辛うじて答えた。

「あ、愛し、て、る？」

「確かめる……方法は……」

だがその続きはファツゾの一言で終わった。

「ベレーが食べなさい。君が勝者だ」

ベレーが視線を外しただけでがくりと崩れ落ちるフィーナ。

肩で荒い息をしながらフィーナは滝のような冷や汗を流していた。

こっ……こわい……なにあの瞳の怖さ……今晚うなされそう。

一方、急速に瞳に光を取り戻したベレーはファツゾを見た。

「……良いんですか？」

「もちろんだよベレー。皆良く解ってる」

途端にぼえんとした表情になると、

「じゃ、じゃあ、頂きますね。えへへ」

と、そつと皿を引き寄せ、嬉しそうにフォークを入れたのである。

ナタリアはそつとファツゾの膝の上でファツゾの手を握った。

握り返したファツゾの手はぐっしよりと汗をかいていたという。

この家で誰を怒らせてはいけないか、全員が認識した夜だった。

最初はぎこちない事もあったが、1週間もすればそれぞれの役割に慣れてきた。

そして話は現在の朝の一コマへと戻る。

ようやく寝癖頭のミストレルが顔を出し、食卓へ着こうとした時、事務所のドアが開いた。

「ようナタリア、ファツゾ、皆。朝早くすまねえ」

「テッド？これから朝飯だが食ってくか？」

「あー、じゃあトーストとコーヒーだけ」

「今朝はサンドイッチなんだ。まあ一緒につまんでってくれよ」

「それならご馳走になるぜ」

「・・・で、どうした？」

「そうそう忘れてた。ナタリア、明日の夜、時間空けられねえか？」

「私だけ？」

「必須はな。ファッツも・・・うん、来てくれて構わねえな」

ナタリアが怪訝そうな顔になった。

「どういう事？何の話？」

「悪い。龍田会の連中との夕食会があるんだが、向こうがナタリアに礼を言いたって言ってるな」

その途端、ワルキューレの面々が一気にジト目になった。

「・・・龍田会、ねえ」

「ボス・・・」

「また何か変な事押し付けられるんじゃないや・・・」

「行かない方が良いですよ・・・」

テッドが途端にバツの悪そうな顔になった。

「あーいや、その、ナタリアには来てもらいたいわって・・・町長も言ってる、さ・・・」

ナタリアはジト目のままテッドを見た。

「始末してあげた数、忘れてないでしょうね」

「60人くらいだったか？」

「正確には63人よ」

ファッツがナタリアに訊ねた。

「何だその人数は」

ナタリアは肩をすくめた。

「テッド、あなたから言いなさいな」

ファッツの視線を感じながら、テッドは渋々口を開いた。

「まあファッツなら良いか。えーとな、俺は大本営勤めだったんだよ」

「知ってる。総合戦略部長だったんだろ？」

「何で知ってた？ま、まあ良い。で、俺は上官ぶん殴ってここに逃げてきたんだが」

「テッドらしいな」

「うるせえ。けどよ、俺の仕事に逆恨みしてた連中がしつこく刺客を放ってきやがってな」

「・・・」

「それをナタリア達SWSPの面々が始末してくれた数が、63人て訳だ」

「あー・・・ナタリア」

「ええ」

「その63人は・・・」

「ドラム缶に押し込んでコンクリ詰めにして南海トラフに放り込んだわよ?」

「だよな」

　ファイナが溜息をついた。

「内戦地の政府要人だつてこんなに狙われませんよ」

「ああ。ちよつと桁が違うよな」

「しかもその事を私達は聞かされてなかったんです」

「えっ」

　ナタリアは肩をすくめた。

「テッドから大本営内で3回くらい命を狙われたと聞いて、じゃあ念の為見張つてあげるって言ったの」

　ファッツは納得したという風に大きく頷いた。

「良かったなあテッド、ところでナタリア」

「ええ」

「その代金はきつちり貰ったんだよな?」

　ぎくりとするテッド、ああそうかと気づいた顔のナタリア。

「そうねえ・・・」

「あ、あー、俺ちよつと用事が」

　立とうとするテッドにナタリアが笑顔で話しかけた。

「テッド、明日の晩行くわ。何時からかしら?」

　腰を浮かしたままテッドはきよんとんとして答えた。

「えっ?あ、ああ、俺の事務所に1800時に来てくれれば町長の迎えが来るぜ」

「じゃあ1800時にテツドの事務所です。私一人で良いわ」

「そつ、そつか、なら町長も喜ぶ。助かるぜ」

「町長にも、テツドにも、貸し1つよ?」

「うっ・・解った、解ったつて」

「あと、龍田さんとお話したいから場所用意してくれるかしら?」

「お、おいおいおい、海軍相手に砲撃戦とかナシにしてくれよ?」

「しないわよそんな事」

「じゃあ町長に頼んどくよ」

「確実に、よろしく、ね?」

「解ったよ!じゃあな!」

ボタン。

ファツゾとフィーナが自分を見る視線を感じたナタリアは、

「んー、ファツゾが良い事言ってくれたから明日が楽しみね」

と、にっこり笑った。

第37話

翌日。

「テッド様、ナタリア様、お迎えに上がりました」
「おお、よろしくな」

「ええ。龍田さんとの会見場所も完璧かしら？」
「もちろんです。さ、車にどうぞ」

そして。

「ナタリアさん達のおかげです、ありがとうございますございました」
「どういたしまして」

応接セットのソファに座り、静かに頭を下げる龍田。
その後ろに立って控える文月と不知火。

龍田の向かいにはきちんと座るナタリアが居た。

これだけ書くと和やかな雰囲気にも取れる。

だがナタリアの笑顔は硬く、こめかみの辺りがピクピクと痙攣していた。
一方で不知火は緊張と警戒のあまり眉間にシワを寄せ、ナタリアを睨みつけていた。

龍田がにこにこ顔のまま、すつと顔を上げた。

「テッドさんには随分刺客が来てたみたいですね」

「63人ほどね。特に最初の2年は57人も始末したわ」

「あらあ、それは多かったですね」

「ロハでやるにはちよつと酷すぎるんだけど？」

ロハとは「只」という漢字を上下に分けてカタカナ読みしたもので、無償という意味のスラングである。

龍田が薄く目を開けた。

「なるほど・・・では何をお望みですか？」

「貴方達の鎮守府では艦娘も深海棲艦も人間に戻せるのよね」

「そうですね」

「じゃあ逆は出来ないのかしら？」

「逆と、仰いますと？」

「人間を艦娘または深海棲艦に、よ」

不知火がぎくりとした顔になり、文月が薄く目を開けた。

龍田はこくりと頷いた。

「出来ますけど〜?」

予想外にあっさり龍田が認めた事に内心焦りつつも、ナタリアは続けた。

「ん・・・じゃあお願い出来ないかしら。それでチャラ。どう?」

「あんまり沢山の人数だと受けかねますよ〜?」

「そうね、せいぜい5〜6人でどこかしら」

「ご内密にして頂けますか〜?」

「もちろん」

「しようがないなあ・・・でもその位なら良いですかねえ」

「ちなみにその場合、その人間は何になるの? 駆逐艦?」

「無線機です〜」

「・・・は? 無線機?」

「私達艦娘は、船魂が艦装に憑依するから艦娘になるわけですけど〜」

「ええ」

「手頃な艦装を探すのが難しいので、工場で対応出来る一番小さな機械に憑依してもらおうんです〜」

「それが無線機って事?」

「はい〜」

「じゃあ私達と同じように、修理も工廠というかドックで出来るようになる」

「ええ。寿命も私達と同じです〜」

「・・・実績は?」

「既に4人の方がなってます〜」

「その人達の問題は無いのね?」

「はい。皆さん問題なく過ごされていますよ〜」

「対象者を特定した後の算段は?」

「そうですねえ、ではテッドさんにお伝えしておきますから仰ってください〜」

「準備含めてどれくらいかかるのかしら？」

「ここまでの往復を含めて、4日くらいでしようか？」

「それってほとんど往復の時間じゃない？」

「そんなものですよ？」

「・・・」

ナタリアは数秒間、3人を眺めた。

全く表情が揺れない龍田はともかく、文月さえ動揺を隠しきれておらず、不知火に至っては露骨に龍田を睨んでいる。

(よし、間違いないわね)

ナタリアは頷くと、

「じゃあそれをお願いするわ。テッドに伝えるからよろしく」

「はい、あ、そうそう」

「なにかしら？」

「今後ともよろしくお願いいたします♪」

「・・・仕方ないわね」

にこりと微笑む龍田と、少し硬い笑みを浮かべたナタリアは握手を交わしたのである。

「龍田会長！あれは特別機密事項ではないのですか！」

その帰り道。

不知火は外洋に出た途端、龍田に噛み付いた。

龍田はひらひらと手を振った。

「名誉会長からは何も指定されてないし、既に外販実績があるでしょ？」

不知火は苦虫を噛み潰した顔になった。

「昆崙初代所長ですか？あれは881研が実際の動作を見たいから」と

「そんなのは言い訳に過ぎないわ、あれはとつても個人的な欲望よ」と

「・・・」

「勿論不知火ちゃんの言う通り、おおつぴらにして良い技術では無いわ」

「・・・はい」

「でも、使える時に使うカードとしては割と良いんじゃないかなあ」

「・・・」

「睦月ちゃん達は波打ち際に作っちゃったけど、今は防潮堤で囲んだし、塩害対策もしてあるし」

「・・・」

「使用する資源は僅かで、重要な交渉の切り札にも使える」

「・・・」

「そういう時に使おうと思ってるのよ」

「では、今回の件は？」

「今までは割と鍛えていた軍人しか例が無いでしょ？」

「えっ・・・ええ」

「普通の民間人に適用しても問題ない、そういう実績を政財界の要人は欲しがるからね」

「不知火の目に動揺が現れた一方で、文月は溜息をつきながら言った。

「龍田会長、実験台なら1人で良い筈ですよ。大盤振る舞い過ぎませんか？」

「実験の為だけじゃないわ。私達や公安が手を回していたにも拘らず、63人もすり抜けてしまった」

「・・・」

「もしナタリアさん達が本気で対処してくれてなかったら、テッドさんは確実に死んでいた」

「・・・」

「それは私達の重大な失点で、それをカバーし続けてくれたのがナタリアさん」

「・・・」

「事実は重く受け止めるべきだと思うのよ」

「・・・ナタリアさんは約束を守るでしょうか？保険は要らないでしょうか？」

「信頼関係が重要な相手に小細工は好きじゃないわ。その人とナタリ

アさんとの関係も解らないし〜」

「・・・」

「仮にナタリアアさんの大事な人だとして、保険の為にその人の頭に小型爆弾を埋め込んだなら〜」

「・・・」

「その事実を知られるだけでとても面倒な事になる。そうは思いませんか?」

「・・・はい」

文月はワルキューレの調査結果を思い出した。

全員元MADF第1艦隊所属者であり、現在はflagship級のレ級。

その4人が怒り狂って襲ってくれば、1万体を数える深海棲艦の防衛網をもってしても鎮守府への損害は避けられない。

理由を知らればお父さんは何故そんな事をしたと怒るだろうし、一方的に停戦して直接謝ろうとするだろう。

怒り狂ったナタリアの前にお父さんが出て行って無事で済む筈が無い。

それだけは絶対に避けねばならない展開だ。

龍田はちらりと考え込む文月を見た後、くすつと笑って続けた。

第38話

龍田は海原を見ながら言った。

「Deadline Deliverersは、今や世界の海運、いえ、物流ラインに必要な不可欠な存在です」

「・・・」

「虎沼さんは北米と日本を結ぶので手一杯、Deadline Deliverersはそれを各大陸と結んでくれている」

「・・・」

「日本が莫大な物流ハブになっている現状は、この国の経済状態を維持する上で不可欠」

「・・・」

「そして虎沼さんの港とDeadline Deliverersの港、その間の陸送を私達の会社が独占している以上」

「・・・」

「彼女達が変調をきたされると私達にも大きな影響が出るのよ」

不知火が口を挟んだ。

「不老長寿化の話が漏れなければ良いのですが・・・」

「絶対漏れるでしょうし、それも織り込み済みよ」

「えっ?」

「考えてみて、私達から世間にPR出来る筈無いでしょ?」

「もちろんです」

「じゃあどうやって政財界の要人の耳に入れるの?」

「・・・あっ」

「実際に処置に成功した人間と会う程、確実な証は無い」

「・・・」

「そして少しずつ噂として漏れ広がる位の方が、こういうオカルトめいた話は信憑性が高まるものよ」

「つつ、つまり、彼らは実験台兼広告塔、だと・・・」

「ええ。昆柊初代所長も同じ役割だけど、話が広がる速度が予想以上に遅かったのよね」

「・・・」

不知火は思った。

こちらもあり知られれば処理能力的に困る。問題視する団体の処理も厄介だ。

かといって全く漏れなければ莫大な金を積んでやってくるカモの耳に届かない。

だから秘密を守れと言われつつも漏れ広がる位を「丁度良い」分量だと考えたという事か。

漏れたら漏れたでビジネスに繋がり、漏れた事実はナタリア達と交渉する時のカードにもなる。

ならば変に爆弾を仕掛ければ全ての意味でネガティブにしか作用しないから何もしない方が良い。

あまりにあっさり認めたからおかしいとは思っていたが、龍田会長はあの短い時間にそこまで考えたのか。

自分とは頭の回転が違いすぎる。もう口出しするのは止めよう。「納得してくれたく？二人ともく」

「は、はい」

文月は腕を組みながら言った。

「という事は、実験台と言えど、あんまり失敗してはいけないという事ですわね」

「あんまり、じゃなくて、絶対、なんだけどねく」

「えっ?」

「悪いサンプルがあつたら要人は決して飛びつこうとしないものく。むしろ予想以上に良くないとねく」

「・・・」

「東雲組は信頼出来るけど、一応ちゃんと言っておかないとねく」

3人は滑らかにソロール鎮守府へと舵を切っていった。

「は?今何て言ったナタリア?」

「だから、私達と同じ寿命になれるのよ」

「俺が艦娘・・・いや、艦男になるのか?」

「正確には無線機に憑依するそうだから、艦では無いけどね」

夕食会から帰ってきたナタリアは、皆が寝静まった真夜中にファツゾの部屋を小さくノックした。

そして顛末をすっかり話して聞かせたのである。

「それにしても、海軍は何考えてそんな技術を開発したんだろうな」「ずっと働ける司令官とか?」

「うわあ、ありそうだなあ・・・」

「辞めてて良かったじゃない」

ファツゾは少し考えていたが、

「・・・うん、結果がどうであれ、その話に乗る事にするよ」

「ファツゾ・・・」

「ただ、1つ約束して欲しい」

「なあに?」

「もし俺が帰らぬ人になった時は、海軍と砲火を交えるな。そして、ミストレル達を頼む」

「えっ・・・」

その時になってナタリアはようやくリスクに気がついた。

ファツゾが処置に失敗して、帰らぬ人になったら?

ナタリアは一気に目の前が真っ暗になった気がした。

ファツゾが、ファツゾが帰ってこなかったら?

えっ?

海軍、いや、あの鎮守府と砲火を交えない?

そんな選択肢あるわけないわよ。

最後の一人になるうがズタボロにされようが、あの鎮守府を地獄の業火に放り込んでやる。

だって生きてる理由が無いもの。

「・・・リア? ナタリア! おい!」

「!?!」

ふと我に返ると、心配そうな目で覗き込むファツゾが居た。

「大丈夫かナタリア?」

ナタリアは言葉が出なかった。

震えながら、泣きながら、ファツゾにしがみつくなかった。

翌朝。

「行くでしょ、あなた？」

「ついでに10歳くらい若返れないかなあ」

「良いわね！出会った頃のあなたは王子様みたいだったし！」

ここは商工会議所の一番奥の会議室。

ファッツが呼んだのはライネス達、テッドが呼んだのは町長と警察署長であった。

クー、ルフィア、ミストレル、ベレー、そしてワルキューレの面々も関係者として集まっていた。

そしてテッドとナタリアが龍田達の提案内容を説明していったのである。

キャツキヤとはしやぐライネスとルフィアはむしろ例外である。

町長やファッツはどちらかというお腹を括った表情をしていた。

そして警察署長に至っては辞退すると答えたのである。

理由を尋ねられた署長は、

「不老長寿になってもメリットが無いよ。結構警察のお仕事はしんどいんだぜ？」

そういつて肩をすくめたのである。

町長はしばらく悩んでいたが、

「わしはもう少し、皆を守る仕組みを整備したい。条例作りは根回しに時間がかかるしな」

と言って参加を表明した。

ファッツは肩をすくめ、

「リスクはあるかもしれないが、そうそう乗れる船じゃないし、なりた
い理由は明確にある」

と言った。テッドはそれに頷くと

「俺もほとんどファッツと一緒にだな。まあ俺の場合は俺の後釜が居
ねえって事だが」

そう答えたし、ライネスは

「不老長寿の可能性を俺のような民間人が得られるチャンスは今回限り
だろうからな」

と、にっこり笑って答えた。

ナタリアは一通り聞いてから、改めて署長の方を向いた。

「この町がこうなれた表の理由が町長とテッドの活躍だとしたら、裏の理由は私と署長のそれだったと思うの」

「んー、俺が何かしたかなあ」

「余計な時に何もせずにくれたし、時に警察の役割以上の事をしてくれた」

「・・・何の事やら」

「次々来る後釜の坊や達にイチから説明するのはとっても面倒なんだけど?」

「警察は定年つてもんがあるんだが?」

町長が澄ました顔で言った。

「うちの県はとにかく貧乏でな。コストカットにシルバー世代の活用を模索する動きがある」

「・・・なに?」

「元氣なシルバー世代なら署長役にモデルケースとして採用されるかもなあ」

「いつから手を回してた?」

「わし一人でこの町を背負うのは荷が重いからな」

「・・・本気かよ」

「本気だが?」

町長と署長は数秒間視線を交わしていたが、署長は最後にはやれやれという風に溜息をついた。

ナタリアはそつと訊ねた。

「改めて聞くわ署長、この町の仕組みに今後も加わってもらえないかしら?」

「このメンバーでずっと町を動かすつての?」

「正確には、町長、署長、テッドよ。そして私達が実働部隊。構成員のほとんどが同じ時間軸を生きる者達になるわ」

署長は肩をすくめた。

「ん、同期の連中にゴルフのドライバー勝負で圧勝するのも悪くない

か」

「物凄いい理由ね」

「まー、その・・・さ」

「？」

「俺もこの町には愛着があるしな」

上目遣いで見返した署長に、ナタリアはニツと笑った。

「じゃあ町長、署長、テッド、ファッツ、ライネスの5人で良いわね？」

室内に居た全員が頷いた。

一方、その頃。

「はあーあ・・・」

「姉様？」

「・・・はあー」

溜息をつきながらぼんやり外を眺める防空棲姫を見て、妹である港湾棲鬼は首を振った。

ファッツさんが結婚したと耳にしてからずっとこの調子。

これはしばらく駄目そうだ。

第39話

商工会議所での打ち合わせから1週間後。

「やあ、曳航ありがとうナタリア。随分綺麗な島だねえ」

「コレグライ簡単ヨ」

ワルキューレが護衛し、ナタリアが曳航する小船でファッツ達5人はその島に辿り着いた。

ナタリア達が人の姿に戻った時、島の建物から龍田達が出てきた。

「お待ちしておりました」

町長が近寄る。

「龍田様、この度はお世話になります」

「町長さん達が今回のお話の方だとは思いませんでした」

「今後とも、我が町を何卒よろしく願っています」

「こちらこそ、よろしく願っています。末永く」

テッドは龍田がちらりと見た視線に気づいた。

「ああ龍田・・その、所長は元気かよ?」

「ええ。この処置も受けてますます元気ですよ」

「えっ、所長も艦娘化処置受けたのかよ?」

「不老長寿化処置、です。艦にはなれませんよ?」

「まあどっちでも良いじゃねえか。するってえと所長も長生きするって事か」

「テッドさんを海軍に呼び戻すチャンスが増えるって喜んでましたよ」

「げっ」

「げっ」

「いっそ、かけもちとかどうですか?」

「止めてくれマジで止めてくれ。それ所長に言うなよ?絶対言うなよ!」

「あああ、フラグですね」

「違〜う!」

その時、ライネスが準備を済ませて出てきた睦月に訊ねた。

「えっと、今日の処置をしてくれる方ですか?」

「そうですねーん」

「ちよつと凶々しい頼みかもしれないんだが、若返るって出来るかな？」

「大幅には無理ですけど、シワを取るとか痩せる程度ならオプションで簡単に出来ますにやーん」

「じゃあ10歳分くらい頼めないかな。あちこちガタが来ててな」
「体調を整えるって事ですか？」

「そうなるかな。老眼とか10年前には無かったからなあ・・・」

「解りました〜！お任せくださいにやーん！」

「ありがとう」

がやがやとした雰囲気になったので、文月がパンパンと手を叩いた。

「あまり時間も無いので、早速始めたいと思います。ではライネスさんからどうぞ」

ライネスはニツと笑ってファツゾ達に手を差し出した。

「じゃ、実験台になってくるさ」

「ちゃんと帰ってこないとルフィアが泣くぞ？」

「解ってる」

ぐつと握手をした後、ライネスは煤で汚れた「工廠」と書かれた建物に入ってしまった。

15分後、ライネスの注文通り若返った姿で出てきたのだが、龍田はそれを知らなかったのだ。

「あ、あら・・・あらあら・・・若くなっちゃいましたか〜？」

と、驚いた様子だった。

程なくオプシヨンの話を聞いた残る面々も幾つか希望した。

それは体脂肪、血圧、尿酸値、肝機能、薄毛、老眼等の改善と切実なりクエストだったのであるが、

「ふうん、そういう事の改善に価値を見出すんですね、なるほど、なるほどお・・・」

と、龍田は興味津々の様子でメモを取っていたという。

こうして2時間足らずで全員の処置が済み、再びワルキューレの護

衛の下で帰っていった。

港町で迎えたルフィアはライネスを見てキヤアキヤア言いながら飛びついた。

「あなたー！ステキ！カッコイイ！」

「そうか？これですつと一緒だぞ〜」

「そうね！ずつと一緒に居られるわね！」

「クーちゃんは？」

「お店でお祝いの支度してるわ！さあ早く帰りましょ！」

そう言つて手を引くルフィアに引つ張られながらも、

「ファッツ、ナタリア。改めてお礼に行くから。じゃあな！」

といつて去つていった。

そして波止場に止めていた自分の車の傍で、テッドに近寄る珍しい姿があった。

「あれ？なんだ武蔵、迎えに来てくれたのか？」

「ちよつと用事があつたからな。ついでだ。つ・い・で！」

「まー何でも良いや、迎えてくれて嬉しいぜ！」

「んつ・ど、どういたしまして。で、どこも変調はきたしてないのだから？」

「そうだな・・ああ、心配ないぜ！」

「あと・・少し痩せたか？」

「おつ、気づいたか。どうだ、格好良くなつただろ？なんてな！」

「・・ああ」

「えつ？」

「なつ、何でもない！何をきよとんとした顔で見てるんだ！」

一方。

「じゃあわし達はこれで」

「帰る前に町長とサシで一杯引つ掛けようつて事になつてな」

そう言つて町長と署長も帰つていったので、埠頭にはワルキューレとファッツだけが残つた。

「・・・」

ファッツを後ろから見るナタリアの様子を見て、フィーナ達は頷く

と

「あーボス、私達は先に戻って、ミストレルちゃん達に伝えてきます」
「バイクじゃないんで歩いて行きますね」

「ごゆっくり」

そう言つて立ち去つたのである。

「え？あー・・・余計な事を・・・」

カリカリとファッツは頭を掻いて振り向くと、ナタリアが俯き加減にポロポロと涙をこぼしていた。

「えっ？ナ、ナタリア？」

「ずっと、ずっと心配してたのよ・・・」

「ナタリア・・・」

「私が余計な事を考えたせいであなだが居なくなったら、私・・・」

「だ、大丈夫だよナタリア、ええと・・・」

ファッツはそつと、ナタリアの両手を両手で包んだ。

「ほら、俺はここに居る。生きてるし、どこも痛くない。ナタリアのおかげで奇跡が起きたんだ」

「・・・」

「これからはずっと一緒に時間を歩めるんだ。共に祝おうよ。な？」

「・・・ずっと？」

「ああ。ずっと一緒に。その為に俺は不老長寿になつたんだ」

ナタリアが泣きながらファッツに抱きつき、ファッツはナタリアの頭を優しく撫でた。

「・・・超、出て行き辛え」

少し離れた倉庫の影で、ミストレルはカリカリと頭を掻きながら言った。

「フィーナが頷きながら言った。

「呼びに行こうとしたらばったり会っちゃいました、なんて都合が良過ぎるしね」

フローラが耳にヘッドホンを押し当てながら相槌を打つ。

「本当の事なんだけどなあ・・・でも録音はする」

ミレーナがびしつとフローラに突っ込んだ。

「なんで持って来てんのよ！」

その時、ベレーが微笑んで言った。

「ファッツさん、ナタリアさん、お二人ともすつごく嬉しそう」

ミストレルが頷いた。

「ああ、姉御があんなに泣いてるの初めて見たぜ」

「私に親切にしてくれた人が、ちよつとずつでも幸せになれば、良いなって、思ってたから、良かったです」

フィーナは思った。

この子は普段はこんなにか細い感じの可憐な美少女なのよねえ。

ファッツのご飯とビーネンシュティツヒへの執着はすさまじいけど。

ぼん。

置かれた手に気づいて振り向いたフィーナに、フローラとミレーナがニツと笑っていた。

「ボス、嬉しそうだね」

「ええ」

「ずっとアタシ達優先で手を尽くしてきたボスだから、一番幸せになつて欲しかった」

「そうね。ファッツさんも私達と同じ時を歩めるようになったし」

「結構良い感じでまとまったんじゃない？」

「後は会社が傾かないように、今まで以上に頑張るだけね」

「えっ？」

「そこはさ、上手にこうやりくりしてさ、もうちよつと余暇を作るって方向でさあ」

「だってフローラに余暇あげたら年がら年中出歯亀しそうじゃない？」

「私そんな変態じゃないよ？」

「今手に持つてるものが何か言ってみなさいよ」

「ガンマイクのMKH816よ？」

「説得力0じゃない！」

「フィーナだってこの前一緒に聞いてた仲じゃなくい」

「いつ!? あ、あれは」

その時。

「いつ、何を聞いてたのかしら? フィーナ、フローラ」

声の方をそつと振り向いた先には、まず苦笑するファッツゾが見えた。

そしてその隣には冷たい微笑をたたえたナタリアが腕組みして仁王立ちし、

「ゆっくり、お話聞かせてもらおうかしら?」

そう、低い声で伝えたのでフィーナ達は心底震えたという。

特別編―それぞれの年末年始

S・O1話

「ぱりっちー！今年最後のゴミ収集車来ちやうよ！」

「えー待ってー」

「間に合わなかったら捨てられないんだよ！」

「もう良いよ、捨てるの諦める」

「・・・全部捨ててやる」

「やっやめてー！」

中庭でぼんぼんに膨れたゴミ袋を両手に持ったまま、ベレーは事務所を振り向いて溜息をついた。

只今12月28日月曜日の早朝、可燃ごみの年内最終日である。

ベレーは普段から週に1度、夕島整備工場ハウスキーピングのアルバイトをしている。

ゆえに二人が捨てられない性格である事を良く解っていた。

なおかつ、アイウイは大掃除など、イベントを作れば捨てられるのに対し、

「いや、絶対何かに使えるのよ。ほら、このチューブだって一昨年夏にね・・・」

そう。

ビットはトコトン捨てられない。いや、捨てないタイプなのである。

この工場の裏手には、各地の夕張から保管を委託されているコンテナ群がある。

しかし2日前のアルバイトの際、とんでもない事が解ったのである。

12月26日、1000時。

ベレーは手に小包を持ち、そつとアイウイに声をかけた。

「あの、アイウイさん」

「なーにベレーちゃん」

「今朝届いた荷物なんですけど」

「・・・あ、3434鎮守府の夕張さんからの荷物でしょ」

「はい」

「あれ、ごめん。80番コンテナに入れといてって言わなかったっけ」
「伺ったんですけど、もう入らなくて」

「へっ?」

アイウイはきよとんとした後、怪訝そうな顔で帳簿を開いた。

「・・・えー?80番以降のコンテナは未使用の筈だよ?」

「で、でも、80番から最後の149番まで探したんですけど、全部埋まっちゃいました」

「・・・本当?」

「はい」

アイウイは途端にジト目になった。

この家でこんな事態を引き起こすのは1人しか居ない。

アイウイが大きく息を吸い込んだ時、ベレーはすいっと自分の耳を塞いだ。

もう慣れっこなのである。

「ぱりっちいーっ!」

半径100mに響き渡るアイウイの絶叫の後、ビットはとてととと歩いてきた。

「・・・はいはいなーに?大声出しちゃって。あらベレーちゃん、いらっしやい」

「お邪魔してます」

「ぱりっちい!コンテナ勝手に使ってるでしょ!」

「げっ」

「ぱりっちいには150番コンテナ1個丸ごと使って良いよって言うてるじゃん!」

「そっ、そうね」

「なのになんで80番から149番まで69個も勝手に使ってるの」

！」

「空いてたからちよこつと借りてただけよ？」

「……」

「わ、解ったから主砲向けないで」

「言い訳を聞こう」

「……だつ、だつてしようがないじゃない！置き場所が無いんだもん！」

「却下」

「ほつ、ほら、取っておいた物でお客様の修理出来た事も1度や2度じゃないし」

「その為の資材庫は別にある。却下」

ベレーは足音を立てないように部屋の隅に移動した。

アイウイの声色がかつてないくらい低い。そして口調まで変わってる。

は、早く気づいた方が良いですよビットさん……

「もう決めた！全部捨てる！全部っ！」

「お代官様それだけは！それだけは勘弁してください！」

「ベレーちゃん！」

案の定の展開になった事に苦笑していたベレーは急に呼ばれたのでびくりとした。

「はっ、はい」

「ファツゾさん達の手を借りられないかなあ？」

「ええと……」

ベレーは天井を見ながら考えた。

年内の仕事は12月始めに終わってる。

大掃除はほとんど終わってるし、正月の飾りつけは30日にやるって言ってた。

年始の仕事は1月中旬に1件あるだけだつてファツゾさんがぼやいてた。

ナタリアさんの方は……3月まで無い筈だ。

「30日までなら大丈夫だと、思います」

アイウイがずびしとビットを指差した。

「28日が今年最後の可燃ごみの日です」

「は、はい」

「それまでに必要なものは150番コンテナへ移し、残りは捨てます」
「うええええっ！そんな！コンテナ1個になんて入らないよー！」

「捨てます」

「けっ、経営者の横暴を許すなー！」

「・・・70個分のコンテナレンタル代、月幾らすると思ってるの？」

「えっ」

「うちは一般向けには1畳辺り月5000コインで貸してるんだよ
？」

「うっ、うん」

「ただし1コンテナ丸ごとなら、ちょっと値引きして40000コ
インで貸してるの」

「げ」

「ぱりつちが毎月280万コイン払うんなら良いけど？」

ビットは目を逸らしながら渋々答えた。

「あ、その、ら、来月中には・・・せ、整理する・・・方向で・・・前向きに・・・」

アイウイは請求書の用紙を取り出しながら言った。

「じゃあ今月分の280万コイン払ってね」

「28日までに何とか致しますー！」

「よし」

ベレーは肩をすくめた。

40フィートドライコンテナ70本分の私物って一体・・・

アイウイはベレーの方を向きながら続けた。

「そういうわけで、70本分のコンテナのゴミなんてゴミ置き場に置
けないし」

「ですね」

「町外れの処分場まで運ぶのを手伝って欲しいんだけど、テッドさん
通した方が良いかな？」

「んー」

ベレーはすこし考えたが、
「先にファツゾさんと相談した方が良いかと、思います。お値段的に」
アイウィは溜息をついた。
「そうだね」

S. 02話

「・・・まあ、確かにビットの所なら部品があるんじゃないかって感じはしてたけどな」

呼ばれて出向いてきたファッツは事情を聞かされるとこう返したのである。

ビットがポンと手を叩いた。

「でしょ！ファッツさんの車だって何度もそれで直したよね！」

「けどさすがにコンテナ70本分は多過ぎだろ。よく在庫把握してるな」

「・・・あー」

ビットがそつと視線を外すと、ビットの傍にいた妖精達が手を振った。

ファッツはジト目になった。

「まさかお前、在庫全く把握してないなんて事は」

頷く妖精達、左右の人差し指をつんつんと合わせるビット。

ファッツはアイウイを見て言った。

「経営者も大変だな」

「ファッツさんなら解ってくれると思った」

「で、どうやって捨てるかだが・・・処分場がなあ・・・」

ファッツが腕を組んで眉をひそめたのには理由がある。

この町には2ヶ所の処分場がある。

1つは最終処分場で、海に面した入り江を囲った形なのだが、こちらは焼却灰と土しか受け入れない。

もう1つは焼却処分待ちの一時処分場だが、こちらは内陸で船が使えない。

アイウイは溜息をついた。

「順当に考えるとトラック借りてきて一時処分場送りだよな」

ファッツは首を振った。

「だがコンテナ1本毎に処分料を取られるし、70本分の輸送となる

と大変だぞ?」

ベレーはずつと考えていたが、

「ここで燃やしてしまえば、最終処分場に持っていきますよね?」
ファッツゾが自分の顎を撫でながら答えた。

「焼却灰にしてしまうのか?それはそうだが・・・ビット」

「・・・はあい」

「嫌なのは解るが教えてくれ。構成する素材は何が多いんだ?」

「ほとんどがDVDとブルーレイとフィギュアだからプラスチック
よ」

アイウイが溜息をついた。

「やっぱり修理と関係無いじゃん・・・」

「でもほとんど未開封だし・・・いつか見ようと思ってたのになあ」
ファッツゾが頷いた。

「それなら捨てなくても良いじゃないか」

ビットの表情が一気に明るくなった。

「えっ本当?取っておいて良いの?」

「売っちゃまえばいい」

ビットの表情がそのまま固まった。

「えっ?」

「捨てるなら金がかかるが、売り飛ばすなら上手く行けばタダで済む
かもな」

「いやー!絶対いやー!私のコレクションン!うおおおおお!」

そう言つてビットが床に伏して泣き出した。

だが、アイウイはけろつとした顔で

「じゃ、まずは中庭を片付けて、整理する場所作るね」

と言つたので、ファッツゾはアイウイとビットを交互に見た。

「コンテナ70本分も未開封の物があつても見られるわけないし」

アイウイがそう言った時、ベレーがぽつりと言つた。

「もしかして、重なつてるものもあるんじゃないかな・・・」

ビットがふと顔を上げた。

「えっ・・・ダブって買うなんて事は・・・ないと・・・思うんだけどなあ・・・」

だが、妖精達が懐疑的な表情でビットを見たので、ファッツは頷いた。

「同じのがあるかどうかは俺達でも解るが、なら尚の事手が要るな」
アイウィは溜息をついた。

「じゃあテッドさんに正式に依頼を出すよ・・・」

「はあ!?! 40フィートコンテナ70本分のDVDの整理い!?!」
「うん」

「それ、どの辺りに輸送が関係するんだ?」

「最後に中古屋さんに持っていく時なんだけど・・・それよりその前の仕分けの手が要るの」

「そのDVDは価値があるのか?」

「私は解んないけど、多分あるんじゃないかなあ」

「なら、輸送以外も出来て、陸上での大量輸送の経験があつて、信用出来る奴、となると・・・」

「ファッツさんの所、ワルキューレさん達、そして」

「神武海運くらい、だぞ?」

「だね」

「・・・ファッツ達を除けば高いぞ?」

「だよね」

テッドはしばらく考えていたが、

「・・・何年かかけて地道に整理したらどうだ?」

「たった3年の結果がこれなの。だから来年末にはもつと溢れると思う」

「ビットは何考えてそんなにDVD買ってんだ?」

「欲しかっただけだと思うよ」

「じゃあいつそ、中古屋に任せたらどうだ?」

「どういうこと?」

「連中に見積もらせるんだよ。で、売りたい奴だけ売る。案外運んでくれるかもしれないぞ」

「それ良いね! あ、それだとお仕事にならないね」

「気にするなよ。年内に済むと良いな」

「うん！ありがとね！」

アイウイの電話を切ったテッドはホッと息を吐いた。

忙しい訳じゃないがコンテナの中で埃まみれで年越しなんて冗談じゃない。

危ない危ない。さて、とつとと店を閉めて正月飾りでも買いに行くか。

テッドは車のキーを掴むと事務所を出た。

「もう26日か・・・」

テッドは信号待ちをしながら、その奥にある師走の空を眺めた。

Deadline Delivers が世間に知られ始め、仕事量が安定してきたのはここ2、3年の事だ。

立ち上げる前から艦娘と深海棲艦のいざこざとか、それぞれが抱えてきた過去の清算とか・・・

「色々やったなあ・・・」

既に人間ではなくなった身だが、武蔵に言った通り全然実感が無い。

うっかり市役所からのお知らせを手に健康診断へ行きそうになった事もあった。

「不老長寿化措置を受けた後は健康診断や医者に行ってはいけません」

それが睦月の注意事項だった。

なんでも心電図等で異常な値が出てしまうので、そこから表沙汰になりかねないらしい。

とはいえ、それくらいしか違いがない。

海に浮ける訳でもなく、無線通信が出来るのはファツゾや町長など、同じ措置を受けた者同士だけだ。

「電話があるのにわざわざ無線なんて使わねえしな」

青信号になったので、テッドはアクセルを踏み込んだ。

S. 03 話

「よう舞ちゃん」

「あ、テッドさん、こんにちは」

「今日は非番かい？」

「はい」

正月飾りや餅等を売っている露天市場で、テッドは私服姿の舞と出くわした。

「そういやこの子と俺は逆の道を辿ったんだなとテッドは思った。

舞は艦娘として建造され、解体された時に船魂から人間になる事を選んだ。

俺は人間だったけれど、無線機に憑依する形で、いわば船魂になったようなもんだからな。

テッドは舞が持っていた包みを指差した。

「おつ、良いモチ買えたな？どこで売ってた？」

「えつと、あつちの角に出てるお米屋さんですよ」

「そっか。舞は正月どうするんだ？」

「実は今年、初めて元旦と2日の2連続でお休み貰えたんです」

「ほー」

舞は警察官であり、年末年始の警察は忙しい。

ゆえに交代で休みを取るし、特に忙しい大晦日と元旦はどちらか出勤が当然である。

「だから初詣から帰ったら温泉に行こうと思って」

「良いじゃねえか。宿は取れたのか？」

「はい。隣町なんですけどね」

「ああ、紅葉屋か？」

「ええ」

紅葉屋は山の上に立つ温泉旅館であり、風光明媚な事で知られている。

地元民からすると近い所にある宿だが、全国から客が訪れる程の人氣振りである。

「ほんとは初日の出も紅葉屋さんから見たかったんですけど、満室だつて言われちゃって」

「だろうな」

「でも元旦の夜なら1部屋だけ空いてるよつて言われたんで、すぐ入れちゃいました」

「元旦の夜なら初夢じゃねえか。良い夢見られると良いな」

「あつそうですね！忘れてました！」

「明日から大晦日までは勤務かい？」

「ええ。毎日交通整理です」

「折角温泉が待ってるんだ。腹冷やささないようにな」

「はあい。じゃ、テッドさん、良いお年を」

「おう、お前も良い年迎えろよ！」

その頃。

アイウイが問い合わせているのだが、地元の中古屋では物量が多すぎて対応出来ないと言われ首を振られた。

そこで大手のセンターに電話すると、最初は冗談かと笑われた。

だが、本当の事だと繰り返し説明すると、声色がコロツと変わった。

「・受けたいのですが、うちには大型トラックがないんです。何台も連ねて行って大丈夫ですか？」

「ご心配なく」

「で、では、まずは見積もり要員を向かわせます。調べる場所はお借り出来ますか？」

「中庭を片付けて、ビニールシート敷いておけば良いですか？」

「充分です。では正午までには伺いますので」

「よろしく願います」

こうして、アイウイとビット、それにベレーが中庭を片付け始めたが、

「やれやれ・・・」

と言いつつ、ファッツも手を貸したのである

時は11時30分。

表がにわかに騒がしくなったので、アイウイはひよいと窓の外を見

てぎよつとなった。

つられてファツゾ達を見ると、そこには見た事のない群集が居た。揃いの緑のエプロンと手袋、それにキャップを着用し、全員マスクにメガネ又はゴーグルをつけている。

まるで陸軍のようだ。

「ネットメディアアーズの者です。お見積もりに伺いました。私が責任者です」

ビットは淡々と応じた。

「えつと、まずはコンテナかつタイトル毎に見積をください。それから・・・」

その様子を見ていたファツゾはアイウイにたずねた。

「なんかビットの奴、妙に慣れてないか？」

アイウイは肩をすくめた。

「だって電気街でばりっちがよく買ってくるお店だもん」

「なんで知ってるんだ？」

「あのお店の袋提げて帰ってくるから」

「なるほどな」

一方。

テッドは舞の教えてくれた米屋の前に立った。

所狭しと並べられた商品の間からおじさんが声をかけた。

「らっしやい」

「ええと、あ、もうちよつと小さいサイズのモチ無えか？」

「あー、さつき売り切れちやったねえ」

「となると、一番小さいのはこれか」

「だね」

「ふーむ」

テッドは3kg入りと書かれた餅の袋を手にとつて考えた。

小さく切つて個包装にしてくれてるのは助かる。

だが、一人暮らしたから500gもあれば充分なのだが・・・

「まあ良いか。じゃあこれ1つくれ」

「あいよ」

しばらくして。

「熊手は買った、餅とあれは買った・・・あ」

ふと、テッドは不老長寿化した時にやってもらったオプションを思い出した。

「糖尿を気にする必要はない、か。よし！」

テッドは魚屋の方に歩いていった。

「ふーい、よいしょっと」

小1時間ほど回ってきたテッドは助手席に幾つかのビニール袋を乗せ、運転席へと回りこんだ。

ちらりと袋の中身を思い出す。

「んー、ちと買いすぎだな。でもなあ」

一人暮らし用の分量を売ってくれる店は少ない。
年末年始用ともなると特にそうだ。

「・・・よし」

テッドはキーを回してエンジンをかけた。

そして1500時。夕島整備工場では。

「おいしっかりしろ！」

「う、腕が痙攣して動かないッス・・・先輩・・・もうダメッス」

「メデイック！メデイック！酸素缶と湿布薬をー！」

とてとてと走ってきたベレーが言った。

「お待たせしました。酸素と湿布薬、です。貼りますね」

「ああ、こんな可愛い子に貼ってもらえるなら・・・悔いは・・・無い・・・ッス・・・」

「こんな所で気を失うなー！」

「チーム12、78番コンテナへの突撃を開始します！」

「よし、必ずツーマンセルを徹底しろ。第2グループ長！誰か手を回せ！」

「このままでは日が暮れます。投光器を手配しませんと」

「よし、本部に増援の催促と投光器のリクエストを！」

「解りました！」

店から到着したのは軽のワゴン車10台に4人ずつ40名だった。責任者の指示の元、彼らは手分けしてテキパキと作業を進めていた。

しかし、コンテナの4割を過ぎた辺りから疲労による負傷者が続出。

この人数では無理だと判断した責任者は応援を要請するも未だ到着せず、なのである。

S. 04話

12月26日1500時、夕島整備工場。

ファッツは一回りした後、見積書を睨んでいるビットに囁いた。

「・・・今度から月に1度位整理したらどうだ？」

「えー」

「あのお兄さん達が死ぬ思いしてるのは誰のせいも良く考えろよ？」
「うー」

一方、アイウイとベレーは救護班兼休憩所と化していた。

「お茶どうぞー！」

「やすいません。本当は頂いちやいけないんですが、頂きます」

「マスク、新しいのに替えませんか？」

「あ、そうですね。貰います」

「酸素ボンベ後2本しかないけど、買ってこようか？」

「助かります。じゃあ20本お願いします。レシート頂ければ現金で清算しますので」

「解った！じゃあベレーちゃん、ちょっと行って来るね！」

「行ってらっしゃい」

アイウイが買いに行こうと踵を返した時。

「ネットメディアアーズの者です。手前共の責任者に会いた・・・うわあ」

「おお来てくれたか！先に負傷者を病院へ！後は手伝ってくれ！」

「は、はい・・・なんだこれ・・・」

その頃。

「・・・よう。誰か居るか？」

テッドが向かった先は神武海運だった。

正門には小さいながらも注連飾りが飾られており、年を迎える準備は出来ているようだった。

だが、人の気配がないしゲートも閉じられている。

普通の会社なら年末休暇だろうとなるが、ここは神通達の住まいでもある。

「変だな・・・」

そう呟いたテッドが呼び鈴を押そうとした時。

「テッドか？どうした」

背後から声がしたので振り向くと、買い物袋を提げた武蔵が立っていた。

「お、丁度良い所に来たな」

「ここは我々の家だぞ」

「ちよつと上がらせてくれよ」

「構わないぞ。ちよつと待て、玄関を開ける」

「なるほど。確かにこの時期は大袋売りが多いからな」

「ああ。だから貰ってくれよ」

「良いのか？」

「俺が持つても腐らせるだけだからな。勿体無えだろ」

「まあそうだが・・・うん？」

「なんだ？」

「どうして餅とイクラとハムと伊達巻とスモークサーモンしかないんだ？」

「他に何か要るか？」

「黒豆は？数の子は？田作りは？蒲鉾は？栗きんとんは？昆布巻は？

紅白なますはどうした？」

「別に好きじゃねえし」

「好き嫌いの問題ではない！」

「あんまりスコツチに合わねえし」

「おせちは酒のつまみではない！」

「日本酒には合うんだけどな」

「その基準から離れろ」

「いーんだよ別に俺の事は。お前は俺のかーちゃんか！」

「お母上もさぞお嘆きの事だろう」

「うるせーな」

その時。

「あーごめんねお邪魔しちゃって、冷蔵庫に入れるだけだから気にし

ないで」

「頑張ってくださいね、武蔵さん」

「そうやで武蔵。気にせんと続けてや」

「あ、僕達どこかで時間潰してこようか？」

「よ、夜までどこか時間を潰せるところがあるでしょうか・・・」

「あらあら、夜までで良いのかしら？うふふふ」

ジト目になった武蔵が神通達6人に答えた。

「何を誤解している？」

「デートの真つ最中やろ？」

「ちつがう！何言ってるんだ！おすそ分けのお返しを話してただけだ！」

「大丈夫。大丈夫やて。うちら仲間やないか」

「何が大丈夫だっていうんだ」

「誰にも言わないから心配しなくて良いよ」

「時雨、お前は完全に誤解してる」

「あらそうかしら」

「姉上まで何を言うんですか！」

「だって武蔵、今とつても楽しそうだったわよ？」

「・・・えっ？」

きよとんとする武蔵、首を傾げるテッド。

「俺が買ったおせちの具が偏ってるって話をしてただけだぜ？」

山城がチツチツチと立てた人差し指を振った。

「どーでもいい奴のおせちなんて1ミリも気にしないでしょ」

「あー・・・まあそうか。それがなんだってんだ？」

「鈍いわねえ。武蔵はテッドさんの事気にかけてるって事じゃない」

「は？俺の健康をか？」

山城以下6名がダメだこいつと言わんばかりの重い溜息をついたので、武蔵はぶんぶんと腕を振った。

「ええい！ややこしくするな！おせちの具は買えたのか！」

「揃えたわよ。全部冷蔵庫に入れたわ」

「ならこれから調理する！貰った分お返しを渡す！」

テッドはぎよつとして武蔵を見た。

「え!?いい、いいよ、俺別になますとか・・痛え!」

テッドのつま先を目一杯踏んだまま龍驤が続けた。

「ほな完成したらテッドの事務所を持ってこか。時間かかるし」

「ん?あ、ああ、そうか。煮しめとかもあるからな」

大和がそつとテッドに耳打ちした。

「武蔵のおせち、楽しみにしててくださいね?」

「えっ?」

「ちゃんと、受け取って、あげて、くださいね?」

テッドは背中に嫌な汗をかいた。

大和はニコニコ笑ってるが拒否は許さないという気迫に満ちている。

「あ、あー楽しみにする、か、なー」

「良かったわね武蔵。じゃあお姉ちゃんと一緒に作りましょ」

「うむ、姉上よろしく頼む!」

ようやく龍驤の踵から開放された足を引いたテッドに、今度は扶桑が声をかけた。

「では明日にでも武蔵さんに持って行かせますので」

「あー、結構かかるんだな」

「煮込んだり下ごしらえする時間もありますので」

「そっか。その辺はわからねえからよろしく頼むぜ。じゃあな」

こうしてテッドが去った後。

「ほら武蔵、デートの続きは明日。おせちちゃんと作りなさいよ?」

「山城何言ってる!」

「ほれほれ、煮しめは大和と武蔵に任せたで?うちはなます仕込むな」

「僕は蒲鉾や数の子を切り揃えるよ。扶桑、手伝ってくれないかな」

「解りました。山城、神通さん、お重を戸棚から出して洗ってくださいな」

その時、神通がぽつりと言った。

「テッドさんが美味しいって言ってくれると良いですね、武蔵さん」

この時武蔵が反論しなかったので、

「私には素直じゃないのに神通さんには素直なのね・・・」
と、山城が少し拗ねたという。

S. 05話

12月26日2200時。夕島整備工場。

「じゃ、この赤丸をつけた物だけ1セットずつ残してください。あとは売ります」

「承知致しました」

最初に到着した責任者以下40名は全員赤疲労でダウンした。

結局増援を含めて計70名もの店員が投入され、ダウンした人数も50名を越えた。

懸命の作業の結果、買取対象となったコンテナは70本中68本。そしてビットが手元に残したのは全て1つずつ。

なのに全部あわせてもコンテナ1本の1/3程であり・

「まさかこんなにダブってるとは思わなかったわ」

というビットの言葉通りで、酷いものだと14セットも重複していたという。

「ちゃんと見てから買いなよー、そしたらこんな惨事にならなかったじゃーん」

というアイウイの言葉に、店員達もうんうんと頷いていたという。

そして明日、メディアを移送する事が決まり、コンテナにはタグと封印が成され・

「で、では、今日はこれで失礼します・明日は8時に伺いますので・」

店員達はヨロヨロとした足取りで帰って行ったが、しっかり仕事を済ませていたのはさすがプロである。

12月27日の朝、キッチン「トラファルガー」。

「おつちや・ライネスさん、窓の拭き掃除終わったよー」

「ありがとな、クーちゃん」

「このお店のおかげで僕達は生活出来てるからねえ。感謝感謝ー」

「ははは。ま、その通りだな」

二人が店内を眺めていると、ドアを開けてルフィアが入ってきた。

「表のゴミ拾い始めたいんだけど、手伝ってくれます?」

「勿論だよ。クーちゃんも来てくれるかな?」

「いいよー」

「よし、じゃ行こう」

キッチン「トラファルガー」の年内の営業は26日で終了とした。

以前は30日くらいまでやっていたのだが、開けてても客はほとんど来なかった。

その数少ない客のうち二人は、また家族となってしまうた。

ゆえにライネスは年末休みをすっかり取る事にしたのである。

それは体を休める意味もあったが、ルフィア達と楽しむ時間を作るためでもあった。

ライネスは枯葉を箒で集めながらルフィアに訊ねた。

「しかし、温泉位行けたのに、どこも行かなくて良かったのか?」

「んー」

ルフィアはライネスのほうに振り向くと、続けた。

「まあ貴方も長生き出来るようになったし、お金に余裕が出来たら行きましょ」

「その位の予算なら今でもあるぞ?」

「まあそうなんだけど・・・ちよつと心配なの」

「何が?」

「貴方と結婚出来て、貴方が私達と同じ時間を歩めるようになったじゃない?」

「そうだね」

「艦娘として生を受けて以来、こんなに幸せな毎日は初めてなの」

「・・・」

「だからこれ以上幸せになると、全部無かった事になるんじゃないかなって、ね」

「・・・そうか」

ライネスはルフィアをそつと抱き寄せると、くしやりと頭を撫でた。

「大丈夫だよルフィア。明日は今日より幸せになっていくんだよ」

「・・・うん」

そんな二人の様子を、クーは少し離れた所から微笑んで見ていた。ルフィアの言う通り、今は生きてきた中で一番不安が無い。

不安が無い事が不安だという贅沢な悩みを、ルフィアも僕も抱えている。

ライネスのおっちゃんは結婚以来、本当に僕達の事を真剣に考えてくれている。

だからこそその平和なのだと思う。

願わくば、この幸せな日々がずっと続きますように。

そしてそれが、ライネスのおっちゃんに負担となりませんように。

12月27日昼頃、夕島整備工場。

「NO88のコンテナ、封印解きますー」

「8号車と5号車は給油と休憩で抜けます」

「8と5了解、あ、2号車が帰ってきたから積み込み準備始めー」

「ういすー」

約束通り0800時に現れた彼らは、昨日とは違いトラックに分乗してきた。

軽トラから2トンロングまで混じっている所を見るとかき集めてきたのだろう。

そして1台積み終わると出発し、2時間ほどで帰ってくる。

運び先を訊ねると、

「近くの倉庫を1週間だけお借りして、とりあえずそちらに運んでるんです」

と、いう答えが返ってきた。

アイワイはもしかしてと思ったが、黙っておいた。

そして、彼らの隣では。

「ええと・・・これなんだっけ・・・あーそうか、あの部品か」

「ぱりっち、残り空き容量はコンテナ2／3本分だからね！」

「解ってるわよう・・・」

そう。

彼らが買い取り対象としなかったコンテナ2本分の整理をしていたのである。

ちなみに今日もベレーに応援を頼もうと思ったのだが、ファツゾが「ベレーは昨日救護班として頑張ったから休ませるぞ」

と低い声で念を押して帰ったので呼べなかったのである。

「では、失礼します！お疲れ様でした！」

「ご苦労様〜」

アイウイは最後まで残って片付けていた店員達を見送ると中庭に帰ってきた。

そこには既にビットがコンテナの中身を持って来て広げており・・・捨てたくなあ、勿体無あ、捨てたくなーい、勿体無いよー」

と、涙目で唸っているビットの姿があったという。

アイウイはふるふると首を振った。

ここで自分が仏心を出せば、ばりっちは間違いなく元通り仕舞うだけだ。

レイさんから甘やかしてはダメだとアドバイス貰ったじゃないか。

ここは心を鬼にして！鬼にして整理してもらおう！

「ばりっち、タイムリミットは明日の0830時までだからね」

「はーい」

そこでふと、アイウイは自分の大掃除をやっていない事に気がついた。

「ばりっち、私も大掃除するから何か必要だったら事務所に来てね」

「コンテナもう1本貸してください」

「4万コイン払う？」

「・・・おにー」

「ていうかさ、ばりっち」

「なによー」

「資材庫の要らない物片付ければ入るんじゃないの？」

「・・・行って来る！」

駆け出していったビットを見送ると、アイウイは事務所の中へと戻っていった。

S. 06話

12月27日昼頃、ファッツの家では。

ファッツがミストレルを見ながら肩をすくめていた。

「まあ、うちに国籍は無いようなもんだからな」

対するミストレルは眉を顰めている。

「にしたってよお・・・」

ナタリアがふふつと笑った。

「みつちゃんがおせちにこだわるタイプだとは思わなかったわねえ」

「別におせち100%じゃなくても良いんだけどさ・・・日本の正月って奴がさ・・・」

ベレーがぼえんとした顔で袋を指差した。

「こつちの包みはお肉、豆腐、長ネギ、お餅です。すき焼き楽しみです」

フィーナが別の包みを指差した。

「こつちはカニ、白菜、厚揚げ、きのこ、タラ、そして昆布とポン酢。

カニ鍋の準備は万全よ」

フローラが持っていた包みを持ち上げた。

「3日目のカレーの具材一式、ちゃんとゲットしてきました！」

ミストレルは継るような目でミレーナを見た。

「な、なあせめてお前くらいは・・・」

「冷凍の本マグロ、鯛、イカ、甘エビの刺身、後は大根です！元旦はお刺身尽くしです！」

「近いけど・・・違う・・・ほら、伊達巻とかさあ」

ナタリアが首を傾げた。

「そんなにみつちゃんおせち食べたいの？」

「せめて朝だけでもさあ・・・」

「でも私、今までおせちつて食べた事も作った事もないわよ？」

「えっ？」

「鎮守府では訓練かねて1年中レーションばかりだったし」

「マジかよ」

「だから美味しいとか以前に知らないのよね」

ミストレルは立ち上がった。

「なら姉御に腹一杯食わせてやる！アタシが雑煮作る！」

「作れるのみっちゃん？正月からお腹壊したくないわよ？」

「出来るよそれくらい！」

ファッツは肩をすくめた。

「まあ買ってきたのは全部夕食用だから、朝と昼兼ねておせちと雑煮でも構わないぞ」

「サンキュー！じゃあファッツ、おせち本体頼む」

「俺は作り方知らんぞ？」

「へつまジ？」

「ああ」

「え、だって今までおせち・・・」

「買ってきてたからな。市場で」

ミストレルは車のキーを挿んだ。

「よし。じゃあアタシが買ってくる」

「いってこい。ああ、小さいのにしろよ？大きいのも買っても飽きるから」

「解ってる！あと、雑煮の具も買ってくる！ファッツお金！」

「はいはい・・・じゃあ2万コインで頑張れ」

「よっし！」

ミストレルが出て行った後、フィーナがそつと訊ねた。

「あの、おせちって意外と高いんですね」

「まあ大きいのだと4〜5万位するからなあ」

「カニ鍋セット一式で7000コインくらいですよ？」

「まあすき焼きも似たようなもんだよな」

「カレーなんて2000コインもかかってないですよ？」

「お刺身は1万コイン近く行ったかな」

「まあおせちは数回分あるとはいえ、ちよつと高いのは事実だな」

ナタリアはファッツを覗き込んだ。

「ねえ、もしかして今年意図的に外したの？」

「いや、誰か食べたいなら買ってくれば良いと思って特に言わなかつ

ただけだ」

「・・・予算大丈夫？」

「年を越せるくらい金は貯めてあるよ」

「さすがファッツお父さんよね」

「ナタリアお母さんも来年からは出来る節制はしてくれよ」

「例えば？」

「真夜中に港でモヒート1本も飲んで寝込むとか」

「ごめんなさいもうしません」

その夜。

「うん、なんとなくこの展開は読めてた」

「だってー」

そう。

資材庫に着いたビットは整理しようという意気込みはあった。

しかし箱を1つ、また1つと開けていくと

「あーこれ、懐かしいわねえ。今となっては手に入らない部品だもんねー」

と、回顧モードが作動してしまった。

そしてそのまま夜になって様子を見に来たアイウイに見つかったのである。

「もう、あの2本のコンテナの中身は捨てる？」

「ま、待って！大事な部品もあるし！」

「じゃー資材庫の中身を捨てる？」

「こ、こつちもいつか使える部品が沢山・・・あつて・・・」

「じゃーどうするの？」

「・・・島ちゃん。お願いがあるんだけど」

「うん」

「晩御飯、ここで食べられて、ちよつと美味しい奴を買ってきてくれな
いかなあ」

てつきりコンテナ2本貸してくれと思うのかと思っていたアイ
ウイは目をぱちくりさせた。

「え?」

「サンドイッチとかで良いから。ねっ?」

「どうするの?」

「明日の0830時までにはきっちり整理するから。ね、お願い」

アイウイは目頭が熱くなるのを感じた。

ようやくビットが本気になってくれたのか。

「そうだね。こんな時冷えたレーションじゃ元気出ないもんね。じゃあちよつと隣町のスーパーで買ってくる!」

「ごめんね、日が暮れてから頼んじやつて」

「良いよ良いよ、夜食も買ってくるね!」

「・・終わらないって言いたい?」

「終わったら二人の朝ごはんにすればいいし!じゃあね!」

「いつてらつしやーい」

車の方に走っていくアイウイの後姿を見送ると、ビットはふんすと鼻から息を吐いた。

「よっし!片付け開始!」

S. 07話

12月28日早朝、ファッツ達の家。

ジリリリン！・・・ジリリリン！

「うー・・・誰だよこんな朝っぱらから・・・」

ミストレルは大あくびをしながら、片目だけ開けて受話器を取った。

ミストレルの部屋が一番電話に近いのである。

「へい、ブラウン・ダイヤモンドリミテッドの本日の営業時間は終了・・・」

「ごめんミストレルさん！夕島整備工場のアイウイなんだけど、ベレーちゃんに急ぎの用事なの！」

「・・・は？」

「あれからずっと片付け続けてたのか？」

「ずっと、でもないんだけどね・・・」

アイウイの声が只事じゃない。

ミストレルの話を聞いたファッツ達、そしてワルキューレの7人が夕島整備工場に急行した。

だが、そこで伝えられたのは

「あまりにも沢山のゴミが出たからゴミ置き場まで運ぶのを手伝って欲しい」

という物だった。

「まあこれだけ積み上がったら2人で運ぶのしんどいわよね・・・」

ナタリア達は全く人騒がせなんだからと文句を口にしつつも手伝ってくれた。

ファッツはベンチで休んでいたビットに声をかけた。

「で、結局コンテナ1本と資材庫に納まったのか？」

「へへへ・・・頑張ったよー」

「よくやったな」

「うん・・・でも・・・」

「なんだ？」

「島ちゃんが居てくれたから、かなあつて」

「フアツゾはにこりと微笑んだ。」

「それが解ってるんなら良いさ。いつか言葉で伝えてやれよ？」

「そうねえ・・・そうよねえ・・・」

その時。

「あ、あの、ビットさん」

「なあにベレーちゃん？」

「あの、ビットさんのお部屋は、片付けないんですか？」

「・・・へ？」

数秒後。

「忘れてたあああああ！」

というビットの切ない叫び声が響き渡り。

「それは・・・ええと・・・捨てる」

「はい、じゃあ次」

「そつ・・・それ・・・んーパス2！」

「じゃあこつちに置いといて、次」

「そつそれ・・・ぬむむむう・・・」

「捨てるの？」

「すつ・・・すつ・・・」

「捨てるんだね？」

「・・・はい」

「はいゴミー」

アイウイが次々と部屋の物を指差し、ビットが捨てるか判断する。

捨てるとなった物はベレー達が交替で袋に詰めてゴミ置き場に運んだ。

「もう0900時になるよ！いつ収集車来てもおかしくないよー！」

「解ったわよう、捨てるわよう」

「はいゴミー」

これだけ聞くとアイウイが無差別に捨てる事を迫っているように聞こえるが、実際は違う。

買ったばかりの服や大切にしている物は最初から指を差さない。その辺はずっと一緒に住んでいる2人であり、解っているのである。

要はそろそろ不要だと思うけれど踏ん切りがつかなさそうという物だけを指差しているのである。

それがまた凶星だからビットは実に悩ましい判断を迫られるのだが。

「次これー」

「あつ・・・えつ・・・えー・・・えーと・・・えー」

「捨てるー?」

「でっ、でもっ、まだ使え・・・」

「ここ壊れてるよねー」

「たっ、確かに直せない部分だけど・・・でっ、でもお」

「捨てるよー」

「うううううう・・・解りましたー」

こうしてビットの部屋から10袋分のゴミが出されたのだが。

「・・・あー、後でもう1回来ます」

うず高く積みあがったゴミの山を見上げた収集車の人達は、数袋だけ積み込むと帰っていった。

ちなみに空の収集車が2回も満杯になったという。

「やっ和大掃除が終わったわねー」

「そうだねー」

口から魂が抜けるんじゃないかという勢いで呆然とする二人に、ミストレルは話しかけた。

「さっぱりして良かったじゃねえか。ところで正月飾りとかはどうするんだ?」

アイウイが首を振った。

「うちは特にしないよー」

「おせちもか?」

「うん。高いしー」

ビットも頷きながら言った。

「家で豪華な食事って食べてないからねえ」

「マジかよ。何食べてんだよ」

「世界各国のレーションよ。通販で売ってるし、日持ちするし」

「正月も!？」

「そうよ」

「なんでだよ?!」

「だって年末年始は山下食堂閉まっちゃうし」

「・・・なあビット、もしかしてお前ら食事って」

「昼も夜も山下食堂行ってるわよ?」

アイウイが続けた。

「山下食堂がお休みならトラファアルガーかお蕎麦屋さん」

「100%外食かよ。朝は?」

「食べないわよ?」

「コーヒーだけだよねー」

やり取りを聞いていたナタリアが腰に手を当てながら言った。

「呆れた。私達だって鎮守府出てからは一応調理してたわよ?」

ビットが真面目な眼差しをナタリアに向けた。

「それがですねナタリアさん」

「ええ」

「私達が台所に立つと食材が炭になっちゃうんです」

「・・・」

「色々料理の本とか見たんです。あれこれやったんです」

「・・・」

「でも炭になるのを止められませんでした!」

「威張れることじゃないわよ?」

「ですから! 私達は食材を無駄にしない為に調理を諦めました! やむを得ない処置だったんです!」

「みっちゃん」

「あいよ姉御」

「この子達に調理指導してあげたら? 来年から」

「おっ、そりや良いな。丁度ベレーも出来るようになったしな」

ビットがポンと手を叩いた。
「それよっー！」

S. 08話

ビットが生き生きとした表情になったので、ミストレルは微笑んだ。

「おつ、やる気出したのかビット？」

「違うの！ベレーちゃん！」

「は、はい？」

「私達のご飯作ってください！」

「へ？」

「習った事の復習にもなるでしょ！ね！ね！ね！」

「え、あ、は、ハウスキューピングの日って事、ですか？」

アイウイが答えた。

「それ以外でも何日でも！何なら毎日でも良いよっ！」

「ふえええっ!？」

ジト目になったファッツが言った。

「良かったなベレー、毎月のバイト料10倍に上げてくれるってさ」

アイウイがぐきりとファッツを見た。

「ど、どうしてそうなるの？」

「週1のハウスキューピングが週7の食事つき家政婦に昇格だろ？10

倍でも安いよなあ」

「うっ」

「まさか同じ料金で、なーんて言わないよな。経営者として」

「あ、ベレーちゃん、やっぱり良いです。レーション食べます」

ミストレルがヘツと笑いながら両手を腰に当てた。

「お前ら、特別にタダで来年から料理教えてやる」

「いえ結構です」

「いや、お前達に拒否権は無い！」

「やだやだ！頑張った挙句に美味しくもないご飯を大量に食べるあの虚

しきはもう嫌ー！」

「炭なんて食べたくない！」

「だーからそうならねえように教えてやるっての！」

「いーよ別にー」

ナタリアはアイウイの耳元で囁いた。

「食事代浮くわよ?」

「本当ですか?」

途端に真顔になったアイウイに、ナタリアは頷いた。

「一人暮らしたと外食の方が安いけど、二人以上なら自分で作る方が圧倒的に安いわよ」

「ぱりっちー!この機会に料理覚えよう!」

「島ちゃん裏切ったわね!レトルトさえ炭になったの忘れたの!?!」

ビットとアイウイ以外の面々はジト目になった。

「どうやったらパウチ詰めされてるレトルトが焦げるんだ・・・」

ファッツゾがミストレルに話しかけた。

「相当スパルタで長期間教えないと無理っばいぞ?取り消すなら今だぞ?」

ミストレルは首を振った。

「いーや、ちゃんと調理出来るように、最低限の基本は教えるっ!」

ビットがミストレルの方を向いた。

「最低限って?」

「コメが炊けるようにとか、野菜を刻めるとか、だ」

「まあそれが出来ればお惣菜だけ買ってくるとか出来るんだけどねえ」

「だろ?」

「炊飯器で炊いてコメが燃えたのよねえ・・・」

「どこをどうやったらそうなるんだよ」

「私が聞きたいわよ」

「と、とにかく、二人にはちゃんと教えるからなっ!」

「うえー」

「はーい」

その時。

「やあ。ビット、アイウイ。今大丈夫かな?」

門をくぐってきた時雨にアイウイが返事を返した。

「あれー？時雨ちゃんどうしたのー？何か修理？」

「違うんだ。うちでおせちを作ったら少し多かったから、お裾分けに
思ってた」

「えっ本当？良いの？」

「うん。丁度2人分くらい余ったから、どうかな」

「貰う貰うー！ありがとー！」

時雨はファツゾ達の方をすまなげそうに見ると、

「あ、えっと、ファツゾ達の方までは余らなかったんだ。ごめん
と言って頭を下げた。

ファツゾは手を振った。

「いや、良いよ。うちはまだ正月料理は全て用意しちゃったから」

ミストレルがニツと笑った。

「こいつらは正月もレーション食べるって言ってたから丁度良かった
ぜ」

時雨が無表情になった。

「・・・正月さえもレーションだっというのかい？」

「炊飯器でコメ炊いても炭になるんだと。だからアタシが年明けから
教えてやる事にしたんだ」

時雨が頷いた。

「それが良いね。もし手に余るようだったら僕に言って。手伝いに行
くから」

「時雨は教えるの上手そうだよな」

「ううん。むしろ今まで武蔵や龍驤から教わってばかりだよ」

「龍驤が料理上手なのは知ってるけど、武蔵も上手いのか？」

「うん」

時雨は包みを解くと、重箱を1つ開けた。

「ほら、この煮しめは武蔵が作ったんだよ？」

「へー、ちゃんとニンジンが花びらの形に切れてらあ。ゴボウのささがきも綺麗だなー」

「うん。味も薄めで品が良いよ」

「武蔵って男っぽいからそういうのは苦手だろうと思ってた」

「実を言うと、僕も意外だった。あ、武蔵には内緒にしておいてね」
「わーっってるわーっってる」
「じゃビツト、アイウイ、松の内を過ぎたらお重を取りにくるからね」
「はーい。洗っておくねー」
「ありがとうね、時雨ちゃん」
「じゃあ僕はこれで。皆、良いお年を」
「良いお年をー」

その頃。

「ふうん、切り揃えると伊達巻も雰囲気変わるものだなあ」
「・・今までどうしていたのだ？」
「へ？フォークで」
「・・まさかとは思うが、直にフォークで切りながら食ってたのか？」
「おう」
「頭痛がしてくるな・・」
「食えりやいーじゃねーかよ」
「うるさい。今年はやんとここから食べる」
「解ったよ・・じゃあこれも持っていけよ」
「伊達巻好きなんだろう？」
「フォークで食うなって言うからよ」
「切れば良いだろ切れば！」
「俺が切ると斜めになるんだよ」
「あーもう貸せ！台所はどこだ！」

S. 09 話

「・・・ほら、すぐ済む事じゃないか」

「上手いもんだなあ」

「ああやって冷蔵庫に入れておけば正月の間くらい持つ筈だ」
「ん、ありがとな」

礼を言いつつ、テッドはお重の二段目をしげしげと見て言った。

「それにしても、この煮物さあ」

「煮しめだ。それがどうかしたか？」

「・・・なんつーか、丁寧だな」

「どういう意味だ？」

「言つたままさ。俺が作るイモの煮つ転がしなんていびつでさ」
「ほう」

「大きいのか小さいのか色が濃い薄いの雑多にあるんだが、これは形も綺麗に揃ってる」

「・・・」

「これを作った奴は、丁寧に食べ物を扱うんだなって」

「・・・褒めてるのか？」

「勿論。良い母ちゃんになれるだろうな。で、これ、誰が作ったんだ？」

「・・・う、うるさい」

「へ？」

「と、とにかくおせちは渡したからな！じつ、じゃあ、かつ、帰る！」
「バタン！」

「・・・なんで怒つたんだ？」

テッドは武蔵が閉めたドアを呆然と見つめていた。

武蔵は大腿で通りを歩いていた。

外の空気を強く当てておかないと顔から火が出そうだ。

「ああもう！ああもう！山城達が焚き付けるから意識してしまうではないか！」

赤信号を仇のように睨みつけながら、武蔵は腕を組んだ。

まったく。ああまったく！

テッドとは単なる仕事上の関係であって・・・そういうものじゃない！

どーでもいい奴のおせちなんで1ミリも気にしないでしょ？

ちつがう！断じて違う！うるさいうるさいうるさい！

武蔵はぼよんと浮かんでくる、山城のニヤケ顔にパンチを入れた。

1月1日の0000時。

「新年、明けましておめでとうございます。各地からの便りを・・・」

TVの中でアナウンサーがそう伝えた時、夕島整備工場では二人の寝息がするばかりだった。

年末のコンテナ整理でくたびれ果てた二人は、29日と30日の二日間はほとんど眠っていた。

そして31日になってようやく

「整理はしたけど掃除して無いじゃん！」

という事に気づき、急遽大掃除大会となったのである。

大晦日にさすがに応援を頼むのは気が引けたので、二人で頑張った結果が現状である。

ちなみに二人とも居間に置いたコタツの中で眠っており、TVはついたままである。

如何に疲れ果てていたかが窺い知れよう。

一方。

「おめでとー！」

「ん、おめでとう」

「おめでとう」

「はいカンパニー！」

「カンパニー」

目を越える直前から酒の封を切ったのはファッツの家だった。

ナタリア達はちよつと乾杯する位は普通にやっているし、ファッツも

「まあ新年くらい乾杯しても良いさ」

という程度には酒をたしなむのである。

一方、ミストレルとベレーの二人は酒は嫌いだと公言しており、

「初詣行く時に起こしてくれよ」

「寝ます。おやすみなさい」

と、目を越える前から眠ってしまったのである。

というわけで、今起きているのはワルキューレの4人とファッツゾである。

そして、0100時を過ぎた頃。

「私、そろそろ寝ます。おやすみなさい」

「お休み、ミレーナ」

「おやすみ」

あくびをしながら引き上げていくミレーナを見送った後、ナタリアはファッツゾに言った。

「それにしても・・・ファッツゾ」

「なんだナタリア」

「ありがとう」

「何が？」

「結婚してくれた事」

「なんだよ藪から棒に」

「ちゃんとやってたかなって思ってた」

「ナタリアは最初に告白してくれたじゃないか。俺こそなかなか返事出来なくてすまなかった」

「悪戯に引き伸ばしたり曖昧にした訳じゃないのは解ってるわよ」

「それでも、気になっただろう？」

「た、多少ね。ちよつとだけ」

それを聞いたフィーナはニヤリと笑った。

多少、ねえ・・・

あの日、ボスはファッツゾさんが帰った後、

「あああどうしよー、私マズイ事言っちゃったかなー」

と、事務所の中をクマのようにうろうろ歩き回ったまま朝を迎えた事を知っている。

ルフィアから電話がかかってきた時はひっと短く声をあげ、震えながら受話器を取っていたのも知っている。

そしてファッツゾがくると聞いたらしく、
「ああファッツゾが来る・なんて言うのかしら・どうしょ。どこで待つてれば良いの？ 迎えに行けば良いの？」

と、真つ青な顔で頭を抱えていた事も知っている。

あと数日もファッツゾさんの返事が遅れたり、断られていたらボスは病院送りになっていたかもしれない。

勿論、鉄格子の嵌った個室の方の、である。

「俺、ちよつとトイレ行って来る」

ファッツゾが席を外した後、フィーナの表情に気づいたナタリアはジト目で見返した。

「なによう」

「何でもありませんよー」

「嘘よ絶対嘘よ」

「どつちがですかねえ」

「なによ何の話よ」

「あの夜う、ルフィアさんから電話がかかってきたときー」

「・・アンタ起きてたの!?!」

「黙秘しまーす・えへへへへ」

ナタリアはごくりと唾を飲み込んだ。

これはまずい。フィーナがかなり酔っている。

しかも自分が隠しておきたい事を知っている。

特にファッツゾには恥ずかしいから知られたくない!

「あー、そうだフローラー!」

「はあーい?」

「フィーナがだいぶ酔っ払ってるから肩貸してあげて」

「ういっ! フローラー! これよりフィーナ副隊長を曳航して参りまっす
! ういー」

ナタリアは二人の後姿を見て苦笑した。

肩を貸してるのか千鳥足で余計歩かせているのか・・・

まあともかくこれで平和は保たれた。
ファツゾに隠し事は無しにしたいが、醜態を積極的に晒したくは無
い。

S. 10 話

戻ってきたファッツはキョロキョロと部屋の中を見回した。

「ん、フィーナとフローラは部屋に戻ったのか？」

「だいぶ酔いが回ってたから」

「そうか。もう0100時も回った。俺達も寝ようか」

「・・・ねえファッツ」

「うん？」

「一緒のベッドで寝ても良い？」

「酔っ払ってるか？」

「お酒が入ってる事は認めるけど・・・」

ナタリアはそつとファッツと腕を組んだ。

「私達、夫婦でしょ？」

ファッツはややあつてから、明後日の方を向いて言った。

「あーその、俺も今夜は酔ってるしさ、その、添い寝で済まんかもしれんぞ」

「解ってるわよ。旦那様ですもの」

「・・・」

「皆寝ちやつたし。ねっ？」

ファッツは二人以外居なくなつた部屋を見回してから、

「あー、その、じゃ、じゃあ、一緒に寝よう、か」

と答えるのが精一杯だったという。

同じ頃。

「ほら、ドア開けたぞ。皆入れ」

神社の駐車場に停めた武蔵のダツジラムのバンに乗り込むと、龍驤はホツと息を吐きながらいった。

「うー寒い寒い。夜明け以降に初詣すればええやんかー」

神通が首を振った。

「2年参りは縁起が良いですからね」

「せやかて寒くないか？」

「冬が寒いのは当たり前前の事ですから」

一方、助手席に乗り込んだ時雨は運転席でエンジンをかける武蔵に言った。

「あ、そうだ武蔵」

「なんだ？」

「今年は随分長い事お祈りしてたけど、何を願ったんだい？」

「願う事は他人に言うとは叶わなくなるのでな、黙秘する」

「よっぽど叶えたい願う事なんだね」

「そうだな」

時雨はふふつと笑うと、

「じゃあ僕も影ながら二人の事を応援するね」

と言ったので、武蔵はぎよつとした顔で時雨を見た。

「何故知ってる！口にしないうような気をつけたのに！」

時雨はきよんとした顔で答えた。

「え？他に武蔵が必死に願う事なんて無いかかって・・・」

武蔵はハツとして後部座席を見た。

龍驤、山城、大和は口に手を当てつつ、にやりんと笑いながらこちらを見ている。

神通と扶桑はニコニコと優しく微笑んでいるが、明らかに気づいている。

完全に自爆した事に気づいた武蔵は顔を真っ赤にしたまま前を向き、アクセルを踏み込んだ。

5.9リッターのV8エンジンは凶悪な出力をタイヤへと伝えたのである。

その頃。

「洋酒でもお屠蘇っていうのかねえ・・・まあ良いや」

テッドは新しく封を切ったボトルから、スコッチウイスキーをグラスへと注いだ。

ボトルの傍らには重箱から取り分けたおせちが盛られた皿。

箸で黒豆をつまみ、テッドはそれを眺めた。

「適当に食ってた去年とはえらい違いだぜ・・・ん」

黒豆を飲み込んだ後、スコッチウイスキーを一口。

「・・・やっぱり合わねーぜ、武蔵よう」

苦笑しつつ、ふと、煮しめが目に留まる。

ひよいとゴボウを口に放り込んだ後、スコッチウイスキーを一口。

「お。こっちは合うな。意外だぜ」

この煮物、いや、煮しめか、これは良い味だ。

あの時は聞きそびれたが、誰が作ったんだろう。龍驤辺りか？

重箱を返す時にちゃんと礼を言うとするか。何もってくかな。

煮しめのレンコンを噛み締めながら、テッドは微笑んだ。

「さて、そろそろ片付けるとするか」

グラスから最後の一口をあおったテッドは、汚れた食器やグラスを手に立ち上がった。

そして、夜が明ける頃。

「はーいいらっしやーい。3名様？テーブル席にどうぞー」

「甘酒2つにおでん1つね？まいどー」

キッチン「トラファルガー」は海沿いにあって、かつこの町で元旦の早朝から開く唯一の店である。

初日の出を見に来た客が、そのあまりに冷たい海風から回復すべく暖を取りにやってくる。

ゆえに店内に入りきらないので、クーが表で甘酒とおでんの出店を始めた所、こちらも人気となった。

元旦から黒山の人ばかりで、通りがかったドライバー達が何事かと覗き込むほどである。

「4番さんのカレーとオニオンスープあがったよー」

「はあーい！6番さんラーメンとホットコーヒーー」

「ん、解った」

店の中もルフィアとライネスがフル稼働しても追いつかないほどの有様である。

といつつ、ライネスはクーの売るおでんと甘酒も仕込みながらの対応である。

「おっちゃんごめん！おでんが切れた！出来てるだけ頂戴！」

表からクーの怒鳴り声がすると、ライネスは両手鍋にひよいひよい

と具材を放り込むと、

「ルフィア、表にこれを持ってってやってくれ！」

と、手渡すのである。

ルフィアはクーの所から空になった鍋を受け取り、持ってきた鍋と差し替えつつ、

「おっちゃんじゃなくて、ライネスさん、でしょ？」

と、クーの耳元で囁き、クーがびくりとなるのである。

こうして、元旦の昼過ぎまで店を開けた後、ライネス達は店を閉じ、仕込みを行う。

そして3人で近くのお寺に初詣に行つて商売繁盛と家内安全を願ひ、翌朝まで眠るのである。

「そりや普段より正月の方が忙しいよ。営業時間も変則的だしね」

ライネスは苦笑しながら肩をすくめるが、続けて

「でも、売り上げがあるってのはありがたい事だよ」

そう言つて笑つたのである。

5章：「夕島整備工場」編 第1話

現在。

すっかり夜も更けたある日の事。

ぐいつと背伸びしつつ、工場から出てきたビットは事務所のアイウイに声をかけた。

「今日も仕事したわあ・・・島ちゃん終わった〜?」

整然と立てられた書類の隙間からアイウイの生返事が返ってきた。

「ん〜まだかかる〜・・・あと1時間くらい〜」

「山下食堂閉まっちゃうわよ〜?」

ビットの一言にがばりと顔をあげるアイウイ。

「うえっ!?!もうそんな時間!?!」

「もう2040時だもの〜」

「あうう終わらないよう」

「じゃあファツゾさんに・・・あ、もう宅配やってないんだっけ・・・」

そう。

ファツゾがなんでも屋だった頃、夕島整備工場の二人は

「山下食堂のお弁当を2人分お願いします!」

という依頼を、特にこういった繁忙期には毎晩のように行っていた。

ファツゾが何でも屋を辞めた時は閑散期だったので

「そっか、じゃあしょうがないわね」

と、笑顔一つで送り出したものの、後で非常に困ったのである。

他のなんでも屋に頼んだ事もあったが、お釣りを誤魔化されたり中身がぐちやぐちやだったりで、

「もう頼まない!」

と、なってしまったのである。

そして今夜も、山下食堂までの移動時間を考えれば猶予は少なかつた。

アイウイは帳簿に付箋を貼るとボタンと閉じた。

「無い物ねだりしてもしょうがないよ！行こっ！ぱりっち！」

「そうね。シャッター閉めとくから車回しといってくれるかしら？」

「はーい！」

ガラガラ・カシャン。

最後のシャッターを閉めた時、ビットの背後で車が止まった。

振り向いたビットはにこりと笑った。

「ピッタリね。じゃあ行きましょー！」

「うん！早く乗って！」

ビットが急いで助手席に滑り込むと、アイウイは軽トラを発車させた。

「レツツゴー！」

今でこそ普通に暮らしている二人だが、今回はその始まりを見てみよう。

その昔。

ビットがまだ夕張として鎮守府で勤務し、深海棲艦を修理していた事が明るみになった日の夜。

工廠から司令官が妖精達を怒鳴りつける声が漏れ聞こえていた。

「それならさっさとドックを空けろ！」

「いやあ、先程大破の4人を入渠させたばかりで、バケツを使わない限り、後14時間は無理ですねえ・・・」

「バケツなんか残ってるわけないだろ！それに修理と解体は並行出来るだろ！」

「それが解体専用ドックがちょうど今修理中ですよ・・・」

「うるさい！さっさと夕張を解体しろ！昇天させて跡形も残すな！」

「えっ？転属か帰属か昇天かは艦娘に決める権利があるんですが・・・」

「あんな事をした奴に選択の権利など与える必要は無い！それより早く修繕処理を中止せんか！」

「修繕処理は一旦始めると後は自動化されているので中止は出来ませんですよ・・・」

「ごんの役立たずがー！」

司令官に同行していた秘書艦の霧島は司令官の右斜め後ろに気配を消して控えていた。

司令官が赤鬼みたいに興奮している時には関わらない方が良い事を霧島は良く知っている。

そしてこういう時、司令官は自らが言った事をロクに覚えていない事も知っている。

更に言えば、こういう時、視界の左半分は良く見てるが、特に右後ろは気が回らない事も知っている。

だからここでじっとしていたのだが、司令官が急にくると振り向いたのでびくりとってしまった。

「おい霧島ー！」

「あ、あー、はい、なんででしょうか」

「夕張を工廠の隅で撃て。他の奴らに気づかれないようにな！」

「・・・は？」

ぽかんとした霧島を見て、司令官はますますヒートアップした。

「解らんのか!? 解体出来んなら轟沈させるまでだ。お前ならやれる！」

霧島っー！」

「お言葉ですが司令、私達は僚艦である夕張さんを攻撃する事は出来ません」

「命令だといってるんだ！」

「兵装は討伐を目的とした出撃時に、深海棲艦相手に限って使用出来ます。もしそれが破れるのなら・・・」

霧島はくいとメガネを上げて続けた。

「例えば、興奮して手に負えない司令にも撃てる事になりますか？」

司令官はごくりと唾を飲んだ。

「お、俺の事を言ってるのか霧島？ 裏切るのかっ!？」

「たとえ、です」

霧島は澄ました顔で言い切ったが、実は兵装の使用に際し、特段制約というものは無い。

射撃演習や艦娘同士での実弾演習なども行うのだから当然である。

だが、僚艦を射殺するなどという暴挙を大本営が許す筈は無く、露見すれば司令官と共に憲兵に連行される。

そして当然経緯について尋問を受けるし、夕張がした事が明らかになる方が大問題である。

司令官はそんな事も解らぬ素人ではない。既に中堅以上の立場なのだから頭も良く回る。

ただしそれは、冷静な時に限るといふ前置きがつく。

普段は良い上司ゆえ、興奮した時に適当な思い付きで命じるクセには毎回溜息が出てしまう。

本音を言えば平手で一発叩いてでも落ち着かせたいのだが、上官に具申するのはこれが精一杯だ。

霧島は目を瞑った。艦娘稼業も楽ではない。

司令官は霧島から妖精に向き直った。

「ええい！どいつもこいつも減らず口ばかり叩きやがって！おい妖精！」

「なんでしよう？」

「ドックが空き次第！すぐに夕張をぶちこめ！良いな！」

「解体処理、ということですか？」

「他に何かあるってんだ馬鹿！この場面で近代化改修するとも思わないのか！」

「はあ．．．まあ．．．しばらくかかりますがねえ．．．」

「くんぬうううう！」

こうして司令官は怒髪天のまま乱暴に工廠のドアを開けると、大股で出て行った。

秘書艦の霧島は工廠の妖精達に向かって頷くと、小走りに司令官の後を追っていった。

残された妖精は肩をすくめ、その周りに他の妖精達が集まってきたのである。

第2話

司令官に應對していた妖精が肩を回しながら言った。

「やー、何とか誤魔化せたかな。毎回とぼけるのも肩が凝るぜ」

「お疲れお疲れ。解体作業にドックなんざ要らねえが、ロクに来ないから知らんだろうしな」

「まあ霧島ちゃんは解つてたみたいだけど黙つててくれたし」

「さて、ひとまず時間は稼いだが、どうしたもんかな・・・」

「夕張さんは出航時以外はずっと俺達の作業を手伝ってくれたからなあ」

「今度の事だつて修繕の技量を上げてたくて始めた訳だしよ・・・」

「まあ敵を直すつてのはアレだが、止められなくなった理由もなあ：言えねえけど」

「実際、アレをやったおかげで幾つか重要な発見もあつたしな」

「そもそもあれだけ鎮守府の為に尽くしてきたつてのに、その功績を全く評価しねえつてのが頂けねえ」

「司令官が落ち着いてくれりゃ話し合いの材料はたんまりあるが、暴走機関車じゃどうにもならん」

「最悪・・・昇天に見せかけて帰属させちまうか？」

「それじゃLVIになっちまうし、今までの勉強で得た記憶が飛んじまったら可哀相じゃねえか」

「じゃあどうするんだよ」
「良い手がありやとつくにやつてるよ」

その時、工廠のドアが開いたので妖精達はびくりとして入り口を見た。

そこには思いつめた表情をした島風が居たので、ほっとしつつ妖精達は声をかけた。

「どうした島風ちゃん、タービンの具合でも悪いのか？」

「・・・」

「うん？」

「ば、ぱりっちきを、どうにかして逃がしてあげたいの。手を貸してくださいー!」

そう言つて頭を下げた島風を前に、妖精達は顔を見合わせると、うむと頷いた。

「・・・よし。俺達も夕張さんには恩がある。一肌脱いでやるぜ」
「あ、ありがとう!どうしたらいいかな?」

妖精の一人がにやりと笑った。

「今夜のメニューはカレーうどんだったよな・・・」
「んー・・・そうだっけ?」

「霧島ちゃんは今頃司令官をなだめるので精一杯の筈だ」
島風が頷いた。

「だと思ふよ・・・司令室から怒鳴り声が外まで漏れてたもん・・・」

「おい、人間用の眠剤まだあつたか?」

「へ?ええと・・・おう、バッチリ有効期限内のラボナがあるぜ」

「艦娘用は?」

「そつちは良く使うからたんまり備蓄してある。軽く500回分はあるだろうよ」

別の妖精が意図を察してのけぞった。

「お、おいおいおいおい、それヤバくねえか?」

眠剤。

睡眠薬の事である。

海軍が鎮守府向けに支給する眠剤は市販薬のそれとは効きが明らかに異なる。

ストレスや興奮状態にある艦娘を寝かしつけたり、遠征の為昼から眠る等に用いる為、効きは強烈なのだ。

なお、最も多く適用されるのは川内であるが、それは他の艦娘がうるさくて眠れないと苦情が出るからである。

問われた妖精は肩をすくめながら言った。

「構うことあねえ。万が一の失敗も許されんし、チャンスは今夜1度きりなんだぜ」

司令官に應對していた妖精が言った。

「ちよつとさあ、司令官に日頃のお返しってやつをしてやりたいんだがなあ」

「なら司令官には大盛りで入れてやっか？」

「ヒグマも一発で寝ちまうくらいな」

「もう起こさなくて良いんじゃないか？」

「さすがに永眠はまずいだろー、大本営にバレねえ程度にしとけよー」妖精は大抵、こういうイタズラに目が無いものである。

島風は良いのかなあと思いながらも、他に策も無かったので妖精達のプランに乗る事にしたのである。

「これよりオペレーションヒグマを開始するぜ！」

「おー！」

工廠を仕切る妖精の掛け声を合図に、作戦が始まった。

この鎮守府では出航中の艦娘を除き、2000時に食堂で全員揃って一斉に食べる慣わしであった。

ただし司令官と秘書艦は同じく2000時に食べ始めるが、食べる場所は司令室である。

唯一、食べるタイミングが遅れる例外は司令室に夕食を届ける艦娘である。

そして今夜、その当番は着任したての羽黒であった。

どこの鎮守府でもそうなのだが、着任したての羽黒は極端なあがり症である。

司令官が何気なく声をかけたつもりでも

「ごっつ、ごっつ、ごめんなさい！」

といって赤面したまま部屋を飛び出してしまう事も割と普通である。

妖精達はこの点を上手く使って役を代わってこいと島風に命じたのである。

重巡寮の外の通路で、島風は羽黒を見つけた。

確かに日が沈んで久しいが、なんだか羽黒の周りだけ闇が濃いように感じた。

「ねえ羽黒ちゃん」

「ひっ！ひゃい！なななななんでしょうか!？」

島風は真つ青な顔でびっしびしに緊張している羽黒を見て可哀相になってきた。

夕食時間前から既にこの調子では、司令室に持参する途中で盛大に転びそうだ。

「あ、あのね、私来月の22日に司令官に晩御飯を届ける当番なんだけど」

「えっ、ええ・・・」

「その日どうしてもお休みを貰いたいの。だから急な話なんだけど、今晚と当番代わってくれないかな?」

地獄に仏とばかりに晴れやかな笑顔になった羽黒はすぐに交代を承諾してくれた。

そして何度も頭を下げると、それまでとは打って変わって鼻歌交じりに歩いていった。

「よっぽど司令室に行きたくなかったんだね・・・まあ今夜の状況考えるとそうだよね」

ともかく、提督と秘書艦に食事を渡し、かつ食べるタイミングが異なる役割は自分が握った。

勿論食べるつもりは無い。

夕張は既に自室で軟禁状態だから食べられない。

島風は領きつつ、妖精から渡されたトランシーバーに話しかけた。

「こちらアイランド、こちらアイランド、鳥は羽ばたいた。繰り返す、鳥は羽ばたいた」

「了解した。これよりダンテライオンに粉雪を降らせる。ヒグマに引導を渡す役を滞りなく遂行せよ!」

「う、うん」

「うんじゃない!了解だ!」

「りよ、了解」

「よし!通信を終わる!」

ノリノリの妖精達は語尾にも細かいのである。

ちなみにダンテライオンはカレーうどんのスープの隠語と説明さ

れた時、その理由を尋ねた島風に妖精は
「色だよ色。同じ黄色だし」
と答えたそうである。

第3話

その夜、2100時。

「予備燃料はドラム缶に詰めといたから曳航していきな！遠征って誤魔化せるぜ！」

「ありがと！これで結構な距離行けちゃうわね！」

「食料も資材も満載しといたぜ！海の果てまで行ってもへっちゃらだぜ」

「そこまで逃げるハメになりたくないわねえ・・・」

「このスーツケースには俺達の餞別が入ってる！かき集めた現金だ！急な話だったから小額で悪いがな！」

「気を使わせちゃったわね・・・皆ありがとね」

「夕張師匠、今まで助けて頂きありがとうございました。上手く逃げ切ってくださいえ・・・ううっ」

「そんなに泣かないで。皆も体を大切にね。ちゃんと休んでね」

「恩は忘れねえよ。あの司令官に爪の垢でも煎じて飲ませてやりてえぜ・・・」

ふと、夕張はすし詰め状態で乗り込んでいる妖精達に話しかけた。

「ねえ、本当に良いの？これから逃亡生活になるのよ。降りても私恨まないわよ？」

妖精達は口々に言った。

「てやんでえ、師匠が飛び込むのに俺らがブルってどうするってんだい！」

「おうよ！夕張さんを今助けねえでいつ助けるってんだ！」

「俺らが揃ってりゃ洋上だって工廠の真似事くらい出来らあ！任しといてくんない！」

夕張は肩をすくめた。

「まあ皆が居てくれたら助かるけどね」

島風が荷物を背負いながら夕張の方に振り向いた。

「じゃ、ばりっち！行くよ！」

「うん！じゃあ、さようなら！」

「元気でなー！」

「皆もねー！」

こうして二人は妖精達の熱烈な送別を受け、脱走にはとても見えな
い雰囲気での出航となったのである。

なお、その少し前の2015時。

食堂は奇妙なほど静かな寝息に包まれていた。

夕食を口にした後で着席位置から動けた艦娘は、7歩歩けた磯風を
最高とする僅か3名に過ぎなかった。

そしてその3名を含む全員が食堂で朝まで完全に記憶も無く、昏睡
状態だった。

司令室では司令官と霧島が突っ伏して眠っていた。

午前中、遠征から戻ってきた艦娘達は異変に気づいたが、司令官が
昼まで起きなかったので行動出来なかった。

ちなみに、何か知らないかと訪ねて来た霧島に対し、妖精達は全く
記憶が無いとしれつと答えた。

勿論、夜明けまでに帳簿等は完璧につじつまを合わせ、徹底的に証
拠を隠滅していた。

妖精を敵に回すと地味に怖いのである。

出航した翌日。

「ぱりっちー！装備捨ててー！じゃないと追いつかれちゃうよ！ー！ノット
でも上げようよ！」

島風はとにかく夕張を急かしていた。

自分一人なら追っ手を易々と振り切れるが、何せ夕張は足が遅い。
更にはすし詰め状態の妖精や溢れんばかりの装備を背負い込んで

おり、余計遅くなっていたのである。

夕張は装備を手に取りながらそつと島風を見返した。

「うー、全部思い入れのある品なんだけど・・・捨てなきゃダメ？」

「思い出の為に殺されたら意味無いでしょ！」

「しょうがない、か・・・でも工具セットだけは捨てないからね！」

その時、妖精の一人がにゅつと顔を出した。

「待つてくんな！方位088に1時間も行きや小さな漁港に出る！近くに鎮守府もねえから警備は手薄だぜ！」

夕張は捨てかけた装備を仕舞いつつ頷いた。

「じゃ、そこに上陸しちゃいましょ！方位088に全速前進！」

島風は溜息をついた。

「はあ・・・しようがないなあ、じゃあ行くよばりつち！」

そんな訳で二人は妖精が指示した漁港を真っ直ぐ目指していったのである。

上陸した島風は手早く艀装をしまうと、不安そうに周囲をキョロキョロと見回した。

「あまり1箇所留まってるで見つかるんじゃない？」

夕張の妖精が答えた。

「モチのロンだ！西に600m行けばバス停がある。そこから20分後にバスが出るぜ！」

夕張が頷いた。

「そっか。じゃあそのバスに乗っちゃいましょ・・・ええと、これどこに仕舞おうかなあ」

「ぱりつち行くよ！おっそーい！」

「ま、まだ積荷片付けてるからちよつと待つてえ・・・」

「・・・そろそろ、バスが来る時間だよね？」

「そうねえ・・・」

島風はガードレールに腰掛けながら、油断無く海原を見続けていた。

夕張はバス停に掲示されていた路線図を眺めていた。

その時、妖精の一人が夕張に言った。

「なあ師匠、街中で互い呼び合うのに艦名じゃ目立つんじゃないかい？」

「あー、そっか。大本営から外に出る時も街中で鎮守府名とか言うなって言われたわねえ・・・」

「だろ？だから何か偽名考えようぜ」

「んー・・島ちゃんどうする？ 私はビットで良いけど」

島風が怪訝な顔で見返した。

「えっ・・それ使うの？」

「慣れてるし」

「うーわ・・島風はどうしようかなあ・・」

妖精がにやりと笑った。

「作戦中のコードネームで良いじゃんかよ」

「アイランド？」

「そうそう」

「んー、もうちよつと何とかしたいよう。丸解りじゃん」

「そんなら島風を英語にするとさ、アイランドウインドだろ？」

「もろ直訳だよね、それ。一発でバレるし長過ぎだよ」

「まあ待てよ。でさ、その頭2文字ずつ取ってアイウイはどうよ？」

「えー」

プップー

「あ、バスが来たわね。あれで良いのかしら？」

「O K O K、あのバスだ。終点まで650コインの前払いだからアイ

ウイも用意しろよ？ 俺達は隠れるぜー」

「えっ確定なのそれ？ 私まだ・・」

島風は抗議しようとした。

だが、さっさと乗り込んでしまった夕張の先ににこやかに待ってい

る運転手の顔が見えて、

「ごっごめんなさい！ 乗ります乗ります！」

と、慌てて財布を取り出しつつ乗ったのである。

こうして、二人を乗せたバスは港を後にしたのだが。

「な、なんだろうね、ばりっち」

「そう、言われてもねえ・・」

バスから降りた場所は人間が大勢歩いている駅前和市街地だった。

名前も改め、臙装も仕舞っていたのだが、それだけでは不十分だっ

た。

通りを歩く人達からが向ける訝しげな視線に気づいたのである。

第4話

アイウイがビットにそつと囁いた。

「どうして見られてるのかな・・・」

「んー・・・私達くらい背格好の子はいるし・・・後は服装かしら」

「服？ 艷装は仕舞ってるよ？」

「じゃなくて、ほら、皆の格好・・・布が多いでしょ」

「んえ？」

アイウイは自らの服装を見て、次に町の人の装いを見て、主に下半身の違いに気がついた。

そして見られている視線の先が、自らの腰回りである事も。

「おうっ！」

「・・・んー、このカッコじゃ目立つかなあ」

ビットはふと、通りの反対側を指差した。

「ねえ島ちゃん、ほら、あの人達の服、あのお店で売ってるわよ」

「皆が着てる服にした方が目立たないよね」

「そうね。買って着替えちゃいませよ！」

二人は店に向かって歩き出した。

「これ、このまま着てつちやいますんで」

「ハイ解りました！ じゃあお二人のタグ外しちゃいますね！ 全部で9800コインっすー！」

「あ、良いわよ島ちゃん。払っておくから」

「うん、じゃあ外で待ってるね！」

「はーい・・・ええつと、じゃあ1万コインで」

「1万コイン札入りやす！ 2000コインのお釣りとレシートっす！ マイドありやーしたあ！」

「どうもー」

通りに戻ったビットの前で、アイウイはしきりに自らの太ももの辺りを撫で回していた。

「どうしたの、島ちゃん？」

「んー、長ズボンなんて久しぶりだから：布がまとわりついて走りにくいなあって・・・」

「でもこれ、とても機能的よ？ほら、こんな所にもポケットついてるし、このベルトで手袋挟んでおけるし・・・」

説明するビットをじつと見ていたアイウイが言った。

「・・・なんかさあ」

「なあに？」

「ぱりっち、やたら似合ってるよね・・・」

「へ？そうかしら？でも島ちゃんとお揃いの格好、嬉しいなあ」

「え、えへへ。そうだね。でもまだなんか皆と違うような気がするんだよねえ・・・視線は感じなくなったけど・・・」

二人が服を買ったのはいわゆる職人向けの店であり、購入したのは「つなぎ」であった。

ビットは通りを歩いていたメカニックの一人団を見た後にこの店を見つけたのだが、これも運命という奴か。

夕張はバッグの中をこそごとと整理していたが、ぽそりと呟いた。「あ、皆には連絡しとこうかなあ」

一方、その頃。

鎮守府では二人が脱走した事が判明し、目を覚ました司令官は昨夜にも増してカンカンだった。

司令官は極秘の搜索艦隊として4名を指名し、司令室で櫂を飛ばしていた。

選ばれたのは旗艦の五月雨、副官の浜風、早霜、そして高波であった。

並び順は純粹にLvである。

「いいかお前達！是が非でも見つけろ、二人共だ！」

「はい！」

「首に縄をかけてでも引っ張って来い！情けは一切無用だ！」

「え、あ、はい・・・」

「抵抗するなら始末しろ！デッドオアアライブだ！」

「「ええっ?!」」

デッドオアアライブとは生死を問わないという意味であり、4人はこの一言で一気に引いた。

確かに、睡眠薬とはいえ自分達に一服盛って脱走した事に良い気持ちしなかった。

ただ、状況を考えればやむを得ないというのが艦娘達の見解だった。

自分達が起きている時に夕張達が脱走するのを見たら、制止しない訳にはいかない。

情に流されて見逃せば見逃した者が処罰の対象になるからである。そして司令官は今も解体どころか轟沈させろとまくしたてている

のだから、残っても弁明の機会は無いだろう。

全員を眠らせれば残った者は誰も処罰されない。

一番穏便に、かつ生き残る為にはあれしか方法がなかったのだと、霧島は司令官の隣でそっと溜息をついた。

この鎮守府で、大なり小なり夕張に借りが1つも無い艦娘はほとんど居ないだろう。

なのにそんな言い方では4人は受け入れがたいだろう。

私にだけさつき言った事を皆にもちやんと言えば良いのに・・・

司令官は4人がどん引きした事に気づき、更に青筋を増やして怒鳴りつけた。

「何だお前達！文句があるのか！」

五月雨が口火を切った。

「えっと、燃料などを補給する為に随時帰港するのは構いませんよね？」

「どんだけ時間かけるつもりだ馬鹿！1週間以内に探して来い！」

「無理ですよ！」

「無理じゃない！ちんたらやってたら憲兵隊に気づかれるだろ！」

恐る恐る高波が手を上げた。

「あ、あの、せめてどっちへ行ったか教えて頂ければ、探しやすいかも、です」

「知るわけないだろ！それを探るのがお前達だろうが！」

「ふえええっ！ま、周り全部海なのに1週間なんて、む、難しい、かも・・・」

「かもかも言う前に探してきてくれよ！」

浜風がついに眉をへの字に曲げた。

「出来ません！」

「なにっ!？」

五月雨が続いた。

「そうですねっ！そんな命令まで受けるなんて、私達は海軍と契約してません！」

「くぬー！」

「うー！」

唸りながら睨みあう司令官と旗艦の五月雨を見ながら、皆が言う事は尤もだと霧島は頷いた。

海軍は、艦娘に対し、出撃、遠征、演習、近代化改修、解体、改造を命令出来る。

それが契約だが、今司令官が言ってる事はどれにも該当しない。

単純に言えば暗殺してでも隠蔽工作してこいと言われているのだからきっぱり断るのが本来だ。

だが。

霧島は司令官にそっと声をかけた。

「司令」

「・・・なんだ？」

「本作戦が特殊なのは確かですので、私がこの子達に補足します」

「む、むう・・・」

そして霧島は司令官に耳打ちした。

「ちよつと食堂で甘いもの食べてもらって、先程のお話をしてきますので」

司令官は霧島にバツの悪そうな目線を寄越しつつ、ぼそぼそと囁き返した。

「あ・・・あまり時間をかけないでくれよ・・・ほら、財布」

「お任せください。では五月雨さん、皆さん、ちよつと食堂でお話しましょうか」

パタン。

一行が出て行くと、司令官はどきりと椅子に腰掛け、深い溜息をついた。

何故だ。

夕張には手が足りない時の遠征以外頼まないようにしたし、工廠での仕事が好きだというから任せてきた。

確かに毎日多忙を極めていると霧島から聞いていたが、皆そうだし、出撃する以上破損はつきものだ。

ここは御三家ほどでは無いが大都市圏も近く、鎮守府近海でも小競り合いはしょつちゆうだ。

我々が潰されれば都市に砲火が届いてしまうので、重要な防衛ラインでもある。

そもそも深海棲艦など話の通じない化け物だ。

1体でも多く、1分でも早く深海棲艦を消す事など、当然全員の共通認識だと思っていた。

怪我をしてるならそれこそ好都合。

仲間を呼んで始末させるなり、怪我を直すふりをして爆薬でも押し込んでしまえば良かったのだ。

何より修繕のプロである夕張と、最も対潜攻撃に優れた島風が抜けた穴をどうやって埋めれば良い？

育成中に轟沈してしまう艦娘も多い中、高Lvまで生き残った艦娘は貴重な存在なのだ。

だが、だからこそ後輩達への影響は大きいので、先輩として正しい姿で働いてもらわねば困る。

軍に唾を吐くような真似をされては後輩達が惑ってしまう。

司令官は再び溜息をついた。

「五月雨も・・・解ってくれなかったなあ・・・」

第5話

ダン！

拳を作った両手で食堂のテーブルを勢い良く叩いたのは五月雨であつた。

並べられたアイスクリームの入った器が小さく踊った。

「霧島さん！何なんですか司令官のあの命令！聞く必要があるんですか！」

向かいに座っていた霧島は、口を閉じてこそいるものの、他の面々も同じ気持ちだと悟った。

表情が読めないのは早霜くらいか。

霧島はゆっくりと周囲を見回し、青葉が居ない事を確認してから口を開いた。

「貴方達に本当にやってもらいたいのは、夕張さん達の意味確認と解決策を決める事です」

「えっ？」

「・・・正直、司令は頭に血が上ってますし、言ってる事も軍規に違反しています」

「はい」

「ただ、そうなった原因については解らなくもないですよね？」

五月雨がしよぼんとした表情になった。

「それは・・・敵艦を修理していたって聞いた時は私達もびっくりしましたけど・・・」

「ですが、夕張さんは私達の艦装や兵装の修理に貢献してきた方です」「そっ！そうです！何度も無理を聞いてくれました！」

霧島も頷き返した。

「ですから事を収めつつ、それぞれの言い分を取り入れられるものは取り入れ、上手く収めたい」

「・・・」

「しかし、大本営に知れたら、彼らは有無を言わず夕張さんを捕縛も

しくは轟沈させるでしょう」

「ええっ!？」

「単に今度の件を書面で読めば反逆というか、不穏分子としか読めないですからね」

「えー」

「さらにいえば監督不行き届きとして司令もクビになり、我々もLv1にされ、バラバラに異動となるでしょう」

「そ、そんなあ・・・」

「大本営に気づかれる前に我々でケリをつける方が、皆の為になるとは思いませんか？」

「・・・」

「ですから、司令の意図を汲みつつ、こういう風に指示を変えるのはどうでしょう?。」

「えっ?。」

「速やかに夕張・島風の両名と接触し、経緯をまとめ、今後について話し合うこと」

「・・・」

「ただし条件として、この鎮守府が取り潰しとならない方向での解決であること」

「・・・」

「これならどうですか? 五月雨さん」

「・・・霧島さんが書き換えてくれるんですか?。」

「ええ。お任せください」

五月雨は溜息をついた。

思えば司令官が着任したばかりの頃から、何かある度にどうにか丸めこんで来た気がする。

「どーして私にばかりこういう面倒なお役目が回ってくるんでしょう・・・」

「五月雨さんは一番司令と長く過ごしてきた方ですから、不器用さは良くご存知ですよね」

「はい・・・それはもう」

「司令は現状に惑い、先々に不安を抱いているのだと思います」

「そうだろうなつてのは・・・解りますけどお・・・さすがにこんな厄介な案件は・・・」

「だからこそ、五月雨さんにしか頼めません。どうか引き受けてくださいませんか？」

「・・・うー・・・解りましたよう・・・どおしよー・・・」

五月雨がふにゆんと机に突っ伏したので、ずっと黙って聞いていた早霜が口を開いた。

「鎮守府からの調査支援は、全く期待出来ないのでしょうか？」

「大本営は頼れないですし、二人が通信に応答しない以上、鎮守府で出来る事はほとんどありません」

「・・・」

「出来る事といえば皆様にせめて燃料や弾薬を満載し、航路手続きを迅速に行う事くらいです」

「解りました。地図や海図等の資料を出来るだけ頂きたいのですが」

「ええ、どれでも持参頂けるよう許可を取っておきましょう」

「あと、もう一つ」

「はい」

「航空機による探索がどうしても必要です」

「：んー、まあそうですね。ですが航空機を扱える艦娘に余裕は・・・」
「ぜひ、あきつ丸さんを」

霧島はぼんと手を打った。

「そういえば先月改になってましたね。解りました！お呼びしましょう」

「では・・・資料を取りに参りましょう。皆さんはアイスを召し上がっててください」

早霜はそう言うのと静かに立ち上がった。

「は、はい！直ちに準備するであります！」

あきつ丸は突然搜索艦隊に編入された事に驚きつつも、出港準備の為に工廠へと向かった。

艦装の調整と兵装設定を妖精達と進めていると、つんつんと足を突

かれた。

見ると妖精が数名、じつとこちらを見上げている。

「えっと、どうかしたのでありますか？」

「あきつちゃん、1つ頼まれて欲しいんだが」

「なんですか？」

「僚艦の皆に気づかれないように、後でこれを読んでくれねえか？」

「読めば、良いのでありますか？」

「読んでどうするかはあきつちゃんに任せるからさ、頼むよ」

「・・・承知いたしました。お手紙、頂戴するであります」

こうしてあきつ丸を加えた5人は、遠征や出撃組に混じってそつと出航した。

工廠からそれを見送る妖精達は不安げな表情だった。

「なあ、あきつちゃん動いてくれるかなあ」

「さあな。ただ、あきつちゃんはこの後も鎮守府で働かなきゃならん。

肩身の狭い思いはさせられねえ」

「俺達で支援出来る事はしてやるけどな」

「かといって毎日司令官に目の敵にされるなんてシャレにならないだろ？」

「確かに」

「出来れば手を貸してやって欲しいがなあ・・・難しいよなあ・・・」

第6話

その日の夕方。

「・・・」

広域探査から戻ったカ号を迎えたあきつ丸は結果を早霜に伝えると、機体の点検を装いつつ手紙を読んでいた。

そこには様々な事が書かれていた。

夕張が工廠でどのような役割をこなし、何に悩み、どうして深海棲艦を直すに至ったか。

「そうだった、のでありますか」

あきつ丸は手紙を仕舞うと、腕を組んで考え出した。

修理訓練の為とはいえ、どこかで敵になるかも知れぬ深海棲艦を直していたのは良くない事だ。

だがそれは司令官の胸三寸で、例えば練習用の艦装を手配するから止めなさいと指導する事も出来た筈だ。

「ただ・・・悩ましいでありますな」

妖精達は淡々と事実を連ねるだけに留めていたが、行間には助けてやって欲しいという気持ちが溢れていた。

そしてあきつ丸自身、着任時に戸惑っていた自分に世話を焼いてくれた夕張に手を貸したかった。

一方で、鎮守府に戻れば司令官がボスである事は紛れも無い事実である。

組織で生きていく上でボスを裏切るのは避けるべきだし、命を預ける関係なら尚更である。

この手紙をどう扱ったら良いのだろう。

司令室で司令官から言われたのは追跡と捕縛、そして処罰の為に連れ帰る事だった。

だが工廠に向かう前、司令棟の出口で霧島に呼び止められ、こう念押しされた。

「旗艦の指示に従ってください。良いですか、何があっても旗艦の指

示を優先してくださいね」

何か、ある。

あきつ丸はそう感じた事を思い出した。

ならばこの手紙の事も旗艦に知ってもらわなければならない。

「五月雨殿、少し、よろしいでありますか?」

あきつ丸は五月雨に近づいていった。

「・・・工廠の妖精さん達から、絶大な信頼を得ていたのかも」

最後に読み終えた高波は、そつとあきつ丸に手紙を返した。

無人島に上陸した5人はレーションで夕食を済ませ、設営したテントの中でランタンを囲みながら順番に手紙を読んだ。

五月雨はしばらく腕を組んでうんうん唸っていたが、やがて話し出した。

「あきつ丸さんは聞いてないと思うんだけど、霧島さんの命令に私達は従ってるの」

「えっ? 司令官殿の命令では・・・ないのですか?」

「霧島さんはね、私達に夕張さんと会って、何があったか、今後どうするかを相談して来てって言ったの」

「・・・ふむ」

「そうでなければ私達断ろうと思ってたしね」

「そう、なのでありますか?」

「だって司令官はデッドオアアライブで連れ戻せって言っただけだもん」

「デッド!? それには言わなかったであります。処罰の為に連れ戻せとだけ・・・そうでありましたか」

浜風が頷いた。

「なるほど、あきつ丸さんに言わなかったという事は、さすがにマズイと解ったようですね」

「自分も、もしデッドオアアライブと言われていたら断ったかもしれないのであります」

「ただ、連れ戻しても有無を言わさず解体されるのは変わらないと思

います」

「・・・昨夜からの経緯を考えると否定しづらいのであります」

高波が首を振った。

「でも、命令を断つたら司令官さんは私達にも冷たく当たるようになるかも、です」

五月雨は頷いた。

「だから霧島さんの助け舟に乗った。そういう事なんです」

あきつ丸は五月雨に訊ねた。

「霧島殿は、他に何か仰っていたでありますか？」

「鎮守府が取り潰しとならない方向で解決して欲しいと」

「まあそうでありましような」

浜風が頷いた。

「妖精達の手紙によって経緯は明らかになりましたが、2人には早く会わねばなりません」

「その通りであります。カ号による搜索も、ある程度範囲を絞らねば燃料が尽きてしまうのであります」

早霜がばさりと大きな海図を床に広げた。

「皆さん、ご覧ください」

高波が首を傾げた。

「これは鎮守府を中心とした海図、かも？」

「その通りです。お二人は昨晚、早ければ2030時には出航したと思われれます」

「・・・」

「島風さんは超高速に分類されますが、夕張さんは低速」

「・・・」

「ゆえに夕張さんの航行速度で考えると、今日の夕方の時点で・・・ここまででは行けません」

そういうと、早霜は同心円状に指をなぞり、交差した陸地の幾つかに丸をつけた。

「一方で、あきつ丸さんが正午頃に行った航空探査で、海洋上にお二人の姿が無い事を確認してくださいました」

「はい。この辺りまでは該当無しでありました」
そういうとあきつ丸は搜索範囲を指でなぞった。

「だとすれば、ここまでは行けませんし、この辺りの島という可能性もありません」

浜風が訊ねた。

「どうしてですか？追っ手をまく為に潜む可能性もありますよ？」

「島は無人で補給も出来ませんし、レーダーがある以上、追っ手に接近されれば状況は不利になります」

「なるほど」

「だとすれば、正午までに航行可能な範囲で、その後の逃亡まで視野に入れれば・・・」

早霜はすうつと1点を指差した。

「上陸地点はこの漁港しかありません」

高波が訊ねた。

「でっ、でも、この漁港はとても小さい町だから、隠れてもすぐ見つけられる、かも？」

早霜は別の地図を広げた。

「あくまで上陸地点です。これがその漁港近辺の地図ですが、ここまです移動すればバス停があります」

「あっ」

「そしてバスが辿りつく先は・・・ここ」

五月雨が眉をひそめた。

「ひいふう・・・うわー・・・6路線も乗り入れてるターミナル駅ですか・・・」

「ただ、夕張さんは恐らく列車を諦めるかと」

「どうしてですか？」

早霜は微笑んだ。

第7話

早霜はノートに駅の絵を書きながら話した。

「駅には大変沢山の監視カメラがあります。そして公安の検問もあります」

「あ」

「もし司令官が自滅覚悟で大本営に報告すれば、これらは致命的な障害となります」

「そ、そうかも。公安さんの追跡は物凄く高度だって、聞いた事があるかも」

「従って、夕張さん達に残された手段は高速バス、タクシー、路線バスの3つですが、まず路線バスは除外出来ません」

「どうして路線バスは無いと?」

「行き先が住宅地を巡回して戻ってくるか、元来た港に戻るかしかないからです」

「なるほど」

「また、タクシーの可能性も低いと思います」

「タクシーならどこでもいけるのに?」

「タクシー無線で手配情報がすぐ行き渡りますし、費用も高額ですし、監視カメラもありますから」

「おぉー」

4人はすらすら答える早霜に感心していた。伊達にいつも色々な物事を見ていない。

五月雨が興奮気味に言った。

「それでそれで、早霜ちゃんは何人がどこに行ったと思うの?」

早霜の表情が曇った。

「それが・・・この路線図によると、行き先の候補が4箇所あるのです」

「んー?行き先は5つだよわ?うわ、一番遠いのは東北まで行っちゃうんだ・・・」

「あ、すみません。東北は外して良いと思います。ですから4箇所と

申し上げました」

「どうしてです?」

「東北エリアに行くバスは途中で公安の検問を通りますし、直行なので降りられません」

「あー」

「あと、根拠としては弱いですが、島風さんは寒い所が苦手ですから・・・」

「だとすると、残るは大都市3箇所と、地方都市かあ」

あきつ丸は眉を顰めた。

「市街地でもカ号は艦娘反応を探查出来るのでありますが、探查半径が2km程度まで短くなってしまっているのであります」

「時間かかつちやうね」

「その通りであります。大都市ともなると1日ばかりになるのであります」

早霜は肩をすくめた。

「私達にはそもそもそんな探查能力はありませんし、あきつ丸さんはお一人・・・」

「どの行き先も隠れやすい、大きな町、かも・・・」

「はい。ですからここから先の特定が困難なのです。申し訳ありません」

早霜は悲しげに俯いた。

しばらく沈黙が続いた後、あきつ丸が思い出したように手を叩いた。

「そうだ!方法が1つあるかもしれないのであります!」

「えっ?どこ?どうやるんですか?」

「少し距離があるのでありますが、大本営に行くのであります!」

五月雨が両手をぶんぶん振った。

「だっ!だめですよ!鎮守府が取り潰されちゃいます!」

「いえ、大本営や憲兵隊の皆様には用は無いのであります」

「へっ?」

「夕張会の本部であります。1度だけ着任直後にお邪魔した事がある

のであります」

夕張会。

兵装実験軽巡という艦種は、夕張型にしか名付けられていない。そして夕張型は1番艦の夕張以外作られなかった。

つまり夕張は唯一人の艦種である。

例えば同じ「駆逐艦」同士なら、型が異なっても艦の運用方法は割と似通っているし、任務も以下同文である。

ゆえに暁型だろうと白露型だろうと艦種が同じなら話がそれなりに合うのである。

しかし艦種から合わなければ一気に難しくなる。

更に研究実験用ともなれば話題自体が極めて特殊になってしまう。

「防錆塗装の寿命テストって地味で面倒だよねー」

「そつ、そうなんだ・・ごめんでち」

「い、いや、謝って欲しいわけじゃなくてね・・」

「・・・オ、オリョールに行く時間でち。またでち！」

「あつ・・」

そんな訳で、夕張は仔細は異なろうとも鎮守府の中で独特のポジションにつきやすい。

簡単に言えば一人ぼっちになりやすかった。

最近では陸軍出身のあきつ丸やまるゆ、工作仲間であきつ丸とつるむ事もある。

突出した能力という意味で島風と仲良しになるケースもある。

だが、同じ艦種だからこそ通じる話題、共通する悩みというものがある。

鎮守府の中に居ないなら、鎮守府を超えて同じ夕張同士で集まってしまおう。

それが夕張会なのである。

夕張会は大本営の工廠近くに大きなプレハブ小屋を持っていて、夕張会が管理している。

とはいえ、夕張会には会長も役員も幹事も居ない。

どこの夕張も所属先で忙しくしており、会の諸事に専任出来るほど

は余裕がないのである。

ではどうやって運営しているか。

夕張会に加入した夕張は自分のスマホに夕張会専用アプリを導入し、通知された会員番号を登録する。

そのアプリに自分が参加したい日付を登録すると、会員中何人がその日参加するかを自動的に集計する。

そして一定閾値を超えると会合開催日となり、登録した夕張に通知される。

もちろん開催決定した日時に後から参加表明する事も出来る。

要するにアプリが幹事役であり、アプリの名前も「幹事君」とそのまんまである。

「幹事君」アプリは夕張会メンバーの多数決とその時対応出来る有志によって機能追加やメンテが行われている。

センターサーバーを持たないシステムとも言える。

会に参加した夕張は何をするか。

持ち寄った飲み物や食べ物、そして様々な資料を手に、技術論や待遇の愚痴、趣味の話などに没頭するのである。

解ってくれる相手と濃ゆい会話をたつぷりする事。

それこそが夕張が渴望する事なので、実に楽しいひと時を存分に味わえる。

そしてお開きの時間には出席者全員で綺麗に掃除して部屋を閉める。

なお、夕張以外の艦も、夕張と同伴であれば立ち入る事を認められる。

ただし登場したての場合、技術的見地からの云々と丸め込まれて艤装を細部まで分解されてしまう。

勿論調べた後は丁寧に組み立ててくれるが、まさにその経験をしたあきつ丸は、

「艤装を完全分解されたので、本当に元に戻るのか、正直不安だったのであります」

そう、苦笑交じりに4人に言った。

なお、夕張会はれっきとした大本営公認の会である。

ゆえに夕張は夕張会に出席する為に鎮守府から外出する権利が認められている。

そうする事で夕張が自らストレスコントロールしてくれる方が大本営や司令官は楽なのだ。

上手に大本営側のメリツトを作り、権利と公認を勝ち取った夕張はなかなか交渉に長けていたのであろう。

第8話

浜風があきつ丸に訊ねた。

「それで、夕張会の会場に出向いてどうするのですか？」

「夕張会のどなたかにご協力頂ければ、我が夕張殿とお電話などで連絡が取れるかもしれないのであります」

「なるほど！それは名案かもしれませんね！」

「でも、夕張会が私達が行った時にやってるかどうかは、解らない：かもっ…」

「その通りであります、夕張会は割と頻繁に行われていると聞いたのであります」

浜風は五月雨に尋ねた。

「会合が開かれていなければ無駄になりますが、一気に解決出来る可能性もあります。どうしますか？」

五月雨はしばらくうんうん唸っていたが、

「分散して全てのルートを辿っても見つけれられるとは思えません」

「では…」

「でも、全員で行く事もない…かな…あきつ丸さん」

「なんでありますか？」

「夕張会の本部は、私達の誰かが行って解るような建物ですか？」

「はい。表現が難しいのでありますが、いかにも夕張会という場所に、いかにも夕張会という建物でありました」

「なら、あきつ丸さんでなくても良いですよね」

「…と、思われるのであります」

「だとしたら、例えば浜風さん、早霜さん、そしてあきつ丸さんは引き続き追跡頂いて…」

「…」

「私と高波さんで夕張会の方に行くのはどうでしょう？」

「なるほど。頭脳としての早霜さんと目としてのあきつ丸さん、ですね」

「はい。臨機応変な統率は私より浜風さんが長けてると思いますし」
浜風が頬を染めた。

「そつ、それは解りませんが、その、お任せ頂けるなら頑張ります」
高波さん、私一人だと心細いから一緒に来てくれませんか？」

「お役に立てるなら嬉しいかも、です！」

「じゃあ今夜は早く寝ましょう。明日の日の出と共に私達は出ます。
そちらは浜風さんに任せます」

「解りました。連絡チャネルは4？6？」

「距離が離れるかもしれないので・・・6の、暗号表8で」

「解りました」

早霜はずつと地図と路線図を睨んでいたが、ぽつりと言った。

「なんとなくですが、こちらのルートの確率が高そうな気がします」

あきつ丸が訊ねた。

「なぜでありますか？」

「このルートには検問がありませんし、その割には高速道路も使う遠
距離ルートです」

「・・・」

「途中で鎮守府の付近を通る事も少ないです。ただ・・・」

「ただ？」

「行き先は地方都市ですから大都会よりは隠れにくい。逃亡先も限ら
れます」

「・・・」

「しかし、あの夕張さんの事。自活する為の環境くらいこしらえてし
まいそんな気がします」

「大変同意出来るのであります」

「ですから、あえて終着ではなく、途中で降りるかもしれません。たと
えば・・・この辺りで」

早霜はそういうと、外洋に突き出た半島を指差した。

浜風は頷いた。

「ここにしろ、最終目的地にしろ、あきつ丸さんの航空探査なら1度に
出来そうですね」

「ええと・・・はい、1度の飛行で探査出来るのであります」

「なら追跡ルートと最終目的地が決まったので、私達も休みましょう」
早霜が初めて心配そうな顔をした。

「・・・先程の話は推定に基づく仮説ですが、よろしいのですか？」

浜風は頷いた。

「どうせ夕張さんがどのルートを選ぶかなんて、今ここで何一つ確証があるわけでもありません」

「ええ」

「ならば推論でも、一番そうかもしれないと思っただころに行きましよう」

早霜はそつとあきつ丸も見したが、

「自分も、他に案がある訳でもありません。こういう時は勘に従うのも良いと思うのであります」

と、にこつと笑われたので、早霜は頷きながら言った。

「それなら・・・私達も眠りましょう。五月雨さん達はお休みになられますし」

「えっ?!」

早霜の視線を追うように浜風とあきつ丸が振り向くと、テントの奥で寝袋に収まってすやすやと眠る2人の姿があった。

「は、はやっ!早っ!」

「で、あります・・・」

「では、おやすみなさいませ」

早霜の声に驚いて向き直れば、既に早霜ももぐりこんだ寝袋のチャックを閉める所であった。

「えっ!あっ!ね、ねまつ、寝ましようあきつ丸さん!」

「み、皆さん早過ぎるのであります・・・」

こうして初日は過ぎて行った。

2日目。

「・・・本当にここに来たのでしょうか」

「ちよつと、自信なくなりますね・・・」

浜風達は推定した漁港からバスに乗り、ラッシュアワーのターミナル駅へと降り立った。

だが想像を超える人の多さと、

「し、視線が痛い、のであります・・・」

というあきつ丸の言葉通り、自分達を奇異の目で見る人々の視線が痛かった。

「もしここに夕張さん達が来ていたら、早々に立ち去りたいと思う筈・・・」

早霜はきよろきよろと見回すと、

「ありました!」

そういつてバス停の1つに駆け寄って行った。

それは昨晩話していた地方都市行きの乗り場だったが、早霜は時刻表を見てがくりと肩を落とした。

「ど、どうしたんですか?」

「4日に1本しかないんです・・・しかも前に出たのは・・・」

「・・・昨日」

「何時頃、でありますか?夕張殿は間に合う時刻だったのでありませんか?」

「ええと・・・」

早霜はしばらくノートになにやら書き込みつつ時刻表を睨んでいたが、

「・・・乗れた可能性がありますね」

浜風が唸った。

「だとしたら追跡を続けたいのですが、我々はどうやって行きましようか・・・」

あきつ丸が肩をすくめた。

「予想降車地点に海路で回る他無いのであります。4日も待っているわけには行かないのであります」

早霜が肩をすくめた。

「では・・・我々は上陸地点近くまで一旦後退するしかないですね」
浜風が地図の1点を指差した。

「この町外れに海浜公園がありますよ？そこから海に出ても良いのでは？」

早霜が首を振った。

「いいえ。そちらの海浜公園を含めてこの鎮守府の警戒エリア内です。呼び止められれば言い訳が出来ません」

「あー・・・そこにありましたか・・・なんと厄介な・・・」

「ただ、漁港まで戻らなくても、この辺りまで戻れば良いかと」

浜風はキツと顔を上げた。

「致し方ありません。先程乗ってきたバスの逆ルートで戻りましょう！」

第9話

浜風達が引き返す頃、五月雨達は大本営の入り口にいた。

「()用向きは？」

「・・・へっ？」

五月雨は、今、警備兵に問われるまで大本営に来た表向きの理由を考えていなかった。

まさか逃亡した夕張達と連絡が取りたいから夕張会に向かうんですなどとは言えない。

何と言おうかと冷や汗をかいてる様を見て、高波がそつと

「あ、あの、司令官に、こちらで売ってるお土産を買ってくるよう頼まれたのかも、です」

と小声で言ったので、怪訝な顔をしていた警備兵は苦笑した。

「なるほど。そういう司令官最近多いんですね。まあ本来は違反なんですけど・・・内緒にしときましよう」

「す、すみません」

「お土産コーナーはそちらの通路をまっすぐ行った先ですよ。お気を付けて」

「ありがとう、です！」

警備兵と別れてしばらく歩いてから、五月雨はそつと高波に言った。

「あ、ありがとう高波ちゃん。ごめんね」

高波はにこりと笑った。

「気にしないで良いのです」

「とつ、ところで・・・夕張会の建物ってどこにあるのかな・・・」

高波は少し首を傾げて考えていたが、

「いかにも夕張さんが居そうといえれば、工廠・・・かも？」

「そっか！大本営の工廠エリアですね！行ってみましょう！」

「はいー！」

そつと。

「う・・・わぁ・・・」

それは多分、ずっと前は普通のプレハブだったのだろうと思われる。

しかし、その外壁は焦げたり溶けたりした所を異なる外壁でつぎはぎされ、工業系の匂いが辺りに漂っている。

よく解らないアンテナが屋根から空に向かって突き出ていたり。壁に埋め込まれた電子部品のランプがチカチカと瞬いていたり。

高波が納得したように頷いた。

「いかにも夕張会の建物かも、です」

「え、えっと、皆で掃除して終わるんじゃないかなかったっけ・・・」

五月雨は引き気味だが、高波はそつと窓から中を覗き込んで言った。

「でも、中は片付けられていて、綺麗かも」

「えー・・・あ、ほんとだ。意外ですね・・・」

そんな話をしていた所、

「あなた達、夕張会に何か御用かしら？」

二人が振り向くと、大きなボールのようなものを手にしたジト目の夕張が一人。

そして見た事もない二足歩行型の武装したロボットが夕張の後ろに2体。

2体はまっすぐ銃口をこちらに向けている。

高波が「ひょうつ・・・」と息を飲んだかと思うと、その場にぺたんと座り込んだ。

「ちよつ！高波ちゃん！高波ちゃん！」

「こ・・・腰が・・・抜けました・・・」

蒼白になった高波を、夕張はポリポリと後ろ頭をかきながら見ているが、

「しようなないわねえ・・・アルファ、ベータ、私についてきて。二人が逃亡したら発砲を許可するわ」

「リョーカイ」

「ほら、肩貸してあげるから。中で話聞かせてもらおうわよ」

そう言つて夕張はプレハブの鍵を開けた。

「で、二人は何してたのかしら?」

夕張は五月雨達に近くのパイプ椅子を指差し、自分は向かいの長椅子に腰掛けた。

「えっと、その・・うちの鎮守府の夕張さんと連絡を取りたいんです」

五月雨はそう言いつつ、夕張の後ろの2体をちらちらと見た。

銃口は相変わらず、ぴたりと自分達を狙っている。

夕張はますますジト目になった。

「普通にインカムなり通信棟で連絡すれば良いじゃない。壊れたの?」

「あ、あのつ、秘密を守ってもらえますか?」

「秘密?」

「はい!」

「・・それはその夕張に関係するのね?」

「はい!」

夕張は少し五月雨を見つめていたが、やがて肩をすくめた。

「話の流れ次第ね。私達の仲間に危険が及ぶなら約束は反故にするわよ」

「逆・・とも・・そうです・・とも・・言えないです」

「んーまあ、話して御覧なさいよ」

五月雨は拳を握った。これはやむを得ない。

「はい・・お話します」

15分後。

「そういう訳で、あきつ丸さんの案に従つて、私達は何とか連絡を取りたくてここに・・」

そこでちらりと夕張を見た五月雨は

「ひっ」

と、短く息を呑んだ。

目の前の夕張が怒りに震えながら眉間に皺を寄せていたからだ。

「あつ、あのつ、ごっつ、ごっつ、ごめんなさい」

「あなたに怒ってるんじゃないの。その司令官、なます切りにしてやろうかしら」

「・・・へっ?」

「でも、秘書艦の霧島さんには感謝しないといけないわね」

「えっ・・・えっと・・・」

「そして貴方達にも。そうねえ：ビットちゃん、悩んでたもんなあ・・・」

高波はおずおずと聞いた。

「・・・ビット・・・ちゃん?」

夕張は手をひらひらと振った。

「あーごめんね。夕張会って全員夕張でしょ」

「はい」

「だから鎮守府番号をもじってあだ名をつけるの。貴方達の鎮守府は第110鎮守府だから」

「それでビットさん、かも?」

「そうよ」

五月雨はふと気づいたように訊ねた。

「あ、あの」

「なにかしら?」

「うちの夕張さんがビットさんなら、貴方は・・・」

「ああごめんなさい。私は大本営所属の夕張だから、あだ名はレイよ」
「れい?」

「鎮守府じゃないから番号が無いの。だから0番でレイ」

高波が首を傾げた。

「という事は・・・会長さん、かも?」

「夕張会に会長は居ないわ。私はまあ・・・そうね、この建物の管理人ってどこかしら」

五月雨はそつと上目遣いに話しかけた。

「そ、それで、レイさん、その、あきつ丸さんの言ったように、ビットさんに連絡は取れないでしょうか・・・」

「ん・・・」

レイは頬杖をついてしばらく考えた後、

「ここで待ってなさい。悪いけど勝手に出ちやダメよ。その2体が見張ってるから。トイレはそっちよ」

「はっ、はいっ！わ、わかりました！」

「アルファ、ベータ、この二人を監視。部屋から出たら発砲を許可するわ」

「リョーカイ」

レイはそう言ってプレハブから出て行った。

高波は慣れたのか、興味深そうにじつと2体のロボットを見つめていた。

第10話

しばらくして。

「・・・連絡、取れたわよ」

ぱあっと笑顔になった五月雨と高波を前に、レイは続けた。

「ただし、悪いけど貴方達を完全に信用したわけじゃないの」

「えっ・・・」

「ビットちゃんに危害が加わるリスクについて、夕張会は全力で阻止する事に決定したわ」

五月雨は首を振った。

「わっ、私達も夕張さんには恩があります！だから無理矢理捕まえるような真似はしません！」

高波は首をかしげながら訊ねた。

「あ、あの、夕張会としてっ・・・どうやって決めたの、です？」

レイは肩をすくめてスマホをちらつかせた。

「幹事君の投票機能よ？」

五月雨は真っ青になった。

「そっ、外に漏らしちゃったんですか!?秘密にしてくださいって言ったのに！」

「大本営や憲兵隊にチクる訳無いでしょ。それこそビットちゃんの身に危険が及びかねないし」

「あうー」

「まあそんな訳で、会場場所ももう決めまし、そこまで私が案内するわ。行きましようか」

「えっ?・・・夕張さんと、御話出来るんですか？」

「そういう事。それも夕張会の総意よ」

高波が頷いた。

「幹事君・・・便利かも、です」

途端にレイの目が輝いた。

「解る?幹事君V6.00の良さ！」

「えっ!? ええ、あ、はい、かも・・・」

「V5・92までは外洋に居る会員の投票が遅延する問題があったんだけど、新開発の投票プログラムでは・・・」

五月雨と高波はさっぱり解らない専門用語のオンパレードに目をぱちぱちさせながら思った。

やっぱり夕張はこの夕張でも似ている、と。

浜風達に連絡を取った五月雨達は、合流時にレイを皆に紹介した。

早霜が深々と頭を下げた。

「レイさん。お手を煩わせてしまい、申し訳ありません」

「まあビットちゃんとのままお別れは寂しいからね」

「外出の許可、よく、取れましたね」

「表向きは新型高圧缶の外洋航海テストって事にしてあるの。実際装備してるしね」

「もしかして・・・手馴れてらっしゃいますか?」

「さあねえ。ご想像にお任せするわ」

「この後は会合場所までレイさんにご案内頂く、そういう事でしょうか?」

「ええ。燃料が半分割ってる子は居ないわね? じゃあついてきて!」

こうしてレイを先頭に、6人は海原を進んで行ったのである。

その頃。

「短時間で用意出来るのがここくらいしかなくて。ごめんなさい」

「良いの良いの。色々してもらっちゃってごめんなさいね」

「とんでもない。ビットさんには今まで散々お世話になってきたんですから」

「悪いんだけど、もうちょっとだけ手を貸してくれるかしら」

「もちろんです。明日の夜まで非番ですから、しっかりお役目頑張っちゃいます」

アイウィはそつと建物のドアノブを掴んだが、その途端、顔をしかめた。

「うわっ・・・埃積もってる・・・気持ち悪いなあ・・・」

それでもドアノブを回し、ゆつくりと中に入り、見回した。
さつきナナミちゃんが言っていたセーフハウスってここの事なのか
なあ。

うす暗いし、かび臭いし、くっつ、蜘蛛の巣張ってるし、なんか無駄
に天井高いし。

埃を被った変な機械が一杯置いてあるし。

私にはセーフどころか余裕でアウトなんだけど・・・長袖長ズボン
で良かったなあ。

まさかずっとこの工場を根城に商売する事になるなど、この時のア
イウイは予想すらしなかったであろう。

五月雨達が鎮守府を出発してから4日目。

「そ、そろそろ・・・着きませんか？」
「んー」

五月雨がレイに恐る恐る訊ねたのも無理はなかった。

巡航に適した速度とはいえ、レイに導かれるまま外洋を1日近く
進み続けていたからである。

「帰りもちゃんと送ってあげるから！さ、行くわよ！」

「あ、あと3日で戻らないといけないんですよー」

「大丈夫！間に合うから心配しない！」

高波が遠くの影を認め、眉をひそめた。

「遠方に艦影・・・かなりの数かもです」

レイは目を細めた。

「へえ・・・あなた目が良いわね。あれが目的地よ、行きましょ」

五月雨にしろ、浜風にしろ、早霜にしろ、高波にしろ、あきつ丸に
しろ。

110 鎮守府から来た面々は呆気に取られていた。

周囲見渡す限り、夕張、夕張、夕張、夕張、そして夕張、なのである。

互いに親しげに、その多くが工具、スマホ、あるいは何らかの部品
を手に議論している。

その数は数百とも数千とも、もはや数え切れなかった。

五月雨は恐る恐るレイに訊ねた。

「あつ、あの」

「なあに？」

「も、もしかして、夕張会全員、いらっしやるんですか？」

「いいえ？都合ついた子だけだから、3割くらいかしら」

「3割でこんなに!？」

「ほとんど全部の鎮守府に居るからね」

「はー」

「でも、これだけ1度に集まるのは久しぶりかな」

早霜がそつと訊ねた。

「やっぱりそれは・・・」

「ビットちゃん人気者だから。会合での技術提供も多かつたし、腕も良いしね」

早霜は小さく頷いた。

「やはり、そうだったのですね・・・」

五月雨が訊ねた。

「それでその、うちに所属していた夕張さん：ええとビットさんは：どちらに・・・」

レイはくるりと振り向くと、五月雨をまっすぐ見ながら言った。

「その前に1つ。司令官がデッドオアアライブと言った事は伏せといてくれないかしら」

「えっ?」

「ビットちゃんは純粹だし、繊細でもある。投票の時にもそこは伏せたの。本人も見ることから」

五月雨は腕を組んで少し考えていたが、

「じゃあ解体の事も言わない方が良いですよね」

「そうね・・・戻ると厳罰に処される、その辺りにしておいてくれないかしら」

「解りました」

第11話

レイはスマホを取り出すと幾つか操作し、話し始めた。

「ビットちゃん、聞こえるう？」

「はい！レイさんばっちりです！」

レイはひよいとスマホを五月雨に向けた。

「じゃ、話して良いわよ」

浜風がポリポリと頬をかいた。

「あー、お会い出来る訳ではないんですね」

レイは首を傾げた。

「私、会わせるって言ったかしら？」

浜風に見られた五月雨はゆっくりと頷いた。

少なくとも当てもなく追っているよりは遥かに進展した状況だ。

五月雨は軽く息を吸うと、自分達が霧島に頼まれた事と、妖精達の手紙を話していった。

ビットは時折相槌を打ちながら聞いていたが、妖精の手紙のくだりを聞き終えると、

「そう。あの子達、そんな事までしてくれたの・・・」
と呟いた。

五月雨は俯きがちに言った。

「私達は、一服盛られた事も含め、あの夜の司令官の様子では仕方なかったと考えてます」

その時。

「そっ、それは・・・え？ぱりっちゅ？」

薬を飲ませたのは自分と妖精であり、ビットではない。

アイウイはそう言いかけたのだが、ビットはそつとアイウイの肩に手を乗せて囁いた。

「言わなくて良いわよ、島ちゃん」

「でっ、でも・・・」

「もう、過ぎた事だし、妖精さんが罰を受けちゃうでしょ」

にこりと微笑んだビットの笑顔に、アイウイは深い覚悟を見た。確かに、二人でもう結論は出したのだけだ。

スピーカーから五月雨の声は続いていた。

「霧島さんは夕張さんの意思を聞いて、お互いの落とし所を見つけて欲しいといいました」

「そうでなくても、私達も、夕張さんに今まで沢山無理を聞いてもらっただご恩を忘れてはいません」

「でも私達の鎮守府が取り潰されて欲しくないと思う気持ちもあるんです」

「どこか、良い解決策は無いでしょうか・・・」

ビットはアイウイを見た。

アイウイはきゅつと唇を結び、こくりと頷いた。

一呼吸置いてから、ビットはマイクに向かって話しかけた。

「解ったわ、じゃあ2人のIDプレートを返します」

「えっ?」

「私達は鎮守府に帰る意志はないわ。処罰の後も冷遇されるのが目に見えてるしね」

五月雨は俯いた。

「・・・そう、です、ね」

本当はそれどころではなく、帰ったら即刻解体される。

喉元まで出かかったが、レイが首を振ったのでぐつとこらえた。

一方、アイウイは唇を噛んでいた。

ビットには言っていないが、あの晚司令官は強制解体だと大声で怒鳴っていた。

厳罰なんて生温い物ではない。騙すなんて酷い。ぱりっちは私が守らなきゃダメだ!

ビットは静かに続けた。

「あと、私達は他所の鎮守府に行くつもりも無いわ。静かに暮らしたいだけよ」

「・・・」

「だから私達を見つけたけど逃げたから仕方なく撃ち、轟沈させた証

としてIDプレートを持ち帰った」

「！」

「そういう事にももらえないかしら」

五月雨はレイに向かって訊ねた。

「そ、それで、その、大本営は認めてくれるのでしょうか？」

レイは目を細めつつ言った。

「・・・ビットちゃん、ちょっとこっちで相談するから待っててね」

「はい、お願いします」

レイはビットの答えを聞いた後、スマホのマイクをそむけ、五月雨達にだけ聞こえるように呟いた。

「実際の話、艦娘が戦闘中に轟沈する事は頻繁に起きてるわ」

「そう、ですね」

五月雨は俯いた。

所属する110鎮守府でも、定刻哨戒ですら強い深海棲艦と遭遇した等の理由で轟沈者が出る。

大討伐事案では駆逐艦や軽巡は必ず轟沈者が出るし、時には重巡や戦艦クラスでも轟沈する。

そんな時は司令官がとて不機嫌になるのだが、霧島が以前、

「司令は皆にではなく、敵に対して憤ってるんですよ」

と教えてくれたつけ。

レイは続けた。

「轟沈した艦娘の船魂を持ち帰れない時はIDプレートを代替とする。これは正規ルール」

「はい・・・」

「合意があるなら本来は契約解除と解体が正式な退役方法だけど・・・」

「話し合えない以上合意出来ないし、成り行き次第で身の安全すら保証されない可能性もある・・・ですね？」

「そういう事。だから次善の策として、IDプレートのみ返還というのは妥当じゃないかしら」

五月雨は浜風を見た。

「・・・どうしよう、浜ちやあん」

今にも泣きそうな五月雨に浜風は溜息を吐きながら答えた。

「理屈は合ってますし、我々が轟沈させたのも元々司令が命じた通り
といえれば筋は通ります」

高波が呟いた。

「でも、司令官さんは、本当は夕張さんに帰ってきて欲しいって思っ
てる気がする、かも・・・」

あきつ丸は静かに首を振った。

「本心がそうだとしても、あれだけ大立ち回りした後で意見を変える
のは難しいのであります・・・」

「そう、ですよ・・・」

レイは無言の早霜を含め、それとなく5人の表情を見回し、ちらと
右手に居た夕張に目配せをした。

その夕張は頷くと、そつと群衆に紛れて行った。

レイは五月雨に尋ねた。

「答えは決まったかしら？」

「・・・はい」

レイはスマホを五月雨の方に戻しつつ言った。

「じゃ、ビットちゃんに言っておいて・・・お待たせ、ビットちゃん」
「大丈夫です」

五月雨は少し躊躇ったが、頷きながら言った。

「夕張さんがそう仰るなら、IDを私達が持ち帰ります。寂しいです
けど・・・お別れですね」

スピーカーから声が聞こえた。

「ごめんね五月雨ちゃん。じゃあ二人でIDプレート持っていくね」
五月雨の顔がパツと明るくなった。

「あつ、じゃあ最後にお会い出来るんですね」

レイが肩をすくめた。

「通信が切れちゃったわね・・・待ってて。もう来る頃だから」

少しして、群衆が割れた間を夕張と島風が手を繋いで現れ、静かに
五月雨達の方に向かってきた。

五月雨が手を振りながら、

「夕張さん、島風さん、今までありがとう・・・」
そう、言い始めた時。

ドドドン！

至近距離で突然砲音が鳴り響き、向かってきていた二人ががくりと倒れ伏した。

すぐに二人の近くにいた夕張達が悲鳴を上げながら周りを取り囲んだが、程なく一帯が強く光った。

それは五月雨や浜風が悲しいくらい見慣れた、艦娘の轟沈を告げる光そのものであった。

第12話

見開いた目で振り向いた五月雨の目に映ったのは、煙を吹く主砲を構えた早霜の姿だった。

五月雨はかすれた声で言った。

「は、早霜ちゃん・・・どうして・・・」

早霜は無表情に言い放った。

「皆さん、先程から何を仰っているのですか？」

「えっ?」

「私達の姉、夕雲はつい先日、深海棲艦に沈められました」

「そっ・・・それは・・・」

「深海棲艦は敵。敵を修理すれば再びこちらに牙を剥く。その一人に夕雲姉さんは殺された」

「で、でも、夕張さんが助けた子が夕雲さんを撃ったって証拠はどこにも」

「直接・間接を問わず、敵の削減が遅れた事が夕雲姉さんの轟沈に無関係という証拠はありません」

「そ、そうかもしれないけど」

「現に工廠で私達が修理を受けられなければ、とうの昔に私達の鎮守府は壊滅しているでしょう」

「そ、そうだけど、そうだけど・・・」

「姉を殺めた奴の共犯。その犯人の逃亡を助けた幫助犯。二人はそれ以外の何物でもありません」

「・・・」

「昔直して頂いた事への礼に急所へ命中させました。痛みも無く轟沈したかと」

「・・・」

はっとして、浜風はレイを見た。

レイは早霜を静かに見ていたが、やがて目を伏せ、口を開いた。

「・・・やっぱり、そう思う子は居るわよねえ」

「・・・」

レイは顔を上げ、すいと早霜の前に立ちはだかった。

「でも、他の夕張達は無関係よ。更に砲撃するなら私達それぞれの所属鎮守府が黙っていないわ」

早霜は砲を静かに下げつつ頷いた。

「無差別殺戮をするつもりは、ありません」

「あと、彼女達の弔いは私達がする。貴方達には渡さない」

「・・・IDプレートは頂けないと困ります。司令官に出す証拠となりますので」

その時、一人の夕張がレイにそっと近づき、2枚のIDプレートを手渡した。

レイはプレートを顔の前に掲げ、プレート越しに早霜を見た。

早霜はまっすぐレイを見返し、二人の視線が絡んだ。

おろおろする五月雨と浜風を横目に、レイは早霜に2枚のプレートを直接手渡した。

「・・・これで良いわね」

「はい。確かに頂きました」

レイは艀装からディスプレイプレイを引き寄せると、北西の方角を見上げた。た。

「じゃ・・・約束だから110鎮守府まで戻れるよう案内するわ。皆！後は頼んだわよ！」

レイはそう呼びかけて出発したが、夕張達は押し黙ったままで返事はなかった。

レイに付き従って夕張達から離れつつ、恐る恐る浜風と五月雨は後ろを振り返った。

そこには夕張達が全員、自分達に背を向けているのが見えた。さようなら。

二度と関わらないで。

その後ろ姿はそう言って自分達を強く拒絶しているかのようで、二人はぞっとした。

早霜の暴挙に誰も反撃しなかっただけ、余計に恐ろしく感じた。

だがそれは先程レイが言った通り、他所の所属艦娘を攻撃すれば大問題になるからだと理解した。

前に向き直った五月雨と浜風は俯いた。

もう2度と、ドロップでも建造でも、夕張も島風もうちの鎮守府には来てくれない。

そんな気がした。

早霜はIDプレートを艤装に仕舞うと、無表情のまま五月雨、浜風の後についていった。

あきつ丸は押し黙ったまま、その後ろにつきつつ、無言で早霜を睨んでいた。

自分の姉妹が轟沈する事はとても悲しいのだろう。

夕雲型は性能の高さ故に出撃も多く、巻雲も長波も早霜が来る前に沈んでしまっていた。

早霜は夕雲ととりわけ仲が良かった。

失いたくなかったという気持ちは解らなくはない。

だが、夕張は自分にとって大切な友人だった。

孤立から救ってくれた恩人だった。

そして夕雲轟沈に関与しているような証拠は何も無い。

問答無用で殺される覚えは無い。

絶対に無い。

たとえそれが司令官命令であつてもだ。

あきつ丸はぼそりと呟いた。

「・・・理不尽な暴力、であります」

高波は時折あきつ丸を心配そうに見ながら、一番最後に位置したまま皆についていった。

翌朝。

水平線に顔を出した夜明けの太陽に手をかざしながら、レイは五月雨に声をかけた。

「五月雨ちゃん、この後まっすぐ方位028を保てば2時間くらいで鎮守府よ」

「ええ。もう見慣れた景色です。燃料が間に合つて良かったです」

「じゃあ皆、私はここで別れるわ。どこまで報告するかは皆で決めてね」

レイは速度を落とし、自分を追い抜く1人1人に別れの言葉を告げていった。

五月雨は寂しそうに笑った。

「レイさんのおかげで鎮守府に帰れます。どうも・ありがとうございます・ございました」

「うん。元々切ない任務だし、あまり気にし過ぎたらダメよ」

「は、はい・すみません」

浜風は手を差し出してきたので、レイはぎゅつと握手した。

「必ず、このご恩を返します。私に出来る事があればお声がけください」

「良いわよ。そんなに気にしないで」

「この度のご協力に感謝します。それでは、またいつか」

そして早霜に近づくと、レイは耳元で囁いた。

「貴方の仮IDはG8840。私のIDは0を5つ。明日の夜、幹事君でダイレクトコールしなさい」

早霜が小さく頷いたのを確かめると、今度はあきつ丸に近づいた。

「明日の夜、誰にも言わず早霜さんの部屋を訪ねて。ただし武器は持っていかないこと。良いわね？」

ぎくりとした様子であきつ丸はレイを見返した。

「なっ、何の事で・ありますか？」

「それで全て丸く収まるから。それまでも攻撃禁止よ。良いわね？全部台無しにしたらダメよ？」

あきつ丸はしゅんとした。

「わ・解ったので、あります」

最後にレイは高波に口を開きかけたが、高波が先に「二人に今までありがとうって伝えて欲しいかも、です」

そう囁いてにこりと笑ったので、レイは苦笑した。

「司令官にバラしちゃダメよ？」

「もちろんです。沢山お世話になりました。あの、ありがとうございます」

ました、です」

こうして最後尾になったレイは

「じゃあね！皆さよなら！」

と手を振りながら反転し、五月雨達から離れて行ったのである。

第13話

レイと別れてから2時間後。

指令室では五月雨達が報告を行っていた。

司令官は呆然とした表情だったが、やっとの事で声を出した。

「……轟沈、させて来たのか？」

「はい。これが証拠です」

早霜からIDプレートを受け取った霧島は、刻まれた文字を凝視し、溜息をつく。司令官に向き直った。

「確かに、二人のIDプレートです」

司令官はがくりと俯くと、指令室に静寂が訪れた。

少しして、司令官がのろのろと顔を上げたとき、拳を握り締めていたあきつ丸がついに叫んだ。

「・なにも、なにも騙し討ちで殺さなくても良かったのであります！」

その言葉は早霜よりも、むしろ司令官に突き刺さった。

動揺した目で司令官はあきつ丸を見た。

「あ、あきつ丸……」

「デッドオアアライブと命じられた、それは事実であります！命令は絶対であります！」

「……」

あきつ丸はぼたぼたと涙をこぼしながら続けた。

「だとしても、せめて……せめて互いに向き合ってもう1度話し合っても良かったのであります！」

早霜は、五月雨達は、全くの無言だった。

霧島がとりなそうと口を開きかけたが、司令官が首を振って制し、話し始めた。

「あきつ丸」

「これでは夕張殿が、今まであれだけお世話になった夕張殿が、あまりにも、可哀相なのであります……」

「あきつ丸、頼む。聞いてくれ」

あきつ丸が歯を食いしばったまま床を睨みつけて黙したので、司令官は続けた。

「早霜が撃ったのは、私の命令だからだ。全ては私の責任だ」
「・・・」

「私がとことん話し合つて、処罰や冷遇はしないから戻るよう説得して来いと言えば良かった」

「・・・」

「私は、あの晩、夕張があつさり言つた事がとても怖かった」

「・・・」

「直すほど気心が知れているなら深海棲艦と他にも通じているのではないか」

「・・・」

「鎮守府の内情まで敵方に伝えてしまったのではないか」

「・・・」

「お前達を不意打ちするような戦法を取られてしまうのではないか・・・」

「・・・」

「そう思うと、怖かった。事の重大性を全く理解していない夕張にも、置かれている状況にもだ」

「・・・」

「だから一刻も早く、夕張と深海棲艦の関わりを断ちたかった。お前達を、大事なお前達を守りたかった」

「・・・」

「だが、夕張も、島風も、大事な一人だった」

「・・・」

「その夕張達の言い分を、本当の状況を聞く機会を全く与えなかったのは私だ」

「・・・」

「あの晩解体していたとしても、現状でも、それは変わらない・・・」
「・・・」

「島風が私から遠ざけようと逃走を手引きしたのも当然だな。友を守

る為に必死だったのだろう・・・」

司令官は霧島から2枚のIDプレートを受け取ると、ぎゅつと握り、額に当てた。

「全ては手遅れになってしまった。私のせいで：酷い事をしてしまった・・・」

あきつ丸はふと、司令官が涙をこぼしているのが見えて我に返った。

「すまない・・・夕張・・・島風・・・すまなかった・・・」

霧島がそつと口を開いた。

「本件は秘匿案件とします。外部への開示は禁止。帰還までの経緯は鎮守府内でも極力言わないでください」

五月雨が霧島に不安げに尋ねた。

「も、もし聞かれたら・・・夕張さんの事は皆心配してましたし・・・」

霧島は頷いた。

「あくまでも・・・極力、ですよ」

「は、はい・・・解りました・・・」

「あと、今、この部屋で見聞きした事は一切口外する事を禁じます。最上級の機密事項です」

「・・・はい」

「では、補給と休養を取ってください。皆様は明後日の0900時まで休暇とします。任務、お疲れ様でした」

プレートを握り締めてすすり泣く司令官の肩に手をやり、目で退出を促す霧島に頭を下げると、5人は部屋を出た。

「ごめんね、ちよつと私、寝るね・・・」

そういうと五月雨はふらふらとした足取りで、浜風に支えられながら寮に戻って行った。

「自分も、失礼するのであります」

あきつ丸は早霜達の視線を避けるように、足早に歩き去った。

「姉さん・・・あの」

早霜が高波を見た時、高波はにこりと頷いた。

「一緒に、もう1つのお役目を果たしましょう？」

早霜は少し驚いた目をしたが、すぐに元の表情に戻り、頷いた。

「はい。もうひと踏ん張り、いたしましょう」
そうして。

早霜達は積極的ではなかったが、鎮守府内で艦娘達から聞かれる度に丁寧の説明をいった。

あきつ丸と同じように早霜の後ろ姿を覗む子は居た。だが、

「テートクにデッドオアアライブと言われた以上、命令通りデース」

と、鎮守府最高LV保持者である金剛が言った事で表面上は静かだった。

早霜は自らに批判的な子達の視線は気にしていなかった。

正確には、気にしている余裕が全く無かった。

さりげなくではあるが、早霜も、高波も、何をする時も油断なく周囲に目を配り続けていた。

その日の夜、風呂から部屋に戻ってきた早霜に、高波がそっと囁いた。

「・・・誰かから言われた、かも?」

「いいえ姉さん。今の所、誰からも」

「就寝後、誰か来るかも、です」

「ええ。でも動くなら・・・早く動いて欲しいですね」

「明日の夜が、節目かも」

「出来れば波が立つ前に、始まる前に収めてしまいたいのですが・・・」

二人の予想に反し、夜も、翌朝も、その午前中も、静かだった。

そして昼食後。

「・・・ちっ」

金剛はふと、腹立たしそうな舌打ちが聞こえた方に目を向けた。

そこには立ち去る早霜の後姿を覗む天龍の姿があった。

金剛は天龍に近づくと、

「Hey天龍! ちょっと相談があるのデース。時間作ってくれませんか?」

と、にこりと微笑んだ。

第14話

天龍は金剛の後に大人しく従っていたが、ついに肩をすくめた。

「・・・なんなんだよ、金剛さんよ。こんな裏つぺりまで連れて来てさ」「んー・・・」

金剛は周囲を何度か見回した後、頷いて言った。

「おかしいと思いませんカー?」

「何がだよ」

「早霜デース」

「・・・イカれてるってんなら賛成だぜ。いきなり仲間撃ち殺したんだからよ」

「そこデース」

「・・・あん?」

「早霜と出撃した時の事、思い出してみてください」

「・・・」

「仲間を差し置いていきなり撃つたり、前に出たりする子ですカー?」

「・・・ちげーな。アイツはずっと戦況を見てて、必要なら急所に一撃つてタイプだ」

「デース」

「だから今回だって夕張と島風を一撃で仕留めたんだろ? あってるじゃねーか」

「撃つた理由はどうですカー?」

「・・・んー・・・そーいや・・・」

「YES。あまりにも感情的で短絡的デース」

「・・・どういう事だよ」

「NEXT。早霜はあんなに出歩く子ですカー?」

「・・・いや・・・あいつはむしろインドアタイプだ」

「デース」

「そーいや・・・昨日からやけに見かけるな・・・高波と二人で・・・」

「YES。あの子達は何かを探してマース」

「何かって何だよ。自分を睨む奴って事か？」

「それなら話を聞いた直後から露にしている子は多いですし、もう解つてる筈デース」

「・・・んー？」

金剛は天龍の耳元で囁いた。

「逆つて事は、無いデスカー？」

「逆つて・・・睨むことの、か？」

「YES」

「・・・け、けどよ、それを何で今更探すんだ？」

「それはつまり、夕張に害を成す存在デース」

「え？だってもう夕張は・・・あっ!!!」

短く声を上げた天龍に、金剛は唇に人差し指を当て、声をひそめた。

「シーツ！全ては仮説デース。でもその方が、全部繋がると思いませんカー？」

「・・・だから歩き回り、探してるってか？」

「ただそのやり方は、早霜と高波が自らを囿にしているって事デース。Dangerousデース」

「それでもアイツらは・・・夕張に今後危険が及ばないようにしているってことか・・・」

「YES」

「俺達はどうすりや良い？」

「仮説が正しければ、確認を終えたら二人から説明があると思いまーす。それまで・・・」

「二人に手出ししねえよう引き締める、ついでにそっち側の奴も探す。だな？」

「YES。天龍は察しがイイネー」

「んー・・・軽巡連中には仮説を説明しねえと引き入れられねーぞ？反発してる奴も多いしよ・・・」

「天龍から説明してもらうのは荷が重いデスカー？」

「・・・午後に川内型・球磨型全員とミーティングがあるが、その時説明して良いか？」

「あまり広範囲に行くと早霜のターゲットが警戒してしまいマース」

「んー・・夜戦馬鹿とクマと筋トレ女だけで大丈夫かなあ・・」

「バランスがとても難しいネー、だから天龍に任せマース」

「そっちは、任せて良いんだな？」

「YES。重巡、空母、戦艦は私と霧島で話すネー」

「後は潜水艦か・・イクに言っとくか」

「潜水艦の子達は横の繋がりが太いデース。それで良いネー」

「やれやれ。それならそうと俺にくらい言えってんだ。高波も早霜も

水臭えなー」

「・・あの子達はとても真面目で、最後までやり通す子達デース」

「けど、何でも背負い込みすぎるのが玉に瑕なんだよ」

「・・YES」

「ま、金剛の仮説を踏まえるとスッキリ説明が付くし・・それに」

「それに？」

「そうであって欲しいな。俺としてもよ」

金剛と天龍はニツと笑いあった。

こうして鎮守府は、どこかいつもとは異なる雰囲気に包まれていった。

その夜。

コン・コン・コン

ノックの音に一瞬の間を置いて、扉がゆっくりと開いた。

「・・・こんばんは、です」

「っ！」

ノックしたあきつ丸は、現れた高波の顔を見てどきりとしたが、すぐに目を瞑った。

そうだ。

高波も早霜と同じ夕雲型の生き残り。同じ部屋で当然だ。

レイ殿は気づいていたのでありましょうか・・当然、そうでありましような。

もし武器を持っていたら、あるいは間違えて・・

観念したように溜息をついたあきつ丸は、目を開けて苦笑した。

「こんばんは、であります」

「ちゃんと説明するので、入って欲しいかも、です」

あきつ丸は無言で頷き、中に入って行った。

部屋には布団が敷かれ、その奥できちんと正座した早霜が待っていた。

「…まずは、必要性があったとはいえ、騙した事を、お詫びします」
向かい合うように座ったあきつ丸に、早霜は深々と頭を下げた。

あきつ丸は怪訝な顔になった。

「…砲撃した事、で、ありますか？」

「正確には、ゴム弾で撃った事を今まで言わなかった事、ですね」

「…えっ…なぜ…そんな…あ…あむっ！」

あきつ丸はもう少しで大声をあげそうになり、慌てて自らの両手で口を塞いだ。

早霜は頷いた。

「これからレイさんに連絡を取り、答えあわせを行います」

「こ、答えあわせ、で、ありますか？」

「はい。状況から考えると、私が考えた事と、レイさんの企みは相違ない筈です」

早霜はスマホを手を取った。

「こちらに夕張会専用アプリ、幹事君をインストールしました。初期設定も済ませてあります」

「…」

「では、レイさんに…ダイレクトコールを…行います」

早霜の手がかすかに震えている事に気づいた高波は、そつと早霜の太ももに手を置いた。

早霜は揺れる目で高波を見返した。

「ね、姉さん…」

「大丈夫。早霜ちゃんの推測は間違っていないから、怖がる事は無いです」

早霜はぎゅつと瞑った後、薄く目を開け、幹事君のダイレクトコールボタンをタッチした。

I
D
は
・
・
0
が
5
つ
・
・

第15話

早霜は操作を終えると、3人の真ん中にスマホをそつと置いた。スピーカーからコール音が数回して、程なく応答があった。

「はーい、どなたかしらー?」

「第110鎮守府の、早霜、高波、あきつ丸です」

「ふーん・・・じゃあ1つ質問良いかしら」

「どうぞ・・・」

「私が大本営で従わせてたロボットは何体?」

高波がにこりと笑った。

「2体です」

「じゃあその名前は?」

「アルファとベータ、かも」

「正解。周りには貴方達3人だけ? 司令官は居ないわね?」

早霜が頷きつつ答えた。

「はい。3人だけです」

「ん、じゃあ早速聞くけど、そっちの様子はどうかしら?」

「司令官と秘書艦には、私が砲撃して2人を轟沈させたと報告しました」

「ええ」

「司令官は予想外だったようで、お二人の言い分を聞く機会を失った事を詫びておられました」

「・・・そう」

あきつ丸はひやりとした。

これは最上級の機密を漏らしたと言えるレベルだろうか、違うだろうか、と。

だが、小さく首を振った。

多分、霧島殿が秘匿と言った真の部分からは・・・外れているだろう。

早霜は説明を続けていた。

「・・・そして、鎮守府所属艦娘や妖精達から聞かれるたびに、同じ説明

をしておきました」

レイの声色がすこし強張った。

「ええと、早霜ちゃんそれで大丈夫？身の危険はなさそう？」

早霜はそつとあきつ丸を見てから答えた。

「少し睨まれていますが、今の所、それ以外に動きはありません」

「んー・適当な時期をみて僚艦や妖精達には言っておきなさいよ、二人とも元気だった」

あきつ丸がびくりと反応し、そのまま反射的に喋った。

「ゆ、夕張殿と島風殿はご無事なのでありますか？」

「そうよ。そもそも貴方達は2人に会ってないし」

「「えっ?」」

目を丸くするあきつ丸と早霜を横目に、高波は静かに頷いただけだった。

「・・・ど、ど、どういう事がありますか？」

やつとの事であきつ丸がそう話しかけると、少しの沈黙が訪れた。

「えつと・・・高波さん」

「はい」

「貴方、からくり解ってるんじゃないかしら？」

「・・・大体、つながってる、かも」

「じゃあ言ってみてくれないかしら。違う所は補足するわ」

あきつ丸と早霜は、そつと高波を見た。

高波は1つ咳払いすると、口を開いた。

「えつと、私達が行った海域には、ビットさんと島風さん以外の夕張さん達が集まっていたのかも」

「私達は遠く離れた所にいるビットさんと島風さんと、幹事君を使ってお話してたのかも」

「IDプレートは・・・んー、ずつと前に二人から外されて、他の人が持ってきたの、かも?」

「早霜ちゃんがゴム弾で撃つたのは二人を模した人形だったのかも、です」

部屋に沈黙が流れた後、スマホからレイの声が出た。

「・・・全部正解よ。いつ気づいたのかしら？」

「夕張さん達が取り囲んだ後、すぐにIDプレートをレイさんに渡した時、かも」

「どうして？」

「そもそもレイさんは、私達がお二人に危害を加えるリスクについて全力で阻止すると仰ってました」

「・・・良く覚えてたわね」

「それに、IDプレートは簡単に外れないし、夕雲型の主砲で軽巡と駆逐艦を一度に轟沈させるのは無理かも」

「・・・ふふっ。閃光弾撃つタイミングがちよっと早かったからね。ナナミちゃん緊張してたし」

早霜が呟いた。

「本物だと思っていました。だから将来に遺恨を残さぬよう、あきつ丸さんに信じてもらう為に撃ったのです」

「遺恨、でありますか？」

「はい。お二人の行動を快く思わない方が将来報復を仕掛けないよう、既に死んだと広める為の工作です」

「・・・あ」

「逃がしたとなれば、どこかで生きてるとなれば、また探し出し、消そうと動くかもしれない」

「・・・」

「司令官がそうする可能性は消えましたが、艦娘の皆さんの中にはまだ恨んでる方が居るかもしれません」

「・・・」

「好かれていた夕張さんを恨む気持ちは出しにくい。でも私がやったと言えば同調して名乗り出てくるかもしれない」

「・・・」

「その恨みが深まる前に私が説得し、もう許してあげて欲しいと言いたい。そう考えたのです」

「そう、だったのでありますか」

「夕張会の反応が早く、しかも昇天に見せる光まで上がったので、話を

合わせてくれたのだと思ってきましたが・・・」

レイが笑った。

「実弾でも耐えられる人形だったし、着弾の衝撃が意外と少なくて倒れないんじゃないかとヒヤヒヤしてたらしいわ」

高波が問いかけた。

「遥か沖合いに集合地点を作ったのは、二人と離す為、かも？」

「まあそれもあるけど、貴方達も知らない追跡者が居ないか確認する為よ」

「遠距離でもお話出来る幹事君があつたからこそ出来た、かも」

「そうなるわね」

あきつ丸は眉を顰めていたが、やがて腕を組みつつ口を開いた。

「えと、あの、全体を1度整理してもよろしいでありますか？」

「もちろんよ」

「ま、まず、我々の夕張殿と島風殿のお二人は、最初から安全な彼方の地に匿われていた」

「そうね」

「追跡者が居ない事を確かめる為に外洋まで連れ出された我々は、幹事君を使ってお二人と話をした」

「ええ」

「そして人形が近づいた時に早霜殿がゴム弾で撃ち、倒れた人形を他の夕張殿が取り囲んだ」

「倒れた後がずっと見えると人形だつてバレちゃうからね」

「囲まれた夕張殿のどなたかが用意していた閃光弾を2発撃ち、轟沈したように見せかけた」

「割とそれっぽかったでしょ？」

「そしてあらかじめビットさん達から外していたIDプレートをレイさんを経由して早霜殿に渡した」

「時間をかけないとプレートが冷たい事を不審に思われるかもしれないからね」

「そして早霜殿と高波殿は、鎮守府内で夕張殿に恨みを抱く艦娘が居ないか、ずっと探していた・・・」

高波が頷いた。

「です」

あきつ丸ががくりと頭を垂れた。

「……物の見事に騙されたのであります」

第16話

あきつ丸の様子を伺った後、高波がそつと口を開いた。

「えっと、もし早霜ちゃんが撃たなかったらどうするつもりだったのです？」

「その時は私が貴方達から十分離れた所まで人形に近づいて行って受け取るふりをしたわよ」

「・・・」

「あなた達が近づこうとしたら、さりげなく他の子達が邪魔するように打ち合わせてあったしね」

「・・・」

「でも私は、早霜ちゃんは微妙に本音が混じってる気がしたんだけど、考えすぎかしら？」

二人に見られた早霜は軽く俯くと、

「あの場で言った事は誇張交じりでしたが、いずれ敵となる敵の損傷を直すというのは・・・」

高波も頷いた。

「もう敵対関係にならないって約束してくれた深海棲艦なら、直しても、良い、かも・・・」

あきつ丸も頷いた。

「たとえ1隻といえど、侮れないのであります・・・」

レイは言った。

「ビットちゃんから事情を聞いたけど、言葉を交わせた相手も居たようなの」

「それで、ありましたか・・・」

「その子達は異口同音に、直してくれてありがとう、これからは戦わず静かに暮らすって言ったそうよ」

「・・・」

「直してくれた礼について、大きな宝石や燃料、鋼材をくれた子も居たそうよ」

「妖精殿の手紙にも、連れてきた仲間には夕張殿を名医だと紹介していた、そう書いてあったのであります」

「あまりにも感謝されるから止める方が暴動が起きそうで、止められなくなっちゃったそうよ」

「はい。それも聞いていたのであります」

「ビットちゃんが居なくなった事が伝われば深海棲艦達は引き上げるでしょうけどね」

「夕張殿が鎮守府を後にした翌日以降、波止場に深海棲艦の姿は見かけないそうですあります」

「・・・で、結局恨んでる子は見つかったのかしら？」

「いえ、それが・・・結局、どなたも」

「そう・・・なら、二人は居なくなっただけど、後は事情を司令官以外に説明すれば丸く収まるって事かしら？」

早霜は頷いた。

「はい。夕張さん達は哨戒中に轟沈した、対外的にはそういう事になるでしょうしね」

「まあ・・・多くの例に紛れるありふれたパターンよね」

「・・・そうですね」

早霜は悲しげに俯いた。

夕雲も、巻雲も、長波も。

そういう「ありふれた轟沈」で沈んで行った。

だが自分にとっては、夕雲は失いたくない、優しい姉だった。

巻雲達ともせめて一目再開を喜びたかった。

レイは続けた。

「戦争が続く限り、どこかで誰かが轟沈する」

「・・・」

「それは当然なんだけど、その当然を、いつかどこかで終わらせられないものかしらね・・・」

高波が呟いた。

「戦って、戦い続けたら、いつか、深海棲艦は、やっつけられるのかな・・・」

「・・・」

「本当は、もしかしたら、もっ・・・もしかしたら、夕張さんのやった事の方が・・・正しいのかもって・・・」

「止めて姉さん！」

早霜が叫んだので、高波はきゅつと口を閉じた。

「止めて・・・それでは夕雲姉さんは、巻雲姉さんは、長波姉さんは無駄死にではないですか・・・」

レイが答えた。

「実験でもね、最初から正解を見つけられる事なんてほとんど無いわ」
「・・・」

「そして、何かの拍子に今までの理屈じゃ説明がつかない現象が出てくる事がある」

「・・・」

「それを理屈に合わないと否定するより、確かめた方が正解に繋がることもある」

「・・・」

「もちろん、単なる時間の無駄遣いだったってことも多いわ。計器のノイズとかね」

「・・・」

「でも、それらは全て答えを見つける為に必要なプロセスで、無意味だと切り捨てる必要は無い」

「・・・」

「お姉さんを失う悲しみは、同じ艦種の居ない私には本当の意味では解らないけど・・・」

「・・・」

「必死に現状を良くしようとして戦った末の轟沈なのだから、全て意味のある事で、正しかった」

「・・・」

「それで良いんじゃないかしら」

「・・・夕雲・・・姉さん・・・」

早霜がついに嗚咽を始めたので、高波はそっと早霜の傍に寄り、背

中を撫でた。

あきつ丸はすつと背を伸ばすと、早霜に向き直った。

「早霜殿」

「うっ……な、なん、でしょうか……」

「作戦、お見事でありました。一時とはいえ恨んだ事をお詫びするの
であります」

「……」

「ただ、その気持ちだが、司令官に反省を促す事に貢献したのであれば、
少しは意味があつたのであります」

「……」

「願わくば司令官殿が、このような命令を再びかけないようになって
欲しいのであります」

「そう、ですね……もう、誰かと……こんな形で……別れたくはないで
すね……」

レイが言った。

「……そうだ。今回の件について、夕張会は一切聞いてなかつたことに
するからね」

高波が答えた。

「そうして頂けると、嬉しいかもです」

「あと、えっと、タイミングは任せるけど、五月雨さん達には確実に話
しておいてくれるかしら?」

「もちろんです」

あきつ丸が言った。

「私も、鎮守府内にある早霜殿に対する誤解を、きちんと解いていくお
手伝いをするのであります」

高波が頭を下げた。

「……はい。そうしてくださると助かるかも、です」

レイが言った。

「じゃあ質問がなければ、そろそろ終わりにしましょうか。3人とも
疲れたでしょ」

「はい。レイさん、助けて頂いて、ありがとうございます。あの、こ

の回線は取っておいでも良いですか？」

「ごめんなさい。夕張会の総意を得てないし、早霜さんに割り振った仮IDは今夜消滅しちゃうの」

「そうですか・・・では、無理にとは言えないです」

「ええ。それじゃ、おやすみなさい」

「ありがとうございます。さよなら、です」

通信が途切れる音がしたので、高波はそっとアプリを操作して終了した。

第17話

「はー」

静かになったスマホを見つつ、3人が同時に溜息をついたその時。ガラリ！

「うー、早霜ちゃあん、高波ちゃあん、それならそうと言ってよう」
戸口を見た高波が真っ青になった。

大勢の艦娘達が様々な表情でこちらを見ていたからである。

「へうっ！さ、五月雨さん！浜風さん！あ、あ、ほ、他の皆さんも……き、聞いてたの、ですっ?!」

ボロ泣き状態の五月雨が鼻を噉りながら答えた。

「全部聞いてたよ……すっ……すっごい入りづらかったから入れなかったけどー」

やれやれと言った表情で両手を腰に当てつつ、金剛が継いだ。

「早霜にしては乱暴な対応だと思ってたのデース。やっぱりネー」

天龍が肩をすくめた。

「仮説大正解だったな、金剛さんよ」

「YES」

高波がカタカタと震えながら金剛に向かって言った。

「あ、あの、あのあの、き、霧島秘書艦さんには、司令官には、その」
「私が何でしょうか？」

そう言いながら霧島が部屋をのぞいたので、高波はぱたりと布団の上に乗っ伏した。

ああ、全てが露呈してしまった。レイさんの心遣いも全て無駄に……

金剛、霧島、天龍、五月雨、そして浜風が静かに部屋へと入ってきた。

「ちよっとお邪魔しますネー、皆は司令官が来ない事をWatchしててくださいー」

「はい」

金剛の呼びかけに、廊下から部屋を覗いていた残りの面々が頷く

と、四方へと走り去った。

金剛はちよこんと早霜の前に座ると、にこやかに話し始めた。

「さて、早霜サーン」

早霜は俯き加減に深呼吸を1つした後、はつきりと答えた。

「…はい。覚悟は出来ています。全ては私の偽装工作です。処罰は私一人にお願いします」

霧島が口を開きかけたが、金剛はちらりと霧島を見てそれを制しつつ続けた。

「処罰しに来た訳ではありませんネー、幾つか教えてくだサーイ」

「…」

「まず、先程までお話ししてた相手は、どなたデスカー？」

「レイさんは夕張会代表として私達に協力してくれた、大本営所属の夕張さんです」

「Oh…大本営所属ネー、この話、大本営のメンバーにも伝わってますカー？」

「うちの夕張さん達に危害が及ぶ可能性があるので、夕張会は何も聞いていなかった事にする、と」

「GOOD。懸念事項が1つ消えましたネー」

金剛が次の質問をする前に、浜風が口を尖らせた。

「それにしても他人行儀じゃないですか。私達はそんなに信用出来ませんか？」

早霜は浜風を見返すと、静かに首を振った。

「五月雨さんにしろ、浜風さんにしろ、高いLvを持つ主力級の方々です」

「…」

「お二人がこの工作を本当に知らなければ、誰かから疑われても処罰の心配はありません」

「…」

「夕張さん達が抜けた穴は大きい。この上お二人のどちらかでも失えば鎮守府は大変な事になります」

「…」

「ならばまだ、Lvの低い私だけが責めを負って解体されるほうが全体への影響は少ない」

「・・・」

「そう考えたのです」

高波が呟いた。

「早霜ちゃんの考えは解ってたし、私も一緒に解体されればそこで事を納められるかも、って・・・」

天龍が顔をしかめつつ呟いた。

「おめーら考えすぎだ・・・とも・・・言えねえか。今回ばかりはなあ・・・」
霧島が溜息をついた。

「今度の件は本当に皆さんを萎縮させてしまいましたね。司令にも困ったものです・・・」

金剛が続けた。

「テートクも悪い人じゃないんだけど、今回はあまりにも冷静さを欠いていましたネー」

霧島が苦笑した。

「妖精さん達もその辺を解ってるからこそ、あの晩何度命じられても、のらくらと拒否されたのでしょうね・・・」

五月雨が頷いた。

「私も今まで何度もクビだつて怒鳴られてるけど、いつもなら1時間もすれば元通りだったし・・・」

あきつ丸が目を瞑りながら続けた。

「普段とは異なる怒り方に身の危険を感じたからこそ、お二人は覚悟を決めたのでありましような・・・」

天龍が頷いた。

「まあ、あの晩ああして逃げ出さなきや翌日には解体されてた。それは間違いねえだろうな」

浜風が腕を組んだ。

「この後、どうしたら良いかと言われれば・・・やはり早霜さんのプランが一番でしょうね」

金剛は頷いた。

「YES。今は轟沈したと聞いてテートクは落ち着いてますが、本当の事を知れば、ネ」

天龍は肩をすくめた。

「あいつらは大本営にバラすとかしねえと思うけどよ、提督は結局口封じしたがるだろうな」

五月雨は小さく頷いた。

「提督は凶太いように振舞ってますけど、実際は物凄く繊細で心配性ですから・・・」

浜風も頷いた。

「我々皆で連携し、二人は轟沈したと言い切る他は無いかと思えます」霧島が続けた。

「ええ。ですから早霜さん達だけで抱える必要はありません。鎮守府の所属艦娘皆で秘密を共有しましょう」

早霜が霧島を見上げると、霧島が微笑んで頷いた。

早霜はぎゅつと唇を噛むと、深々と頭を下げた。

「大変・・・申し訳ありませんでした・・・ご厚意に、感謝します」金剛がにこりと頷くと、インカムをつまんだ。

「Hey皆サーン！話は解りましたカー？」

「はい」

「どういう事かイマイチ解んない、何か思う事があるって人は私か霧島に相談してくださいネー！」

「はい」

「当然だけど、司令官や外部に言うのはノー、なんだからね！」

「はい！」

「皆さんVery Goodデース！」

霧島は軽く頷き、部屋を後にしながらインカムをつまんだ。

「では皆さん、今回の件に関する機密ポイントをおさらいしますので、間違えないように・・・」

こうして早霜のプランは110鎮守府の艦娘達全員の承認を得た・・・筈だった。

しかしそれはその日の深夜、目を回る頃に起きたのである。

第18話

深夜の工廠に、小さな足音がした。

その足どりは確かで、暗がり迷路を迷う事無く、まっすぐ兵装庫へと進んでいった。

「・・・こんな夜更けに単独出撃かい？電気もつけねえでどうしたよ？」妖精に声をかけられた人影は、兵装庫の棚に置かれた主砲へと伸ばしていた手をびくりと止めた。

とはいえ、普通の子なら絶叫してしまう位、妖精は音もなく背後に立っていたのであるが。

「そもそもどこ行こうってんだ？司令官の命令にしちや、俺達は聞いてねえけどな」

「あ・・・貴方達には関係ありません」

「そりやねえな。ここにある物は全て俺達が管理してるんだぜ？」

人影は答えぬまま、荒々しく12.7cm連装砲を掴むと艤装にガチリと装着した。

妖精は続けた。

「早霜がやらないならアタシが殺るってか？不知火ちゃんよ」

不知火は再びびくりとしたが、ぷいと視線を逸らすように早足で魚雷の棚へ向かって歩いて行った。

その背後を妖精がついていく。

「経緯はすっかり説明されたし、お悩み相談も受けるって金剛が言っていたじゃねえか」

不知火が黙って4連装酸素魚雷の発射装置に手を伸ばした時、妖精は一段声を低くして告げた。

「それに、命令も無く武器持って海に出たら反逆罪だぜ？」

不知火は発射装置の手前で手を止めると、目を瞑りながら答えた。

「・・・あの二人を討った後であれば、不知火はどうなろうと構いません」「なぜそこまで恨む？」

「陽炎の弔い合戦です」

「陽炎ちゃんは遙か遠くの西方海域で沈んだんだぜ？」

「どこで沈もうと、深海棲艦に沈められたのです」

「その理屈ならそもそも陽炎を向かわせた司令官だって仇つて事になるぜ？」

「・・・そつ・・・それは」

「それは？」

「・・・少し・・・そうだと・・・思ってます」

「おいおい」

「陽炎が・・・大破したあの時に撤退出来ていれば・・・」

「・・・」

「ですが戦艦が全て無傷だった。やらねばならない刻限も迫っていた。最後のチャンスだった」

「・・・」

「だから仕方なかった。そう思う事に決めました。だから司令の差配について今更蒸し返すつもりはありません」

「・・・」

不知火はギツと妖精達を睨み、歯を剥き出しにして怒鳴った。

「でも夕張は！島風は！そんな必要はどこにもありませんでした！」

妖精は不知火の殺気漂う表情を黙って腕を組んで見返していた。

不知火は怒りで震えながら続けた。

「あの時、追跡隊が編成された時に長期遠征中だった事が返す返すも腹立たしい」

「・・・」

「早霜さんだつて夕雲さんを失っているのに、何故徹底的に追い詰めて討たなかったのか」

「・・・」

「不知火には全く理解出来ませんが、不知火は不知火として筋を通します」

「夕張さんが陽炎ちゃんを直接殺したつてんならまだ解るが、なんか筋が違うんじゃないか？」

「そつ、そんなことはありません！すつ筋違いなどでは！決して！」

その時。もう一人人影が現れた。

「・・・不知火さん」

「きつ！霧島秘書艦・・・なぜ・・・」

「そういう風にお考えになる人が出ないか、それが早霜さんと高波さんの心配だったと伝えた筈ですよ」

「・・・」

「ですからわざと二人はそういう気持ちで撃つたと喧伝した」

「・・・」

「その行為に同調する人が来たら説得しよう、そう思つての事です」

「不知火には解りません。余計な事をして姉妹が沈む遠因を作つたのに、何故許すのです?」

「では、過去の出撃で貴方が撃ち損じた敵艦が居た事をもって、僚艦が沈んだのは貴方の責任だと誰か言いましたか?」

「っ！それとこれとは」

「どう違いますか?遠因を問うなら全く同じです」

「・・・」

「更に言えば、出撃そのものが深海棲艦達を刺激している事は事実です。我々が討伐しているのですから」

「・・・」

「ならば出撃した事そのものが遠因と言えますから、突き詰めれば自業自得の一言に集約してしまふのです」

「・・・」

「轟沈は自業自得。そんな事を言われて納得出来ますか?」

「・・・出来ません」

「不知火さん。兵装を棚に戻し、寮で睡眠を取ってください。浜風さんが気づいたら心配しますよ」

「!」

「司令は連帯責任を問うお方ではありませんが、貴方が強行すれば浜風さんは自分を責めるでしょう」

「・・・くっ・・・」

「1度眠り、起きたら私と話しましょう。時間は明日の午前中に必ず作ります」

「・・・」

「とにかく、今夜は部屋に戻ってください。私は貴方を失いたくありません」

「・・・そんな・・・そんな簡単に・・・姉の轟沈を・・・割り切れるものではありません」

霧島が溜息をついた時。

「不知火！何をしています！」

「はっ・・・浜風・・・」

「あれほど、あれほど夕張さんが直した方達がどうなったか説明したではないですか！」

「・・・」

浜風は不知火と霧島達の間割って入り、息を切らせたまま霧島の方に向き直り、がばりと土下座した。

「霧島秘書艦！申し訳ありません！かつ、必ず、必ず浜風が説得します。どうか今だけ見逃してください！何卒！」

「・・・浜風・・・あなた・・・」

不知火はぼかんとしてその様子を見ていたが、次第に目が揺れ始めた。

霧島はカリカリと頭を搔いた。

「・・・浜風さん」

「はいっ！」

「昨日の帰港時、司令とのやり取りを覚えてますか？最上級の機密と言った部分です」

「全て覚えてます！」

「では特別に許可しますので、その事を不知火さんには打ち明けて構いません」

「必ず伝え、解らせます！」

不知火は眉を顰めた。烈火のごとく怒っていた司令が帰港時に浜風達に何を言ったのだろう・・・

「では、不知火さんと一緒に自室へ戻ってください。兵装は全て置いていってくださいね」

浜風はキツと不知火を睨みつけた。

慌てて視線を逸らした不知火からひったくるように主砲を外すと、
兵装庫の棚にドスンと置いた。

「さあ、帰りますよ」

「・・・」

「帰るんです！これから朝までかけてきっちり理解してもらいます
！」

「えっ・・・あ・・・じ、自分で歩けます・・・ちよっ・・・苦し・・・」

「問答無用！」

霧島達が後ずさりする程の迫力で浜風は不知火の襟首を掴み、なか
ば引きずるように寮へと戻っていったのである。

第19話

浜風達を呆然と見送っていた霧島の横に妖精が並んだ。

「あの様子なら心配ねえんじやねえか？」

霧島は肩をすくめた。

「まあ・・そうでしょうね」

「それにそもそも、このまま持つてつても役立たずだけだな」

「・・と言いますと？」

「ここに置く時は全部発射装置をバラしてあるんだよ。そのまま持つてつて弾込めても撃てねえんだ」

「・なるほど。そういうえば装備する時、皆さんが必ず作業されますね」「うちだけのローカルルールだがな。ま、庫内で万が一にも暴発しない為の独自対策って奴だ」

霧島はそつと、戸口の方を見て言った。

「だそうですよ、早霜さん、高波さん」

「!!」

そつと陰から出てきた二人を見て、妖精達はニツと笑った。

「ここは俺達のフィールドだ。心配しねえでゆっくりねんねしな！」

高波がそつと頭を下げた。

「ありがとうございます。早霜も私も、そろそろ、限界かも・・です」

霧島がにこつと笑った。

「二人とも、良く出来ました。さ、後は私達に任せて、ゆっくり眠って良いんですよ」

妖精が霧島の方を向いて言った。

「霧島ちゃんも朝から働いてしんどいだろう？良いから一緒に帰んな。俺達は夜勤組だし応援は頼んであるんだよ」

「・・えっ?・・そうなのですか?」

妖精がひゅいつと口笛を吹くと、

「夜戦なら任せといてつての!」

そう言いながら、フル装備した川内が空を舞って霧島の隣にスタリ

と着地した。

妖精はニヤリと笑った。

「夜の川内ちゃんほど頼りになるやつはいねえからなあ」

「でっしょー！皆もつと夜戦すべきだよねー！」

霧島は頷いた。妖精達は誰に何を言えば良いか良く解っている。

先程も不知火は妖精達の言葉に相当動揺していた。だからこそ説得する隙が出来たのだ。

「ではすみませんが、川内さん、妖精さん、ここはお任せしますね」

「任せといて！」

「おうよ、おやすみっ！」

霧島は高波達に振り向いた。

「では3人で、寮に帰りましょうか」

高波と早霜はほっとした顔で微笑み返した。

戦艦寮の入り口で、早霜と高波は霧島に頭を下げた。

「重ね重ね、お手数をおかけいたしました」

「助けて頂いて、ありがとうございます、です」

霧島は小さく首を振った。

「いいえ。今度の件、早霜さんの機転でここに居る皆が救われました」

早霜は黙って霧島を見返したが、その目は揺れていた。

「鎮守府の皆を代表して御礼申し上げます。ありがとうございます、ございました」

霧島がきちんと頭を下げたので、早霜達もつられて頭を下げた。

「では、明日も任務がありますし、そろそろ休みましょう」

「はい。おやすみなさい、です」

「・・・」

霧島と分かれ、駆逐艦寮に歩く途中、早霜がふと立ち止まった。

高波が早霜に近づくと、早霜の頬を1筋の涙が伝っていた。

高波はその小さく震える背中を優しくさすりながら言った。

「早霜ちゃん、認めてもらえて良かったですね」

「・・・わっ、私・・・」

「霧島さんは、頑張った事は、ちゃんと見てくれているかも」

「姉さん・・・だって・・・見てくれた」

「・・・」

「だから・・・だから・・・」

「無理に言葉にしなくても、解ってるから大丈夫・・・かも？」

「こつ・・・こんな時くらい・・・疑問系は止めてください・・・」

「口癖かもー」

「・・・うふふっ」

「やっぱり、早霜ちゃんには笑顔が似合うのです」

「は、はい」

「帰りましょ」

「はい・・・姉さん」

二人はどちらともなく手を繋ぐと、ゆっくりとした足取りで部屋へと帰って行った。

翌朝。

背後から氷のような目をした浜風に睨まれつつ、不知火が霧島と金剛の部屋を訪ねてきた。

「金剛さん、霧島秘書艦。しっ、不知火の落ち度を認めます。申し訳ありませんでした」

不知火は震えながらそう言うと、深々と頭を下げたのである。

テーブルを挟んで座っていた霧島と金剛はぽかんとして顔を見合わせていたのだが、

「・・・続きはどうしました？」

という浜風の低い低い声に不知火はびくりと肩を震わせると、続けた。

「ごっつ、ごっごご迷惑をおかけいたしました。ご指示に従いますので、どうか、あの、許して頂けないでしょうか・・・」

霧島が苦笑しながら答えた。

「大丈夫ですよ。解ってくだされば良いので・・・ええと、もしかして徹夜ですか？」

「・・・」

不知火は何も言わなかったが、僅かに目だけ背後の浜風の方を示したので、霧島は理解した。

「解りました。勿論許しますし・・・お二人とも1900時の遠征開始まで何も無いので、ゆっくり眠ってください」

不知火は地獄に仏を見たような顔で霧島を見返すと、何度も頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。ありがとうございます。では、その、失礼します。お邪魔致しました」

・・・パタン。

霧島は不知火があんなにも真っ青になって怯えているのを見た事がなかった。

確かに、普段の浜風は一步引いているような、真面目だが大人しい子である。

そういう子が怒った時のパワーは時に想像を絶する事がある。

とはいえ、敵戦艦さえひと睨みで萎縮させるほど腹が据わり、攻撃能力の高い不知火である。

昨晩も正直自分は押されていた。

浜風は一体何をどうやったのだろう・・・ちよつと知りたい。だが、その考えは

「やつとミツシヨンがFinishした気がしマース。紅茶が飲みたいネー」

と、金剛が背伸びしながら言ったので、そこで打ち切った。

「今日の昼過ぎには榛名姉様と比叡姉様も揃いますから、久しぶりにお茶会を開きませんか？」

「YES！それなら軽食を用意しておきまショー！」

「ええ、厨房をお借り出来るか間宮さんに確認してきますね」

霧島は廊下を歩きながらホツと息をついた。

悲しい事もあるが、今の生活はとても大事なものであり、失いたくない記憶だ。

時は戻らないし、鎮守府としては二人も失ってしまったが、最悪の展開は避けられた気がする。

私も、秘書艦として、戦艦として、もっともっと頑張っていかなければなりませんね。

第20話

後日。

閉店時間となり、工場を閉めたビットはスマホの「幹事君」経由でレイから説明を聞いていた。

「という訳で、鎮守府の方がトラブルになってない事もチェックしていたから。もう心配しなくて良いわよ」

「そうですか。レイさん、色々ありがとうございます」

「そうねえ、色々したわねえ」

「ふえっ？あ、そ、そうです…ね…そうなんだけどなんか嫌な予感…」「じゃあ引き続き、スマホには幹事君をインストールしといて頂戴ね？それで連絡するから」

「えっ？ま、まだ何かあるんですか？」

「何言ってるの。これからじゃない」

「へっ？」

「ほら、極秘の修理とか、881研が開発した兵装の耐久チェックとか色々頼みたい事あるじゃない？」

「うげっ…どれもメンドクサイ奴…」

「正直、腕利きのビットちゃんフリーで居てくれると助かるのよ。渡りに船とはこの事よね」

「あ…え…ええと…」

「なにかしら？」

「頼み事への拒否権は…」

「そこ、どこのセーフハウスだったかしら？」

「夕張会…です」

「そうよねえ。あと、お店開けるまでに色々お金かかったじゃない？」

「ま、まあクリーニングとか設備のオーバーホールとか…いくつか…」

「そんなのたかだか半月店を開けたくらいで元取れたかしら？」

「無理だと思います」

「短期間滞在する為だけにそんなに投資しないわよね」

ビットはその瞬間、レイの意図に気づいてぐくりと唾を飲んだ。

あの日。

五月雨達との通信を終え、切なくほろ苦い気持ちでいた私達の元に
数人の夕張が現れた。

「ビットさん、体動かしてれば気も紛れますって！」

「ここは元々自動車修理工場だったんです。設備はそのまま残ってる
んですよ」

「へー」

「あと、この町には修理屋さんが居ないので、手伝ってくれると助か
るって町長さんが！」

「そっ、か・・・」

ビットは寂しげに笑った。

確かに何の関係も無い仕事でもしてたほうが気は紛れるかもしれ
ない。

「じゃあ、やってみようかなあ」

「それならお掃除とか機械類の調整とか手配しちやいますね！」

「あ、うん、お願い出来る？」

「任せてください！」

そう言って夕張達は次々と業者を手配し、あっという間に店を綺麗
に仕上げた。いった。

開店を告げるWebチラシまで手配していた事にも驚いたが、開店
当日から地味に客が来た。

本当に修理屋のニーズがあったのねと、少しずつ増えていく依頼に
手ごたえも感じていた。

ビットはジト目になった。

「ってことはレイさん・・・既にあの時点で布石を打ってたって訳ね。
いやもつと前からか。」

ビットは溜息をつき、恐る恐る訊ねた。

「あの、続けるならお給料とかは・・・」

「依頼する時はしばらく生活出来る程度のギャラは支払うわよ？」

「それなら・・・依頼が無い時の生計立てないと・・・工場の売上だけで間
に合うかなあ」

「そんなに依頼と依頼の間が空くと思うの？」

「そんなに頼むつもりなんですか？まさかレイさん：自分が面倒な仕事を押し付けようって」

「あ、中将さん・・・」

「止めて止めて止めてごめんなさいごめんなさい！」

「うそよ？」

「・・・はあー」

「まあ、毎月何がしかの依頼は出すと思うけど、それ以外の時間をどうするかは任せるわ」

「基本的には工場開けとくけど、休日とかにも設備は適当に使って良いかしら？」

「好きにして良いわよ。ああ、そこ、今度から夕張会の外部倉庫も兼ねる事にするから」

「へ？」

「今まで大本営の倉庫で預かった物とか、会員が置き場所に困った色々なブツを送るからよろしくね？」

「・・・よ、よろしく・・・って？」

「もちろん、それらの管理よ？それで家賃チャラにしてあげるから」

「えー・・・なんか取ってつけたような・・・」

「雷さん」

「ひいー！やりますやりますありがとうございます！」

「じゃ、二人でよろしくね。幹事君の更新もサボっちゃだめよ？自動更新にしておくこと！」

「はーい・・・」

「あと、たまには会員の子達と遊びに行くからね！」

「・・・はーあ、やっぱりレイさんにはかなわないなあ」

「なにが？」

「交渉事でレイさんに勝てる夕張は居ないって話です」

「今更何言ってるのよ：だからこそ大本営に引き抜かれて何十年も居続けてるんじゃない」

「まあそうですけど・・・もう会長って名乗って良いんじゃないですか

？」

「バカねえ。かつこいいフィクサーってのは表に出ないものなのよ？」

「もう充分会員の子達は知ってると思いますけど？」

「違うわよ。夕張会の外に対してよ」

「外？」

「私の実質決定権を持つてると気づかれたら、夕張会操りたい奴が私に圧力かけるに決まってるでしょ」

「あー・・・大本営ですもんねえ」

「そんなのマツピラよ。まあ・・・ゴタゴタ言ってきたても負けないけどね」

「ですよー」

「というわけで、その管理も任せたからね」

「はーい」

「あ、そうだ。後で山甲信用金庫の担当者が説明と手続きの為に行くから応対してね」

「山甲信用金庫？先日口座作りしましたが、他にも何か？」

「それは貴方達の工場の為でしょ」

「ええ」

「今回の訪ねてもらうのは夕張会とのつながりに関してよ」

「はあ」

「貴方達に雷会とかから直接支払わせる訳にいかないでしょ。夕張会を通した後に処理してもらうのよ」

「へー」

「・・・イマイチ意味解ってないでしょ？」

「全然」

「まあ指示に従って。後、お金があるからって工具に投資し過ぎない事。しっかりチェックするからね？」

「うっ・・・だ、だだ、大丈夫ですよー？」

「・・・そうだ、島風ちゃんに念押ししておこうかしら。ビットちゃんは小遣い制で良いって」

「良いです良いです余計な事しないでください」

「うん、やっぱり言っとくわ」

「げっ」

ビットは妖精達から貰ったスーツケースの事を思い出した。

逃走初期こそビットが持って使っていたが、60万コインもする塗装キットを衝動買いした時、

「ぱりっちー無駄遣いしたらダメ！私が持つてるからねー！」

アイウイがそう言っただけかへと隠してしまったのである。

とはいえ、そのキットがあつた事でオープン当時の板金対応が出来たので胸を張ったのだが、

「そういうの、怪我の功名って言うんでしょ？まあ財布の管理は任せてよ、ぱりっちー！」

と、アイウイは簿記のテキストを手に笑顔で言い切った。

「もうちょっと工具に投資してもバチは当たらないわよねえ・・・ねえ、そう思わない？」

ビットはそう、妖精達に同意を求めたが、

「あー・・・ぜ、銭の管理に関しては師匠よか、なあ・・・」

「ま、まあアイウイちゃんも仕事がねえとヒマだしよ、分担する方が良いんじゃないか師匠？なっ？」

と、目を逸らされた。

妖精達は良く見ているのである。

こうしてビットとアイウイの二人は、この港町で夕島整備工場の商売を今も続けている。

そして。

司令官はあの日以来、動揺する事態があつてもぐつと堪えてから言うようになったという。

「悪いクセを抑えられるようになりましたね、司令」

「もう・・・大切な部下をあんな形で失いたくないからなあ」

「で、今日の最後の建造レシピも駆逐艦と軽巡ですか？」

「諦めが悪いと言われるのは解ってるが・・・」

「そんな事無いですよ、司令」

そう。

あの日以来、司令官は夕張と島風を再び迎えるべく、ずっと建造レシピを回している。

だが今日に至るまで、建造どころかドロップでさえも、不思議と島風も夕張も来なかった。

指令書に押印しつつ溜息をつく司令官の肩に、霧島はそつと手を置いた。

「きつといつか、またあの子達が来てくれますよ、司令」

「そうだと良いんだけどな・・・」

悲しそうな顔の司令官を見ると、つい二人が無事で居る事を伝えたくなる。

だがそれは全てをひっくり返す事であり、その先が良いとは思えない。

皆の総意で出来上がった現在を壊す事は無い。

「じゃ、このレシピで頼むよ、霧島」

「かしこまりました司令、それでは工廠に指示して来ます」

「うん」

ペンを取った司令官を見て頷いた霧島は、静かに司令室を出た。

分厚い雲間から見える遠くの空は、黄金色に染まっていた。

「この場合、明日は良い天気なのでしょうか・・・やっぱり雨なのでしょうか」

霧島は少しだけ首を傾げた後、工廠へと歩き出したのである。

6章：「Silver bullet」編 第1話

2月4日朝、第9642鎮守府。

その朝、窓の外は相変わらず鉛色の空と、一面の雪景色だった。

カタカタと風に舞う窓は頼りなく、小さなダルマストーブの熱と中に居る人達の体温が辛うじて部屋を温めていた。

「司令官、遠征任務…完了しました。報告書です…ケホツケホツ」
司令官は別の書類を睨み、指示を書き込みながら言った。

「お疲れさんな。ところでどうした、風邪か？」

「何日か前から少し喉が痛くて…うがいはしてるんだけど…」

「そうか。じゃあ遠征旗艦を交代して、一度きっちり寝なさい。そうだな…私から神通に頼んでおく」

「ありがとうございます。じゃあ失礼…します」

ドアの閉まる音がした時、司令官はハッと顔を上げた。

多摩が語尾に「にゃ」を付けてないだど!？」

その時、廊下で悲鳴が上がった。

司令官が大急ぎでドアを開けると、那珂に抱きかかえられた多摩がぐったりと倒れていた。

「多摩!どうした!多摩!」

那珂が不安そうに司令官を見た。

「きゅ、急に倒れちゃって…どうしよう司令官…凄い熱だよ多摩ちゃん…」

司令官はテキパキと指示を発した。

「よし。那珂!工廠に先に行って知らせてこい!」

「はい!」

「比叡!そこの担架を持ってきてくれ!二人で運ぶぞ!」

「解りました!」

艦娘は年を取らない。

破損は工廠で修理出来るし、バケツを使えば高速化を図ることも出

来る。

疲労は間宮謹製のアイスを食べれば瞬時に取り去る事が出来る。しかし。

艦娘だって不死というわけではないし、病気もする。

狭い範囲で大勢の艦娘が生活する鎮守府という空間は疫病が流行りやすい。

特に空気感染で容易に流行る風邪は引きやすく、その割には集中力や体力の低下といった弊害が多い。

大流行すると鎮守府全体のパフォーマンスが低下してしまう。

司令官の重要な仕事の1つに、重篤な症状を示した艦娘を隔離するという任務があるのはその為である。

その判断が出来るのは工廠に居る妖精だが、多摩を診た医療妖精は首を傾げた。

「風邪にしては意識を失うなんて重篤過ぎるし、インフルエンザの検査は陰性だし・・・うーん」

ベッドに横になり、苦しそうに浅い息をする多摩を見つつ、司令官は首を振った。

「数日前から喉が痛かったそうだが今朝まで症状は見られなかった：隔離した方が良いか？」

「そうだなあ。念の為、隔離した方が良いかもしれないねえ」

「・・・同室の子達は？」

「症状が出ていればね。多摩ちゃんには解熱剤も点滴してるし、まあ、インフルでも1週間くらいだしね」

「風邪の予防を今一度徹底させよう」

「そうだね。寒いとどうしても手洗いやうがいや端折りたくなるからね」

2月8日朝、大本営通信室。

通信士は、第9642鎮守府からの緊急警報を受信した。

「こちら第9642鎮守府の司令官です。大至急応援を：敵の侵攻を受けてます」

「緊急コード確認しました。敵の数などは解りますか？」

「いつもなら・・・いつもなら索敵出来るのですが、今は全員が床に伏せてて・・・」

「周辺の鎮守府に応援を手配しました。到着まで頑張ってください。あと、床に伏せてるとはどういう事ですか？」

「風邪のような症状を発症してるのですが・・・起き上がる事さえ困難なのです」

「それ、本当に風邪ですか？」

「解りません。医療妖精は症例が・・・うわつくそおおつ！」

「・・・どうしました司令官？」

「・・・」

「第9642鎮守府、応答願います」

「・・・」

「司令官殿？司令官殿！応答を・・・」

2月11日午後。

「これは・・・ちよつと気になるね」

ヴェールヌイ相談役は第9642鎮守府が壊滅した事を報告するリポートを読んでいた。

最寄の3箇所の鎮守府から支援艦隊が到着した時には既に鎮守府は陥落し、炎に包まれていた。

付近を哨戒したが、敵は既に居なくなっていたという。

鎮火後に支援艦隊が鎮守府に立ち入ったが、司令官は殺され、艦娘は残らず轟沈し、妖精は消えていたという。

そこまでは珍しくも無いのだが、ヴェールヌイ相談役は最後の司令官と通信士のやりとりに注目した。

「・・・艦娘達が全員、風邪を引いた・・・ね・・・」

ヴェールヌイ相談役は頬杖をついた。

我々だって風邪を引けば辛いし、通常の集中力など出せるものではない。

だが、自分達を殺そうとしている敵が目前に迫れば生き残りを賭け

て戦おうとする筈だ。

いわゆる火事場の馬鹿力というやつである。

それこそインフルエンザで狙いをつけるのが難しかろうとも撃ちまくる事位出来る筈だ。

なのに誰一人起き上がれもせず全滅したとなれば、通信士の言う通り、本当に風邪だったのだろうか？

確かに今は真冬で、第9642鎮守府は北海道の北に位置する鎮守府だったが・・

「ふむ・・」

ヴェールヌイ相談役は席を立った。

念の為、他に症例が無いか、雷に頼んで全ての鎮守府に調べてもらおう。

コン、コン、コン。

ヴェールヌイ相談役は雷が仕事に使う部屋のドアをノックした。

「開いてるわよー」

いつもの声、雷の声。

ヴェールヌイ相談役はノブに手をかけたまま軽く目を瞑った。

雷の声を聞くと落ち着く。決して失いたくない、大切な妹。

その為に私は、するべき仕事をしよう。

第2話

ガチャ。

開いたドアを見た雷は、すぐに書類を置いた。

「・・・あ、ちよつと外すわね」

だがヴェールヌイ相談役は軽く手を上げて部屋に入ってきた。

「いや、いいさ。雷、至急頼みたい事があるんだ」

「ここで話して良い事なの？」

「うん。今日貰ったりポートの件だよ」

「それなら良いわね。えつと、主人も居た方が良いかしら？」

主人とは大将の事である。

「いや、今はまだ良い。同じ症例が無いか、他の鎮守府にも確認して欲しいんだ」

「・・・えつ」

ヴェールヌイ相談役の言葉を聞いた途端、雷とスタッフの表情がこわばった。

「ん？なにかな？」

「そつ・・・そうよね・・・伝染・・・するかも・・・しれないものね・・・」

「そもそも第9642鎮守府だって、自然発生的に感染したとは思えないし、経路があるはずだ」

「う、うん、解った・・・あ、えつと、指示文書作ってくれるかしら？」

「は、はい、かしこまりました・・・」

ヴェールヌイ相談役は一気にテンションの下がった雷達を見てしまったと思いい、ドアの取っ手に手をかけた。

「あ、じゃあ、邪魔すると思いから、私は戻る」

「え、ええ、結果が解ったら伝えるわね」

ドアを閉めたヴェールヌイ相談役は溜息をついた。

そうか。気づいてなかったのか。悪い事をしてしまった。

まあ伝染力が強くないと解れば安心してくれるだろう。

強くなければ、だけど・・・

ヴェールヌイ相談役は廊下を歩きながら窓の外を見た。

これでは今年もチョコどころじゃなさそうだ。

2月18日

「・・・なんという事だ」

定例の上層部会にて、その報告を聞いた大将は唸った。

ヴェールヌイ相談役の予感は当たっていた。

第9642鎮守府の調査に当たった艦娘達は、程度に差異はあるが全員が発症していた。

さらに北海道の北東方面に配置されている鎮守府で複数の発症例が確認された。

中将は担当官の報告を聞きながら、どこか得体の知れない不気味さを感じていた。

「これまでに該当する35箇所の鎮守府に発症者の強制隔離命令を下しました。報告は以上です」

出席者の一人が手を上げた。

「他所でも同様の症例が見られる場合は重症化していなくても隔離してはどうだろうか?」

別の出席者が答えた。

「少し咳き込んだくらいで隔離しては戦力がガタガタになってしまうよ。現実問題として無理だ」

「インフルのように、検査キットか何かがあれば良いんだが・・・」

「それなら881研に検体を送って調べさせてはどうだろうか?」

大将も頷いた。

「発症者の所持品や機装等、サンプルを取り寄せて調べさせよ。扱いは慎重にな」

中将は頷き、後ろに控えた五十鈴に言った。

「感染者の所持品を検体として密封状態で881研に送るよう、2、3の対象鎮守府に指示してくれ」

「解ったわ。881研にも準備するよう伝えます」

五十鈴は部屋を出て、体がふるつと震えた事にびくりとした。

いや、これは廊下が寒いからよ。そうに違いないわ。ちよつと考え

すぎよ五十鈴。

・・・うがい、しておこう。

3月1日午後

「・・・多過ぎる」

ヴェールヌイ相談役はリポートを閉じると、ばさりと机の上に放り投げた。

今月に入って鎮守府の壊滅例が急増している。

「突出しているのは・・・北だね」

艦娘達が風邪のような症状を発し、床に伏せて出撃出来なくなった所を襲撃され、壊滅するパターン。

第9642鎮守府を始まりとし、次第に北海道を覆うように南下している。

いずれ本州にも来るだろう。

「このままでは、来月には北海道の制海権が取られてしまうね」

確かに今まで哨戒や出撃をさせていた鎮守府が大人しくなれば好機と見る深海棲艦は居るだろう。

だが、所属艦娘が全員重症化すると、ほぼ間髪を置かず侵攻されている。

あまりにもタイミングが良すぎる気がする。

「それにしても・・・881研が手こずるなんてね」

いつもならサンプルを届ければ1週間前後で答えを出す881研がまだ沈黙している。

「検体を受領してほぼ2週間・・・今朝の段階でも調査中、まだそれらしい物は見つからず、か」

ヴェールヌイ相談役は窓の外を見た。

鉛色の空から舞い降りる雪の粉は、地表をうつすらと白く染めていた。

3月1日夜

881研の棟にある中央監視室に警報が鳴り響いた。

うとうとしていた警備員が慌ててモニタをチェックすると、地下研究室からの非常警報だった。

突然の事で戸惑っていると、蛇又が駆け込んできた。

「どうした!」

「あつ、へつ、蛇又さん!地下の研究所から緊急警報が・・・」

「あの大型モニタとスピーカーを切り替えてくれ!」

「わ、解りました」

第3話

・ガツ・ガガツ・

切り替わったモニタに写ったのは青ざめた主任の顔で、その声はかすれていた。

「誰か・誰か居ないか？」

蛇又は警備員からマイクを受け取ると話しかけた。

「蛇又だ。何があった？」

「良かった・中将達に・報告を・頼みたい」

「何をだ？待ってる、そっちへ行く」

「来るな・来るんじゃない・」

「・どうしたんだ？」

「お、送られてきた・検体を・調べてたんだが・ゲフツゲフツ！」
蛇又は目を疑った。主任の口から赤い物が散ったからだ。

「救急車を呼ぶ。そこで待ってる」

「ダメだ・俺はミスったんだ・検体に触った針を・自分の手に・刺してしまった」

「なんだと・」

「そ、そんな事は良い・検体から、未知のウイルスが・ゲフゲフゲフツ！」

「未知のウイルス？」

「そうだ・デイ、DNA鑑定結果が出たが・これはデザインナースウイルスだ・」

「デザインナース・ウイルス・」

「お、俺が咳をしている以上ここは汚染されている・もうダメだ・グツ！ゲフツ！ゲフツ！」

「・」

「こ、ここを焼き払うから・地下を封鎖してくれ・全て燃えるまで誰も入らせないでくれ・頼む・」

「待て主任！防護服をつけた救助隊に病院まで運ばせる！警備員！中

中央防疫病院に連絡！減圧室を用意させろ！」

「は、はい！」

「どうせ俺は手遅れだ．．頼む．．大本営全体に広がれば．．軍が滅びる．．ここで食い止める．．」

「そ．．それは．．」

「へ、蛇又さん．．世話になった．．」

モニタの先で主任が震える手でライターに火をつけた。

「．．ゆ、床に暖房用の灯油を．．撒いた．．皆を．．早く．．頼む．．」

「わ．．解った．．」

「じゃあ．．な．．」

画面の中が火に包まれた後、モニタは地下研究室の火災を示す表示に切り替わり、火災報知機のベル音が鳴った。

「．．くっ！」

蛇又はマイクに向かい、館内に響き渡る火災報知機の音に負けない位の大声で叫んだ。

「館内全員に告ぐ！これは誤報ではない！繰り返す！誤報ではない！直ちに屋外へ退避せよ！」

蛇又が言い終わるかどうかのタイミングで中央監視室の電話が鳴った。

蛇又が取ると所長の声がした。

「輪泉だ。蛇又はいるか」

「私です」

「一体どこの火災だ」

「地下研究室です。主任が自ら火を放ちました。内部がウイルスに汚染された、全て焼き払うと言って」

「．．防火壁は閉じたか？」

「今、警備員に用意させてます。主任もそう仰ってました。よろしいのですね？」

「．．許可する。この時間なら残っている研究員は少ないだろう。仮眠者も含め確実に避難させろ」

「かしこまりました」

「主任は・・・2階級特進だな」

「・・・そうして、あげてください」

「解った。では急げ。避難場所でおおう」

「はい！」

電話を切ると、警備員が操作盤の前で叫んだ。

「へっ、蛇又さん！ほ、本当に、本当に地下の防火壁を閉じて良いんですか？」

「構わん！所長許可も出た！」

「で、でも、閉じたら主任さんに逃げ道は無い！焼け死んじまいますよ・・・」

「やれ！」

「し、しかし・・・」

蛇又はなおも躊躇う警備員をどかし、防火壁起動ボタンを押した。

「ビーツ！ビーツ！・・・ビーツ！ビーツ！・・・」

警告ブザーが鳴り響き、地下の防火壁の状態ランプが、作動中を示す黄色の点滅に変わった。

・・・ズン

火炎や爆発にも耐えられるコンクリートの防火壁が研究室の通路を封鎖する鈍い音は、警備室にも届いた。

炎はエリア内の酸素を猛烈な勢いで消費し、代わりに膨大な有毒ガスを出す。

主任は炎を逃れたとしても、数分で窒息するだろう。

「・・・許せ」

蛇又は苦渋の表情を浮かべながら呟くと、警備員に振り向いた。

「俺は棟内を回って残存者が居ない事を確認してくる。全警備員を招集し避難場所への誘導を！行け！」

「はっ、はい！」

「・・・」

火災報知機のベルが鳴り響き、悲鳴を上げて避難する人の中、その目は別の方を向いていた。

少し立ち止まっていたが、やがて人ごみを縫うように、ポケットに

手を入れながら見ている方へと歩き始めた。

「・・・デザインーズウイルス？」

「はい。主任は最後にそう言い残しました」

中将と大将、そして雷とヴェールヌイ相談役は、会議室で蛇又達から報告を受けていた。

首を傾げる中将に、大将が言った。

「デザインーズウイルスとは遺伝子操作されたウイルス、簡単に言えば生物化学兵器だよ」

「・・・艦娘を無力化させる為のウイルス、という事ですか？」

「そういう事だろう。主任の様子を見れば人間にも感染するようだな」

「そ、それは・・・つまり」

「我々を壊滅させるつもりだろう。深海棲艦の知能を、甘く見ていたかもしれないな」

雷は黙って腕を組んでいたが、瞼をピクピクさせていた。

ヴェールヌイ相談役は眉をひそめながら天井を睨んでいた。

それはそれとして、まだ何か引つかかる。何だろう？

第4話

「本当に・・・本当にふざけてるわね！」

雷は自室への道を歩きつつ怒りが収まらない様子だった。

しばらく歩いた所で、ヴェールヌイ相談役があつと短く声を上げたので、雷は振り向いた。

「どうしたのよ？」

「そうだ。おかしいよ雷」

「何が？」

「我々と深海棲艦の身体的特徴に関する特別機密事項は覚えてるか？
雷」

「・・・深海棲艦と艦娘は共通事項が多いって事？」

「そう。特に身体機能についてはほとんど同じと言って良い」

「だから連中も海中では生命維持装置が必要なんですよ。覚えてるわよ」

「深海棲艦はどうしてウイルスが蔓延している鎮守府に乗り込んでるのに平気なんだろう？」

「えっ？」

「私達が容易に感染するようデザインされたウイルスなら、深海棲艦達も感染するんじゃないのかな？」

「深海棲艦達も感染してるって事じゃない？鎮守府への攻撃とは無関係かもしれないし」

「えっ？わざわざ死のリスクを冒してるって事かい？」

「そもそも、鎮守府に対する深海棲艦の攻撃はほぼ全ての鎮守府で日常的に起きている事よ」

「・・・そうだね」

「発症すると哨戒や迎撃が出来ないから滅ぼされた。普通なら撃退出来るから事無きを得ている。違う？」

「まあ、戦争が始まった頃、小さな島に住んでいた人間達はそうやって滅ぼされたわけだしね」

「ええ。だからそのうち、感染した深海棲艦と戦う可能性も出てくるかもしれないわね」

「・・・いや、そうか。むしろそうだったのか」

「第9642鎮守府が感染した感染源は、深海棲艦ってこと？」

「となると、緊急に防疫手段が必要なんだけど・・・」

「そうね・・・でも・・・」

雷とヴェールヌイは今尚騒がしい881研の棟の方を振り返り、雷は肩をすくめた。

「・・・ワクチン開発にしろ、治療薬開発にしろ、頼みの綱は燃えてしまっただわ」

「それらを外注しようにも・・・また検体を手に入れなければならないね」

「いいえ。人に感染する以上、検体を外に出すのは危険過ぎる。万一市街地で漏れたら取り返しがつかないわ」

「881研の人的被害が少なかったのがせめてもの幸いかな」

「そうね。出来るだけ早く建物や設備を修復して、やってもらうしかないわね」

ヴェールヌイ相談役は首を振った。

「冬は好きな季節なのに」

「早く戻りましょ。ここで普通の風邪引いたら紛らわしすぎるわよね？」

「そうだね」

二人は再び歩き出した。

同じ頃。

ミレーナはキッチン「トリアアルガー」でフローラと飲んでいた。

家でも禁じられている訳では無いが、飲まない人間が多いと飲みにくいのである。

「この時期は本当に仕事がなくなるわよね」

「ボスが閑散期の分まで計算してギャラ交渉してくれるから良いけど、私達だけならお手上げよね」

「ワルキューレに」

「ボスに」

「かんぱーい」

カロン♪

習慣で入口を見たフローラはそのまま声をかけた。

「やつほー、スターペンデュラムの那珂ちゃんじゃない。どうしたのそんなしよぼくれた顔しちゃって」

呼び止められた那珂はじっとフローラを見た後、ぶわわっと双眸から涙を溢れさせた。

「う．．う．．うえーん！」

「えっちよつとどうしたの？止めてよ人の事見て泣き出すの」

ルフィアが肩をすくめた。

「素直に謝った方が良いわよ」

「本気で何もしてないわよ！ちよつと那珂からちゃんと言ってよ！」

那珂は腕で目をぐしぐし擦りながら言った。

「契約が．．定期契約が3つも切られちゃったの．．」

クーが厨房からひよいと顔を覗かせた。

「うえ。3つ同時は痛いね。別のお客さん？」

「ううん。同じお客さん。2次問屋さんんだけど．．うちの契約を．．全部解除するって．．」

「なんかハマしたの？」

「してないもん！今日だってちゃんと届けたって明細持っていったんだもん！」

「ふーん。それで？」

ルフィアに促された那珂はカウンター席に腰掛けた。

それを合図に店内はしんと静まり返った。

とても他人事とは思えないDeadline Deliver

達が耳をそばだてて聞いている故である。

那珂はしよんぼりと肩を落としながら続けた。

「理由も聞いたんだよ。那珂か誰かが気に触る事しましたかって」
「うん」

「でもそうじゃなくて、あちこちの取引先と連絡が取れなくなって焦げ付いてるんだって」

「あっちゃー．．．那珂も輸送料取りっぱぐれたの?」

「ううん。うちは毎回現金で支払ってもらってるもん」

企業同士の取引は、基本的に品物の受け取りと代金の支払いの間に期間的な間隔がある。

この間に取引先が倒産するなど代金を回収出来ないトラブルを焦げ付きという。

那珂のように現金取引をしている場合は起きないが、これが出るのは額面が小額だからであろう。

実は金融機関も含め、企業は手元にそれほど大金を置かないのが普通なのである。

「で、3つも定期契約をなくしちゃったから落ち込んだと」

「うん。うちがミスした訳じゃないし、仲良しのお客さんだったから．．．寂しいなって」

那珂の話がそろそろ終わりだと察したDeadline Delivery 達は一斉に話を再開した。

クーが肩をすくめたのを横目に、ミレーナが那珂に声をかけた。

「それならまた呼んでくれるわよ。なんか奢ってあげるから元気出しなっ」

那珂はびよこんと顔を上げた。

「ほんと!?じゃあルフイアさん、トリプルベリーチョコパフェのXLサイズください!」

「はい、景気の良いオーダー入りました」

ルフイアは呆然とするミレーナをちらりと見ると、笑いをこらえながら厨房に入ってしまった。

ミレーナはげつそりとした顔で言った。

「あ、あんた．．．一気に元気出たわね．．．」

「アイドルは、切替が大事なんだよっ!」

「だったら入ってくる時から元気にしてなさいよ」

「誰か奢ってくれるかなっ。きやは♪」

イラツ☆

青筋を立てながらホルスターに手をかけるミレーナの肩を、そつとフローラが叩いた。

「騙されたアンタの負けよ」

「おのれこのド腐れアイドルうゝ」

「それはそうと那珂ちゃん」

「はーい？」

「その連絡が取れなくなった取引先って、うちの仲間？それとも人間？」

「んー・・・」

那珂はライネスから巨大なパフエを受け取りつつ眉を顰めていたが、

「多分うちの仲間じゃないかなあ。ボーキサイトとか常にリクエストされてたし」

「今までそんな話聞いたことあった？」

「ううん。今回が初めてだって問屋さんも言ってたよー」

「そう・・・」

フローラは腕を組んだ。

艦娘、あるいは深海棲艦が突然かつ一斉に失踪、か。

ちよつとボスの耳に入れておこうかしら。

第5話

3月2日朝

その日は夜明け前から冷たい雨が降っていた。

前夜の881研地下研究室の騒動でバタバタした雰囲気の中、郵送室の担当者は首を傾げていた。

「えーっと・・・どうしよう・・・これ」

「どうしたんですか？」

声に振り返ると、封筒を抱えた大和が立っていた。

「ああ大和さん。大将宛と記された書留が届いてるんですが、見た事ない差出人なので・・・」

「X線と金属探知機は通したの？」

「勿論です。爆発物や機械類、刃物等は入っておりません」

大和は持参した封筒を「投函」と書かれた籠に入れ、担当者から書留を受け取った。

「ビニールコーティングされた封筒なんて珍しいわね・・・」

表には太い筆の文字で「大本営大將殿」と記されている。

ひよいと裏返すと、そこには同じく筆で「海底国軍 元首」と書かれていた。

大和は眉をひそめた。

「聞いた事無いわね・・・」

担当者も肩をすくめた。

「捨ててしまいますか？」

「ちよつと・・・雷さんに聞いてみますね」

「海底国軍なんて知らないわよ？」

雷はインカムをつまみながら即答した。

「そうですか・・・」

「今時筆で字を書く時点でどんな連中か予想がつくわね。わざわざコーティングまでしちゃうなんて」

「まあ最近は何が多いですし、墨は濡れたら字が滲みますからね」

「読まずに捨てる」と後で本当に来た時面倒だから、適当に中身読んでおいてくれないかしら？」

「解りました」

大和はハサミを借りると、封を切り、中に入っていた紙を取り出した。

その時一瞬だけ、薬品のような強い異臭がした。

「んっ・・・」

大和は嗅いだ匂いに眉をひそめつつ畳まれた紙を開いたが、すぐにカタカタと震えだした。

担当者が大和に話しかけた。

「あ、あの、大和さん・・・お顔の色が悪いようですが・・・」

「・・・ドアを閉めて、内鍵をかけて」

「えっ？」

「今すぐ！ドアを閉めて内鍵をかけて！窓も閉めなさい！」

「はっ、はい！」

大和はインカムをつまんだ。

「・・・雷さん、緊急事態です」

「大和？一体どうしたの？」

インカムに耳を傾ける雷が怪訝な顔をしたので、大和が顔を上げた。

「どうした？」

「・・・えっ？もう1度、ゆっくり言って。主人に言うから」

「なんだね？さっきの手紙の事か？」

雷は目を瞑り、一生懸命インカムを聞いていたが、やがて目を開けると大将に言った。

「この封筒には破滅をもたらす悪魔が入っている。降伏するか、死か、選ぶが良い」

「・・・なに？」

「意志を3月10日正午に示せ。連絡先を記す」

「・・・」

「そう、手紙に書いてあったそうよ」

「・・・」

「あと、開封時に薬品のような異臭がしたって」

「・・・郵送室か？」

「ええ」

「大和に伝えろ。中にいた人間と共に郵送室に待機。ドアと窓を閉めよと」

「もうやったそうよ。居るのは担当者で大和の2人らしいわ」

「・・・バイオテロの可能性がある。郵送室のある資材棟1階を封鎖し、立ち入り禁止に」

「そうね」

「あと、二人は郵送室内で待機。郵送室以外の資材棟1階に居る者は退去後自宅待機に」

「解ったわ」

「二人には定期的に連絡し、様子を聞くように。まずは水と簡易食料をロボットに運ばせろ」

「・・・寝袋も、かしら」

「今から絶望させる必要はないが、夕刻を越えて事態が動かなければ要るだろう。タイミングは任せる」

「解ったわ」

雷が部屋を出て行くと同時に大将は中将に電話した。

「中将。落ち着いて聞いてくれ。郵送室でバイオテロが発生した可能性がある」

「さ、先程大和を郵送室に向かわせたのですが・・・」

「・・・」

「た・・・大将殿？」

「その大和君が、開封した郵便物に仕込まれていた」
「！」

「大和には郵送室で待機してもらっている。上層部会を緊急招集してくれ」

「解りました！」

大将は奥歯を噛んだ。

いつもならこういう時に向かわせる筈の881研が今は使えない！

それから2時間が過ぎた。

大和と担当者は、ロボットカーゴが運んできた食料と飲み物を机の上に並べた。

大和はインカムから手を離すと、にこりと笑って言った。

「このフロアのお手洗いは使って良いそうです。助かりましたね」
担当者は苦笑した。

「大袈裟ですよね・・・早く笑い話になって欲しいです」

「ええ、そうね」

大和はにっこりと微笑みつつ、恐らくそうはならないだろうという予感めいた物があった。

中将と・・・死ぬ前にもう1度だけお会いしたいなあ・・・無理、かな・・・

同時刻、大本営大会議室。

大將は緊急招集した上層部会の席で、懸命に平静を保とうとしていた。

海軍中に伝令を飛ばし、あらゆる情報を集めさせた。

ヴェールヌイ相談役も招き、過去のあらゆる資料について問うた。
しかし1時間以上かけて解った事は

海底国軍が何者かは一切情報がなく、不明

過去にデザイナーズウイルスによる攻撃や罹患例は皆無
という2点に過ぎなかった。

つまり大和が感染したかどうかも、どう治療すれば良いのかも解らない。

大將が雷に訊ねた。

「ゾーンBの様子はどうかだね？」

「特に変わらないわ。食料と水が届いたそうよ」
「うむ」

郵送室を含む封鎖エリアは「ゾーンB」という呼称で呼ばれていた。

では「ゾーンA」はどこかというところと881研地下研究室であり、今なお燃え続けているというのである。

「確かに、ゾーンA内には可燃性の試料など、無酸素状態でも燃えうる物があります」

881研の輪泉所長は溜息混じりに首を振った。

「もう火災発生から12時間近く経過しているのだぞ？」

「試料の備蓄量はそれなりにありますし、併設されている無停電電源装置の蓄電池はリチウムです」

「だからなんだ」

「外側の被覆が火災によって失われれば空気中の水分と反応して爆発的に燃焼します」

「・・・」

「温度センサーが全て故障してない限り、この状況を誤報とは言えない。本当に燃えている可能性が高い」

「ううむ」

「それに、このまま火の勢いが止まらなければ、最悪、建物ごと崩れる可能性ががあります」

「なんとという事だ・・・」

「とにかく鎮火を待つしかありません。燃えている物によっては水はおろか消火剤でも爆発する可能性がある」

「・・・では上のフロアにも」

「足下が燃え、崩れる可能性がある場所に部下を戻せというのですか？」

「そう・・・だな・・・」

出席者のひとりがついに声を荒げた。

「ええい！だから881研の研究施設を1棟にまとめるのは危ないと言ったのだ！」

「それよりテロ対策班は今まで何をしていたのだ！こんなバイオテロの欠片すら掴んでなかったのか！」

「毎年予算を削減しまくったのは財務部ではないか！必要な活動費も捻出出来んからこうなったのだ！」

大將は部署間の罵り合いを前に1分ほどかけて静かに息を吸い込んでいたが、

「黙れ！責任のなすりあいをしている場合か！」

と、一括したのでピタリと収まった。

第6話

落ち着きを取り戻した面々を見回しながら、大將は続けた。

「我々が取り乱せば相手の思う壺だ。まず、状況は全員共有出来たかな？」

列席者がこくりと頷く。

「ヴェールヌイ相談役」

「なにかな？」

「発症してから重症化するまでの期間は？」

「およそ1週間。症状が出始めるのは大体3〜4日後だね」

「50%生存期間は？」

「生き残ってる子が居ないし、全て深海棲艦達の攻撃によるものだから、ウイルスそのものの致死率は・・・」

「解らんという事だな」

「・・・残念ながらね」

中將が大將に向いて話し始めた。

「状況を打破する為には残り時間は大変短いです。いつそ、特別委任体制に移行しては如何でしょうか？」

特別委任体制。

敵の広範囲な侵攻を確認した等、次々と大きな決断を要する場合、その都度上層部会を開くのでは間に合わない。

従って、あらかじめ上層部会列席者が大將に判断を一任する事を特別委任体制と言う。

いわば大將への白紙委任状である。

大將は30秒ほど目を瞑っていたが、

「よし。では特別委任体制に賛同する者はこのまま退席するように。残った者と本件を対応する」

といった途端、列席者は我先にと立ち上がり、出口では押し合いら見られたのである。

・・・ボタン。

部屋に残った中将を見て、大將は苦笑した。

「・・・彼らはどこに逃亡するんだろうな」

中将は肩をすくめた。

「ウイルスが確認されていない南の方か、海軍や艦娘の居ない：山奥の別荘辺りでしような」

ヴェールヌイ相談役は溜息混じりに言った。

「私は発症していないのだが、遠巻きにして避けられたよ。既に媒介者扱いだね」

大將が頭を下げた。

「部下が不快にさせた事をお詫びする。未知のウイルスと聞いて神経質になっているのだとは思うのだが・・・」

「ううん、大將のせいじゃない。解ってるさ」

大將は部屋に残った、雷、五十鈴、ヴェールヌイ相談役、そして中将を見回した。

「さて、上層部会は私達5人に任せてくれたわけだが・・・」

ヴェールヌイ相談役がくすつと笑った。

「予定通りだろうか？大將」

大將は肩をすくめた。

「こういう時、他の連中は居るだけ邪魔でしょう」

「そうだね」

中将は指を折りながら答えた。

「失敗は許されず、期限は短く、なのに我々には手がかりもなく、調べる手段すら失われてます」

雷が肩をすくめた。

「今なお燃えている881研の復旧を待つてからでは、到底間に合わないでしょうね」

五十鈴が呟いた。

「881研の火事と、脅迫文のタイミングが合い過ぎてる気もするわね・・・」

ヴェールヌイ相談役が眉をひそめた。

「そういえば、鎮守府の壊滅の方もタイミングが出来過ぎている気が

したんだ・・・」

大将が頷いた。

「海底国軍は深海棲艦かもしれない、という事か」

「それもかなり組織的な、ね」

「特別機密事項行きになりそうな臭いがぶんぶんしてますな」

「ダー」

「中将・・・」

「ええ、恐らく5人とも、同じ事を考えていると思われれますよ、大将殿」

「彼等に丸投げするのは心苦しいが・・・」

「海軍で深海棲艦の情報を入手出来て、これだけ高度な事態に対応出来るのは・・・」

「もう他に居ないんじゃないかしら」

大将が頷いた。

「ソロル鎮守府の提督に連絡を取ってくれ、中将」

中将は頷きながら立ち上がった。

「大将命令、緊急度最高でよろしいですか？」

「大本営として出来る事は最優先で全面協力すると伝えよ」

ヴェールヌイ相談役が中将に数枚の書類を手渡した。

「中将、私がまとめた状況だ。これも提供してあげて欲しい。あと、必要なら私もそちらに行く」と

「解りました」

中将は会議室のドアを勢い良く開けて出て行った。

周囲をそつと見回した後、ヴェールヌイ相談役は両手を顔の前に持ってきた。

頑張って言った！自然に！さりげなく！

その一瞬の後、今度は大きな溜息をついた。

良いんだ・・・解ってる。

提督がこのメッセージにこめた思いに気づくなんて事があれば地球が終わってしまう事くらい解ってる。

それでも言えた自分を褒めてあげたいんだ。

同時刻、北海道某所。

力なく受話器を握りつつ、地上組北海道支部長はオペレーターと話を進めていた。

「解りました。では明日の地域部長会議は欠席されると言う事ですね」

「ゲホツゲホツ・・・は、はい、すみません。伝染すと・・・申し訳ないの・・・」

「だいぶ辛そうですね。病院には行かれましたか？」

「それが・・・ゲホツゲホツ・・・風邪が流行ってるらしくて、病院に入れないくらい混んで・・・」

「それなら関東の病院をご案内しましょうか？」

「あ、あまり遠いのは辛いので・・・北東北辺りに・・・ありませんか？」

「あるんですが、同様の報告が入ってるんです。受け入れ可能な病院は関東から西になってしまいますね・・・」

ぐるぐる回りだした部屋の景色から目を閉じると、北海道支部長はオペレーターとの会話に集中した。

「そ、それなら止めておきます。仕事もあるし・・・ゲツゲホツゲホツ：ゼー・・・ハー・・・ゼー」

「独力での移動が難しいのでしたら救護班をへりで向かわせませんが？」

「や、大丈夫、大丈夫です。たかが風邪でそこまでは・・・」

「風邪は万病の元といえますから、決して無理しないでくださいね」

「ありがとうございます・・・ございます・・・では・・・失礼します・・・」

受話器を電話にそつと戻すと、北海道支部長はバタリと机に突っ伏した。

良かった・・・用件は伝えられた。

それにしても辛い・・・インフルエンザってこんなにも辛いものだったんだ。

初めての経験だから良く解らないけど・・・

視界がぐるぐる回るし、体中がギシギシ言ってるし、寒いのか暑いのか解らない。

「ちよつと起き上がるだけで何キロもマラソンした後みたい息が切れて苦しい。」

「そういえば、ずっと昔、司令官が一人だけインフルエンザにかかって1週間寝込んでたなあ。」

「私達に伝染るといけないからって一人で自室に籠って、運び入れた水と缶詰だけで過ごしてたっけ。」

「こんなに辛かったらお粥とか欲しかったんじゃないかなあ。」

司令官のパスター・もう1度食べたいなあ。」

あれ・司令官がこつち見て笑ってる・何で・居るの?・司令官・

「そうだ・出先から・戻ってきて・ストープ・入れて・ない・眠・」

3月2日午後、ソロル鎮守府。

「・・・ふうむ」

提督は集会場の一角に移した執務机に肘を突きつつ、置かれた状況に眉をひそめていた。

「集会場は今や巨大な事務所と化していた。」

並べられた椅子と机に座るのは所属艦娘、基地の北方棲姫達、そして近海の深海棲艦達それぞれの代表者である。

机の上には大本営から届いた資料のコピーを始め、膨大な資料が積みまれている。

参加者はそれぞれの仲間とインカム等で連絡を取りつつ、手にした情報から可能性を討議していた。

「浮かんできた提案を白雪達経理方が1次審査し、これはと思うものを組み合わせていく。」

「事務方と提督がその情報を見ている、という体制であった。ただ、提督の元まで届く資料が一向に増えないのである。」

第7話

鎮守府が大本営からの緊急暗号通信を受けてから、既に3時間。全く無関係と思われるような情報まで集められていたが、皆の表情には焦りの色しかなかった。

「お父さん・・・」

文月が不安そうに提督を見た。

「うん。余りにも情報がないね」

「こちらで新たに解った事は、海底国軍の正体だけです」

「東雲も北方棲姫もウイルスの研究開発なんて聞いた事もないと首を振ったしね」

龍田が肩をすくめた。

「相当大きい組織でないとウイルスを合成出来るような研究所の維持は難しいから、合ってると思うわねえ」

「でも、現状では証拠が無いから動きようが無いね。更に外部に応援を求めるしかないか・・・」

文月が言った。

「地上組はどうでしょう？深海棲艦も感染する恐れがあるなら共闘してくれるかもしれません」

「・・・そうだね。文月、デスクC-2に浮砲台組長さんが居る。連絡を取ってもらおうよう頼んでくれないか？」

「はいー！」

文月が駆けて行った後、龍田はついと、右手の人差し指を立てた。提督が首を傾げた。

「ん？なに？」

「もう1箇所、お話しても良いかなって所がありますよ」

「んー？」

「・・・大山事務官、です」

「なるほど、海運業なら何か知ってるかもね。それなら虎沼さんにも・・・」

龍田は首を振った。

「完全な民間の方に話したらパニックになると思うなあ」

「あーそうか。大山さんならうちの事情も解ってくれる、か」

「ええ。あの町全体が海軍と深く関わってますから、情報漏洩の心配も少ないと思いますし」

「よし。龍田から連絡してくるかい？それとも私が電話しようか？」

「んー・・・」

龍田は少し迷ったが、

「提督が話すと別の疑いをもたれるでしょうから、私からかけますね」

「何その別の疑いつて」

「大山事務官カムバックつてね」

「幾らなんでもこんな時に言わないよ」

「事実かどうかわなくて、大山事務官がどう思ってるかだから」

「・・・ま、余計な波風は立てない方が良いか。頼めるかな？」

「任せて」

「あ、依頼にかかる費用は大本営に交渉するから私に言いなさい」

「大丈夫よく、任せておいて」

提督は龍田の背中を見ながら首を傾げた。手付金だけでも大金が必要だと思っただが・・・

3月2日夕方、柿岩家会議室。

「協力する事は構わない、というよりぜひお願いしたい位ですが・・・」

浮砲台組長の相談を通信経由で聞いていた防空棲姫は、日本エリア長であり妹の港湾棲鬼と顔を見合わせた。

「我々も全くの初耳ですから、今は提供出来る情報がありません」

画面の先で浮砲台組長も頷いた。

「エエ。私モソロルカラ話ヲ聞イタ時ハ、腰ガ抜ケソウニナリマシタ」

港湾棲鬼は眉をひそめた。

「でも、彼らは第41研究局を作り、corrosion計画を遂行する程度の能力はあります」

「ソウデスネ」

「ずっと昔からバイオテロ用ウイルスの研究をしていたとしても不思議ではありません」

防空棲姫は少し考えていたが、

「少し、海底国軍の様子を探ってみましょうか」

「エエ。本当ニ彼ラガ組織的ニ動イテルナラ、兵ノ配置ガ変ワツテイルカモシレマセンナ」

「では提督には情報収集に協力すると、まずは回答しておいてください」

「解リマシタ」

通信を切ると同時に、姉妹は立ち上がった。

同じ頃、山甲町役場。

「なるほど、なるほど」

龍田の電話を受けていたのは町長だった。

ドックなどのリソース提供、輸送や護衛のみならず、幅広い分野での Deadline Deliverers の全面協力。

それら全てを町の外に漏らさぬよう、機密案件として対応して欲しいという依頼である。

「簡単に言おうと、町ごとチャーターされるといふ事ですか？ 以前のよう」

「出来ればそうしたいのですが・・・今はお忙しいですか？」

「いえいえ。元々冬は閉鎖される航路が多いので閑散期ですよ。お仕事大歓迎です」

「では・・・」

「ええ。私から各方面に働きかけましょう」

「助かります。その疾病対策に関してはそちらも興味がおありかと」

「仰る通りです。艦娘・深海棲艦共に我々の住人ですからな。ぜひ、我が町の対策にもお力添えを頂きたい」

「勿論です。ではご協力頂けるといふ事で・・・後のお話はどのようなルートがよろしいですか？」

「そうですね・・テッドさんに窓口を一任しますか。私から話を通しておきますよ」

「なるべく早期の解決を目指しますので、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い致します」

「では1度、こちらの体制がまとまったらテッドさんから連絡させましょう」

「お待ちしております」

電話を切ると町長は立ち上がった。

これは忙しくなる。まずは署長に連絡しておかねば。

それに・・

町長はコートに袖を通しながら思った。

先日から取引先からの契約破棄や取引停止が立て続けに起きていくという噂もある。

そんな事が長期化して欲しくは無いが、そうなった場合の備えは早めにしておいて損は無い。

同じ頃、ムファアマスの事務所。

「おいおい待ってくれ。ギャラの交渉なら受けるぞ・・あつ」

ムファアマスは一方的に切れた電話を少し睨んだ後、そつと電話機に戻した。

海底国軍周りのネタを提供してくれていた情報提供者が突然引退するという電話だった。

深海棲艦の動きを知る上で海底国軍の動向は欠かせないが提供者は少ない。

それは海底国軍の結束が強いというより、裏切り者に対する厳しさを右に出るものが無い為である。

とりあえずコーヒーでも飲むか。

「やれやれ。後任くらい紹介して欲しかったが、連絡をくれただけよしとするか」

席を立ち、情報提供者が最後に言い残した言葉を思い出した。

「風邪を引く前に今すぐ逃げろと言われてもな・・後でナタリアかテッドに相談してみるか」

ガチャリ。

台所でカップにコーヒーを注いでいたが、事務所のドアが開く音を聞いたムファアマスは眉を顰めた。

あれ、さつき鍵を閉め忘れたかな？

「お客さん？営業は18時からなんだ。悪いけど出直してくれないか」

コツ・コツ・コツ。

近づいてくる足音がしたので、ムファアマスは眉をひそめつつ台所から廊下にひよいと顔を覗かせた。

「急ぎの用でも勝手に入って来・・・」

冷たくなつたムファアマスが事務所の奥で発見されたのは、その日の夜の事だった。

第8話

3月2日夜、ソロル鎮守府。

日が暮れてもなお、提督達の表情は冴えなかった。

始まったばかりとはいえ、余りにも集まらない情報と、見えないが故の気持ち悪さが空間を支配していた。

手持ちの資料は調べ尽くされており、集会場の中は不気味な静けさに包まれていた。

参加者は物音に鋭く振り向いたり、コツコツと机を指で叩いたりしていた。

「今は動きようがないから仲間の元に帰っても良いよ。その場合は連絡手段だけ教えておいてほしい」

そう、提督は言ったが、

「ナントナク、ソノ、海ニウイルスガ居ルンジンヤナイカツテ、怖クテ…」と、深海棲艦達は海に戻ろうとしなかったのである。

長門は小さく頷いた。

デザイナーズウイルスなどという得体の知れない病原体が、確実に世の中に存在している。

それだけが判明している中、世界中と繋がっている海に帰るのは結構勇気がいる。

提督は言った。

「ふむ。なら、希望者が仮眠を取れる場所を用意するか。えっと、じゃあ高雄！すまないがとりまとめを頼む！」

「解りました。ただ、迎賓棟だけでは入らないかと思えますよ？」

「寮の空き部屋も使って良いし、集会場の空きスペースとか、とにかく使える建物は何でも使って良い！」

「解りました！」

高雄が頷いた時、集会場の入り口が大きく開き、間宮と鳳翔、そしてたすきをかけた赤城達が入ってきた。

「さあさあ、おなか膨れれば気持ちも落ち着きますよ。運動場にお

夕飯の席を用意しました」

「豚汁が美味しく煮えてますよ！手を洗って、うがいしてから並んでくださいね！」

鳳翔の優しい声と赤城の明るい声を聞き、ようやく面々の顔が綻んだのである。

同時刻、ムフアマスの事務所

鑑識係が次々と撮影していくフラッシュを眩しそうに遮りつつ、刑事は年配の同僚に呟いた。

「・・・ウカンムリですかねえ」

同僚はぐるりと見渡して言った。ウカンムリとは窃盗の事である。

「違うな。荒らされた感じが無い」

「じゃあ何で殺られたと？」

「ムフアマスは一匹狼だったな」

「ええ。マルカイ関連の情報提供専門で、他に商売してたといった噂はありません」

「情報屋が殺される理由なんて普通に考えりや当事者、つまりマルカイのお礼参りだな」

マルカイとは深海棲艦の事であり、お礼参りとは復讐の意味である。

「いやまさか。マルカイのお礼参りなんて聞いた事ありませんよ」

「だが、だとしたら、お宮さんだな」

お宮とは迷宮入り、転じて未解決事件にするという事である。

「また公安が出張ってくんですか？」

「だろうよ。海軍様は都合が悪くなると公安使って全部召し上げちゃうからな」

「・・・根拠は？」

「カンだ」

「あーあ。それじゃ当たりますね。程々にしときますか」

「とはいえ一応引継ぎ用の格好はつけにやならん。証拠は集めといってくれよ」

二人の刑事の傍でカメラを構えていた鑑識係の一人が肩をすくめた。

「足跡も指紋のしの字もありません。壊れた鍵と頭を貫通して壁にめり込んだ銃弾1発。それだけですわね」

「なら現状を撮影したら、とつと弾を回収してしまえ」

「了解」

年下の刑事は、そつとムファアマスの死体袋に向かって両手を合わせた。

「ムファアマスさんは嫌いじゃなかったんですけどねえ」

「俺もだ。物静かな男だったからな。ま、殺つたのは他所者だろ。成仏しろよムファアマス」

年上の刑事は頭を下げて目を瞑り、手刀で小さく空を切ると、周囲に声をかけた。

「よし、通報分はどつちもこれでお仕舞いだ。鑑識も帰れるか?」

鑑識に撤収準備を促す年配の刑事に向かって年下の刑事は肩をすくめた。

「一応聞きますが、あつちの現場は何もしないんですか?」

「数分間に渡る銃声と叫び声、それに強い光が見えたと言われてもな、仏どころか血痕すらねえんだから立件出来ん」

「証拠なら壁に弾の1つや2つ埋まつてるんじゃないですかね、ここと同じく」

「だからなんだってんだ?」

「うちの国には確か銃刀法って法律があつた気がするんですがね」

「ワルキューレに向かつてそれを言えるなら勝手にしろよ。後で霊安室に線香上げに行つてやる」

「どうしてワルキューレの仕業だつて言い切れるんです?」

「市内で派手な銃撃戦かますなんてワルキューレかSWSPしか居ねえよ。で、一人で行くか?成仏しろよ」

「冗談止してくださいよ。自分の眉間に向かって1発撃つ方がまだ気楽です」

「納得したか?お、準備出来たか。じゃあ引き上げだ。山のような書

類が帰りを待つてるぞ」

「ぐつたりするような事言わないでくださいよ・・・」

こうして警察の一行は事務所を後にしたのである。

3月3日朝、某海底。

「ナ、ナンダ、アレハ・・・」

潜水力級は目の前の景色に目を疑い、僚艦と顔を見合わせた。

メンバーは幾つか撮影を行いつつ、全速力で海域を離脱した。

早く報告しなければならぬ。

1時間後、柿岩家会議室。

「・・・我々との海境付近にですか？」

「正確には全域ではなく、大本営と最も近い、地上組との海境付近に最も集結していますな」

鎮守府に居る浮砲台組長を除いた元老院の面々は、報告に眉をひそめていた。

全エリアの協力を得て偵察した結果、大本営に最も近い海境付近に戦力を極端に集中させている事が判明した。

その集中している場所に遭遇したのが先程の力級達だった、という訳である。

1課長の表情は緊張していた。

「かつてここまで狭い範囲に、これだけ部隊が密集して配備された事はありません」

「・・・」

「この数では日本エリアのメンバーだけでは到底太刀打ち出来ません。我々に対する軍事的挑発とも取れます」

レ級組組長が唸った。

「このエリアで武力攻撃に移行されると、我々の海域は大本営の艦娘達と海底国軍に挟み撃ちされてしまうなあ」

別のメンバーが言った。

「艦娘達が突破されればここだって攻撃されるかもしれん。大本営と

は離れているが安心は出来ないぞ・・・」

防空棲姫は重い口を開いた。

「・・・彼らに連絡を取り、意図を確認してみましよう。よろしいですか？」

面々は頷いた。

「これは我々の決断であり、総意である」

防空棲姫との会談に応じた海底国軍の副将軍は、電子会議システムのモニタ越しにきつぱりと言い切った。

防空棲姫は静かに応じた。

「・・・我々に実害が及ぶならば協定違反とみなしますが？」

「我々が今回敵対する相手は大本営のみであり、貴方を含めた深海棲艦勢への武力攻撃は行わない」

「大本営には我々との海境を突破する形で進軍されるのですか？」

「作戦の詳細は言えないが、越境行為も行わない。これは約束する」

「越境以外の侵略行為も、ありませんね？」

「・・・具体的には？」

「たとえば、海洋汚染とか、バイオテロとかです」

ピクリ。

副将軍の頬が僅かに痙攣するのを地上組の面々は見逃さなかった。

「あーその・・・いい、いずれにせよ、海軍への作戦決行中は侵略行為を禁ずる。それが相互不可侵条約の基本だ」

「・・・」

「条約はお守り頂ける。よろしいですか？」

「我々への明確な攻撃が無ければ」

「冬は元々、風邪を引きやすい季節ですからな。疾病まで我々のせいにして頂きたいですな」

防空棲姫は目を瞑り、微笑みながら言った。

「普通の風邪であれば、我々は何も申しません」

そして、声色を一段落とし、ギロリと睨みながら続けた。

「普通の、風邪であれば、ですが」

副将軍の目が明らかに泳ぎだした。

「・・・とつ、とにかく我々の方はそういう事だ。本作戦に関し余計な詮索はしないで頂こう」

副将軍が言い終わらぬうちに通信がブツリと切れた。

レ級組組長が笑った。

「あれじゃウイルスばら撒きますと言ってるようなもんだ」

元老院の面々も静かに頷いた。

第9話

通信の切れたモニタから目を離すと、防空棲姫は眉をひそめた。

「しかし、証拠をどう手にいれるかです。証拠が無ければ条約違反で全面戦争になってしまいます」

レ級組組長が肩をすくめた。

「構わないじゃないですか。小さな海境侵犯は日常茶飯事だし、今度も姑息な手をチマチマ使いやがって・・・」

「我々が条約を破棄して海底国軍に攻撃を始めれば年単位の大戦争になり、彼等は堂々とウイルスを使うでしょう」

「・・・無駄な犠牲が広がるだけ、ですか」

「決して面白くはありませんが、そうだと思います。あと、先程の話で2つハッキリした事があります」

「なんででしょう？」

「1つは彼らのウイルスが深海棲艦にも感染し、風邪に似た症状を示す事」

「・・・」

「もう1つは彼等は既にその対抗手段も持っている、という事です」

「・・・治療薬、あるいはワクチン、か」

「製薬プラントがあるはずです。あれだけの兵員に摂取または携行させるのですから」

「作り終えたから決行に移した、という事ですか」

「あるいは必要分は整った、残りは作戦遂行中に作る、という可能性もありますね」

「確かに。海底国軍の気の短さを考えればそちらの方が正しそうですね」

防空棲姫は少し考えた後、控えていた3課の課長に向き直った。

「3課長さん」

「はっ！」

「情報収集をお願いします。彼らの製薬プラントがどこか見つけてく

ださい。手がかりだけでも構いません」

「他所の3課に協力を依頼してもよろしいですか？」

「構いません。迅速な対応を求めます」

「かしこまりました！」

3課長が部屋を出ると同時に、通信機がアラームを鳴らした。

「浮砲台組長殿からの通信要請です」

防空棲姫は元老院の面々と頷きあった。

「すぐに繋いでください。新しい情報が入りました」

3月3日昼、ソロル鎮守府

「…これで、人間と艦娘を狙った生物化学兵器という事がハッキリしたね」

提督は穏やかに返事をしたが、同じく浮砲台組長の報告を聞いていた面々は怒りに震えていた。

浮砲台組長は頷いた。

「付ケ加工レバ、我々ニモ感染スルヨウデス」

提督の表情が曇った。

「そろそろ大和さんも発症する頃だし、皆の治療薬をどうやって作るかなあ・・・」

長門が提督に声をかけた。

「情報が得られたのだ。専門家の意見を聞いてはどうだ？」

「そうだね。長門、東雲組と、工廠長に医療妖精を連れてきてくれと伝えてくれ」

「任せろ」

「っと、龍田」

「はあい、山甲町にも伝えておくわね」

「向こうから何か報告は？」

「体制は整えてくれたそうよ。情報は特に無いわ」

「各国のニュース等にも変化は無いか？」

「特に関係のあるようなニュースは無いわねえ。世間は普段通りとしか・・・」

「そうか・・・まあ軍の外が平和なら何よりだ」

同時刻、大本営郵送室。

大和は呼吸を意図的に深く、ゆっくり、静かに行っていた。

その方が咳が出にくいからだ。

「うっ・・・ケフツケフツ・・・ゴホツゴホツゴホツ・・・フー、フー、フー・・・」

「だいぶ辛そうですね・・・横になりますか？」

「だ、大丈夫です。椅子にじっと座っていれば・・・マスクもありますし」

「机の上を片付けてくつつければ1組くらい布団が引けます。頼んでおきますよ」

「でも、貴方は床に寝袋で寝てるのに・・・」

「私の事は良いですから。それより、お水を飲みませんか？」

同時刻、山甲町山下食堂。

「いらっしやいませえ」

「天ぷら蕎麦ちよんだい。大盛りね」

「あいよ、好きな席にどうぞ」

「そこに居るよ」

店のおばちゃんに手で軽く合図しながら、男は先に来ていた友人の隣へと腰を下ろした。

「よう聞いたか？ツアルコフ海運は取引先全滅だよ」

「ああ。北海道はいよいよキナ臭くなってきたな。もう情報すら入ってこねえ」

「ツアルコフの連中はサハリンルートを捨てて北海道に特化したばかりだったからな、運が無えよ」

「俺は東南アジア専門で良かったよ。お前もインド洋方面だから影響ねえだろ？」

「ああ。だがツアルコフの連中見てももう1本くらい持つとくかになって思うぜ」

「まあ今回の異変は北海道だけらしいからなあ」

「・・・それがそうでもないんだな、これが」

「どういうことだよ」

「津軽湾を警備する艦娘連中の数が減ってるらしい。そいつは通りやすいつて喜んでたけどよ」

「・・・本州に来てるって事か？」

「他に何が考えられるんだよ」

「なあ、お前はあの話乗るか？」

「騒動が治まるまでイタリアに逃げようって奴か？いつまでかも解らねえのにか？」

「でもよう、本州に来たって事はここだっていつかは来るだろ？」

「来るかどうかは解らねえが、俺の懐がお寒いのは間違いないからな」「こつちだつてバカンスしやれ込むほど余裕はないけどさあ」

その時、ほかほかと湯気を立てる井が置かれた。

「あいよ、天ぷら蕎麦大盛りお待ちどうさま！」

「ありがとっ・・・それに、俺はこの天蕎麦が好物だからよ」

「けどよ、ウツデイルーパーの連中は昨日逃げ出したぜ」

「本当かよ・・・マジでイタリアくんで行ったのか？」

「それが燃料に余裕がねえからってカリマンタン島だと。俺の得意先より近いっつーの」

「しよっぼ。情報がなくて逃げるべき時に知らなくて詰んじまうってオチじゃねえ？」

「だよな」

男は箸入れから箸を取り出すとペコりと頭を下げた。

「とりあえず俺はテッドに任せるよ。頂きますっつと」

3月4日夕方、キッチン「トラファルガー」

「ふえっ!?何それ？」

たまたまファツゾとライネスが話していた事を耳にしたビットは目を見開き、声を上げた。

二人は振り返った。

「ん？なんだ、知らなかったのか？」

「今日ずっと、町が騒がしかっただろ？」

ビットは肩をすくめた。

「昨日からバカみたいに修理依頼入ってたから町なんて行けなかったの。おかげで食事は全部レーションだし」

「修理依頼？こんな時に誰から？」

「あー、まあ、お得意さんなんだけどね」

ビットは言葉を濁したが、依頼主は夕張会のレイであった。

「詳しくは言えないけど、ちよつとクリティカルな事態なのよ。ごめんね。協力してくれないかな？」

珍しく丁寧な口調だと思つたら、その日の午後届いたのが10トトラック1台分の故障品。

「全部修理して、3月5日中にうちに着くように送ってね。よろしく」依頼書を要約するとそういう事だった。

「2日弱でこれ全部！ちよつとレイさん冗談じゃないわよー！」

ビットが絶叫する横でアイウイは目を輝かせていた。

この閑散期に嬉しい大量受注！助かった！

というわけでビットは死に物狂いで修理するハメになったのである。

そして先程荷物を送り出したので、アイウイと共に食事と休憩を兼ねてトラファルガーに来たという訳だった。

仕上げてしまうのはさすがだが、仕上げてしまうから余計オーダーが酷くなる事に気づかないのがビットである。

ファッツは肩をすくめた。

「まあ、もしかしたらビットにも何か依頼が行くかもしれないな。何せ町ごとチャーターされてるからな」

「えつちよつと待って。少しくらい休みたいんだけど」

「俺に言うなよ。それに来るかどうかも解らないよ。可能性の話だ」

アイウイは水を飲みつつ思った。

そりやまあ、レイさんが事情を言える筈も無いか。

でもそんな状況なら、下手にばりつちを外に出さない方が良い。

人の多い電気街なんて論外だ。

ばりつちにはまずたつぷり寝てもらおう。

その後、今うちで預かっている品の棚卸に付き合ってもらおう。
なにせ膨大で、死ぬほど時間がかかる作業だから後回しにしていた
のだ。

軍の報酬は良いし、あれだけの量をこなせば数ヶ月は仕事がなくて
も生きていける。

店は棚卸につき臨時休業としてしまおう。

これで外との接触を断てる。

アイウイはそつと窓の外に手を合わせた。

レイさん様々だ。ばりつちは私が守ります。

第10話

3月5日朝 柿岩家会議室

「以上を総合しますと、ここ数ヶ月の間で、物資や出入りが頻繁だったのはこれらの4海境に絞られます」

3課長の報告を聞き、防空棲姫は頷いた。

「後はその先のどこにプラントがあるかですが：実際に越境する訳にも行きませんね」

レ級組組長が手を打った。

「そうだ。海軍なら衛星を持ってませんか？」

防空棲姫は元老院の面々と頷きあつた。

「浮砲台組長殿に連絡を取ってください。ソロル鎮守府に報告して調べて頂きましょう」

4時間後、ソロル鎮守府通信棟。

スピーカーから聞こえてくる中將の声には焦りの色が濃くにじん でいた。

「衛星写真とその解析は最優先で手配した。後30分もすれば結果が出る筈だ」

「ありがとうございます」

「・・・依頼からたった3日でここまで掴んでくれた事には感謝しなければならぬのだが・・・」

「大和さんの容態が、良くないのですね？」

「：うむ。今はもう、横になったままで、起きる事も難しいそうだ：：
「・・・」

「提督・・・解っている。解ってはいるのだが・・・急いで欲しい・・・」
「勿論です。我々も大和さんには恩がありますし、大事な友人ですから」

「頼む・・・んっ?!入れ!」

「どうしました?」

スピーカーの向こうでごによごによとやり取りが聞こえ、五十鈴の
声が聞こえてきた。

「提督、待たせたわね。連絡を受けた海域の衛星画像を解析したけど、
可能性があるのは1箇所しかないわ」

「どこです？」

「ウエーク島の西1kmにある比較的浅い海底よ。他の候補の調査結
果も含めて詳細は暗号通信で送るわ」

「お願いします」

「じゃ、通信終わり。しつかりね！」

「あ、まだ中将殿と・・・」

「ダーリンの事なら私が励ましておくから大丈夫！そっちはそっちの
仕事をして！」

「解りました」

提督は通信機を切ると、ゆらりと立ち上がりながら長門に言った。

「そうだ・・・良い事を思いついた。皆を集会所に集めてくれないかな」

長門は提督を見てゾクリとした。

提督が蛇のように暗い目で邪悪な笑みをたたえている。

ずっと平静を装ってはいるが、提督は今度の件に怒り心頭である事
を長門は察していた。

「いよいよ、我々が攻勢に転じるという事か。ならば地獄の底まで付
き合おう。」

長門は頷いた。

「任せろ」

それから1時間ほど、集会場はパーティーかと思うほど賑わってい
た。

発端は提督が状況説明の最後に放った「一言」であり、どう実現す
るかを皆で話し合っていたのである。

検討すべき課題はハードで、大量で、一見すると不可能なものだっ
た。

それでも皆の表情は今までと明らかに異なっていた。

なぜなら霧の中で迷走している訳ではなく、明確に目標が定まって

いるからである。

賑やかで、騒々しく、笑い声が飛び交う中、猛烈な勢いで一言が草案に、草案がプランへと整っていく。

その様子を間近で見ると事になった浮砲台組長は後に防空棲姫に青ざめた顔でこう語った。

「連中は狂った作戦を技術力で無理矢理実装します。そこには常識の欠片も無い。絶対敵対してはなりません」

同時刻、大本営郵送室。

「大和さん、お水です。少しでも飲んでください」

「余り・近寄らない・方が・良いですよ・ゲフツゲフツゲフツ・ゴハツ」

「どうせ私も遅かれ早かれかかります。さあ、これを飲んだら少しでも寝てください」

「ごめん・なさい・・・」

机の上に敷いた布団から伸びた大和の手を取ると、熱く、そして弱々しかった。

郵送室の担当者はそつと手を取り、布団の中へと戻すと、大和の額に冷水で絞った手ぬぐいを乗せた。

こんなに具合が悪いのに、ずっと大和さんは私の事ばかり気にかけてくださっている。

誰が、何故、こんな事を・・・

3月5日昼過ぎ、ワルキューレの事務所。

「また龍田会でしょ。嫌な予感しかしないわね」

「今回は窓口は龍田だが依頼元はソロル鎮守府だ。ただまあ、その意見には賛成だ」

テッドは肩をすくめつつ紫煙を吐き出した。

ナタリアは気だるそうにメモの紙切れを眺めながら、細巻き煙草に火をつけた。

「・・・絶対これ、アタシ達を前提にしてるオーダーよね」

「俺もそう思うぜ。しかもソロルまで来てくれってよ」

屋内戦の経験が豊富で機転の利く1艦隊。全員深海棲艦で。

ナタリアは上目遣いにテッドを見た。

「他のオーダーは？」

「ありつたけ艦娘を集めておけ、とき。これは町で待機してれば良い
そうだが」

「他に条件無いの？」

「無い。だから応じた艦娘は全員準備に入らせるさ」

「艦種の限定も無いの？何がしたいのかしら」

「誰でも出来るとなりや輸送くらいしかねえし、本当に手が足りねえ
んだろう」

「ギャラはちゃんと出るんでしようね」

「今回は請求しただけ払ってくれるそうさ」

「危険手当も欲しいわね」

「ああもちろんだ。ふんだくれるだけふんだくってやる」

「そこは任せたわよテッド」

「じゃあ受けてくれるか？」

「他となるとSWSPしか居ないでしょ。あっちはテッドの警備があ
るし、無理よ」

「そっか。すまん。あと、やけに金払いが良い所が却って引つかかる。

装備は固めていけよ」

「せめてターゲットが何かくらい教えてくれれば良いのにな」

「最初の3文字がそうなんじゃねえか？」

「・・・兵装は装甲系で馴れた武器を持っていくべきかしら」

「相手がどんな奴とは書いて無いぞ。深海棲艦かモンスターかさえ解
らん」

「龍田も解らないのかもね。まあ後はフィーナ達と相談するわ」

「出発時刻とか集合場所はこの紙を見てくれ。じゃ、よろしくな」

「ええ」

テッドとナタリアは同時に立ち上がった。

同時刻、虎沼海運社長室。

虎沼が恵と来年度の戦略について話し合っている所に内線が鳴った。

「なんだ？」

「社長、ソロル鎮守府の文月様からお電話が入っておりますが」

虎沼は恵を見ながら答えた。

「会議システムにつないでくれ。オープンで受ける」

「文月様、ご無沙汰しております」

「はい。恵ちゃんも元気ですか？」

「元気だよ」

「それで、えっと、そちらには今、お二人以外はいらっしゃいませんか？」

「ええ。私と恵の2人だけです」

文月が一瞬、間をおいた後に話し始めた。

「：実は、うちの鎮守府からアメリカに輸送したい物があるんです」
「なるほど」

「それがとても沢山あるのですが、今何隻くらいチャーター出来ますか？」

「恵」

恵はタブレットでファイルを呼び出すと、すばやく数を数えた。

「んー、定期便とか修理中を除くと・・・当面予定が無いのは28隻、かな。充分ありますよ」

「修理中というのは、うちにドック入りしてる2隻の事ですね？」

「そうよ」

「じゃあその2隻も含めて30隻、まとめてお借りしても良いですか？」

第11話

文月の提案に、虎沼は目を白黒させた。

「えっ?か、構いませんが・・・30隻全部ですか?」

「はい。あと、こちらにある荷物なので、こちらから出航させたいんです」

「そうしますと、航路プログラムの書き換えが要りますよ?」

「輸送に必要な作業の他、使用後の給油や破損修理、設定の書き戻し等全てうちで済ませてお返しします」

「期間は?」

「1ヶ月です」

虎沼は腕を組んだ。

うちの船は割と速いが、日本とアメリカを往復するだけでも3週間近くかかる。

荷役時間を見ても1回きりの通常輸送という所か。

しかし、1隻1000tも積載出来るのに、それを30隻もチャーターするなんて・・・

虎沼は声を潜めて恵に問いかけた。

「なんか裏がありそうだよな」

だが恵は笑って囁いた。

「うちは貸すだけ。それを明記してもらいましょ。それに・・・」

「それに?」

「ソロルだよお父さん。まともな訳が無いじゃない」

「確かに」

虎沼は納得したように頷きつつ、マイクに向かって返事をした。

「解りました。契約書に我々は船を貸与するだけと明記して頂けるのであれば請けましょう」

「勿論です。ではFAXで送りましたので確認してください。船は送れる物から順次回送してください」

「え?揃えなくて良いんですか?」

「はい。1隻ずつでも構いませんから出来るだけ早く送ってください。お願いします」

「解りました。では送れる船から送り、本日中には済ませましょう」
「よろしくお願いします」

その時、FAXが受信完了のブザーと共に紙を吐き出した。

「……んー」

恵はぺらぺらとめくりながら喋った。

「今日から1ヶ月間の30隻チャーター、運航に関する一切の責任は鎮守府持ち、鎮守府で満タンにして返却……」

「うん、保険も荷役も修理も向こう持ち。提督のサイン入り。何の問題も無いわ」

虎沼は受け取った紙にサインしながら肩をすくめた。

「30隻も必要な輸送って何なんだ？」

恵は返信の操作をしながら答えた。

「私も気にならないと言えば嘘になるけど、閑散期のありがたい収入。それで良いじゃない、お父さん」

「強いて言えば運賃単価の高い時ならもっと良かったけどね」

「今月は特にレートが下がってるわね。繁忙期の1割にもならないわ」

「底値の時にまとめて運ぼうって事か。じゃあ出航手配を始めよう」

二人は顔を見合わせて頷いた。

余計な事にいつまでも首を突っ込まないのはビジネスの基本だ。

3月5日夕刻、大本営大将の執務室。

「それじゃ一体何の為の防護服ですか!」

激しく机を叩いて抗議する中将の前に、大将は首を振った。

「ダメだ。幾ら防護服を着ても大和達と面会する事は許可出来ない」
「しかし!これだけ長期化し、大和は疲弊の極地にある!せめて顔を見せるだけでも違う筈です!」

「ではその用事を済ませたとしよう。防護服をどこで除染するのか?」

「そりやもちろん・・・」

続きを言いかけた中將が目を見開いたので、大將は頷いた。

「・・・881研の設備は使えんが、どこに持ち込むかね？」

「・・・」

「洗う前の防護服の表面には我々を死に追いやるウイルスが付着しているのだが、それを外に運ぶのかね？」

「・・・」

「中將。私だってあの場に居たのが妻だったらと思うと辛い気持ちはよく解る」

「・・・」

「ここが正念場だ。ソロルの皆はよくやってる。指定刻限のその時まで信じて待つんだ」

「・・・くっ」

拳を握り締めてうつつむく中將から顔を背けると、大將は眉をひそめて窓の外を見た。

鉛色の空は重苦しさしか与えてはくれなかった。

海軍に入ってからここまで無力感を感じた事は無い。

提督の作戦が起死回生の一手となるか、否か。文字通り祈る他ないとは情けない。

同じ頃、テッドのオフィス。

「・・・ねえなあ」

テッドは葉巻の煙をくゆらせつつ、PCの画面を眺めて眉をひそめていた。

オーダーに必要なDeadline Deliveries達をソールに送り出した後から、仮説を検証していたのである。

幾つかのサイトを巡回し、数箇所にかけたが得られる筈の情報に辿り着かない。

諸々の情報が線で繋がっていく中、1個だけ他の情報と合わないのである。

「所長の耳に入れとくか・・・でも今は作戦の方で手一杯だろうから

なあ・・・もうちよいネタ集めするか」

ふと、テッドが見た窓の外は、粉雪の舞う先に夕日が見えていた。「雨なら狐の嫁入りだが、雪の場合はなんて言うんだろうな。今の気分にはぴったりでせ」

葉巻の火を力任せに押し潰すと、テッドは机の引き出しから車のキーを取り出した。

「俺様の調査能力を舐めんなよ。絶対辿り着いてやる」

3月6日夜、柿岩家会議室。

「あーちゃんと一緒に仕事するのは久しぶりよねえ。嬉しいわあ」

「あーちゃんは止めてください。北極圏軍閥総帥殿」

「そんな堅苦しい言い方しなくて良いのに。ほら、いつも通りゆーちやんで良いのよ?」

「オッホンオッホン!では作戦をおさらいします!」

「あらあら、はあい」

防空棲姫が真っ赤になって咳払いする様を見て、元老院の面々は必死に笑いをこらえていた。

元老院のメンバーは全員柿岩姉妹より、ずっと長く生きている。

だから柿岩姉妹が昔から誰と遊んでいたかも良く知っている。

画面の向こうにいる北極圏軍閥の総帥は2代目で、防空棲姫とそれはそれは仲良しである。

互いに大軍閥の長という立場上、その交流は年に数えるほどしか無い。

だが非公式の場面となれば、すぐにあーちゃんゆーちゃんと呼び合う仲である。

とはいえ、今は共同軍事作戦の開始直前という大事な場面だ。

気を緩めてはいけないという防空棲姫の方が言い分としては正しい。

早く済ませて二人が仲良く話せるようにせねばなるまい。

元老院の面々は互いに顔を見合わせ、にこりと微笑んだ。

防空棲姫はやや早口に、一気に作戦の説明を進めていった。

「……これらをコールサイン受信まで続けます。以上よろしいですね！」

それに対し、画面の向こうから聞こえてきた声はあくまでマイペースなものだった。

「ええ、大丈夫よ。あーちゃんにちよつかい出すのは得意ですから」

「ゆーちゃん真面目にやって！」

「うふふ、甘えても良いのよ？」

「失敗したら許さないんだからね！」

「はいはい」

「むぬぬぬうううううう！」

レ級組長が言った。

「まあまあ、落ち着いて落ち着いて。では北極圏軍閥総帥殿、よろしいですか？」

「いつでもどうぞー」

元老院の視線が集まる中、フンと息を吐いた防空棲姫は凜とした声で言い放った。

「作戦開始！進めっ！」

第12話

3月6日深夜、アリューシャン列島近海海底

「・・・チエ。コッチハツーパーア・・・ウン？」

「ドウシタ？」

小さな監視小屋の中で相方とポーカーをしていた海底国軍の兵士の片方が、ソナー音の変化に耳を澄ませた。

「・・・」

相方への返事代わりに片手を上げ、ソナーの前に戻り、幾つか操作をした後に振り向いた。

「AD7ノ海域ニ・・・感アリダ・・・妙ダナ」

もう1人が気だるそうに答えた。

「ドウセ無頼者カ、零細軍閥ガウロツイテルンダロ？放ツトケヨ」

「イヤ・・・」

ソナーからレーダーの操作台に席を移した兵士は一気に顔をしかめた。

「クソ！北カラ大軍ガ海境ニ向カツテ進軍中！ID不明！ウチノ連中ジヤナイ！」

「ナンダツテ？北極圏軍閥ノ連中ガ攻メテキタツテノカ?!」

「IDガ検知出来ナイカラ所属ハ不明ダ！数ハ少ナクトモ1000以上！パートリーダーニ緊急連絡ヲ！」

「ワ、解ツター！」

同時刻、海底国軍北方パート海境防衛センター

オペレータールームの中で、どのオペレーターも次々かかってくる連絡に目を白黒させながら対応していた。

「エエト、海域A Q 6ニ1000体以上、所属不明ノ軍勢ガ海域ヲ南下中デスネ？エツ？A P 6？」

北方パートリーダーはどさりと置かれた書類を前に目をごしごし擦っていた。

「勘弁シテクレヨ・・・」

更に書類を積み重ねた部下は目を三角にした。

「リーダー！早く目ヲ覚マシテクダサイ！報告分ダケデ10万モノ軍勢ガ進軍シテキテルンデスヨ！」

「・・・ウエツフ」

「アアモウ！西パートニ応援ヲ要請シマシタカラネ！」

「ソレデ良イヨ・・・全ク、何ガドウナツテルンダヨ・・・」

北方パートリーダーは叩き起こされた頭を振りながら必死に事態を整理していた。

少なくとも1000箇所海境付近で、1箇所当たり1000体以上の深海棲艦の軍勢が空白海域に迫っている。

1000体以上、というのは海底国軍が保有するリーダーの同時計測数が1000体までだからである。

つまり少なくとも10万体が我々に向かって進軍している、というのである。

どこもまだ空白海域にも達していないが、速い部隊では後2時間程度で越境するペースだ。

今は元首命令で大本営相手に海境警備部隊を日本近海に集中させており、それ以外は完全に手薄。

当然、それらを呼び戻す訳には行かない。

越境に間に合う次の最寄りには西側の警備を担うセンターであり、そこに援軍を頼んだのである。

だが・・・

北方パートリーダーは首を傾げた。

北極圏軍閥とは当然不可侵条約を結んでるし、元々北極圏軍閥は極めて温厚な連中だ。

そして奴らの戦い方はホームである酷寒の海に敵を誘い込み、凍らせて始末するというものだ。

だからこちらが余計な越境行為さえしなければ平穏なものだった。

事実、今まで1度たりとも攻め込まれた事などなかった。

「・・・マサカ」

北方パトリダーの頬を冷たい汗が流れた。

攻勢ウイルスを北海道沖で艦娘に向かって散布したが、まさか北極圏軍閥の連中まで感染したのか？

そしてそれを我々の仕業だと気づき、怒り狂って進軍してきたというのか？

ならば10万どころか50万を越すと言われる全軍で進撃してきている可能性だってある。

北極圏軍閥海境警備部隊の錬度は高い。我々の精鋭部隊と海境争いが出来るのだから。

決して戦えない連中じゃない。あえて戦わないだけだ。

全軍で来られれば今居る3万体の警備体制では到底押し返せない。

いや、海境警備部隊が全員揃ってても厳しいだろう。

「ホ、本部へ連絡スル！シバラク部屋ニ入ルナ！」

北方パトリダーはコールセンターの様子をちらりと見て、ぶるっと震えながら自室のドアを閉めた。

3月7日0400時、ソロル鎮守府工廠。

「作戦開始1時間前です。各チームは進捗状況を報告してください。繰り返し、作戦開始1時間前・・・」

電子アナウンスがひっきりなしに鳴り響き、それをかき消すかのようには作業音が鳴り響く。

工廠付近は船がみっしり詰まって並んでおり、次々と作業が施されては出航していく。

鎮守府の妖精に加え、普段は日向達の基地で艦娘化作業をしている妖精達も加勢しているがギリギリだ。

溶接の火花があちこちで滝のように流れ落ち、すぐ近くの船からは揮発性溶剤の匂いが漂っている。

通常であれば

「安全確保せんか馬鹿者！」

と工廠長が怒鳴るような有様だが、今はそうも言ってもらえないのである。

ガシヤツ!

メンテしたMP7にマガジンを叩き込んだナタリアは、同行するメンバーをぐるりと見渡した。

フィーナ、ミレーナ、フローラ。

艦娘時代からずっと一緒に戦ってきた、阿吽の呼吸で動いてくれる部下。

こういう時は何よりも頼れる、心強い存在だ。

「落ち着いてチェックしてね。充分猶予はあるわ」

「はい」

その時、ナタリアは背後から声をかけられた。

「チームブラボーはアンタ達だよな？」

第13話

3月7日0400時、ソロル鎮守府工廠。

ナタリアが振り返るとスパナを手に溶接用ゴーグルを頭に寄せ、頬を機械油で汚した加古が立っていた。

「そうよ。何かしら？」

「言い忘れてたから今言つとくよ。アンタ達が乗る船は競技用パワーボートも真つ青な代物だ」

「・・・」

「サインランプがつくまでは出来るだけ首を動かさない方がいい。あ、シートベルトは絶対に外しちゃダメだよ」

「そう・・・」

ナタリアは返事をしつつ加古を見ていた。

見返す加古の目は静かで深い色をしていた。

これだけの一大事の中、これだけの喧騒の中、ナタリアにはこの落ち着きがとても奇異に映った。

ナタリアは目を細めた。

「・・・あなた、鎮守府所属の艦娘よね。それにしても色々知ってる目だわ」

「今は、ね」

ナタリアはとっさに身構えた。

「・・・出ていくつもりなの？」

加古は苦笑しつつ首を振った。

「逆。アタシは提督が拾ってくれる前に1度沈んでる。だから深海棲艦の経験もあるの」

「・・・」

「アタシの目に何かを感じるなら、そういう事だと思うよ」

ナタリアは聞き忘れた事を思い出した。命に関わる大事な質問だ。

「ねえ」

「うん？」

「海底国軍は本気で数千から数万の徒党を組んで追いかけてくるのよ」

「知ってるよ。昔、うっかり領海に入って死にかけてたからね」

「・・・この船、本当に目的地までもつんでしょうね？」

加古の瞳の光が消えた。

「提督を困らせる奴はアタシが噛み殺す。提督が欲しがらるなら何であつても、何が何でも用意する」

「・・・」

加古がニイツと笑った。

「提督が、あんたらを、あの地点まで運ぶ船を作れと言つたんだ。アタシが逆らう訳無いだろ？」

ナタリアは深い色の意味を理解した。

それは濃い、とてつもなく濃い忠誠心だ。もはや狂信的ともいえるレベルの。

この海域の連中は、艦娘も、深海棲艦も、一体どうなってるんだ。ナタリアはごくりと唾を飲み、応じた。

「・・・オーライ、貴方を信じるわ」

加古が元の目に戻り、にこりと笑った。

「ありがと。あと、チームブラボーが乗る船は・・・ほら、右から2つ目だよ。もう出来てるからね」

「ええ」

「さて、あと3隻か！いづくぞー！」

慌しく去って行く加古の後姿を見つつ、ナタリアは思った。

もしミツシヨンに失敗し、提督が私達を見て悲しげに溜息をつけば、その時点で命は無いも同然だ。

あの加古が目を見開き、牙を剥いて飛び掛ってくる姿が容易に想像出来る。

これから対峙するであろう数万体の海底国軍海境警備部隊より、たった一人の加古の方が恐ろしい。

身震いするような相手は久しぶり、本当に久しぶりだ。

ナタリアはニヤリと笑った。

良い、ゾクゾクする。戦場特有の昂ぶりだ。

「・・・ボス？」

振り返ると、フィーナ達が装備を整えて指示を待っていた。軽く息を吸って感情を抑えつつ、ナタリアは言った。

「OK、皆聞いて。乗船する船はかなりのGと衝撃が予想されるわ」

「はい！」

「サインランプがつくまでしっかり座り、シートベルトを外さず、最初から酸素マスクを着けておくこと」

「はい！」

「今回は私達がMADFでやってきた事の復習みたいなものよ。1つ1つ対処していきましょう」

「はい！」

「久しぶりに皆のガンマンとしての腕が見られるわね。ロウライフに遠慮は無用。楽しむ用意は良いわね！」

「はい！」

「さあ行くわよ！乗船開始！」

こうしてナタリア達は用意された船に乗りこんで行った。

3月7日0515時、海底国軍西方パート海境防衛センター

「チクシヨウマー！」

バン！

西方パートリーダーは机を叩きつつ、朦朧とする頭を必死に左右に振っていた。

真夜中に北方パートの海境付近に突如集まってきたという謎の大軍勢に应じる為、緊急支援要請を受けた。

かき集められるだけ集めた部隊を送り出したのが2時間前。

今は残った部隊で警備部隊の編成計画をやりくりしてる真っ最中だった。

なのに、今度はワープする船の出没だと？

「IM059630202」

これが西方パートリーダーを悩ませる元凶である。

IMO番号とは、船のナンバープレート的存在である。

人間が建造する船舶と艦娘は全員所持しており、廃船になるまで1つの番号を使う。

深海棲艦でも軍閥を明確化する為、IMO番号に順ずるナンバーを記している艦は多い。

ゆえに海底国軍の海域に侵入した船は、このIMO番号を使って位置情報を組織内で共有し、効率的に追撃する。

日々の越境数は手動で対応出来る数ではない為、センターには自動対応するシステムが備えられている。

海境警備部隊が越境船の写真をセンターに送れば、そこからIMO番号を抽出し、ターゲットとして登録する。

だが。

先程からセンターに越境船として報告される船が、ことごとくIMO59630202という番号なのである。

同じIMO番号だった場合、システムは情報のアップデートとみなし、最後に届いた位置情報で上書きする。

そして前回の位置情報から線を引く。

普通なら刻々と1本の線で描かれていくのに、それが広域の海図上でスパゲティのように描かれている。

まるで幼稚園児が画面上に水色のクレヨンで絵でも書いてるかのようだ。

第14話

西方パートリーダーは疲れきった様子で頬杖をついた。

「一体ドウイウ事ナンダ・何隻モ同ジIMO番号ヲ持ツ船ガ居ルノカ？」

だが、海境警備部隊が送ってきた船舶の写真を見る限り、全く同じ船にしか見えない。

多少色に濃淡があるような気もするが、日が昇る時間だから朝焼けに染まっているのだろう。

それに、もし違う船なら積荷のコンテナの位置や船体の傷の場所まで同じな訳が無い。

だが、同じ船が5分後に85海里も離れた場所に移動出来る筈が無い。

「モウ止メテクレ・徹夜明ケデ疲レテルンダヨ・大人シク編成サセテクレヨ・俺ハ寝タインダヨ・」

オペレーターが振り向いた。

「リーダー！警備部隊N232ガ新タナ越境船ヲ発見！バ、番号ハ：ソノ・」

「皆マデ言ウナ。モウウンザリダ」

「ド、ドウシマスカ？コノママデハ引キ離サレル、応援求ムト言ツテマスタガ！」

そう。

普通の船であれば各現場に見つけ次第沈めろと通達してあり、ほとんどはその場で済んでしまう。

多少侵入出来たとしても隣接域の部隊が急行するので包囲して撃ちまくればいい。

しかし、この厄介な船は猛スピードで突入してくる。

海境警備部隊が装備しているスピードガンの上限である99ノットを余裕で超えてくる。

あまりにも速すぎるので高速型魚雷さえ振り切られてしまう。

そして分身の術でも使えるのかというくらい左右にも高速で移動する。

砲弾を高密度に撃てば一瞬で横っ飛びして回避されてしまう。

ならばと広範囲に撃てば弾と弾の間を器用に縫って進み、同じく避けられてしまう。

通常弾より低速で距離も飛ばないペイントマーキング弾なんて全然当たらない。

行く手を遮ればすれすれを掠められ、通過の際に衝撃波と巨大な波で為す術も無く吹き飛ばされてしまう。

さらに今どこに居るのかという情報を次々とシステムが書き換えてしまうので支援部隊はパニック状態だ。

保有している空母や戦艦は緊急時のマニュアル通り、残らず北方に回ってしまった。

手元に残したのは軽巡と駆逐艦であり、艦載機が使えなかったのである。

せめて軽空母の一部だけでも残せば良かったと悔やんでも時既に遅し、である。

「俺ハ確カニ昨日晩酌ヲシタサ。ダガニ日酔イニナルホド飲ンジヤイナイ。頼ムカラ覚メテクレ。」

西方パトローダーはこみ上げてくる酸っぱい物を懸命にこらえていた。

一体なんだってんだ。もう目が回ってきた。

3月7日0530時、ウエーク島近海

ガボン!

一瞬の無重力感がやってきた後、急激な減速Gと沈下する動きを感じた。

やっぱり轟沈したかと、ナタリアは肩をすくめた。

海底国軍の領海に堂々と船で入るなんて無茶も良い所だ。

さて、簡単に死ぬつもりは無いわよ。

どうにかして生き延びて加古に拳骨くれてやらなきやね!

ナタリアがフンと息を吐いた瞬間、サインランプが点灯し、水深1mと表示された。

「・・・えっ?」

ナタリアは表示を疑ったが、それでも酸素マスクを外し、フィーナ達を見た。

見返した3人ともが戸惑いの目をしているが、指示通りに動いていた。

ナタリアは返事代わりにシートベルトを外し、変身を解いた。

ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!

水深3mの表示と共にアラートが鳴った。あと2m沈めばゲートが開く。

本当に到着していれば、目の前に製薬プラントがあるはずだ。

ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!

ガコン!・・・ザバアアアアアア

開き始めたゲートの隙間から勢い良く海水が浸入して来た。

ナタリア達はゲートが開ききるのを待ち、周囲を見回しながら外に出た。

本当に・・・あるわね・・・

ナタリア達の目の前には、海面まで届きそうな巨大なプラントが立ちはだかっていた。

ふふっと笑ったナタリアは、沈み行くコンテナを蹴って海中へと進みだした。

そのナタリアに続きながら、フローラは頭を振り、めまいを振り払っていた。

ナタリアが警告した通り、お世辞にも船の乗り心地は良くなかった。

鎮守府を出航し、越境時刻直前からむぎゆつとシートに押し付けられた。

加速度としては速いが常識的な物であり、最初は違和感も感じなかった。

だがその加速度が全く衰えず、いつまでも加速し続けている。

えっ？ちよつ、何ノット出るのこの船・・・こんな速度で制御出来るの!?

フローラの懸念に対して突然回答がもたらされた。

左から巨人に金属バットでぶっ叩かれたかと思うほどの激しい加速度が突如かかったのである。

魂と実体がずれるんじゃないかと思うほどに。

「グウツ！」

戦闘機のミサイル回避訓練で2Gの世界を経験しているフローラでもきつかった。

それも1度や2度ではなく、数えるのを諦めるくらい続いた。

フローラは正面のモニタの写るプログレスバーに意識を集中していた。

到着まで82%、83%、84%、85%・・・グウツ・・・は、86%、87%・・・早く・・・

だから100%になったと同時に着水のショックを感じた時、全てが赦された気さえた。

出来る事ならこのまま3日位眠りたかったが、これからが本番だ。

ミレーナはフローラの後を泳ぎながら、作戦説明を思い出していた。

自分達は自動操船式の高速艇に積まれたコンテナの1つに乗り込む。

コンテナとは外観だけで、中は固定座席や酸素マスクの装備された待機室になっていた。

水深20m前後の浅い海底に建つプラントに潜入する。

追っ手を引き離す為、無人操船の船は目的地に着いても止まらず進んでいく。

目的地海上で荷崩れを装う形でコンテナがパージされ、我々はコンテナごと海に沈む。

丁度水深5mに到達したらゲートが開くので作戦を始めて欲しい、と。

ミレーナはジト目になった。

そりや無人操船も当然だ。

あんなもん操ろうものなら5分も経たずにブラックアウトしてぶっ倒れる。

なんてものを作るのよ、あの変態鎮守府！

フィーナは列の最後を進んでいたが、振り向いたナタリアに手信号を送った。

ナタリアは皆の信号を見て頷き、手信号で返した。

周囲に敵反応なし、か。

私も同じ答えだし、これだけ綺麗な海なら見落としても無いでしょう。

ナタリアはちらりと上に揺らめく水面を見た。

それにしても綺麗な海ね。いつかファッゾと二人で来たいなあ．．

ナタリアはふと、反対側からやってきたもう一つの集団を視界に捕らえ、手で合図した。

基地の侍従長を筆頭とし、別の船でやってきたチームアルファの面々だ。

チームアルファの面々はプラントの周囲を慎重に泳ぎながら、侵入口を探していた。

水中にある以上、あまり浸水させたくは無い。正規の入り口が使えるなら使いたい。

だが常識的に考えて、最も警戒が厳重なのは入り口である筈だ。ならば。

調べた結果に満足した侍従長は、ナタリアの傍まで来ると屋根を指差した。

ナタリアは一瞬きよとんとしたが、すぐに頷くと、フィーナ達に合図した。

ドズン！

チームアルファの仕事は繊細かつ丁寧だった。

周囲の海中を警戒するチームアルファの間を縫って、破られた屋根から侵入した先は廊下だった。

プラント内では浸水を知らせるアラートが鳴り響き、廊下の左右で

は頑丈なゲートが閉じ始めていた。

「右か・・・いや、左の方が近い！」

いつもの姿に化けながら、ナタリアは左のゲートへと駆けだした。

「左！急いで！」

「はい！」

最後のフィーナが間一髪でゲートをすり抜けた頃には、ナタリア達は既に警備兵との銃撃戦の真っ最中だった。

フィーナはミレーナの肩を叩き、廊下の反対側にあるドアを指差した。

ミレーナの援護射撃が始まると、フィーナはドアを蹴破って部屋に飛び込んだ。

「・・・」

フィーナは身を屈めたまま窓際へと駆け寄り、小型の鏡を使って部屋の窓からその外を写し見た。

そこはまさに製造工場というべき、オートメーション化された大型の機械が所狭しと並んでいる。

01、02と番号がつけられた棚が並び、そこにロボットがケースを次々と出し入れしている。

「ウイルス？ワクチン？治療薬？」

「どれがどれだ？」

第15話

パパパツ！パパパパパパ・・・

突然、フィーナの頭上から粉々に割れた窓ガラスが降ってきた。

フィーナは鏡を引つ込め、頭を庇いながら壁を見つめた。

この音と弾痕だと・・・5・56mm NATOか。

向こうがフルオートでライフル弾を撃ってくるなら、建物は撃つて問題ないってことよね！

フィーナは一瞬の切れ間について反撃した。

フィーナの発射した3発の弾丸は正確に警備兵2体を天国へと導いた。

「・・・強化されてるわけではない、か。普通の深海棲艦ね」

背後から声がした。

「そっちはどう？フィーナ」

「2体片付けました。通常艦装のようです」

「こっちも15体始末したわ。防弾装甲くらい追加してるかと思ったんだけど」

そう。

深海棲艦も艦娘も通常兵器では歯が立たない、というのはおとぎ話である。

まず、艦船や航空機に搭載されている対艦用レーダーでは、深海棲艦や艦娘は小さすぎて反応しない。

また、数キロ先の高さ2mも無い、潜水可能で海面色に似た深海棲艦を目視で見つけるなど絶対に不可能である。

これが「見えない敵」という誤解を生んだ。

次に、海上では艦船の常識を超えた挙動で移動出来る為、艦砲等の大型兵器で攻撃しても着弾前に避けられてしまう。

そもそも直径1m程度しかない対象物に命中させられる精度など無いのである。

ならばと大型爆弾を用いても、海に潜って手順に従って対処すれ

ば、ほぼノーダメージでクリア出来る。

かといって狙撃銃やライフル等の対人兵器を用いようにも、それらの射程圏内に入る前に逃げられてしまう。

仮に接近出来て身体に当てられたとしても、艦装が自身ならびに船魂の状態を加味して身体を再構成してしまう。

そして艦装は基本的に分厚い金属の塊であり、対人兵器を適当に着弾させても損傷しない。

以上の理由から、「近代海戦用」レーダーでは見つけられず、「近代海戦用」兵装ではダメージを与えられない。

ゆえに近代海戦用の最新兵器は万能だと信じていた人類には「攻撃の通じない化け物」と写ったのである。

昆柀所長と海底国軍元首の異様なまでの執念が生み出した特殊なシステムだが、得体の知れないものではない。

そもそも、もし攻撃が一切通じないなら艦娘が深海棲艦を、あるいはその逆を攻撃出来る筈が無いのである。

では、艦娘と深海棲艦はどうやって戦っているのか。艦装には必ず、脆弱だが壊されてはならない「クリティカルポイント」と呼ばれる場所が出来てしまう。

例えば可動部の継ぎ目は装甲が弱いのに、内部に重要な配管や配線が通っている箇所がある。

煙突に爆発物を放り込まればより中枢に近い部分に損傷を受けてしまう。

深海棲艦が主砲や航空機を使うには耐水ゲート（口のように見える部分）を開けねばならないが、内側には可燃部もある。

艦装で最も重要なのは船魂とのインターフェースである「コア」と呼ばれる装置である。

「コア」が壊れると霊力の支援が得られなくなつて身体が形成出来なくなり、艦装が停止し、洋上航行が不可能となる。

これが轟沈と呼ばれる状態であり、艦装と船魂が分離してしまうので、艦装だけ持ち帰っても復旧は不可能となる。

従つて、敵艦種をいかに早く特定し、いかに早く「コア」を壊せる

かが攻撃の要点である。

逆に、いかに艦種を悟られず、「コア」を守り抜くかが防御の要点である。

この為、艦娘側も深海棲艦側も敵側に知られてしまったクリティカルポイントは対策を打つ。

例えば他の船から艀装の煙突を貰い、自分の艀装に加工して組み込むといった細工を近代化改修と呼ぶ。

より幅広い、あるいは抜本的な対策は艦娘なら改や改2、深海棲艦なら後期型などと呼ばれる。

ただし大掛かりな対策ほど加工に高い技術や設計図が必要とされるし、加工後の艀装は取扱いがシビアになる。

艦娘に高い艀装取扱いレベル(Lv)が求められるのはその為である。

このように艀装の状態管理は大変重要であり、たとえ新米の司令官でも損傷を見逃してはならない。

その為、やむを得ず、やむを得ず、最も目立つ服の損傷にてダメージを表現するしかなかった。

決して紳士的な理由ではありません！
そう、初代881研昆柊所長はキリツとした顔で拳を握り締めて強

調したそうである。

だが艦娘達は全く納得しておらず、昔から艦娘達が不満に思う事のトップである。

他にやり方があるでしょと幾ら訴えても、海軍の面々は小さく咳払いをして目を逸らすだけである。

この「悪しき仕様」は海外への技術供与においても脈々と受け継がれている。

ゆえに艦娘の間では洋の東西を問わず大変盛り上がる定番の話題であり、881研の評判が芳しくないのである。

更に記すと、船魂の霊体イメージが一定である為に艦娘は年を取らない。

一方でこの霊体から具現化する機能を進化させたのが一部の深海

棲艦が持つ「化ける」能力である。

艦娘にしろ、深海棲艦にしろ、生成後の身体の維持に必要なエネルギーは飲食等から得る。

艦装は機械ゆえ、燃料で動き、修理には鉄鋼石やボーキサイトを必要とする。

つまり艦娘や深海棲艦が生活していくには、食事と資源のそれぞれを補給していく必要がある。

そして艦装の制御、思考や記憶といった部分を司る船魂のエネルギー源は何かというと「需要」である。

ゆえに鎮守府には艦娘を明確に必要なとする象徴たる「司令官」が必要とされるのである。

深海棲艦が凶暴なのは、「需要」を攻撃する事で他者に認知してもらう事をもって代用しているのではないか。

881研は過去にそのような説も含め幾つか提起しているが、いずれも推測の域を出ていない。

さて。

以上を踏まえると、何故龍田や天龍、木曾といった面々が帯刀しているかもお分かり頂けるだろう。

敵の懐に飛び込んで正しくクリティカルポイントを攻撃出来るなら、武器は刀でも良いのである。

更に言えば、現代的な武器である銃器類でも全く構わない。

全ての艦娘ではないが、接近し、かつ正確に狙えるのなら拳銃弾程度のパワーでも壊せる所はある。

提督がブローニング1910で他所の鎮守府に所属していた天龍に対し攻撃を加えた顛末は以前記した通りである。

では、なぜ兵装があるのにナタリア達はMP7等の対人兵器を使うのか。

駆逐艦の有する12cm砲でさえ建物を崩してしまう恐れがあり、さらに遠距離攻撃専用ゆえ屋内戦には向かない。

ナタリアの持つ主砲ともなればビルごと瓦解させてしまうから自身も死の危険が生じてしまう。

ゆえに、屋内戦といえは対人兵器による銃撃戦、あるいは刀剣類による戦いとなるのである。

第16話

3月7日0545時、ウエーク島近海

ガシヤツ!

HK45CTに新しいマガジンを叩き込むと、フィーナはスライドロックを解除し、チャンバーに弾を送り込んだ。

身軽に感じるという事は残弾が乏しくなってきたという事で、あまり良い兆候ではない。

実際、MP7の弾はあと一マガジン分しかない。これは万への備えだから使いたくない。

だが・・・

耳を澄ませても、プラントの機械が放つ低いファンの音と、銃撃で破壊された機械のカタカタという音だけだ。

ようやく制圧出来たか？

これだけ警備員を配置しているからには重要な施設に違いないだろうが・・・

ふと、ナタリアが手招きしているのに気づいたフィーナは駆け寄って行った。

「ここがオペレーションルームのようね」

ナタリアとフィーナは無人の室内に入ってしまった。

その入口にはフローラとミレーナが立っている。

「ここにお目当ての物があれば良いんだけど・・・」

フィーナは設備管理モニタに記された略称を眺めていた。

これはロボットキャリアよね。UPSは無停電電源装置、MIXは攪拌機かしら。

CENは・・・この大きさからすると遠心分離機か。

とすると・・・ここに大量に並んでいるCSってなんだ・・・

ナタリアの声が出た。

「フィーナ、そこにCSS3とか4とか無いかしらっ?」

「あります。我々の真下です」

「それがウイルスを保管する棚よ。CS1から9がウイルス、10から19がワクチン・・・かしら」

「ここからは階段で繋がってて・・・1箇所電磁ゲートがありますね」

「待って・・・あー、CSってCULTIVATION SHELFの略か。なら一番最後の棚が完成品ね」

「プラントにはCSとは別にMSというのが1から9まであるんですが」

「何かしらね・・・見てみましょうか」

フィーナは壁にかかっていたカードホルダーを手に取った。

「ゲートはどれかで開くでしょう」

ナタリアが頷いた。

「フローラとフィーナでプラントに降りて。ミレーナは入口の警戒。

私はここから二人を誘導するわ」

「はい！」

二人はゲートに向かって駆け出した。

ピーッ！ウイイイイイイイイ・・・ン・・・ガコン！

フィーナがかざした2枚目のIDカードでゲートは開いた。

ナタリアがデジタル無線機に話しかける。

「フローラ、その次の棚がCS8よ」

「了解ボス。これがCS8ですね？」

「ええ、今左手で触ってるのがCS8、右手が9よ」

「了解。私が警戒します」

フローラが周囲を警戒する中、フィーナはCS9の中を見た。

「BIO HAZARD LEVEL4」

目立つように赤く、禍々しきさえ感じる警告シールが張られた、低いモーター音のする棚。

そこには病院でよく見るような、注射用のアンプルにも似た容器の中に透明の液体が青白い照明に照らされていた。

ここにウイルスがぎっしり詰まっているかと思うと身の毛がよだった。

ふと、棚の下部を見るとジュラルミン製のアタツシユケースが仕舞ってあった。

取り出して開けてみると、容器と似た形を含む、様々な形の穴が開いたウレタンが敷き詰められている。

フィーナは頷くと、アンプルを3本取り出し、アタツシユケースに収め、フロローラに頷いた。

「次は19・・・でしたね。誘導してください」

CS19ではCS9とは別の形の容器に、薄緑色の液体が入っていた。

「確かに色が違うけど・・・これが本当にワクチンなのかしら・・・」

フィーナはアタツシユケースの穴と比較し、同じ形を見つけてそこに5本差し込んだ。

「入れました。あとはMSですが・・・」

MS1から9は少し離れた場所に置かれていた。

今までと違って棚も一般的な開放棚のような形だし、なにより・・・籠の中身は白い錠剤ですね」

「錠剤の包装も普通の薬みたいだし・・・なんか頭痛薬とか、そんな感じね」

「それに随分大量にありますねえ」

「籠1つで・・・ざっとみて2000錠位か」

フィーナは無線機に話しかけた。

「ボス。これが治療薬かもしれません。この1籠で2000錠位です。多めに持ち帰りませんか?」

「アタツシユケースに入る?」

「ええ・・・2籠分は入りますね」

ナタリアは少し考えると

「まず、アタツシユケースにはきっちり入れて。あと、別に持てるだけ持ってきて」

「はい」

「・・・んー、マガジンホルダにも100錠は入るかなあ」

「頑張れば1人1万錠は持てそうですね」

「入れられる分だけで良いわ。残り時間も少ないし・・・ん？」

「どうしたんです？ボス」

「・・・」

ナタリアは机の上に置かれていた書類を読んでいたが、そのまま折りたたみ、懐に仕舞った。

その時、ナタリアの腕時計のアラームが鳴った。

「・・・0615時。時間切れね。ここにもう用は無いわ。撤収よ」

「はいー！」

ドガン！

変身を解除し、突入場所からやや離れた壁を砲撃して水中へと戻ったナタリア達は、侍従長達に手で合図した。

そのまま海面へと登った所で、侍従長がナタリアに話しかけた。

「時間ギリギリダツタノデ心配シテマシタ。如何デシタカ？」

「必要ナ物ハ手ニ入レタト思ウワ。ケドネ・・・」

「ケド？」

「アレガ本当ナラ、チョット許セナイワネ・・・」

「？」

「アー、エツトネ・・・エツ？」

首を傾げる侍従長に説明しようとして、ナタリアは1点を見つめ、ぽかんと口を開けた。

「・・・嘘デシヨ？追ツ手ヲ撒イタツテイウノ？」

その視線の先にはここまで来た時と同じ、

「IMO59630202」

という船体番号をつけた船が減速しつつ近づいてきていたのである。

侍従長が首を振った。

「恐ラク別ノ船デシヨウ。迎エモ同ジ番号ダト提督ハ仰ツテマシタカラ」

「・・・迎エ「モ」・・・カ。ソウ言ワレレバソウダツタワネ」

自分達のすぐ傍で停船し、ゲートが開いたので、

「皆乗船シテ！シートベルト忘レズニ！」

と、ナタリアは言ったのである。

第17話

「海底国軍ごくろーさん計画」

提督が皮肉たつぷりにつけた作戦名である。

まず、地上組に依頼し、ウエーク島近海の警備が手薄になるよう、隣接海域にて越境騒動を起こしてもらう。

越境してしまうと協定違反で大戦争になってしまうので、海境ギリギリまで大軍勢を迫らせては引き返す。

引き返したかと思うと別海域でまた寄って来るといいうのを繰り返してもらった。

一方で、虎沼海運から借り受けた30隻の輸送船を、架空の船会社のカラーリングへと塗り替え、

「IMO59630202」

という同じ船体番号を付与し、コンテナの積み方も、傷も、全く同じに仕上げた。

地上組が引き付けたのを見計らった上で、この30隻を様々な位置からタイミングをずらしつつ突入させた。

その中の2隻に侍従長達アルファチームとナタリア達ブラボーチームが乗っていた。

それぞれの船が全く別方向を目指すか、その2隻がウエーク島付近に寄った時点で一齐にコンテナを取り落とす。

パージされたコンテナから両チームがプラントに向かい、合流する。

チームアルファが周囲の掃討と警戒、チームブラボーが強行突入し内部で重要と思われる物を片っ端から奪取する。

帰還した両チームを生き残った船のうち最も近い所に居る1隻が迎えに行く。

残りの船は迎えに行った船を領海の外に逃すまで再び攪乱行動に出た後、海底国軍海域内で木っ端微塵に自爆する。

地上組には両チームがソロール鎮守府に帰還した時点で海境付近か

ら撤退してもらおう。

虎沼海運には残る借用期間内に30隻を新造し、元のカラーリングとIMO番号をつけて返却する。

こういう作戦だった。

ちなみにIMO番号は

「ごころーさんおつおつ」

という語呂合わせである。

「ひとつ海底国軍をおちよくつてやろうと思うんだが、イタズラに付き合ってくれないか？」

提督はこの作戦を最初にそう表現し、一瞬きよんとした一同はニヤリとして頷き返した。

なお、この作戦では輸送船が残存するだけでなく、敵を引き離し、パニックに陥れる事が非常に重要となる。

その為、最上・加古・夕張が予算無制限で何をしても良いからとにかく実現してくれと提督から頼まれた。

輸送船の機関系は勧誘船の流れを汲む為元々マッチョであり、満載時でも50ノット程度は出せる。

海底国軍の領海を横切る太平洋航路を航行する為には、このぐらいのスペックが必要なのである。

そして酷使される事を想定し、耐久性はたっぷり余裕を持って作られていた。

その推進系を2並列化してカリカリのハードチューニングを施し、制御プログラムも過激な設定へと書き換えた。

単に積んでるようにしか見えないコンテナも衝撃に備えてパージシステムとガチガチに溶接。

一方で内装で不要な物は徹底的に取り外すといった軽量化も行われた。

見た目は薄汚れた貨物船、中身は化け物という組み合わせはさながらラリーカーのようである。

「本当は固形燃料式のロケットエンジン入れてマッハー1に届かせたかったんだけど、時間が無くて・・・」

最上は後日、そう言って残念そうに肩をすくめたが、長門は静かに首を振ったという。

なお、本作戦で被弾した船は無く、帰還した1隻を除く29隻は計画通り洋上で突如自爆した。

自爆した貨物船の煙と、越境する事無く急に去っていった北からの大軍。

海底国軍の面々はそれらを呆然と見つめていたが、散々振り回された挙句に何だったのかさえ把握出来なかった。

ゆえに、製薬プラントから音沙汰が無い事に気づいたのはずっと後の話だったという。

話は現在に戻る。

3月7日0705時、ソロール鎮守府

輸送船からよろめくように下りてきたナタリア達は、波止場で座り込むと荒い息を吐いていた。

水の入ったボトルを手渡した長門に、ナタリアは代わりにアタツシユケースを差し出した。

「・良い？き、3本入ってる液体がウイルス、5本入ってる液体がワクチン、じ、錠剤は治療薬。推定だけどね」

「解った。早速東雲組に解析してもらおう」

「空気感染する・ゲホゲホツ・ウイルスだから気をつけて」

「解っている。ところで・感染したのか？」

「違うわ・船酔いよ。それと、提督は・どこ？」

「提督室で今電話しているが・顔色が真っ青だぞ？大丈夫か？」

ナタリアは力なく笑った。

「長門・貴方も機会があればあの船に乗ってみると良いわ。船の挙動としてありえないから」

長門は真顔で頷いた。

「そうだな。最上と加古と夕張がタッグを組んで制限無しで改造した代物だから察しはつく」

「帰りは言われたとおりキャビンのシートに座って帰ってきたから外が見えたんだけど・」

「ああ」

「なんていうか、周囲の景色が残像になるというか、慣性の法則無視してるんじゃないかって勢いだったわ」

「それはもう誰かを乗せる船ではないな。本当に申し訳なかった。鎮守府を代表してお詫びする」

「いいえ、怒ってないわよ。あれくらいじやなきや連中の攻撃振り切るなんて無理だったろうし」

「どのくらいの数、敵はいたのさ？」

「帰りだけで軽く見積もって500体くらいの部隊が4つ・いや5つか。海底国軍にしちゃ少ない方よ」

「そうか・・・」

「私はここでちよつと休んでから提督と話すわ。長門はそれをお願い」

「解った。任せろ。提督室には文月が居る。貴方達が行くと連絡しておこう」

「ありがとう」

長門が東雲組の診療所に向かって走っていく後姿を見ながら、ナタリアはボトルから水をがぶ飲みした。

空のボトルをくしやりと潰しつつ呟いた。

「運び屋の任務にしたって度が過ぎてるでしょ・・・こんなの二度とやりたくないわ」

ナタリアは口の周りについた水滴を腕でぐいと拭った。

その頃。

「所長、最初の鎮守府の報告が離島ってんなら解りますが北海道ですよ？おかしいと思うんです」

「うむ・・・大山さんの読みは合ってる気がするね」

「俺の話はこれだけです。作戦遂行中のお忙しい所、すみませんでした」

「いや、良く知らせてくれた。ありがとう。ところでどうだろう？これが終わったら復職の手筈でも・・・」

ツーツ・・・ツーツ・・・ツーツ

「ああ・・・つれないねえ」

そう言つて提督は軽く溜息をついて受話器を置いたが、言葉と裏腹に頬をピクピクと震わせ、拳を握り締めていた。

文月はそつと提督の様子を伺っていた。

電話の内容を聞いてから急激にお父さんは怒り始めた。

でもテッドさんには最後まで丁寧に応じていたし、矛先はテッドさんじゃないような・・・

コンコンコン。

「はいー」

文月が振り向くと、そつと開いたドアの先にナタリア達が立っていた。

「あ、お帰りなさい。お父さん！ワルキューレの皆さんです！」

その言葉で気配をふつと切り替えた提督は両手を軽く上げた。

「やあやあ、皆さんお疲れ様でした。補給は済んでますか？入渠は必要ありませんか？」

「それはこの後にしますわ提督。あと、持って帰ってきた薬品類は長門さんに渡してあります」

「んー・・・では私に何かご相談ですか？」

ナタリアは懐から持ち帰った書類を取り出した。

「こちらをご覧頂きたくて」

1枚・・・また1枚

紙をめくるごとに増していく殺気に、フィーナは思わず唾を飲んだ。

先程まで穏やかだった提督が、今は本気で怒ったナタリア並の迫力だ。

「・・・文月」

「はい」

「この文書を、中將と大将に、極秘暗号で送ってくれ」

「・・・解りました」

文月は書類を受け取ると、小走りに部屋を出て行った。

第18話

3月7日0720時、ソロル鎮守府提督室

提督は席につき、顔の前で両手を組みつつ、ナタリアに話しかけた。

「・・・さつき、大・・・ああ、テッドさんから連絡があったんだ」

「あら、町で何かあったのかしら？」

「いや。彼は世間が静か過ぎると言ったんだよ」

「静か過ぎる？」

「未だに北海道や東北の新聞では一言も、インフルエンザなり風邪なりの大流行といった記事が無いそうだ」

ナタリアが眉をひそめた。

「さらに北海道内の保健所に問い合わせても、人間で風邪を引いた患者の急増は確認されていない」

「私達の取引先は東北辺りまで連絡がつかなくなっているのに・・・」

「そう。罹患した艦娘の居る鎮守府はもう北関東まで達してるから、そちらと流行状況はほぼ同じと見て良いだろう」

「ええ」

「その裏づけとして、深海棲艦や艦娘向けの病院は東日本全域でパンク状態だとテッドさんは言っていた」

「・・・」

「ダメ押しすれば、最初に罹患報告のあった鎮守府でも司令官は最後の瞬間までまともな受け答えをしていた」

「・・・つまり」

「人間には感染しない可能性が濃厚だ。そしてもう一つ、テッドさんは言ったんだよ」

ナタリアは提督が深く怒る矛先を理解したので、黙っていた。

「だとすると、881研の主任がこのウイルスによって倒れた部分だけ説明がつかない、とね」

「血を吐いて咳き込んでいた・・・それそのものが嘘」

「そうだ。研究施設と主任を失い、人間に感染すると誤解した事で、大本営の対応は非常に後手に回った」

「もし偽装工作ならそれで誰が得するかって事だけど、プラントにあつた書類から考えれば当然よね」

「ああ。なにせあのウイルスのデザイナーとして」

「881研の主任のサインがあつたんだからな」

提督がハツとしてインカムをつまんだ。

「文月！まだ通信中か！」

「えっ!? あ、もう切る所ですけど」

「待て！中将殿にこれも伝えてくれ！」

「はっはい・・・どうぞ。暗号化します」

「881研地下研究室の火災は偽装の可能性あり、至急人間のみの部隊で突入して調べられたしとー！」

「ええええっ!? ほ、本当ですかお父さん！」

「良いから、早くするんだ！」

「はい！」

インカムから手を離し、ふうと溜息を吐いた提督はナタリアを上目遣いに見た。

その瞳には全く光が無く、底知れぬ暗さを感じた。

ナタリアは小首を傾げつつ、提督を見返した。

これじゃまるで我々の側の目のようだ・・・

意味を探るように目を細め、1つの結論に達したナタリアは訝しげに口を開いた。

「間違つてるかもしれないけど・・・提督、貴方・・・非合法的な事を私達に頼もうとしてないかしら？」

「邪魔が入らないよう段取りは踏む。ただ、そこまで頼んで大丈夫かな？ 嫌なら他所に頼むよ？」

「慣れてるし構わないわよ。ただ、奴が海底国軍の領海に既に逃げ込んでたら無理ね」

「それはしようがないね。まだそうじゃないとして、依頼料の相場は幾らかな？」

「全部こちらでやるのなら経費込みで5千万つて所だけど・・・」

「そうか。小切手で良いかな？」

「いえ、今回は口ハで良いわ。ただ・・・」

「勿論現在の居場所や必要な物は提供するし、各機関への手回しといった支援は行うよ」

「そこまでしてくれるの?」

「無理を聞いてもらうのだから支援は当たり前だ。それを踏まえて、他に何が欲しいかな?」

「うちの町に治療薬を分けてくれないかしら。艦娘用、深海棲艦用、両方よ」

「元々関係者全員に配るつもりだよ。どれくらい必要なんだい?」

「ざっくりだけど・・・人数考えるとそれぞれ5000回分位。あと、今後も不足したら提供して欲しいの」

提督は引き出しから小切手帳を取り出した。

「そりやそうだ。あと、遂行中には色々物入りだろ?ギヤラは今渡しとくよ」

ナタリアは両手を軽く上げた。

「薬をくれる約束をしてくれば口ハで良いわよ」

「薬は渡す。今約束したし、初回分はすぐに持って帰れるよう手配しよう。それはそれ、これはこれだよ」

「ん・・・」

ナタリアは一旦言葉を切った後、提督を見て目を細めると、

「本音を言えば、大手を振ってこの騒動にケリをつけられて嬉しいのよ」

と言った。

提督は数秒の間ナタリアを見返した後、深く頷いた。

「・・・うん、そうだね。私も出来るなら自分で対物ライフルの引き金を引きたい所だ」

「でしょ。貴方の部下だつてそう思う子は多い筈よ」

「仲間の敵討ち、だからね」

「ただ相手は人間で軍の裏切り者。貴方達が動けばコトが大きくなりすぎる。だからこそその依頼でしょ」

「そこまで理解してくれているなら助かるよ。ならせめてこれくらい

は受け取ってくれ。私達の気持ちとして」

そういうと提督はさらさらと書き込んだ小切手を手渡した。

ナタリアは軽く頷くと小切手を懐にしまった。

「オーケー、じゃあ分担を決めましょ」

提督は頷きながらインカムをつまんだ。

「龍田、提督室に来てくれないか」

龍田は微笑みながら提督の部屋に入ってきた。

「お待たせ、ナタリアさんの読み通りって東雲組が太鼓判を押ししたわ」

「よくこの短時間で解ったね」

「最上ちゃんも夕張ちゃんが反応促進機とか電子顕微鏡とかオーダーされるままバンバン作ってるわ」

「え、ええと・・・大本営に費用請求出来るのかな、それ」

「当然飲んでもらうわよ。あと、基地でそれぞれの治療薬を製造する事にしたから」

「ん、よろしく頼むよ。ウイルスへの罹患リスクが消えるまで、長期かつ大量に作れる体制で頼む」

龍田はちらりとナタリアを見てから提督に答えた。

「ええ。あと、テッドさんとさつきお話して供給契約を結んだから、初回分を持って帰ってもらえないかなあ？」

ナタリアは頷いた。

「願ったり叶ったりよ。艦娘分、深海棲艦分、それぞれ5000回分くらいあるかしら？」

「じゃあ余裕見て6000回分ずつ入れとくわね」

「ありがと」

提督は龍田に頷きながら口を開いた。

「鎮守府への治療薬配布準備も並行してるのかな？」

「ええ。大本営から司令官に受取指示を出してもらったから、後は出来た薬から輸送するだけよ」

「うちの子達だけで間に合うのかい？」

龍田はにこりと笑った。

「山甲町の方にも応援を頼むわよ、チャーターしてるし」

ナタリアが渋い顔をした。

「深海棲艦達は当然使えないし、艦娘達だってあれこれ詮索されたらマズい事にならない？」

「その辺はクリアしてるから安心して」

「どうやって？」

「深海棲艦の方々は山甲町内での支援作業をお願いするし」

「ええ」

「艦娘の子達は感染防止策として全身タイプの防護服を被ってもらうの」

「えっ・・・あの黄色い宇宙服みたいなモコモコの奴？」

「ええ。それと、正規の運び人としての認証は大本営公認の腕章で代行するから喋る必要は無いし」

「・・・暑そうね」

「そこは冬って事で」

提督は小さく頷いた。

「ところで、ワルキューレの皆さんにお願いをしたんだけど、支援総括を龍田さん頼めるかな？」

龍田は一通り説明を聞くと、目を細めてニタリと笑った。

「悪い子にはお仕置きってコトね？任せて」

3月7日正午、日本近海。

ソロル鎮守府が用意した山甲町へと戻る船の上で、フィーナはナタリアに話しかけた。

「ところでボス」

「なに？」

「これ、どうするんです？」

ナタリアがフィーナの方を見ると、肩をすくめたフィーナがポケットからプラントから盗み出した錠剤を取り出して見せた。

ナタリアは首を傾げた。

「当然持って帰るわよ？」

「いや、こんなに持ち帰ってどうするんですって話です。罹患時に1錠服用で良いって聞きましたよ?」

フローラも頷いた。

「私達全員合わせれば4万錠もありますけど、飲みきれないと思いますよ?」

ミレーナが指折り数え出した。

「ええと、町内の深海棲艦全員合わせても多分200体も居ないですから・・それぞれ200回分?」

ナタリアは笑いながら手を振った。

「町内に配る訳無いでしょ。まず2千錠程度は私達とSWSPの為に置いておくわ」

「ええ」

「残りは全部売るのは」

「売る!?!どこですか?」

「んー、決済とか考えればオークションかしらね。町の人にもバイトで手伝ってもらおうわよ」

「いや、オークションで売れませんよ?」

「そこはほら、商品はプラケースとかで、錠剤がサンプルで入ってます
くみたいにね」

「そんなふざけた言い訳してたら警察が飛んできますよ?」

「いつも通りPOBに貢げば良いんでしょ?」

ナタリアが言ったPOBとは、町内にあるPOB倉庫の事である。

警察の定年退職者が運営しているとされる会社だが、所有資産は広めの倉庫が1つだけでいつも人影は無い。

この倉庫を「借りる」という名目で賃借料を支払うと、代金はそっくりそのまま町の警察の懐へと入る。

要は警察に賄賂を贈る手段なのである。

フィーナは首を振った。

「どうしてこの町はあらゆる抜け道が堂々と存在してるんでしょうね」

「そういう町だからよ。ただ、今回は私達の銭儲けの為じゃないわ」

「といたしますと？」

「今回の件で、特に東北から北海道と取引してた会社は結構痛手を被ってるわ」

「そうですね。割と2次3次的な被害も出ていと聞きます」

「そういう子達が次の取引先を見つけるまでの当面の手元現金になれば良いかなってね」

「それならバイトと言ってもそれなりの報酬に設定しないと厳しくないですか？」

「もちろん特効薬なんだから高く売りつけるわよ。1回分5千コインとか・・・1万でも良いわね」

「うーわ」

「それと提督からの小切手を原資にしてバイトを雇い、町内に金を回す。その為の薬ってわけ」

「麻薬ビジネスみたいです」

「仕組みは一緒よ。ただ売ってる物が破滅させる薬か、救う為の薬かって違いよ」

「まあ一刻も早く欲しいって深海棲艦はそれなりに居るでしょうね」

「私達向けの病院も、ね」

「その辺は地上組とかから流れるんじゃないですか？」

「だから時間が勝負よ。帰ったらすぐ始めるわよ」

「わあ・・・お仕事嬉しいな」

「そうねえ・・・到着までまだ時間あるから作業一覧と担当決めましょうか。打ち合わせやるわよ」

3人はやれやれと肩をすくめつつ、ナタリアについていったのである。

第19話

3月10日明け方、山甲町湾岸倉庫前。

傍目にも解る位にふらふらの足取りで除染機から出てきたミストレルとベレーは、目の前のファッツに問いかけた。

「な、なあファッツ・・もうねえよな・・勘弁してくれるよな・・」

「ああ、もう追加が無い事はテッドに徹底的に念を押しした。任務完了だ」

ミストレルは力なく頷くと、手を引いていたベレーを前に押し出した。

ベレーが返事をしなくなってから既に30分以上経っていたからである。

「こいつの装備を早く外してやってくれ、ビット」

「はいはい」

ベレーはビット達に手伝ってもらったものの、防護服を外すのに悪戦苦闘していた。

やがてがぱりと防護服が外れるとベレーが顔を覗かせた。全身汗だくで顔色は真っ青だ。

「ふあ・・や、やっと脱げました・・外が涼しいです・・」

ファッツはスポーツドリンクのボトルを手に取り、封を切って手渡した。

「さあ、これを飲みなさい。任務完了だ」

ベレーが一息で飲み干す間にミストレルも防護服を脱いだ。

「これさ、ほんとーにクソ暑いったらねえよ。二度と着たくねえな」

ファッツは次のスポーツドリンクの封を切りながら頷いた。

「まあ快適な防護服なんて聞いた事無いな。ほら、ミストレルも飲んでけ」

「サンキュー・・」

ミストレルが手渡されたドリンクを飲み干す間、ベレーは地面にぺたりと座り込んで海を見ていた。

7日の昼過ぎ、ソロル鎮守府から届いたコンテナ数本と依頼書が届いた。

コンテナの中身は様々な形の防護服、除染用の機器セット、そして配布物の山だった。

依頼書に記された配布先は北海道にある、再建中を含めた全ての鎮守府だった。

ただ、指示内容を見たDeadlineDelivers達は顔をしかめた。

艦娘達は少量の遠征を何度も繰り返す事は出来るが、1度に大量の物資を運ぶ事は不可能である。

そしてここから北海道までは物理的に遠い。

「輸送用ドラム缶に突っ込んでもこのサイズじゃ5箇所分くらいが良い所だぜ?」

「こんな防護服着て何度も往復なんて体力がもたねえぞ、テッド・」
そう訴える皆に頷いたテッドが考案したのはハイブリッド方式だった。

まず、鎮守府の沖合いまでは防護服を着た深海棲艦のワ級勢にまとめて持つていってもらう。

そこから各鎮守府まで防護服を着たミストレル達艦娘勢がピストン輸送する、という訳である。

契約違反を心配する声もあったが、素早くソロルの龍田とまとめ直したテッドはさすがだと評価された。

一方、艦娘達が動けない為、棧橋に出てきた鎮守府側の受取人はいずれも司令官だったが、

「ご、ご苦労だった・・それにしても物凄い装備だな・まあ君達にとってはそうだよな・」

と、防護服姿のミストレルやベレーから恐る恐る治療薬の包みを受け取っていた。

ミストレルは誰か覗き込むんじゃないかとヒヤヒヤしていたが、心配は杞憂に終わった。

テッドの機転のおかげで実質1日足らずで配り終えたのだが、それ

をすぐに報告した事が仇となった。

「さすがはテッドさくん、じゃあ次お願いしますね〜」

そういつの間髪を入れず東北から関東全域分の配布物がコンテナで運ばれてきたのである。

テッドは電話口で猛抗議したが、時間が経つにつれてどんどん勢いがなくなっていくた。

その背中を見ていたファッツ達は途中で溜息を吐きつつメンバーの給油作業に戻ったのである。

結局、

「り、臨時ボーナス出すっていうしよ、乗りかかった船じゃねえか、な？な？な？」

「そもそも依頼料は2回分それぞれ出るんだろうな？」

「当然じゃねえか。そこはちゃんと確認したぜ！満額、倍額だ。な？な？」

「俺達の取り分にもボーナスとやらはしつかり回ってくんだろうな？」

「もちろんだよファッツ！いやーさすがファッツ！ありがたいなあ」

「で、テッド。お前龍田に何握られてるんだ？」

「さあー配布先エリア表を俺は割り振るから最終確認よろしくー！さあがんばろー！」

そういつて引き彎った笑顔で脱兎のごとく立ち去るテッドを、ミストレル達はじと目で見送った。

そんな経緯があったので3回目の出航がない事をミストレルは念押ししたのである。

ファッツはポケットから車のキーを取り出しながら言った。

「こつちに車を回すからもうちょつと頑張れ。家に帰れば風呂もメシの支度も出来てるぞ」

ベレーがゆつくりとファッツの方に顔を向けた。

「・・・ごはん？」

「ああ。二人が好きなチキングラタンとライ麦パンだぞ」

「チキングラタン・・・ライ麦パン・・・食べたい・・・お腹空きました」

「よし、ちょっと待ってる。もうちょっとだからな！」

ミストレルは車に走って行くファッツの背中を見ながらニツと笑った。

鎮守府でも大きな目標を達成した時は慰労会なんてものがあつた。それに比べれば人数も少ないし派手でもないが、アタシ達に注がれてる気持ちは絶対今の方が多い。

ミストレルはビツトの方を振り向いた。

「ビツト、防護服の片付けは頼んで良いか？」

「ええ大丈夫よ。これから続々帰ってくるでしょうし、返却前のチェックもするから私に任せて」

「サンキューな。よっしベレー、もう立てるな？」

ミストレルが差し伸べた手を掴んだベレーは、ぐぐつと立ち上がった。

「ごはんの為に・頑張ります」

「後もう少しだからな」

「はい」

二人は向かってくるファッツのBMWを見つけると、微笑みながら見つめていた。

3月10日1145時、大本営大将執務室。

「・・・ぎりぎり、ですな」

「本当に皆、良く頑張ってくれた」

薬は急ピッチで増産され、各鎮守府へと届けられた。

発症している艦娘達に直ちに服用させた所、目覚しい治療効果が見られた。

全ての鎮守府に配達が済み、発症者が全員回復に向かっているという報告が、たった今揃ったのである。

「薬が出来、1人でも重篤な艦娘の回復が確認されるだけでも充分だとは思っていたが・・・」

「発症者全員が回復に向かっていると解るのは、やはり安心出来ますな」

「まったくだ。それに・・・」

大将は報告書から目を上げ、目の前の二人を見た。

「特に君達の冷静な対処が海軍を救ったよ。お手柄だった」

中將と大将、そして五十鈴の満面の笑みに囲まれ、大和と郵送室の担当者は頬を染めた。

「あ、ありがとうございます。もう治らないかなと、正直覚悟しました」

「結局私は最後まで感染しなかったですし、お役にも立てなくて」

「いえ、貴方が励ましてくれたおかげで持ちこたえられました。どうもありがとうございます」

「と、とんでもないです」

五十鈴が言った。

「後日、所属部署を通じて改めて表彰の場を設けますから、楽しみにしててくださいいね。では・・・」

五十鈴の視線から意味を理解した郵送室の担当者は、ペこりと頭を下げた。

「はい。私は職場に戻ります。失礼いたします！」

「ゆっくり休んでくださいいね」
パタン。

郵送室の担当者が去ると、部屋に残された面々の顔から一気に笑みが消えうせた。

中將が受話器を取り、大将に渡した。

「まもなく1200時です。私がダイヤルします」

大将は受話器を受け取り、黙って頷いた。

第20話

トウルルルル・・・トウルルルル・・・カチャツ

「誰ダ」

「大本営、大将である」

「私ハ、海底国軍元首ダ」

「先日頂戴した手紙に対する回答を用意した」

「ウム」

大将は深呼吸をした後に、静かに告げた。

「お前達の要求には、一切応じない」

数秒の沈黙があった。

「・・・根性論ハ結構ダガ、自然治癒スルモノデハナイゾ？」

大将はニツと笑って答えた。

「我々は、銀の弾丸を手にしたんでな」

「・・・ソウカ。ナラ、セイゼイ運命ニ抗ウガ良イ。最後ニ勝ツノハ我々
ダ」

そういうと、電話は切れた。

ガチャリ。

受話器をぎゅむつと置くと、大将は中将を見上げた。

「よし、後残っているのはドブ鼠の始末だけか」

「各機関には根回し済です。彼は既に国籍も戸籍もありません」

「うむ。早く終わらせたいものだ」

そう。

提督からの暗号通信を解読した中将は直ちに憲兵隊に命じ、人間だけ
けで構成した部隊で突入した。

防火壁をあけると火の気配は一切なく、こじ開けた研究室の中も焦
げ跡すらなかった。

ただし主任の姿はなく、地表に通じる換気ダクトの蓋が外されてい
たという。

その後の捜査で監視カメラ、温度センサー、火災報知機にそれぞれ

細工が見つかった。

蛇又達が見た炎に包まれる研究室は録画された映像であり、温度センサーと火災報知機を偽り火災を演出していたのである。

中将は結果を提督に伝え、提督の提案を大将に持ち帰り、大将は即座に提案を承認したのである。

「それにしても大将殿、銀の弾丸とは？」

「うん？英語でSilver bulletといえど特効薬だし・・・」

「連中の手紙に悪魔とあつただろう？悪魔を倒すのは銀の弾丸と昔から相場が決まってる」

「ははあ」

雷は微笑んだ。

主人は格好良いわ！

今日だけはソロール鎮守府から届いた天文学的な請求書の事は忘れるよう。

でも・・・

この件を特別機密事項扱いで一切秘匿するという決定をソロールにどう伝えるかを考えねばならない。

提督や長門はともかく、龍田への伝え方を一步でも間違えれば今回事務の騒ぎでは無くなる。

やはり請求書までとぼけるのは難しいか・・・かといって12桁となると機密費では到底・・・

いやいや、今日は。今日だけは忘れる！主人には明日相談する！

一方、ヴェールヌイ相談役は小さく頷いていた。ずっと引つかかっていた事の1つがスッキリして良かった。

特別機密事項である「艦娘と深海棲艦の類似点」の中に、「艦娘や深海棲艦が罹患する疾病は人間には感染せず、その逆も然り」

という事が記されている。

それが、主任の件でその原則がいに破られたのかと心配していたのだ。

艦娘にしろ深海棲艦にしろ、その身体は船魂を艦装が具現化した物

であり、人間とは根本的に異なる。

また、時間の経過という概念が無いので成長しないし、加齢による病気にもかからない。

だが、自然界に存在する一部のウイルスや細菌は、その身体に感染し増殖する。

それらに罹患した場合、艦娘は人間の病気によく似た症状が出る。感染経路が風邪と似ている為、防疫方法は手洗いやうがいなど、人間のそれと共通点が多い。

ゆえに咳を発する疾病を風邪と、高熱等の重篤な症状を発する物をインフルエンザと便宜上呼んでいる。

ただ、原因が異なる為に人間向けの治療薬は効かず、専属要員である医療妖精に診てもらおうよう指導している。

(だから医療妖精は人間の司令官は治療出来ないのである)

この事は大将にも知らせていない。

ヴェールヌイ相談役や雷など、初期から生き残ってきた艦娘だけが知る事の1つである。

ただ、その事を今なおしっかりと記憶しているのはもはやヴェールヌイ相談役一人である。

それはヴェールヌイ相談役がその事について口を固く閉ざしてきたからである。

今度の件でも上層部会で近い事を問われたが、ヴェールヌイ相談役は知らないと言い切った。

なぜここまで機密扱いにするか。

もし知られば「やつぱり化け物同士の戦いじゃないか」という声が息を吹き返す為である。

ずっと昔、艦娘達は海軍の中でも公然と化け物呼ばわりされてきた。

それを体験し、記憶し続けるヴェールヌイ相談役にとって、その再来は耐え難い苦痛以外の何物でもない。

そして解体と称して外見そっくりな人間と同じ身体に置き換える仕組みが出来た今、両者の区別はますますつきにくくなった。

いや、意図的に曖昧にしてきたのである。

否定され、恐れられるのはとても辛い事だから。

ゆえに今となつては艦娘でさえその事を知らない子も多い。

ヴェールヌイ相談役はそつと窓の外空を見た。

空は冬特有の、どこまでも青く高い空だった。

ヴェールヌイ相談役は悲しげに目を細めた。

どうか、皆が一刻も早く、この事件を忘れてくれますように・

その頃、ソロル鎮守府では。

「いやあ、うちから罹患者が出る前に対策が打てて良かったなあ」

「そうですね」

「・・・ところでどうしてもやらなきゃダメでしょうか、東雲先生」

「提督も不老長寿化措置を受けてますから対象です」

「ほ、他に方法とか無いかな。例えば錠剤とか、飲み薬とか」

「開発に莫大なお金がかかりますから、龍田さんの了解が取れません」

「ほ、ほらあれだよ、私は金属アレルギーで」

「対応済の注射針ですから心配ありません。さ、腕を出してください」

「い、いや万が一と言う事もあるかもしれないし、ああそうだと打ち合わせが」

東雲の額に青筋が2本立ったのを見て、長門が頷いた。

ガシッ！

「あーこら！背後からは反則だぞ長門！止めろ！うわ！やめろおおお！」

「東雲！早く！こら提督暴れるな！」

「そのまま押さえててください。1本辺り37万コインもするんですから」

「うわあああ嫌だあああ!!」

プスッ！

「・・・」

「ほら、もう終わりましたよ」

「・・・」

「提督？」

「・・・」

長門が提督の目の前でひらひらと手を振り、溜息をついた。

「注射を打たれて気絶した事は機密事項にすべきだろうか・・・」

注射器を医療器具用ダストボックスに捨てながら東雲は首を振った。

「提督がへたレなのは周知の事実です」

長門は頷き、提督をひよいと肩に担いだ。

「それもそうだな。このまま部屋まで運んでおく」

東雲は次の注射器とアンプルを袋から取り出しながら言った。

「よろしくお願いします。では次の方・・・ああ」

そこには真つ青な顔で柱を握り締めている加古と、扉を開けつつにこやかに微笑む古鷹の姿があった。

「ほら、私が先に受けますから。ぜんぜん怖くないですよ」

「嘘だ！ さっき提督が絶叫してた！ 痛いに決まってる！」

東雲は溜息をついた。

艦娘がワクチン接種を嫌がるなんて聞いた事ありません。感情が豊か過ぎます。

この鎮守府はユニークというより癖があります・・・まったくもう。

第21話

3月10日1200時、テッドの事務所。

「邪魔するぞ」

「ん？」

顔を上げたテッドの前に居たのは紙袋を手にした武蔵だった。

「テッド、そら、お前の分だ」

「何の？」

「薬だ。例の合成ウイルスとやらの」

「ん？・・あ、ああ、そうかそうか」

テッドは怪訝な顔をした後、気づいたように深く頷いた。

「どうした？」

「そーいや俺は艦娘だったな」

「おいおい、忘れてたのか？」

「普段意識する事なんて無いからな。別に海に浮けるわけでもねえし」

「お前は感染する危険性は少ないだろうが、治療薬を持っていて損は無いだろう」

「そうだな。まあ貰つとくよ」

「これが切れるまで何度もかかりたいものでは無いがな」

「ええつと、使い方は？」

「症状が出たら1錠飲む。それだけだ」

「・・なんで50錠もあるんだ？」

「我々は時が止まっているだろう？」

「ああ」

「つまり免疫システムは進化しない。同じ病気に何度でもかかるんだ」

「じゃあワクチンって何なんだ？普通は免疫系に学習させて抗体を作る為のものだろ？」

「人間のように弱めた菌を入れて学習させるのではなく、免疫システ

ムを直接書き換えるんだ」

「プログラムのアップデートみたいなもんか」

「そういうことだ」

「んじゃあワクチン寄越せってんだよなあ」

「ワクチンは大抵高価だし、副作用が出た時に医療妖精でなければ対処出来ないからな」

「ビットんところなら医療妖精も住んでるだろ？」

「・・・そうだな。だとするとあとはコスト面だろうな」

「ちえ。じゃあ俺達はウイルスがこの世から滅亡するまで油断出来ねえってわけか」

「そういう事だな」

「あー、だから不足したら言っ来て言っ来て龍田の奴は言ったのか」

「ほう。海軍もたまには良い事を言うな。少し心細かい量だ、早速頼んでおいたらどうだ？」

「バカ言え。1錠200コインだぞ？今くれた一袋ほっちで1万コインだぞ？」

「金を取るのか!？」

「製造原価だとき。だからまあ、せいぜい言うがいと手洗いでもして、この50錠を大事にしようぜ」

「ワクチンを渡さないのはそれが理由かもしれないな」

「・・・あの龍田だからなあ」

二人は顔を見合わせて苦笑した。

「まったく・・・こんなもんをばら撒いた海底国軍とやらの請求書を回したいものだな」

「ウイルスの付いた札で良ければって言いそうだぜ？」

「止めてくれ。洒落にならん」

柱時計が12時の鐘を打った時、テッドは武蔵の手元をちらと見た。

「薬の配達は終わりか？」

「ああ、お前が最後だ」

「なら、昼飯でも一緒にどうだ？これから食いに行こうと思ってたん

だが」

武蔵はにこりと頷いた。

「そうだな。今日の山下食堂は：日替わりランチがステーキ丼だったかな」

「決まったな。なら、とつとと行こう」

テッドはがたりと席を立った。

3月10日1300時、柿岩家会議室。

「従いまして現在、受領した錠剤を各地の資材基地に向けて1次分配している状況です。以上です」

「北極圏軍閥に回す分も鎮守府から受領していますか？」

「はい。そちらは既に北極圏軍閥の輸送チームへ引き渡しました」

「今後、不足分が出た場合の対応の方は？」

「基地の北方棲姫殿と継続的な供給契約を締結しましたので問題ありません」

防空棲姫は安堵の息をついた。

これでようやく、会員に対して治療の手段を提示する事が出来る。

改めて情報を集めると、このウイルスの感染者が多数発生していた。

皆、普通の風邪かインフルエンザかと思っており、動けないほど重症化しても報告していなかったのである。

このウイルスによる直接の死亡者は居なかったが、凍死した北海道地域部長はこのウイルスによる犠牲者ともいえる。

レ級組長がニツと笑った。

「これで我々はもう1枚カードを手に入れましたな」

防空棲姫は怪訝な顔をして問い返した。

「・・・どういう事ですか？」

「メジャー軍閥しか治療薬を持っていませんからな。この病を治したければ鞍替えしろと誘える」

「そこまでして会員を増やす事はありません。望まれば薬を売りますよ」

「恩を売るというわけですな」

「恨みを買わない事も大事です」

「ま、それも良しですか」

浮砲台組長が防空棲姫に向かって言った。

「ところで、提督からの追加依頼の方はどうなってますかな?」

「間もなく4課がワルキューレの方と合流し、処置を始めるそうです」

「・・・しかし、今回4課はお手柄でしたな」

「昨日、念の為に確認し、捕捉済と聞いた時には驚きました。数日ロスしましたが提督に貸しも作れました」

「まさに大金星と言えるでしょう。あの子達を大いに褒めてあげてください」

防空棲姫は懐から取り出したスマホを見ながらつぶやいた。

「それは良いのですが・・・先日のメールの件も・・・大目に見ないといけないでしょうか・・・」

「まあ、あれの意味が解っていればロスする事も無かったですからなあ・・・」

「失点とまでは言いませんが、次回も変わらなければやはり問題と言わざるをえないかと・・・」

「せめて、読んで意味が解る程度にはして欲しいですからなあ・・・」
浮砲台組長の一言を聞き、面々は溜息をついて頷いた。

4課長の報告メールは最近スラングが多用され過ぎて、何を言ってるのか良く解らなくなっていた。

もし、あのメールの意味を最初から解っていたら、それこそもっと大きな貸しを提督に作れたのだが・・・

同時刻、山甲町POB倉庫。

フローラとミレーナが事務作業をしている部屋に、バイトの子が1人入ってきた。

「うっす、フローラさんお疲れっす」

「はい。今日は何番だっけ。番号札くれる?」

「これっす」

「えっとNO211だから・・・今日は3万5000コインね。はい!」

「ひいふう・・・確かに。ああこれで今月の電気代払って灯油も買える。助かるっすー!」

「良かったわね。じゃ、ここにサイン頂戴」

「・・・これでいいっすかね?」

「おっけ。お疲れ様あ」

「またよろしくっすー」

ナタリアの「アルバイト」は最初に町長と警察署長に話をつけたので順調に進んだ。

「食い詰めたら強盗に鞍替えする奴が出る。それよかマシでしょ・・・過去の苦い教訓ってやつよ」

そう言ってナタリアは肩をすくめ、それなら良いじゃないかと町長が渋る署長をなだめたそうである。

実際、ナタリアは痛手の大きい会社から優先的に雇った為、取引先の回復を待てる空気が町内を支配していった。

オークションでの取引は順調で、「プラケース」を50個、100個単位で注文する者も居る。

初日こそ雇ったバイトが手持ち無沙汰になる事があったが、今では猫の手も借りたいほど忙しい。

国外に逃げていたDeadline Deliveries達も噂を聞きつけて少しずつ町に戻ってきた。

ただ、一人だけ貧乏くじを引いた者が居た。

準備が整った時、ナタリアはスタートをより早く切る為、1つの工作をする事にした。

それはネット上で

「この風邪には特効薬がある、私はこれでけろりと治った!」

という口コミを沢山書き込ませる工作である。

「深海棲艦の集まる匿名掲示板とかに商品の写真つきで沢山書き込めば良いんでしょ?良いわよやっても」

訪ねてきたナタリアにビットは頷きつつも、

「ただ、あのね、出来ればバイト料は今、現金でくれないかなあ・・・お小遣い使い果たしちゃって・・・」

と、台所に居るアイウイをちらちらと見ながら声を潜めたので、ナタリアはくすくす笑いながら

「良いわよ。これでどう?」

と、5万コイン手渡したという。

ビットが目をキラキラさせながら懐に仕舞ったのは言うまでもない。

「今日は何の相談なの?」

その直後、そう言いつつお茶の入った湯飲みを持って台所から姿を現したアイウイに対し、

「ちよつとね。オークションで信憑性を上げるための掲載方法を教えて欲しいのよ」

と、にこりと笑いながらアイウイに「表の用件」を伝え、計画の全容も説明した。

3人でしばらく話し、メモに納得したように頷いたナタリアは、アイウイに言った。

「ありがと。今のアドバイス料はこれぐらいで良いかしら?」

2万コインを受け取ったアイウイはにこりと笑った。

「うん充分。ありがとっ」

「じゃ、ちよつと準備で忙しいから失礼するわね」

「はい・・・」

そう言ってナタリアが工場を後にするのを見送ったアイウイは、「で、ナタリアさんから裏のバイトとして何を引き受けて幾ら貰ったの? ぱりっち」

と、黒い笑顔で振り向いたという。

つまり貧乏くじを引いたのは、タダで裏工作するハメになったビットという訳である。

第22話

3月10日1430時、某海底。

「所詮ハ研究室ノ失敗作ダ。ツマラヌ搦メ手ヲ使オウトスルカラコウナル」

受話器を置いた副将軍に、元首は苦笑混じりに話しかけた。

「大量生産方法マデ判明シテイタノデ信用シタノデスガ、申シ訳アリマセン。元首閣下」

「殺傷能力ノ無イB兵器ナド無意味ダ。奴等ハドコマデ生温インダロウナ」

ワクチンを投与した斥候部隊を散布地域に派遣した結果、艦娘も深海棲艦も死者は居ない事が解った。

資料を詳細に調べた所、どうやら艦娘にも感染すると判明した時点で毒性を弱めた痕跡が見つかった。

この為、当初は黙って皆殺しにする作戦だったのを、やむを得ず大本営を脅迫する作戦に切り替えたのである。

「今ノ様子ダト、主任ハDNAノ再変更ヲ把握シテイナカッタヨウデスナ」

「ドウデモ良い事ダ。始メカラ雇ウ気モ無イ奴ノ事ナド」

「寝返ル者ハマタ寝返ルダケデスカラナ」

「長官」モ結局ハ役立たズダツタ。今回ハソノ時ノ教訓ガ生キタ事ダケハ評価出来ル」

「今後ハ情報収集ノミデ、買収工作ハ控エマシヨウ」

「ソレデ良い。サテ、時間ヲ無駄ニシタ。艦娘ドモガ気ツク前ニ通常体制ニ戻シテオコウ」

「ハツ」

「次ノ侵攻作戦ハ1ヶ月以内ニ行ウ。セメテ一部デモ海軍ガ弱体化シテル間ニナ」

同じ頃、国内某所。

「もしもし!?!もしもし!・・・クソツ、冗談じゃねえぞ!」

主任は乱暴にスマホをベッドに叩きつけると、ボストンバッグを引き寄せた。

海底国軍の副将軍は艦娘達が回復した事を告げ、主任に治療法を大本営側に漏らしたのではないかと問うた。

主任は必死に弁明したが、作戦失敗の責任を問わない代わりに海底国軍で雇う件は反故にすると告げられた。

「研究所も俺も無しで、こんな短時間で治療薬を生成出来る訳が無い。一体何をしやがった・・・」

そう。

今回使用されたウイルスは、元々は深海棲艦にだけ感染する生物化学兵器として881研で開発された。

ところが実験の結果、ヒトには感染しないが艦娘には感染してしまう事が解った。

また、治療薬等を一通りサンプルで作った時点の試算で高コストになる事が判明し、お蔵入りとなったのである。

この最後の資料一式を主任が海底国軍に引き渡し、本気で移籍を希望している事を信用してもらおう証としたのである。

効果が証明されるまで待機するよう言われたので、主任はホテルを転々としつつ部屋に閉じこもっていた。

だが、移籍計画も夢と消えた。

足早にフロントでチェックアウトの手続きをし、地下駐車場へと向かうエレベーターの中で考えを巡らせた。

まずは身の隠し場所を変えよう。裏ルートでロシアに渡り、向こうの研究所に雇ってもらうか。

なにせ日本の艦娘関連技術は世界中が欲してるからな。

俺は一通り知ってる。海底国軍がダメでもまだまだ大丈夫だ。

出来るだけ優遇してくれる国を慎重に選ばねば。やはり先渡しはダメだ。

車路の先に自分の車を見つけた時、ふと背後に人の気配を感じた。

ぞくりとして振り向くと、薄暗い車路にナタリアと4課長が立っていた。

「こんにちは、主任さん」

「だ、誰だ？」

「さようならっばい」

ナタリアのFN Five-seveNと4課長のコルト デイ
フエンダーが同時に火を噴いた。

主任は一瞬で絶命し、糸の切れた操り人形のようにがくりと倒れ伏
した。

ナタリアは主任の首の脈と瞳孔で死亡を確認した後、背中にもう1
発撃ち込みながらスマホを取り出した。

「・・・私よ、提督。きっちり済ませたわ。ええ、後はお願いな」

通話を終え、2個の薬莖を拾いつつ歩き出すナタリアを4課長がキ
ラキラした目で追った。

「すごい手際が良いっばい！」

ナタリアは道すがら、監視カメラに被せていた布袋を次々と外しな
がら、ちらりと4課長を見返した。

「貴方こそ私の挙動を見てから同時に撃ったわね。この仕事、貴方一
人でも出来たんじやない？」

4課長は肩をすくめながらついていった。

「そうなんだけど、ちよつと手違いがあつたっばい」

「良くある事よ、仕方ないわ。ほら、そこに貴方の薬莖落ちてるわよ」

「あ、ありがとっばい。ところで、転職する気無いつばい？」

「無いわね」

大股でスタスタと歩き去るナタリアに、通路の隅に落ちていた薬莖
を拾った4課長は駆け寄った。

「あ、えつと、3食お昼寝つきだし、仕事は簡単なお掃除だし、長期休
暇も各種保険もあるっばい！」

表に出たナタリアは路地に停めていた自分のハーレーにまたがる
と、エンジンをかけながらくすつと笑った。

「犬はお断りよ」

「ぼーいー」

去っていくハーレーを見送ると、4課長は携帯を取り出し、こう

メールを打った。

「Devil father give up the ghosts. so damn?」

だが、すぐに電話がかかってきた。

「ぽい?…あつええと、完了っぽい…ごめんなさいっぽい…解りましたっぽい…えっ?ほんとっぽい?」

電話を切ると何とも言えない表情をしながら溜息をついた。

今のは最高のジョークだと思ったのに、全然意味が通じてないなんて格好悪い。

スラング禁止令は出るし、リクルートにも失敗したし、今日はツイてない。

でも、火事の夜から延々と主任を追尾監視するミッションもやっと終わった。

火事の夜、人々の目を避けるように別方向へと走っていく主任を見た4課長は何か怪しいと睨んだ。

以来普通の業務に加え、4課総出で24時間体制で監視を続けた。

地上組にはその事をメールで報告していたが、昨日になってその件を電話で問われたので、

「えっ?今ずっと追ってるっぽい…何日も前にメールしたっぽい…そういう意味っぽい!」

と、思わず叫んでしまった。

そして今日、提督の依頼を受けたナタリアと合流したのである。

本来の任務は手引きだけだったが、経緯を聞いてムカムカしていたらナタリアが発砲を許可してくれた。

主任に鉛玉をブチ込めてせいせいした。

「んっ!…ふはっ!」

4課長はぐぐつと背伸びをした。

見上げた空は鉛色の雲が覆っていたが、その隙間からきらきらと薄日が降り注いでいた。

そんな空を見て4課長はにこりと笑った。

今日までしんどかったけど皆で頑張って乗り越えた。

ご当主からも褒めてもらえたとし、皆で慰労会を開いて良いと言われた。

ここは食事より、景気付けに無茶苦茶高いケーキを沢山買っていつて皆で祝おうとしよう。

仕事が終わったら控え室で待機してくれるように頼んでおいたし。景気付けにケーキ・うん、皆に言ったら絶対白い目で見られるから言わないでおこう。

でも、あの人本当にただの海運業者なのかなあ・到底そうは思えないけど。

それにしても、現場の片付けを蛇又さん達がやってくれるのは助かる。証拠隠滅工作は面倒だし。

あ、まずい。

こんな所で蛇又さんと出くわせば疑われるから早く帰らないと。

大本営の中で動きにくくなっては本末転倒だ。

どこのケーキ屋にするかと思案しながら、4課長は車を停めたコインパーキングに向かって歩き始めた。

同じ頃、ホテルの裏口に黒のミニバン以下数台の車両が停まった。

「先発隊、行動開始。状況をモニタリングします」

「ん」

蛇又は機嫌の悪さを隠そうともせず、短く唸った。

思い返せば普段と違う所はあったが、まさか全人類を裏切って敵に寝返ろうとしていたとは思わなかった。

だから881研は信用出来んとかうさんくさいと言われるのだ。自業自得じゃないか。

ああ、それにしても今度の件は気分が悪い。

図らずも奴の手助けをしてしまったからな。

輪泉所長も大将室に居た面々も奴に対して怒り狂っていたが当然だ。

奴の死体はどうせコンクリ詰め海に捨てるんだし、俺も一発撃ちこんでやりたいところだが・

「官給品を指示も無く発砲すれば始末書だ：ファツゾに1丁融通してくれと頼んでみるか・・・」

無線から耳を離れた部下が蛇又に向いた。

「すみません。何か仰いましたか？」

「いや。で、どうだ。ホテル側は説得できたか？」

「はい。国際手配犯の緊急検挙を行うので地下駐車場を封鎖すると言いい、協力をとりつけました」

「監視カメラは潰したか？」

「中央監視室を別働隊が押さえました。記録媒体は全て押収中で、この後粉砕機にかけます」

「消毒エリア内の第三者立ち入りは？」

「駐車中の車を含め、居ませんでした」

蛇又はサングラスをかけながら言った。

「上出来だ。最後までぬかるなよ。じゃ、ホテルの連中に顔を覚えられる前に済ませるぞ」

部下がミニバンを発進させると、後に続く車両と共に地下駐車場へと消えていった。

7章：「昼下がりの出来事」編 第1話

それは、ある日の午後の事。

「車を点検に出してくる」

「あいよー」

ファッツが車の鍵を掴んで出て行くのをちらりと見たミストレルは欠伸をすると雑誌に手を伸ばした。

ここ数日ほど、仕事の無い日が続いている。

別にミスをして干されているわけではなく、季節や月、曜日等で緩急が激しい。

6月や10月は帰ってきたと思ったら次の依頼が来ているなんてのはザラである。

普段の月も、その中で見れば月初から中旬頃は忙しい。

逆を言えば、それらを除けば開店休業状態なのである。

ただ、海原で深海棲艦達と海軍が「やらかしている」時はとても忙しい。

それは民間の荷に加え、深海棲艦側、海軍側双方から資源の「輸送手伝い」を頼まれるからである。

会社のバランスシートを計算しているファッツが、

「もうちよつと年間を通じて業務量が平準化出来れば良いんだけどな・・・」

と、溜息混じりに言うのも無理はない。

単純に平準化するなら、スターペンデュラムやかつてのC&L商会のように定期契約を結べば良いのだが、

「とはいえ、うちにそういうやり方が合うとは思えないしな・・・」

そう言っって首を振るのである。

実際、ミストレルは今の生活を気に入っていた。

過去には家財を売る事態になった事もあったが、今では皆無であ

る。

住まいは清潔で、食に困る事はなく、ファツゾがくれる給料にも納得している。

自分もやるべき仕事があり、やり方は任されているし、力を十分発揮出来ている。

途中から一緒に住む事になったナタリア達とも仲良くやれている。

「ミストレル、ちよつとだけ足上げて」

「あいよ」

声をかけられたミストレルは雑誌を読みつつひよいと足を上げ、そのままごろんとソファの上に寝そべった。

今日はフィーナが床掃除当番なので、モップで床を拭いている。

日替わりの当番ゆえ、対象人数が多いほど楽になる。ワルキューレ様々だ。

フィーナは雑誌をのんびりとめくるミストレルに話しかけた。

「今日はヒマなの？」

「今日はずて言うか、とりあえず今週ずっとだなあ」

「そういえばヒマな時って何してるの？」

「んー？雑誌読んだり、コレクションの手入れしたり、散歩したり…」

「訓練とかしないの？」

「やんねえなあ…その点フィーナ達はすげーよな」

「なにが？」

「毎日メニュー決めて鎮守府の演習並みにハードな訓練してるじゃん」

フィーナはモップの手を止めると深々と溜息をついた。

「…聞いてくれる？」

ミストレルはフィーナをチラリと見ると、むくりと起き上がり、パタンと雑誌を閉じた。

「おう」

「私達は元々MADFで毎日任務か訓練に明け暮れてただけど」

「だろいなあ」

「正直、深海棲艦になった時はちよつとサボろうって思ったのよ」

「ああ、自分で決めりや良い話だもんな」

フィーナはミストレルの隣に腰を下ろすと、モップの柄を見ながら続けた。

「それに、ボスも別に今までのペースを維持するつもりはなかったの」

「ふんふん」

「ところがね」

「おう」

「訓練サボると艤装がスネるのよ」

「・・・は？」

「言い方が難しいんだけど、本当なの」

「指示通りに動かねえとかか？」

「ええ。展開や反応がやけに鈍くなったり、渋々というか、ふてくされた様子で動くのよ」

ミストレルは首を傾げた。

艦娘側の艤装は完全な装置であるからだ。

メンテナンスをサボれば錆び、それによって動きが渋くなることはある。

「錆びやすいつてことか？」

「いいえ。機械的な故障じゃなくて、艤装自身に意志があるって言えば良いかしら？」

「艤装がメシ食ったりするの？」

「そういうのは無いわね。だから高度なAIというか、擬似生命体って所かしら」

「いやほら、歯が生えてるじゃん？」

「あれ、歯じゃなくて開口部を深海の水圧から守る装甲なのよ」

「へー。意志があるって事は頼んでも居ないのに兵装展開したり話しかけてきたりするんのか？」

「それは無いわね。あつたら困るもの」

「だよな・・・でも毎日訓練しないとスネるってさ」

「ええ」

「案外真面目なんだな、艤装」

「真面目というか・・・楽しみみたいね。でも私達からすると大変よ」
「面倒臭えもんな」

「それもあるし、弾薬とか燃料とか補充し続けられないといけないし、メンテナンスも、ね」

「あ」

「だからコストが高いの。維持費の高い兵装の積みっぱなしなんて厳禁よ」

「普段は何積んでるんだ？ダメコンとかか？」

「本当はそうしたいけど、それなりの主砲か艦載機を1種類は積まないとまたスネるから・・・」

「・・・わがままなやつぢやなー」

「でしょう？たまには1週間くらいんびりしたいのよねえ」

「なあ」

「なに？」

「大きめの鎮守府だと仮想演習場とかあったじゃん」

「うちにもあったわよ」

「それ使ったらダメなのか？」

「さあ・・・深海棲艦になってから使った事無いのよね」

「そっか。鎮守府の施設だもんな」

「ええ。あれが使えれば体力的には楽だけど、この町には無いでしょう？」

「へ？あるぞ？」

「えっどこに？」

「ビットン家」

「・・・なんで？」

「元々預かったらしいんだけど、もう要らないって言われたらしい」

「仮想演習システムって1セットで何千万もするのよ？要らないなんて事あるの？」

「新しいの買って置き場所がなくなったんだと」

「随分予算が潤沢な鎮守府ねえ」

「だよな」

「それで、ビットさんは使わせてくれるの？」

「ああ。手土産の1つも持っていけば大丈夫だぜ」

「何持って行けば良いのかしら。工具とかアニメのDVDとか好きって聞いたけど」

「あー、そっちは手を出さない方が良いぜ」

「なんで？」

「嗜好品の好みなんて人それぞれだし、夕張は筋金入りのマニアだ」

「ええ」

「マニアになるほど、自分の好みからちよつとでも外れれば気に入らないもんさ」

「そうなの？」

「解りやすい喩えをするとな」

「ええ」

「ベレー大魔神に他の店のビーネンシュティツヒ渡したらどうなるか、だよ」

　　ファイナの顔色がゆつくりと青褪めていった。

「・・・大惨事しか思いつかないわね」

「だろ？」

「えーと、じゃあどうしようかしら」

「逆に食べ物とか、凝ってない物なら良いんじゃないか？」

「それこそビーネンシュティツヒとか？」

「ああいや、あいつらはビーネンシュティツヒ意外と効かねーんだよ」

「そうなの？」

「甘いケーキより主食的な奴が好きらしい。キツシュとか」

「キツシュ・・・どこかで売ってたかしら？」

「いんや。だから手に入りづらいんだと。ナマゾン超特急で冷凍物を買ったらしいぜ」

「へー・・・あれくらいなら作れるわ。ちよつと考えてみようかしら。ありがと、ミストレル」

「どうってことねーよ」

　　ファイナはモップを手に立ち上がり、ミストレルは再び雑誌を開い

た。

第2話

それは、ある日の午後の事。

「ごちそうさまねー」

「ありがとうございます。またどうぞ」

店内から最後の客が出て行くと、ライネスはサーバーからコーヒーを注いだ。

「ルフィア、一息入れたらどうだ？」

「んー・・・」

ルフィアは背伸びをしながらチラリと時計を見た。昼もだいぶ過ぎてきているし、夜には早い。

「じゃあちよつと休憩貰うわね。部屋に戻ってて良いかしら」

「構わないよ。17時くらいに戻ってきてくれるかな」

「ええ」

「ほら、コーヒー持って行きなさい」

「ありがとう」

ルフィアはカウンターでライネスからコーヒーの入ったマグカップを受け取った。

いつも自分が使う大きめのマグカップ。

階段を上りつつ一口啜るとミルクと砂糖の程よい甘みを感じ、微笑んだ。

「んっ・・・おいし」

ライネスはちゃんと自分の好きな味にして渡してくれる。

こういう小さな事1つ1つが嬉しい。

パタン。

自室に戻ったルフィアはパソコンの電源を入れた。

席に着き、並んだ大型モニタを眺めると、肩を回した。

「さて、今日も戦争を始めましよ。この前は負けちゃったしね」

しかし、ルフィアが見つめる先には俯瞰したヘックスマップも無ければ戦場の3DCGも無い。

ただただ文字と数字の表と折れ線グラフが並ぶばかりである。そう。

ルフィアがやっているのはデイトレーディングである。

短時間で結果が出る物を中心に、休憩時間の間だけ市場に参戦する。

低めのレバレッジで、その日に買ってその日に売り切るので利益も損も小額である。

この戦い方は、かつて山甲町信用金庫の行員から教えてもらったものだ。

「とにかく長時間持つてはいけません。買った分はその日に売りきつてください」

実際、このルールを破らず運用してきたルフィアは手堅く稼いでいた。

取引単位で見れば損も得もあるし、1日単位では負け越した事も割とある。

だが、年単位で見れば預金するよりはよほど良い利益を手にしていった。

ルフィアが元手としているお金は、C&L商會を畳んだ時の余剰金であった。

金融機関に返済を済ませても幾らかは現金が残ったので、クーと山分けしたのである。

ガチャ。

「ねールフィアあ、ちよつと漫画貸してー」

ノックも無く入ってきたクーに、ルフィアは画面を見たまま答えた。

「好きなの持つてって良いわよ」

「ありがとー．．あれ、まだやってるんだそれ」

「やってるわよー」

「んー．．」

ルフィアの背後からしばらく画面を覗き込んでいたクーは、1ヶ所を指差した。

「これ買った方がいいよ」

「なんで？」

「なんとなく」

「へえ・・・」

ルフィアはクールの指差す部分を見た。

それはケニンという通貨だった。

ルミル連邦国という中堅国の通貨だが、政府が継続的に通貨介入しているせいではほとんど波が無い。

現に今、通貨グラフはまるで動きがなく、ほとんど横一線にしか見えない。

「手数料の分だけ損すると思うけど・・・」

そう言ったものの、何となく気になったルフィアは10万コイン分のケニンを購入することにした。

クールがこういう事を言った時は、たまに稼がせて貰った事があったからである。

カチリ。

「ほら、買ったわよ」

ルフィアは別の通貨グラフを睨みながらクールにそう言ったのだが、クールが返事をしない。

怪訝に思っただけ振り向くと、クールがぽかんと口を開けたまま画面を見てる。

「どうしたの？」

「・・・」

「大丈夫？」

「ル、ルフィ、ア・・・」

「具合悪いの？顔青いわよ？」

「あ、あの、あれ・・・」

クールの指を追っていくと、その先にあったのはケニン対コインの通貨グラフだった。

だが。

「・・・あら？」

ルフィアは眉をひそめた。さっきまでであった横一直線の表示が消えている。

「表示が乱れてるのかしら・・・」

カチリ。

だが、表示の更新ボタンをクリックしても出てこない。

首を傾げるルフィアの横で、クーがようやく呟いた。

「も、物凄い、暴騰・・・してるよ・・・」

「へっ?」

ルフィアはふと、ケニン対コインの軸目盛りの異変に気づいた。

「・・・えっ?」

先程までほぼ1ケニンは240コイン程度だった。

しかし残像のように見える目盛りの数字は・・・

「は?300?400?」

「ち、違うよルフィア、今1500越えたよ」

「えっ?」

ルフィアは画面を睨みつけた。

一瞬読めた表示は

「せ、1800?」

クーはルフィアを揺さぶった。

「ル、ルフィア、他の通貨取引終わらせた方がいいよ」

「え、あ、そ、そうね」

ケニンは表示異常かもしれないし、システムの調子が悪い日に取引などしない方がよい。

やつてもいない取引で追証でも来たらたまらない。

そしてケニン以外の売却が済み、ケニンの通貨グラフを再表示させた二人は揃って目を擦った。

1ケニン≡2781コインの辺りでグラフの線が細かく上下に揺れつつも安定していたのである。

「は・・・?」

呆然とするルフィアからマウスをひったくったクーは、即座にケニンの全売却をクリックした。

だが、いつもなら瞬時に帰ってくるはずの応答が来ない。永遠とも感じられる37秒が過ぎた後、小さなウィンドウが表示された。

取引は以下の通り確定しました。

指示：売却（ケニン↓コイン）

416ケニン

↓ 1, 156, 896コイン

手数料：

5, 785コイン

差引口座入金額：

1, 151, 111コイン

二人は1分ほど呆然とウィンドウを見つめていたが、

「やつ・・・た」

「た、たった5分で、10万が・・・115万に・・・化けた・・・」

「や、やった・・・やったわ・・・ね」

「いやっほー！」

「凄い！凄いわクーちゃん！すごーい！」

抱き合って飛び跳ねる二人の横では、再びケニンの通貨グラフが乱高下していたという。

その日の夕方。

ルミル連邦国財務大臣の顔が世界中のトップニュースを独占していた。

財務大臣は通貨安定策の継続は困難になっていた為、やむを得ない措置だったと淡々と告げていた。

キャスターは引き続き、各国中央銀行報道官のコメントや金融街の人々の反応等と共に衝撃の大きさを伝えていた。

「・・・恐ろしいもんだなあ」

夜の部を始める前に早めの夕食を3人で取っていたのだが、ライネスはニュースを見てそう呟いた。

ルフィアがライネスの方を向いて首を傾げた。

「なにが？」

「いや、これが起こった頃なんて、私は店のキッチンで夜の部用の仕込みを始めた頃だ」

「ええ」

「こんな片田舎では無関係な話だが、直撃した人は嵐のような一日になっただろうなっつてね・・・」

クーはそつと何うようにルフィアを見たが、ルフィアは神妙な顔のまま答えていた。

「そうね。得した人も居るかもしれないけど、色々な人が損したんでしようね」

「ほら、あの人なんて個人で追証7億とか・・・払える訳ないだろうになあ」

「そうねえ。悲惨な人も居るわよねえ」

クーは完全に他人事の如く振舞うルフィアを見て震えながら、ごくりとポテトサラダを飲み込んだ。

おっちゃん！

まさにその件で100万以上稼いだ人が目の前にいるよー！

クーはそう言いたかったが、ルフィアとの約束を破る事になるので言えなかった。

正確には、言ったら後が怖いので到底言えなかった。

ルフィアはライネスと結婚する為にC&L商會を畳んだが、ライネスにお金を返す事は諦めていなかった。

時間に余裕のある時にちょこちょこことああいう事をやっているのはその為だ。

ライネスにお金を返すその日まで、何やってるかも含めて絶対内緒にする事。

クーはルフィアにそう約束させられていたのである。

ライネスは首を振りながら言った。

「俺はクジ運無いから大当たりはないが大損も無い。地道に働くよ」

「そうね、それが一番ね」

「よし。じゃあこれを片付けて夜の部を始めよう。味付けは良かったかい？」

「ええ。いつも通りとっても美味しかったわ」
クーはジト目で、ライネスに微笑むルフィアを見ながら思った。
ルフィアはやっぱりとんでもないタヌキだ、と。

第3話

それは、ある日の午後の事。

「あ、ファッツォさん」

「舞ちゃんか、どうした？」

夕島整備工場で車を引き取った帰り、ファッツォは交差点に立つ舞から声をかけられた。

「ついうっかり返事してしまったファッツォに、少しムツとした舞が答えた。」

「あー！また舞ちゃんって言ったー！」

「あ、あー・・・すまない」

この町に配属される前の経緯から、子ども扱いにトラウマを持つ舞。

一方で配属当時から知っているファッツォにとって舞の印象は早々変わるものではない。

ゆえにファッツォは全く悪気は無いのだが、とつさに「舞ちゃん」と言ってしまうのである。

「言わないって約束してくれたのに・・・んもう」

「ごめんごめん。で、何かあったのか？」

「この先の道路でね、水道管が割れちゃったんです」

「下水か？」

「水が綺麗だったから上水道だと思います」

「うーん・・・」

水道管の破損は非常に厄介である。

下水管が破損するとその匂いに悩まされる。

上水道が破裂するとその付近の家は断水になってしまいうし、破損の程度が酷ければ周囲は水浸しだ。

「この先って、どの辺りだ？」

舞は通りの奥を指差した。

「・・・ほら、あの角の家の屋根のところ」

「うおっ」

ファッツは屋根の上を越える「噴水」を見つけて眉をひそめた。

「ファッツさん家とは離れてるけど・・・」

「あの道は近道なんだよなあ」

「でしょ？あの道は結構使ってる人多いからねえ・・・」

「水道屋はいつ来るんだ？」

「さあ・・・その辺は解らないんです」

「うーん・・・」

この町には建設業、特に土木関係の業者が居ない。

近くの町にはあるので依頼すれば来てくれるだろうが・・・

「舞、お前はどこから通報受けたんだ？」

「受けてませんよ。巡回中に見つけたんです」

「署には言ったか？」

「勿論」

「んー・・・俺、ちよつと役場行ってくる。気づいて無いかもしれん」

「そつか・・・ごめんなさい。お願い出来ますか？」

「舞のせいじゃないさ。じゃあな」

ファッツはそういうと、車をUターンさせた。

「とすると、この辺りで水道管が破裂してるんですね」

「ああ。気づいたのはそこだけだ」

「解りました。じゃあこちらで業者等手配します」

「なるべく早く頼むよ。結構な勢いで吹き上がってるしな」

「ええ、すぐに手配します。ご連絡ありがとうございます」

ファッツが再び戻ると、舞は破損箇所により近い所で、簡易バリ

ケードを背に立っていた。

「役場の連中に言ってきたぞ」

「連絡行ってなかったの？」

「みたいだな。これから対応するとき」

「んー、じゃあ私は一旦戻ろうかなあ」

「まああの噴水とバリケードで解るだろう」

二人が見つめた先には道路から6 m位の高さまで勢い良く噴き出

す水の柱があつた。

「ところで、ここじや濡れないか？」

「ちよつとね。でも勝手に離れる訳にも行かないですし」

「帰つて良いか署に聞いたらどうだ？」

「・・・そうですね」

ミニパトの中でひとしきり話した舞は、そのまま車を動かしてファッツの車に並んだ。

「戻つて良いそうです。ファッツさん、ご協力ありがとうございます」

「服が濡れたのならちゃんと乾かせよう？」

「はい、そうします。それじゃあ」

ゆつくりと走り去るミニパトを見ながら、ファッツはぽつりと口にした。

「舞ちゃんもいつの間にか、大人になったなあ」

着任当時は中学生位にしか見えなかったが、今はどうにか婦警さんと言つても信じてもらえるくらいにはなつた。

「もうそろそろ、他の町に転勤つてこともあるかもしれんなあ」

舞の礼儀正しきや性格の良さは始めからだし、この町にずっと居たのは幼く見えた容姿のせいだ。

それが取り除かれれば引く手あまただろう。

なにより「この町で生き残れた」という実績付きなのだから。

「そうになったら・・・寂しくなるな」

ファッツは車を発進させながら、寂しそうに微笑んだ。

ナタリア達と同じ時間軸を生きられるようになったのは嬉しいが、反面、人との別れは増える。

以前、司令官の教育課程で教官が、

「艦娘達は多くの別れを経験する事になり、それ自体がストレスになる」

と言っていたが、今ならその気持ちが良く解る。

別に舞が異動すると決まった訳じゃないのだが。

「帰つたぞ」

ファツゾの声に、ソファで雑誌を読んでいたミストレルがひよいと顔を上げた。

「よっ、お帰りい」

「うん」

「・・・何かあったか？」

「大した事じゃないんだが・・・よく解ったな」

「なんとなくな」

「あー、びつくりしたか？」

「びつくり・・・うーん・・・びつくり・・・してるのか？俺」

「しつくりこねえか？」

「何て言うか、寂しさを覚えるよ」

「どういう風に？」

「街角のどこかに舞ちゃんがいるってのは割と当たり前の光景だったからなあ」

「うーん・・・つるんでたダチが居なくなる寂しさ、って奴か」

「そうだなあ。うん、そっちの方が近いな」

「あんまり良い話じゃねえけどさ・・・」

「ああ」

「アタシ達は慣れ過ぎちまって麻痺してる部分があるんだよな、そういうの」

「仲良しとの別れに、って事か？」

「ああ。鎮守府に居た頃はさ、同じ釜の飯を食ってた同僚や姉妹艦がある日突然帰ってこなくなるとかさ」

「・・・」

「出撃で僚艦が沈むのを目の当たりにするってのも、まあ割と日常的に起きてたんだ」

「・・・」

「だから艦装の感情抑制装置云々じゃなく、慣れちまうんだよ。あまりにも長い間、あまりにも多く見ているとさ」

「・・・そうか」

「逆を言えばいつそうなるかお互いに解らねえから、一緒に居られる

間は仲良くしようとするけどな」

「俺が司令官だった頃、艦娘の皆がやたらと親切だったり優しかったりしたのはそういう事か・・・」

「ファッツの場合は違うんじゃないかな」

「ああ、やっぱり上司部下の儀礼的な所なのか？」

「いや、アタシ達の生き死には司令官の差配次第だからさ、司令官の一挙一動を皆で見てるし、共有するんだよ」

「・・・」

「だから、ちゃんと話を聞いてくれたり、気を使ってくれる司令官だとすげえ安心するし、嬉しい」

「・・・」

「ファッツんところは轟沈を出さなかったんだろ？」

「ああ」

「それは他所の艦娘と少し話せば凄い事だって解るし、皆で感謝の気持ち伝えてたんだと思うぜ」

「だが結局、俺の部下だった子達は全員記憶もLVも奪われて異動して行ったけどな」

「・・・それさ」

「ん？」

「艦娘と妖精ってさ、割と腹を割った関係になる事が多いんだけどよ」
「ほう」

「たとえば作業命令上は記憶を消してLV1にしろってあっても、LVだけ1にするって事、割とあるんだぜ」

「え？だってすぐばれるだろ」

「着任時の頃の台詞思い出して、何を言われても覚えてませーんって答えれば良いんだから簡単さ」

「・・・そうなのか？」

「妙にするするLV上がる奴とかいなかったか？」

「・・・えっ？あれ、そういう事なのか？」

「おう。LV判定やEXP稼ぐ要領覚えてりゃ、LV30位までなら取り戻しやすいからな」

「そういう事か」

「ただ、そうしてもらうのが良いかどうかは別だけどな」

「というと?」

「記憶を残したいって事は、自分が楽しかったやり方だったって事だろう?」

「ああ」

「行った先がそれより悪かったら?」

「・・・あ」

「やっぱり昔と比べちゃうし、それが重荷になったりするんだよなあ・・・誰にも言えないしよ」

「・・・うちの子達は、どうだったんだろうなあ」

「どこかで楽しく過ごしてると良いな」

「ああ」

ファッツ達はどちらから言うでもなく、窓の外を見た。

空は爽やかで、どこまでも遠い色をしていた。

第4話

それは、ある日の午後の事。

「ほいお待ちどうさん、山ブドウのジャムと蜂蜜、2瓶ずつだ」

ナタリアは溝山農園の主からずっしり重い紙袋を満面の笑みで受け取った。

「ありがと。えっと、幾らかしら？」

「変わらんよ。全部で2400コインじゃよ」

ナタリアは1000コイン札を3枚渡しながら言った。

「・・・ねえ、ほんと大丈夫なの？」

「なにがかね？」

ナタリアは袋からジャムを一瓶取り出した。

「これ1つで1kgも入ってるでしょ」

「計量が簡単だからの」

「味はとびきり美味しいし、たっぷり入ってるのに値段はどれもたった600コイン」

「そうなの」

「本当に商売になってるの？もつと払うわよ？」

溝山氏はニカッと笑った。

「ここまで足を運んでくれる客からふんだくる気は無いよ」

「えっ？どういうこと？」

「買いに来てくれれば、この年寄りと話をしてくれるだろ？それが嬉しいんだよ」

「そんなに話して無いわよ？せいせい天気の話とかじゃない」

「元々わしが長話は好かんからの。軽く話せば良いんだよ。儲けは他所で間に合つとる」

「あら、このジャム外販してるの？」

「たまに鶴美屋に卸ろしとるよ」

「えっ」

ナタリアの表情が固まった。

鶴美屋。

高級食材専門の商社であり、顧客には一流ホテルや旅館、料亭、レストランがずらりと並ぶ。

鶴美屋から仕入れていると誇らしげに宣伝する店すらある。

国内のみならず海外とも手広く取引しており、Deadline
Deliversの仕事としてオフアールがくる事もある。

もつとも、輸送条件から届け先での立ち居振る舞いまで事細かに指定する為、「うるさい客」として有名なのだが。

「・・・ふうん」

「おや、その顔は鶴美屋を知つとるみたいだね」

「うちの取引先よ。彼らの荷を中東とかに何度か運んだ事があるから」

「そりやまたご苦労さんな事じゃの」

「温度は何度から何度の範囲でとか、先方に会う時はアイロンの当たった黒のスーツを着用しろとか、まあ色々言われたわね」

「届け方が鶴美屋の真骨頂だからの」

「届け方？」

「むしろが鶴美屋に納品するだろ？」

「ええ」

「すると連中は、まず検品した後、丁寧に洗って磨き布で磨き上げる」

「・・・容器をつてこと？」

「うむ。そうしてガラスが輝くくらいピカピカにした後」

「ええ」

「軽く焦がしたふわふわのおがくずを詰めた桐箱を用意しての」

「・・・ええ」

「その上に紫で鶴美屋の文字を染め抜いた絹の布を置き、布の上からジャムをゆつくりとおがくずの中に沈める」

「・・・へえ」

「その上に半透明の和紙を載せ、食べ方などを記した小冊子を置き、桐箱の蓋をする」

「・・・」

「更に桐箱の外から白と紫の手ぬぐいで丁寧に包んで結わえ、それを

緩衝材入りの段ボール箱に詰める」

「・・・」

「そして客の元に送り届ける。うやうやしくな」

「だから中で偏ったりしないよう、あれこれ言うわけね。納得したわ」
「まあ相手が王室とかもあるからの。仕方ないといえれば仕方ないが
の」

「私はここで溝山さんから紙袋で手渡してもらう方が嬉しいわね」

「人それぞれだ。ああそれから、もう耳にタコが出来とると思うがの」
「ここで買える事は山甲町以外の人には言わない、よね。解ってるわ
よ」

「うむ。大勢押しかけられるのは迷惑なんだな。ほれ、釣りの600
コインだ」

「良いわよ取っておいて」

溝山氏は首を振った。

「変な借りは作らんのが主義だ。金が必要なら卸せば良いからの」
ナタリアはハーレーのエンジンをかけると釣りを受け取った。

「・・・解ったわ。じゃ、またね」

「毎度あり」

事務所に戻ったナタリアは、自室でノートPCを立ち上げた。
買ってきたばかりのジャムを傍らに置き、ブラウザを開く。

「んー・・・」

タカタカとWebサイトを辿っていき、

「あつた鶴美屋の通販ページ。ええつと・・・」

ジャンルはジャムで・・・

「キーワードは山ブドウかしら?」

カチリ。

「あつ、あつた・・・溝山農園の100%国産山ブドウジャム1kg・・・
えっ?」

ナタリアは目を数回パチパチと瞬いた後、ごしごしと手で擦った。
「・・・うそでしょ」

そこにはナタリアの傍らにあるジャムと寸分たがわぬ画像が示さ

れていたが、価格は

16200コイン（税込・送料別）

と、記されていたのである。

そしてなにより驚いたのが

「し、品切れ・次回入荷未定・えっ、購入希望者は整理券を500コインで買うの？」

その時、ふと

「金が必要なら卸せば良いからの」

という一言を思い出し、ナタリアはごくりと唾を飲み込んだ。

この有様なら卸したただけ右から左へと売れていくに違いない。

文字通り溝山氏にとってはATMで金を下ろすようなものだ。

実際の販売価格から溝山氏に幾ら支払われるかは解らないが、600コインという事はなさそうだ。

しかし一方で、鶴美屋もたんまりマージンを取ってる気がする。

ナタリアはジト目になった。

「鶴美屋・エグい商売してるわねえ・」

これなら今度から鶴美屋のオフアーにはたんまり吹っかけよう。あれこれうるさいし。

テッドにも言っとくか。

無意識ではあったが、いつもより丁寧に戸棚へと瓶を仕舞ったナタリアは、ハーレーのキーを手に玄関を出た。

テッド仲介所の扉を開けたナタリアは一気に目を細めてにやりと笑った。

「テッド、居るでしょ・・あらあら、へえー」

「うおっ・・よ、よおナタリア、どうしたこんな時間に？」

「こんな時間って、まだ1500時過ぎだけど・へえー、随分仲良いわねえ」

「えっ、あつ、いや」

「折角のお楽しみを邪魔しちゃ悪いわね。出直しましょうか？」

「い、いやいやいやいや、さあかけてくれ、さあ」

ナタリアはニツと笑いながら、勧められた席に腰を下ろした。

「あー、えつと、は、葉巻吸うか？」

「吸わないわよ・・・これで充分」

「そつ、そうか」

そう言うとナタリアは懐から出した細巻き煙草を見せると、そつと仕舞った。

「で？」

テッドはちらちらと入り口を見ながら答えた。

「で、で、でつて何だよ？」

「その子といつからそんな仲だったのつて聞いているの」

テッドは諦めたように深い溜息をつくくと、

「あーその、い、一ヶ月くらい・・・前かな」

「なれそめは？」

「雨の日にうちの軒先に居たんだが、その時仲良くなつてな」

「へえ」

「そ、それでその、一緒にメシ食ったりしてるうちによ・・・すっかり居着いちゃまって」

「美人さんじゃない。良かったわね」

「う、ま、まあそうだな」

「一緒に寝てるの？」

「いや、こいつが嫌がるからさ」

「その割には、今は気持ち良さそうに腕に頭乗せてるじゃない」

「その辺はよく解らねえんだよ・・・気まぐれな所があるし」

「まあそれはそれとして、ちよつと耳に入れときたい事があるのよ、テッド」

「おう、なんだ？」

それから二人が話し込んでいると、しばらくしてテッドの事務所のドアが勢いよく開いた。

第5話

チリリン!

「テッドさん! 貴方一体どういう・・・あら?」

「お、おいおいなんだよ。物騒な物は仕舞ってくれよ」

ナタリアが振り向くと、きよとんとした顔でテッドを見ている大和がいた。

ただしその艷装にセットされた46cm砲はまっすぐテッドへと向いていた。

「・・・だからさ武蔵、何をどう勘違いしたか知らねえけどよ、その話題の相手は猫だつての」
そう。

ナタリアが先程目を細めたのは、テッドが目尻を下げた猫を撫で、傍に猫用のおもちやが幾つも並んでいたからである。

泣く子も黙る怖い仲介人というイメージが台無しになる位の溺愛ぶりだったので、ナタリアはからかったのである。

一方武蔵は「たまたま」焼いたクツキーをテッドに渡そうと事務所を回りこんだ時、窓越しにこの会話を耳にした。

泣きそうな顔で帰ってきた武蔵を問いただし、血相を変えた大和が怒鳴りこんできた、という訳である。

そして大和から状況を聞いたテッドとナタリアは、神武海運の事務所に足を運んで釈明の真っ最中である。

「ヒック・・・な、なんでもない、き、気になんてしていないぞ」

「じゃあなんで説明したら余計泣くんだよ」

ナタリアは肩をすくめた。

「テッドが猫を抱えてる状態を見ないで話だけ聞けば誤解・・・まあそうかしらねえ」

テッドはじとりとナタリアを睨んだ。

「お前が冷やかすからこんな事になったんだろうが」

「えー」

「武蔵、誤解させたのは悪かったよ。謝る・・・ほらナタリア！」

「わ、解ったわよ・・・ごめんなさい・・・でもね武蔵」

「な、なん・・・だ・・・」

「どうして入ってきて一緒に会話に混ざらなかつたの？いつもの軽口でしょ」

首を傾げるナタリア。

ナタリアを見返したまま硬直する武蔵。

そういえばと怪訝な顔になるテッド。

そんなテッドを見て溜息をつく大和以下6名、という構図である。

「そ、え、あ、あの」

「？」

どもる武蔵にますます首を傾げるナタリアの肩を、龍驤がぽんと叩いた。

「ちよーっち、向こうで話そかナタリア」

ナタリアは龍驤を見た後、再び真っ赤になっている武蔵とテッドを交互に見た後、

「はっはーん・・・そういう事ね。良いわ。皆、行きましょ」

「話が早うて助かるわー」

大和以下6名とナタリアが去ろうとしたので、テッドが慌てて声をかけた。

「お、おい待て。確かに冷やかしたのはナタリアだが、原因は俺が猫を撫でてたせいだから、制裁とかは」

「んな事せえへんよ」

「テッド、ちゃんと武蔵の話聞きなさいよ？」

「応援してるよ武蔵」

「ちゃんと返事してあげてくださいね、テッドさん」

「武蔵、お姉ちゃんがついててあげた方が良い？なんなら・・・あうう」

「さあさあ、私達は外に出ましようねー」

残ろうとする大和を扶桑がぐいぐいと押し出すと、事務所に静寂が訪れた。

「あ、あー・・・えーと」

「・・・よ、余計な事を」

「何か言ったか？」

「何も言って無い！」

「と、ところでその、話って何だ？」

「・・・」

神武海運の裏庭に出ると、ナタリアは細巻き煙草に火をつけた。

「それで、武蔵はいつからテツドの事好きだったのよ？」

「本当はいつからなのかは知らんけど、気づいたんは時雨が最初やったかな」

時雨は首を傾げた。

「僕はてつきり皆解ってると思ってたよ。山城は気づいてなかったの？」

山城は眉間に皺を寄せた。

「んー・正直解らなかつたわね。行くのを嫌がってない事だけは知ってたけど」

神通は肩をすくめた。

「私はあの頃はほとんど1日中寝てたので・・・」

龍驤は苦笑した。

「うちはむしろ、武蔵がうちらの中で頑張って役を演じとる方を気にしとったからな」

ナタリアは首を傾げた。

「呆れた。じゃあ大和さん達が来た辺りからずっとってこと？」

「今の会話でよう解ったな」

「神通さんが具合悪かったのはその辺でしょ」

「せやけど、町にも話漏れてたんか？」

「あまり外で見かけないから、具合悪いんじゃないかって噂が立ってたのよ」

「さよか。まあ、事実やからなあ」

「あの頃からとすれば・・・随分経ってるわよね？途中ブランクでもあったの？」

大和が溜息をついた。

「いいえ。傍で見てる方がじれったいくらい遅いですよ、あの二人」
時雨が頷いた。

「昨年ようやくおせちを渡せたくらいだからね」
ナタリアは肩をすくめた。

「殺人級にニブチンのテッドに、そういうのがトコトン苦手そうな武蔵じゃねえ・・・」

龍驤が頷いた。

「せやからあれやこれやとうちらも手を打ったんやで？」

「苦労がしのばれるわね」

扶桑が建物の方を振り向いた。

「ある意味、今日は丁度良かったのかもしれないね」

神通が続けた。

「ちゃんと言えたでしようか、武蔵さん・・・」

チツ・・・チツ・・・チツ・・・チツ・・・

「・・・」

「・・・」

大和達が出て行ってから今までの間、テッドはとても居心地が悪かった。

なぜなら武蔵が真つ赤な顔のまま押し黙っているからである。

音を発しているのは事務所にかかっている柱時計だけだ。

こちらからフォローしようにも言うべき事は言ってしまったし、なにより・・・

(何で俺が猫を可愛がったと解ったら武蔵が泣いたんだ?)

という点がさっぱり解らなかつたのである。

ただ、余計な事を言えるような雰囲気ではない事だけは解っていた。
た。

ゆえに大変居辛かつたのである。

一方、廊下ではこんな囁き声が。

「ねえ、気持ちちは解るけどあまり弄り回さない方が良いと思うわよ?」

「わ、私もそう思います・・・」

「せやかて気になるやん」

「ちよつとだけ、ちよつと様子を見るだけだよ」

「姉としては妹の行く末を案じるのは当然です」

「そもそも、そんな事言いながら皆来てるじゃない」

「山城、そんな言い方はいけませんよ」

何度目かの深呼吸をした後、武蔵は口を開いた。

「・・・テッド」

「お、おう」

「ま、まずはその、ごつ、誤解して、取り乱して、わ、悪かった」

「ああいや、俺の方は平気なんだが・・・」

「なんだ？」

「何がそんなに泣くほどマズい事だったんだ？」

「う・・・」

「お、お前もしかして・・・」

「!？」

顔を真っ赤にしたまま武蔵ががばりと顔を上げ、テッドを見つめた。

「猫アレルギーか？」

武蔵はがくりとつんのめった。

その時、ガタツという音や悲鳴と共に、事務所の引き戸が外れて倒れこんできた。

「キヤーー！」

「ちよつ！ちよつ！退けてや！潰れる！46cm重すぎや！」

「イタタタ・・・」

「と、とにかく退いて・・・あ」

顔を上げた大和達と、呆気に取られたテッド、そして怒りをあらわにする武蔵の視線が交錯した。

「あ、あ、あ、姉上えくつ！」

第6話

「すんまへん」

「ごめんなさい」

「いや、だって、さすがにテッドさんニブ過ぎでしょ」

「あの場面で猫アレルギー・・さすがに無いかな」

「無い無い絶対無い。ありえへんわ」

「余りにも不意打ちでしたね・・夜戦のカットイン攻撃並でした」

「さすがに鈍感にも程があるわよ、テッド」

ドアと共に倒れこんできたナタリア達から集中砲火を浴びたテッドは口を尖らせた。

「悪かったなあ・・でも他に理由が思いつかなくてよ・・」

そう、テッドは返したのだが、

「あの、幾らなんでも、武蔵さんの恋心には気づいてますよね？」

と、神通が素で言ってしまったのである。

「・・・は？」

テッドは予想通り、目をぱちくりとさせた。

だが、武蔵達も同じ事をした後、

「じ、じじじ神通う！それ言っちゃダメえー！」

という大合唱になるまで数秒を要したのが、いかにインパクトの強い一言だったかを示している。

「あ、あの、完全に勇み足でした。誠に申し訳ありません」

俯いたまま固まる武蔵に、おろおろとした様子で何度も頭を下げる神通。

それだけならともかく。

「え？え？え？武蔵が？お、おとおお俺に？」

と、部屋のあちこちをきよろきよろ見回すテッドまで居るのである。

葉巻をシガーカッターで次々輪切りにしている辺り、相当動揺しているであろう。

大和と扶桑が大きな溜息をついた時、腰に手を当てたナタリアがテッドに言った。

「アンタ本当に解らなかったの?」

「・・・すまん」

「このままじゃ武蔵が可哀相って事は解る?」

「えっ何でだよ」

「自分の気持ちは知られて、アンタの返事は聞いてないからよ」

「そっ、そそそそそんな突然言われたってよ」

「何か考えなきやいけないの?」

「ん?んー・・・」

テッドはふと、自分が葉巻の半分をシガーカッターで細切れにした事に気づき、手から欠片を払いのけた。

「頼む、一本だけ吸わせてくれ。頭ごちやごちやだ」

「どーぞ」

「すまん」

・・・シュー・・・パシュー

新たに吸い口を切った葉巻にターボライターで火をつけていくと、少しずつ落ち着いてきた。

ただ、既に充分火がついているのにライターを消さない辺り、見るように見えていない感じである。

おいおい待ってくれ、なんだか訳が解らねえ事になったぞ。

確かに武蔵とは軽口叩き合える程度には打ち解けてるって事は解ってた。

で、でもそれは、てつきり武蔵が男っぽい性格ゆえにウマが合うんだらうって程度に思ってたしよ・・・

・・・シュー・・・

葉巻の半分以上が灰になりつつあったが、テッドはターボライターで炙り続けていた。

いや待て。武蔵が俺の事を好きって言っただど?

一体全体どういう事なんだ?

ていうか、アイツは俺のおせちの具が偏つてるとか毎日洗濯しろと

か文句ばっかり言ってたじゃねえか・

「・・・っ！あっちー！」

ついにテッドが持つ部分まで火が回り、テッドは燃えた葉巻を宙に放り投げた。

ナタリアは片手で、燃えていない部分を選んで葉巻をキャッチすると、ジト目でテッドを見下ろした。

「何やってるのよ」

だが、動いたのはナタリアだけでは無かった。

「テッド、手を見せろ。酷く痛むか？」

「い、いや」

「変色は・・・してないな。治癒するまで患部は触らない方が良い。待ってろ」

「あ、ああ」

テッドは向かいの棚から薬箱を取り出す武蔵をぼんやり見つめていた。

アイツはずっと・・・俺の事を心配してくれてたつてののか？

武蔵はガーゼを切りながら言った。

「テッドは艦娘の状態になってから怪我したのは初めてか？」

「え？あ、ああ。そう・・・だな」

「我々の場合、システムが傷を復旧させるまで広がらぬようカバーするだけだ。人間用の薬は使えないから気をつける」

「そ、そうか」

「テッドの場合は無線機だが、艦装本体まで損傷がフィードバックされた場合は妖精が修理せねば治癒しないから留意しろ」

「詳しいな」

「旗艦の業務には僚艦の応急処置も含まれるのでな、基礎的な知識や処置は一通り覚えねばならん」

「そっか・・・色々やってきたんだな」

テッドの耳元で山城が囁いた。

「泣かせたら承知しないわよ？」

「・・・そう、だな」

切ったガーゼ等を手に、武蔵が戻ってきた。

「ほら、手をパーの形にしろ」

「ああ」

「これから患部にガーゼをあてて包帯を巻く。痛かったら言え」
「解った」

テッドは武蔵の作業をじっと見ていた。

武蔵の手つきは無駄がなく、結び目も綺麗だった。

仕上がり納得したように小さく頷くと、武蔵はテッドに言った。

「今、包む前より痛みは悪化してないな？」

「ああ。ちよつとチクチクするくらいだ」

「なら傷は浅いだろう。ここ以外に炙った所はあるか？」

「いや、ここだけ・・だ」

そういうと武蔵は立ち上がり、薬箱の方に歩いていった。

「それなら包帯は明日の朝外せ」

「ああ」

「もし、その時まだ痛むようならビットの所に居る妖精達に診てもらえ。艤装の微調整が必要かもしれん」

テッドは薬箱を開け、片付けを進める武蔵の背中に声をかけた。

「解った。でな、武蔵」

「なんだ？」

「・・ずっと傍にいてくれよ、大事にするからさ」

武蔵は片付ける手をピタリと止め、ぎこちなくテッドの方に振り向いた。

二人を固唾を呑んで見つめるナタリア達7人の瞳孔が開ききつているのは言うまでも無い。

「・・・えっ？」

「俺はさ、お前の言う通り仕事以外はズボラでさ」

「・・・」

「伊達巻もフォークで切りながら食うとかさ、色々面倒かけちまうかもしれん」

「・・・」

「け、けどよ、お前が俺を心配してあれこれ言うんなら、直すようにするよ」

「・・・」

「す、少なくともDeadline Deliverが続く限り俺には仕事がある」

「・・・」

「食うに困るような事にはさせないし、大事にするからさ、その、嫁に来てくれねえかな・・・」

武蔵はぼかんとしたままテッドを見返していたが、次第に歯を食いしばり、拳を固め、わなわなと震え始めた。

「おま・・・テツ・・・こっ！・・・こん！・・・こんな所でなんでそんな大事な事を言うんだ！」

そんな武蔵の反応に明らかに動揺した表情でテッドは答えた。

「えっ、だっ、だつてよ」

武蔵は顔を真っ赤にしながら薬箱を指差した。

「私が今何をしてると思う！薬箱に包帯を仕舞ってる最中だぞ!？」

「お、おう、見えてるぜ」

武蔵はぎゅつと目を瞑り、包帯を握り締めながら腕をぶんぶん振り回した。

「ふぎっ、ふぎけるな！そんな！そんな大事な事！こっ、こんな雑な雰囲気の中で聞いてしまったではないか！」

「なんだよ雑な雰囲気って。初めて聞いたぞそんな単語」

「包帯を仕舞いながら横耳で聞くような！そんな！そんな話じゃないだろ！」

「じゃあどうしろってんだよ」

「そっ、それにうちの事務所だぞここは！」

「解ってるよ見えてるよ知ってるよ！」

「もっ、もっとうこう！もっとう洒落た高層ビルの夜景が一望出来るホテルの展望デッキとか！」

「んな場所知らねーよ！っーかこの町のどこに高層ビルがあるんだよ！一番高いのでも市役所の3階建てじゃねーか！」

「うるさい！テッドが作れ！もう！このバカ！バカ！バカモノ！」
「何を怒ってんだかさっぱりわからねーよ！」

第7話

・・トン。

「はーあ」

武蔵とテッドがヒートアップする中、廊下に避難したナタリア達7人は引き戸を閉めると重い溜息をついた。

疲れきった表情でナタリアは口を開いた。

「まあ、武蔵の言う事も解らなくはないけどね」

大和が静かに首を振った。

「いいえ。あの子は自分で気持ちを伝えてもいないのですから甘え過ぎです」

神通が首をすくめた。

「私に変に伝えてしまったから、こんな事になってしまったのでしようか・・」

時雨が首を振った。

「神通が言わなかったら、あと5年経っても進展しなかったよ。もう頃合だったと思うよ」

龍驤は頷いた。

「まあ場所はともかく、テッドのプロポーズの中身は及第点とちやうか?」

扶桑が頷いた。

「ええ。テッドさんらしく、飾らないけれど武蔵さんを大事にしたいという気持ちで籠ってました」

山城は肩をすくめた。

「でも武蔵ってムツツリだから、きっと少女マンガのようなプロポーズの場面を想像してたんでしょうね」

ナタリア達全員が山城を見た。

「・・それだ」

「あー、せやから武蔵はあんなにぶち切れとるんやな」
「納得したよ」

「さすが山城さんですね」

大和はジト目になった。

「・・・ちよつと武蔵を説教してくるわ」

ドアに歩み寄ろうとする大和を龍驤が引き止めた。

「い、いや止めとき。今出てつたら完全にドタバタコントの出来上がりやで!？」

「幾らなんでもテツドさんに甘え過ぎです」

「まあテツドのお裁き拝見と行こうやないか。雲行きが怪しくなったらうちらが出ればええ」

「んー・・・仕方ないですね・・・」

大和は今一つ納得していない感じだったが、不承不承頷いた。

ナタリアが言った。

「そういえば静かね・・・」

全員の視線が引き戸に集まった。

ナタリア達が出て行った少し後。

なおも腕をぶんぶん振り回してあれこれ言う武蔵に対し、テツドはその手を両手で掴んだ。

「離せ！一体なんだ！」

「武蔵」

「なんだ！」

「場所や場面が気に入らなかつたのなら詫びる。だが俺の気持ちをちゃんと伝えたかつたんだ」

「・・・」

「俺が、お前に感謝してて、俺がお前を必要だつて思ってるって事だな」

「・・・」

「伝え方が問題で、俺がやり直すのは構わねえ」

「・・・」

「だが、俺の誤解なら、皆の勘違いなら今ここで言え。俺から皆に上手く説明しといてやる」

「・・・えっ?」

「お前が俺の事を好きでも何でもないなら今言え。気持ちって奴は何より大事だが、誰からも見えねえんだ」

「・・・」

「なあ武蔵。本当は、お前は どう思ってるんだ？ 皆の誤解なのか？ 本当に好きなのか？ 教えてくれよ」

武蔵は押し黙った。

黙ったまま次第に頬を高潮させ、ふるふると震えていた。

だがテッドの手を振り払う事はせず、じつとその手を見つめていた。

テッドはしばらく黙って武蔵の様子を見ていた。

大和達が気づいたのは、まさにこの時だった。

再びテッドが口を開いた。

「周りが違う事言っても、訂正し辛い時はある。良く解るぜ」

「・・・」

「でも、雰囲気にも飲まれて流されたらいつか苦しくなる」

「・・・」

「武蔵。俺はさっき言ったとおり、お前の事は大事だと思ってる」

「・・・」

「別に俺のかみさんになってくれなくても突き放したりしねえ。だから・・・」

「・・・ない」

「あん？」

「ま、ま、間違つて、なんか、ない」

「・・・」

「や、山城の言う通りだ：好きでもない奴に誰がお節介など焼くものか」

「・・・」

「どうでもいい奴のおせちなぞ気にしない。その通りだ。そんな奴、勝手にフオークで食べばいい」

「・・・」

「だから、その、皆は、ま、間違つてないし・・・」

「・・・」

「テツ、テツドが、その、言ってくれて、う、嬉しかった・・・」

「・・・となると、やっぱ場面と場所か？どこでやり直せば良い？条件を
言えよ」

「・・・いや」

「ん？」

「い、言い直す必要はない。どこで言われたかより、だ、誰から何を言
われたかが大事だからな」

「・・・でもよ、さつきあれだけ」

武蔵は再びぶんぶんと腕を振ってテツドの手を振り払った。

「ああもう！頼むからこのくらいで勘弁してくれ！顔から火が出そう
なんだ！」

「だから、それだけ言われても良く解らねえんだって・・・俺はどうす
りやいいんだよ・・・」

ガラッ！

「じゃーん！龍驤様の解説コーナーやでー！」

開いた引き戸に振り向いたテツドは地獄に仏とばかりに龍驤を見
た。

「おお龍驤！頼む教えてくれ！一体全体どういうことなんだ？」

テツドの背後で必死に黙れとアピールする武蔵を無視しつつ、龍驤
はテツドに向かって続けた。

「簡単に言うとな、解りやすい所にケチつけて照れ隠ししとったって
事やー！」

呆然とするテツド、愕然とする武蔵。

時が止まったかのような瞬間を崩したのは、ようやく出たテツドの
一声だった。

「・・・は？」

「嬉しゅうて嬉しゅうてたまらんのを素直に出せへんから、とりあえ
ず適当に文句言っただけや！」

「マジかよ」

「せやから別に・・・なんや山城、これからええとこなんやから」

振り向いた龍驤に、ジト目の山城は囁いた。

「・・・急いで退避した方が良いと思うわよ?」

「なんでや?」

「あれを見なさい」

ふと龍驤が顔を向けると、武蔵は目が据わり、どす黒い般若のような笑みを浮かべながら艤装を展開しつつあった。

「・・・辞世の句は読んだか? 龍驤」

武蔵のほうに振り向いたテッドは余りの迫力に椅子から転げ落ちた。

だが、この程度で尻尾を巻く程に付き合いの浅い龍驤ではなく、武蔵をまつすぐ見ながらにやりと返した。

「ほほう。ほんならテッドに誤解されたままでええんか?」

「・・・なに?」

龍驤と武蔵を交互に見るテッドや龍驤を止めようとする山城達を無視したまま二人の話は進んでいく。

「武蔵が素直に気持ちを出せへんと解つたら、テッドの事や、ちやあんと配慮してくれるんやないか?」

「ぐっ・・・だつ、騙されない! そんな手に引つかからないぞ私は! お前は面白がつてるだけだ!」

「ほうか? ほな今後一切、テッドとの交際を進める上でうちの支援は要らんねやな?」

「む!」

「微妙なオンナゴコロをよう解らん言うテッドに自分で全部説明出来るんやな?」

「そ、その、それは・・・」

「当事者が自分で説明するのはごつつ恥ずかしいでえ?」

「う・・・うう・・・」

「そもそも告白さえハタレて今なおハッキリ言えへん武蔵がそんな大技出来るんかな?」

「うぐ・・・そつ、それくらい・・・」

「ホンマかあ? ほんまに出来るんかあ?」

「ぐ・・・で、でき・・・る・・・」

「ほな、うちらが見届たるさかい、今はつきりとコクつてみ？ほれ？ほうれ？テッドは真ん前におるでー？」

目を細めてニヤリと笑う龍驤、真っ赤になって歯を食いしばり、艀装を展開したままぶるぶる震える武蔵。

傍目にも明らかな勝敗は、ついに武蔵ががくりとひざをついた事で確定した。

「て、手伝って・・・ください」

龍驤はフンと鼻息を吐きながら腕を組んだ。

「しゃーないなあ、こんな真似して許すんは今回だけやで？」

「はい。すみません」

大和は何度も頷いていた。

龍驤は相変わらず武蔵に甘いのが、まあ自分が説教しなくても意図する所は伝わっただろう。

俯いて床に座り込んだままの武蔵に、テッドはそつと手を差し出した。

「・・・なんだ？」

「俺もさ、人との付き合いは器用じゃねえから、何となく解るぜ、武蔵の気持ち」

「・・・そうか？」

「お互い不器用同士ってんなら、人より時間かけて、ちゃんと気持ちを示していこうぜ」

「・・・」

「その、俺は、武蔵と仲良くしたいから、さ」

武蔵はテッドの手を取りながら言った。

「不器用同士、か」

「ああ」

「・・・それなら私だけ引け目を感じる事は無いか」

「そうさ」

「色々取り乱してすまなかった、テッド：その、これから、よろしく、頼む」

「ゆつくり、ゆつくり始めような」

「ああ」

ナタリアは肩をすくめた。

「まー収まる所に収まったんじゃない？良かったじゃない？
神通がほつと息をしつつ応じた。

「本当に、良かったです・・・」

時雨が笑った。

「じゃあこれから、式とか、色々決めていかないといけないね」
山城がニヤリと笑った。

「愛の巢も要るわね」

テッドと武蔵がぎゅいんと山城の方を向いた。

「や、やややや山城何言ってる！」

扶桑がころころと笑った。

「あらあら、息ピツタリですねえ、うふふふふ」

こうして、武蔵とテッドは結ばれたわけであるが、その話は当日の夜には町中に知れ渡っていた。

当然、翌日から二人は冷やかされまくった。

武蔵はしばらくの間龍驤を疑っていたが、

「うちとちやうがな！そういう事で嘘つかへんわ！」

と、真っ赤になつて怒るので、大和達はシロだなど早々に理解していたのである。

では実際誰の仕業だったかという点はご想像にお任せする。

第8話

それは、ある日の午後のこと。

部屋に入ってきた雷は、後ろ手にドアを閉めるなり溜息をついた。「ほんとにもー、毎回毎回やんなっちゃうわよねえ・あ、お邪魔するわね」

「その部分は全くもって同意だけど、恐らく主語は違うのだろうね」「どういう意味かしら。あ、最後のー切れいっただき♪」

「あへっ!?!・・・し、信じられない・・・端っこ・・・私が楽しみに残していた・・・ガリガリした端っこ・・・」
「むぐむぐ・・・うるさいわね。どうせ何本も備蓄してるんでしょ。次出さないよ」

傍に来た雷に電光石火の速さで羊羹を取られ、涙目になって震えているのはヴェールヌイ相談役である。

ここは大本営資料室、つまりヴェールヌイ相談役の仕事部屋である。

広大な敷地を誇る大本営図書館の地下、図書館の倉庫に囲まれる形で存在している。

通路が完全に分離している為、図書館職員でもこの部屋の存在を知らない者は多い。

元々、ヴェールヌイ相談役の執務室は別にあり、ここは空襲等に備えたシエルターとして作られた部屋だった。

しかし何回言っても

「・・・パサー」

「仕事を立て込んでね。ほら今朝来た分だよ」

「いや、私が居ない事に誰がいつ気づくかという検証をね」

などとあれこれ理由をつけて毎年避難訓練をサボるヴェールヌイ相談役に、

「ふーん、それなら最初からシエルターに居たら良いじゃない」

と、雷が皮肉たつぷりに言ったところ、

「ハラショー。シエルターは静かで涼しいし、ついでに非常食の管理も引き受けるよ」

と、二つ返事で本当に引越してしまったので、雷は実に渋い顔をしたものである。

ただ、今から思えば増え続ける資料が元の執務室に入る筈も無かつたので、結果オーライの面はあった。

(本当にシエルターが必要になった時にどうするんだという件は完全にタブーの話題である)

余談だが、シエルターに備蓄される非常食は大本営の上層部向けという事もあり、大変リッチである。

普通は非常食といえばカンパンに缶詰が関の山だが、ここにはレトルトの惣菜や缶入りの柔らかいパン、そして甘味も届く。

(先日、新型ウイルスに罹患した大和が郵送室に隔離された際、届けられた非常食もこの在庫である)

また、食料は永続的に食せる筈も無いので、賞味期限が切れる前に次のセットを発注せねばならない。

そこでヴェールヌイ相談役は在庫の期限をチェックし、入替が必要な物と数を給糧部第2課に伝えている。

ただ、発注してから物が届くまでの時間は世間の食糧事情に左右されるので少なからぬブレがある。

その為、賞味期限から余裕を持って発注せねばならず、その加減はヴェールヌイ相談役に一任されている。

一方、置ける場所は限られているので、代わりが来た食料は差し替えて廃棄する事になる。

とはいえ単に廃棄するとまだ食べられるのにケシカランと、うるさい団体が怒鳴り込んでくる。

なのでヴェールヌイ相談役は「仕方なく」差し替えた食品を消費する役目も引き受けている。

また、極端に入手困難な時期に備蓄している食品が一気に期限を迎える事は避けねばならない。

加えて特定の食品ばかり発注すると異物混入問題等が出れば致命

傷となるので適度にブレンドせねばならない。

ゆえにこの仕事は非常に複雑な内容になっており、頻繁かつ様々な食品を少しずつ入れ替える事になる。

以上によりヴェールヌイ相談役は1年中廃棄品を消費する為、「結果的に」引きこもり生活を送っている。

かつて審査会で問われた時、これらをゆっくりと説明したうえで、「いや、私も運用負荷は高いけど仕方なくやってるんだよ・皆にとつて一番丸く収まる方法だろう?」

やけに神妙に答弁するヴェールヌイ相談役を見て、雷は本当かなあと眉をひそめたものである。

ヴェールヌイ相談役が神妙な態度で語る時は大抵口クでもない事をやっているからだ。

ただ、それぞれの理由はもつともであり、胡散臭いとは思いつつも質しきれなかった。

雷の読み通り、ヴェールヌイ相談役は答弁において幾つか言っていない事があった。

例えば、1年中3食全て期限間近の非常食を食べている訳ではないし、仮にそうした所で食べられる量ではない。

それらをヴェールヌイ相談役は別の方面で活用している。例えば大本営情報部の斥候艦隊旗艦である伊8はオフになると必ず書店街へと繰り出すが、

「もし〇〇の新書が出ていたら買ってきてくれないかな?」

そう言つて真空パック入りのシュトーレンを幾つか握らせる。また、工廠の夕張にちよつとした艤装の改良や兵装の手入れを頼んだ後、

「助かったよ。これ、夜食の差し入れだよ。皆で食べてくれないかな」
そういつてレトルトのおかずとごはんを段ボール箱単位で渡したりする。

伊8にしてみれば呆れるほど長い斥候任務のお供として欠かせないアイテムである。

夕張も自身の夜食のほか、夕張会に供する食事としても重宝してい

る。

(これは夕張会のメンバーに調理させると必ず火事になるので雷から禁止されている為である)

このような形で色々な方面に物を流し、代わりにヴェールヌイ相談役の手元には様々な情報や品物が還元される。

部屋に居ながらにして手に入らない物は無い状況は、一見快適な引きこもり生活といえる。

だがそれは身辺警護上の理由で休日さえ外出も自由に出来ない厳しい制限に耐える為の術なのである。

ちなみに。

かつて、鳳翔が総料理長に着任した直後の事。

新しく届いた羊羹の箱と引き換えに、差し替えた羊羹の箱を廃棄すべく持つて行こうとした時、

「あつーその羊羹は来週のおやつ．．あ、いや、なんでも．．ない」

言いかけて慌てて口をつぐんだヴェールヌイ相談役を少し見た後、鳳翔は言った。

「実は上に持つて行つても置き場所がないのです。今後はこちらで処分頂ければ助かるのですが、如何ですか？」

それを聞いて目を輝かせて何度も頷くヴェールヌイ相談役に、鳳翔は箱をそつと置くと、

「それでは処分の件を皆に伝えます。勿論、先程仰りかけた事は内緒にしておきますね？特に雷様には」

そう言つて鳳翔は柔和に微笑み、ヴェールヌイ相談役は真っ青な顔で硬直した。

こんな一件があつたので、ヴェールヌイ相談役はいまだに鳳翔総料理長に頭が上がらない。

鳳翔総料理長の口の固さに感謝しつつ、週に1度、ニコニコしながら次に発注する保存食をカタログで物色する。

これがヴェールヌイ相談役の数少ない楽しみの一つなのである。

第9話

話は現在に戻る。

ヴェールヌイ相談役はぶつぶつ言いながら冷蔵庫を開け、今朝仕舞ったばかりの羊羹の包みを取り出した。

「雷が来ると必ず半本分余計に消費してしまう：計算式に雷の補正要素も含めた方がいいな」

「何か言った？」

「いいや。ところで何が嫌なんだい？」

ヴェールヌイ相談役は話を振るも上の空であった。

それは羊羹の全長を測りなおしている最中だったからであり、その結果に大きく頷いた。

さて、これからが一番大事な場面だ。長さ345・8mmの羊羹をきつちり10等分しなければならぬ。

温度上昇による伸縮補正と切断ロス分を考慮して、今回は34・3mm毎に刃を入れていこう。

栗羊羹は栗が砕けやすい。零れ落ちないように慎重に、慎重に・

包丁を持ち、真剣に羊羹と向きあうヴェールヌイ相談役を眺めながら雷は続けた。

「この時期よ。決まってるでしょ」

ヴェールヌイ相談役は切りながら返した。

「・・・月水金戦争、春の陣かな？」

「ええ。うんざりしちゃうわ」

大本営の中で執務している制服組は、いずれも出世レースに勝ち残った面々である。

その中でも特に少将の連中はゆくゆくは大将、正確には元帥入りを目指している。

1つしかない大将の座につくのは普通の功績だけでは無理であり、運の要素が多分に入る。

加えて相対評価による降格が普通に行われる。

その莫大な不安の反動として、派閥に入り、対立陣営の足を引つ張るのは自然な流れである。

一方、大将はその制度上、代行時の混乱を避ける為、中將に指名する者は1人に絞るのが大本営の慣わしである。

その中將は大将が元帥になれば一緒に引退し、元帥の秘書室長になるのが慣わしゆえ、意外と華が無い。

つまり自分が大将となった後、中將役を命じられる、寝首を搔かない腹心を一人だけ見つけておかねばならない。

それも飛び級では後々火種になるので少將の中から選ばねばならない。

誰を蹴落とし、誰を将来の中將として手懐けておくか。あるいは誰を将来の大将としてついていくか。

互いに蹴落としあう少將という立場の中で本当に信用出来る、上あるいは下を探し出すのは至難の業である。

やっと手を結んだ相手が体調でも崩して降格すれば探し直さねばならず、候補を絞り過ぎてもしけない。

それは互いに複数の候補を擁立する事を意味するので、手を結んだからと言って安心も出来ない。

ゆえに少將という役職は、全ての役職の中でも飛び切りストレスフルで複雑怪奇な力関係が存在するのである。

ヴェールヌイ相談役が月水金戦争と言ったのは、その中でも突出した3派閥間の争いである。

月元少將、水山少將、金代少將それぞれが率いる、月元派、水山派、金代派の頭文字を取って月水金戦争。

春の陣というのは、年度初めの人事異動で自派閥の者を一人でも多く有利なポストに着かせる為の暗躍を意味する。

派閥の勢力は掴んだポストによってあっさり塗り替わるので、その壮絶さは推して知るべしである。

ヴェールヌイ相談役は羊羹から包丁を抜き、深呼吸をした後、どうでも良いとばかりに言った。

「放つとけば良いや」

「そうもいかないでしょ。洒落にならない所までエスカレートするじゃない」

「いっそ共食いさせてしまえば良いじゃないか・次は4切れ目・ここだね」

「世間に対してみっともない所を晒すわけにはいかないのよ」

そう言つて雷は肩をすくめた。

ヴェールヌイ相談役は包丁を濡れ布巾で拭いながら答えた。

「そんなにモメるなら宝くじのように抽選制にでもしたらどうか」

「抽選関係者がやけに羽振りの良い生活を送った後、次々失踪する羽目になるだけよ」

「買収と暗殺つて事かい？なら大将と中将、それに五十鈴と大和あたりで抽選すれば良い」

「それこそ会場で謎の爆発が起きそうよ？早く自分の番が回つてきますようにつて」

「・・そうだね。ここがどうしようもないのは今に始まった事でもないか」

その時、ヴェールヌイ相談役は包丁の手ごたえに変化を感じた。

こっ・・この1切れは・・凄く大きな栗が入ってる・・間違いない。是が非でも雷に取られる訳には行かない・・よし。

ヴェールヌイ相談役は直前に切った3切れをひよいひよいと皿に乗せ、雷に差し出した。

「ほら、君の分だ」

「あら。取り分けてくれるなんて優しいじゃない。じゃあお茶淹れて来るわね！」

「良いね」

雷が廊下に出て行ったのを眼光鋭く見送ったヴェールヌイ相談役は、すばやく切りたての羊羹を口にした。

・・大正解だ・・甘い大きな栗が・・栗が・・黒蜜羊羹も良いが栗は格別だ・・

嬉しさに目尻を下げたまま、ヴェールヌイ相談役は残りの羊羹を切り分け、雷の皿に2切れ追加した。

これで5切れずつ。数の上では公平だ。

「待たせたわね！良い感じに淹れられたわ！」

「1切れ先に頂いてしまったよ」

雷が湯飲みを渡ししながら互いの皿を見て訝しげな表情になった。

「あら、均等に5切れずつ？」

「何か不満でも？」

「いつもは私4切れであなたが6切れじゃない。どういう風の吹き回し？」

ヴェールヌイ相談役は内心舌を打った。

ちっ：罪悪感からついつい普段と違う事をしてしまった。さて、どう切り抜けよう。

「・・・どうせそうやった所で私が喋ってる間に横取りするじゃないか」
「まあそうだけど」

「だからだよ」

「ふうん・・・まあ良いわ。じゃー頂きまーす」

そして黒文字を羊羹に差し込んだ雷は目を見開いた。

「うわあ！この羊羹、大きな栗が一杯入ってるわね！」

「そ、そうかい？よ、良かったじゃ・・・ないか」

同じように自分の一切れに黒文字を差し込んでいたヴェールヌイ相談役は答えつつ冷や汗をかいていた。

わ、私の一切れにはほとんど栗が入ってない・・・そんな・・・

会話を進めながら1切れを平らげ、もう1切れ、もう1切れと食べ進める。

雷が4回とも黒文字を差し込んで歓声を上げたのに対し、ヴェールヌイ相談役は涙目で呟いた。

「こ、これも栗がほとんど入ってない・・・はは・・・なんとこの事だ・・・」
4切れ目を食べ終えた時、雷は自分の皿をそつとヴェールヌイ相談

役に返した。

「・・・なんだい雷？この1切れは」

「そっち、栗があんまり入ってなかったんでしょ？」
「!？」

「だから私のあげるわ。ほら、最初に端っこ貫ったし。じゃあそろそろ行くわね！」

「あ、ああ」
パタン。

出て行く雷を見送ると、ヴェールヌイ相談役は手元の皿に目を落とした。

雷がくれた1切れがちよこんと皿の上で待っている。

「・・・」

恐る恐る黒文字を差し込んだヴェールヌイは肩をすくめながら笑った。

「まいったね・・・つまみ食いした1切れより栗が入ってるじゃないか・・・」

羊羹を頬張りつつ、ズルをするものではないなと肩をすくめるヴェールヌイ相談役であった。

第10話

それは、ある日の午後の事。

「はい、確かに。それではお預かりします」

南城は丁寧な溝山農園の玄関扉を閉め、駐車場に停めた「山甲信用金庫」と書かれたセダンのドアを開けた。

車に乗り込むとすぐにドアロックし、膝の上でスーツケースを開ける。

「・・・ええと、これで全部・・・だな。よし」

エンジンをかける前に運転席で再確認。

客の目の前でも確認は取っているが、少し時間を置くと忘れ物に気づくこともあるからである。

発進させてから思い出すと気になって仕方ない。

市内を運転中によそ見をすれば警察がにこやかに切符を切ってくる。

そもそも、溝山農園内の私道はガードレールすらない崖っぷちの細い道。

少しでも目を離せば谷底まっしぐらなのである。

「くわばらくわばら」

小さく首を振るとスーツケースを閉じ、施錠して助手席の足元に置く。

エンジンをかけ、周囲を見回してからそろりと車を発進させる。

「ふー」

私道から県道に出て赤信号を待つ段になり、南城は安堵の息を吐いた。

あの私道は心臓に悪い。ここまですれば・・・ん？

タタタタツ・・・ドン！ドン！ドン！ドン！・・・タタタツ・・・

「・・・!!」

「!!・・・!!」

「あー」

南城はジト目になり、ハンドルに隠れるよう頭を低くしながら外を

窺った。

交差点の青信号側を2台の車が走り抜けながら互いに怒鳴りながら銃で撃ち合っている。

流れ弾に当たって死ぬなんて真っ平御免である。

「ここまで山賊が追ってくるなんて珍しいなあ・・よほど挑発でもしたのかな？」

南城が乗る車にも何箇所か弾痕があるように、ここでは銃撃戦など日常茶飯事である。

ディーラーオプションでも普通に防弾セットが用意されている位である。

つくづくここは、日本であって日本じゃないと思う。

「昔の日本なら、発砲音みたいな音がただけでパトカーが来た気がするんだけど・・」

正確にはそれは昔ではなく、今も、特に都市部であれば常識である。だが、ここは都会から遠く離れた山甲町である。

警察署もあるれっきとした日本の街だが、ほんの少し常識が違う。そう、南城は自分に言い聞かせた。

パッ

「青信号か・・」

南城はそろりと発車しつつ左右を確認したが、急ブレーキを踏んづけた。

交差点の赤信号側から、急停車した南城の車の前を数台のバイクが横切っていく。

そのうちの1台のライダーが南城に向かって軽く手を振った。

ドドドドドドドド・・・

危ない危ない。

あれはワルキューレとSWSPの面々じゃないか。手を振ったのはミレーナさんか。

バイクに小傷でもつけたら命は無いと言われてるのに、まん前を遮ればホラー映画も真っ青の展開になる。

早く気づいて良かった。今度からは発進前に確認しよう。

「右よし、左よし、と・・・」

南城は通りを窺いつつ、慎重に車を発進させた。

「あー・・・ややつこしい事になったなあ・・・」

南城はそろそろと車を進めながら溜息をついた。

ここ、器下地区は県道沿いの表通りさえも廃屋が立ち並ぶスラム街であり、治安が悪い。

特に信号待ちの車のガラスを叩き割ってカバン等を盗むスマツシユアンドクラブという強盗が多発している。

別にここだけではないので、荷物は足元に置くのである。

そして目の前の信号は妙に長い間「赤信号」が続いている。

制御盤を弄って赤信号にし、車を停めて強盗を働く輩も居るから、この辺りの信号なんて信用出来ない。

ゆえに無視してしまいたいのだが、通りの向こうにはパトカーが停まっている。

強盗をする連中はパトカーが停まっていようと銀行の名が入った車を見逃したりはしない。

なぜなら警官が降りてくる前に蜘蛛の子を散らすように逃げてしまおうし、警官が捕まえようとしなからだ。

幾ら銃を持った警官といえど、器下地区のスラム街に一人で突入すれば生きては帰れないからである。

さりとしてパトカーの目の前で信号無視をすれば警察のメンツを潰す事になるから必ず止められる。

どちらを優先するかといえば、命の危険よりは警官が切符を切る前に鼻薬を嗅がせる方がマシだ。

それを解っていてあえてこういう場所に陣を張る警官も少なからず居るので溜息が出る。

「・・・信号無視、幾らで見逃してくれるかなあ」

南城はスーツの内ポケットの財布を確かめつつ、交差点を走り抜けた。

ファンファン！

その途端、パトカーの赤色灯が点き、スピーカーから怒鳴り声がし

た。

「そこの白のセツダアン、停まってクさりヤがってえーい！」

交渉の為に減速体勢に入っていた南城だったが、その声を聞いて一気にアクセルを踏みつけた。

南城はジト目になった。警官なら少なくともナンバーや車の特徴を言つて停める筈だ。

そもそも警察どうこう言う前に言葉が変なんて怪しすぎる。

おいおい、まさか噂の偽検挙つてやつか？

停まったが最後、外人系の連中が車を取り囲んで身ぐるみ剥がされ、車まで強奪されるつて言う・・・

南城の命令通り、ターボ過給されたエンジンは蹴飛ばすように車体を前へと押し出した。

すれ違いざまにパトカーに目を向ければ、服装も様々な黒人4人組がこつちを指差して何か叫んでいる。

あんなの絶対警官じゃない。

それに、よく見るとパトカーも薄汚れて錆びてるなど、全体的にどこかおかしい気がする。

「停まりヤガれつて言ってますデシヨ〜！」

バックミラー越しにパトカーが追いつがってくるのを確認しつつ、南城はアクセルから足を外さなかった。

後輪が煙を吹くほどテールスライドしながら交差点を辛うじて曲がりきる。

右、左、左。

曲がり切るのが精一杯で車線など守ってられない。

すんでの所で南城の車をかわした対向車がクラクションとハイビームで抗議するが知った事ではない。

なおもパトカーは追いつがってくる。

ただ、南城は単にジグザグに走っているわけではなかった。

「見えたー！」

キキキキキーーーーッ！

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・どうだ・・・」

南城が飛び込んだのは警察署の敷地である。

立番していた警官が銃を抜きながら駆け寄ってきた。

「おい！ここは警察署だぞ！クスリでハイになってんのなら他所行きやがれ！パクられてえか！」

「違います！変なパトカーに追われてるんです！ほら！あれ！」

南城が元来た方を指差すと、警官は少し離れた所で急停止したパトカーを一目見るなり眉をひそめた。

「・・・俺らのテリトリにあの車で入ってくるってか？良い度胸してんじやねえか」

警官は一切躊躇せず、パトカーに向かって3発発射した。

赤色灯が碎け、ビシビシとウインドガラスにヒビが入る。

ギャギャギャギャ・・・ウオオオオオオン！

慌てて回れ右して走り去る車を見ながら、警官は銃を仕舞いつつ訊ねた。

「ありや旧パトだな。お払い箱にした奴でも盗んだか？おい、あいつらとどこで出会った？」

「器下地区5丁目交差点の辺りです」

「はあ？あんなとこ銀行の名前が入った車で通る方が悪いだろ。バイパスか反対側から迂回しろよ」

「迂回は遠すぎますし、バイパスは上駒トンネルが使えないじゃないですか」

「あー、まだ崩落したままか」

「ええ」

「車高上げてグリルガード追加したクロカンならいけるだろ」

「銀行の社有車はセダンしかありませんよ」

「なら中古のランクルでも用意してもらえよ。命に比べりゃ安いだろ？」

「私は全く異議はありませんが、そう簡単に通らないですよ・・・」

「それに、あの道使って行かにならん所なんてあったか？」

「溝山農園ですよ」

「ああ・・・それは重要だな。まあトンネルの修理に関しては町役場に言

え。俺達は知らん」

「じゃあ器下地区のパトロールを強化してくださいよ」

「密入国者どもは廃屋を勝手に使ってるからな、パトロールしても別の地区に逃げるだけだ」

「溝山さんが襲われたらどうするんですか」

「そんな阿呆居るわけないだろ。自殺したきや他にマシな手が幾らでもあるだろうが？」

南城は溜息をついた。

溝山農園のジャムをワルキューレのボスであるナタリアが溺愛してるのは周知の事実である。

以前、溝山氏を街角で殴り、その鞆を奪った奴は翌朝には20発以上撃たれて用水路に浮かんでいた。

一方、鞆は中身もそのまま傷一つ増えず、溝山農園の玄関先にそっと置いてあったという。

ワルキューレの実働部隊であるSWSPの犯行だと皆解ってるが、警察は「自殺」として片付けた。

溝山氏に手を出すなど自殺行為には違いないと同僚と話した事を覚えている。

山甲町には治安が悪く、誰もが安心しては歩けないという場所がある。

だが、たとえ器下地区のど真ん中だろうがワルキューレやファッツ、神武海運等が一緒なら問題は無い。

そういう町なのである。

第11話

「運転席で溜息をつく南城を見下ろしながら、警官は肩をすくめて続けた。」

「それに、やつらを器下地区から追い出すだろ？」

「ええ」

「すると逃げた先から俺達が文句言われんだよ。てめえのせいでゴキブリがうちに来たじゃねえかってな」

「逮捕してくださいよ」

「おいおい、刑務所送りなんてゴキブリ共の思う壺だ。今より生活がタダで良くなるんだからな」

「えー・・・」

「もし強盗に懲役1年なんてなってみろ、入獄目当ての犯罪が激増しちまうぞ？いいのかわ？」

「治安維持の為に取り締まらないって一体・・・」

「ただでさえ現場で上手く始末しろって通達が出てるしな・・・ああめんどくせえ」

「現場で始末？」

「おっと口が滑っちゃまった。適当な理由でパクられたくなかったら今の言葉は他言無用だ」

「解ってますよ。それはそうと、お願いですからせめて上駒トンネルが繋がるまでパトロールしてくださいよ・・・」

「ほう、警察脅して交換条件出そうってのか？シヤブ中で暴れたって事にして撃ち殺してやろうか？」

警官がホルスターから銃を抜いたので南城は慌てて首を振った。

「ち、ち、ち、違いますよ。それとこれとは別です。絶対言いませんし、単にさっきの話の続きです」

「ま、検討しといてやるよ。用は済んだだろ？ほれ、俺は忙しいんだ」

銃を仕舞い、背を向けてしっしっしと手を振る警官に、南城は肩をすくめながらギヤをリバーズに入れた。

絶対何も検討してくれないだろうが、今、偽パト連中を追い払ってくれた事には感謝しなければならぬ。

でも、ちよつと気分転換したいなあ・・・とほほ。
チリリン。

「いらつしやいませー。あ、南条さん。こんにちは」
「こんにちは」

キッチンから顔を覗かせたライネスは首を傾げた。

「納税はまだ先だし、先物に興味は無いし、金利が安かろうとローン組む予定は特にないぞ?」

「いえいえ、本当に一息入れに来ただけです」

カウンターについた南城に水を渡しながら、ルフィアは訊ねた。

「あまり顔色が良くないですね。どうかしましたか?」

「それがですね・・・あ、えつと、アイスコーヒー頂けますか?」

「はい」

「器下地区なあ・・・」

ライネスは苦笑しつつ首を振ったが、ルフィアは眉をひそめながら訊ねた。

「ねえ、そのパトカーに乗ってたのは黒人だったの?」

「ええ。筋肉ムキムキの。車内にぎゅうぎゅう詰めに入ってる感じでしたから相当大柄だと思えますよ」

「うーん・・・」

ルフィアは少し考えていたが、宙を見たまま眩いた。

「ねえ、上駒トンネルがいつまでも修理されない理由知ってる?」

「え?」

「町役場は修理業者を毎年入札させてるらしいんだけど・・・」

「そうなんですか・・・てつきり放置してるのかと」

「でもね、応札した業者が工事に入ろうとすると妨害を受けるらしいのよ。それも2年連続で」

「え?誰が妨害するって言うんです?」

「目撃情報では、筋骨隆々の黒人連中だったそうよ」

「まさか、そもそも崩落したのも・・・」

「今の話考えると嫌な予感がするわね」

南城はジト目になった。

要するにバイパスの要である上駒トンネルをわざと通行止めにし、自分達の餌場を通るよう仕向けていると？

「溝山さん、たまったものじゃないですね」

「・・・そうねえ。バイパスの開通を一番喜んでたものね」

その時。

「溝山さんがどうかしたの？」

「さつきはありがとね、南条さん」

声に振り向くと、買い物袋を提げたフローラとミレーナが立っていた。

「あらいらつしやい。聞いてく？」

ルフィアはそう言いながら、カウンターの椅子を2つ引いた。

「へー」

フローラが不機嫌になる様子確かめながら、ルフィアは続けた。

「工事会社の人のうちで妨害された事を話してたから、100%噂つて訳でもないわ」

「どんな妨害されたのよ？」

「建機や資材を盗まれたり、作業に因縁つけられて暴力振るわれたり、トラックが突っ込んだり」

「それが例の黒人グループって訳？」

「目撃された範囲ではね」

「酷いわね」

「結局怪我人続出で工事が続けられないってのが手を引いた理由だそうよ。前回はね」

「ちよつとボスの耳に入れとこうかなあ」

ミレーナが頷いた。

「器下地区の周辺は道路が曲がりくねってるから見通しも悪いし走りにくいのよね」

「バイパスは早く復活して欲しいよね」

南城が苦笑した。

「折角道があるんですからねえ」

ライネスが肩をすくめた。

「それもそうだが、そんな連中の都合に振り回されてるってのは面白くないな」

フローラが頷いた。

「ええ。私達を不便にさせて商売してるって事ですからね」

南城はコーヒーマシンの最後の一口を飲み干すと、席を立った。

「すみません。愚痴を聞いてもらって気が楽になりました。ごちそうさまでした」

「気にしないでくださいね。400コインになります」

「ええと、はい400コイン丁度。レシート頂けますか？」

「どうぞ。ありがとうございます」

「只今戻りましたー」

信用金庫の従業員口から入った南城は誰ともなく職場に向かって声をかけた。

ひよいと上司が顔を上げる。

「ご苦労さんな。溝山農園と木林工業の件はどうだった？」

「ええ、二つ・・・」

南城が言いかけたとき。

「てっ・てめーらあー！お、おお、大人しくしやがれー！」

二人がひよいと声のほうを見ると、正面入り口から入ってきた男が喚いていた。

だが、職員も順番を待っている客もちらつと見ただけで元の用事を再開し、全くの無反応であった。

男はその反応に明らかに戸惑っているが、南城は理由がよく解つた。

フルフェイスのヘルメットを被り、手には獲物を持っているが・・・
「ゴルフクラブ？何だってカーボンのドライバーなんか：せめてサンドウエッジにすりや良いのに」

南城がそう呟いた時、受付に居た女性職員が頬杖をついたまま言い放った。

「アンタよそ者ね。この町をバカにしてるの？」

「お、おとおおまえ、こ、これが見えねえのかよ！ぶん殴るぞ！」

「見えてるわよ。だからバカにしてるのかって聞いてんのよ」

「ど、どういう事だよ！警察呼ぶ時間稼ぎしようだったって」

「警察なんか来ないわよ」

「はあ!？」

「へっぴり腰で喚いてる男が一人居るくらいで警察なんて来ないしそもそも呼ばないわよ」

「ふ、ふざけてんじやねえよ頭カチ割られてえのか！こっつ、これに現金詰める！こっつ使い古した札でだ！」

ぶるぶる震えながらバッグを差し出した男に、女性職員が肩をすくめつつ答えた。

「今日は機嫌が良いから一回だけ教えてあげる」

「な、何をだよ」

「今アンタにわざとらしくキヤーとか言いながら10万コインくらいくれてやるとするでしょ」

「なんだよそのくれてやるって言い方！」

「黙って聞け」

「・・・おっ、おう」

第12話

強盗をひと睨みで黙らせた女性職員は、溜息混じりに続けた。

「アンタはその金を掴んでも、外に出られないと思うわよ？」

「じ、自動ドアの電源切ったのか！セキュリティか！」

「普通に開くわよ。ほら」

その時、ウイイイインと音がして、背の高い女性が一人入ってきた。ヘルメットを被り、ゴルフクラブを振りかぶっている男を一目見ると、

「・・・ぷっ」

笑いをこらえつつATMへと歩いていったのである。

男は職員に振り向いた。

「一体全体どういう事だよー」

「強盗を襲う強盗がいるのよ。どうせ犯罪やって稼いだ金だろってね。割と容赦ないわよ」

「えっ」

「そもそも、アタシ達だって武装くらい持ってるし」

そういうと女性職員はカウンターの影からUZIピistolを取り出した。

「ええええっ!？」

UZIを男にまっすぐ構えつつ、女性職員は言った。

「これはアンタの為よ。死にたくなければここで止めて引き返せ。真面目に働きな」

男はゴルフクラブを力なく下ろした。

「・・・はい」

その時、背後で舌打ちをする音がした。

「面白くないねえまったく・・・」

男が恐る恐る声のほうを振り向くと、待合所のベンチに腰掛けていた老婆がバッグに銃を仕舞う所だった。

それもショットバレルとはいえ、マグナム弾を用いるコルト・キン

グゴブラである。

顔を上げた老婆と目があつた時、男は理解した。職員が言っていた「強盗の強盗」はこいつだと。

「イカれてる・・おつ、おまえら全員イカれてる!・・うわああああん!」

男はゴルフクラブを放り投げると一目散に逃げて行つた。

老婆が溜息をつきながら言つた。

「あんなに取り乱して表に出たら強盗成功したかと思つて撃たれちまうんじゃないかねえ」

女性職員はUZIのセーフティをかけながら言つた。

「それならそれがアイツの寿命よ。148番でお待ちの方どうぞー」

老婆が立ち上がった。

「アタシだね。やつと来たか」

「アンポンタンのせいでお待ちせしましたー」

「気にしてないさ。定期預金したいんだけどね」

一方、その頃には南城は上司への報告を終えていた。

あんなのをいちいち気にしていたらこの町で生活出来ない。

上司が言つた。

「まあ理由はちやんとあるし、4輪駆動車の申請出してみたらどうだ?」

「通りますかねえ?」

「良い事を教えてあげよう」

「ええ」

「支店長は今朝、インスタントくじで3万コイン当たつたつて小躍りしてた」

「ビッグチャンスじゃないですか」

「そういうことだ。早く行けよ」

翌朝。

「あれ?」

自宅から銀行へとマイカーで向かつていた南城は、空に幾つか立ち上る煙に気がついた。

少し遠いようだが、下の方に火柱が見える。
車を路肩に停め、ナビで確認する。

「あー、器下地区の方角か・・・やな感じだなあ。朝から火事なんて」
南城は首を振ると、後ろを確認しつつ車を発進させた。

南城は事務所に着くと、新聞を読んでいた同僚に声をかけた。

「おはよう」

「よう。あれ？南条は器下の辺りは通勤ルートに入っていないんだっけ？」

「あんな物騒な所通りたくないよ。そういえば今朝、そっちのほうで火事が見えたなあ」

「消防の奴に聞いたら瓦礫が道路塞いでるってよ。だからあの道通る人は今日はお休みだ。残念だったな」

「えっ、じゃあ結構大きい火事だったの？」

「新聞見てないのか？」

「あー、今朝は寝坊したからTVしか見てない」

「TVではこんな地方ローカルな話題はやらないだろうな。ほら」

同僚が指差した地方欄の小さな記事を、南城は読み始めた。

山甲町で火事

〇月X日未明、山甲町器下地区から出火した。

消防車2台が出動し、他地区への延焼は押さえられた。

当該地区は元々廃屋が立ち並ぶ所で怪我人は居ない模様。

器下地区を横切る県道267号線は瓦礫が散乱して通行止めとなっており、完全復旧には数日かかる見込み。

警察は老朽化した電柱が倒れた事が出火原因であると発表した。

南城は眉をひそめながら同僚に向き直った。

「色々引つかかるんだけどさあ」

「そうだな」

「まず、他地区への延焼が抑えられたって事は、器下地区は・・・」

「全焼っていうか焼け野原だって消防の奴が言ってたな」

「地区全焼する勢いの火事なのにたった2台しか消防車が出てないって事はさ・・・」

「たまたま出払ってたか、始めから延焼を止める気しか無かったか、だな」

「あとき、確かに器下地区って廃屋が立ち並んでるけど、住人一杯居るよな？」

「密入国者ばかりだけだな」

「そんな大火事で誰も怪我一つしてないって本当かなあ」

「よく読めよ。怪我人「は」居ないんだよ」

「え？」

「全員死んでたら怪我人じゃないからな」

「・・・警察だつて動いてんだよな？」

「南城、よく思い出せ」

「ああ」

「今朝、まだ、火の手があつただろ？」

「そうだな。地区のあちこちから・・・」

「なのに何で火事の火元の原因が発表されてんだろうな。現場検証つて鎮火後にやる筈なのにさ」

「あれ？そういえばこれ・・・今朝の朝刊、だよな・・・」

「ああ。今日の未明に起きた火事が、今日の午前4時には俺の家のポストに入ってる朝刊に、書かれてるんだぜ？」

「えっ・・・まさか」

「記事の行間には色々書かれてるって事だよ。おっと、課長が来たぜ。おはようございます！」

南城も新聞から顔を上げ、課長に頭を下げた。

「おはようございます！」

1ヶ月後。

「ほいお待ちどうさん、山ブドウのジャムと蜂蜜、2瓶ずつだ」

ナタリアは溝山農園の主からずっしり重い紙袋を満面の笑みで受け取った。

「ありがとう。えっと、幾らかしら？」

「変わらんよ。全部で2400コインじゃよ」

ナタリアは1000コイン札を3枚渡し、つり銭を受け取った。

だが、ハーレーの物入れに紙袋を入れようとして怪訝な顔になった。

「どうしたね」

「いつもの場所に入らないのよ・・おかしいわねえ」

「1瓶ずつ余計に入れといたからの。後、今朝焼いたスコーンと自家製バターもな」

「どうして?」

「皆へのお礼だよ。仲良く食べてくれ」

「お礼?」

「ふもとの方を掃除してくれただろ?」

ナタリアは少し考えていたが、思い出したように何度か頷くと肩をすくめた。

「通行の邪魔だったからね」

「諸々出費もあつたじやろ?」

「毎日やってる合同演習を場所を変えてやっただけだし、後始末は警察と消防がやってくれたから何とも無いわよ」

「上駒トンネルも来月から復旧工事に入るらしい。先週、業者が挨拶に来おつた」

「ええ。そっちも終わるまで気にかけておくわ」

「ありがとう。食べる時で良いから皆によろしく言っておいてくれな
いかね?」

「もちろんよ。あの子達も喜ぶわ」

その時、長い坂道を見慣れない四輪駆動車が登ってきた。

やたらと大きなタイヤを履き、車高も随分上げている。

ガチャ。

「あ、溝山さんこんにちは。山甲信用金庫の南城です」

ナタリアが首を傾げて車を指差した。

「それ社用車なの?」

「ええ・・これなら上駒トンネルを走破出来ると思って手配したんです
けど・・」

「修復工事が始まるらしいわね。今聞いてたところよ」

「今度は邪魔されないと良いですね。そういえば例の火事で焼失した器下地区も再開発される事になりましたね」

「バイパスから離れてるから利便性は悪い場所よね。再開発して誰か来るのかしら?」

「何でも運動公園と公民館を移転させるらしいですよ。津波が来た時の避難所にするとかで」

「・・・地区全体を? 幾らなんでも広すぎない?」

「いや、他にまだあった筈ですよ・・・確か警察の寮・・・だったかな?」

「チツ・・・やっぱりあいつ横取りしたわね」

「何の事です?」

「こつちの話よ。ま、私はここに来易くなれば良いわ」

「そうですね。上駒バイパスが通じれば、後はその、この私道さえ頑張れば・・・」

ナタリアが車を見ながら言った。

「そんな幅の広い車で来るからでしょ。バイクで来れば良いじゃない。広々通れるわよ?」

「私が現金入れたカバン抱えて、原付バイクで街の中を1周走って生きてたら奇跡ですよ」

「・・・まあ否定しないわ。ならそれで頑張るなさい」

「そうします。あ、えつと、ご用事が済むまで車の中でお待ちしてますから、ごゆっくりどうぞ」

「あ、良いわよ。もう済んでるから。用件はこれだし」

ナタリアはそういうと、物入れからジャムの瓶を取り出した。

「わあ、美味しそうですねえ。溝山さん、私にも1つ譲って頂けませんか?」

溝山氏は顎に手をやりながら訊ねた。

「・・・ふむ。南城さんは山甲町の住人だったな」

「え? ええ、そうです」

「ならばよかろう。ただし、町の外の者にはここでこれが買える事は他言無用だよ?」

「はい、解りました」

「うむ。1つで良いか？」

「ええ」

「では600コイン用意して待つとれ。いつものハンコと書類も持ってくるわい」

「お願いします」

嬉しそうに財布を取り出す南城を横目に、ナタリアはハーレーのエンジンに火を入れた。

「じゃあね南城さん」

「はい、お気をつけて」

南城は笑顔で、走り去るナタリアを見送った。

第13話

それは、ある日の午後の事。

「・・・じゃ、これで、と」

パチツ！

「むおっ！」

「王手飛車取り」

「・・・ま、まままま」

「待ったなし」

「・・・んー」

町長はさくりと葉巻の吸い口を切ると、反対側にマッチで火をつけた。

目の前では既に勝利を確信した署長がどや顔でこちらを見ている。

町長は盤面をしばらく睨んでいたが、ジト目で見返すと、

「・・・やむをえん。わしの負けだ」

「よおしよしよし。今年は連勝スタートだぜ」

町長は苦々しい顔で将棋盤を裏返すと、裏面に貼られた小さな付箋の数字を1つ書き換えた。

不定期だが、署長が用件を言わず、町長をふいに訪ねてくる事がある。

町長も時間がある時はこうして将棋を指す事にしており、星取表をつけているのである。

「だ、だがトータルではまだわしが2勝分勝ち越してるからな！」

町長は鼻息荒く言い放ち、署長は苦笑した。

「この調子ならそっちも追いつけるだろうよ」

「そう簡単にはさせんぞ」

「ま、それはさておき。そろそろ終業だろ。メシ兼ねて一杯どうだ？」

「珍しいな。構わんが」

「よし」

署長がガラガラと店の引き戸を開けると、すぐに元気の良い声が飛

んできました。

「らっしやーい」

「オヤジさん、2人だが奥の間、良いか？」

「ええ、大丈夫ですよ。おい、奥にお二人だ！」

「はーい。あらどうも、ご無沙汰してます」

ぱたぱたと小走りで近寄ってきたおかみさんに署長は自分と町長を指差して言った。

「やおおかみさん、ええと、飲み兼食事で2人分見繕ってくれ。酒はぬる爛でな」

「最初はとつくり2本でよろしいですか？」

「そうだな。一度に貰っても冷めるしな」

「メインはお刺身とお鍋、どちらがよろしいですか？」

署長が振り向いたので、町長は少し考えた後答えた。

「刺身かな」

署長は頷きながらおかみさんに言った。

「じゃあ刺身で」

「かしこまりました。さあどうぞ、こちらへ」

おかみさんが去ると、おしぼりで手を拭きながら町長は尋ねた。

「わしの希望通りなんて珍しい事するじゃないか」

署長はメガネを外し、ぐいぐいと掌でまぶたを押しながら答えた。

「そうか？」

「いつもなら刺身といえば鍋を頼むじゃないか」

「読みが外れたか？」

「いや、そうだったら悔しいから毎回食べたいものを言つとる」

「じゃあ良いじゃないか」

「珍しい事をするんだなと言っただけだ」

「・・・まあ、な」

二人はしばらく、店内の内装や掲示物をぼんやり眺めたまま無言で過ごした。

長年の付き合いで、町長は署長が真面目な話題をする時は恐ろしく引っ込み思案である事を解っていた。

だからこういう時はあれこれ言わず、署長が切り出すのを待つ事にしている。

そうこうするうちに女将が皿を手にやってきた。

「おまたせしました。こちらが八寸、こちらは炊き合わせでございます」

「うん」

「お刺身ですが、今日はカツオと鯛の良い物が手に入りましたので、こちらを中心に致しました」

署長が目を細めた。

「やあ、船盛りとは豪勢だな」

町長も頷いた。

「他はイカ、甘エビ、これはブリかな？」

おかみさんが頷いた。

「ええ。天然物の寒ブリですよ」

「珍しいね」

「ゆつくりご賞味ください。お酒はこちらに置いておきますね」

「解った」

「それでは失礼します」

・・・トン。

襖が閉まると、町長はとつくりをつまんだ。

「ほら」

「・・・ん」

お猪口に注がれた酒を飲み干すと、署長もとつくりをつまんだ。

「じゃ、ご返杯」

「ん」

町長はくいと猪口を開けると、箸に持ち替えた。

「よし、じゃあ頂きます」

町長は微笑みながら寒ブリの刺身を小皿へと移した。

珍しいなど、町長は箸を進めつつ思った。

いつもならとつくりの半分も進めば言い出すのに、追加が届いた段階でも無口とは。

よほど悩んでるのか？

「どうした？・そんなに言いづらい事なのか？」

「んー・・ほら」

「うん？あ、ああ、ありがとう」

言葉を濁す署長の酌を受けながら、町長は肩をすくめた。

そしてついに、署長が口を開いた。

「先日、な」

「うむ」

「引退してた同期が大往生しちゃった」

「大往生って事は・・」

「ああ。死因は老衰。病院だし、医師が確認してるから疑う所は何も無い」

「そうか」

「・・その葬儀の席でさ」

「ああ」

「参列者の中で俺以外は皆、老いぼれてたんだよ」

「・・まあそうだろうな」

町長は頷いた。

自分にも沢山の知り合いが居るが、自分と同年代だった連中はほとんど他界している。

不老長寿化処置を受けてから長い年月が過ぎているので当然といえは当然なのだが。

「別に不老長寿化を受けた事を悔やんでるわけじゃない」

「ああ」

「愛着はあれど物騒な町だ。よたよた歩いてれば後ろからズドンなんて事もありえる」

「何とか悪化を食い止めたいがね」

「言葉も文化も合わせる気が無い密入国者が押し寄せる中じゃ、戦前のような治安状態に戻す事は不可能だ」

「都市部の治安はマシだそうだがね」

「ヤバイ連中ほど、入国管理局がしょっちゅう巡回している大都市圏

は避けるからな」

「周辺警備の厳しい大本営や鎮守府周辺もな」

「ああ。そしてそれらを避けた奴らがこういう片田舎に押し寄せてくる」

「うちの町だけじゃなく、県の会議でも似たような事言つとるよ。もつと鎮守府を招致しろとな」

「・・・少し話を戻すとな」

「ああ」

「その大往生した奴が、俺の「職場」の最後の友人だったんだよ」

署長は自分が警察官だという事をこういうプライベートの席では言わない。

それは名乗る事で周りに居る人が自分を警戒する空気が生まれるのが嫌だからだと聞いた。

最近警察に要求を飲ませる為に幹部が誘拐される事件も起きており、その意味でも言えないのだが。

「そうか。話の解る人間が居なくなってしまったんだな」

「同業者でなきや言えない話つてのは・・・あるんだよ」

「そうだな。同業で仲良しつてのは大事な人間だ」

町長は頷いてお猪口を傾けた。

警察の署長と町の町長。同じトップの立場でさえ組織が異なれば理解出来ない部分は多々ある。

「妻もだいぶ前に他界したし、周りからどんどん俺の知ってる連中が居なくなっていく」

「それはわしもそうだな」

署長がちらりと町長を見た後、ふいと窓に目を逸らしながら呟いた。

「・・・事故とか気をつけろよ」

「藪から棒だな。私の襲撃計画でも聞きつけたのか？」

「無い。だが俺達は不老長寿であつて不老不死じゃない」

「ああ」

「武器で襲われれば死ぬし、病にかかってもそうだ」

「ああ、例のインフルエンザとやらか？　そーいや薬を受け取ったな」

「それも含めて気をつけてくれよ」

「それこそお互い様だろ？」

「・・・頼むぜ。それこそ、不老長寿の友人はお前一人だからな」

町長は笑って頷いた。なるほど、そういう事か。

「解った解った。そう心配するな」

「ふん、心配などしていない」

「お前さんが将棋でもうちよつと手心を加えてくれたらわしはもつと嬉しいがな」

「手心を加えられたと明らかに解る状況で勝って楽しいか？」

「・・・そこは解らない様にだな」

「そんな器用な真似出来るか」

「ほら、お猪口が空いてる」

「ん」

署長に酌をしながら町長は思った。

自分の周りでも、町長に初当選した頃から一緒にやってきた人は部下でさえ僅かとなった。

支援企業も経営者はあらかた代替わりしている。変わってないのは開業医や寺の住職くらいか。

町は昔も今もここにあるが、中身は様変わりしている。

町長は船盛りの中を見た。

聞いた話では、ここは戦争が始まる前はカツオ漁で賑わう、のどかな漁村だったらしい。

その頃には密入国者で構成された重犯罪組織への対策なんて問題は存在しなかっただろう。

戦前の平和な雰囲気を残す町並みが、密入国者の手によってスラム街へと変貌していくのは心苦しい。

誰もが手ぶらで歩けたのどかな漁村が、武器を携行してもなお限られた場所しか行けなくなってしまった。

先日、ナタリアの提案で官民連携して町内最大規模だったスラム街を一掃したが、こういう事はいたちごっこだ。

密入国者はまた他所から流入してくるだろうし、住人の居ない廃墟となった地区は他にもある。

いつか戦争が終わった時、ここが再びのどかな漁村に戻れるよう、我々が道筋をつけておかねばならない。

刺身をじつと見つめている町長に、署長は首を傾げながら声をかけた。

「どうかしたか？」

「ああ、いや、早く戦争が終わって平和な世の中に戻って欲しいと思っ
て、な」

「随分壮大な考え事だな。ほら、飲めよ」

「ああ、もらおうか」

普通の人が、昼夜問わず、場所を問わず、普通に歩ける国。それこそが日本という国だ。

日本を、取り戻す。それが我々に課せられた戦いだ。

町長は胸の内でそう呟きつつ、お猪口の酒を飲み干した。

第14話

それは、ある日の午後の事。

テッドは鳴り出した事務所の電話を取った。

「はいテッド仲介所」

「こんにちは、大山さくん」

その一声を聞いたテッドは一気にジト目になった。

「・・・ご無沙汰だな、ソロル鎮守府の龍田会長殿」

「あらあ、よく解りましたねえ」

「他の鎮守府の龍田さんは俺の本名を知らないんでね」

「そういえばそうですね、では早速なんですけど、明日の午後、お時間取れますか？」

「ええと・・・大丈夫だが、何だよ」

「では1500時、旧コンテナ埠頭でお会いしましょうか」

テッドは眉をひそめた。

「旧コンテナ埠頭？役場なり商工会議所なり料亭なり用意するぜ？」

「町長さんにお話しする前のご相談なので」

テッドはますます眉をひそめた。とても嫌な予感がする。とびきり面倒臭い二オイがする。

「・・・トラブルは御免被りたいんだが」

「あらあ、そうですね」

「誰だつてそうだよ」

「そういえばそろそろ、人事異動のシーズンですよねえ・・・」

テッドは受話器を当てたまま、怪訝な顔をしてカレンダーを見た。

「・・・まだ早くねえか？」

「最終的に公示されるピークは3ヶ月くらい先ですけど、実質的な異動草案の決定は今頃なんですよ」

「だから・・・なんだ？」

「今頃雷名誉会長もヴェールヌイ相談役も、頭を抱えてらっしゃる頃だと思っんですよねえ。あの件で」

テツドのこめかみを嫌な汗が流れた。

それは自分がまだ大山事務官として海軍の117研に所属し、提督の配下で動いていた頃の事。

「本当に毎年毎年、同じ話題でもめるねえ・・・」

提督は117研に戻ってくるなり、首をゴキゴキと鳴らしながらそう言った。

大山事務官はひよいと顔を上げた。

「上層部会への説明で、なんか問題が起きましたか？」

「大山さんのシナリオは毎回完璧で、今回も引つかかる事無く承認されたよ。いつもありがとう」

「では？」

「いや、なに・・・春の陣の戦後処理だよ」

「ああ・・・なるほど」

春の陣の戦後処理。

様々な理由でなり手の居ないポストへの着任者を決める人事会議の隠語である。

正確には人事会議自体は人気のあるポストも審議する場ではあるが、そちらは既に話がまとまっている。

もつとも、それは献金合戦やロビー活動、果ては派閥同士の争いなど、非公式な黒い蠢きによる。

それが「月水金戦争、春の陣」である。

ゆえに人事会議の席で残っているのは不人気なポストの割当だけであり、これを戦後処理と呼んでいる。

ただ、この会議もかなりエグいやりとりとなるので、ここまで含めて春の陣だと言う人もいる。

「今年は遠方の司令官ポスト関連はなくなっただけだね」

「へえ。本土から遠く離れた鎮守府への片道切符に誰が手を上げるって言うんです？」

「新規採用者、だよ」

「ああ。民間から採用した連中ですか」

「だから戦後処理は大本営の中で、数が減ったからますます陰悪な押し付け合いの雰囲気になったよ」

「バーターですか」

「それもあるね」

ある派閥が良いポストを得る見返りとして、不人気のポストもセツトで引き受ける事をバーターという。

「なら何を引き受けるか決まってるんじゃない？」

「そんな不利な言質を取られるような事を派閥のボスが言う訳無いでしょ」

「あー・・・」

つまり人事会議で不人気の中でもまだマシなポストから取られていくが、その取り合いが醜いという訳である。

「そんな場に5分と居たくないですね」

「でもまあ、最後には雷様がぶち切れて強引に阿弥陀クジでケリを付けたけどね」

「いい大人が阿弥陀クジって・・・」

「しかも青筋立てて真剣に線を書き加えてるんだからね・・・」

「それでも、さすがに大本営のポストを民間採用者に晒すほど阿呆ではなかったって事ですネ」

「大本営の敷地内で過ごせば伏魔殿ぶりはすぐ解るし、それが世間にバレたら大スキャンダルだからね」

「権力と現金と欲望が飛び交ってますからね」

「実弾と盗聴電波もね。ま、利権等の旨みがないポストは不人気ってのは解りやすいよね」

「後はハイリスクまで揃えば完璧ですね」

「ん？そこまで酷いポストがあるのかい？」

「ご存知ないんですか所長？」

「何を？」

「ここですよ、ここ」

「・・・君の机がどうかしたのかい？」

「違います。117研がそのワーストポストだって言われてるんで

す」

「なんで？」

「・・・俺達のあだ名を知らない訳じゃないでしょ？」

「私がヤマタノオロチってやつ？」

「です」

「単に関係者とお話してレポートにまとめるだけの簡単なお仕事じゃないか」

「ならどうして深山の家が火星まで吹っ飛んだのかって事ですよ」

「つい先日の事だが、出入り業者との癒着事件を憲兵隊に告発する直前、深山担当官の自宅で大爆発が起きた。」

深山担当官は独身で書類作成の為に事務所に泊まりこんでいたので無事だったが、その後も明らかに不審な経過を辿った。

家が跡形もなく吹き飛んだにも関わらず、警察はガス爆発で事件性無しとして異様に早く引き上げたのである。

「後ろ暗い事をしてる証拠が憲兵隊の手に渡って欲しくなかったからでしょ？」

「他に考えようが無いですし、事実そうだった訳です」

「でも、それが却って深山君を本気にさせたんだけどね」

「警察との大規模な癒着まで洗い出しましたからね」

「余計窮地に追いやられるって結末をどうして予測出来ないんだろうねえ」

「その程度の知能しかないから目先の金や権力に飛びつくんでしょよ」

「はっはっは。そりやそうだ。大山さん相変わらず上手いね」

「ただ、今回も結局は単独犯の小者という扱いです」

「連携の証拠は出なかったね。嘘くさい点は幾つかあるけど」

「このままだと巨悪に辿り着くのは難しい。末端の実行犯だけしか捕まえられない」

「・・・」

「俺はどうも、もっと深い所になんか居そうな気がするんですよ」

「居ると思うよ。深いというか上の方というかは表現の問題だけど」

「俺達はそういう所まで手を伸ばせるってどうか、届くんですかね？」
「うーん・・・まあ本来そういうのは憲兵隊の領分って事もあるんだけど・・・」

提督はカリカリと頭を搔いていたが、一瞬、暗い目を見ると、
「それこそ「闇の力」への対抗手段を充分持つてなければ届かないだろうね」

と喋って肩をすくめたのである。

そして提督が所長を外れて鎮守府に異動して以来、117研は目に見えて弱体化した。

それは報復を恐れるあまり、2代目以降の所長が日和見主義路線を貫いているからである。

原因を追究し、問題を指摘し、必要なら告発するという本分を遂行出来ない以上、ポストでの加点はありえない。

誰にも喧嘩を売らず所長職をつつがなくこなしたという、減点を食らわない最低ラインが満点となる。

ゆえに誰もが最短任期でさっさと別のポストに逃げていくので、長期戦略もへったくれもない。

「マムシどころかトカゲ並みに馬鹿にされてますよ」

総合戦略部に異動した後、テッドと仲の良かった117研のメンバーからはそう聞いていた。

その状況を中将や雷、ヴェールヌイ相談役といった面々が快く思っていない事も、である。

そしてそれらは容易には変化も解決もしないだろう。

黒い勢力は牙の抜けた117研であり続けることを強く望んでいるのだから。

提督は中将と太いパイプがある事が知られていた為、直接手を出す愚か者は居なかった。

その代わりを誰が担えるか。

正確には、やればやるほど派閥を敵に回し、ロクな見返りの無いポストに対して誰が力を尽くすというのか。

当然、誰も居ない。

ゆえに「戦後処理」の中でも最悪のポストと久しく言われ続けている。

一方で雷達は本気で取り組んでくれる人をずっと待ちわびている。それこそが龍田の言う「あの件」なのである。

テッドは深い溜息をつきつつ、回想を中断した。

「あの件、ね」

「そうですよ」

「俺は何一つ後ろ盾がねえから対象外だな。着任したら翌朝には千の風になってるだろうよ」

「そうでもないですよ」

「・・・えっ?」

「龍田会の名前はそれなりに、暗い穴の中にも届いてますし」

「・・・」

「私はいつでも大山さんの為なら護衛部隊を差し向けますよ」

「龍田会のメンバーはそれぞれ別の鎮守府に所属してるんだろ? 常時護衛出来ねえだろ」

「そうなんですけど・・・とりあえず、続きは明日お話ししましょうね」

「えっ、本気でその話かよ?! こっ断る! 俺は絶・・・」

「ツーツ・・・ツーツ・・・ツーツ・・・」

「くそっ!」

テッドは受話器を電話機に叩きつけた。

これは本当にビッグトラブルだ。

もし117 研所長に任命されたら24時間365日死亡リスクが100%だ。

「あー・・・もう勘弁してくれよ・・・」

テッドはへちやりと机に突っ伏した。

第15話

「ふむ。テッドが117 研所長か。まあ悪くない人選ではないか？」
「思い切り悪いわ！」

テッドが噛み付いたのは目の前で夕食を取っている武蔵である。

あの日、互いに付き合う事を了解したものの、いきなり同居など到底無理と首を振る二人に、

「ほなせめて食事くらい、毎日一緒に食べなあかんで？」

という龍驤の提案が多数決により半ば強制的に採用された。

ゆえに朝と昼は武蔵が弁当を持参して事務所に来て、夕食はテッドが武蔵達の家を訪ねている。

支度や片付けを仲良く行う姿はなんとも清く正しい交際で微笑ましいのだが、

「ミクロン単位の進捗は本当に歯痒いわね」

というジト目の大和の呟きに神通達は何度も頷いたそうである。

それはさておき。

龍田の電話以降ぐったりしていたテッドは、そのまま暗い顔で神武海運の門をくぐったので、

「なんやテッド、連帯保証人にでもさせられたんか？」

と、龍驤がきよとんとした位であった。

テッドは武蔵達と夕食の支度をする時、龍田との電話の内容を説明していった。

そして席について食べ始めた一言が、冒頭のやり取りという訳である。

山城がご飯をぐくりと飲み込んでから口を開いた。

「そうかしら？ 最初の117 研を知ってるし、その中核メンバーだったでしょ」

「それはそうだけだよ」

「私達一介の艦娘にまで轟いてた頃の強い117 研を復活させる錦の御旗には適任だと思っけど？」

「何が轟いてたんだよ」

「え？」

きよとんとする山城の横で大和がくすつと笑い、ナプキンで口を拭くと答えた。

「所長さんは人間じゃなくて、本当は蛇の化け物だとか」

「ヤマタノオロチか？」

「ええ。117研の取調べを受けると魂まで抜かれるとか」

「どれだけ嘘つこうが何日費やしても暴いてたけどな」

「メンバーが去った後は草木一本残らないとか」

「不正をしてりやあトコトン証拠を挙げて憲兵隊に投げてたけどよ、単なる事故ならリポートで終わりだぞ？」

神通が青い顔で小さく頷いた。

「誤魔化した部分は徹底的に問われましたけど、結局は再発防止策の提出で終わりましたからね」

「だろ？」

「で、でも、し、司令官も私も、あの分厚い通知書が届いた時は生きた心地がしませんでした・・・」

「そこまで怖がるなよ・・・だから事前に言つといただろ？」

「えっ？」

「えっ・・・って・・・んーつと、確かお前んところは・・・」

龍驤ががばりとテッドに手を差し出した。

「ほ、ほっほらテッド！ご飯お代わりいらんか？」

「え？あ、いや、まだ入ってるから・・・」

「ほなお茶！お茶注いで来たる！」

「まだ一口も飲んでないって」

二人の様子を見ていた扶桑がポツリと呟いた。

「ああ、龍驤さん、伝言し忘れたんですか？」

ピシッ

龍驤が真っ白になって固まるのと、神通が急速に真っ黒な気配を纏い始めたのは同時だった。

数秒後、神通が静かに箸を置いた時、黒い気配は部屋全体を支配し

ていた。

「・・・龍驤さん」

「ひゃいつ!？」

「・・・扶桑さんの発言は事実ですか？」

「あ、あああれや、ほら、あ、あのあの日までな、う、うち敵母港空襲作戦行かされてたやんか」

「事実かどうか、聞いているのです」

「その遠征から帰った直後でな、司令官への報告済ませてほつとしとつたんよ」

「事実ですか？」

「せ、せやからな、たつ、たまたま寮に帰る途中で郵便配達から司令官宛の速達を、う、受けとつたんやけど・・・」

いい加減に質問に答えろとばかりに目を見開いて腰を浮かせた神通。

一瞬で凍りつく場を切り裂いて、テッドはのんびりと呟いた。

「最後まで言わせてやれよ。こういう時は順を追って全部吐き出したいもんなんだって」

神通は数秒、テッドをジト目で睨んでいたが、テッドが飄々と肩をすくめたので渋々座りなおした。

龍驤は真つ青な顔のまま、テッドに一礼して続けた。

「う、うちな、眠くてかなわなかったから、その手紙ポケットに入れて部屋帰って、そのまま寝てしもうたんよ・・・」

「・・・」

「め、目が覚めたらその、神通と司令官が封筒の前でガタガタ震えてるって話でもちきりやったし」

「・・・」

「もう御仕舞いやとか、魂吸い取られる前に逃げようとかいう子達をなだめるので大忙しだったんよ」

「・・・」

「せやから速達の事思い出したんは、更にその2日後にシーツの隙間から手紙が出てきた時でな・・・」

「・・・」

「そーっと開けたらテッドからで、形式上堅苦しいもんが届くけど心配せんでええよって書いてあつてな・・・」

「・・・」

「そ、そりゃ、あの時はすぐ言おうと思ったんやで？」

「・・・」

「けど、神通は思い出したない言うて青い顔しとつたし、うちが持ったまま寝てましたとは言い辛かったんよ・・・」

「・・・」

「せやから、今まで言い出せなかったんや・・・」

「・・・」

「・・・ごめんな。ほんま、ほんま堪忍してや」

龍驤が口を閉じて俯くと、部屋には沈黙が訪れた。

龍驤は神通をそつと何回か見たが、神通は眉間に皺を寄せ、目を瞑ったままだった。

たつぷり1分ほど押し黙っていた神通は、やがて深い溜息と共にテッドの方を向いた。

「・・・テッドさん」

「おう」

「117研のお仕事つてこう言う事ですよね」

「100%こればかりだったな」

「大変さがよく解りました。胃が変になりそうですね」

「解ってくれるか神通さん！」

「それはもう！」

涙ぐむテッドと固い握手を交わした神通は、手を離しざま、龍驤の頭を拳でコツンと軽く叩いた。

「痛った！」

「黙ってたバツです」

「いったあー・・・あれ、でもこれで許してくれるん？」

「もう怒ってても仕方ありませんから」

「・・・悪気は無かったんよ」

「あつたらこんなもんじゃありません」

「とほほ・・・」

「それで・・・テッドさんはどうするんですか？」

テッドは箸を置き、目を細めた。

「あの龍田が動く時は絶対相手が断れないように準備を整えた時だ」
「ええ」

「だから勝ち目の無い勝負って事は解ってるが、それでも・・・」

テッドは少し俯き加減に首を振った。

「・・・俺はやりたくねえ」

武蔵は食事を終えると、湯飲みを手に口を開いた。

「お前の理由を話せ」

「俺はさ、所長みたいに皆を鼓舞して上手にやる気を引き出すって事が出来ねえ」

「・・・」

「嫌な所が見えたら気になって仕方ねえし、遠慮なく言っちゃおう。それで喧嘩になってもな」

「・・・」

「だからメンバーの特性を見極めて上手く率いるなんて役は無理なんだよ」

「前に居た時はどんな立場だったんだ？」

「所長はその辺よく解ってくれたからな、俺はずっと一人で分析やってたんだ」

「・・・」

「皆が集めてきた資料や会話メモを基に、推論を組んで、集めるべき証拠を指示したりしてた」

「・・・」

「それと、上層部会で年度予算獲得する理屈も俺が考えてたし、想定答弁も以下同文だ」

「・・・それなら、楽しくやれるのか？」

「んー」

テッドは腕を組んで考えていたが、

「今の方が楽しくやれてる。軍は法と内規でがんじがらめだったからな。いつも顔をしかめてた」

「そうか」

「今はDeadline Deliverの連中も町役場の連中も警察の連中も顔が見えるし、関係も良い」

「・・・」

「何より一生懸命仕事してるのに死神だマムシだ言われるのは、気分の良いもんじゃねえからな」

「・・・まあ、今はそういう事も無いか」

「ケチつけられて値下げしろとか、もっと取り分寄越せとか言われる事はあるけどよ」

「それは仕事として仕方なからう」

「ああ。それ位はギャラのうちだし、やりがいもあるからな」

「・・・ふむ」

武蔵はしばらく考えていたが、やがて頷くと

「ならば断るが良い。もし龍田会を向こうに回そうとも、私はお前の味方でいよう」

「武蔵・・・」

「気持ち解るし、理由もおかしなものではない。仕事は選べるのが我々だからな」

龍驤は首を傾げた。

「せやかて龍田会と正面からぶつかるのはあまり得策やないで？」

山城も頷いた。

「ええ。斜めに向かっていつて当たらずに避ける位で辛うじて命が繋がる、そんな感じじゃないかしら」

時雨がつぶやいた。

「とはいえ、龍田さんが本当にそれを望むか、まだ確定した訳ではないんだよね？」

「ん？あ、まあ、さっき言った通り話の続きを明日しようって言われただけだが・・・」

「なら確定してからでも良いんじゃないかな。変に憶測で動くところじ

れてしまうかもしれないよ」

神通は眉をひそめていた。

「普通の相手ならばそうですが、なにせあの龍田さんですから・・・」

扶桑も頷いた。

「どの方向に転んでも良いように、備えておいて損は無いですよ」

大和は腕を組んだ。

「時間が少な過ぎるわ。呼べる仲間がさっさと呼んでしまいませんか？」

ややあつてから、テッドは頷いた。

第16話

「それは困りますなあ・・・」

「まだ確定じゃないんですが、それを匂わせるような事を言われているんで」

「しかし、テッドさんが抜ければDeadline Deliver

s全体への影響が大きい事は龍田様もご存知でしょうに・・・」

「だが、それを超える切迫した事情があるのかもしれない。詳細は聞いてないので」

「うーむ・・・」

神武海運を後にしたテッドと武蔵がまず向かったのは町役場だった。

帰り支度をしていた町長に声をかけ、町長室で話し合っていたのである。

町長は眉をひそめた。

「いずれにせよ、我々も海軍と協力関係を続けるならテッドさんがこちらに居る事は大前提です」

「・・・」

「一方的かつ突然反故にされては困るという事をご理解頂けてないのなら、ご理解頂く必要がある」

「・・・」

「我々は、龍田会の前身たる雷会から海軍と関わりがあるんですがね」

「ええ」

「雷様は龍田会でも名誉会長職に居られる。我々は雷様に貸しがあ

る」

「強引にテッドさんを連れて行くならば、我々は雷様に貸しを返してもらう事にしましょう」

「町長・・・」

「心配しなくて良いですよテッドさん。貴方は山甲町に必要不可欠な

存在ですから」

テッドは涙を零しながら町長に向かって頭を下げた。

「…すいません。迷惑かけちまうかもしれませんが、万一の際は助けてください」

「ずっと今まで我が町に貢献して来てくださったんです。この位どうという事はありませんよ」

テッドは少しの間俯いていたが、大きく頷くと立ち上がった。

「交渉は何時からでしたか？」

「1500時、旧コンテナ埠頭です」

「解りました。では17時になっても私に連絡が来なければ様子を見に行かせましょう」

「・・・」

「その時、もしどなたも居なければ雷様に電話します。それでよろしいですね」

「ええ。そうなりたくは無いですかね」

「私もですよ。無事を祈ってます」

テッドは戸口で深々と頭を下げると、町長室を辞した。

「・・・良かったな、テッド」

ずっと黙って傍に控えていた武蔵は、町長室を出るとテッドにそう告げた。

「ああ。俺はこの町で・・・頑張って来て良かったぜ」

「まずは一人、心強い後ろ盾ができたな」

「ああ、まったくだ」

同時刻、夕島整備工場では。

「それ・・・本当なの？」

「うん、テッドさんの話を要約するとそうなるんだ」

「酷い話ねえ・・・」

ビットは眉をひそめ、懐疑的な表情をしながら説明に来た時雨を見た。

アイウイは腕を組んで黙っていたが、時雨の方を向くと、

「概要は解ったけど、念の為、要約せずに全体を教えてもらってもいい

？」

と言った。

客との数多くのやり取りを通じて、アイウィは要約の危険性を学んでいた。

大きなミスの影には思い込みというのがある。

きちんと全体の経緯を知っていたら良かったのにと後悔した事が何度かあったのである。

時雨は頷いた。

「うん、じゃあちよつと長くなるけどテッドさんが言った通りに話すね」

「手間かけさせちゃってごめんね」

「ううん、真剣に聞いてくれるんだから、これくらい当然さ」

同時刻、キッチン「トラファルガー」では。

説明にきた扶桑と山城を前に、ウイスキーのグラスを手にした署長は嫌そうな顔をしていた。

「あんまり派手なドンパチやんないでくれよ。軍相手の証拠隠滅工作は面倒臭えんだよ・・・」

ぐびりとジントニックを飲んだマツケイは署長の肩を叩いた。

「俺達がそんな単細胞に見えるかよ、署長」

「何か策があるってのか？」

「そこはそっちの二人に聞いてくれよ。俺達も必要なら手え貸すぜ？」

マツケイから振られた扶桑と山城は頷いた。

「もし拒否したにも拘らず、テッドさんを強引に拉致しようとした場合への備えですが・・・」

同時刻、ファッツ達の家では。

「そういう訳で、この作戦に協力して頂けませんか？」

「ふーむ・・・」

ファッツは大和の説明を走り書きしたメモを見返していた。

横に居たナタリアは肩をすくめた。

「確かに龍田は強引だけど、そこまで無茶苦茶するかしら」

「俺もそこが引つかかる。ナタリアはその龍田と何度か話した事があるんだろ？・どんな奴だ」

「そうねえ・・老獪な策士、かしら」

「そんな腹黒いというか、狡猾な奴なのか？」

「どこまで何を考えてるかまるで読めないわね。決して浅はかな行動には出ない。慎重で大胆」

「テッドよりキレ者か？」

「それはもう。あれを配下に置くソロル鎮守府の司令官も普通の人ではないし」

「どういう感じなんだ？」

「常識に囚われず使える手は何でも使う、そしてトコトン部下を信じて自由にやらせるタイプ」

「なら尚の事おかしくないか？テッドは嫌がってるんだろ？」

大和が頷いた。

「ええ。嫌だとハッキリ言っていました」

「テッドだつてその司令官の部下だつたとどつかで聞いた気がするんだが・・」

「ただ、司令官さんはテッドさんの海軍への復帰を強く願っていると聞きました」

ナタリアが頷いた。

「そういえばファツゾ達不老長寿化処置を受けた島でもそんなやり取りを龍田としてたわね」

「そうだっけ？」

「掛け持ちしないかとかなんとか。横耳で聞いたただけだけど、テッドは凄く嫌そうだったわ」

「テッドを匿ったのも龍田だが、それは司令官が望んだ事だろうしな」

「司令官はテッドが狙われてる事自体知らないみたいよ。町長が言つてたわ」

「つて事は、それを司令官に伝えて、命の危険があるから止めてくれと頼めば良いんじゃないか？」

大和が大きく頷いた。

「・・・なるほど。それは盲点でした」

ファッツは首を捻った。

「まあ、本当に嫌がるテッドを連れ去ってまで117研の所長に据える気があれば、だけどなあ・・・」

ナタリアは肩をすくめた。

「手配だけはしておくわ。本当に海軍を相手にするならそれなりの準備は要るしね」

「おいおいナタリア、直接砲火を交えようとするなよ?」

「したくないわよ。だからといって丸腰で死ぬのは嫌」

「まあそうだが・・・」

ナタリアはスマホを取り出すと、SWSPの事務所をコールした。ファッツは大和に告げた。

「とにかく、作戦での役割は解ったし引き受ける。テッドには俺達が友人として最大限手を貸すと伝えて欲しい」

「ありがとうございます。では失礼します。夜分遅くすみませんでした」

「気にしないでくれ」

大和はがたりと立ち上がった。

同時刻、山下食堂では。

「おいおいおい、テッド抜きでこの町が回る訳無えだろ何考えてんだ」

「そうなんよ、せやからいざとなったら手え貸してくれへん?」

「良いぜ。テッドには色々借りがある」

「海軍相手だろうが知った事か」

「やったらもうじゃないか!」

龍驤と神通は山下食堂で食事の面々に声をかけていた。

この時間はDeadline Deliveryが食事の為に集まってくるので、話を広めるのに適していたのである。

反応に手ごたえを感じつつ、二人は説明を続けていった。

テッドは自分では苦手と言っていたが、ちゃんと信用を得ている。

そうでなければこういう時に誰も手を貸す筈がない。

第17話

その日の夜、神武海運の事務所。

町長の所から戻ったテッドは神通達から助っ人に目処がついたと聞き、ポツリと呟いた。

「この町は良いなあ」

横に居た武蔵は頷いた。

「なんだかんだ言っても最後は手を貸すのが今の流れだからな」

「大本営って所はさ、ほんと足の引っ張り合いだよ」

「・・・」

「一番足を引っ張られない奴が上の椅子に座れるが、自らは誰かの足を引っ張ってるんだよ」

「・・・」

「面従腹背、約束を笑顔で反故にする、困った時は既に誰一人傍に居ない」

「・・・」

「だから誰も互いに信じないし、失点を悟られまいと皆必死なんだ」

「・・・」

「ま、やっぱりそんな所に戻るのにはゴメンだな」

「・・・そうだな。テッドがそう思っているのなら、そんな所に戻る必要は無い。我々皆で守る」

「とにかく皆、ありがとな」

「まだ何も始まっていないぞ」

「声をかけて回ってくれたじゃねえか。それだけでも十分ありがたいよ」

「・・・」

「じゃー俺はそろそろ家に帰るわ。あまり遅く帰ると保障外になるからな」

「何の保障だ？」

「あれ、聞いてないか。俺の家の周りはSWSPが警備してくれてる」

「ただけどよ」

「あの地区、そんな治安が悪いようには聞いてないが？」

「いや、俺を殺そうって連中が外からやってくるの」

「は？」

「だから俺がこの町に来てからずっとワルキューレなりS W S Pが警護してくれてるんだけどさ」

「・・・」

「特に真夜中はそういう連中が蠢くから、外に出たら命の保証は無いつてナタリアに言われてるんだよ」

「そ、その、殺し屋とやらは実際に来たのか？」

「ああ。ナタリアに聞いたら少なくとも60人以上始末してくれてたらしい」

武蔵達は息を呑んだ。

確かにこの町の治安レベルは決して良くは無いが、せいぜい山賊や武装強盗が出るくらいだ。

だがテッドだけは毎日命の危険に晒されているのだと。

武蔵は眉をひそめた。

「それは大本営に居た時、関係のあった連中から、と言う事か？」

「そうなるな。正確には俺が潰した司令官が所属してた派閥が送ってきたってこつたな」

「とんでもない話だな。テッド、私も護衛に加わろうか？」

「いや、連中はローテーションを組んで警護してるし、決して一人では動いてねえ」

「・・・」

「一人で毎晩警護なんて絶対続かねえし・・・それに・・・」

「それに？」

「お、お前が俺のせいで怪我とかさ、嫌なんだよ・・・S W S Pは良いって意味じゃねえけど」

大和がふふっと笑った。

「ならそろそろ帰った方が良さそうですね。家まで送りましょうか？」

「いや、俺は俺の車で帰るし、まだ大丈夫な時間だ。皆も早く寝てくれ。じゃあな！」

敷地を出て行くキャデラック・フリートウッドを見送りながら、武蔵は顔をしかめていた。

何年経つても刺客を送り込んでくるような伏魔殿にテッドが帰ればどうなるか火を見るより明らかではないか。

武蔵の横にそつと神通が立った。

「武蔵さん」

「・・・ああ」

「これから皆で艤装の臨時メンテナンスを始めますけど、武蔵さんもご一緒にいかがですか？」

武蔵が神通に振り向くと、神通はまっすぐ武蔵の目を見返し、ゆつくりと頷いた。

武蔵はぎゅつと目を瞑ったあと、ニツと笑って答えた。

「ああ。万全の体制で明日を迎えねばな！」

「睡眠も大事です。すぐ始めましょう！」

二人は颯爽と明かりが点いたばかりの倉庫に向かって歩いて行った。

翌日、1455時。

「・・・あー、こりや町中のDeadline Deliverersが動いてるなあ」

テッドは旧コンテナ埠頭の中に車を進めつつ、周囲をきよろりと見回すと苦笑した。

使われなくなり、放置されて久しい旧コンテナ埠頭。

今も人影こそ見えぬ、朽ちた筈のこの場所は熱い気配に満ちていた。

近くの林には、スコープらしきガラスの反射光が何箇所も見えた。

外觀こそ錆びて古ぼけてはいるが、数日前には一本も無かったコンテナが何本も置かれている。

入り口を封鎖していたバリケードは微妙に動かされ、大型トラック

さえ楽々通行出来るスペースが空いている。

近くの倉庫には明かりが灯ってるし、その裏側に何台もの車が停まっている。

旧コンテナ埠頭全体が見渡せる駐車場に停まってる大型トラックも無人に見えるのにエンジンはかかっている。

テッドは車のパーキングブレーキをかけつつ、そういえば今朝から変だったなと思いだした。

店を開けても訪ねてくる者も居らず、電話すらかからず、テッドは開店休業状態だった。

誰かは事情を聞きに来るだろうと思って、説明内容を考えていたテッドは拍子抜けしていた。

ただ、時間がある分、どうしても会合の事が頭から離れず、テッドの表情は暗かった。

朝食の時も、昼食の時も、武蔵はいつも通り来てくれたが、言葉少なだったのは却って嬉しかった。

武蔵が昼食の帰り際、戸口で振り向いた。

「テッド」

「あん？」

「・・・その、会合は一人で行くのか？」

「龍田に同行者の可否を聞きそびれちまったからな。変に刺激するのにもアレだしよ」

「そうか。場所には車で、まっすぐ行くが良い。歩いて行くとか、寄り道とかするなよ」

「ああ。旧コンテナ埠頭は風が強いし、車の中で待つてないと凍えちまうからな」

「準備は整った。言うべき事を言ってこい。私達はお前の傍にいるからな」

「ありがとよ」

武蔵が何かを言い淀んでいる風だったので、テッドは何とか笑顔を作った。

「心配すんなよ。大丈夫だって」

そして現在に至る。

「てつきり心理的な距離の話かと思ったが、物理的にも傍に居るのかよ・・龍田にバレまくりだろ」

テッドが火をつけた葉巻を啜えた時、腕時計のアラームが1458時を告げた。

ガチャ。

キャデラック・フリートウツドのドアを開けて外に下りたテッドは、外洋の方を見た。

「・・時間ピッタリだな」

防波堤の先から3つの人影が現れたのを見ながら、テッドは紫煙を吐き出した。

第18話

「・・・あら〜・・・まあ制限はしてなかったけど〜」

龍田はテッドの近くに上陸し、周囲にチラリと目配せすると、ここにしたままそう呟いた。

テッドは頭を掻いた。

「ええと、すまん。おつかなくてよ」

「何がですか〜?」

「その、電話であんなこと言うからよ、強制連行されるんじゃないかって、な」

「ん〜?」

龍田は初めて不思議そうな顔をして顎に手を当てていたが、

「ああ、117研に復帰って話ですか?いつもの冗談じゃないですか〜」

と、ひらひらと手を振った。

「だってよ、今日の話はそれ絡みなんだろう?」

「いいえ?」

「えっ?」

「電話で色々話すと漏れるので、本題は今日にしましょうって言いましたけど〜?」

テッドは眉をひそめ、必死になって会話を思い返した。

「とりあえず、続きは明日お話ししましょうね〜」

おい待て、それはそういう意味だったのか?

滅茶苦茶紛らわしい言い方しやがって・・・

肩が下がり、ぐんにやりと俯くテッドの表情を面白そうに見ながら龍田は続けた。

「それで、用件なんですけど〜」

「お〜・・・」

「Deadline Deliversのフリをさせたい子が居るんです〜」

テッドは顔を上げた。

「あん？　どういこうこった？」

「テッドさんが言ったとおり、龍田会の今までのメンバーは全員鎮守府所属艦娘なんです」

「おう」

「ですから命令系統の第1位は当該鎮守府の司令官で、龍田会としては人員手配が大変でした」

「だろうな」

「そこで、世間的にはDeadline Deliverersとして龍田会専属者を常駐させておきたいんです」

「フリって事は、Deadline Deliverersの仕事はさせねえんだな？」

「ええ。ただ、変にマスコミに勘付かれると問題があるので」

「Deadline Deliverersとして俺の所に登録はするが仕事は振るな、かつそれを外に告げるな、か？」

「あは。さすがはテッドさん、お察しの通りです」

「それくらい構わねえし、町長だつて反対しねえだろうよ・・・」

「やった、お話成立」

龍田が軽くパチパチと手を叩いたので、テッドは再びがくりと首を垂れた。

「紛らわしい言い方するなよ・・・俺がどれだけ肝冷やしたと思ってるだ」

「117 研所長にどうですかって話ですか？」

「そーだよ」

「んー・・・何がそんなに嫌なんですか？」

テッドは数秒、俯いたままだった。

だがふいつと龍田の方にまつすぐ顔を上げると、ゆつくりと話し始めた。

「まず俺は、人を率いるのが苦手だ」

「・・・」

「次に、仕事した挙句に死神だママシだと陰口を叩かれるのは辛い。

命を狙われるのもな」

「・・・」

「そしてどうやっても、越えられない壁を俺は感じてたんだよ」

「越えられない壁って何ですか？」

「俺達が告発までたどり着けたのはトカゲの尻尾までで、本体はいつも見えなかった」

「・・・」

「そこから先は軍内の様々な圧力とか妨害で煙に巻かれた。機密事項だつてそうだろ」

「・・・」

「だから117研じゃ限界があるし、苦勞に見合う物も得られなかった」

「・・・」

「所長が良くしてくれたから頑張ったが、所長の居ない117研なんて嫌な物しか残らねえ」

「・・・」

「そして俺はこの町を、町の人々を、俺の周りの仕事仲間をととも気に入ってる」

「・・・」

「だから俺が所長として戻るのはゴメンだ。そういうことさ」

龍田はテッドの目をじっと見ていたが、聞き終わるとにこりと笑い、ポンと手を叩いた。

「じゃあ2つ目のお話はピッタリですね」

テッドは啞えていた葉巻を慌てて外した。

「えっ何だよ2つ目って」

「テッドさんには、もう1つお願いしたい事があるんです」

「俺に？」

「はい」

「な、何だよ。あ、いや、何か嫌な予感しかしねえから聞きたくねえ。言うな」

「1つ目と関係があるんですけど」

「無視すんなよ」

「そのチームの目的は、不正行為を暴く事なんですわ〜」

テッドははつとしたように目を見開いた。

「・・・おいやめろ、続きを言うな。本当に言うな！」

「その分析のお仕事を〜」

「止めろって言うてるんだ」

「テッドさんお願いしますわ〜」

テッドは両手で頭を抱えてしやがみこんだ。

「あああやつぱりいいいいいい」

「じゃあ顔合わせしちやいましようわ〜」

腕を解いたテッドはがばりと龍田に向かって顔を上げた。

「待ちやがれ。俺はマジでOKしてねえよ！むしろピュアにNOだ！」

「あああ、そうなんですわ〜？」

「俺がこの町で唯一の仲介人だって解ってんだろ!？」

「解ってますよ〜？」

「だったらそんな暇ねえってことぐらい」

「ありますよわ〜？」

「・・・えっ？」

「月の後半とか〜」

「・・・」

「真冬のシーズンとか〜」

テッドは立ち上がりつつ、ぐっくりと唾を飲んだ。

「お仕事があんまり無くて、お時間のある時間はトータルすると年で4ヶ月くらいありますよわ〜」

「な、なんでやたら高精度に詳細を知ってるんだよ。町長から聞いたのか？」

「虎沼海運さんって覚えてますか〜？」

「覚えてるどころかうちの一番の得意先だ、それがどうした」

「虎沼海運さんから荷物を陸送する会社って、大体決まってますよわ〜」

「・・・おう、幾つかあるな」

「そこと私達はとつても仲良しなんで」

テツドはぼかんと口を開けた。

「輸送依頼の時期と量を何年分か教えてもらったんですよ」

テツドは目を瞑り、唸った。

個人依頼主やスポット輸送など、虎沼海運以外の依頼も無いわけではない。

だが、虎沼海運との取引量は圧倒的で、自分達の忙しさはほぼ虎沼海運に左右されている。

正確には海軍と深海棲艦のいざこざにも左右されるが、こちらは龍田は当事者なので言わずもがなである。

ゆえに陸送会社は偏らないよう4社に分散し、周期性も無いよう輸送依頼をかけてきた。

それは陸路上での強奪を避けるのと、依頼総量が（主に龍田に）漏れないようにという配慮だった。

だが4つとも龍田の配下にあつたのでは情報は筒抜けだ。ぐうの音も出ない。

第19話

バツが悪そうに葉巻を吸うテッドを見ながら龍田は続けた。

「本業に影響する時期に無理に分析頂く必要は無いですよ、調査は大體長期に渡りますから」

「・・・」

「うちのチームが物証を集める上で、こんな所が欠けてるとか、こんな物が無かったかとか」

「・・・」

「そういう所をお時間がある時にちよつと見て頂けたら良いなうつて」

「・・・」

「もちろん軍として分析料はお支払いしますから、閑散期の副業に如何ですか？」

「・・・それを受けたとするだろ」

「はい」

「そしたら所長はその、俺に海軍に帰って来いって言わなくなるのかよ」

「そこまでは保証しかねます」

テッドは鉛のように重い溜息を吐いた。

テッドはとても疲れていた。

前の晩はよく眠れなかつたし、起きてからも龍田に何と釈明しようかなど、あれこれ考えていたからである。

少なくとも今聞いた1つ目の依頼は頭の片隅に入れておけば良い話だ。

2つ目に関しても閑散期だけと念押しし、先に町長に断りを入れれば、まあ受けられなくは無いです。

いずれ武蔵を迎える事も視野に入れているのだから、収入は多くて困る事は無い。

だが・・・なんか嫌な予感が止まらない。これで終わらない気がする。

くそ。普段ならもう少し頭が回るのに。

「解ったよ、2つ目も引き受けるけど条件がある」

「何でしようか」

「まずは分析を受けるのは閑散期のみに限定する。これは町全体との信用問題になるから譲れねえ」

「良いですよ」

「もう1つは1回あたりの分析料だ。それなりの額を期待したいんだが？」

龍田が傍らの文月を見ると、文月は難しい顔で電卓を叩き始めた。

「えっと、これくらいでどうですか？」

電卓の画面を見たテッドは首を傾げた。

「・・・なあ、所長がこれで頼めって言ったのか？」

「へうっ!？」

文月は予想外の一言にぎくりとした表情を浮かべてしまった。

この話は提督に内緒でやっているので、当然許可は貰っていない。

元々提督は117研時代の事を話したがらないので、テッドとの関係は手元に無かった。

そして交渉の基本として、いつも通り支払っても良い額の2割を提示したのである。

テッドはジト目で屈みこみ、文月と目線を合わせた。

「なあお嬢ちゃん」

「は・・・はい」

「俺は所長からさ、分析官として年収100万ドルの価値があるってよく言われてたんだよ」

「ううっ」

テッドは目が泳ぎまくる文月をじつと見つめつつ、ポケットからゆっくりとスマホを取り出した。

「・・・所長に電話してみつかなあ。あれは嘘だったんですかって」

文月は慌てて電卓を叩きなおした。

「こっ、これでどうでしょうか!？」

テッドはスマホを持ったまま、電卓の画面を食い入るように見なが

ら大仰に首を傾げた。

「・・・年に40件も分析依頼が来るのかなあ」

「え、ええつと、ええつと」

テッドはスマホのロックを解除しながら言った。

「・・・所長の番号はつと」

文月は諦めて電卓を三度叩いた。

「これでお願ひします!」

テッドは電卓の数字をチラリと見た後、肩をすくめた。

「んー・・・今年は初年度だし、リハビリ兼ねてるからこれで良いか。来年度はまたお話しような」

「あ、ありがとうございます・・・」

「で、俺の報酬は小切手か? 信金経由か? いつくれる?」

「へっ? あ、ええと、分析結果をこちらで受領してから3日以内に山甲信用金庫経由で・・・」

「ああつと聞こえなかつたな。依頼時から3日以内、だよな?」

「じゅ、受領時・・・」

「電話すつか」

「依頼時で結構です!」

「ん、解った。振込手数料はそっち持ちな」

深々と溜息を吐く文月を見て、龍田は小さく肩をすくめた。

文月の外見を見れば手加減するのが普通だが、毎日魑魅魍魎を相手にしているテッドでは勝負にならない、か。

来年の交渉は私がやるか、文月ちゃんにリベンジしてもらおうか後で考えましょう。

龍田は振り向くと、じつと立っていた子に声をかけた。

「話は理解してもらえたかしら?」

「ええ」

「じゃあテッドさーん」

立ち上がっていたテッドはぎざつと後ずさりした。

「な、なんだよ、3つ目なんて勘弁してくれよ?」

「さつき言ってた顔合わせですよ、ご紹介します。専従班班長の香

取さんです」

「練習巡洋艦香取と申します。この度はお世話になります。何卒よろしくお願いいたします」

深々と頭を下げる香取に、テッドは慌てて体勢を立て直すとぺこりと頭を下げた。

「ええと、よろしくな。俺はその、この町で仲介人やってるテッドだ。龍田、俺の事は・・・」

「以前海軍と縁があった方、と、説明してありますよ」

「そうか。で、香取さんはソロール所属なのか？」

「正確には、どこにも所属していませんよ」

「・・・どういうことだ？」

香取が顔を上げて微笑んだ。

「こちらで住まう以上、IDプレートなどは所持していない方がよろしいかと思ひまして」

テッドは怪訝な顔で龍田を見た。

「そこまで徹底するのか？」

「私はこだわらなかつただけど、香取さんがそうすべきだと」

テッドは肩をすくめた。

軍を除籍扱いで特定のミッションに専従するなんてCIAのやり方じゃないか・・・

「なあ龍田、まさかとは思うんだが、その、香取さんの住まいとか、身支度のあれこれってやつは・・・」

「私がこの町の空き物件や店舗を把握してるとでも？」

「龍田なら知ってそうな気がするんだが」

「そこまで暇じゃないんで」

「解った解った。支度金はあるのか？それともそこから稼がせるのか？」

「ああ、だから香取さんにお任せしようかと思ってたんですけど、テッドさんが整えて頂けるんですね？」

「へっ？」

「香取さん、このバッグに当座の支度金が入ってます。良かったです

ねく手伝って頂けるなんてく」

「ありがとうございます。右も左も解らないので助かります」

テツドはぎゅつと目を瞑った。くっそハメられた。

「あーもー、解ったよ。とりあえず今夜は旅館に泊まれ。住まいは明日見繕ってやるよ」

「宿はどちらにあるのでしょうか？予約した後歩いて伺いますので地図とか頂ければ・・・」

「良いよ。ここから遠いし、俺の車で送ってやるよ」

龍田は文月に頷くと、くるりと背を向けた。

「じゃ、そういう事で私達は引き上げますねく」

テツドはその背中に声をかけた。

「おっと待て、まだ用があるぜ」

第20話

「なんでしようか？」

ゆるりと振り向いた龍田に、テッドは眉をひそめながら訊ねた。

「香取への「依頼」や、それに必要な装備の調達方法はお前達で取り決めてあるんだらうな？」

「その辺は大丈夫です」

「なら俺はその領分は一切知らんぞ。良いな？」

「良いですよ」

「あと、香取さんの生活費はどうするんだ？」

「香取さんには近々、山甲信用金庫に口座を作って頂きますんで」

「ふーん」

「・・・で？」

「俺が信金まで連れて行けと？」

「他にも、山甲信用金庫さんとの付き合い方とか、町の注意事項とか、色々ありますよね？」

「・・・諸々説明しろと？」

「そういう事で」

「そこまで言うなら支度料寄越しやがれ」

「じゃあ文月ちゃん、帰りましようね」

「おい・・・くそ、まったく毎度毎度無茶言いやがって」

テッドは力なく助手席のドアを開けた。

「じゃ、乗ってくれ」

香取は右側に案内されたので慌てて手を振った。

「え、あの、私、車の運転はした事が無くて」

「この車は左ハンドルなんでな」

「あ、ああ！すみません！」

テッドはカリカリと頭を搔いた。しっかりとそうして意外とドジっ子かもしれない。

龍田が少し離れた所でくすくす笑いながら振り向いた。

「香取さくん、テッドさんの言う事よく聞いてくださいね、残りのメンバーは今週中には来させますんで〜」

その一言に、運転席に乗りこんでいたテッドは慌てて首だけ外に出した。

「龍田待て！香取一人じゃないのかよ！聞いてねえぞおい！」

龍田は海に向かう歩みを止めず、半分振り向いて答えた。

「一人でチームなんて聞いたこと無いですよ、それじゃ〜」

テッドは額に手を当てた。

くっそ、またハメられた。

この町で多人数の支度を整えるのに車無しでは無理だ。

力仕事まで口ハで全部押し付けやがって、やっぱり龍田は信用ならねえ！

シートベルトを締めながらギギギと歯軋りするテッドに、助手席から香取が心配そうに声をかけた。

「早速ご迷惑をおかけしてしまい、誠に申し訳ありません」

「あ、いや、別にアンタが悪いわけじゃねえ」

「出来るだけお手間を取らせぬように頑張りますので、よろしくお願いいたします」

テッドは溜息を吐いた。こう言われてはどうしようもない。

「一通りルールを覚えるまでは俺をあてにしろよ。治安の悪い所もあるから変に踏み込むなよ」

「ありがとうございます。どこかで必ず、この御恩をお返しします」

「それなら後から来る連中の指導、しっかりと頼むぜ」

「かしこまりました」

テッドはエンジンをかけつつ、内心で溜息を吐いた。

どうにもこういう礼儀正しさは苦手だ。

溜息一つ吐いてもあれこれ気を遣わせちまいそうだからな。

武蔵みたいに遠慮なくズケズケ言い合える方が俺には合ってる。

そっぴい武蔵はどこに居たんだろう？早く会ってえな。

パーキングブレーキを解除したテッドは、前を向いたまま言った。

「じゃ、行くぜ。町長のところも寄らねえとな・全く、何て言や良いん

だよ・・・」

「・・・ははーん、なるほど、ね」

ナタリアがそう呟いたとき、傍らにいたビットは首を傾げた。

「何がなるほどなんですか、ナタリアさん」

「龍田がこの騒動を起こした理由よ。本当に食えないわね」

「えつと・・・」

ナタリアは旧コンテナ埠頭を後にするテッドの車を写したモニターから、ビットへと向き直った。

ここは旧コンテナ埠頭の端に「放置されたように見せかけたコンテナ」の1つの内部である。

埠頭の随所に仕掛けた小型カメラと集音マイクを使ってテッド達の会話を見聞きしていたのである。

ナタリアは続けた。

「1つは町の人間への経緯説明、テッドが承認する姿、そして着任者の披露目を同時にやってのけた」

「・・・あ」

「もう1つはテッドを悩ませてロクに眠らせず、集中力を欠かせて承認を取り付けやすくした」

「そっか・・・テッドさんいっぴくなく悩んでましたからねえ」

ビットの隣に居たアイウィは首を振った。

「わざと悩ませるなんて、酷いね」

ナタリアは肩をすくめた。

「まあ立場を有利にする為の根回しはタフネゴシエーターの常套手段だし、テッドをハメる位には超一級の連中よ」

ビットが目を丸くした。

「ナタリアさんがそこまで評価するの初めて聞いたな」

「敵に回したら厄介な事この上無いわよ、あの龍田は。だから最後まで気を抜けないわ」

ナタリアはデジタル無線機を握った。

「アインは二人の護衛を継続、ツヴァイ以降は現刻をもって緊急体制を解除してよし」

「了解ボス」

「大和、武蔵。そつちも体制を解除して良いわよ。残りの皆は域外まで現態勢を維持。もう少し頑張つて」

「了解した・・・ふう」

龍田達が防波堤の外に出た事を確認し、ナタリアの無線を聞いた武蔵はバレットM82のスコープから目を離した。

林の中に急遽作り上げた丸太小屋の中で、武蔵は湾内に入ってきた龍田をじつと狙い続けていたのである。

龍田の艀装は一見ノーマルだが、極めて高度なフェイクやカムフラージュが幾重にも施されていた。

その上で武蔵がクリティカルポイントと見当をつけた場所はとても小さく、そして狭かった。

バレットM82は超遠距離から航空機や兵員輸送車の中に居る敵を狙撃する為に設計された対物ライフルである。

風に強い為選ばれたが弾頭も大きく、龍田のクリティカルポイントに命中させるのは武蔵でも厳しかった。

だが、艀装から考えられるLVは150前後。隙の無い挙動と左手の指輪が何よりの証拠だ。

1度でも外せばクリティカルポイントを狙えるチャンスはなくなり、こちらの正確な位置を悟られてしまう。

ごり押しが通じる相手ではない。

「あの艀装はもはや天龍型とは呼べないだろう・・・なんて奴だ」

その時、デジタル無線機から大和の声がした。

「砲兵隊の体制解除完了したわ。そつちはどう？武蔵」

「まだだ。これから確認する」

武蔵はじとりとかいた汗を拭うとインカムをつまんだ。

「狙撃班は狙撃体制を解除しその旨を報告せよ。繰り返し、全班、狙撃体制を解除し報告せよ」

その頃、海原を行く二人は。

「龍田会長、契約金額の節約につなげられず、申し訳ありませんでした・・・」

外洋に出てしばらくした後、文月はそつと前を行く龍田に頭を下げた。

龍田は振り向くと、小さく首を振った。

「いいえ。テッドさんと提督が個人的にどんな会話をしていたか知らなかったのはどうしようも無かったし・・・」

「・・・」

「情報を集めて渡すのは私の役割だったから、むしろ謝るのは私の方。ごめんなさいね」

「いつ、いえいえそんな。でも、あの、いずれお父さんには言わないといけないですよ」

「ん・・・分析が終わった時点が報告の頃合かもねえ」

「そうですか？」

「少なくとも今までよりは海軍との関わりが強くなったわけだし・・・」

龍田はにやりと笑って続けた。

「この件を理由に、提督がテッドさんに会いに行く事もできるでしょう？」

「それはそうですね・・・」

「提督は海軍云々を省いてもテッドさんと仲良しだし、たまに会うのも気分転換になると思うの」

「・・・そっか。お父さんの楽しみになるんですね！」

龍田はちらりと後方の空を見た後に頷いた。

「あの町はほとんど中規模鎮守府並の戦力を持つてる事もこれでハッキリしたしね」

「データは取れたでしょうか・・・」

「最上さんと夕張さんのチームだから心配ないと思うわ」

そう。

ナタリア達が言い当てた事に加え、龍田には3つ目の目的があったのである。

第21話

龍田の3つ目の目的。

それは山甲町全体が有事に遭遇した際、どれだけの兵力を集められるかを見極めるといふ事であつた。

提督はずっとテツドの事を気にかけているし、実力を高く評価している。

一方で海底国軍のように好戦的な深海棲艦や、海軍内の阿呆な派閥連中など、二人の敵は意外と多い。

もし提督が旧交を温める為に山甲町を訪ねれば、まとめて始末出来る絶好の機会と写るだろう。

その時にどれだけ町に防衛能力があるか、我々がどれだけ支援すれば二人を安全に避難させられるか。

提督が実際に山甲町へと向かう前に、現状の能力をどうしても知っておきたかつたのである。

「対艦、対潜、対空、航空戦、地上戦・・・まあ備えは及第点かなあ」

龍田は小さく頷くと、最上達との合流点に向けて舵を切つたのである。

「偵察中隊より龍驤へ・・・標的の領外退出を確認した」

「ん。お疲れやね、戻ってくる時も他所からの奇襲に気をつけるんやで」

「了解」

「皆も自分とこの子達に帰還指示かけてええで！」

「はい」

龍驤を筆頭とする航空チームは、洋上で艦載機への指示を出す時とホツとした表情を見せた。

Deadline Deliverersはコストパフォーマンスが重要であり、高コストの代名詞たる空母は極めて少ない。

龍驤のような軽空母以外にも航空戦艦や艦載機を有する重巡達を手を組んで航空チームを編成したのである。

大所帯ゆえに指示は大まかなものしか出来なかつたが、それぞれが

考えてカバーしていた。

空母勢の護衛を兼ねた水雷戦隊長を任されていた神通が龍驤達の傍にやってきた。

「私達も航空隊の着艦誘導体制に入りますね」

「頼むで〜」

「でも、龍田さん達の目的は結局なんだったのでしょうか：山城さん解りますか？」

「ん〜」

山城は眉をひそめて少し唸っていたが、やがて小さく肩をすくめながら答えた。

「武器を使わない威力偵察、とでもいえば良いかしらね」

「威力偵察？」

「だって今、私達はナタリアの指揮の元ではほぼ全兵力を繰り出しているでしょう？」

「ええ・・・」

「なら今、あちこちから記念撮影すれば戦力丸分かりじゃない」

「で、でも、どこからですか？」

「多分、ね」

山城はそう言っついついと上を指差した。

神通達は怪訝そうな顔でその指を追って上を見た。

同時刻、外洋の海上では。

「最上さあーん、夕張さあーん」

「やあ龍田、お疲れ様」

「どうでしたかー？」

「高々度にガスが出てたんだけど、イメージングレーダーと赤外線でバッチリカバー出来たわよ！」

龍田はホッと胸をなでおろした。

「良かったあ。あれだけ砲門や銃口を向けられて成果が無かったら泣きたくなるわ〜」

文月が溜息を吐きながら龍田を見た。

「殺気が予想以上だったのでぞっとしました」

「そうねえ、レーザーやスコープで少なくとも常に4箇所からは同時に狙われてたし」

「はい」

「私達が少し動いた時にあちこちから兵装の再照準音が聞こえたし」

「誰か先走って撃たないかと気が気じゃなかったです…脱出ルートも僅かでしたし」

「そう見えるトラップも沢山あったわねえ。トリップワイヤーも見えにくかったし」

「深海棲艦と艦娘の連合軍ですから戦術の想定パターンも膨大ですし…」

「帰る途中まで、上空には沢山の航空機から見張られてたしね」

首を振る文月の横で最上が笑った。

「あは。彩雲、瑞雲、零戦、流星、彗星に紫電改。航空機の見本市みたいだったよ」

夕張は顎に手を当てていた。

「それにしてもこの部隊の配置方法は参考になるわねえ。乱雑なように射線は被らないし、死角が無いの」

龍田は少し考えて、頷いた。

「MADFのマニユアルが生きてるって事かしらね。私が撮って来た映像の分析もお願い出来るかなあ」

「もちろん」

「任せてくださいー！」

「じゃあ皆で帰りましょ。集合」

島の中から、背後の海面から、隣接海域から。

鈴谷が、伊19が、金剛が、霧島が、大鳳が、球磨が、多摩が、そして木曾が。

音も無く集まってくると、無言で頷いたのである。

翌日。

「なぜそこまで手助けする必要があるのだ？」

「ここはテッドの事務所、朝食の席である。」

香取の口座開設や身支度まで押し付けられたとテッドが話した所、武蔵は一気に機嫌が悪くなった。

「俺だってやりたかねえけどよ、龍田は口が上手いんだよ・・・」

「香取とやらに見とれていたのであるまいな」

「あ、それは無い。全くねえよ」

「どうだか」

「俺は四角四面って奴が嫌いだな。武蔵とは本音で話せるが、香取には何も言えねえ」

「・・・」

「例えば溜息一つ吐いてもあーだこーだ詮索されるような手合いはダメなんだよ、俺」

「・・・本当に香取目当てではないな？」

「違うよ」

「なら私が同行しよう」

「なんで？」

「テッドの車よりは家財道具を運べるからな」

「なるほど、武蔵のはバンだからな。でも良いのか？家具とか積むと傷つかねえか？」

「構わん」

「じゃあ頼むよ。一人だとちよつと荷が重いつて思ってたから助かるぜ」

「・・・」

武蔵は黙々と朝食を食べつつ、ちらつとテッドを伺った。

機嫌が良くなったし、どうやら助かるというのは本音のようだ。

それにしてもこの気持ちは一体なんだろう。

「・・・いや、幾らなんでもこれは要らねえだろ」

「大きい分には問題ないと思うよ」

「それに何で全員で来るんだよ、完全なタダ働きなんだぜ？」

「人手も多い方がええやろ？」

武蔵が朝食の弁当箱を持ち帰った後。

テッドの事務所の前に停まったのは神武海運の10tトラックと

武蔵のダッジラムバンだった。

それぞれの車からは神通以下7名がぞろぞろと降りてきたのである。

テッドは首を傾げながら言った。

「まあ良いけどよ、手伝ってくれても俺はせいぜいメシ位しか奢ってやれねえぞ?。」

「それでええよ、今日の順番は決めたんか?。」

「家が決まらねえと何も始まらねえからまず不動産、次いで家具屋、家電屋、ホームセンターって感じかな」

「まあそうであろう」

「家具屋以外は10トトラックは入らねえだろ」

「その時はダッジラムで行けば良いだろう」

テッドは指折り数えていたが、

「俺と香取入れたら9人だが、乗れるのか?。」

武蔵は頷いた。

「時雨にはトラックで待機してもらってから8人だし、ダッジラムは8人乗りだ」

「そうか、なら大丈夫か。んー、ごめんな時雨」

「良いよ。気にしないで」

龍驤はつんつんと武蔵を突いた。

「なんだ?。」

「自分達の時の参考にしいや?。」

「んなつ!ばつ!バカもの!。」

「ダンナの好みを知る良い機会やで?うまく使いや?。」
「~~~~!。」

二人を見たテッドがきよとんとした顔で訊ねた。

「なあ武蔵、お前何真つ赤になってるんだ?。」

「知らん!もう行くぞ!。」

「は?。」

首を傾げるテッドに大和がにこやかに囁いた。

「婚礼家具売り場も行くんですよね?。」

「なんで？」

「し・た・み、です」

「お、おお、なるほどな。そういや一通り回るな」

「はい」

「んー、よし、その辺も気にかけてくぜ。ありがとな大和！」

「どういたしまして」

大和は龍驤と視線を交わし、互いに頷いた。

第22話

「ありがとうございます！それでは後日、購入に必要な書類一式を持って伺います！」

「よろしく願います。皆さんお待たせ致しました、次へ参りましょうか」

「全然待つてねえよ。ていうかあれで良かったのか？」

「他に候補はございませんから、すっきり決められました」

香取はそう言いながらダツジラムへと乗り込んだ。

一行が旅館で香取をピックアップし、不動産屋に着いたのはわずか1時間前の事。

出てきた不動産屋が最初の一言を発する前に、香取は矢継ぎ早に用件と条件を伝えていった。

泡を食った不動産屋が必死になって探し出しては見せる物件情報を、香取は

「これは平米が足りません、これは：部屋数が足りません、これは：保留ですね」

と、一瞬で選別していくので不動産屋は息つく暇も無い様子だった。

一方テッドと武蔵は隣同士に座らされ、その両脇を大和と龍驤に、背後を山城と扶桑と神通に固められていた。

「オーシャンビューの浴室なんて良いじゃないですか！」

「外側の掃除どうするんだよこんな崖っぷちで」

「こっちはリビング広いで？」

「そんなバカデカイ家、一体何人で住むつもりだ」

「それはほら、ぎょうさん子供作れば」

「朝っぱらから何をいつてるんだ！」

しばらくして、ふとテッドは香取と不動産屋が居ない事に気がついた。

「あれ、香取と不動産屋はどこ行った？」

奥からお茶を運んできた事務員が首を傾げながら言った。

「先程、手前共の車で物件を見に行かれましたよ?」

「もう決めたのかよ!？」

「えっ、ええ、3つくらいに候補を絞ったから見せてくださいと仰つて・・・」

きよとんとするテッド達の背後でガラリと店の引き戸が開き、

「それでは書類をまとめますのでおかけになってお待ちください」

「ええ、ご親切にありがとうございます」

そう言いながら香取達が帰ってきたのである。

テッドは香取に訊ねた。

「え、ええと、候補を絞ったって聞いたけど・・・」

「最終的に条件に合う物件が1つございましたので、お借りする事に致しました」

「賃貸?」

「ええ。売買ですと今日からは住めないそうですので、一旦お借りし、購入手続きを進める事にしました」

「なる・・・ほど・・・」

二人がそう言ってる間に不動産屋はテキパキと書類を持ってきた。

「ではこちらの太枠の中を記載願います。すみませんが敷金と1か月分の賃貸料を頂戴します」

「存じております。現金でお支払いします」

「解りました」

やり取りを見ていたテッドは肩をすくめた。仕事は速いようだ。

「では、こちらの机を6つとその書棚を2つ、この布団を10組、ご提案頂いた食器棚、あと照明は・・・」

「ありがとうございます!ありがとうございます!」

不動産屋を後にした一行は、続いて家具屋に来ていた。

香取は入店した直後、一番年上そうな店員を捕まえるとぐるりと店内を一周する間に目的等を説明。

2周目には店員のアドバイスを取り入れつつ次々と購入するものを決めて行ったのである。

テッドと武蔵を婚礼家具売り場に押し込んだものの、大和と龍驤は肩をすくめていた。

「どうやら二人が選べる時間は短そうだ。」

時雨が10トトラックを家具屋の倉庫に横付けし、従業員が次々と購入した家具を運び入れた。

積み込み状態を確認した時雨が納得したように頷きつつドアを閉めた時、香取は店員に言った。

「積み込みまでお願いしてしまつてすみませんでした」

「いえいえとんでもない、不用品や廃材につきましてはご連絡頂ければ私共が引き取りに伺いますので！」

「解りました。近日中にご連絡しますのでよろしくお願いいたします」

「ありがとうございます！またどうぞ！どうぞ当店をよろしく願ひいたします！」

従業員総出で見送られる中、時雨の運転する10トトラックとダツジラムバンは家具屋を後にしたのである。

武蔵は香取に尋ねた。

「ええと、このまま家に向かうのか？」

「トラックの方はそうして頂きますが、私はどこかで掃除用具を手に入れたいので・・・」

テッドが武蔵に言った。

「それならホームセンターが良いだろ。掃除機とかも売ってるしな」

武蔵が頷いた。

「解った」

3時間後。

「残りの布団はこの部屋やったね」

「はい、ありがとうございます」

「入れる前に掃除したるか？」

「あ、今掃除が終わりましたので大丈夫です」

「香取さんえらい早いなあ。手馴れとるなあ」

「いえそんな、褒めて頂くほどではありません」

そこに神通がひよいと顔を覗かせた。

「あの、この部屋用のカーペットがまだトラックにありますよ。掃除が終わるまで待つように伺いましたので・・・」

「ああ忘れてました！先に入れなくては！申し訳ありません」

「いえいえ、大丈夫です。お持ちしますね」

龍驤と神通は顔を見合わせると、真っ赤になつてゐる香取を見て微笑んだ。

香取は契約した家の掃除をテキパキと済ませ、家具の入れ方も効率的だった。

ただ、時折こうしたお茶目をやらかすので手戻りはあった。

それ以外がやたらと隙が無いので、やらかした時に恥じ入る姿が可愛いのである。

「ふう」

搬入が済んだりリビングで、武蔵は椅子に腰掛けて小休止していた。

そこにテッドが声をかけた。

「よ、お疲れの所悪いが車の鍵貸してくれ」

「どうした？」

「そろそろ日が暮れるだろ。その前に飯の用意しとこうと思つてな」

「まだ食器とか買つてないだろう？外で済ませたらどうだ？」

「俺達はその方が良いが香取さんは明日からここでスタートだぜ？紙皿とか要るだろ」

「なるほどな。よし、私も行こう。9人分は一人で持ちきれまい」

「あーそうか、悪いな、手伝ってくれるか？」

「ああ」

二人を乗せたダッジラムバンが出て行くと、庭から大和と時雨が出てきた。

「上手く二人きりに出来ましたね」

「そうだね。今日は家具とか家とかはゆっくり選ぶ時間がなかったからね」

「香取さんのペースがあんなに早いとは予想外でした」

「条件がかなり限られていたんだろうね」

「んー…そう言われると…」

大和は家の周りを一通り見ると、頷いた。

「確かにここは町の中心からさほど遠くないですし、襲撃されにくい場所です」

「うん。静かで治安も良い地区だよね」

「ワルキューレの勢力圏ですからね」

「香取さん、そこまで知ってたのかな？」

「龍田さんならそのくらい把事情を押さえていても不思議ではありません」

「…そうだね」

「さて、じゃあもう一息頑張りましょうか」

「うん」

こうして大和と時雨は再び家の中に入って行ったのである。

第23話

数日後。

「先日は本当にありがとうございます。メンバーも揃いましたので、ぜひ夕食会にお越しく下さい」

テッドの事務所を訪ねて来た香取は、そう言って深々と頭を下げた。

テッドは啞えた葉巻の紫煙を吐き出し、苦笑しながら答えた。

「礼なら神武海運の連中に頼むぜ」

「勿論です。テッド様のご都合が本日でよろしければ、この後伺うつもりです」

「俺は構わねえよ。あ、そうだ、これ渡しとくぜ」

「何でしょう?」

「Deadline Deliverのルールブックと許可証だ、話合わせる為にも読んでいてくれ」

「なるほど、仰る通りですね。チームメンバーにも徹底させます」

「後、一応これな」

「こちらは?」

「急ごしらえだがこの町の歩き方だ。危ないエリアや生活に必要な物売ってる店なんかを書いといた」

「まあ・・これはとても助かります。ありがとうございます」

「本当は俺が一通り回りながら説明出来れば良いんだが、ちいと時間が取れそうにない。皆で見といてくれ」

「いえいえ、そこまでお手間を取らせるわけには参りません。ありがとうございました」

「で、まずはアンタの所で俺との窓口役を誰か一人決めてくれ」

「はい」

「それと、それに書ききれない事も沢山ある。知りたければ俺に電話するか窓口役が尋ねて来い」

「はい」

「それなら他の Deadline Deliversと同じ行動になるから目立たねえよ」

香取は受け取った書類をぎゅつと胸元に抱きかかえると、目を瞑って答えた。

「何から何までありがとうございます。最初の着任時、貴方が司令官であれば良かったのですが」

テッドは首を傾げた。

「あん？所・いや、ソロル鎮守府の提督になんかされたのか？」

香取はふるふると首を振った。

「いえいえ、ソロル鎮守府の提督は私達にとっても良くしてくださいました」

「つてーと・・・」

「私は最初の司令官に他所の鎮守府へと売られ、そこで出撃中に沈み、深海棲艦になりました」

「・・・」

「最初の鎮守府に残された妹が心配でずっと探していたのですが、やはり深海棲艦になっておりました」

「・・・」

「インド洋沖で私達は再会し、たまたま通りがかったソロル鎮守府の勧誘船に乗り、この姿へと戻りました」

「・・・」

「提督の御恩に報いる為にもお手伝いさせて頂きたいですし、腐敗の一部始終も目にしております」

「・・・」

「1つでも多く、1日でも早く、悪に染まった鎮守府を潰し、仲間を助けたい」

「・・・」

「ですからこの仕事に志願したのです」

テッドは静かに葉巻の煙を吐くと、眉をひそめて舌打ちした。

「ちっ、俺が居た頃と大して変わんねーな」

「えっ？」

「・・・俺はさ、一時期117研に居たんだよ」

「確か、ソロル鎮守府の提督も・・・」

「ああ。俺の上司だった。117研が何をやる所かは知ってるか？」

「基本的には事故調査委員会ですが、鎮守府内の不正を発見した場合は憲兵隊に告発する所であると」

「正解だ。だから薄汚い鎮守府を嫌というほど見てきたんだ」

「・・・」

「香取が言ったようなケースも見てきたし、随分地獄に送ったつもりだったんだがな」

「・・・」

「ま、俺もそのせいでこの町に辿り着いた訳だし、まだまだ悪は健在、か」

「私の知る限りでも、艦娘の献上や売却は幾つも耳にしておりますので・・・」

「龍田から聞いているだろうが、俺は分析の仕事なら引き受ける。今尚命を狙われる身だからそれしか出来なくて悪いがな」

「いいえ。テッド様の分析力は天下一品だと龍田さんも仰ってました」

「・・・」

「我々は意気込みはありますが若輩者。これから鍛えていきますが、ご支援頂ければ心強いです」

「んー・・・どうやって鍛えるつもりだ？」

「まずは皆で書物を読んだり、走り込みなどのトレーニングを予定しておりますが・・・」

「・・・んー」

テッドは窓の外を見ながら頬杖をついていたが、ぱっと香取の方を向いて言った。

「ま、話を戻すと俺は今夜で問題無いから、後は神武海運に聞いてくれ。OKなら一緒に伺うぜ」

「かしこまりました。では神武海運様のご意向を伺ってまいります。結果は後ほど改めて伺います」

「ああいや、これから外に出るし、後で俺も神武海運に行くから連中に伝えておいてくれ」

「ありがとうございます。ではそのようにいたします」

香取は一礼すると、テツドの事務所を出て行った。

テツドは香取を見送った後、ワルキューレの事務所を訪ねた。

「よう、この前はすまなかったな。今度何か奢るよ」

デスクに座っていたナタリアは肩をすくめた。

「その件ならとくに神通達が挨拶に来たわよ。知らなかったの？」

テツドはきよとんとした後頭を掻いた。

「や、それはすまん。今の今まで知らなかった」

「菓子折持って、ちゃんと揃って御礼に来たわよ。だからもう過ぎた話」

「そうか・・・」

「あ、そうだ。あの時テツドはどうしたのって聞いたたら、私達が独断で頼んだ事だからって言ってたっけ」

「・・・あいつら」

「テツド、あなた聞いてないのにどうして私達が動いたって知ってるの？」

「お前な・・・俺の目が節穴だとも思ってたのか？あの兵の配置が素人に出来る訳無えだろ」

「そう？」

「恐ろしいくらい隙の無え配置だったじゃねえか。MADF仕込みか？」

「まあMADFベースだけど、私達の独学がほとんどよ」

「SWSPの訓練も、以下同文か」

「ええ」

「なあ、あの時の龍田の話聞いてたか？」

「もちろん。相変わらず食えない奴ね。ご愁傷様」

「今度来た香取達の事なんだがよ・・・」

「どうかしたの？」

「ありやあ頭でつかちだ。理屈はともかく実力が追いついてねえ」

「そうね。香取さん、4丁目の信号で待つてる時、後ろに強盗が忍び寄ってたのにぼーっとしてたもの」

テッドはうんざりしたように目を瞑りながら片手で額を押さえた。「おいおい嘘だろ」

ナタリアは細巻き煙草に火をつけた。

「本当よ。ついでに言えばうちの子がそいつに1発撃ち込んで吹っ飛ばしたのも気づいてなかったわ」

「・・・なあナタリア」

「ちよつと、変な事言い出さないわよね？」

テッドは首の後ろに手をやりながらバツが悪そうに続けた。

「あいつらさあ・・・これから本とか読んで訓練するとか言ってるんだよ・・・」

ナタリアは小さく鼻で笑った後に続けた。

「ふふっ・・・まあ20年も訓練すれば何とかなるかもしれないわね」

「龍田がそんな悠長な奴だと思うか？」

ナタリアは目を細め、眉間に皺を寄せた。

「だからといって何もかも龍田に手の内さらけ出す気は無いわよ」

テッドは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに目を見開いた。

「・・・まさか」

ナタリアはテッドから視線を外し、灰皿に煙草の灰を落とした。

「ちよつとテッド、しつかりしなさいよ。龍田が何の計算も無くヒヨツ子を送り込んできたとも思ってるの？」

「・・・俺が話聞いてここに来る事も」

「当然計算してるわよ」

「お前らのノウハウを盗む為にか？」

「盗むって言うか、実力を把握する為でしょうね」

テッドは葉巻に火をつけながら唸った。

「あー・・・そう言う事かよ。くそ、龍田の依頼にしちゃ妙に簡単だから、まだ何かあるとは思ってたんだが」

「だから私達は手を貸さない。手の内を知られたくないから。ファッツゾ達も近過ぎるからNG」

「かといって放り出すのもなあ・・・」

眉をひそめるテッドにナタリアは肩をすくめながら続けた。

「教育なら適任者が居るでしょ」

「誰だよ」

「神武海運の社長」

「・・・神通か」

「あの子は基本的に面倒見が良いし、秘書艦も経験してる」

「改二だし、鎮守府じゃ最高錬度艦娘だったって言ってたな」

「対軍隊の正規戦闘手法という意味では相当上級まで教えられるでしょ」

「それで間に合うかなあ」

「そんな基本も身についてなきや任務以前の話だし、応用は自分で頑張って、よ」

「卑怯な手を喰らって沈んじまうかもしれないぞ」

「テッド。貴方言ってたじゃない。お釈迦様が手招きしたら自分の都合関係なく死ぬんでしょ？運命って事よ」

「・・・だな」

俯き加減になるテッドをナタリアはしばらく見ていたが、やがて溜息を吐くと

「・・・もし応用段階になって誰も居なければS W S Pの誰かを回してあげるわよ」

「本当か!？」

「そこまで行くかどうかは神通と、その子達次第だけどね」

「まあそれは俺にも解らんし保証も出来ん」

嬉しそうにするテッドにナタリアは怪訝な顔で訊ねた。

「それにしても香取に情が移ったのテッド？武蔵に殺されるわよ？」

テッドはきよとんとした顔で答えた。

「は？なんでそうなるんだ？」

「ダンナが浮気してるからに決まってるでしょ」

テッドはナタリアにそっと近づき、真顔で声を潜めた。

「お、おい・・・これ、浮気っていうのか？」

「他に言いようが無いわよ。もしお礼にキスでもされたら完璧よね」
テツドは一層声を潜めた。

「ど、どうすりゃ良い？俺はそんなつもりねえんだよ」
ナタリアは呆れたように紫煙を吐き出した。

「一人で動かず神武海運全員と相談してから動く。出来るだけ武蔵に
最初に相談する」

「・・・そんなんで良いのか？」

「それが大事なの」

「解った。あー、今の話も悪いけどよ」

「当然神武海運の皆には言って良いわよ」

「サンキューナタリア。恩に着るぜ」

「とつとと説明してきなさいな。神通が承知するかも解らないけど
ね」

「そ、そうだな。色々ありがとう！じゃあな！」
バタン。

「あーあ・・・私もお人好しになったわね・・・」

ナタリアは肩をすくめると、次の細巻き煙草に火をつけた。

第24話

テッドは早足で神武海運へと向かい、事務所のドアを開けた。

「よう邪魔するぜ・あ、良かった。武蔵聞いてくれ」

声をかけられた武蔵はゆっくりと新聞を畳みながら返した。

「どうした？ああ、香取がさつき来たから夕食会は承知しておいたぞ。

1900時に来て欲しいそうだ」

「そーいや俺は時間教えてもらってなかったな。助かった」

武蔵は苦笑した。

「どこかしら抜けてるな、香取の奴は」

「なあ武蔵、その香取だが、LVで言うのとどれくらいだと思う？」

「・・・ふむ」

武蔵は腕を組んでしばらく考えていたが、

「そうだな、30から35という所だろう。あまり実戦経験は多くなさそうだが」

「要は頭でっかちで甘ちゃんだったって事だろ」

「そこまで身も蓋もない言い方をするな・・・まあ否定はしないが」

「ナタリアもそう言ってたんだよ」

武蔵は首を傾げた。

「何故ナタリアと香取の話などしたのだ？」

「それなんだが、聞いてくれよ」

「・・・ふーむ」

武蔵は片目を瞑りつつ、ガリガリと頭を掻いた。

「な？そんな勉強しようが任務につかせたら一発で沈んじまう」

「だろうな。悪徳鎮守府はそれこそ手段を選ばぬ。どんな本を読もうと・・・なあ・・・」

「ただ、ナタリアが警戒する気持ちも解る」

「うむ。龍田はそれくらい考えていてもおかしくあるまい。むしろ・・・」

「あん？」

「後から来たメンバーの一部には手錬が混じっているかもしれない」
「・・・依頼を実行出来るかどうか見極める役か？」

「違う。どのような事を教えてもらったか龍田に報告する為に、だ」
「それじゃスパイじゃねーか」

「そもそも依頼なんて来ないかもしれないぞ」

「最初から全部茶番かよ。香取はダシにされてるだけか」

「あの龍田ならそれくらいやりかねん。お前をあれだけ振り回したのだからな」

「まいったな・・・じゃあ神通にも言わない方が良いかなあ」

武蔵はしばらく腕を組んで考えていたが、やがて顔を上げた。

「いや・・・ちよつと待ってくれ」

「ん？どういこうこつた」

「我々神武海運のメンバーは、かつて所属していた鎮守府の第1艦隊の生き残りでな」

「おう」

「既に高練度だから勝手に自分で不足している所を見極めて訓練出来るんだ」

「なるほど」

「だが神通は同時に筆頭艦娘で、鎮守府全体の艦娘の面倒を見ていたんだ」

「まあそういう役回りになるよな」

「訓練しかり、生活しかり、仲裁しかり、だ」

「手広いな」

「うむ。私達との共同生活で生活と仲裁はそれなりに満たされてると思うのだが」

「訓練だけは満たせない」

「そうだ。だから香取達への訓練は良い楽しみになるかもしれない」

「龍田達に手の内晒して良いのか？」

「そもそも鎮守府で行っていた訓練だ。問題あるまい。隠すつもりも無い」

「じゃあ神通には俺から話すが、同席してくれないか？」

「解った」

「・・・そうですか・・・可哀相な生い立ちなのですね・・・」

テッドが香取達の現状を説明した時、神通は悲しそうに目を細めた。

神通自身も偽司令官から虐待を受けた身であり、共感する物があるのだろう。

「というわけでよ、一人前になるまで面倒見てやってくれねえか？」

「この町で生きていくという意味ですよね・・・ん・・・」

迷いを見せた神通に、武蔵が話しかけた。

「鎮守府でよく補習をしていたではないか。あれで良いのではないか？」

「・・・それで間に合うでしょうか」

「香取も練習巡洋艦だ、ある程度教えれば後は工夫出来るであろう」

神通は目を瞑って少し考えていたが、頷いた。

「はい。香取さん達がお気に召すか解りませんが、私でよろしければテッドは頷いた。

「うん、確かに香取達がどう反応するか解らねえが、その時は頼むぜ」

「はい・・・」

テッドと武蔵は顔を見合わせるとにこっと笑った。

「ええっ!? く、訓練のご指導までして頂けるんですか!？」

香取達の家で夕食を食べ終えた後、テッドはおもむろに話を切り出した。

「香取姉え、私賛成! うふふっ♪」

「うむ、兵装を支給されても使えねば意味が無いからな!」

「そうですね、利根姉さん」

「よろしくお願ひします!」

そう。

香取に続いて山甲町にやってきた面々は、鹿島、利根、筑摩、そして朝潮だったのである。

一方、今夜初めて紹介されたテッド達は内心冷や汗をかいていた。戦艦も居なければ、正規空母どころか軽空母さえ居ない。

確かに全員集まれば対応出来ない艦種は居ないが、絶対的な戦力が不足している。

これでどうやって隠密裏の偵察や強制離脱をしろというのだ？

深海棲艦なら海に潜れるが、艦娘ではそうもいかない。

まだ高錬度の工作艦でも居れば奇手を狙えるかもしれないが、それすらもないとは・・・

硬直するテッド達を他所に、神通は静かに頷いて答えた。

「訓練は裏切らないというのは香取さんの言葉ですが、それもやり方次第です」

「・・・」

「体をきちんと鍛え、艦装取扱いに習熟し、敵の展開を読める力をつけ、それを上回る策を持つこと」

「・・・」

「訓練は非常に多岐に渡ります。時間も当然かかります。でもきちんと行えば必ず皆さんの力になります」

「はい！」

「皆さんが生き残る為の術を身に着けられるよう、私が微力ながらお手伝いさせていただきます。よろしいですか？」

「はい！よろしくお願いします！」

テッドは意外そうな顔をしつつ武蔵に囁いた。

「なあ、神通ってあんな感じだったのか？」

「ああ。新入生にも厳しい教官であったが、誰よりも皆の成長を案じていた」

「そうか」

武蔵は神通を見て微笑んだ。

「・・・ふふ、やはり神通が楽しそうだ。目が生き生きとしている」

テッドは香取達と会話する神通を見ながら言った。

「んー・・・そうだな、なんかやる気を感じる」

「教える子供達のやる気を引き出すのも上手い。後は任せよう」

神通はにこりと笑って言った。

「では明日の0430時から朝練を開始します！0400時には起き

「ていてくださいね！」

テッドはおいおいと思っただが、香取達はきらきらした目でハイと答えていた。

「どうやら艦娘と人間の時間感覚は違うらしい：あれ、俺も人間じゃねえんだっけ。」

「ま、いいか。俺は寝る。」

こうして神通の指導の下で香取達は日々訓練を受けた。

鎮守府的光景で言えばLV99の改2艦娘がみっちりノウハウを教えてくれる訳である。

一方、武蔵の見立て通り香取達はほぼLV30前後だった。

ようやく独り立ちした位の子が最上位クラスの職人技をすぐ飲み込めるかというが無理がある。

だが、そこは秘書艦として鎮守府を切り盛りしてきた神通。

最初は高めの訓練を課し、どこまでついてこれるかを見極め、必要なところを補う。

その加減も実に手慣れており、やる気を殺がず、簡単過ぎずという絶妙な所を突いていた。

香取と鹿島は元々練習巡洋艦という事もあり、神通の教えたいポイントをすぐに察した。

神通はそこまで意図していた訳ではなかったが、香取姉妹は神通の教育手法をも吸収していったのである。

一方で神通は早々に一人だけ違う事に気づいたが、淡々と専用のメニューをこなさせたのである。

第25話

そんなある日の事。

「へ？何か買物頼んで欲しいってどういうこと？」

神通がテツドの事務所に見れてそう言ったので、テツドはきよとんとして首をかしげた。

神通はにこりと笑った。

「訓練は全般的に行ってますが、実践に勝る教科書はありませんから」
「って事は、神通的に任務をこなしても良いって判断したって事か」

「いいえ」

「えっ？」

「彼女達はそろそろ基本というか、私が一方的に教えられる段階は終わりを迎えます」

「うん」

「その次、つまり自らの欠点を知り、それを鍛える応用段階の手順をそろそろ学んで頂きたいのです」

テツドは腕を組んで唸った。

「意図は解った。けどよう、仕事失敗したら客との信用問題になるんだよなあ・・・」

神通は手を軽く振った。

「あ、いえ、すみません。そうではないんです」

「あん？」

「この町の方が必要な物を代わりに買って来る。買い物専門の便利屋さんですね」

「町内の買い物って事か？」

「いえ、頼む方が町内の方というだけで、買う物が隣町や海を隔てた所であれば行ってもらいます」

「・・・」

「怪我をする事、危ない目に遭う事、時に轟沈を覚悟する事もあるでしょう」

「・・・」

「そういう瞬間こそ、自分の欠点に気づくのです。他人から言われても実感がなければ反発するだけです」

「いつまでも訓練じゃダメって事か」

「ええ。たとえお相手がフル装備したワルキューレの皆さんでも、訓練は時間が来れば終わるといいう油断があります」

「・・・」

「切り抜けなければ本当に死ぬという極限の状態は、最高の教育の場なんです」

「なあ・・・海軍のお仕事なら強制離脱の支援があるんだろうけどよ・・・
うちらはねえんだしさ・・・」

「いえ、軍もありませんよ」

「無いのか!?!」

「あつたら轟沈なんてする筈無いですし、司令官の指示以外の戦闘は厳禁です。それが規則です」

「まあそうだよな・・・じゃあ中破までなら帰ってこられるってのは単なる運なのか・・・」

「ただ・・・」

「あん?」

「たまたま航行中に他所の艦娘の撤退場面を見ていたら、うっかり魚雷を海に取り落としてしまっって事はあります」

「うっかり?」

「はい、うっかりです。発射装置の誤作動で弾幕張ってしまう事もあります。兵装ってデリケートなんですよ」

テッドはジト目で神通を見上げたが、神通は澄ました顔でにこりと微笑んだ。

「落とし前はどうかやってつけるんだよ」

「ああ、故障や不良弾薬等の廃棄分は出撃による消費量とは別の申告書式で出しますよ? 標準手順じゃないですか」

「けどよう、毎回毎回誤作動ってのも疑われるだろ・・・」

「んー・・・話は変わりますが、定期船って自動航行ですし、航路が決

まっていますよね」

「へ？あ、ああ、そうだな」

「長距離遠征や激しい戦闘の後、ちよつと乗船して休息を取る事は認められていますよね」

「ああ．．ええと、そう．．だったな。うん」

「定期船はばら積みなので、波が荒いと荷物がこぼれたり、海水を被つてダメになったりするんです」

「だろうな」

「ですから休憩時に、ダメになつてる積荷を選別して投棄するのは艦娘の仕事なんですけど」

「．．おいまさか」

「これはアウトかな、セーフかなって微妙なら、少し勿体無いって思つても捨てるんですよ。不良品は怖いですからね」

「．．どこに捨てるんだ？」

「当然海の方に向かって放り投げますよ」

「そこでお前達の仲間がキャッチしてるんじゃないのか？」

「とんでもない。仲間に向かって投げて怪我でもしたらどうするんですか。魚雷とかもあるんですよ？」

「．．．でもよう」

「ただ、船で休憩中に、紛失したと思つてた弾や魚雷が足元に落ちて、見つかつて良かったらうって事はよくあります」

「テッドはますますジト目になったが、神通は「解るでしょ？」という目で小首を傾げるだけだった。

「そうして帳尻合わせて、何食わぬ顔で帰還するわけだな？」

「人聞きの悪い。認められた手段で休息し、課せられた仕事を果たして帰ってくるだけじゃないですか」

「海軍所属ならそうだが、それは俺達は使えない手だろ？」

「そうでもないですよ」

「えっ？？」

「先程も申し上げましたよ、定期船は自動航行だつて」

「．．．おい」

「たとえば船の上で遭遇しても、どの鎮守府の艦娘か探るなんてのは野暮ですから」

テッドは手で額を押さえた。

命令外の撤退支援をやってパクった弾薬で誤魔化すなんて限りなく黒に近い黒ってか真つ黒じゃねえか。

だから定期船の積荷ロス率がやたら高かったのか。長年の疑問が解けたぜ。

ただ・・・と、テッドは思った。

それで艦娘が帰還する確率が上がってるならそれで良いじゃねえか。

目の前で死にそうな仲間が居て、それを庇う為なら敵にありつたけ撃ちまくるのが情けつてもんだ。

神通はテッドの様子を伺い、納得したように目を細めて続けた。

「そういう事も、肌で知らなければ理解出来ませんからね」

テッドは黙って頷いた。

確かにこんな事を大本営勤めだった俺が聞いたら目を三角にして是正しようとしただろう。

だが今は、やれたとしてもそんな気はさらさら無い。

今の海がどれだけ危ない物か、Deadline Deliver
sと毎日付き合っただけ痛いほど解る。

ルールギリギリ、いや、摘発されない限界まで黒にはみ出ても手を差し伸べたいのだろう。

定期船の仕組みを作った奴も、実はそういう意図があつたのかもし
れねえな。

テッドは肩をすくめた。

「話を戻すとよ、頼み事の方は最初のうち、陸上の方が良いのか？それ
とも海上か？」

神通はいつも通りののにこやかな表情に戻ると続けた。

「個人的な意見を言わせて頂ければ、私達にとっては陸上の方が気を遣
うんですけどね」

「深海棲艦の方がマシか？兵力比べ物にならねえだろ」

神通は苦笑しながら答えた。

「でも・痴漢に驚いて主砲なんて撃ってしまつたら20m四方消し飛ばしてしまいますし」

「・・・なるほど」

「地上戦に備えて、一応こういう物は持ってますけど・・・」

そう言いつつ神通はホルスターから銃を抜いて見せた。

「スチエツキンかよー！マニアックだなおい」

「弾が安くて、多少は命中率があつて、いざとなればフルオートでばら撒けるハンドガンつてあまり選択肢がなくて」

「ハンドガンに求めすぎだ・・・」

「でも、これを見つけたから。結構気に入ってるんですよ」

神通は肩をすくめつつホルスターに銃を戻した。

「はあー・・・あれ？そーういや香取達は何か持つてんのか？」

テッドが呟くと、途端に神通が渋い表情になった。

「私はあれだけは止めた方が良くと思うんですけど・・・聞き入れてくださらなくて」

「あん？」

「聞いてください！よりもよつてブローニング1910ですよ？骨董品にも程があると思いませんか！」

ダンダンと両手を拳にして机を叩く神通をテッドはなだめた。

「ま、まあまあ待てよ。何か理由があるんじゃないやねえか？」

「ソロール鎮守府の提督さんと御揃いなんだそうです。でも命がかかつてる時に32口径なんて・・・」

「あー・・・」

テッドはぼりぼりと頬を掻いた。

所長は拳銃に関しては何も飛び切りマニアックで変態だ。

どうせ奇怪な理由でブローニング1910に辿り着き、それを香取達に力説したんだろう。

それですっかり洗脳された香取達は揃ってそれにした。そんなとこだろうな。

第26話

テッドがなだめたので神通はそつと机から一步引き、しよぼんとした顔で言った。

「弾頭の大きさはストップピングパワーに直結するんですよと言っても聞いてくださいませんし」

「・・・」

「スチエツキンが重過ぎるなら、せめて9mmパラベラム弾を使う銃にしましょうと言ったのに・・・」

テッドはホルスターから自分の銃を取り出した。

GLCK36は大口径の45ACP弾を使う割に軽く、対人護身用として良く出来た銃だと思う。

この町を歩く上では絶対に手放せないし、実際世話になった事もある。

だが、きつと所長は魂を感じないとか訳の解らん理由で拒否するんだろうな。

テッドは苦笑しながらホルスターに銃を戻し、続けた。

「なあ神通、持たせたい機能というかレベルはどんな感じだ？」

「え？ええと、例えば一人で全盛期の器下地区を縦断すると考えるじゃないですか」

「LV1の勇者が棍棒持ってラスボスの洞窟に行く位の酷さじゃねーか」

「ですけど現実問題として治安の悪い街は日本中にありますから」

「・・・まあ・・・なあ・・・で？」

「路地の角を曲がったら銃を下げたマフィア5人ずつに前後挟まれたとしますよね」

「人生詰んでるじゃねーか！」

「それを切り抜けるのに手榴弾は使えません」

「・・・まあ、自分もゲームオーバーになっちまうからな」

「上級者ならダブルアクションの9mmオートでも行けるでしょうけ

ど」

「普通は前を片付ける間に後ろが抜くからな」

「初級者ならイングラムM10辺りが必要です」

「目を瞑っても良いから周囲に向けて引き金を引き続けろと」

「はい。中級者でもSPASかストリートスナイパーが欲しい所です」

「前後1発ずつで一丁あがりか」

「ええ。予想外の瞬間に冷静かつ高度な銃操作を不慣れな人に求めるのは酷ですから」

「ふーむ」

テッドは頷いた。

確かに神通の言ってる事は正しい。

だが所長も何か考えがあるんじゃないかなろうか。

「うし。ちょっと香取達に話聞こうぜ」

テッドはそう言って立ち上がった。

「ハンドガン、ですか？えっと、神通様には申し上げましたが・・・」

「いや、俺が確認してえのは、何か改造してねえかって事だ」

「ええと、ノーマルの状態が解らないのですが、トリガーの重さ以外は提督と同じ仕様だと伺ってます」

「予備でいい。ちょっと銃を見せてくれねえか？」

「解りました」

神通は少し頬を膨らませて黙ったままなので、テッドは冷や汗をかきつつ香取と話を進めていた。

木箱を手に戻ってきた香取はそのまま箱を差し出した。

「どうぞ」

「んじゃ拝見」

テッドはまず、油紙から取り出した銃のマガジンに違和感を覚えた。

「なんかこれ・・・グリップより長くないか？」

「ええ、8発入るそうですよ」

「へえ」

鹿島がひよいと銃を指差した。

「先にチャンバーに1発こめて9発装填しておけーって提督さんは言っていました!」

「9発?」

「深海棲艦や艦娘なら一人倒すのに3発要るから、3発1セットにするんだそうです!」

「おい待て。弾何使ってる。32ACPじゃ弾かれるだけだろ?」

鹿島が小走りに弾薬を取って戻ってきた。

「これと、これです!」

「・・・タングステン芯のKTW弾にダムダム弾かよ。エグ過ぎるだろおい」

神通が首を傾げた。

「どういう事ですか?」

「ええとな、こっちのKTW弾は、人間なら防弾チョッキ着てもぶち抜ける高貫通弾だ」

「えっ」

「モルタルの壁やシヨベルカーのバケツトも撃ちぬける最新型だ。屋内戦ならライフルと互角に戦える」

「・・・」

「対深海棲艦なら標準型の装甲なら撃ち抜いちまうかもな」

神通の表情が少しだけ和らいだ。

「・・・へえー」

「でもってこっちのダムダム弾は当たった直後に破裂する」

「それじゃ貫通出来ないですよね」

「逆の役割だ。人体に当たれば内臓をずたぼろにするし、艦装なら内部の配線が無茶苦茶に引き千切る」

「・・・」

「これを向けられた奴は3発のラッパが鳴り響けば神の召喚状をもらえらってこった」

「でも9発では多人数の場合、弾数が少なすぎます。絶対的な火力が足りませんよ」

「お前ら、提督からなにか注意事項言われてないか？町の歩き方とか」
「必ず予備マガジンは3本以上持ってて言われています」

「弾数は確保しろって事か。まあ順当だな」

「でも・・・連射性能は弱いですし・・・」

「そしてこれの良い所は、深海棲艦だろうが艦娘だろうが人間だろうが対処法が同じって事だ」

鹿島が頷いた。

「はい！とにかく狙った所を3回ずつ撃ってていわれています！」

「背中合わせで反動をキャンセルするって事か」

神通はテフロンコートされたKTW弾をつまんで眉をひそめていたが、

「それでも何か1つくらい、追加で持って欲しいですねえ・・・山賊とかは多人数で来ますから・・・」

と呟いたとき、利根が首を傾げた。

「我輩と筑摩はそれも持つておるが、これも持つておるぞ？」

そう言つて利根が取り出したのはFN-P90であった。

「早く言えよ・・・」

テッドががくりと俯くと、利根はきよとんとした顔で答えた。

「これはハンドガンではなからうと思つたのでな」

「それは何で持つてるんだよ」

「龍田が出発前に良いから持つて行けと押し付けたんじゃ」

神通とテッドは顔を見合わせて頷いた。

さすがに龍田もむぎむぎ死なせるつもりは無いらしい。

テッドは続けた。

「それ持つんならハンドガンだつてFive-seveN持つてば良いだろ」

「なぜじゃ？」

「同じ弾使えるからな」

「ほう。ならばこっちと同じ弾が使えるこういうのは無いのかの？」

「32口径のPDWなんて聞いた事ねえよ」

「うむ。ならばこれを32口径仕様にしてもらえば良いんじゃない！」

「わざわざ弱くしてどうすんだよ」

「こっちの方が弾が可愛いからの！」

ふと見ると神通がぎりぎり歯をかみ締めつつ拳を握っていたのでテッドはそつと後ろに下がった。

「いい加減にしなっさあい！」

神通火山大爆発などと、テッドは壁にもたれつつ目の前の光景を見ながら肩をすくめた。

まあP90持ったらそこそこ行かせても帰ってこられるだろう。

変な改造さえしなければな。

さあて、神通の言う「実践」に出して大丈夫かねえ・・・まあ開けてみねえと解らねえか。

こうして香取達はテッドを仲介として仕事を始めたのである。

買い物専門の便利屋、略して「買い物屋」である。

第27話

数週間後。

「待たせたの。ケチャップにベーコン、マッシュルームに牛乳じゃ」

「や、ありがとう。助かった」

「うむ。用があればいつでも連絡するが良いぞ。あ、ええと、間違いや抜けはないかの?」

「・・・ん、大丈夫だ。ありがとう。コーヒーでも飲むか?」

「いや、気遣いは無用じゃ。ではな!」

カロン♪

あつという間に去っていく利根達を見送ると、ライネスは厨房に戻った。

階段を下りる足音がした後、ルフィアがひよいと厨房に顔を覗かせた。

「えつと、お客様かしら?」

「ああいや、買い物屋だ。頼んでた物を届けてくれたんだよ」

ルフィアはジト目で答えた。

「・・・もうそろそろマトモになったの?」

ライネスは頷いた。

「瓶も割れてないし、銘柄は指定通りだし：まあパックが少し潰れてるくらいは大目に見るさ」

ルフィアは肩をすくめた。

「無くして解るファッツの優秀さ、よね」

ライネスは遠い目をした。

「鞍替えされた直後はどうしようかと頭を抱えたっけなあ：まあ何とかなったが」

香取達が買い物屋を開いた事はあまり大々的には知らされなかった。

親しい人にだけテッドが直接説明し、テッドが依頼内容から金額を交渉した。

支払いを確認してからテッドは香取達に依頼を伝え、香取達が動く。

香取達は品物を届け、テッドに報告すると引き換えに経費込みの報酬を受け取る。

もちろんトラブルを起こした場合はペナルティが報酬から差し引かれる。

Deadline Deliverersと仕事の仕方を同じにする事でDeadline Deliverersの動きを知ってもらう。

それがテッドの意図だった。

その、テッドの事務所では。

テッドは自分の席についたまま苦笑しており、武蔵と一緒に来た神通は何度も頭を下げていた。

「本当に申し訳ありません。ここまで酷いとは予想以上でした・・・」

「まあ鎮守府の遠征司令で物運ぶのとは勝手が違うだろうしな。もう慣れたぜ」

武蔵が首を振った。

「助手席に卵を入れた買い物袋をただ置くなど、結果は火を見るより明らかだろうにな・・・」

「まあ最近はトラブルも少しずつ減っては来てるしな」

「トラブルの後始末では何度もご迷惑をおかけしてしまいました。なんとお詫びしたら良いのか・・・」

「いや、別に神通が謝る必要はねえよ。差配は俺の仕事だしな」

「でも、元々提案したのは私ですから・・・」
そう。

テッドは香取達が受けられそうな依頼しか受けなかったし、依頼内容は皆にきちんと言明した。

どこに売ってるのかも、そこまでの地図も渡していた。

ただ、例えばAという商品が割れ物だから注意しろ、といった所までは言わなかった。

ゆえに客が届いた袋を開けると中身が飛び出ている、卵が割れているなどのトラブルが続出。

最初はファツゾの再来かと期待して多くの依頼が入ったのだが、たとえばビットなどは

「えーっと・・・袋の中がぐちゃぐちゃで何がなんだか解んないんだけど・・・受け取らなきゃダメかなあ？」

と、呆れた声でテッドに電話してきたし、ナタリアに至っては

「オリーブオイルまみれのタバコなんて頼んでないわ。頼んだものを買ってきてくれるかしら？」

そういつて受け取りを拒否したそうである。

最近はやうやく壊さずに運ぶ割合が増えてきた為、最悪期よりは依頼も持ち直してきた、という状況である。

武蔵がポツリと呟いた。

「それにしても、なぜライネスは最初からずっと頼み続けてくれるのだろうか」

テッドが頷いた。

「俺もそう思ってたな。先週菓子折りを手に詫びてきた時に訳を聞いたんだよ」

「ああ」

「そしたらファツゾも取引開始直後はひでえもんだったそうさ」

「あのファツゾがか？」

「そう。それでも1ヶ月、3ヶ月、半年と頼んでるうちに良くなっていったって言うてよ」

「・・・」

「誰でも最初は素人なんだから一人前になるまで付き合ってたよって笑ってた」

「・・・そのうち我々も礼を言いに行かねばならんな」

「まあ、あれだ。メシ食うとか飲みに行くならトラファアルガー使おうぜ」

「で、少し多目に頼む、か」

「だな。それでも足向けて寝られねえけどよ」

神通はしょぼんとうなだれた。

「理由は一応あるのですが、お客様には関係の無い話ですからね」

テッドは苦笑した。

「皆知ってるだろうが、それぞれ工夫して対処する事だからな」

香取達は何も行儀作法がなっていない訳でも、ぞんざいに荷を扱いたかった訳でもない。

ただ、ここは不便な土地柄で、治安が悪い所が点在するのである。

例えば先程のライネスの依頼を受けるとする。

ライネスが指定するブランドのケチャップとマツシユルムは隣の雑貨屋に行けば買える。

ベーコンは町内の肉屋で買えるし、牛乳は牛乳屋で買える。

ただ、山甲町と隣町の間には見通しの悪い峠道があり、当然近代兵器で武装した山賊が出る。

そこを通れば現金や食料、車そのものやガソリンなど、様々なものが狙われる。

一口に山賊といえど複数のグループが居るし、どれがどんな意図で出てくるか解らない。

町内を走っていても偶発的に起こる犯罪組織同士の銃撃戦や強盗は避けようが無い。

それは肉屋の前とて例外ではない。

さらに牛乳屋に至っては店を持たず、リヤカーを引きつつ歩き回るので町中を探さねばならない。

車の操作が荒ければ買い物袋は転げ回り、銃撃戦の流れ弾でも命中すれば牛乳瓶など木っ端微塵である。

また、弾を無制限に持てるわけでもないので、戦闘毎に配分を考えねばならない。

さらに、買った物を持ち歩き続ければ痛んでしまうから時間も限られる。

たかが買い物、されど買い物、なのである。

ちなみに牛乳屋とベレーは仲良しであり、牛乳屋は毎朝ファッツォの家の前でベレーが来るのを待っている。

ベレーはその代わりに毎日決まった量を買うようにしているし、それを知る近所の人も集まってくる。

こういう互助関係を結ぶのも工夫の1つである。

ただ、襲われる苦労は香取達が顔を知られていないから、という証拠でもある。

山賊にしろ強盗にしろ、誰も好き好んで強い相手の餌食になるつもりはない。

ナタリアがハーレーで峠道を走っても山賊が出てこないのは、躊躇なく銃や主砲をぶっ放すと恐れられているからである。

牛乳屋がリヤカーを引いて街を歩いても銃撃戦に巻き込まれないのは、牛乳屋を必要とする人々の報復が怖いからである。

テッドに迂闊に銃口を向ければ、どこからともなくSWSPの放ったライフル弾が頭に命中する事は常識である。

この町に迷い込んできた阿呆か？ ちよろそうだ、勝てるかもしれないねえ。

そう思うからこそ、山賊や強盗が目の前に躍り出てくるのである。

なお、山甲町信用金庫に勤める人は知られる方が狙われるという可哀相な傾向がある。

それは日常的に現金を扱っているのに非武装と、犯罪者から見ればカモが葱を背負ってるに等しいからである。

ゆえに変装したり自家用車で営業に行ったり、なかには会社の内緒で武装する者も居る。

何でもない毎日を生きるのにも頭を使わねばならないのが、ここ山甲町なのである。

第28話

そんなある日の事。

「いかがですか、山甲町の住み心地は？」

「刺激的ですね。生活も訓練も何もかもが」

「じゃあ鎮守府より楽しいのかしら？」

「・・・良い刺激ばかりとは決して申しません。決して」

「あらー」

見渡す限りの海という外洋の只中で、ソロル鎮守府の龍田と向き合っているのは朝潮だった。

龍田は続けた。

「ええと、まず香取さん達の実力はどれくらいになったと思いますか？」

「艦装取扱いLVとしては50前後かと思います。ただし」

「ただ？」

「教育者としての実力は80ないし90台かと」

龍田は首を傾げた。

「・・・先生としての教育でも受けてるの？」

「いいえ。我々に今指導してくださいるのは神通社長ですが」

「・・・神武海運の？」

「ええ。神通社長は教え方が上手く、香取さんも鹿島さんもああなりたいと独学を続けておられます」

「んくそつかあ、ワルキューレは出てこなかったのねえ・・・残念」

「えっ？」

「なんでもないわよ。今は毎日神通さんと訓練の日々なの？」

「いいえ、アルバイトをしています」

「・・・お金足りなかったの？」

「いえ、神通社長が実地訓練の一環だと仰って、町内の皆様の買い物役を仰せつかっています」

「・・・何か身についた事があつた？」

「はい」

「具体的には？」

「私は銃をベレッタのM93Rに変えたのですが、とても扱いやすくて気に入ってます」

「どうして変えたの？」

「3点バースト射撃が出来、9mmの弾は武器屋で手に入れやすいんです。神通社長の推薦もありましたし」

「・・・現金輸送車でも襲撃するの？」

「違います！山道を通ると装甲を追加したジープで山賊に体当たりされるんです！」

「・・・は？」

「片手でハンドル操作しながらジープのタイヤを打ち抜くには9発では足りませんし」

「・・・」

「もたもたしていると車載の50calで狙われますし」

「・・・」

「かといってフルオートでは1回で数十発も撃ってしまうので、コストが高く赤字になってしまおうんです」

「えっとー」

「はい」

「どこまでお買い物に行ってるの？」

「隣町です」

「どうしてそんなコロンビア・カルテル同士の武力抗争みたいな事になってるの？」

「私が聞きたいです！買い物1つで車が蜂の巣にされるような銃撃戦になるなんて聞いてないです！」

涙目で拳を振る朝潮を前に龍田は首を傾げた。

確かに国内の治安の悪化は耳にした事がある。

だが、大本営や鎮守府の周りはもちろん、出かけた事がある都市部でもそんな酷い事にはなっていない。

場所によって多少異邦人を多く見かける程度だ。

更に龍田は町長やテッド、ワルキューレ等と移動していた為、山甲町の本来の姿を知らなかったのである。

「そうよねえ・・・ところで朝潮ちゃんは元々LV60だったでしょ〜」
「・・・はい」

「ここに來てから強くなったと思う〜?」

「艦装取扱いLV的には変わらないと思います。神通社長の訓練内容は過去にやったものですし・・・」

そう言いつつ朝潮は腕組みしつつ思案顔のまま、そちらを見向きもせず真横へと主砲を突然撃った。

龍田はチラリと着弾した方角を見た。

朝潮が放った弾がクリティカルポイントに直撃した後期型イ級が今まさに轟沈する所であった。

「さあ、どうでしょうか・・・陸戦なら幾つかコツを教えてくださいました
が・・・実感はあまり無いですね」

「お見事〜」

朝潮は一瞬龍田を見て何の事かと首を傾げたが、すぐに攻撃の事と気づいて小さく肩をすくめた。

「あれくらいいの殺気は感じられないとスラム街での銃撃戦で後れを取りますから・・・海原は遮蔽物が無いから楽ですね」

龍田は朝潮の変化をどう判断したら良いか迷っていた。

イ級とはいえ意外と厄介な後期型である。

そんな敵の方を見向きもせず正確にクリティカルポイントを撃ち抜くのはLV60の技ではない。

ケツコンカツコカリをしてLV100を突破した艦娘でもそうは居ない。

ただ、ソロル鎮守府の球磨や多摩もそういう事をやってのけるがLVはそう高くない。

龍田は気がついた。

そうだ。共通項があるじゃないか。

「朝潮さん」

「は〜」

「今度、うちの球磨さん達とお話してみませんか？」

「お話・・・ですか？」

「はいー」

「構いませんが、事前に日程を教えてくださいますか？」

「というところ？」

「出来ればテッドさんと神通社長には話を通しておきたいので」

龍田はくすつと笑った。

「なるほどね。ええ、解ったわ。じゃあ、そろそろ戻った方が良いでしょう。またね」

「はい。龍田様もお気をつけて！」

朝潮は龍田が見えなくなるまで敬礼したまま見送っていた。

その夜。

「はい・・・はい・・・かしまりました。ではお待ちしております」

通話を終えた香取が首をかしげていたので、鹿島はちよこちよこと近寄ってきた。

「香取姉え、どうしたんですか？」

「今の電話は龍田様からだったのですが」

「はい」

「明後日、ソロル鎮守府から球磨さんの艦隊がこちらにいらつしやるそうです」

「いよいよミツシヨンなんですか？」

「いいえ。それが・・・今の生活について話を聞きたいんだそうです」

鹿島はきよとんとした。

「お話・・・ですか？」

「ええ。ですから何故かしらと思つて」

「そうですよねえ・・・」

二人が腕組みをしていると、廊下の角から朝潮が歩いてきた。

「香取さん、鹿島さん、お風呂空きましたからどうぞ・・・どうかなさいましたか？」

鹿島が苦笑しながら答えた。

「ううん、ただ、明後日ソロル鎮守府から球磨さん達が来るって連絡が

あつただけけど」

「・・・依頼ですか？」

「話をしたいんですって。変わってるよねえ」

「明後日ですか。それでは神通社長やテッド様にも言わねばなりませんね」

「あー、まあ、全員でずっと居る必要も無いと思うし、交代で対応しても良いんじゃないかしら？」

「それでも、普段よりは対応が遅くなるかもしれせんから」

「それはそうね・・・じゃあ香取姉え、明日朝イチでテッドさんに電話しておこうよ」

「そうですね。今夜はもう遅いですからね」

「ありがとね朝潮ちゃん。じゃあお風呂入っちゃうね！行こつ香取姉え！」

「ええ。では朝潮さん、おやすみなさい」

「はい、お休みなさいませ」

朝潮は二人を見送ると小さく頷いた。

チーム内の士気は下がってないし、雰囲気も良い。町での生活もやっと慣れてきた。

神通社長の訓練は楽しいし、テッドさんは面倒見も良くて良い方です。

メンバーを観察し、分裂の危機に陥らぬよう適宜対処せよ

赴任前に龍田様から受けた命令は、どうやら果たさせているようです。

第29話

龍田から連絡を受けた翌日、香取達は早速テッドと神通に説明しに行った。

「それなら明日は休みにしちまえよ。こっちは任せな」

「積もる話もあるでしょうし、明日の練習はお休みにしましょう」

という訳で丸1日休みとなった。

ゆえに香取達はその日の仕事をこなしつつ手分けして食材を買い集めた。

そして当日は朝から調理を始め、もてなす準備をしながら到着を待っていたのである。

丁度昼を迎える頃、予定通り球磨達が到着した。

メンバーは球磨、多摩、菊月、皐月、睦月、そして如月であった。挨拶を交わした球磨達は早速広間に通された。

これだけの大人数となるとダイニングでは椅子が足りなかったのである。

広間にまつすぐ並べられた座卓には、それぞれ幾つもの料理が並べられていた。

「クマーっ！」

「うわあ、ごちそうだねー！」

「カーペットの上に直接お座り頂く形で申し訳ありません。御口に合えば良いのですけど・・・」

「ねえ、これ食べて良いのかな！」

「ええ、どうぞ」

「こら！頂きます位ちゃんと言うクマー！」

目を輝かせる一行を見て、香取達は安堵した表情で微笑んだ。

そして。

「お腹一杯だね！」

「うむ、とても美味しかった。すまぬが、これはどのような調味料を使っているのか教えてくれないか？」

「ええとですねー」

賑やかな雰囲気が続く中、球磨が朝潮の隣に腰を下ろした。

「今日は歓迎ありがとうだクマー」

「いえ、これくらい当然です。お気に召して頂けましたか？」

「充分クマ。ところで町に住む艦娘から訓練を受けてるって聞いたクマ」

「はい。神武海運の神通社長です」

「どんな訓練か教えて欲しいクマ」

「はい。ご説明します」

その夜。

「それで、どうでしたか？」

洋上で待つていた龍田は、挨拶もそこそこに戻ってきた球磨に尋ねた。

球磨は龍田から受け取ったハチミツ飴をぼいと口に放り込むと話し始めた。

「神通がやってる訓練はまともな基礎訓練だクマ。でも習わせる順番が上手いクマ」

「・・・」

「特殊能力の育成に貢献してるのは龍田の見立て通り買い物屋の方だクマ」

「・・・続けて」

「リスクフルな状況下で制限時間内にミッションを正しくこなし続ける、そういう訓練になってるクマ」

「・・・」

「荷物は割れ物や温度管理が必要で、リスクの種類も豊富、それらと遭遇するタイミングも不明」

「・・・」

「そんな事を毎日続ければ嫌でも神経が研ぎ澄まされるクマ。球磨や多摩が外人部隊で得たのと同じだクマ」

「・・・」

「これらは直接的にLV上げに貢献する訳ではないクマ。ただ、実戦

で生き残るのには役立つクマ」

「なるほどね。で、球磨さん」

「なんだクマ？」

「貴方や多摩さんから見て、真夜中のお仕事をするのに一人前って言えるかしら？」

「救助隊や討伐班の要員としてって事かクマ？んー」

球磨はハチミツ飴を口の中できちんと転がしながらしばらく考えていたが、

「仕上げに一旦鎮守府に呼び戻して、戦闘でLVを10位上げれば全員大丈夫だと思うクマ」

と、言った。

「なるほどねえ、そういう事かあ。それならそっちの方に特化しようかしら」

「こんなもんで良いかクマ？」

「・・・充分よ。報酬は後で部屋に持っていくわね。ありがと」

龍田達は静かにソロルへと帰って行った。

数日後。

「はい、かしこまりました。そのように致します」

電話を置いた香取は首を傾げた。

「メンバーを1人ずつ2ヶ月毎に入れ替えるって・・・こういう事かしら」

その日の午後、ワルキューレの事務所。

「ようナタリア」

「どうしたのよテッド。また面倒な依頼？」

「ちげーよ。ナタリアの読みはビンゴだったって話だ」

「あら、どの話？」

「香取達だが、来月からメンバーが2ヶ月毎に1人ずつ入れ替わるんだと」

「・・・はっはーん」

「な。龍田に発案者の神通に教育費寄せって言うてみるか」

「今後を考えれば買い物頼んで酷い目にあつた人達の補償をしてあげて欲しいわね」

「完全に訓練と見てるよな」

「ええ。鎮守府じゃ買い物屋みたいな類の訓練は難しいだろうし」

「LV以外にも役立つスキルがあるって気づいたんだらうなあ」

「とはいえ、あんまりソロルの連中がそっち方面で育つのは良い事じゃないわね」

「どういうこつた？」

「ますます突出して手のつけられない特殊部隊になるじゃない。出る杭はなんとやらよ」

「俺はむしろ所長の鎮守府の何処が普通か教えて欲しいね」

「・・・それもそうね」

同時刻、ソロル鎮守府。

「ふえつくしん！」

「お、お父さん大丈夫ですか？例の風邪じゃないですよね！」

「ただのくしやみだよ。きつと誰かが褒めてくれたんだよ」

「そうですか・・・それなら良いです」

「ところで、大山さんにはいつ会えるかな？」

「えつとですね・・・」

再びワルキューレの事務所。

「・・・寒気がする。所長がまたロクでもない事たくらんでるのか？」

「まあそれはそれとして、この件であまりライネス達に負担かけるのも迷惑よっ・・・」

「交代しちまうなら育てると言うライネスの気持ちに反するしな」

「別に龍田に付き合う事も無いでしょ。そろそろ訓練終わらせたら？」

「んー・・・」

テッドは腕を組んで少し考えていたが、

「・・・それもそうだな。ロハで身支度整えろと押し付けられた所からちよつと付き合い過ぎてるか」

「そう思うわよ。あれこれ起こされてるけど、元々何の義理も無い話

よ」

「つていうのをどう切り出すか、だな」

「それは神武海運と相談しなさいな。当事者なんだし」

「よしよし、おかげで考えがまとまった。サンキューな」

「こういう所から武蔵に相談してあげなさいよ」

「まあ今日は読みが当たってたぜって言う事を伝えたかったんだよ」

「次から龍田に対処する時は気をつけなさいよ」

「だな。あ、1つだけ確認だけだよ」

「なによ」

「SWSPの出張講座はまだする気あるか？」

「必要無いわよ。買い物屋で充分達成してるし」

「OK。じゃあ俺達の手助けはここでオシマイ、だ」

第30話

「えええっ!?!止めちゃうんですか?・・・はあ・・・そうですか・・・」
神通は目を丸くしてテッドを見返したあと、しゅんと肩を落としたのである。

「・・・ふーむ」

同席していた武蔵は頬杖をついて唸った後、続けた。

「まあソロールの連中の訓練を続けるのも、それによってライネス達にまた迷惑がかかるのも、なあ」

冷蔵庫からウーロン茶の缶を取り出した山城は、一口飲んだあと神通を見た。

「別に神通が朝練する部分はうちの勝手なんだから、続ければ良いんじゃない?」

俯いていた神通がぴよこつと顔を上げた。

「良いんですかテッドさん?」

テッドはさくりと葉巻の吸い口を切りながら答えた。

「朝練の部分か?別に構わねえが、神通一人でしんどくないか?」

神通はゆつくりと首を振った。

「あれくらいで音を上げてたら鎮守府の秘書艦なんて勤まりませんか」

「まあやりたきややつても良いが、念押ししとくと続ける義務は無いぜ?」

「・・・はい。私が仕事に支障をきたさない範囲で、私が続けたいと思う時点まで、ということですね」

「そういう事になる。あとはさ」

「はい」

「それこそ香取姉妹に少しずつバトンタッチしていきや大丈夫だろ」

神通は上目遣いにテッドを見た。

「いえ、あの、皆さんと訓練すると、私が楽しいんです」

「武蔵の読みは大正解だったわけだ。そういう事なら好きにしるよ」

武蔵はフンと息を吐いた。

「私が神通と何年一緒に居ると思ってるんだ」

神通は首を傾げた。

「でも、買い物物屋の方はどうしましょう？」

テッドが肩をすくめた。

「仕組みのうち、俺がやってたのは依頼の選別と金額交渉くらいだ」

「ええ・・・」

「金は依頼を受ける時にギャラ分含めて先に貰えばいいし、何を受けられるかは本人が一番良く解るだろうよ」

「・・・」

「ただ、今のまま自主運営すると条例に触れるとか言う奴が出るから、なんでも屋と名乗らせりゃいい」

「そっか、買い物物屋だとDeadlineDeliverersの迂回手段と誤解されるんですね」

「今はDeadlineDeliverersに慣れる為に似せた運用にしてたが、今後も続けるなら輸送に拘る必要はねえだろ」

「ですね」

「マネージメントや町の歩き方を後輩達に教える所はそれこそ香取姉妹に任せるさ」

「・・・まあ、そろそろ町の人とも顔馴染みになってますし、大丈夫ですかね」

「そう思うぜ。じゃあ話をまとめると、買い物物屋の方は辞めるか、なんでも屋に移行させる」

「続けるとしても自主運営になるんですね」

「ああ。で、神通は楽しみとして朝錬を当面は行う」

「はい」

「まあこれぐらいの変化なら香取達も面食らう事は無いだろ。これから説明に行くが、神通も来てくれるか？」

「ええ、その方が良さそうですし。武蔵さんも同席願えますか？」

「構わないが、何でだ？」

武蔵の問いに神通は深い溜息をついた後、ピツと人差し指を立て、

「テッドさんと二人になる機会を生かさないとどうするんですか。そんな事では(略)」

と、武蔵に噛んで含めるように15分ほど諭したという。

「そうですね。仰る通りだと思います。思えば随分長い間、沢山のご支援を賜りました」

「ん、理解してくれて助かるぜ」

神通と武蔵を連れたテッドは香取達の家を訪ねると、買い物屋の終了を告げた。

頷く香取の隣で利根は寂しそうに肩をすくめた。

「我輩は町の者と話せて楽しかったんだがのう・・・」

「ああいや、終了するのはDeadlineDelivers見習いとしての買い物屋と俺の口利きだけだ」

「ほう。その意味する所はなんじゃ?」

「香取達でなんでも屋を自主的に運営する事に俺は何も言わねえよ。見習い期間卒業ってこった」

「なるほど。確かにテッドが我々の訓練にいつまでも付き合う理由はないのう」

「すまねえけどな」

「何を言う。礼と詫びを言わねばならんのは我輩達じゃ」

「なんか謝ってもらおう事あったか?」

「我輩達の失態を代わりに謝ってくれたであろう」

「實力を見て差配するのは俺の仕事だからな」

「ならばお主の期待に応えられなかった、という意味で詫びねばなるまじ」

「誰だつて最初は初心者だ。出来ないままなら別だが、最近はやんと出来てるじゃねえか」

「あれだけ毎日こなせばの」

「で、そこまで出来るようになったのならもう大丈夫だろ。後輩の世話も含めてさ」

「うむ。町に来た直後にそう言われても泡を吹いていたであろうが、

今なら大丈夫じゃ」

「だからそろそろ俺は潮時って訳さ。ただまあ、別に喧嘩別れするわけじゃない」

「む？」

「困った事はとりあえず俺達に相談しろよ。直接解決してやれるかは解らねえけどさ」

「まさに遠くの親戚より近くの他人じゃな！」

「逆もあるかもしれねえがな。まあその時は頼むぜ」

「うむ。これだけ世話になったのだ。我輩達が力になれる事なら何でも相談に乗るぞ！」

「じゃ、皆でなんでも屋として続けるかどうか決めてくれ。続けるなら手続き諸々教えるからよ」

立ち上がるテッド達に続いて香取達が立ち上がった。

「色々ありがとうございます。鎮守府にも確認を取り、まとまりましたらご報告に伺います」

「頼んだぜ。じゃー！」

しかし、香取達はすぐになんでも屋を立ち上げられなかったのである。

第31話

数日後。

「そうか・・・」

「折角ご提案頂きましたのに申し訳ありません」

香取がテッドの事務所を訪ねてきて、鎮守府から許可が下りなかったと伝えたのである。

「いや、向こうも色々あるんだろうよ。ところで神通の朝錬も断るのか?」

「いえ、朝錬に関しては受けなさいと」

「ふーん・・・ところで依頼は来たのか?」

「そちらに関してはまだ何も・・・ですから日中どう過ごそうかと思案している所です」

「まあ今までは買い物屋で忙しくしてた時間だからなあ」

「ええ」

「とりあえずは骨休みしておけよ。いきなり忙しくなるかもしれないしよ」

「・・・そうですね。空回りしても仕方ありませんね。ではそろそろ失礼致します」

「おう、お疲れな」

・・・パタン。

事務所を去る香取を見送ると、テッドはジト目になった。
なんだろう。物凄く嫌な予感がする。

同じ頃。

「まったくもって許可しかねるな」

「なぜでしょうか?」

「警察の縄張りを軍が荒らしていると俺の上が気づいたらアンタが釈明してくれるのか?」

「・・・んー」

料亭の個室で向かい合っているのは警察署長と龍田だった。

署長は肩をすくめて続けた。

「海軍様が首を突っ込むべきは海の上だろ？うちの町の治安維持は俺達の仕事だ」

「ですが、艦娘や深海棲艦のお相手は辛くないですか？」

「大本営様は今も上陸した深海棲艦の存在を全否定してるのに、その為に来てるなんて知られたらマズくないか？」

「・・・」

「警察の治安が行き届いてない地区がある事は認めるが、それは警察の問題で軍の管轄ではない。違うか？」

「・・・」

「更によれば町の治安を悪化させてるのは密入国者の人間達だ。艦娘さん達が撃つちゃならん相手だろ？」

「お互い利益になるお話かと思っただけですけどね」

「そっちに何の利益がある？」

「ん・・・」

龍田は少し躊躇うように警察署長を眺めた後、溜息混じりに話し始めた。

「海上戦は地上戦に比べるとペースも遅いし攻撃精度も大まかなんですよ」

「そういうもんか」

「だから地上戦で勘を鍛えておけば、海上戦で大幅に有利な立場に立てるわけですよ」

「攻撃を避ける為に治安の悪い所をわざと歩かせるってか？」

「パトロールって事にすれば犯罪者も減らせて一挙両得じゃないですか」

「下手に引つ掻き回して密入国者どもが拠点を移せば調べ直すだけ手間が増えるだけだ」

「・・・」

「治安維持を目的としたパトロールは許可できん。そこは何度堂々巡りしても譲る気はない。ただ」

「・・・ただ？」

「治安の悪い所に誰かが迷い込むのは知った事じゃない。スラム街で何が起ころうと通報する奴も居ないしな」

「・・・それじゃ困るんですよ」

「なんでだよ」

「署長さんが仰った通りですよ。艦娘が人を合法的に撃てる名目が無くなるじゃないですか」

「おい、仮にパトロールを認めようと発砲なんて絶対に許可出来んぞ。それこそそつちの方が大問題だ」

「そうなんですか？」

「おいおい、この国で警察が発砲するのはやたらと許可があるんだよ。海原の海軍様と違ってな」

「・・・まあ私達も地上では兵装使えませんがね。表向きは」

「だからこの話はここでオシマイだ」

「でも」

「ん？」

「この町の警察さんは結構発砲してますよね？」

「さあな。暴発じゃないか？」

「両手で銃を構えて引き金を引いてる暴発ってあまり見かけませんか？ど〜？」

「知らんなあ」

「お写真もあるんですけど〜？」

龍田が見せたスマホの画面を一瞬見た署長はフンと鼻を鳴らした。

「その写真を表沙汰に出来るのか？まず最初に艦娘がやってはならん事をしてる写真に見えるがね」

龍田は途端に渋い顔になった。

確かに警官が両手で銃を構えて撃ってるが、その先に居るのは署長の言う通り艦娘である。

艦装を仕舞った艦娘が人間の荷物をひったくり、警官が制止させようとして銃を撃っている、という構図だ。

普通の警察ならこの状態の艦娘と人を容易に区別出来ないが、伊達に山甲町の警察をやってないという事か。

「それを切ればこっちは正当防衛を適用するし、その根拠として犯罪を犯す艦娘が居るって事も説明するぜ」

「・・・」

「そつちが火蓋を切るなら俺達も容赦しない。海軍が抜き差しならん大スキャンダルになろうとな」

「・・・」

「もう1度言う。警察の縄張りを軍が荒らすな。俺達の町の治安を更に悪化させる火種の持ち込みもお断りだ」

「・・・」

「話は終わりだ。俺は帰るぜ」

・・・トン。

警察署長が部屋を出て行くと、龍田は肩をすくめた。

「んー、テッドさんの買い物屋演習はこういう問題を上手に避けてたつて事かあ・・・失敗したなあ・・・」

とつくりからコココとぬるくなった日本酒を注ぎながら呟く。

「パトロールなら多人数同時に、日がな一日スラム街で戦闘に明け暮れても怪しまれないと思っただけど・・・」

お猪口からクイと酒を飲み干すと、龍田はそつと額を叩いた。

「鎮守府で拡大解釈しすぎた、か。じゃあ元の案で少しずつやるしかないわね〜」

龍田は立ち上がると、署長が座っていた座布団を見てくすつと笑った。

普段、あまり言い負かされる事の無い龍田だが、あの署長との戦績は負け越している。

だが、署長とヒリヒリするような交渉を重ねると他の人と論ずるのがとても簡単に思えてくる。

「私にとっての署長が、あの子達にとってのスラム街って事よね・・・さて、軌道修正しなきゃ〜」

そう呟くと、龍田はそつと部屋を出て行った。

第32話

そんなある日の事。

「やあやあ久しぶり。元気そうだね。ちよつと日に焼けた？」

「・・・」

「・・・大・・・あ、いやいや、テッドさん？」

「・・・で」

「で？」

「でっ・・・でっ・・・出たああああああ！」

「!？」

ひっくり返るほどの勢いで自席から後ろに飛びのき、テッドは背後の壁にビタリと張り付いた。

「よう、なんかあったのか？」

雑誌とお菓子を買い込んだミストレルは、テッド仲介所の前に出来た人だかりの1人に声をかけた。

「いや、俺達も良く解んねえんだけどよ、なんかテッドの悲鳴が聞こえたらしいんだよ」

「はあ？助けにいかねーのかよ」

「あそこにいるSWSPの連中は入ったらしいけど、大丈夫だからって追い出されたらしい」

「・・・どういうこっちゃ」

「俺もそれしか知らねえんだ」

「ふーん、サンキューな」

「おう」

ミストレルは指差されたSWSPの一人に声をかけた。

「よつ、中はどうなってるんだ？」

「およ？みっちゃんも野次馬かい？」

「つーか、テッドのトラブルなら助太刀しようかと思ってさ」

「あたいらもそう思ったんだけどさ、海軍の頃の上司が訪ねてきただけだって言われちゃってね」

「今、中には誰が居るんだ？」

「神武海運全員とテッド、海軍の方は3人だ。一人は司令官の格好してたからそいつじゃない？」

「まあ、それだけ居りゃテッドは安全か」

「周囲はうちのツヴァイ班が見張ってるけど、特に異常は無いみたい」

「そつか。なら何でお前らここに居るんだよ」

「なーんか妙な雰囲気だったからさー」

「妙？」

「海軍の方はすんげー親しそうなのにテッドは真っ青だったんだよねー」

「・・・訳わかんねーな」

「うん」

ミストレルは買い物袋からプチシューの袋を取り出した。

「食うか？」

「おっ、新発売の夕張メロン味じゃん。もらうもらうー」

袋を手渡すと、ミストレルはテッド仲介所のドアの方を見た。

マズい展開になったとして、どこから突入すりゃ良い？

一方。

テッドの事務所の中で、提督は小さくソファに座りなおすと、そつと話し始めた。

「いや、何度も言うけどね、今まで色々世話になってるみたいだから一言札を言いたくて来ただけなんだったば」

「・・・」

「そこまで睨まないでくれると嬉しいなあ・・・」

「・・・」

その時、ずっと提督の隣で黙っていた長門が口を開いた。

「これが日頃の行いの悪さというものだぞ、提督」

「えー・・・」

真っ青な顔で机の陰から提督を睨んでいたテッドは、長門の言葉にコクコクと何度も頷いた。

長門は続けた。

「事ある毎に復職はいつだのなんだのと言ったそうではないか」
コクコクコク。

「あーいや、テッドさんの分析力が優秀なのは事実だし、今の117研は腑抜けになってるからさ・・ちよつとはね」

ブルブルブルブル。

「それで本当の用向きさえ疑われるほど警戒されては本末転倒ではないか」

・・・ジーツ。

テッドはこの3人ではまだ長門は信用出来そうだと内心思っていた。

だが神武海運の面々はいつでも攻撃出来る態勢を崩さず、びっしびしに緊張したまま警戒を解かなかった。

そんな様子を見て、提督を挟んで反対側に座っていた龍田は小さく肩をすくめた。

「えつと・・その辺に関しては私もネタにした所があるから私のせいでもあるわねえ・・」

提督は龍田に振り返った。

「ん？ そうなの龍田さん？」

「まあ用件を切り出す為の軽いジャブみたいな意味が半分くらいだったんだけど・・」

「残り半分は？」

「・・名誉会長にしろ、ヴェールヌイ相談役にしろ、今の117研にほんと失望してるのよねえ」

テッドがそつと口を開いた。

「やっぱり二人とも半分本気じゃねえか」

提督と龍田は同時に頭を掻いた。

「そりやまあ優秀な人材は喉から手が出るほど欲しいし・・」

「まあ半分冗談だから」

テッドはビシリと龍田を指差した。

「意味は一緒じゃねーか！ 割合が変わらない分、朝三暮四よりひでーじゃねーか！」

「でも、テッドさんが本気で大本営に帰りたくないって事は解ったし、この仕組みが代替案なのも本当よ」

「・・・それだけだよ」

「なにかしら?」

「本当に、あいつらだけで鎮守府を調べられると思ってるのか?」

「どういう事ですか?」

「練習巡洋艦2、駆逐艦1、重巡2だぞ?どうやって偵察するんだよ」

テッドの言葉に頷いた武蔵が続けた。

「正面切るなら正規空母か戦艦は必要だし、密偵なら潜水艦か工作艦が必要だ。それらが一切居ないではないか」

提督は頷いた。

「なるほど。確かにもつともな指摘だけど、その辺どうですか龍田さん」

龍田は微笑んだままテッドを見返した。

「・・・別にあの子達を捨て駒にする意図は無いわよ」

「・・・」

「偵察ミッションを遂行する際は、続行か撤退か非常に微妙な判断の連続になるでしょう」

「まあな」

「だからそれらの情報を最初に得る目や耳となる子がハンドリングするのが一番良い」

「・・・」

「とはいえ、手足となって働いてくれる子達も一定以上のスキルは要る」

「・・・」

「だからハンドリングは鎮守府に居る高錬度の子達が行い、ここの子達の実働部隊としてアシストする」

「・・・」

「香取さんと鹿島さんはそうした子達を教育する専属教官を目指して欲しいからミッションには出さない」

「・・・」

「一方で町に負担とならないよう順番に少しずつ育成していくつもり。これで説明になったかしら？」

テッドはじつと聞いていたが、小さく首を傾げた。

「一見正論っぽいけど、目的は他にもあるだろ？」

「あらあ、たとえばどんな事？」

「Deadline Delivers の実力測定、たとえば高錬度の深海棲艦達の、な」

龍田が微笑むのを止め、薄く目を開けて見返した。

「仕方ないわねえ・・・」

長門が口を開いた。

「そうなの？龍田」

龍田は諦めたように溜息をつくと肩をすくめた。

「提督がここに来たがってるのは知ってたから、誰かに襲撃された際に町としての反撃力を知りたかったのよ」

だがテッドはジト目のまま答えた。

「それはこの間、旧コンテナ埠頭の一件で解つただろ？どうして続けてるんだよ・・・」

龍田の目元がピクリと動き、声がより低くなった。

「こういう時が「君のような勘のいいガキは嫌いだよ」って言いたくなる訳ね・・・よく解つたわあ」

第33話

龍田に睨まれると、テッドはさらに机に隠れるように身を縮めた。

「う、うるせーよ。凶星なんだろう？」

長門が肩をすくめた。

「小出しにせず、白状してしまっただらどうだ？これだけ協力関係にあるんだ、腹を割っても良いではないか」

神通はずっと目を瞑っていたが、この時ちらりと長門の方を見た。

少なくとも、この長門は演技を上手にする手合いではない。龍田よりは信用出来るだろう。

それでも100%龍田に騙されている可能性はある。油断は出来ない。

提督は肩をすくめた。

「教えてくれないか、龍田さん」

龍田はしばらく嫌そうにしていたが、渋々口を開いた。

「…この間の件でも詳細が明らかに出来なかったのがワルキューレと夕島整備工場で、前から予測してたの」

「…」

「この町は凄く繊細なバランスの上に建ってる。私達も利用してきたから批判するつもりはないけど事実でしょ」

「…」

「一方では深海棲艦、それも地上組から零細軍閥まで幅広く密接に繋がってる」

「…」

「片や私達のような鎮守府や大本営はおろか、人間社会にも密接な関係を持つてる」

「…」

「バランスを壊すつもりは無いけどリスクはヘッジしておきたい。だから全員の素性を押さえておきたかったのよ」

「…だからワルキューレに俺が出向いて説得するよう、トーシロを送

り込んだんだな？」

「そうよ。ついでに言えばやや貧弱な兵装を装備させたのも夕島整備工場を訪ねさせる為、よ」

「偵察ミツシヨンそのものは本当にやらせる気があるのか？」

「あるわよ。常備軍を備えたいのも本当」

「で、その目的は達成出来たのかよ」

「いいえ。神通さんが予想以上に素敵な訓練を考えついでに、どちらの出番も無くなってしまったわ」

提督は眉をひそめて龍田の方を向いた。

「龍田、そういう言い方は良くないだろう」

「はぁーい・・ごめんなさーい。でもそれが本音。これで全部よ」

山城が腕を組んだまま口を開いた。

「そもそも何のリスクをヘッジしたかったの？」

「1つは情報の漏洩、もう1つは襲撃される可能性よ」

「ワルキューレに上位組織がいるかって事？」

「横でも良いけどね」

「あれだけ好き勝手やってる連中に上がいるとは思えないわね」

テツドが頷いた。

「ワルキューレはこの町の最初期から居て、ずっとこの町を育ててきた。その理由も知ってる。裏とは通じてねえよ」

「・・理由とやらを教えてもらえるかしら？」

「この町がこうなったのは、恩の連鎖なんだよ」

「恩？」

「ああ。元々町長の娘がアメリカで重病になったが、手術に必要な薬を届けたのがナタリアだった」

「・・」

「ナタリアが運んでくれた事に恩を感じた町長は警察に手を回して深海棲艦の取り締まりを止めさせた」

「・・」

「その事に恩を感じたナタリア達は深海棲艦達をとりまとめつつ、地上で働いて生きる道を選んだ」

「・・・」

「深海棲艦達は迫害しない町と統率してくれるナタリアに深い恩義を感じてる」

「・・・」

「だが、一時期この町に居た艦娘達が統率の取れた深海棲艦達の仕事をぶりを妬んだ」

「・・・」

「艦娘達が仕掛けた戦いで深海棲艦の町はほとんど壊滅した。その生き残りがワルキューレとSWSPだ」

「それは・・・いえ、いいわ」

「俺はその頃この街にやってきた。そして復興の為に深海棲艦にも艦娘にも平等な機会を与えた」

「仲介業でね」

「で、俺があちこち営業に回り続けてやっと今の需要を掘り起こした」
「・・・」

「今の依頼量があればこの町のDeadline Deliverersは食っていける。そうすれば周辺産業も生きていける」

「・・・夕島整備工場のような、ね」

「そうだ。だからこの町を維持する為にワルキューレは、ナタリアは動いてるんだよ」

龍驤は小さく頷いた。

「うちらがこの町に来た時には既に仕組みは出来とってなあ、本気でたまげたもんや」

山城が頷いた。

「深海棲艦は本土には上陸してないというのが私達の教えられてた情報だったからね」

「そうや。それがどうや、深海棲艦が人と一緒に真面目に働いとるんやで。そりゃがくーっと落ち込んだもんや」

「何の為に戦ってたのかしらってね」

提督は頷いた。

「・・・まあ、大本営の中でもこの事実を知ってる人はかなり限られるか

らね」

テッドは首を振った。

「だからよ龍田、少なくともワルキューレは信じて良いと思うぜ。この町の為に本当に尽くしてきたんだからよ」

龍田が眉をひそめて頬杖をついたので、山城が声をかけた。

「そもそもどうして疑ったのよ」

上目遣いに龍田は山城を見返すと、ぼそぼそと答えた。

「この町にしか流して無い情報を、大本営の連中が知ってたのよ・・・」
「えっ」

「内容そのものに意味は無いの。漏洩テスト用の情報だったしね」

「そんなテストしてんのかよ」

「当たり前でしょ。取引先全てに対して定期的に行ってるわ」

「で、うちに流したのが大本営に漏れてるってか」

「ええ。そして割と早く他の鎮守府にも回ってる」

「・・・」

「ノイズ交じりで不正確な噂として漏れるならともかく、正確に、それも早く漏れてる。内通者が居るわ」

「・・・」

「提督にしろテッドさんにしろ、海軍内で逆恨みしてる連中はまだまだ居る」

「・・・」

「提督が安全に行き来する為には正確な情報の漏洩はリスクで、出来ればヘッジしたい。だからこそ調べてるの」

テッドは首を傾げた。

「しっかし、この町で大本営に情報流して得する奴なんていねーぞ?」

龍田は首を振った。

「流れてるのは間違いないわ。理由があろうと無かろうと、よ」

提督は頭を掻いた。

「情報を流してるか、流す事に加担してしまってる何者かを特定するとすれば、狐狩りしかないけど・・・」

武蔵は首を振った。

「互いに疑心暗鬼になってしまいうぞ。それではこの町の仕組みそのものが崩れてしまう」

龍田は溜息をついた。

「だから困ってるの。正直、手詰まりよ」

神通が口を開いた。

「当初の計画では、ワルキューレさんと夕島整備工場さんを調べるつもりだったんですよ」

「そうよ。香取さん達に幾つか情報を喋ってもらって、どれが聞こえてくるか調べるつもりだったの」

「それを広範囲にやってみたら良いんじゃないですか？」

「どうやって？」

「今までやっていて、買い物屋さんを再開して貰うんです」

「・・・あー」

「品物の授受の際、必ず依頼人と顔を合わせます。その時に噂話として話してもらうんですよ」

「調査対象から注文が都合よく入ってくるか微妙だけど」

「逆を言えば、そこを細工しなければ、相手は疑われないと思います」

「そうね。頼んだのは自分だからね」

第34話

神通の提案に提督は頷いた。

「うん。話してもらおう内容を依頼人ごとに変えておけば見つけやすいかな」

龍田は眉をひそめて考えていたが、提督に続いて答えた。

「そうねえ・・・波風立てずにやるにはそれしかないかなあ・・・」

テッドは肩をすくめた。

「じゃあ香取達の初仕事か。卒業試験みたいなもんだと誤魔化しや行けるだろ」

提督達が一齐にテッドを見た。

「な、なんだよ」

神通が呟いた。

「・・・そうですね。案件の程度を考えても、卒業試験にふさわしいかもしません」

龍田が頷いた。

「それほど危険もなく、勝手知ったる町で、今まで通り動けば疑われないうし〜」

山城が顎に手をやった。

「ローリスクの割に実践ノウハウはそこそこ集まるし、悪く無いわね」
提督が龍田に話しかけた。

「内々の依頼として、テッドさんと神武海運の皆さんに手伝ってもらおうよ。それでダメなら別の手を考えれば良い」

神通が腕を組んだ。

「ただ、香取さん達への頼み方が難しいですね・・・」

龍驤が肩をすくめた。

「せやな。試験やからて気合入れて目えキラキラさせとれば一発で見抜かれるで?」

武蔵も頷いた。

「丸つきり知らせねば試験にならないが、普通に知らせれば多分町の

者に気取られて失敗するだろう」

時雨がふと顔を上げた。

「じゃあ噂の流布を試験としたらどうかな？」

大和が時雨に返した。

「噂の流布、ですか？」

「うん。集団に対する情報操作の部分が調査スキルとして必要だから卒業試験とするんだよね」

「ですね」

「なら、覆面試験官が確かめるから、どこどこにこういう情報を広めなさいって試験だと伝えればどうかな」

扶桑が頷いた。

「なるほど。私達は流した情報のどれが漏れ聞こえてくるかを知りたいけれど・・・」

山城が続けた。

「そこまで言う背景まで説明しなければならず、そこが街の中に漏れば互いに疑心暗鬼になる」

「でも噂を流すという試験なら、試験内容が漏れたとしても別に害は無いですね」

長門が頷いた。

「大本営にどの話が聞こえているかは我々が内々に調べれば良い話だ。なかなか良い案ではないか？」

龍田は何度か頷きつつ口を開いた。

「そうねえ、じゃあテッドさんを怖がらせちゃったお詫びに、これは正式な依頼として出すわね」

テッドは肩をすくめた。

「まあ、輸送任務じゃねえが神武海運向けの依頼だからな。仲介させてもらうぜ」

「お幾らかしら〜？」

テッドは武蔵と小声で二言三言交わしてから電卓を叩いて見せた。

「こんなもんだな」

龍田は眉をひくつかせながらジト目になった。

「・・・人が値下げ交渉しづらい時に限って吹っかけてくるわね」

「それが俺の今の仕事なんぞな」

「もう少し嘯ませてやろうかしら・・・」

「何か言ったか？」

「何でもないわゝ、じゃあ聞こえてくるまでお願いねゝ」

「ぐっ・・・この手の依頼で成功確約かよ」

「今回は漏れてる事は解ってるから、突き止めるのが依頼なんぞゝ」

「しかたねえ、依頼状況によつては結論が出るまで長期化する事は諦めてくれよう？」

「それはそうでしょうねえ。まあ提督が次に来られるようになるのが延びるだけだしゝ」

提督が龍田の方を向いた。

「えっそうなの？」

「漏れたまま何度も来たら危ないでしょゝ？」

提督はテッドに向き直った。

「テッドさん早く解決してください！」

テッドは肩をすくめ、武蔵に向かって小声で呟いた。

「なんつーかさ、俺にとつては迷宮入りの方が良いんじゃないかねえかって今ちよつと思つた・・・」

ジト目で頷きあうテッドと武蔵に、提督はパタパタと手を振つた。

「ちよつ！そんな事言わないでよゝ」

「どうも解決した方が俺は余計面倒を抱え込む気がすんだよなあ・・・」

「いやいや！いやいや！そんな事は無い！そんな事は無いですよ！」

テッドはジト目で提督を見た。

「じゃ、所長がこの町に来るメリットは？」

「楽しくお話が出来る！」

「・・・所長がでしょ？」

「うっ・・・ええと・・・」

滝のように冷や汗をかく提督の隣で龍田が静かに呟いた。

「情報が漏れないというのがこの町のプレミアムだつて事・・・忘れて無いわよね、テッドさん？」

「ぐ」

「その信頼に傷がつき、放置するようなら、今までみたいには頼めない事が出てきちゃうけど？」

「む・・むむ・・」

「そうしたら軍からの依頼が減って町が不景気になっちゃわないかしら？」

「むうう・・そういわれると・・仕方ねえ・・のか？・・うーん」

あつという間に旗色が悪くなるテツドの様子を見て神通は思った。

やはりこの3人の中ではダントツに龍田が悪どいな、と。

龍田は記入した小切手をテツドに手渡しながら言った。

「じゃあよろしくね〜・・あと、テツドさんが先に表に出てくれないかなあ」

「何でだよ」

「テツドさんが無事だった事が解らないと私達蜂の巣にされそうだし」

「？」

テツドはひよいと窓越しに外を見て納得したように頷くと、

「あー・・そもそもおめーらがいきなり来るからじゃねーか：全く・・」

そう、ぶつぶつ言いながらドアを開けると、

「おーい！俺はピンピンしてるし、客人はもう帰るから！大丈夫だ！心配ありがとよー！」

と怒鳴ると、ようやく通りの群集が解散し始めた。

提督が戸口のテツドの方を向いた。

「えっ？あれっ？夕食一緒に食べようかと思ってたんだけど？テツドさん？」

テツドがジト目で振り返った。

「丁重にお断りいたします。さ、お帰りはこちらで」

「えー」

長門はさっと立ちつつ渋る提督の手を取ると、
「この場は引く方が後々の為だぞ。テツド殿、神武海運の皆、すまないがよろしく頼む」

そう言つて一礼すると提督を引つ張つて事務所を出て行つた。

龍田は二人の後を面白そうに目を細めてついていきつつ、テッドとすれ違いざま、

「進捗報告はいつもの通り、テッドさんから私宛にお願いするわね」と、囁いたのである。

第35話

・・・バタン。

事務所のドアが閉まり、3人が居なくなると、事務所内の空気が和らいだ。

テツドは額の汗を拭いながら神通達に話しかけた。

「や、や、本当に助かったぜ。ありがとうな。今度メシ奢るぜ」

山城がにやりと笑った。

「それなら全員揃ってるんだし、これから食べに行きましょうよ」

「んー？今日は別に用事もねえし構わねえけど、どこ行くんだ？」

武蔵が眉をひそめた。

「ここから近いのは蕎・・・むぐぐぐ！」

武蔵の口を手で塞ぎながら大和が答えた。

「近衛屋さんに行きましょう！」

テツドと神通が首を傾げた。

「近衛屋？知らねえなあ・・・」

「どこにあるんですか？」

龍驤がチツチツチと指を振った。

「あかんなあ二人ともお、今日オープンした焼肉屋やで？」

「へー、まあ大勢で肉食うのも良いか」

大和は武蔵の背中をぐいぐいと押した。

「ほら、そうと決まったら早く行きましょ！ほら！」

「な、き、急になんですか姉上!?!姉上!?!」

そして。

8人だと告げた龍驤に、店内を確認した店員は困り顔で答えた。

「すみません。テーブルが分かれてしまおうのですが、よろしいですか？」

「かめへんかめへん。どこや？」

「4人がけテーブル2つか、6名様と2名様テーブルのどちらか・・・」

龍驤は一応大和達に振り向いたが、大和達の「当然でしょ」という視線に頷くと、

「ほなそつちいこか！」

と行ってスタスタ歩き出したのである。

「・・・な、なぜこつちを選んだんだ・・・龍驤」
龍驤はムフツと笑いながら答えた。

「大人数で来る組み合わせは少ないやろ？」

山城はしたり顔で頷いた。

「オープン初日なんだし、客の方から店に協力してあげないとね」

武蔵はがたりと立ち上がり、山城達を指差した。

「絶対嘘だ！こつちを見て楽しむつもりだろ！」
そう。

龍驤はあっさり6人掛けと2人掛けの組み合わせを選択した。

2人掛けのテーブルは奥の隅であり、店内とは神通達の座る6人掛けテーブルで仕切られる形であった。

それを確認した神通達は武蔵とテッドを追い抜くようにすばやく6人掛けへと着席。

6人は仲良く注文を選ぶような会話をしつつチラチラと2人掛けテーブルに視線を送ってくる。

その時になって初めて、テッドと武蔵は龍驤達の狙いに気づいたが時既に遅し、である。

武蔵の向かいに座り、おしぼりで手を拭きつつ、テッドは肩をすくめた。

「ま、しゃあねえよ武蔵。折角だし好きな物食おうぜ。何が良い？」

武蔵は龍驤をもう1度殺意の籠った視線でひと睨みし、フンと鼻を鳴らすと答えた。

「まったく。ああ、ええと、ロースとカルビがあれば嬉しいな」

「ホルモン系は？」

「わざわざ頼むほどではないが・・・テッドは好きか？」

「いや、焼肉好きから言わせると勿体無えらしいけどよ、俺もロースとカルビが好きなんだよ」

「全く問題ないじゃないか。外野は好きに言わせとけば良い」

「なら、ロースとカルビ食べ放題セットと・・・野菜盛り合わせも頼むか。」

飲み物どうする？俺は酒行くけど」

「私はウーロン茶が良い」

「お、ウーロン茶に大ジョッキサイズってのがあるぜ？」

「じゃあそれを。あと、ライスが欲しい」

「特盛、大、中、小どれだ？」

「特盛で」

「漬物は？」

「白菜の浅漬けはないか？」

「・・・多分これじゃねえか？」

テツドの指示した写真をじっとみた武蔵は

「・・・かな。ではそれを」

テツドは頷くと神通達に声をかけた。

「よし。おーい、そっちは任せて良いか？」

龍驤が頷いた。

「ええよ。こっちは適当に始めとるし、気にせんときやー」

「早いな。そっちは何頼んだんだ？」

「オールホルモンセットやで？適当に焼いといてじゃんけんで順番に

箸をつけるんやー！」

「お、おう、なんか最初から罰ゲームみたいだな・・・」

「何言うてんねや。普通に食うたかてオモロないやんか」

時雨と扶桑が早くも青い顔になっているのを見て、テツドは囁いた。

「・・・なあ武蔵」

「ああ」

「俺、こっちのテーブルで良かったぜ」

「私もそう思う」

「じゃあ頼むか。コールボタンは・・・これか」

「お待ちせ致しましたあ、カルローモリモリ食い放題コースですー！」

「おっ、来た来た。真ん中に置いてくれ」

「はーい！えっと、お時間は90分で、このタイマーが鳴ったらラストオーダーですー」

「ん。解った」

「肉のお代わりは皿が空いてからでお願いしまーす。炭と網はこちらで適宜交換しますんで!」

「OK OK」

「後は野菜盛り合わせと、お漬物と、あと・・・特ライスでーす!」

「絵に書いたような・・・てんこ盛りのどんぶり飯だな・・・」

「国産コシヒカリをガスで炊いてるんでウマいつすよ! みっちりよそつときましたー!」

店員が目の前にライスを置こうとしたのでテッドが遮った。

「あ、違う違う。メシは向こうだ」

店員は武蔵のほうを振り向き、目を見開いた。

「えっ?・・・と、特盛で良かったですか? 今なら小さいのに変えられますけど?」

武蔵は肉を網に載せる手を止め、ひよいと丼を受け取ると首を振った。

「いや。お代わりは出来るのか?」

「へっ? あ、いや、お代わりは無いです。追加注文に：なりますけど：?」

「そうか。解った」

呆然とする店員にテッドが告げた。

「大丈夫。大丈夫だから。で、他に注意事項あるか?」

「え? あ、えーと、た、タレはこっちから、ゆず塩、オリジナル、ピリ辛になります」

「おう」

「取り皿がこちらで・・・あ、レモンハイは・・・」

「俺だ」

「ではウーロン茶はこちらに置きますねー」

「ああ」

「ではごゆっ・・・く・・・り・・・」

どうして店員が言葉に詰まったかというのと、武蔵が手に持つ丼のライスが明らかに減っていたからである。

武蔵はちらと店員を見返したが、気にせずテッドに告げた。

「そのエリアのロースはもう大丈夫だぞ」

テッドは箸を取ると武蔵ににこりと笑った。

「サンキュー・・・あ、兄ちゃんありがとな」

「は、はい、ご、御用の際はコールボタン押してください・・・」

第36話

食べ始めてから30分が過ぎた頃。

テッド達と龍驤達のテーブルの間にやってきた店長が恐縮した様子で告げた。

「あの、お客様・・・」

「そのロースいけるぜ・・・あ、おう。なんだ？」

「大変恐縮なのですが、まだまだ召し上がれますか？」

テッドは隣のテーブルを含め、皆の様子を一瞬見てから頷いた。

「そろそろ折り返しして感じかなあ・・・ピークは過ぎてると思うぜ？」

「よろしければ1度にお持ちする量を2セット分ずつにしたいのですが、大丈夫でしょうか？」

「あー・・・そうだよな・・・しよっちゆう来て貰ってるもんな・・・」

「すみません・・・いかんせん他のお客様にも滞りなく対応せねばなりませんので・・・」

そう。

テッドは慣れてしまっているが、メンバーにはまず大和と武蔵が居る。

二人ほどでは無いが、扶桑と山城も居る。

この4人がそれぞれ大皿に盛られた肉を次々と消費していく。

つまり置いたそばからお代わりを頼まれるので店員がこの2テーブルにかかりつきりになっていたのである。

ちなみにテッドは酒が入ってる事もあり、小食と言われる時雨とほぼ似たような量である。

テッドはすまなさそうに頭をかいた。

「や、そっちが構わねえなら3セットでも4セットでも盛って良いぞ？協力するぜ」

店長は頭を下げた。

「助かります。では4セットずつお持ちしますので減らす時は仰ってください・・・あ、ライス追加ですか？」

武蔵が丼を差し出しつつ良い笑顔で領いた。

「うむ。このご飯は本当に美味しいな！素晴らしい！」

「ありがとうございます。それでは少々お待ち下さい」

ズシツ。

「おお・・・壮観だなあ」

テッドが肉が山積みになされた大皿を見て眩くと、店員も領いた。

「ご協力ありがとうございます。俺も色々な店で働いてきましたけど、こんなの正直初めてっス・・・」

「だよな」

「あ、えと、ライス特盛です」

「うむ」

「あとそろそろ・・・炭と網替えちやいますか？」

「おっ助かる。ありがとな」

「よっ・・・と。ではごゆっくりどうぞー」

店員が去るとテッドはひよいひよいと新しい網に肉を乗せつつ武蔵に話しかけた。

「網のこつち半分がコースで良いか？」

「ああ。テッドは取れるか？」

「おう、心配するな」

「では私はカルビを焼いて行こう」

網の上の肉をひっくり返しつつ、テッドは続けた。

「・・・それにしてもさあ」

「どうした？」

「武蔵はあの件、どこだと思う？」

武蔵は肉を乗せる手を止めると、炭火を見ながらしばらく黙した。時折肉から垂れる油が炭にかかり、ぼうつと炎を上げている。

「・・・誰であれ、あまり良い話ではないからな」

「それもあるんだけどよ、俺はどうにもしつくりこねえんだよ」

「どういう事だ？」

「この町の連中はさ、多かれ少なかれ海軍に文句の1つや2つは抱えてるだろっ・・・」

「だろうな」

「その海軍にわざわざ何か言うかと思つてよ・・・」

「そうだな。ただ、龍田が嘘をついてるとは考えにくい」

「ああ。あれがお芝居なら天下の名女優だ」

「それか、超一流の詐欺師だな」

「違えねえ。そうか・・・やっぱり武蔵の方も心当たりはねえか」

「無いな」

「どうしたもんかなあ」

二人で黙つて考えていると、隣から声が飛んできた。

「そんなに眉間に皺を寄せてたらお肉がまぶしくなっちゃうわよ?」

「姉上・・・」

「折角の焼肉デートなんだから、もうちよつと楽しい話題をしなさいな」

途端に武蔵の顔が真っ赤になる。

「やっ!? ややや焼肉デート!」

時雨が俯き加減に頬を染めて言った。

「あ、あの、焼肉を食べに来るカップルつて、その、随分親密になつた証拠だつて言うけど、どうなのかな・・・」

龍驤が首を振つた。

「通説ではそう言うんやけどなあ、残念ながらハズレやろなあ」

「どうして言い切れるんだい?」

「ほな考えてみい? うちの誰かは四六時中武蔵と会うとるやろ? しかも家は会社内の寮や」

「そう、だね・・・」

「そんな状態でどうやってテッドと乳繰り合うっちゅーねん」

ぶふっ!

龍驤の一言の直後、同時に咳き込んだ武蔵とテッドをジト目で見つめ山城は言った。

「そうねえ、たかがこの程度であんな反応してるんじや、間違いなくおぼこよねえ・・・」

「せやせや。折角あれこれ理由つけて二人にしとるんやし、はよ

せえつてな・・・」

武蔵がぐぐぐつと拳を握り締めながら二人を睨んだ。

「勝手放題言ってくれるではないか・・・」

山城は箸の先を軽く噛んだまま、横目で武蔵を見返した。

「違うなら違うって言えば良いでしょ」

「ぐー」

大和は肩をすくめた。

「自ら認めましたね・・・まったく奥手にも程があります」

「あつ・・・あああ姉上まで何を言ってるんですか！普通こういう時は止めるものじゃないんですか!？」

「それは進み過ぎる場合です。貴方達は止まっているのかと思うくらいの速度じゃないですか」

大和の言葉に何度も頷く神通・山城・龍驤、そして時雨。

「そつ、そんな事を言われても・・・その、わ、私もどうして・・・良いか・・・美味しそうにハラミを飲み込んだ扶桑が言った。

「いつそテッドさん家で同棲なさってはどうですか？」

武蔵がぎよつとした顔で扶桑を見返した。

「んはあつ!?!ぎぎぎぎ、ぎぎぎ、艦装の整備とか合同訓練とか、そつ、そもそも仕事はどうする!？」

「そういうご用事がある時だけ事務所にお越しくだされれば良いかと思えますよ」

「しっしっしっかし、しやしや社員なんだからその、あ、あれだ：：出社!：：そう!：：出社しないわけには!：」

「テッドさんの家に住み、必要ある時だけ出社頂くという事で問題ありますか?：時雨さん」

「んー・・・」

時雨は真面目に考え始め、それを武蔵は祈るような目で見ていたが、

「別に行方不明になる訳じゃないし、必要ならテッドさんの事務所に
行けば良いだけだよね」

扶桑は頷いた。

「ええ」

武蔵は無言でバタバタと首を振り、ダメだダメだとアピールしていたが、

「うん、別に良いんじゃないかな・元々テッドさんの窓口役が主な仕事なんだし」

と言ったので、武蔵はがくりと肩を落とした。

テッドはグラスのレモンハイをちびりと飲んで答えた。

「1つ確認して良いか、時雨ちゃん」

「いいよ、何でも聞いてよ」

「うちの家に武蔵が来た場合、22時から夜明けまで出入り禁止になるが、良いか？」

「えっ？どうしてだい？」

「前にも言ったけどさ、SWSPの保障絡みだよ」

そう。

テッドを狙う殺し屋は今尚たまに現れており、SWSPがずっと警護している。

特に明かりが減り、暗闇が増える夜中の時間帯はハイリスクとなる為、外出禁止令が出ているのである。

第37話

時雨は腕を組んで少し考えていたが、やがて頷いた。

「…うん。真夜中の急な依頼なんて無いし、夜中に帰着する輸送は武蔵に割り当てなければ良いんだよね」

「なっちまった場合はそつちで武蔵を泊めてやってくれよ?」

「大丈夫。今の武蔵の部屋を仮眠室にしておくから」

「ま、寝床に困らないなら俺は良いけどよ」

武蔵は顔を真っ赤にしたままテッドと時雨を交互に見ていたが、ついに言った。

「ごっころー!私を抜きにして進めるな!」

テッドがポリポリと頬をかきながら答えた。

「やー、まあその、俺んちは幾つか使ってない部屋があったりするんだよ…」

「そ、それがなんだというんだ」

「メシ一緒に食う事にした後さ、実はもう、部屋を片付けといたんだよ…」

「うっ」

大和が頷いた。

「ほら御覧なさい。ニブチンのテッドさんでさえ武蔵より先を行って
るではありませんか」

テッドがジト目になった。

「誰がニブチンだ誰が…おい、何で皆で揃って頷くんだよ…せめて
武蔵くらい否定しろよ!」

「嘘はつけんのでな…ちっ違う!そこじゃなかった!あつ姉上っ!」

「お肉が焦げてますよ武蔵。炭にしては勿体無いですよ」

「ああつ!…あつ、姉上達が変な事を言うからじゃないですか!」

慌てて取り皿に肉を取る武蔵を見ながら神通が言った。

「テッドさん」

「おう」

「…武蔵さんを迎える準備は整ってると言う事でよろしいですか?」

「本当は例の副業で1回くらい収入が入ってからにしたかったんだが、あれもなあ」

「そうですね。あの件は本当に来るのか怪しくなってきましたしね・・・」

「そういうことだ」

神通は箸を置くと、きちんと居住まいを正し、テッドに向き直った。

「武蔵さんはずっと私達を支え、辛い時も希望を持たせてくれました」

「・・・」

「ですから私は武蔵さんが一番先に、一番の幸せを掴んで欲しいと願ってきました」

「・・・」

「テッドさんなら私達は安心して送り出せます。武蔵さんを、どうかよろしくお願いいたします」

テッドは真っ赤になって視線をそらす武蔵をちらと見た後、背すじを伸ばして神通に向き直った。

「ありがとうございます。そんな風に評価してもらえて嬉しいぜ。武蔵に釣り合う様な奴になれるよう頑張る」

「・・・」

「あと、俺達は皆から見えてて亀の歩みかもしれねえけど、そこは今まで通り大目に見て欲しい」

「・・・」

テッドは武蔵に向き直ると、にこつと笑った。

「二人の生活を、新しい生活を始めようぜ・・・な、武蔵？」

武蔵はぎゅつと目を瞑ったあと、そつと上目遣いに神通達を、そしてテッドを見返すと、こくりと頷いた。

龍驤がしみじみと呟いた。

「ほんまに長かったなあ・・・やつとここまで来たって感じやなあ。なんや泣けてきたわ・・・」

大和が頷いた。

「大討伐事案が1年くらい続いた感じですよね・・・」
時雨が首を横に振った。

「これからが本当の始まりなんだから、まだ討伐すら始まってないんだよ」

山城が肩をすくめた。

「そうね。出撃の度に羅針盤が逸れては戻る25回目って感じ？」
途端に面々がジト目になった。

「あー・・・」

「ピッタリですね・・・」

「随分前、キス島撤退作戦に龍驤と何度も出撃した時の事を思い出さね・・・」

「時雨え、嫌な事思い出させんといてや」

「背の低い子なら突破出来るなんてデマを司令官が信じたばかりに・・・」

「あれは嫌な事件でしたね・・・」

そんな面々を見て、テッドはぱたぱたと手を振った。

「まあまあ、昔話で落ち込むのはよそうぜ。それよか肉食おうぜ、肉！」

武蔵が頷いた。

「よし！肉焼くぞ肉！皆も食えー！」

テッドは武蔵を見てニツと笑うとトングを手にした。

武蔵はずつと、こうやって来たのだろうな、と。

そしてさらに時は過ぎ・・・

ピピツピピツ・・・ピピツピピツ・・・ピーツ！ピーツ！ピーツ！ピーツ！

「これでラストオーダーとなりますが、最後に1皿お持ちしますか？」
「あーいや、ここままでOKだ」

「・・・わ、わっかりましたー。お酒とか追加あればお呼びくださいー」
テッドの答えに店員は一瞬心底安堵した表情を見せたが、すぐに持ち直す辺りがプロである。

店員が空き皿を持って下がった後、テッドは武蔵に話しかけた。

「大丈夫か？足りるか？」

武蔵は苦笑した。

「仕事明けとはいえ、これだけ食べて腹8分目：：というのはやはり不経済だな」

「大和型だからな。食いたきや単品で追加するぞ？」

「いや、どれも美味しかったし、店に嫌がらせと誤解されたくはないのでな」

「まあ向こうも客商売とはいえ、初日だからなあ」

「そういう事だ」

テツドは龍驤達を見た。

「そつちも食べたかー？」

「食ったでー」

「色々な意味でごちそうさまー」

「よつし、じゃあ出るかー」

帰り支度を済ませたテツドはテーブルの上の伝票を掴もうとしたが、そこに伝票はなかった。

「あれ？落としちゃった・・・か？」

きよろきよると探していたが、ふと神通が居ない事に気がついたので、龍驤に訊ねた。

「なあ龍驤・・・もしかして伝票・・・」

「ん？神通が会計しに行つたで？」

「えっ？今夜は俺のおごりつて・・・」

「うちらからのささやかなお祝いや。引越しの日取りは二人で決めや？」

「・・・そつか」

そこに神通が帰ってきた。

「お待たせしましたー・・・あら？どうしたんですかテツドさん」

「祝つてくれてありがとうな。それと、これからもどうかよろしく頼む」

神通はテツドの耳元で囁いた。

「引越しを先延ばしさせないでくださいね？武蔵さんは日が経つと絶対恥ずかしがるので」

「お、おう。頑張る」

「それと・・・食費のご相談はいつでも受けますので」

「ちなみにそつちではどうやってたんだ？」

「問屋さんから一括で買って私達が直接取りに行く事で値引きしてもらってたんです」

「そういうレベルかよ」

「大型冷凍庫が1台あると便利ですよ」

「れ、冷凍専用って事か？」

「ええ。600リッターくらいの」

「業務用かよ」

「ええ。そちらが共同購入して頂ければうちも助かりますし」

「・・・うん。明日相談に行く」

「お待ちしてます」

テッドと神通は小さく頷きあうと、皆に向かって告げた。

「よっし。これで今日はお開き。ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした！」

第38話

そして、翌日。

「・・・そういう風に計算するのかあ」

「大体これで不足が発生した事はありませんし、あつてると思いますがよ」

「なるほどなあ」

「ここは神武海運社長室、つまり神通の執務室である。

テッドは昨晚話していた、武蔵が必要とする食材量を計画する為の計算方法を神通から教わっていたのである。

「要するに艤装、特に航行機能を使わなければ食う量は普通の人間並なんだな」

「ええ。司令官も以前そのように仰ってました」

「・・・例の深海棲艦が化けてた司令官がか？」

「その前の、人間の司令官です」

「だよな」

「ですからトラックを使った陸送とか、待機している分には普通の食生活と思つて頂いて構いません」

「逆を言えば帰港後はこれくらい手配しておけて事だな・・・何でこんなに差が出るんだ？」

「ちよつと違うんですけど、簡単に言えば妖精さん達のご飯なんですよ」

「だったら日常も要るんじゃないの？」

「そこが不思議な所で、艤装を動かしてない時、妖精さん達ってどこかに居なくなつてしまふんです」

「そうなのか？」

「はい。で、出航しようとしたり艤装を展開するといつのまにかいらつしやるんです」

「で、艤装を動かしてる間は飯を食わせる必要がある、か。それ以外の時妖精達はどこに居るんだろうな？」

「大まかに言えばそうなりますね。鎮守府ではたまあに工廠でお見かけしましたけど」

「妖精達の賄い食材をうちでどうやって手配するかって事か：いつもじゃないしなあ。・うーん」

「そちらだけで当てはまるケースが無いのなら私の方でハンドリングしておきましょうか？」

「うちで艤装を使うケースは起きねえけど、それじゃ神通に負担かけちまうなあ。・」

「どうせ私達も手配するんですし、手配量がまとまるほど割引率が大きくなりますし、平気ですよ。・」

「そっか。・で、そんな量の食料をどうやって食うんだ？」

「季節にもよりますけど、年を通じてならカレーですね。冬なら煮物とか鍋、シチューとかで」

「なんで？」

「煮た方が体積が減るので食べる負担が減るんですよ。カレーは食べやすく飽きませんし」

「・・・寸胴鍋とか買った方が良いかな」

「でしたら艤装を使った後は武蔵さんも一緒に召し上がってからお帰り頂くようにしましょうか？」

「そこまでしてもらうのは気が引けるなあ」

「別に今まで通りですし、武蔵さんが減った所で手間はほとんど変わりませんし」

「あ、そっちでかかる食材とかの金はどう計算すりやいい？」

「今までは寮の食費としてかかった費用を按分して給料から天引きしてたんですけど・・・」

「そのまま続けるか？」

「仕事が無い日の食費も入っちゃいますから取り過ぎです。武蔵さんが可哀相かと」

「・・・そっういや神通よう」

「はい？」

「仕事が無い日ってどう過ごしてるんだ？」

「それぞれバラバラですよ。自主トレしたり、艀装を整備したり、お出
かけしたり」

「そっか・・・」

「どうかしましたか？」

「いや、武蔵がこつちで住むのは良いんだけどよ、あんまりそつちと距
離を置く形にしない方が良いかと思つてさ」

「んー・・・」

「いわゆる就業時間中はこつちで過ごしたらどうかなんて思つてよ。
それなら昼も含まれるからあまり変わらないだろ？」

「まあそうですね・・・休業日と夜だけそちらつて事ですか？」

「あとは仕事上打ち合わせる時な」

「それでテッドさん寂しくないですか？」

「逆にさ、俺が他の *Deadline Deliver*s と仕事してる
時、武蔵が手持ち無沙汰になつちまうんだよ」

「あー・・・」

「神通達に振る仕事量はそれなりにあるけどよ、それでも3割にはな
らねえ」

「・・・」

「だから武蔵は7割以上の時間、どうして良いか解らねえつて事にな
る」

「なるほど」

「たとえば自主トレでもさ、仲間と同じ敷地内に居た方が楽しくねえか
なつてさ」

「・・・」

神通はしばらく考え込んでいたが、

「そうですね。まずはそこから始めてみましょうか。ただ、私達は覚
悟していますよっ・・・」

「何を？」

「武蔵さんがテッドさんの相棒として神武海運を抜ける事を、です」

「まあ別に敵味方に別れるわけじゃねえからなあ・・・ここは実家みたい
なもんだし」

「ええ」

「ただ、武蔵は今の所そういう気配はねえし、一気に変わる事を周りが決めちゃうのも、な」

「ふふっ」

「な、なんだよ」

「テッドさんは優しいですね」

「まあその・・・あれだ」

テッドはふいと視線を逸らすと

「かみさんの幸せを考えるのは基本だろ？」

と呟き、神通はますますニコニコしたのである。

「ふむ。要するに私の寮の部屋をテッドの家に移すんだな？」

「簡単に言えばな」

「そうか・・・うむ、解った。案外変化はなさそうだな」

テッドから説明を聞いた武蔵が納得したように頷いた時、事務所に山城が入ってきた。

「あ、居た。ねえ武蔵、調整工具類は悪いけどこっちで使ってくれるかしら？ 皆との共有品が多いのよ」

「勿論それで構わないが・・・」

「じゃあそろそろ整うからそっちも支度しなさいよ？」

「えっ？」

「何？」

「な、なにが・・・整うんだ？」

「引越しの支度よ。他に何かあるの？」

「えっ!?!ちよつと待て！私の部屋に何をした！」

武蔵は寮に通じる階段を駆け上がっていき、テッドは山城にたずねた。

「部屋の物全部トラックに積んだのか？」

「そうよ。6畳間1つだから皆で運べばあつという間よ。ところでそっちは何畳の部屋かしら？」

「1階なら8畳間、2階なら6畳間が空いてるぜ」

「リビングってあるの？」

「・・・今は事務所をリビング代わりに使ってるなあ」

「じゃあ8畳をプライベートのリビングにしなさいよ」

「一人暮らしとは勝手が違うもんな」

「そこに何を置くかは二人で決めれば良いと思うけど、ダイニングの機能は持たせなさいよっ」

「二人で食う部屋か」

「そう言う事」

「キッチンの隣だし、まあそれで良いか」

テツドが頷いた時、上の方から

「うわああ！かっ！空っぽだあああああ！」

という武蔵の悲鳴が聞こえてきたのである。

第39話

「・・・やー、早えなあ」

テッドが呆然と呟いた通り、神通達はあつという間にテッドの家の空き部屋を掃除し、搬入し、配置してしまった。

出来上がりを見た武蔵が

「せつ！洗濯物を椅子の背にかけた所まで再現しなくていい！」

と、真っ赤になって怒鳴るくらいの精密さだったという。

テッドは後ろ手に洗濯物を隠す武蔵に2本の鍵を手渡した。

「ほらよ」

「なんだ・・・この鍵は？」

「黄色い方が玄関の鍵、銀の方がこの部屋の鍵だ」

武蔵は洗濯物を洗濯籠に放り込むと鍵を受け取り、目を細めた。

「・・・そうか。ここが私の家になるんだな」

「そういうこつた」

「そうか・・・そっか・・・」

その時、扶桑が入ってきた。

「あのう、大変良い雰囲気の所申し訳無いのですけど」

「うおっ!?!な、なんだ扶桑」

「寮のお部屋の鍵をお返し頂けますか？仮眠室として使うので」

「あつ・・・そ、そうか・・・ほら、これだ」

「確かに頂戴しました。じゃあ私達はこれで引き上げますね」

「あ、終業までは私も会社に戻る」

「そうですか？今日は仕事も無いですしお帰りになっても構いませんと社長が仰ってましたよ」

「・・・」

「お部屋の調整とか済ませては如何ですか？」

「あ、や、それは山々だが・・・良いのか？」

「ええ、大丈夫ですよ。ではそのように伝えておきますので、お二人で仲良くどうぞ」

「あ、ああ」

「では」

テッドは階段を下り、事務所に戻ったところで扶桑を呼び止めた。

「な、なあ扶桑、ちよつと待ってくれ」

「はい、なんでしよう?」

「ええと、運んでくれてありがとな。礼は改めてするからさ」

「それなら甘い物でも頂ければ嬉しいですね」

「洋菓子か?和菓子か?」

「そうですねえ:どちらでも大丈夫だと思いますけど、あ、大和さんはお饅頭が好物ですね」

「:..やっぱり寂しがるかな」

「喜びつつ、でしようけどね」

「ん、解った。その辺用意する。で、でき」

「はい?」

「そ、その:武蔵は晩飯何が好物だ?」

「お作りになるんですか?」

「ほ、ほら、武蔵は片付けがあるだろ?」

「ん:武蔵さんの好物はビーフシチューとドイツパンですけど:」

「作るにしても食いに行くにしてもレベル高えなちくしょう:」

「テッドさんが作るなら何でも美味しいと思いますよ?」

「:..無理するよりしつかり作れるもの、か」

「はい」

「ん、そうだな。引き止めて悪かった」

「では、失礼しますね」

:.:.パタン。

扶桑が静かに閉めたドアを見たまま、テッドはポリポリと頬をかいた。

今までも武蔵は仕事の事でしょうっちゅう事務所を訪ねてきていたし、最近は朝昼と一緒に食事していた。

だが、それと今とは明らかに違う。

どうにもこそばゆいというか、じつとしていられないというか。

落ち着かない。

「あー．．．こういう時に限って仕事もねえんだよなあ．．．」
だが、ふと思いついたようにジト目になると

「1つあったな．．．武蔵と相談するか」

そう言つて階段を登つていったのである。

コンコンコン。

「武蔵、入つて良いか？」

「ちよつと待つてくれ．．．半分くらい開けてくれ」

「んお？おう．．．お邪魔する．．．おおう」

テツドがそつとドアを開けると、武蔵は模様替えの真つ最中だつた。

「日の当たる位置や押入れの位置が変わつたのでな、今までの配置だと居心地が悪いのだ」

「そりやそうだろうな。なんか手伝うか？」

「いや、家具ぐらい一人で動かせる。で、何か用だつたのだろうか？」

「あーいや、龍田の仕事の件を相談しようと思つたんだが、まずはこつちを先にやれよ」

「良いのか？」

「落ち着く部屋を確保するのが優先だろ。あ、晩飯は19時で良いか？」

「ええつと．．．ならば買い物は1800時開始か。まあ間に合うか」

「ああいや、今夜は俺が作るし、冷蔵庫にある物で作るから買い物はいらねえよ」

「えつ？」

「模様替え済ませちまいな。用は今の所それだけだ。じゃあな」

パタン。

閉まつたドアを武蔵は見ていたが、ふふつと笑つた。

「家事は私の役かと思つていたのだが．．．」

武蔵はぐいと体を起こすと、家具を動かし始めた。

「あれこれ欲張つても仕方ない。まずは家具の配置を決めてしまおうか！」

そして日は暮れて。

コンコンコン。

「はいー!」

「もうすぐメシなんだけどよ」

「あつ・・もうそんな時間か。すまない、まだ終わってないんだ」

「構わねえけどメシの前に一旦風呂入らねえか? 埃まみれになってねえか?」

「まあ、多少な・・」

「風呂はこの階の廊下を階段と反対に向かった突き当たりなんだ」

「うむ」

「で、24時間風呂だからいつでも沸いてる。好きに入ってくれよ」

「そうなのか!」

「俺も住み始めた時びっくりしたんだけどな」

「・・ガス代かからないか?」

「あんまり他を知らねえからなあ・・でよ」

「ああ」

「入ってる時はこれを風呂場のドアにかけといてくれよ」

そう言つてテッドは紐を通したカメオのブローチを手渡した。

「随分高そうな物だな・・」

「まーな。他に無くつてよ」

「着替えはどこでしたら良いんだ?」

「説明するより見てくれた方が早えからちよつと来てくれ」

「ああ」

「なるほど、ドアの内側に更衣所があつて、その奥が風呂なんだな」

「そういうこと。だからそれはここにかけといてくれ」

「なるほどな。解つた。じゃあ・逆算するともう入ってしまった方が
良いな。早速借りるぞ」

「おう」

武蔵が部屋に戻つた後、テッドは階段を下りながら呟いた。

「改めて見るとカメオの横顔と武蔵つてそっくりなんだよなあ・・びつ

くりしたぜ・・・」

降り切った所で上を振り向いたテツドは苦笑した。

「好みってのは・・・そうそう変わらもんなんだな・・・」

肩をすくめたテツドはキッチンへと歩いて行ったのである。

第40話

「頂きますつと」

「あ、ああ・・頂き・・ます」

テッドは並べた料理にスプーンを入れようとしたが、武蔵の返事に首を傾げた。

「どうした？何か足りなかったか？」

「あ、いや、その、なんだ」

「おう」

「・・は、初めての夕食なのに、その、作らなくてすまなかったな」「なんで？」

「な、なんでって・・こういうのは私の役割かと」

「別に決めてねえだろ？」

「・・あー、いや・・」

「？」

ますますきよんとするテッドに、武蔵はもじもじしながら答えた。

「そ、その、そういう役割に・・憧れててな・・」

「素敵な奥さんのな？」

「う、うむ」

「エプロンかけて台所で振り向いて「あなたお帰り」みたいな？」

次第に頬を染めつつ頷く武蔵。

「・・そっかあ」

テッドは一旦スプーンを置くと少し考え、続けた。

「俺の方はやれる奴がやりや良いやっていうか、全くこだわりが無かったんだけどさ」

「・・う、うむ」

「とりあえず今は演習期間って事にしとかねえか？」

「演習？」

首を傾げる武蔵。

「ああ。ほら、兵器とか変えた後はいきなり出撃しねえだろ？」

「うむ。演習で運用方法や扱いについて学ばねば怖すぎる」

「だから俺達は今日から一緒に住みつつ位相合わせをする段階と考えりゃあさ」

「・・・」

「鎮守府の生活で言う演習みたいなもんだろ？」

「・・・」

「いきなり全部がピッタリ一緒なんてあるはずねえからさ」

「そうだな。神通達との生活でも互いに当たり前と思う事の差異の解消に一番苦労したものだ」

「だろ？」

武蔵は目を細めた。

「・・・ありがとう、テッド」

「ゆっくり差を埋めていこうぜ。さ、食おうぜ。冷めちまう」

「うむ」

「ほいご馳走様でしたつと」

「ご馳走様・・・あー・・・驚きの連続だった・・・」

「どうかしたか？」

「いや、オムライスは鎮守府でもたまに出たんだがな」

「おう」

「中が麻婆茄子の混ぜご飯というのは初めてでな」

「そっか」

「食べてみれば旨かったのだが、次々出てくる具が予想外過ぎてな」

「あー・・・確かに山下食堂の定食とかでも見かけねえか」

「う、うむ。これはどこで習ったのだ？」

「習ってねえよ」

「えっ？」

「料理習った事なんてねえんだが、一人暮らして連続性なんだよ」

「連続性？」

「例えば月曜日に麻婆豆腐食うとして一通り買ってくるだろ」

「ああ」

「すると麻婆豆腐の素は1袋で4人分とか入ってるんだよ」

「・・・ふむ」

「それも1人前×4じゃなくて2人前×2とかが多いんだよ」

「ふむふむ」

「だから1袋の半分が残ったとすりや、早く使わなきゃいけない」

「封を開けていれば、そうだな」

「でも2日続けて麻婆豆腐なんて飽きる」

「ああ」

「だから茄子買って来て麻婆茄子にするが、もうひと工夫しないと代わり映えしない」

「それで卵で包んだのか？」

「そういうこつた」

「今から思えば卵にかかっていたのがケチャップではなく醤油という時点で気づくべきだった」

「・・・麻婆豆腐にケチャップはナシだろ？」

「無い無い絶対無い。醤油で合ってる」

「良かった」

「・・・麻婆茄子にさつま揚げを入れるのは好みか？」

「いや。期限が近かったから食っちゃまおうと思ったただけだ」

武蔵は小さく安堵の溜息をついてから続けた。

「ふむ。テッドも色々やりくりして、たくましく生活してきたのだな」

「イチイチ無駄にしたたら外食より高くなるし、その外食だって決して安くはねえからなあ」

「なるほど。さて、食器は私が洗う。仕舞ってある場所を知りたいのでな」

「そうか？今日は模様替えて疲れてるんじゃないか？」

「いやいや、大丈夫だ。心配要らない」

武蔵はにこやかに食器を手に立ち上がった。

テッドの料理はマズかった訳では無いが、あまりにも奇抜すぎる。

これは早く自分が調理役を押しえた方が良い。

そう思っでの行動だったが、テッドには内緒である。

食器を仕舞いながら、武蔵がポツリと呟いた。

「さつき、外食も安くないといってたが・・ちなみにな」
拭き終えた食器を武蔵に手渡しながらテッドが答えた。

「おう」

「昨晚の焼肉なんだが・・」

「おう。旨かったな」

「それはそうなのだが、合計が約18万だったらしい」

テッドが目を見開いた。

「・・マジか」

「ああ。神通からは内緒にしておけと言われたんだが・・言っておいた方が良いかと思ってるな」

「お、俺、やっぱ払った方が良いかな？」

「いや、テッドはほとんど食べてないから気にするな。私と姉上の補給分がほとんどだからな・・」

「そういう俺ん家に駆けつけてくれる直前に帰港したんだよな・・」

「ああ。航海後に1回でも喫食してればその後食べる量は人並みで済むのだが・・」

「ほんと違うんだな」

武蔵は溜息をついた。

「とにかく私や姉上は帰港直後の食事は気が重いのだ。顎が痛くなってくるし、申し訳なくなってくるのでな・・」

「大変だなあ・・」

「そして前に航海直後の食事を取った事がある店に再訪するとな」
「おう」

「以前の量を食べるものだと思われて、頼んでないのに物凄い量を出されたりするのだ・・」

「まあそう思うだろうなあ」

「鎮守府では基礎訓練や演習、出撃などで毎日海に出るから、ほぼ常に沢山食べる事になるんだが」

「おう」

「航海が無ければ普通の1人前で充分なのでな、体調が悪いのかと逆

に心配されてしまう」

「極端に違うもんな」

「だから大和型というか、戦艦の艦娘達はいきつけの店を指定する事が多いんだ」

「そういう差異に戸惑わない店、か」

「まあ、最初に一言聞いてくれれば済む話だからな。だから鳳翔がやってる店があれば一番気楽に入れる」

「なるほどなあ．．他の艦種もそうなのか？」

「いや。軽巡や駆逐艦、潜水艦は常時少量だし」

「ほう」

「空母や重巡は艤装を使ったとしても更に毎回差が激しい」

「なんで？」

「空母は艦載機の種類や積載量、出撃機数、それに破損度合で、重巡は装備兵装によって大きく変動するのだ」

「ほほう．．じゃあ龍驤は苦労してるんだな」

武蔵がジト目になった。

「うちの龍驤は高LVの軽空母だからな．．うらやましいものだ」

第41話

武蔵の表情を見てテッドは首を傾げた。

「うらやましいってどういうことだ？」

武蔵は軽く肩をすくめた。

「例えば兵装によっても資源消費量は大小あるし、航続距離によっても同じく差がある、戦闘回数にもよる」

「だろうな」

「奴は遠い行き先の場合は兵装を省資源な物にするといった形で調節するのが実に上手いんだ」

「はっはーん、常に同じ量食えば済むようにするのか」

「ああ。その見極めが実に上手い。我々もそう出来ればそうしたいんだが、調整要素が少なすぎてな」

「L Vが上がるってのは色々違ってくるんだな」

「ああ。独自のノウハウを集めれば同じ事をしても疲労しにくくなる等、上手に運用出来るようになる」

「艦娘の運用も奥が深いなあ」

「所属する妖精と運用方法の相性もあるし、一概にこうすれば良いというのものない」

「へえー・・・あ、これはその引き出しだ」

「ああ。これで最後か？」

「棚の方はそうだな。あ、フライパンとか鍋類はここだ」

「包丁も一緒だな。ちよっと冷蔵庫開けるぞ」

「おう」

「・・・ふむ、期限切れの品はなさそうだな」

「食い物無駄にするほど贅沢してねえよ」

「ふふ。それは良い事だぞテッド」

「よっし。片付け終わりっつと。武蔵も飲むか？」

「何をだ？」

「スコッチ。今日のはつまみはビターチョコだ」

「・・・ここから更に食うから太るんじゃないか？」

「空腹で酒飲んだら胃が荒れるし、スコツチにチョコはイケルんだぜ？」

「・・・そうか」

「1回やってみろよ、騙されたと思ってさ」

「部屋の模様替えが終わらなくなってしまうではないか」

「1日で無理に終わらせる必要はねえだろ？」

「・・・解った。少しだけな」

「よしよし、事務所のソファで待っててくれ」

武蔵は溜息をつきつつキッチンを出た。

どうもテッドと話していると楽な方へと傾いてしまう。

時雨や神通は優しくても厳しい生活へと導くから、今までどのギヤツプが激しいな・・・

「ほいカンパニー」

「ん」

テッドは事務所の執務席で、武蔵は応接用のソファでグラスを軽く掲げた。

武蔵はグラスの中で揺れる琥珀色のスコツチと氷の塊を眺めていた。

艦娘の中には酒豪で名を馳せる者もいるが、基本的に鎮守府では常時臨戦態勢である。

特に旗艦は召集がかかった時にへべれけでは鎮守府が壊滅する危険もある。

ゆえに常にシラフでいようと、武蔵は今まで飲んだ事が無かったのである。

ただ、素直にそう言えない辺りが武蔵らしい。

「んー！やっぱこのボトルは当たりだなあ！うまいっ！」

嬉しそうな声にふとテッドを見るとニコニコと笑みを浮かべており、ご満悦の表情で葉巻をカットしていた。

「・・・」

美味しい・・・のか？

「武蔵はきゅつと唇を結んだ後、覚悟と共に一気にぐいと喉へと流し込んだ。」

「!?・・・ゲフツゲフツゲフツ!」

「お、おいおいどうした? 気管にでも入ったか?」

武蔵は涙目でテッドに答えた。

「何でこんな・・・ヒリヒリするぞ?」

「?」

テッドは一瞬怪訝な顔をしたが、

「あー・・・もしかして初めてか?」

「う」

「O K O K。飲み方教える。それならロックやか水割りの方がいいな」

そういうとテッドはちよいちよいと手招きをした。

「・・・こんなもんかな」

「・・・今度は大丈夫なのか?」

「気に入る割合は人それぞれだからなあ。後、飲むんじや無くて舐めるって気持ちでな」

「舐める?」

「おう。飲むってくらい一気に口に入れるからヒリヒリすんだよ」

「ど、どのくらいだ?」

「なんていやあ良いんだ・・・スプーン1杯?」

「小さじ1か?」

「まあそんなもんだ。厳密に決まった量なんてねえからな」

「・・・」

「まあダメならまた加減するからさ」

「少だけテッドをジト目で見た後、武蔵はほんの僅かだけ口に含んでみた。」

「んー・・・」

「ちよつと少な過ぎたのか、再びグラスに口をつける。」

「・・・どうだ? 甘いか? 辛い?」

「甘くは無いな・・・水っぽい、のか?」

「んー？」

テッドはひよいと武蔵のグラスを受け取ると、クイと一口飲んだ。
「!?」

「んー．．．これで水っぽいか．．．となると．．．」

「あ．．．ああ．．．」

「こんなもんか。ほれ」

「え．．．ええと．．．」

「どうした？」

「い．．．いや．．．なんでもない」

テッドからグラスを受け取った武蔵はそれはもうドキドキしていた。
「た。」

同じ所に口をつけている訳では無いが、これも間接．．

「．．．ふ」

いや、待て私。テッドとは夫婦ではないか。何を今更。

武蔵は改めて、テッドと同じくらいの量を含んでみた。

「．．．あ」

「どうだ？」

「甘い．．．甘いかもしれない」

「それが武蔵の適量だ。この量だと．．．少し多めのワンフィンガーだな」

「ワンフィンガー？」

「空のグラスの底から指一本分酒を入れて、後はグラスの6割くらいを水で満たす。炭酸でも良い」

「炭酸？ラムネの事か？」

「いや、ラムネは砂糖が入るだろ。砂糖抜き炭酸水だ」

「ふむ．．．」

「今は水で作ったけど、炭酸だと俺は若干濃い目に作る」

「どれくらいだ？」

「武蔵で言えばツーフィンガーかなあ」

「底から指二本分か」

「多分な。ちよつと少なめから試していけば良いさ」

「うむ。それにしてもあんなに辛かったのに、水と混ぜるだけで甘くなるなんて不思議だな」

「適切な量で割らなきや意味無えぜ？」

「ああ。さつきは水っぽかったな。でも分量自体はあまり変わらないように見えた」

「1本の半分か、1本か、位だ」

「不思議なものだなあ」

テッドは元の席につくと葉巻に火をつけ始めた。

「ま、お代わり欲しければ作ってやるから言えよ」

「ああ」

うむ。テッドの手料理に酒。今日は初めて尽くしだな・

武蔵はくすつと笑いながらグラスの酒を口に運んだ。

「意外と飲めるクチか？」

「うむ、そうかもしれない」

武蔵は3杯目のソーダ割を口にしていたが、特に仕草や口調は変わってなかったのである。

「やはり私はソーダ割の方が好きだな」

「今度はレモン入れてみるか？」

「今から剥くのか？」

「いんや。冷蔵庫にレモン汁入ってるんだ。待ってな」

「あ、それなら私も見に行く」

「おう」

テッドは冷蔵庫をがぱりと開けると、ドアポケットを指差した。

「これこれ」

「はは。可愛いレモンのボトルだな」

「いーだろー？」

「ああ。なかなかシャレてるな」

「入れるとすれば必ずここだから」

「解った」

席に戻った武蔵はボトルを手に小首を傾げた後、テッドに訊ねた。「どれくらい入れるもんなんだ？」

「何滴でも気に入るまで入れりゃいいよ。最初は少なめにな」

「アバウトだなあ」

「嗜好に厳密なルールなんてねえよ。人自体がアナログなんだから
さ」

「ま、そうだな」

武蔵は軽く振り、2滴ほどグラスに落としたのである。

第42話

「!」

テッドは傍目にも解るくらいピクンと反応した武蔵を面白そうに眺めた。

「良い感じか?」

コクコクと頷きながら武蔵は返した。

「ああ!これは良い!程よく酸味が効いて旨い!」

嬉しそうにクイクイと飲み進める武蔵にテッドは微笑みながら言った。

「良かったじゃねえか。好きな物が1つ増えてさ」

「・・・」

武蔵は空になったグラスをコトリと置くと、テッドを見返した。

「どした?」

「・・・ああ。テッドのおかげでまた1つ、楽しい事が増えた」

「またって、他になんかあったか?」

武蔵はにこりと笑った。

「沢山あるぞ。仕事の話をする時だってテッドと話すと楽しいし」

「・・・」

「弁当を作る時は次は何を作ろうか、喜んでくれるかなと楽しみだし」

「・・・」

「作った弁当を二人で食べると味がずっと美味しく感じるし」

「・・・」

「テッドが笑ってるのを見ると私も嬉しくなる」

「あ・・・あー」

「テッドの横に並んで歩けばいつもの景色がキラキラして見えるし」

「お、おう・・・」

「今日からはテッドの家から帰らなくて良くなったし!」

「・・・」

「空の弁当箱を持って事務所のドアを開ける時・・・結構寂しいんだぞ

？」

潤んだ目で自分を見る武蔵を見つつ、テッドはごくりと唾を飲んだ。

あ、あれ、武蔵、実はかなり酔っ払ってねえか？

絶対普段聞かせてくれないような凄え事聞いている気がする。

「そ、そうか．．あ、あー、ええと、今日はもう遅いから寝るか？」

「断る」

「えっ？」

「こーとーわーるう！もつと飲むー」

間違いねえ。こいつ、ギリギリまでシラフで一気にへべれけになるタイプだ！

「ほーら。お前完全に酔ってるから！部屋まで送ってやるから寝るの！」

「よってませーん」

「酔ってる！完全に酔ってるからー！」

「あはっはー！なんか楽しくなってきたのー！」

武蔵に肩を貸しながらテッドは思った。

次からは1〜2杯飲ませたら寝かせよう、と。

翌日。

「ふ．．う．．お．．」

武蔵は布団の中でそつと額に手をやった。

な、なんだこれは。

誰が頭の中にクラツシュ・シンバルなんか持ち込んだんだ．．．お

おお止めてくれ．．

そんな時。

コン・コン・コン

武蔵は目を瞑りながら必死に考えた。

誰だ？

姉上や山城、龍驤は勝手に入ってくるからノックなんてしない。

時雨にしては音が大きいし、神通は4回鳴らす。

扶桑か？でも何か違う気が．．

「…最初の晩に続き、最初の朝までこの体たらくはさすがに申し訳ない」

「初めて酒飲んだんだから加減が解らねえのは仕方ねえだろうよ。装備と一緒にさ」

「…」

「でも、これで懲りねえで次からも付き合ってくれと俺は嬉しいな。もっと早く切り上げさせるからさ」

「…だらしない嫁だと思わないのか？」

「二日酔いにならない程度を覚えていけば良い。それだけの事じゃねえか」

「…」

「なんでも最初から100点満点なんて無理だ。俺がそうじゃねえんだから武蔵も同じでホツとしたぜ」

「…そうなのか？」

「俺ばっかり何でもへタレじゃ気い使う…っつか凹むぜ？」

「…そっか」

「おうよ。ま、粥は温かい方が旨いから適当に諦めて起きてくれ」

「…ああ」

「じゃあ俺は仕事始めるからさ、下に降りて来る時は寝癖直せよ？」

「…私の髪は本当にクセっ毛でな」

「別に入りたきや風呂入って良いぞ？どうせ24時間沸いてんだから」

「…ああ、そうだったな」

「じゃな」

「…パタン。」

「うー…」

武蔵はぼすんと布団に横になると目を閉じた。

ああバカバカ。今朝からは私がご飯を作ろうと思ってたのに！

とんだ醜態を晒してしまった。

寮の部屋だと寝ぼけるなんて何てみつともない…

…でも。

「ホツとした・・・かあ」

本当にマズいと思うのだが、テツドは私に・・・甘い。
そうだ。奴は甘いんだ。

この短い時間の中でもそれだけはハッキリ解った。

「これは・・・相当厳しく自分を律せねば墮落してしまうな・・・よし！」

そう言つて勢い良く起き上がったのだが、

「う・・・お・・・部屋が・・・回る・・・」

押し寄せてきた気持ちの悪い感覚に、そのまま体育座りするように顔を伏せてしまったのである。

「お・・・おはよう・・・テツド」

「あーあー真っ青だなー」

「もう少し水を飲んでも良いだろうか・・・」

「白湯の方が良さそうだな。座つてろよ」

「いや、いい。自分でやってみる」

「今無理するなよ」

「慣れておきたいからな・・・」

「そうか?・・・じゃあ一緒に行くか」

第43話

シユンシユン・・・フイーーーー!!

やかんの甲高い笛の音に武蔵が眉をひそめたので、テッドは苦笑しながら火を止めた。

「この湯飲みなら沸かした湯を1/4、水を3/4で、大体人肌だ」

「ああ」

「これに塩を一つまみ」

「入れた方が良いのか?」

「経験的にな。あと、レモン1振りで出来上がりだ」

「・・・」

武蔵は手渡された湯飲みをそつと口にした。

湯の温かさと鼻を抜けるレモンの香りでホツとする。

「うん・・・良いな、これ」

「まだやかんには湯が残ってるから、飲みたければ作ってみな」

「ああ・・・テッドは大丈夫なのか?」

「俺はそうならねえ範囲を知ってるからな」

武蔵はバツの悪そうな顔でテッドを見たが、テッドはニツと笑って見返した。

「・・・気をつける」

「とりあえず1〜2杯は大丈夫そうだったけどな」

「3杯目以降を・・・濃く作りすぎたかもしれないな」

「ん? ツーフィンガーだろ?」

「上手く止められなくてな・・・ドバツと出てしまった」

「おいおい、それじゃそうなるのも無理ねえよ。今度からそういう時は言えよ」

「どうするんだ?」

「俺がまだ飲めるならグラスから移すし、ダメなら捨てるさ」

「勿体無いじゃないか」

「武蔵が悪酔いするよか良いよ。無いに越した事は無えけどな」

「うぐ．．そうだな。もう少しゆっくり傾ける事にしよう」

「その辺も慣れだからなあ」

「．．．」

武蔵が無言で見返したので、テッドは首を傾げた。

「どした？」

「．．お前はいつも優しいな」

「怒ってもしやーねーし、俺の趣味に付き合ってくれるんだから当然だろ？」

「．．神通達の方がはるかに厳しいぞ」

「そりやまあ、可愛い嫁さんでしょう．．」

「ぐ」

これが山城や龍驤なら「おちよくるな！」と怒鳴りつけるが、武蔵は解っていた。

テッドが本気で言ってるという事を。

だからこそ恥ずかしくてたまらないし反論しようがない。

真つ赤になって俯くしか無い。

「すいませーん」

事務所の方から呼ぶ声がしたので、テッドは返した。

「あいよー！ちよつと待ってくれー！．．じゃあ火傷には気をつけろよっ。」

ぽんぽんと武蔵の肩を叩くと、テッドは事務所に戻っていった。

そして。

「武蔵さんが遅刻とは珍しいですねえ．．」

「本当にすまない。生まれて初めて酒を飲んでな」

「えっ？」

「い、いや、本当の話なんだ。それでその、二日酔いになってしまったんだ．．」

「武蔵さん．．お酒飲んだ事ありませんでしたっけ？」

「それはそうだ。いつ招集がかかるか解らぬ中で酔っ払う事など出来ないからな」

「そうでしたか．．」

就業開始時刻を大幅に過ぎて事務所にやってきた武蔵は真っ先に神通の部屋を訪ねていた。

それでも神通が怒らない辺りがそれまでの武蔵の勤勉さを示している。

神通は苦笑しながら続けた。

「でも、大和さんは旗艦になってからも結構お酒をたしなんでましたよ?。」

「え・・・本当か?。」

「ええ。夜の食堂と言えば隼鷹さんと足柄さんは有名でしたけど。」

「ああ。」

「意外と大和さんや那智さん、扶桑さんなんかもいらしたんですよ。」

「りよ、寮の部屋に夜遅く帰ってくるのは、旗艦の仕事が忙しいのだからばかり思っていた・・・。」

「いえいえ、私が秘書艦の仕事を閉めるのが2000時くらいですからね。」

「そうか。それより遅い筈が無いか。」

「まあ一緒に執務室を出て、大和さんは食堂に、私はお風呂につけてパターンが多かったですね。」

「そうだったのか・・・でも姉上が泥酔してるのを見た事が無い。」

「あまり量は飲まれなかったのかもしれないですね。」

「・・・。」

「折角ですから聞いてみたら良いんじゃないですか?。」

「そのうちな。あと、今日の私の仕事は・・・。」

「ええと、お願いしたいのは倉庫のCエリアの荷解きですね。今日中で良いですよ。」

「うん? Cはあまり無いから3時間もかからないだろう:それで良いのか?。」

「二日酔いの人をトラックに乗せる訳には行きませんし。」

「うぐ・・・すまない。」

「次は気をつけてくださいね。」

「解った。」

「ところで武蔵さん」

「ああ」

「しよ・・・初夜は・・・楽しかったですか？」

頬を染めて上目遣いに見る神通、ぽかんとする武蔵。

数秒の静寂の後、

「いや、私は酔っ払った後、どうやって部屋に戻ったかもロクに覚えてないのだ・・・」

武蔵がそう返すと、

「あ・・・そうでした・・・なんとつまらない展開でしょう・・・」

と、神通は心底がっかりした表情を見せたのである。

そして昼休み。

「姉上、ちよつと教えて欲しい事があるのですが・・・」

「どうしたの？」

「姉上はどのくらい飲めるんですか？」

「へ？」

首を傾げる大和に、武蔵はポリポリと頭をかきながら事の次第を告げたのである。

「あつはつはつは！最初からそんな飲んだら二日酔いして当然やんか」

「・・・うー」

そう。

武蔵の背中を面白そうにバンバン叩いてるのは山城であり、声をかけたのは龍驤である。

大和にだけ打ち明けるつもりが、皆にあっさりバレたという訳である。

扶桑がころころ笑いながら返した。

「大和さんはせいぜい日本酒を徳利1本くらいですよね」

大和が頷いた。

「ええ。晩酌ですからせいぜい1合か2合ですね」

「ばん・・・しゃくっ！」

聞き返す武蔵に時雨が囁いた。

「晩酌っていうのは夕食をつまみに飲むお酒の事だよ」

「お、そ、そうなのか・・・という事は姉上は毎晩飲んでいたのか？」
「んー」

大和は少し考えるポーズを取ったあと、

「起きてすぐ用事があるとか夜間に用事が無ければ、ね」

「ええと・・・」

武蔵が何と聞こうかと言いよんどんでいると、扶桑が口を開いた。

「大和さんが居酒屋になった食堂を訪ねてくるのは週に3日くらいでしたかねえ・・・」

「半分くらいという事か・・・姉上は飲むのが好きなのか？」

「楽しい雰囲気が好きだったわ。飲んでる時は皆暗い話題を避けますからね」

「なるほどなあ」

「時雨さんが来てたのもそういう意味でしょう？」

武蔵がぐきりと時雨を見た。

「しっ!?!しししし時雨、お、お前酒を飲むのか!?!」

第44話

すっかり動揺する武蔵に山城が手をひらひらと振った。

「あー違うわよ。時雨は私とよくお汁粉を食べに行ってたの」

「汁粉!?!そんな甘味が鎮守府で食べられたのか?」

龍驤がきよとんとした顔で言った。

「へ?裏メニユーやけど割と頻繁にやっとなので。餡が切れると本日は無しって出てたけどな」

武蔵がハツとしたような顔になった。

「そ、それは見たぞ!あれはそういう意味だったのか・・・」

「ほんまに知らなかったんか・・・」

山城はにやりと笑った。

「あのお汁粉美味しかったのに勿体無いわねえ」
「!?!」

武蔵から質すような視線で見られた時雨は

「う、うん・・・かなり美味しかった・・・かな」

と、おずおずと答えたし、

「鎮守府で唯一心残りといえればあの汁粉やなあ」

という龍驤の一言が追い討ちをかけたのである。

「ただいま・・・」

「おかえ・・・うおう、朝より顔色悪くねえか?おい大丈夫か?」

ずしんと重い雰囲気を負った武蔵を見て、テッドは慌てて駆け寄ってきた。

「・・・」

「どうしたってんだよ武蔵?」

武蔵は俯いていたが、きゅつとテッドの方を見ると、

「聞いてくれ・・・」

と、ぽつりぽつりと話し始めたのである。

「ふーん、汁粉なあ」

「うむ。どんな味か知らぬが、一生の不覚だ・・・」

「んー…例の件もあるし、じゃあ今から行くかあ」
「…どこにだ？」

「まー良いからテッドさんについてこいって」
そう言うのとテッドはニツと笑い、車のキーをくるくると指で回した。

「！」

「はいお待ちどうさま、栗ぜんざいとお汁粉、持ち帰り用の饅頭詰め合わせはここに置いてくよ」

「ありがとよおばちゃん」

「ここは隣町の温泉街にある茶店である。」

テッドの運転でやってきた二人に、器を置いた店の老婆は興味深げにニコニコと話しかけた。

「それにしても可愛い子だねえ。あんたの娘さんかい？」

武蔵に箸を渡していたテッドはぐきりと老婆に向き直った。

「待ちやがれ。俺はまだそんなジジイじゃねえよ。嫁さんだ嫁さん！」

老婆は一層目を丸くした。

「おやまー！まーまー、そうかいそうかい。可愛い奥さんだことー」

「あ、その、初めまして……」

「ゆつくりしておいきよ。ダンナさんは時々来て大福とか栗ぜんざい食べてくんだよ」

「そうなのか」

「今度からご夫婦でおいでな。ところでダンナさんとは上手く行つてんのかい？」

「あ、いや、その」

「夜はお盛んなのかいちよいと！ウツシツシツシツ」

テッドがジト目になった。

「旨えんだから静かに食わせてくれよ。ほらほら」

「ケチだねえ……ちよいとくらい聞かせとくれよう」

「いーから！」

「はいはい、じゃあごゆつくり」

老婆の背中を押して店の奥へと連れて行ったテッドは眉間に皺を寄せたまま戻ってきた。

「まったく話好き噂好きのバアさんだからなあ・・・気にするなよ」

「あ、ああ」

「よし、冷めねえうちに食おうぜ」

「うむ」

「・・・美味しい」

「うめーだろ。あのバアさんが作ったとは到底思えねえ上品さだよな」

テッドはそう言って笑ったのだが、

「ちよいと聞こえてるよー!」

と、すかさず店の奥から怒鳴り声が返ってきたのでテッドも負けじと怒鳴り返した。

「聞き耳立てんなっつーの!」

「あたしや耳は遠くないんだよ!」

「都合の悪い事はすぐとぼけるじゃネーか!」

「さあ何の事だか。覚えてないねえ」

「言ったそばからとぼけてんじゃねーよ!」

武蔵はキツネ色に焦げ目がついた餅を噛みながら、テッドと老婆のやり取りを聞いていた。

「武蔵、これで払っといってくれ・・・ちよっとトイレ借りるぞ!」

「はいはい：汁粉と栗ぜんざい、饅頭詰め合わせで1960コインだよ」

「では、ええと、これで」

「40コインのお釣りとおまけだよ。持ってお行き」

そう言っつりの後に老婆が武蔵の手に乗せたのは2個の大きな味噌饅頭だった。

「・・・良いのか?」

老婆はにこりと笑った。

「あんなに嬉しそうな坊やを見るのは初めてだよ。よほどアンタが気に入ってるんだらうね」

「そ、そうなのか？」

「仲良くおやり。幸せにね」

「・・・うん。また来ても良いか？」

「いつでもおいでな。腰の按配が悪くなければいつも開けてるからね」

「腰が良くないのか？」

「持病って程じゃないんだけどね。トシにや勝てないよ」

「そうか・・・こんなに美味しい汁粉を食べたのは初めてだ。少しでも達者で長生きしてくれ」

「嬉しいこと言ってくれるねえ。じゃあ酒饅頭も持っていきな」

「そう言って老婆は酒饅頭を4つ手渡した。」

「あ、いや、何かを貰いたかったわけではない」

「解ってるよ。気持ちだよ」

「・・・ありがとう」

武蔵と老婆がにこりと笑いあった時、

「お待たせお待たせつと・・・何笑ってるんだ？」

トイレから出てきたテッドがきよんとした顔で二人を見たのである。

テッドはハンドルをゆつくりと操作しつつ、武蔵に話して聞かせていた。

「そうか、いわばテッドの隠れ家なんだな」

「そうだな。ちよつと息抜きしたい時に行ってるんだ」

「あちこちに知り合いが居るのだな」

「それでもねえよ。この町ではあの甘味処と紅葉屋くらいだ」

「紅葉屋・・・ああ、山の頂上にある温泉宿か」

「Deadline Deliversに初めて定期契約結んでくれた上得意さんだ」

「なるほどな。あの甘味処とも結んでるのか？」

「・・・いや、結んでねえよ」

「訳でもあるのか？」

「なんつーかさ・・・あのバアさんとは仕事抜きで居たいんだよ」

「そうなのかな？悪いようにはしなさそうだが」

「まあそう思うんだが、余計な関係のせいでこじれたり、気い遣う関係になりたくねえんだ」

「・なるほどな。それも良いんじゃないか。今度からは私も連れてつてくれないか？」

「もちろんだ」

「ところで、この饅頭詰め合わせは自宅用か？」

「いや、大和達への土産。ほら引越し手伝ってもらっただろ？」

「なるほどな。ならば帰りがけに渡してしまおう」

「おう、そのつもりだ」

二人を乗せたキャデラック・フリートウッドはゆっくりと山甲町へと帰って行ったのである。

第45話

数日後。

「そういう筋書きだが、何か質問あるか？」

「そうですねえ・・・」

テッドは神武海運の事務所を訪ねると、香取達に出す「依頼」の案を神通達に説明した。

神通は少し考えていたが、やがてこくりと頷くと

「皆さんは何か質問事項とか、疑問点はありますか？」

と、水を向けた。

龍驤が腕を組みつつ口を開いた。

「んー、悪くは無いんやけど、ちと覚えにくいんやないかって気がするで？」

「噂の中身って事か？」

「せや。あんまりおもしろくないし、噂っぽくないっちゅーか・・・事務的やん」

「まあな・・・来年は小麦の値段がトン辺り15%上がるとか・・・だからなあ」

「せめて噂らしい噂にせえへん？」

テッドが顎に手をやった。

「良いけどよ、俺は噂話ってあんまし得意じゃねえんだよ・・・どんなのが良いんだよ」

山城がにやりと笑った。

「身近に良い題材があるじゃない」

「何が？」

「二人の事に決まってるでしょ」

一瞬意味が解らなかつた様子だったが、山城の視線の先を追ったテッドは眉をひそめた。

「俺達？」

「そうよ」

「なんもねえよ」

「デートとかして無いの？」

「別に」

「新生活で噂の1つにもなるような事が無いっておかしいわよ？」

「そ、そう言われてもなあ」

テッドが困った顔で武蔵の方に向くと、武蔵も肩をすくめた。

「せいぜい汁粉と一緒に食べたくらいだ」

途端に大和達の瞳孔が開いた。

「どこで？どこで食べたの！」

「えっ」

「家で缶入りの汁粉飲んだとか許さへんで？」

「缶入りの汁粉なんてあるのか？」

「質問してるのは私達よ。さあ洗いざらい白状しなさい」

「何故いちいち言わねばならんのだ！食堂の裏メニューを教えてくださいなかつたではないか！」

「やっぱ根にもつとるんか・・・ああそれも噂にはええネタやな」

「私の恥ずかしい話ばかり噂にするんじゃない！」

「じゃ、1人1つずつ噂話のネタを提供しましょうか」

テッドが首を傾げた。

「・・・まあ8つあれば充分だけどよ、俺に噂のネタなんてねえぞ？」

時雨がおずおずと訊ねた。

「テッドさんに愛人が居るって噂は本当なのかな？」

途端に大和と武蔵の眼光が鋭くテッドに刺さる。

「どーゆー事ですかテッドさん！」

「聞いてないぞテッド！」

テッドはふるふると首を振った。

「一体どこからそんな話が出てきたんだよ100%知らねえし居ねえよ」

大和達の視線は時雨に移った。

「どこですか！」

「ぼ、僕も随分前にちよつと聞いたただけなんだけど」

「ふんふん」

「テッドさんが定期的に車で隣町の方に一人で嬉しそうに出かけていくから、そうなんじゃないかって・・・」

「定期的にい？」

大和は再びジト目でテッドを睨んだが、武蔵はポンと手を叩いた。

「汁粉か？」

テッドは眉をひそめながら時雨の方を向いた。

「それ、何年前の話だ？」

「えっと、神武海運を始めて少しの頃だけど・・・」

「それなら紅葉煎餅だ。間違いねえ」

大和達が首を傾げた。

「紅葉煎餅？紅葉饅頭じゃなく？」

「ああ。隣町に紅葉屋って温泉宿があるだろ」

龍驤が頷いた。

「あのごつつ高い宿やろ？」

「ああ。あそこで名物を作りたいって相談を受けてな」

「ほほう」

「上得意の頼みだし、仕事に繋がるかもと思って相談に乗ってたんだよ」

「で？」

「色々企画したり作った物の試食とかしてよ、最終的に店の名前もじって紅葉煎餅になったんだ」

「どんな煎餅なの？」

「山の紅葉のように赤、黄、緑とかが派手でさ」

「ほう」

「すっげー辛そうなんだけど、実は紫蘇や柚子皮だから辛くねえんだ」

「へー」

「そこそこ売れてるらしいから俺もホツとしたんだよ。あれだと思っ
ぜ」

大和はまだジト目だった。

「一応聞きますけど、天地神明に誓って他所に女は居ないですね？」

「居ねえっての。誓うぜ」

「まあ、それなら・・・じゃあ一つはそれで良いですね」

「おい待てよ、それ採用するのか!？」

「噂ってこういうもんやからな」

「またクー辺りが絡んできそうだな・・・めんどくせーなー」

「じゃあ2つ目探しますか」

噂話となると盛り上がるのが乙女。

こうして異様に時間をかけつつ8つの噂話が用意されたのである。

「卒業試験・・・ですか?」

朝錬の後、神通から説明を聞いた香取はそういつて首を傾げたので、神通は続けた。

「これは試験という形を取りますが、訓練でもありません」

「はい」

「こちらの目的を悟られずに相手を動かしていくノウハウは大切です」

「はい」

「皆さんでやるかどうか決めて頂いて、受ける場合はご連絡ください
ね」

「解りました。鎮守府の方にも確認を取った上でご連絡致します」

「よろしくお願いします。では、また明日」

「はい、朝錬ありがとうございます」

香取と分かれた神通はふうと小さく息を吐いた。

嘘をついてるわけではないし、騙す意図は無いのだけれど、どうにもこういう事は不得手だ。

それからしばらくして。

「お待たせしました!卵パックとほうれん草、あとバターありました!
た!」

「あら早かったじゃない・・・うん、中身も問題ないわね。ご苦勞様」

「ありがとうございます・・・ところで聞きました?」

「何かしら?」

ワルキューレからの発注を受けた香取達は無事買物を終えた。そして卒業検定を遂行すべく、朝潮と鹿島が事務所に届けに行つたのである。

「いかに自然に話を振るか」

これは結構難しい。

上手く伝わるかなど、心に意図があれば尚更である。

ワルキューレが注文を寄越したのは卒業検定が始まってからだいぶ経っていたので、香取達は練習を重ねられたのである。

「ありがとうございます。またよろしくお願いします！」

「ええ、またね」

事務所から出て車に乗り込むと、二人は小さく溜息をついた。

「・・・いけるかしら？」

「ええ。鹿島さん、かなりお上手だったと思います」

「そう？そう？そっかあー、良かったあ」

朝潮はそんな鹿島を見てにこりと笑いながらシートベルトを締めただのである。

第46話

ちょうど同じ頃。

「はいテッド仲介所・あー、今取り込み中なんだ。後でかけ直す」
ガチャリと電話を切ったテッドは依頼人と交渉しながらもそわそわしていた。

龍田の声色が違った。ついにかかったか？

「・・・どういこうった？」

「んー・・・私の方が聞きたいかなあ」

テッドは町外れの高台にある広い駐車場で龍田と会っていた。

一人になった後、急いで龍田に連絡したところ、

「ちよつと指定する場所に着てくれないかしら。今すぐ」

と、龍田が低い声で短く場所を伝えたのである。

そして、ボデイチェックをされた後、龍田から説明された内容は予想とは全く違ったものだった。

「・・・待ってくれ。じゃああの日、俺の事務所に居たメンバーから漏れてるってのか？」

「貴方達が私達と以外にどの噂が大本営まで聞こえてくるかって事を話してないなら、ね」

そう。

大本営に漏れてきたのは卒業検定で流している噂の全てに加え、

「そういう形で誰が噂してるかチェックしようとしている」

という話そのものだったのである。

龍田は低い声のまま続けた。

「貴方は漏洩させるメリットが何も無いと思うから伝えるけど、他の人には当面ナシでお願いね」

「し、しかし・・・神武海運の連中だって何のメリットもねえだろ・・・」

「でもね、聞こえてくる話を分析すると・・・貴方達に話した事以外は聞こえてこないのよ、ね・・・」

テッドが眉をひそめた。

「なに？」

「貴方には申し訳ないけど、あの日、私達は食事を兼ねて町の幾つかでわざと情報を流したのよ」

「・・・」

「でもそれらは1つを除いて漏れて来て無いの」

「1つつてどこだ?」

龍田は一瞬間を置いてから答えた。

「・・・香取さんに話したものの、よ」

テツドの顔色が変わった。

「おい待てよ、それじゃ共通点は1人しか居ねえじゃねえか」

「・・・」

「ま、待て。神通はそういう奴じゃない。違う。絶対違う」

「ともかく、今はそう言う状況。話はそれだけ。他言無用を忘れないでね?」

「・・・ああ」

「じゃ、そういう事で」

その日の夕方。

「ただいま」

「よう武蔵お帰り。今日は何してたんだ?」

「今日は倉庫の掃除だ。ほら、来週、割と大きな輸送が入ってるだろう?妖精達に休みを取らせなかったしな」

「そ、そうだったな。他の皆も同じか?」

「いや、時雨は私と一緒にやっていたが、他はそれぞれ別の作業をしていた・・・が・・・」

「じ、あ、ああいや、そうか・・・」

テツドの返事を聞いた武蔵は首を傾げた。

「どうかしたのか?」

「うん?・・・あー・・・」

テツドは眉をひそめてしばらく考え込んでいたが、ちよつと出ようぜ

そういうと車のキーを掴んだのである。

「いらつしや」

茶店の引き戸を開けたテッドは奥の座敷を指差しながら言った。

「すまねえな・・大きな玉こんにやくと、道明寺を2つくれ」

老婆はちらとテッドの目を見た後、こくりと頷いた。

「はいよ」

テッドについていきながら武蔵は尋ねた。

「ここに来るのであれば店先の駐車場に停めれば良かったのではないか？なぜあんな遠くに停めたんだ？」

テッドは座敷に上がり、武蔵を通した後にふすまを閉めた。

「・・・ま、とにかく座つてくれ」

少しして、老婆が静かにふすまを開けた。

「置いとくよ。済んだら出ておいで」

「悪いな」

「ごゆつくり」

テッドは出された茶と道明寺の皿を武蔵に手渡した。

「さあてと。えつとな武蔵」

「ああ」

「この前は言わなかったが、この婆さんとは古い知り合いなんだ」

「・・・知り合い？」

「そうだ。俺が元117研だったのは知ってるだろ？」

「ああ」

「その時、証人を匿ってもらってた。いわゆる逃がし屋さ」

「・・・今もか？」

「いや。とつくに足を洗ったけど、この店にはその頃のノウハウが詰まってる」

「どういう事だ？」

「店内は絶対に盗聴されないし、発信機の類も外から検知出来ない。完全な隔離空間なんだ」

武蔵は眉をひそめた。

「なんだそれは。そんな危険があるのか？」

「そういう事だ」

「・・・他の客が入ってきたら？」

「話し終わるまで店を閉めてもらってる」

「穏やかじゃないな。一体何があったんだ」

「例の件、神武海運と俺の誰か、あるいは俺の事務所、このどこかから情報が漏れてる」

「なんだと?」

「俺はお前を信じてる。だから話した」

「・・・龍田からそう言われたのか?」

「そうだ。今日至急会いたいと言ってきてな。直接、口頭で。ボディチェックまでされた」

「・・・」

「俺達が卒業試験という形で何の噂が漏れてくるか探知するって所まで漏れてると聞かされた」

武蔵の表情が険しくなった。

「俺はあの場でしかその部分は話してねえ」

「・・・いや。違うぞ」

「ん?どういうことだ?」

「我々の事務所でも計画の全容を説明したではないか」

「だがそこでもメンバーは俺と神武海運の7人だけだ」

「・・・そうだな。他には何も聞こえてきてないのか?」

「いや、流す噂の内容が全部漏れてるらしい」

「ならばどちらかという和我々の事務所で話した時の内容の方が疑わしくないか?」

「・・・そうか。それらを1度に全部話したのはあの時だけか」

「問題は・・・漏洩経路だな」

「そうだ。あと、龍田はもう1つ言っていた」

「?」

「龍田が香取達だけに話した噂が漏れてるらしい」

武蔵の眉が吊り上った。

「・・・神通だと言いたいのか?」

「俺も絶対違うって言った。あいつはそう言う奴じゃねえし動機もねえ」

「・・・」

「龍田もまだ断定してねえ。だが漏れた情報はそれだけらしいんだ」

「・・・なるほどな」

武蔵は頬杖をつくとき茶を一口啜った。

時間にして1分ほどだったが、その静寂はとても緊張感溢れるものだった。

「テツド」

「ああ」

「外部から1人巻き込もう。ただし事を不必要に大きくしない奴だ」

「なぜだ？」

「私やお前では近すぎて目が曇る。最悪の場合にな」

「・・・となると」

第47話

それから30分後。

ファッツは指定された駐車場にBMWを止めると、怪訝な顔で老婆に訊ねた。

「・・・ええと、何でも屋の依頼と聞いたが、あんたが依頼人か？」

「電話したのは私だけど本当の依頼人は向こうでお待ちだよ。まあ来ておくれな」

座敷に通されたファッツは、中に居るテッド達を見て肩をすくめた。

「おいおい、一体なんだテッド、こんな手の込んだ呼び方して。びつくりしたじゃないか」

「悪い。そうしなきゃならない状態なんだよ」

二人の表情から悪戯ではないと理解したファッツはサングラスを外した。

「どうしたんだ？」

「・・・んー」

一通り話を聞いたファッツは手元の手帳にあれこれ図を書き込んでいたが、

「で、お前達は神通が海軍に漏らす筈がないと思うんだな？」

テッドが頷いた。

「理由がねえよ」

武蔵が首を振った。

「そもそも、我々は海軍から身を隠す為に全員除籍扱いにしてもらったのだ」

「わざわざ会う必要が無い、か」

「ああ」

「なあ、他に誰も居ないか？」

テッドも武蔵も肩をすくめた。

「最初のシーンで俺の事務所に居たのはソロール側の面々を除けば本当

に俺と神武海運の面々だけだ」

武蔵が続けた。

「最初だけに限れば表通りには群衆が居たが、あの位置では中の話は聞こえないだろう」

「2回目は文字通り俺と神武海運の面々だけだ」

ファッツはペンの尾でカリカリと頭をかくと言った。

「そもそも依頼を受けたきっかけとしては何の話が漏れてたんだ？」

テッドは首を傾げた。

「龍田が漏洩テスト用に用意した情報が聞こえてきたとは聞いたが、具体的な中身は聞いてねえな」

「その内容と誰に伝えたか確認出来ないか？」

「・・・よし。店の電話から龍田に聞いてみる」

テッドはふすまを開けた。

「という事で良いかしら」

「すまん龍田。ありがとう」

「いいえ」

通話を終えたテッドは老婆に茶の追加を頼むと座敷にとって返した。

「ファッツ、武蔵、解ったぜ」

「まず、誰向けだ？」

「それがよ、アイウイとビットなんだとさ」

「・・・どうやって龍田はあの二人に噂話など伝えたのだ？」

「俺も聞いたけどはぐらかしやがった。くそ、俺が知らないタイミングでも町に来てやがりそうだなあ・・・」

「それはともかく、内容は？」

「妖精向けの温泉がオープンして、開店記念やってるって話。もちろん嘘っぱちだそうだが」

ファッツがぴくりと顔を上げた。

「武蔵」

「ん？」

「お前さん、今は妖精乗ってないな？」

「ん？あ、ああ。それがどうかしたか？」

「最初、あるいは2回目、艦装に妖精が乗ってなかったか？」

武蔵はすぐに頷いた。

「ああ。1回目は帰港直後で戦闘の可能性もあったから妖精は全員乗ったままだったし・・・」

テッドはファッツを見た。

「お、おいファッツ。まさか漏洩ルートって・・・」

ファッツは頷いた。

「可能性だ。2回目はどうだ武蔵？」

武蔵はしばらく考えていたが、

「あの日は神通は香取達と早朝演習を終えた直後だったから、乗っていた可能性はある」

「他は？」

「・・・ないな」

ファッツが頷いた。

「神通だけが疑われるという部分もこれで説明がつかない」

テッドが首を傾げた。

「けどよう、ビットの所にしろ、神武海運の所にしろ、妖精達はどうかやって海軍に伝えてるんだ？」

ファッツは肩をすくめた。

「まずは検証が要るだろ。妖精が気にしそうな噂を1つでっち上げよう」

「どうやって妖精だけに伝えるんだ？」

「武蔵から妖精に聞かせるとして、何か案はないか？」

「艦装の整備後テストとして洋上航海を短時間行えば良い。それなら単独で出られるしコストも僅かだ」

ファッツが頷いた。

「よし。じゃあネタを何にするかな」

翌日。

「神通、邪魔するぞ」

「何でしょう？」

「艤装の缶を整備したんだが、少し洋上で確認したくてな。20分ほど近海に出ても良いか？」

神通は帳簿をパラパラとめくって頷いた。

「ええ、それくらいでしたら備蓄燃料で行けますから大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。テストが済んだらすぐに戻る」

「缶は重要部品ですから急がなくて良いですよ。しっかりと確認してきてくださいいね」

「すまん」

一瞬、武蔵がじっと見ていたので神通は首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「・・・いや、何でもない。神通も艤装は手を入れてるかと思つてな」

神通は苦笑した。

「私は前科ありですからね。でも大丈夫です。最近はこちらとやってますよ」

「そうか。ならば良い。では行ってくる」

「行つてらっしゃい」

・・・パタン。

武蔵が閉めたドアを一瞬見つめた神通は、再び手元の書類作業に戻った。

「右前進微速の後、両舷前進原速黒15。缶の圧力と温度を記録！」

「了解！」

武蔵はちらりと艤装の上で動き回る妖精達を見た。

鎮守府を飛び出す前からずつと行動を共にしてきた者達であり、ある意味神通達より深い付き合いだ。

そう、思っていた。当然のように信じてきた。

本当に、そうなのだろうか・・・

「全体検証結果、微速から全速まで問題ありません！」

「よし！検証を終わる！」

「はい！」

ピシリと敬礼する妖精達に武蔵は微笑んだ。

「ところで・・・たまには甘味でも一緒にどうだ？」

妖精達は破顔一笑した。

「・・・だそうだぞ。噂だな」

武蔵の話を聞いていた妖精達は口々に答えた。

「そうなんですかー！」

「楽しみー！」

「でもこの間の話は完全なデマだったじゃねえか」

武蔵はその一言に答えた。

「デマ？何かあったのか？」

「聞いてくださいよ武蔵さん。先日ね、妖精友の会の忘年会があったんじや」

「うむ」

「そこでどっかの妖精がね、妖精専用の温泉がオープンするって聞きつけてきやがったんですが」

武蔵は表情を変えないように気を遣いながら答えた。

「ほう、そんなのが出来るのか？」

「それが完全な嘘っぱちだったって後で解りましてね、言いだしつぺをとつちめてやりたいでさ」

「出来るのなら行って来たら良いと思ったのだが、迷惑な話だな」

「まったくでさ」

「ところでその、妖精友の会とやらはこの町の妖精が集まるのか？」

「え？ええ、この町の艦娘に所属してる妖精が集まりますあ」

「・・・」

武蔵はテッドに相談すべきかと一瞬躊躇ったが、小さく首を振ると告げた。

やはり私は神通達を、この部下達を信じたい。

「機関長」

少し離れた所で談笑していた機関長役の妖精は、武蔵の声に駆け寄ってきた。

「はい！なんでございましょうか！」

「皆を信じて頼みがある。聞いてくれないか」

「はい！よし！全員集合！全員集く合く！」
機関長の言葉を合図に、妖精達が武蔵の周りにぞろぞろと集まりだした。

第48話

その日の夜。

武蔵はテッドに次第を伝えたが、テッドは眉をひそめた。

「おいおいおい、妖精に狐狩りをさせるって大丈夫なのか？」

「私と乗組員の信頼関係は強固なものだ。裏切るなどありえない」

「まあ、もう話してしまったのなら後戻りは出来ねえか」

「ああ。あの噂がいつ出てくるか。龍田にしっかりと確認させろ」

果たして2日後、その電話はかかってきた。

「はい、テッド仲介所」

「こんにちは、大山さくん」

その一声を聞いたテッドは一気に眉をひそめた。

「・・・来たか？」

「ええ。妖精が紅葉屋でコマネチの真似をするとブルーハワイのワンドリンクサーブスってやつ」

「OK、確認する」

「がんばってねー」

電話を切ったテッドは事務所の戸締りをするのと車に乗り込んだ。

「どうだ機関長、何処が該当する？」

武蔵が問うと一斉に妖精達が帳簿を確認し始め、やがて報告を受けた機関長が答えた。

「ビットさんの建造妖精殿にお話した噂です。間違いありません」

「えええっ?!わ、私、な、なな何もしてませんよ師匠!信じてくださいよー!」

「でも貴方しか知らない噂なのよ、これ」

「そんなあ!」

ここは夕島整備工場に程近い海岸であり、建造妖精に話しかけているのはビットである。

その背後には武蔵と武蔵所属の妖精、そしてアイウィとテッドであ

る。

可哀相なくらい怯えきつた建造妖精はプルプルと首を振った。

「本当に！ほんつとーに海軍なんぞにネタを流したりしやせん！師匠を危険に晒すような真似、あつしはしません！」

「うーん・・・」

ビットは建造妖精長の方を見た。

「でも、話は本当なの。何か考えられる線は無いかしら？」

建造妖精長はギヌ口と殺意の籠った目で建造妖精を睨みつけた。

「てめえ師匠に後ろ足で砂かけるような真似しやがって！洗いざらい白状しやがれ！」

「ほんとーに知らねえんですよー！」

「今夜のおやつ抜くぞ！」

「やめてえええ俺の唯一の楽しみがああああ！」

やり取りを見ていたビットは怪訝な顔で武蔵に振り向いた。

「一応聞くけど、他に可能性は無いのよね？」

武蔵は即答した。

「ああ」

「うーん・・・でもうちの子が海軍に告げ口するなんて考えられないんだけどなあ・・・」

アイウイがそつと手招きした。

「ねえ、ばりっち。武蔵さん。ちよつと」

ビットは妖精達に断ってからアイウイの方に寄ってきたので、武蔵も続いた。

「はいはいなーに？」

「どうした？」

「ばりっち。あの子って普段どこに詰めてるの？」

「仕事場所って事？」

「うん」

「どうして？」

「その場所に盗聴器とか無いかな？」

「なんでそう思うの？」

「あの工場、夕張会のセーフハウスじゃん」
ビットの表情が変わった。

「……えつまさか」

武蔵はぎよつとしてアイウイを見た。

「そつそうなのか？」

アイウイは自分の唇に人差し指を当てた。

「シュー！声大きいよ武蔵さん」

武蔵は周囲を見回してから頭を下げた。

「あ、す、すまない……そうだったのか。盗聴なら当人に心当たりが無いのは納得だな」

ビットは腕組みをしながら眉をひそめた。

「うーん……確かにそういう類は調べた事無いわねえ」

「あの子は多分やってないよ。だとしたら仕事場所か、武蔵さんの妖精から噂を聞いた場所に仕掛けられてないかな」

「よし、関係者と呼んでこよう」

「奴に噂を伝えた場所……ですか？」

武蔵の機関長は部下に訊ねると、すぐに答えた。

「夕島整備工場の妖精用応接室だそうです」

ビットが建造妖精長に訊ねた。

「妖精用応接室ってどこにあるの？」

「ええと、師匠の事務機の天板の裏というか、一番上の引き出しの奥ですわね」

「引き出しの奥？」

「ええ。引き出しって、天板の奥行の半分くらいしかねえんですよ」

「へー」

「だからその奥側の空きスペースに床を作って応接室にしてるんですよ」

アイウイが首を傾げた。

「なんでそんなところに？」

「エアコン効いて涼しいですし、電気の配線も通ってるんで照明とか付けやすかったんで」

「なるほどねえ」

ビットがポケットから手袋を取り出した。

「じゃあ調べてみましょう？建造妖精長さん、手伝って」

建造妖精長はビシツと敬礼した。

「了解です師匠！」

建造妖精は涙目で訴えた。

「おいらの無実を証明してください！ほっとにやってねえんですよ……」

そして1時間後。

「おつかしいわねえ……」

「無い……でやんすねえ……」

逆探知システムで電波を探ったり配線やコンセントタップ、壁まで剥がした。

見かねた武蔵の妖精達も総出で探したが、ついに見つからなかったのである。

テツドが肩をすくめた。

「これだけ探してなきやねえだろー」

「普通なら諦めるレベルよねえ……」

建造妖精長は建造妖精をジト目で見た。

「てめえ……」

「絶対！絶対違いますから！」

武蔵が逆探知機を手を取った。

「反応は一切無かったんだな？ビット」

「ええ」

「ふむ……」

そう言いつつ武蔵はスイッチを入れると、

ピーツ……ピーツ……ピーツ……

途端にアラームが鳴ったので、武蔵はビットに見せた。

「おい、反応があるではないかー！」

ビットは小さく手を振った。

「これよ、これ」

そういうとビットは一番上の引き出しからスマホを取り出し、逆探知機に近づけた。

ピッ!ピッ!ピッ!ピピピピピピ!

「ね?スマホの電波を検知してるのよ」

テッドがスマホを凝視した。

「なあおい、ビット」

「なあに?」

「スマホに仕掛けられてねえだろうな?」

「・・・えっ?」

全員が目がスマホに注がれた。

30分後。

「し、師匠、100%普通のスマホです。絶対間違いねえです」

「ご、ご苦労様・・・」

ビットの配下でも電子系に強い妖精達が細部まで分解し尽くしたが、スマホの中に盗聴器は仕掛けられていなかった。

テッドは尚も疑わしそうにスマホを睨んでいた。

「ちげーのかなあ・・・」

「だってこれ、普通に電気街で買った型落ち新品のスマホですもの・・・」

「でもよう、普段仕舞ってるのが一番上の引き出しなんだろう?」

「ええ」

「つてことは妖精応接室に近えじゃねえか」

「まあそうね」

丁寧に組み立てなおしたスマホをビットに返しながら妖精は答えた。

「ハード的には普通のスマホですからね。そりやマイクもスピーカーも通信機能もありますけど・・・」

アイウイが眉をひそめた。

「ねえばりっち」

「なーに?」

「幹事君って常駐ソフトだよね?」

「ええ」

武蔵が怪訝な顔をした。

「幹事君とは何だ？」

ビットが手をひらひらさせた。

「幹事君は夕張会会員なら誰でも持つてるアプリよ。飲み会の幹事とか投票機能があるの」

「・・・盗聴機能は無いんだな？」

「えっ？」

全員の視線が再びスマホに集まった。

第49話

そして、その日の夜。

テッドは受話器に向かつてうんざりした顔で話しかけていた。

「龍田さんよ。判明したぜ、何もかもな」

「聞かせて〜」

「まず、誰がと言う意味では、妖精って事になる」

「・・・はい？」

「所長達が来た時、神武海運は帰港直後だったから妖精達が艀装に乗っていた」

「・・・」

「その妖精達が夕島整備工場の応接室で、夕島整備工場の妖精に茶飲みついでに話しちまった」

「・・・で、聞いた側の妖精さんが売ってたの〜？」

「ちげーんだなこれが」

「？」

「その妖精用応接室ってのがビットの事務機の引き出しの奥にあるんだけどよ」

「ええ」

「その引き出しの中にビットがスマホを仕舞っててな」

「ええ」

「スマホの常駐ソフトに「幹事君」という夕張会の作ったソフトがインストールされててな」

「・・・ええ」

「ビットがロクに説明読まずに弄ったせいでラジオトーク機能が常時ONになっててな」

「えっ・・・」

「ビットとアイウイの会話とか妖精用応接室の会話とかの諸々が夕張会全員の幹事君に流れてたんだよ」

「あー」

「だから幹事君のラジオトーク機能を聞いてた夕張が鎮守府内に噂として流したって訳さ」

「情報源を皆が直接聞いてたら情報は極めて正確に伝わるわねえ・・・」
「ああ」

「なるほど。夕張会なら大本営にもメンバーがいるわねえ」

「その大本営所属のレイとか言う奴を問い詰めたら白状したよ」
「なんて？」

「世間の日常会話が面白かったからビットには内緒にしておこうって皆で示し合わせてたんだと」

「・・・わあ」

「もちろん町の死活問題だって事を説明して納得させたし、設定も直させた。だからしばらく様子を見てくれ」

「なるほど、なるほどお。筋道は通ってるわね。他にルートが無いと良いんだけど」

「そうである事を祈ってるぜ。とりあえず、報告は以上だ」

「じゃあ1ヶ月くらい聞こえてこなければひとまず完了にしましょうね」

「あ、いや、半年、いや1年くらい様子見ても良いぜ？」

「・・・」

数秒の沈黙の後、龍田は続けた。

「そろそろ提督の事は許してあげて、本当にテッドさんの事高く評価してるのよ」

「絶対大本営には戻らねえからな」

「解ったわよ。だから香取さん達を手伝ってあげて」

「そっちだけだよ、本当に分析依頼来るのか？」

「そのつもりだけど・・・今はそこそこ忙しいんじゃないの？」

「今日明日寄越せて言ってるわけじゃねえが、当初の話とだいぶ変わってねえか？」

「そお？」

「そもそもあの5人を使って狐狩りさせようとしたんだろ？」

「訓練やりながらの副産物として期待しただけよ？」

「で、狐狩りは終わったわけだろ」

「そうね・・きつとね」

「でも香取達のなんでも屋はNG出しただろ？卒業試験の後はどうすんだよ」

「それなんだけど〜」

「おう」

「卒業検定合格の代わりに何でも屋の開業を近々OKにするって伝えるから〜」

「なんでだよ？」

「色々あるの〜」

「まあ良いけど、俺達はもう普通に隣人としてつき合わせてもらうぜ？」

「しよがないなあ・でもDeadline Delivers登録の件はお願いね〜？」

「カムフラージュ用の話だろ。解ってる」

「じゃあ1ヶ月経ったら連絡するわね。完了とするかはその時に〜」

「はいはい。あ、龍田！」

「なあに？」

「完了の礼とか言って所長寄越すなよ！絶対な！」

「先手打たれちやったかあ。しよがないわねえ・・解ったわよ〜」

ガチャリと電話を切ったテッドはニツと笑った。

今度こそ龍田を先回りしてやった！

一方。

「・・・そういう事だったんですね」

神武海運では武蔵と武蔵所属の機関長が神通達とその所属妖精達に説明を行っていた。

神通がふるると身震いした。

「私に疑いがかかっていたとは・武蔵さん、無実を証明してくださいってありがとうございますございました」

神通の機関長がぺこりと頭を下げた。

「誠に申し訳ありません。喋った者につきましてはおやつ抜き1ヶ月

の処分とし、皆にも徹底させます」

龍驤が肩をすくめた。

「そうは言ってもどーでもええ噂の1つ2つ喋るのはしやーないで？」

山城も頷いた。

「機械が勝手に音を拾ってたのなら誰も悪意は無かったわけだしね」

時雨が首を振った。

「逆を言えば、そういう事が現実にあつたわけだから、どこでも気をつけるべきだつて事じゃないかな」

大和は頬杖をついた。

「まあ過去の歴史で言えば、情報管理の不徹底が戦争の敗因の1つではあるんだけどねえ」

扶桑が首を振った。

「人の口に戸は立てられぬと昔から言いますからね」

武蔵が頷いた。

「確かに噂話の1つや2つ解らなくはないが、そんな事で仲間を疑うのはもううんざりだ」

神通が溜息をついた。

「まあ、濡れ衣は嫌ですしね・・・」

「噂話は程々に、という事だな。まあ今回神通は何も悪くなかったのだが」

龍驤が答えた。

「後は・・・スマホには注意して事かいな？」

山城が頷いた。

「たとえば無料で性能が良いと有名な某日本語入力アプリは中国の諜報機関に入力情報を流してるのは有名な話よ」

「タダより高いものはあらへんつて事やんなあ」

「アプリを作るには数千万の金がかかる。タダで配るつて事は誰が何故その金を負担してるのかつて事よ」

「何が欲しいねん？噂話とかか？」

「違うわよ。企業システムのログインIDやパスワード、あるいは株

価を左右する機密情報とか、そういうもの」

「ゴツソリ知りたいたいから日本語入力アプリに化けてるスパイっちゅう事かいな。あこぎやなあ・・・」

「調べもせずホイホイ入れるユーザーが悪いのよ」

武蔵が頷いた。

「という訳で、一応1ヶ月くらい様子は見るが、漏れが続かなければ一件落着、だ」

大和が手を叩きながら言った。

「武蔵とテッドさんの夫婦初の共同作業、大成功ね。お疲れ様〜♪」

「んなっ!?!」

時雨達も口々に

「そうだったね」

「せやせや! ホンマめでたいな〜」

「おめでとうございます〜」

などと言いながら手を叩いたので、武蔵は真っ赤になって俯いたという。

第50話

翌日。

「や、今度の件では本当に助かったよファツゾ」

「我々も一言御礼を申し上げたくて参りました」

ファツゾの家を訪ねたテッドと神武海運の面々は次第を説明し、深々と頭を下げた。

そして出迎えたワルキューレとファツゾ達を前に顛末を説明したのである。

ナタリアは目を丸くした。

「私達の艦装に妖精は居ないけど、建造や修復をする機械には居るって聞くし、他人事じゃないわね」

フィーナは肩をすくめた。

「そういう漏洩ルートは考えもありませんでしたね・・MADFの頃も」
ファツゾも頷いた。

「俺もそんな結末は予想してなかったよ。解決出来たのは武蔵が皆を信じたおかげじゃないか？」

ちようどその時、ベレーとミストレルがお盆にコーヒーを載せて運んできた。

「コーヒー淹れましたので、皆さんどうぞ」

龍驤がにこりと笑って紙袋を掲げた。

「せやせや、これケーキ屋で買うて来たんや。皆の分ちやあんとあるさかい、食べんか？」

その途端、ベレーが紙袋を見つめたままピタリと止まったので、大和が声をかけた。

「べ、ベレー・・ちゃん？」

完全に目の光を失ったベレーは紙袋を凝視しながら呟いた。

「・・・気配がします」

龍驤は紙袋を持ったまま周囲を伺い、怪訝な顔をした。

「け、気配ってなんやねん・・・敵か？」

「違います。ビーネンシュティツヒの気配がします」

龍驤はごくりと唾を飲んだ。

「よ、よう解つたな・・ケーキ屋のおばちゃんに聞いたらファッツゾ達はそれしか買わん言うから・・」

「15個・・ワルキューレの皆さんの分も含めて全員に1個ずつ行きま
すね」

「せ、せやで・・ん？どっかに個数書いとんのか？」

龍驤が箱の底を見ようと傾けたので、ベレーが慌てて言った。

「あつ、そつ、それ以上傾けたらNO8が潰れちゃいます！」

「NO8てなんやねん!？」

ベレーは両手をババツとかざした。

「そのまま！そのままテーブルに置いてください！私が保護します
！」

龍驤は爆弾を扱うようにそつと紙袋をテーブルに置いた。

「こ、これでええか？」

「はい。それでは紅茶を淹れてきますね」

「へ？いや、今コーヒー淹れたんやからそれで・・」

龍驤が言いかけたのをファッツゾが全力で阻止した。

「待て龍驤！全てベレーの言う通りにするんだ！」

ファッツゾの言葉に小刻みに頷いたのはワルキューレの面々とミス
トレルである。

「な、なんでファッツゾ達真つ青やねん？ま、まあ好きにしてええけ
ど・・」

ベレーがゆつくりと頷いた。

「お任せされます。アツサムのミルクティーを23%濃い目、任務開
始です」

ベレーは紙袋をそつと手に取ると、

「ビーネンシュティツヒ・・ビーネンシュティツヒ・・今日も良い子達
ですね」

と、眩きながらキッチンへと向かったという。

それから月日は流れ。

「どうぞ、開いてますよ」

ドアをノックする前に部屋の中から声がしたので、廊下に居たリットリオはびくりとしながらドアを開けた。

「し、失礼します：ほ、本日付で着任いたします、パスタの国からやってきました、戦艦・・・」

「リットリオ・・・いえ、LV的にはもうイタリアさんですね？」

香取は執務机越しにリットリオを見て微笑みながら続けたが、そのリットリオは目を見開いた。

「へっ？あ、はい、確かにイタリアへ改造可能なLVですけど・・・どうしてご存知なんでしょうか」

香取はくすくすと笑った。

「いらっしやる時の身のこなしや艦装の扱い方で。なんとなくですけど」

「そうなんですか。あ、あの、こちらでは鎮守府では習わない特殊技能を身に着けられると伺いまして」

「特殊技能と呼べるほどの物ではありませんが、身に着けておいて損は無いですよ」

「はっはい。これから2ヶ月の間、お世話になります。どうぞ、よろしくお願いいたします」

「こちらこそ。では早速ですが、武器を選択致しましょう」

「武器、ですか？兵装なら381mm／50三連装砲と・・・」

香取はにこやかに、軽く手を振って制した。

「ああいえ、そうではありません。詳しくは鹿島から説明させましょう」

「という訳で、最初の2週間はこの家の外に出る時はツーマンセル徹底って事です！」

「そうなんですかあ・・・」

鹿島の部屋に案内されたリットリオは、この町の状況や武器を携行する必要性の説明を受けていた。

次第に青ざめて行くリットリオを前に鹿島は続けた。

「というわけで、リツちゃんはPDW撃った事ある？」

「いいえ。兵装はそれなりに経験がありますけど、ハンドガンやPDWは・・・」

「普通そうだよな。じゃ、どれを持つか実際に撃ってみようよ」

そして、1時間後。

海岸沿いに立つ香取達が有する射撃訓練場の中で、リットリオはイヤーマフを外しながら頷いた。

「うん・・・この辺りの方が撃った後に痺れが少ないですね」

鹿島はデザートイーグルを手に取り、首を傾げた。

「こっちは厳しかった？」

「ええ」

「そつかあ・・・やっぱりそうだよなえ」

今度はリットリオが首を傾げた。

「やっぱり・・・と仰いますと？」

「物凄いストツピングパワーって事で買ってみたんだけど、だあれも使えないの。失敗しちゃった」

鹿島がペロリと舌を出したので、リットリオもつられて笑った。

「それは1発撃つと銃口が物凄く上に跳ね上がるので、手首が引っ張られて痛くて・・・」

「15発目くらいから狙った所に当てるの至難の業になるよな」

「はい。でも使えないわけじゃないですから、私が使いますしょうか？」

鹿島は首を振った。

「ううん。1発撃てれば良いってもんじゃないからね。毎日何十発と撃つ事になるし」

「あ、射撃訓練もあるんですね？」

鹿島は自分の顎に手を当てた。

「んー・・・最初は軽く訓練するし、後は希望があれば補正訓練もするけど・・・」

「えっ?」

「とりあえず、リツちゃんのハンドガンはベレッタM93Rね。朝潮ちゃんとお揃いだねっ!」

リットリオは目を丸くした。

「あ、朝潮さんですか？」

「うん」

リットリオは一瞬迷った。軽過ぎる選択と言われているのだろうか・・・

「・・・あ、あの、ちなみに鹿島さんは何をお持ちなんですか？」

「私？」

「ええ」

「これだよっ」

そう言うのと鹿島はひよいとホルスターから銃を抜いたが、リットリオは眉をひそめた。

「それ・・・ハンドガン・・・なんですか？」

「うん。Vz61スコルピオン。チェコ製のハンドガン。可愛いでしょうっ。」

第51話

リットリオは鹿島のVz61を眺めた後、

「なんか、あれに似てますね」

そう言つて、テーブルに置かれていたAK-47を指差した。

鹿島はにっこりと笑った。

「どっちも旧東側の武器だから似てるのかもね！弾も含めてミニチュアって感じ」

「あの、試しに撃たせて頂いても良いですか？」

「いいよー」

リットリオは手渡されたVz61をテーブルに置くと、しっかりとイヤーマフをかけ直した。

ドパラララララッ！

「……………」

リットリオは煙の立つVz61にそつとセーフティをかけ、信じられないという表情でマガジンを引き抜いた。

果たしてそこには1発の弾も残っていないかった。

一方でのを見ると弾があちこちに散らばっている。

これでは集弾性もへつたくれもないではないか。

イヤーマフを外したリットリオは恐る恐る鹿島に振り向いた。

「あ、あの、ちよつと引き金に指をかけたら全弾撃ち尽くしてしまいました」

「分速800発だから30発撃つのに2秒ちよつとかな。少し遅くしてるから実際は3秒くらいだよ」

「あ、あの、1回撃つ毎にマガジン替えるんですか？」

鹿島は笑つてひらひらと手を振った。

「そんな訳ないよ、そんな事してたら死んじやうもん」

「で、でも……」

「セレクター動かせば単発でも撃てるけど……ちよつと貸して」

そういうと鹿島はイヤーマフを着けながら、リットリオが立っていた射撃台に向かった。

タン！タタン！タタタッ！タタタタッ！タタタタッ！

鹿島はきつちりと単射から5発バーストまで2回繰り返すと、イヤーマフを取った。

「ね？これで30発。何発でも止められるし、結構柔軟に発射数の配分が出来るんだよ？」

的の中央に集まった弾痕を見ながらリットリオは恐る恐る答えた。

「な、なるほど・・・そうみたいですね・・・」

「リツちゃんもこれにする？」

リットリオは首を振った。

「私には無理なので、M93Rが良いです」

「そう？これをホルスターから抜くだけで山賊さん達は一目散に逃げてくから楽だよ？」

「・・・でしようね・・・」

リットリオは何度も頷いた。

恐ろしく物騒なマシンピストルと、それを笑顔で意のままに扱う艦娘。

そんな組み合わせに喧嘩を売るような馬鹿は長生き出来ないだろう。

一瞬、鹿島と遭遇した山賊達が哀れに思えたリットリオであった。

「じゃ、M93Rの使い方をおさらいして、弾をどれにするかも決めよっか！」

「あら、お帰りなさい。丁度良いところに」

家に戻った二人は廊下で香取に呼び止められた。

鹿島はにこりと微笑んだ。

「香取姉え、ただいまっ。何か用事？」

「たった今、夕島整備工場のアイウイさんから電話があつて、車の修理が終わったと」

「じゃあ町の案内兼ねて二人で取りに行ってくるね！リツちゃん行くっー！」

「あ、あの、私、車の運転はした事が無くて・・・」

「だーいじょうぶ大丈夫！行ってきまーす！」

「ふんふくん♪あ、もうタンポポ咲いてる！今年は暖かいもんね〜」
「……」

楽しげに歩く鹿島の隣でリットリオはガチガチに緊張していた。武器を携行し、ツーマンセルで歩かないといつ襲われるか解らないと説明されたばかりであり、無理も無い。

鹿島は通りの店を指差しながらリットリオに振り向いた。

「ねえねえリッチちゃん！クレープ好き？」

リットリオは店と通りを挟んだ側にたむろするガラの悪そうな面々から、そつと目を離した。

「あ、はい。こちらに来る前に間宮さんの所で試食させて頂きました。美味しいですよ〜」

「じゃあその店で売ってるから食べながら行こうよ！おごつてあげる！」

「え、あ……良いんですか？」

鹿島がくすつと笑い、悪戯っぽく声を潜めた。

「香取姉え見てないし、大丈夫」

リットリオはきよとんとした後、にこりと笑って頷いた。

鹿島は両手にクレープの包みを1つずつ持ち、ずずいとリットリオに差し出した。

「はい。ベリーソースのチーズケーキと、キャラメルアーモンドバナナどっちが良い？」

「うえっ！そ、そんな……そんな選びがたき2つのどちらかを取れというのですか？」

「選ばないと私が両方食べちゃうよ〜？」

「うー……キャッツ！キャラメルで！」

「あはは。じゃあこつち。途中で一口あげる」

「ありがとうございます！」

そう言つて鹿島からリットリオはクレープを受け取ろうと、した。だが、その時既にリットリオは後ろに突き飛ばされていた。

そしてリットリオの居た場所で宙を舞っていたクレープが四散したのである。

「いつ…いつたあ…な、何が起きたのですか？」

リットリオは屍餅をつき、地面に落ちたクレープの欠片を見て呆然としていたが、ふと見ると鹿島が居ない。

「？」

慌てて見回すと、通りの反対側に鹿島は居た。

「お前…一体どういうつもりだよ…」

「すみません！狙うつもりはこれっぽっちもなかったんす！」

「知らねえよこのボケナスが…」

「か、勘弁してくださいませ鹿島の姉御！」

そう。

鹿島はVz61を握りしめ、

額に幾つもの青筋を浮かべ、

震えながら土下座するチンピラ達を見下ろしていたのである。

チンピラ達の釈明によると、銃の安全装置をかけていれば落としても暴発しないかどうかでモメたという。

だから（実弾が入ったまま）実際にやってケリをつけることになった。

そして案の定暴発し、二人に向けて弾が飛んで行った、という訳である。

鹿島はゴリゴリとVz61の銃口をチンピラの頭に押し付けながら続けた。

「私の大事な後輩の服が汚れたんだけどなー」

「ク、クリーニング代は今すぐきっちりお支払いしやすー！」

「木っ端にしてくれやがったクレープ代も弁償しやがるんですよねえ？」

「お好きなものをどうぞー！」

鹿島がフンと息を吐いて立ち上がり、矛を収めようとしたその時。「なんでこんな小娘一人に土下座してんだ？お前えら？」

リットリオは今やってきた巨漢のチンピラに思わず手を合わせた。戦艦リットリオ、ご冥福をお祈りします。

ヒュウウウウ…

車道の真ん中で距離を置き、鹿島と向き合う巨漢。

「勝つたら何でも好きな事させてもらうぜえ？ 後で泣き叫んでも知らねえぞお？」

「あーはいはい、さっさと抜きなさいよ」

リットリオはカタカタと震えていた。

傍目には鹿島は面倒臭そうに突っ立ってるようにも見える。

だが、放たれる殺気が洒落になってない。

棲姫クラスが裸足で逃げだすレベルである。

・・・ヒュッ！

確かに巨漢がホルスターからリボルバーを抜く速度は早かった。

だが、その銃を構える前に、

「グゲハッ！」

巨漢の鼻に鹿島の蹴りが、その細いピンヒールを經由してめり込んでいた。

反動で道端へと転がりゆく巨漢を更に数発蹴り飛ばすと、巨漢は瘻撃したまま泡を吹いていた。

鹿島はスタリと着地すると正座したまま成り行きを見ていたチンピラ達にジト目で視線を投げかけた。

「あーすつきりした。運動したからお腹空いたなあ・・・」

チンピラ達は再び土下座した。

「幾つでもどうぞー！」

「皆にお土産も欲しいなあ」

「お好きなだけどうぞー！」

「ああ、あの子の服のクリーニング代3万ね？」

「えっ？」

「・・・なに？」

「何でもありません！」

リットリオは小さく頷いた。

強盗どころか大半の深海棲艦より怒った鹿島の方が怖い。絶対逆らってはいけない。

第52話

出てきたそれを目の前にして、リットリオは恐る恐る指差した。

「あ、あのう」

「なあにリツちゃん？」

「しゅ、修理・・・終わっただんですよね？」

「そうだよっ」

「これで・・・終わって・・・るん・・・ですか？」

アイウイが中庭から出てきた1台の車は、確かに自走していた。だが、ボディのあちこちに銃弾らしき穴が無数に開いており、サイドに至ってはただの鉄板で補強してある。

これですらに機関砲でもあれば、世紀末なSF映画にでも出てきそうな車である。

リットリオの指摘に車から降りてきたアイウイは肩をすくめた。

「まあ普通そう思うよねえ・・・私達もちゃんと直せるし、これならもう買い替えなよって毎回言うんだけどねえ」

鹿島が苦笑しながら手をひらひらと振った。

「どうせ1週間でボロボロになるんだから安いが一番！アイちゃん今回は何回？」

「えっと、フロントガラス修理とラジエターホース交換、中古タイヤ1本で合計3万コインだよ」

「はいこれ。領収書ちよーだい」

リットリオが首を傾げる中、アイウイに支払いを済ませた鹿島はドアを開けた。

「さっ、早く帰ろっ。お土産もあるし、貴方の服をお洗濯しないとね！」

「は、はい・・・」

リットリオは恐る恐る助手席のドアらしきものを開けた。

帰る道すがら、リットリオは鹿島に訊ねた。

「あ、あのう、鹿島さん」

「なあに？」

「シートが随分穴だらけなんですけど・・・」

鹿島はハンドルを切りながら肩をすくめた。

「そうなの。ガラスが割れちゃった後も撃ち込まれるとシートに弾がめり込んじゃうの」

「はあ」

「弾は取り出すし、最初はシートも縫ったりカバーかけたりしてたんだけど、もう多過ぎて諦めちゃった」

「・・・穴が開く事がって事ですか？」

「ええ」

リットリオは改めて自分のシートの穴を見た。どう見ても背もたれを貫通して後ろが見えている。

それはつまり、助手席に座ってた人も・・・

「え、ええと、もう一つお聞きしたいんですが」

「うん」

「た、たとえばこの穴が開いてた時、こちらにおかけになっていた方は・・・」

リットリオの質問の意味に気づいた鹿島はころころと笑った。

「あはは！大丈夫大丈夫！誰も座ってないよ。お化けとか居ないから！」

「誰も？」

「最初の2週間はお買い物も2人で行くけど、銃撃戦になった時はシートベルトして座ってられないしね」

「えっ？」

「運転手はしようがないけど、助手席の人は文字通りショットガンだからー！」

「えっ？ショット・・・ガン？」

きよとんとするリットリオに鹿島は頷いて続けた。

「あー・・・えつとね、英語で助手席に乗るって「ride shotgun」っていうんだけど」

「へえ・・・」

「それは馬車の時代に、道中出てくる敵をショットガン撃って追い払ったからなんだって」

「も、文字通り護衛役ですね・・・」

「お買い物任務についてももう時は、最初は運転手やってもらうからね」

「えっ?」

「助手席役が下手すると二人とも死んじゃうから」

「えっ」

「1週間過ぎたら助手席デビュー、2週間過ぎたら後は一人で行くんだよ」

「一人!?!」

鹿島は苦笑した。

「お買い物物のギヤラは安いからねえ：本当は一人で行かないと赤字なの」

リットリオは鹿島の左腕にすがった。

「あ、ああああの本当に運転した事無いんです。ど、どこかで練習を・・・」

「んー、じゃあこれから練習する?途中に広い駐車場あるから」

「ありがとうございます!よろしくお願いします!」

「えっと、まずは操作方法は解る?」

リットリオは運転席に浅く腰掛けたまま硬直していたが、ふるふるとう首を振った。

鹿島はポリポリと頬を搔いた。

「とりあえず、まずはちゃんと座ってみよっか」

「・・・ちゃんと、座る?」

「でないと運転が下手になっちゃうのです!」

「わ、わわわわわわ・・・あうー」

「後ろに下がりがながら曲がる時はもうちょっと早めにハンドルを切ろっか!」

「も、もう1度やってみます!」

「がんばってー」

こうしてとつぷりと日が暮れてもリットリオの運転練習は続いたのである。

「歓迎会も済んでないのにこんな夜遅くまで引つ張りまわす人がありますか！」

「ごめんなさいーい」

「あつ、あのつ、私が鹿島さんに運転を教えて欲しいってお願いしたんです！」

その晩。

夜になったのでとりあえず帰ろうと鹿島が言い、二人が戻った所、玄関で香取が仁王立ちしていたのである。

「一体どれだけ心配したと思ってるんですか……ところでリットリオさん、どうして服が汚れてるのですか？」

「あ、ええと、途中でガラの悪い人の銃が暴発して……」

香取はリットリオの服の汚れをじつと見つめた後、鹿島に向き直った。

「……鹿島さん、お土産は買ってきましたか？」

鹿島がニツと笑って頷いた。

「もつちろんです香取姉え！」

「モンブラン？」

「はいー！」

鹿島から紙袋を手渡された香取は肩をすくめた。

「仕方ありませんね……リットリオさん、歓迎会の前にお風呂をどうぞ。鹿島さん、案内してあげて」

「はい。じゃあお風呂頂いてきますー！」

「汚れた服は脱衣かごの一番上に置いてくださいいね？」

「はい。いこつ、リツちゃん！」

鹿島に手を引かれたリットリオは香取に一礼すると、廊下を小走りに駆けて行った。

「おめでとー！」

「ようこそー！」

「そしてお疲れ様ー！」
そう。

今夜はリットリオ着任の歓迎会と同時に、利根のお別れ会でもあった。

列席者は香取と鹿島の他、隼、朝潮、利根、そしてリットリオというメンバーである。

「まあわしはお姉さんじゃからな、筑摩の奴が居なくてもちやんとやるのじゃ！」

利根はそう言つて胸を張つたが、

「でも先月、筑摩さんがお戻りになった日は随分寂しそうですよね〜？」

と、鹿島から指摘されると顔を真っ赤にしていた。

香取は頷きながら続けた。

「明日、鎮守府からは筑摩さんがお迎えに来られるそうですよ」

「なに？それは本当か！」

「ええ。良かったですね」

「うむ！筑摩の奴が寂しがっておろうからな！早く会った方が良かったー！」

一段と上機嫌になった利根を見て、残る面々は優しく微笑んだのである。

第53話

宴も終盤になった頃、リットリオはそつと利根の隣に座った。

「あの、利根さん、お聞きしたい事があるのですが」

「うむ。リットリオ殿、何でも聞くが良いぞ!」

「そ、その、ここで生き残るには何が大事でしょうか?」

利根は冗談かと思つたが、リットリオの真剣な目を見て頷いた。

「・・・そうじゃな。最優先すべきは仲間を信じる事だ!」

「はい」

「次はの、逃げる時は余計な事を考えずにまっしぐらに、一心不乱に逃げきる事じゃ!」

「へっ?」

「車の中を買つた物が残つておるとか、財布を置き忘れたとか、そういう事を考えてはいかん!」

「・・・なるほど」

「とにかく逃げる時は逃げる!命あつてのモノダネじゃ!あとは何とかなるからの!」

「利根さんはどれくらい、そういう命の危機にあいましたか?」

利根は小首を傾げたが、やがて首を振つた。

「我輩は香取達と立ち上げから携わつた事もあつて何年も居たからの。もはや数え切れんな!」

「・・・そう、ですか」

「だが我々がこの訓練を始めた頃に比べれば狙われる事も随分と減つたぞ」

「そうなんですか?」

「うむ。我々を襲つても返り討ちにあうだけだと悟つた山賊や強盗団は手を出してこんからな!」

「じゃ、じゃあ、買い物途中で銃撃にあう事も、実は最近だとあまりないとか」

「いや!3回に1回はあるな!」

当てが外れてがつくりと肩を落とすリットリオに、笑いながら利根は続けた。

「おぬしはまだ顔を知られてないからしばらく一人で歩くでないぞ。間違われるからの！」

「・・・間違われる？」

「うむ。観光で迷い込んできた旅行者と間違われれば100%襲われるからの！」

「ええと、さつき鹿島さんと歩いてた時、ガラの悪そうな人があちこちで地面に座ってたんですが・・・」

「そやつらもそうじゃし、山賊も居る。山賊の方が重武装でしつこいがの！」

リットリオは軽くめまいがしたので額に手を当てた。

2カ月も居て、本当に帰れるのだろうか。

利根が鹿島の方を向いた。

「鹿島よ、今日は座学と散歩か？」

「いいえ。銃選びと運転練習も始めました！」

利根がリットリオに向き直り、にこりと笑った。

「ほう。やる気満々じゃのう。良い事じゃぞ」

「・・・他の方はどうだったのですか？」

利根はささつと視線を逸らす臙を指差した。

「こやつは来てから1週間は部屋に閉じこもりつきりじやつたな！」

臙は真っ赤になって利根に食ってかかった。

「ばっバラさないでくださいよー！」

「こんな地の果てのゴミ溜めみたいな町に出たくなあいつか抜かしおつての！」

鹿島が頷いた。

「食堂に流れ弾が飛んできた時は柱にしがみついてわんわん泣いてたよね」

リットリオが恐る恐る訊ねた。

「そ、その場合でも・・・お買い物は行くのでしょうか？」

臙が首を振った。

「ううん。アタシは本当に最初の1週間は怖くて部屋から出られなかったし、無理に行けとも言われなかった」

「そうなんですか」

「でも、今から思えばあの1週間があれば色々出来たのについて後悔してるんだ」

「えっ?」

「私も車運転出来なかったし、リツちゃんみたいに初日から練習すれば良かったなあって」

「・・・」

「本当に毎日があつという間だよ。で、やればやるほど楽しいんだよ」
香取がころころと笑った。

「あらあら、まあまあ、臃さんはこの1ヶ月で本当に成長なさいましたねえ」

鹿島が頷いた。

「もう何の買い物任せても安心だし、頼りにしてるよっ」

てへへと照れ笑いをする臃を見て、リツトリオはにこりと笑った。

不安は一杯あるけれど、臃や皆の言葉を信じてみよう、と。

翌日。

「・・・はい、はい。承知致しました」

受話器を置いた香取は廊下で声を上げた。

「リツトリオさーん、朝潮さーん、買い物の依頼ですよー」

キュキュキュ・・・ドルン！ドルドルドル・・・

リツトリオは手が真っ白になるくらいハンドルを握り締めていた。

昨日とは違う車のキーを手渡され、行ってみるとフルサイズのアメ車。

穴の開き具合は似たような物だったが、とにかくボディが大きい。乗ってみると車の四隅が気が遠くなるほど遠く、しかも角が丸いからどこか解らない！

き、きき昨日駐車場でちよつと走らせただけでいきなり路上?しかもこんな車で!?

だ、だだ、大丈夫なんでしょうか・・

助手席に滑り込んだ朝潮は買い物メモを見ながらシートベルトを締めた。

「今日はよろしくお願いいたします。早速ですが昨日鹿島さんから買物の事は何か聞いてますか？」

「ぜ、ぜぜ、全然」

朝潮はM93Rのスライドを引き、チャンバーに初弾を送り込むと頷いた。

「なるほど。まだ初日ですから大丈夫です。少しずつ覚えていきましょう。とりあえず左に出ましようか」

「はっはいー!」

ブ、ブレーキを踏んでシフトレバーをD、ウインカーを下げて・・よし!

リットリオはキツと車庫の出口を睨みつけた。

「い、いつ、行きますっ!」

「オーライオーライ・・オツケーだよばりっちー」

「はーい。じゃあ1台手配するわね。今預かってる1台はなるべく早く返すわね」

香取はビットに向かって頭を下げた。

「よろしくお願いいたします」

一方、その頃。

「ごめんなさいごめんなさい、本当にごめんなさい」

「見事に刺さりましたね。まあ正面の家は空き家ですから
そう。」

初運転に緊張して力みまくったリットリオはアクセルを底まで踏みつけた。

さすがの朝潮でも全力で突進する車を制御出来るものではなく、真正面の家の塀に激突した。

連絡を受けてレッカー車でやってきたビットとアイウイは一目見るなり廃車だと言いつつ切った。

「ねえねえ、リツちゃん怪我してない？大丈夫？」

「!!!」

朝潮に頭を下げていたリツトリオは、鹿島の声を聞いて文字通り飛び上がった。

そしてそのまま見事なスライディング土下座に移行した後、

「お、おおおおおおお許しを！どうか！どうかお許してください！ごめんなさい！」

と、ぶるぶる震えたのである。

第54話

香取、鹿島、朝潮、そして遅れてやってきた朧はぽかんとその様子を見ていたが、朧がひよいと屈みこんだ。

「どしたのリツちゃん。何か悪い物でも食べた？」

「・・・」

ぽろぽろ涙を零しながら恐る恐る顔を上げたリツトリオに、朧は続けた。

「・・・あー、もしかして車オシヤカにしちゃったから怒られるって思ってる？」

コクコクコク。

「そういえば歓迎会では話に出なかったけど・・・皆何台も車壊してるから平気平気」

「・・・はい？」

相変わらず真つ青な顔色のリツトリオに、今度は鹿島が屈みこんだ。

「昨日工場で言ったでしょ、安いが一番って」

「は、はい」

「お買い物行けば大体穴が増えるし、機械的に壊されるのもしよっちゅうだし」

「・・・」

「あと、研修に来た子は大体この車庫から初めて出す時に壊すんだよ」
朧が苦笑した。

「通過儀礼みたいなもんだよ。私もほら、そこの壁見て」

リツトリオを見ると、ガレージの柱が削れ、ペンキらしき物がこびりついている。

「車庫入れ失敗して派手にドアを擦っちゃったんだけどさ、香取さんがそれを見て言ったの」

「・・・な、なんと仰ったんですか？」

「初めてのお買い物から帰ってきて、まだ車が動くななんて凄いです

ねって」

「……」

呆然とするリットリオに香取が微笑んだ。

「今まで研修にいらした方で、車が自走可能な状態で初めての買い物から帰ってこられたのは臈さんお一人です」

「そ、そんなに襲われるんですか？」

「ええ。山賊の方々も良く見ておられます。見た事のない方がハンドルを握っていれば、ほぼ間違いなく」

朝潮が微笑んだ。

「自損事故も多いですよ。半々くらいですね」

その時、リットリオがハツとしたように香取の方を向いた。

「……あつ！香取さん！大変！」

「どうしました？」

「か、買い物！お客様から頼まれた買い物！」

「それなら心配要りませんよ……丁度帰ってきたようですね」

香取が頷いた時、ガレージに戻ってきた車から降りてきたのは利根と筑摩だった。

一足早く降りた筑摩が声をかけた。

「只今戻りました、香取さん」

「この時間ですと特に問題は無かったようですね」

「ええ。引き金を引かれる前に全部始末しました」

ボタンと運転席のドアを閉めた利根が次いだ。

「筑摩は新人と間違われるかと思ったが、奴等め覚えていたらしいな！」

筑摩がポリポリと頬をかき、FN-P90を取り出した。

「これを手にしていたから……かもしれませぬね」

リットリオはピンク色に塗られたFN-P90をぼかんと見つめた。

「あ、あの、筑摩さん専用のカラーリングなんですか？」

筑摩は苦笑した。

「え、ええ。元々は銃撃戦の際にペンキがかかってしまったのをどう

にかしようとしたただけなんですけど」

利根はニツと笑った。

「筑摩はチェリーピンクの悪魔と恐れられておったのう」

筑摩は肩をすくめた。

「たまたま250m先のバイクのタイヤに命中したただけなんですけどね」

「4回も当てるのをたまたまとは言わんな！」

「ハズレも多いじゃないですか。でも、久しぶりに利根姉さんとお買い物行けて楽しかったです」

「うむ、最後に良い思い出をもらえた。香取殿、粋な計らいに感謝するぞー！」

香取はくすつと笑った。

「こちらこそ助かりました。そろそろ出発のお時間ですか？」

筑摩が時計を見て頷いた。

「そうですね。これから少し寄り道しながら港まで行って丁度位です」

鹿島がひよこつと筑摩に顔を向けた。

「お土産買うの？」

「はい。といっても加賀さんとか球磨さんとか、頼まれた方の分だけですけど」

鹿島が苦笑した。

「全員分はキツイもんねえ」

「はい。長門秘書艦からお土産は買ってこなくて良いと念押しさせていただきますし」

「じゃあ皆でお見送りしよっか」

「・・うむ。では我輩達はそろそろ行くぞ。筑摩！土産に買い忘れは無いなっ！」

「はい、利根姉さん」

「.....」

利根は岸壁に立ったまま、町を見上げた。

「過ぎてみれば全ては良き思い出、じやな。香取、鹿島、朝潮、隴、そ

してリットリオ殿」

「はい」

「そなた達も達者でな・・・な、泣くでないぞ！」

利根と同じように目を潤ませた鹿島が答えた。

「なっ泣きません！鹿島は泣いてなんかいません！」

「うむ、うむ、それで良い。それで良いぞ鹿島！」

「・・・利根さあん！」

「鹿島あああ！」

リットリオは利根と鹿島がひしと抱き合い、香取や朝潮が涙するのを見て呆気を取られていた。

鎮守府でも艦娘達は仲が良い。姉妹艦以外でも艦の歴史上、一緒だった事が多い子達は仲が良い。

それでもこれほどに別れを惜しむ事はあまりない。

逆を言えば、それほど強い絆が結ばれるほど、ここでの生活は濃いつい事か。

・・・何となく解る。解りたくないけれど。

「ではの！またの！達者でなあ！」

「利根さんもー！お達者でー！」

「今まで本当にありがとうございました！」

「さよーならー」

リットリオは朧に訊ねた。

「あの、朧さんはあんまり泣かないんですね」

「私はまだ1ヶ月しか居ないしねえ」

「というと？」

「あつちの3人は利根さんと一緒に何年もここに居たみたいだし、ひとしおなんじやないかなあ」

リットリオは頷いた。

苛烈な戦場を一緒に生き抜いた戦友は生涯の友になる事が多いという。

・・・やっぱりそんな酷い場所なんですね。

翌日。

「・・・はい、はい。承知致しました」

受話器を置いた香取は廊下で声を上げた。

「リットリオさーん、鹿島さーん、ちよつと来てくださーい」

「か、かか、買った車の受け取りですか？」

一気に青ざめるリットリオに、香取は手をひらひらと振った。

「受け取る車の方は鹿島さんに運転してもらいます」

「よ、良かった・・・」

「ですが、いつまでも運転に苦手意識を持ったままでも困ります」

リットリオは俯いた。

「・・・そうですよね」

「ですから、帰りは鹿島さんの後に続いて運転してきてください」

「・・・後ろに？」

「ええ。夕島整備工場からちよつと遠回りしてこちらに戻ってくる間に運転に慣れて頂きたいのです」

「・・・」

リットリオは考えていたが、ぎゅつと頷くと、

「お買い物のためには車は必須です。リットリオ、頑張ります！」

と、答えたので、香取はにこりと頷き、鹿島に車のキーと封筒を手渡したのである。

第55話

「封筒の中に車の代金が入ってます。アイウイさんから伺った通りの額です」

鹿島は受け取りつつ訊ねた。

「香取姉え、何時くらいまでドライブしてきて良い？」

「夜にかからないくらいまでですね」

「うん、解った」

「運転しながらの護衛になりますから気をつけてくださいね」

「はあい」

「へー、こんなの良く手に入ったねえ」

「だね。珍しいけど、ちゃんと直せるから大丈夫だよ」

「・・・お安く？」

「もつちろん！」

「さっすがアイちゃん解ってるうー」

「いえーい！」

鹿島がアイウイとハイタッチしてる時、リットリオはそつと納車された車に触れていた。

確か日本に来る前、イタリアの博物館で見ましたね・・・え？

リットリオは慌ててアイウイに振り向いた。

「あつあのっ！」

「なーにリットリオさん」

「こっこれ、物凄く古くないですか？」

「まあ20世紀の車だし。でも部品が単純だから直しやすいよ」

「そ、そうなんですか」

リットリオは車の後ろに回り、4x4と誇らしげに輝くプレートをなぞった。

「・・・これ、どういう意味なんでしょう？」

「4輪駆動って事だよ。舗装の悪い道でも行けるって事」

「そうなんですか・・・」

アイウィからキーを受け取った鹿島は、リットリオが見つめるフィアットパンダ4×4のドアを開けた。

「んー、穴が開いてないシートに座るの嬉しいなあ。ごめんねリツちゃん」

「い、いえ。また廃車にしてしまったら申し訳ないです」

「アクセルは軽くーじわっと踏もうねー!」

「はい!」

鹿島はにこりと笑った。

「じゃー出発うー」

・・・キツ。

目の前で信号待ちをする空色のパンダを見ながら、リットリオは小さく息を吐いた。

夕島整備工場から続く道は広い事もあり、なんとか今まで擦らず、ぶつからず、乗り上げずについていけた。

鹿島が明らかにゆっくり走ってる事は他の車を見れば明らかだった。

ふとリットリオは思った。

ここでは何をしろ、という命令は非常に少ないし、したくなければ拒否も出来る。

でも、やるとなれば自分がちよつと頑張れば出来そうな、そんな所を設定してくれてるのではないか。

利根が言っていた、仲間を信じろとはそういう事なのかもしれない。

「さすが、練習巡洋艦ですね」

青信号とともに左折していくパンダを追いながら、リットリオはくすつと笑った。

それは、突然の出来事だった。

日が西に傾いて空に少し赤みが差した頃、2台はカーブの多い山道へと入っていた。

いつの間にか隣町まで来ており、帰るにはこの山道を抜けなければ

ならなかったのである。

その頃にはリットリオもすっかり運転に慣れていた。

鹿島のパンダと少し車間を空けつつ走っていた所、通り過ぎた脇道から2台のジープが現れた。

・・・何となく今まで出会った車達と雰囲気が違う。

リットリオは嫌な予感がした。

「な、なんですか・・・あれ」

バックミラーを見てそう呟いた後、前に視線を戻したリットリオは目が点になった。

凄まじい白煙を上げた鹿島のパンダの「真横」が目の前に見えていたからである。

「ぶつかるっ！」

咄嗟にパンダのテール側にハンドルを切ったリットリオは辛うじて激突を避けた。

「あわわっ！あわわわわわっ！」

キツ、キツ、キキーツ！

リットリオは急ハンドルを繰り返して横転を避けつつ、鹿島のパンダからだいたい離れた所で車を停止させた。

最後に路肩のガードレールにサイドを軽く擦ってしまったが、リットリオは気づいていなかった。

パララッ！パラララッ！

リットリオは元来た道を凝視していた。

ジープに対してパンダを真横に向けた鹿島は、ガラスを開けたドア越しに車内からVz61を撃っていた。

数回の銃声の後、1台のジープが横転する！

だが、もう1台はパンダの脇をすり抜けた。

リットリオの全身に鳥肌が立った。

鹿島に加勢するか、逃げるか。

「余計な事を考えずにまっしぐらに、一心不乱に逃げきる事じゃ！」

一瞬、利根の言葉が頭をよぎる。

だがリットリオはぐつと奥歯を噛み、ドアを開けた。

ガチャッ!

スキール音をたて、ヘッドライトをハイビームにしたままこちらに突進してくるジープ。

リットリオはその光景が不思議とスローモーションのように見えたとという。

「戦艦、リットリオ・・・抜錨します」

キキキキーツ!

「リツちゃん!逃げなさい!」

Vz61を撃ちながら叫ぶ鹿島の声がかすかに聞こえる。

だがリットリオは、その場で身構えると目を細めた。

「・・・一番、二番主砲、狙え」

猛然と近づいてくるジープ。

だが、棲姫クラスに対峙する事に比べれば、これくらい。

リットリオは軽く息を吸った。

「今よ。撃て!」

ズドム!

峠道に爆音が木霊した。

「あつはつはつは!やったねリツちゃん!マジでホームランだ!」

「うううううう・・・」

「ここに伝わる武勇伝の中でもぶっちぎり1位だよね香取さん!」

「あ・・・否定出来ませんねえ・・・」

「お恥ずかしいですう・・・」

家に戻ったリットリオは、夕食を用意して待っていた臙に笑顔でバシバシ肩を叩かれながら、そう言われたのである。

数時間前。

迫り来るジープを木っ端微塵にした所までは良かったのだが、リットリオの主砲は威力が強すぎた。

おまけにジープが積んでいた燃料が弾薬に引火したのか、激しい爆発は道路脇の斜面まで崩してしまっただのである。

道路に向けて膨大な土砂がズズズと低い音を立てて覆いかぶさる様を、リットリオは呆然と見つめていた。

「……あ……か、鹿島さん……鹿島さああああん！」

リットリオは慌てて近づこうとしたが、土砂は後から後から覆いかぶさってくる。

ためらっている間にも土砂崩れは続き、ついに斜面に生えていた木までが覆い被さってしまった。

もう向こう側は完全に見えない。

「ど、どど、どうしよう……どうしよお……」

リットリオはどうやって鹿島を探せば良いのかと途方に暮れていたが、ふと大勢の気配に気づいて振り向いた。

「なあ、見ない顔だが……アンタ艦娘さんだろ？とりあえず話は聞くから抵抗はナシにしてくれ。警察だ」

そこには数十名の、アサルトライフルをこちらに真っ直ぐ構えた重武装の警官達が居たのである。

話しかけたのは警官達の少し後ろに立ち、ハンドスピーカーを構えている警官だった。

「あ、あの……鹿島さんが……鹿島さんがそこに！助けて……助けてください……お願いします！」

リットリオが真っ青な顔で土砂を指差した、その時。

「リツちゃあん、大丈夫？……あ……」

聞きなれた声の方を振り向いたリットリオは、木の枝をかき分けて出て来た鹿島を見つけた。

「鹿島さん！鹿島さああああん！うわああああん！」

鹿島の顔を見て安心したせい、ペたりと座りこんで泣き始めるリットリオ。

大勢の警官達にどう説明しようかと頬を掻く鹿島。

だが、この町の警官にとってそんな事は慣れたものだった。

「ま、署でお話聞かせてもらうぜ。とりあえず背中の中の物騒な物を仕舞って、あのバスに乗ってくれ」

3回ほど同じ説明を繰り返し、案内された署の留置場でしょんぼり

座っていると、迎えに来たのは香取だった。

涙目のリットリオを見つけた香取は無言で頷き、隣に居た警察官が独房の鍵を開けた。

「香取さん・・・」

「お話は何いしました。とにかく出ましよう」

「か、鹿島さんは？」

「玄関で朝潮さんと一緒に待ってますよ」

第56話

「外歩かせる前に陸でのルールって奴をちゃんと教えといてくれよ、頼むぜほんとに」

「誠に申し訳ありませんでした」

警察署の正面玄関先で署長はひとしきり香取に苦言を放った後、

「もういい．．．さっさと帰んな」

そう言ってくるりと背を向けたのである。

香取を先頭に、鹿島、朝潮、リットリオという順番で、4人は無言のまま警察署を後にした。

リットリオはとぼとぼと歩きつつ、頭の中では大会議の真つ最中だった。

自分がした事がとても大きな問題になった事は警察官の口ぶりからも良く解っていた。

路肩を崩してしまったのは全くの予想外でした．．．と言っても始まらないですよ。

皆で徒歩という事は、乗っていた2台の車は土砂に埋まってしまったのでしょうか。

買い物屋にとつて欠かせない車が1台も無くなってしまいました。これからどうなるのでしょうか。

こんな大事を起こしてしまった事について、私はどう責任を取れば良いのでしょうか。

鎮守府に強制送還されるのでしょうか。

それとも解体？

ら、雷撃処分は許して欲しいです．．．でも．．．

警察署が見えなくなり、海岸沿いの道へと曲がった時。

前に行く3人の足取りが明らかに軽くなった。

「？」

怪訝な表情をするリットリオに香取が振り向いた。

「反省の意は示さねばなりませんからね。警察の皆様にご迷惑をかけ

てしまいましたし」

リットリオは泣きそうな顔で答えた。

「ほ、本当に申し訳ありません」

「・・・でも」

「？」

「これで山賊の方々の隅々にまでリットリオさんは認知されましたね」

「へっ？」

きよとんとするリットリオを横目に鹿島が笑った。

「山賊さんも含め、人間相手に兵装を使っちゃいけないって海軍からお達しが出てるんだよ」

「・・・そう、ですよね」

「だからこの町の艦娘さんにしろ、深海棲艦さんにしろ、地上では兵装を使わないんだけど」

「すみません」

「でもね」

「・・・？」

「ナタリアさんが峠道を走っても山賊さんが誰も出てこない理由は「え？ええ」

「ナタリアさんは山賊さんを見つけるとすぐに主砲撃ちまくるからなんだって」

「・・・つまり」

「あの峠道で主砲撃ったのは、今の所ナタリアさんとリットリオさんだけってこと！」

「そ・・・その・・・ナタリアさんって・・・」

「町でいっちゃん喧嘩を売っちゃいけない深海棲艦さんだよっ！山賊さん的にはナタリアさんとリットちゃんは同じって事！」

「うわああああん」

「どういう事かようやく認識したリットリオの方を、朝潮はポンポンと叩いた。

「これでもう、峠道で狙われる事は無いから良いじゃないですか」

「それは嬉しいですけど、なんか違いますよう」

「別に山賊と交流を深める為に研修にいらしたわけではないですよね？」

「そ、それはそうですけど・・・」

鹿島が肩をすくめた。

「あ、しばらくは町で歩くと急に人通りが絶えたり、皆が一目散に逃げてくと思うけど、落ち込んだらダメだぞっ」

「も、もうさっきの事を知ってる人が居るんですか？」

香取は苦笑した。

「砲撃音が出て、機動隊が大勢連なって出動するなんて事、滅多にないですからね」

そして一呼吸間を置いた後、

「その・・・既に町の住人で知らない人は居ないと思います」

「えっ」

「その証拠に・・・ここはメインストリートなんですけれど・・・」

香取が周囲を指差しながら言ったのでリットリオも視線を回すと、
そう言えば誰も居ない。

店という店は closed の札がかかっている。

今は日が暮れようとしているが、まだ宵の口にも関わらず、店内に
明かりが見えるにも関わらず、である。

リットリオは嫌な予感がしつつも香取に訊ねた。

「つまり・・・ここに私が居るから・・・お店まで閉まってるって事ですか？」

「簡潔に申し上げればそうなりますね」

「じゃ、じゃあお買い物物の任務が出来ないじゃないですか・・・明日から
どうしたら良いんでしょう・・・」

朝潮が肩をすくめた。

「まだ着任して3日目の夜ですし、街の中で砲撃でもしない限り2〜
3日で店に入れるようになりますよ」

リットリオはジト目になった。

・・・そうだった。

自分がこの町に来てからまだ3日目、正確には2日と半日しか経ってない。

あまりにも濃密な時間過ぎて、もう何年も居るような気がしていたけれど。

「・・・朝潮さん」

「なんででしょう?」

「今までいらした方々も、こんなに濃密な時間を過ごされたのでしょうか?」

朝潮は少し考えた後、ちらと鹿島を見た。

つられてリットリオを見ると、鹿島は香取を見た。

皆から見られた香取はおほんと咳払いを1つした後、そつと言った。

「3日目で機動隊のご厄介になるほど大暴れしたのは：リットリオさんが初めてですね」

「やっぱりいい・・・うわああああん」

鹿島がベソをかくリットリオの肩を叩いた。

「まあこれで後に続く子達は随分気が楽になるし」

「・・・どういう意味ですか?」

「え?聞きたい?」

「解るから良いですう・・・うう、恥ずかしい・・・」

香取が肩をすくめた。

「ここで立ち話を続けても仕方ありませんし、家に帰りましょう」

連なつて帰宅する中、ふと朝潮が香取に訊ねた。

「明日からですが、リットリオさんは引き続き運転役ですか?」

リットリオはハツとして香取を見たが、香取はきよとんとした顔で

朝潮を見返した。

「運転にも慣れたと聞きましたし、何か問題がありますか?」

リットリオが音速で突っ込んだ。

「問題無い訳ないじゃないですか!誰も出てきてくれないんですよ!」

「運転役として車から出なければ影響ありませんし」

「えっ？そんなアバウトな対応で良いんですか？」

鹿島は笑った。

「出てこないって言うのはね、この町がこういう事に慣れてるって証
拠でもあるんだよ」

「・・・慣れてる？」

「ずっと前だけど、ナタリアさんは喧嘩売ってきた艦娘を背後のビル
ごとぶっ飛ばした事もあるし」

「い!？」

「その報復合戦として艦娘達と深海棲艦が町のだ真ん中で互いに主砲
撃ちまくったり」

「・・・えー」

「一方で密入国者が山賊か強盗になって襲ってくるから町の人は皆武
器携行してるし」

「初日の一番最初に銃を選びましたもんね・・・」

「銃撃戦なんてしよっちゆうだし、だから皆身の守り方を知ってる」

「・・・」

「銃声ができるからと言って1日中閉じこもってたら生活出来ないで
しよっ・・・」

「・・・ですね」

「だからリツちゃんが普通に過ごして、自分に危害を加えないと解つ
たらすぐ元通りになるよ」

「そう・・・でしょうか」

「ちゃんと見てないと、変化の激しいこの町じゃ生きていけないもん
リツトリオは小さく首を振った。

「私が聞いていた日本という国とあまりにも違いすぎます」

「どんな事聞いてたの？」

「誰もが非武装で、夜中に若い女性一人でもどこでも歩いて、皆親切
で、ごはんが美味しくて・・・とか」

朝潮が顎に手をやった。

「今となると、上位の政令指定都市・・・くらいですかねえ・・・」

「えっ、どういう事ですか？」

香取が頷いた。

「大本営や大規模鎮守府の近辺、大都市圏は警備体制が強化されてるので比較的治安が良いんですよ」

鹿島が首を傾げた。

「でも普通に歩けるのは日があるうちで、夜出歩いて犯罪に巻き込まれても同情されないって聞いたけどなあ」

「大本営周辺なら可能でしょうけれど、職務質問は沢山されるでしょうね」

「意味も無く大本営の周辺をうろうろしてたらねえ」

リットリオが再び溜息を吐いた時、朝潮が笑った。

「まあ済んだ事は仕方ありませんし、家に着きましたよ」

リットリオは車庫を二度見した。

空色のフィアットパンダ、そして自分がさっきまで乗っていた車がガレージに戻っていたからである。

第57話

リットリオは車を指差しつつ鹿島に訊ねた。

「あ、あの、車・埋まってなかったんですか？」

鹿島が肩をすくめた。

「木が倒れてくる前に逃げたよ。リツちゃんの車は木が倒れた所とは離れてたじゃん」

「そうですか・あ、あの・いえ、やっぱり良いです」

リットリオは山賊のジープはどうしたのか聞こうかと思ったが止めた。

そもそも主砲を命中させて誘爆させたのだから木っ端微塵に決まってる。

鹿島はちらとリットリオを見て続けた。

「ちなみに山賊さん達は全員逃げたからね」

リットリオは目を剥いた。

「……ええっ!?!ど、どうして?主砲の弾を当てたんですよ!?!」

「リツちゃんが機装展開した時点で横転してたジープに乗ってた山賊さんは皆逃げてったし」

「……」

「向かって行った車の方も主砲の砲門が向いた時点で山賊さん達後ろから飛び降りてたもん」

「……見えませんでした」

「ねっ、皆慣れてるでしょ?」

「……だから私の事が山賊の間に知れ渡ったわけですね」

「そういう事。さ、ゴハン食べよっ!」

リットリオは再び溜息をついたが、表情は先程より穏やかになっていた。

香取はそんなリットリオを見て微笑むと、玄関のドアを開けた。

程なく夕食を用意して待ち構えていた臙に、リットリオは根掘り葉掘り事情を聞かれたという訳である。

「リットリオ、ただいま戻りました」

「香取さん、買い物および依頼主への引渡し任務完了です」

「大変お疲れ様でした。トラブルはありませんでしたか？」

「はい、なんとか」

「何よりです。今は次の依頼も来ておりませんからゆっくりしてくださいね」

二人の報告を聞き、香取はにこりと頷いた。

リットリオが着任して6日目が暮れようとしていた。

隼が一人でパンダに乗って、リットリオは朝潮を助手席に乗せ、交代で買い物に出ていた。

鹿島達が言った通り、あの翌日はリットリオが運転する車が通ると人通りがごっそり減った。

しかしその次の日、つまり昨日はというと、ほぼ元通りの人通りとなったのである。

ただしあくまで、リットリオが車から出ない限りは、である。

「あつ、リツちゃんに朝潮ちゃん、おかえり。良い所に来たね」

二人がリビングに入ると、鹿島が手招きをした。

「なんででしょう？」

リットリオが返事をしながら近づいていくと、鹿島がニツと笑った。

「1番から4番まで好きな番号を1つ言って！」

「1番」

眼光鋭く朝潮が即答したのを見てリットリオはわたわたしつつも、

「さ、3番で」

と、答えた。

鹿島は頷きながらそれぞれに包みを手渡した。

「はい、1番がこつちだから、朝潮ちゃん」

「頂きます」

「これが3番だから、リツちゃん！」

「あ、あの、これは・・・」

朝潮は、リットリオをキリツとした顔で見返しながら答えた。

「補給物資です！」

「ほ、補給・・・物資？」

「開けてみれば解ります」

そういつて朝潮が自分の包みを解いた。

中から出てきたのはクツキー、チョコ、キャンデー。なぜか豆大福も一つ混ざっている。

「いよっしやあああ豆大福いらっしやいましたあああ！・・・あつ」

全身で勝利を表現した朝潮が、自分を見つめる鹿島とリットリオの視線に気づいて赤面した。

「朝潮ちゃんは豆大福が大好きだもんね。良かったね」

「は、はい。あ、ええと、こういう事です」

リットリオは赤面しつつも説明してくれた朝潮に頷き、自分の包みを開けた。

中身はほとんど一緒だったが、唯一違ったのは

「このお饅頭・・・とても綺麗な色ですね」

鹿島がにこりと笑った。

「・・・紅白饅頭だよ。小さいけど2個入りだからお得感あるよね」

朝潮も頷いた。

「そうそう、お饅頭だけは早く食べた方が良いですよ」

「日持ちしないんですか？」

「いいえ。争奪戦になるからです」

「争奪戦？」

朝潮はソファに腰掛け、自ら言った通りに早速豆大福を頬張りながら言った。

「たとえばその紅白饅頭は、鹿島さんの大好物です」

「へっ？」

リットリオは反射的に鹿島を見て、そして気づいた。

鹿島は普段通りに装っているが、肩の辺りからゆらゆらと怪しい気配が漂っている。

「・・・あ、あの、鹿島さん」

「なーに？」

「鹿島さんの包みには、どんな和菓子が入っていたのですか？」

「茶饅頭だよー」

「じゃっ、じゃあそれと・・・」

だが、朝潮は続けた。

「茶饅頭は香取さんの大好物です」

「えっ」

「ちなみに豆大福は私も好きですが、臃さんも大好物です」

「えっ・・・じゃ、じゃあ残る包みは・・・」

朝潮が鹿島を見ると、鹿島は頷いた。

「1つはもちろん激辛煎餅だよー」

「定番ですよね」

「ハズレが無いと盛り上がりたくないからねえ」

「残る包みは？」

「豆大福だよー」

「ですよねえ」

リットリオは状況を整理した。

包みは恐らく5つ用意され、それぞれの包みには香取、鹿島、朝潮、臃の好物が入っている。

ただしハズレとして激辛煎餅が1つだけ入っている。

鹿島が5番を取り、茶饅頭が入っていたのだろう。

どれを引くかはお楽しみだが、もたもたしていれば食べる前に奪われ、手元に激辛煎餅が残る。

そういう事か。

リットリオは苦笑した。自分も辛い食べ物あまり得意ではない。

しかし鹿島の目の前で鹿島の好物を食べるのはとても気が引ける。

さりとて鹿島の持つ茶饅頭と交換しても今度は香取から恨まれる。もたもたしていれば激辛煎餅に化けてしまう。

自分が貧乏くじを引きたくなければさっさと食べろという事、か。しかし、リットリオが紅白饅頭のケースを取り出したとき、鹿島が

明らかにピクリと反応した。

「・・・」

リットリオはちらと鹿島を見つつ刹那の間迷ったが、小さく頷いた。

「鹿島さん」

「な、なあに？」

「私も食べてみたいので、はんぶんこ、しましよう」

「へっ？」

そして。

「・・・あ、あの、鹿島さん、そんな真剣にならなくても大丈夫ですよ？」

「いいえ。好意にはきつちりお応えしなくてはなりません！・・・直径4

6. 224ミリ！よし！」

そう。

リビングから台所に移動した2人は紅白饅頭をまな板に乗せた。

執刀役の鹿島は目を三角にして饅頭の大きさを測り、今まさに刃を入れようとしていた。

包丁を熱湯消毒までしている所が鹿島らしい。

果たして包丁は饅頭に吸い込まれるように滑らかに入り、崩れる事無くきつちり2等分されたのである。

「じゃあ・・・頂きます」

リットリオは鹿島がつまんだのと同じ、薄紅色の片割れをつまんだ。

「リツちゃん待って、紅白饅頭を食べるなら渋い緑茶が絶対に必要なんだよっ。はい！」

鹿島がそう言って茶の入った湯飲みを手渡す。

「あ、ありがとうございます」

「左手にお饅頭、右手に湯飲み。OK？」

「お、OKです」

「ではっ！」

「頂きますっ！」

鹿島の真似をして饅頭を一口で頬張り、続いて茶を啜ったりリットリオは驚いた。

これは・・・これは美味しい。饅頭の甘みの後味が渋茶で際立つ。なんとというハーモニー。

これは好物になるのも納得です！

「続いて白行くよ白！」

「はい！」

・・・はむっ・・・ずずずーっ・・・

「美味しい！」

「でしょ？」

「はい！」

「んふふん、解ってくれて嬉しいよ」

「これはまた食べたいですね」

「でしょ」

リットリオと鹿島はころころと笑いあっていたが、リビングのほうから

「じゃあ次回からは鹿島さんとリットリオさんは大バトルですね」

と、いう朝潮の声が飛んできた。

リットリオと鹿島が笑顔のまま笑い声が一瞬止まったが、朝潮は気づかなかつた事にした。

なお、その晩。

「んなっ！そっ、そんな筈はありません！そんな筈はっ・・・ああ・・・そんな・・・」

激辛煎餅は見事に香取が選んだ包みに入っていた。

香取は必死になって煎餅を食した後、鹿島から茶饅頭を差し出され、涙目で飛びついたという。

第58話

「あ、あの、なんと御礼を申し上げれば良いか・・・」

着任から16日目を迎えたリットリオは、BMWの助手席でファツゾに頭を下げていた。

「別に話のついでに乗せたただけだ。気にしなくて良い」

「いいえ。本当にありがとうございます」

話は1時間ほど遡る。

恐ろしいくらい誰一人出てこなくなった峠道を、リットリオは一人で運転していた。

昨日が15日目だったので一人で買い物に行く事になったリットリオだったが、何事も無く終わった。

今日も今日とて買い物任務が入り、今はその帰り道という訳である。

頼まれた物はきちんと揃ったし、指定時間までだいぶ余裕もある。

「今日もこのまま、何事も無いと良いですね・・・」

そう言った途端、車のボンネットから真っ白な煙が立ち上ったのである。

「はい・・・はい・・・解りました・・・そうですね」

香取に連絡したリットリオは、車は香取の方で夕島整備工場に連絡するから買った物を届けるよう指示された。

その通りだとは思うのだが、車は道路脇でオブジェと化している。

「仕方ありません・・・」

リットリオはとぼとぼと歩き始めた。

何事も無くて最後にこうなるなら、ちよつとずつ来てくれる方が良いかもしれません。

「はあ・・・車だとあつという間なのに歩くと遠いですね・・・」

20分ほど歩き、ようやく峠道も終わりになった時。

ウオオオーン・・・キッ！キキーツ！・・・オオオーン・・・

元来た道の方から凄まじい速度で何か近づいてくる。

山賊だろうか？強盗だろうか？

リットリオは荷物を茂みに隠すと、ホルスターからM93Rを引き抜いた。

えっと、スライドを引いて、安全装置を解除して・・・っと。

近づいてくる音に緊張しつつ、両手で銃を構えたリットリオはふと気づいた。

・・・もし普通の人だったらどうしよう？

また警察の厄介になるのは嫌ですし・・・

そうこうしてるうちに音はどんどん近づいてきた。

「・・・うー」

リットリオは悩んだ挙句、安全装置をかけ、ホルスターに銃を戻したのである。

オウン！・・・キキキキーツ！

リットリオが丁度銃を仕舞って視線を道路に戻したとき。

目の前に、BMWがいた。

運転手がぎよつとしてるのがはつきり見えるほどの近さで。

あれ？私、そういえば道の真ん中・・・

キキキキーツ！

BMWはスピン状態に陥ったが、リットリオの脇を辛うじてかわすと止まった。

すぐにドアが開き、運転手が出てきた。

「おい！大丈夫か！」

「え、あ、あの、はい。大丈夫です」

「良かった。ぶつかったら大変・・・うん？」

「なんででしょうか？」

「君は・・・ええと、買い物屋の？」

「は、はい。リットリオと申します」

「・・・」

「・・・」

ファッツゾがそうつと運転席に向けて後ずさりし始めたので、リットリオは涙目になった。

「あ、あの、撃ちませんから：その、怖がらないで頂けると嬉しいです」

「ま、まあ・・・しよせん噂だよな」

「あのう」

「ん？なんだ？」

「どんな・・・噂が立っているんでしようか・・・」

「えっ!? あー・・・」

ファッツは決まりが悪そうに自分の顎の辺りを撫でていたが、

「とりあえず、路肩に車を寄せるから待ってくれるか」

「あ、はい。どうぞ」

ファッツはリットリオが寂しそうに頷いたのを見た後、静かに車を路肩に寄せた。

そして運転席の窓を開けてリットリオに告げた。

「・・・ええと、立ち話もなんだ。助手席なり後ろなり乗ると良い」

リットリオはきよとんとした。

「よろしいんですか？」

ファッツは肩をすくめた。

「このままだと5分も経たずに俺の首が悲鳴を上げるんでな」

「あ、すみません。じゃ、じゃあ、お邪魔します」

そつと助手席に腰掛けたリットリオに、ファッツが訊ねた。

「ところで・・・ここで何してたんだ？」

「車で通りがかったら、少し前の所で壊れてしまいました」

「ん？あー・・・さつき煙吹いてる車があつたな。あれか」

「はい。あ、あの、壊したわけではないです」

「・・・ひよつとして、買い物の途中か？」

ファッツに言われたリットリオは真っ青になった。

「そ、そうでした！買った物を届けないと！」

「その買った物はどこにあるんだ？」

「あっー！」

リットリオは慌てて車を降り、茂みから袋を引っ張り出してファッツに見せた。

「これです！」

「・・・中身は何だ？」

「大豆の缶詰にコンビーフ、メモ帳、台所洗剤にゴム手袋です」

「・・・まあ腐るような物は無いか。どこに届けるんだ？」

「ライネスさんのお店です」

「なら帰り道だ。送ってくから乗るといい」

「あ、た、助かります」

「車の方はレッカー手配してるのか？」

「香取さん達がやってくれるそうです」

「そうか。じゃあ安心だな」

リットリオを乗せたBMWは、先程とは打って変わって静かに走り始めた。

てつきり先程のようにスキル音をたてながら派手に走ると思っていたリットリオは拍子抜けしてしまった。

「・・・どうかしたか？」

ファッツゾに問われたリットリオは、思わず

「いえ、ゆっくり走って頂けて良かったって」

「誰かを乗せてさつきみたいには走らないさ」

「ですか・・・ええと、ところで先程の話なんですけど・・・」

「あ、覚えてたか」

「・・・はい」

ファッツゾはカーブを1つ2つ曲がりつつ沈黙したまま、迷っているようだった。

「あの、私、何と言われても仕方ないと思ってますから」

「ん？あー・・・言い難いなあ」

「何と言われてるか知らないのも、それはそれで不安なので」
「・・・」

ファッツゾはその後黙々と山道を下りたが、ふもとの交差点で信号待ちをしている時にようやく口を開いた。

「・・・ええとな」

「はい」

「夜な夜な峠道で山賊狩りしてるとかさ」

「砲撃したの1回だけですよ・・・」

「中央通りでクレープが地面に落ちる前にマファイア20人撃ち殺したとか」

「それ・・・私じゃないですし、物凄くお話が大きくなってますよ・・・」

「思い当たるネタがあるのか？」

「鹿島さんがガラの悪い人を蹴り飛ばしたんです」

「まあそんな感じで・・・君のあだ名はな」

「あ、あだ名までついてるんですか？」

「・・・聞きたくなければ黙るぞ？」

「い、いえ、聞かせてください」

「・・・イタリアン・マンハンター・・・だとさ」

第59話

リットリオは溜息混じりに返した。

「完全に濡れ衣・・・という訳でもないですけど・・・」

信号が青になったので、ファッツは車を発進させた。

「まあ噂つてのはさ、大抵は嘘100%だ」

「・・・」

「ただまあ、時としてちよつとだけ本当の事が混じってるから、一応気にするってのもあるが」

「・・・」

「そもそも、こういう小さな町だと話のネタなんてすぐ尽きて、皆話題に飢えてるんだ」

「・・・」

「だから君の事もあつという間に伝わって、尾ひれがついたんだろうよ」

「・・・あの」

「ああ」

「お名前、伺っても良いですか?」

「ああすまん。俺はファッツ。ブラウン・ファッツだ」

「ファッツさん・・・あれ?」

「ん?」

「ブラウン・ダイヤモンド・リミテッドのファッツさんですか?」

「よく知ってるな」

「当然です!町で一番頼りになる、お手本にすべき良識人だって伺ってます!」

「それこそ噂だ。俺は普通のDeadlineDeliverだし、なんでも屋にすぎないよ」

「でも、噂には本当の事が混じってるんですよ?」

ファッツはちらとリットリオを見たが、真剣に見返されたので肩をすくめた。

「混じってる事もある、だ。そうかどうかは自分の目で判断した方が
良い」

「本当だと、思います」

「この町の人間を簡単に信じると痛い目を見る事もあるぞ」

「気をつけます」

「・・・ほら、もうすぐライネスの店だ」

リットリオは腕時計を見た。

「そうですね。時間にも間に合います。良かった」

「・・・」

・・・キツ。

ライネスの店先でBMWを停めたファッツは、シートベルトを外す
リットリオに声をかけた。

「・・・君の噂は、どうやら嘘っぱちのようだな」

「・・・でも私は、山賊さんの車を砲撃し、木を倒してしまいました」

「誰か犠牲になったのか？」

「いいえ。目撃していた鹿島さんの話では、山賊さんは皆逃げたと」

「なら別に、もう気にしなくて良いさ」

「・・・そうでしょうか？」

「本人が深刻そうな顔をしているほど、周囲の噂も大袈裟になる。そ
ういうもんだ。普通にしてれば良い」

「実はお買い物物の依頼が来ても、私以外でって注文されてしまってい
て」

「ライネスは違つたんだろう？」

「はい」

「・・・そうだな。じゃあ私も君達に頼む時は、君を指名するようにする
よ」

「えっ？」

「君じゃ困るといふ人、君でも良いと言ふライネス、君で頼む俺、これ
でバランスが取れるだろう？」

「・・・信じて、くださるんですか？」

「人を見る目には自信があるつもりだ」

「・・・」

じつと見返すリットリオに、ファツゾはぶいと外を向いて言った。

「・・・ライネスがお待ちかねじゃないのか？」

リットリオがぎゅつと目を瞑ると、ぽたぽたと涙がシートにこぼれた。

「・・・うん、品物に問題も無い。大丈夫だよ」

「そうですか・・・良かったです」

「コーヒードも飲んでいくか？」

「いいえ・・・大丈夫です」

「顔が赤いが、無理して買ってきたんじゃないか？」

「いいえ・・・大丈夫です」

「そ、そうか。じゃあ気をつけて帰りなさい」

「ありがとうございます・・・ございました・・・」

カロン♪

ドアベルの音に気づいたクーが2階から降りてきた。

「おつちや・・・ライネスさん、お客さん？手伝う？」

「ああいや、買い物屋のリットリオさんだったんだが」

「・・・主砲でも向けられたの？機動隊呼ぶ？」

「いや、頼んだものをちゃんと買ってきてくれたんだが、なんだかぽーっとしてたんで気になってな」

「ぽーっど？」

「変な喩えだが・・・恋する少女のような目だったなあ」

クーの目がキラリと輝いた。

「頂きます」

香取の声を合図に、食卓を囲む鹿島達は一斉に箸を取った。

だが、リットリオは食卓の雰囲気が妙な事に気がついていていた。

準備の時から、香取達が何か聞きたそうな目でこちらを見ていたからである。

ちらちらと皆を見渡した後、リットリオはそつと箸を置いた。

「あ、あの、車の故障でご迷惑をおかけしてしまいました。すみませ

ん」

臙がひらひらと手を振った。

「あー、それは前も言ったけど皆やってるし・・・ていうか聞きたい事はそれじゃなくて」

「？」

頭の上に大きなクエスチョンマークをこしらえたリットリオをじっと見ながら、朝潮が訊ねた。

「リットリオさん」

「は、はい」

「ライネスさんにホの字って本当ですか？」

「は？」

リットリオの態度を見て、鹿島ががっかりしたように肩をすくめた。

「だよねえ。一目惚れにしちや何度も会ってるし遅過ぎると思ったんだよねえ」

臙がにやりと笑った。

「でも町中の噂だよ？リットちゃんがライネスさんに惚れたくって」

リットリオが首を傾げた。

「どうしてそんな噂が・・・」

「心当たり無いの？」

「うーん・・・今日は確かに買った物をお届けしましたけど・・・」

リットリオはライネスとあった時の事を思い出そうとしたが、全然覚えてない事に気がついた。

「あれ？」

「どつたの？」

「そういえば・・・覚えてないです」

「なんで？」

「えっ？」

「別に難しくも無かったでしょ・・・あ、時間無くて走って行ったとか？」

「いえ・・・」

言いかけて、リットリオはふと口をつぐんだ。

そ、そうだ。

ライネスさんにお届けする前にファツゾさんから励ましてもらったんです。

それが凄く嬉しくて、泣きたいくらい嬉しくて、いいえ、泣いてしまったんです。

だから・・・

「・・・ちゃん、リツちゃん？おーい」

ハツと我に返ったリツトリオの目の前に、目を輝かせる鹿島、臙、そして朝潮が居た。

「ふええっ!?!」

「さ、リツちゃん。今思い当たった事をどーんと喋ってみよう!」

「え、あ、な、何の事でしようか」

「リツちゃんは嘘が苦手なタイプだよねえ」

「ひっ」

「大丈夫!大丈夫です!さあ!」

「朝潮さん、キャラ変わってます」

「誤魔化してもダメです!さあ!」

「~~~~~!!!」

第60話

「・・・ヤバイよリッツちゃん、それは、それだけはヤバイよ。地雷エリアでタップダンスだよ」

「ど、どういう事でしょうか・・・」

ファッツとの一件を説明し終えたリットリオを、鹿島達は青い顔で見返していた。

鹿島が口を開いた。

「いやあ、確かにファッツさんはまともな紳士だけどね」

「はい」

「えつと、その、奥さんがね」

「はい」

「・・・ナタリアさんなんだよねえ」

「？」

リットリオが首を傾げたので、鹿島がこれはマズいと言わんばかりに額に手を当てた。

そんな鹿島の様子を見て、おもむろに朧が次いだ。

「リッツちゃんといえど、ナタリアさんとサシでファッツさんの争奪戦やるのは勝ち目が無いと思うなあ」

「・・・あの」

「うん？」

「どうして私が、争奪戦をやるんですか？」

「え？だって一目惚れしたんだから結婚したいでしょ？日本では重婚禁止だし」

リットリオは目をパチパチさせていたが、すぐにジト目になった。
「他人の旦那様に手を出すなんて不謹慎で不潔です。そんな真似、リットリオはしません」

「ほんとー？」

「本当です」

「手も繋ぎたくない？」

「はい。奥様に申し訳ありません」

「優しい言葉をかけてもらって微笑んでもらえれば満足なんだ」

「あ、はい、それは嬉し・っって何言わせるんですか!」

頬を染めて怒鳴るリットリオを見つつ、鹿島達は叫んだ。

「プラトニック!」

「純愛!」

「乙女ですねっ!」

その様子を横目に、香取は軽く咳払いして箸を置いた。

「3人ともはしやぎ過ぎですよ。それからリットリオさん」

「はっ、はい!」

「覚えてないとの事でしたが、あくまでも任務遂行中です。ぼんやり

してはいけませんよ」

「す、すみません」

「でも、嬉しかったのは解ります。良かったですね」

リットリオはポツリと、

「・:はい。鎮守府に戻った後、私もあんな風に振舞えたら良いなと思います」

そう返したので、香取は微笑んで頷くと、ちらと窓の方を見た。

丁度、その時。

「アインよりマザーへ、パッケージJに敵対意思が無い事を確認した」

「ええ。早い内に誤解と解って良かったわ。じゃあ通常体制に戻って

良いわよ。お疲れ様」

「了解。撤退します」

そんな小さなやり取りが聞こえた後、香取達の家の庭先から幾つかの気配が音も無く消えたのである。

そんな、ある日の午後。

「あわわわっ、も、申し訳ありません!すぐ買い直して来ます!」

「もう良いわよ!今からじゃ間に合わないわよ!だからあれほど時間指定でって頼んだのに!」

「すみません、本当にすみません」

「こんなの受け取らないからね!依頼はキャンセルよ!」

ボタン！

「・・・あうー」

玄関先で延々怒鳴られたリットリオは、しよぼんと肩を落として回れ右をした。

確かに、こちらの確認が十分ではなかったかもしれない。

でも、元々「赤い口紅買ってきて」と頼んでおいて「こんな色は赤じゃない！」と言われても・・・

「口紅の赤色系は物凄く種類があるなんて・・・知りませんでした」

実はリットリオにとつて、これが初めての受け取り拒否であった。

最初の頃に車庫で事故を起こして買い物そのものに行けなかった事はある。

だが、行った買い物は間違えずに買ってきていたのである。

「折角買ってきたのに・・・」

リットリオが深い溜息と共にドアを開けた時。

「どつたの？リツちゃん」

声の方を振り向くと、臃が運転席の窓を開けて手を振っていたのである。

「この子、意外と中広いよねえ」

「そうですね・・・」

臃から着いてくるよう言われたリットリオは、臃の操るパンダの後に従って車を走らせた。

途中で臃は露店で何かを買っていたが、リットリオの車窓からは見えなかった。

そうこうするうちに辿り着いたのは小高い丘の上にある、海が見える広めの駐車場だった。

車を並べて停めると臃が手招きをしたので、リットリオはそつと臃のパンダに乗り込んだのである。

リットリオが乗り込んだのを見た臃は満面の笑みを浮かべた。

「んっふっふーん」

「ど、どうしたんですか？」

「これを見たまえ」

「えっ……そっ！それはっ！」

朧がグローブボックスから取り出した箱は、リットリオにとって懐かしい箱だった。

だが、同時にリットリオは軽く混乱しながら朧に訊ねた。

「あ、あの、朧さん」

「うむ」

「それって、ナポリチーズケーキの箱ですよね？」

「ご名答！」

「た、確か、イタリアにしかお店は無い筈なんですけど、どうやって手に入れたんですか？」

「聞いて驚くが良いのだよ、リットリオ君」

「ふえ？」

「ここから3つ隣の町にあるデパートでだね、イタリアンフェアをやってるんだな」

「……イタリアン、フェア」

「うむ！そして私の今日の買い物任務は、2つ隣の町まで買い物に行く任務だったのだよ」

「ええと……そっか、そうですね」

「だから3つ隣の町まで足を伸ばして買ってきたのだよ！これを！」

「……じゃ、じゃあ、本当に、その中にはナポリチーズケーキが？」

「うむ！そしてこれはご存知の通り」

「……7個入り、ですね？」

「YES。事務所の面々は？」

「……5人」

「中途半端にあまりが出ると？」

「戦争です」

「ここに居るのは？」

「2人」

「5+2は？」

「7」

「という訳で？」

「・・・」

意味する所を理解したりットリオが上目遣いに朧を見返すと、朧が大きく頷いた。

「これは仕方ない処置なのです！」

「そ、そうですね・無駄な争いを避ける為、ですよね」

「うむ！仕方ない！仕方ないのです！」

「です！」

朧はそつと紙箱をリットリオに手渡すと、露店で買ったビニール袋から紅茶のペットボトルを取り出した。

「あつ！」

「ケーキには紅茶でしょ？」

「はい！その通りです！」

「では君と私は重要な機密を共有する仲だよ？解っているね？」

「わ、解ってます。バレたら血を見ます」

「では」

朧が2本のペットボトルの蓋を開け、リットリオが丁寧に紙箱を開ける。

中の数を数えて7本ある事を確認したりットリオは、1本を朧に手渡し、ペットボトルを受け取った。

第61話

綺麗にラッピングされたバー状のケーキを凝視しながら、隴は口を開いた。

「・・・時にリットリオ君」

「なんででしょう」

「これはどこから開けるのかね？」

「そのの、ちよろつと出てるセロハンの紐を下に引いてください」

「・・・これかね？」

「はい。で、切れないようにゆっくり、ゆっくりです」

「・・・お、おお、おおおおお」

「上手く行きましたね。じゃあ私も・・・あ、懐かしいです・・・」

「さすがに上手いねリットリオ君」

「美味しくて沢山食べちゃったんで慣れてしまいました」

「・・・では、改めて」

「頂きます」

・・・パクツ。

「・・・んふー♪」

「美味しい・・・懐かしい・・・そう、そうです。このチーズの香りです」

「これは美味しいねリットリオ君」

「イタリアを代表するお土産ですから」

「これは2本余ったら皆銃を抜くね」

「紛争必至です！」

「紛争回避！」

「紛争回避！」

「隴さん、ごちそうさまでした」

笑顔で紅茶を飲み干したリットリオを見て、隴はニツと笑った。

「そろそろ元気出たかね、リットリオ君」

「えっ」

「どうかね？」

「・・・朧さん」

リットリオは意味する所を察し、ペこりと頭を下げた。

「ありがとう、ございます。初めての任務失敗だったので、がっかりしてました」

「・・・だよねー」

「でも、よく私が失敗したって解りましたね。それに、どうしてあそこにいらいしたんですか?」

「・・・んー」

「どう、したんですか?」

「やー、私は1週間閉じこもってたって言ったでしょ」

「はい」

「でもって、初めての任務失敗は3回目だったんだよねえ」

「・・・」

「だから他の失敗に紛れちゃって、ああまたやっちゃったーって感じだったんだけど」

「・・・そうですね。最初の頃って毎日失敗ばかりですもんね」

「大木なぎ倒したりね」

「そつ、それは私しかやってないじゃないですかあ!」

「あははっ。ただね、リットリオ君」

「はい」

「私とその3回目の任務で仰せつかったのはだね」

「はい」

「・・・先程リットリオ君が出てきたお家の依頼だったのだよ」

「・・・えっ?」

「そして私の先輩も、実はあの家で失敗したと聞かされたのだよ」

「・・・」

「意味する所は解るかね?」

「・・・く、クレーマー・・・ですか?」

「かもしれない。でも・・・んー、これを私が言っちゃうとダメだよね」
「え?」

「リットリオ君」

「はい」

「家から出てきた時、どう思ったかね？」

「私の確認ミスもそうですけど、そもそも注文がアバウト過ぎるっ
て思っ、ちよっぴり腹が立ちました」

「それに初めて気づいたのはあの家に着いた時だったかね？」

「多分・・・ええと・・・」

リットリオは少し腕を組んで考えていたが、

「あ、お店の売り場で困った時に思いました」

「お店で困ったのかね？」

「はい。どれを買おうかって」

「困って、どうしたのかね」

「赤色が沢山あって、どれにしようかって迷って、一番赤だと思っ色を
買いました」

「誰がそう判断したのかね？」

「・・・私、ですけど」

「誰の買っ物だったのかね？」

「お客様・・・です」

「もう1度聞ぐぞよ。誰がそう判断したのかね？」

リットリオは一瞬怪訝な表情をしたが、

「・・・あっ！」

「思った事を言っってみるが良っぞよ」

「そう、か。私が決めちやいけなかつたんですね・・・お客様にその時間
けば良かつたんだ・・・」

「うむ。その通りなのだよリットリオ君」

リットリオはがくりと肩を下げた。

「そう、ですね。あの時お客様に色の名前なり商品番号なりを確認し
ていれば、失敗しなくて済んだんですね」

「うむ」

リットリオは臍を見た。

「どうして・・・教えてくださつたんですか？」

「何をだね？」

「失敗した理由を、です」

「それはだね、伝統なのだよ」

「伝統？」

「さつき、私が失敗したのも、先輩が失敗したのもあの家だと言ったのを覚えているかね？」

「はい・・・あっ！」

「そういう事。私は失敗した後、怒りまくって電柱をガンガン蹴つてる所に先輩が来たのだよ」

「電柱・・・」

「そしてクレープを2つも奢ってくれた後、大体同じ問答をしたのだよ」

「・・・なるほど、だから、伝統」

「そう。きつと香取さんや鹿島さんは自分で気づいて欲しいって思っ
て任務を課してる」

「・・・」

「けど、怒ってる時に自分の悪い所に気づくって死ぬほど大変。でも
周りからは見えてるのだよ」

「・・・あう」

「それはリツちゃんだけじゃなく、私も、先輩もそう」

「・・・」

「だからリツちゃんも、次に来る子にこうやって教えてあげて欲しい
のだよ」

「・・・伝統、ですものね」

「そういう事。ちなみに私は教えてもらった次の時はちゃんと成功さ
せたのだよ」

「そう、ですね。失敗したままでは悔しいです」

「期待しているよりトリオ君」

「ありがとうございます！・・・ところで臙さん」

「なにかね？」

「なんでそんな口調なんですか？」

臙は胸を張った。

「学校の先生っぽかろう?」

リットリオはくすくす笑い出した。

ちなみに、2人は仲良く帰ったのだが、その夜、

「どうして朧さんがこの包みの開け方をご存知なんでしょうねえ・・
ねえ?」

と、全てお見通しだという凶悪な笑みをたたえた香取達に睨まれ、
2人は震え上がった。

しかし、二人で夕食の食器洗い1回というバツ当番を、2人はにこ
にこしながらこなしたという。

第62話

バツ当番から数日後。

「・・・うん、皆さんお世話になりました」

リットリオが間もなく1ヶ月という頃、朧が鎮守府に帰る日がやってきた。

岸壁で、迎えに来た漣と隣に並んだ朧は、こう言つて町を見ながら目を細めた。

向かい合う香取達が微笑んだので、漣が悪戯っぽく口を開いた。

「ところで香取さあん」

「なんでしよう、漣さん」

「朧っちはちゃんと卒業したんでしよつか？」

香取は頷いた。

「ええ。立派に最終課程までこなされましたし、全て合格です」

漣は朧をちらと見た。

「見た感じ、筋肉ムキムキとかにはなってないですよねえ」

朧は視線を町並みから漣に戻すと肩をすくめた。

「んな訳無いでしょ」

「でもミニガンとか手持ちで撃ちまくるんでしよ？」

「撃てる訳無いわよ、どっから聞いてきたのよ」

「え〜？鎮守府ではそういう噂だよお？怪獣とか出るのを毎日撃ちまくるって」

「どこの映画と混同してるのよ。怪獣なんて居ないし！」

リットリオが鹿島に囁いた。

「噂ってどこでも大袈裟ですね」

鹿島が囁き返した。

「噂だもん」

漣と朧のやり取りを見ていた香取が口を開いた。

「2ヶ月離れても相変わらず仲が良さそうでなによりです」

漣は首を振った。

「うちらにとつてはたかが2ヶ月。あつという間に元通りです」
「まあそうよね」

隼はやれやれと首を振りながら、突然艤装から対空機銃を港湾倉庫の方に向けて数発発射した。

漣は何事かとびくりとしたが、隼は、

「こつち見てる阿呆が居たから威嚇しただけよ。ナメんなよつての」

漣は怪訝な表情をしながら香取に尋ねた。

「あもう、隼ちゃんは乱射魔になってしまったのでしょうか？」

ジト目で漣を睨む隼に微笑みつつ、香取は首を振った。

「いいえ、本当の事です。恐らく最近強盗を始めた方達なのでしょう」

朝潮が海原の方を見ながら呟いた。

「山でも街中でも見ない顔でしたね」

リットリオも頷いた。

「殺気がここまで漂ってきてましたし、迷ってるようでしたね」

鹿島がくすつと笑った。

「リツちゃくん、そろそろ身についてきたね？」

「いえいえ、皆さんに比べればまだまだです」

「あー・・・」

漣はポリポリと頬をかいた。

自分はさっぱり気づかなかつたが、この5人は解っていたようだ。

まあ隼がちが前より頼りになる存在になったのは素直に嬉しい。

海原で沈む僚艦を見るのは辛いから。

「じゃあ隼っち、帰ろつか」

隼は漣を見て苦笑した。

「帰るっていうと、今朝まで過ごしたあの町の中の家を思い浮かべちゃうんだよねえ」

漣はニツと笑った。

「へえ。最初は30分に1回くらい「ここマジありえないおかしい」とかメール飛ばしてきてたのにねえ」

「わーっ！・・・ここで言うなあー！」

「ポーノが珍しく心配してたよ。いざとなったら提督に直談判しよう

とか言ってたし」

「・・・そっか」

「あ、この話絶対内緒ね。ポーノがめっちゃ凄んで言うなって言ってたから」

「曙らしいわね。解った。あと、ちよつと最後に挨拶だけするね」

「どうぞー」

隳はとことごと香取の前に進み出た。

「香取さん、本当に2ヶ月間で色々学ばせて頂きました。鎮守府でご帰還をお待ちしています」

「貴方の活躍を楽しみにしていますよ。決して無理はなさらないように」

「はい」

そして隣に立つ鹿島に目を向けた。

「鹿島さん、最初は論外でしたけど、最後まで見捨てず面倒を見て頂いて、ありがとうございます」

「良い感じに肩の力が抜けて、本当の力を出しやすくなったよね」

「そう、なんでしょうか・・・でも鹿島さんが言うならそうなんでしょうね」

「ほらほら、また堅くなってるよ。スマイルスマイルっ」

「・・・だっ・・・だっって」

「・・・うん」

「きつ、気合入れてないと・・・泣きそう・・・なんですもん・・・」

「あーだめ！だめだよ隳ちゃん！泣いちやだめだよ・・・私までつられちゃうから・・・」

「鹿島さあん！うわああああん！」

「隳ちやああああん！」

抱き合ってわんわん泣く二人の後ろで、なぜそこまで悲しむと首を傾げる漣を見て、リットリオは微笑んだ。

私も着任当初に利根さんが泣いた理由が解りませんでした。

でも今は、何となく解ります。

香取さんにしろ、鹿島さんにしろ、朝潮さんにしろ。

それぞれの立場から私達を常に見守り、どうしたら成長するか凄く心配してくれてるのが解るから。

きつと私も、お別れの日には泣くような気がします。

やっと鹿島から離れた臙は、ぐしぐしとすすり泣きながら朝潮とリットリオの前に立った。

「・・・うう、最後は絶対かつこ良く去るんだって決めてたのにさ」

朝潮が肩をすくめた。

「そんな割り切れる人じゃないのは良く解ってますから」

「くっそー」

「これで私は豆大福を安心して食べる事が出来ます」

「あ」

「なんですか?」

「豆大福・・・自分のお土産に買おうと思ってたのに忘れた・・・」

「そうだと思っただんで・・・」

朝潮がひよいと後ろ手に持っていたアルミバッグを差し出した。

「えっ?」

「書いてある賞味期限は明日までですが、冷凍してるので半年は大丈夫です。解凍は冷蔵庫で半日です」

「・・・朝潮ちゃん」

「豆大福を奪われるのは困りますが、同好の士は減って欲しくないですから」

「・・・うん。朝潮ちゃんはいつもそうやって助けてくれたよね。ありがとう」

「こういう性格なんです」

「・・・ねえリツちゃん」

「はい」

「伝統の継承、頼んだわよ」

「はい、もちろんです」

「来月帰ってくるの楽しみにしてるからね?」

「ご期待に沿えるよう頑張ります」

「・・・アタシはさ、その・・・」

「なんででしょうか？」

「・・・あー、ええと・・・」

「？」

言い淀む朧の両肩を背後からぐわしと掴んだ漣が口を開いた。

「リツちゃんから見てさ、朧っちは良い先輩だった？」

「へっ？」

途端に真っ赤になって顔を背けようとする朧の肩をがっしり押さえながら漣は続けた。

「何日か前から私達に「ちゃんと良い先輩として振舞えたかな、どうかなく」なんて言ってきたやがるんですよ」

「やめて・・・そこまでバラさないでよ・・・恥ずかしいじゃない・・・」

「本人に聞きやがれて返してるのに何度もうだうだ聞いてくるからですよー」

きよとんとしていたリツトリオだったが、香取達の視線に軽く頷くと、

「ええ。朧さんとはつても頼りになる、優しくて良い先輩です！」

と、漣に向けてにこりと笑いながら答えた。

茹でエビもかくやというほど全身真っ赤になりながら、朧は

「そっ、そう・・・それはその、よ、良かったわ」

と、辛うじて聞こえるくらいにもごもごと返した後、

「さっ、漣！ほら帰るわよ！帰還予定時刻過ぎちゃうから！」

と、文字通り脱兎の勢いで海に向かって岸壁を駆けていった。

漣は肩をすくめると、

「あー、まあ、お解りかと思えますけど照れ隠しなんで大目に見て頂ければと〜」

香取達は微笑んで頷いた。

「勿論解っておりますよ。では、提督や皆様によろしくお伝えください」

「かしこまりました。では失礼しますー！」

そう言ってピシリと敬礼すると、漣は朧の後を追って行ったのである。

二人を見送りながら、リットリオは香取に訊ねた。

「次の方が着任される予定はあるのですか？」

香取は頷いた。

「ええ。少し予定から遅れてますが、明日の午後にはいらっしやるかと」

リットリオは頷いた。

「そうですね・私の時は利根さんがお帰りになる前の日に着任でしたものね」

「ええ。今回もその予定だったのですが・・・」

語尾を濁す香取の後を鹿島が継いだ。

「多分噂を真に受けちゃったんでしようね」

リットリオはなるほどという顔で頷いた。

「・・・着任を拒否されてるんですね？」

「まあそこまで大袈裟じゃないんだけど、あまりにも怖がってるから龍田さんが話を聞いてるんだって」

「それってむしろ逆効果になるんじゃない？」

香取がきよとんとした。

「どういう事でしょう？龍田様はお優しい方だと思っておりますが」

リットリオは3人の表情から、香取達が本気でそう思ってる事を理解した。

「ええとですね・・・まあその、龍田さんに関しても色々物凄い噂がありました・・・」

「まあ、それは存じませんでした・・・物凄い？」

「それはもう」

「怖い方の、という事でしょうか？」

「それはもう」

「ええと・・・鹿島さんや朝潮さんはご存知でしたか？」

香取の問いに鹿島は首を振ったが、朝潮は頷いた。

「真偽混ざっていると龍田さんは仰ってましたが、要約すれば逆らったら命は無いという事です」

香取は目を丸くした。

「まあ。あんなに良くしてくださいる方を捕まえて：酷い誹謗中傷ですね・・・」

リットリオと朝潮は顔を見合わせた。

「どうやら香取は龍田の優しい側面しか知らず、そう思っていたようだ。」

自分達が鎮守府生活の中で見た「非常に怖い真実」もあるが、香取には言わないでおこう。

二人は無言のまま、目だけでそう話し合い、互いにこくりと頷いたのである。

第63話

数日後。

「ただいま戻り・・・？」

リットリオは買い物から帰り、事務所のドアを開けた時に違和感を覚えた。

かつてないくらいの張りつめた空気。

「・・・」

おもむろにホルスターから使い慣れたM93Rを取り出し、僅かにスライドを引く。

チャンバーには記憶通り、AP弾が装填されていた。

カチリと音を響かせてハンマーを引き起こし、リットリオは両手でM93Rを握った。

弾の種類が何であろうと、先に正しく状況を把握した側の勝ちである。

今はあまりにも情報が足りない。

リットリオはそつと、気配の強い方へと顔を向けた。

そう、香取の執務室の方に。

「・・・」

廊下の曲がり角の先を、リットリオは慎重に伺った。

しかしそこには武装したマフィアといった者は居らず、腕組みをした朝潮が一人居るだけだった。

近寄りつつ黙礼すると、朝潮も小さく頷き返した。

「朝潮さん」

「リットリオさん、おかえりなさい。首尾は？」

「問題ありません。ところで、この気配は何ですか？」

「・・・新しい研修生の方が着任されるかもしれません」

「・・・かも、とは？」

「いらした方と香取さんが話し合ってますが、非常にもつれています」

「・・・着任に何かもつれる要素ってありましたっけ？」

「着任する事をとても躊躇ってらっしゃるのです」

「ど、どういう話・・・」

「リットリオさん」

「は、はい」

「時に立場が物を言う場合がありますが、今はまさにその時かと思えます」

「へっ?」

「私も、香取さんも、鹿島さんも出来ない事があります」

「?」

「もう一つ。決してこの研修は強制ではありません。いつでも帰還する事ができます」

「あ、はい。それは提督から着任前に伺・・・」

ドンー!

執務室の中から何かを叩く音がしたので、リットリオは思わず執務室のドアに向き直った。

耳を澄ませると小さく小さく声が漏れ聞こえてくる。

「・・・ことはありませんよ」

「私!到底・・・られません!」

香取さんはいつも通りだけど、着任予定の子は随分と興奮している。

この緊張感も恐らくはその子が放っているものだろう。もう少し・・・聞けるかな?

ガチャッ!

ふいに執務室のドアが開いたので、リットリオは慌てて背を伸ばした。

「リットリオさん、おかえりなさい」

「あ、ええと、はい。ただいま帰りました」

「依頼は滞りなくこなせましたか?」

「はい」

「なら、朝潮さんに頼もうかと思ったのですが、風雲さんを町にご案内頂けますか?」

「へっ？朝潮さんなら・・・あれえっ!？」

リットリオは朝潮が元居た場所を見て驚いた。
いつの間に居なくなっただろう。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ、何でもありません」

「ではよろしくお願いいたします」

そういつて香取がぐいと押し出してきたのは、思い切り疑いの目で
こちらを睨む風雲だった。

パタン。

執務室のドアが閉められた時、リットリオは香取がいら立っている
事を察した。

いつもならこちらがドアを閉めるし、それまではにこやかにしてい
るからだ。

そして自分に向けられた視線を見て頷いた。

これは完全に私も疑われている。何もしてないのに・・・

「え、ええと、私は研修生のリットリオです。じゃ、じゃあ、行きましょ
うか」

「・・・あなたは、研修生なのですか？」

「はい。1か月前からお世話になってます」

リットリオの返事を聞いた風雲は、急に左右をきよろきよろと見回
し始めた。

「どうかしたんですか？」

風雲は首を傾げるリットリオの手を取ると、打って変わって泣きそ
うな顔で囁いた。

「ちゃんと話せる場所に連れてって。お願い」

「この辺りなら誰も居ないから大丈夫ですよ」

「・・・」

リットリオは風雲を車に乗せ（車を見た風雲は目が点になっていた
が）、小高い丘に来た。

周囲は見通しが効き、駐車場からも少し離れ、目の前は海原が続き、

心地よい風が吹く。

風雲は何度も周囲を見回した後、リットリオに話し始めた。

「あ、あのね、リットリオさん」

「はい」

「・・・」

何度か口を開きかけては躊躇う風雲に、リットリオはどうすべきか一瞬迷った。

しかし、こういう時は待った方が良いと判断し、小首を傾げて待つ事にした。

たつぷり1分ほどそうした後、風雲はついに声を出した。

「そ、その、半身を差し出した時は痛かったですか？」

「・・・へ？」

ぽかんとしたリットリオに、風雲は半歩近づき、声を一段低めて囁いた。

「け、研修始める時に月の裏側に居る悪魔と契約する為に半身を差し出すんですよ？」

「うわあ〜ん・・・騙されたあ〜」

最後の質問の後、風雲はこう言いながら涙目でぺたりと座り込んだ。

風雲が質問する事を全てリットリオが否定する、こんな事が15分ほど続いた。

初めはきよとんとしていたリットリオだったが、質問が進むにつれて眉をひそめた。

質問が全てオカルトチックで、荒唐無稽な物だったからである。

だが、風雲がどうしてもあんなに懐疑的な目で見ていたのかはよく解った。

ついでに言えば、香取が機嫌を損ねた理由も、である。

こんな話を吹き込まれ、信じていたらこの町はどんな魑魅魍魎の世界かと思うだろう。

リットリオは風雲の傍に屈み込んだ。

「風雲さん、この話はどこから聞いたんですか？」

「秋雲と・・・深雪ちゃん・・・」

「・・・あー」

リットリオは挙げられた二人を思い浮かべて頷いた。

「間違いなく、からかわれましたね」

「ですよねぇ・・・どうしよう、香取さんに信用出来ませんとか言っちゃった・・・」

「んー・・・」

リットリオは少し考えた後、

「今日は折角ですから隣町までご案内しましょうか」

「隣町？」

「ええ」

第64話

「はいお待ちどうさま、この組み合わせで良いのかい？」

「えっと・・・はい、大丈夫です」

町内を一周した後、隣町に向かったリットリオは、風雲を連れて和菓子屋に入った。

物珍しそうに店内を見回す風雲を指さしながら、老婆はリットリオに尋ねた。

「ところでこっちの子は新人さんかい？」

「はい」

「そうかい。リッチちゃんもようやく後輩が出来たねえ」

「ええ、とつても可愛い後輩です」

その一言に風雲はびくつとした後、恥ずかしそうにリットリオを見返した。

老婆はその様子を見てニコニコすると、

「お名前は？」

「えっ！あっ！ゆ、夕雲型駆逐艦、三番艦の風雲です！」

「そうかい。リッチちゃんは良い子だから何でも相談すると良いよ。頑張りな」

風雲は老婆を見返しつつ頷いた。

「はい！あ、えっと、お幾らでしようか？」

「1380コインだよ」

老婆の返事を聞いて財布を取り出す風雲をリットリオが止めた。

「良いですよ、私払いますよ」

「とんでもないです。私のせいですから、私が払います。ご紹介頂けただけで充分です」

「そう？」

老婆は頷いた。事情を深くは知らないが、この子はちゃんとしてる。

上手くやっていけるだろう。

その頃、香取は龍田と通信していた。

「・・・あらあ、それは噂というより誹謗中傷ねえ」

「龍田様の元には届いてませんか？」

「そうねえ。毎日大規模な戦闘が絶えないといった、ちよつと誇張した噂程度は、ね」

「今度の着任遅延の主因とも言えますし、是正をお願いしたいのですが」

「ええ。でも、状況確認から入るから、終わったら改めて報告するね」

「手段等はお任せいたしますので、お手数ですがよろしくお願いいたします」

「・・・香取さん」

「はい」

「ごめんね？」

「い、いえ、龍田様に謝罪頂く事ではありません」

「私はこつちで教育関係にも携わってるから、香取さん達の気持ちは良く解るの」

「・・・」

「新しい子が来ると知ったら、気持ち良く迎えてあげたいって思うものねえ」

「・・・はい」

「それをいきなり、悪魔に魂売られるだの言われたらガツカリしちゃうわよねえ」

「・・・龍田様」

「はあい？」

「その・・・ミッションはいつ始まるのでしょうか？」

「その件だけど、ちよつと相談に乗ってくれないかなあ・・・」
「どうかされたのですか？」

その頃。

「ヤダヤダ誘爆しちやう！当たらないでえ〜！」

「頭を低くして！」

峠道を下っていたリットリオ達の手は、案の定山賊に襲撃されていた。

リットリオはハンドルを握りつつM93Rで反撃していた。

風雲は目をつぶって助手席の足元に蹲っていたが、恐る恐るリットリオを見上げた。

リットリオは僅かに山賊を引き離した時、風雲に向かって怒鳴った。

「風雲ちゃん！」

「はっはい！」

「私の左脇にマガジンが入ってるから、入れ替えて！」

「わっわわわ！」

リットリオが投げたM93Rを辛うじて拾った風雲。

しかし峠道の直線は短く、カーブは鋭かった。

すなわち、僅かな先に居るリットリオのマガジンホルスターに手が届かないのである。

「~~~~!!」

自分がM93Rを握ってる以上、リットリオは山賊達に反撃出来ない。

従って逃げの一手となり、車の挙動は必然的に激しくなる。

風雲はやつとの事で空のマガジンを引き抜いたが、既に半べそをかいていた。

「風雲さん！」

「はっはい・・・はいいい」

「泣くのは後です！早く入れ替えてください！」

「・・・うー」

ドガン！

「うあつ！・・・あー！」

リットリオのマガジンに手が届いた時、山賊のジープが体当たりをしてきた。

風雲が取り出したマガジンは車内で宙を飛び、後部座席へと飛んで行った。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！
頭の上を弾丸らしき物がかすめていく。

「ひええええええ！もうやだあ！」

このままでは明らかに旗色が悪い。

起死回生にはM93Rに次のマガジンを装填しなければ。

しかし、マガジンは後部座席に・・・

こっ、こんなジグザグに走って、しかも撃ちまくられてる車内で後部座席まで取りに行くの？

風雲はぎゅつと目を瞑り、1度だけ深呼吸した。

どうせやられるなら、抗ってからだ！

「うわああああ！」

助手席の足元から這い上がった風雲は、助手席の背もたれに飛びつきながらロックレバーを解除した。

背もたれがバクンと倒れ込むと、後部座席の座面にマガジンが落ちていた。

「もおおおおお！」

ガシャツ！

マガジンに飛びついた風雲はM93Rに叩き込んで振り向いた。

「リットリオさあん！」

「貸して！」

リットリオはカーブの終わりで一瞬だけ風雲の方を振り向き、素早くM93Rを掴んだ。

だが、先にスライドロックが解除されたらしく、チャンバーに弾が入ってない。

カーブまで150m。ギリギリ行ける筈！

リットリオはぐつとアクセルを踏み込みながら言った。

「風雲さん！ハンドル持つて！」

「はー！」

後部座席から助手席にスライディングしてきた風雲は、伏せたままハンドルの左下を掴んだ。

リットリオは一瞬でスライドを引き、並ぼうと加速してきた山賊の

ジープにM93Rを向けると、

「・・・お疲れ様でした」

そう呟いてジープのフロントタイヤを撃ち抜くと、ブレーキを目一杯踏みつけた。

二人の車の横を、制御を失ったジープが追い抜いていった。

シユウウウウウ・・・

リットリオは路肩の林に突き刺さり、煙を上げるジープの手前で車を止めていた。

少しの後、ジープが道に戻る様子を見せない事を確認したのち、再び車を発進させた。

「・・・もう大丈夫ですよ、風雲さん」

先程とは異なる優しい口調に、呆然としていた風雲はハツとしたようにリットリオを見た。

「あ、あの」

「はい」

「さ、さっきの車は、何だったんでしょうか・・・」

「山賊ですね」

「え、ええとその、ああいう事はよくあるのですか？」

「普通にありますよ」

「・・・うー」

麓の信号を待ちながら、リットリオは言った。

「ところで風雲さんは、どのような理由で研修を志願されたのですか

「？」

「・・・」

第65話

風雲はリットリオの問いにしばらく黙していたが、やがてぽつりと口を開いた。

「こ、こつちに研修に来た子達は、間違いなく強くなって帰ってくるんです」

「ええ」

「出撃でも遠征でもとにかく成功率が上がるので、引つ張りだこになるんです」

「そうですよね・・・」

リットリオは少し頬を緩めた。

自分は戦艦だが、着任がとても遅かったので、他の戦艦達と明らかにLV差があった。

LVは35を過ぎると上がりにくく、先輩戦艦達は軒並み85以上。

リットリオはそのLV35にちょうどなったばかり。

LV差があるほど作戦上使いにくい、だからますます置いて行かれてしまう。

それを良く解っていたリットリオは早く追いつこうと、この研修に志願したのである。

自分もそうなるだろうかと思っていた時、風雲は意外な事を口にした。

「だからこの研修を受けた子が姉妹の中になると、周りの目が変わってくる」

「姉妹？」

「同型と言い換えてもいいです。たとえばこの前帰還した朧さんが居れば・・・」

「綾波型は一目置かれる？」

「そういう事です」

「ふーん・・・」

「なので、行って来てほしい、と」

「え？」

「・・・」

「じゃあ風雲さんは、自らの意志で志願したのではないんですか？」

「・・・はい」

「そっか・・・」

リットリオは頷いた。

自分は自ら志願したから、幾つか不吉な噂を耳にしても覚悟を決めるだけだった。

しかし、行って来いと言われた風雲は、噂を聞きたびに赴任するのが嫌になっていったのだ。

嫌ならいつでも帰れる筈だが、姉妹艦に頼まれたとあつてはそうも言えなかったのだろう。

リットリオはそこまで考えて首をひねった。

「あ、あのですね」

「はい？」

「行くように命じたのは、やっぱり姉妹の方ですか？」

「夕雲姉さんに頼まりました」

「じゃあどうしてそんな悪い噂を・・・」

「どうして、とは？」

「えっ？だって深雪さんはともかく、秋雲さんは同型艦ですよね？」

「違いますよ」

「あれっ？ええと、確か同じ制服着てませんでしたっけ」

「確かに秋雲は同じ制服ですけど、彼女は陽炎型なんです」

「難しい世界なんですね・・・」

「秋雲はちやうど、陽炎型と夕雲型の更新時期に建造されたので、立場もちよつと曖昧で・・・」

「ふうん・・・」

リットリオは思った。少し香取の耳に入れといった方が良いかもしれない。

「かつ、かかかか香取さんごめんなさい！噂を鵜呑みにしてました！」

「・・・」

どう続けようかと風雲が迷っていると、リットリオはそつと紙包みを風雲に押し付けた。

「・・・あっ！ かつ香取さん。これ、ごめんなさいの気持ちです。皆様で召し上がってください！」

香取は包み紙を2度見すると、がばつとリットリオの方を向いた。リットリオが大きく頷いたので、香取は溜息交じりに言った。

「・・・仕方ありません。昼の件はこれで手打ちと致しましょう」「あつ、ありがとうございます！」

「ですが今後は、噂を盲目的に飲み込むのではなく、自らの目で見て判断してくださいね？」

「はい。本当に申し訳ありませんでした」

その日、夜遅く。

リットリオはドアの隙間から明かりが漏れているのを確かめると、執務室のドアをノックした。

「・・・まあ、そうだったのですか」

「はい」

「我々の研修に妙なプレミアムが付くのは困りものですね・・・」

「風雲さんがいらしたのも、変な噂を吹き込まれたのも・・・」

「プレミアムのせいだとすれば、根の深い問題になってそうですね」

香取はしばらく手を組んで考えていたが、

「リットリオさん、重要な情報をありがとうございます」

「はい」

「鎮守府の方は龍田様と相談いたします。後はこの香取にお任せください」

「わかりました。でも、今動くとも風雲が情報源だという事がバレますから・・・」

「その辺はご心配なく」

「わ、解りました。では失礼します」

・・・パタン。

執務室のドアを閉めた後、リットリオは小さく溜息をついた。

香取に余計な心労を与えてしまったような気がする。

「あれえ？香取姉えと何の話してたの？」

リットリオが顔を上げると、鹿島が手を振った。

「鹿島さん・・・」

「良かったんじゃない？リットちゃんお手柄だよ」

星空の元で、二人は海岸沿いの道を歩いていた。

リットリオはうつむきがちに言った。

「余計な心労をかけさせてしまったのではないかと・・・」

星を数えるのをやめ、鹿島がリットリオに向き直った。

「んー・・・ねえリットちゃん」

「はい」

「現代において、戦争に勝利するのはどういう人かな？」

「情報を制した人です」

「正解。だから香取姉えに情報を提供するのには勝利をもたらすって事だよ」

「・・・」

「もう一つ。リットちゃんが知らせなくても後で大惨事に遭えば凄い心労になるし・・・」

「・・・」

「それなら、解っている問題に構えて向き合う心労の方がマシじゃないかな？」

「そう・・・ですね」

「だからリットちゃんは良い事したくって胸を張って良いんだよ」

「・・・鹿島さん、ありがとうございます」

「何もしてないよ。こっちこそ香取姉えを助けてくれてありがとう」

リットリオは鹿島と笑顔を交わしながら思った。

こんな良い人達に、これ以上変な噂が被さりませんように。

一方。

夕食の膳を下げていた秋雲は、ついついと肩を指でつつかれた。振り向くと、そこには那智が立っていた。

「ほえ？那智さんどうしたんですか？」

「貴様に話がある。膳を下げたら一緒に来てもらいたい」

秋雲はそこで嫌な予感がしたが、ふと周りを見ると姉達が居ない。しまった。最後に席を立ったからはぐれた。

これでは陽動を頼めない。

しようがないか・まあ那智さんだからおかしな事にはならないだろう。

「はい」

食器を流水にくぐらせ、盆を定められた場所に返すと、秋雲は那智に従った。

第66話

「あ、えーと……こつて……」

那智が連れてきたのは食堂の地下から続く線路だった。

秋雲も食事当番で調理室までは来た事があったが、この辺りは列車で通り抜けていた。

中程まで来た時、トンネルの側面に消火栓の赤い灯と、緊急避難場所と書かれた分岐路が現れた。

正確には、分岐路といっても5m程で行き止まりの壁があり、その壁にはドアが1つあった。

そのドアを、那智はノックし、何かを囁きあつた後、ドアを開けた。「ほら、入れ」

秋雲はごくりと唾を飲み、振り向いた那智の目を見た。

絵心のある秋雲は、観察眼に優れている。

だが、那智はいつになく無表情であり、秋雲をもつてしても感情を窺い知る事は出来なかった。

「は……はい」

自分の予想より悪い局面なのではないか。

秋雲は段々心細くなり、一緒にこの鎮守府へ来た面々の顔を思い浮かべた。

前の鎮守府では不動の第4艦隊と言われていたが、その実は遠征部隊であった。

能代、阿賀野、那珂、舞風、そして若葉という面々と共に、西へ東へと資源探訪の旅に出ていた。

地味ではあるが適切な労働ペースだったし、なにより常時艦隊入りしている事に誇りを持っていた。

その司令官が突然辞任し、後任の司令官が来るまでは。

「オリョール海で資源を掘れるだけ掘ってこい！」

「……は？」

能代が思わず聞き返すと、司令官は顔を真っ赤にして怒鳴り返し

た。

「なんだ！お前達は俺が新任だから何も知らないと思つてバカにしてるのか！」

「い、いいえ、そんな事は決して」

「オリヨールで資源採掘なんて子供でも知ってる！さつさと行つてこい！」

「お、お言葉ですが、オリヨール海で資源採掘が出来るのは第3艦隊の、潜水艦の子達です」

「もう居ねえよ」

「えっ？」

「さつき、最後の伊401が途中で沈んだからな」

能代達は絶句した。あれだけ高練度の潜水艦隊を全員沈めたというのか？

秋雲はふと、秘書艦が居ない事に気が付いて口を開いた。

「あ、あとう」

「ぶちぶち質問してる暇があつたらオリヨール行けよ…ちっ、なんだよ？」

「秘書艦…さんは…」

「ここで一番強いつていうから中部海域哨戒線に行かせたらそれつきりだぜ」

「はあ？アンタ何やってるの？」

「アンタっていうな！なんだよ！未攻略の海域に最強の艦隊行かせて何が悪いんだよ！」

「いや、あれこそ高練度の潜水艦達が要るし、物凄くこまめな撤退判断が要るよ？」

「うるせーな。いーから資源採掘行つてこい！」

「うちらは対オリヨールじゃなくて遠征特化だから出撃には向いてないし、取つてこれないよ」

「命令だつてんだよ！」

出港準備を済ませた秋雲は、阿賀野に囁いた。

「あ、あの、出撃なのにドラム缶しか持つてないのつて…大丈夫なん

ですかね？」

「駄目だと思うけど、実際行ってみないと提督さんは気づいてくれないんじゃないかなあ」

「ですよね・・・」

「今回は大破でも仕方ないから、とにかく戻ってこれるルートである事を祈りましょう？」

「はあ・・・神様仏様羅針盤様ってね」

「はあ、はあ、はあ・・・」

「やー、危なかったねえ・・・」

「でも誰も沈まなくてよかったね」

「1回目の出撃で阿賀野と若葉が小破したものの、メンバーは辛うじて帰ってこれたのである。」

「これで進言を聞く気になるでしょ」

だが、司令官は開口一番こう言った。

「なんで補給にかかる資源より持ち帰った資源が少ねーんだよ！」

「ですから、こちらは軽巡と駆逐艦だから、潜水艦より高コストなんですって」

「もう1回行ってこい！オリヨールは何度も行くんだろ！知ってるぞ！」

「・・・再出撃なら修理を済ませてから」

「今すぐ！行ってこい！」

「は？破損してるのに修理させてくれないんですか？」

「補給だけで赤字なのにさらに資源食い潰す気か！俺が新人だからってバカにするな！」

この時、メンバーの胸をよぎった予感は的中した。

再出撃の後、荒れた海で秋雲は鎮守府との通信を行っていたが、内容はおもつと荒れていた。

「だから！舞風が今の戦闘で大破したんですって！これで全員大破です！」

「報告は旗艦が行え！なんでお前が言ってくるんだ秋雲！」

明らかに優先順位を無視した発言に、秋雲の何かが切れた。

「能代の通信機は前回の戦闘で壊れたって言ったでしょ！もう忘れたの!? バカじゃないの?」

「・・・進軍」

「は?」

「お前ら全員進軍しろ。命令だ」

そして次の戦闘はボス戦であり、勝負にすらならないまま、海原へと沈む事になったのである。

全員がもやもやとした思いを胸に秘めていた為、程なく深海棲艦として再会した。

しかし鎮守府のバックアップがない深海棲艦の生活は決して楽ではなかった。

早い者勝ち、騙しあい、そして莫大な憎悪による殺伐とした世界。秋雲達は海原をさまよい、軍閥と臨時輸送契約を結ぶ等で糊口をしのいでいた。

そして赤城との縁を通じ、提督の居る鎮守府で艦娘に戻ったのである。

提督は着任に際し、こう言った。

「間違えずに居て欲しいのは、私は艦娘としてではなく、娘として迎えるという事だ」

能代が首を傾げた。

「え、ええと、軽巡能代として迎えると言う事ではないのですか?」

「そう。君は世界でたった一人の能代として迎えると言う事だ」

「・・・」

「建造して君そっくりの能代が来たとしても、その子は君と違う記憶を持っている」

「そう、ですね」

「君は世界でたった一人の能代なんだ。私が迎えるのは君であって他の誰でもない。そこを忘れないで欲しい」

「・・・」

「だから私は、君達に無理に戦いを強いたりしないし、轟沈させるような無理もさせない」

「・・・」

「戦うなら勝ち戦のみ、遂行が無理と解つたら捨てるのは作戦であつて命じゃない」

提督室を辞した後、秋雲是那珂に話しかけた。

「ねえ那珂ちゃん」

「んー？」

「あの提督さあ・・・私達が轟沈した理由を知っているのかなあ」

那珂が苦笑した。

「それは無いんじゃないかなあ。でも結構サクツと核心ついてきたね」

「前の鎮守府の事を考えると、いっちばん不安な事だったよねえ」

「うん」

阿賀野が口を挟んだ。

「あの提督さんは嘘をついたりする必要は無いと思うなあ」

「なんで？」

「だって・・・」

そう言つて阿賀野はくるくると周りを指さした。

「こんな発展してる鎮守府、阿賀野は見た事ないよ？」

「そう・・・だね・・・」

秋雲は立ち並ぶ講堂や食堂、寮や売店といった施設を見回した。

どれも大きくて立派であり、さらに遠くには工廠や「白星食品」と書かれた工場まで見える。

能代が頷きながら続けた。

「それに、赤城さんもそうですけど、皆の表情が明るいわね」

「表情豊かだよね」

「そう。今まで見てきた他の鎮守府より、喜怒哀楽を表に出してる気がする」

那珂はニコリと笑った。

「表情を出しても怒られないなら、皆そうしたいもんね！」

若葉は肩をすくめた。

「わ、私はあまり得意ではないがな・・・」

「そお？よくお風呂上がりには笑う練習してたじゃん」

「なぜそれをつ！だつ、誰も居ない時にやってたのに！」

「私は気配を消してイラスト書くという特技があるのだあ」

「そんな特技忘れてしまえ！」

若葉に襟首を掴まれつつ、秋雲は陰のある笑いを返した。

それはどうしても、1つの不安が拭えなかったからである。

人間を・・・また簡単に信用して良いのだろうか、と。

第67話

話は現在に戻る。

那智に促されて入った場所は、薄暗い空間だった。

ギイイイイ・・・ボタン・・・

背後で鋼鉄製のドアが閉まる重い音が響き渡った。

地下ゆえに窓は無く、音は反響し、明かりのある所以以外は良く見えない。

壁が凸凹してる所を見ると、部屋というよりは洞窟のようなイメージだ。

自分が立っている入り口側はほのかに明るい、奥ほど暗いので奥行きが掴めない。

その奥の方に1ヶ所だけ机上スタンドのような小さな明かりが灯っていた。

目を凝らすと誰かの胸元がかすかに照らし出されているようにも見える。

「呼び出して悪かったわねえ・・・秋雲さん」

秋雲はその声色を聞いた途端、ぞくぞくと鳥肌が立った。

所属艦娘が異口同音に言った事。

この鎮守府では起業さえも支援してくれる程の自由を得られる。

だが、ルールを破った場合はかなり厳しい処置がある。

特に仏の文月を召喚してはならない。

不知火が首を振った時点で諦めろ。

最悪なのは龍田が出てきた時だ、と。

今耳にした声は、間違いなく龍田の声だ。

謝罪の言葉とは裏腹に、押さえ込んだ怒気を感じた。

そして、この場所。

どんなに大声を上げようとも絶対に地上へと届く事は無いだろう。

いきなり文月を通り越して龍田が来てしまうほどの何かを、私はやってしまったのか？

秋雲の口が震え、カチカチと歯が当たる音が小さく響いた。

「は、はははははい、いえ、と、とと、とんでもありません、龍田さん」
「ちよつと・・聞きたい事があるんだけどなあ」

「な、な、何でも聞いてくださいしい」

「単刀直入に聞くわね。あなた・・どうして研修センターの噂を吹聴してるの？」

秋雲は何を聞かれるのかとビクビクしていたが、予想外の方向だったので呆気にとられた。

「へ、あ、あの、噂？」

「月の裏側の悪魔と取引する為に半身を差し出すとか、そういう類の事よ」

「・・あー、風雲に言ったことですか」

秋雲は俯き、小さく溜息をついた。

やっぱり自由といっても所詮は鎮守府。

発言1つで厳罰に処せられるのか。

秋雲は再び明かりの方を向いて答えた。

「深雪と私、それに風雲で話してた時、風雲が呼び出されたんです」

「・・続けて」

「風雲が提督室から出てきて、センターに異動指令が出たって言うんですけど」

「・・」

「なんか浮かない顔してるんで、理由を聞いたら本当は行きたくないって言うんです」

「・・」

「それを聞いたら、ちよつとイラツとしちゃって」

「どうして？」

秋雲はムツとした顔になった。

「だってセンターで研修を受けられるって、その後が保証されたも同然じゃないですかー！」

「・・」

「高い実力とノウハウを得られて、皆から頼られて」

「・・・」

「だから沈みにくくなるし、沈んでも転属先ですぐまた良い地位につける」

「・・・」

「LVは単なる相対評価ですけど、研修センターで身に付く事は絶対的な能力です」

「・・・」

「永遠に通じるノウハウを身につけるチャンスを得たのに、行きたくないなんて！」

「だから、変な噂を吹聴したの〜？」

「そういう・・・妬みはありましたけど、噂は、その・・・」

「なあに？」

「深雪と私は仲良しなんで、その、つい話が止まらなくなっちゃったというか」

「尾ひれを付けすぎた、そういうことね？」

「・・・はい」

「研修センターに対して何か思う所があるわけではないのね？」

「行ける人がうらやましいとは、思います」

「どうして？」

「わ、私達は・・・すごく不安定じゃないですか」

「不安定？」

「私は、元の鎮守府で、司令官が交代した後、ひどい目に遭いました」

「・・・」

「それまで楽しかったのに、あつという間に変わり果ててしまった」

「・・・」

「司令官の気持ち一つで、私達は海原に散る事になります」

「・・・」

「だから、どこに行っても通じるノウハウが欲しい。安心したいんです」

「うーん・・・」

「ここにいる皆さんは、そんな酷い目に遭った事なんて無いんでしょ

うけど・・・」

「そうねえ、ほとんどの子達は無いけど・・・私はあるのよねえ」

「・・・へっ?」

秋雲はぞくりとした。

まさかあの提督も、何か別の顔があるのか?

「この鎮守府も、提督が来る前に3人司令官が来てるの」

「・・・」

「最初の司令官は熱血で優しかったけど過労死しちゃった」

「・・・」

「次の司令官は傲慢で間抜けな差配をして、あつという間に艦娘達を沈めちゃった」

「・・・ぐ」

秋雲は顔をしかめた。うちの2人目とそっくりだ。

「3人目は着任1ヶ月で深海棲艦を見て、怯えて帰っちゃった」

「・・・は?」

秋雲は思わずその光景を頭に思い浮かべた。

どう考えても漫画だ。

「だから私達生き残りは、正直最初は提督を信じられなかったわ」

秋雲は龍田の意外な発言に毒気を抜かれてしまった。

あんな悲惨な体験は自分達くらいしかしてないだろう。

秋雲は勝手にそう思っていた。

だから龍田達所属艦娘をどこかで、苦勞も知らないくせにと思って

いた・・・けれど。

「・・・ですよね」

「ええ。だから秋雲さんの不安は良く解るわ」

あれ?

怖い怖いと言われてるけど、龍田さんは当たり前前の事しか言っていない。
い。

そして自分と同じような酷い経験をしてきているんじゃないか。

秋雲はそっと、そっと口を開いた。

「あの、龍田さん」

「なあに？」

「龍田さんから見て、提督は信じられますか？」

「そうねえ・・・」

少しの沈黙の後、龍田は続けた。

「軍人としてはいささか温情に過ぎるくらいがあるわね。基本的に戦いを好まないし」

「・・・」

「けれど、あの人が目指す先にはきつと私達は笑ってる」

「・・・」

「だからあの人が苦手な事、至らない事は私がやれば良い。そう思ってるわよ」

「完璧ではない、と？」

「完璧どころか穴だらけよ」

「えー・・・」

秋雲は困ったというように唸った。そんな人を信じていいのか？

第68話

秋雲の表情を読んだのか、龍田は少し声色を穏やかにして続けた。

「だからこそ、私達の価値があるんじゃないかなあ」

「価値？」

「あの人だけでは到底なしえない。でもあの人を支えれば素晴らしい未来が待ってる」

「・・・」

「だから私達全員が力を出して、あの人を夢を叶えるんだって頑張るの」

「・・・」

「提督が1から10まで一人で出来るなら私達はただの飾りでしょう？」

「・・・」

「自分の額に汗する事で、あの人を夢が自分の夢にもなるわけだし」
「そっか：私達が居ないと成しえないから、私達の価値があるって事ですね・・・」

「ええ」

秋雲は自分が考えてきた事の欠点を見出した。

司令官を頼らずとも良い術を身に着けたいと思いつながら、一方で完璧な司令官を望んでいた。

そういう矛盾があったのではないか。

だがそれは、本当は拠り所を持ち、安心したいからだ。

秋雲は思わず口にした。

「龍田さん」

「なあに？」

「提督の元で働いて、安心・・・出来ますか？」

「どういう意味で、かしら？」

「頑張れば認めてもらえて、ちゃんと休めて・・・」

「・・・」

「私がここにいて、働いて、成果を上げてるんだ、貢献してるんだって

実感出来ますか?」

「今までここに居て、それらで不安になったかしら?」

「・・・貢献してるって実感は、あまり無いです」

「そっかあ・・・でも秋雲さんは資源調達役として相応の評価を受けてると思うけどなあ」

「ノウハウを聞かれる事はありましたし、答えられる事だったんですけど」

「ええ」

「その、あまりにも簡単過ぎて、ほ、本当にこんな事で良いのって思っちゃって」

「簡単過ぎる?」

「だっ、だっ、長期遠征1つこなしたら3日間もお休みをもらえるし、有休まであるし」

「規定通りよ?」

「お給料も妙に多いし」

「それは成果評価が高いからよ」

「あまりにも簡単過ぎるのにこんな厚遇って、なんか後で酷い事になるんじゃないかって」

「・・・そうねえ」

龍田はくすつと笑った。

「この鎮守府がビジネスを手掛けているのは知ってるわね?」

「・・・はい」

「どうしてだと思ってる?」

「へっ?あの・・・艦娘がやりたがったからって・・・聞いてますけど」

「その通り。じゃあそれによって何がもたらされると思う?」

秋雲は考え込んだ。自ら志願して始めた仕事なのだから、それは：

「・・・艦娘達が自信を持てた・・・ですか?」

「あははっ。秋雲ちゃんは相当深く考えるのね」

「へっ?」

「それも正解だけど、単純に言えば大本営から支給される以外の収入よ」

「あ、ああ、仕事だからそうですね・・・」

「私達の鎮守府は、少なくとも今は財政的にも潤ってる」

「・・・」

「財政に余裕があれば、制度を緩く運用しても差し支えがない」

「・・・」

「だから皆をコキ使う理由がないのよ」

「そういえばそうだと、秋雲は思った。」

「2人目の司令官が泥沼状態に陥ったのは、資源不足だったからだ。」

「赤字だ赤字だと怒鳴り散らし、差配の悪さがさらに拍車をかけた。」

「だから皆を無理矢理働かせる羽目になり、我々まで沈んだのだ。」

「あー・・・確かに元の鎮守府は貧乏暇なしを地で行きましたね」

「でしよう？褒美を取らせるのにも原資は居るのよ」

「ええ」

「武士は食わねど高楊枝、なんて悪行が昔からまかり通る国だから・・・」

「えっ？それって、悪い事なんですか？」

「悪い事よ。貧乏は将来に莫大な害悪をもたらすから、是正しなければならぬ」

「・・・」

「・・・」

「世の中、お金なしに出来る事なんてほとんど無いわ」

「・・・」

「お金と精神的な余裕が両方あって初めて何か出来る。それが現実」

「よ」

「・・・なるほど」

「秋雲は頷いた。」

「武士は食わねど高楊枝では、やせ我慢なので精神的な余裕もなければ」

「金もない。」

「だから貧しい現状の維持は出来ても何かをするような状況ではな」

「い。」

「とはいえ、マネーゲームに明け暮れて金だけ持っても金そのものに」

「意味は無い。」

「だから精神的な余裕を持たせる意図をもって、規則が作られている」

のか。

何かに気づき、成し遂げられるように。

秋雲は再び明かりの方を向いた。

「私は……この意図を誤解して、そのせいで不安になってたんですね……」

「まあ、しようがないとも言えるけどね」

「えっ?」

「軍の中では清貧こそ美しい、極限まで働くのが当然という風潮が強いから……」

「月月火水木金金、ですよね」

「体調管理上、十分な休息は不可欠で、能力を發揮させる基本中の基本なのにな」

「根性論、精神論、我慢こそ美德」

「譲り合いの精神は大切だけど、行使するには基本的欲求が満たされた方が円滑」

「お腹空いてるのに配給されたコメを誰かにあげるなんて厳しいですよ」

「ええ。一杯あるからあなたにもあげる、その方が簡単」

「だからここは、余裕綽々なんですわ……」

「過労は罪。そういう精神で動かしてるわね」

「頑張りすぎて体調を崩すな、と?」

「そういう事。未達の所もあるけど……ところで秋雲さん」

「はい」

「あなた……今でも研修センターに行きたいと思う?」

「……」

秋雲は少し考えていたが、

「なんか……変な話ですけど」

「ええ」

「行つて、そういうノウハウを身に付けるのが怖くなりました」

「怖い?」

「身に付けたら、ここがなくなるといふか、居られなくなりそうで」

「・・・」

「そ、それこそ荒唐無稽な事かもしれないけど」

「提督はね、艦娘化処置を受けてるからそう簡単に退任しないわ」

「あの島の浜で実際に処置を見た時は心底びっくりしましたけどね」

「でも、ここが無くなってしまいう確率は0ではないわ」

「・・・」

「受けた、受けないは無関係に、そういうのはやってくるわ」

「・・・」

「だから無くなったとしても生きるノウハウを身に着けたいなら、行かせてあげるわよ?」

「・・・あの」

「ええ」

「風雲が帰ってきた後に、決めても良いですか?」

「良いわよ。切羽詰まった話ではないから」

秋雲はふと、龍田に聞いてみたくなった。

「・・・龍田さんは、その、提督が居なくなったら、どうなさるんですか?」

第69話

秋雲の問いに、龍田は即答した。

「私も居なくなるけど?」

「へっ?」

「居なくなる理由が、退官であれば私も引退してついていくし」

「・・・」

「戦死なら私も討ち死にするし」

「・・・」

「最後の一瞬まであの人の傍にいる。それが私が決めた、私の生き方よ」

一切淀みのない、そして何の気負いもなくさらりと出てきた言葉に、秋雲は言葉を失った。

龍田がそう言い切る為に必要な提督との信頼は、信じられないほど莫大な物だ。

それをあの提督は、龍田に与えたという事だ。

秋雲はしばらくして、やっと口を開いた。

「龍田さんは・・・その・・・今がとても楽しいんですね?」

「ええ。あの人の傍にいて、あの人の為に私が出来ることが沢山ある毎日がとても好きよ」

「・・・風雲に悪い事しちゃったなあ」

「研修センターに行く子は誰でも不安を持つてるものだけど、風雲さんの場合はね」

「・・・はい」

「ノウハウを身に付けてくるよう、夕雲型全員から凄く期待を背負わされてたの」

「・・・」

「それは夕雲型の名誉の為、よ」

「・・・そういうの、あり、なんですか?」

「ナシよ。だから風雲さんの着任前夜に、夕雲さんと巻雲さんを呼ん

で4人でお話したの」

「お、お話・・・ですか・・・」

秋雲はポリポリと頬を掻いた。

どれだけ龍田が怒っていたか手に取るように解る。

夕雲さんと巻雲さん、相当寿命が縮んだだろうなあ・・・

「家とか、一族とか、名誉とか、そんな物を人の気持ちの前に置いても足枷になるだけ」

「・・・」

「だから風雲さんが着任しなくても、途中で帰ってきてても良いと確約させたわ」

「・・・んー、お言葉ですけど」

「ええ」

「風雲は多分、失敗しないと思いますよ？」

「あああ、随分風雲ちゃんの肩を持つのね」

「あいつは真面目で優秀ですから」

「そういう子の方が、どうして戦場で命を散らしやすいと思う？」

「えっ？」

「立てた作戦は遂行しなければならぬ。上官の期待に応えねばならない」

「・・・」

「そんな気持ちは置かれた状況を無視した行動に繋がるわ」

「・・・」

「私達は1ミリも作戦通りの行動なんて期待しない」

「えっ？じゃ、じゃあ」

「私達が期待するのは皆が無事に帰ってくることに。作戦はいずれ成功すれば良い。それだけよ」

秋雲は呆気にとられた。他所とは優先順位がまるで違う。

「それを風雲ちゃんがこの研修で身につけられたら、間違いなく大きく伸びると思うなあ」

「そっ・・・か・・・研修って、そういう事だったんですね」

秋雲は今まで研修センターに行った面々を思い出した。

直近では臙が帰ってきたが、行く前の臙はそれはそれは堅物だった。

そして何より、猪突猛進。撃滅するまで帰らないといった戦い方は心配でもあった。

だが帰ってきた後の戦い方を見る限り、戦況をよく見ているし、引く時は引く。

戦い方の変幻自在さや見もせず命中させる技術ばかりがもてはやされているが・・・

「退き時を冷静にみられるようになった事が、真の成果なんですね？」
「ええ」

「・・・私は傍から見て、危ない所まで突っ込んでいるでしょうか？」

「秋雲ちゃんは割と良く戦況が見えてると思うわ。だからあまり研修の必要性を感じなかった」

「・・・」
「ただ、研修に呼ばれない事が寂しかったのなら、行ってきても全然問題無いわよ?」

「・・・あー」

秋雲は苦笑した。本当に龍田は自分達を良く見てる。敵わないなあ・・・

「でも、今はより研修の必要性の高い子が多いから、ちよつと先になっちゃうわ」

「・・・」

「行きたいなら行かせてあげるけど、待つ事になるのはごめんなさいね」

「・・・いえ」

秋雲は小さく首を振った。

「良く解りましたし、私は臙ちゃんと仲良しですから、臙ちゃんに教えてもらいます」

「そうしてくれると助かるなあ。でも必要だと思ったらいつでも志願してね」

「・・・龍田さん。ありがとうございます。これでもやもやが晴れまし

た」

「能代さんとか、一緒に来た子達にも伝えてくれるかなあ？」

「伝えますけど・私以外はあんまりこういうもやもやは抱えてない気がします」

「表面だけでは解らないから」

「・・はい。そのお役目、承りました」

「じゃあ今夜のお話はおしまい。気を付けて帰ってね」

「ありがとうございます」

・・・パタン。

ドアが閉まったのを見て、龍田はぐっと腕を伸ばし、手元の明かりをつけた。

秋雲が見ていた明かりの位置とは全く異なる場所だった。

それは核心を突いた時、秋雲が激高して砲撃した場合への備えだったのだが・・

「そんな事にならなくて良かったわあ」

龍田のLVは秋雲より遥かに上だが、秋雲の実力は侮れないものがある。

「これで、騒動も収まるかなあ」

龍田は入り口に辿り着くと、全ての明かりを消して部屋を出て行った。

それから数日後。

「リットリオ、風雲、只今戻りました！」

「は〜い、お疲れ様でした。手を洗う間に1番から5番のどれにするか決めといてください」

風雲の車に同乗する役を頼みたいと香取から言われた時、リットリオは二つ返事で引き受けた。

自分は朝潮がずっと付いててくれたが、風雲の着任当初の事を考えると私が乗る方が良いだろう。

だが、いつか3人に対する風雲のわだかまりを解きたい。

とても自分達を思ってくれる、優しい教官達なのだから。

二人は洗面所で交互に手を洗いながら話していた。

「今日も疲れましたね」

「そうですね。でも風雲さん、ハンドル捌きがめきめき上達してますよ」

「えっ本当ですか？」

「はい。迎撃の時に撃ち易いつて思いますから」

「良かったあ・実はどうやったら滑らかに車が動くか考えて操作するようになっているんですよ」

「風雲さんは勉強熱心ですね。その調子なら射撃の方もすぐでしょうね」

「そう・・・ですよね・・・」

風雲はタオルに手をかけたまま俯いた。

第70話

リットリオは風雲の方に向き直った。

「どうしました?」

風雲はタオルを見つめたままポツリと答えた。

「やっぱり・・来週から交代、なんですよね」

「普通は、ですけどね」

「・・解ってるんです。やらないと研修にならないって」

「銃を撃つのは苦手ですか?」

「んー・・その・・はい」

「反動が大き過ぎるなら鹿島さんに言えば取り替えてくれますよ?」

「あ、いや、その、教官が決めた事に逆らうなんて・・」

「そんな事無いと思いますけど・・」

「ま、まあこの話はこれで。さ、早く行きましょう!」

「・・ええ」

そう。

風雲はリットリオを大変信頼し、一緒なら買物もこなせる。

しかし香取姉妹と朝潮に対する怯え方が尋常では無いのである。

その日の夜遅く。

執務室を訪ねたリットリオは、丁度方針を話し合っていた香取達と出会った。

そこで風雲の言ったこと、最近の様子等を打ち明けたのである。

「んー、何に困ってるのかなあ・・」

「そこまでは聞けなくて・・」

「苦手・・ですか」

香取が首を振った。

「一番気になるのは、意見を言う事を教官の指示に逆らう事と認識されている点です」

鹿島が続けた。

「うん。私達が言うのはあくまで見立てや草案だから、本人に合っ

るとは限らない」

朝潮も頷いた。

「でもその差異までは私達では解りませんから、言ってもらわないと解決しません」

「未解決の問題を抱えていては、銃の捌きは上手くならない」

「そしてその話さえ、リットリオさんには言えるけれど私達には言えない」

「やっぱり順番を後回しにしてもらって、着任を遅らせた方が良かったのかなあ」

「ですが、その間鎮守府内で要らぬプレッシャーに晒されては可哀相ですし・・・」

「我々も堂々巡りの議論の果てに、一番マシだと思っ選択肢を取ったんですよね・・・」

リットリオは黙って頷いた。

誰かが着任すると決まった時から、香取達は話し合いを重ねている。

表向きは手取り足取りでもないし、傍に居て教えてくれる訳でもない。

だが、一人一人を良く見て、どうすれば最善の教育となるかを高密度に調整している。

ふと、リットリオは自分がこの場に居る意味は何だろうかと考え、口にした。

「あの」

「ええ」

「私がここに居るのは・・・えっと」

香取と朝潮はグラスの水を見つめたまま、鹿島は上目遣いにリットリオを見返した。

3人とも静かにリットリオの答えを待っている。

「いつか・・・戦艦として皆を率いる際、トラブルが出た時の対処法を見せて頂いてるのですか？」

鹿島がニツと笑った。

「まあ正解、かな」

朝潮はグラスに目を向けたまま継いだ。

「正確には、別に艦隊運営に限らなくても構いません」

香取はミネラルウォーターのボトルからグラスに水を注ぎながら継いだ。

「困り事は抱え込むほど大きく見えます。周囲に打ち明け、適切な大きさにして調理してしまうのです」

「風雲さんの事は・ありふれた、そのくせ難しい物だと思います」

「誤解は解けたけど気持ち的に畏怖の念が残っている。あるいは前からそうした常識を持っていた」

「です。一体どうしたら・」

鹿島が胸を張った。

「出来る事をやれば良いのだよ・きみい」

「・あつ」

リットリオはその仕草と臍の姿が重なった。

あの時、先生つぽかろうと言って、優しく諭してくれた臍の姿を。

自分も、あの時の臍のように導けるだろうか。

「どうしたんですか、リットリオさん？」

香取が心配そうに見ていたので、

「いえ、私も良い先輩になりたいなって、思いました」

「んー・それはお二人に重荷となるかもしれませんよ」

「えっ？」

「リットリオさんの良い先輩たる理想像と、風雲さんのそれが一致してれば良いんですけど」

鹿島が溜息をついた。

「割と高い確率で違うんだよねえ・これが」

「そ、そうなんですか・」

朝潮がリットリオの肩を叩いた。

「そしてリットリオさんは、風雲さんの支配者でも、下僕でもありません」

「え？ええ・当然です」

「本当に、そこを理解してますね？」

「えっ？」

「風雲さんの為にと、良かれと思って、自ら下僕になっていませんね？」

「そ、そんな事・・・は・・・」

鹿島が続けた。

「実はねえ、ほとんどの子がその罫に嵌るんだよ」

「へっ!？」

「だって、他人から好かれない、評価されたいって言うのは当たり前
の気持ちだもん」

「・・・」

「更によれば、困ってる子が居たら手を差し伸べたくなるのが人情だ
もん」

「・・・」

「一番難しいのが、自他共に犠牲にしない適切な距離感を保つ事」

「・・・」

「リツちゃんは今、かなり難しい局面に居るよ。だから種明かしして
るんだもん」

「えっ」

「朧ちゃんとかはこの辺も自分で気づいてもらったんだけど、状況が
状況だから」

「私は、どこから考えれば良いのでしょうか・・・」

香取が呟いた。

「1つは、リットリオさんがここに居られる日数を考慮せねばならな
い、と言う事です」

「あー」

リットリオは顔を歪めた。

そうだ。

今は私が中間に立ち、風雲ちゃんと香取さん達の意思疎通を図って
いる。

だが私がこのまま抜けてしまったら、風雲ちゃんはやっていけないだ

ろうか。

いや、違う。

やっていけるように、しなければならぬ。

残り2週間と3日。着任が1週間遅れた分リミットは短い。

どうすればいい？

「・・・」

黙り込んでしまったリットリオを、3人はちらちらと見たまま黙っていた。

沈黙のまま1分が過ぎた時、ハツとしたようにリットリオは顔を上げると、

「あ、あの、こういう場合にどうしたら良いかご存知ですか？解らないので知りたいです！」

と言ったので、鹿島が応じた。

「ギリギリ合格かな、リツちゃん」

香取達が頷いたのを見つつ、鹿島は続けた。

「まずは私達の気持ちを伝えてみようよ。その反応を見て次に行こう！地道にね！」

鹿島がにこつと笑いながら言ったので、朝潮はほっと溜息をついた。

「鹿島さんの明るさに、私は何度も助けられていますね。いつもありがとうございます」

「私だって朝潮ちゃんに助けられてるよ、こちらこそありがとうね」

「・・・おほん」

香取が小さく咳払いしたので、

「もっちゃん、香取姉えにも感謝してるよっ！」

と、鹿島が笑顔を向けたので、香取は頬を染めて頷いたのである。

リットリオは3人の様子を見て思った。

いつか自分も、こんなに信頼しあえる仲間を作る事が出来るだろうか。

いや、ぜひ作りたいものだ、と。

第71話

翌朝。

朝食の席で、おもむろに香取が口を開いた。

「今日は銃の訓練日と致します。入った依頼は朝潮さんに対応頂きます」

「うえええっ・・・あ、いえ、なんでも、ないです・・・はい」

「ではリットリオさん、朝食の片付けを風雲さんと済ませた後、射撃場にお連れください」

「解りました」

カチャカチャと音をたてながら、その割に静かなキッチンで。

俯き加減で食器を洗う風雲の隣で、リットリオは何と言葉をかけたら良いか迷っていた。

昨晩は一気に色々なことを教えてもらったので、まだ消化不良気味だった。

ついでに言えば、その事を考え続けていてあまり寝ていなかった。だから正直、買い物当番がなくてホッとしていたのである。

「・・・リットリオさん」

ようやく、風雲が重い口を開いたのは、食器を拭き始めた時だった。「はい」

迷いが表に出て、声色が変わって無ければ良いなど、リットリオは思った。

「あ、あの、わ、わたし・・・ええと・・・ああ上手く言えない・・・」

目を泳がせる風雲の両手を、リットリオはそっと包みながら言った。

「聞きます」

「ふえっ?」

「時間がかかっても良いです。上手に言えなくても良いです。私は、貴方の話を聞きます」

「・・・あ、ああ」

「だから、聞かせてください」

「うっ、ひつく、うわあああああん」

立ち尽くした風雲がわんわん泣き始めた声は、家の外まで聞こえたという。

「・・・そんな、それは無理ですよ」

「でも、でも・・・」

泣き止んだ風雲がポツリポツリと話した事。

夕雲型として恥ずかしくない成績を残したい。

皆勤賞は当然、銃の訓練は最初から満点で、あらゆるテストを満点でクリアする優等生でありたい。

「でないと・・・でないと当番をやりくりして送り出してくれた姉さん達に申し訳が立ちません・・・」

その呟きに、リットリオは頷いた。

それこそが風雲をガチガチに縛っていた元凶だし、根本的に勘違いをしている。

「風雲さん」

「・・・」

「この名前を覚えてますか？」

「・・・山甲町・・・研修・・・センター」

「ええ。その通りです。間違っても山甲町試験場ではありません」

「・・・？」

怪訝な顔で見返す風雲に、リットリオは続けた。

「ここは知らない事を教えてもらい、出来ない事を出来るようにしていく場所です」

「・・・」

「全ての試験に最初から満点であれば、恐らくその方は研修不要と評価されるはずですよ」

「えっ」

「来る前から全て知っているのなら、そもそもここに来る意味が無いからです」

「・・・そっか」

「一番の問題は、知っているかのように振舞うこと。知る事を怖がる事と言っても良いです」

「・・・で、でも、教官に聞くの、こ、怖いんです」「なぜですか?」

「わ、私に対する教官の覚えは悪いと思います。ですからこれ以上失態を重ねては・・・」

「重ねては?」

「こ、ここから追い出されるんじゃないかって、そしたらそれこそ、姉さん達に合わす顔が・・・」

風雲がぎゅつと縮こまったので、リットリオは優しく風雲の背中を撫でた。

「・・・んー」

「ここは恥ずかしいけれど、仕方ない。」

「風雲さん」

「はい」

「私は着任3日目に、峠道を通り止めにしちゃいました」

「・・・へ?ど、どうして?」

「山賊さんの車に向けて主砲を撃ったら道路脇の崖まで崩しちゃいまして・・・」

「・・・え」

「その後警官隊に囲まれて護送車に乗せられました」

「ふええっ!?!」

「取調べを受けて、留置場に夜まで入れられて」

「・・・」

目をぱちぱちさせ、ぽかんと口を開けたままの風雲をちらりと見たリットリオは、

「最後に署長さんにごつてり絞られて、香取さんに迎えに来て頂きました」

と、言い切った。

風雲はたっぷり1分ほど固まっていたが、

「そ・・・そ、それって・・・た・・・逮捕・・・じゃ・・・」

「です」

「リ、リットリオさんが・・そんな」

「で、でも！でも聞いてください！これには訳があるんです！」

「訳があったって警察のご厄介になる所まで研修とは言わないんじゃないですか!?!」

「そうですね！そうですねけどそうなたちやっただからしょうがないじゃないですか！」

「そもそも人に向けて主砲発射ってご法度中のご法度じゃないですか！」

「人じゃないです！向かってくるジープです！」

「それは詭弁です！提督はご存知なんですか!?!憲兵隊からどんな処分が下されたんですか！」

「えっ!?!」

リットリオはその時初めてその事に気がついた。

風雲は眉をひそめてリットリオにずいっと近づいた。

「・・まさか、何も・・」

「今の所、何もないですね・・」

「そんな事したら雷撃処分間違い無しじゃないんですか?」

「え・・えーと」

「あまりに酷すぎてまだ報告されてないとか?」

リットリオは嫌な汗をかいていた。

「やっぱりともんでもないことをしてしまったんじゃない?」

「提督さんには勿論報告してるよ?」

リットリオ達が声の方を向くと、肩をすくめた鹿島が廊下からこちらを見ていた。

リットリオは鹿島に訊ねた。

「え、ええと、それで提督は何と・・」

「工場長に頼んで復旧要員送るよ〜って」

「へ?あ、いや、壊れた道路の方じゃなくて、私の処分については・・」

「特に何も言っただけよ?あ、研修頑張っただけよ?」

風雲が激しく食いついた。

「まっ！待ってください！そんな重犯罪を犯してお咎めなしなんですか!？」

「うぐう」

風雲の言葉にリットリオはよろめいた。

やっぱり大変なことをしてしまっただんだ・・・

だが、鹿島はあっけらかんと答えた。

「そんな事言ったらこの町で生きていけないよ？相手だつて50c a1撃つてくるんだし」

「で、でも、艦娘が人間に砲を向けるなんて」

「まあ今ならM93Rで対抗出来るだろうけど、あの時は銃の扱いに不慣れだったもんね」

「そういう問題なんですか?!」

「誰だつて最初から全部上手く出来るわけないし、こなせるようになるのが研修だよ?」

「あ・・・」

「失敗して、気づいて、反省して、工夫して、学んでいく。だから強くなれるんだよ?」

第72話

鹿島の言葉に、風雲がふっと力を抜いた。

「・・・そっか・・・あくまで研修センターであって、何か処置を施してもらおう場所じゃないですものね」

「ここは改造する施設じゃありません。私達が出来るのは導く事だけです」

「半身を差し出して、悪魔と契約するわけじゃないんですものね・・・」

「・・・まだそれ信じてたんだ」

「だ、だって、LVがほとんど変わらないのに、どうしてあんなに強くなるのか理由が解らなくて」

「それが学んだ結果なんだってばく、やだよう風雲っちー」

「す、すみませくん」

その時、ふとリットリオは風雲が鹿島と普通に話してる事に気がついた。

あまりにシヨックな事を聞いたから、自らの防壁を構築してる暇が無かったと言う事か。

そしてその絶妙なタイミングで、ごく自然に登場した鹿島はやはり只者ではない。

リットリオはそつと、鹿島を見た。

鹿島はちらとリットリオを見返し、ぱちんとウインクを返したので

ある。

リットリオはほつと溜息をついた。

「どうやら、最大のミッションは達成できたようです。」

「鹿島さん・・・リボルバーって隙間からの火花が酷いですね」

「まあそういう構造だからねえ」

「6発しか撃てないし」

「代わりに1発の威力が大きいし、構造が単純だからメンテは楽だよ？」

「でも、あの時の事を考えると、1発の威力より装弾数の多さが物を言う気がするんです」

「あの時？」

「山賊を撃退する時です！」

「まあ、最初のうちはマシンガン欲しくなるくらい出てくるもんねえ・・・」

「はい。そう考えるとこつちが良いんでしょうか？」

そういつて風雲はM16A4を指差したが、鹿島は首を振った。

「気持ちは解るけど運用コスト的にNGです」

「ああっ！その問題が！やーだー！」

「でもつて、車内や街中の銃撃戦で使うには長過ぎるのです」

「あーもう！全部良い武器は無いのですか！」

「ないねー」

リットリオはにこにこしながら風雲と鹿島の会話を聞いていた。

すっかり風雲は鹿島には打ち解けたようだ。

M93Rの分解整備を終えてスライドを戻した時、風雲がこちらを向いた。

「リットリオさん」

「はい？」

「リットリオさんはなぜ、M93Rを選んだんですか？」

「まず、両手で持てて、幾つか弾の選択肢がある事」

「ええ」

「3点バースト射撃が便利だって聞いたし、反動も小さかったし」
「なるほど」

「・・・イタリア製だし」

途端に風雲はジト目になった。

「リットリオさん」

「・・・はい」

「本音は最後だけですよね？」

「そ、そそ、そんなことないですよー」

「解り易すぎます」

「えー」

リットリオは違いますよねという目で鹿島を見た。

だが鹿島はうんうんと頷いていたので、

「1個残しておいた紅白饅頭があるんですよねえ」

と、ポツリと呟いたところ、鹿島はキリツとした顔で、

「そんな事ないよ風雲さん！リットリオさんは思慮深い先輩ですよ！」

そうだったので、風雲はジト目で

「鹿島さん、買収に応じすぎです」

と、返したのである。

結局、風雲は散々悩んだ末にMP5KA1を選んだ。

「うん！9mmパラベラム弾でも絶対こっちの方が撃ちやすいわ！」

空葉莖に足首まで埋もれながら満足げに頷く風雲を見て、鹿島はリットリオに囁いた。

「ねえ、風雲ちゃんてとことん真面目だよね」

「はい」

風雲はイヤーマフを手にするると鹿島の方を振り向いた。

「後100発練習して良いですか？」

「ひゃ、ひゃっばっ!？」

「はい。通常弾としてAPかFMJか、多弾数撃った後の手の痺れ具合で決めたいんで！」

「あ、ああそう・・・ま、まあ良いけど?。」

「ありがとうございます!。」

タタッタタタツ・・・パララララ!

ふと、リットリオは鹿島に尋ねた。

「あの」

「ええ」

「風雲ちゃん・・・集弾率上がってませんか?」

「よく気が付いたね。うん。初めの頃に比べると良くなってるよ」

「です・・・よ・・・ね・・・」

「でもリツちゃんのM93Rよか集弾率は元々良いからねえ」

「えっ?M93Rって集弾率悪いんですか?」

「フルオートも出来るピストルと、本家SMGじゃねえ」

「・・・」

「単発で撃てばM93Rだって良く当たるよ？」

「私も・・・MP5撃ってみて良いですか？」

「えーと・・・あー、MP5SDならあるよ」

「なんか形違いませんか？」

「先つちよが消音器になつてゐるんだよー」

「へー」

「突然の屋内戦には有利だよね」

「お借りします」

ピスッ！ピススススス...

「んー・・・」

「どお？」

「やっぱりSMGは重いですね」

「そうだね」

「それに、消音器がついてても結構音はするんですね」

「サプレッサーが無音にしてくれるなんて幻想だよ？」

「やっぱり私は、こつちで良いです」

「M93Rは良い銃だからねえ」

リットリオと鹿島が話し込んでいると、風雲が何度も頷きながら戻ってきた。

「やっぱりフルメタルジャケットで行きます。一番疲れません」

鹿島は頷いた。

「良いんじゃない？FMJは最も整備性が良いし、銃が壊れにくいし」

「やっぱりAP弾は厳しいですか」

「ホローポイントよりマシだけどね」

「なるほど」

リットリオは微笑んだ。

警戒して話すら出来なかった時に比べれば、この短い時間でも風雲は沢山学べている。

私が居る間に、もっと楽しんでくれたら良いな。

こうして鹿島を皮切りに、朝潮、そして香取とも風雲は話が出る

ようになって行った。

時は進み、風雲がついに一人で買い物に行く日がやってきた。

だが、その任務を聞いた風雲は明らかに戸惑っていた。

「ふええっ？こっつ、これが依頼なんですか？」

香取は普段より機嫌が悪そうに返事をした。

「そうです。ではよろしくお願いいたします」

「……んー……んー……」

「車は3番を使ってくださいね。あまり時間はありませんよ」

「あの……あーいや、はい……行って……きます」
パタン。

風雲が閉めたドアを見て、香取は小さく溜息をついた。

「聞き辛い雰囲気であろうと、訊ねなければならぬ時はあるのですよ、風雲さん……」

しかし、風雲は香取の予想とは全く異なる展開を取ったのである。

第73話

「ですから！マリモっぽい羊羹なんて言われたってさっぱり解りません！」

「あなたバカじゃないの！常識でしょそんな事！」

風雲が車で真っ先に向かったのは店ではなく、依頼主の家だった。

そして出てきた依頼主にもっと詳しく教えてくれと頼んだ。

だが、依頼主はまだ買いにすら行っていない事に激怒し、この有様になっただのである。

風雲は額に青筋を立てつつ、ずいずいと依頼主に近づきながら反論した。

「バカですいません！さっぱり解りません！教えてください！お急ぎなんですよね！」

「急いでるってずっと言ってるでしょ！もう良いわよ他の人寄越して頂戴！」

「今から他の人に頼んだらもっと遅くなりますよ！さあ！マリモっぽい色ですか？形ですか！」

「う、うう・・・」

「さあ教えてください！商品名でも良いです！さあ！さあ！」

「い、色よ・・・緑色の・・・」

「何味ですか？抹茶ですか！野菜ジュースですか！」

「や、野菜ジュース味の羊羹なんて、あ、ある訳無いでしょ何言ってるのよー！」

「はぐらかさないてください！じゃあ抹茶味で良いんですね！」

「う、うう、そう・・・よ・・・抹茶味よ」

「大きさは!？」

「大体こんな感じかな、こんな」

「長方形ですか円形ですか！」

「ちよ、長方形・・・」

「オーソドックスな羊羹の形ですね？長さは！」

「さ、30cmくらい」

「重さは！」

「し、知らないわよ！普通の羊羹よ！」

風雲はペットボトルのお茶を取り出した。

「これより重いですか軽いですか？」

「お、重い・・・かな？」

風雲はもう一本手渡した。

「これでどうですか」

「こ、こんなもん、かな？・・・やるわね」

その時風雲は怪訝そうな顔になった。

「・・・どこかでお会いしました？」

「ぜつ全然！全然会ってないわよ何言ってるの！」

「ふうーん・・・」

風雲はジト目で依頼主を見つめたあと、

「じゃ、1kg位ですね。お店の名前はわかりますか？」

「覚えてないわね・・・」

「包み紙はありませんか？紙袋とか！」

「さっ、探せばあるかも・・・でも面倒臭いし、それくらい良いでしょ？」

「お急ぎで買う為には絶対必要です！探してください！何なら私も探します！」

「あつだめ！入ったらダメ！」

「・・・やっぱりどこかでお会いしてませんか？」

「会ってない！会ってないから！ちよ！ちよつと待ってなさい！」
バタン！

勢いよくドアを閉められ、締め出された風雲は首を傾げていた。

あのお客さん、なーんかどっかで会ってるような気がするんですよえ・・・

ガチャ！

「ほ、ほら紙袋あったわよ！これで良いでしょ！」

「・・・店名と住所、電話番号まで印刷されてるじゃないですか」

「じゃあ急いでください！」

ボタン！

「・・・ください？」

風雲は首を傾げた。

なんか、変。

「・・・んー」

「か、風雲・・・ちゃん・・・ど・・・あれえ？」

顎に手を添えて考えながら路地に戻ってきた風雲に声をかけたのはリットリオだった。

しかし、風雲は更に首を傾げた。

「リットリオさん・・・どうしてそんなに息を切らせてるんですか？」

「だ、だって早す・・・いいいや、何でもない・・・よ・・・」

「？」

「そ、それより、か、買い物は、済ませたのですか？」

「いえ、これから買いに行きます」

「・・・これから？」

「ええ。マリモつぽい羊羹一本なんて曖昧過ぎるオーダーだったんで詳細確認してきました」

「あー・・・」

リットリオはポリポリと頬をかいた。

このお題は間違いなく自分や先輩達が引つかかったアレだ。

だが風雲は最初から依頼主に訊ねるといふ最も適切な行動を取ったのだ。

とすると、自分の出番が・・・

「あ、あは、あははははは」

「どうしたんですかりットリオさん？」

「いえ、あ、ええと、情報は補完出来ましたか？」

「はい！前回購入した際の紙袋を頂いて、大きさや重さ、色、形、味まで伺いました！」

「す、凄いね・・・ぬかりないというか・・・手馴れてるね」

風雲はジト目で溜息をついた。

「ある意味、卷雲姉えのおかげなんですけどね・・・」

「え？」

「あ、とりあえず買い物まだなんで、良かったら一緒に行きませんか？」

「あ、はい」

で、伝統・・・どうしよう・・・

変な汗をかき始めたリットリオを他所に、風雲は自分の車へと促した。

車を走らせながら、風雲は口を開いた。

「とにかく雑なんですよ、巻雲姉えは」

助手席でちょこんと座るリットリオはおうむ返しに聞いた。

「雑？」

「ほわほわーっとしたやつーとか、紅葉の葉っぱのような色のーとか」

「それ、説明なんですか？」

「ええ。そもそも例えが悪いし擬音ばかり多用するんでさっぱり解らないんです」

「あー・・・」

なるほどとリットリオは頷いた。

それは今回の訓練よりはるかに質が悪い頼み方だ。

「それを人づてで聞くと余計酷くなるんで、直接本人に質するのがいちばん早いです」

「なるほど」

「だから今回の依頼主もそうだと思ったんで、直接聞きに行ったんです」

「カンペキだね」

「巻雲姉えの対応が役立つ日が来るとは思いませんでしたけど」

「・・・だね」

「でも、なーんか引つかかるんですよねえ・・・」

「引つかかる？」

その時、横道からバイクに乗った強盗が飛び出してきたが、風雲は「うるさい、考え事してるの」

と、呟くや否や急ハンドルを切りつつサイドブレーキを引いた。

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ!

・・・タタツタタツ・・・パラパラ!

車がスピンしてバイクと対峙する角度になった時。

風雲は躊躇う事無く運転席の窓から出したMP5KA1の引き金を引いた。

あまりにも突然の出来事に応じ切れなかった強盗は、あっさりタイヤを撃ち抜かれて転倒。

そのまま元の方向までスピンさせた後、風雲は何事もなかったように話を続けた。

「ええと、どこまで話しましたっけ」

「えっと、引つかかる、かな」

そう答えつつ、リットリオは助手席で風雲の対応に舌を巻いていた。

自分とは明らかに異なるスタイルをいつの間確立していたのだろう。

あしらい方は自分より上手いかも・・・

第74話

風雲は思い出したように頷いた。

「そうでしたそうでした。訊ねた時はすつごいまくし立てられたんですけど」

「あの人はそうだよねえ」

「矢継ぎ早に聞いていったらなんか大人しくなっちゃって」

「あの人が!？」

「ええ。巻雲姉えの場合は天然なんでどこまで行っても反応が一緒なんですけど」

「むしろお姉様の方が酷いですね・・・」

「あの人の場合、なーんか無理してわざと曖昧に言ってそうな気がしたんですよねえ」

「・・・わざと?」

「ええ。本当はちゃんとしてる、そんな気がして」

「へー」

「あと、どっかで会ったような気がするんですよー」

「街の中ですれ違ってるんじゃない?」

「そんなんじゃないくて・・・もつと話とかしてそうな気がするんです

よ・・・」

「・・・」

リットリオは腕を組んで考えた。

「そういうえば、あの客は隴先輩も、その先輩もトラブルになったと
いっていた。」

「そして何回か後に克服した、とも。」

「何でこれだけトラブルになってるのに頼むのかなあ」

「えっ?」

「あーええと、あのですね、あの家の事なんですけど」

「怪しい!怪しすぎます!」

「ですよね」

商店街の隅で目的の羊羹を買った風雲とリットリオは、再び車に乗るとそう言ったのである。

「これは突き止めたいですね。我々にトラブルを何故吹っかけるのか」

「・・・」

しかし、リットリオは何故か別の意味で引つかかっていた。

なんか正体を追求するのはよろしくないような気がする。

リットリオが返事をしないので、風雲はひよいとリットリオのほうを向いた。

「どうかしたんですか?」

「んー：なんとなく、正体を突き止めるのは止めた方が良い気がするんです」

「えー、これを届けに行く時がチャンスじゃないですかー」

「いつもだと何回か依頼があるはずですから、まずは普通に渡して、様子を伺いましょう」

「リットリオさん慎重ですね」

「何かもやもやするというか、嫌な予感が」

「んー・・・」

風雲はウインカーを出しながら、

「まあリットリオさんがそう仰るなら、面と向かって問い詰めるのは止めときます」

と、続けたのである。

その夜。

リットリオは寝間着のまま、そつと階段を昇って行った。

風雲が既に寝てる事は確認した。話すなら今だ。

コン、コン。

「・・・はい」

「リットリオです。入っても良いですか?」

「いいよーう」

ガチャ。

リットリオがそつと中を伺うと、開け放した窓際に鹿島が立ってい

た。

手にはウイスキーの入ったグラスを握って。

「やー、リツちゃんだー」

「鹿島さん、結構飲まれてますね？」

「良いかねリツトリオ君、お酒は飲むものだよ！呑まれちゃダメなんだよっ！」

「その通りです。ですから呑まれないでください」

「・・・うん」

「あー・・・」

リツトリオは躊躇った。

自分の中では十中八九、あの依頼人は鹿島が変装してるのだという確証があった。

しかし自分はまだ研修中。このタイミングで聞いて良いのだろうか。

研修がやりづらくなったら申し訳ない。

押し黙ってしまったリツトリオを見て、鹿島は小さく溜息をついた。

「リツトリオ君」

「・・・はい」

「昼の件だね？」

「・・・」

鹿島はカラカラとサツシを閉め、窓の外を見ながら続けた。

「・・・風雲君は気づいてしまったかね？」

「特定してませんが・・・かなり身近な人ではないかと気づいています」

「あうー」

鹿島はがくりと頭を垂れた。

リツトリオはそつと顔を上げた。

「あの、鹿島さん」

「うん」

「あの依頼人は、鹿島さんですね？」

「・・・その通りだよリツトリオ君」

「好意的ではない人との交渉を行う訓練なんですね？」

「・・・それもあるし、本当にうまく説明出来ない子も居るしね」
「あー」

リットリオは苦笑した。まさに巻雲の事だ。

「どうかしたのかね？」

「今日の風雲ちゃんの対応はパーフェクトに近かったのでは？」

「想定ケースとは全然違ったけど、結果を考えれば満点でござる」

「語尾無茶苦茶ですよ」

鹿島はリットリオに振り向き、両腕をぐいと上にあげた。

「飲まなきややってられないのだよぅ」

「なら、種明かしをしますね」

「種明かしとな？」

「・・・なあるほど、お姉さんがまさにそのパターンだったのかね」

「です」

「だからかぁ・・・異様に対応が手馴れてて上手いと思ったのだよぅ」

「さすがの鹿島さんでも追いつけなかったんですね」

「だってさ、だって機関銃みたいに物凄い勢いで正確に聞いてくるんだもん」

「・・・」

「・・・」

「まさかまつすぐ来るとは思わなかったからネタを考える時間もな

かったんだもん」

「ですよね」

「だからボロが出てしまったのだよ明智君」

「誰ですか明智君て？」

「誰でも良いのだよトソン君」

「とりあえず、そういうわけです」

「じゃあ、その辺の訓練はもう良いかなあ」

「鹿島さんの見立て通りだと思えますよ」

「・・・リツちゃん」

「はい？」

「教えてくれて、ありがとう」

「・・・」

「実を言えば、変装して演技するのはちよつと自信があつたのだよ鹿島さんは」

「私は１ミリも気づきませんでした」

「だから今日はとことん凹んだのだよ」

「鹿島さんの方もバレそうって思ってたんですか？」

「だって風雲つち、どっかで会ったよねってしつこく聞いてくるんだもん」

「あー」

「質問にしどろもどろになったのも恥ずかしいし、その上演技までバレたら切ないのだよ」

「先生も、進化していけば良いんじゃないでしょうか？」

「・・・」

「最初から完璧な人は居ない。皆さんに教えて頂いた事ですよ？」

「・・・たはは。こりや鹿島さん、一本取られちゃいました」

「でも、風雲さんには言わないでおきます」

「そうして欲しいな」

「でも・・・どうしようかなあ」

「何が？」

「あー・・・」

リットリオは一瞬、「伝統」を説明すべきか迷った。

研修生の間で受け継がれている「伝統」は、見方を変えると研修の

ネタバラシである。

香取達から見て気分の良い物なのだろうか？

だが、口走った以上は言ってしまうしかないだろう。

変に鹿島が気にしたら可哀想だから。

「えつとですね・・・」

第75話

リットリオの話に、鹿島はあっさり頷いた。

「もちろん知ってるよ」

「ふえっ？」

「知らないふりしてるけど、3人とも知ってるよ」

「え、あ、あの、それはどうして・・・」

「だって、その伝統を受け継ぐ方が研修生の子達は沢山の事を学べるもん」

「・・・」

「それに、研修生同士の絆にもなるでしょ？」

「ですね」

「で、何か困るの？」

「だって、風雲さんに伝統を披露するタイミングがなくなっちゃったじゃないですか」

「もう十分受け継いでると思うよ？」

「えっ？」

「伝統って、別に困ったお客さんに対する処し方を説明する事だけじゃないよ」

「・・・」

「先輩が後輩の破れない殻を破り、味方だという事を実感させるって事だもん」

「・・・」

「リツちゃんは初日からずっと、風雲ちゃんにそうしてきたよ」

「・・・上手く、接してこれたでしょうか」

「でなきや風雲ちゃんとはつくに鎮守府に戻されてたと思うよ」

「伝統として認識してくれたでしょうか・・・」

「んー・・・」

鹿島は小さく肩をすくめると、

「そう認識するように、ちよっと種明かしはしてあげても良いかもね」

「・・・そう、ですね」

リットリオは頬に手を当てた。

自分は今週末にはここを去ってしまう。

風雲にどのタイミングでどうやって打ち明けるか。

「・・・」

少し考えていたが、上手い案が思いつかない。

やがてふうと溜息をつくとき、

「鹿島さん、あの」

だが、鹿島はそう言いかけたリットリオの唇にちよんと人差し指をあてた。

「それはリツちゃん最後の課題だから、自分で考えてみたまえ」

「えっ？さ、最後の課題、ですか？」

「その通りだよリットリオ君」

「あ、あの、私は、その、こちらの研修をちゃんと卒業出来るのでしようか？」

「今までは大丈夫じゃ。だから安心して最後の課題に取り組みたまえのすけ」

「だから語尾無茶苦茶です」

「鹿島さんは眠いのです」

「あ、そ、そっか。もう夜遅いですもんね。そろそろ戻ります」
「うむ」

「じゃ、じゃあ、おやすみなさい」

「・・・リツちゃん」

「はい」

「大丈夫だよ。リツちゃんは戻ったら、皆から頼られても応じられるよ」

「・・・そう、でしょうか」

「リツちゃんがここで学ぶべきだった事はね」

「はい」

「・・・おおつとう口が滑る所だった危ない危ない」

「・・・」

鹿島はベッドに腰掛けるとひらひらと手を振った。

「早く寝たまえ明智君」

「・・・はい、おやすみなさい」

・・・パタン。

閉じられたドアに向かって、鹿島は小さく呟いた。

「大丈夫だよ。こんなに周りを安心させられるんだから」

鹿島はふつと笑うと、グラスに残った最後の一口をあおった。

「・・・ぶはっ」

グラスをテーブルに戻し、そのままごろんとベッドに横になる。

今まで何人もの研修生を迎え、2ヶ月のカリキュラムを施してきた。

この町に来た当時は自分が生きていくだけで手いっぱいだった。

研修センターとして本格的に受け入れを始められたのは実質1年近くたった後だった。

神通さんの訓練は厳しかったけど、神通さんが居れば襲われないから安心だった。

そんな人になりたくて、香取姉えと朝潮ちゃんと3人で頑張ってきた。

・・・でも。

「うん。いつまでも凹んでも仕方ないよね。せつかくリツちゃんに元気貰ったんだし」

もぞもぞとシーツの間に身を入れていく。

「明日から・・・また頑張ろっつと」

鹿島はそつと目を瞑った。

翌朝。

「それはまた急なお話ですね・・・ええ、大丈夫ですが・・・はい、ではそのように」

電話を置いた香取は少し考えていたが、執務室のドアを開けると、

「鹿島さん、急いで来てください」

と、声を上げたのである。

風雲が途端に真っ青な顔になったので、リットリオは首を傾げた。

「そんなに凄い方なのですか？」

「ええと・・・」

風雲が言い淀んでいると、香取が続けた。

「申し送り事項としては、調理をさせぬよう特段の配慮を要する、と・・・」

途端に風雲がうんうんと何度も頷いたので、香取が訊ねた。

「ええと、風雲さん、何かご存知なのですか？」

風雲はピンと人差し指を真上に立てながら言った。

「比叡さんのカレーの3倍は酷いです」

リットリオは香取まで青くなった事に首を傾げたのである。

第76話

その昔。

リットリオは鎮守府に着任した直後、真夜中の調理場で比叡を見かけた事があった。

いつになく真剣な表情だったので、思わず声をかけた。

「こんばんは、比叡さん。何をしてらっしゃるんですか？」

顔を上げた比叡はてれてれと頬を染めた。

「あ…リットリオさん。実は苦手なカレーをですね、ちよつとでも上手くなるうと思つて」

「カレー…？」

リットリオは首を傾げた。

本国イタリアではそれほどカレーはありふれた料理ではない。

インド料理店に入れば食べられるが、自宅では作らないからだ。

比叡はリットリオに尋ねた。

「リットリオさんはカレー作るの上手いですか？」

「いいえ。全く作った事ありません。作れないと問題がありますか？」

「ん…」

比叡は少し腕組みをして考えた後、肩をすくめた。

「鎮守府では金曜日のお昼は毎回カレーライスなんですけど」

「そうなんですか。まだ金曜日のランチを頂いた事がなくて」

「出撃とかで鎮守府を離れた場合、自分達で食事を用意するんですけど」

「はい。ただ、士気高揚の為に旗艦が用意する事もあると伺いました…あ」

「そう、その時くらいかなあ。といつても必ず金曜日の昼にカレー作らなきゃいけないってこともないよ」

「比叡さんはカレーが苦手なのですか？」

「食べるのは大好き。でも作ると…その、食べ物エリアをはみ出た

ものが出来上がるんだよね・・・」

「エリアをはみ出る？」

リットリオは今、調理台の上に置かれてるものを見た。

ジャガイモ、たまねぎ、にんじん、スイカ、肉、バター、黒蜜、小麦粉、カレー粉。

スイカと黒蜜はデザート用の材料だろうと思いつつ、リットリオは続けた。

「別におかしな物はなさそうですけど・・・これがそうなってしまうのですか？」

「そうなの」

「では、先程のような場合はどうされたのですか？」

「私が旗艦って事があまりないんだけど、ある場合はこれを使ってるよ・・・」

そうやって比叡が取り出したのはレトルトカレーだった。

「なるほど。それなら失敗しませんね」

「私が作りましたっていうより皆もホツとした表情になるしね」

「そんなに凄いですか？」

「食べてみますか？」

「うーん：私はカレーの味を知りませんから、味見役には適さないかと思います」

「そっかあ。まあ、練習は自分の為にするものだしね！」

「上手く作れるようになったら教えてくださいね」

「ももちろん！じゃあ調理に入るね」

「はい。比叡さん、おやすみなさい」

「おやすみー」

その翌朝、演習相手になる筈だった比叡と金剛がドック入りしたと聞いた。

演習中、僚艦だった雪風に昨夜の事を話すと、

「リットリオさんは信じられないほどの剛運ですね！雪風、あやかりたいです！」

そういつて拜まれたのである。

リットリオが回想から意識を戻すと、香取と風雲が真剣に話し合っていた。

「では、磯風さんは食事当番の一切を免除しましょう」

「それだけですと怪しまれます。調理係と片付け係を分けては如何でしょうか」

「良いアイデアですね。調理係は私達で行い、磯風さんは当たっても片付け係ですね？」

「ええ、次に比叡さんが来ない限り押し通せるかと」

「では、当番編成は私が決めているという事にいたしましょう」

「その方が良いですね。抽選とかは嫌です」

「命懸けの抽選なんてしてはなりません」

ふと、風雲が顔をひよこつと上げた。

「あれ？　そういえば朝潮さんと鹿島さんはどちらに？」

香取がぎくりとした顔で答えた。

「あ、ええと、二人はちよつと用事があつて出かけてます」

「ふーん・じゃあこの話、香取さんからお二人に伝えて頂けますか？」

「もちろんです。リットリオさんも口裏を合わせてくださいいね？」

リットリオは肩をすくめた。

「構いませんけど・・・」

それで良いのかなと思つた時、事務所の電話が鳴つたのである。

その日の夕方。

「昼からの注文にしては多かったですねー」

「そうだねー」

普段は一人に対応するが、量の多い依頼だったので二人で行く事になったのである。

風雲はハンドルを操りながら言った。

「リットリオさんが帰る前に、もう一回ご一緒出来て嬉しいですよ！」

「そう？」

「そりやそうですよ！　最近は一人対応でお話しする人も居ませんですし、それに・・・」

「それに？」

「私が着任した早々から、教え切れないくらい助けてもらったじゃないですか」

「・・・んー」

「初日には噂を否定してもらったうえに、香取さん達へのお詫びの仕方でも教えて頂いて」

「・・・」

「銃が合わなくて、それを言えなくて困ってた時も凄く自然にきつかけをくださいましたよね」

「あれは何と言うか、たまたま上手く言った部分が大きいですけどね・・・」

赤信号を見つめながら、風雲は微笑んだ。

「でも、リットリオさんが助けてくれなかったら、きっと私は今ここに居ないです」

「・・・」

「途中で帰ったら、私は夕雲姉さん達に合わす顔が無かったし、自信をなくしたと思います」

「・・・」

「実は私、この町に来る途中の景色、ほとんど覚えてないんです」

「えっ」

「地獄のようなガラの悪い所で、1つもミスが許されなくて、途中で帰れば恥晒し」

「・・・」

「心細くて、泣きたくて、でもどこから誰が見てるか解らないから表に出せなくて」

「・・・」

「だから、私にとって唯一の希望が同じ立場のリットリオさんだったんです」

「立場？」

風雲は青信号を見て、車を進めながら言った。

「香取さん達は教官ですから、どうしても上下の関係です」

「ええ」

「でも、リットリオさんは先輩ですけど、同じ研修生でもあります」

「ええ」

「仔細は違うかもしれませんが研修を受けるという意味では同じですから」

「ええ」

「私が怖いとか困ったとか、出来て良かったとか思う事を共有出来る人ですから」

リットリオはふと、風雲が着任した日、朝潮が言ったことを思い出した。

「私も、香取さんも、鹿島さんも出来ない事があります」
なるほど。

そう言う事だったんですね・・・

第77話

リットリオは軽く深呼吸すると、ゆっくり風雲に話し始めた。

「研修生の間で、ずっと受け継がれている伝統があるんです」

「伝統、ですか？」

「聞いて頂きますか？」

「はっ、はい！もちろんです！」

「研修にしろ、この生活にしろ、鎮守府では経験し得ない事が沢山あります」

「・・・むしろそっちの方が多いですよね」

「はい。ですから、本人だけでは乗り越えられない事があります」

「・・・」

「一方で、後輩が出来る時には、私達はある程度慣れて、余裕が出てきます」

「そうですね」

「ですから後輩が躓いた時、そつと寄り添ってあげてください」

「・・・リットリオさんが、私にしてくださいのように、ですね？」

「そこにこだわる事は無いと思います。私が先輩から助けて頂いたのはですね」

「ええ」

「赤い口紅を1本買ってきて欲しいと頼まれた時でした」

「・・・微妙に曖昧ですね」

「ええ。でも私はその曖昧さを確かめず、自分でこれだと思った口紅を買ってしまいました」

「・・・」

「当然お客さんは怒り、受け取ってくれませんでした」

「・・・ん？」

「その時、お客さんの所からとぼとぼと帰ろうとした時にですね」

「ええ」

「先輩がひよこつと顔を出して、話を聞いて、お菓子を奢ってくれたん

です」

「・・・」

「そして、どうしてそうなってしまったかを整理するのを手伝ってくださいました」

「・・・」

「課題ですから、本来は一人で考えねばなりません」

「・・・」

「でも怒ってる時に自分の悪い所に気づくはとても大変だからと、手を貸してくれた」

「・・・」

「おかげで私は引きずる事無く次に進めました」

「なるほど。その事に鹿島さんは何も言いませんでしたか？」

「知ってるけど知らないフリをしてる、と」

「ふうん・・・じゃあ鹿島さんはそこまで踏まえた上で、怒りっぽい客の役を演じてるんですね」

「そうです・・・って!?!」

「はい？」

リットトリオは目を見開きながら風雲に訊ねた。

「ど、どどどどどうしてあのお客様が鹿島さんだと知ってるんですか?」

風雲は肩をすくめた。

「だって、その日の夜に一緒に晩ご飯食べてるんですよ。気づきますって」

「私、この件があるまで全然知りませんでした・・・多分先輩達も」

「そうですか? 駆逐艦なら割と普通に出来ると思いますよ?」

「そうなんですか?」

「ええ。入渠中、つまりお風呂場で誰かに何かを伝えるとするじゃないですか」

「はい」

「その時に相手を間違えたら大変ですけど、裸で、かつ髪が濡れてると紛らわしい人が多いんです」

リットリオはふと、風呂場で駆逐艦の子達と出会った時、見分けがつかなかった事を思い出した。

「あー」

「ですからちよつとした仕草とか、語尾とか、外観と無関係の特徴だけで特定するスキルは必須なんです」

「・・・なるほど」

「話を元に戻しますが、それが伝統なんですかね？」

「・・・ええ。ですから風雲さんも、磯風さんと対峙したり、避ける方向に回らないであげてください」

「・・・うーわあ・・・難題だ」

「料理の件は大変なんでしょうけど」

風雲は思わず車を止め、リットリオの方に向いた。

「り、リットリオさん・・・ちよおつと確認したいんですけど」

「はい？」

「まさか、磯風の料理の凶悪さをご存じないんですか？」

「ええ。ご馳走になった事は無いですね・・・」

風雲は腕を組み、答えた。

「それは・・・それはとても由々しき問題かもしれません」

「ええっ？」

「えつと、じゃあ比叡さんのカレーは解りますよね？」

「それが・・・そちらも機会がなくて・・・」

「うええええええっ!?!リットリオさんもう結構長いですよね？」

「え、ええ・・・」

「それは良くありません。意識の共有が出来なくなってます」

「意識の共有？」

「・・・」

「・・・あの？」

風雲はしばらく考え込んだ後、悲壮な決意を秘めた目でリットリオを見た。

「わ、解りました・・・リットリオさんの今後の為、こ、この風雲、ご協力いたします」

「？」

その日の夜。

「陽炎方駆逐艦十二番艦、磯風だ、皆、よろしく頼む」

キチツと背筋を伸ばしてそう言った磯風に、リットリオは

「かつこいいですねー、こちらこそよろしくお願いします」

と、ニコニコして応じ、磯風はホツとしたように

「で、では、す、少し自己紹介をさせて頂く」

と、続けた。

しかしその時、風雲は1点を見つめたまま固まっていた。

そして香取は鹿島と朝潮から視線だけで大会議の真っ最中だった。

なぜなら面々が囲む卓上には、香取が用意したものではない鍋が1

つ混じっていたからである。

3人の会話を聞いてみよう。

「か、かかかかか香取姉え、絶対！絶対磯風さんを台所に通しちやダメってあれほど！」

「そうですねよ！昼の調整会議で最重要事項として蛍光マーカーで2重ライン引きましたよね!？」

「そ、そうなのです。私もそうしたかったのですが、風雲さんが1度だけと」

「なんで!？」

「風雲さんいつから自殺志願者になったのですか？」

「私にもさっぱり解らないのですが、これはどうしても必要なんだと強く仰って」

「えー・・・」

「それから、その、もう1つ風雲さんから言われてまして」

「・・・物凄く嫌な予感がしますが」

「そ、その、リットリオさんと同じタイミングで一口だけ召し上がって欲しいと」

「・・・」

「・・・なるほど、風雲さんは我々を皆殺しにするつもりなのですね」
「いえ、それが、リットリオさんにとって非常に重要なことなのだ」と

「リツちゃんに？」

「どうしてでしょう？胃腸は鍛えられませんわが・・・」

「ともかく、風雲さんの目はまともでしたので・・・」

「真顔で狂言を吐くのは相当なサイコだよ？」

「風雲さんは真面目だと信じていたのですが・・・」

「ともかく、1度だけ、一口だけと風雲さんも仰ってますので」

「・・・気が重いなあ」

「ド下手だと解ってる看護師の注射を待つ気分です」

「・・・と、話が終わりましたよ」

鹿島と朝潮がぱぱっと向き直ると、磯風がおほんと咳払いをした。

「そ、それでだな、これから世話になる礼の意味で、この磯風の手料理を振舞いたい」

リツトリオが応じた。

「わあー、楽しみですねー」

・・・ごくりと、と、誰の物とも解らぬ唾を飲む音が響いた。

第78話

「1度だけお許しを頂けたので、腕によりをかけたのだ」

磯風は手近にあった取り皿と、自らが先程置いた鍋を引き寄せると、その蓋を開いた。

「!?」

リットリオはランプから魔人が出てくる古い童話を思い出した。

なぜなら磯風が開いた鍋から、濃紺色の煙が立ち上ったからである。

一瞬、その煙が雄叫びを上げる人の顔のように見えたので、リットリオは目を擦った。

磯風は照れたように頬を染めながら、その鍋におたまを差し込んだ。

「さあ、この磯風が取り分けよう」

・・・ぷうっ

鍋から引き上げられたおたまに絡みつくように、粘性を持って鍋に落ちていく塊。

動きが液体のそれではない。

何より色がスライムのようにぬめりを持った緑色である。

風雲が努めて平静を装って訊ねた。

「め、メニューはなにかなー?」

「うむ、タイで食されてるグリーンカレーというものらしい」

「らしい!?!」

「レシピを見ると大層辛そうだったのでな、マイルドになるようアレンジを加えたから大丈夫だ」

多分、大丈夫じゃない。

・・・コトリ。

最後に取り分けられたグリーンカレー（らしきもの）が、朝潮の前に置かれた。

にこにこ微笑みながら席に着いた磯風が、おもむろにカレー用の

スプーンを持った。

「さあ、召し上がれ」

リットリオは取り皿の中の物を見た後、上目遣いにちらりと風雲を見た。

風雲は丁度、青褪めた顔で目だけこちらを見ていた。

二人は目で会話した。

・・・これは、危険な香りがします。

・・・その読みは間違いなく当たりです、リットリオ先輩。

・・・でも、ここまできたら・・・

・・・はい。あの笑顔の磯風の前で捨てる訳には行かないですし。

リットリオはそのまま視線を香取達に移した。

香取達はいずれもスプーンを持ち、じつと自分の方を見ていた。

まるでタイミングを合わせようとするかのように。

これで、先に誰かが食べた反応を伺う事も難しくなりましたね。

リットリオはきゅつと目を瞑ると、ぬるりとスプーンを取り皿の中に差し込んだ。

やや手ごたえを感じながら引き上げると、そこには一匙分のグリーンカレー（らしきもの）。

・・・いつ、いきます。

リットリオはカツと目を見開き、スプーンを一気に口の中へと運んだ。

「!?」

リットリオが最初に感じた味覚は、甘みだった。

それも尋常ではない甘さである。

間宮が供してくれたおかげで、リットリオは数種類の「美味しい」カレーを知っていた。

ゆえに辛い物が来るといふ予想は、いの一番に打ち碎かれたのである。

え、ええと、グリーンカレーってこんなに甘い物なのでしょうか：

次に襲ってきたのは、舌が痺れるような感覚。

いや、正確には痺れる程の苦味と言ってもいい。

この辺りでリットリオは口にした物が料理というか、口にして良い物ではなかったと認識し始めた。

やがて、苦味とは別の感覚がやってきた。

寒気、である。

何故自分は温かいカレーを食べてるのに寒気がするんだろう？

・・あれ？

ぐにやり。

視界が・・なんか・・歪んで・・

「・・ちゃん！リツちゃん！寝たら死ぬよ！リツちゃん！」

「あ、あれ・・鹿島・・さん？」

「良かった！気がついた！」

リットリオが上半身を起こすと、そこは食堂の床の上だった。

ふと周りを見回すと、朝潮がしきりに香取と風雲に話しかけている。

二人はぐつたりとして返事をしていない。

「・・あ」

自分達と少し間を置いた所に目を向けた時、磯風がぽつんとソファに座っているのが見えた。

膝の上に両手を置き、悲しげに目を伏せている。

「む、無理しちゃダメだよリツちゃん・・」

「大丈夫・・大丈夫です」

心配そうな鹿島に頷いてから、リットリオはゆっくりと磯風に近づいた。

磯風は顔を上げなかったが、きゅつと身を縮めたのが解った。

「・・磯風さん」

「また・・やってしまった。わ、解っている。覚悟は出来ている」

「覚悟？」

「食中毒騒ぎを起こしてしまったのだ。この磯風、着任を取り消されても文句は言えない」

スツ。

リットリオがすぐ隣に腰掛けた時、磯風はびくりとした。

「磯風さんは、料理が好きですか？」

「・・・え？」

「料理をすると、楽しいですか？」

リットリオの問いに、風雲を抱きかかえたまま、鹿島がこちらを見た。

磯風は戸惑ったように目を泳がせ、膝の上で手をきゅつと拳にする
と、

「・・・うん」

と、小さく頷いた。

リットリオはぴとつと、自分の右腕を磯風の左腕に押し付けながら
言った。

「好きこそ物の上手なれ、といいます」

「・・・」

「でも、正しいやり方を知らなければ、努力は意味を為しません」

「・・・」

「ほら、羅針盤が荒ぶったら、幾ら頑張ってもボスの所に辿り着けない
じゃないですか」

「そう・・・だな。適切な艦隊構成と、適切な装備が必要だ」

「料理も同じです。美味しい物へたどり着く為にレシピがあるんです
よ？」

ようやく意識を取り戻した香取と風雲に、鹿島と朝潮がすばやく状
況を耳打ちしていく。

磯風はたつぷり1分ほど目を瞑っていたが、パツと目をあけ、

「皆！すまぬ！私は辛いなら甘くすれば良いと思って水飴を1缶入れ
ただの」

リットリオは味を思い出そうとしたが、上手く思い出せなかった。

ただ、やたら甘かった気はする。

「それがこんな惨事を引き起こすとは知らなかった・・・本当にすまな
かった」

「・・・」

リットリオ達は磯風の言葉を静かに聞いていた。

「そ、その、これからはレシピに従い、ちゃんとした料理になるようにしたい」

「・・・」

「だ、だからその、れ、練習するチャンスを、もらえないだろうか」

「・・・」

香取がびくりとしたので、磯風は慌てて付け加えた。

「も、もちろん練習の間は自分で味見する。誰にも食べさせない。た、ただ、」

「・・・」

「私は、料理が好きだ。だからいつか、喜んで食べて欲しいのだ・・・」

「・・・」

「だから、少しだけ・・・台所を・・・研修の合間に貸してくれないか？」

リットリオは鹿島の方を向いた。

「私からもお願いします！」

鹿島はとても渋い顔をしていたが、朝潮が頷いたのを見て溜息をつくと、

「でも、台所だけ貸しても結果は目に見えています」

今度は磯風がびくりとしたが、その手をリットリオの手が優しく包んだ。

磯風はそつとリットリオを見たが、リットリオが鹿島の方を見ていたので、向き直った。

「・・・だから、私が付き添うよ。レシピとか作り方とか教えてあげる」「！」

「か、簡単な！簡単な所から行くからね！難しいのは成功してから！成功してからだからからね！」

磯風はぺこりと鹿島に頭を下げた。

「・・・改めて今夜の事を詫びる。そして、鹿島殿、すまないが手ほどきの程、よろしく頼みたい」

・・・パチ、パチ、パチパチパチ。

鹿島がふと見ると、抱きかかえていた風雲が小さく拍手していた。

にこりと笑い、リットリオが続いた。
やがて朝潮が、香取が続き、全員で磯風に拍手を送ったのである。

第79話

翌朝。

「ほつ本当だ！本当にこの磯風が焼いたのだ！」

そう磯風が答えると、全員の視線が鹿島に集まった。

鹿島は力強く頷いた。

「検査済です！大丈夫です！」

ぶるぶる震える手でフォークをつまんだ風雲が言った。

「い、いい、頂きます！」

「やー、なんでしようねえ」

「こんなにスリリングな気持ちで目玉焼きを頂く日が来るとは思いませんでしたねえ」

「でもすっごい達成感あるー」

「普通においしかったですよー」

そう。

磯風が鹿島監修の元で初めて作ったのは「目玉焼き」であった。

しかし、である。

「まさか目玉焼きがこんなに奥深いとは思わなかったな」

という感想の通り、磯風は皆に供せる目玉焼きとなる前に4回ほど失敗していた。

「テフロンのフライパンは赤熱するまで炙ってはいけなかったのだな」

磯風のこの一言に1ミリ秒で風雲が突っ込んだ。

「待って磯風。鉄のフライパンでも中華鍋でもダメだよ！」

「そうなのか？阿賀野がチャーハンは強火力で手早く行うのが命と言っていたのだ」

「だからと言って赤熱するまで炙っちゃダメ！」

「鹿島にもそう言われた。そうか、違ったのか・・・」

リットリオは鹿島に囁いた。

「朝から・・・大変お疲れ様でした」

鹿島は力なく頷いた。

「まさか卵の殻ごと真つ赤になってるフライパンに放り込むとは思わなかったよ」

「そこから今朝の食卓に出てきた綺麗な目玉焼きになるまで導いた鹿島さんは凄いなと思います」

「・・・そう?」

「ええ。尊敬しました」

「・・・そっかあ・・・えへへへ」

「鎮守府の平和の為、今後ともよろしくお願いいたします」

「うん、鹿島さん頑張るよ」

リットリオは頷いた。

磯風は導く者が居れば大丈夫だ・・・アレンジしなければ。きっと。多分。恐らく。

そして。

「お世話になりました」

リットリオが研修を終え、帰る日がやってきた。

迎えに来たのは日向だった。

そして、この日の光景は普段とは少し違っていた。

「やっぱり嫌ですう、ちよおつとー!あとちよつとだけ一緒に居て」

と、リットリオの右手を引っ張るのが風雲で、

「ねえねえ、あ、明日予定が入ってる訳じゃないでしょ?も、もう1日

!は、半日でも一緒に居ない?」

と、リットリオの左手を引っ張るのは鹿島だったのである。

「あー・・・ええつと・・・」

リットリオが困っていると、鹿島の手到手刀が落とされた。

「あうっ・・・うう、香取姉え痛いよお」

「痛いじゃありません。講師がそんな事でどうするのですか」

「うう・・・」

ぐいぐいと二人を下がらせた香取は、そつとリットリオに微笑んだ。

「リットリオさん、あなたは十分に研修で必要な単位を修められました。そして・・・」

「？」

「妹が大変お世話になりましたこと、改めて御礼申し上げます」

そう言うと、香取は深々と頭を下げたのである。

「ええっ?! い、いえ、私は別に何もしてませんよ」

「リットリオさん、自信を持ってお戻りください。今の貴方の振る舞いは周りを救います」

「・・・」

「それは普段であろうと、海戦の最中であろうと、とても大きな力となるでしょう」

「・・・」

「鹿島を、風雲さんを、そして磯風さんを導いたことを、忘れないでくださいね」

リットリオは香取をじっと見つめていたが、ペコりと頭を下げた。

「最初からご迷惑をおかけした私に、最後まで手ほどき頂いた事、このリットリオ、生涯忘れません」

リットリオは鹿島に目を向けた。

「鹿島さん、ごめんなさい。風雲さんは既に解っていたようです」

「・・・あちゃー」

「紅白饅頭、間宮さんも作れないか聞いておきますね」

「あ! それ嬉しい! お願い!」

「はい。それから朝潮さん、いつもの確なアドバイス、ありがとうございます
いました」

「リットリオさんは察しが良かったので楽でした。道中お気をつけて」

「ええ。それから風雲さん」

「・・・うん」

「1カ月後、私がお迎えに来ます」

「ふえ?」

「一緒に鎮守府に帰れる日を、楽しみにしていますね」

「・・・うん、うん! 私頑張る!」

「最後に、磯風さん」

「うむ」

「・・・調味料はちよつとずつ、味を見てから入れていきましようね?」

「あ、ああ、そうだな・・・それかあ・・・」

磯風が苦笑しつつ、恥ずかしそうに頭をかいたので、皆の間でくすくすと笑いが起きた。

リットリオはそつと一歩後退すると、岸壁から町を眺めた。

利根も、隴もやった事。

今ならどうしてやりたかったのか、痛いほど解る。

ハチャメチャな2ヶ月だったが、自分は確かに2ヶ月、この町で過ごしたのだ。

肉屋のおじさんの顔も、

洋服屋のお姉さんの顔も、

クレープ屋のお婆さんの顔も、

和菓子屋のお婆あちゃんの顔も、

牛乳屋のおじさんの顔とリヤカーも、

出会うと必ず敬礼をしてくる山賊の人達も、

キツチン「トラファルガー」のライネス達の顔も、

ブラウン・ダイヤモンド・リミテッドのファッツの顔も、

瞼の裏に描けるくらい、覚えている。

愛すべき町、山甲町。

そこから今、私は居なくなる。

もう二度と、こんなに長居する事は叶わないだろう。

リットリオは目を瞑った。

ぎゅつと、ぎゅつと目を瞑った。

1つ、2つ。

大きく呼吸をした後、目を開け、町に向かって深々と頭を下げた。

「ありがとうございます、ございました」

横に並んだ日向が囁いた。

「後1時間くらいなら、出発を遅らせても構わないぞ?」

リットリオは首を振った。

「離れられなくなりますから」

「そうか」

リットリオは最後に香取達に向かってひらひらと手を振った。

鹿島が声をかけてきた。

「リツちゃんーダメだよー泣いてお別れはダメだよー!」

そう言われて初めて、リットリオは自分の頬を伝う涙に気がついた。

ぐいと右腕で涙を拭うと、リットリオはニコツと笑った。

鹿島達が頷いた。

「その調子だよ!じゃあねリツちゃん!」

「はい!では皆さん!また今度!」

「またねー!」

外洋に出た後、日向は少し速度を落とす、後に続くリットリオに寄り添った。

リットリオは少し俯き加減に進んでいた。

「・・・よく頑張った、リットリオ」

「・・・」

「もう町からは見えない距離だ。大丈夫だ」

「うっ、う・うー」

「泣いておけ、誰にも言わぬ」

「うわああああん!寂しいよおおお!うわあああん!」

棒立ちでわんわん泣くリットリオを、日向はそつと抱きしめ、背中をぽんぽんと叩いた。

その夜、リポートを読み終えた龍田は微笑んで頷いた。

「練習巡洋艦のお二人が本領発揮、か。当初の案よりよほど良い状況になったわあ」

そう。

龍田は当初、山甲町の家を龍田会常設軍の隠れ拠点にしようと考えていた。

だが、二人の導きは本物だと妙高が太鼓判を押したので、龍田は方針を切り替えた。

元々ソロール鎮守府は軍事拠点であり、艦娘が居る事はおかしくな

い。

ならば一人一人の能力を大本營の想定を遥かに超えた所まで上げ、皆に余裕を持たせる。

そうする事で自由に動ける余地を作り、仮想的な常設軍を内包してしまおう、と。

この事は既に香取達にも伝えている。

名目ではなく、きちんと予算をつけるので存分に教育を施して欲しい、力を注いで欲しいと。

嬉しそうに返された香取の声をまだ覚えている。

とはいえ、こうした事は提督には一部しか伝えていない。

それはタダでさえ提督が考えねばならない事が山積しているからだ。

龍田はそつと、左手薬指の指輪をくるくると回した。

「ちよつとは理想に近づくお手伝いが出来てるかなあ・・ねえ、あ・な・た」

ひとしきり指輪を眺めていた龍田は、やがて次の書類を手を取ったのである。